昭和十年十二月一日印刷
昭和十年十二月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一一〇五四番
　　　　　　　　三三六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）

大正二年五月二十五日印刷
大正二年五月二十八日發行

神宮司廳

鹽米芬布、鹽出于洲仔尾淡水兩處、泥鰍烏魚出于坑仔口打狗港、蟳蝦出于蚊港、蚶蟹蠔螺海濱俱產、

(華夷通商考下)大寃○中略此島ノ人ハ、甚卑シウシテ、常ニ衣服ヲ不著、山中ノ獵師常ニホコヲ持テ鹿ヲ追ヒ、其肉ヲ生ニテ食シ、其皮ヲ賣テ酒食ニ代ルナリ、身甚輕ク、走ルコト鹿ニモマサレリ、山中ニ計居ル故ニ山童ト號ス、海邊ノ漁人猶以賤也、尤詞モ曾テ不通、根本ハ文字モ無之國ナリシガ、國姓爺以來ハ、漁人獵師之外ハ、唐人多ク居住スル故、中華ノ風儀ヲ習タルモノ多キ也、

○

(南島志上世系)宋史流求國列傳曰、國在泉州之東、有海島曰彭湖、烟火相望、淳熙間、國之酋豪、嘗率數百輩、猝至泉之水澳圍頭等村、肆行殺掠、喜鐵器及匙筯、人閉戸則免、但刓其門圏而去、擲以匙筯則俯拾之、見鐵騎則爭刓其甲、騈首就戮而非知悔、臨敵用標鎗、繫繩十餘丈爲操縱、蓋惜其鐵不忍棄也、不駕舟楫、唯縛竹爲筏、急則群舁之、則泅水而遁、按流求去彭湖五百里、豈是烟火相望之地哉、而海路險遠、舟楫之制、非其堅厚則不可渉矣、且其喜鐵器、縛竹爲筏、皆是巴且之俗、其國亦去彭湖不甚相遠、蓋宋人謬認之言耳、

(臺灣紀略)附澎湖

澎湖舊屬同安縣、明季因地居海中、人民散處、催科所不能及、乃議棄之、後內地苦徭役、往々逃于其中、而同安漳州之民爲最多、及紅毛入臺灣、并其地有之、而鄭成功父子復相繼據險、恃此爲臺灣門戸、環繞有三十六嶼、大者曰媽祖嶼、等處澳門口有兩砲臺、次者曰西嶼頭等處各嶼、唯西嶼稍高、餘皆平坦、自厦門至澎湖、有水如墨色、深不可測、爲舟行之中道、順風僅七更半、○中略但澎湖初無水田可耕、人咸採捕爲生、或治圃以自給、今幸大師底定、貿易輻輳、漸成樂土、營將外復設一巡檢治之、

物産

帥懸金印、郡縣官僚闘草堂、使者莫嫌風土惡、番兒到處棹車旁、

〔外國通信事略〕塔伽沙古(タカサゴ)

寛永四年十一月に、此國の理伽といふもの參拜の儀あり、これよりさき參拜の例ありしやいまだ詳ならず、

〔外國通信事略〕中華幷外國土産

東寧 塔伽沙古といふ、今臺灣とも申す、日本より六百四十里程、 此國より商船來る

土宜 白砂糖　氷砂糖　黑砂糖　鹿皮　山馬皮　樟皮

〔華夷通商考下〕大寃　土産

白砂糖　鹿皮　山馬　樟皮　木綿　西瓜

右之類、唐船ニ積テ來ル也、是ヲ大寃出シノ舟ト云也、

〔臺灣紀略〕物産

鳥之屬、有鴉、鸎、鸂鶒、鷺、鳶、杜鵑、斑鳩、瓦雀、鶺鴒等類、鴻雁、燕、鶯有而希見、鵲與鵪鴿、則其所絕無者、山無虎、但有豹、亦不噬人、故鹿麕獐麂之屬、成群徧野、莫爲之害、野牛最蕃滋、設欄柵圍之、有典牧之官、董其數、農夫乏牛者、稟命于官而取之、至老而無力、則縱之去、澤中有大龜、時游水濱、人取而食之、果之美者、樣爲最、狀如豬腎、味甘冽可啖、荔枝、越宿卽爛、故難到遠地、次莫若波羅密、梨仔茇、王梨、芭蕉子、石榴、橘、柚、椰、檳榔、甘馬弼等類、各方共產、荔枝龍眼則間有之、花莫如四季錦邊蓮、而蘭桂梅桃拒霜刺桐之類次之、所少特牡丹耳、內山樹木之大者、多洪荒時物、人至不能識其名、竹有大如斗、高數十尋者、地多藤、盤旋里餘、可爲椗索及耕茅屋、磺產于上淡水、土人取之以易

平鎮二鯤身隙間、遁去占城、(占城屬廣南、今有道乾遺種、)道乾既遁、澎之駐師、亦罷、因設巡檢守之、既以海天遙阻、裁棄、天啓元年、漢人顏思齊、爲東洋國甲螺、(東洋即今日本、甲螺即頭目之類、)引倭屯于臺、鄭芝龍附之、尋棄去、久之荷蘭紅毛舟遭颶風、飄此、愛其地、借居于土番、不可、乃紿之曰、得一牛皮地足矣、多金不惜、遂許之、紅毛剪牛皮如縷、周圍圈匝、已數十丈、因築臺灣城、(即安平鎮城、)居之、已復築赤嵌城、(即紅毛樓、)與相望、設市於城外、而漳泉之商賈集焉、

國朝順治六年庚寅、甲螺郭懷一謀逐紅毛、事覺被戮、辛丑、鄭芝龍子成功、自江南敗、其勢日蹙、孤軍厦門、適甲螺何斌負債逃厦、誘成功取臺地、舟至鹿耳門、水忽漲數丈、時大霧、聯進而入、紅毛不虞、鄭舟猝至、意天假手于鄭、以式廓我朝係外之疆域也、荷蘭歸一王、以死拒戰、成功告之曰、此地先人故物、今珍寶聽而載歸、地仍還我、一王知不敵、乃率紅毛遁去、成功遂入據之、改臺灣爲安平鎮、赤嵌爲承天府、總名東都、設縣二、曰天興、曰萬年、成功死、子經嗣、改東都爲東寧、二縣爲二州、設安撫司三、南北路澎湖各一、興市廛、教耕稼、漸近中國風土矣、辛酉、經死、子克塽嗣、康熙二十一年、福建總督姚啓聖、深知虛實、用間諜、離散其黨、約傅爲霖爲內應、垂成事洩、爲霖遇害、啓聖仰遵廟算、定策平臺、二十二年、靖海將軍侯施琅統舟師進征、六月、由銅山直抵澎湖八罩澳、取虎井桶盤嶼、戒軍士毋得妄殺、軍士若水鹹島岸、突湧甘泉、遂無渴患、一戰而澎湖平、克塽震懾天威、遂籍府庫、納地歸誠、二十三年、廷議設府一、曰臺灣、屬福建布政使司、領縣三、附郭曰臺灣、外二縣曰鳳山、諸羅、雍正元年、巡察吳達禮、黃叔璥、摺奏割諸羅虎尾溪以北、增設縣一、奉旨俞允、賜名曰彰化、今領縣四、

(臺灣府志二十藝文)東寧十詠　高拱乾○中略

其二

曉來吹角徹蒼茫、鹿耳門邊舊戰場、流毒猶傳日本國、偏安空比夜郎王(臺○地○先○爲○倭○奴○所○踞○繼歸[illegible][illegible]、後歸鄭氏、)樓船將

横街皆其竝建也、癸卯年、厦門敗、經由銅山入灣、改東都爲東寧省、前後招納內地兵民眷口、以實之、甲寅、經兵入漳泉、委陳永華爲諮議參軍、留守國政、丁巳年、兵潰、經守厦門、復命劉國軒攻開海澄縣、旋爲大兵恢復、鄭兵潰去十有八九、遣劉國軒、調殘兵守澎湖、派般戶出糧、抽壯民爲兵、致民心離散士卒喪氣、辛酉年經預立其庶子鄭欽爲監國、退閒于洲、子尾築游觀之地、峻宇雕墻、茂林嘉卉極島中之華麗、不理政務、嬉遊爲樂、未幾經卒、衆懼欽之嚴、迫之縊死、欽妻陳氏、卽永華之女、亦登臺自縊、遂立鄭克塽爲主、年幼、政出多門、福建總督姚啓聖偵知之、密請南征先行、秘劉興傳爲霖約爲內應、事泄、爲霖被戮、僞續順公沈瑞、亦以疑誅、（瑞妻鄭氏、僞禮官鄭斌之女、亦自盡、）朝廷允姚總督之奏、命靖海將軍侯施琅爲提督、與總督姚啓聖、巡撫吳興祚討之、康熙二十二年癸亥六月十四日、大師由銅山開駕、十五日、兵入八罩灣、十六日、進澎湖、竟大戰日、勝負未決、十七日、舟停八罩灣、十八日、進取虎井桶盤嶼、克之、（中略）七月初三日、將軍飛章奏捷、八月初二日、揚旗入灣、文武官僚薙髮迎師、兵不血刃、臺灣已歸我版圖矣、（中略）

建置

大師底定臺灣、設分巡道一員、領一府三縣、臺灣縣居中、轄四坊十五里九街六鄉、南爲鳳山縣、自臺灣府起至沙馬磯頭止、共五百三十里、轄六里十四鄉二十餘社、過沙馬磯頭山之背、爲呂宋開洋處、其餘則土番負固、稀到城市、今土官加老師統之、北爲諸羅縣、自臺灣府起至雞籠城止、共五千三百三十里、轄四里十四鄉四[illegible]社、人衆力役尤多、其餘二十四社、至雞籠城而界盡、過此則無路可行、亦無灣可泊、用小艇[illegible]、猶有十日之程、至直脚宜前面、則人跡不到矣、

〔臺灣府志二（建置沿革）〕臺灣府、古荒服地、先是未隸中國版圖、明宣德間、太監王三保（通志作鄭和）舟下西洋、因風泊此、嘉靖四十二年、流寇林道乾擾亂邊海、都督俞大猷征之、追及澎湖、道乾遁入臺、大猷偵知港道紆廻、不敢進逼、留偏師駐澎、時哨鹿耳門外、道乾以臺非久居所、遂恣殺土番、取膏血造舟、從安

そ其廻り日本の三十里にあまりたる島にて、たかさごに近きゆへ、たかさごを責取て、二島を領地とし、時を待て福建道をも再傾し、大明の世を再興せんとおもふ志し深かりければ、厦門の名を改め、思明州と號せしは、明朝を思ふの意なり、又臺灣の名をあらため、東寧と稱せしも、日本を忘れず、故郷を親きし意とかや、國姓爺智謀無雙の軍將たりし事、長崎人の明淸鬭紀に委し、眼前見聞し事なれど、これもいまはむかしと成て、知人もなければ、おもひ出るあらましとて、老たるが語りしをしるし侍りぬ、國姓爺は日本寛文六年の比、東寧にて終りぬ、其子錦舍遺跡を繼て、なを東寧を治め持て、淸朝にしたがはずして在しが、是も死して、其子奕舍なを相續して在しかども、中々父祖には似もせぬ器量にて、十五省に味方なく、吳三桂も死して、遺族もちり〳〵なれば、心ぼそくやおもひけん、淸朝に降參し、東寧を開きて北京に到りて、東海王に封せられ、廣大の宅地を賜はり、今にありやなしや、飛鳥川の淵瀨は、もろこしもおなじ世のながれにて、常なきを常とす、豈おもはざらんや、

〔臺灣紀略〕沿革

先是北綫尾日本番、來此搭寮經商、盜賊出沒于其間、爲沿海之患、後紅毛乃荷蘭種、由咬𠺕吧來、假其地于日本、遂奄爲己有、築平安赤嵌二城、倚夾板紅爲捍戰、而各社土番聽其約束、設市于安平鎭城外、與商賈貿易、至壬辰年、土民郭懷一反、西王氏召土番、擒之戮子、赤嵌城民被上番警殺、漸以消索、直至此歸紅毛、已三十餘年矣、辛丑年、僞鄭成功敗自長江、窮蹙無所、土人勾之往、乃發大小船千餘號、道何斌到港由鹿耳門入、潮水忽漲數尺、紅毛戰敗、逃入鎭城、堅閉不出、鄭兵沿山圍之累月、柴薪不得入、又乏外援、紅毛突圍遁歸、成功因改臺灣爲僞東都、設一府二縣、僞立府尹及天興萬年二縣、壬寅年五月、成功卒、提督馬信立其胞弟鄭世襲、改號維理、癸卯年、成功之子鄭經、自廈門來、與世襲爭國、世襲兵敗退歸、經遂嗣位、後經至厦、委爺天祐爲轉運使任國政、于是興市肆、築廟宇、新街

任て、晝夜坐臥を同ふして遊ぶ事三年、城外四邊の名跡所々見めぐり、近き程南京西湖等にあそばしめんといひて、さま〲日ごとの馳走美を盡せりといへども、唯日本をなつかしとおもふ心しきりなりければ、強て暇を乞しに、さま〲留められしかど、老親に事よせて終に長崎へかへりぬ、此おのこ日本風俗にあらため、濱川氏久右衛門と號し、元祿年中まで存命居て、福建道所所の物語、國姓爺城中のありさま、男女の風俗、四季折節の儀式、城內正朔元三に門戸に松竹を飾り立る事、日本のごとく祝きしたぐひ、鄭成功日本故鄉を慕ふの意深かりしと見えたり、是より今に福閩の間、正月門松立る所多しと聞傳ふ、偖鄭成功が別腹の弟も長崎にありしを、福州よりむかへもせずして、長崎に居住せしが、後に國姓爺日本へ便船ありて、援兵を乞し時、おのれ行ん事を願ふといへども、公けの許しなくて、つゐに不行、援兵も又ゆるしなくしてむなしく便船は歸され、本朝へ珍貨の音物共も、受給はずしてかへされぬ、此時國姓爺は福建道を平均し、南京浙江までしたがへ、北京の帝都に責上り、北京城を責て、既に勝利を得べかりしが、韃旦の勢は日々に數そひ、味方には援兵なくして、終に敗軍し、福州へ引かへしぬ、吳三桂も雲南貴州の遠境に在て、援兵を出す事あたはず、日本の援兵も叶はねば、都て福州城をも韃旦に責破られ、鄭成功は泉州城へ落行ぬ、此時日本平戶よりむかへし鄭成功の母は、我日本を去て爰に來れるも、子孫の榮華を見んとおもひてなり、今老て此難にあふ事、何の面目在て又爰を去ていづくに往事をせんやといひて、城の樓に登りて自害しつゝ、下なる大河に落入てこそ死にけれ、日本女人のありさまかくの如くなれば、男子の武勇、おしはかりぬと、韃旦の軍勢みな舌をまきけるとかや、國姓爺はしばらく漳州泉州に在しが、かねて覺悟したりければ、厦門といふ島に一城を築て居住す、此島漳州泉州の地を去事甚近く、要害無雙の城地にて、万國への運湊便りよき所なれば、漳州泉州等まで、韃旦責破りしかども、此厦門を責る事不叶、一島みな國姓爺の領とぞ成にける、厦門は凡

松浦郡の人、寛永七年の秋、我國をさりて安南にゆきて、其父にしたがひ、永暦の天子の時、思明州に鎮して延平王に封せられ、國姓爺といはれしはこれ也、其後寛文元年塔伽沙古の地を併せて東寧國とあらたむ、すなはち今の臺灣これなり、

〔長崎夜話草 三〕塔伽沙谷之事 并 國姓爺物語

塔伽沙谷は、唐土東南の海中に在島國にて、本は國主もなく、○中略いつの比よりか紅毛人住居して、平戸へ渡海の便りとす、則名を臺灣と改め、城郭を築て住居せり、しかるに寛文元辛丑の年國姓爺福州泉州の軍援兵なふして利を失ひ、臺灣に責入、紅毛を追落し、城郭を押取て住居とす、是より紅毛は咬𠺕吧に落行て住居す、されば此國姓爺は、父を名は鄭芝龍と云、一官老と稱して、福州の者なりしが、明朝變亂の時に及んで、海島の賊船をかたらひ、韃靼に不屬して與三桂に通路し、海邊の所々徒黨多しといへ共、味方士卒少きゆへ、急に福建道を討したがへる事あたはず、海島にかくれ居て、時を待て謀略をめぐらし、又は商舶に乗て數々日本の五島、平戸、長崎の間に往來して年を經たり、其比平戸に妻ありて、男子一人産り、又長崎にも妻ありて、男子一人あり、其身はしば／＼福州へ渡海して、軍旅怠る事なく、屬徒漸く多勢に成て、終に泉州漳州を責取、福建道を治め、福州城を築て居城とし、勢ひ漸く盛にして、十五省を幷呑せり、此時に到りて平戸なる妻子をむかふ、其船長崎に入津し、此旨關東へ注進ありて、公けの旨により、平戸の男子十七歳なりしを長崎に送られ、長崎より歸帆す、其母は此時に行ず、後に又行しとかや、此男子後に鄭成功といひ、國姓爺と號せしは是なり、又五島一官といふ者あり、芝龍が舊友にして五島に住居し、領主の寵愛に依て年を送りぬ、其一男子を鄭成功平戸に留め置て友とす、既に鄭成功日本の御免を得て、福州に到るに臨て、五島一官が子を偶ひ往んことをねがひ訴ふ、公けも御憐愍ありて、其心に任すべしとの御事にて、一官が子鄭成功と同じく出船す、則福州城内に入て、鄭成功と一所に

ズ、

〔華夷通商考下〕大寃(タイワン)○中略島國也、此所古ハ主ナキ島ナリシニ、何ノ時ヨリカ、阿蘭陀人日本ヘ渡海ノ便リニ、此島ヲ押領シテ、城郭ヲ構ヘ住シテ、日本其外國々ヘ此所ヨリ渡海セシヲ、日本寛文元年ノ比、國姓爺厦門ヨリ此島ヲ責落シ、ヲランダ人ヲ追拂、國中ヲ治メ、城郭ヲ改メ築キ居住セリ、其子ノ錦舍モ、父ノ遺跡ヲ續ギ、一國ヲ治テ、明朝ノ代再興センコトヲ謀テ、終ニ清朝ニ隨ザリシニ、其子奐舍、日本貞享元年ニ至リテ、清朝ニ降參シテ、國ヲ退キ渡シテ、其身ハ王號ヲ蒙リ、北京ニ居住ス、今此島モ清朝ヨリ守護ヲ置テ仕置スル也、

〔琉球國事略〕異朝の書に見えし琉球國の事

同〔○明萬曆〕四十四年五月、舊事其通事蔡廛をして、日本の戰艦五百餘、雞籠、淡水を脅し取りて、閩廣を犯さんとする事を奏す、

元和二年の事也、日本の戰艦雞籠、淡水を攻取りしといふ事心得られず、雞籠に一ツには東番といふ、今の大淸の諸羅縣の北にあり、すなはちこれ臺灣の地なり、淡水洋は呂宋の地に近し、按するに、大明萬曆年中に、泉州の人鄭芝龍といふもの、本朝に來りて肥前國松浦郡平戸にとどまり、其後に長崎にうつり住す、平戸老一官といひしはこれなり、つひに我國をさりて、海盜のために推されて、賊首となり、熹宗天啓六年十二月、閩中に入て漳浦の白鎭に據る、これ本朝寛永三年の事也、懷宗崇禎元年九月に、大明に降て終に福建の海防使となさる、これ本朝寛永五年の事なり、初め芝龍我國を去り、塔伽沙古にゆき居る事一年にして、船よそひして安海にゆくといふ、おもふに日本戰艦雞籠、淡水を脅取といふ事は、鄭芝龍が事をいふ歟、又按するに、芝龍大明に降て、海盜を平らげし功によりて、後に太子大師に拜せらる、其子鄭成功は、肥前國

本島ハ北緯二十一度五十四分三ヨリ、二十五度十八分五ニ至リ、東經百二十度七分五ヨリ、百二十二度十五分ニ至ル、澎湖島ハ更ニ西ニ離レ、其西端ノ半坪島、及高島ノ二島ハ、東經百十九度二十分ニ位ス、

地勢

本島ノ地勢ハ、南北ニ長ク、東西ニ狹ク、中央ヨリ稍東ニ偏シテ、略南北ノ方向ニ走レル一條ノ山嶽アリ、此山脈ハ本島ノ中部ヨリ南部ニ著シク、九千尺ヨリ一万尺以上ノ峯巒ニシテ、之ヨリ東ハ急激ノ傾斜ヲ以テ海ニ入リ、西ハ陂陀タル邱陵ヲナシテ平野ニ沒セリ、北部ハ之ニ反シ、山嶽ノ位置此ノ如ク整然タラズシテ、數多ノ秀峯錯雜シテ起伏シ、且邱陵多シ、

面積

凡二千三百十一方里八六ト(九州本島ヨリ小ナルコト四十二方里〇中略)

氣候

〔華夷通商考下〕大寃〇中略

四季、四五月ノ比ハ大キニ熱セリ、二八月ノ比ハ日本ノ六七月時分ノ如シ、此國ノ十一月十二月ノ比ハ、日本ノ八九月比ニ同ジ、雪霜降コトナキ國也、一年ニ二度ヅヽ田作スル所也、

道路

〔臺灣形勢一斑〕道路

本島ノ道路ハ、大路ト稱スルモノ三アリト稱ス、其一ハ台北ヨリ彰化、嘉義ヲ經テ、台南及鳳山ニ至リ、其一ハ鳳山ヨリ東港ヲ經テ台東ニ至リ、其一ハ台北ヨリ基隆ヲ經テ、蛤仔難及蘇澳ニ至ルモノトス、其他路線固ヨリ少ナカラズト雖、皆狹隘ニシテ不完全ヲ極メ、或ハ巓頂ヲ歩シ、河川ニハ概ネ橋梁ナクシテ、洪水汎濫ノ際ハ、數日通行ヲ遮斷スルコトアリ、僅カニ人ノ行旅ヲ許スト雖、貨物ノ運搬ニ差支フルコト甚シク、交通ノ點ヨリ觀察セバ、殆ンド道路ナシト云フモ過言ニアラズ、故ニ本島ノ經營ヲ圖ランニハ、改メテ之ガ開鑿ヲ爲シ、以テ交通ノ便ヲ開カザルベカラ

位置地勢

〔長崎港草 七〕日本人異國漂流雜記、
寛文ノ初メ、長崎稻佐村ノ浦人二人、小舟ニ乘テ五島ヘ行ントテ、沖灘ニテ逆風ニ吹流サレ、大。寃。ニ漂ヒ著ス、折節長崎渡海ノ唐船ニ送ラレ歸リヌ、

〔華夷通商考 下〕大寃〇中略道程、日本ヨリ海上六百四十里、厦門ヨリ百里南也、島ノ長サ日本ノ百二十里アリ、五月巳後ノ南風ヲ候テ來ル也、

〔萬國夢物語 上〕海ヲ踰テ東大寃(オイワン)ノ島ニ到ル、〇中略方角、支那ノ東南海中ニ在テ、琉球國ヨリ西、日本九州ヨリ西南、厦門ヨリ百里許東ノ海中ナリ、島ノ長サ凡百四五十里也、五月後ノ南風ヲ候フテ船來ル也、〇中略北極出地廿二三度許、夏至ノ前後ニハ、影南ニサス、日本ヨリ海上六百四五十里許也、

〔臺灣紀略〕形勢
臺灣爲海中孤島、地在東隅、形似彎弓、中爲臺灣市、市以外皆海、由上而北、至淡水鷄籠城界、與福建相近、其東則大琉球也、離灣稍遠、由下而南、至加洛堂郎嶠止、其西則小琉球也、與東港相對、由中而入、一望平原三十餘里、層巒聳翠、樹木蓊茂、即臺灣灣之所也、而灣外復有沙堤、名爲崑身、自大崑身至七崑身止、起伏相生、狀如龍蛇、復有北線尾、鹿耳門、爲臺灣之門戶、大線頭海翁窟爲臺城之外障、舡之往來由鹿耳、今設官盤驗、

〔臺灣形勢一斑〕地位
本島ハ支那海上ノ一大島ニシテ、東北ニハ琉球ヲ控ヘ、西南ニハ南支那ノ福州ニ對シテ黄海ノ南ヲ扼シ、南方ハ遙カニフイリッピン諸島ト相對ス、
經緯度

名稱

爲ス、既ニシテ明朝ノ亡ブルヤ、鄭成功明祚ヲ恢復センコトヲ謀リテ、臺灣ニ據ル、我貞享年中、成功ノ孫奏舍ノ時ニ至リ、遂ニ淸ニ降ル、是ニ於テ淸國始メテ官ヲ置テ本島ヲ治セシガ明治二十七八年戰役ヲ經テ本島全ク我版圖ニ歸セリ、

〔華夷通商考下〕大寃(タイワン)、又三名有、臺灣、東寧、或ハタカサゴトモ云フ、此國根本ノ名ハ、タカサゴ也、日本ノ人高砂ノ文字ヲ假用ユ、或ハ大寃、臺灣ト書、此ハ唐人ノ名ケタル也、國姓爺居住已後ハ、國號ヲ東寧ト改ム、此島中華之京都ヨリ南ニ當レルニ、東寧ト號スル事、國姓爺生國日本ナル故ニ、生國ヲ慕ノ心ニヤト云、

〔萬國夢物語一〕海ヲ踰テ東大寃(タイワン)ノ島ニ到ル、此國三ツノ名有、臺灣(タイワン)、東寧(トンネイ)、大寃也、

〔野史二百八十九外國〕臺灣(臺灣府志、鄭氏紀事、高國新語、據[illegible]以爲僞) 大寃(唐土歷代沿革圖、圖書集錄) 東番(紀事引明史、東西洋考) 或臺灣(紀事引臺灣府志) 東寧(讀史方輿紀要、新語) 塔伽(沿革圖、伽作揚) 沙古(紀事、沿革圖)

鄭氏紀事引明史曰、萬曆季年、紅毛番泊舟、於是因事耕鑿設闤闠稱臺灣焉、川口長碁按、番人呼臺灣爲痛洸茂邪、則臺灣非紅毛所名也、蓋明人舊呼爲東番或土番、故知台灣臺灣皆一音之轉耳、非別有意義也、

〔臺灣形勢一斑〕名稱
臺灣ハ、往古支那ニ於テ、東番ト呼來リシ地ニシテ、宋代ニハ毘舍耶ト呼ビ、蠻民ノ住スル島嶼トシ、明代ニ至リテ、支那人之ニ往來シ、外國ト寄商スルニ及ビ、北港或ハペキアンデト云ヒ、古代日本航海者ノ高砂(タカサゴ)(増加沙古(タカサゴ)ニ書ナリ)トト云ヒ、支那人ノ臺灣ト云フハ同ジク安平港ノ、仍島嶼ニシテ、未ダ本島ト連續セザリシ時ノ名ニシテ、全島ノ名ニ非ザリシナリ、西洋人ノ本島ヲフォルモサノ(美麗ノ島)ト呼ブハ葡萄牙人ノ名ケタルヨリ始マレリ、臺灣ヲ全島ノ名トセシハ、康熙二十二年、(我天和三年)全島始テ淸朝ニ屬スルノ時ニアリ、

有音無字、則合書二字、反切行之、如村名泊與泊舟之泊、並讀作土馬伊、則一字三音矣、村名喜屋武、讀作腔字、則又三字一音矣、國語多類此、國人語言、亦多以五六字讀作一二字者甚多、得中國書、多用鈎挑旁記、逐句倒讀、實字居上、虛字倒下逆讀、語言亦然、本國文移中、亦參用中國一二字、上下皆國字也、四十七字之末有一字、作二點音媽、此另是一字、以聯屬諸音、爲記者、共四十八字云、

元陶宗儀云、琉球國職貢中華、所上表、用木爲簡、高八寸許、厚三分、濶五分、飾以漆、釦以錫、貫以革、而横行刻字於其上、其字體科斗書、又云日本國中自有國字、字母四十有七、能通識之、便可解其音義、其聯輳成字處、髣髴蒙古字法、以彼中字體寫中國詩文、雖不可讀、而筆勢縱横、龍蛇飛動、儼有顛素之遺、今琉球國表疏文、皆用中國書、陶所云横行刻字科斗書、或其未通中國以前字體如此、今不可考、但今琉球國字母、亦四十有七、其以國書寫中國詩文、筆勢果與顛素無異、蓋其國僧皆游學日本、歸教其本國子弟習書、汪錄所云、皆草書無隸字、今見果然、其爲日本國書無疑也

臺灣　澎湖島附入

臺灣ハ、一ニタカサゴト稱シ、琉球ノ西南ニ在リ、面積凡ソ二千三百十一方里、其地勢ハ、南北ニ長ク、東西ニ狹ク、山脈ハ國ノ中央ヨリ稍東ニ偏シテ、縱ニ南北ニ走リ、南部ニ於テ特ニ高峻ヲ極メ、其東面ハ急激ノ傾斜ヲ以テ海ニ入リ、其西面ハ陂陀タル邱陵ヲ成シ、遂ニ平野ト爲ル、北部ハ之ニ反シ、數多ノ秀峯相錯雜シテ起伏スルヲ見ル、

本島原ト蠻夷ノ居ル所、支那人ハ荒服ヲ以テ之ヲ待チ、皇朝亦之ヲ聲外ニ委ス、足利幕府ノ季世、我國人黨ヲ作テ、支那沿海ヲ剽掠スルモノアリ、稍ニ本島ニ據リテ根基ト爲ス、是ヲ我國人ガ其土ヲ占有シタルノ始ト爲ス、後和蘭人來リテ本島ヲ我國人ニ假リ、遂ニ己ガ有ト

〔中山傳信錄　六〕風俗

正月十六日、男婦俱拜墓、又有板舞戲、略○中　三月三日上巳、家作艾糕相餉、遺官民皆海濱禊飲、又拜節相往來、略○中　五月五日、競渡龍舟三、泊一、那覇一、久米一、一日至五日、角黍蒲酒同中國、亦拜節、略○中　七月十五日、盂祭祀、先預於十三日夜、家々列火炬二於大門外、以迎祖神、十五日盂後送神、　八月家々拜月、略○中　白露爲八月節、先後三日、男女皆閉戶不事事、名守天孫、此數日內、如有角口等諸事故、必犯蛇傷、國中蛇九月出、傷人立斃、　同日蒸糯米、交赤小豆、爲飯相餉、略○中　每月朔望、家々婦女、取潮水、至砲臺汲新潮水、歸獻竈神、或獻天妃前石神、略○中

凡許嶽、皆以石爲神、凡神嶽靈祠之所、皆有巨石數塊矗立、設香爐炷香燭於前、燒酒設牲果禮拜、皆就石致供、不設神像也、

通國平民死皆火葬、官宦有力之家、先用生葬、候時舁出、仍用火葬、（前使錄云、以中元前後日、擇婦子溪水、三四五年後、以水入穴、浸屍、去腐肉、取骨入甕、藏石坎中、歲時祭掃啓視之、）　棺製圓如木桶、高三尺許、溫水洗屍、盡屈足趺殮、略○中

國中惟三種人、皆剃髮如僧、一爲醫官、名曰五官正、一爲王宮執茶役者、名曰宗叟、又名御茶湯六人、又有司禮圜六人、皆全剃髮、戴黑色六稜帽頂寬簷帽、名曰片帽、衣多著短衫一領、比大衣略短二三尺許、黑色、二種人皆趨役無時、備髮恐稽時事、故皆使從薙省云、略○中

字母

琉球字母四十有七、名伊呂花、自舜天爲王時始制、或云卽日本字母、或云中國人就省筆易曉者教之、爲切音色記、本非字也、古今字繁而音簡、今中國切音字母舊有三十六、後韻簡爲二十八、自喉顎齒唇張翕輕重疾徐清濁之間、融爲一韻、皆有二十八母、天下古今有字無字之音、包括盡矣、今其略仿此意、有一字可作二三字讀者、有二三字可作一字讀者、或借以反切、或取以連書、如春色二字、琉人呼春爲花魯二音、則合書ハロ二字、卽爲春字也、色爲伊魯二音、則合書イロ二字、卽爲色字也、若

國人和歌をよくするもの往々あり、是皇國淳化遠裔の島嶼に届るを知るべし、因てしるす、

元祿中、清の北京にまいりて、國にかへりなんとせし時よみ侍る、　池城親方

たれも見よ今ぞまことのからにしききたのみやこをたちいづる袖

忍戀　　眞壁親方賢寛

こゝろのみかよはぬ時はなけれどもよそ目にかゝるほどぞくるしき（下略）

〔華夷通商考下〕琉球

人物朝鮮ニ似テ、詞中華ニ不通、薩摩ノ國ヨリ諸事アヅカリ聞ク、此國ノ船漂流ノ時ハ、其所ヨリ長崎ヘ送届テ、長崎ヨリ薩摩ヘ渡シテ歸國ス、

〔白石子筆話下〕琉球國之地形皆島に御座候、（中略）人之家居日本と同事に御座候、王城之樣子は、明朝の人琉球江使に參候人の書に記置候通、殿閣は三階作に御座候而、上の階は神を祭候所、中の階は王者之居所、下の階は臣庶之居所に候而、中華より封冊を請候時は、假に高樓を造り、使者之坐を設申候由御座候、但是も表向規式迄の時ばかりに御座候、常住は日本之家作同事に住居之由御座候、

十一月廿一日　　小瀨復庵

〔西遊雜記四〕琉球館を一見せしに、門番ありて内に入事を禁せり、凡百人ばかりは鹿兒島に渡り居て、琉球の產物を賣買して、又は交易する事にて、何も日本の言葉を七八分もつかふと云り、田舍よりも京へ登りて諸藝を習ふ樣に、琉球人は鹿兒島に渡りて學文をし、諸藝を習ふ、和歌もよみ、手跡も見事成琉球人あり、天窻は有髮にて、小童の髮結ひしやふに、何れも丸わげにして、笄を差て居る也、衣も日本に言ふ居士衣の如し、規式祭葬の節は、色々の冠服も有べし、右は平生の形り也、五雜俎に琉球は醇也と記せしはむべ也、

風俗

巖石間、不假水土、或寄樹椏上、或以棕皮裹之、懸之又有鳳蘭、葉比蘭較長、香如山奈茴香、處竹爲籃懸挂風前、極易蕃衍、俗皆尙蘭、號爲孔子花、

粟蘭、一名芷蘭、葉如鳳尾、花如珍珠、蘭又有松蘭、竹蘭、棒蘭、狀如珊瑚樹、綠色無葉、花從椏間出、與風蘭較小、中略

佳蘇魚、削黑暈魚肉、乾之爲脯、長五六寸梭形、出久高者良、食法以溫水洗一過、包蕉葉中、入火略煨、再洗淨、以利刃切之、三四切皆勿令斷、第五六七始斷、每一片形如蘭花、漬以淸醬、更可口、

〔國朝舊章條十〕琉球國之事略

東山殿の頃より、彼國には我國の假名字を用ひしと見へ、又其國の人共、我國の倭歌を能するもの少からず、　琉球人の和歌いくらも見へたり、能よめる者有、山川等の名も人の名も、皆々我國の詞なるも多く、殊に我國の神々を祭れる故蹟、いくらも世に聞えたり、されば彼國の始祖、我國の人たりし事は一定也、但爲朝の後と申は如何有べき、すべて彼國の事共、詳ならぬ事ども多し、可々齋私曰、琉球は其人品柔和にして、名髮に油を塗、容貌我朝の人よりも麗く、最殊國の風俗也、伎藝を嗜む國にて、中にも碁局の術を善くす、前々我國江来聘の度毎に、彼國の棋手に長するもの、其使に伴來て、我國の棋家に便りて、江都の殿中に於て相對して手談す、其勝劣を試たる上にて、我國の妙手より或は先んを著し、又は二子を著するの許狀を授く、所謂碁に先ん二つ置の事也、夫棋局の遊は、其先中華に始りて、伎藝に於る最久し、然るに中華には此術衰て、今万國の中に我朝ほど是に精きは無く、琉球次之、其佗に有る事を不聞、是故に琉球より中華へ聘問の折柄は、寛て中華の國手迎えて琉球の許可を得るとかや、是にて此術の我國より遂に衰たる事を想ふべし、其外琉球の事を記せし、定西物語と云小冊の我櫃中に在しを、辱に書加んと擬之共紛失せり、

〔中山聘使略〕和歌

云、

〔華夷通商考 下〕琉球 土產

木綿 芭蕉布 黑砂糖 アハモリ酒 蘘荷

右之外色々有之トイヘドモ、皆福州ヨリ來ル物也、

〔中山聘使略〕雜事

其產物は、五穀甘蔗を始として、異種極て多しといへども、僅に此小記の悉す所にあらず、依て今略、皇國及西淸へ獻貢の方物を擧ぐ、

金銀粉匣、沈金漆器、螺鈿漆器、文房具、玉石金銀緞紗、紅白苧布、精粗多品芭蕉布、生熟蕉多品土綿、線香、多品長髮、瓷瓶、鼈甲盆、腰刀、袞刀、鎗、畫屏、鞍具、鬱金、硫黃、白鑞、紅銅、磨石、扇、泡盛、

〔琉球國聘使記〕寶永七年庚寅十一月、薩侯源吉貴率琉球國中山王聘使入都、○中略上獻禮物

太刀一副 駿馬一匹 壽帶香三十盒 香餠二盒 龍涎香二盒 畦芭蕉布五十端 島芭蕉布五十端 淡色芭蕉布五十端 綿紗五十卷 太平布百匹 久米島布百匹 靑貝大卓二座 堆飾硯屏一對 羅紗二十匹 靑貝飯籠一對 泡盛酒十壺

〔中山傳信錄 六〕物產○中略

穀則六穀咸備、○中略異產有香蕈、在處皆有之、亦種沙土中、蔓生荒野、人以爲糧、功並粒食、家種芭蕉數十本、績絲織爲蕉布、男女多夏皆衣之、利匹蠶桑、○中略

鐵樹卽鳳尾蕉、一名海椶櫚、身蕉葉勁挺對出、纖稚如鳳尾缺日、中心一綫、虛明無影、四時不凋、處々植之、○中略

山丹比中國特大、有高樹長丈餘者、紅花四出、數朶攢生、如火、有千葉者、一云寶蓋樹、五雅註云、山丹扶桑同出日本、始入中國、○中略

名護蘭、葉短而厚、與桂葉同、大僅如指、三四月開花、與蘭無異、一莖八九朶攢開、香越勝蘭、出名護嶽

物產

〔白石子筆記下〕一琉球國之地形、皆島に御座候、常に舟行を以あなたこなた往來仕由御座候、狹長ニ候而、縱橫幅三里計之所も有之由御座候、島津家江附屬仕候對、知。行。高。拾。貳。萬。石。之軍役ニ御座候、但此知行之多少、其國世間江儀ニ露顯不仕候、尤小國ニ御座候、○中略

十一月廿一日　小瀨復庵

〔南島志下〕物產

大明會典云、琉球貢物、馬、刀、金銀酒海、金銀粉匣、瑪瑙、象牙、螺殼、海巴、摺子扇、泥金扇、生紅、銅錫生熟夏布、牛皮、降香、木香、速香、丁香、檀香、黃熟香、蘇木、烏木、胡椒、硫黃、磨刀石、若其馬、及螺殼、海巴、夏布、牛皮、烏木、硫黃、磨刀石、則其國所產而已、其餘則所與此間及諸國交易也、穀則稻、秫、稷、麥、菽、蔬則瓜、茄、薑、蒜、葱、韮之屬、皆有焉、亦有蕃薯、可以代穀而食、此間俗曰琉球薯、即此薯也、蔬亦多、果則龍荔、蕉子、甘蔗、石榴、橘、柿、但無梅杏桃李之類、近時有梅、移自此間者、唯蕃花而不結子、草則山丹、佛桑、鳳蘭、月橘、名護蘭、粟蘭、[illegible]花、澤蘭等品不少、近產烟草、葉細而長、木則赤木、其性堅緻、紫紅色而有白理、蓋棕木之類、本朝式所謂、南島所出赤木即此、(俗曰加之木)黑木、即會典所稱烏木也、蘇鐵、即琉球俗所謂鳳尾蕉、其野生則不如栽在國廳者、棕、(俗曰加津木)木犀、(俗曰畿伊入)何樓麗木、(曰盧巴、曰也夏木、其俗所謂未詳)隋書所謂闘鏤樹、使琉球錄以爲土產、無其樹、即今國人亦所不詳、(隋書曰、闘鏤樹似橘而葉密、條纖如髮然下垂、又云、織闘鏤樹皮以爲衣)禽鳥則鵝鴨、鳧鶴、鷄亦有異色者、(俗名三乃字作瓦、蓋謂其毛文有三色也)蝙蝠產于八重山者、其形極大、(俗名之入、山蝙蝠)其餘有烏鵲、麻雀、野雉、野鳥之屬、但無鶴及錦鷄、而鴻雁不來、秋月之候、鷹隼及小雀自南來者多、畜獸則烏牛、水牛、犬、豕、麋鹿之屬、皆無不有者、而無虎豹犀象、亦產異色猫、蟲豸則蛇蝎之屬、最多毒蛇、凡七種焉、亦能螫人、其有在于壁間際[illegible]如雀者、春夏之交有赤卒自南來、亦多鱗介則海出、白魚亦名海馬、馬首魚身、皮厚而脊、其肉如鹿、人常験之、馬鮫龍蝦之類、亦皆有之、雖鯊其色不紅、而味亦不佳、鯨魚每出沒洲嶼之間、而其被擒者、鮫龍時自海中起、而能致風雨、俗謂之風待也、螺蛤之屬多奇品、貝子即會典所稱海巴螺殼、大者可以代釜甑、

恩縣仲泊村、至美里縣石川濱、關僅漆合肆勺壹撮、分爲三山、而中山俗曰中頭方、山北曰國頭方、山南曰國尻方、其國頭有縣九村百、中頭有縣十一、村百六十三、國尻有縣十五村百五十六、總計三十五縣四百五十二村云、里兼所丈量、今雖莫知其詳、應此一島云、

〔琉球國鄕帳〕琉球國〇中略

總合高拾貳万三千七百拾壹石八斗壹升三合四勺八才　村數百七拾六

內六万八千貳百六拾四石五斗貳升七合　田方

五万三千百貳石壹斗五升五合三勺八才　畠方

貳千三百四拾五石壹斗三升壹合壹勺　桑役

寛文八年申十月　日

〔郡名一覽〕琉球國　拾五島　七拾壹ヶ村

高拾貳万三千七百拾壹石八斗壹升三合四勺八才

內

宮古島　六ヶ村　高壹万貳千四百五拾八石七斗九升貳合四勺貳才　八重山島　拾壹ヶ村

高六千六百三拾七石三斗貳升壹合六才　沖繩島　貳拾七ヶ村　高六万貳千百九拾九石

計羅摩島　高貳百三石　戶無島　高四拾五石壹斗　久米島　貳ヶ村　高三千六百七拾七石七斗　粟島高七百貳拾七石四斗　伊惠島　高三千六百四拾三石　伊是那島

高七百五拾石貳斗　惠平屋島　高五百四拾壹石六斗　鬼界島　五ヶ村　高六千九百三拾貳石四斗　大島　七ヶ村　高壹万四百五拾五石五斗　德之島　三ヶ村　高壹万九石七斗　永良部島　三ヶ村　高四千百五拾八石五斗　與論島　高千貳百七拾貳石六斗

以上

郡城間切

村數石高

六日、中山王尚成、恩謝使大宜見王子安村親方等をして方物を貢す、（輪池掌錄）文化三年十一月廿三日、中山王尚灝、恩謝使讀谷山王子小祿親方等をして方物を貢す、

〔南島志上〕沖繩島。。。即中山國也、其地南北長、東西狹、而周廻凡七十四里、（是據此間里數而言、凡六大島間、六十四町爲町、三十六町爲里、後皆倣此、）國頭居北、爲首、島尻居南、爲尾、王府在西南、曰首里、蓋古翠麗山地、今作首里、方音之轉也、（家屋山見屋據）（[illegible]）城方一里、東西距海各二里許、至于北岸二十九里、去其南岸五里、凡諸島地山谿嶮巖、罕有寬曠之野、其人濱山海而居、各自有分界、謂之間切、間切者猶言郡縣也、王府領間切二十七、曰國頭、曰名護、曰羽地、曰今歸仁、（舊作伊麻奇時利）曰金武、（舊作鬼具足）曰越來、（舊作五欲）曰讀谷山、曰具志河、曰勝連、（舊作賀通連）曰北谷、曰中城、（舊作中具足）曰西原、曰浦添、（舊作浦傍、已上在都城東北）曰眞和志、曰豐見城、曰兼城、曰喜屋武、曰摩文仁、曰眞賀比、（已上在都城西）曰南風原、曰島添大里、曰佐敷、曰知念、曰玉城、（舊作玉具足）曰具志頭、曰東風平、曰島尻大里、（舊作島尻、已上在都城南）海港二所、其在東北、曰運天湊、湊者水上人所會、而此間海船所泊也、（運天湊、舊作運見泊、在今歸仁間切、湊者此間古言水門也、）（港深一里二十七町、闊二町、大船五六十隻、可以繋泊、去此東北行至與論島二十里、）在西南、曰那霸港、去都城里餘、此間及海外諸州船所輻湊也、（那霸港、舊作那覇港、港深二十二町、闊一町二十間、堪泊大船三十隻、去長崎三百里、去朝鮮四百里、去塔加沙古東南海角四百八十里、云塔加沙古、即今台灣也、）港口四邑、居民蕃盛、曰那霸、港官四員、分治焉、迎恩亭、天使館、亦在于此、迎接中國使人之所也、

〔恩榮錄上〕慶長十四年

加十二萬三千七百石（七月七日、合七十二万九千五百石）　琉球國十五島　島津陸奧守家久

〔南聘紀考人〕是歲、（○十四年）公（○家久）又遣上井次郎左衛尉里豐、及阿多某等、如琉球、脩正經界、里豐等既至、與本田親政等議、乃丈量沖繩島、

十五年三月、里豐所正丈完竣成、凡七冊、謂之御捡地帳、里豐自加花押、所謂琉球先竿云此也、按沖繩島、本家所載十二島之一、而今日本琉球者此也、周廻佰拾里肆合參勺伍撮、自國頭縣奧崎、至喜屋武縣具志川崎、長參拾肆里漆合一勺玖撮、自讀谷山縣美崎、至勝連縣平敷屋崎、伍里漆合玖勺貳撮、自

賀貞宗之御腰物幷御馬致拜領候、且又櫻田之御屋敷を被下、直に御暇を給る、同廿日に江戸を發し候、兼て被仰渡候により、中山王は東海道を罷上り、家久は木曾路を通り下國仕候、其年上意にて中山王に歸國いたさせ申候、

〔琉球入貢紀略〕慶長以後入貢

寬永十一年閏七月九日、中山王尚豐、賀慶使佐敷王子、恩謝使金武王子等をして方物を貢す、（元寬日記）この年、將軍家御上洛ありて、京都にましますをもて、二條の御城へ登城す、このゆゑに二使江戸に來らず、　正保元年六月廿五日、中山王尚賢、賀慶使金武按司、恩謝使國頭按司等をして方物を貢す、七月三日、下野國日光山の御宮を拜す、（輪池叢書）　慶安二年九月、中山王尚賢、恩謝使具志川按司等をして方物を貢す、（琉球事略）また日光山の御宮を拜す、　承應二年九月二十日、中山王尚質、賀慶使國頭按司等をして方物を貢す（羅山文集、和漢合運、近世武家編年略、）また日光山の御宮を拜す、　寬文十一年七月廿八日、中山王尚貞、恩謝使金武王子等をして方物を貢す、（高天日記）また日光山の御宮を拜す、（琉球事略、歷代備考、）　天和二年四月十一日、中山王尚貞、賀慶使名護按司、恩納親方等をして方物を貢す、（高天日記、甘露叢、）

寶永七年十一月十八日、中山王尚益、賀慶使美里王子富盛親方、恩謝使豐見城王子與座親方等をして方物を貢す、（琉球聘使紀事）また東叡山の御宮を拜す、中山使の日光山に到らずして、東叡山に來ることゝ、この時を始とす、　正德四年十二月二日、中山王尚敬、賀慶使與那城王子、恩謝使金武王子等をして方物を貢す、（文[illegible]）　享保三年十一月十三日、中山王尚敬、賀慶使越來王子西平親方等をして方物を貢す、（享保日記）　寬延元年十二月十五日、中山王尚敬、賀慶使具志川王子與那原親方等をして方物を貢す、（歷史要略）　寶曆二年十二月十五日、中山王尚穆、恩謝使今歸仁王子等をして方物を貢す、（歷史要略）　明和元年十一月、中山王尚穆、賀慶使讀谷山王子等をして方物を貢す、（三國通覽、達水私記、）　寬政二年十二月二日、中山王尚穆、賀慶使宜野灣王子等をして方物を貢す、（琉球談）　寬政八年十二月

〔康富記〕寶德元年八月廿五日、近日琉球國商人京著、令進上藥種幷料足一千貫文云々、　三年八月十三日、或說云、琉球島船商人去月末著兵庫津之處、守護細川京兆早遣人彼商物撰取、未渡料足之間、先々年々料足未進物、及四五千貫無返辨、又賣物抑留、爲島人難澀之由申之間、自公方被下遣奉行三人、(布施下野守、飯尾與三左衞門、同六郎、)被糺明之處、得押取之物、自京兆未被返、依之奉行未上洛云々、京兆者前管領也、希代之所行哉、如何之、

〔齋藤親基日記〕文正元年七月廿八日、同日琉球人參洛、(當御代六ケ度日)號長史、(チヤウス)於御寢殿庭前三人懸御目、(三拜申了)庭餝席、

〔實隆公記〕永正六年四月廿八日、阿野相公來臨、琉球國□書狀之體等被談之、　廿九日、阿野相公來臨、琉球國書狀事大略爲談、又將軍御書爲假名、其故者、最初通事女房也、仍任其例如此云々、

〔島津家覺書〕慶長十五年五月十六日、家久中山王を率て鹿兒島を發し、八月六日に駿府に參着す、道中之御馳走朝鮮人來朝と同じかるべき旨、宿々に兼而爲被仰付之由にて、殊之外結構に御座候、同八日、家久中山王を召列登城す、尙寧、緞子百端、羅紗十二尋、太平布貳百疋、蕉布百卷、白銀壹萬兩、御太刀一腰獻上す、家久も御太刀馬代其外品々獻上仕候處に、御代初に、早速異國を從へ、其王を率ひて來朝せしむる事、家久無比類働き之由上意にて御感を蒙り候、同十八日に御暇被下、御酒宴之上、常陸介殿御鶴殿座を立て舞ひ給ひ、貞宗之御脇物大小、家久に被下、同十九日に御暇被下、翌二十日、駿府を立て、廿五日に江戸に致參着候、廿六日に上使を被下候、又廿七日に上使を以、米千俵致拜領候、同廿八日に家久、尙寧を召列登城いたし候、尙寧緞子百卷虎皮十枚、太平布二百疋、蕉布百卷、白銀一萬兩、長光之御太刀致獻上之候、若君樣に、御太刀一腰、緞子五拾卷、太平布百疋、蕉布五拾卷差上候、家久も御太刀馬代其外品々獻上いたし、九月三日に登城いたし御暇有、同七日に於御數寄屋に、御手自御茶を被下、同十二日、又登城仕候、同拾六日致登城、御振廻之上、加

〔琉球入貢紀略〕琉球使の來れる

琉球は、掖玖とともに、推古天皇以前より入貢しけんが、はやく朝貢怠りて來らざりしなるべし、かくてその國と往來なければ、たま〳〵記載に見えたるも、みな懸開聽度のみにて、たしかなることなきは、そのゆゑなりとおもはる、その國もまたはるかの島國にて、いづれの國の附庸にもあらず、通信もせざりしが、明の洪武年間、琉球は察度王の時にあたりて、冊封とて唐土より中山王に封せられて、彼國へも往來して、制度文物すべてかの國にならひてぞありける、明の宣德七年に、宣宗内官柴山といふ臣に命じて、勅書を齎らしめ琉球につかはし、中山王より人をして、我邦に通信せしむ、この宣德七年は、我邦の永享四年にあたれり、これによりて考ふるに、上古よりはやく往來絶えて、後明宣宗のために我邦へ使せしは、はるかに年を歷て、再び我邦へ琉球使の來れる始めなるべし、これより後も、明の正統元年、英宗琉球の貢使伍是堅をして回勅を齎らし、日本國王源義教に諭すといひ、(これ永享八年のことなり)嘉靖三年、琉球の長吏金良の詞に、これより先に正議大夫鄭繩といふものをして、日本國王に轉諭す、(これ大永四年のことなり、中山傳信錄・琉球國志略に見えたり、)といへることあれば、明より我邦へ書を贈るに、琉球使に命せしこともありしとぞおもはるゝなり、

〔琉球入貢紀略辨誤〕永享年間琉球使來るの辨

室町紀略云、永享十一年七月、是歲琉球國入貢、(琉球入貢始見)また琉球事略に、後花園院寶德三年七月、琉球人來りて、義政將軍に錢千貫と方物を獻ず、これよりしてその國人兵庫の浦に來りて交易すといふ、しからば彼國の使本朝に來ることは、脩金羂が時をもて、その始めとすべきかといへり、これらの說みな誤りなり、按ずるに中山傳信錄云、宣德七年、宣宗以外國朝貢、獨日本未至、命内官柴山齎勅至國、令王遣人往日本諭之と見えたり、これ實に我永享四年にあたれり、かゝれば二書にいふところ、この時より後れたれば、その始にあらざるをしるべし、

到琉球、指遣兵船、不移時日及一戰、彼黨數多討捕之、剩國王降參之、并三司官以下到于其地、不日可爲渡海之注進、誠以無比類働共候、猶本多佐渡守可申候、謹言、

七月五日　秀忠御判

薩摩少將殿へ

琉球之儀、早速屬平均之由注進候、手柄之段被思召、卽彼國進候條、彌仕置等可被申付候也、

七月五日　家康御黑印

薩摩少將どのへ

〔南浦文集中〕與大明福建軍門書

琉球國王尙寧、上書大明國福建軍門老大人閣下、恭審、小邦去日本薩摩州者、僅三百餘里、以故三百年來、以時獻不腆方物、修其鄰好、頃有不肯貢、夫緩其貢期、是故薩摩州進兵於小邦、小邦荒墟者、誠天之所命、而我亦以無苞桑之戒也、不幸而爲其俘囚、在薩摩州者三年矣、州君家久公、外好武勇、內懷慈愼、待我以待貴客之禮、禮遇之厚者三年一心、加之送還我於小邦、於是吾民之歌於市、抃於野者、莫非奉欽州君寄書於我、其之言曰、夫邦國在四方也、有金玉者、或不足乎錦繡、有粟米者、或不足乎器皿、若有餘而不散、不足而無聚、民用不足、而其貨亦腐、惟坐而待腐、不如通其有無各得其所矣、日本非無金玉器皿、其土宜質素、而不及於中華之文質彬彬、是故使我參謀於兩國、一以使日本商船、許以寧之大明邊地、二以使大明商船、來我小邦、交相貿易、三以使一遣使年年通其貨之有無者、匪翅富兩國人民、大明亦無爲倭寇最備兵衛矣、三者君無許之、今日本西海道九國數萬之軍、達運於大明、大明數十州之鄰於日本者、必有近憂矣、是曾日本大樹將軍之意、而州君所以欲通兩國之志者也、伏冀軍門老大人、於斯三者、許一於此、我小邦大沐大明之德化、且達日本之夙志、是亦天朝恤遠守小之仁心也、若然則永守藩職、無生貳心、遠方嚮化之念、沒世不忘也、伏惟仲夏、爲依仰祈尊炤、不宣、

隨號令急云亡、他時棄父棄妻後、必掉扁舟赴大唐、

(當代記)慶長十四年四月、薩摩之島津百餘艘集兵船、琉球ヘ令渡海、彼島不及一戰、則内裏ヲ責崩、王ヲ生捕令歸朝、彼島中靡、令撿地、指ヲ知行モ無之、漸々拾二萬石餘有之ト云々、

(慶長見聞錄案紙下)慶長十四年七月七日、島津家久所討取之琉球國家久ヘ被下之、

(一話一言十八)琉球國事

夫琉球國者、自往古嘉吉年中、屬我國矣、雖然背舊規不進貢、自薩摩再三遣使以諭之、不肯聽、故告相國家康公、請伐之、蓋瑣々小島不足屑也、而戎狄是膺、荊徐是懲、詩經之所戒、故慶長十四己酉春、以樺山權左衛門尉久高、爲大將、〇中略 都合其勢三千餘人、整兵船一百餘艘、而二月廿一日發船、巳著大島、振威、又趣德島、島郎出應而防戰者殆千有餘人、其中斬首者三百餘人也、故殘黨不日屬于旗下、而悉焉、同年四月初一日、欲到那覇之津、彼徒卒爲隱謀、設鐵鎖於津口、以備焉、故從異津上陸、交鋒相戰三日、殺騎將步卒數百人、遂入都門、圍其城、而欲攻之、時國王三司官及諸士卒共請和、於是不血刃、而已唱凱歌矣、輙以捷書告于薩摩、則遣使家康公言上、公感其戰功、及以黑印賜彼島於太守陸奥守家久、

到于琉球差越兵船、彼黨數多討捕之旀、更國王及降參、三司官以下近日著岸趣、誠以希有之次第候、委細本多佐渡守可申也、

七月五日　秀忠御判

島津修理入道殿

到琉球差越人數、不經日數數討捕之、其上國王降參、近日到其國可爲著岸之旨、最無雙之仕合候、猶本多佐渡守可申候也、

七月五日　秀忠御判

羽柴兵庫入道どのへ

客觀、詩歌於右覽上、至今風俗不異、中改流求二字、字從玉、而爲琉球矣、費誓之言未知是否、貪長之罷、不知阿誰、昔朝於大明皇帝、皇帝賜之衣冠、且錫爵位、爾來世稱中山王、王稱亦至今不絕矣、蓋十世之先、爲我薩隅日三州太守島津氏附庸之國、歲輸貢獻於我州、比來不脩我號令者有年、於茲矣、是歲戊申、有太守家久公之命、遣二使於彼國、國素有三司官、國之公卿、世守其職、時有一殺歎臣名邪那者、補一官闕、以汚公卿之衣冠、邪那見我二使之來也、以色可否、以頤指揮、二使亦不知所云、空手而歸矣、於是不得已而使數千兵行以討之、嗚呼琉球日薄西山、遂其極矣、何其不念包桑之戒乎哉、予桑門之徒也、雖不與國家存亡之事、見此兵戈之將出、而恐彼敗禍之在衽席之間也、不顧才之拙、與語之俚、漫賦俳諧體十章、首章先述天與人歸之義、兼祝大洋波平、而兵船之安如泰山之安矣、次章仰諸將威武動搖乾坤、其次三章、謂欲富我國家一邪那好行小惠、降我強兵之不早也、且欲我諸將亦疑其部伍、有其戒心也、其次二章謂知己之在彼國者、且復我先師之徒、有景叔春庵之二負皆帶先師與隣若干篇、寄跡於彼國、移瑕此時恐與隣之若失知兵火而賦之、其次肆巫覡卻斛厭之托言於我、感世歷民、爲身謀者矣、末二章彼國風俗、愚而多詐、不乞降於我、後必患有不得致忠孝於我君父、且復兄弟妻子離散、赴遐遠之邦、而言之、書以呈之於伊勢氏兵部員外郎、以供一笑云、

琉球小島一彈丸、天與人歸討不難、四海波平天水淺、諸軍大艦泰山安、　欲伐鬼方揚白旄、諸軍威武動乾坤、樺山右將平田左、坐得伊川伴衛門、　一灯將滅琉球逆、爲擧邪那紀綱斎、臨晤未知實邪虛、邪那本是河邊蹤、〈邪[illegible]琉球國那也〉　琉球國合夏和戰、心苦君民更不甘、想是邪那疫城主、一身逃死定降參、　我國武威誰敢侵、豈多猛將智謀深、報言蜂薑有其毒、須學猫兒鼠尿心、　報恩主席我知音、句狀聯珠且嘯吟、歸想西來一庵主、無心有亦識其心、　與頂誓莫作禁坑、字字元如金鐵鳴、景叔春庵曾遊日、先師曾隨帶之行、　奇術誑人巫女流、巧言令色爲身謀、飯無君臨義兵至、鑣的誇發自縊頭、　愚而偏詐世無雙、未敢歸心肯受降、又假蟷螂侍長臂、人言小艇大艘亦、　自古琉陽屬薩陽、不

十餘州、有源氏一將軍、以不猛之威發其號令、尺土無不獻其方物者、一民無不歸其幕下者、是故東西諸侯、莫不有朝覲之禮、我今雖去鹿府之任、每歲使親族之在左右者、行以致其聘禮、況家久爲國之宗主、豈不逮年年之職乎、貴國亦致聘禮於我將軍者、豈復在人之後哉、先是我以此事告於三司官者數矣、未聞有其聘禮、是亦非三司官懈於內者乎、今歲不聘、明年亦懈者、欲不危而可得乎哉、且復貴國之地、鄰于中華、中華與日本不通商舶者、三十餘年于今矣、我將軍憂之之餘、欲使家久與貴國相談、而年年來商舶於貴國、而大明與日本、商賈通貨財之有無、若然則匪翅富於吾邦、貴國亦人人其富潤屋、而民亦歌於市、抃於野、豈復非太平之象哉、我將軍之志在茲矣、是故家久使小官二人、告之於三司官、三司官不可、將軍若有問之、則家久可如之何哉、是我夙夜念茲、而不措者也、古者善計國計家者、雖大事小者、有隨時之宜而爲之者、況復小之事大者、豈爲之背於理哉、其存焉與其亡焉、其在國君之擧而已、伏乞圖之、

○按ズルニ、此書狀ハ、慶長十一年九月、島津家久、琉球王ノ來聘ヲ促スタメニ遣ス所ナリ、

〔南聘紀考人〕慶長十四年二月、公○島津家久及貫明公、松齡公、相與運策於帷幄中、定律令十三章、乃使樺山權左衛門尉久高爲大將、○中略總計三千餘人、艤艦百餘艘、導七島楫師小松吉兵衛等二十四人、往討琉球、

〔南浦文集下〕討琉球詩幷序

薩隅之南二百餘里、有一島、名曰琉球、使小島之在四方者幷呑爲一、而爲之會長矣、予聞之貴耆曰、昔者日本人王五十六代清和天王之孫、其名曰六孫王、本朝源家之鼻祖也、八世孫義朝公、令弟爲朝公、爲鎭西將軍之日、挾千鈞强弩於扶桑、而其威武偃塞垣草木、是故遠航於海、征伐島嶼、於斯時也、舟隨潮流、求一島於海中、以故始名流求矣、爲乃見、巣居穴處於島上者、頗雖似人之形、而載一角於右鬢上、所謂鬼怪者乎、爲朝征伐之後、有其孫子、世爲島之主君、固築石壘、家於其上、因効鬼怪之

みにもんで攻破らんとす、琉球王及び三司官等、薩州勢の強大にして、當るべからざるに避易し、みな出て降を乞ひけるによりて、軍の勝利を得て、琉球忽に平均せしよしを、速に駿府へ言上ありしかば、甚だ稱美せさせたまひ、琉球を永く薩州の附庸とぞせられける、かくて五月廿一日に、中山王尚寧及び諸王子を檎にして、薩州の軍士凱陣せり、十五年八月、薩州の太守中山王をともなひ、駿府に來りて登城す、中山王段子百端、猩々皮十二尋、太平布二百疋、白銀一万兩、大刀一腰を獻上す、それより江戸に到りて、將軍家に謁しけるに、米一千俵を下したまふ、さてその年歸國ありて、翌十六年、中山王琉球に歸ることを得たり、これによりて十二月十五日、琉球人駿府へ歸國御禮のために參りて、藥種及び方物くさぐさを貢獻す、さて中山王尚寧降服してより、永く我邦の正朔を奉じ、聘禮を修すべきよしの誓ひをなしてけり、嘉國、舊傳集、政事録、南浦文集等によりて記す、これ今の入貢の始めなり、この後貢使かつて闕ることとなし、

〔島津家覺書〕慶長十一年六月十七日、於伏見御城、御諱〇德川家康之字を被下、家久と改め、太宰長允之御腰物頂戴仕候、

琉球國者、家久十代之祖、陸奥國忠國代に、普廣院殿〇足利義教より致拜領、永享年中より薩摩に相從ひ候處に、近年致怠懈候、殊更權現樣に、御禮可申上之旨、使札を以申付候へ共、不致領掌候間、人衆を差越、可致退治之旨、山口駿河守直友を以言上候處に、蒙御免候、〇下略

〔南浦文集中〕呈琉球國王書

貴國之去我薩州者、二百餘里、其西島東嶼之相近者、僅不過三十餘里、以故時時有聘問聘禮、以修其鄰好者、其例舊矣、就中我宗子之嗣而立、則盡齎賀貢龍於其舟、以使業其衣者、貢其巾者二人、爲其遣使區縣玄貢來、而結盟於右翼之上者、奏衆疑於庭際、蓋致嗣子之賀儀也、今也遣崇元寺長、宣諭里主、賚其方物來、以賀我家久之嗣而立、又率舊例也、我今寄言於國君、勿以我之言厭之、日本六

王他魯毎ヲ滅シ（山南四世一百四年）始テ全島ヲ併有ス、十二年、尚巴志卒シテ、子尚忠立、將軍義教薩摩ノ守護島津忠國ニ琉球ヲ賜ヒ、其附庸トナス、嗣後島津氏ト聘使來往シ、歳時ヲ以テ方物ヲ將軍ニ獻ズ、是ニ於テ內地及明ニ兩屬ス、尚忠ヨリ五傳シテ尚德ニ至リ國亂ル、文明元年、尚德卒シ、國人世子ヲ廢シ、義本ノ裔尚圓ヲ奉ジテ王トナス、後六世尚寧ニ至リ、使聘ヲ修セズ、慶長十四年、島津家久將軍德川秀忠ニ請ヒ、將ヲ遣テ之ヲ伐チ、尚寧ヲ擒ニシテ歸リ、將軍ニ謁ス、將軍命ジテ永ク島津氏ノ附庸トナシ、世々貢禮ヲ修セシム、明治五年、尚寧ノ後十二世尚泰、職貢ヲ修ス、詔シテ藩王ニ封ジ、國ヲ西海道ニ屬ス、

〔琉球入貢紀略〕薩州太守島津氏琉球を征伐す

琉球國は、嘉吉年間足利義敎の命ありてよりこのかた、世々薩州に附庸の國たるを、天正のころ、群雄割據の時にあたりて、琉球の往來も姑く絕えたりければ、薩州の太守島津家久より、もとの如く貢使あるべきよしを、再三使をもていひつかはしけれども、彼國の三司官謝那といふ者、驕に明人と事を議りて、待遇ことさらに無禮なりしかば、已むことを得ずして、慶長十四年の春、台命を蒙、軍を起し、樺山權左衞門久高を總大將とし、平田太郎左衞門益宗を副將とし、龍雲和尚を軍師とし、七島郡司を按內として、その勢都合三千餘人、戰船百餘艘を出して、二月廿一日、纜を解きて、琉球國へ發向せしむ、樺山久高總勢を引率して、はじめ大島に着岸し、また德島に赴きしに、島人これを防もの凡千人ばかりなり、この戰ひに首を獲ること三百餘級、餘はみな降人にぞ出にける、四月朔日、那覇の港に至らんと、かのところに赴くに、港口には逆茂木亂杭をかまへ、水中に鐵の鎖をはり是に船のかゝりなば、上より眼の下に見おろして、射とるべき手だてをかまへ、その外の島々へも、用意おごそかにしてぞ待かけたる、これによりて他の港より攻入りて、三日の間世の戰ひ、手負討死少なからずといへども、遂に進みて首里に攻入り、王城を圍みて、急にも

ん事を望給ふ。（萬暦三十七年に、本朝慶長十四年也、此事五月島津彼國王を擒にして來り、止る事三年にして是を歸す、慶長十七年、本朝の爲に互市の事を、大明福建は軍門に申せし事有き、）右異朝諸書に見へし處也、是より後の事しるせし物考へず、此國の事本朝の書に見へし處、是も古の事不詳、五十五代文德天皇仁壽三年、僧圓珍（智證大師）唐國に趣かる、時、北風にさそはれて琉球に至りしと云事、元亨釋書に見へたり、是本朝にして、彼國の名聞えし始にて、其後聞ゆる事にて、東山の公方義政の頃、寶德三年七月、琉球の使來れり、（是時彼國にて山南山北を并せし、中山王尚泰久が時也、公方より書を贈られて其禮に答へられき、其書は假名字を用ひて、りうきうこくのよのぬしへと記されたり、）是より後其國人常に來りて、兵庫の湊にて商物などしたり、太閤秀吉の代と成て、使參らせて、天下の事しり給ふ事を賀す、程なく朝鮮の事起て、太閤も失せ玉ひ、太閤へ使をまいらせしは、慶永の時成べし、（此年號不審、書誤ナルベシ、）御當家の始、島津の爲に討れて、終に其屬國のごとくに成たる也、右本朝諸記に見へし處也、世には彼國は鎭西八郎爲朝の末葉也、されば今も其國に爲朝の遺跡共多しと云也、

〔日本地誌提要七十五琉球〕沿革　開國始祖ヲ天孫氏トス、文武天皇ノ時ヨリ本朝ニ内附入貢ス、天孫氏相傳ル二十五世、賊臣利勇ノ爲ニ弑セラル、文治三年浦添按司尊敦、賊ヲ誅シテ代リ立、首里ニ居リ、王ト稱シ、全島ヲ統ブ、是ヲ舜天王トナス、尊敦ハ源爲朝ノ子ナリ、（爲朝伊豆大島ニ配セラル、後琉球ニ抵テ、大里按司ノ妹ヲ納レテ尊敦ヲ生ム、）文應元年、孫義本、位ヲ天孫氏ノ裔英祖ニ讓ル、文永三年、大島始メテ來屬ス、曾孫玉城ニ至リ、嘉暦中國大ニ亂レ、今歸仁按司山北王ト稱シ、大里按司山南王ト稱シ、玉城僅ニ中頭ヲ保テ、中山王ト稱ス、正平四年、玉城ノ子西威卒ス、明年國人世子ヲ廢シ、浦添按司察度ヲ擧ゲテ中山王トナス、文中二年、察度始テ明ニ通ジ、終ニ其冊封ヲ受ク、山南山北二王亦明ニ入貢ス、元中七年、宮古八重山諸島始テ中山ニ内附ス、子武寧ニ至リ、應永十二年、佐敷按司尚巴志兵ヲ起シ、之ヲ滅シ、其父思紹ヲ奉ジテ王位ニ即カシメ、二十三年、尚巴志山北王、樊安知ヲ滅シ、（山北四世、九十餘年）使臣ヲ遣シ、方物ヲ將軍足利義持ニ獻ズ、二十八年、思紹卒シ、巴志立、永享元年、山南

推恭卽位、賞功罰罪、民安國豊、在位五十一年、壽七十二、嘉熙元年丁酉薨、

〔國朝舊章條八〕琉球國之事略

此國の事、異朝の諸書に見へし處は、此國古よりの事は詳ならず、隋の煬帝の時、朱寬と云者をして異俗を訪求られしに、始て此國に至、其詞通せざりしかば、一人を取て歸る、其後に師して再び其國に到らしめて、男女五百人を取て歸る、是此國の名、異朝の書に見へし始也、其後唐宋の時、中國に通ぜず、大元の時使して招かれしか共來らず、大明の代に及、大祖の洪武の初に貢使をまいらす、其國三ッに分れて、中山、山南、山北の三王有、其後封爵を請しかば、中山山南の二王に鍍金の銀印を賜たり、鍍金とは金をやきつくる事也、此時三王互に爭ひ戰しかば、天子其中を和らげ給ひ、山北にも印、幷文綺等を賜、（中山山南封ぜられしは、洪武十五年の事、山北を封ぜられしは、同十六年の事也、本朝後圓融院永德二年三年、公方は鹿苑院殿〈足利義滿〉の御時に當れり、）同廿五年中山王察度（王の名也、姓は尙と云、）其子姪幷陪臣の子弟を遣して國學に入、此國書隋元等の代に攻れども來らず、招けども至らず、然るに大明の代初に、自ら來り貢して其國の君臣子弟をして學び、中國に隨ひしが、天子其忠順の志を悅び給事大方ならず、（此故に外國にて此國程恩寵篤きは無りき、閩人のよく舟を乘ものの三十六性を給りて、年毎に往來すべき儀となる、察度が曾孫王巴志其位を嗣し時より、彼國王代を繼し時に、必中國の天子使を其國に遣して册封せらるゝ例始れり、是長き彼國の例也、）巴志が孫王思達景泰の始に代を繼て、程も無く山南山北を討亡して其國を幷せたり、（是より、琉球國王を中山と云也、景泰は大明第五代英宗の年號にて、本朝後花園の寳德の頃、公方は東山義政の時也、此國より始て通ぜしも此時也、後二見ゆ、）是よりして三年に二度中國に進貢する事例は始れり、（今も此例の如く也と云、）王思達が六代の孫、王永が代に當て、日本關白の秀吉の御事、此時高麗陣の頃也、爲に其國亂る、、王永程なく卒て、其子王寧代を繼、萬曆三十一年、其國に使を給て册封有、（萬曆は大明十三王神宗の年號、其三十一年は、本朝後陽成院慶長八年、神君征夷大將軍に任し年也、）其使歸奏して曰、琉球必倭の爲に困めらるべし、日本の人千計、利刃を挾て其市に出入せりと申き、程なく同三十七年、王寧薩州の爲に捉はれ行、同四十年、王寧使して進貢して、歸國の事を申、又日本の爲に市を通せ

〔日本國郡沿革考四島〕琉球　一名阿兒奈波、〈淡海三船鑑眞傳〉古時唯以南島呼之、〈三善清行智證傳作流球、性靈集作留求、元亨釋書、隋書作流求、元史作瑠求、或作流虬、〉大寶和銅間、內附來貢、靈龜元年、南島奄美、〈齊明紀作海見島、天武紀作阿麻彌、文武紀作菴美、或云今天草島、〉夜久、度感、〈今德之島〉信覺、〈今石垣〉球美、〈今久米〉等入朝、授位有差、卽是也、後與白石、阿儗、黑島、儀貢等凡十二島、總稱之曰鬼界島、皆通內地、至長寬承安際、往々離叛、十二島中鬼界以南七島皆不屬、時薩摩人阿多權守平忠景、私越海至鬼界、遣筑後守平家貞討之、不果行、文治四年、源右將使天野遠景、宇都宮信房、擊鬼界、降之、先是〈保元元年〉鎭西八郞源爲朝、配流于伊豆大島、侵略諸島、遂到鬼島、懾服島人、擄一人而還、島人象納絹百匹、所謂鬼島亦琉球也、既而爲朝子逃島中、代天孫氏爲王、世襲至于今云、〈中山世鑑云、宋乾道元年、舊同爲朝公圖、〉〈朝至國、生一子、而還、其子名尊敦、後爲浦添按司、淳熙年間、天孫氏二十五紀之裔孫、爲權臣利勇所弑、尊敦倡義起兵、誅利勇、國人推戴爲君、是爲舜天王也、舜天登位、制度漸定、國俗大革、〉足利氏之時、琉球王時遣使貢方物、薩摩島津氏、世掌接伴、後復背叛、及東照公之時、島津家久奉敎招之、不至、請而討之、慶長十四年、遂將南伐、平其全島、明年家久率其王尙寧、入朝于駿府、及江都、嘉聽以琉球隷島津氏、世々爲其藩屬、以後其使以時從島津氏朝貢、

〔中山傳信錄三〕中山世系

中山世鑑云、琉球始祖爲天孫氏、其初有一男一女、生於大荒、自成夫婦、曰阿摩美久、生三男二女、長男爲天孫氏、國主始也、二男爲諸侯始、三男爲百姓始、長女曰君君、二女曰祝祝、爲國守護神、一爲天神、一爲海神也、天孫氏二十五代、姓氏今不可考、故略之、起乙丑、終丙午、凡一萬七千八百二年、今斷自舜天始、

舜天

宋淳熙十四年丁未、舜天卽位、

舜天日本人皇後裔、大里按司朝公男子也、淳熙七年庚子、年十五、廉有奇徵、長爲浦添按司、人奉其政、斷獄不濫、天孫二十五世政衰、逆臣利勇恃寵執權、弑其君而自立、舜天討之、利勇死、諸按司

二、山北爲國頭省、府九、府土名間切所屬皆稱村、頭、土名母喇、國中亦有五嶽、辨嶽在中山、八頭嶽在山南、佳楚嶽、名護嶽、恩納嶽在山北、比他山爲高、佳楚嶽尤峻、爲琉球第一峯云、

〔西遊雜記 四〕薩州の地より琉球迄の海上、諸板にも顯し、琉球志抔にも其實說委しからず、今土人の言所山川といふ津より南の方にあたりて、凡三百里計、夏冬によつて船路の替り有といへ共、其間に連る島大小三十餘、何れも船懸ある島にて、大坂へ往來せる海上よりも安し、薩州大隅の浦々に國守よりのゆるしの廻船ありて、一ケ年に幾度といふ御定めありて渡海する也、鹿兒島よりも、士格の人數琉球の地へ渡りて勤番する役所も有る事にて、米のよく生ずる風土にて、二十餘方石薩州上納す、近き年の事にや、琉球すべて旱魃して、稻熟せず、(暖國にて、稻は五月熟頃也、)國民飢渴せんとす、此時には、薩州侯數石の米を渡してすくひ給ふ年あり、すべて琉球人日本の風俗を慕ひて、薩州に屬せるといへども、中華福建省の地へ近く、やゝもすれば福州の爲になやまさるゝ事によつて、福建省の下知にも應じて聘禮する事也、薩州にては、知りても知らぬ體にて、是迄濟來りしといふ、

〔華夷通商考 下〕琉球

此國、過半ハ福州ニ從ヒタル國ニテ、唐ヨリ往來モ有之也、薩摩ヨリ往來之所モ有之也、四季日本ヨリ暖ナリ、海上薩摩ヨリ二百里南西當レル島國也、

〔中山聘使略〕雜事

彼國(○琉球)北極出地二十六度二分三釐の地にして、時令大に皇國と同からず、其地氷雪なく、草木多を經て枯れず、四方の山野蒼々たり、百蟲蟄せず、四時蚊帳をたる、甘蔗植るに時なし、稻九月稱を下し、五月刈收め、六月には田に禾穗なし、一年再登す、梅九月花さく、貧賤の小民は、芭蕉布の單衣一ッにて冬を涉るといへり、

那城、越來、美里、具志川の諸府此に屬す、山南を島尻省とす、大里、玉城、豐見城、小祿、兼城、高嶺、佐敷、知念、具志頭、麻文仁、眞壁、喜屋武の諸府此に屬す、山北を國頭省とす、金武、恩納、名護、久志、羽地、今歸仁、本部大宜味、國頭の諸府此に屬す、國王のみやこする處を首里と云、湊を那覇と云、大湊也、屬島三十六あり、遠近つらなりめぐる、海上の里數南北三千里、東西六百里なり、諸島は察侍紀官を遣して治しむ、此を奉行といふ大平山、八重山、大島は、島大なるゆへ三人、馬齒は二人、其外は各一人也、只巴麻、伊計、椅山、硫黄の四島は、尤小なれば官をおかず、土着の頭目官をして治めしむ、

（琉球國事略）異朝の書に見えし琉球國の事

琉球は、其國大小の二ッ有り、今の中山は、其大琉球の國なり、

小琉球の國は、中國に通る事なしと見えたり、某琉球の人に此事を問しに、小琉球といふ所詳ならず、今の大島の地を申せしにやと申す、此せつ心得ず、異朝の書に、小琉球は泉州の地に彭湖といふ所と煙火相望むといひ、又國中の鼓山に上りて望むべしといふ、然らば國中に近き海上に有や、大島ならんには國を去る事數千里を隔つ、又朝鮮の書に、小琉球の地は、琉球の東南水路七八日が程にあり、國に君長もなく、人みなたけたかく大にして、衣裳といふもなし、人死しぬれば、其親族集りて其肉をくらひ、其頭にうるしぬりて飲器とすといふ事あり、是も亦信用に足らず、

（中山傳信錄四）琉球地圖○地圖略

琉球始名流虬、（中山世鑑云、隋使羽騎尉朱寬至國、於萬濤間見地形如虬龍浮水中、故名、）隋書始見、則書流求、宋史因之、元史曰瑠求、明洪武中、改琉球、國在閩福州正東一千七百里、偏南三里、其地形東西狹、寬處十數里、南北長四百四十里、自中山首里、南至喜屋武邊海、緊行一日半、北至國頭邊海、緊行三日半、明永樂以前、國分爲三、曰中山、曰山南、曰山北、宜德幷爲一、分爲三省、中山爲中頭省、屬府十四、山南爲島尻（一作嶋）省、屬府十

地勢

シ、大小總テ十餘島、支那人之ヲ小琉球ト稱ス、北緯貳拾七度壹分（與論島）ヨリ貳拾八度三拾壹分ニ至リ、西徑九度四拾八分（喜界島）ヨリ壹拾壹度貳拾貳分（與論島）ニ至ル、大島五島ノ首ニ居リ、地最宏濶、山嶽重疊、渦灣嶽頗高峻、山脈東北ニ起リ、島内ニ散布シ、北部稍夷坦ナリ、沿岸港灣參錯相望ミ、皆繫泊ニ宜シ、諸島風土、大抵琉球ニ同ジク、夏涼冬暖、草木繁茂ス、民俗亦數様ナリ、大島ハ卽古ノ庵美（アマミ）ニシテ、琉球國祖肇基ノ地タリ、天武天皇十一年、始テ入朝貢獻シ、爾後往來絶エズ、文永三年、琉球ニ入貢シ、終ニ其屬島トナル、慶長十四年、島津家久琉球ヲ伐チ之ヲ取リ、喜界等四島ト共ニ、永ク薩摩ノ所管ニ歸ス、王政革新、鹿兒島縣ニ隷シ、治所ヲ大島名瀬ニ置キ、以テ諸島ノ事ヲ管ス、

〔中山傳信錄四〕琉球三十六島

琉球屬島三十六、水程南北三千里、東西六百里、遠近環列、各島語言、惟姑米葉壁與中山爲近、皆不相通、擇其島能中山語者、給黄帽令爲酋長、又遣黄帽官涖治之、名奉行官、亦名監撫使、歲易人、土人稱之曰親雲上、聽其獄訟、徵其賦稅、小島各一員、馬齒山二員、太平山、八重山、大島各三員、惟巴麻（中山讀同字、音國麻、華言山也、下倣之）伊計、椅山、硫磺山四島不設員、諸島無文字、皆奉中山國書、我皇上聲敎遠布、各島漸通中國字、購畜中國書籍、有能讀上諭十六條、及能詩者矣、○下略

〔續日本紀一（文武）〕三年七月辛未、多褹、夜久、菴美、度感等人、從朝宰而來、貢方物、授位賜物各有差、其度感島、通中國於是始矣、

〔中山聘使略〕其地（琉球）の形ち角なき龍の流れたるがごとし、因て流虬といふ、東西の廣さ數十里、南北四百四十里、中山のみやこ首里より、南は喜屋武の海邊まで五十里、北は國頭の海邊まで三百八十里、我正和中國分れて三と成、中山、山南、山北といふ、我永享年中、又併せて一統し、三省に分つ、中山を中頭省とす、首里、泊、那覇、眞和志、南風原、東風平、西原、浦添、宜野灣、中城、北谷、讀谷山、勝連、與

稱之曰宮古島、又曰麻姑山、伊世佳奇、(俗呼石垣、)姑彌、(俗呼西表、)烏巴麻、(俗呼小濱、一曰宇波間、)二島　阿喇斯姑、(俗呼新城、一作阿喇姑斯古、)達奇度奴、(俗呼武富、一作武富、)巴梯呂麻、(俗呼波照間、)姑呂世麻、(俗呼久里島、一作黒島、)巴度間、(俗呼鳩間、一作巴度麻、)由那姑尼、(俗呼與那國、)以上九島、總稱之曰八重山、又曰太平山、姑達佳、(俗呼久高、一作孔達佳、)津奇奴、(俗呼津堅、)巴麻、(俗呼濱比嘉島、)伊奇、(俗呼伊計、以上東四島、)姑米、(俗呼久米、)東馬齒、(俗呼慶良間、)西馬齒、(俗呼西慶良間、以上西三島、大小四島、)度那喜、(俗呼渡名喜、)阿姑尼、(俗呼粟國、)椅世麻、(俗呼伊江、一曰椅山、)葉壁山、(俗呼伊比屋、)硫磺島、(俗呼鳥島、一名硫磺山、又名黒島、以上西北五島、)多度姑、(俗呼德島、)烏世麻、(俗呼大島、)由論、(俗呼與論、)永良部、(俗同、)由呂、(俗呼與路、一作由路、)烏奇奴、(俗呼沖野、又曰浮野、)佳奇呂麻、(俗呼垣路、又作加喜呂麻、一作加計呂麻、)奇界、(俗呼鬼界、以上東北八島、國人皆曰烏父俟麻、渡此爲土噶喇七島、亦作度加喇、巨接汪揖輪七島者、口島、中島、諏訪瀬島、惡石、臥蛇島、平島、寶島也、人不滿萬、惟寶島最大、國人統呼之曰土噶喇、或曰都佛也、)是○爲○琉○球○三○十○六○島、

〔中山聘使略〕琉球屬島全圖(略)○圖

屬島三十六、爰に其方位を擧ぐ、東の四島、姑達佳、(中山の東四十五里)津堅、(中山の東三十五里)巴麻、(南北二島、中山の東三十五里)伊計、(中山の東三十五里)正西の三島、東馬齒、大小五島、西馬齒、大小四島、(中山の正西百三十里)姑米山、馬齒の西にあり、(中山を去事四百八十里)西北の五島、度那奇、(姑米に近し)安根呢山、(度那奇に並ぶ)椅山、(至て近し、汐満けば少して遠るべし)伊平屋、(中山の西北三百里)硫黄山、(中山の西北三百五十里、姑米山と南北相峙す、)東北の八島、由論、(中山の東北五百里)永良部、(中山の東北五百五十里)度姑、(中山の東北六百里)由呂、(度姑の東北三十八里)烏奇奴、(度姑の東北四十里)佳奇呂麻、(中山の東北七百七十一里)大島、(中山を去事八百里にあり、)奇界、(中山を去事九百里、最遠の界也、)南の七島、太平山、(中山の南二十里に在)伊計麻、(太平山の東南に在)伊良保、(太平山の西南に在)姑李麻、(太平山の正西)達喇麻、(太平山の正西)面那、(太平山の西南)烏鳴彌、(太平山の西北)西南の九島、八重山、(太平山の西南四百里、中山を去事二千四百里、)烏巴麻、(二島、八重山の西南)巴度麻、(八重山の西南)由那姑呢、(八重山の西南、以上の四島、皆磯に近し、)姑彌、(八重山の西)達奇度奴、(八重山の東、姑彌の東、)姑呂世麻、(八重山の西少し北)阿喇姑斯古、(八重山の西)巴梯呂麻、(八重山の極西北)

〔日本地誌提要(七十三、西海道)〕州南諸島　大島、薩摩川邊郡寶島ノ南少東海上直徑壹拾八里、開聞岬ノ南南西七拾八里ニアリ、東ニ喜界島、南ニ德之島、永良部島、與論島アリ、其ニ五島、其間小嶼點綴

八重山島、石垣入表　島之地、總稱以爲八重山、國史稱信覺、(見續日本書紀)星槎勝覽稱重曼山、蓋皆謂此石垣、乃是信覺之轉耳、石垣島周廻十六里十七町、所屬間切四、曰河平、曰宮良、曰大濱、曰石垣、其港二、在西北曰河平湊、(去宮古島針孔濱五十八里半、港深六町三十間、濶一町、大船二三十隻、可以繫泊、)在南曰御崎泊、港口淺狹、不可泊船、唯其西南要津耳、堂計止美島、黑島、波照間島等隸焉、(堂計止美島在御崎泊西一里二十八町、周廻一里三十町、黑島在堂計止美島西南二里二十町、周廻亦二里二十町、)其所管二島、曰上離島、周廻二十町、曰下離島、周廻二十七町、並在黑島西南、波照間島周廻三里二十町、去黑島十四里許、乃是琉球南界也、

入表島、在石垣島之西南、(石垣島有山、曰於茂登嶽、此島在彼山之南、故名曰伊利於茂登島、方言凡深奥之所、謂之伊利、伊利即入也、表者於茂登之訛耳、)周廻十五里、所屬間切二、曰古見、曰入表、亦有小濱、鳩間、內離、外離等島、而隸焉、(小濱在堂計止美西二里、其周廻三里、小濱之北有宇也末島、狹小而無人住、鳩間島在入表西北、海上二里半、內外離島在入表西南海濱、三島亦皆狹小、非有民居者、)去此以西、路過落漈、而行四十八里、至與那國、其地周廻五里十町、乃是琉球西界也、(與那國、亦隸入表島焉、)

以上二島古山南之地

〔日本國郡沿革考(四屬島)〕琉球○中略

沖繩島(管二十七村、方言呼村爲間切、而私稱郡、日本史云、沖繩即阿兒奈波之訛、中山傳信錄、一國人至今自呼流球、曰屋其惹、中山世譜云、中頭中山府、五州十一郡、原八郡、康熙年間分爲十一郡、島尻山南府、原十四郡、康熙年間分爲十五郡、國頭山北府、原十四郡、康熙年間分爲九郡、)　計羅摩島(管一村、或作慶良間、琉球史略云、東馬舊山、大小五島、俗讀賴米、以下屬外注、皆操琉球史略、)　戶無島(トナキ)(管一村、或度名喜、度那奇、)　久米島(管二村、續紀作球美、姑米、)　粟島(管一村、或粟國島、安根妮、或阿姑尼、又安護仁、)　伊惠島(管一村、椅山、或椅世麻、亦伊江島、)　伊是那島(イゼナ)(管一村、琉球史略不載、)　惠平屋島(管一村、或伊比屋、又伊平屋、蹟豐山、俗呼萬臣島、)　宮古島(管六村、南七島、國人皆曰太平山、始爲宮古、復爲迷姑、今麻姑、)　八重山島(管十一村、南北九島、國人皆曰八重山、一名北木山、土名蝶師加紀、按續紀稱信覺、與蝶師加紀音相近、疑是一島、中山世譜以此島爲太平山、可疑、)　鬼界島(管五村、古作貴賀、或貴賀、或貴海、奇界、)　大島(管七村、島父世麻、自稱小琉球、)　德之島(管三村、續紀作度感、度姑、)　永樂部島(管三村、或永良部、伊良保、或惠良部、)　與論島(管一村、由論、)

右島津氏所上幕府之圖籍所載如斯、而中山世鑑云、庇郎喇(俗呼平良)、姑李麻(俗呼來間、譯曰古喜間、一作來麻、土名來曰姑李、)烏喝彌(俗呼大神、一作宇間味、)伊奇麻(俗呼池間、譯曰伊喜間、)面那(俗呼水納、一作水名、)伊良保(俗呼惠良部、)達喇麻(俗呼多良間、一作太良末、)七島總

西曰大和腎也泊、其北曰井之川、西北二港、並皆淺狹、大船未易出入、

○大島、島在德島東北十八里、琉球北界也、續文獻通考所謂琉球北山是也、國史所謂阿麻彌島、或作菴美、並皆謂此、阿麻彌者上世神人名也、其東北有山、乃神人所降、因名曰阿麻美嶽、島亦因得此名、地形稍大、後稍以爲大島、其周廻五十九里十町、所屬間切七、曰笠利、曰奈瀨、曰古見、曰住用、曰東、曰西、曰燒內、港八、曰西古見湊、曰燒內湊、曰大和馬場湊、曰奈瀨湊、曰深井浦、曰世德多浦、曰瀨名浦、曰住用湊、西古見湊、港深五十間、闊三十間、可泊大船五六隻、此去渡于德島、有二路、其一正南行十八里、可以抵井之川、其一西南行十八里、可以抵大和泊、燒內湊在其東口里、港深三里、闊三十町、可泊大船二百隻、其東七里、即入和馬場湊、港深五町、闊三町、可泊大船五六隻、又其東五里、即奈瀨湊、港深十二町、闊五町、可泊大船十四五隻、又其東北□里、即深井浦、港深三十町、闊四町、可泊大船三十隻、其東南八里、即世德多浦、此港淺狹、不可泊船、其南四里、即瀨名浦、亦不可泊船、其西南四里、即住用湊、港深十三町、闊二町、可泊大船七八隻、自此南去西轉西北、抵西古見湊、約十三里、去自深井浦西北行三十五里、至二七島、島之大小十餘、散在德中、總謂之七島、諸國使琉球錄、及圖書所謂七島者即此、其海潮常向東而瀉、乃是元史所謂落漈水、趨下而不回者也、凡諸島相離、中間所謂落漈者、往往在焉、使琉球錄以爲落漈不知所在、謂遠去琉球而非經過之處者非、又去此北行七十里、至于大隅國、永良部島、俗所謂之阿麻彌洲之度、蓋古遺言也、所隸三島、曰加計奈、周廻五里十町、曰于計、周廻四里九町、曰與路、周廻三里二十町、並皆在大島之南、

○鬼界島、島在大島東南七里、自世德多浦東南行七里、至鬼界島梅泊、周廻六里二十四町、所屬間切五、曰志戶桶、曰東、曰西目、曰梅、曰荒木、其港在西曰梅泊、乃是明人所稱吉佳、見圖書、琉球國東北極界也、圖書人云、小琉球蓋此、未知是否、

以上五島古山北之地

○宮古島、島即明人所謂大平山也、見廣輿圖、按星槎勝覽云、琉球有大崎山、島夷志云、大崎山極高峻、夜半登之、望暘谷日出、紅光燭天、山頂爲之俱明、疑此、在針羅摩島西南七十五里、周廻十一里、所屬間切四、曰於呂加、曰下地、曰平良、曰雁股、此島無可泊船之所、所隸六島、曰以計米、周廻一里八町、曰久議末、周廻一里、曰永良部、即是與永良部島、周廻四里二十町、曰下地、周廻□里、曰太良濔、周廻四里、曰美徒奈、周廻一里、去此西行五十二里、至八重山、其海潮亦常向東而瀉、乃所謂落漈者、去宮古島針孔濱、南西南行三十五里、至太□濱島、又去西至石垣島平窪崎十八里、

久米島（舊作九米島）在那覇港及計羅摩島西、周廻六里二十町、所屬間切二、曰中城、曰具志河、港二、其南曰兼城湊（港深一町、濶五十間、可泊大船四五隻、）其東曰町屋入江（其港淺狹、船隻難泊、）並皆去那覇港四十八里、國史所謂球美（見續日本書紀）明人以稱古米即此（見使琉球錄、及廣輿圖等、）閩人三十六姓之後所居也、直北五里有鳥島者隸焉（即謂久米鳥島者）

粟島、島在戸無島北、其周廻二里十二町、去那覇港西北三十里、

伊惠島（舊作泳島）即明人所稱移山島（見使琉球錄、及廣輿圖閩書等、）五島相接、而至今歸仁西北港口（港名曰渡輿波入江）去島港口約可二里、其周廻四里七町、

惠平屋島（舊作惠平也島）隋書作鼅鼊嶼、明人以謂熱壁山、或謂葉壁山（熱壁見使琉球錄及廣輿圖、葉壁見閩書、按廣輿圖分載鼅鼊嶼熱壁山者誤、）周廻二十六町、在今歸仁間切正北十里、其南小島、名曰乃保、即隸于此（乃保島周廻二十三町、去惠平屋島五町、）

伊是那島、島在惠平屋島南里餘、周廻二里十八町、所隸二島、其南曰具志河、其北曰柳葉、並皆狹小、非有居人者、

島島、島在惠平屋島東北五十餘里、周廻二十四町、厥土產硫黃、明人所謂硫黃山即此（見使琉球錄、及廣輿圖閩書等、）

以上九島、古中山之地、

與論島（舊作與論島）明人稱繇奴島、在沖繩島東北、而其北接永良部島（繇奴見閩書、）周廻三里五町、所屬村二、曰武幾也、曰阿賀佐、其港曰阿賀佐泊、泊即謂可泊船之所也、去自運天湊東北行二十里而至于此（港口淺狹、大船未島出入、）

永良部島（舊作惠羅武島）在與論島北、而其北接德島、明人稱野剌普即此（見閩書、南島名永良部者凡二、隸大隅國、謂之口永良部、隸八重山、謂之奧永良部、名義未詳云、）周廻十里十八町、所屬間切三、曰木比留、曰大城、曰德時、其港曰大和泊、去自與論島東北行十三里、而至于此（港深二町二十間、濶二町四十間、大船未島出入、）

德島（舊作度九島）國史所謂度感島（見續日本書紀）在永良部島北、而其東北接大島、周廻十七里三町、所屬間切三、曰東、曰西目、曰面繩、港三、其東曰秋德港（港深一町、濶□町、可泊大船三隻、）去自永良部島東北行十八里、而至于此、其

の海宮王の姿を描に、龍冠を戴く形を作る、畫工元より本基ありて圖するにあらねば、是微とするに足らざれ共、暗に其同軌に出るを强て五の證とす、此等を合せ考ふるに、海宮は琉球たる事決定して知ぬべし、されば我と琉球とは、尊卑等殊也といへども、相隣て唇齒とやいわん、肝膽とやいわん、此より後、續て貢使の往來ありつべけれど、考ふる所なし、

位置疆域

〔中山聘使略〕其國薩州の南一千六百里、福州の正東千七百里にあり、北極出地二十六度二分三釐、偏度北極の中線を去り、東に偏る凖五十四度、牛女の野にあたる、

〔戎國夢物語上〕琉球國ナリ、是モ海中ノ島國也、中華ノ東南海中に在、大寃ヨリ少シ北東ニ有島也、○中略北極出地廿七度許、氣候暖國也、大寃ヨリハ寒シ、日本帝都ヨリ凡二百四十餘里ノ直徑ノ南ニシテ、方角ハ西南ニテ、海路ハ六百餘里成ベシ、薩州ヨリ海路三百里バカリ也、國中蛇多シ、日本ノ鼠ノ如シ、薩州迄ノ海中ニ數多ノ小島有、皆々薩州琉球ヨリコレヲ領ス、土產、木綿、芭蕉布、黑砂糖、アワモリ酒、其外藥種類品々也、

〔日本地誌提要七十五琉球〕疆域　沖繩島、薩摩ノ開聞岬ノ西南少南、海上凡壹百三拾六里ニアリ、東北ヨリ西南ニ亘リ、長凡貳拾七里、東西廣處壹拾里、狹處壹里餘、南北凡壹拾里、周回七拾四里、幅員凡壹百六拾方里、其南島ヲ宮古(ミヤコ)八重山(ヤヘヤマ)群島トナシ、之ヲ先島ト稱ス、

島嶼

〔南島志上〕針羅摩島、舊作計羅婆島、明人稱雞籠嶼、即此、雞籠嶼見於山那土番琉球國圖、按皇明實記所載雞籠山一名東番、非此島也、其名偶同爾、去那覇港西行七里、而至于此、其周廻三里、座間味島隷焉、旁近小島凡八、土壤狹少、皆非有民居者、座間味島周廻二里二十四町、本島周廻一里十八町、國人云、中國人稱馬齒山者即此、去此西往、先島、南海諸島總稱曰先島、海中砂礁、其國稱曰八重千瀨者、南北五里、東西里半、使琉球錄所謂古米山水急礁多、舟至此而敗者即此、或曰礁東、或曰礁西、南路均是七十五里、而至宮古島針孔之濱、島、

戸無島、島在那覇港西北二十六里、周廻一里六町、傍近小島曰天未無、其地甚狹、無人住者、

琉球の我國に通信する事は、いとも久しかりけん、神代卷に、天孫彦火火出見尊海宮に趣かせ給ひ、海神豐玉彦の女豐玉姫を娶り、海宮に留りましまする事を載す又玉依姫鸕鷀草葺不合尊の皇妃に海宮より立せ給ふとあるを、海宮とは當時琉球をさして云へりといふ諸家の說あり。此は正しく史策に載ざれば、臆斷に出たる說なれど、私に思ふに、備に左もあるべしと覺えぬ、其故は、日向大隅以南諸島多しといへ共、君臣禮節の備りたるは琉球に若べからず、今薩隅の淳風四達し、遠く島嶼に及び、頑民皇化に浴といへども、琉球以外の諸島は、ことごとく窮境仄陋の夷蠻にして、君長ある事をしらず、況や太古に在りては、其賤劣愚昧推して測るべし、天孫何ぞ三年の久しきに堪させ給ふべき、其上二代の皇妃に立せ給ふ程の、端正莊麗の女子のおはすべき共覺えず、是一の證也、今琉球の崇祠多き中に、彦火々出見、葺不合の二尊を崇祀し、及び豐玉彦、豐玉姫、玉依姫をも祀る事を聞けり、又我國の古語、往々彼國に殘れるが中に、豐といひ玉といふ事いと多し、凡そ彼國の事情云爲、太だ我に近くして、和歌をよみ得るものまゝ多し、此を二の證とす、文字は應神帝十六年に渡りはじめ、彼國にも中古舜天以後より始ると見えたり、しかれば天孫と稱し來る事も、應神以後より稱し來る事とはしられたれど、彼も亦天孫氏といへば、我天孫彼國に留らせ給ふ中に、皇胤を殘して歸らせ給ひ、さて其皇胤彼の開闢の君とならせ給ふも亦しるべからず、此を三の證とす、京都將軍の末、政道弛て西國沿海の地、無賴の士私に船樣を出し、兵器を携へ、琉球臺灣、安南、呂宋、閩廣の間を縱し劫し、貨財を奪ひ取る事あり、明に此を倭寇と云て大に畏る、その劫すもの詞に、龍宮城へ至り寶を得たりとなんいひしと、今も其地にて語り傳へける、是龍宮城とは、泛く海島をいひし事なれ共、日向大隅よりして、諸島つらなり、甚至り易は琉球なれば、此を四の證とす、琉球の衣冠は、明の制を受て其俗變といへども、男子の簪を插は、其國固有の風なるべし、國王は龍蛸の簪を用ふといへり、今國俗

はなる、琉球をうるまの島と云と也、

〔琉球入貢紀略〕うるまの島琉球にあらざるの辨

寳垓隨筆、夏山雜談等に、うるまの國とは琉球なりといへりこれはもと狹衣といふ册子に、うるまの島といふことのあるを、紹巴の下紐といふ註釋に、琉球なりといへるによると見ゆれども、誤りなり、うるまは新羅今の朝鮮なりの屬島にして、琉球にはあらず、自ら別なりその證は大納言公任集に、しらぎのうるまの島人來りて、こゝの人のいふことも聞しらずときかせたまひて、返りごとと聞えざりける人にと、詞書ありて、おぼつかなうるまの島の人なれやわが悃むるをしらずがはなる、千載集には、因の句をわすがことのはなに作る、また本朝麗藻に、新羅國迂陵島人とも見えたり、これにて琉球ならざることいと分明なり、新田夏蔭云、うるまは迂陵の韓音なりといへり、

〔萬國夢物語上〕琉球國ナリ、○中略日本ノ西南海中ニ在、王城ノ門ニ龍宮城ト云額ヲアゲタリ、古昔ヨリ日本ニテ龍宮ト云ハ、此國ヲカタドルナラン、

〔日本書紀通證七〕古事記曰、如魚鱗所造之宮室、是龍魚鱗屋、号龍堂、今按此擬水府而言、故口訣篡疏等直爲龍宮也、古事記曰、稻氷命者爲妣國而入坐海原也、姓氏錄曰、新良貴、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、男稻飯命之後也、是出於新良國主、鑑眞和尙傳曰、或漂日南國、或赴龍宮、琉球神道記曰、琉球王門謗記龍宮城、

〔古事記傳十七〕海神の宮は海の底にある國なり、後世のなまさかしき說どもは、古傳の趣にかなはず、佛書に龍宮と云る物あり、其說さまゞ、あやしきまで美麗にいとよく似たる島あり、中略さこに又西き代のなとさかしき人の心には、水中に宮室などのあるべき理なしと思ひとるから、かの龍宮などの說を聞り信ず、此說の事を謂し、實は海底に非ずとして、說き一の島なりといひ、或は琉球を謂なりといひ、或は對馬なりなども云て、其說區々なれど、凡て古き書の記事に、皆古傳に聞ける例のことを、書意の私事なり、

〔中山聘使略〕通信　貢使

て中山傳信錄に在り、可見皆我東方語音耳、其字音をもて爰に復記さず、南島志曰、周廻七十四里、是據此間里數而言、凡六尺爲間、六十間爲町、三十六町爲里、後皆倣此、南去本藩鹿府二百九十五里半、至北達天長三百八十里、間切二十七、海港二所、村落數百、

舊說云、沖繩島者、卽沖之島といふ事なり、日本紀火々出見御歌に、沖津鳥鴨著島と詠じ給ひしより出たり、繩は之の音の轉せしなり、今按、繩今の那覇是耳、沖といひ繩といふ、本是兩地の名、合而沖繩といふに似たり、

說云、倭急耶とは沖掖玖の略言なり、卽古之所謂掖玖にして、而後今の馭謨郡益救に分て沖といふなり、今按、沖之島轉じて沖繩といひ、沖繩方言沖屋といふ、而其倭奴のごとき、又沖之の略にして、國史以て掖玖と云、卽南島志所謂、其路所由と、是今の屋久島、南島の中、此方地に密迹す、當時南島地名未詳、其端島の名をもて各島を混じ稱する耳、於是流求をもて沖屋久といひしに似たり、然共其據る所未審なることを考がたし、

〔唐大和上東征傳〕廿一日戊午、〇唐天寶十二年十一月第一第二兩舟、同到阿兒奈波島、在多禰島西南、

〔長門本平家物語 四〕少將は、都にてさつまがたへと聞給ひしかば、さもやはと思給けるに、九州のうちには有ざりけり、誠に世の常の流罪だにかなしかるべし、ましで此島の有樣傳聞ては、客もだえこがれけるこそむざんなれ、〇中略さつまがたとは總名也、きかいは十二の島なれば、くち五島は日本へ隨へり、おく七しまはいまだ我朝に從はずといへり、白石、あこしき、くろ島、いわうが島、あせ納、あせ波やくの島とて、ゑらぶ、おきなは、きかいが島といへり、

〔倭訓栞 中編 三〕うるまのしま　琉球をいふといへり、蠻國にさうるまあり、袖中抄などにも、いづくともなし、

〔狹衣 一 下〕こはいかにかとようるまのしまの人ともおぼえ侍るかな、

〔狹衣下紐 一〕一こはいかに　引おぼつかなうるまの島の人なれやわがことのはをしらすが

也、蓋倭與接壤、攻之甚易、中國豈能越大國而授之哉、其國敬神、以婦人守節者爲尸、謂之女王、世由神選、以相代云、自國王以下、莫不拜禮、惟諸田將穫必禱於神、神先往採數穗茹之、然後敢穫、不者食之立死、儀與捍患屢顯靈應、中國使者至則女王率其從二三百人、各頂草圈、入王宮中、親供億廚饋、恐有毒也、諸從皆良家女、神特攝其魂往耳、中國人有代彼治庖者、親見神降、其聲嗚嗚如數焉、

〔兩朝平攘錄日本四〕適有大國名倘島者、其子受關白金、遂殺父來降、關白自爲天授、令州廣造兵船、聲言、三月入寇大明、〇中略　又差人脇琉球、勿貢大明、致漏事機、時有福建同安船商陳申寓琉球、因與鄭迵商議、乘本國進貢請封之使、備將關白情由奉報、陳申搭船回、面稟巡撫趙參魯以聞、此萬暦十九年四月也、

〔異稱日本傳中二〕倘島蓋指琉球國王多以倘字爲名、故訛爲倘島、

〔倭訓栞前編四十五〕おきな〇中略　中山傳信錄に、土人自呼其地おきなといふ、蓋舊土名也と見ゆ、沖中の義にや、

〔中山傳信錄六〕琉球語

琉球土人居下郷者、不自稱琉球國、自呼其地曰屋其惹、蓋其舊土名也、

〔倭訓栞前編四十五〕おきなひと〇中略　中山傳信錄に、琉球人おきなびと、日本人やまとびと、見ゆ、

〔麑藩名勝考三〕沖繩島、（即中山國也、又作惡鬼納島、中山方言於喜那、又曰二字喜那、中山傳信錄作屋其惹、琉球國誌略云、按屋其惹鬼納、徐葆光錄謂其舊土名非也、細考之、乃土音知也、今之作書、則仍是琉球國字耳とぞ、按に、屋其惹は即沖繩、其土音を呼ことヤンの如し、壹屋音濁字、其歌の土音琉球ならん歟、周煌國志略詳く書して、意に徐葆光の說を駁、尤杜撰甚し、）添卷之一附錄夷語音釋人物門曰琉球人、（倭急拿必周）日本人、（亞馬吐必周）琉球國王、（倭急拿敖那）今按に、是琉球人より聞たる所を取りしなるべし、其故は、凡琉球本邦人を稱して倭急那知字といひ、自國人をさして倭急那知字といふ也、（必周の周、[illegible]は國の誤字、又數國の下、志の一字を脫する、數國志は[illegible]なり、琉球の方言沖繩御主なり、國志略加那志に作る、從ふべし、凡琉球國語[illegible]）

のしま、(狹衣)言葉の聞しらぬを、うるまのしま人よといへるなり、琉球をさしていふにはあらず、さるを下紐と云解に、うるまは琉球なりとあり、依て今世の人、只一筋に琉球の事と思へり、公任卿の集に、しらぎのうるまのしま人とあれば、新羅に屬せし島とみえたり、鬼島、(保元平治物語)おきなはしまの下略なり、屋其慧、(土俗自稱)おきなとは沖繩の下略にて、其國の形ち細く長く、繩の如く海中に浮べりと云意にて、沖繩島也と先輩いへり、惡鬼納、(同上)於伎夜、(同上)宇伎夜、(同上)共におきなの轉也、ウとオ音通ず、

〔性靈集五〕爲大使與福州觀察使書一首

賀能啓、○中略今我國主顧先祖之貽謀、慕今帝之德化、謹差太政官右大辨正三位兼行越前國大守藤原朝臣賀能等、充使、奉獻國信別貢等物、賀能等、忘身銜命、冒死入海、他既辭本涯、比及中途、(平)暴雨穿帆、(平)戕風折柁、(他)高波汰漢、(他)短舟裔裔、(他)颶風朝扇、(他)摧肝耽羅之狠心、(平)北氣夕發、(平)失膽留求之虎性、

〔元亨釋書三 釋解〕釋圓珍、姓和氏、讚州那珂郡人、○中略初珍泛洋、北風俄起、漂流求國、遙見數十人持戈矛、立濱涯、良範悲泣謂珍曰、我等當爲流求所噉、爲之如何、蓋流求者、海島之噉人國也、

〔杜氏通典 百八十六 邊防〕東夷　琉球

煬帝大業初、海師何蠻等云、每春秋二時、天清氣靜、東向依稀似有煙霧之氣、亦不知幾千里、三年、帝令羽騎尉朱寬入海求訪異俗、得何蠻遂與俱往、因到琉球國、言不相通、掠一人幷取其布甲而還、時倭國使來朝、見之曰、此夷邪久國人所用也、帝遣虎賁郎將陳稜、朝請大夫張鎭州、率兵自義安(今潮陽郡)浮海擊之、至琉球、初稜將南方諸國人從軍、有崑崙人頗解兵語、遣人慰諭之、琉球不從、拒逆官軍、稜擊走之、進至其都、頻戰皆敗、燬其宮室、虜其男女數千人而還、

〔五雜組 四地〕琉球國、小而貧弱、不能自立、雖受中國冊封、而亦臣服於倭、倭使至者不絕、與中國使相錯

は琉球と記す、此國虬の大海の中に蟠る如くなれば、流虬と云しと云々、按るに流虬の說心得られず、我國の書に見えし處は、往古鎭西八郎爲朝、大海の流に隨ひて求め出されし國なれば、流求と記と云、此說も誤れり、夫より先倭漢の書に皆々流求と記たり、又一說に、龍宮と云し也、我國の書に龍宮と云習はせるは此國也といふ、是も亦心得られず、只何となく古よりりうきうと云しを、後に漢字を假りて流求共、琉球とも記せし成べし、

〔倭訓栞前編三十八〕りうきう　琉球、瑠球、流求、龍宮など書り、今中山と稱す、慶長十九年、王自來朝す、南島志に、山海經の南倭也といへり、明史に、万曆四十年、日本果以勁兵三千入其國、虜其王遷、遷其宗器、大掠而去と見ゆ、薩州の兵の時也、安永四年五月に、志摩島羽浦に漂流す、十二三間の船也、船主照屋筑登之、船頭宮里と、水主以下十八名、髮結たる所に銀の笄二本を指り、又異說とあり、

〔中山聘使略〕國號

琉求隋書　流鬼新唐書　是流求の下音の約りたるなるべし、瑠求元史　瑠球、事志　留仇續文章正宗　留求性靈集　流梂三善淸行が智證大師の傳　流虬中山世鑑　琉球同上　明の洪武琉球と改むといへり、しかれ共宇治大納言の今昔物語に、仁壽三年、宋の商人良暉が琉球へ漂流の事を載て、琉球の名あれば、唐宋よりありし名と見えたり、中山むかし琉球分れて三つとなり、中山、山南、山北といふ、各王あり、其後中山王南北を一統したれば、中山の名は止むべきなれ共、舊によりて今に中山といふなり、淸より冊封の詔書にもなを琉球國中山王といふ文あり、掖玖日本紀　掖玖の唐音ウエキーなり、今薩音にて琉球をリユキーといへば、掖玖も琉球の轉音なり、夜句同上　夷邪久隋書　此は隋の時夷邪久といひしにあらず、煬帝二年、朱寬海に入て異俗を求る時琉球に至り、撫すれども從がわず、其布甲を取て返る、時に日本の使是を見て、此は夷邪人の用る處也といひしを聞て書したるにて、隋の時彼方にて元より夷邪久といひたるにはあらず、蘇邪久續弘書はうるさ

名稱

古事類苑

地部三十六

琉球

琉球ハ、一ニ沖繩ト云フ、薩摩ノ西南海中ニ在リ、東北ヨリ西南ニ亘リ、凡ソ二十七里東西廣キ處十里、狹キ處一里餘、南北凡ソ十里、周廻凡ソ七十四里、地勢狹長、山川ノ稱スベキナシ、中世畫シテ三區ト爲ス、中頭、島尻、國頭ト曰フ、而シテ大小數十ノ島嶼之ニ屬シ、點々海中ニ散布ス、

琉球開國ノ始祖ヲ天孫氏ト曰フ、相傳フルコト二十五世、島中大ニ亂ル、浦添按司尊敦、代リ立テ全島ヲ統ブ、是ヲ舜天王トナス、尊敦ハ源爲朝ノ子ナリト云フ、永享年中、將軍足利義敎、薩摩ノ守護島津忠國ニ琉球ヲ賜ヒ、其附庸トス、是ヨリ先琉球明ニ通ズ、是ニ於テ皇朝及ビ明ニ兩屬ス、既ニシテ漸ク使聘ヲ修セズ、慶長十四年、島津家久、將軍德川秀忠ニ請ヒ、將ヲ遣シテ之ヲ伐ツ、是ヨリ世々貢禮ヲ修ス、明治維新ノ後、詔シテ藩ト爲シ、國ヲ西海道ニ屬セシム、後又藩ヲ廢シテ沖繩縣ヲ置キ、全島ヲ統治セシム、

〔下學集〕上天地 琉求

〔易林本節用集〕利乾坤 琉球國外

〔國朝舊章錄〕八 琉球國之事略

異朝の書を按るに、昔は流求と記したり、近代に及て琉球とは記せり、一說に流虬と記せしを、今

推量するに、朝鮮國の諺文ならんとをもはるゝ也、滿州山丹にも諺文を用ゆるといへり、日本國の伊呂波の樣なるものにて、假名也、

て、からふと島に漂著す、時に寶曆十二年六月廿一日也、船頭德五郎いづくとも志らざれば、たゞ忘然として旻天を望むのみ、數日滯留の內、鳥の翔雲を視るに、鴫とをぼしき鳥の、辰巳の方位を指て翔びゆくを見て、彼島は日本に徘徊する鳥也、毎年秋には集るなれば、辰巳の方位に日本あるべしといひ、夫より十八日を經て人里あり、此時九月十八日也、此處は蝦夷地シラヌレといふ村也、此節既に雪ふりたりと見へたり、予〈○德內常矩〉竊に考ふるに、カラフト島の內タライカとヲッチンとの間に漂著せると思はるゝ也、此等を察し日本の船師の未熟を推量すべし、猶島の廣太なる事を思ふべし、扨又天明丙午年夏、大石逸平といふ者、カラフト島の地方廣狹遠近、及諸產及人物等の撿査の爲に渡海せり、濱邊傳ひに段々と遞換するに、ナヨロ村に至る所の乙名ヤエンコロアイといふ、此者の父の名はヤウチウチイといひし、死去して忰ヤエンコロアイの乙名をする也、父のヤウチウテイは山丹國に涉海し、又松前所在島西蝦夷地ソウヤ村に涉海し、交易を博くせしもの也しが、先年山丹國に涉海せし時に、滿州の官人來居り、ヤウチウチイといふ名を授けたりといへり、其官人有三身の龍を織たる官服を著したる人也といへり、安永七戊戌年、松前家臣工藤清左衞門上乘役にてソウヤに往し時に、彼ヤウチウチイ交易の爲ソウヤ村に來り居たる故、工藤清左衞門此蝦夷人の名を貰ひたる事を尋るに、楷書に楊忠貞と書たる唐紙の一軸を出したり、清左衞門此始末を見て、山丹からふと兩國の精しきに依て、山丹國の地圖を書記とはせければ、大小島都て六箇所を畫したり、　イチヤ　ホツトン　スムク　タムル　ハアトメ　スチヤトシリ　以上六島なり、所在の體は詳ならずといへども、猶識者の比校をまつ、又蝦夷土人山田久左衞門といふ通詞ソウヤにゆきたるとき、カラフト島の土人よりもらひたる墨跡の一幅を、予精しく閱に、其書法日本の三社の詫に似たりといふ、大字と小字とに書記せし物にて、大字は楷書にて、小字は變字體にて、上と中と下とに三段に朱印を居たる物也といへり、予

し、此處に來りて滯留するといふ、ナヨロウより、此ヲッチンまで、舟路凡十日程、海上凡一百餘里なり、此處より西北に一日路の乘舟にて、ナツカウといふ所あり、此所は山丹國への渡海場にて、海上凡十里を隔つ、此瀨戸冬中に至れば、堅氷はりて陸地のごとし、此期に至れば、犬に橇を牽せて通行する也、シラヌシより此邊までを西カラフトといふ、又シラヌシより東はウルといふ處に大河あり、是より東北にノシカロナイといふ所あり、此處にも大河有、此河上に池有て、蝦夷舟にて土人渡海して運送を達すといへり、此ノシカロナイの東北にシレトコといふ處あり、此處海岸より沖の方へ出たる山崎有、シラヌシ在ノトロ邊より此邊まで、蝦夷土人多く徘徊し、產業に力を盡すといへり、又同島西北の地タライカといふ所は、西北第一の繁昌の所にて、是より山奧にヲ・タカタといふ所あり、此處に蝦夷土人多く住居たる大村あり、蝦夷地に稀なる山中に村民あるは、日請よく、土產能土地よき所とゝ云られたり、仍而通路の土人も少々故に、產物も出すといへり、此邊を北カラフトといふ、扨又此島の風土は、松前所在島の氣候に等しき地也といへり、北極土地四十六度より四十八九度に至る也、土人の產業獲物は、ソウヤに近きはソウヤへ運送し、山丹にちかきは山丹に運送して交易するに、風俗も山丹に交易する土人は、山丹風俗に移り、ソウヤへ交易する土人は、日本蝦夷土人のまゝ也といへり、此土地の風俗に、家每に犬を數多飼畜、夏中は舟の綱手を牽せ、冬中は橇をひかせ、犬をつかふ事牛馬のごとくす、冬雪中にいたり漁獵も不足して、粮盡れば、其飼畜たる犬を第一の食用に達すると也、此島の廣き事、松前在所島より勝れたる大嶋なり、日本國より遙に大なり、松前所在島と、此カラフト兩島にては、凡日本國三增倍に近かるべし、〇中略

日本人カラフト島に漂着の事

松前家舊記、漂流船の吟味留書を觀るに、攝州西宮の船頭德五郎といふもの、難風にあひ漂流し

有ス、但シ日本國ハ前記住民ノ財産權ガ、完全ニ尊重セラルベキコトヲ約ス。〇中略
明治三十八年九月五日卽一千九百五年八月二十三日(九月五日)ポーツマス(ニユー、ハムプシヤ州)ニ於テ之ヲ作ル

小村壽太郎(記名)印
高平小五郎(記名)印
セルジウヰッテ(記名)印
ローゼン(記名)印

〔蝦夷草紙附録五〕カラフト島の事

一松前所在島の西蝦夷地ソウヤといふ處有、此ソウヤを出帆し、海上十里を渡海して、カラフト島の内シラヌシといふ所に至る、此シラヌシより西に乗り、同島の内ナヨシといふ所に至る、此處の沖中にトヽシマといふ島あり、此島カラフト島と僅に海上六七里を隔つといへり、又ナヨシより西に磯部傳ひに乗りて、ヲホトヤリといふ處に至る、此處は左右に山崎の峡有て、風波も淩ぎ安き所にて、涯端まで深くして、港とも謂べき處也、又此處ヲホトマリ、西に磯邊傳ひに乗りナヨロウといふ所あり、此處は涯遠淺に濱邊砂地にて、丘陵は平かなり、此所に大河あり、蝦夷舶に乗り、河上に溯る事數日の舟路也といふ、此邊の地中溪間廣き事と見へたり、此河の海へ落口に、大船の泊にも宜しかるべし、同島シラヌシより、此處まで海上搔き漕送り、凡三十日程の舟路なり、其道法三百里に及ぶべし、此ナヨロウより一日路西に乗、クスリナイといふ所あり、此處に河あり、河上へ一日路のりて大なる池有、毎年冬に至れば堅氷はりて陸地のごとく、此期を候ひ、堅氷の上を渡り、山を數峯を打越し、同島東北の地、タライカといふ所に到るといふ、是近道故也、此クスリナイより西北にのりヲッチンといふ所に至る、此處蝦夷土人も多く、山丹土人も渡海

界、爲約、現今遣吏員、專行開墾之計、

○按ズルニ、慶應三年ノ樺太島假規則、及ビ明治八年ノ樺太千島交換條約ハ、外交部露西亞篇ニ載ス、宜シク參照スベシ、

〔官報號外〕明治三十八年十月十六日

朕明治三十八年九月五日、亞米利加合衆國ポーツマス(ニユー、ハムプシヤ州)ニ於テ、朕ガ全權委員ト露西亞國全權委員ノ記名調印シタル講和條約ヲ批准シ、茲ニ之ヲ公布セシム、○中略

第九條

露西亞帝國政府ハ、薩哈嗹島南部及其ノ附近ニ於ケル一切ノ島嶼、並該地方ニ於ケル一切ノ公共營造物、及財產ヲ完全ナル主權ト共ニ永遠日本帝國政府ニ讓與ス、其ノ讓與地域ノ北方境界ハ北緯五十度ト定ム、該地域ノ正確ナル經界線ハ、本條約ニ附屬スル追加約款第二ノ規定ニ從ヒ、之ヲ決定スベシ、

日本國及露西亞國ハ、薩哈嗹島、又ハ其ノ附近ノ島嶼ニ於ケル各自ノ領地内ニ、堡壘其ノ他之ニ類スル軍事上工作物ヲ築造セザルコトニ互ニ同意ス、又兩國ハ各宗谷海峽、及韃靼海峽ノ自由航海ヲ妨礙スルコトアルベキ何等ノ軍事上措置ヲ執ラザルコトヲ約ス、

第十條

日本國ニ讓與セラレタル地域ノ住民タル露西亞國臣民ニ付テハ、其ノ不動產ヲ賣却シテ本國ニ退去スルノ自由ヲ留保ス、但シ該露西亞國臣民ニ於テ、讓與地域ニ在留セムト欲スルトキハ、日本國ノ法律、及管轄權ニ服從スルコトヲ條件トシテ、完全ニ其ノ職業ニ從事シ、且財產權ヲ行使スルニ於テ、支持保護セラルベシ、日本國ハ、政事上又ハ行政上ノ權能ヲ失ヒタル住民ニ對シ、前記地域ニ於ケル居住權ヲ撤回シ、又ハ之ヲ該地域ヨリ放逐スベキ充分ノ自由ヲ

有之よし、から戸島より北西は高麗のよし申候、是も海上十里程隔申候よし、からと島も蝦夷の内なり、

〔日本地誌提要七十七北海道〕樺太(カラフト)

疆域　四至皆海、南宗谷海峽ヲ隔テ、北見州ニ對シ、北ハ尼哥來斯(ニコライス)海峽ヲ隔テ、魯西亞ニ對ス、北緯四拾六度ニ起リ、五拾三度貳拾分ニ至ル、東西凡四拾五里、南北凡貳百七拾三里、

形勢　地形狹長、委蛇南ニ趨ヤ、東南一隅彎屈シテ一灣ヲ包ミ、極南兩岬對峙シテ、又一灣ヲ容ル、山嶽盤互、陂澤多ク、氣候寒冱冰雪常ニ結ブ、土人數種アリ、各地ニ聚落ヲナシ、魯西亞人ト雜居シテ、開拓ニ從事ス、風俗言語殊ニ陋醜ナリ、

〔各國條約書〕日本國魯西亞國通好條約

安政元年甲寅十二月二十一日(西暦千八百五十五年第二月七日、魯暦第一月二十七日、)於下田調印、安政三年十一月十日(西暦千八百五十六年十二月七日、魯暦十一月二十七日、)於同所本書交換、○中略

第二條

今より後、日本國と魯西亞國との境、エトロプ島とウルップ島との間に在るべし、エトロプ全島は日本に屬し、ウルップ全島夫より北の方クリル諸島は魯西亞に屬す、カラフト島に至りては、日本國と魯西亞國との間に於て界を分たず、是まで仕來の通たるべし、○中略

安政元年十二月二十一日(魯西亞暦千八百五十五年第一月廿六日)

筒井肥前守花押

川路左衛門尉花押

エフィミユス、プーチャチン手記

〔日本國郡沿革考四屬島〕唐太(一名山丹、又名ニ太來(タイカイ)、卽北蝦夷地、滿人名ニ薩哈連、或名ニ庫頁ー、)我使議國境時、又及ニ該島之事、幕議欲下以ニ島中北緯五十度之地一爲中國界上、然議亦不レ協、暫以隨ニ從所一爲

境を經て、滿州山丹より海に入る薩哈連江の末に、此洲の北盡の近く指向へる故に、彼方より號て薩哈連といへるにて、本邦人は用べき名にあらず、

〔北蝦夷地部序〕北蝦夷地古稱ニカラフト島

此島は蝦夷島の極北ソウヤ地名の北十三里の海を隔て、北極地を出る事、凡四十六度より五十一度の間に在りて、其地南北に長く凡二百餘里東西に短し、凡十五六里より狹き處は七八里にせまる其周廻凡五百餘里、南は蝦夷島に對し、東は大洋をうけ、西北は東韃滿州の地方に臨める一大島なり、其人物蝦夷島の如き者は島の三分にして、その一に居し、其他は悉くヲロッコ、スメレンクルと稱せる異俗の夷是に居す、往時松前家島を檢するの時、明和年間家臣和田某なる者をして、此島の中東西僻に五十餘里の地理を觀せしめ、終にシラヌシ地名クシュンコタン地名の兩處に、小府を設け、島夷を撫し、其產物を交易せしに、寛政十戊午年夏五月、信濃守松平忠明命を奉じて夷島を檢するの時に當て、從夷高橋一貫中村意積なる者二人をして、此島東西の地理を窺しむといへども、其險僻に百里計にして歸り來りぬ、其地素より不毛にして、居夷亦多からす、徑路ありといへども、大低叢棘足を傷り、烟霧眼を鎖し、是に加ふるに、人居を絕つの間五十里百里にいたる者あり、故に其後奧地の地理を窺ふ者なかりしかば、或は孤島と稱し、又は滿州地域の岬と稱して、其說紛々たりしに、文化三寅年、夷島皋て官に上入し、松前に鎮臺を置て島夷を牧育せしめらる、同辰年、松田傳十郞、間宮林藏なる者をして、此島の奧地を窺しむといへ共、猶其極界をきわむるに及ばすして歸來りしに、同年秋再び間宮林藏一人をして北奧地に至らしむ、所謂ヲロッコ、スメレンクルの地を經て、終に此島の北界を窮め、海を越へて東韃に入其假府德楞哩名と稱る處に至り、淸國の官吏に接して島名を問ひ、其作事所業を閱して、冬十一月、松前府に歸り到るといふ、

〔蝦夷島記〕から戶島とて、蝦夷島の三分二程有之島御座候、から戶島へは蝦夷島より海上十里程

後カムサスカ國土人ヲロシヤ國に伏從せしは、日本享保年間に其盟ありてより、今に到りて然り、此頃より東蝦夷地島々の東海を、セイウエレフラストシウエと名け、西海をペンシユンモフレヤウと名付たり、其以後官船涉來して開業をなす事盛ん也、此ペンシユンモウレヤウへ落來る大河有、此落口は大港にしてヲポツカといふ、日本享保年間に、奧州南部佐井町商人竹内德兵衞といふ者漂着せし處也、

○

〔蝦夷志〕北蝦夷（卽奧蝦夷、夷中呼之曰カラフト、）

北蝦夷、其俗與蝦夷同、夷人亦皆濱山海居、部落凡二十二、○中略東際大海、西北乃韃靼、東南海、兩地相去近遠不可得詳、厥產靑玉、鵰羽、雜以蟒緞文錦綺帛、卽是滿物、其所從來蓋道韃靼地方而已、萬國圖中、東室韋地曰野作者、疑此也、凡南北接壤、但隔小海、而波濤險惡、夷中亦稱長途、且其地絕遠、此間之人到者鮮少、不能從歷而知之、故其間廣狹亦不可考、

〔本田利明異國話〕松前より西蝦夷陸地を經て海邊に距り、ソウヤと言所あり、此所より海上凡十里を隔て唐太島あり、此島殊に大島なり、松前所在島よりは勝れる大島也と云、此島を日本に西奧蝦夷と言なり、北極出地凡四十四五度なり、依之百草百穀豐饒の國と成べし、ムスクバ或山丹に奪れぬ樣にありたきもの也、

〔蝦夷東西考證上〕西蝦夷

蝦夷の西の海際なる宗谷より、船路二十里に足らずして、（蝦夷拾遺には、此船路を十五里といひ、北海紀には十八九里といひ、蝦夷圖說地圖には十八里といへり、或書も是に同じ、）加良敷登洲に到る、此洲國最も廣くて南北の亘は二百里に餘り、東西は百里に近しといへり、（其狹き地にては廿五里ばかりなる所ありとぞ、）東蝦夷の來葉後、江澤府、渦津生等の島に對へれば、是を西蝦夷といふ、○中略此加良敷登洲を外國の夷等は薩哈連（又沙哈里印とす、）と云、これは於魯志耶國の

僅せり、是をコサと云なりとぞ、略中

或は蝦夷人は能霧を吐て身を陰すの術有、又は木の皮のいかにも厚きを卷て、簫と覺しき所に小さき竹あり、只空然たるのみ、水に浸して吹ば、只竹を打拔て、吹音の如し、是を胡蘆といふ、胡蘆は則胡笳也、笛の聲に山氣立登て、月曇るともいへり、是か地の類なり、

〔年中行事大成三上〕四月二十八日

此月より北海浪靜なり、故に南部津輕の商人、蝦夷松前に渡つて交易し、九月を限て歸國す、是を松前渡といふ、

〔北海隨筆中〕蝦夷地圖の事

常憲院殿綱吉德川御代初に、松前領主へ御尋有て、蝦夷の地理差上られ、狩野祐甫に命せられ、寫し取て上りたるといへり、又水戶黃門光圀卿、蝦夷地の周廻御記の爲め、大船を仕立、松前へ遣され、蝦夷へ乘込けるに、順風稀にして日數懸り、西蝦夷マシケといふ所まで渡りけるに、ほどなく秋の末になりて、海上あらく渡りがたきゆへ、ソウヤまでも渡らずして歸りしとなり、殘念の事なり、

〔休明光記凡例一〕一都て蝦夷地へ立る碑類に、漢文を用ひざるは、林大學頭乘衡述齋が曰、今度彼地の事は、新に本邦より處置せしめ給ふ所なれば、和文こそあらまほしけれとなり、故に皆和文を以て記す、

〔蝦夷草紙附錄五〕異國船漂著の事

一カムサスカといふ國は、ヲロシヤ國の地續にて、東方の大端也、然といへども元來日本國の蝦夷地也、爰にヲロシヤ國の暦元一千六百四十三年に至りて、彼國の士人にコウフルといふ者、此の地に至りて、はじめて見開たる所也、日本天明丙午の年年〇六に及て、一千百四十七年になる、其

の事にて、九十五里を五日路に、同廿六日江戸安着いたし候、然處舊臘より蝦夷國境御取締御用被仰出、東蝦夷地ウラカツよりシレトコ迄、其外島々迄上地に相成、御役人數人被差遣候折柄、三月十五日、不佞儀不存寄轉役被仰付、是全く去年以來海外之勤勞を被賞候御事にて、同十七日爲御暇金二枚、時服二拜領、同十九日御朱印拜受、東都在宅僅廿三日にて、同廿日又々蝦夷地へ發足いたし、四月廿四日松前渡海、五月九日御用地ウラカワ江入、六月十二日子モロよりクナシリ江渡り、同十九日アトイヤ江著いたし候、何方も昨年順覽之地、山川再會之思をなし、面ヿ覺へ申候、併クナシリ島半途よりは、夷人も住居無之、野宿のみにて、往來風雨飢寒之患も不少候得共、志士溝壑を不忘之一助を獨笑罷在候、又々夷地に越年、來早春エトロフよりウルツフ江相進候筈に候、〇中略 先は起居承度、旁任舊契、アトイヤ風待之丸小屋之内、草々如此に候、頓首頓首、

六月廿一日（寛政十一未年也 閏十二月晦日備中著）　守重

古松軒老人

〔笈埃隨筆〕二松前

奥州津輕秋田の邊は、すべて北向なれば、常に陰風砂塵を飛して、天色平生ドンミリとして、太虚の碧瑠璃の色を見る事なし、呉竹集に、冷泉爲家卿の歌あり、

胡砂ふかば曇りもやせん陸奥の蝦夷には見せそ秋の夜の月、とよめり、世に傳ふ蝦夷人は日本人と交易するに、若その價ひ相應せずして、夫を責はたらるゝ時は、耻て面を合せかね、胡砂を吹忽ち我姿を隱して通るゝ故に、此和歌其心を含りとぞ、誠に奇事といふべし、

十方庵曰、紹巴の發句に、春の夜や蝦夷かこさ吹空の月といへり、コすとは彼地の笛の類にして、口に汐などを含み、空に向て吹上、其邊の月影をくもらせて漁捕しけるか、又一說に山中海邊などへ出るもの、落たる木の葉を拾ひ取、きり〱と卷て是を吹に、眞に笛音出して愁情を

ブラゴ、カサゴの類、手に應じて釣り得申候、夫より八月廿六日、メナシ領ノツケと申所へ着船、九月十三日アツケシ江出、十一二月之内サル、ムカワシユツリ（コタアツより凡八里餘）江罷越、義經之故蹟を訪ひ候に、サルミ川上ハイピラといふは、昔判官此山上にハイといへる魚吻を立て、（則カザキトチシ）居を構へ給ひし處にて、世に判官、八面大王の女に通せられしに、大王怒て逐ければ、長刀を以て櫂となし逃去給ふ、今の車櫂は、其遺風也と云傳ふるは此地にて、夫故か此處の夷人は、風俗家居も格別に宜しく、ハイダルとて夷中に稀せられ候由、又同所より凡十里餘、ムカワの川上にキロロイといへる山上に、判官の來て魚を釣、幣を建給ひし處とて、今尙其故蹟あり、又古き甲冑所藏之夷もあり、此所上江凡十日路餘も踏入、是迄人跡稀なる處にて、ムカワのキロロイ山上は、不佞始て登り候外、夷人も登不申由申事に候、夫より山中川上雪中氷上跋渉いたし候處、極寒にて大川皆氷り、歩渡に成、大水も寒氣にて、立ながら凍れ割れ、夜中夜着の背も、寢息にて霜凝り、爐邊に差置候茶碗に盛候酒も、暁は凍り固り如丸、風立候得ば鬚髮目睫皆氷り、如雪に成也、夫より臘月廿七日エトモに越年、正月八日ウス江移り申候、

一當正月夷地ウスに滯在、雪解氷釋を待て、直ちに奥蝦夷地へ進み、クナシリ島エトロフ島よりウルツフ島へ渡海、夫より赤人之島々チリ、ホイ、シモシリ島邊へも、可成だけ渡海之積りに候處、一先歸府候樣、東都より之召狀到來候に付、早速ウス出立之處、いまだ山中深雪にて、道路艱難、殊地越年に候得者、當未之曆も不存、正月之大小も不辨、所謂山中無曆日の類にて、又南部松前の私大も閏あることく存當り、箱館へ至り、始て津輕板之柱曆を見て、今年之大小を知り、二月二日白神崎にて大風雪、併同日無恙松前著いたし、同九日三馬屋へ渡海之處、津輕地いまだ深雪、一望皓白、只人跡を見候のみにて、人足は皆猿羚羊の皮を被り、貨物はソリに載せて引申候、南部野邊地邊にて、軒の上まで雪に埋れ、戶口は穴の如くに成居申候、同廿二日仙臺著之處、急ぎ歸府候樣にと

ジリ島の八景を作り、追而鏤梓之積りに候、此島霧露深く、時として咫尺不可辨ことも數日有之、魚類は夥しく、鯖は海面凡一里餘も充滿、海岸は舟底に當り、櫓械も支候程にて、時々手捕にもいたし、一網凡二三千本は入申候、メナシの鮭も同樣に候、此等之事餘りに珍敷、曾參が口を不假ば、信を世人に取に不可足かと獨笑いたし候、又可喜は此國いまだ修驗浮屠不入がゆゑに、高山大川とも、皆神代渾沌之儘にて、至て清淨に、山奥の夷人は、白鬚髮木皮衣、實に仙家と同じく、大に俗氣を解脫候こそ幸甚と存候、扨同島アトイヤと申所は、エトロフ島へ之渡り口にて、松前より凡三百里、極暑は四十五度に有之候、順風相待、七月廿三日、一葉之夷舟無恙渡海いたし候、然るに此渡りは一望纔に六七里に不足候得共、荒汐之强は、三馬屋之汐に二倍も可致、逆浪の面に沸騰、凡一丈五六尺も水底へ沼り可申、十五六間を隔候友舟之帆も互に不相見程にて、尤草根木皮を以綴合候夷舟にて搔渡り、事馴れ候夷人も每々溺沒之患有之由にて、何レも咒符を唱へ、必死に搰搔渡海いたし候、著岸之比は、乄風にて半面鬚髮皆如雪になり申候、是迄は荒汐の强に恐れ候が故に、日本人更に渡海無之、夷人も年に一度往來のみにて、開闢以來、此エトロフ島ヱ日本人渡海候は不佞を合て僅四度に不過候、夫が故に彼島の夷人も、日本人を珍敷覺へ、見物に出候程に候不佞も既に溺沒之覺悟窮候事も度々有之、召具之者顏色皆靑黑如鬼、或は帶を解き、或は衣を薄して游揚を謀り候得共、不佞固より水練無之、此荒汐一度覆舟候得者とても無生理、たとへ死して骸を魯西亞外國に暴し候とも、我邦之香を殘し可申と、著籠を著して渡海いたし候、扨エトロフ島は、日本人一切渡海不致候故か、山海の樣子も事變り、森然と物淋しく、其人物は夜國之人とも覺敷ごとくにて、大に口蝦夷と異候、尤アツシも無之、草を以衣を製し、又は犬熊皮鷲羽を著し候、鯨も多く、頭に牡蠣附候程之大なるが游ぎ戯れ候に、夷舟にて其背へ乘かけ、毒箭を以射申候、不佞も鑓を以突可申と致候程之事に候、魚類は夥敷、試に鉤を投れば、一餌凡八九尾を釣り、鱈ア

書不少候、夷俗之事は、東遊雜記に詳出候得ば、不贅候、乍去奥地之方は、夷人之寶と唱候雜器も多く、人物も逞しく、ウラカワより只夷人大低眉毛兩分、穀食故にも候歟、エリモより奥は眉毛相連りて鬢に至る、蓋く魚食故にも候歟、其風俗其語頗相違にて、奥蝦夷之方は一切作物を不作、日蝦夷之方は粟稗大小豆作附相貯へ、粟をモンジロ、稗をピヤパと唱へ昔義經此土へ來り給ゐし時、播種を敎へられ候よし申傳へ、巳にサルムカワに、義經之故居とて、夷人幣束を立る處有之候、六月廿三日、アツケシ出立、ビバセ、ヲツケシを經て、チモロに至る、此地はキイタツフ領と唱へ、北はクナジリ島、東はノツカマツフの出崎、西はメナシ(夷言に東の方といふ事)ニシベツよりシレトコ迄凡七八日路、チモロは去子年魯西亞人伊勢之漂民を送り、渡來候地にて、今尙其故跡殘り有之候、夫より海上凡十七八里、クナジリ島、此島周廻百里に不過といへども、名山奇石實に天造之妙、先セヽキといへるに、海中より温泉沸騰し、クサリナといふは自然方石、幅凡六七寸、長凡一丈半、或一丈ほどなるが、疊々と相疊みて、鐙の草摺のごとく、其傍に胄形之石あり、又其傍上に方石長二三尺なるに、井幹(ヰゲタ)を組し凡六七あり、平地は方石の小口、波浪に磨して鑑甲のごとく奇々妙々不可言、夷人は昔義經此地へ甲胄を置給ひしが、化して石となり、其井幹は熊を商なふ處と云傳ふ、不佞は孔明魚腹浦八陣石のごとく、義旗を建給ひしか、又六花招之隊伍を被試候遺跡かとも存候、夫よりイエンシユマ業黑之角石、其上頭は種々之像をなし候が、二町ばかりがほど屛風の如くに立並び、海水と相映じて如畫、フタチツフといふ砂山は、夏中穿こと凡一二尺なれば、砂下皆々雪にて、是も義經の船化して砂となる由言傳ふ、チヤチヤスフリといふは、高三四里分、高山絕頂に湖あり、湖中に高山秀抜して雲際に聳へ、湖之水島の西へ流れて瀑布となるを、シヨフケベといふ、東へ流れて大川となるをワンチベツといふ、此山メナシよりエトロ迄を一望して、實に瀨内第一之神山ともいふべきか、此外ルヨウベツの紋難、バウチの沸湯の如き奇絕無雙、故に不佞タナ

松前志摩守どのへ

〔正齋與古松軒書〕爾後は契濶松竹之壽、愈御安榮御渡光之由、珍重不過之候、當春鴻書落手之處、發程間際至而紛雜、旅中より可及御報と存候處、日々繁冗無其儀、背本懷候次第に御座候、扨不佞去春松前御用被仰付、四月十五日江戶發程、五月十六日三馬屋渡海、同廿三日松前出立、箱館江罷越申候、兼而老人御編述之東游雜記相携、沿途之勝槩、松前之風物比校いたし候所、過差無之、老人一過眼之地、烟霞之妙察、全く山水之奇骨を被得候事と、感心不啻候、夫より東蝦夷地通り、佐原よりエトモ江渡海、凡七里、此地は去辰巳兩年、蠻船イキリス着岸之處にて、海灣凡五六里、ハクチヨウの沼モロランなど紆回して、ウスを經アプタに至る、ウスは山水尤勝麗にして、頑石之位置、崎嶼之錯曲、恰も盆山家園之如く、東夷地細景之第一なり、アプタは平坦といへども、是よりヲシヤマンペの海岸、靑石白巖遙に內浦嶽大里島の眺望亦一絕なり、六月二日アプタ出立、ホロヘツ江出、海濱砂濱シラヲイ、ユウブツ、ムカワ、サル、ニイカツプ、シプチヤリ、ミツイシ、ウラカワ、ジヤマニを經て、ホロイヅミに出る、シラチイより凡八日路エリモといふは、海中へ凡三里ばかりも突出たる出崎にて、回船は箱館、エサシより、此エリモを見て乘り、東夷地之風土も此崎之前後にて一變すといふ、シヤマニよりホロイヅミ、ヒロウ之間、嶮岨尤多く、巉巖絕壁突兀として、馬足不通、其間チコシキルイ、トモチクシホの嶮、蟻附蟹步始て魚腹を免れ、石頭岸牙を躍步し、飛泉を登り、水中を行て、始てヒロウ江出、是より又海濱砂濱之地、浪烟衣を濡し、砂石面を打、ヲホツチイ、トウブイ、シヤクベツ、シラヌカ、クスリコンプムイ、センボシを經て、海を渡ること三里、アツケシに至る、海灣道ありといへども、嶮岨故海を渡るなどり、此地は湊泊尤よろしく、海面に大黑島といふあり、廻船はエリモ崎より此島を見て乘るといふ、入江は凡三里餘、奥に湖水あり、廣凡二三里、湖中小嶼數十、皆牡蠣之凝りて島となるもの、奇勝不可言、是ウス以來大景之第一なり、アツケシは古來夷中之巨擘と唱へ、夷俗も殊に正しく、人物

標柱　蘂取郡カムイワツカヲイ高山ノ嶺ニ在リ、題シテ従是大日本ト曰フ、寛政中幕府吏近藤守重ノ建ル所ナリ、或云、近年此地ニ至レル吏人、守重自筆ノ柱ヲ以テ歸リ、別ニ柱ヲ建テ舊ニ仍ルト、

重松ノ井　國後郡ニ在リ、享和元年七月、箱館奉行羽太正養、屬官重松熊五郎ニ命ジテ鑿タシム、休明光記ニ、島中水苦惡、飲者病ム、羽太正養之ヲ聞キ、重松熊五郎ヲシテ地ヲ相シ井ヲ鑿メシム、其水清冽、人始テ病ヲ免ル、蝦夷古ヨリ井ヲ鑿ツコトヲ知ラズ、初見テ驚キ、邪人ノ知巧測ルベカラザルヲ歎ズ、正養其井ニ名ケ因テ其事ヲ歌フ、歌ニ曰、伊久與興毛淺氐志流眞幸都久利奈須伊多以能美豆能布加伎鬼具美達、

〔御成敗式目追加〕一犯人斷罪事

右爲夜討强盗之張本所犯無遁方者、可被行斬罪也、是則爲相鎮傍向後也、其外至枝葉之輩者、可召進關東、可被流遣夷島也。以前條々存此旨、可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

文暦二年三月廿三日　武藏守判　相模守判

駿河守殿　掃部助殿

○按ズルニ罪人ヲ蝦夷島ニ遣ス事ハ、法律部中編流罪篇及ビ同部下編遠島篇ニアリ、參看スベシ。

〔古文帖〕蝦夷松前領主松前志摩守所藏　大神君御判物寫

定

一從諸國松前江出入之者共、不相理志摩守、夷仁と直商賣仕候儀、可爲曲事事、

一志摩守江無理而令渡海賣買仕候者、急度可致言上事、

附夷之儀者、何方へ往行候共、可爲夷次第事、

一對夷仁非分申懸儀、堅停止之事、

右條々、若於違背之輩者、可處嚴科者也、仍如件、

慶長九年三月廿七日　御朱印

渡島國

箱館　龜田郡ニ在リ、文安二年、龜田郷領主河野加賀守政季之ヲ築ク、東西三十五間、南北二十八間七重濱ヨリ望ハ其狀箱ノ如シ、故ニ呼テ箱館ト爲ス、苗名ヲ宇須岸ト云其子季通ノ時、永正八年夏四月、蝦夷ト戰テ敗レ自殺シ、館廢ス、幕府ノ時箱館奉行邸ハ、卽河野氏ノ館址ニシテ、今ノ支廳是ナリ、〇中略

富山泉　函館ニ在リ、文化三年、箱館奉行支配調役富山元十郎、箱館山中ノ水ヲ引キ市街ニ分ツ、箱館奉行羽太正養石ヲ建テ之ヲ記シ、屋代弘賢書幷題額(中略)按ニ、此時蝦地松前氏ニ復セシ日、賂シテ源ヲ塞ギ、又人アリテ時ヲ運シ高龍寺ノ溝ニ架シテ橋トナセリ、安政ノ時、河津三郎太郎テ開鑿シテ稍舊ニ復セリ、今支廳及ビ其他ニ引テ井ト爲セリ、

鼎泉　函館大町ニ在リ、文化四年春箱館奉行戸川安論、羽太正養之ヲ鑿ツ、正養ノ書記高坂元禎記ヲ作リテ井幹ニ鐫ム、〇中略

釧路國〇中略

義經橋杭釧路港中ニ在リ、暗礁二條港中ヘ斗入ス、潮退ケバ現ル、土人云、昔源義經十勝岬ヘ橋ヲ架セントセシ時ノ柱跡ナリト、天造ト雖モ實ニ奇ト云ベシ、

盤螺山　厚岸郡ニ在リ、安政年間官吏喜多野省吾山道ヲ開鑿シ、萬延紀元庚申夏五月、官吏鈴木善敎文ヲ作テ之ヲ記ス、〇中略

根室國

義經事跡オショマウノ地ヘ、義經鯨ノ流寄シヲ切リ、蓬ノ串ニ刺シテ燒キシ所ナリト、エショマイノ地ヘ、公野宿シテ席ヲ投棄セシ所ナリト、マクチイノ地ヘ、昔公合戰ノ時事ヲ强リシ跡ナリト、〇中略

千島國

髯塚　擇捉郡ニ在リ、歸化ノ蝦夷剪ル所ノ鬚髯ヲ聚テ斯ニ埋ム、文化四年三月、箱館奉行安藝守羽太正養、石ヲ建テ之ヲ誌ス、高四尺五寸、橫一尺三寸、〇文略

猶しけれ、仍て蝦夷國は、此因縁にて、米穀の出來ぬことはり也、

〔蝦夷草紙三〕妻妾の事

一蝦夷地は、都て妻をマチ、妾をウツシマチといふ、東蝦夷地クナシリ島の脇乙名に、ツキノイといふものあり、妻妾都合十八人あり、本妻と妾との差別なく、諸所に家を作りて、獨身に住はせおく也、或は五六里、或は二三十里を隔て、或は海上を數十里隔てたる島々にも、此ツキノイに限らず、富貴なる蝦夷人は妻妾を數多持つは、土地の風俗なり、或ときツキノイ魚油干魚類を船につみて、クナシリ島の運上小屋に來り、交易して代り物の米と麹と小間物類を請取て濱邊に丸小屋を懸て逗留し居けるが、其近所五里七里隔たる所に住居せし妾の方へ、米と麹と小間物とを配分す、但し米八升俵麹八升俵也、是を三俵づゝ送り遣せば、妾其米と麹にて濁酒を造り、ツキノイ方へ呼使を遣はせば、ツキノイ旅先へ連あるく妾どもに手をひかれゆきて到れば、饗應に濁酒を出し、妾と共に酒宴をして遊興するなり、妾ども大勢よりあひても、悋氣嫉妬の意もなく、皆類母敷睦敷ものなり、蝦夷土地の風俗にて、大身小身に限らず、旅稼旅商等我家內のものを不殘召れ、家財も携へて巡行す、是蝦夷土地の風俗なり、又妾どもには家を造り渡し置のみ、外に衣食の手當もなく聞けども、獨り我身を營成し、アヒヤウといふ樹の皮を煉り、アツシといふ太布のごときものを織て衣服となして夫に贈るは、蝦夷の夫人の習はせ也、大身の乙名などには、ウタレとて、家來大勢あり、代々相傳の家來にて、主人旅稼に出る時は、此ウタレどもの妻子も供に從ひゆく、主もウタレも家內不殘旅先に滯留して、かせぎして營成す、是蝦夷土地の風俗なり、生涯住所を定めず、數十里の海邊に住居す、家屋は皆假小屋にて獵產の卑山なる處へ移りて、又假小屋を作りて住居する也、生涯みなかくのごとし、是耕作の產をしらず、獵產澤山なる故也、

〔北海道志十七風俗〕名諱

圍爐裡と鍋計にて食用を足し、いろりの廻り甚むさくろしく、物を喰ても其跡を洗ふといふ事もなく、鍋の內を指にてなで廻しては口へ入れ、如斯して其儘にて差置、又何ぞ煮時は、やはり洗ひもせず、直に其鍋にて煮て食し、食物にも多く魚油をさす事にて、夫ゆへ家內もびた〳〵と滑り、臭き事たとへん樣なし、湯浴は勿論、朝起出ても手水遣ふといふ事もなく、手拭も不持ゆへ、海邊より上りても、其濡たる儘にいろりの火に當り干す也、大小便をなしても手も洗はず、草村の中濱邊の岩間にひり散し、夜臥にも衾もなく、アツシ壹枚著たる儘にて寢るなり、夜中外へ出て見れば、予〇串原正峯が旅宿運上屋前往還に、犬の寐たる樣にて雨露にうたれ、土間に臥して居るもあり、誠に野鄙の極也、前文述る如く、日域へ歸伏なしてより以來二千年近く成事なれば、上國の風俗におし移るべき事なるに、多年を經ていまだ開けず、斯淺間鋪體なるは歎げしき事ならずや、

〔蝦夷草紙二〕歌の文句の事

一西蝦夷地のソウヤ松前ヨリ海上凡二百里也邊にて、土人の風俗を見るに、遊の座興の戯れにする事にて、口に糸をくはへ、手指の爪にて彈き鳴らし此相手には團扇太鼓のごときの物をうち、拍子をとり、囃しに乘じ和し謡ふ歌の章句を、翻譯する事左のごとし、

蝦夷國はじめて開けし時に、十二一重の美服を著したる神と、只一重の麁服を著したる神と、ふた神の天降りける時に、美服を著したる神をば尊く思ひて、此國に神とゞまりたまへと祈り尊敬しけるに、麁服を著したる神をば信じ近よらず、依て其神天上して、終に再び降り玉はず、また美服を著したる神は、此國に留り給ふ、此神は粟稗の神にて、麁服を著したる神は米穀の神なりしが、天上し給ひしゆへ、蝦夷國は酷寒の地なれば、十二一重の神へ此國へ留り玉へと祈りしが、糠穀の多き粟稗の神ともしらず、單衣の神は米の神ともしらず、夷狄なるこそ淺

きし眉毛は更になし、
眼中するどく、黑目玉にして、顏色赤く、畫る樊噲張飛の顏を見るにひとし、長も低からずして、大成丈なるもの也、婦夷は髭もなく、色も日本人のごとく、生れ付にはさして替りし事なく、男夷女夷とも、小耳には鐶を入てあり、其環に大小ありて、銀或は銅、あるひは鐵も見ゆれども、右圖〇圖略のごとし、初めに入し穴の切て、環の入れざるは、新に入穴をあくると見へて、破れし穴耳たぶに二つあるもあり、女夷は首にシトケといふものをかけて居るなり、悉くかくるにもあらず、衣服のよきを著たる女夷のかけて居るを見れば、貴賤のわかちなるにや、また富饒の夷なるゆへにや、是又詳ならず、

〔夷諺俗話 一〕蝦夷地風俗之事

西蝦夷地スッといふ場所の內に、辨慶崎と云あり、又其先イソヤといふ場所の內に、來年の崎といふあり、是は辨慶蝦夷人に對し、來年來るべしと、約諾せし處故、夏を來年崎と云傳ふるよし、其外夷言にも、義經をシャマイクル、辨慶をヲキクルミなどいふ事、今に其名あり〇中略新日本へ從伏なして二千年に近きといへども、未道ひらけず、髮を被り衣を單衣にして、アツシといふ木の皮にて織たるを著し、左衽になして笠桂履を用ひず、みな裸跣なり、耳には環を穿て飾となし、身體最も色黑く、眉毛一條に連り、總身熊のごとく毛生ひたるあり、故に上古毛人國ともいひたるよし、其性質正直なるもあれ共、交易に馴たる蝦夷は僞謀の事あり、一體其性勇奸にして直ならず、女は脣と肘に入墨して文をなす、亦又文字の曆なき故、甲子紀年を知る事なく、寒暖を以春秋を分ち、月の盈缺を見て朔望を知り、金銀の通用なし、古器刀劍を以寶とし、山野海河を獵し、鮮害諸魚を捷りて食とし、屋室は只四壁のみにて、夫も熊笹を累ね、或は葭茅等を以て是を圍ふ、家內を見れば、土間へアツスケ是は葭簀の事也、是を敷、其上にキナといふ物を敷、是は管苫の事也、

とし、色々の産物を集置て、日本の商船に夫を交易せる事、無智の夷なりといへども、上古の風俗を傳へ、僞りを言事なく、父母に仕ふるに至て孝なり、父母死せる時には夷の法にて、死體を窟より出し、夫を山に葬りて、後は追善など、云事は更になく、葬の法ありて、草を結びかけて、おのおの跡ずさりして家に歸る、夫より木の皮を以て笠を製し、天の日を見ずとて、三年の間は門戸を出るには、笠を著せずと言事なし、此外にも風俗の感ぜるもの語り多し、

〔東遊雜記十四〕乙部浦百餘軒の町にて、漁士計の町なれども、家居あしからず、此地に於ては先例ありて、蝦夷御巡見使御三所へ御目見へに出る事也、〇中略御目通りへ出る蝦夷、都合十四人なり、扨御前へ出る時には、蝦夷の禮式にや、男夷は男夷計、女夷は女夷計、手と手を取くみ、雁のつらなりしやふに並び立て、夫よりおの〳〵頭を低くさげ、足をよこへ〳〵とふみて、庭へ通りて、男夷はむしろの上に箕(アクラ)居し、兩手を組てひざの上に置て、頭をさげずして座せり、女夷は砂上に横ひざにして並び座せり、頭の髮は赤熊天窓にして、壹人の衣服は、日本の地黑の紬に、五色の糸にて祝義著にせる總ぬひの小袖を、蝦夷衣に仕立直したるを著て、年のころ五十餘に見へし壹人都內じま、此外何れも日本の古著をなをせし衣服なり、中にも蝦夷にて製せるアツシと稱する衣もあり、是はアツシと云木の皮を以ておりし物なり、婦人の頭にも、髮を切て五六寸計にして、前後左右へ童子の天窓のごとく撫たりせしものにて、生ぎわよりうしろの方は剃てあり、衣は男夷とおなじ仕立にして、是も日本の古著木綿の、紺の染模様なるものなり、帶は日本のさなだおり、或はアツシ、或はくけひも、いろ〳〵ありて、男女とも二重廻して、前にて結びてあり、男夷は皆或は二三寸、或は五六寸ほう〳〵と生、眉毛黑長し、

或書に、眉毛はつゞきて、一文字にはへて有と記せり、此度蝦夷人を見しに、一文字につゞきしはなし、ちよつと見れば、日本人の眉毛よりもふときゆへに、つゞきしやふに見ゆれどもつゞ

風俗

同二年	一、一六四	六、三九七	三、五〇七	二、八九〇
同三年	一、二七一	六、七七六	三、五八三	三、一九三
同四年	二、〇〇五	一二、〇五〇	六、四三〇	五、六二〇
同五年	三、〇〇七	一五、二七五	七、九六四	七、三一一
計				
	開拓使調			

○此表、原書ニハ郡領ノ戸口ヲ一々擧ゲタレドモ、今之ヲ略シ、此ニ總計ノミヲ掲ク、

〔倭訓栞前編五衣〕えぞ　毛人島をいへり、〈○中略〉文字なし、縄を結び木に刻して記とす、又醫業なし、死すれば山に埋む、其人の秘藏せし物は一所に埋み、家は燒すて、殘る家内の者は別に住也、其妻三年の内かむりものし愼む、又再嫁せず、凡て易產にて、直に海に入て血のさわぐ事なし、生兒も海にわらひて虫けづく事あらずとぞ、〈○中略〉家は甕がまの如く、入口まがりて、外より内は見えず、晴天に獵船を出す時は、濱邊へ小屋を造り、妻子ともに居とぞ、男少く女多く、一夫に七八婦あるに至る、長壽の地なり、衣服は木皮、熊皮、狐皮等を用う、家内にて色情をいふはいとはず、他人來居とまに色欲の事などいへば、甚怒りて、七つの償物を出す、其物は、鎗、太刀、矢筒、烟草、米、餅、衣服也、人家に入ば、三度いたゞきて禮をなす、やいくぬしかれまよろれといふは、息災なるといふ挨拶也、父子夫婦兄弟の間、次第分差ありとぞ、

〔東遊雜記十三〕蝦夷と稱せるは、夷の總名にして、島の名にはあらず、古書に奧州蝦夷越後蝦夷と記せるを以てしるべし、〈○中略〉今世にいふ蝦夷の地は、必ず松前侯の支配にもあらず、島の主といふもなく、領主地頭といふ事はしらぬ所にて、日本にていふ一門々々に、ヲトナと稱せる夷有て事濟なりといふ、元より五穀不生の地、金銀錢も不通にして、おの〳〵山に狩し、海上に漁りを業

内 三万六千七百三拾九人 男 三万四千百四拾八人 女　高無之　松前蝦夷

〔北海道志一總敍〕北海道舊土人戸口表

蝦夷戸口、古ヨリ得テ知ル可ラズ、松前建國以來、政敎南ヨリシテ北シ、厚岸ハ寛永ニ開ケ、宗谷ハ貞享ニ始リ、根室ハ元祿ニ及ビ、國後擇捉ハ寶暦寛政ノ間ニ漸ス、乃チ地ヲ割テ家臣ノ封邑ト爲シ、領ヲ設テ租税ヲ徴ス、然後戸口纔カニ得テ計ル可シ、然ルニ對比貌閲ノ法アルニ非ズ、況ヤ漁獵ヲ事トシ、水草ヲ逐テ遷ル者ニ於テヲヤ、今表スル所、松前領ノ如キハ、古來土人ヲ分タズ、故ニ記スルヲ得ズ、維新以後僅ニ茅部爾志二郡ヲ擧ルノミ、其全島ヲ記スル者ハ、唯文政安政ノ記籍備ルト爲ス、然ルニ安政元年ハ多ク巡見記ニ據リ、無キ者ハ蝦夷雜書ヲ以テ補フ、其他之ヲ古人ノ記行筆記ニ徴スルニ、多ク東ニ詳ニシテ西ヲ略ス、然ルニ一領ノ增減モ亦其地ノ盛衰ヲ考ルニ足ル、故ニ其明晰ナル者ヲ取テ此ニ收ム、明治以降、領ヲ改テ郡ト爲ス、則之ヲ各郡ノ下ニ收ム、但其戸口遽ニ增減アル者ハ、省藩等ノ支配地ヲ定メ、尋テ之ヲ罷メ、請負人ヲ廢シ、直轄ト爲スガ如キ、新舊交代ノ際査閲ニ暇アラザレバナリ、六七年以後ニ至テハ、其實數ヲ獲ル者ナリ、

北海道舊土人戸口表〇中略

總

年號	戸	口	男	女	引用書目
文政五年	五、一〇六	二三、七二二	一一、六〇四	一二、一一八	蝦夷雜書
安政元年	三、〇二三	一四、四二九	七、三〇一	七、一二八	蝦夷雜書及安政元年巡見記
明治元年	二二二	八五三	四六二	三九一	

人口

青玉　大いなるあさぎ色なり、中玉小玉は種々の色有、

タンツウ　織たる毛氈にして、模樣種々のかはりあり、多く古ものにて渡る

煙筒　白銅細工にて彫物あり、硝子を入たる細工にて日本にて七寶細工也といふ、銘を切りたるもあり、

此外蝦夷產物に　イケマ　エブリコ帆立貝等多し、諸書に載たれば爰に略す、又渡りものには、草金襴包雜種羅紗猩々緋の類も出るといへども、不定の渡りものゆへ爲に略す、海邊磯邊寄物には、大竹の類網の浮木船具等も、時々には珍器もあれども、諸書に載たるものは爰に略す

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷私交易狄士物事

右被右大臣宣偁、渡島狄等來朝之日、所貢方物例以雜皮、而王臣諸家競買好皮、所殘惡物以擬進官、仍先下符禁制已久、而出羽國司寬從會不遵事、爲吏之道豈合如此、自今以後、嚴加禁斷、如違此制、必處重科、事緣勅語、不得重犯、

延暦廿一年六月廿六日

〔官中秘策四〕蝦夷松前

一人數貳万千八百七人　内壹万貳千四百六拾六人男　九千三百四拾壹人女

領主　大名壹人

一蝦夷松前一國領主　松前志摩守

江戸へ海陸貳百九拾里餘

〔吹塵餘錄三人口及國高〕諸國人數調弘化三丙午年○中略

一御領私領人數七万八百八拾七人

キナボウ　形ちあんこうのごとくにして、蝦夷人此魚の腹より油腸を取、腹中へ幣をいれ、又海へはなすなり、

ラツコ　首より手は猫の如し、足はなし、鰭ありてヲツトセイに似たり、仰て食物を喰ふなり、ウルツプ島マカンル、島より出る、

膃肭臍　ヲシヤマンヤクンヌイアフタ邊にあり、又クナシリ島にもあり、形諸人志る通り海獸也、

ウチウヲンチツ　膃肭臍の大なるものにて、蝦夷地何方にもあり、形をつとせいに似たり、海獸也、

蝶鮫　西蝦夷地よりをもに出る、東蝦夷地のタヲイ邊にも出る、

海鹿　チヤエ、ユウ　レタウ　マツチツフ　イタナシ　五種共皆アシカ也、松前にて、はアシカを名付てトヽといふなり、

イルカ　ヲコンラレケチロンノブ　レフ、ンカモイ　トワユク　コシユンブ　イカラカモイ　チハイユイキカモイ　イチムケ　フンヘヲトキ　九種みないるか

海豹　シロトカリ　アザラシ　ヲラタンチ　ヘカトヌマウシ　ホヤリ　ペクツホユマルヲマムシヘ　ニクイ　イタシマ　ホヒクケシヨウ　ヤイトカリ、十三種みなアザラシ

鯨　ノコル　トナイ　フシンヘ　タンチヘ　コクンヘ　ヲタリゲン、ヘイトチケレ　ヲアヤウシ　凡九種あり、皆鯨也、

錦　松前にて十德といふ、又ころもといひ二種あり、各綴あり、縫もあり、みな異國の古著也、满洲の官服也といふ、

段切　卷物にて渡り來る、錦純子繻子の類もあり、各異物もの也、

るなり、角は鳥犀角に似たり、

カチコルペ　形は未詳、角一本にて水面に振立て見ゆれども、其形は不見得、依て志らず、近よる時は香氣に醉ふて煩ふ也、

ラクンヘコルペ　松前にてシャリ蟹といふ、首は蟹にて尾は蝦なり、頭中に異珠あり、紅毛人持渡る、ヲタリカンキリなり、

カカモコルペ　松前にてコツコといふ魚にして鱗なし、鰻のごとし、腹に菊の花のごとき心ほありて、是にて岩に吸付居る、味ひ輕く淡きもの也、

ロコン　アツケシの小沼にあり、性は魚にて、形は角なり、總身に刺有、其形はヲコゼといふ魚に似たり、毒魚なりとぞ、

ヲシユルコマ　鰻の形に似て、肉は鱒のごとし、味ひ至つて美なり、エトロフ島の先より島々に多し、

ウルツプ　鱒のごとくにして大也、肉は至て赤く、味ひ甚だ美なり、煮燒て猶また赤く海老のごとし、

レプタチリ　形色ともに鳥のごとくにして、腹あかし、クナシリ島よりさきにあり、

エトヒリカ　色形とも鳥の如く、口觜赤く、エトロフ島邊に多くあり、

フンラシヤムチリ　雀のごとくにて大なり、目玉甚だ美しく、眉毛あり、觜の上に毛ありて異形なり、

タンチレキ　松前にて鳥鳥といふ、すはかりたる形の高さ二尺計あり、

シリカプ　魚にて形は鮫のごとくにして、身の丈七尺計あれば、上唇の長さ六尺ばかりもあり、不釣合なるものなり、

石炭　クスリ場所の内、ヘツシヤフ村にあり、
海松　松前海邊何方よりも出來るなり、色赤く檜のはのごとし、松前近くに床飾に用ゆ、
汐凝　俗に蝦夷珊瑚といふなり、枝珊瑚に似たり、色紅にて甚だ美しき物也、是も床飾に用ゆ、
明礬　エサンに澤山あり、製法いまだ知らず、依之土人捨をくなり、
黑き花の百合　アツケシ邊より奥所々にあり
白花の春菊　此春菊は東蝦夷地諸所々にあり
秋萩　モナシヘ村、ヤモキシナイ村邊にあり、鉢の廻り四寸以上の物あり、
篠竹　シヤコタン竹とて西蝦夷地シヤコタンといふ所にあり、生れ附て黑き虎斑あり、
牛房　ウス、アブク兩所を最上とす、自然に生て、其根のふとさ廻り一尺餘あり、味ひ甚だ宜しく、和らかにして中心に髓の穴なし、
一角　ウラカワ場所にて得たる事あり、松前家臣北川伊左衛門東都に持來りて、價貴くなりたりといへり、
白熊　ノツイヲ、ストロフといふ島より出る、赤人ははなはだ賞美せり、
黑狐　松前にてつほふにて捕たるを、專念寺に葬りたるといへり、
銀鼠　東蝦夷地に諸所にあり、いたちより少し小なるものにて、眞に白し、又稀に赤きもあり、
金海鼠　奥州金華山の近所の海上より取るを名物也といへり、他國になき樣に思ふ人多し、

東蝦夷地

ムリカラ　大蟹にて手の長さ四五尺計、味ひ甚美なり、
セチコロプ　あんかうのごとくなるものにて小なり、肉堅く味美なり、
アイヲユルベ　赤ゑ如くにて角あり、此角の龜皮を取て箭の根に塗て獸を射るに、一矢にて留

金山　松前所在島の内センケン山、クンヌイ山、ハホロ山等諸書に載たれども、皆是下金といふものにて、土砂の内に交りたる砂金なり、今はなし、又ウラカハといふ所に金山見ゆ是も堀たらば出べきと思はるゝ、其外エリモ邊ラツコ島等にあり、又深山に有べき歟、未開の大國なれば、明細に探索に及び難し、時を得て達すべし、

銀山　古來より銀山の沙汰はなし、カワクシ山、ユウヲツプ山等にあり、西蝦夷地は深山多し、依ておくゆるしけれども、予（常○姫蝦内）未到なれば風説は擧がたし

銅山　東蝦夷地シベツの奥山にあり、箱館在の山に有、

鐵山　箱館在の大森村石崎村等にあり、その外[illegible]所に多し、

鉛山　見市村の奉ヲボユ嶽最上たりといふ、先年江指村の堀たる時に、一ケ年に三百箇程出來たり、其外赤神村江技村等にも有也、

黄銅　メツノイワ、ストロフといふ島にあり、此金日本にていまだ不見、生れながら金色なる銅にて、眞鍮の柔かなる樣なりと、赤人渉海して予に委細物語せり、

餘糧　エトロフ島、シヨツチキヤといふ所にあり、貯置て時々糧に用ひ、食事とす、色白く餅のごとくにて、味ひ淡く、此島に渡海せし時、友船に分れ、米味噌もなく、草の根を焚て此土をいれ、食事とせしに甚かろくたべよき也、

碗青　シエメン島より取來り、石にて珍らしき品なるに付て、目利者衆評して、佛頭青と名付、瀬戸物を燒に用ゆる土器の模樣を畫く繪の具なり、

硯石　箱館村の先石崎村まろゐ濱といふ所へ一匿にあり、又此山陰にヌルイ川といふ川筋にあり、江戸細工人に彫せて、予所持するものなり、日本へ運送易し、

鍾乳石　西蝦夷地大田山の崎地藏安置の岩窟にあるといふ、

田二十一町九段二畝、安政元年、箱館近郷田六十四町四段、明治三年、龜田郡二百八十八町八段六畝二十八步、上磯郡五十八町四段四畝十二步、○中略白田　文化二年、箱館近郷二十町、文政五年、箱館近郷百五十八町八段二畝十五步四分、安政元年、箱館近郷三十九町一段五畝餘、蝦夷分三段餘、明治三年、龜田郡六百八十五町六段十二步七釐、上磯郡五十二町五段四畝五步、○中略

後志國　田畝　享保年間ヨリ粱ヲ種ヘ以テ粮食ニ充ル者、西部ノ地ニ太櫓瀨棚島小牧壽都歌棄磯谷岩內古宇積丹美國古平祝津ト曰フ、段別詳ナラズ、○中略

膽振國　田畝　安政年間虻田振內邊幕府官吏石橋某等新田ヲ墾ス、段別詳ナラズ、明治十年有珠郡五段六畝、○中略白田　安政年間虻田振內ノ邊土人墾スル所ノ白田多シ、段別詳ナラズ、○下略

○按ズルニ石狩、天鹽、北見、日高、十勝、釧路、根室、千島等ノ諸國ノ田數ハ、明治以後ノ調查ナルヲ以テ省略ス、

物產

〔庭訓往來〕諸國商人旅客宿所、運送賣買津悉令進行候、交易合期公私潤色、何事如之哉、○中略夷鮭、○下略

〔毛吹草 三〕松前

鷹　眞羽(マハ)　鹽鶴　干鮭(カラザケ)　鯡(ニシン)　鰊(カド)　數子(カズノコ)　炙鯨(ヤキクジラ)　昆布　獵虎(ラッコ)　水豹(アザラシ)　熊皮　鹿皮　胡獱(トド)　ヲツフ　アモシツヘイ　膃肭臍　干獨活(ホシウド)　干豆腐　沙金　磁石

〔蝦夷志〕蝦夷

凡物產、異草珍木不可盡狀、春菊有花白者、百合有花黑者、頗可爲奇、百合根夷中采食之、無牛馬及雞鶩之類、鷹鶻鵰鷲、皆巢于林木深鬱之間、鷲羽及鶻羽方產最貴者山有熊羆麋鹿、水有海豹海獺海狗之屬、

〔蝦夷草紙 三〕產物の事

田數

松前若狹守

蝦夷地之儀者、古來より其方家ニ而、進退致來候得共、異國へ接し候島々、萬端之手當難整樣子ニ付、先達而東蝦夷地上地被仰出、從公儀御處置被仰付候、西蝦夷地之儀も、非常之備等、其方手限難行屆段申立、外國之境不容易之事ニ被思召候間、此度松前西蝦夷地一圓被召上候、依之其方江ハ新規九千石被下候、場所之儀ハ追而可相達候、

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年二月廿二日、松前伊豆守ニ封地ノ内替地ヲ命ズ、

松前伊豆守名代松前伊織へ達　此度御用に付、東西蝦夷地西在乙部村東在木古内村迄島々共、一圓上知被仰付候、替地の儀は追て可被下、猶御手當等の儀も、御沙汰可有之候、右老中列座備前守申渡之、　十二月四日に至り御達、今度東西蝦夷地西在乙部村東在木子内村迄、島々共一圓上知仰出され、右爲替地、陸奧國伊達郡の内高三万石、込高一万六百五十八石餘共被下置、且又御手當として年々御金藏にて金一万八千両づゝ被下之、以來三万石高家格に被仰付候、

〔北海道志五地理〕田野官林牧場

田圃ヲ開墾スル元祿年間ニ始ル、其方法夏月茂草ヲ薙シ、中秋火ヲ放チ、明年春鋤犂シテ白田ト爲ス、之ヲ荒起ト稱フ、地味肥沃、培養ヲ用ヒズシテ物熟ス、五年ノ後、地力盡クレバ即チ棄テ他ニ移ス、故ニ段別毎ニ增減アリト云、古來其地稻米ニ適セズト爲シ、唯粟稗蕎麥大小豆等ノ雜穀及ビ菜蔬ヲ植ユ、且松前氏ノ時、人民ノ收穫ヲ縱ニシテ、貢賦ヲ課セズ、寛政文化ノ間、幕府直轄スルノ時、上山藤山大川七重等ノ諸村皆墾地アリト雖モ、畝步零星亦稅額ナシ、秋田、庄內、南部、津輕等ヨリ是テ墾ヲ開ク所ナリ、明治以降大ニ舊習ヲ釐革シ、規ヲ設ケ、地ヲ畫シテ之ヲ民ニ授ク、是ヨリ畝步得テ算スベシ、夫通議通理ハ田ヲ授ルノ方、租賦租斂ハ地ヲ闢クノ務、故ニ戸口ニ次テ田野ヲ志ス、

渡島國　田畝　寛政七年、文月村試田一段餘、文化二年、箱館近郷田百四十町、文政五年、箱館近郷

其地を春の雪融、秋の暴雨に志ば〳〵往來して實驗せしが、此地に府を開んには、禹王再誕の後ならで難かるべしとおもふがまゝ、其邊を探索するに、ツイシカリ川三里を上り、札幌樋平の邊りぞ、大府を置の地なるべしとおもふゆへに、是を酋長ルピヤンケ、ツイシカリモニヲマサツカロに再三審し、以て鎮將竹內堀村垣の三名に言し置ものなり、一他日此札幌に府を置玉はゞ、石狩は不日にして大坂の繁昌を得べく、十里を溯り津石狩は伏見に等しき地となり、川舟三里を上り札幌の地ぞ帝京の脅ふきにも及ばん、左有時は、ユウフツ東海岸は北陸山陰の兩道にも及び、手宮高島は兵庫神戶の兩港にも譬ふべき地とならん、また札幌より新道を切らば、臼、虻田、岩內の地も其日の便を得、東上川川筋より、天鹽十勝の地にも何日か馬足を運ばさしめんと、依て此新道をして此卷首に志るし置ものなりと、文久四甲子の仲冬、多氣志樓の主人弘誌

〔慶應元年武鑑〕松前伊豆守崇廣 柳間 従四位侍従慶應元丑四月任 三万石 居城奥州松前福山 江戶ヨリ海陸二百九十里餘

每年於御金藏一万八千兩宛拜領

従往与松前氏代々領之、文化四年、梁川ニ移、文政四、依台命再蝦夷松前一圓領之、安政二卯年、蝦夷上地、爲代地陸奥出羽國之內領之、

〔休明光記七〕松前西蝦夷地上地之事

文化四卯年三月廿二日、執政伊豆守信明朝臣より、左之通り書付を以て安倫江達し給ふ、

箱館奉行江

松前若狹守

右松前西蝦夷地一圓被召上、新規九千石被下候間、可被得其意候、

若狹守へは左の如く御達し有けるよし、與御右筆組頭近藤吉左衛門より其寫しを安倫へ見する、

駄計、町に入見れば呉服店、酒店、小間物屋、此外諸品の店ありて、物の自由なる事上方筋に替らず、御巡見使拜見に出し男女を見るに、縮緬の單へに、白あけの紋などを付、人物言語よくて、凡そ邊鄙の風俗なし、委しく聞くに、近郷越前より出店數多く、上方のもの多し、其上長崎の俵もの問屋、湊ゆへに上方の風俗にならひて、斯のごとしといふ、此度江戸を出しより、家居人物言語ともに揃ひてよき所は、此江。指。町。と、松前の城下に及ぶ所更になし、奥羽は寒國にして、瓦よはきとて、瓦ぶきの家はなかりしに、此町には瓦ぶきの家も土藏もあり、いかゞの事にて、此所も寒強地に瓦を用る事ど思ひしに、何れも上方やきの倉入し瓦ゆへに、寒の强きにも損せずといふ、又家々に圖○圖略のごとき玄關付なり、小家といへども所の習ひにや、相應の唐破風作りにしてあり、土藏も圖のごとく檜板模板にて包廻して、奇麗に見ゆる餘なるゆへ、おの〳〵美を飾る風と見へ侍りしなり、世にいふ松前の地にては、昆布にて家根をふきし所もあると云、甚あしき地のやうに風聞もせしが、人物言語も日本を離れし所にて、日本の地よりしては大ひに劣りし事と人思ひし事なりしに、かゝるよき町あらんとは思ひよらず、見るものごとにあきれし事也、是等を以て天地の間至らざる地は計るべからず、所の風にて傾城とも女郎とも云ずして、遊女の總名をいふに、雁の字といふなり、小童に至るまで雁の字と稱して、おやまの女郎の遊女などゝはいはぬなり、予○河古川古松軒つく〳〵考へ見るに、此地に右のごときの繁昌なる町ある事、至て不審なる事なり、其上海上濱の辻々は、御巡見使拜見に出る人、所不相應に大人數にて、又江指町に雪踏下駄計を賣見せあり、何方より買用ゆる事にて、商ひのたよりとせる事にや、合點ゆかず、是らの事に心を付て見れば、御巡見使御通行なき所にも、村里のある事にや、くれ〳〵も不審少からず、

〔西蝦夷日誌五編〕サ。ツ。ホ。ロ。はサツナホロの儀にて、多く乾くの儀、此川急にして干安き故也、

〔西蝦夷日誌五編凡例〕一文化度近藤守重が獻策に、津石狩に大府を置んことを言れしが故、余○松浦武四郎

し人也、又加賀守盛季といふ人、明應中箱館に居り、後武田太郎信廣に敗破られて麾下に屬す、永正八年、加賀守の息彌次郎右衛門といふ人、蝦夷の亂に沒し、永祿元龜の間、加賀守好通といふ人、蠣崎義廣の舅となる、文祿の頃、蠣崎慶廣箱館を破壞る、城跡は淨玄寺の東より公廳の前にかゝり、會所町に亘り、塹溝の蹟現に存せり、慶長年間、龜田の人民多く玆に遷れり、商船は昔近江越前より偶來れるのみ、上方船は百四五十年前、大坂道頓堀の橘屋某の船の來るを始とす、然れども猶落船の由を松前へ申すことなりき、後六七年過ての書に、龜田より箱館といふ湊廻船入込、繁昌の處也とみゆ、其逐年殷賑に到る事思知るべし、蕃船の初て港中に入しは、寛政五年、根室へ來し魯西亞人の、玆に入津せしは六月八日也、是より松前へ陸行せしめ、御目付石川將監、村上大學等應接したり、今は北國無雙の都會となり、天下の船艦輻輳するのみならず、海外蕃船も貿易を求、商販を事とし、相競て入港するに到れり、

〔北海隨筆下〕蝦夷松前開發

一今の松前城下は、領內の中央を以て府となし、〇中略是より三十里東海路龜田と云ふ所は、土地平坦にして、一國の都會の地となし、西北は山つらなり、海へ發て、蝦夷地のかためあり、東南は入江にして、數千艘の舶舟今風波の恐れなし、海を隔て南方は南部領佐伊大間等の港まで八里の渡りにて、しかも潮流おだやかにして、タツとシラカシの如くなる激流なし、風景優美にして、箱館の山海中に突起し、入江の屛障となれり、此地を以て府中を定る時は、往々仙臺水戶邊の船通路彌仕ならひ、江戶廻船も自由すべし、箱館よりは江戶廻船自由し、江指よりは上方廻船自由する時は、海路にをいて事たりぬべし、

〔東遊雜記十四〕取勝といふ浦は、至てよき町にて、家數千六百餘軒、はし〳〵に至る迄も貧家と見ゆる家は更になし、濱通りには土倉幾軒となく建ならべ、諸州よりの廻船此日見る所、大小五十

一從諸國松前渡海之輩、對夷人商賣堅禁止之事、

一無子細而松前令渡海賣買候者有之候はゞ、急度可致注進事、

附蝦夷之人義、擧往來何處、可爲其心次第事、

一對蝦夷人非分之義不可申掛事、

右之條々可相守之、若於違犯之族者、任當家代々先例之旨、速可處嚴科者也、

寛文四年

〔東遊雜記十三〕扨松前に上りしに、案外なる事にて、其屋宅のきれいなる事、都めきし所にて、左右の町屋表をひらき、床に花をいけ、金銀の屛風を立、毛氈を敷ならべ、御巡見使御馳走の體と見へ、貴賤の男女千體佛の如く、拐拜見に出し風俗容體衣服に至る迄も、上方筋の人物に少しもおとらぬ、秋田津輕の邊鄙の惡所をもすぎ、僅かなる海里を渡りて、かゝる上々國の風俗あらんとは、風聞にても聞ざりしゆへに、壹人もあきれざるもの更になし、

〔蝦夷實地檢考錄〕箱館。箱館、古名ウシヨムケモシリといふ、地名考にウシヨロと同語とし、灣也と解は牽強なるべし、按に海潮受にて、ウクをムケといふは通音也、方言モは叉の義、シリは地角の義、モシリへ俗語飛島といふが如し、抑此地往古は礬石の火山にて、燒盡したる處なれば、山中燒埆皆爛灼の痕みゆ、知内嶽の奥にも火山の痕殘れり、惠山駒嶽と必火脈を通せしなるべし、其大に燒出たる時より、瘠をも壞て地容一變して、其以來いよ〳〵壤土も裹まれるか、往古は蠻戶のみ住けらし、文安二年乙丑龜田郷の領主河野加賀守政通、城を此地に築て移る、其時土を穿て窟宮を得たり、其中鐵器有しとぞ、箱館の名は是より創れり、河野は藤原氏從五位上尾張守某の胤といふ、（河野の族は藤原氏なるべし）（なこれは家何なる故にて雖取なるか未詳ならず、）政通初龜田郷を領し、後箱館に徙る、長祿元年丁丑五月、大に蝦夷と戰

き、信廣も決起して東征西伐を爲し、終に上國に終老せるを思へば、松前の晩く開けしを知る、應永田八幡宮の神主藤山長門の家記に、蠣崎若狹守光廣、上の國より相原周防守居城址へ移る、應永十五年云々とあるは、相傳の誤にて、實に松前の拓て開けしは、明應五年、相原周防守の子彥三郎季胤、村上河内守政善、始て松前を守護せるより、著姓の人茲に居る事と成ぬと見ゆ、此は下國定季が、其子山城守經季の放縱なるを以て誅せし其事により、經季に黨し動亂を作さんとするものなど有によりて、季胤政善に命じて鎭撫せし一時の機策より起りし也、實に松前に豪姓の居を奠めしは、永正十一年三月、三代若狹守義廣、上國より茲に移しを始とすべし、松前の系譜に、二代若狹守光廣康正二年、三代若狹守義廣文明十一年、四代若狹守季廣永正四年、皆松前に誕すと記たり、康正二年は、始祖信廣初て渡海せしより三年に當れば、松前に落魄せし間に生れたりともせん、文明十一年は、光廣上國にをり、永正四年も、義廣上國に住ぬ、父は各上國に在て、其子松前に、生るゝも如何なるべし、且松前舊事記に、永正十年、大館合戰、松前の守護相原季胤、村上政善自刃と書たれば、其頃までは、此二人大館に戍衞せし事明かなれば、いよ〳〵光廣義廣は、永正十年巳前は、松前に在ざりし證とすべし、翌十一年三月十三日、義廣來て松前を鎭せしは、二人戰死の後代りて大館に在しなるべし、義廣松前の大館に居こと久しく、其孫伊豆守慶廣に至り、慶長五年、福山に營を築きしより、累世裘業を嗣ぎ、雄藩たりしに、文化四年より文政四年までの間、松前蝦夷悉く官に收たまひぬるに、又復故し、今の伊豆守に至り、特旨を欽て新に金城を築き、萬世不朽の基礎を固め、永く北地の藩屛たるは、忝かしながら官の御明斷により、此盛事は有し也、

〔夏埃隨筆二〕松前

松前城下といふは、後に山を負て前は海也、東西家つゞき建つらねて、壹里計り有、城は壘にて、二の櫓あり、大手の兩側は家士の町也、城下の三ヶ所に高札を建たり、

りあるなれば、松樹のこと、はなし難からめなど、あはめいふ者もあめれど、蝦夷には松なしとはいふべからず、凡關國幹太(カラフト)の奥までも、五葉松は殊に多く、南方には所々の山中二葉の松も少からず、決て後に移植たるものとすべからず、惟ふに松前は松の並樹など有し故の名なるべく、今外廓の壘上に喬松枝を垂れ、陰を覆ひ、青々の色を易ざるは、伊豆守慶廣、慶長五年、丘阜を剷夷し、營砦を構成せし當初、其已前より有し嶺松を、其まゝ殘し置たる遺像なるべし、凡山に據る城壘の制は、必從前所在の喬樹をこそ蔽蔭ともなさめ、新に矮木など植べきにあらず、故に今の松は、千載不抜の根幹也とはいふ也けり、前は國の表となる所には、いつも名づくる例也、抑松前の名は、いづれの時よりか舊にも見へ、言にも傳しか詳ならねども、何時若狹武田の末裔、太郎信廣此國に渡り、五代伊豆守慶廣、慶長四年、始て松前と稱號を改しなれば、所こそ多けれ、松前は殊に名に顯れし故にこそしかいひしならめ、(中略)松前は南西の海涯、往古渡島の阜頭にて、津輕外ケ濱に近接の地なれば、津輕の蝦夷の航海來復も繁く、白神の蝦夷なども、多く此境に蔓衍棲居せしなるべし、且本邦も蝦夷も、上古國の開くる初は、西より起りしとみへ、海路も早く通せしなるべし、上國(カミノクニ)の近鄕は、却て優れる所有を以て、松前に先だちて開ぬ、松前は海角にて、大府を開べきの利なき故に、白雉の比、安倍紀氏他田淳代より航海して、其地を廣視し、遂に東を經略して、後方羊蹄府の擧も有しなるべし、文治中、源義經の航渡せしといふも、三厩より松前へ越て、直に東へ赴き、嘉吉中に、下國安東太の越しも、小泊より松前へ總りて、東茂別に城し、其他渡黨の人皆多は東に館し、蠣崎季繁は上國に壘す、享德中、松前の始祖武田太郎信廣は、南部大畑より纜を解たれど、松前に著ぬることは顯然たり、然れども其始一年許は、甚窮約せしといふ傳もあるは、其地航海阜劇なれとも、誰も遠く居館を營し土豪と云べき人も居らざりしを云る、否ざれば假令貨賄器用こそ欠乏の時にはありけめ、館主豪族など居るならば、いかで信廣當頭主人と頼まざるべ

一ウロチトマリ　會所略○中海岸南請、西北は山あり、峻地にて凌方宜、略○中蝦夷家百三拾三軒、總人數五百五拾貳人、内男貳百五拾壹人、女三百壹人、

東蝦夷地エ。ト。ロ。フ。島大概書

寛政十一己未年、御用地被仰出、同十二庚申年、新規開發、エトロフ島北極出地、オンネモイ四十五度十分フウルヘツウルツフ。アトイヤ四十六度此島未申より丑寅に流れて、周廻凡二百餘里、南はクナシリ島に渡り、北はウルツフ島に連り東西は大洋にして、島中には高山並び峙ち、蝦夷村は西浦にありて、東浦には近來土人住居なし、松前より行程凡三百里なり、總蝦夷村拾三ヶ村、同家數百八十六軒、人別九百九十四人、内、男四百八十八人、女九百六人、

〔蝦夷志〕蝦夷

松。前。治城、介居山海之間、東西各有港口、諸州賈舶所輻湊也、東至黑岩、西至乙部、去此以往陸行路絕、西南海上三島、在南曰小島、其北曰大島、又其北曰奥尻、從此至乙部十八里、奥尻島南北二十有五里凡松前地界、東西相距八九日程、其北則爲夷地、夾夷人亦皆瀕山海居、往々而成聚落、其邑聚左者五十四、

〔蝦夷實地檢考錄〕松前

東は及部川より、西は總社堂町まで、北は山麓を限り、松前城下の幅員とす、寅向泊川枝ケ崎大松前小松前唐津内博知石生符を緯とし、傳次澤神明澤湯殿澤唐津内澤を經とす、然れども白神より立石野までの大灣漫の内は、一望眸中に在て、應接呼吸の續く所なれば、截て別區と爲べからず、地名考に方言ヲアツナイにて、ヲは有といふ意、マツは婦人、ナキは溪澤也と說は、誰も思よるほどのことにて、考とするに足らず、或說に昔はマトマへと云へり、松に非ずとすれど、マトはマツの通聲にて、猶松なり、亦一說に秣鞨の訛音なるべしとするは、殊に忌しき僻言也、按るにマツは松樹、マへは前なること論なし、蝦夷は松なき國といふ說もありて、地名は國のひらけし始よ

卯をよしとす、土人（文政壬午改三十九軒、百七十三人、安政庚寅改二十八軒、百十五人、）近頃減す、是當所產物多くして、其遣方苛酷なる故也、處々に部落す、土產鰊、鮭、鱒、ふのり、鮫、亮、昆布、椎茸、鯖等多し、其餘雜魚海鼠多く、繁昌の地也、〇中略

十。勝。〇中略　トカチ會所（従二カロイヲミ會所一海岸丁間十五里四ト四ヨリ二ヒタヽヌンケ一海岸三里三十丁、陸道リ従十大里二十四丁五十四間、従二サヽル山岩所一陸道リ五里廿）四丁、従二箱館一百十八里、會所午向一棟二百四十坪、通行屋二十坪、板藏九棟、通小屋、鍛冶小屋、風呂釜屋、藏、大工小屋、番人小屋、木挽小屋、舟藏、前に土手有、（長九十七間高七尺）是は昔し非常の爲に礫石もて積上し也、觀音堂稻荷社（二棟）土地少し高く巽向、左リラツ　岬、右フンヘムイ岬、其間一灣をなし、後ろ平山雜木立、船は西南風にて入津、戌亥風にて出帆、灣内にヒンネワタラ（立石）、マチネワタラ（平石）有、甚難場也、當石はヒロウといへる地にて、其名義ヒヲロにて小石の多きに取る也、又岬の陰とも云よし、其名惡き由にて、此場所内に十勝の大河あり、故にトカチと改むと也、會所文化尚下の濱に在しが、餘り地所狹きが故爰に移すと、持場内土人（文政壬午百七十一軒、千九十九人、安政庚寅百九十五軒、千百廿八人、）多く、爰に四十五軒（二百三十五人）有、土產昆布、海苔、鰤、鱈、鰯、鯖、鰈、鮭、鱒、其餘雜魚、椎茸等多し、

〔東蝦夷日誌七編〕久。摺。〇中略　久摺會所、〇中略　當所領分總家數貳百五十二軒、人別千二百九十八人（安政年改）長有、（文政壬午改二百七十四軒、千三百四十九人、安政戊午改二百七十一軒、千二百九十八人、）元松前藩飛内總左衛門給所、〇中略　土產鮭、昆布、鱒、鰯、鰈、鮫、鯖、雜魚、水豹、鷲尾、椎茸、熊皮、アツシ、[illegible]、シユシヤモチカ粕多し、

〔納紗布日誌〕厚。岸。は、今場所の總名と成ども、本地の所は灣の北岸に在也、其譯土人が衣服になす木皮を剝に多しとの儀にて、本名アツニクウシ（アツニは楡、クは皮剝、ウシ多し也、）

〔東夷[illegible]々夜話十四〕クナシリ場所大概書

箱館ゟ道法二百餘里（従根[illegible]ノツケより海上凡五里程、同所ユシベツより同拾里程、）寛政十午年迄、元松前若狹守遣退之節、アツケシ、キイタツプ、クナシリを三場所と唱へ、手場所と名附、〇中略

シ。ツ。ナ。イ。領。〇中略　シツナイ〇略　註辨天社〇略　註下に小流有、是を以て號し、本名フツナイ也、名義曾祖母澤の義也、往昔此所に老母神の在せしと、其より此場所は廣まりしと、此澤に、昔は人家多く有しや、種々陶器缺け出る也、今に七目縄め等面白き物有、土人文政壬午改百四軒、人別五百廿三人、安政卯改百廿七軒、人別六百四十一人、多く、產物鯡、鮭、鱒、昆布、鮫、鱈、海草類、椎茸、鹿皮、雑魚、

三。石。領。〇中略　三石〇略　註土地少し岬に成、上は平山、下砂濱、午未向、大船五六町沖懸り、小舟岸に繫ぐ、〇略　註本名ミトシとて、樺桶の事なり、從是十町東の川の名を以て總名とす、此處地名はシユフトにて、此澤の口に蘆荻ある以て號し也と、又和人今三石の字を冠らしめ、此沖に三つの大暗礁有故とも云り、〇中略　土人文政改五十六軒、二百廿二人、安政改四十九軒、二百廿人、多く、土產、昆布、鮭、鰯、鯡、鱈、鹿皮、海鼠、雑魚、粕也、

〔東蝦夷日誌五編〕浦。河。　會所〇略　註元松前家來北川重次郎給所、濱形未申向、〇中略　名義前に云ふ如し、地名ホンナイノツとて、小澤岬なるに、ウラカワの名有は、昔しウラカワに有しを此所へ移せし故なり、領內土人文政壬午改七十五軒、人別三百廿七人、安政寅改八十八軒、人別四百四十一人、土產鮭、鰯、いりこ、鹿皮、鱒、昆布、其外雑魚多し、

シ。ャ。マ。ニ。〇中略　シャマニ樣似會所〇略　註地名エンルンなるを、シャマニヘツに住する土人を遣ふ處故に、如斯改りし也、元は松前家家臣蠣崎藏人の給所なり、此所西南向の一灣にして、澗內に蠟燭岩、ホロシユマ大岩、ホンシユマ小岩と云岩あり、風景また妙なり、船は未申の風に入て、丑寅の風に出帆、東北に高山有、總て暖地、畑作よろし、土人文政壬午改廿三軒、百三十二人、安政庚寅改廿八軒、百七十四人、村多し、產物鰯、鯡、鮭、鱒、昆布、煎海鼠、布海苔、鹿皮、其外雑魚多し、

〔東蝦夷日誌六編〕幌。泉。〇中略　幌泉〇中略　名義前に云如くホロエンルンにして、岬の名を以て當所の總名とす、此地元松前家の臣蠣崎藏人給地也、其地後にホン岳と云山道、灣は申七分向にして、海に枕み、船泊荒磯多く、七八百石五六艘、千石餘壹貳艘をいる、其餘は皆沖懸也、入津未申、出帆寅

〔東蝦夷日誌 二編〕宇須(ウス) 略○中 ウス 略○註 と云て、場所の總名となれり、東西北地とも、如斯よき灣を皆ウシヨロと稱る處多し、箱館をウシヨロケシと云しは、灣(ウシヨロ)の端(ケシ)也、西北のフシヨロ、是ウシヨロの轉し、ウシヨロコツは灣の地所の義、北地のウシヨロも如灣潤よりして號し也、此地本名はメツカ元會所と云、其義太古の海嘯(ツナミ)に、外は皆流れしが、此所計殘しが故也、是恐は今の辨天社 略○註 の地か、土人多し、文政改百三軒、四百十七人、安政改九十三軒、四百六十人、

ホ○ロ○ヘ○ツ○領○ 略○中 ホロヘツ、略○註 傍に妙見稻荷社有、此所文化度前は松前家臣鍋田儀右衛門總所也、其後モロランと一場所の樣に成しが、今度又境標を立たり、土人多し、文政改五十八軒、二百三十一人、安政改五十二軒、二百六十人、

白○老○領○ 略○中 シラヲイ、略○中 土地東南向、素濱船沖懸り、土地平地なり、略○中 名義シラウは虻の事なり、此地に多きが故號し也、土人文政改七十二軒、三百三十餘人、安政改八十二軒、三百九十九人、

〔東蝦夷日誌 三編〕ユ○ウ○ブ○ツ○領○ 略○中 ユウブツ、略○註 名義イウブツ也、イウとは溫泉、ブツは口也、此川上に溫泉ある故に號く、元は松前藩十三軒、略○註 入會の給所にして、土人文政改三百十二軒、二千三百十二人、安政改二百二十八軒、千百七十九人、○中略

沙○流○領○ 本名シヤリにして、溫澤蘆荻叢の義、此邊多きより號く也、略○中 サル會所 略○註 人別文政五改千二百十人、安政三改千三百廿餘人、

〔東蝦夷日誌 四編〕ニ○イ○カ○ツ○プ○領○ 略○中 ニイカツプ 略○註 舩々遠淺にて、潟無故に、產物積取時も沖掛り、時化荒候時は遁船とす、略○註 往昔は松前家臣工藤平右衛門給所なり、ピポタと云しを、文化六年、呼聲の不宜に依て、ニイカツプと改む、名義ニイカツプは、楡松皮の義なり、此川木皮多き故號也、ピポタも此會所元の地名にあらず、此川の名なり、土人皆川筋に住す、文政改七十一軒、人別三百九人、安政改九十一軒、人別三百八十一人、產物、鮭、昆布、煎海鼠、鱒、椎茸、干鱈、鮫亮、其餘雜魚多し、

居し、殘りは別苅邊に住す、
ルヽモツヘ領　本名ルヽモヲッペと云、ルヽは汐、モは靜、ヲッはある入る、ぺは水の事也、此川自然と奥深く汐入る故に號く、是運上屋元の川の名也、今此地の總名となる、略○中運上屋略○註地形亥子向、前にシリエトの岬有、東にエンルと對し、其間一灣をなし、船懸りよし後ろ方川筋、總て平地、略○中土人多し、文政壬午改九十九軒四百七十二人、安政乙卯改六十二軒二百十一人、
苫前領　トマヽイ、譯して延胡索目綱有る義、本名トマヲマイ也、總て此邊り延胡索多きが故號しもの哉、略○中苫前運上屋略○註北はハホロ、南ノツトの間を一灣とし、戌亥向、略○中土地肥沃、雜穀野菜能みのる、略○中當節土人人別多くテシホより移住者也、文政壬午改四十八軒二百十一人、安政乙卯改二十町百九人、
〔東蝦夷日記初編〕山越内領略○中　山越内制札、會所、旅宿所、板藏五、武器藏、備米藏、馬屋二、鍛冶屋、漁屋、雜藏、廬屋、本名ヤムクシ内にて、栗多澤の義、其地今のサカヤ川也、昔し其所に會所有し故、場所の總名となる、此所の本名はパロシベウシとて、往古關柵を結し時用ひし木の切株多を以て號しと、
虻田領略○中　フレナイ略○註是をアフタノ會所といへり、其儀は元虻田に有りしが、文政五壬午閏正月十五日、臼岳燒の時、此所へ移したる故、其名殘れるなり、地形西南を受、船懸り惡し、皆アフタに懸り、荷役するなり、海を隔て内浦岳に對し、風景宜し、略○中土產鮭是は多く、レヲヘツの川筋にて取、馬にて爰に出すもの多し、冬鮭、春鮭、海鼠、昆布、ふのり、鱈、雜魚種々有、又巨材多く、椎茸あつし多く、土人文政壬午改百七十軒人口八百人、安政丙辰改百六十四軒人口六百餘、多し、
〔東夷窺々夜話十七〕江友場所大概書上
一江友會所壹ケ所略○註　一諸蘭番屋壹ケ所略○中　一蝦夷家二拾五軒　一蝦夷男女百十六人、
內男六十三人女五十三人　右之通御座候、以上、
文化三寅年六月

其儀何故に號初めしや、水源にイシカリ岳あり、其より來る川なる故なり、又一説に、イとはイシヤにて無と云儀、シカリとは塞ると申事にて、此川筋屈曲して塞り見へさる故號る哉、（地名解）地形西北向にして、總て平地地味濱より七八町上より眞土に成、濕地多く、草生宜しく、追々陸になる程樹木蕃茂したり、昔は當川筋十三ヶ處に分たり、（トクヒタ、シユマ、ソフ、上下ノイシカリ、ハツシヤフ、千百七十人、上カハメ三百七十二人、下ニウハリ四百九十二人、上ユウヘリ三百七十二人、下サツホロ百九十四人、下カヘメ百二人、ナイホ廿九人、上サツホロ百九十四人、シノロ百拾八人、〆三千六十七人、文化六年改、）其頃は如此人別も有しを、此餘上川には六百人計も別になりしが、今は追々人員減じぬ、實に遺憾ならずや、（文政壬午改千百五十八人、安政乙卯改六百七十人、）

ア。ツ。タ。領。　アッタ、譯して楡皮（アッカ）取といふ儀にて、此川楡皮多きが故に號し也、（中略）昔し此運上やアッタに有りしが故、場所の總名となせども、今の運上屋の地は、本名フシヨロコツと云處なり、其譯儀の地と云、此灣の好きより號しと云、（中略）ヲショロタチ（運上や中略）地形西戌向にして、後ろ平山前は崖に柵を結て、其下暗礁多し、前船泊にして大船を容る、並てニウフツ、石狩、出稼や立並び、頗る繁華の地也、土人多し、（文政壬午改十九軒七十二人、安政乙卯改九軒四十一人、）年々和人の入込高壹万人餘もあるべし、

濱益毛　本名マシケイにして、宜しきと云儀なれども、是洞名あれば、濱の字を冠らしめて、當所の地名とす、（地名解）（中略）濱益毛（運上や中略）地形マフイ岬、ヲカムイ岬の大灣中、またアイカフホロタンヘツ岬の小灣をなし、未申向にして、風波常に荒く、左にウカシユマ、右にチキナマの間、澤目深く、後ろ峨々たる高山、（中略）土人多し、（文政壬午八十四軒二百九十七人、安政乙卯五十四軒二百〇四人、）此邊地味宜しく、總て漁事の暇には畑作をなす也、

〔西蝦夷日誌六編〕増毛。　マシケ、譯て鷗數事に取る也、其義をまた譯せば、マシは鷗の事にして、ケはケイの略にて、成るとの義也、（中略）マシケ運上屋、（中略）此地形北向ノフカとハシベツ岬の間の一灣をなす、依てホロ泊の名ある也、（中略）土人多し、（文政改八十五軒四百三十七人、安政改三十七軒百三十六人、）此處に十一軒家

平山南方に川有、其兩岸澤目平地、丑寅向にして宜しき泊なり、古平は川の兩岸赤崩平の名也、今愛の總名と成し也、土人文政壬午改七十三軒三百七十四人、安政乙卯改五十五軒二百四十一人、多シ、

○ヨイチ領。略○中 ヨエチ運上や、略○中 名義はイウヲチなり、イウとは温泉の事、ヲチはある、此水源に温泉有故號る也、其地所は川の事也、此處は本名シユマヲイと云る處也、略○中 土人多し、文政壬午改九十九軒五百六十四人、文政乙卯改七十九軒四百九十三人。

○ヲシヨロ領。略○中 ヲシヨロ運上や、略○註 名義ウシヨロにして、懐の事也、此處懐の如く灣に成し故號く、略○中 灣口亥向にして、後に平山つゞき、凡百五六十町にてヲシヨロ岳ありて、雜木陰森たり、また其邊り李花多く、滿開の時は海面に映じて、樺入漁舟は水晶盤裏を渉るかと思はる、土人多し、文政壬午三十軒百廿五人、安政乙卯七十一軒二百九十七人、

○タカシマ領。 高島といへども、本名トカリシユマにして、譯て水豹岩の義也此處灣の中に水豹の多く寄集る岩有、故に號しもの也、また一說には、前の岩の形水豹に似たる故號るともいへり、略○中 高島運上や、略○註 前船繫り宜し、地形後山にして、右左とも岬有、内一灣をなし、深くして船繫よし、略○中 土人有、文政壬午四十一軒人別百九十九人、安政乙卯十九軒七十一人、

○ヲタルナイ。 譯て沙路澤にして、其地は石狩境の川也、今此場所の總名となるは、當所の土人總て、其澤目に任せしが故なり、略○中 ヲタルナイ運上や、略○中 地形高島よりアツタ領、コギヒルの大灣の奥に成、丑寅向にして、後はシユマサン岳よりカツナイ岳等聳え、海岸は近年迄歩行路無りしを、今度其岸には棧を架け、岩を鑿、石を碎て、今は可也に通行成樣になりたり、略○中 土人多し、文政壬午改四十三軒百五十人、安政乙卯改二十六軒百二十人、

(西蝦夷日誌 五編)○石狩領。略○中 イシカリ元小屋、略○註 他場所にては運上やと云、此處にて元小やと云は、石狩十三ケ所の元小やと云より起し事なり、略○中 イシカリ、譯て行詰て先か不見形を云、

ヲタスツ領（中略）ヲタスツ運上屋（中略）地形後にヲタスツ岳と云有、濱西向、スツヽと對して灣をなす、土人（文政改四十六軒二百九人、安政改十五軒五十四人、）然る處去春疱瘡にて多く死し、當時女人に不足のよし也、

磯谷領（中略）イソヤ運上屋（注）本名イシヤウヤにて、岩磯岡也、此邊總て暗礁多きが故に號く、地形後に山有、前ライテン岬に對して灣をなし、海中小島有（中略）土人（文政改廿四軒八十三人、安政改廿五軒十七人、）今十年も過れば絕んと思はる、

〔西蝦夷日誌三編〕岩内領（中略）イワナイ運上や（中略）イワナイの名義はイワヲナイにて、硫黃澤也、其地南五丁なる川也、此地は本名ヲムナイ也、此所土人昔よりイワナイに住る故總名となる也、地形西南山有、東北サヲナイに對一灣をなす、近くはホリカフに向て灣をなす、船懸りよろし、土人（文政改七十一軒二百五十人、安政改二十六軒五十六人、）往古は千餘軒有て、シリフカ川筋に注しと、

フルウ領（中略）フルウ運上や（中略）地形は後に山有、前砂地、右プイタウシ、左トラセにて灣となり、船懸よし、未向、暖也、傍に大なる奇岩あり、風景よろし、土人（文政改二十九軒百廿八人、安政改十八軒七十五人、）往古は所所散落せしが、今爰に集る

〔西蝦夷日誌四編〕シヤコダン場所（中略）シヤコタン場所（注）當所はクツタランにて、シヤコタンと云は、場所の總名なり、濱形戌向にして、後ろ平山、前に島あり、西戌の方ヲカムイと對して一灣をなしたり、土人多し、（文化五壬午改十五軒七十五人、安政二乙卯改十七軒七十七人、）（中略）山峻にして鹿多く、雜樹巨材を出す、地味肥沃にして海に海草多し、

ビクニ（中略）ビタとは小石の義、ウニは有る、此邊總て小石原なる故に號しもの也（中略）ビクニ運上や（中略）ビクニは川の名なりしが、今場所の總名となりしなり、本名はヲタニコロといふ也、譯して砂濱の義、土人（文政壬午改十四軒人別百十四人、安政改七軒十四人、）如此四分一に減たり、

フルビラ（中略）フルビラ運上屋（注）地形左丸山崎、右チヤノセフイ岬の間一小灣をなし、後は

ウは弓、ウンは入る、又在に當り、ツウは山崎にて、弓形崎の義也、地名解又弓形に窪き所とも言り、

太田領 地名何の轉せしや、今は太田と書、是を古老に審に知る者なし、此場所久敷土人絶て有しが故、近年請負人なく、春漁は申に及ばず、鮑海鼠も八ヶ村の夏漁の稽古場と成て、無運上の地なり、

太櫓領中略 太櫓注略 地形西北向なれども、船泊宜し、上は平山樹木なし、この地本名キリキリ也、フトロは東の川の名なるを、場所の總名とす、其義ピトロにて、ピッヲロの略語、ピッは小石、鮮網り鎌石にする石の事也、ヲロは有る、地名解又ピトロにて美敷所ともいへり、注略 土人文政改十七軒、人別六十八人、安政改十八軒七十三人、

瀬田内領中略 瀬田内運上屋中略 名義大澤の義、此後ろの川を指て號く、本名セタヲミマヒイナイなり、此所本名エンルンにて、岬の義也、土人多し、總て漁獵の暇畑作を好む、文政改十九軒八十六人、安政改十八軒七十三人、

シツキ領 本名シユフキ、譯して蘆荻也、元一ヶ場所にて有しが、土人も追々死絶て、纔に一人フクメロ殘り居る計也、故に島古巻持と成て有、

〔西蝦夷日誌二編〕島古巻領中略 島古巻運上屋、注略 昔はホロムイに在しを、此處に移す、上に大岩有、實に奇觀也、濱形西面海面に立岩と云有、其餘種々の奇岩有、產物春彼岸より鯡、夏分海鼠鮑雜昆布、秋は鍋鮭鱒鱈、雜魚は四時共に有、土人文政五壬午改三十一軒百廿八人、男六十八人、女六十人、安政元改十一軒三十四人、男二十五人、女九人、近比大に減ず、此九人の女も皆老婆と子供にて、當時孕む者なし、

壽津領中略 スツ・運上屋、注略 當所地名はシユマテレクウシにて、スツヽは川の名也、土人文政改十五軒七十六人、安政改十六軒六十三人、昔は五百餘人も此川筋に在しと、其者今濱に出て住する故、川の名を以て總名とす、土地艮向にして、西にルシヤ岳、并てトップ岳を帶、ヲタスツと對して灣をなす、土產鯡を第一とし、鮭、鱒、鯡、鮃、鱈、海鼠、鮑、駄昆布とて細き昆布、又海草も多し、材木、薪、椎茸有、

ト云、尻澤部村、四十戸許、百四十人、柴海若村、三十戸許、百四十人許、鍛龜澤村、十餘戸、五十餘人、汐泊村、二十餘戸、九十人許、石崎村、六十戸許、三百餘人、

小安村、四十戸餘、百六十人、世多良村、十戸許、二十人許、

以上松前ヨリ東南ニ在、松前ヨリ世多良エ陸路三十里餘、都合七十七村、六千八百餘戸、二万六千人餘、

セキナイ亜石村ト界ヲ接ス、海岸行程十里餘、奥ノ島ノ中央ナル山頂ヲ界トス、里數并エゾノ戸數詳ナラズ、他國ノ商人來テ諸産ヲ買ヒ集ル商家一戸アリ、松前氏エ運上ト唱ヘ、利潤ノ内ヲ分チ納ムルヲ以テ、其商家ヲ運上屋ト云、ウスヘチ運上屋一戸皆同、海岸里數七里、セタナイ五里。フトロ三里。ラウタ十里。スツキ十里。シマコサキ五里。スツウ七里。ヲタスツ三里。イソヤ（イソヤノ北川間ヘルリヘツ）十里。イワナイ三里。フルウ十一里。シマコタン九里。ヒクニ十五里。フルヒラ三里。カミヨイ四里。ソモヨイチ三里。モイレ八里。シクスシ十里。ヲタルナイ七里。イシカリ運上屋八戸、海岸里數十里餘也、八戸ノ内一戸ハ鮭一色ヲ出シ、七戸ハ鯡色ヲ商フ、此地島ノ中ニテ大河アリ、エゾ皆其流ニ臨テ居ス（中略）總テ四方ヘ便利ノ地ニシテ、相開ルノ後ハ、國ノ府トモ成ルベキ土地ナリ、アツク一戸下テンホ迄同三リ。ヘシケ十里。ハママイ（トマイノ北八ホロ）七里。チンホ三十里。ソウヤ五十里餘、舟ヲ繋テ風波ノ憂ナシ、此地ヨリカラフト島エ渡ルベシ、昔ヨリ松前人ノ行至ルハ、此所ヲ以限トス、トウヘツ川アリ、エゾノ川舟通ズ、ユウヘツ川アリ、皆エゾノ川舟通ズ、トウフツ湖水アリ、エゾ舟通ズ、アワシリ川及湖アリ、エゾ舟通ズ、ウラマシヘツ川アリ、皆エゾノ川舟通ズ、シマリ川アリ、皆エゾノ川舟通ズ、ヘレケトマリ繋舟風波ノ憂ナキ入江ナリ、シレトコトウヘツヨリシレトコマデ、海岸里數百五十里餘、此內地ヘハ、古ヘヨリ松前人行コトアタハズ、故運上屋ナシ、諸産ハソウヤヘ持來テ交易ス、都テノ風土ハ異ルコトナシ、チウレテシホノ沖七里ニ在、周廻六里、運上屋ナシ、マンゲシリヘ來交易ス、マンゲシリテンホノ沖六リニ在、周廻四里、運上屋一戸、リイシリソウヤ境內ハツカイヘツノ沖五里ニアリ、周卅里、運上屋一戸、レフンシリソウヤノ境內ノツシマムノ沖十里ニアリ、周七十里、リイシリノ運上屋交易、

以上西蝦夷之地ト云

トイ運上屋一戸、メルーヘ比調ウ、世多村ト界ヲ接ス、此內地海岸里數三里餘、シリキシナイ三里。オサルベ二里。カマベ八里。ノクヲイ七里。ユウラツフ八リ。アフタ十五里。ウス八リ。エトモ十一リ。

地高無御座候

元祿十三庚辰年正月日　松前志摩守

〔蝦夷拾遺元地理〕地理大概

松前ニ次者、根部田村十戸不足、二十餘人、札前村十餘戸、四十餘人、赤神村十戸不足、二十餘人、南垂石村十戸許、二十人、茂草村二十戸、七十餘人、清部村四十餘戸、百四十餘人、江良町村百戸許、百八十餘人、原口村十戸許、三十餘人、小砂子村二十戸許、九十餘人、石崎村六十戸餘、百八十餘人、羽根差村十戸許、四十人許、山子鱈村十戸許、十人餘、鹽吹村五十戸許、百五十人、風石村十一戸、六十人、木子村六十戸、百六十人、原歌村十戸、十人、上之國村二百十餘戸、三百七十人、喜多村九十戸、三百六十人、大留村六十餘戸、三百三十人、五勝手村百餘戸、三百五十餘人、江差村千餘戸、三千五百餘人、此地諸國輻輳スル、泊村百九十餘戸、二百人餘、尾山村二十戸許、三十人餘、田澤村八十戸許、二百三十人餘、伏木戸村三十戸許、百餘人、厚澤部村二百三十戸、九百餘人、五輪澤村十戸許、十餘人、乙部村二百五十戸、八百二十人、小茂内村五十餘戸、百九十人餘、大茂内村四十戸、百三十人、實府村二十戸餘、八十人許、三谷村四十戸許、百三十人、蚊柱村六十戸許、二百人、相沼内村百戸許、二百人餘、泊川村九十餘戸、百三十人許、熊石村百八十餘戸、六百人、小島茂草村ノ沖凡三里餘ニ在、民家ナシ、周廻三十人許、大島江良町村ノ沖凡五里ニ在、周廻二十里餘、民家ナシ、常ニ煙ヲ吐ク、奥尻島熊石村ヨリ西北ノ沖凡十里餘ニ在、周廻十里許、民家ナシ、

以上松前ヨリ西北ニ在、松前ヨリ熊石エ陸路廿六里餘、

下及部村三十戸、凡十餘人、上及部村四十戸許、百七十人餘、大澤村八十戸許、三百七十人許、覚谷村二十戸許、廿餘人、炭焼澤村三十戸許、四十人許、禮髭村五十戸許、百五十餘人、吉岡村五十戸許、二百六十人餘、宮歌村八十餘戸、三百三十人餘、白府村七十戸、二百五十人、福島村八十戸、三百四十人、知内村七十戸、二百五十人、木子内村五十戸許、二百人餘、札狩村三十餘戸、百五十人、泉澤村五十餘戸、百五十人、釜谷村二十戸許、八十人許、三石村三十餘戸、百四十人許、當別村十戸許、三十人餘、茂邊地村六十餘戸、三百人餘、富川村三十戸、百四十人餘、三谷村五十戸、二百許人餘、戸切地村百戸許、三百八十人、有川村七十戸、三百六十人、濁川村四十戸許、二百餘人、文月村三十戸、百餘人、上山村五十戸、二百七十人、鍛冶村四十戸、百八十人、大野村六十戸許、二百五十人、一渡村六十戸、二百八十人許、七重村五十戸、二百六十人、上湯川村三十戸許、百二十人餘、下湯川村五十戸許、二百餘人、龜田村三十戸、百四十人餘、箱館村四百五十戸許、二千五百人餘、此所モ諸國ノ商船輻輳リア、市ヲナスコト松前ニ同シ、役ヲ置ク、江差箱館ヲ三湊ト云、

村里聚落

群集せり、エトヒリカ、フレシヤムチリといふ島など、產物の條に委し、此岩山の形甚だ險阻にして、風景眺望目を驚かすばかり也、扨又ベウツの北にアタツイといふ所有、此處に赤人の家宅五六戸あり、其造作穴居とも云つべき體なり、此處小河にシユルゴマトいふ異魚あり、國を隔れば、產物も又異形の魚鳥異類の物多し、また此アタツイより北にゆき、フタレモイといふ所あり、此所はこの島の西北の隅にて、遙の沖に、西にはマカンル、島、北にハレプンチリホイ島、ヤンゲチリホイ島の三島みゆる也、又ヲタンモイより崎を廻りて、東北の沖にフレムコといふ小島あり、是より遙の沖にヤンケモシリ島、ヲタホ島、レフンモシリ島、カハルモシリ島の四島あり、此外晴天なればシモシリ島もみゆる、此島はエトロウ島よりは大島なり、扨此フレムコより僅南にゆきチヘヤイムといふ所あり、此處は獵虎の獵場にて、赤人此地を改名してシヤパリンと號す、此處、赤人の泊有、泊とは船の懸る處をいふ也、天明丙午年年〇六以前十ヶ年に、赤人渉海せし時に、大津浪あり、其節大波濤に彼大船打損られ、山の谷間に懸りたり、赤人ども引出さんとすれ共其手段なく、その儘大船は山に捨置たりといへり、予是を功觀したり、扨此海を赤人改名してレパヤント稱す、赤人假住居の宅五六戸あり、又ワエナウより南に地續き遙に隔て、ノビといふ所あり、都て此邊は獵虎多し、赤人改名してコロシンと名付たり、爰に名產多き島也、

〔野史二百八十八外國〕蝦夷或野作、增譯采覽異言在陸奥北、與津輕龍飛碕、南部大間嶽、唯隔海水一條耳、凡自四十三度、係五十三度、大寒國也、東西屈曲、廣狹不一、一州分爲五部、曰波良岐、是謂東部、聚落五十一、蝦夷記曰女部志久留隔直徑百七八十里、曰岐伊多布、是謂東北部、聚落七、直徑八九十里、曰宇良耶志運都、是謂北部、聚落四、廻北西百四五十里、曰骨宇耶、是謂西部、蝦夷記曰志由牟久留聚落四十一、直徑二百餘里、到宇須運知添雨豁及大河、是謂中部、聚落十三、總五部、蝦夷記

〔松前島鄉帳〕一人居村數八拾壹箇所　一蝦夷人居所百四拾箇所　一總島數四拾八箇所　一田、

を得て貝に發語せんと思ふ所也、此所にイバヌシカといふ蝦夷人あり、此イバヌシカは赤人の言語を能習ひ通詞をする也、依て赤人より名をつけてホヲナシセといふ、此シャルシャムより僅北方にゆき、ヒンチヘツといふ所あり、此處に瀧あり、○中略蝦夷地第一の大瀧也といへり、此所までは當島の西浦にて、海上も靜なり、是より東浦に廻れば、實に荒島にて、波浪も高く、潮汐の流も早くして、少し風あれば通船もなり難く、此ヒンチヘツより東方凡十里程に、モシリハフケといふ處に燒山あり、此燒山の裾通、東南に向て捲き廻り、一日の海路をへて、トウシル、といふ所にいたれば、古碇一頭あり、是は寛文十二年壬子、勢州の船志摩國を出帆して難風にあい、翌年七月、初て一國にいたるといへり、則此處也、天明丙午年中○大まで一百一十五年を經たり、此說三國通覽にも載たり、三十日の旅行を經て、西南の地に至るといふ、是を以て島の廣き事を考ふべし、此邊は海豹海鹿至て多し、○中略

ウルップ島の事

一ウルップ島は、一名獵虎島とも唱ふ也、海獸に獵虎といふ獸、此嶋の周廻の海中にある故に、獵虎島ともいひ、又ウルップ島ともいふ也、ウルップは魚にて、此島の周廻の海中に出產す、此魚形鱒のごとく、肉の色至て赤く、味ひ赤美也、扨此島の西端に、モシリヤといふ所有、予エトロフ島より渉海して此處に著船す、此所に海苔の名產有、其品日本若布のごとく、香味ともに至て美し、又海獸多くあり、獵虎是を好て食する也、同島にタブケツタラといふ島あり、モシリヤより北方に僅に隔たる所なり、此處に黃金の山色あり、其山の體を能熟し見るに、隙間とて、金山の曼ありて、甚だよき寶山となるべき也、此海濱を北に廻れば、セタツといふ所あり、海岸の巖頭より溫泉湧出て、瀧と成て直に海中に落る、予數日の旅行の間に浴せざれば、此溫泉を浴せり、此セタツが磯邊を北方にゆき、西の海中に離れ、ウツといふ岩島あり、此岩島至て險阻也、數十丈の巖頂に、鳳島

口二十二、戸六、村二、〇下略

〔蝦夷草紙附録四〕エトロフ島之事

一エトロフ島は、クナシリ島の隣島にて、彼島より渡り口西南の地、海邊に峨々たる峻山の下に、イトイヤ、ヘレタルヘといふ二ケ所、クナシリ島に渡海の船、日和を伺ふ處也、是より北一里程にして、モヨロといふ所に蝦夷村あり、此村の乙名をクテレルといふ、此乙名の稼場にて濱邊に古碇あり、三頭あり、頭の重さ七十貫目程也、〇中略之より北方には磯邊を副ひ漕ぎ、凡二十餘里にしてアッサノホリといふ高山あり、〇中略此アッサノホリより、北大凡島中央にモシリノシケといふ所に、エトロフッタラといふ岩あり、あげ卷の形に似たり、此岩に因て當島をエトロフと名づく、昔ヲキクルミ、シヤマイクルといふ二人の神とも謂つべき人、蝦夷北に渡りたるが、其人の太刀の環に捉し緒の形に似たるとて、エトロフといへり、エトロは鼻、フは緒、ッタラは岩といふ義也、此二人は義經と辨慶の兩人也といふ說あれども、いまだ詳なる事をしらず、是より僅此方に、シヤナアといふ所に河あり、水勢漫々として、山奥曠地有て、其地を流れこゝに至ると見へたり、此處は鷲の羽の出る所にして、蝦夷地鷲羽出產最一の場所也、眞羽、薄氷、粕尾の三品、共に比類なき良品の物多し、又シヤナアより北方海濱に四五十里隔て、ショッ、チキヤといふ所あり、此處に蝦夷人食物とする土あり、色白く和らかにて餅のごとし、食用に達せんと思ふ時は、まづ水にひたし水飛して、土を去て煎るに、しやうふ糊のごとし、味ひ平淡にして毒なし、土人殊に賞翫する也、又此ショッ、チキヤより北方西最よりの隅に當り、海路凡十里にして、ジヤルシヤムといふ所あり、此處にマウカアイノといふ乙名あり、此乙名の處に、魯齊亞國の人にて赤人と唱ふる者滯留して居たる處にて、彼人卒都婆のごとくなる柱を建て置たり、此柱に彼國の國字を錄したり、庭前に建置て信仰し、朝暮に拜禮するといへり、此卒都婆に大說あり、書に載がたき一段なり、時

（年、山田嘉元ト云者ニ命ジ、此島ニ來リ、タナシリ島ヨリ國島トリカマイニ着帆シ、ナイトヱ會所ヲ立ソ、此島日本ノ船ヲ通ジ、日本ノ家ヲ立ソ初ナリ、）魯西亞人立ル所ノ十字ヲ倒シ、（是ヨリサキ、ロシヤ人イシユエトロフヘ七年在留シ、十字ヲ立テ夷人ヘ法ヲ教ヘ、夷人ノ中ソノ佛ヲ受ケ、其風俗ヲ變ズル者有ニ至ル、エトロフ島ニ於テヤルレヤムノ夷人ヘヲシピトノ云モノハ魯西亞ノ風トナリ、ソノ佛ヲ受ルモノ、背見アテ受ルニ至ル、又夷人ヘ名ヲ與ヘテ、カウナンセト號ルモノアリ、）同島カムイワツカヲイニ於テ、木ヲ立テ標トス、翌年エトロフ島ヲ新開シ、魯西亞人授ル處ノ佛ヲ棄シメ、魯西亞人變ズル處ノ風俗ヲ改テ、本邦ノ風俗トナス、

〔蝦夷島記〕蝦夷の千島と申は、東の方松前居られ候、蝦夷島より海上七八十里有之、風はげしく日本の船は通路成りがたく、蝦夷は船にて通路仕候、

〔日本地誌提要七十七千島〕疆域　根室州ノ東北群島ヲ合稱ス、幅員五百七拾貳方里八、大者貳島アリ、東ヲ擇捉（エトロフ）ト云、西ヲ國後（クナシリ）ト云、共ニ地形狹長、國後幅員壹百答四方里、周回凡七拾壹里、西南ヨリ東北ニ至ル、凡三拾里、東西廣處凡八里、根室野付岬ト相距ル凡五里ニアリ、擇捉幅員四百六拾八方里七六、周回凡壹百五拾三里、西南ヨリ東北ニ至ル、凡五拾里、東西廣處凡拾里、國後ノ東北凡三里餘ニアリ、又其東北得撫（ウルツプ）群島ニ連リ、魯西亞ノ堪察加（カムサツカ）ニ至ル、

〔北海道志四地理〕戸口

千島國

國後郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ根室國、東北ハ擇捉郡ニ對ス、）口七百十、戸八十二、村五。（中略）　擇捉郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ國後郡ニ對シ、東北ハ振別郡ニ接ス、）口一百四、戸十六、村二。（中略）　振別郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ擇捉郡、東北ハ紗那郡ニ接ス、）口一百八十八、戸二十八、村二。（中略）　紗那郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ振別郡、東北ハ蘂取郡ニ接ス、）口三百十、戸二十七、村四。（中略）　蘂取郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ紗那郡ニ接シ、東北ハ得撫島ニ對ス、）口一百七十二、戸三十、村二。（中略）

得撫郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ蘂取郡、東北ハ新知郡ニ對ス、）口三十三、戸十一、村一。（中略）　新知郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ得撫郡、東北ハ占守郡ニ對ス、）口五十七、戸十三、村一。（中略）　占守郡（東南ハ太平洋、西北ハ新科海、西南ハ新知郡、東北ハ勘察加ニ對ス、）

千島國

口二千六百二十二、戸五百四十六、町十、村六。略○中 野付郡、東ハ根室郡、西ハ標津郡、北ハ海、南ハ釧路國川上郡ニ界ス、口四百三十三、戸九十八、村四。略○中 標津郡、東ハ野付郡、南ハ釧路國川上郡、西ハ北見國斜里郡、北ハ目梨郡及ビ海ニ界ス、口三百四十五、戸一百零三、村二。略○中 目梨郡、東ハ海、南ハ標津郡、西及ビ北ハ北見國斜里郡ニ界ス、口二百九十七、戸八十四、村四。略○中

〔邊要分界圖考〕四 郛弗加考

東海ウルツプ島ヨリ、前路シモシリ島ヨリ、カムサスカ地方ニ至ル迄、凡十餘島、島ミナ丑寅ニ流ル 世ノ所謂千島ニシテ、蝦夷人之ヲ稱シテチユプカト云、チユプカトハ、日出處ト云ノ義也、蝦夷人ハ日月ヲ指テ、チユプカムイト云、魯西亞國主ヲ稱シテ、チユプカカモイトノト云、魯西亞夷人ヲチユプトノト云、共ニ日出ル處ノ人ト云コト也、一說ニ初メロシヤ人諸島ニ來ルトキ、夷人ニ語テ曰ク、我國ノ帝王ハ日月ノ尊ガ知シト、故ニ夷人チユプカカムイト稱シ、其屬島ヲ、チユプカト云ト亦通ズ、蠻書ニ、紅毛千七百六十八年、刻スル所ノモノ、之ヲクリル諸島ト云、蠻書ニ曰、カムサスカノ南ノ出崎ヨリ、南西ノ日本ノ方マデ、大小ノ島連續シタルモノ、大凡二十五、一ニ日三十六、其餘ハ詳ニシガタシ、カムサスカニ近キハ皆魯西亞ニ屬ス、ソノ島大ナル者十六、小ナル者無數、古昔ミナ我蝦夷ノ屬島タリシニ、八十年前正德中魯西亞人カムサスカヲ併呑シテヨリ漸々ニ諸島ヲ蠶食シテ、三十年前ヨリシモシリ迄ヲ服從シテ、其島々ノ名ヲ改メテ魯西亞ノ名トナシ、二十年前ヨリ夷人ノ風俗ヲ易ヘテ、魯西亞ノ風俗トナシ、往古ヨリ日本ニ屬セシ蝦夷人ヲシテ、髮ヲ辮ミ帽子ヲ被リ、股引ヲ用ヒ靴ヲ穿チ、鐵炮玉藥ヲ與ヘ、魯西亞人ノ言ヲ使ヒ、魯西亞ノ佛ヲ頸ニカケ、魯西亞ヨリ役人幷ニ敎法師ヲシテ、敎法師ヲ夷人ハロウロウシイシヤムト云 時々諸島ヘ至リ撫順セシメ、其夷人ヲ悉ク魯西亞ニ貢ヲ入ルヽニ至ラシメ、十年前ヨリウルツプ島ニ到リテ土著シ、儼然トシテ去ラザルニ至ル、カムサスカハクルムセノ國地ニシテ、本我蝦夷ノ種族ナリ、其地今魯西亞北海ノ要津トナル、嘆ズベキニ非ズヤ、チユプカ諸島ノ地理、前輩ノ圖書大抵疎漏少カラズ、天明中、最上常矩嘗テウルツプ島ニ至リ、魯西亞人イシユユニケタニ邂逅シテ、其大略ヲ得タリ、然レドモ未ソノ詳ナルコトヲ得ズ、寛政十二年、守重近藤○奉命シテエトロフ島ヲ按察シ、エトロフ島モ古來日本人往シコト更ニナシ、寛政十年、守重始テ此島ヘ渡リシハ、前後日本人渡海ノ四度目也、其時守重最上常矩ト共ニ此島ヲ見開キ、翌十一年、海路ヲ開キ、十二

根室國

拾壹町、南北凡貳十九里七町、

〔北海道志地理四〕戸口

釧路國

白糠郡（東ハ海、北ハ同國釧路二郡、西ハ十勝國十勝郡ニ界ス、方言シラリカナリ、今誤テシラヌカト呼ブ、平衡ノ義ナリ、）口四百五十五、戸一百、村三、略○中

足寄郡（東ハ同國白糠二郡、南ハ十勝國十勝、中川二郡、西ハ同國河東郡、及ビ天鹽國上川郡、北ハ北見國網走、常呂二郡ニ界ス、方言アイチロノ略言ニテ、矢ヲ納ルヽ義ナリ、奥地ノ土人往還此所ニテ矢ヲ放チ、此地ノ所ヘ排ル故ニ名ク、）口一百十七、戸二十六、村四、略○中

釧路郡（東ハ厚岸、南ハ海、西ハ阿寒、北ハ川上郡ニ界ス、方言クシユルト呼ブ、越ル道ノ義ナリ、此所西別又西地併里網走等ヘ通路ス、故ニ此名アリ、）口一千六百三十二、戸三百五十二、町一、村五、略○中

阿寒郡（東ハ釧路、南ハ白糠、西ハ足寄、北ハ上川、及ビ北見國網走郡ニ界ス、）口八十二、戸十八、村四、略○中

川上郡（南ハ釧路、厚岸二郡、西ハ阿寒、及ビ北見國網走、東ハ根室國標津、野付、北ハ北見國斜里、網走二郡ニ界ス、）口二百四十二、戸五十三、村五、略○中

厚岸郡（東南ハ海、西ハ釧路、北ハ川上郡、及ビ根室國根室郡ニ界ス、方言阿津計牛ト呼ブ、今誤テ厚岸ト稱ス、土人ア[illegible]ノ義ナリ、）口二千六百九十七、戸二百、町二、村十五、略○下

〔知床日誌〕此（○○○去箱館三百九十八里九丁、去厚岸三子モロ十里三丁、持場沿海六十里十三丁、）は東部第一の繁昌地形北は舍利の山々、西はクスリ領より厚消に續き、總て平地、東南に海有、會所元略○注は其一岬の北面にして、前にクナシリノツケを遠望して灣をなし、漁場多し、土産略○注數ふるにいとまなし、土人（文化度千二百餘人、當時五百十一人、當所に十一軒、三十六人）有、所々に散在す、其地名ニムイにして、往古は此所樹木多く有りしが故號しと、ニは木、ムイは灣なり、今訛りてチモロと云よし、

〔日本地誌提要根室七十七〕疆域　西及南ハ釧路、西北ハ北見、東ハ海ニ至リ、南北兩角斗出シテ千島ニ對ス、東西凡壹拾九里壹拾八町、南北凡貳拾九里貳拾七町、

〔北海道志地理四〕戸口

根室國

花咲郡（東南北三面ハ海、西ノ一隅根室郡ニ接ス、）口二百一、戸三十六、村九、略○中

根室郡（東ハ花咲郡、西ハ野付郡、北ハ海、南ハ釧路國厚岸郡ニ界ス、）

沙流郡、東ハ新冠、南ハ海、西ハ膽振國勇拂、千歳二郡、北ハ石狩國夕張、空知二郡、及ヒ十勝國河西郡ニ界ス、松前藩ノ時、佐藤長馬支配地タリ、北蕃風土記ニ、此郷ノ夷ヲ御味方蝦夷ト呼ブ、古時蝦夷謀起ノ時松前ニ協シ、其後奥蝦夷ヲ說諭スルノ勞アリ、故ニ毎歳恩賜アリシト云、口二千零四十、戸四百五十六、村十八。○中略　新冠郡、東ハ靜内郡、南ハ海、西ハ沙流、北ハ十勝國河西郡ニ界ス、松前藩ノ時、工藤平右衛門支配地タリ、此亦御味方蝦夷ノ一ナリ、此地舊美朴ト呼ブ、國音猥雜ナラザルヲ以テ、文化六年改テ新冠ト稱ス、口六百四十、戸一百四十、村十一。○中略　靜内郡、東ハ三石、浦河二郡、南ハ海、西ハ新冠、北ハ十勝國河西中川二郡ニ界ス、松前藩ノ時、新井田兵作支配地タリ、本名佛内ニア、曾祖母澤ノ義ナリ、往昔此ニ老母神アリシト云、口二千四百十八、戸四百六十七、村十六。○中略　浦河郡、東ハ様似、南ハ海、西ハ三石、北ハ十勝國當緣、廣尾二郡ニ界ス、口一千六百十一、戸三百十一、村十一。○中略　様似郡、東ハ幌泉、南ハ海、西ハ浦河、北ハ十勝國廣尾郡ニ界ス、方言シャンサマウニト呼ブ、名山アル所ノ義、或曰女夷ノ名ニ取ルト、口七百四十六、戸一百四十一、村八。○中略　幌泉郡、東南ハ海、西ハ様似、北ハ十勝國廣尾郡ニ界ス、口一千六百零九、戸四百零九、村九。○下略

〔日本地誌提要七十七十勝〕疆域　東ハ釧路、北ハ石狩、西ハ日高、南ハ海ニ至ル、東西凡三拾里貳拾壹町、南北凡四拾七里壹拾八町、

〔北海道志地理四〕戸口

十勝國

廣尾郡、東ハ海、南ハ日高國幌泉郡、西ハ同國様似、浦河二郡、北ハ當緣郡ニ界ス、方言ヒロロト呼ブ、今讀テヒロート爲ス、ヒロハ屎所ナリ、此地三面山ヲ圍ム、故ニ名トス、口四百零七、戸七十三、村一。○中略　當緣郡、東ハ海、南ハ廣尾、北ハ中川、西ハ日高國浦河郡ニ界ス、口五十四、戸十、村三。○中略　上川郡、東ハ河東、南ハ河西、西ハ石狩國空知、上川二郡、北ハ北見國上川郡ニ界ス、口一百二十、戸十四、村二。○中略　中川郡、東ハ十勝、南ハ當緣及ヒ日高國靜内郡、西ハ河東、河西二郡、北ハ釧路國足寄郡ニ界ス、口六百二十、戸九十三、村二十二。○中略　河東郡、東ハ中川、南ハ河西、西ハ上川郡、北ハ釧路國足寄、天鹽國中川二郡ニ界ス、口二百二十八、戸三十九、村五。○中略　河西郡、東ハ中川郡、南ヨリ西ハ日高國靜内、新冠、沙流三郡、北ハ上川、河東二郡ニ界ス、口二百三十七、戸七十一、村十二。○中略　十勝郡、東ハ海、南ハ當緣、西ハ中川郡、北ハ釧路國白糠、足寄二郡ニ界ス、方言トカプチト呼ブ、乳房ノ義ナリ、河上ニフシコトカチト名ル地アリ、丘ノ乳房ニ似ルアリ、故ニ名トス、口二百四十七、戸百零八、村六。○下略

〔日本地誌提要七十七釧路〕疆域　東ハ根室、北ハ北見、西ハ十勝、石狩、南ハ海ニ至ル、東西凡四拾七里貳

（日本地誌提要膽振七十六）疆域　東ハ日高、西ハ後志、南ハ渡島及海、北ハ後志石狩ニ至ル、東西凡四拾四里貳拾五町、南北凡壹拾四里三町、

（北海道志地理四）戸口

膽振國

山越郡、東ハ海、南ハ渡島國茅部、爾志二郡、西ハ後志國久遠、太櫓、島牧三郡、北ハ虻田、及後志國寿都、歌棄二郡ニ界ス、方言ヤムクシナイハ栗ノ澤ヲ通路ト為スノ義ナリ、一説ニ、古木ノ流ル瀬ト爲ス、口一千二百五十一、戸二百四十七、村三。略○中　虻田郡、東ハ有珠郡、及ヒ石狩國札幌郡、南ハ海、西ハ山越郡、及ヒ後志國磯谷郡、北ハ同國岩内、余市、小樽ノ三郡ニ至ル、方言アブハ鉤、タハ製作ナリ、鉤製作ノ所ト云義ナリ、口一千百三十二、戸一百四十一、村三。略○中　有珠郡、東ハ室蘭、幌別、白老、千歳四郡、南ハ海、西北ハ虻田郡、東北ハ石狩國札幌郡ニ界ス、方言ウショロナリ、今俚訛レテウスト呼ブ、灣ノ義ナリ、口三千六百四十六、戸六百八十五、村六。略○中　室蘭郡、東ハ幌別郡、南ハ海、西北ハ有珠郡ニ界ス、方言モロハ數々、ランハ降ルナリ、此地ヨリ鷲別ニ至ル登降數回故ニ名クト、口千三百三十四、戸二百三十八、町七、村四。略○中　幌別郡、東ハ白老郡、南ハ海、西ハ室蘭郡、北ハ有珠郡ニ界ス、方言ホロベツハ大川ノ義、一ニ云、富川ノ義、水源富アル故ニ名トス、口一千百二十九、戸一百三十六、村三。略○中　白老郡、東ハ勇拂郡、南ハ海、西ハ幌別、北ハ千歳郡ニ界ス、方言シラヲヒト呼ブ、波生ブルノ義ナリ、此地砂濱ニシテ浪濤ノ泛濫スル故ニ此名アリ、口六百三十三、戸一百四十一、村三。略○中　勇拂郡、東ハ日高國沙流郡、南ハ海、西ハ白老郡、北ハ千歳郡ニ界ス、此地古名ユウブト呼ブ、ユウハ湯ナリ、ブハ澤ナリ、又河水ノ合流ヲ云、此河源キムンゲワブトウト名ル、瀦水ニテ温暖ナル、故ニ此名アリト、口一千三百十六、戸三百四十四、村六。略○中　千歳郡、東ハ日高國沙流郡、南ハ勇拂、白老二郡、西及ヒ北ハ石狩國札幌、夕張二郡ニ界ス、舊名志古津、古語死骨ト通ズ、故ヲ以テ寛政年間、箱館奉行羽太正養改メ名ク、其後ハ此地鶴多ク集ルヲ以テ、鶴ノ義ニ取レリト、松前藩ノトキ、オタロコハ鳳崎四郎左衛門、オシクフハ厚谷新下、アツシハ工藤富内、下マヽ、チハ木村又八、上ロウラン、ロウサンハ佐藤三郎左衛門、イチヤリハ今井番兵衛、ナンメリ、マスハ関口彦兵衛支配地タリ、口四百五十、戸百零七、村六。略○下

（日本地誌提要日高七十七）疆域　東北ハ十勝、西ハ膽振、南ハ海ニ至ル、東西凡貳拾九里拾四町、南北凡貳拾壹里貳拾貳町、

（北海道志地理四）戸口

日高國

天鹽國

増毛郡（東ハ留萌、南ハ石狩國濱益、西ヨリ北ハ海ニ面ス、南留別志ニ、増毛ハ麻志計伊ノ縮語ニテ、善キト云フ義ナリ、）口二千二百十四、戸三百九十八、町七、村五、○中略　留萌郡（東ハ石狩國雨龍郡、南ハ増毛、及ビ石狩國樺戸郡、西ハ海、北ハ苫前郡ニ界ス、方言ル、チッヘト呼ブ、海水靜ニ入ル所ノ義ナリ、）口一千百零三、戸一百九十四、村五、○中略　苫前郡（東ハ石狩國雨龍郡、南ハ留萌、西ハ海、北ハ天鹽郡ニ界ス、方言トマチマイト呼ブ、延胡索アル所ノ義ナリ、）口一千零三十六、戸一百九十六、村五、○中略　天鹽郡（東ハ中川、南ハ苫前、及ビ石狩國雨龍郡、西ハ海、北ハ北見國宗谷郡ニ界ス、）口八十七、戸三十、村四、○中略　中川郡（東北ハ北見國枝幸郡、南ハ上川及ビ石狩國雨龍郡、西ハ天鹽郡ニ界ス、）口十三、戸六、村未定、　上川郡（東ハ北見國紋別、釧路國足寄二郡、南ハ十勝國河東、上川二郡、及石狩國上川、雨龍二郡、西北ハ中川郡ニ界ス、）口二十一、戸八、村未定、

（日本地誌提要七十七北見）疆域　西ハ天鹽、南ハ釧路、東南ハ根室、西及北ハ海ニ至リ、宗谷海峡ヲ隔テ樺太ニ對ス、東西凡七拾八里、南北凡壹拾七里七町、

（北海道志地理四）戸口

北見國

宗谷郡（東ハ枝幸郡、南ハ天鹽國天鹽郡、西ヨリ北ハ海ニ至ル、方言鉢チソウヤト呼ブ、此地石ノ峰ニ吹タルアリ、故ニ以テ名トス、）口三百七十、戸八十六、村六、○中略　利尻郡（拔海ノ西海ニ對スル島嶼ナリ、方言リイシリハ高山アル島ノ義ナリ、）口四百零三、戸百零八、村六、○中略　禮文郡（東[illegible]ノ正西ニ當ル島嶼ナリ、方言レフンシリハ沖ノ島ノ義ナリ、）口三百十、戸四十八、村四、○中略　枝幸郡（東ハ紋別郡、南ハ天鹽國中川郡、西ハ宗谷郡、北ハ海ニ至ル、方言アシヤシト呼ブ、山ノ海岸ヘ出タル崎ノ義ナリ、）口一百七十一、戸四十六、村四、○中略　紋別郡（北ハ海、南ハ常呂郡、及ビ釧路國足寄郡、西ハ枝幸郡、及ビ天鹽國上川、中川二郡ニ界シ、北ハ海ニ面ス、方言モベツト呼ブ、靜ナル川ノ義ナリ、）口三百九十九、戸九十四、村十、○中略　常呂郡（東南ハ網走郡、西南ハ釧路國足寄郡[illegible]ヨリ、北ハ紋別郡、東北ハ海ニ至ル、方言トコロト呼ブ、山崎ノアル所ノ義ナリ、）口一百二十二、戸三十一、村七、○中略　網走郡（東ハ斜里郡、南ハ釧路國川上、阿寒二郡、西ハ常呂郡、及ビ釧路國足寄郡ニ界シ、北ハ海ニ面ス、方言アバシリハ入ル所ノ義ナリ、此地岩窟アリ、水常ニ滴ル、故ニ名ク、明治十四年七月、釧路國網尻郡ヲ併ス、）口三百二十四、戸八十六、町一、村十四、○中略　斜里郡（東ハ根室國目梨郡、南ハ同國標津、釧路國川上郡、西ハ網走郡ニ界シ、北ハ海ニ面ス、方言シヤリ、或ハシヤルト呼ブ、濕澤ノ義ナリ、）口二百二十五、戸五十八、村五、○下略

四拾三里貳拾貳町、南北凡貳拾五里三拾町、

〔北海道志 地理 四〕戸口

石狩國

札幌區（東ハ空知、南ハ膽振國千歳、有珠二郡、西ハ同國鉱田郡、及ヒ後志國小樽郡、北ハ溶テ石狩ニ連ル、）口一萬四千零八、戸三千零十六、町二十九、村十八、（略○中）石狩郡（東ハ空知、南ハ札幌、西ハ海、北ハ厚田二郡ニ界ス、方言イシカリハ塞ノ義ナリ、水脈屈曲シ、上流塞ルカ如クニ見ユ、故ニ名トス、）口二千八百三十五、戸五百六十五、町十、村五、（略○中）夕張郡（東北ハ空知、南ハ膽振國千歳、日高沙流、西ハ札幌ニ界ス、夕張ハ往昔千歳領ニシテ、千歳土[illegible]）口二十七、戸八、村（未定）、樺戸郡（[illegible]）口二十七、戸六、村（未定）、雨龍郡（[illegible]）口十八、戸二、村一、（略○中）空知郡（[illegible]）口二十三、戸五、村（未定）、上川郡（[illegible]）口一百十八、戸四十一、村（未定）、厚田郡（[illegible]）口一萬二千二百五十四、戸一千五百九十二、村十、（略○中）濱益郡（[illegible]）口一千百四十六、戸百三十三、村六、（略○下）

〔日本地誌提要 七十七 天鹽〕區域 東及北ハ北見、南ハ石狩、西ハ海ニ至ル、東西凡三拾里、南北凡三拾九里貳拾七町、

〔北海道志 地理 四〕戸口

（ロノ略言ニテ、網ノ足ニ作ル、岩アル所ノ義ナリ、）口四百七十一、戸九十二、村四。略○中

瀬棚郡（東南ハ太櫓、西ハ海、北ハ島牧郡ニ界ス、方言セタハ犬、ナイハ澤ノ義ナリ、）口八百七十五、戸一百七十九、村五。略○中

島牧郡（東ハ壽都郡、南ハ太櫓、瀬棚二郡、西北ハ海ニ至ル、名義詳ナラズ、松前藩ノ時、并川吉兵衛支配地タリ、昔隣領ニ棄木ト云地アリ、亦一場所ナリ、土人漸ク減少シテ、纔ニ一人ヲ存スルヲ以テ、天保弘化ノ頃島小牧ニ併ス、）口一千七百三十八、戸四百零二、村七。略○中

壽都郡（東ハ歌棄、西ハ島牧、北ハ海、南ハ膽振國山越郡ニ界ス、方言シユフノ訛リニテ蘆荻多キ岩崎ノ義ナリ、松前藩ノ時、鈴木儀兵衛支配地ナリ、）口四千八百零二、戸七百十八、町七、村四。略○中

歌棄郡（東ハ磯谷、西北ハ海、南ハ膽振國山越郡ニ界ス、方言オタシユツナリ、此所砂濱ト岩石トノ分界アルヲ云フ、）口一千九百零七、戸三百零七、村六。略○中

磯谷郡（西ハ歌棄郡、西北ハ海、東北ハ岩内郡、南ハ膽振國虻田郡ニ界ス、方言イソヤハイシロウノ訛リ、岩磯ノ義ナリ、此地松前藩ノ時、下國舍人支配地タリ、）口一千九百零七、戸三百二十七、村四。略○中

岩内郡（東ハ余市、西ハ海、北ハ古字、古平二郡、南ハ磯谷及膽振國虻田郡ニ界ス、方言イワウナイハ硫黄アル所ノ義ナリ、）口五千零二十七、戸六百三十四、町七、村九。略○中

古宇郡（東ハ古平、南ハ岩内、西ハ海、北ハ美國積丹郡ニ界ス、方言フルト呼ブ、名義詳ナラズ、）口二千八百七十二、戸四百三十一、村六。略○中

積丹郡（東ハ美國、南ハ古宇、西北ハ海ニ至ル、方言シヤツコタント呼ブ、夏ノ所ノ義ナリ、昔時鯨海鼠鰛ノ如キ夏漁多シ、故ニ名ク、松前藩ノ時藤倉八十八支配地タリ、）口一千五百九十六、戸二百四十五、村八。略○中

美國郡（南ハ古宇、西ハ積丹、東ハ古平、北ハ海ニ至ル、方言ビクウニト云、ピタハ小石、ウニハアロト云義ナリ、）口一千二百零一、戸二百七十七、村五。略○中

古平郡（東ハ余市、南ハ岩内、古宇、西ハ美國、北ハ海ニ至ル、方言フルハ小山、ビラハ崩ル、義、山崩レアル所ヲ云、松前藩ノ時新井田嘉内支配地タリ、）口二千九百五十五、戸五百二十一、町五、村四。略○中

余市郡（東ハ小樽、忍路、西ハ岩内、古平、北ハ海、南ハ膽振國虻田郡ニ界ス、方言イワチナイト呼ブ、温泉アル所ノ義ナリ、余市川ノ源ニ温泉アリ、故ニ名ク、松前藩ノ時、下余市ハ松前左膳、上余市ハ松前八之丞支配地タリ、）口一千六百二十七、戸九百二十七、町七、村七。略○中

忍路郡（東ハ高島、南ハ小樽、西ハ余市、北ハ海ニ面ス、方言ウシヨロト呼ブ、灣ノ義ナリ、）口二千百九十七、戸三百七十八、村四。略○中

高島郡（東北ハ海、南ハ小樽、西ハ忍路ニ界ス、此地本名ツカリイシロト呼ブ、水豹居磯ノ義ナリ、高島ハ海中ニ岩島高ク聳ル故ニ、邦人ノ名ル所ナラン、一說ニ此島ニ鷲多ク集ル、故ニ名クト、孰カ是ナルヲ知ラズ、）口二千二百八十四、戸二百九十六、町四、村二。略○中

小樽郡（東ハ石狩國札幌郡、南ハ膽振國虻田郡、西ハ余市高島二郡、北ハ海ニ至ル、オタルハ方言沙路ノ義ナリ、松前藩ノ時、氏家新兵衛支配地タリ、）口九百八十三、戸千零五、町二十五、村五、

〔日本地誌提要七十六石狩〕疆域　東ハ釧路、北見、南ハ膽振、十勝、西ハ後志及海、北ハ天鹽ニ至ル、東西凡

根室國　花咲、根室、野付、標津、目梨、　〆五郡

千島國　國後、擇捉、振別、紗那、蘂取、　〆五郡

（日本地誌提要七十六渡島）疆域　南ハ津輕海峽ヲ隔テ、陸奥ニ對シ、北ハ後志膽振、東西共ニ海ニ至ル、

東西凡貳拾壹里貳拾町、南北凡貳拾三里壹拾八町、

（北海道志四地理）戸口

渡島國

函館區南ヨリ西ハ山、北ハ海、東ハ龜田郡ニ界ス、口三萬二千七百三十八、戸六千百六十、町四十四、○中略　龜田郡東自リ北ハ茅部郡、南ハ函館區及ヒ海、西ハ上磯郡ニ界ス、口一萬千零四十三、戸二千六百六十、村二十八、○中略　茅部郡東北ハ海、南ハ龜田郡、西ハ檜山爾志二郡、西北ハ膽振國山越郡ニ界ス、方言カヤウベシト呼ブ、帆形アル所ノ義ナリ、口一萬一千六百六十九、戸千九百六十七、村十三、○中略　上磯郡東ハ龜田、南ハ海、西北ハ松前檜山二郡ニ界ス、口八千六百四十九、戸千三百八十三、村十三、○中略　松前郡東南西ハ海、北ハ上磯檜山二郡ニ界ス、明治十四年七月八日、福島津輕二郡ヲ併セテ松前郡ヲ置ク、口二萬三千八百十八、戸四千三百四十八、町三十四、村十七、○中略　檜山郡東ハ上磯郡、南ハ松前郡、西ハ海、北ハ爾志郡ニ界ス、口二萬零九百六十三、戸三千七百四十、町二十六、村二十一、○中略　爾志郡東ハ茅部郡、南ハ檜山、西ハ海、北ハ後志國久遠郡ニ界ス、口七千九百零三、戸千四百零四、村八、

（日本地誌提要七十六後志）疆域　東ハ膽振石狩、南ハ渡島膽振、西北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾六里、南北凡三拾貳里三拾壹町、

（北海道志四地理）戸口

後志國

久遠郡東ハ膽振國山越郡、南ハ渡島國爾志郡、西ハ海、北ニ太櫓郡ニ界ス、方言[illegible]呼ブ、土人[illegible]ノ處メ、山野ニ弓ヲ射ルヤウタヽント曰フ、此地一名牛渕ト稱ス、魚多キ川ノ義ナリ、松前藩ノ時、[illegible]下支配地タリ、口一千百六十二、戸三百三十六、村七、○中略　奥尻郡久遠郡ノ西ニ在ル島嶼ナリ、松前藩ノ時[illegible]ノ所[illegible]、口二百八十八、戸四十九、村四、○中略　太櫓郡東北ハ膽振國山越郡、南ハ久遠、西ハ海、北ハ瀬棚島牧二郡ニ隣ス、方言ヒトロナリ、ビフヲ

國郡

同文言

右同文言の内海御警衛御免被成候

佐竹右京大夫

酒井左衛門尉

南部美濃守

蝦夷開發守衛の儀、當節時務專要の事に付、割合、松平陸奥守、松平肥後守、佐竹右京大夫、酒井左衛門尉へも領分被成下候、其方並に津輕土佐守持場の儀は、是迄の通可相心得候、陣屋有之場所には、相應の地被下候間、一同申談じ、入精相勤可申旨被仰出候、

同文言

津輕土佐守

〔憲法類編十國法〕第四己巳〇明治二年八月十五日御布告

蝦夷地、自今北海道ト被稱、十一箇國ニ分割、國名郡名等別紙之通被仰出候事、

北海道十一箇國

渡島國　龜田、茅部、上磯、福島、津輕、檜山、爾志、　〃七郡

西部　後志國　久遠、奥尻、太櫓、瀬棚、島牧、壽都、歌棄、磯屋、岩内、古宇、積丹、美國、古平、余市、忍路、高島、小樽、　〃十七郡

石狩國　石狩、札幌、夕張、樺戸、空知、雨龍、上川、厚田、濱益、　〃九郡

天鹽國　増毛、留萌、苫前、天鹽、中川、上川、　〃六郡

北見國　宗谷、利尻、禮文、枝幸、紋別、常呂、網走、斜里、　〃八郡

東部　膽振國　山越、虻田、有珠、室蘭、幌別、白老、勇拂、千歳、　〃八郡

日高國　沙流、新冠、靜内、三石、浦河、様似、幌泉、　〃七郡

十勝國　廣尾、當緣、大津、中川、河東、河西、十勝、　〃七郡

釧路國　白糠、足寄、釧路、阿寒、網尻、川上、厚岸、　〃七郡

人右は今般蝦夷地一體上地被仰出候に付、御旗本御家人の内、風寒暑濕を厭はず、山野を跋渉し、骨骸を固め、文武の修練心懸候者共相願候へば、元身分に應じ、在住被仰付候間、名前早々取調べ可申聞候、且万石以上以下の家來主人見込の者も有之候はゞ、是又被差遣候間、書面の者共、何れも荒地開發、野馬牧牛の養を始として、食料藥用に充べき生類育方、金銀銅鐵鉛山田畑巨材薪柴伐出し、草木類植付、石炭堀取、器具製作、採桑鯨漁、何に寄ず出產相成候類、並港付等の場所へ休泊所茶店取立度存候者は、望に任せ被差遣候、尤も其品に應じ、御手當をも可被下、猶又御國益にも相成り、格別出精の廉顯れ候者は、篤と事實相糺し、士人の身分に御取立、農工商の輩は、地所家宅等相渡し、其上御賞賜御手當等も有之候條、右之趣相心得、有志の者は其筋迄可願出候、猶委細の儀は、箱館奉行へ可承合候

〔嘉永明治年間錄 八〕安政六年九月二十七日、蝦夷地開拓守衞ヲ、奥羽兩國ノ諸侯ニ命ズ、

松平肥後守

蝦夷地開發守衞の儀、當節の時勢專要の事に付、別段の譯を以て、蝦夷地の內割合領分被成下候、松平陸奥守、佐竹右京大夫、酒井左衞門尉、同樣被仰付候間、諸事申談じ、一同入精專開發等、格別行屆候樣可被取計候、內海御警衞の儀は、御免被成候、且又南部美濃守、津輕土佐守持場の儀は、只今迄の通り相心得、障碍有之場所にて、相應の地所被下候間、是又申談じ、一同入精相勵可申旨被仰出之候、

松平陸奥守

同文言、松平肥後守、佐竹右京大夫、酒井左衞門尉へも同樣被仰付候間、右同斷可被取計候、尤も函館表松前地へ警衞向の儀は、是迄の通可被相心得候、且又南部美濃守、津輕土佐守持場の儀は、右同文言略之、

而被仰付、同奉行支配吟味役二人被仰付、是より先ニ寛政十年五月、御目付渡邊久藏胤、大河内善兵衛政壽、御勘定吟味役三橋藤右衛門成方、御勘定組頭松山總右衛門直茂、御勘定太田十右衛門政與等已下八十七人を、松前へ被遣、其地及蝦夷を巡察せしめらる、是蝦夷の邊境を開るゝの始也、同十一年の春、松前領分東蝦夷地、箱館より以東の地御用地に被召上、若狹守(松前章廣)へは替地として、武州久喜濱五千石を賜る、此時御書院番頭松平信濃守忠明、總奉行と成、御勘定奉行石川左近將監忠房、御目付羽太庄左衛門正養、御使番大河内善兵衛政壽、御勘定吟味役三橋藤右衛門成方等仰を受て、松前に至、東蝦夷地の邊境を開き、夷人撫育、魚獵交易等の事を沙汰す、布衣以下にては御勘定組頭、御勘定吟味方改役、支配勘定等出役にて是を勤、此時南部大膳大夫利敬、津輕越中守寧親に被仰付、人數を出して箱館を守衛す、十二年より人數を配て、東蝦夷地エトロフ等の島々を守る、此頃松前より西蝦夷地は松前の領分なれば御構なし、享和元年までは、右の人々相持にて、東蝦夷地の事を執れり、同二年冬、蝦夷地奉行を箱館奉行と被改、

〔嘉永明治年間錄 四〕安政二年乙卯三月二十七日、蝦夷地守衛ヲ松平陸奥守等ニ命ズ、

松平陸奥守へ達　此度東西蝦夷地在乙部村東任木古內村島々共、一圓上地被仰付、向後函館奉行御預所に被仰付候に付、其方へ蝦夷地の警衛被仰付候、佐竹右京大夫へも被仰付候間、諸事可被申合候、且津輕越中守、南部美濃守へは、兼て被仰付置候條、猶又可被申合候、函館表松前地警衛をも可被相心得候、佐竹右京大夫へ達、上同文言、松平陸奥守へも被仰付候間、諸事可被申合候、

四月廿五日に至り、守衛箇所譯け、東蝦夷シラヌイよりシレトコ迄の內、島々共一圓持場の事、エウフツ、子モロ、エトロフ、クナシリ、右松平陸奥守へ被爲命、陣屋取建人數可差出置候、西蝦夷ヲカムイ岬より北海岸邊シレトコ迄總體、並北蝦夷地其外島々一圓持場の事、且又マシケ、ソウヤ出張陣屋取建、夏分蝦夷地應接可被相心得候、右佐竹右京大夫へ、函館警衛並江差末乙部村より、西蝦夷地ヲカムイ岬迄持場の事、右津輕越中守へ、函館表出岬警衛可被相心得、江差岬より東蝦夷地ホロヘツ迄海岸總體持場の事、右南部美濃守へ、函館表警衛備場の儀は、七重濱より木古內村迄持場の事、右松前伊豆守へ、

十月十七日、蝦夷地開拓ニ就キ、有志ノ者ハ該地ニ移住スルヲ許ス、

阿部伊勢守殿渡書付、五百石以下御目見以上以下、同總領二男三男、厄介、清水附の者、浪人、百姓、町

候樣申敎へ、往々和人に變化致候樣敎育可致事、
但此方之人、蝦夷詞遣ひ候儀決而不致、ひたすら夷人に和語を遣はせ候を專一に可心掛候、
一夷人ども追々御德化に感じ、御主法に馴れ、和人の風俗に相成度由望の者も有之候はゞ、夫々月代も致させ、日本の服をも與へ、猶其者稼方等出精いたし、餘人をも勵し候樣の者共に候はば、日本風之家作をも拵へ遣し、外々之物迄も追々見習ひ、風俗を替候樣可取計事、
かならず氣情に拘り、成就致間敷候、渠等が方より相望は、時節を待て可取計候、女之風俗抔改め候儀、尙更之事に候、
一上を崇め候儀者、不及申、親に孝し、兄に弟し、親族にむつましく、朋友に信を盡し候道ども、追々にさとらせ、且いろは文字幷數の文字抔、追々に敎へ、往々文筭之開候樣可心掛事、
一彼地の習にて、有德なる者は妻を大勢持、貧しきものは無妻にて暮し候由に付、おのづから出生も少く、土地に合候面者人別不足之儀と被存候、此儀も純一にいたし度ものに候得共、急に令を下し候はゞ、其氣情に拘り可申候、往々人倫の道をも辨へ、夫々男女とも獨身のもの無之、子孫多く生じ候樣致度事に候、急に其行ひがたき筋に候得共、兼而其趣を含取扱可有之事、
一夷人ども病氣のもの有之候はゞ、品に寄臥具等も與へ、藥用其外可成丈手當いたし、死者多く無之樣取計可遣事、
右之外此ヶ條に洩候儀者、其場所に請取之面々、器量次第十分之力を盡し、一體開國の御趣意を基本にいたし、專ら敎育可被致候、何方なりとも敎育服從之整ひ候方、其場所預り之面々手柄に候條、相互に勵み合、粉骨を盡さるべき事に候、
未（寬政十一年）二月

〔泰平年表大[illegible]所〕享和二年二月廿三日羽太庄左衞門（安藝守と改）戸川筑前守安倫蝦夷地奉行始

候間、此度者御直捌に相成、夫々御役人交易場に罷在、取捌候筈候、扨此御仕法御救ひの故とは申ながら、猥に弛め候而は不宜候間、交易之極めは、やはり是迄之姿に居置、升目秤目等不足に無之、幷悪敷品等不相渡、聊以不正之筋無之様精々吟味致し、夷とも相歓び、稼方出精いたし候様可取計候、右體交易方正しく相成候に付而は、追々出荷物等も相増可申候得共、今度之御趣意侍以御益を謀り候儀にて者無之候間、其所に目をつけず、只々夷人ども潤候儀、専要之目當に致し取計可申候、

一往々者耕作之道を教へ、穀食を以命をつなぎ候事を覺させ、漸々本邦之風儀に教育可致事、

但耕作之道、未整之内とても、成べき丈速々に肉食に遠ざかり、穀食を仕習ひ候様教へ、設、穀食は肉食よりは尊きものと申譯を、能々得道可為致置候、左候得者、追日農事を施し候節、格別進み方宜敷、成功捗行可申候、此段兼而相含可取扱候、

一此度之御趣意難有段、銘々に説聞せ可申は勿論に候得ども、必其言を實と違ざる様可取扱儀第一に候、渠等者邊鄙之夷狄にて、其性却而誠實に可有之候間、聊たりとも僞を施し、本邦は無實の國風之様に存込候得ば、先入主と成候而、以之外服従之妨に相成候、此所専要に心かけ、實意を以示し可申候、

一夷人共人足其外に遣ひ候節、賃米之儀、別紙定之通、遠近に随ひ、少しも無間違相渡、聊も疑惑を生じ不申候様可取扱候、尤其内にも働格別之者は、賃米之外も少々づゝも品物なりとも指遣候歟、又は酒飯を給させ候歟、其時宜によりて取計ひ、功を賞し可遣候、乍去姑息に流れ不申様勘辨致し、己々が働きの甲乙によつて、御恩澤厚薄有之譯を能々知らしめ、銘々其職に進み、稼方出精致候様可取計候事、

一夷人ども日本詞遣ひ候事制禁之由に候得共、此度御用地の内は、其禁を相止、専ら和語を遣ひ

等萬端差引進退可仕旨、被仰出候間、是又被得其意、右之差圖に任せ候様可被致候、委細之儀は、掛之面々より可申談候旨相達候條、得其意可申談候、

二月〇寛政十一年十六日

蝦夷地御用被仰付候面々江御書付

今度異國境御取締被仰付候に付、東奥蝦夷地之内島々迄、當分御用地に相成、其方江右御用被仰付候、是迄松前若狹守、右之土地より年々收納之分、從公儀若狹守江相渡候様被成下候に付、右場所に而、萬端其方共さし圖に任せ候様、若狹守江申渡候間被得其意、猶土地之様子も追々申談候上、見分有之、蝦夷人敎育之儀を始、風俗相替候儀、并交易之趣法迄存寄に任せ、一體開國之御趣意を含、服從致候儀第一に可被心得候、右御用之儀は、深き御趣意に而被仰出候儀有之、御國境之事にも候得者、其心得を以、銘々粉骨を盡、此度之御趣意不違様、進退差引精勤可被致候、尤不得止事儀は不及窺取計可被申候、御入用向之儀は、不少分外も可有之候之間、追々可相伺候、

松平信濃守　石川左近將監　羽太庄左衞門　大河內善兵衞　三橋藤右衞門

右正月七日被仰出候

松平伊豆守殿御書取　ゑぞ地御用の趣意被仰渡候寫秘書

今度蝦夷地御用之御趣意は、彼島未開地に有之、夷人共衣食住の三ツも不相整、人倫之道も辨ざる不便の次第に付、此度御役人被遣、御德化を及し、敎育をたれ、漸々日本之風俗に歸し厚く服從いたし、萬々一外國より懷け候事など有之候共、心底動かざる様存込せ候儀、御趣意之第一に候得共まかれども只今俄に事を施め、或は發に物を與へ、急速に服從を取候様に而者、往往際限も無之却而永續もいたし間敷候間、先當時之處は土地に仕馴し、交易の業を以、夷人どもも潤ひ候様可致候、此交易之儀、是迄之通町人ども計に而者、彼是不正之趣も有之やと相聞え

罪人を、悉く助命せしめ、左遷の士をも、倶に蝦夷土地に送り遣はし、是に監副の明を加へて守護させしめ、能々蝦夷の土人を教育せしめ、○中略於是江州の流水を招き、山岳の溪水を導き、或は井を堀溝を穿ち、用水の流行等の便理を量りて田畑を墾耕して百穀を蒔、農業を爲さしめば、終に良田畑と成事慥なり、依之鍛冶木匠を始に遣はし、諸職人も追々遣はし、家宅器財等の制作あるべし、依之銅鐵早速に入用有べし、又土地に金銀銅鐵錫の山岳多くあり既に往古日本より數千人ゆきて砂金を採り、又は山嶽を穿ち、黄金を堀採りたりしが、寛文己酉年○九年に、彼地サルと云處の長夷シャムシャインシャウセン一揆の時より、日本の金堀の者共を悉く追ひ拂ひ、其後金堀砂金採を松前氏より停止せしといへり、夘又土民撫育教導の制度は、其土地に是迄用ひ來りたる禮義あり、此内の宜敷に據り採りて、日本の法令を以て保助せしめ、蝦夷土地に都而長者(おとな)といふて、長夷あり、是を直に郷村の名主或は庄屋と役名賜りて、その郷村に法令を是に傳ひ土人に、布くべし、天監師を賜はりて、民間暦を制作し、博く國中に頒行あらば、後々は人道備り良民と成、良國と成べきなり、彼地いまだ佛法の沙汰なし、依之是を幸ひに斟酌有べし、前にもいへるごとく、北京王城の土地は、北極出地四十度七十五分にして、百草百穀豐饒なり、蝦夷土地も北極出地凡四十度より五十三四度に距る土地なれば、甚廣大にもあり、北極出地に依りて勘考すれば、諸土産も良菓良穀を出すべき道理有、

〔松前若狹守に被仰渡候御書付〕　松前若狹守

今度異國境御取締被仰付候に付、東奥蝦夷地之内島々迄、當分御用地に被仰付候間、其趣可被存候、尤右土地より、是迄年々其方收納之儀者、御用地中從公儀御取替金御下げ可被成候、右之御用は、書院番頭松平信濃守、御勘定奉行石川左近將監、御目付羽太庄左衛門、御使番大河内善兵衛、御勘定吟味役三橋藤右衛門、右五人之面々出立被仰出、右土地之蝦夷人敎育之儀を始、交易之趣、被

年、箱館奉行ニ拜シ、左近將監ニ任ズ、　竹内保德、安政元年、箱館奉行ニ拜シ、下野守ニ任ズ、　新藤方凉、安政元年、箱館奉行支配組頭ト爲リ、文久三年、箱館奉行格ニ拜ス、〇中略　堀利熙、安政二年、箱館奉行ニ拜シ、織部正ニ任ズ、〇中略　村垣範正、安政三年箱館奉行ニ拜シ、淡路守ニ任ズ、〇中略　津田正路、安政五年箱館奉行ニ拜シ、近江守ニ任ズ、〇中略　勝田充、萬延元年、箱館奉行ニ拜シ、伊賀守ニ任ズ、　栗本鯤、萬延元年、箱館奉行支配組頭勤方ト爲リ、慶應三年、外國奉行兼勘定奉行箱館奉行ニ拜シ、安藝守ニ任ズ、〇中略　糟谷義明、文久元年箱館奉行ニ拜シ、筑後守ニ任ズ、〇中略　小出秀實文久二年、箱館奉行ニ拜シ、大和守ニ任ズ、〇中略　杉浦勝誠、慶應二年、箱館奉行ニ拜シ、兵庫頭ニ任ズ、

〇按ズルニ、箱館奉行ノ事ハ、官位部遠國奉行篇ニ詳ナリ、

(本田利明異國話)蝦夷土地開發成就して良國と可成事

すべて庶人のおもはく、蝦夷の土地は雲霧深くして、濕地なれば、住馴れざる日本の人抔は、中々以て住居難成土地也、假令おして住居するとも、五穀も生ぜざれば食物乏しく、因て忽ち飢に及ばん、殊更に濕氣を受、病を發して、廢人と成べし、亦往古より日本の農民度々渡海して、耕作種々に蒔植仕付等して試たる事有といへども、終に稔りし例なし、依て今に至りても開發せざるべし、〇中略　天下萬邦、各南北兩極出地凡そ二十三度計りより六十二三度に距りても、四季有て、百菓百穀出產して、人民の住居又大同小異なり、然るに蝦夷土地に限りて、霧至て深く濕地成べき筈なきに、如何となればはやく云へば土地に人民乏敷して、耕作の地面なきゆへ、山岳曠野悉く大樹、或は雜草繁茂せし故、是に覆はれ、地面の陰冷の濕氣、大陽の溫熱の乾氣、各霄壤に昇降せず、地面に屯營するゆへ、雲霧悉く土地を蔽ふ、〇中略　此地面を覆ふ所の雲霧を悉く運ひ拂ひ、霄高く押し揚、常の雲となる大計策は、其最初は仁政よりはじむ、御料私領寺社領に每年死刑に行ふべき

〔吏徴附錄(慶職)〕松。前。奉。行。二人、(○中略)享和二年壬戌二月廿三日、始置蝦夷地奉行二人、(○中略)同年五月十日改ニ御役名箱。館。奉。行。、文化四年丁卯十月廿四日、箱館御役所を松前に移す、改ニ稱松前奉行、員を增し四人となる、文政四年辛巳十二月七日、廢ニ當職、

〔慶應元年武鑑〕箱館御奉行　芙蓉間(當御役文北新規、其後絕、嘉永七寅六月ヨリ、)

〔北海道志(十五風俗)〕職官一(上代、幕府、○中略)

渡邊胤、寬政十年目付ヲ以テ、蝦夷地ヲ巡察シ、松前ニ止ル、　大河內政壽、寬政十年使番ヲ以テ、東蝦夷地ヲ巡察シ、樣似ニ至ル、　三橋成方、寬政十年、勘定吟味役ヲ以テ、西蝦夷地ヲ巡察シ、宗谷ニ至ル、　松平忠明、寬政十年、書院番頭ヲ以テ、蝦夷地警衞ノ事ヲ掌ル、　石川忠房、寬政十一年、勘定奉行ヲ以テ、蝦夷警衞ノ事ヲ掌ル、　羽太正養、寬政十一年、目付ヲ以テ、蝦夷地警衞ノ事ヲ掌リ、箱館奉行ニ拜シ、安藝守ニ任ズ、著ス所休明光記、邊策私辨、正養院家訓アリ、　村上常福、寬政十一年、寄合ヲ以テ、蝦夷地ヲ巡察ス、　遠山景晉、寬政十一年、西丸小姓組番士ヲ以テ、蝦夷地ヲ巡察ス、著ス所未曾有記アリ、　長政忠七郞、寬政十一年西丸書院番士ヲ以テ、蝦夷地ヲ巡察ス、　松山惣右衞門、寬政十一年勘定組頭ヲ以テ、五有司(松平忠明、石川忠房、羽太正養、大河內政壽、三橋成方、)ニ隨從シ、蝦夷地ヲ巡察ス、(○中略)　近藤守重、寬政十一年以下同上、著ス所邊要分界圖考、續蝦夷草紙、蝦夷奏議、近藤巡夷錄、擇捉談等アリ、(蝦夷ニ係ル者ノミヲ擧グ、○中略)　最上常矩、寬政十一年以下同上、後箱館奉行支配調役並ト爲ル、著ス所蝦夷草紙、西蝦夷地上地一件アリ、　戶川安倫、寬政十二年箱館奉行ニ拜シ、筑前守ニ任ズ、(○中略)　川尻貞勝、文化五年箱館奉行ニ拜シ、肥後守ニ任ズ、　村垣貞行、文化六年、箱館奉行ニ拜シ、淡路守ニ任ズ、　小笠原長幸、文化七年、箱館奉行ニ拜シ、伊勢守ニ任ズ、　荒尾成章、文化九年、箱館奉行ニ拜シ、但馬守ニ任ズ、　服部貞勝、文化十年、箱館奉行ニ拜シ、備後守ニ任ズ、(○中略)　本多繁文、文化十二年、箱館奉行ニ拜シ、淡路守ニ任ズ、　夏目信平、文化十四

制スル能ハズ、寛政ノ末、徳川氏、吏ヲ遣テ東蝦夷ヲ經理シ、松前領ノ本蝦夷東部ヲ收ム、(浦川ヨリ、知床(シレトコ)ニ至ル、)松前氏猶其西部ヲ領シ、且采色ヲ內地ニ賜フ、(五千石)享和ノ初、箱館奉行ヲ置、文化四年、松前章廣(道廣ノ子)ヲ陸奥梁川ニ徙シ、(九千石)其西部ヲ收メ、松前奉行ヲ置キ、全島ヲ總管シ、北蝦夷ノ地ヲ撿視セシム、文政四年奉行ヲ罷メ、章廣ヲ復封ス、安政ノ初、再ビ松前崇廣(章廣ノ少子)ノ封ヲ收メ、箱館奉行ヲ置キ、全島ヲ統シメ、崇廣ニ邑ヲ內地ニ賜ヒ、(三萬石)福山ニ居ラシムル故ノ如シ、王政革新、箱館府ヲ置、福山ヲ改テ館ト稱ス、明治二年八月、全島ヲ以テ北海道ト稱シ、十一州ニ分チ、開拓使ヲ置キ之ヲ管ス、北蝦夷舊ニ依テ樺太(カラフト)ト稱シ、魯人雜居ヲ許ス、既ニシテ館藩ヲ廢シ、渡島ヲ青森縣ニ併ス、五年九月、之ヲ開拓使ニ隷シ、使廳ヲ札幌ニ定ム、

〔日本書紀(二十六齊明)〕四年四月、阿倍臣(闕名)率船師一百八十艘伐蝦夷、○中略 遂於有間濱、召聚渡島蝦夷等、大饗而歸、　五年三月、是月、遣阿倍臣(闕名)率船師一百八十艘、討蝦夷國、阿倍臣簡集飽田渟代二郡蝦蛦二百四十一人、其虜三十一人、津輕郡蝦蛦一百十二人、其虜四人、膽振鉏蝦夷二十人於一所、而大饗賜祿、(膽振鉏、此云伊浮梨娑陛、)即以船一隻與五色綵帛、祭彼地神、至肉入籠、時問菟蝦夷膽鹿島、菟穗名二人進曰、可以後方羊蹄爲政所焉、(肉入籠、此云之之梨姑、問菟、此云塗毗宇、菟穗名、此云宇保那、後方羊蹄、此云斯梨蔽之、政所蓋蝦夷郡乎、)隨膽鹿島等語、遂置郡領而歸、

〔釋日本紀(十四述義十)〕飽田

渟代、津輕、膽振鉏、肉入籠、問菟、後方羊蹄、竝方象之、皆是蝦夷國之郡號也、

〔日本書紀(三十持統)〕十年三月甲寅、越度島蝦夷伊奈理武志與肅愼志良守叡草、錦袍袴、緋紺絁、斧等、

〔續日本紀(八元正)〕養老四年正月丙子、遣渡島津輕津司從七位上諸君鞍男等六人於靺鞨國、觀其風俗、

〔諸家系圖纂(四ノ二)〕若州武田之系圖

信廣(若狹守)——光廣(松前藏人、號修理大夫、)

夷、偕來、卽此也、時高宗問我行人曰、蝦夷幾種、對曰類有三種、遠者都加留、次者麁蝦夷、近者熟蝦夷、今此熟蝦夷、所謂三種、擧其在荒服及內地者而言也、〈出日本紀註所載伊古連博德書、都加留卽津輕、是其在內地而遠者也、麁猶荒也、是其在荒服、卽次遠者、熟謂其居內地而近者也、〉厥後凡稱蝦夷者、皆謂其在內地者也耳、天平寶字六年、東海東山節度使藤原惠美臣朝獦、刻石於鎭守府門、以誌四方道里相距近遠、曰、去蝦夷國界一百二十里、〈其石古俗所謂壺碑〉則知宮城郡北方數百里、盡沒于夷地、〈古謂百廿里、準之今方二十里、〉至其驛之荒徼、悉收東山地、因海爲塞、則征東將軍坂上大宿禰田村麻呂之功、蓋以爲大也、史闕不傳其事、可勝歎哉、〈會聞之津輕人、坂將軍行營之地往々而有焉、土人亦說其事、猶知前日、唯其文獻無足以徵者云、〉厥後六百五十六年、若狹守源信廣越海入于夷中、遂取其南界、以定北地、是歲嘉吉三年也、〈信廣若狹國人、始稱武田太郎、後稱蠣崎、又改稱松前、蓋因地名也、〉自此以降、子孫世々據守其地、而迄于今、東藩之憂久絕矣、

〔日本地誌提要七十六北海道〕沿革　北海道、舊蝦夷ノ地タリ、古ヘ陸奥出羽ノ北境、夷種雜居シ、渡島以北ノ夷ト併セテ蝦夷ト云、景行天皇ノ御宇、日本武尊武內宿禰、北方ヲ巡視シテ夷地ニ至ル、其後叛服常ナシ、齊明天皇ノ御宇、阿部比羅夫ニ命ジテ北伐シ、政所ヲ後方羊蹄ニ置ク、嗣後王化日ニ弘マリ、渡島以北ヲ指シテ蝦夷トナス、既ニシテ內地多事、邊境置テ問ハズ、一條天皇ノ御宇、蝦夷亂ヲ作ス、陸奥ノ人安倍國東、伐テ之ヲ定ム、源賴朝ノ陸奥ヲ征スル、安倍貞任〈國東ノ裔〉五世ノ孫安藤季信ヲ以テ津輕ノ守護トナシ、後之ヲシテ蝦夷ヲ管セシム、南北朝ノ初、其族安東貞季代テ津輕ヲ領シ、蠣崎〈津輕郡弘前ノ北ニアリ〉ニ居ル、正長元年、貞季ノ孫教季、南部守行ニ逐ハレ、嘉吉三年、松前ニ到リ、島民ヲ撫懷ス、是ヲ下國氏トナス、享德三年、若狹ノ人武田信廣松前ニ航シ、上國ノ蠣崎季繁ノ女婿トナリ、島夷ヲ服從シ、天河ニ居リ、蠣崎氏ヲ冒ス、永正十一年、其孫義廣松前ニ徙ル、天正十八年、豐臣氏東征ノ後、義廣ノ孫慶廣款ヲ納レテ內附ス、慶長五年、福山ニ城テ治所トナシ、松前氏ト稱ス、明和中ニ至テ、魯西亞人、始テ東蝦夷得撫島ニ留住ス、松前道廣〈慶廣八世ノ孫〉

六間　留萌（ルヽモッペ）郡ルヽモッペ、四十三度五十八分、　五里三十町五十五間　ホンフニシカ　四里三十町五十二間　苫前郡トマヽイ、四十四度一十八分、　二里四町二十一間　ハホロ　六里三町五十五間　フレップ　一十五里二十町一十七間半　天鹽郡ワッカシヤタナイ　六里一十五町九間　北見國宗谷郡ハッカイベ　四里一十五町二十三間　ノッシヤム岬　七里一十八町二十七間　ソーヤ、四十五度二十八分半、（島眞所測）　六里一十一町五十七間（至シルムッ岬一里三十一丁九間）　ナ
ヱトイヲマイ　二里三十一町六間　ヲニシベツ　一十四里一十五町四十二間　枝幸（エサシ）郡エサシ　二十里二十一町二十二間　紋別郡サルヽ、　三里二十一町四十二間　モンベツ　六里一十九町三十六間　ユウベツ　九里二十九町一十五間　常呂（トコロ）郡トコロ　六里二十三町一十三間（至ノトロ岬三里二十一丁五十間）　網走（アバシリ）郡アバシリ　九里一十九町　斜里（シャリ）郡シヤリ　九里二十町五十三間　ホロベツ川　西沿海通計二百八十七里二十三町四十七間半　北海道東西沿海總計五百四十里一十八町四十三間（蓋從ナシヨロコフ、至ホロベツ川、未測定闕之、）

〔蝦夷志序〕蝦夷一曰毛人、古北倭也、（北倭出山海經）漢光和中、鮮卑檀石槐聞倭善網捕、東擊倭人國、得千餘家、徙置秦水上、令捕魚以助糧食、鮮卑東胡種、卽今韃靼東北地、所謂倭人卽北倭也、夷俗善沈沒、捕魚於今亦然矣、夷多種落、曰渡島蝦夷、其在東北海中者曰北蝦夷、曰東蝦夷、其徙居于內地者、北謂越國、東謂陸奧國、曰齶田、（一作能田、今作秋田、）曰渟代、曰櫃養、（一作[illegible]）曰津刈、（一作津輕、又作都加留、）皆東北之別也、宋書曰、毛人五十五國、唐書曰、倭國東北限大山、其外卽毛人、總言其內外種落也、夷種分居內地、其始不可得詳、景行天皇征東、詔曰、東夷犯邊界、以略人民、往古已來未染王化、由是觀之、其後犯內地、蓋由來既久矣、而叛服亦屢矣、齊明天皇四年、遣阿倍臣率船師、伐蝦夷、齶田渟代、合帥迎降、渡島蝦夷亦來會、乃定渟代津輕二郡郡領而還、五年復遣阿倍臣、率齶田渟代津輕膽振鉏等首帥、以伐蝦夷、乃徇其地、進晝泊於後方羊蹄而還、（後方羊蹄、或云之利別之地、今南部之邊之地也、）是歲、秋遣使率陸奧蝦夷以朝于唐、唐書曰、永徽中蝦夷人與蝦

渡島國津輕郡松前　一里三十四町一十八間　根部田　一十九町六間　札前　一十五町五十四間　赤神　一十五町一十二間　雨垂石　六町四十八間　茂草　三十四町五十五間　清部　二十二町五十四間　江郎町　一里三十町　原口、四十一度三十八分、一里二十町三十間　檜山郡小砂子　一里三十四町四十一間　石崎　一里三町二十四間　鹽吹　二十八町三十六間　木野子　二里四町三十間　上國　二里七町三十二間　江指、四十一度五十二分半、二十一町三十九間　泊　一十一町三十九間　田澤　一十三町一十八間　伏木戸　一十六町（至ニアツシヤフ川口一九丁三間）　ウグイガハ　一里九町四十二間　爾志郡乙部　三十一町一十二間　小茂内　九町六間　大茂内　一十九町三十六間　突府　一十五町三十六間　三谷　三十二町五十四間　蚊柱　一里一町四十四間　相沼内　二十六町一十間　泊川　二里四町二十三間　熊石　五里二十町三十七間　クトー　六里七町四十四間　フトロ　二里一十五町三十間　セタナイ　四里一十六町一十八間　スッキ　七里一十四町五十四間　後志國島牧郡シマコマキ（至ニヘニケウ岬一五里一十二丁四十八間）　六里一十九町二十間　壽都郡スッツ　二里一十七町（至ニ山越追分、二里五丁四間）　歌棄郡ウタシナツ　三里二町一十二間　磯屋郡シリベツ　四里三十町一十八間　岩内郡イハナイ　六里一十五町五十四間　古宇郡フルー　一里二十七町五十七間（至ニカムイ岬一七里一十六丁三十三里〇里一間）

誤　積丹郡シャコタン　五里三十二町三十間　美國郡ビクニ　六里二十六町三十八間　余市郡下ヨイチ　九町五間　上ヨイチ　一里二十九町四十二間　忍路郡オシヨロ　五里四町三間（至ニシクトル岬一四里四丁一十八間）　高島郡タカシマ（越レ山至ニホロビー、一十六丁二十六間）　一十三町二十五間　ホロビー　一里六町三十三間　小樽郡ヲタルナイ　九里一十五町一十八間　石狩國石狩郡イシカリ　三里二十九町一十九間　厚田郡ヲシヨロコツ　一十三里二十九町四十三間　トフラシナイ（至トフラシナイ岬三丁五十六間）　五里四十間　天鹽國増毛郡ホロトマリ、四十三度五十一分、四里七町四十

十二間　日高國沙流郡モンベツ、四十二度二十八分、五里三十二町一十八間　新冠郡ニヒカップ、四十二度二十一分、二里二十四町二十五間　靜內郡ウセナイ　一里三十二町三十六間　シブナイ　二里一町　三石郡ミツイシ、四十二度一十三分、九里四町二十一間至ウラカハ五里二十八丁二十一間　ムクチ、四十二度八分、二里已十二町　樣似郡シヤマニ　六里一十八町一十六間　幌泉郡ホロイヅミ　七里一十二町一十七間至エリモ岬三里一十六丁三十九間　シヨーヤ　二里二十六町三十七間　サル、四十二度七分、五里六町三十六間　十勝國廣尾郡ビロト、四十二度一十七分　六里三十三町一十八間　當緣郡タウブチ　六里二十二町　十勝郡ヲコツナイ、四十二度三十九分、七里一十九町一十八間　釧路國白糠郡シヤクベツ、四十二度五十二分、四里八町四十八間　シラヌカ、四十二度五十六分、六里三十二町一十四間　釧路郡クスリ、四十二度五十八分、四里七町二十八間　コンブムイ、四十二度五十八分、五里二十八町一十七間至トーアブ三里二十七丁五十一間　ホンセンホウシ至シリパ岬一里二丁五十七間　五里二十六町一十七間至アツケシトーリタ子五里五丁四十一間　厚岸郡アツケシ、四十三度二分、至ノコベリベツ至カニチヘタ、汎瀬一十二里三丁北極高四十三度一十八分　七里二十四町一十四間　ピハセイ　一十一里三十町二十八間　ラツチン　六里二十町一十四間至イヌ、ウシ、五里一十六丁一間半　根室國根室郡チモロ至ノツシヤム岬七里一十九丁三十三間　九里一十三町五十九間至ウンチトー三里一十九丁八間、從テンチトーロ至フーレントーロ、二里一十六丁二十七間　野付郡ニシベツ、四十三度二十三分、七里二十二町三十二間　コイトイ至ノツケ五里一十丁三十七間、從ノツケ至セフサキ一十六丁、又從ノツケ會所三丁四十五間半　一里一十七町四十三間　標津郡シヘツ　三十二町五十二間　イチヤメル　一里六町四十八間　チウルイ　一里二町　目梨郡コタンヌカ　一里二町三十六間　クンチベツ　三十一町二十七間　ムイ　一十一里九町一十四間　ヲレヨロコツ　東沿海通計二百五十二里三十町五十五間半

從松前西沿海至ホロベツ、

里一町二十四間　泉澤　一里二十六町五十七間　釜谷　三十一町一十二間　三ッ石　一十七町　當別　三十四町一十七間　茂邊地　一里二十二町三十三間　富川　五町一十八間　三谷　至タキノ澤一里四十八間　一十八町六間　龜田郡邊切地　至野崎一里九丁一十一間　四町　有川　至龜田濱二里五丁三十六間、從龜田濱至龜田、八丁二十九間、從龜田至上山、一里一丁五十九間、從上山至森川、一里七丁二十一間、從赤川至ナカツクラ、三十二丁二十四間、又從龜田濱至大森濱、二十三丁一十六間、從大森濱至尻澤部濱、經測五丁三十間、又從大森濱至箱館地藏町五丁四十一間、北極高四十一度四十七分、從地藏町（町下恐脱至字）辨天岬一十五丁一十八間、從岬至尻澤部、一里二十一町四十七間從尻澤部至尻澤部濱、一十四丁三十六間、從尻澤部濱至タカモリ、三十三丁三十六間、　二里四十八間　大野、四十一度五十三分、一十二町三十六間　一ノ渡　七里一十町九間　茅部郡ヤナギハラ　一十六町五十六間　鷲木、四十二度五分、三里一十八町三十二間　落部　一里一十一町一十二間　野田追　一里九町二十六間　臉

振國山越郡ヤムクシナイ、四十二度一十四分、五里一十五町三十間　ホロナイ　三里二十町四十二間　ヲシヤマンヘ、四十二度三十一分、循山至タルマツナイ、五里一十五丁四十間、從タルマツナイ至チメシユツ、三里一十七丁四十四間、六里五町三十間　虻田郡レブンゲ　一里二町五十八間　ワブクシ　至タアタケシ岬三丁一十八間　四里五町五十六間　アブタ、四十二度三十一分、一十二町四十八間　有珠郡ウズ　一十三町一十九間　マクコタン　至ウタハチ岩四丁二十六間　五里一十六町五十六間　室蘭郡モロラン、四十二度二十二分、二里一十八町四十六間　チフタランナイ　至ホコイ三十二丁五十四間、從ホコイ至エントモ二里六丁四十六間、從エントモ至ホンエントモ、七丁一十二間、又從ホコイ至チイナウシ、一十四丁四十二間、　二十二町三十六間　ベシボタ　至トカリイシ十六丁一間　一里六間　幌別郡ワシベツ川岸　沿川至川口、四丁三十六間　五町三十六間　ワシベツ　至コトヽイ九丁二十七間　一里五町一十八間　ホロベツ、四十二度二十三分、七里一、十五町五十一間　白老郡シラヲイ、四十二度三十分、九里三十三町一十六間　勇拂郡ユウブツ、四十二度三十六分、五町二十四間　同追分　沿川至ヒ、イムコ、四里二十五丁四十四間、從ヒ、イムコ至千歳川、一里二十九丁九間、從千歳川至マ、ツ一十六丁、又從千歳川至チサツ川岸、二里七丁六間、從川岸至シコツ、一十七町、又從ラサツ川岸至イベツプト、一十一里一十九丁五十二間、從イベツフト沿本川至ホロモイ、四里一十二丁四十八間、又從イベツプト至イシカリ、一十一里一十二丁五十六間半、　八里二十二町四

道路

里、

〔蝦夷隨筆二〕松前

其地山嶽重疊として、大河多し、則北は韃靼に隣り、東は大海、南は津輕、西は海中島々多し、國の形は南北に長く、凡四百八十里なり、東西は狹くして、三百六十里といへり、一國の大ひ成事、察して知るべし、

〔日本地誌提要七十六北海道〕形勢　渡島、南方陸奥ノ北郡ニ向ヒ、其狀頭ヲ伸ベ頤ヲ張ルガ如ク、宛折シテ東北ニ趨キ、膽振、後志トナリ、石狩餐脊ノ要ニ直リ、天鹽、北見、日高、十勝、南北ニ擁シテ、左右翼ノ如ク、釧路其脅トナリ、根室ノ地岬角左右相望テ之ガ股トナリ、千島其後ニ曳テ之ガ尾トナル、石狩十勝ノ二高嶽、全道ノ中央ニ對峙シテ、支脈四布、諸大川大率源ヲ此ニ發シ、衆水ノ分流スル者、西ハ石狩川、西北ハ天鹽川、北ハ常呂川、南ハ大津川トナス、土人漁獵ヲ業トシ、耕稼ヲ知ラズ、石狩十勝等ノ原野曠漠、土壤肥沃ト雖モ、産業未ダ開ケズ、風俗鄙朴、言語衣服皆内地ト異ナリ、氣候冱寒、西方諸州稍暖ナリ、札幌極暑八拾六度、極寒貳拾度、

〔日本實測錄十三〕北海道（從二陸奥國津輕郡三厩一至二松前一、渡海直徑一十三里、）

從松前東沿海至ヲシヨロコツ、

渡島國津輕郡松前、四十一度二十八分半、　一十九町五間（至三ツ川一三丁四十二間）　及部　一十二町　根森　三町一十八間　大澤　一十五町三十六間　荒谷　一十五町四十八間　炭燒澤　一里二十九町五十四間（至峠一十一丁）　福島郡福島　二十町三十間　吉岡　一十四町二十四間　宮ノ歌　一十町四十八間　白府　一十五町四十八間　福島、四十一度三十分（至大ノ澤一三丁大間、至ヲトノ澤一十三丁）　七里四町五十五間半　知内　四十一度三十七分、　一十九町五十八間　ヲムナイ（至三十一丁峠、至二十五丁、二十一間）　一里三十三町二十四間　上磯郡木古内　三十町二十四間　札苅　一

地勢

ベ島　アバシリ　クナシリ岩　ナンチイン　シコタン　イシヨシラ　辨天　ルイカ　カサルイカ　イタシニベル礁　トマツプ岩　モイルリ岩　タテ岩（チン子イルリ）　白岩　パイケシユイ岩　モヨモシリ　フシワタラ岩　ワタラウシチロツプ岩　モシリカ　ムイ岩　ホロピ岩

サカツキヲイ岩　通計五十九島

〔和漢三才圖會六十四蝦夷島〕蝦夷島（エゾ）（按服、東夷、日高見國、毛人國、）

按、蝦夷在日本東北海中島也、其地南北長、而北隣韃靼地、東乃大洋海也、山嶽多嶮岨、不能陸行、又有大河、名石加利河、水甚急飛石、不可以得渉行、船亦不得濟行、故未知其河源幾里程、

〔蝦夷志〕蝦夷地圖說

蝦夷在東北大海中、依山島爲國、地多山險、僅通禽鹿徑、夷人輕捷驍健、且善沒水、行不見阻、此間之人往來所由、唯其水路而已、故夷地幅員廣狹、不可得詳、我東北海岸、距蝦夷南界、不甚相遠、而其間海潮駛急、（蝦夷東南地角、突然而出者、名曰シウカミ崎、相距南部地方、只隔一衣帶水而已、）自津輕之地小泊、發舟北行八里、而到松前、亦由御厩津西北行十四里、而到松前、（四時此路常通）松前者夷地之南界也、（國史所謂渡島津輕津者蓋此）絲是而北、亦皆水行東路、則乍東乍北、順風約五晝夜、可抵其東港、（地名曰ノツサフ）去此亦東北行、順風約六晝夜、可抵其北港、（地名曰ソウヤ）其間沿海可泊船之處凡十二、西路則乍西乍北、順風約五晝夜、可抵其北港、（卽ソウヤノ地方ナリ）其間沿海可泊船之處凡十七、其北渡海七里、復有國、皆夷種、其地幅員略與南同、蓋其西北卽韃靼海也、（俗以爲奥蝦夷、其地總稱カラト島、）東北相離十三里、五島相錯而在于海中、又其東北海中有三十二國、亦皆夷種云、地方遼絕、疑不能明、（東北海島凡三十七、總稱クルミ、又名曰ラツコ島、詳見于後、）西北絲海有四島、相離近者七里、其遠者十五里許、（西南一島總名曰ヘウニ、其地一島名曰レンリ、又其北名曰レソシリ、）在此蝦夷地境所盡也、

〔蝦夷拾遺地理元〕島形、蜻蛉ニ化スル水蠆ノ曲ルルニ似テ、（略）〇註 首ノ突然ト出タル如クノ地、白紙崎津輕部三馬屋ノ渡ヨリ凡五六里、背ハ花ソウヤノ界ニ盡キ、尾ハ丑寅ニ添テ終ヲシレトコト云、都テ周廻七百餘

宗谷は蝦夷地之極奥にて、三國通覽には、松前より四百里と記したり、其外松前人々に聞にも、區區なる答にて、貳百里或は貳百五十里などいふて、決定したる事なく、如此里數定かならざるも、獵場計にて、田畑といふなき事故、境も等閑にて、里數は人々の目分量にて言事なれば、取用ひがたし、殊に蝦夷地場所々々持場廣く、宗谷場所の内も、南の方ナシヲ境イキコマナイと言所より、内場所の内、北の方シレドコといふ所迄、凡百十四里半あり、此里數之内は、みな宗谷の持場也、斯持場廣き事故、手行屆かず、里數を改る事もなく、中勘相當の里數凡をいふ事也、此度松前より出帆せしより、船中にて空眼見積をも樣し、其場所々々へ數往來なしたるものに委しく聞糺し、野帳に付置、宗谷會所迄之道法、松前より行程凡百七十七里と記し得たり、北極出地松前は四十二度、宗谷は四十六度二十三分相減じて、差四度二十三分也、天の壹度は地球皮にては二十九里半強として里數を積り見るに、松前より曾谷までは、直徑百二十五里餘なり、曾谷は松前より正北に當れ共、路程屈曲あれば百七十七里と記したるも、遠く失せじと思ふ也、

〔蝦夷島記〕一蝦夷島の廻り、船にて乘廻り候へば三百里程有之よし、此島南部津輕に出向候、此島の日本より船著を松前と中候、

〔北海道志地理二〕疆域

北海道ハ北緯四十一度二十五分ヨリ起リ、四十六度廿三分ニ至リ、西經零度一十五分（奥尻島）ニ起リ、東經一十度廿三分ニ至ル、東ハ千島國ニ至リ、群島散布シテ露領東察加ニ對シ、北ハ北見國宗谷海峽ヲ隔テ、露領薩哈嗹（樺太）ニ對シ、南ハ渡島津輕海峽ヲ隔テ陸奥國ニ對シ、西ハ海ヲ以テ限リ、遙ニ滿州地方ニ向フ、東西百二十五里、（極東端根室國納紗布岬ヨリ、極西端後志國島牧郡持田岬ニ至ル、）東北凡百十九里、（極北端北見國宗谷岬ヨリ、極南端渡島國松前郡白神岬ニ至ル、）周圍六百五十里、（千島州並島嶼ヲ除ク、下同、）面積五千八百六十方里、（此地東西狹ク、南北長シ、東西凡四五十里ヨリ二三十里ノ所アリ、南北凡百四五十里ヨリ二百里許ニ及ブ、幅員ノ大九州ニ比スレバ之ニ過ギ、四國ヲ合スレバ少ク及バズト云、）島嶼西部

タホツナイ 四十二度六十九分 同二十三分
シヤラペツ 四十二度五十二分 同二十四分
シラスカ 四十二度五十六分 同二十四分
タスリ 四十二度五十八分 同二十六分
コンラムイ 四十二度五十八分 同二十六分
センホウチ 四十二度五十七分 同二十七分
アツケシ 四十三度〇二分 同二十七分
アンペツ 四十三度一十六分 同二十八分
ニシペツ 四十三度二十三分 同二十八分〔〇中略〕

寛政十二年庚申十二月 伊能勘解由謹圖

〔寛政俗話〕一天度之事

今年〔〇寛政十二年〕蝦夷地え越く事、當春二月急々に事極、支度も早々取調べたる事故、北極出地測量の儀器も師傅の如くためすには甚手重く、儀器急ぐには出來兼る故、予〔〇中原正業〕が新案の儀器を考へ作らしめ、周髀儀と名付、是を持参せしめ、津輕三厩より、松前蝦夷地の端ソウヤ場所迄の北極出地度を測り得たる處、左の如し、

奥州津輕三厩 四十二度弱 同松前 四十二度 同松前石崎村〔松前より十一里〕 四十二度三十〇分 西蝦夷地セキナイ〔同二十八里半〕 四十二度七十三分 同カイジ、〔同四十六里半〕 四十三度四十二分 同フルウミ内「イスルシ」 四十三度半 同クニシカ〔同百四十四里〕 四十五度弱 同トマヽイ〔同百二十里〕 四十五度 同クシヲ 四十五度強 同ソウヤ〔同百七十七里〕 四十六度二十三分

大野	四十一度五十一分	同七分
鷲木	四十二度〇五分	同六分
ヤマコシナイ	四十二度一十四分	同五分
ヨンヤマンヘ	四十二度三十一分	同五分
ノツンケ	四十二度三十四分	同六分
アブタ	四十二度三十一分	同七分
モロチン	四十二度二十二分	同八分
エトモ	四十二度二十一分半	同九分
ホロベツ	四十二度二十三分	同九分
シラヲイ	四十二度三十〇分	同十二分
ユフブツ	四十二度三十六分	同一十三分
モンヘツ	四十二度二十八分	同一十五分
ニイカツブ	四十二度二十一分	同一十七分
ミツイシ	四十二度一十三分	同一十九分
ムタチ	四十二度〇八分	同一十九分
ヤシマニ	四十一度〇七分	同二十一分
ホロイツミ	四十一度〇三分未審	同二十三分
サルヽ	四十二度〇七分	同二十三分
ヒロウ	四十二度一十七分	同二十三分
トフツイ	四十二度三十一分	同二十三分

越之地亦得此名、猶安房出自阿波然耳、

〔地勢提要 十〕各國經緯度（附里程）

蝦夷

松前、極高四十一度二十八分半、經度東四度四十四分半、從陸奥三厩（渡海直徑）一十里、二百二十八里三十二町四間（從東京都）

箱館、極高四十一度四十七分、經度東五度二十三分、從松前（沿海至鷲島、自同所沿道、至シリウチヌ、沿海）二十六里九町、二百五十五里五町六間半（從東京都）

江指、極高四十一度五十二分半、經度東四度四十九分半、從松前（西沿海）一十六里二十六町半、二百四十五里二十二町二十五間（從東京都）

ソーヤ、極高四十五度二十八分半、經度東七度二分、從松前（同上）一百九十七里二十六町、四百二十六里二十二町五間半（從東京都）

アツケシ、極高四十三度二分、經度東九度五十分、從松前（東沿海至有川、自同所沿道、至ヤナキフラヌ、沿海）一百九十一里三十二町半、四百二十里二十八町四十二間半（從東京都）

〔日本經緯度實測〕東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇（中略）　松前　箱館　東五度〇〇分〇〇秒

〔東蝦夷測量記〕東都以北及蝦夷地北極出地度方位里測量

地名	北極出地六十分算	自京都方位（一支三十分〇中略）
松前	四十二度二十八分半	同子〇三分
鷲島	四十一度三十〇分	同四分
知内	四十一度三十七分	同六分
箱館	四十一度四十七分	同八分

〔比古婆衣 五〕えみし

まづ日本書紀神武卷戊午年十月に、大倭の國見丘にて、八十梟帥を誅たまひ、また道臣命に勅して、其餘黨をうたせ給へる時、皇軍密旨を奉てうたへる歌二首の中に、愛瀰詩烏、毗嚢利毛々那比苦、比苦破易倍廼毛、多牟伽比毛勢儒と、みえたる愛瀰詩は、八十梟帥等をさしていへる稱なり、○中略 さてまたえぞが島より、陸奥に渡り來て暴行ぶる黨類をも、愛瀰詩といへるなるべし、しかるに大倭なるは、そのほかにありけむもはやくなごりなく滅亡せたりしかば、おのづから陸奥わたりなるをのみ呼ぶ名となりて、やがてそれが本郷の號にもおふせて、えみしの國と稱ふ事とはなりしなるべし、但し上代には、その愛瀰詩の、本郷あることをばしらで、たゞ其種類を然呼びてありつるが、後にその本郷の知られたるなるべし、かくてそのえみしを、蝦夷とかくは、古事記景行段に、はじめて見えたり、そははやくより蝦字の訓を借りて、夷字に加へて、書くこと、定められたりつるものなるべし、

〔野史 二百八十八 外國〕蝦夷○中略

北陸杞憂云、松前之地、在西蝦夷、即古所謂毛人國、稱惟古昔奧羽之土、津輕、秋田、古作齶田野代、古作渟代概稱蝦人、山海輿地圖作野作、蓋訛言也今所謂蝦夷、古謂之島蝦夷、日本書紀作蝦夷、宮所渡海來之夷人也、按文獻通考、其人鬚長四尺、其稱蝦者蓋取鬚蝦之義

又按、八紘澤史云、則有蝦人國、即其蝦國、不與此同、

〔日本書紀 神代一〕陰陽始遘合爲夫婦、○中略 廼生大日本日本此云耶麻騰、下皆效此、豐秋津洲、○中略 次生越洲。

〔日本書紀通證 神代二〕今按、夫水繞其外謂之洲、則八洲各應別島、恐不應分陸續之地爲二洲也、今也越洲既接秋津洲中、且以鹽角鹿坂爲名、倶爲可疑、或謂、北越地方、山嶽重阻、其初難通、故立堺限、亦得此名也、蓋蝦夷初見景行紀、而齊明紀謂之渡島、此島自古屬我邦、不爲外國、西土諸籍所載亦然、或內附、或背叛、固其常、而紀中動並稱隼人蝦夷、蓋謂國之西戎東夷也、因是觀之、北陸五國、則固爲秋津洲中、此所謂越洲、疑今毛人島歟、渡島之名義亦相近、蓋奧羽三越、其所往來以取用、故後世三

名稱

那、棄取ノ五郡等總テ八十六郡ヲ置ケリ、後開拓使ヲ廢シ、札幌、箱館、根室ノ三縣ヲ置キシガ、更ニ北海道廳ヲ建テ、之ヲ治セシム、而シテ蝦夷ノ事ハ、尙ホ外交部露西亞篇人部蝦夷篇等ニ載セタレバ、宜シク參考スベシ、

樺太州ハ、カラフトシウト云フ、蝦夷ノ一部ニシテ、本ト皇國ノ版圖ナリシガ、安政元年ノ通好條約ニ於テ、遂ニ兩國雜領ノ地トナル、明治八年ニ至リ、樺太全州ヲ露國ニ讓與シ、其代トシテ、我國ハ千島群島ノウルツプ島以下十八島ヲ得タリ、同三十八年九月、日露講和條約ニヨリ、露國ハ樺太州北緯五十度以南ヲ我國ニ割讓ス、是ニ於テ樺太州ノ半部ハ、復タ我版圖ニ歸セリ、

〔下學集 一 天地〕蝦夷島（エゾガシマ）

〔饅頭屋本節用集 天地〕夷千島（エゾガチジマ）

〔書言字考節用集 二 乾坤〕蝦夷（エミシ）（エゾ） 附東 毛人國

〔袖中抄 二十〕どくきのやちしまのえぞ

あさましやちしまのえぞのつくるなるどくきのやこそひまはもるなれ

顯昭云、（中略）えびすのおほかればちしまのえぞとぞ云也、

〔倭訓栞 前編 五〕えぞ　毛人島をいへり、明人輿地の圖說に野作（エゾ）と書せるは、音をとれり、えぞの千島といふは、毛人島に沿たる多くの小島を指ていへり、毛人は宋書に見え、續日本紀に蝦狄と見え、蝦夷は唐書に見えたり、兩山墨談には交易國ともいへり、（中略）周廻凡そ八百里といふ、男は總身毛生て熊の如し、女は色白く、共に耳がねをせり、今津輕南部にも蝦夷人あり、是往古よりといへば、日本紀に書せる如し、（中略）日本人よりえぞをあひの國といふ、日本と唐山との間の者也、えぞといへば、蝦夷人まよもないかたなどいふて怒る、まよもないは、いやなどいふ事也、

古事類苑

地部三十五

蝦夷 樺太州併入

蝦夷ハ、古ク、エミシト稱シ、後ニ、エゾト謂ヘリ、本土ノ北邊ニ在リテ、南ハ津輕海峽ヲ隔テ、陸奧國ニ對シ、北ハ宗谷海峽ヲ隔テ、樺太州ニ對シ、千島列島ハ其東北ニ走リテ、露領東察加ニ連ル、東西凡ソ百二十五里、南北凡ソ百十九里、其地勢ハ、石狩十勝ノ二嶽、全島ノ中央ニ對峙シ、支脈四布、諸大川率ネ源ヲ此ニ發セリ、原野曠漠、土壤頗ル肥沃ナリト雖モ、土人唯漁獵ヲ業トシ、曾テ耕稼ヲ知ラズ、風俗、言語、皆內地人ト異ナリ、

此地、固ト國郡ノ名ナシ、東蝦夷、西蝦夷、北蝦夷等ニ大別シ、所々部落ノ稱アリ、明治維新ノ後、箱館府ヲ置キシガ、後廢シテ開拓使ヲ置キ、蝦夷ヲ改メテ北海道ト稱シ、分テ渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十勝、釧路、根室、千島ノ十一國トシ、渡島國ニ、龜田、茅部、上磯、福島、津輕、檜山、爾志ノ七郡、後志國ニ、久遠、奧尻、太櫓、瀨棚、島牧、壽都、歌棄、磯屋、岩內、古宇、積丹、美國、古平、余市、忍路、高島、小樽ノ十七郡、石狩國ニ、石狩、札幌、夕張、樺戶、空知、雨龍、上川、厚田、濱益ノ九郡、天鹽國ニ、增毛、留萌、苫前、天鹽、中川、上川ノ六郡、北見國ニ、宗谷、利尻、禮文、枝幸、紋別、常呂、網走、斜里ノ八郡、膽振國ニ、山越、虻田、有珠、室蘭、幌別、白老、勇拂、千歲ノ八郡、日高國ニ、沙流、新冠、靜內、三石、浦河、樣似、幌泉ノ七郡、十勝國ニ、廣尾、當緣、大津、中川、河東、河西、十勝ノ七郡、釧路國ニ、白糠、足寄、釧路、阿寒、網尻川上、厚岸ノ七郡、根室國ニ、花咲、根室、野付、標津、目梨ノ五郡、千島國ニ、國後、擇捉、振別、紗

及壹岐、對馬等要害之處、可置船一百隻以上以備不虞、而今無船可用、交關機要、不安一也、

（續日本紀　二十八　稱德）神護景雲元年九月戊申朔、右大臣從二位吉備朝臣眞備獻對馬島墾田三町一段、陸田五町二段、雜穀二万束、以爲島儲、

高無之　對馬國

諸國人數調（弘化三丙午年）〇中略
内 八千百三拾四人 男　五千七百貳拾八人 女 〇中略
皆私領
一人數壹万六千九百四人
内 八千六百四拾八人 男　八千貳百五拾六人 女

〔津島紀事　一　續體〕むかしの戸數は聞し事なし、本州今の家數五千六百餘軒、人數二万六千六百餘人あり、

名所

〇按ズルニ、對馬國ノ風俗ハ、壹岐國篇風俗條ヲ參照スベシ、

〔日本鹿子　十四〕同國〇對馬名所之部

淺茅山　淺茅の里といふ有、淺茅の浦といふも此所也、西より東へ入海有、

竹敷の浦　竹の浦と云も此所也、入海有、

黃葉山（キハヤマ）　府中の近所、海にある山也、

〔萬葉集　十五〕竹敷浦船泊之時、各陳心緒作歌十八首〇中略

多可之伎能（タカシキノ）、母美知乎見禮婆（モミヂヲミレバ）、和藝毛故我（ワギモコガ）、麻多牟等伊比之（マタムトイヒシ）、等伎曾伎爾家流（トキソキニケル）、

雑載

〔朝野群載　三〕對馬貢銀記　作者江納言

欽明天皇之代、佛法始渡吾土、此島有一比丘尼、以吳音傳之、因玆日域經論、皆用此音、故謂之對馬音、

〔日本書紀　二十七　天智〕三年、是歲於對馬島壹岐島筑紫國等置防與烽、　六年十一月、是月築〇中略對馬國金田城、

〔續日本紀　十一　聖武〕天平四年五月乙丑、對馬島司、例給年粮、秩滿之日、咽傳常粮、比還本貫食粮交絶、〇中略仍請給之、

〔續日本紀　二十二　淳仁〕天平寶字三、三月庚寅、太宰府言、府官所見、方有不安者四、據警固式、於博多大津、

准米二百四十六斛七斗
見米二百廿五斛　百廿五斛防人例人功料　百斛正稅交易貢銀直料
壹岐島陸拾斛玖斗
右光經、謹撿故實、當島年貢銀者、是被催渡彼七ケ國年粮米、下行採丁等、或致採銀之勤、或所交易進上也、此外又島內恒例佛神事有其數、皆以年粮米內支配件用途、且奉祈天長地久國家泰平之由、且所祈請口內安穩貢銀採得之旨也、而近代管國吏、各背先例、猥忽進濟、仍代々島司申下官符宣旨、令加催促之間、雖成渡一旦之廳宣、更無始終之所濟、因茲任廳不致貢銀之營、雜掌共所濟之計、然而觀光任被催渡管七ケ國正稅交易米六百斛九斗可令交易貢銀三百兩之旨、經奏聞之時、被成下依請官符之間、致沙汰經公用云云、從往古被定置七ケ國年粮米、本數三千五百餘斛也、當島司貢盛俊成能盛親光等、時經上奏之日、被召下七ケ國廳宣、以官使催渡當島、可取返抄之由、悉宜下了、望請官裁、早任彼等例、被成下官符之後、各召給廳宣、正稅已下任色數、可寬濟之由、欲被宣下者、
一請被停止他國住人等押渡當島恣犯用魚貝海藻事、
右光經謹撿案內、當島者本自無一步一枝之田桑、只以海底之貝藻、僅備京庫之調庸、而他國住人等渡來、恣犯用之條、理可然哉、望請官裁、早可停止他國住人等犯用之由、欲被宣下者、〇中略
以前之條事、任代々之例、爲被成下依請官符、勒在狀謹解、
弘安十年七月二日　從五位下行對馬守源朝臣光經

人口

〔官中秘策五〕對馬國　二郡〇中略
一人數壹万四千八百人　內七千六百四拾人男　七千百六拾人女
〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年〇中略
對馬國
一人數壹万三千八百六拾貳人

高無之　對馬國

官續文○中略

從五位下行對馬守源朝臣光經解申請官裁事

請特蒙官裁因准去仁安治承建仁三箇年例被成下官符雜事參箇條子細狀

一請任色數仰管漆箇國被催渡當島年粮米幷正稅交易貢銀直防人功米等事

筑前國伍佰陸拾壹斛

准米二百廿一斛

見米三百四拾斛　二百四十斛防人拾陸人功料　百斛正稅交易貢銀直料

筑後國伍佰肆拾伍斛

准米二百廿斛

見米三百廿五斛　二百廿五斛防人拾陸人功料　百斛正稅交易貢銀直料

肥前國伍佰肆拾伍斛玖斗

准米二百廿斛九斗

見米三百廿五斛　二百廿五斛防人拾伍人功料　百斛正稅交易貢銀直料

肥後國捌佰肆拾漆斛玖斗

准米二百八十二斛九斗

見米五百六十五斛　四百六十斛防人參拾壹人功料　百斛正稅交易貢銀直料

豐前國肆佰漆拾壹斛漆斗

准米二百四十六斛七斗

見米二百廿五斛　百廿五斛防人捌人功料　百斛正稅交易貢銀直料

豐後國肆佰漆拾壹斛漆斗

出擧稻

(延喜式主税二十六)諸國出擧正税公廨雜稻〈中略〉
對馬島、正税三千九百廿束、

(倭名類聚抄國郡五)對馬島　管二〈中略〉本稻三千九百二十束

(續日本紀聖武十六)天平十七年十月戊子、論定諸國出擧正税、毎國有數、但多褹對馬兩島者並不入限、

國產 貢銀

(延喜式主計二十四)對馬島〈行程四日、海路〉
調、銀、

(毛吹草三)對馬
椎〈シヒ〉　同茸　コブ苔　青砥〈仕立研料用之〉　鍋熨斗　此外高麗之珍物
○按ズルニ、和漢三才圖會ニハ、以上ノ外ニ石、鉛等ヲ擧ゲタリ、

(朝野群載三)對馬貢銀記　作者江納言
全無田畝、唯耕白田、或置諸租税、至此島、以大豆爲正税、島中珍貨充溢白銀、鉛、錫、眞珠、金漆之類、長爲朝貢、

(日本書紀二十九天武)三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、即貢上、由是大國授小錦下位、凡銀有倭國、初出于此時、故悉奉諸神祇、亦周賜小錦以上大夫等、

(續日本紀文武一)二年十二月辛卯、令對馬島冶金鑛、

(續日本紀文武二)大寶元年三月甲午、對馬島貢金、建元爲大寶元年、　八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬島、冶成黃金、

(續日本紀聖武十三)天平十一年三月癸丑、詔曰、〈中略〉得太宰少貳從五位下多治比眞人伯等所進對馬島目正八位上養德馬飼連乙麻呂所獲神馬、青身白髮尾、謹檢符瑞圖曰、青馬白髮尾者神馬也、〈下略〉

(勘仲記)弘安十年七月十三日、內大臣殿令寄障給、〈鳥〉其後人々寄障、〈中略〉

〔伊呂波字類抄国郡部〕對馬島　本田六百二十町

〔運歩色葉集諸國之郡名〕對馬二郡(中略)田數五百五十九町

〔津島紀事一統體〕豊臣秀吉公、諸國の石高を定め給ふに、壹岐までは石高を定られて、本州(○對馬)の高は定められず、是に依て公儀御代替の我が君に下されける御判物に、對馬國一圓とありて穀高をのせ給はず、今吾州の出來穂稲三千石、舂て千五百石、麥二万三千七百石餘、精麥一万六千六百石、都合一万八千一百石なり、武用辨略に、對馬の高五千石とし、廣益節用集に、對馬の高二万五千石とし、城主記に一万千八百石餘と記せるは、ともに聞傳の誤なり、本州の農業は、他國の如く精く詳ならずして、田作の仕かた疎末なりし故に、たゞ原野の地ひくなる所、うるほひある所に稲を種へ、水を引て地をひたす所は、僅かに數所あり、古筑紫の稲二千石を以て國司防禦の人々の粮米に宛行れき、(○中略)筑前の水田三十町を以て上縣下縣の兩郡司にあてらる、(○中略)又稲を種るの少きゆへなり、三代實錄に、對馬島例格の大豆百石、租地子の穀百石を以て、銀山を堀るの宛行とせらるの事を載せらる、(○中略)租地子の穀は稲なり、續日本紀に、神護景雲元年丁未九月朔日、空に五色の雲あり右大臣從二位吉備の朝臣眞備對馬島の田三町一段、畠五町二段、雜穀二万束を獻りて島の儲へとなすとあり、雜穀は粟蕎麥をいふなり、元祿八年定る所畠木庭の秋、穀粟三千三百石、蕎麥八千三百石、大豆四千三百石、小豆八百石、都合一万七千七百石なり、續日本紀に云、天平十七年乙酉冬十月、諸國出擧の正稅を論じ定め、國毎に數あり、たゞ多褹對馬の兩島は幷に其數に入らず、

〔和漢三才圖會八十對馬〕二郡　高二万五千石

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調(○中略)

對馬國皆私領　一無高

郷

(日本書紀顯宗十五)三年四月庚申、日神著人謂阿閉臣事代曰、以磐余田獻我祖高皇産靈、事代便奏、依神乞獻田十四町、對馬下縣直侍祠、

(日本後紀嵯峨二十二)弘仁三年正月甲子、太宰府去十二月廿八日奏云、對馬島言、今月六日、新羅船三艘浮口西海、俄而一艘之船著於下縣郡佐須浦、船中有十人、言語不通、消息難知、○中略遂知賊船、

(三代實錄清和十)貞觀七年三月廿二日癸卯、以筑前國水田三十町、充對馬島上縣下縣兩郡司、統領職田、

(三代實錄清和十一)貞觀七年八月十五日癸亥、太宰府言、對馬島銀穴在下縣郡、自高山底穿鑿巖、堀入四十許丈、白晝執炬而得入、

(三代實錄清和十七)貞觀十二年二月十二日甲午、先是太宰府言、對馬島下縣郡人卜部乙屎麻呂、爲捕鸕鷀鳥、向新羅境、乙屎麻呂爲新羅國所執、縛囚禁于獄、乙屎麻呂見彼國挽運材木構作大船、擊鼓吹角、簡士習兵、乙屎麻呂竊問防援人、答曰、爲伐取對馬島也、乙屎麻呂脫禁出獄、纔得逃歸、

(倭名類聚抄九對馬島)上縣郡　賀志　鷄知　玉調　豆酘

下縣郡　伊奈　向日　久須　三根　佐護

(津島紀事一)郡郷

古國を分ッて郡とし、郡を分て郷とし、郷を分ちて村とす、○注略和名抄に載せられしは、郡名二所、郷名九所なり、今郷名八ヶ所とす、左の如し、○注略

上縣郡四郷　豐崎(度與左護)　十七ヶ村(枝村壹)　佐須(讀の字の如し)　八ヶ村(枝里四)　伊奈(上ニ同)

十六ヶ村(枝村枝里壹)　三根(美禰)　十ヶ村(枝村一枝里三)

下縣郡四郷　仁位(讀の字ごとし)　十八ヶ村(枝村四枝里一)　與良(上ニ同じ)　三十ヶ村(枝村四)　佐須(上ニ同)

九ヶ村(枝村一枝里五)　豆酘　三ヶ村

上縣郡 下縣郡

上縣(カムツアガタ)	同	同	同	同(カンアガタ)	同	同	同(カミツアガタ)(カムフ)	同
下縣	同	同	同	同(シモアガタ)	同	同	同(シモアガタ)(シモフ)	同
管二	同	二郡		同	同	同	同	同

〔津島紀事一續地〕上縣の下文にかんがたと訓を寄せるは誤れるなり、かむつしもつの音によりて、字もまた上ッ津下ッ津に作り、上縣郡を上ッ津郡といひ、下縣郡を下ッ津郡といふ、古き文に上縣下縣など、しるせる時は、上縣郡下縣郡としるさずして、上縣何郡下縣何郡としるす、上ッ津下ッ津としるす時は、上ッ津郡下ッ津郡としるし、縣の字を省きて郡の字をかゝげたり、ある人のいへるは、縣と郡と通用す、大小の違ひはあれど郡は同様なりしゆへならん、又本州の郡の名に縣といふ名を用ひしは、上代對馬縣といひしその縣の號を傳へしものならん、略○註中比以來津を略して加美阿家多、志毛阿我多といふ、注書に記せる所も皆同じ、民俗その訓をついで、下縣をしも我多といふ、阿我多の阿を略して我多と讀ふるは、河內國の大縣、美濃國の山縣、信濃國の小縣、安藝國の山縣の類ひの如くなれど、されども本州の下縣は、ひとり此類ひにあらず、しかるに民俗がたととなふるものは稍略しぬるなり、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年二月庚辰、對馬島上縣郡人高橋連波自米女、夫亡之後、誓不改志、其父尊亦死、結廬墓側、毎日齋食、孝義之至、有感行路、表其門閭、復租終身、

〔日本後紀十二桓武〕延曆二十四年六月乙巳、遣唐使第一船、到泊對馬島下縣郡、

ス、既ニシテ縣トナシ、又之ヲ廢シ、長崎縣ヨリ兼治ス、

國府

〔先代舊事本紀 國造 十〕津島縣直
橿原朝 武○神 高魂尊五世孫、建彌己己命改爲直、
〔日本書紀 天武 二十九〕三年三月丙辰、對馬國司守忍海造大國言、銀始出于當國、
〔倭名類聚抄 國郡 五〕對馬島 嶋○中 下縣、國府
〔津島紀事 陸處 一〕國府 和名類聚抄 府中 日本分形圖
府の有所は、下縣郡與良鄕の東南なり、此故に和名抄に、下縣の國府と見へたり、海東記に古于に作り、國府一に古于と讀めばなり、圖書編登壇必究に歌に作る、俗に府中といひ、又府内と云、舊き文書に國府を與良と記せると有、是與良は府の本號なればなり、往古天日神命、又の名は天照魂命と云、津島縣の主と成り給ひし時は、小船越を府とせられ、建彌己々命は豆酘を府とせられ、雷大臣命は始は豆酘に居給ひて、後加志に移給ひ、住居の地一所ならず、

郡

〔倭名類聚抄 國郡 五〕對馬島 管二○中 上縣 加無津河加多 下縣 國府
〔延喜式 民部 二十二〕對馬島 下、管 上縣 カムツアガタ 下縣 シモツアガタ 右爲遠國、
〔皇國郡名志〕對馬國 二郡
上縣 カミツアガタ ●豐浦 ●大津 ●鹿浦 ●島 ●鰐浦 ●佐須奈 北ノ方
下縣 府中 ●九鬼崎 ●佐須 ●大浦 ●シタリ 南ノ方
○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、
〔郡名異同一覽〕對馬

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄕帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制

〔坂時二十五丁六間〕志多賀村、三十四度二十八分半、二里一十町九間　小鹿村　二十七町三十一間〔[illegible]〕一十八丁四十六間〕　一重村坂口原　三町一間〔至海岸渡分二町一十五間〕　一重村、三十四度三十一分、一十町二十四間　峯見村　二十二町一十一間　琴村峯見坂　二里六町二十間〔至針尾川口三十六間半、從川口至泉崎一里九十丁三十間〕、舟志村、三十四度三十六分半、一十九町一十六間〔至小增浦一十三丁〕　大增村入道浦　一十四町一十八間半〔至立目浦一十丁三十四間、至中崎二十丁二十四間、從立目至濱二〕　濱久須村立目浦　一十四町三十一間〔至泉一丁、三十間、從泉至本郷鰐浦一丁二十九間半〕、同牟理屋　三十五町二十八間半　比田勝村、三十四度三十九分半、二町一十八間　同比田勝磯　一町三十九間　同小平大浦　二十九町四十七間半　泉村　二十一町四十三間半　豐村本川岸　一十三町二十八間半　同元越〔從仁位村至豐村〕、街道、通計一十四里三十四町九間半、

〔日本國郡沿革考 三 西海道〕對馬　古作津島〔古事記　對馬之字、始見魏志、是漢人以邪人之音填下者、當時未發、邪作對馬、至于後世、從之爲國名、北史作都斯麻、〕

下縣、管二郡、百四十村、

上縣　六十五村　下縣　七十五村 古國府

〔日本地誌提要 七十四 對馬〕沿革　古ヘ國府ヲ下縣郡ニ置ク〔嚴原分町〕國　鎌倉府ノ時、少貳氏ヲシテ二島ノ事ヲ管セシム、島ノ豪族阿比留國信、其命ニ從ハズ、寛元四年、宗重尚〔平知盛ノ孫知宗、家ヲ繼ギ惟宗ト稱ス、尊リ、惟宗氏ヲ冒シ、宗氏ト稱ス、〕〔其子重尚是ナリ、〕國信ヲ滅シテ終ニ地頭トナリ、少貳氏ニ屬ス、文永中、元虜來寇ス、重尚ノ孫助國力戰シテ死ス、正平中、助國ノ曾孫經茂始テ守護ニ補ス、應永中、經茂ノ曾孫貞茂、三根郷佐賀ニ居ル、〔上縣郡〕嘉吉三年、其子貞盛始テ朝鮮ト貿易ス、文明中、其孫貞國徙テ國府ノ中村ニ居ル、享祿元年、貞國ノ後四世將盛與良郷金石ニ治ス、後五傳シテ其少子義智國ヲ立チ、豐臣氏ニ屬シ、州守ニ任ジ、肥前ノ田萬石ヲ加賜ス、關原ノ役西軍ニ應ズ、朝鮮聘事ニ任ズルヲ以テ罪ヲ免レ、封邑故ノ如シ、寛文六年、義智ノ孫義眞徙テ嚴原ニ治シ、府中ト改稱ス、王政革新、府中ヲ改テ嚴原ト稱

七町二十間　鷄知村追分　九町一十八間　同樽之濱　二十六町三十間　大船越村新右衛門開　一十町三十九間　同小田山從上之島至下之島濱直望　同瀨戸口　二十一町五十七間　久須保村七町三十九間　同木下濱　一里一町一十八間　小船越村志土路濱　二町二十四間　小船越村追分　一十四町六間　小船越村沿江至國之本、四丁二十七間　二十七間　同追分　一里一十五町二十一間　仁位村柳ヶ浦　二十四町三十四間半至大道碌一十二丁一間半、從大道碌至和坂裏比須川岸、二十一丁三十四間半、　同和坂二十八町六間　同橋口　三十三町三十三間　田村上村至田村下村七丁二十二間半　一里一町四十二間上縣郡吉田村吉田川岸　二十町五十四間　三根村田口　一町四十二間　三根村鹽坪　一里三十四町二十九間半　久原村　五町三十三間至鹿見村一丁三十九間　鹿見村鹿見川口　一里一十一町一十三間　樫瀧村弓原　一町　同仁田川口　一里一十二町五十九間　越高村　一十八町四十間至伊奈越濱、三丁　伊奈村伊奈川口　六町一十四間　志多留村　五町四十二間　同志多留川口二里九町五十五間半　深山村佐護川岸至天諸羽命神社、四丁一十八間　五十一間　惠古村　一里二十一町三十三間　佐須奈村至島大國魂御子神社、五丁二十間　四町　同佐河內川口歷舟志坂峠至舟志村原、徑測一里一十七丁三十子間半、三町二十七間　同船附　一里一十七町八間　河內村佐河內　五町五十八間至河內濱一丁一間　大浦村　三町七間　同大浦川口　三十三町三十間至豐坂峠一十五丁三十六間半　豐村元越　一十四町三間至元越、五丁四十八間、從元越至本宮下、五丁九間半、　鰐浦村、三十四度四十一分半、從殿原至鰐浦街道、通計二十四里三十五町二間半、

從對馬國仁位街道歷志多賀至豐村

對馬國下縣郡仁位村和坂　一里二十三町一十六間　曾村、三十四度二十五分、至千尋藻村殿浦徑測一十三丁二間　一十二町二十四間　同缶浦　一十一町二十四間　上縣郡櫛村大地石川口　九町一十八間半　同德意浦　二十町五十七間　同志內浦　八町七間半　佐賀村　一里四町三十六間至佛

三十町二十五間半　三根村田口　一町四十二間　同鹽坪　二里四町七間半　木坂村　三里二町四十三間半（至女連村ミツツル寶一里二十五丁一十五間）　久原村　九町　鹿見村　三町五十三間　同鹿見川口　二里一十六町五十一間半　樫瀧村弓原　一町　樫瀧村仁田川口　一里三十三町四十間半　越高村　三町　同伊奈越元濱　二十六町六間　伊奈村伊奈川口　二町一十五間　伊奈村　一十八町四十八間（至志多留村十三丁一十二間）　志多留村志多留川口　一里三十三町五十四間（至伊奈岬一十九丁四十八間）　同苅生　二里二十四町三十五間　湊村佐護川口（至惠古村一里二丁三十九間）　二里二十一町一十三間　佐須奈村佐河内川口　三町二十七間　佐須奈村船附　二町二十間　同番所下（至遠見番所七丁二十一間）　一里八町五十七間半（至向番瀬岬十五丁二十間）　同佛崎　二里九町二十六間　河内村佐河内一町一間　同河内濱　七町三十六間半　大浦村濱町　三町七間　同大浦川口　一十五町二十五間　同網濱浦（至鰐浦一十五丁二十七間）　二里一十七町一十四間（至女瀬岬二十五丁二十四間）　鰐浦村　二里七町五十九間　豐村本川口　一十六町六間　同長崎（長岬邊四丁六間）　三町三間　同椿ヶ浦　二十町二十一間　同深浦　一里二十三町四十九間半　泉村　二里二十三町五十間　西泊村初崎　一里五町五間（至鰐浦二十四丁一十四間）　西泊村　一十八町一十八間　比田勝村小平次浦　一町三十三間　同比田勝礒　二里三十町一十一間（至妙見崎十六丁六間）　富浦村尉殿崎　一里三十四町九間（至波戸崎二十七丁三十六間）　唐舟志村（東風坊崎邊二丁四十六間半）　一里六間（至ノコノ濱十九町三間半）　濱久須村牟理屋　二町五十四間　同藥師堂濱　一町三十間　同氏神之本　八町二十三間　同立目浦　五町四十間半　大増村立目浦　一里二十八町五十七間（至井口下一十九丁五十四間半）　同田之藏　二十町五十七間（至入道浦七丁三十三間）　舟志村前濱川口　一里一十四町四十八間　五根緒村　二里二十六町九間　同鼻フリ崎　一里二十町八間半（至琴崎二十八丁一十一間半）　琴村琴之浦　三十三間　同葦見坂　一里四町八間　遠見村江川口　一十二町三十間半　一重村　二町一十二間　同坂口原　三十四町四十八間　小

十四町二十一間半、

對馬國下之島（至大船越村上之島小田山、至下之島瀨戸口渡、直徑二十四間）下縣郡大船越村瀨戸口（直大船越村路兩島）一町五十七間　大船越村、三十四度一十六分半、一里二町五十一間半　久須保村（至衛道二丁四十九間）一里六町四十五間半（至新之浦五丁四間半）同玉調浦（瀨江至大山村玉調浦三丁三間）二十四町四十二間　大船越村六郎岬（瀨江至小野瀨三丁一十八間）五町四十八間　同中小野瀨（至江奥三丁四十八間）三十四町五十七間　同狹瀨戸炭燒浦　一十五町五十六間半　小船越村新之浦　九町五十一間　同炭燒岬　一十一町一十六間半　小船越村內之浦　三十一町一十五間（至嶋白岬二十七丁四十八間）大山村滿切岬（至切岬西四丁三十一間半）三十四町三十六間　同岡崎（岡崎岬九丁五間）一里二十町二十三間半　小船越村國本　五町四十八間　大山村國本　一里二十九町一十七間半　濃部村三十四度二十九分　一十九町一十二間　同柳浦　一里二十一町二十八間半（至毛上崎二十丁四十八間）仁位村和坂惠美須川口（至衛道四丁二十一間）二里二十二町五十八間半　嵯峨村カシコウ浦（至嵯峨村磯瀨一十丁二十八間）三十五町四十間（至多田島岬二十丁六間）嵯峨村佛浦（至衛道三丁四十四間）一里三十四町二十五間　貝鮒村　八町四十六間　同ミコドウ浦　一里六町一十四間　嵯峨村　一里二十町四十四間　同塔崎　一里三十三町四十五間半　仁位村仁位川口（至嶋口一十二丁三十九間）三里八町一十間（至男鼻村一里六丁五十七間半）佐志賀村笹苹浦（至佐保村生石鼻崎三丁五十二間）二里一町四十六間　貝口村小路浦　一里二十八町三十九間半　貝鮒村小島崎　一里一十五町六間（至深浦一里八丁九十七間）貝鮒村ユリ越浦　二十一町九間　同西浦　一里七町一十二間　唐洲村嵯越岬　一十七町一十一間半　廻村瀨戸間　二十三町二十七間　廻村　二里二十町一十五間（至鷹崎三丁二十一間）佐保村イヤシ濱　一里二十六町三十間半　志多浦村トウノ崎　三十二町五十七間　小綱村（至田村下村平口川口、二十丁三十九間、）三里二十三町二十間半（至九高瀨戸三里一十二丁一間）田村平口川口　一里三十三町一間　上縣郡吉田村

〔日本實測錄〕八 對馬國上之島（從壹岐國壹岐郡勝本浦至對馬國下縣郡嚴原渡海、直徑一十二里二十丁二十四間、）

下縣郡嚴原（本府中）濱町　一十六町二十八間　久田村（歷板屋峠、至北瀨村三里七丁三十六間半、從北瀨至南瀨村五丁四十二間、）　二里一十七町（至輪島岬一里十丁五十一間）　安神村龍野崎　二里八町五十二間半　東內院（ヒガシナイイン）村　一里二十町一十九間半　西內院村松ナシ　二里三十五町一十八間半（至神崎三十丁三十三間、從神崎至卒土濱二十二丁二十七間半、）　豆酘（ツツ）村前濱（至觀音前四丁六間、從觀音前、歷豆酘峠、至南瀨村三十一丁五十四間半、又從觀音前至觀音堂六丁、）　二里一十一町五十二間（至豆酘崎二十三丁四十八間）

北瀨村內山川口（至街道四丁七間半）　二十七町八間半　久根濱村久根川口（至久根濱村三丁二十四間、從久根濱至北瀨村二十二丁六間、又從久根濱至久根田舍村銀山上神社、一十七丁三十間、）　二里六町一十八間半　小茂田村（歷下原村、至佐須峠、二里四丁三十七間、）　一里九町五十八間半　阿連村（至雷命神社五丁三十五間）　四十五間　阿連村阿連濱（至今里村中川口徑測三十三丁一十五間）　二里八町九間　今里村鄉崎　二里一十五町四十一間半（至尾崎村一里五丁卅三間半）　同中川口　一町三十九間

今里村（至加志村六丁四十八間半、從加志至加志川岸一十四町三十三間、從川岸至太祝詞神社三丁五十一間、又從川岸至箕形村千之木濱二十二丁七間、）　二十町一十二間　加志村加志川口（至街道二丁五十五間半）　二里二十五町三間（至大首岬一里一十七丁四十五間）　吹崎（フクサキ）村　二十五町一十九間　箕形村千之木濱　八町三十三間　同針浦　三里四町四十八間（至城八幡社前一里七丁三十九間）　黑瀨村坂無浦（至洲藻村汐越浦徑測六丁三十二間）　二里九町四十七間　黑瀨村中崎　二里二十一町一十六間

竹敷村チツトク崎　二里二十四町五十一間半　洲藻村汐越浦　一十九町五十七間、　鷄知村久須浦（至街道肥川六丁四十二間）　一里一十三町三十三間　同檞濱（至街道三町五十一間半）　一里三町四十四間半　竹敷村寸斷（スンキリ）島岬　一里一十九町五十三間　大船越村鹿燒浦（至狹間浦徑測二丁一十八間）　二十六町四十間半　同狹間浦　二十八町三十五間　同角兵衞濱（至街道新右衞門開二丁五十七間半）　八町四十五間　大船越村小田山　一里二十七町三十九間半　鷄知村高濱　二十九町四十八間　根緒（ネヲ）村　一里三十四町二十四間　小浦村　八町三十六間　嚴原（本府中）犬阿須　二十八町五十一間　同遠見崎　一十七町四十三間半　同本川口（至横町二丁三十四間）　二町五十一間　同濱町　沿海、周廻五十四里二十一

地對

佐賀村

〔津島紀事 續一〕本州北を上縣郡とし、南を下縣郡とす、南北廿六里、豐村より豆酘村まで南北濱往廿五里廿四町半、廿六里は廣濶なり、南北豆酘崎より鰐浦豐崎までの直線へ十六里十八町有之、東西の廣狹は村の鼻に配し置くなり、東西或は四五里或は二三里、凡山亭云く、本州を平地として積るときは縱十七里計、橫二里半計、凡一坪にしてこれを積れば、四十二坪半ばかり、その內田島也、(地の平なる處を坪と云ふ)悉掩るに州內の土地多くは白色なり、是岡方の正色なり、あらはすものか、山地はすべて赤地赭火燒金にて、國土の性に起するの色なりしゆへ、穀物宜からざるならん、武用辨略に對馬四方一日半、小下國なりと記せり、周り百八十三里三町五十七間三尺九寸、濱汀の出入を細に引離し里數なり、濱々等を除き、大方を引離せば四十里と十九町五十六間一尺入す二分、是大外の周なり、山多くして田少なく、土地墝くして民貧き故下國とす、

〔海東諸國記〕對馬島　郡八、人戶皆沿海浦而居、凡八十浦、南北三日程、東西或一日、或半日程、四面皆石山、土瘠民貧、以煑鹽捕魚販賣爲生、宗氏世爲島主、其先宗慶死、子靈鑑嗣、靈鑑死、子貞茂嗣、貞茂死、子貞盛嗣、貞盛死、子成職嗣、成職死而無嗣、丁亥年島人立貞盛母弟盛國之子貞國爲島主、郡守而下土官皆島主差任、亦世襲、以土田鹽戶分屬之、爲三番、七日相遞、會守島主之家、郡守各於其境、每年踏驗損實收稅、取三分之一、又三分其一、輸于島主、自用其一、島主牧馬場四所、可二千餘匹、馬多曲背、所產柑橘木楮耳、南北有高山、皆名天神、南稱子神、北稱母神、俗尙神、家々以素饌祭之、山之草木禽獸、人無敢犯者、罪人走入神堂、則亦不敢追捕、島在海東諸島要衝、諸酋之往來於我者、必經之地、皆受島主文引、而後乃來、島主而下各遣使船、歲有定額、以島最近於我、而貧甚、歲賜米有差、

〔日本地誌提要 七十四 對馬〕形勢　日本海ノ西北隅ニ位シ、島形東西ニ狹ク、南北ニ長シ、中央劈開シテ一大灣ヲ成シ、大艦巨舶ヲ容ルベシ、島內峯巒相接シ、地多ク磽确、播殖ニ宜シカラズ、居民穀ヲ內地ニ仰ギ、利ヲ海ニ採リ、朝鮮ノ互市ヲ以テ、營生ノ主ト爲ス、風俗固陋、氣候極暑九拾度、極寒三拾度、

三町一十一間、海賊島周廻六町八間、イヤ島周廻二町四十四間、カツマ島周廻一町三十二間　大佛島周廻一町四十七間、上根緒島周廻六町四十八間　下根緒島周廻五町五十三間、小浦島周廻四町一十一間、南室島周廻四町一十一間、遠測　霧坊瀬　星小島、千鳥瀬（西内院村）　コウノ瀬　小島瀬（上槻村）　鵜瀬（椎根村）　鵜瀬（阿連村）　立瀬　ヲコ島　六郎瀬　鵜島　カヤリ島　辨天島（尾崎村）　サキノ島　島帽子瀬　ユルキ瀬　千鳥島（大舟越村）　千鳥島（島山村）　廻島地　廻島沖　五合島　三郎島　一クワン島　千鳥島（仁位村）　白銀島　浮瀬（貝口村）　小島（貝口村）　泉島　二子島大（貝口村）　二子島小（貝口村）　新島瀬　唐洲岩　島ケ瀬　ホケ島　メウ瀬地　メウ瀬沖　沖カノ島　飯瀬　千島瀬（横島）　金吾瀬　ウニ島小　ウニ島大　千鳥島（鑓川村）　元島　小島（横浦村）　裸島大（横浦村）　裸島小（同上）　コトヲ瀬　ヒシケ島大　ヒシケ島　猪島　馬子島　駒島　小佛島　保島（黑島）　浮瀬（久須保村）　鄕瀬　鵜瀬（根甲村）　釜蓋瀬　二ツ瀬　琴瀬　口瀬　折瀬

上縣郡　實測　海泉島周廻二十一町一十四間、地海老島周廻四十三間半、沖海老島周廻二町一十七間、大島周廻四町二十二間半、高島（從西岬至東岬）三十間、中島（從西岬至東岬）三十六間、志古島周廻一十三町五十五間、小島周廻三町三十一間、妙見島周廻二町一十五間、品木島周廻九町五十六間、鷲首島周廻三町三十六間、荻島周廻八町三十九間、島浦島周廻二町二十四間、錢島周廻五町五十九間半、黑島周廻四町三十九間、コシヤウ島周廻三町七間半、遠測　呼瀬　平瀬（吉田村）　立瀬　沖瀬　大千鳥瀬　錢島（鹿見村）　赤子瀬　舟瀬　トロク瀬　本瀬　鵜瀬（大谷村）　立岩　ハイノハ瀬大　ハイノハ瀬小　小太郎島　横瀬　島瀬　北瀬　鯨瀬　釜蓋瀬（豐村）　錢島（豐村）　ミサコ瀬（豐村）　小島（豐村）　地椎根島　沖椎根島　小島帽子　雎鳩瀬（西泊村）　梶カキ瀬　轟島　轟島小　ツハツイ瀬　鵜瀬（大增村）　千鳥島（舟志村）　京島　島帽子瀬（五根緒村）　臼石　淺黃瀬　平瀬（鹿見村）　赤瀬　松島　中瀬（小鹿村）　下瀬（小鹿村）　裸島（志多賀村）　離島　釜蓋瀬

（加志村）周廻二町一十三間、九郎太郎島周廻二町一十六間半、ヘタノ島周廻四町三十九間半、沖島（大吹崎村）周廻五町一間半、沖島（小吹崎村）周廻一町二十七間、盗人島周廻二町二十七間、鼠島（竹敷村）周廻一十一町、ワタイガ島周廻四町九間、車島周廻六町四十五間、アジサキ島周廻八町四間半、鹿島周廻一十八町一十八間、鹿小島周廻三町四間半、ズンギリ島周廻二町四十二間、茶木島周廻四町八間、六郎島周廻三町五十四間、黒ミサキ島周廻一里一十八間、千切島（島山村）周廻三町一十二間半、ハントウ島周廻二町三十三間、琵琶島周廻六町二間、三ツノ島周廻八町四間半、豢島周廻四町三間、沖ノ島（大山村）周廻一十二町五十三間、中ノ島（同貴）周廻一十一町一十六間半、丸島（同貴）周廻六町三十六間半、（從沖島至丸島、總稱三室島、）夾島（大山村）周廻二町二十八間、京島周廻一十五町一十七間、沖京島（又呼千切島）周廻三町五十三間、草島周廻一十四町一間半、灘五郎島周廻二町四間、多田島周廻三町四十八間、塔ケ崎島周廻一十一町一十間半、黒島（唐洲村）周廻六町一十三間、ワデンカ島周廻三町九間、横島（唐洲村）周廻六町五十六間、牛島（從東岬至北岬、）五十七間、寺崎島周廻五町五十七間半、カウ島周廻一十二町四十三間、中ノ島（小網村）周廻七町五十七間、榎島周廻一十六町二間半、カノ島周廻二町四十二間、（從カウノ島至カノ島、總稱網島、）丸島（田村）周廻三町三十二間、立場島周廻二町四十五間、八兵衛島周廻三町四間半、御崎島周廻二町一十五間、的島（又呼松島、）周廻二町八間、干切島（樽浦村）周廻四町三十三間、豊島（大）周廻三町一十六間、豊島（小）周廻一町五十六間、鼠島（賀谷村）周廻七町五十九間、東風泊島周廻一十三町四十一間、赤島周廻一里一十一町三十九間、本ノ島（又呼サゴ島、）（從西岬至北岬、）二町三十九間、中島（赤島）周廻五町九間、八天島周廻二町四十八間、沖島（鰐浦村）周廻四里廿七町一十九間半、銭島周廻二町一十九間、北瀬島周廻六町五十二間半、唐船島周廻二町三十五間、黒島（鰐浦村）周廻一里三十町三間、仁兵衛島周廻二町五十六間、鮪島周廻三町、雀島（鰐浦村）周廻

のなく、大概をいふのみにして定かならず、對馬は南北に長き島國にて、府中は北にあり、肥前より、四十八里といふは、府中への事なるや、是とても定かならず、府中より朝鮮への渡海口、鰐の浦までは海上を廻りて三十餘里、鰐の浦より朝鮮の釜山浦の海上わづかにして、漁舟一汐に渡海すといふ也、かくのごとく朝鮮へは近き對馬なれども、いにしへより手指もせぬ事、日本の勇強なるを知らぬ人多し、己が眉毛己が目に見へぬといふたとへは是歟、

〔津島紀事一統體〕本州は、本邦と朝鮮との間にありて、東西何れも大海を隔て固に遠き離島なるに、本邦の内なる證據には、朝鮮に產して本邦に產せざる物は、この島にも產せず、本邦に產して朝鮮に產せざるもの此國にも產せず、そのうへ國民の言語にも本邦と同うして、朝鮮とは違へり、州中の人傳へいひけるは、州の南方豆酘崎の長瀨は、肥前の國の五島に連なり、州の北方鰐浦の鮮髮瀨は、石見の國の高島に續きて日本の地を斷せず、是にても本州は本邦の内なりし事を知ぬべし、

疆域

〔日本實測錄八〕對馬國上之島、○中略沿海、周廻五十里一十四町二十一間半、　對馬國下之島、○中略沿海、周廻一百三十五里三十一町一十九間半、

〔日本地誌提要七十四對馬〕疆域　壹岐ノ西北ニアリ、二島ニ分ル、南ヲ上ノ島ト云、周回五拾里壹拾四町貳拾壹間、東西貳里貳拾八町、南北五里貳拾町、北ヲ下ノ島ト云、周回壹百三拾五里三拾壹町壹拾九間、東西四里六町、或貳里貳拾八町、南北九里貳拾六町、壹岐壹岐郡勝本ヨリ下縣郡嚴原ニ至ル、海上直徑壹拾貳里貳拾町、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕對馬國下縣郡　實測　島山島、周廻一十一里三十五間、島山村三十四度一十八分半、　相島從西岬至東岬一町一十八間、　輪島、周廻四町三十九間、　內院島、周廻一十四町一十九間半、　馬耙島、周廻二町五十七間、　志賀島、周廻一町三十九間、　大島、加志村周廻一十二町二間、　經島、

て國と稱せしは久き事に侍りぬ、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命、〇中略、妹伊邪那美命、〇中略、如此言竟而御合、〇中略、次生筑紫島、〇中略、次生津島、亦名謂天之狹手依比賣、

〔日本書紀神代一〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、〇中略、陰陽始遘合爲夫婦、〇中略、適生大日本日本此云耶麻騰、下皆效此、豐秋津洲、〇中略、由是始起大八洲國之號焉、卽對馬島、壹岐島、及處々小島、皆是潮沫凝成者矣、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

對馬府中、中測賀町、極高三十四度一十二分、經度西六度二十五分、從壹岐勝本浦海直徑一十二里廿町半、三百四十里八町四十四間半、〇從二東都一、

對馬鷄浦村、極高三十四度四十一分半、經度西六度一十七分、從府中仁位浦直徑二十四里三十五町、三百六十八里七町四十七間、〇從二東都一、

〔日本經緯度實測〕北極出地

對馬　府中　三四度一二分〇〇秒　鷄浦村　三四度四一分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　對馬　府中　西六度二五分〇〇秒

〔朝野群載三〕對馬貢銀記　作者江納言

對馬島者、在本朝之西極、屬大宰府、孤立海中、四面絶壁、其名竝見於隋唐史籍、自筑前國博多津、西向飛帆一日、到壹岐島、自斯又到對馬島、一日、自非大風、不得渡矣、與高麗隔海北口金海府牧野之馬、掛帆之布、分明直見、其近可推、

〔西遊雜記七〕世にいふ、肥前の地より對馬へ海上四十四里、對馬より朝鮮へ海上四十八里といふ、然ども肥前より朝鮮への海上九十六里也、すべて海上の里數は風による物故に、唯吟味するも

なりと、字書にも濟渡の州を津といふと、壹土傳に島は住むと讀、人のすむ處なりと見へたり、日本紀にいはく、素盞嗚尊御子五十猛命を伴ひて、新羅の國に到り、曾戸茂利の處に居給ふと、新羅に降給ひし時は、この國より行たまひしとなん、傳ていちゞるし、津島の號は此時に始ける、傳いふ則和漢大海の間にある島にして、兩國往來の津湊なればなり、藤仲鄕(俗名兵内)の云く、對馬の字を用ふる事は、もろこしの人、この國の名を問ければ、州人答て津志麻といひしを、彼人おのが音聲によりて、ついまあかといひて當て、對馬の二字をしるしぬ、これ是れによるならん、(平戸を飛鸞、土傳多を禰可察、松浦を末盧と書し類ならん、對馬の字ついまなれば音ちかし、)本邦上代の風俗は、音によりて文字にかゝはらざりしゆへ、假りて是を用ひしなり、(墨按するに、對馬の字を用て、つしまと讀も、たとへば近淡海を近江とし、母木を伯耆と改られし類にて、字義は當らざれども、古きとなへを捨られざるがごとくならん、)陶山存(俗名庄右衛門)云く、對馬の字を用る事、地馬韓に對するによれりと、しかれども舊事本紀、古事記、日本書紀等に馬韓の號を載られず、三韓と稱せるものは有り、新羅百濟高麗をいふ、(高麗は東國通鑑にいへる高句麗の事なり)これによりて見れば、本朝新羅と相通ずるの始は、馬韓亡びしの後なれば、なにしに馬韓辰韓弁韓の號あらん、そのかみ書を作れる人のしらざりしならん、されば本州の號をまるす、何すれぞ馬韓に對するの義をとれるや、本州馬韓に對するの說は、後漢書に馬韓の南倭と接するの語に本づくならん、陳壽が三國志の倭人傳に對馬國の號あり、陳壽は晉の武帝惠帝の時の人にして、日本應神天皇の御宇に當る、本邦の人經書を讀み、文字をしる事も、應神の朝に始りければ、本州の名をしるすに對馬、又は津島の字を用ひ初たるは、此時より始りけん、○中略むかし、島と號へしを、天智天皇の御時更めて國とせられ、文武天皇の御字に、又島と稱せらる、後花園院の朝嘉吉年以來、太宰府及び本州の書物には、定て國としるし、他國にては國又は島としるして一定せず、これ兵亂治らず、朝命通せざりしゆへならん、天正年以來、公私一定して國と稱せり、三國志に對馬國を記せり、三國志を撰びしは應神天皇の御時なれば、本州の事を、中國に

シ、其故ハツシニ對ノ字ヲ書ル假字ノサマ、當昔皇國ノ假字ノ用ヒザマニハ似ザレバ也、

〔島林本節用集下〕對島〈對州〉下、管二郡、四方一日、雖日本地、故號島、有異珍之類、鎮諸神、副隨廣、是故致怪探題職也、小下國也、

〔津島紀事〈一地號〉〕對島州　津島〈舊事本紀〉　津島〈古事記〉　對馬島　對馬洲　對馬國〈日本書紀〉

幾島〈大和本紀〉　西海國對馬島〈部之島、和名類聚抄、〉

〔古事記傳〈五〉〕津島、名義は萬葉十五〈廿六丁〉に、毛母布禰乃波都流對馬とよめる如く、韓國の往返の舟の泊々津なる島なり、〈魏志と云から書に、此島のことを對馬國とあり、こは此方にて古より如此書るを見て取れるかとも思へど、さには非ず、彼書のいできつるは書紀の前なり、そのかみ韓國にかゝる國字のつかひざまあるべからず、たゞ津島と云を、韓國にて同傳へ誤りてかくは書る物なり、さて書紀にやがて此文字を假字に取用て對馬島とかゝれたり、津島の假字に對馬とかゝむは、さる例あれば、さも有なむ、なを島字を添られたるこそいと心得れ、島々との重れて云名はあるべきことかは、讀津の津など云例とに異なるならや、讀津例等には津島とかゝれたるところあり、是れ古の書ざまなり、〉

〔倭訓栞〈前編十六〉〕つしま　對馬は馬韓に對する稱、中山傳信錄に、黃帽對馬三十人と見えたり、されど古事記日本紀に、もと津島と書り、三韓往來の津也、よて萬葉集にも、百船のはつる對馬とよめり、

〔津島紀事〈一地號〉〕神代の卷の纂疏に云く、對馬の和訓は、津といふ心もちにて、海島の中にある津といふ事なり、神代の卷重士傳に、對馬は古津島と書く、是西北の津なり、又云、津とはつどふなり、釋日本紀に、對馬島私記に云く、問ふ、古事記を考れば、唯津島といふ、今爰に對馬の島といふはいかにや、答へていはく、其義まさに同じ、今の俗對馬の二字を讀てつとするなり、島の字は文字の如し、しかるに今の人、都志麻の志麻と讀ものは誤なり、但此島と壹岐の島との名義は未詳ならず、沙門義堂が撰びし日用工夫略集に、對馬は馬韓に對するの義なりと、本州の儒士に、山崎〈闇齋〉三書せし州府院石亭の記にも、小島の中に津あれば也、對馬の字を用ふる事は、馬韓に對すれば

及壹岐對馬等要害之處、可置船一百隻以上、以備不虞、而今無船可用、交關機要、不安一也、

（續日本紀 三十二 光仁）寶龜三年十二月己未、太宰府言、壹岐島掾從六位上上村主墨繩等、送年糧於對馬島、俄遭逆風、船破人沒、所載之穀、隨復漂失、謹撿天平寶字四年格、漂失之物、以部領使公廨塡備、而墨繩等欵云、漕送之期、不違常例、但風波之災、非力能制、船破人沒、足爲明證、府量所申、實難默止、望請自今以後、評定虛實、徵免許之、

（三代實錄 十七 清和）貞觀十二年正月十三日丙寅、是日勅充壹岐島雷并手糧各二百具、彼島元有甲無冑、太宰府依島解請充、從之、

名稱

對馬國

對馬國ハ、ツシマノクニト云フ、西海道ニ屬シ、壹岐島ノ西北約十二里半ニ在リテ、殆ド我國ト朝鮮トノ中間ニ介セリ、其地形ハ、中央劈開シ、二部トナル、其南部ヲ上ノ島（下縣郡）ト稱シ、周廻凡ソ五十里餘、其北部ヲ下ノ島（上縣郡）ト稱シ、周廻凡ソ百三十五里餘アリ、此國ハ古ヘ國府ヲ下縣郡ニ置キ上縣（カムツアガタ）下縣（シモツアガタ）ノ二郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、現今長崎縣ヲシテ之ヲ治セシム、

（倭名類聚抄 五 國郡）對馬島（都之萬）

（饅頭屋本節用集 天地門）對馬（ツシマ）對州

（地名字音轉用例）雜の轉用

つしま 對馬 國 都之万（ツシマ） 古事記ニ津島トアリ、此意ノ名也、然ルヲ對馬ト書ルハ、漢籍魏志ニ見エタリ、サレバ此ハモト、彼國ニテ譯シタル字ナルヲ、ソノマヽ用ヒラレタルモノナルベ

人口

一、

〔官中秘策　五〕壹岐國　二郡（○中略）

一人數貳万參千貳百人　内（壹万貳千三百五人　男）（壹万八百九拾五人　女）

高壹万八千七拾貳石餘　壹岐國

〔吹塵錄　五人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）（○中略）

（曾私領）一人數貳万五千三百六拾八人

内（壹万三千四百七拾八人　男）（壹万千八百九拾人　女）（○中略）

弘化三丙午年諸國人數調（○中略）

（曾私領）一人數貳万七千五人

内（壹万四千貳百七拾七人　男）（壹万貳千七百貳拾八人　女）

高三万貳千七百四拾貳石餘　壹岐國

風俗

〔人國記〕壹岐對馬國

壹岐對馬之兩國、遠島タレドモ、物之花奢成事ハ大隅薩摩ニハルヽ可勝也、人之氣柔弱ナル所多ク而、自墮落事多シ、

名所

〔日本鹿子　十四〕同國（○壹岐）中名所之部

風本（かざもと）　呼子の松原といふあり、此所より海上十り北也、北は筝也、舟津也、是より對馬國へ渡る也、またおろふるなど云所あり、此所を天原と云ならはせり、そのゆへは西行法師のうたに、

かざもとのたぐるればこそ天原おろふる雪に袖はぬるらめ

雪の島　越中にも同名あり

戀しくばなどかとはなん雪の島巖にさける撫子のはな

勝本　衣島　見目の浦

[illegible]

〔續日本紀　二十二淳仁〕天平寶字三年三月庚寅、太宰府言、府官所見、方有不安者四、（一）據警固式、於博多大津、

田數 高石

〔倭名類聚抄 國郡五〕壹岐島　管二田六百二十町

〔伊呂波字類抄 國郡由〕壹岐島管二郡(中略)本田六百二十一町九段、

〔運歩色葉集 諸國之郡名〕壹岐二郡(中略)田數五百八十三町

〔海東諸國記〕一岐島　郷七、水田六百二十町六段、

〔日本鹿子 十五〕壹岐國、二郡、小下國、四方一日、〇中略　知行高壹万五千九百八十二石、

〔官中秘策 五〕壹岐國　二郡〇中略

一石高壹万八千七拾貳石餘

〔吹塵錄 人口及國高五〕天保度御國高調〇中略

壹岐國 皆私領　一高三万貳千七百四拾貳石九斗貳升壹合

出擧稻

〔延喜式 主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略

壹岐島正税一万五千束、公廨五万束、修理池溝料五千束、救急料二万束、

〔倭名類聚抄 國郡五〕壹岐島　管二正萬千五(千五恐五千誤)束、公五萬束、本頴九萬束、雜頴二萬五千束、

〔續日本紀 聖武十六〕天平十七年十一月庚辰、制、諸國公廨大國四十万束、上國三十万束、中國二十万束、

〇中略 下國十万束、就中〇中略　志摩國壹岐島各一万束、

國産 貢獻

〔延喜式 主計二十四〕壹伎島海路行程三日

調、大豆廿三斛、小豆十一斛、小麥廿斛二斗、自餘輸海石榴油藻鰒、

〔毛吹草 三〕壹岐

綾布　宇爾　鰤ブリ

〔續日本紀 光仁三十一〕寶龜二年閏三月乙巳、壹伎島獻白雉、授守外從五位下田部直息麻呂外從五位上、

賜絁十匹、綿廿屯、布卅端、稻一千束、目從七位下笠朝臣猪養從七位上、賞賜半之、除當島田租三分之

壹岐郡

〔續日本紀　三十二光仁〕寶龜三年十二月壬子、壹岐島壹岐郡人直玉主賣、年十五夫亡、自誓違不改嫁、著﨟餘年、供養夫墓、一如平生、賜爵二級、幷免田租、以終其身、

石田郡

〔三代實錄　七淸和〕貞觀五年九月七日丙申、壹伎島石田郡人宮主外從五位下卜部是雄、神祇權少史正七位上卜部業孝等、賜姓伊伎宿禰、其先出自雷大臣命也、

郷

〔倭名類聚抄　九壹岐島〕壹岐郡　風早　可須　那賀　田河　鯨伏　潮安　伊宅

石田郡　石田　物部　箟原　沼津

〔萬葉集抄　二〕壹岐國風土記云、鯨伏郷、鯨伏〇郷〇ニ一本、在郡西、昔者鮨鰐追鯨、鯨走來隱伏、故云鯨伏、鰐並鯨並化爲石、相去一里、俗云、鯨〇鯨ニ一本、爲伊佐、

村里名邑

〔郡名一覽　曾我部〕一壹岐國　壹州　四方一日　貳郡

高壹万八千七拾貳石八斗六合　三百九拾ヶ村

●勝本　三百七十一里平戸迄

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國郡條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要　曾我部〕壹岐　二郡、五十村、

高三万二千七百四十二石九斗二升一合

壹岐郡二十三村　石田郡二十七村

〔地勢提要　ニ〕郡邑島嶼奇名

壹岐　石田郡、武生水村、初瀬浦、印通寺浦、渡良村、半城村、壹岐郷、若宮島、君島島、

郡封

〔慶應元年武鑑〕松浦肥前守詮　從五位上

六万千七百石　居城肥前松浦郡平戸　江戸ヨリ三百十九里

當國平戸壹岐〇壹岐國、松浦家代々領之、

國府　郡

香、〈略〉〇中宜ᄂ賦ᄂ園梅ᄂ聊成ᄂ短詠ᄂ、〈略〉〇中
波流奈例婆、宇倍母佐枳多流、烏梅能波奈、岐美乎於母布得、用伊母禰奈久爾、〈壹岐守板〔板一本作ᄂ楓〕氏安麻呂〉

〔續日本紀〈稱德〉二十九〕神護景雲三年六月乙巳、外從五位下田部直息麻呂爲ᄂ壹伎島守ᄂ、

〔倭名類聚抄〈國郡〉五〕壹岐島〈略〉〇中石田〈伊之太、國府、〉

〔倭名類聚抄〈國郡〉五〕壹岐島〈管二、〉〈略〉〇註壹岐　石田〈伊之太〉

〔延喜式〈民部〉二十二〕壹岐島〈下、管〉〇中略壹岐　石田〈イシタ〉　右爲ᄂ遠國ᄂ

〔皇國郡名志〕壹岐國〈二郡〉

壹岐　〔鯨本〕〈呼子松原北ノ方〉　石田〈イシタ〉　〈●直途ハセ浦●湯浦南方●鄕浦●芦浦●タモ〉

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛宕郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕壹岐

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治初年帳	地誌提要	郡區編制
壹伎〈郡〉	同	壹岐	同	同	同〈闕文〉	同〈イキ〉	同	同	同〈イキ〉	同
		石田〈イシタ〉	同〈伊之太〉	同	同〈闕文〉	同〈イシダ〉	同	同	同〈イシダ〉	同
		管二	同	二郡		同	同	同	同	同

社二丁四十八間　五町一十一間半、布氣村總石(至二國分村一十八丁一十五間、從二國分一至二國分寺一四丁二十四間、又從二國分一至二月讀神社一五丁三間、)五町九間、同水場(至二水神社一三丁三十六間、)一里一十八町四十五間、勝本浦聖母町(從二鄕之浦一至二勝本浦一、)街道通計三里一十八町三十二間半、

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國驛傳馬(中略)○

壹伎島驛馬(優通各五疋)

〔日本國郡沿革考 三 西海道〕壹岐　古作伊伎島、(古事記作伊支島、懷風藻作一支、)作下國、管二郡、五十村、

壹岐　二十三村　石田(いしだ 古府治)二十七村

伊佐(見于壹岐風土記、國號參詳、)

〔日本地誌提要 七十四 壹岐〕沿革　古ヘ國府ヲ石田郡ニ置(今ノ國分村、壹岐郡ニ屬ス、)鎌倉府ノ時、少貳氏島事ヲ管シ、肥前松浦黨志佐、(壹岐郡湯岳村戸城、)佐志、(同郡中野鄕、及可須村、)鹽津留、(同郡國分村、城、)呼子、(石田郡渡良村、)鴨打、(同郡物部村大原城、)五氏ヲシテ其ニ島事ヲ掌ラシム、少貳氏衰ヘ志佐氏終ニ守護トナル、文明四年、肥前岸嶽(キシタケ)ノ城主、波多泰(ヤスシ)來リ襲ヒ、悉ク五氏ヲ滅シ、全島ヲ併セ、龜尾城(石田郡生水村)ヲ築キ、守護ト稱ス、天文中、泰ノ孫盛(サカン)卒シテ子ナシ、肥前ノ有馬義直ノ子親ヲ迎ヘテ嗣トナス、族人之ニ服セズ、盛ノ從子隆ヲ奉ジテ主トナス、弘治元年、隆其下ニ弑セラレ、親終ニ守護トナル、既ニシテ其臣日高喜等其邑ニ據テ叛キ、永祿六年、鎭ヲ松浦隆信ニ送リ、波多氏ヲ逐ヒ、全島終ニ松浦氏ニ屬ス、德川氏ニ至テ、松浦氏ノ封故ノ如ク、王政革新、平戸縣ヨリ兼治シ、又改メテ長崎縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀 十國造本紀〕伊吉島造

磐余玉穗朝(繼體)○伐石井從者新羅海邊人天津水凝後上毛布直造、

〔萬葉集 五雜歌〕梅花歌三十二首幷序

天平二年正月十三日、萃二于帥老之宅一、申二宴會一也、于時初春令月、氣淑風和、梅披二鏡前之粉一、蘭薰二珮後之

一十三町　同御手洗江口（鳴江至八幡旅所四丁九間、従旅所至八幡社六丁三間、又従旅所沿江至可須村江口七町五十四間、）三町四十八間（至柄杓崎三丁二十四間）可須村江口　二十六町四十二間（至弁天崎二十四丁六間）勝本浦（又呼風本浦）聖母町　一十九町五十四間半　同田中町（至新庄村城辻三十丁三十九間、従城辻至佐市布津神社七丁、又従城辻歴箱崎村針尾至瀬戸浦一里一十六丁四十七間半、）一町五十一間　同本浦町、三十三度五十一分、一里九町一十間（至田浦一十五丁三十間）可須村見目浦　一十九町二十二間半（至小串一十五丁二十八間半）同田浦北濱　二里二十七町五十一間（至魚釣崎一里二十九丁二十一間）瀬戸浦竈津濱　一十八町五十五間半（至瀬戸浦南町一十二丁二十八間半）同西町　二十八町一十二間半（至阿彌陀崎、四丁六間、）箱崎村谷合川口（至箱崎村針尾一十五丁）三十三町八間　盧邊浦（歴川北村至湯岳村、一里七丁一十九間半、従湯岳至志原村、一十五丁四十間半、従志原至角上神社九丁、）二里二町五十一間半（至シヤキヤウ岬一里一十四丁七間半、従岬至長者原崎九丁二十四間半。）八幡浦長濱　二十九町二十四間　川北村（至街道五丁三十八間半）二十五町七間半　石田郡箇城村夕部（至海神社七丁五十八間）一里廿九町四十二間半（至千々浦一里一十二丁五十一間）同宮濱　九町二十七間　箇城村箇城濱（矢[illegible]崎[illegible]三丁二十六間半）一里二町二十一間（至志自岐濱三十一丁三間）石田村小浦　一十一町三十三間　印通寺（インドウジ）浦本町（至池田村四丁三間、従池田至湯岳村一里六間、）一里二十七町三十六間半（至鬼山岬四丁三十六間）初山村初瀬浦北濱　一里二十町一十一間半（至初瀬浦一十五丁一十二間）同藻廐岬　一里二十二町四十四間　津甫村細崎（細崎[illegible]一丁三十間）三十町三十二間

郷之浦本町　沿海、周廻三十五里一十五町五十九間半、

従壹岐國郷之浦街道至勝本

壹岐國石田郡郷之浦本町　一町五十四間　武生水（ムシヤウヅ）村大里（至志原村一十九丁、従志原至岳辻一十丁三十九間、又従志原至九郡畑一十四丁一十八間、従九郡畑至大国玉神社六丁五十四間、又従九郡畑至池田村二十七丁五十三間、）一町三十六間　武生水村、三十三度四十四分半、一十町一十八間　同大平（歴牛方至黒崎村牧屋敷、一里二十五丁三十三間、）四十八間　同鎮塵山（至志原村二十七丁二十七間）九町四十八間　物部村（至天手長男神社二丁四十四間、又至天手長姫神社三丁八間、）五町九間　同柳田（至津神社七丁一十五間）一十九町五十七間　壹岐郡住吉村（舊呼鯨伏村）栗坂（至住吉神社二丁二十四間）一十一町五十七間　立石村（至愛見神）

沿革

道路

瀬（黒崎村）

壹岐郡　實測　手長島、周廻一十七町一十三間、長島、周廻三十五町二十間、若宮島、周廻三十三町七間、（從渡良浦見通所、三町五十九間）名鳥島、周廻二十八町三十四間、赤島、周廻七町五十八間　冑島、周廻一十三町一十六間、元小島、周廻二町五十三間半、遠測　タコ島　赤瀬、蛇島　牛島　柱瀬　白瀬　黒瀬　上折柱　飯島　高瀬　検島　引島　巾着瀬　中瀬　カモメ瀬　鯖瀬　和布瀬　トシヤクノ瀬　ノフ瀬　シヤキヤウ瀬　コツ子瀬　宮島　ナキ小島　竹ノ小島　イナ島　昼島　釜白瀬　前島　沖ノ島　元島　白瀬（以上前島、一名白瀬、總名名島）

〔續日本後紀　仁明四〕承和二年三月己未、太宰府言、壹岐島遙居海中、地勢隘狭、人數寡少、難支濤急、頃年新羅商人來窺不絶、非置防人、何備非常、請令島徭人三百卅人、帯兵仗戍十四處要害之埼、許之、

〔海東諸國紀〕一岐島　郷七、（中略）人居陸里十三、海浦十四、東西半日程、南北一日程、志佐、佐志、呼子、鴨打、鹽津留、分治有市三所、水田旱田相半、土宜五穀、收税如對馬、

〔日本地誌提要　七十四　壹岐〕形勢　肥前北角ノ餘脈ニシテ、四面海灣、皆港泊ノ便アリ、土性膏沃、果穀ニ宜シク、鱗介ニ富ム、風俗柔和、農暇漁業ヲ營ス、氣候極暑九拾貳度、極寒三拾五度、

〔日本實測錄　八〕壹岐國（從肥前國松浦郡呼子浦、至壹岐國石田郡郷之浦、渡海直距七里一十二丁、）

石田郡郷之浦本町　一里八町六間半　渡良村船越（至麥屋、經[illegible]五丁四十二間）　二十九町三十七間　渡良浦（經野浦、至宮）　三里二十五町四十六間　渡良村麥屋　一里二十四間　半城村（至有安村、經呼子）　松崎（經松崎、至西）　丁三間　七町四十三間　同大浦新田（至半城村、經大浦、九十八間）　一里一十九町七間　長峯村森之浦（至黒崎村、經白崎）　神社七丁二十四間　一里三町二十間　黒崎村西濱（經國分、至牧里、二丁四十二間）　一里三十四町五十八間（[illegible]一十丁）　七丁五十一間、（至唐船崎、二十丁）岬　間德目　二十八町三十九間半　壹岐郡勝本浦、三十三度四十九分、二町二十一間　立石村湯浦新田（至本村黒崎、二丁五十一間）石十　一里一十八町三十二間　本宮村（至手長島、經大瀬、四丁[illegible]間）

位置

〔日本書紀神武一〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、〇中略陰陽始遘合爲夫婦、〇中略酒生大日本日本此云耶麻騰、下皆效此、豐秋津洲、〇中略由是始起大八洲國之號焉、卽對馬島、壹岐島、及處處小島、皆是潮沫凝成者矣、

〔地勢提要〕各國經緯度附里程

壹岐勝本町東浦　極高三十三度五十一分、經度西六度二分、從肥前呼子浦渡海至壹岐鄕浦直徑七里一十二町、自同所衞道一十里三十一間半、　三百三十里二十四町二十間半〇從東都

〔日本經緯度實測〕北極出地

壹岐　脇本浦　三三度五一分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　壹岐　脇本　西六度〇一分五五砂

疆域

〔日本實測錄八〕壹岐國、〇中略沿海周廻三十五里一十五町五十九間半、

〔日本地誌提要七十四壹岐〕疆域　肥前ノ西北ニアリ、周廻三拾五里壹拾五町五拾九間、東西三里壹拾貳町、南北四里六町、肥前松浦郡呼子浦ヨリ石田郡鄕野浦ニ至ル、海上直徑七里壹拾貳町、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕壹岐國石田郡　實測　乙島、從西岬至東岬三町一十三間　妻島、周廻二十町一十九間、机島、周廻三町五十七間、　平島、周廻八町一十間、　春島周廻三十二町三十四間、　長島、周廻三十一町四十二間、　黑瀨、周廻五町一十間半、　大島、周廻一里二十九町一十間、　前小島、周廻二町一十三間、　後小島、周廻四町四十三間、　嫦娥島、周廻四町四間、　鳥島、周廻四町二十七間半、　飛島岬、周廻五町四十三間半、　火島、周廻一町一十三間、　アセ島沖周廻四町二十七間、　アセ島、地周廻七町七間、　赤島、周廻二町一十間、　黑島、周廻三町三十五間、　遠測　鯨瀨　黑瀨妻島　小島大印通寺浦　小島小同上　短瀨　ノブ瀨久喜浦　折柱岩　ノブ瀨鯨山村　釜蓋瀨　鄕瀨　前瀨大　前瀨小　金白瀨　小机島　小平島　ニシソ根　大瀨　小島大渡浦頁　高瀨　折柱　黑

名稱

ノ海中ニ在リ、東西凡ソ三里餘、南北凡ソ四里餘、周廻凡ソ三十五里餘、土地膏沃、全島殆ド耕地タリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ石田郡ニ置キ、壹(イ)岐(キ)石(イ)田(シダ)ノ二郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、明治維新ノ後、石田郡ヲ廢シテ壹岐一郡トシ、長崎縣ヲシテ之ヲ兼治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕壹岐島 由岐

〔伊呂波字類抄 由國郡〕壹岐島 ユキノシマ

〔饅頭屋本節用集 以天地〕壹岐(イキ)

〔易林本節用集 下〕壹岐、壹州(イシウ)二郡下、管、四方一日、此州與對州曰二島、西戎襲來侵故、額請字佐備、貢皆異珍也、

〔古事記傳 五〕伊伎島は、万葉十五(二十五丁二十六丁)に、由吉能之麻と見え、和名抄にも壹岐島由岐とあるに因て、由伎を古訓と思人あれど、書紀繼體卷の歌に以祇とよみ、此記にも伊字をかき、壹字も由の假字にあらねば、本は伊伎なること明けし、然れども懷風藻に、伊支連と云姓を目錄には雪連とかき、又かの萬葉に由吉とあるなどを以て思に、必由伎とも通はし云べき故ある名義と見えたり、(行も雪はして伊伎とも云り、これも同じ例なり、)故思に、書紀天武卷に、齋忌此云踰既とある齋忌は伊牟、伊波布、由麻波留、由々志、由豆、伊豆などさま〴〵に云言にて、伊と由と通へり、かゝれば齋忌も、古は伊伎とも云べし、さて(若くは息長帶比賣命の、辛國を證に事行しなりなどにもや、)此島にして神祭り坐とて、齋忌のことありけむ故の名にもやあらむ、(息吉は大舊に限るべからず、)又は辛國に渡るに、先此に舟とめて息む故に、息の島か、(されど國名には凡そ、曾いまゝかの國號なほてつけそめしが多かれば、後世の曾考に、理こそまされあらめ、實には當れりやあらずや定めがたくなむ、さりとてはたひたぶるに不可知とて有べきにしあらねば、人し疑しも心のかぎり推し量言はするなり、)

〔古事記 上〕伊邪那岐命(中略)妹伊邪那美命(中略)御合(中略)次生伊伎島、亦名謂天比登都柱、(自比至都以音、訓天如天、)

す事也、

右之書付、幷旅人之樣子をも見屆、無別條候付、兼而被仰渡之趣爲申聞、爲致一宿、今巳の刻爰元爲立、御方々樣ヘ差遣し申候、以上、

月日　　何村何某

西方鄕士年寄中

右之通にして止宿し、通行する國法ながらも、修行者と成りて入こむ時は、野宿といへる事を云ひらきとして、行度方へ見めぐりて、幾日にても國中に滯留して、番所有る所にて右之書付を番人へ渡して、國を出る事也、

今にては昔と違ひて、他國もの、薩州へ入事六ッかしからず、銅山、金山、殊の外繁昌して、人數入りても日雇拵あり、何國にても金山へ入ては、其山法ばかりにて、人改も無事故に、金掘といふて番所を通入ば、無滯御通有事也、扨薩州侯の領分へ入ては、宿杯は自由にせし事也、町場には旅人宿と記し、大文字の看板を出して有、六十六部は木錢十二文にて、無心遣止宿する事也宿に取る所は二十四文にて、十二文は國守より下さる事也、乍然十二文の木錢にて、自分食事を調ざれば、宿の者はしらぬふりして、薪に鍋を添て渡すのみ也、達者にさへあれば、中々氣散じ成事にて、宿を借る心遣ひもなく、路銀の懸る世話もなく、安氣也べし旅中也、薩州一見の志あらん人は、修行者の體よろし、其人の爲にもならんと爰に記しぬ、

壹岐國

壹岐國ハ、イキノクニト云ヒ、又ユキノシマトモ云フ、西海道ニ屬シ、肥前國ノ西北約七里餘

墾田、相承爲佃、不願改動、若從班授、恐多喧訴、於是隨舊不動、各令自佃焉、

(類聚國史百五十九田地)延曆十九年十二月辛未、敕大隅薩摩兩國百姓墾田、便授口分、

(西遊雜記三)薩摩侯の領分に入ル時には、關所において荷物を改め、見せ金と稱して金子三步計も所持せざれば關所を入れず、是は國に入て病死せるか、疾病ある時に、國所の物入にならぬ用心と見えたり、予(○古河辰)此國の一見は、一通りの旅人にては緘々盡見めつる事ならぬ樣に兼て聞及し故に、假に六十六部の修行者に身をやつして、國所にかゝりし故に、さして番人のとがめもなかりし也、然ども往來證文を一見とて、左の通ゆるし切手を渡し、村々において、此手形を庄屋年寄に見せて、何月何日何村に止宿せしといふ書付を取て通行すべしと云渡せし也、其書付の寫、

覺

備中國下道郡岡田村
修行者　古松軒一人

一年五十歲

一笈一ッ內に本尊地藏尊、其外何々、

一金子何兩

右者國所證文路錢持參、水引新田宮、鹿兒島福昌寺、正八幡霧島山、六十六部經文爲奉納、昨日當御番所江入來候付、相改、受元ニ致一宿、今日午剋爲立差越候條、御領分中少も爲滯差通、經文奉納相濟候者、其最寄御番所より、無油斷歸國可被申付候、以上、

何月何日　何之何某印

郷士年寄中江

此書を、止宿せんと思ふ所にて、年寄(村役人の事)宅に行て差出せば、年寄よりも又左之通の書付を渡

薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風殘れり、器物も酒の銚子といふものなし、皆錫の徳利なり、膳も宗和などいふ膳は一ツも見へず、皆二枚脚の木具なり、扨多くは皆土器類を用ゆ、只京都にて官家に交る心地す、其外元服の儀式、婚姻の禮法、甚嚴重にして古法ある事、余〇南谿などが知らざる事のみ多し、其外にも狩の作法、犬追物の式等は、薩摩に殘れる事、世の人も知る所也、余彼國に有し時、或町家の好みにより、彙好が徒然草を講せし事ありしに、鷹の鳥の付やうの所にいたりそらにてはしかとおぼへざりしに、座につらなりしもの大かたは皆覺え居て余に語り聞せ、猶色々委敷法ありとて、鳥の付樣の圖を出して示せり、町家の人だに斯のごとし、誠に恥べきことも也き、其外近き事は何更にて、何事も故實に從ひ、人皆かたく守り居て、假初の事にも等閑にはせず、是は此國四方にきびしく關所を居られて出入鳥からず、他國の人も入來らず、自然に隔りて繁花の風にも押移されざる故也、近き年はやう〳〵に他國の人も往來するやうに成て、器物杯も好事の家には、當世の品を調へ持るも間々あり、又下女はしたなどは、今に丸ぐけの帶なれども、妻娘などは帶は幅廣くなり、髮形ちゝも漸上方を學ぶ家もあり、

〇按ズルニ、人國記ニ記スル所ノ、此國ノ風俗ノ事ハ、大隅國篇ニ載セタレバ參照スベシ、

名所

〔日本鹿子十四〕同國〇麑嶋中名所之部

奥小島（オコノ）　いわうが島　向の島

すべて當國は島々多し、かうのみなと、こし璽など云所有、舊記にのする名所すくなし、奥小島と云は、往古平康頼流されし所といへり、

雜載

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月丙申朔、薩摩多褹隔化逆命、於是發兵征討、遂校戸置吏焉、　九月戊寅、討薩摩隼人軍士、授勳各有差、

〔續日本紀十聖武〕天平二年三月辛卯、太宰府言、大隅薩摩兩國百姓、建國以來未曾班田、其所有田、悉是

風俗

（西遊雜記 四）薩州の武風を見るに、鎌倉の遺風有りてあしからず、東都へ幾度も參勤して、上方筋の風俗を見し士は、中國筋の士風とさして替りし事はあらざれ共、外城に在宅して、薩州の地を離れざる士は、其容體土佐繪に寫せし士のごとく、長き刀にはさも見ゆるやふ成短き袴、言語も國なまりにて解しがたく、いかにも古しへのぶしのかゝる風俗ならんと、賴母敷體也、秀吉公にこそ手も無く責破られし事なれ、何國の戰ひにても、薩州軍はねばり强くして、きたなき負をせず、士著の側尤其ことはり有べし、百二十餘外城にて、士給三万餘、五石取十石取も土著して、自ら耕して作り取にする時には、馬も養はれ、三人も五人は自由に扶され、身體も大丈夫と成て、寒暑も衣食もいとはぬやうに成物なり、上方筋の武風は是に反して、平生の身持十人に七八人迄甘を食し厚く着し、榮耀に暮し、至て寒く至て暑き節などは、いかゞあらんと賴母しからぬ風俗あり、薩州は海內西南のはしにて、地面强堅固にて、要害いはんかたなし、島津家數代地をかへず、其ことわりなきにあらず、勝地を給ふといふべし、然ども邊鄙なるゆへに、婦人の風俗はいとゝあしく、言語は聲高にて、尻張の吟の强き音故に、甚だ解がたし、中以下に於ては、一笑せる言葉多し、中にも脇をトウゾタと稱せる事にて、腰の物脇指など・いふては、土人は一向に知らぬ名也、是等の事を以、僻地なるを知るべし、

（西遊記 二）獵犬

薩摩は武國にて、若き人々山野に出て、鳥獸を獵る事、他國よりも多し、すべて山野に獵するには、よき犬を得ざれば不叶事なり、彼邊の犬常の人家に養ひ飼ふものは長ケ低く、上方の犬よりも少し小なり、常に座敷の上に養ふて、上方の猫を飼ふが如し、至極行儀よく、上方の犬よりは柔和なり、異品といふべし、○下略

（西遊記續編 一）古朴

地ハ、他國ノ及ブ所ニ非ルコトヲ知ル、然レバ木綿、檳榔子、肉豆蔻、龍眼肉ト雖ドモ作ルベカラザルモノ無シ、當國ノ氣候斯ノ如クニ温ナリ、故ニ烟草上品ナルコト、他國ノ及ザル所ナリ、肥前島原領ハ、氣候モ僅ナル差ヒニテ、骨ヲ折テ烟草ヲ作レドモ及ブコト能ハズ、此名葉ナル烟草ヲ多作テ、他國ニ出サン者ナラバ頗ル大ナル物產ナレドモ、國府ノ土地ニ限ナド云フ俗說ニ惑ハサレテ、其他ノ鄕村ハ作ル者アルコト鮮シ、斯在温暖ノ地ニ於テ作法ヲ精クシテ、此ヲ植ル者ナラバ、爭デ國府ニ伯仲スル名葉ノ成就セザルコト有ン哉、太夫能ク此理ヲ熟察シテ、(六部耕作ノ二、法烟草ヲ極上品ニ作ル秘訣アリ、)俗說ニ拘ハルコト勿レ、又貴濟ノ如キ煖國ハ、肉桂ヲ多ク植シムルモ、利潤ノ甚厚キ者ナリ、其他橙柑橘柑柚子等ヲ始トシテ、果物ノ煖地ニ宜キ者極多ク、且鬱金、莪朮、大黃、巴豆、甘草等ノ藥物モ、亦夥シクシテ、名花奇草勝テ記スベカラズ、何レモ皆他國ニ出セバ國家ノ利ナリ、且又當國諸島ノ甘蔗ヲ作ルコトハ、信ニ天地應合ノ產物ニテ、殊ニ年來專ラ業トスル所ナレバ、其作法ト製煉ニ遺策ハアルマジキナレドモ、諸島ノ數多アル、土地ノ廣大ナル、心ヲ盡シテ此ヲ經營セバ、沙糖木魚等ノ年額次第ニ增加ハルコト有ルベシ、

人口

〔官中秘策五〕薩摩國　十四郡　〇中略

一人數拾九万四千三百拾貳人　内　拾万六千九百六拾人 男　八万七千三百五拾二人 女　高三拾壹万五千五石餘　薩摩國

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調　文化元甲子年　〇中略

皆私領

一人數貳拾三万八千四百九拾三人　内　拾貳万五千六百四拾七人 男　拾壹万貳千八百四拾六人 女　〇中略　高三拾壹万五千五石餘　薩摩國

諸國人數調　弘化三丙午年　〇中略

皆私領

一人數貳拾四万千七百九拾七人　内　拾貳万五千五百五拾三人 男　拾壹万六千貳百四拾四人 女　高三拾壹万五千五石餘　薩摩國

柄、及ビ椅櫈枕等ニ製シ、世人ノ珍重スル所ナリ、然レドモ柹木ヲ大坂ニ輸ノ年額一萬本ニ足ラズ、若此ヲ年々十萬本ヅヽモ出スニ至テハ、國家ノ利益頗大ナリ、櫃ヲ作ル法ハ、六編精作ノ法ニ詳ナリ、又當國ノ山深ク、木多キニ就テ、胎骨椎素ヲ造リ、髹椀及ビ層榼提盒、春慶、果盆、果盃、酒盃、盃盤等ノ漆器ヲ製シ其描金ヲ鳳翼精妙ニシ、或ハ螺鈿或ハ剔紅等ノ畫ヲ清絶ニシテ、夥シク此ヲ他邦ニ出ストキハ、此亦一箇ノ盛産ナルベシ、會津國ハ朱ノ無キ處ナリ、然レドモ漆器ヲ出スヲ以テ、人民頗ル殷ナリ、況ヤ當國ハ日本第一ノ朱國ナルヲヤ、其大利ヲ興サンコト必セリ、又薩隅日三洲ハ、茶ヲ作ルニ宜シ、中略○當藩ノ北境ハ、薩州モ日州モ肥後國球磨郡ニ界シ、山遠谷深ク、第十六番以下ノ氣候行ハル、宜ク地ヲ撰テ茶園ヲ立ツベシ、肥後球磨郡ニテモ、舊來茶ヲ作レドモ、相良領ノ茶ハ香烈甚強ク、味美カラズ、作法ノ疎故ナルガ故ナリ、極上品ヲ作ルニハ精細ニ意ヲ用ズンバアルベカラズ、極上品ノ茶ヲ作ル法ハ、六編製作法ニ詳カナリ、然レドモ中茶モ亦多ク作ルベシ、茶モ多ク出スニ至テハ、此亦盛ナル産業ナリ、又貴藩ハ楮木ヲ作ルニ甚宜シ、故ニ古ヨリ種々ノ紙ヲ出ス、然レドモ國君ヨリ局ヲ立テ、斡旋コト嚴ナラザルニヤ、盛産ト稱スルニ足ラズ、宜ク小倉、津和野、大洲、岩國等ノ製度ノ如クスベシ、貴藩ハ元來萬物豊饒ニシテ、政亦寛ニ過ギ、百姓産業ヲ俛勵者少シ、故ニ海濱ニ鹿角菜及ビ石花菜、海帶、海苔等海藻甚多ケレドモ、此ヲ採者少ク、大川ノ畔ニ蘆ヲ作レバ大利ヲ興スベキ、空地極テ多ケレドモ、植ル者稀ナリ、海邊及ビ諸島ニハ、苧麻夥シク生ズレドモ、麻ヲ績者甚少ク、或ハ刈ズシテ腐朽セシムルコト有リ、此ノ如キノ類甚多クシテ、勝テ紀載スベカラズ、此等ノ諸物ハ、人ヲ傭テ物産ヲ興サシムルト雖ドモ、國家ヲ利スルニ足ル、況ヤ境内ノ人民ヲ鼓舞シテ、地力ヲ盡サシムルニ於テヲヤ、予信淵○中略先年西海ニ漫遊セシ時ニ、貴國ノ海濱ヲ巡覧シ、薩州山川邊ノ野中ニテ、茄子丈八尺餘リアル古木ヲ觀キ、又大泊邊ニテ、一丈一尺許ナル蕃茄ノ古木ヲ觀タリ、皆是ヽ氣候ノ温ナルヲ以テ、幾年モ枯ズシテ木ノ如クニ成タルナリ、此ニ因テ貴藩ノ上

国產
貢獻

〔倭名類聚抄 五 國郡〕薩摩國 管十三（中略）正公各八萬五千束、本穎二十四萬二千五百束、雜穎七萬二千五百束、

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十七年十一月庚辰、制、諸國公廨、大國四十万束、上國三十万束、中國二十万束、就中大隅薩摩兩國各四万束、下國十万束、○下略

〔延喜式 二十四 主計〕薩摩國（行程、上十二日、下六日、）
調、鹽三斛三斗、自餘輸綿布、 庸、綿紙席、 中男作物、紙、

〔毛吹草 三〕薩摩
髭人參　莪朮　欝金　生臘　硫黄　桂心　紫根　白蘭　紅花　蘇鐵　棕櫚毛　黃楊木（櫛ニ用之）　楠木　椎茸　大名竹子（四季共ニ有ト云）　赤芋　水瓜　鳳蓮草　洪武鏝（コロセン）　燒物　筵　太布　芭蕉布　醬（色々ノ作物ナスル也、旅行ニ用之、）　櫛　黑檀細工（筆ノ竿、香合、簪挿等彩テ出之、）　杓子貝　螺（ホラガイ）　浮石　鹿皮　牧駒
アハモリ酒　此外琉球之名物

○按ズルニ、和漢三才圖會ニハ、右ノ外ニ、海人草、烟草、（國府）木蠟、肉桂（川內）等ヲ擧ゲタリ、

〔薩藩經緯記 下〕當藩ハ他邦ニ勝レタル靈地ナルヲ以テ、山嶽ハ往々ニ金銀、銅鐵、錫鉛、汞、（霧島山ハ硃ニ汞氣多シ、山内ノ池沼ノ中ニ、黃色ナル滋ノ多キハ、即チ是レ水銀ノ氣ノ自然ニ蒸發シタルナリ、）美玉、丹青、硫黄、礬石、諸藥石ヲ含有シ、其他白岩多クシテ、甍器（館野ノ白燒ノ土壚、其名既ニ日本第一ト稱ス、）ヲ製スルニ宜ク、紫埿樟埴甚ダ硬強ナリ、以テ陶器（加地木ノ玉流ノ土壚、及ビ薑家ノ薑ト土壚、其性ノ強キコト天下ニ比類ナシ、）ヲ夥シク燒出スベシ、當藩ノ甍器ハ、世人ノ珍重スル所ナレドモ、製造スルコト多カラザルヲ以テ、國益ヲ興サンコトヲ圖ルニハ、先ヅヨク其產物ヲ他邦ニ輸スノ乾沒ヲ審察シ、實ニ境內ヲ利潤スベキヲ察シ得タル上ハ、何レ國君ヨリ局ヲ立テ、嚴ク法ヲ定メ、掛リノ官人ヲ置テ、幹旋ニ非レバ用ヲ爲スコト能ハザル者ナリ、甍器陶器ノミナラズ、諸產業皆然リ、又樟木極多ク、殊ニ氣候温暖ナルガ故ニ、樟腦甚多シ、且上品ナリ、○中略若夫レ樟ノ幹ヲバ船板ニ鋸セ、樟腦ヲバ根ヨリ採シメバ、此亦一箇ノ國益ナリ、又櫨木甚多ク、日本一ノ上品ナリ、故ニ鎗

出擧稻

日置郡四十八箇村　高五万千六百四十八石四斗三合九勺
阿多郡弐拾箇村　高貳万三千五百七拾石四斗七升五勺
河邊郡三拾五箇村　高三万五千四拾五石七斗壹升八合
甑島郡貳箇村　高貳千七百九拾壹石三斗八升五合
頴娃郡七箇村　高壹万五千九百三拾九石三斗八升四合七勺
揖宿郡七箇村　高壹万六千八百五拾七石五升六合七勺
給黎郡六箇村　高壹万四百六拾四石貳斗七合
谿山郡六箇村　高壹万五千四拾七石八斗九升五合五勺
出水郡七箇村　高貳万三千七百三拾五石貳斗五升六合
高城郡八箇村　高八千四百四拾五石九斗九升壹合四勺略○中
右今度被ㇾ差ㇾ上郡村之帳面相改及ㇾ上聞ㇾ、如ㇾ御先代之高ㇾ所ㇾ被ㇾ成ㇾ下ㇾ御判物ㇾ也、此儀兩人奉行依ㇾ被ㇾ仰ㇾ付、執ㇾ達如ㇾ件

寛文四年四月五日

松平大隅守殿

〔日本鹿子十四〕薩摩國十四郡、中上國、四方二日略○中知行高三十一万五千二百五十石、
〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調略○中
薩摩國皆私領　一高三拾壹万五千五石六斗壹勺貳才
〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中
薩摩國、正稅公廨各八万五千束、國分寺料二万束、同寺十一面觀世音菩薩燈分料一千五百束、文殊會料一千束、修理官舍料二万束、救急料三万束、

藩封　田數　石高

建武元年二月二十一日　　左衛門權佐花押○闕崎証圖

島津上總入道久○眞館

〔慶應元年武鑑〕松平修理大夫茂久大廣間從四位少將○中略　七拾七万八百石　居城薩州鹿児島郡鹿児島江戸ヨリ海陸四百十一里、肥前國筋大坂迄海陸二百七十六里、鹿児島ヨリ同國京泊湊迄陸十一里、是ヨリ出船、　薩摩大隅日向三國主、兼領琉球國、

〔倭名類聚抄五國郡〕薩摩國　管十三田四千八百餘町

〔伊呂波字類抄左國郡〕薩摩國管十三(中略)本田四千六百四十町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕薩摩　田五千五百廿一町

〔運歩色葉集諸國之郡名〕薩摩廿四郡(中略)田數一万四千六百廿町

〔海東諸國記〕薩摩州　產硫黃、郡十三、水田四千六百三十町、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳

合肆仟拾町漆段内　　郡頭八十町

右衛門兵衛尉貳千五百九十一町六段　千葉介四百十一町二段　佐女島四郎二百十町四段

一圓國領二百十一町　方々權門寺社五百六町五段○中略

右件圖田注文、去文治年中之頃、依豐後冠者謀叛、彼亂逆之間、被引失畢、仍大略注進如件、

建久八年六月日○署名略

〔寛文印知集二〕目錄

薩摩國一圓

伊作郡　五拾貳箇村　　高三万八千四百一石三斗六升二合四勺七才

薩摩郡　三十三箇村　　高四万二千七百十九石一斗三升四合七勺五才

鹿兒島郡　二十七箇村　　高三万三百三十九石六斗九升四合二勺

建久八年六月日（○名略）

〔阿蘇文書一〕薩摩國滿家院地頭職（島津豐後守實忠跡）同國泉莊地頭職（同跡○中略）爲勳功賞、可支配一族幷當手之軍勢等者、天氣如此、悉之以狀、

延元元年五月六日　　　左中將（花押）

阿蘇前大宮司（惟時）館（○宇治）

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳（○中略）

市來院百五十町（島津御庄寄郡）　院司僧　滿家院百二十町（同御庄寄郡）　地頭右衞門兵衞尉（○中略）

入來院九十二町二段內　沒官御領地頭千葉介（○中略）　祁答院百十二町內（島津御庄寄郡）　沒官

御領地頭千葉介（○中略）　牛屎院三百六十町（島津御庄寄郡）　右衞門兵衞尉　永松二百四十町

院司元光（○中略）　山門院二百町內（○中略島津御庄寄郡）　莫禰院四十町（島津御庄寄郡）　地頭右衞門兵

衞尉（○中略）　知覽院四十町（○中略島津御庄同寄郡）　給黎院四十町（島津同御庄寄郡）　郡司小太夫重保

（○中略）　伊集院百八十町（○中略）

建久八年六月日（○名略）

〔阿蘇文書一〕薩摩國滿家院地頭職（島津豐後守實忠跡）同國泉莊地頭職（同跡）同國伊集院地頭職（同跡）同國日置南鄕地頭職（同跡）同國給黎院地頭職（同跡）爲勳功賞、可令支配一族幷當手之軍勢等者、天氣如此、悉之以狀、

延元元年五月六日　　　左中將（花押）

阿蘇前大宮司（惟時）館（○宇治）

〔色川本島津文書一〕薩摩國市來院名主職、豐後國井田鄕地頭職（島王丸跡）爲勳功賞、可被知行者、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年七月日

右書ノ口ニ如此有之 岡崎鏡團

奉行人藏人式部少輔

〔薩摩風土記 一〕鹿兒島と申候は、西に山をかたどり、東南は海なり、北は日本の地つゞき也、御屋形は山の前、まへどふりは大身の武家方也、圖〇略圖の如く、上野六丁やかたの北にあり、武家やしきを中にして南を下町といふ、十二町有、町々武家多し、此外山西に西田町あり、西國道中の入口也、

〔日本書紀通證 七〕重遠曰、大隅國熊毛郡熊毛神社、俗傳齋𡈽火火出見尊、神名帳曰、桑原郡鹿兒島神社、傳言亦齋𡈽火火出見尊、今按、三代實錄、薩摩國鹿兒島神、或曰鹿兒島籠島也、以無目籠得名、

〔西遊雜記 四〕鹿兒島南北凡三十町計、西の方山連々とし伊集院といへる所より壬里、此道は小山のたきを街道とし、左右の各々村里多し、此故に鹿兒島に入るに下り坂あり、南は海西の山際より三五丁、又八町計もあらん歟、せまきやふに見え侍りし也、東北の間白銀坂より、入口は嶮しき坂道、上下三里餘、所によりて屛風を立しごとく也、〇中略鹿兒島の要害がため、最上の地といふべし、

〔佐藤元海九州紀行〕鹿兒島ノ城下ハ、南北凡ソ三十一丁、東西ハ長ク入江多シ、市井殷富、土俗鎌倉時代ノ遺風アリト云フ、札辻ヨリ東ナル潮入ノ川ニ橋ヲ架シテ往來ニ便ス、町家ノ南ニ番所モ有リ、海濱ニハ船番所アリ、潮入ノ川多クシテ、町家ハ所々ニ有リ、新橋ト云フヲ渡レバ、本城ニ至ル、此都城ハ、屋形造ノ城ナリ、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳〇中略

殿下領島津御庄二千五百五十六町一反〇此行朱書、中略、

山門院二百町内島津御莊寄郡　老松庄二十四町四段〇安樂寺　日置庄三十町北郷内彌勒寺　下司小野太郎家綱〇中略

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕薩摩　十三郡、二百五十八村、

皆弘領
高三十一万五千五石六斗一勺二才

鹿兒島郡二十七村　谿山郡六村　給黎郡六村　頴娃郡七村　河邊郡三十五村　阿多郡二十村　日置郡四十八村　薩摩郡三十三村　伊佐郡五十二村　出水郡七村　高城郡八村　飯島郡三村　揖宿郡七村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名

薩摩　谿山郡、宇宿村、給黎郡、揖宿郡、俣河淵、頴娃郡、河邊郡、鹿籠村、赤生木村、阿多郡、花熟里村、日置郡、薩摩郡、寄田村、久見寄村、高城郡、網津村、出水郡、伊唐島、甑島、

〔塵袋　六〕オサナキチゴノホソノヲ竹刀ニテキルハ、前蹤ニヨル歟如何、日向國土記ノ心ニヨラバ、皇祖裒能忍耆命、日向贈於郡高茅穗槵生峯ニアマクダリマシテ、是ヨリ薩摩國閼駝郡竹屋村ニウツリ玉ヒテ、土人竹屋守ガ女ヲメシテ、其腹ニ二人ノ男子ヲマウケ玉ヒケルトキ、カノ所ノ竹ヲカタナニツクリテ臍緒切玉ヒタリケリ、其竹ハ今モ有リト云ヘリ、

〔薩藩舊記前集十二山田文書〕島津大隅式部諸三郎忠能同舍弟龜三郎丸等謹言上

欲早任當知行旨、下賜安堵綸旨、備將來龜鏡、薩摩國谷山郡內山田上別府兩村地頭職、同國散在名田畠相傳所領等事、

副進　一巻　所領相傳文書等

右被下綸旨於忠能一族島津上總前司貞久法師道鑑法名令誅罰武藏修理亮英時之時、忠能父子共馳先令生捕抽軍忠之間、可浴恩賞之旨、以別紙言上、至當知行所領等者、早下賜安堵綸旨、欲備將來龜鏡矣、仍恐々言上如件、

村里名邑

高城郡　合志　飽多　櫟木　宇土　新多、託萬
薩摩郡　避石　幡利　日置
甑島郡　管管〈○高山寺本、不載〉　甑島
日置郡　富多　納薩　合良
伊作郡〈○高山寺本、作許、作、〉　利納
阿多郡　鷹屋　田水〈○高山寺本、作水、〉　葛例　阿多
河邊郡　川上　稻積
穎娃郡〈エノ〉　開聞　穎娃
揖宿郡〈イフスキ〉　揖宿
給黎郡〈キヒレ〉　給黎
谿山郡　谷上〈○高山寺本、作上、山、〉　久佐、
鹿島郡　都萬　在次　安薩

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳〈○中略〉
。日。置。北。鄕。七十町　本郡司小藤太貞澄　同。南。鄕。内外小野十五町　地頭右衛門兵衛尉〈○中略〉宮。
里。鄕。七十町〈○中略〉
建久八年六月日〈○署名略〉

〔郡名一覽〕一薩摩國〈皆私領〉　薩州　四方二日　拾三郡
高三拾壹万五千五石六斗壹勺五才　貳百五拾八ヶ村
●鹿児島〈海陸四百十一里　大坂ヘ二百七十八里〉　)(●重留〈サツマ三万石〉　島津將監
)(○加治木〈同二万七千石〉　島津安房　)(○宮城〈同一万七千石〉　同圖書

鹿兒島郡

郷

町半許、西伊作田布施、南川邊知覽ヲ入、北鹿兒島伊集院ニ境ヲ接ス、周圍十二里廿二町十四間、村落七、(五ヶ別府村、山田村、中村、上福元村、和田村、塩田村、下福元村、平川村、)高一万二千六百四十八石二斗七合餘、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進圖中總圖田帳(〇中略)

谷山郡三百町内(島津御庄寄郡)　没官御領地頭右衞門兵衞尉(〇中略)

建久八年六月日(〇署名略)

〔地理纂考二鹿兒島郡〕鹿兒島郡

鹿兒島ハ、東姶羅郡、(近世始羅郡ト書ルハ誤レリ)南大隅郡、西谿山郡、北日置郡ニ接ス、東西七里、南北凡六里餘ナリ、郷一ヶ所、村落合テ二十ヶ村ナリ、

〔鹿兒島名勝考一鹿兒島郡〕鹿島郡鹿兒島府(和名抄鹿兒島郡加古志萬)

郡名には鹿の一字、地名には鹿兒の二字を用ゆといへり、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年十二月庚寅、是月西方有聲、似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、烟雲晦冥、奔電去來、七日之後乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、沙石自聚、化成三島、炎氣露見、有如冶鑄之爲、形勢相連、望似四阿之屋、爲島被埋者、民家六十二區、口八十餘人、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進圖中總圖田帳(〇中略)

鹿島郡三百二十五町(〇島津御庄寄郡中略)

建久八年六月日(〇署名略)

〔南浦文集上〕淨光明寺上梁文(〇中略)

薩摩州鹿兒島郡淨光明寺者、無量壽佛之道場也、山名松峯、島津高祖忠久公領此三國之時、與一遍上人之徒亞宜阿俱共來而同居此、

〔倭名類聚抄九薩摩國〕出水郡　山内　勢度　借家　大家　國形

人等、持兵剽劫覓國使刑部眞木等、於是勅、竺志總領、准犯決罰、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十月九日庚申、先是大宰府言上、〈○中略〉薩摩國言、同月〈○七月〉十二日夜陰雲、衆星不見、砂石如雨、撿之故實、穎娃郡正四位下開聞神、發怒之時有如此事、國宰潔齋奉幣、雨砂乃止、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳〈○中略〉

穎娃郡五十七町〈内島津御庄寄郡〉

府領社二十三町〈正八幡宮領〉　下司穎娃次郎忠康〈○中略〉

建久八年六月日〈○署名略〉

揖宿郡

〔地理纂考十四薩摩〕揖宿郡〈和名抄ニ、揖宿(以夫須岐)トアリ、建久八年薩摩國圖田帳ニ、揖宿郡四十町内島津御庄寄郡云々、下司忠元云々、下司平三忠秀云々ナド見ヘタリ、土俗此地天智天皇臨幸ノトキ、御船着御ノ地ナル故ニ名付タトイヘドモ、例ノ妄説ニシテ信ズルニ足ラズ、〉

〔地名字音轉用例〕入聲クノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

いふすき　揖宿〈薩摩郡〉以夫須岐

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳〈○中略〉

指。宿。郡。四十七町〈島津御庄寄郡○中略〉

建久八年六月日〈○署名略〉

給黎郡

〔地理纂考十四薩摩〕給黎郡〈和名抄給黎郡給黎トアリ、建久八年薩摩國圖田帳ニ給黎院四十丁、島津御庄寄郡々司小太夫錄保トアル是ナリ、〉東海岸ニ對シ、南指宿郡、西知覽郡、北谷山郡ニ接ス、郡内給黎、知覽ノ兩郷ヲ置ク、〈給黎今喜入ニ作ル〉

〔地名字音轉用例〕入聲フノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

きひれ　給黎〈薩摩郡〉岐比禮　給ヲキヒニ用ヒタリ、

谿山郡

〔地理纂考十四薩摩〕谷。山。郡。〈谷山郷〉倭名谿山ニ作ル、建久八年圖田帳ニハ谷山トス、今俗猶谷山ノ字ヲ用フ、鹿兒島ヲ去ル事、南方二

天平七年定正税頴稻貳仟陸伯玖拾束肆把

雜用壹伯捌拾漆束肆把

酒漆斗貳升參合高城郡酒肴

依天平七年閏十一月十七日恩勅賑給寡惸等徒人[ ]

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳事○中略

河邊郡二百二十町内同御庄寄郡　地頭右衞門兵衞尉○中略

建久八年六月日○署名略

〔地理纂考國郡十三〕頴娃郡

東揖宿郡、西北川邊郡ニ接シ、南ハ海ニ對ス、郡内頴娃ノ一郷ヲ置ク、續紀ニ、薩末比賣久賣衣評督衣君トアルハ是ナリ、評ハ朝鮮字ニテ、古ハ郡ノ字ニ換用フ、又和名鈔ニ、頴娃郡開聞頴娃トアレバ、開聞モ當時鄕名ナリシナリ、今開聞ノ社號ニ遺リテナル鄕名ナレ、和名抄ニ頴娃ハ江乃トアルヲ、古事記傳ニ曰、頴娃字ハ紀伊ノ伊乃字ナドノ例ニテ、土ノ音ノ韻ヲ添ヘタルノミナリ、和名抄ニ江乃トアル、乃ノ字ヲ削ルベシトイヘルハサルコトナリ、又曰、國人ノエトモ云フ、其モ上ヲ長ク引キ呼ナリ云々トイヘレド、國人更ニエイトハ云ハズ、薩摩國圖田帳ニ、頴娃郡五十七丁云々ト見ヘタリ、

〔地名字音轉用例〕韻ノ音ノ字ヲ添タル例

え　頴娃薩摩江乃ヱノ　續紀一ニ、衣評エノコホリトアル是ナリ、郡ヲ評ト云コトハ、書紀ニモ其外ニモ例アリ、神代ノ可愛エノ山陵モ此地也、此事ハ、古事記傳ニ委云リ、サテ此郷名、今國人ハエイト云リ、和名抄ニ江乃トアルハ、娃字ハアシタルハイカヾ、郡ニ此ヘリ、エノ郷ト云トキハ、ノノチ通テ書ルニコソアラメ、イノ音ナルヲユニ用ヒタ誤タルナリ、アイヲエニ用ルハ、愛エ埃エ哀エナドノ如シ、

〔日本書紀神代二〕久之天津彦彦火瓊瓊杵尊崩、因葬筑紫日向可愛之山陵、可愛此云埃

〔續日本紀文武一〕四年六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、衣評督衣君縣、助督衣君弖自美、又肝衝難波、從肥

志、而膂宍之空國自頓丘覓國行去、（頓丘此云毗陀烏、覓國此云矩貳磨儀、行去此云騰褒屢、）到吾。田。長屋笠狹之碕矣、其地有一人、自號事勝國勝長狹、皇孫問曰、國在耶以不、對曰、此焉有國、請任意遊之、故皇孫就而留住

〔古事記 上〕故後木花之佐久夜毘賣、（〇中略）即作無戸八尋殿、入其殿內、以土塗塞而、方產時、以火著其殿而產也、故其火盛燒時、所生之子、名火照命、（此者隼人阿。多。君之祖）

〔古事記傳 十六〕隼人阿多君之祖、（〇中略）阿多君は、（多を清て讀べし、濁るは非なり、）地名に由れり、（〇中略）さて阿多てふ地は、和名抄に、薩摩國阿多郡阿多鄕あり、是なり、（此名今も存り）書紀に、吾田長屋笠狹之碕、神武卷に日向國吾田邑（古は薩摩までかけて日向國と云しこと、上に云るが如し、日向國臼杵郡英多あれど、其にはあらず、）などある、皆此地を云り、

〔日本書紀 三 神武〕神日本磐余彥天皇、（〇中略）年十五、立爲太子、長而娶日向國吾。田。邑。吾平津媛、爲妃、生手研耳命、

〔日本書紀 三十 持統〕六年閏五月乙酉、詔筑紫大宰率河內王等曰、宜遣沙門於大隅與阿多、可傳佛敎、

〔釋日本紀 十五 述義〕隼方案之、阿多者、薩摩國有阿多郡、可謂薩摩國也、

〔唐大和上東征傳〕廿日乙酉、（〇唐天寶十二年十二月）午時第二舟著薩摩國阿多郡秋妻屋浦、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳（〇中略）

阿。多。郡。二百五十町（〇中略）

建久八年六月日（〇署名略）

河邊郡

〔地理纂考 十一 薩摩〕川邊郡

和名抄曰、河邊、（加波乃倍）建久八年薩摩國圖田帳ニ川邊郡二百二十町、地頭右衞門兵衞尉トアリ、此地上古吾田國內ナリ、東南給黎揖宿ノ兩郡ニ境ヒ、北阿多谿山ノ兩郡ニ接シ、西海岸ニ連リ、郡內川邊勝目、加世田、南方ノ四鄕ヲ置ク、

〔續々修東大寺正倉院文書 三十五帙六〕河。邊。郡。

阿多郡

木、鶴田、宮之城、山崎大村、關牟田ノ八ケ鄕ヲ伊佐郡トイフ、此郡ハ古書ニ見ヘザレバ、此地伊佐郡ニテ伊佐ト伊作ト相似タレバ、後世伊作ヲ誤レルニヤト思ヘド、ナホ和名鈔ノ郡ノ次第、出水、高城、薩摩、甑島、日置、伊作、阿多、河邊云々ト續キタルニ、地理符ハズ、今ノ伊作鄕ヲ古ノ伊作郡ト見ル時ハ、今モ郡ノ次第和名鈔ニ違ハザルヲ、伊作郡ヲ廢シテ伊佐郡ヲ置レシハ詳ナラズ、國田帳ニ伊作郡ノ名見ヘタレバ、建久八年ヨリ後ナル事疑ナシ、一說（一郡一鄕ナルハ和名鈔揖宿郡揖宿、給黎郡給黎ナド見ヘタリ、又外ナラヲカ）偖伊作郡ヲ廢ラレシハ、一郡トスルニ、足ラザルガ故ニ一鄕トシテ阿多郡ニ隸ケラレケム、和名鈔ニ阿多郡鷹屋トアルハ、加世田ノ地名ナルヲ、加世田ハ今川邊郡ニ屬シタリ、其ハ何頃トモ知ラレザレド、是等ノ改易アリシト、伊作モ同時ニテヤアリケン、カタ〴〵推按ズルニ、伊作郡ヲ廢シテ薩摩國十三郡ノ內一郡闕タレバ、薩摩郡ノ半ヲ割テ伊佐郡ト號セシヲ、後ニ伊佐ト誤レルニヤアラン、其ハ如何トイフニ、國田帳ニ當時今ノ伊佐郡ノ地ハ、薩摩郡ノ內ナレバナリ、此ハイタ〴〵强說ナガラ今按ヲ述ナ後勘ニ備フ、

〔地理纂考薩摩國入〕伊佐郡（伊佐ノ郡名、和名鈔其外ノ古書ニ見ヘズ、往古宮之城及ヒ鶴田大村並曽木關牟田山崎七ケ鄕ノ地ヲ合セテ、郡名ヲ號トイヘリ、（中略）又郡名號ノ起ニ屬シタル牛山鄕ヲ牛屎院トイフ、（中略）此郡號テ今伊佐ノ一郡トス、〇中略）當郡ハ、東南薩摩國薩摩郡ニ境ヒ、西同國出水郡ニ接シ、北日向諸縣郡、丑方大隅菱刈郡ニ接ス、郡內牛山、佐志、曽木、鶴田、宮之城、山崎、大村、關牟田ノ八ケ鄕ヲ置ク、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進圖中總圖田帳〇中略

伊作郡二百町（正八幡宮領田廿二町五段廿）　地頭右衞門兵衞尉〇中略

建久八年六月日〇署名略

〔地理纂考十三薩摩國〕阿多郡（往古薩摩國ノ地方ヲ吾田ト云ヘリ、阿多郡ハ吾田ニ作ル、其地今僅ニ一鄕ニ殘レリ、）

〔日本書紀二神代〕皇孫遊行之狀者、則自槵日二上天浮橋、立於浮渚在平處、（立於浮渚在平處、此云羽企爾磨梨陀毗邏而陀陀志）

日置郡

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳(略○中)
甑島四十町内(島津御庄寄郡)　設官御領地頭千葉介(略○中)
建久八年六月日(名○略署)

〔地理纂考(薩摩四)〕日置郡
和名鈔日置ハ比於木、建久八年圖田帳、日置郷七十丁、本郡司小藤太貞隆、マタ同書、日置庄三十丁、下司小野太郎家綱ト有リ、土人日置ヲヘキト云フ、

伊作郡　伊佐郡

〔太宰管内志(薩摩中)〕伊作郡
輿地圖を按ずるに、伊作郡東は大隅國菱苅、桑原二郡、南は高城薩摩二郡、西は高城出水二郡、北は肥後國球摩郡に隣りて、東西三四里、或五六里、南北は十里餘あり、中に千代川あり、(鹿山雷立辨云、伊作と伊佐とは別なり、伊作と云は日置と阿多との間にありて、僅に一郷の地なれば、後に阿多郡内に入れて、郷となしたる物と聞ゆ、されば今伊佐郡と云は、後に出水高城二郡内を割て置たる物なるべし、と云へり、いかにもさる事なるべく思はるれど、作をサの假名にも用ふべければ、しばらく伊作を伊佐と定めて引出たり、なほよくかむがふべし、)

〔地理纂考(一)〕薩摩國
古ヘノ伊作ノ郡名ハ、今郷名ニ遺リテ、別ニ伊佐郡アリ、サルハ字形相似タレバ、作ヲ佐ニ誤レルニカト思ヘド、伊佐郡ハ古ノ伊作郡ノ地ヨリハ北ニ距ル事二十餘里ニテ、肥後國ノ界ナレバ、其地異ニシテ、文字ノ誤トモ云ヒ難シ、

〔地理纂考(十薩摩頴娃郡)〕伊作郡
鹿兒島ヲ距ル事、西南六里十八町餘ナリ東谷山南田布施北永吉伊集院ニ接ス、(略○中)伊作ハ和名鈔ニ伊祚(イサク)郡又伊作(注ニ伊佐久)トアリ、サルヲ今伊作郷ノミアリテ郡ハナシ、此郡ハ和名鈔ニ載スル處モ、日置阿多兩郡ノ間ニアリテ、今ノ伊作郷ノ地ニ能ク當レリ、又建久八年、薩摩國圖田帳ニ、伊作郡二百町云々ト見ヘ、日置ノ郡ト相並ビテ伊作ノ郷名ハ見ヘズ、サテ薩摩郡ノ内牛山、佐志、黒

飯島郡

采、樋脇、永利、平佐、隈之城、高江、東郷ノ七郷ヲ置ク、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳（中略）

薩摩郡三百五十一町三段（中略）

建久八年六月日（署名略）

〔麑藩名勝考一〕飯島郡（和名抄飯島、古之木之島）

飯島（續日本紀、大日本史作千數、海東諸國紀、日本國本藍甑島、式備志作天堂、上甑中甑下甑三嶋新島統呼二甑島一、但中甑屬二上甑一、今按唐書有二流求小王一云々、所謂流求耶、疑其島一乎、續紀甑隼人あり、故甑は隼人の訛なるべし、）

〔地理纂考七薩摩〕飯島郡

飯島（常郷ハ上下二ツニ分レテ、島形南北ニ長ク、北ヲ上トシ、南ヲ下トス、上甑ト下甑ト相離レテ上下相距ル事一里、二島ノ間ヲ伊串田道戸トイフ、潮流甚急ニシテ汐時ヲ以テ通船ス、上甑ハ島形方ニシテ、山林少ク、四面ニ海磯多シ、下甑ハ南北長ク、東西ハ狹ク、大形山林ニシテ海灣ナシ、二島ニ皆海岸ニアリ、鹿島右千本島ノ外ハ人家ナシ、）鹿兒島ヨリ西海陸二十四里、上甑島周圍十四里三町餘、村落八、（中津村、中野村、小島村、瀬上村、浦村、里村、江石村、平良村、）高千五百十二石六斗六升二合餘、（中略）惜島名ヲ甑トイヘルハ、中甑島ノ中ニ、東西ヘ潮ノ通フ海門アリテ、串瀬ト云フ、其内ニ甑形ノ巨岩アリ、島民是ヲ甑大明神ト稱ス、是ヨリ出タルベシ、是ニ因テ思フニ、串瀬戸ノタシハ、甑ノ略語ナルベシ、（中略）

下甑島　上甑島ヲ南ニ距ル事僅ニ一里、周回拾五里村落六、（手打村、青瀬村、長濱村、藺牟田村、片浦村、瀬々之浦村、）高二千六十六石六斗七升二合、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年十一月壬子、遣唐第四船來泊薩摩國甑島郡、

〔三代實錄二十三淸和〕貞觀十五年五月廿七日庚寅先是太宰府言、去三月十一日不知何許人、舶二艘載六十人、漂著薩摩國甑島郡、言語難通、問答何用、

〔北條九代記下〕正慶三年十一月廿一日、異國舟若干、著薩摩國甑島、大風吹、賊舟遁竄訖、

甑島（コシキシマ）	管十二
同（六之木之守）	管十三
同	十三郡
同（闕文知）	
同（コレキシマ）	同
同	同
同（コレキシマ）	同
同	同

出水郡

〔地理纂考（九薩摩）〕出水郡（古名山門院トイフ、又和泉トモ書リ、和名抄ニ出水郡伊豆美ナリ、又建久八年ノ圖田帳ニ、和泉郡三百五十丁云云トアリ、）

當郡ハ、薩摩國ノ西北ノ肥ナリ、東伊佐郡ニ境ヒ、南薩摩高城ノ兩郡ニ接シ、西海岸ニ對シ、北肥後國葦北郡ニ接ス、郡內出水、高尾、野田、阿久根、長島ノ五ケ鄉ヲ置ク、

〔續日本紀（三十五光仁）〕寶龜九年十月庚子、勅太宰府得今月二十五日奏狀、知遣唐使判官海野等乘船到泊、其寄乘唐使者、府宜且遣使勞問、十一月乙卯、第二船到泊薩摩國出水郡、

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳（○中略）

和泉郡三百五十町　下司小太夫兼保（○中略）

建久八年六月日（○署名略）

高城郡

〔地理纂考（十薩摩）〕高城郡

當郡ハ、東南薩摩郡ニ境ヒ、西海ニ出、北出水郡ニ接ス、郡內高城水引ノ兩鄉ヲ置ク、（和名抄ニ高城ハ太加木トアリ、方言タキトヨブ、諸錄郡高城ニ分テルナリ、）

〔薩摩國圖田帳〕薩摩國　注進國中總圖田帳（○中略）

高城郡二百五十五丁內　島津御庄寄郡（○中略）

建久八年六月日（○署名略）

薩摩郡

〔地理纂考（六薩摩）〕薩摩郡（倭名抄作薩麻）

當郡ハ、東伊佐、始羅ノ兩郡ニ界シ、南日置郡ニ續キ、西海ニ出、北高城出水ノ兩郡ニ界ヒ、郡內ニ、入

〔皇國郡名志〕薩摩國十三郡

高城(タカキ)　●高城　●京泊　ヲノ町　●西方　西海ニ向

甑島(コシキシマ)　上甑島外二島　一郡三島也

伊作(イサク)　●大口　一ニ伊佐ト云　日肥隅界

河邊(カハノベ)　●大浦　●片浦　坊津　南西出崎

揖宿(イブスキ)　郡町無シ　東海

谿山(タニヤマ)　二ケ村隈山　鹿兒島ニ並

鹿兒島(カコシマ)　鹿兒島　●入來　隅界東海ニ向　向島

薩摩　●市來　●串木　●向田　●水引　川內川　羽島岬　隅界ヨリ西海ニ貫

日置(ヒオキ)　●伊集院　西海

阿多(アタ)　阿多　極小郡河邊ニ連

頴娃(エノ)　●大川　南海

給黎(キヒレ)　郡町無シ　東海

出水(イツミ)　●米津　●出水　●高尾野　●長島　●阿久根　肥後界天草ニ向

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕薩摩

六國史古書	鹿島		
延喜式	鹿島(カコシマ)	谿山(タニヤマ)	給黎(キヒレ)
倭名抄	鹿兒島(加古志万)	同(多仁也末)	同(岐比禮)
拾芥抄	同	同	同
諸書	同	溪山(知元)　溪山	給黎(知元)　給黎
郡名考	同(カコシマ)	谿(タニヤマ)	給黎(キレイ)
天保鄉帳	同	同	同
明治沿革帳			
地誌提要	同(カゴシマ)	谷山(タニヤマ)	同(キヒレ)
郡區編成	同	谿山	同

國府　郡

〔太閤記十〕島津修理大夫義久降參事

伊集院左衛門大夫、大和中納言殿へ走入て、義久事一命をたすけられくだされ候やうに、ひとへにたのみ奉る趣申けり、若御僞惑もなくおはしまさば、是非に及ばず、切腹に及ぶべきとふかうし見て申しかば、秀長よきにはからひみんとて、細智三河等を金吾に相添、木下半介を以て秀吉へなげき見給ふ、○中略秀吉卿聞召給ひ、島津事數十年公儀を蔑如し奉り、自由の奸謀はなはだもつてかろからず、しかる間此つゐで幸に根を絶ち葉を枯し、仰付くるべしといへ共、頼朝卿以來より、連綿として久しき島津を、ほろぼさんもいかゞしく思召、安堵せさせ給はんやうにのたまふ、○中略五月十〇天正十五年七日、義久御禮申上し處、かへつて御ねんごろの仰ありて、本領安堵せさせ給ふ、是によつて島津家老七人、いづれも人質出し奉り、御禮申上けり、

〔地理纂考十薩摩高城郡〕麓村

屋形ヶ原　方三四町平坦ニシテ今陸田ナリ、可愛山ヨリ西北四五町ニテ、府ノ一面高一丈餘、切岸ノ如ク、其下ハ往還ナリ、古ヘ薩摩國府ニテ今屋形ヶ原ト稱ス、國分寺ノ址モ、是ヨリ東北四五町、水引郷大小路村ニ現存シテ、高城郷ト境ヲ接ス、東郷ノ內國司城及司野等モ、皆此國府ニ就タノ名ナリ、ソモ〳〵此所ノ古ヘノ街道ハ、延喜驛傳式ニ、驛路ノ次第、市來、英根、網津云々トアリテ、今ノ街道ヨリ西南一里餘海邊ナレバ、今ノ道ノ開ケシハ、延喜ノ後ナル事明ラケシ、

〔倭名類聚抄五國郡〕薩摩國、管十三、○略　出水伊豆美　高城太加岐　薩摩　飯島古之木之萬　日置比於木　伊作伊佐久　阿多　河邊加波乃倍　頴娃江乃　揖宿以夫須岐　給黎木比禮　谿山多仁夜末　鹿兒島加古之萬

〔延喜式二十二民部〕薩摩國、中、管出水、高城、薩摩、飯島、日置、伊作、阿多、河邊、頴娃、揖宿、給黎、谿山、鹿兒島、○中略　右爲遠國、

〔和漢三才圖會八十〕十四郡、　出水、高城、薩摩、飯島、日置、伊作、阿多、河邊、頴娃、揖宿、給黎、露山、鹿兒島、智覽、

[illegible]

ノ玄孫貞久、少貳大友氏ト共ニ官軍ニ應ジ、九州警固使トナリ、仍テ守護ヲ領シ、始テ鹿兒島郡東福寺城ニ治ス、足利尊氏ノ西奔スル、貞久之ニ屬シテ功アリ、第三子師久守護ヲ襲ギ、碇山ニ居ル、薩摩郡子伊久ノ時、叔父氏久ト倶ニ官軍ニ屬シ、後復足利氏ニ降ル、應永十四年、伊久卒シ、氏久ノ子元久、代テ守護ヲ領シ、清水城鹿兒島郡ニ居ル、後四世忠昌ニ至リ、內訌屢興リ、國勢大ニ壓マル、其三子忠治、忠隆、勝久、兄弟相繼ギ、委靡振ハズ、大永中、勝久其再從弟忠良ノ子貴久ニ封ヲ讓ル、貴久頗ル英武、漸ク故封ヲ恢復シ、勢日ニ盛ナリ、天正ノ初、其子義久伊東氏ヲ逐ヒ、日向ヲ略シ、大友氏ヲ耳川ニ敗リ、又肥後ニ入リ、龍造寺隆信ヲ擊テ之ヲ殺シ、筑前筑後ヲ侵奪シ、十四年、大友氏ヲ逐テ豐後ヲ併ス、明年、豐臣氏大擧西伐シ、義久降ヲ乞フ、因テ薩摩大隅二州及ビ日向ノ諸縣郡ヲ與ヘ、其弟義弘ヲ以テ嗣トナス、關原ノ役、義弘西軍ニ屬ス、義久之ヲ幽シテ以テ謝ス、因テ義弘ノ子家久、舊封ヲ領スル故ノ如ク、慶長七年、徙テ鹿兒島ノ鶴丸城ニ治ス、十四年、家久琉球ヲ伐テ之ヲ降シ、其大島等五島ヲ取ル、王政革新、鹿兒島縣ヲ置、

〔先代舊事本紀國造十〕薩摩國造

纒向日代朝景行、伐薩摩隼人等鎭之、仁德朝代日佐改爲直、

〔續日本紀元明四〕和銅二年六月癸丑、勅、自太宰率已下、至于品官、事力半減、唯薩摩多褹兩國司、及國師僧等不在減例、

〔續日本紀元正九〕養老六年四月丙戌、始聽太宰管內大隅薩摩多褹壹岐對馬等司有闕、選府官人權補之、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年正月己未、從五位下大伴宿禰家持爲薩摩守、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月四日己巳、島津左衛門尉忠久被收公大隅薩摩日向等國守護職、是又依能員緣坐也、

薩摩國ハ、延喜式曰、行程上十一日、下六日云々、所管十三郡、三十八鄕、周匝百三十里二十六町十六間三尺、東界大隅、北界肥後、西南至海島、ト見ヘ、和名抄曰、薩摩國管十三云々、聖原鈔ニ、日向大隅薩摩等國管ス、于中土ナド見ヘタリ、サテ薩摩モ日向國ノ内ニテ、太古吾田國、中古隼人國ト云リシハ、前ニイヘルガ如シ、カクテ薩摩ノ建國ヲ按ズルニ、續紀文武天皇大寶二年四月壬子ノ詔ニ、筑紫七國ト見ヘタレバ、此時イマダ建設ナカリシナリ、カクテ同紀ニ同年八月丙申、薩摩多褹、隔化逆命、於是發兵、征討遂校戸置吏焉、ト見ヘ、次ニ同月戊寅、討薩摩隼人、軍士授勳各有差、マタ同年十月丁酉、先是征薩摩隼人時、禱祈太宰府所部神九所、實頼神威、遂平荒賊、云々、唱更國司等(今ノ薩摩國ナリ)言、於國内要害之地、建柵、置戍守之、許焉、マタ同紀元明天皇和銅二年六月癸丑、勅自太宰率已下至于品官事力半減、唯薩摩多褹兩國司云々、マタ同三年正月戊寅、薩摩國貢舍人、ト見ユ、是ヨリ先阿多隼人ト記シタルヲ、大寶二年八月以來薩摩隼人トアリテ、阿多ノ號無キヲ思ヘバ、彼大寶二年八月、校戸置吏トアルゾ、ヤガテ薩摩ノ建置ナルベキ、諸國ノ建置ハ、彼制日向國云々、始置大隅國、トアルガ如ク記ナレタルヲ、其例ニ違ヒ、記シデマ備ナラザルト、校戸置吏トアル同年同月ニ、阿多ヲ改メ始テ薩摩隼人ト記ナレ、又和銅二年同三年ノ紀ニ、薩摩多褹兩國司云々、薩摩國貢舍人、トアリテ、諸文々ニ薩摩トノミ記シテ、阿多ノ號ナキヲ證トスベレ、又續紀、元明天皇和銅二年戊申、薩摩隼人郡司以下一百八十八人入朝、徵諸國騎兵五百人、以備威儀也ト見ユ、此郡司トアルニテ、イヨイヨ建國ノ事知ラレ、又威儀ヲ示サレシモ、建國ノ始ナルガ故ナリケム、サテ大寶二年八月、薩摩多褹隔化逆命云々トアルハ、イマダ建國ノ前ナレバ、此所ニ薩摩トハ云マジキナレド、此ハ後ヲ始ニ及ボシテ記サレシナリ、

(日本地誌提要七十三薩摩)沿革　古ヘ國府ヲ高城郡ニ置(府跡、今ノ高城郡國府村國分原ナリト云)、文治三年、島津忠久ヲ以テ守護トシ、大隅日向ヲ兼知セシメ、木牟禮(出水郡)ニ居リ、子孫職ヲ襲ダ、建武中興、忠久

宿驛

町五十九間　同縱(サビレ)(縱岬迄二十七丁五十間)　三里六町二十二間　大浦村水ケ濱　三里一十六町一十四間　阿多郡池邊村鹽屋堀浦　二十七町　入木村(至入木濱宿所五丁七間、北極高三十一度三十分、)　二里八町二十一間　(ヘキ)日置郡日置村帆湊浦、三十一度三十四分半、　三里二十六町五十六間　串木野村湊川口(沿川至街道七丁六間)　一里九町三十一間　同串木野濱、三十一度四十分、　一里三十三町一十四間　薩摩郡羽島村羽島浦、三十一度四十五分、　四里四町二十九間　久見崎村(沿川至早崎三十二丁一十八間半)　四町四十六間半　高城(タカギ)綱津(アウツ)村(沿川內川至京泊浦宿所五丁五十九間、北極高三十一度五十分半、從京泊沿川至月屋岬一十七丁一十五間、)　一里一十七町二十四間　麥之浦村西方　二里二十九町三間　出水(イツミ)郡阿久根(アクネ)村西目　二十三町四十六間　同西目佐潟(佐潟岬迄二十二丁四間)　三十一町五十九間　同波留　一十一町五十九間　同阿久根川口　二町四十九間半　同浦町　二里六町二十九間　知識(チシキ)村脇本、三十二度四分半、　二十六町三十六間　同番所下(至湘岬一十丁一十五間)　二十七町三間　同西目黑(至西目宿所三丁六間、北極高三十二度五分、)　三里一十町五十四間　知識村江內　二里三十三町三十七間　鯖淵村米之津　三里三十町二十七間(至國界一里二十四丁三十四間半)　肥後國葦北郡袋村

〔延喜式 二十八兵部〕諸國驛傳馬　○中略

薩摩國驛馬(市來、英禰、網津、田後、櫟野、高來各五疋、)傳馬(市來、英禰、網津、田後驛各五疋、)

建置沿革

〔日本國郡沿革考 三西海道〕薩摩　古唱更國、(續紀大寶二年、以征薩摩隼人、禱于太宰府所部之神、唱更國司柵于要害、以戍之、注云、唱更今薩摩國也、按唱發聲也、更五更之更也、隼人以火酢芹命之故事、永守宮門、每更發聲警夜、事見延喜式等、故以唱更訓隼人也、)中國、管十三郡、(延喜式十二郡、)二百五十八村、

鹿兒島(二十七村、延喜式作鹿島、圖書寮作鹿國什麼、)　谿山 六村　給黎 六村　頴娃(七村、續紀衣評、即是)　河邊(三十五村)　阿多(二十村、延喜式不載、神武紀日向國吾田邑、即此地、蓋薩摩國上世割日向國所置、神武時未折置、故以阿多管日向國、)　日置(四十八村)　薩摩(三十三村)　伊佐(五十二村、延喜式等作伊作、和名抄或作伊祚、)　出水 七村　高城 八村　甑島 二村　揖宿 七村

〔地理纂考 一 三國總說〕吾田國　隼人國　薩摩國

一間　鹿兒島新橋東頭　五町一十七間　同車町、三十一度三十六分　（從山東至鹿兒島、）薩州街道、通計八十一里一十町一十三間、

從肥後國湯浦本村大口街道至鹿兒島〇（中略）

薩摩國伊佐郡南榎原村、（又呼大口、）三十二度三分半、　二里一十八町四十二間（至國界一十八丁二間）　大隅國菱刈郡湯尾村

〔日本實測録（沿海六部）〕從薩摩國鹿兒島沿海至長崎

薩摩國鹿兒島郡鹿兒島新橋東頭　五町二十一間　同築町　二里二十二町四十四間　谿山郡福本村（至谷山濱町四丁三間、北極高三十一度三十一分、）　二里一町四十八間　和田村平川浦　二里二十二町三十五間　給黎郡下之村濱町（至上之村宮假所五丁三十六間、北極高三十一度二十二分、）　二里三十二町四十六間半　揖宿郡岩本村高目（又呼立目、）　二里三十三町二十二間半　拾二町村湊浦、三十一度一十四分半、　一里三十三町二十四間　山川村濱町、三十一度一十二分、　二里八町三十六間半　鳴川村兒ケ水浦　二里二町三十七間半　頴娃郡仙田村川尻浦、三十一度一十一分、　三里八町二間（至開聞岬一里六丁五十五間）　郡村前濱、（至郡村宮原八丁三十間）三十一度一十三分半、　四里三町四十八間　給黎郡西別府村塩屋浦、三十一度一十五分、　二里一十六町四十一間半　河邊郡鹿籠村枕崎浦　二里八町五十七間半　坊津村駒走（至泰莫ノ木浦四丁一十二間）　一十三町五十三間（至坊岬五町四十六間）　同泰莫ノ木浦　三十五町四十一間半　坊津村坊津浦、三十一度一十六分、　一十四町一十九間半　泊村（至塚ケ崎一十丁四間）　三里二十七町四十五間半　久志村末柏（至岳下國一十七丁一十一間）　二里一十七町五十七間（至鵜喰岬一里一十四丁五十八間）　同岳下　一里一町二十二間　秋目村秋目浦、三十一度二十一分半、　一里二十町五十八間半　寄生村黒瀬　二里一十四町一十六間　片浦村野間岬　一里二十二町三十一間　同野間屋敷　二里三町五十一間（至[illegible]岬一里一十一丁三十三間）　同片浦、三十一度二十五分、　二十一町三十八間　同小浦　九

也、溫泉八ヶ所有、副田、（在二入來一）湯田、（在二市來一）兒水、成川、（在二山川一）揖ノ濱、芝立、（在二指宿一）市比野、（在二蒲生一）大河内（在二出水一）也、

〔薩藩經緯記上〕日本總國ノ中ニ、草木ノ能ク繁行シ、物品ノ多ク化育スベキ諸州ハ、西海道ヲ以テ第一トシ、山陽道コレ次ギ、南海道及ビ畿内ノ地又コレニ次ギ、東海道及ビ山陰道又コレニ次ギ、北陸道東山道コノ二道ハ最下トス、又其ノ第一タル西海道ノ中ニ於テ、盛ニ物產ヲ開發シテ、大ニ境内ヲ富裕スベキ土地ヲ撰ブトキハ、日向、大隅、薩摩ノ三州ニ若ク者ナシ、其說何トナレバ、此三州ハ日本總國ノ極南境ニシテ、日輪ノ正焦最モ近ク、陽氣ノ光熾ヲ以テ土ト水トヲ炙リテ、化育ヲ薫煉コト他國ニ勝レテ強キヲ以テナリ、是故ニ、日本ハ萬國中ニ於テ、氣候ノ最モ良和ナル善域ニシテ、此三州ハ又日本中ノ最モ物產豐饒地ナリ、

〔日本地誌提要七十三薩摩〕形勢　東北連山環擁、肥後日隅ヲ界シ、地勢海ニ傾テ南ニ走リ、又勾屈シテ東ニ拱シ、大隅ニ對シテ一大灣ヲ抱ク、山脈其間ニ斷續シテ州内ニ布キ、川内川中央ヲ貫キ、西方一面、大小洲嶼、遠近環峙ス、地味肥瘠一ナラズト雖モ、百穀繁殖ス、民性勇悍、僻境ニ居ル者、極テ樸質トス、氣候極暑九拾七度、極寒四拾貳度、

道路

〔日本實測錄七街道〕從二筑前國山家一薩州街道至二鹿兒島一中○略

薩摩國出水郡鯖淵村米之津　四町二間　同浦町、三十二度七分、　二里三町五十七間　高尾野村野町　一里三町五十一間　野田村野町　二里一十六町一十八間　阿久根村　二町五十六間　同浦町、三十二度一分、　三十四町一十三間　同西目　二里二十町三十一間　高城郡麥之浦村西方　四里三町一十二間　大小路村浦町（至二薩摩郡新田村八幡新田宮一十七町三十六間）　四町七間半　薩摩郡東手村向田町　一里三十五町一十八間　日置郡串水野村芹野　二里五町五十七間　串水野村　七町三間　湊村湊浦、（又呼二市來一）三十一度四十一分半、　三里三十町四十五間　谷口村野町（又呼二伊集院一）　二里四町四十二間　鹿兒島郡犬迫村　二里二十九町一十一間　鹿兒島築町　五町二十

地勢
風俗

ニ吐火羅國ヲ出シ、又含衞國ヲ載テ云、並不詳其國地之所在トアリ、是當時イマダ筑州ノ寶島七島アルヲ知ラザル故ナルベシトアリ、和訓栞ニ至テ是ヲ發明ストイヘドモ、其風俗ヲ擧ル如キハ然ラズ、只僻島ナルガ故ニ、其人物諸島ニ勝リテ朴野ナルノミ、倂同書ニ、トカラ島薩摩ノ洋中ニアル島ナリトアルハサル事ナレド、書紀ニイハユル吐火羅ヲ、七島ノ寶島ナリトイヘルハ、イマダ其確證ヲ得ズ、

漢土人七島說　淸人周煌琉球國志略曰、汪楫錄云、七島者口島、中島、諏訪瀨島、惡石島、臥蛇島、平島、寶島也、人不滿萬、惟寶島較大、國人統呼之曰土噶喇、或曰、卽倭也、然國人甚諱之、殊不知有日本者、臣閒覽其國所設經書、悉係日本所刻、仍用漢文、旁印釣挑字母、且有寶曆、永曆、元和、寬永、天和、貞享、元祿諸名色、又皆日本僭號、則與日本素相往來明矣、一說、七島本國屬尙寧王、被薩割地與之、王乃歸、卽七島也、今非所屬、故不詳、前使臣汪楫至時、適七島人在其國、欲仰覲天朝使者、因得一見、至問之、則書手版曰、琉球國屬地、是未免國人諱之耳、汪又云、北山寂無人來、或云、倭常執王割地乃得返、卽北山實則非也、中山傳信錄曰、大島德島崎界云々、以上八島國人稱之皆曰、島火世麻、此外卽爲土噶喇本作度加喇七島矣、七島諸島、水程遠近見汪記錄、以非琉球屬島、故不載、コノ文ニ國人統呼之曰土噶喇トアルハ、琉球人常ニ淸國ニ告テ、七島ノ總名ヲ土噶喇ト云フガ故ニテ、書紀ニ所載吐火羅、覩貨邏等ヲ、七島ノ總名ナル證ニハ取リガタシ、又國史略ニ、七島本國屬尙寧王、被薩割地與之、王乃歸ト云ルハ、淸人無稽ノ妄說ニシテ云フニタラズ、朝鮮人所□海東諸國記渡加羅ニ作ルハ、一島ノ名ニシテ總名ニ非ズ、

〔萬國夢物語上〕海ヲ論テ薩摩ニ至ル○中略氣候寒國也、北極出地卅一度許也、○中略薩摩ノ富士山、南方海邊ニ在、遙南ニ硫黃島古云鬼界島也有、夫ヨリ遙南ニ行バ琉球國ナリ、西南海中ニ上甑下甑ノ兩島有、上甑海上七里、下甑十八里也、鹿兒島ノ大守一圓ニ領之、風俗害尖也、金銀、砂糖、白砂、硫黃、鰹等產物

平島府南八十六里、周圍三十二町、諏訪瀬ゟ南五里、臥蛇島ゟ八里、諸國記多伊羅、或平羅にも作る、前瀬、瀬尻、荒瀬等の洲嶼あり、

惡石島府南八十七里、周圍二里二町、諏訪瀬より南七里、諸國記惡石、小立神、唯瀬、筋瀬、苦瀬、鹽瀬、子襄瀬、筆子瀬等の洲磯あり、

寶島府南百五里、周圍二里廿町、惡石より十八里、平より廿二里、諸國記渡加羅、所屬二島東に在、入島子島と云、周廿七町、諸國記作島子、沖鰆の洲嶼有、又西南に在ニ入上子島、周廿町、又下子島、理口町大離の洲嶼あり、寶島を去ともに十二里、

〔地理纂考十二薩摩河邊郡〕七島

鹿兒島縣廳ヨリ南七島ノ內、口ノ島迄六十九里ナリ、在番官交代シテ島中ノ事ヲ管轄ス、七島トハ、口之島中之島、臥蛇島、平石島、諏訪島、惡石島寶島ノ總名ナリ、此諸島南海ノ中遠近ニ羅列ス、北ハ釜敍島ニ近ク、南ハ琉球ノ內大島ニ近シ、

吐火羅國　一說ニ云、往古七島ノ總名ヲ吐火羅ト云ヘリ、吐火羅ハ卽チ寶島也、後世ニ至テ七島中ノ一島ノ稱トナレリ、書紀孝德天皇紀曰、白雉五年夏四月、吐火羅國男二人、女二人、舍衞國女一人、被風流來于日向、齊明天皇紀、三年秋七月丁亥朔己丑、覩貨邏國男二人、女四人、漂泊于筑紫、言臣等初漂泊于海見島、乃以驛召、辛丑云々、幕雲都貨邏人、或本云墮邏人同紀、五年三月丁亥、吐火羅人乾豆波斯達阿請曰、願得賜送暫還于本國、當留妻以爲質、許之、卽與數十人入于西海之路云々、天武天皇紀、三年、吐火羅及舍衞婦女、獻藥種珍寶トアル吐火羅モ、今ノ七島ナリトイヘリ、按ズルニ、彼暫還于本國、當留妻以爲質トアルガ如キハ、遠カラヌ國ナルガ如ク聞ユレド、舍衞國ハ中印度境括地志ニ、沙祇大國、卽舍衞國也、在月氏南萬里云々トアリテ、七島ノホトリニ同名ノ島ヲ聞ザレバ、以上ノ說イカヾアラム、此事猶考フベシ、又和訓栞曰、トカラ島、薩摩ノ洋中ニアル島ナリ、日本紀ニ吐火羅ニ作ル、中山傳信錄ニ土噶喇ニ作ル、夫婦ノ間甚正シク婦人再緣セズ、夫ニ食膳ヲ進ズルモ眉ニ齊シクスト云、薩摩ヨリ琉球ニ至ルハ、必ズ此島ヲ經ルナリ、薩州人至レバ男女各酒瓶ヲ持來テ獻ズ、終ニ去レバ合掌シテ敢テ顧眄セズト云、大日本史外國傳

ハズ、島中樹林少ク、溪竹多キガ故ニ、居宅皆笹葺ニテ、床壁垣籬ヨリ、家具器物朝夕ノ薪ニ至ル、皆溪竹ニテ、其用ヲ成辨ス、竹工ニ熟シ、溪竹ヲ以テ諸器物ヲ製ス、

〔麑藩名勝考 薩摩一〕河邊郡　黑島。圖書編作ニ兩島 南去府四十三里、周廻三里十八町、

〔地理纂考 十二 薩摩河邊郡〕黑島

鹿兒島縣廳ヨリ西南三十八里、山川港ヨリ海上二十五里、硫黃島ニ續ク、同島ヨリ東方十里、硫黃島在番管轄、周廻四里十八町、平民二百八十八人、男百四十六、女百四十二人、戶數五十四、海岸皆石巖高ク相連リ、平沙灣曲ナシ、島中都テ峯巒疊重シテ、林木天ヲ覆ヒ、山色黑シ、是ニ因テ名ヲ得タリト云フ、絶頂モ又巖石多クシテ平地アル事ナシ、人家ハ岩石ヲ削リ、石垣ヲ築テ平地トシ、住所トセリ、村落二ケ所ニアリ、北ニアルヲ大里トイヒ、西ニアルヲ片泊ト云フ、當島山川多キ故ニ、流水ヲ山間溪谷ニ引キ、高下重々水田ヲ設ケタリ、然レ共稻田ニシテ、收穫少シ、又陸田ハ山間ニ地ヲ開キ、竹木ヲ燒キテ種植ス、別ニ糞ヲ用ヒズ、大凡二三年モ過レバ、土力盡ルヲ以テ、又別所ニ新地ヲ開クトゾ、此島小ナリトイヘドモ、山林多ク、屋久島ノ形狀ニ似タリ、

土俗　習俗凡硫黃島同ジ、人家笹葺ノミ、男子ハ漁釣ヲ專ラトシ、婦女ハ耕作ヲ業トス、又婦女ハ齒ヲ染レドモ、生涯眉ヲ拂ハズ、土人ノ習性最淳朴ナリ、

〔麑藩名勝考 一〕同郡〇河邊 七島。

口島 府南六十九里、周回二里廿五町、烏帽子崎、黒瀬、中瀬、九瀬等あり、海東諸國記に小川島と云に、九瀬等の事なるべし、屋久島、口永良部より南廿五里、是七島の海口故に口と云、

中島 府南七十三里、周回四里半、諸國記中島、平瀬、高飛崎、七ツ山、小瀬、大瀬、小山、濱崎等の洲磯あり、口島より南五里ほど、

諏訪瀬島 府南八十里、周回三里廿町、諸國記諏訪島、切石瀬、鐙見崎、小板之浦等の洲嶼あり、中島より七里、

臥蛇島 府南八十二里、周回一里半、諸國記臥蛇島、滿江浦地琉球臥蛇島、又外嶋に記し作ろ、前立神、後立神の小洲有、諏訪瀬西十里、口島より十二里、所屬小臥蛇島、周六町、諸國記に作小臥蛇島、又小[illegible]とし、

〔吾妻鏡七〕文治三年九月廿二日庚申、所衆信房（號宇都宮所）爲御使下向鎭西、是天野藤内遠景、相共可追討貴海島之旨、依含嚴命也、件島者、古來無飛船帆之者、而平家在世時、薩摩國住人阿多平權守忠景、依蒙勅勘、逐電于彼島之間、爲追討之、遣筑後守家貞、家貞粧軍船、雖及數度、終不凌風波、空以令歸洛云云、今度同意豫州之輩、隱居歟之由、依有御疑貽、有此儀、又去年、河邊平太通綱、到件島之由、聞食之間、殊所思召企給也云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年九月二日戊申、平内左衛門尉牧左衛門入道等流刑、就中俊職爲公人、與此巨惡之條、殊背物義之間、被配流硫黃島云云、治承比者、祖父康頼流此島、正嘉今又孫子俊職配同所、寔是可謂一業所感歟、

〔麑藩名勝考一薩摩〕河邊郡　竹島（日本紀武備志日本考、全浙兵制錄、日本風土記並曰、竹島佗計甚麼、書與所謂五龍山混者多、海東諸國記作高島、圖書編作鷹島、）

日本紀曰、皇孫遂登竹島、而臨覽國之形、孝德紀曰、薩摩之曲竹島之門是也、（今按、竹島は今の竹島一洲を指にあらず、黑島、硫黃、屋久等の諸島を統いふなるべし、）

〔地理纂考十二薩摩河邊郡〕竹島

鹿兒島縣廳ノ南二十六里ニアリ、（山川港ヨリ海上十三里、硫黃島ニ隷ク、硫黃島ハ當島ヨリ南ノ方三里ニアリ、硫黃島在番ヨリ管轄ス、）平民八十二人、（男三十六人、女四十六人、）戶數十二、闔島山野村里只篠竹ノ一種ヲ生茂セル故ニ、竹島ノ名ヲ得タリ、日本風土記、武備志、全浙兵制錄並ニ佗計志磨トアリ、海東諸國記高島ニ作ル、圖書編鷹島ニ作ル、今通シテ竹島ノ文字ヲ用フ、孝德天皇紀ニ竹島トアルハ是ナルベシト、或人云リ、然レド其確證ヲ得ズ、

島形　周廻三里、東西長ク、南北狹ク、高山峻嶺無シ、人居島ノ北面ニアリ、土人處々ニ陸田ヲ開キ耕作ス、四五年ヲ經レバ土力衰フル故ニ、又別ニ新地ヲ開ク、

土俗　風俗大抵硫黃島ニ同ジ、男子漁釣ヲ專トシ、婦人ハ農業ヲ業トス、婦女齒ヲ染テ眉ヲ拂

島形　此島周廻三里、島中ノ東北ニ硫黄岳アリ、其下ハ群山相連リ、其餘ハ原野ニシテ、頗ル平地多シ、人家ハ島南ノ港口ニ傍テ聚落ヲナセリ、土民男子ハ松魚ヲ釣リ、魚腊ニ作ルヲ產業ノ第一トス、耕作ハ專ラ婦人ノ業トナセリ、大抵麥及ビ蕃薯ヲ多ク植フ、

土俗　島中ノ婦人ハ眉ヲ拂ハズ、歯ハ或ハ染タルモアリ、染ザルモアリテ不同ナリ、屋宇ハ皆笹葺ニテ、茅茨ヲ用ヒズ、其笹ハ島產ノ篶竹ヲ用フ、此笹ニテ葺タル時ハ、凡ソ三十餘年ヲ保ツト云フ、富民ノ屋ハ、笹葺ノ厚サ三尺許ナルモアリトゾ、島內醫師ナキ故ニ土人病ヲ受ル時ハ、社司等ヘ請ヒ祈禱ヲナス、土俗甚ダ神社ヲ敬信シ、日參ヲナス者多シ、

〔源平盛衰記七〕信俊下向事

丹波少將成經ヲバ福原ヘ召下シ、妹尾太郎ニ預置、備中國ヘ遣シタリケルヲ、俊寛僧都、平判官康賴ニ相具シテ、薩摩國鬼界島ヘゾ放サレケル、○中略

俊寛成經等移鬼界島事

薩摩方トハ總名也、鬼界ハ十二ノ島ナレヤ、五島七島ト名附タリ、端五島ハ日本ニ從ヘリ、康賴法師ヲバ、五島ノ内チトノ島ニ捨、俊寛ヲバ白石ノ島ニ棄ケリ、彼島ニハ白鷺多シテ石白シ、故ニ白石ノ島ト云、丹波少將ヲバ奥七島ガ内、三ノ迫ノ北硫黄島ニゾ捨タリケル、○中略 此島々ヘハ、オボロゲナラデハ人ノ通事モナシ、島ニモ人稀也、自有者モ此土ノ人ニハ不似、身ニハ毛長生、色黑シテ牛ノ如シ、云事ノ言モ聞知ズ、男ハ烏帽子モキズ、女ハ髮モケヅラズ、木ノ皮ヲ剝テサテカブラニシタリ、ヒトヘニ鬼ノ如シ、眼ニ遮ル物ハ燃上火ノ色、耳ニ滿ル物ハ鳴下雷ノ音、肝心モ消計ナレバ、一日片時モ堪テ有ベキ心地セズ、賤ガ山田モ打ザレバ、米穀ノ類モ更ニナク、園ノ桑葉モ取ザレバ、絹布ノ服モ稀也、昔ハ鬼ノ住ケレバ、鬼界ノ島トモ名附タリ、今モ硫黄ノ多ケレバ、硫黄ノ島トゾ申ケル、

ヲ硫黃ノ三島ト名ク、又此三島ノ西海ニ、草垣、宇治等ノ數島アリ、又大隅國ノ南海ニ、種兒島、（周回三十里餘）屋久島（周回二十里餘アリ）一有リ、此二島ハ頗ル大ニシテ、一國ノ如シ、又此島ノ南海ニ永良部島（周回七里餘アリ、此チ口ノ永良部ト云フ、此ヨリ南海琉球諸島ニ永良部ト云フ島ノ數多アルチ以テナリ、）有リ、此口永良部ノ南海中ニ、大小數十島アリ、其中ニ於テ頗大ナル者ハ、口島、中島、臥蛇島、諏訪瀨島、吐火羅島、橫宛島、惡石島ナリ、此ヲ世ニ薩摩ノ七島ト呼ブ、所謂ル此吐火羅島ヨリ、琉球大島ニイタル三十五里ノ海路ナリ、今夫レ天度ノ一分ヲモツテ、地上ノ十八町ト約シ、一度ヲ三十里トシテ、地坪ヲ平均スルノ算法ヲ行ヒ、海上諸島ノ坪數ヲ以テ、內洋ノ闕タル處ヲ實テ、長ヲ絕チ短ヲ補ハヾ、大約五十里四方程アルベシト云ヘリ、然レバ一里四方ノ土地凡ソ二千五百許アリ、頗廣大ノ國ナル哉、

〔廢藩名勝考一薩摩〕川邊郡　沖小島（方角集、千載集、今云ニ硫磺島、登壇必究作ニ硫黃島、和漢三才圖會作ニ澳小島、）　府西南三十一里、周廻二里餘、

〔地理纂考十二薩摩河邊郡〕硫黃島（鹿兒島縣ノ辰巳三十一里、山川湊ヨリハ十八里ナリ、黑島竹ノ島二島當島ニ隸ス、在番衙所當島ニ在リ、一員ヅヽ在番交代ス）平民二百五十三人（男百三十人、女二十三人、）戶數五十二、

島ノ名義　此島古來硫黃ヲ產ス、太宰府別貢トアルハ、卽チ此島ノ產ナリ、因テ島ノ名トス、平家物語、此島ヲ鬼界島ニ作ル、千載集沖小島ニ作ル、和漢三才圖繪澳小島ニ作ル、登壇必究硫黃島ニ作ル、東藻彙伊王島硫黃灘等ニ作ル、按ニ和名鈔硫黃和名由ノ阿和、和俗ニ云、油王、本草和名石硫黃、和由ノ阿加、生ニ太宰府、又慶長年錄ニ、ユワフガ島トミユ舞ノ本トテ三十六番アリ、多田義俊ガ三十ケ條故實辨ニ注釋ヲ加ヘタリ、其本ハイワフガ島トアリ、本草綱目引ニ庚辛玉冊ニ云、石硫黃、生ニ南海琉球山中、倭硫黃亦佳ナリトアリ、是琉球人此物ヲ薩摩ニ得テ、琉球硫黃ト稱シ、唐土ニ渡セルヲカク記セシナラム、又鬼界島トイヘルハ、輕野大臣ノ故事ヨリ出タリ、（此事下ニ云フ）今島人、俗ニ黃海島ノ字ヲ用ユ、海邊ノ水都テ硫黃汁ニテ黃ナル故ナレバナリ、

甑島、周廻二十里二町三十二間、伊牟田村三十一度四十六分半、青瀬村三十一度四十分半、濱之市浦三十一度三十八分、瀬々之浦三十一度四十一分半、（從二瀬々之浦一至二青瀬村一徑渡一里五丁九間、）近島、周廻一十一町二十四間、野島、周廻一十町五十六間、中島、周廻二十八町、四十八間、遠測　松生岩　二子島　無名瀬（里村）　尾橋河原岩　辨慶瀬　下ヶ瀬　前瀬（大瀬々浦村）　ナフ瀬岩　前瀬小　岩島　鷹島　宇治瀬

薩摩郡　遠測　沖羽島　大辻鼻　鴨瀬

高城郡　實測　舶間島、周廻一十四町三十六間、遠測　立花瀬

出水郡　實測　長島、周廻二十一里三十四町四十三間、城河内村三十二度八分半、座本村三十二度一十一分、三船村三十二度一十三分、伊唐（イカラ）島、周廻四里二十五町一十二間、和仁之浦三十二度一十二分半、（從二伊唐浦一至二長島蕨浦一徑渡四丁一十五間、從二同岬一至二東岬一三丁一十八間、自二吹鼻一渡六丁一十八間、）蕨島、周廻一里二町二十一間、蕨浦三十二度七分、大島、周廻三十三町三十六間、桑島、周廻五丁五十八間、無名島、（和村）周廻六十四間、小伊唐島、周廻一十三町一十五間、竹島、周廻一十町五十一間、櫓島、周廻五里二十四間、野島、周廻一十六町四十四間、黒島、周廻一十二町二十九間、獅子島、周廻八里二十二町二十六間、（從二南岬一至二黒島東岬一、一丁二十八間、）所島、周廻二十九町二十間、無名島、（獅子島）周廻六町二才六間、大桂島、周廻一十三町三十二間、小桂島、周廻九町一十九間、遠測　飛礒　黄島　黒瀬　通小島　沖小島　末ノ島　ナタカ島　青島　七尾島　タタ島　的島　鷲島　無名島（長島）　小島（獅子島）　無名瀬

〔薩藩經緯記上〕西北海上ニ大小數十島アリ、其中ニ於テ長島、（周圍二十七里二十三丁餘アリト云フ、）本渡（周圍七里餘アリ）獅子島（周圍四里二十七丁餘アリ）ノ三島最大ナリ、西海ニモ亦數多ノ島アリ、上甑島（周圍十四里五丁餘アリ）下甑島（周圍十二里二十町餘アリ）ノ二島頗ル大ナリ、南海ニモ島多シ、鬼界島、（周圍二里五丁餘有）竹島、（周圍三里十二町アリ）黒島、（周圍三里十三丁有）此レ

疆域

ノ山間（俗ニ字都皆ト呼ブ處ナリ）ニ至リ、東西一度五十三分、南北一度零八分アリ、此レヲ當國天地合體ノ經緯度分トス、

〔萬國夢物語上〕海ヲ隔テ薩摩ニ至、此州モ東西南ノ三方ハ海也、東ノ方ノ北ニテ、大隅ニ隣、北方ハ肥後也、

〔地理纂考三十一國總說〕吾田國　隼人國　薩摩國

東大隅國始良郡、北同國菱刈郡ニ接シ、西肥後國水俣ニ界ヒ、南ハ海ニ對ス、周廻百三十里二十六町十六間三尺、

〔日本地誌提要七十三薩摩〕疆域　東ハ大隅、日向、及海、北ハ肥後、西南ハ海ニ至ル、東西凡壹拾里、南北凡貳拾七里、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕薩摩國谿山郡　遠測　七ツ島

揖宿郡　實測　知林島、周廻二十六町八間、　遠測　小島　鵜瀬　俣河洲（マタカハス）

河邊郡　實測　沖秋目島、周廻一里六町三十二間、　橘島、周廻六町四十九間、　竹島、周廻六町四十三間、　棧敷島、周廻六町五十八間、　遠測　赤喰礁　一ツ瀬（枕崎浦）　沖立神　一ツ瀬（小湊）　雀島　長瀬崎　松島　ヒシヤコ瀬（坊津浦）　高立神　首島　雙劒岩　鵜瀬　大瀬（伯村）　草瀬　ヒシヤコ瀬（伯村）　松生瀬　大瀬（久志村）　赤馬礁　天神鼻　五島礁　水越瀬　鹿巢　蜂瀬　鵜來島（赤生木村）　立神　鵜來瀬（野間屋敷）　飛瀬　カモメ島　桂瀬　烏帽子瀬　大瀬（片浦村）　松瀬　二子瀬　鱶島　硫磺島　竹島　黑島　口之島　中之島　諏訪瀬島

日置郡　實測　松尾明神山（又呼二守島一）、周廻四丁三十間、　遠島　久多島

飯島郡（コシキ）　實測　上飯島、周廻一十七里四町二十五間、里村三十一度五十分、小島三十一度五十一分半、（從二長目濱一至二瀬上村一、徑測一十三丁二間）　平村周廻四里一十二町五十六間、湊三十一度四十八分、（湊邇六丁四十八間）　下

食貨

唱更國といへるこれなり、(○中略)さて其戍櫃を磨め給ひ、國名をも舊に復されたる證は、同紀に、養老元年四月甲午、天皇御西朝、大隅薩摩二國隼人等奏風俗歌舞、授位賜祿各有差とみえて、(唱更國な建られたる大寶二年より十六年)是より先に、二國の隼人等の暴戾たる徵は、こと〴〵く平伏たる趣なり、故いはゆる唱更の櫃を磨給ひ、(既に令制も整ひて、隼人も皆にはりたるなるべし、)それにあはせて、國名をも舊の薩摩に復されたりしなるべし、

〔地勢提要乾〕各國經緯度(附里程)

薩摩鹿兒島(上之町內裏町)極高三十一度三十六分、經度西五度四分半、從小倉(自長崎街道東薩摩街道)山九十八里一十八町、三百八十一里二十六町一十九間半(○從東京)

薩摩山川村(港濱)極高三十一度一十二分、經度西四度五十八分半、從鹿兒島(陸路海)一十五里三町、三百九十六里二十九町三間半、(○從東京)

薩摩下甑島、極高三十一度三十八分、經度西五度五十六分半、從小倉(自薩摩街道海陸海路)一百三里一十町(內陸海直徑一十三里廿四町)三百八十六里一十八町九間半(○從東京)

〔日本經緯度實測〕北極出地

薩摩　鹿兒島　三一度三六分〇六秒　濱之市　三一度三八分〇〇秒(○中略)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(○中略)　薩摩　鹿兒島　西五度二一分三〇秒

〔薩摩經緯記上〕我ガ祖父不昧軒翁ノ皇國度數譜ニ云ク、薩藩ノ經緯ヲ審ニスルニ、東ハ江戶ノ城ヲ西ニ離ルコト八度二十四分ニ當レル日向國諸縣郡倉岡ノ東境ナル山中ヨリ起ク、西ハ十度零十八分ニ當レル薩摩國高城郡倉津ノ海岸ニ至リ、南ハ赤道下ヲ北ニ距ルコト三十度零十八分ニ當レル大隅國大泊伊佐浦ノ海岸ヨリ起ク、北ハ三十一度二十六分ナル日向國諸縣郡嶋戶

唱更の名の事由いまだ詳なる說をきかず、古事記傳に、隼人の別稱のごとく說はれたるも、なほ穩當ならぬこゝちせられつるに、此ごろふと史記の中に見あたりたる事のあるに據りて、考たる說のいできたるを試にいふべし、さるは其史記の吳王濞傳に、漢文帝の時、濞が封國に在て反心ある狀を云へる下に、其居國以銅鹽故、百姓無賦、卒賦更輙與平賈とあるを、正義に、踐更若今唱更行更者也、言民自著卒更、有三品、有卒更、有踐更、有過更、古者正卒無常人、皆當迭之、是爲卒更、貧者欲雇更、錢者次直者出錢雇之、月二千、是爲踐更、天下人皆直戍邊三日、亦各爲更律所謂繇戍也、雖丞相子亦在戍邊之調、不可人々自行三日戍、不行者出錢三百入官、官給戍者、是爲過更、此漢初因秦法而行之、後改爲謫、乃戍邊一歲といへり、今その大意を考るに、史記にいはゆる踐更は、漢世の制に邊塞の戍卒をいふ稱にて、唐世の制に唱更行更などいふと、おほかた同じ趣なる戍卒の稱なりといへるなり、こなたの唱更も、その唐制に准へて擬びたまへる戍卒の稱なりとぞきこえたる、然るは上に擧たる續紀に、大寶二年十月云々と載されたる前に、八月丙申朔、薩摩多褹、二國なり、同紀和銅二年六月の下に、薩摩多褹兩國司と見ゆ、隔化逆命、於是發兵征討、遂校戸置吏、九月戊寅、討薩摩隼人、軍士授勳有差とみえて、此二件を併考るに、此時逆命たるは、二國の隼人なるが、薩摩なるを征討たれば、多褹なるは畏れて自伏たりときこえたり、十月におよびて、上に擧たるがごとく、唱更國司等今薩摩國也言、於國內要害之地、建柵置戍守之許焉と載られたるは、薩摩國の要害の地に、隼人を守る押の柵を建て、戍卒を置むと奏せるを許し給へるなり、この時その柵を建て、戍卒を置れたるに、かの唐制の唱更の稱を擬びて、薩摩を唱更國と改められたるを、略〇註こゝには國司の稱におよぼしたるうへをもてかく記されたるにて、注に今薩摩國也とあるは、後にその戍柵を廢め、戍卒を置る、さまも替られたるによりて、舊の薩摩の名に復されたりける御世になりて、此紀を撰されたるが故に、今薩摩國也とことわり記されたるなるべし、さはいへど、誤にて混らはしき記されざまなり、拾芥抄改名所々部に、薩摩國元

國也、

〔倭訓栞前編十〕さつま　薩摩と書り、薩人の守島の義成べし、古へ隼人の國ともいひし、

〔麑藩名勝考一〕薩摩國

薩、幸也、取諸日本紀所謂山幸海幸之義、万葉集有薩男薩人薩弓薩矢之稱、蓋兵威猛而言、又歴妙觀、續日本紀作薩妙觀、可以見矣、麻、島之略、或謂摩語助、猶如紀伊之伊也、(摩又作麻、)大和本紀作隅、因威哉、颯々風樣而言、或以薩之字義、薩摩之漢音爲之說者、未瑩耳、

〔諸國名義考下〕薩摩

和名抄に、薩摩、(散豆萬)名義は幸濱(サツハマ)ならむか、古事記に、火照命(ホデリノミコト)、此者隼人阿多君之祖云々、故火照命者、爲海佐知毘古、而取鰭廣物鰭狹物云々、この佐知は幸にて、獵物(カリツモノ)また獵(サツ)などの意なり、(○中略)薩摩藩川白尾國柱云、薩摩とは幸島(サツシマ)の義なるべし、今の鹿兒島の内海は、天孫漁獵し給ひし故址なるべし、大隅國桑原郡鹿兒島神社は、彦火々出見命を祀奉るなり、又鹿兒島てふ名も、無目籠(マナシカタマ)より出たりときこえ、又所隷頴娃郡に籠てふ郷あり、さて今の薩摩國より、西阿多郡川邊郡の海邊まで、いにしへは吾田(アタ)國なりき云々とあり、猶委しかれど、こゝには略きて記しつ、たゞ國の名義を擧るのみ、

〔續日本紀二文武〕大寶二年十月丁酉、唱更國司等、(今薩摩國也)言、於國內要害之地、建柵置戍守之、許焉、

〔古事記傳十六〕景行仲哀の御世のころ、熊曾と云し者も是にて、即其國を熊曾國と云き、(○中略)又其を隼人國と云るは、續紀二に、大寶二年、先是征薩摩隼人時云々、唱更國司等(今薩摩國也)言云々とある、唱更これ隼人なり、(拾芥抄收名所々部に、薩摩國元唱更とあり、職員令隼人正條に、隼人者分番上下、一年爲限云々とあるを見合て、其ころ唱更とは書たりしなり、今薩摩國也とは、續紀撰ばれし時の注なり、)

〔比古婆衣四〕唱更國

古事類苑

地部三十四

薩摩國

名稱

薩摩國ハ、サツマノクニト云フ、西海道ニ在リ、東ハ大隅、日向、北ハ肥後ニ界シ、西南ハ海ニ至ル、東西凡ソ十里、南北凡ソ二十七里、其地勢ハ、東北連山環擁シ、海ニ循テ南ニ走リ、又勾屈シテ東ニ拱シ、大隅ニ對シテ一大灣ヲ抱キ、川内川、國ノ中央ヲ貫流シテ西方海ニ入ル、此國ハ、延喜ノ制、中國ニ列シ、出水、高城、薩摩、甑島、日置、伊作、河邊、頴娃、揖宿、給黎、谿山、麑島ノ十二郡ヲ管ス、後阿多郡ヲ加ヘ、伊作郡ノ亡ビタル後、更ニ異地ニ伊佐郡ヲ置ケリ、明治維新ノ後、伊佐郡ヲ南北ニ分チ、谿山郡及ビ大隅國北大隅郡ヲ麑島郡ニ合セ、給黎、頴娃ノ二郡ヲ揖宿郡ニ合セ、阿多郡ヲ日置郡ニ合セ、高城、甑島、南伊佐ノ三郡ヲ薩摩郡ニ合セ、河邊郡ノ硫黄三島、寶七島ヲ割キテ、大隅國大島郡ニ隷屬セシメ、大隅國菱刈郡ヲ、本國北伊佐郡ニ合セ、伊佐郡ト稱シ、新ニ鹿兒島市ヲ設ケ、鹿兒島縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕薩摩散豆萬

〔饅頭屋本節用集左天地〕薩摩サツマ薩州

〔日本風土記一寄語島名〕薩摩撒子馬サツマア

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年七月、被遣大唐使人高田根麻呂等、於薩麻之曲、竹島之門、合船沒死、

〔易林本節用集下〕薩摩薩州中、管十四郡、四方二日、雖小國、鄰唐故備器用之、雖然无桑麻之衣服也、中上

追ふを見るに、馬卒に男子は一人もなく、婦人のみ也、一人して五疋も七疋も放し網にて追ふた皆々女馬とは云ながら、飼合食合もせず、無質の馬也、男子牛を遣ふ手にて山分の材木を牛にて引出す也、牛の大トさ大津の車牛の如し、かくの如きの地、車の上にいか程大成材木にても載置、道の嶮しきもいとはず、して、牛に引する事也、國風とは云ひながら、無調法なる事也、

名所

〔日本鹿子十四〕同國大隅〇中名所之部

風の森　當國はさして名所なしと舊記にも見へたり、風の森、大隅郡の内也、うたに

恨みじな風の森なる櫻花さこそあたなる色にさくらめ

後瀬山　青葉山　夕暮の關　氣色の森

雜載

〔日本書紀天武二十九〕十一年七月甲午、隼人多來貢方物、是日大隅隼人、與阿多隼人相撲於朝廷、大隅隼人勝之、

〔類聚國史田地百五十九〕延暦十九年十二月辛未、收大隅薩摩兩國百姓墾田、便授口分、

人口

〔毛吹草 三〕大隅
多禰島簓　ヤクノ島ノ榑板

〔官中秘策 五〕大隅國　一八郡　略〇中
一人數拾三万千六百貳拾三人　内 七万四千五拾貳人 男　五万七千五百(五百下恐脱七)拾壹人 女　高拾七万八百三拾三石餘　大隅國

〔吹塵錄 人口及國高 五〕諸國人數調 文化元甲子年 略〇中
一人數拾壹万四千百六拾六人 寛政領　高拾七万八百三拾三石餘　大隅國
内 六万貳千七百貳拾壹人 男　五万貳千四百四拾五人 女　略〇中

諸國人數調 弘化三丙午年 略〇中
一人數九万九千貳百拾貳人 寛政領　高拾七万八百三拾三石餘　大隅國
内 五万三千百七拾人 男　四万六千四拾貳人 女

風俗

〔人國記〕大隅薩摩國
大隅薩摩兩國之風俗違フ事ナシ、是モ皆死ヲ以テ表トシ、唯男子ハ死スルヲ道トスト覺タ、五常之道ト云フ事、一段外之事ト覺へ、佛法トイヘバ、死テ後之穿鑿ニ而、生死ヲ可知爲トナレバ、明ルニ不足ト自見而違リ、常ニ主下之作法モ有テナク、主ト云名ヲ知テ職ヲ受ル士ハ主トノミ覺へ、百姓ハ地頭トノミ覺タ、不禮之行跡專而不足言也、武士之戰場ニ死スルモ、忠義ニ因テ死スル處ノ儀ヲ以テ善トスル工夫ナク、唯武士ハ於戰場ニ死ヲ致ス者トノミ覺ヘタ、死スルハ可論儀ナシ、蓋シ泰平之時ハ、主君坐而席ヲ正フ而アルモ、臣ハ足ヲ伸シ、或ハ立テナガラ主君ト問答スルノ類多シ、末代以テ是風俗ナルベシ、

〔西遊雜記 三〕日向大隅の二州にて、一家に女馬三疋五疋も飼て、駒をあまた出す國にて、九州すべて所用の駒を用ゆる事也、所國にては、年毎に三千疋も產せると土人の物語き、御詳ならず、牡馬を

始羅郡　三拾九箇村　高貳万六千六百四拾三石四斗六升貳合

噌唹郡　六拾三箇村　高四万三千八百八拾四石四斗八升

肝屬郡　三拾八箇村　高四万貳千拾五石九斗八升八合

大隅郡　三拾貳箇村　高貳万百九拾貳石三斗壹升三合

熊毛郡　九箇村　高五千貳百五石七斗壹升九合

馭謨郡　四箇村　高千八拾石五斗九升〇中略

寛文四年四月五日

松平大隅守殿

〔日本鹿子　十四〕大隅國、八郡、中上國、東西一日、〇中略知行高十七万八百二十石、

〔官中秘策　五〕大隅國　八郡〇中略

一石高拾七万八百三拾三石餘

〔吹塵錄　五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

大隅國　皆私領　一高拾七万八百三拾三石四斗五升壹合

出擧稻

〔延喜式　二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

大隅國、正稅八万六千卌束、公廨八万五千束、國分寺料二万束、文殊會料一千束、修理池溝料二万束、救急料三万束、

〔續日本紀　十六聖武〕天平十七年十一月庚辰、制、諸國公廨、大國四十万束、上國三十万束、中國二十万束、就中大隅薩摩兩國各四万束、下國十万束、〇下略

國產貢獻

〔延喜式　二十四主計〕大隅國　行程上十二日、下六日、

調、綿布、庸、綿布、中男作物、紙、

小河院　三百四十八丁三段大(中略)　蒲生院　百十丁九段半(中略)　吉田院　十八丁二段(中略)
栗野院　六十四丁(中略)　鹿屋院内恒見　八丁(中略)　正宮領(中略)　深川院　百五十餘丁
財部院　百餘丁(中略)　横川院　三十九丁五段二丈(中略)　串良院　九十丁三段二丈　鹿屋院　八十五丁九段(中略)
建久八年六月日(署名略)

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平修理大夫茂久(大隅國從四位少將)　七拾七万八百石　居城薩州鹿兒島郡鹿兒島　薩摩、大隅、日向三國主、並領琉球國(中略)

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕大隅國(中略)　管八(田四千八百餘町)
〔伊呂波字類抄於國郡〕大隅國(管八(中略)本田三千七百七十三丁)
〔拾芥抄中本國郡〕大隅中八郡(中略)田四千九百七町
〔運歩色葉集諸國之郡名〕大隅(八郡(中略)田數五千八百十四丁)
〔海東諸國記〕大隅州　郡八、水田六百七十三町、
〔大隅國圖田帳〕大隅國　注進　圖中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事
合田參仟拾漆町伍段大(中略)
右件總田數、任御敎書之旨、注進如件、
建久八年六月日(署名略)
〔寬文印知集二〕目錄
大隅國一圓
菱刈郡　拾三箇村　高九千九百八拾六石八斗五升六合
桑原郡　三拾貳箇村　高貳万千八百貳拾四石四升三合

院

〔大日本史食貨十六莊園〕至保延中、前關白忠實新立大隅島津莊、占一國之半、大隅國田帳其莊跨日向薩摩二國、日向田數、過國中三分之一、薩摩亦殆居一國四分之三、日向薩摩國田帳、二國莊田不詳何時置之、姑書于此、

〔大隅國圖田帳〕大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事〇中略
始良庄五十餘町　正宮大般若庄内沙汰　元吉門高信宗濟所知　島津庄　殿下御領　地頭衞門兵衞尉　新立庄　七百五十丁〇中略

建久八年六月日〇署名略

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀
總處分　條々事〇中略
一家地文書庄園事　宣仁門院洞院攝政長女　泉涌寺〇中略　寺領〇中略　日向國平群庄〇中略
建長二年十一月　日　愚老在御判

〔薩藩舊記前集十三〕御袖判
下　島津上總入道道鑒久〇貞
可令早領知薩摩國河邊郡大隅國本莊事
右以人爲勳功之賞所補任也、任先例可令領掌之狀如件、
建武三年三月十七日

〔南浦文集上〕隅州國分莊永德寺地藏堂再興幹緣文
聞昔隅州國分莊者、諸大薩埵之古道場也、相傳此地昔年有洪水之害、人皆作魚矣、〇中略慶長辛丑之夏、島津華胄龍伯尊君相攸、欲營華第於此地、至於甲辰冬之仲、華第落成矣、諸士大夫之侍從者、殆乎千人、野人之懷惠而移家者倍焉、然後國分爲一都會之地矣、

〔大隅國圖田帳〕大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事〇中略

註

此地、其用人力者、非物情之所欲、直避其地之低濕也、〇中略忠增公歸國之後、綿蕝於野外、以分街巷、予觀夫新府廓狀、東西之衢其數九者、蓋象于陽數也、南北之陌其數五者、蓋象于五行也、士大夫之家予九衢者、三百、蓋取千禮儀三百也、其營中之延袤方九十餘間、而不滿百者、斷登而益謙也、〇中略是故不日面華第創造之功成、士大夫迫應人之新居、亦其功成矣、於是英雄霧列、俊傑星馳、尊君之願既滿、衆人之望亦足矣、不幾而新府爲一都會之地、不亦盛哉、

〔西遊雜記三〕此日加。治。木。の。町。に至りて止宿せり、此所は外城と稱して、士家凡三百家計繼つきの町にて、商家も數多にて、大隅にては第一の市中と云所なり、是より肥後へ出る道有、薩州侯御一代に一度、此道筋を御通行有て、御參勤有と云、大口外城と云所には、士家五百軒餘も在當の武家ありと云、薩州界より、大隅をへて、再び薩摩の小河内と云所に薩摩所にあり出て、肥後の久木野村へ出る道也、此道路は近しといへども、難所の極計にて通行なりがたき道といふ、

〔長門本平家物語四〕丹波少將は、〇中略それ室野、鮎引、大山といひて、月影日かげもさゝぬ深山のがたるせきがんをしのぎこえて、日向のくに西方が島。津。の。庄。に着給ふ、かの庄内にあさくら野といふ所に、ひとつの峯たかくそびえて、けぶり絶せぬ所あり、日本さいしよの峯、霧島のだけと號す、金峯山、しやかのだけ、富士のたかねよりも、さいしよの峯なるがゆへに、名づけてさいしよの峯といふ、

〔薩藩舊記前集十三〕新田右衞門佐義貞誅伐事、去年被下國東御教書訖、而肝付八郎兼重以下輩、令同意義貞、於日向國所々擧旗、既及合戰之由、當國守護代、幷島津莊總政所等、依馳申所差遣、類月四郎右衞門尉元胤也、早相催一族、馳向彼所、可被退治候、仍執達如件、

建武三年正月廿五日　太宰小貳〇賴尚

廣武又次郎入道殿

右以人所補任當村半分地頭代官職也、於有限年貢已下濟物等者、任先例可沙汰進之狀如件、

東條藤次郎入道々恬

建武三年四月十日　道鑒（花押）（○島津貞久）

〔薩藩舊記前集十三〕菱刈郡田中村。（號重富本名之）内、祁原平寒水名主職事所申付也、於有限所當米濟物公事課役等者、無懈怠可致沙汰之狀如件、

建武三年九月廿日　道鑒（花押）

（朱書）菱刈郡本城郷、今有村名重富者此也、又馬越郷、今有村名田中者、

〔薩藩舊記前集十四〕大隅國多禰島内現和村名主職事、被致軍忠之上、帯右大將家御下文以下證文等、相傳之條、歷然之間、於半分者、先所申付也、至年貢者、爲軍勢兵粮可被直進之狀如件、

建武四年八月一日　源（花押）（○島山直顯）

禰寢彌次郎殿

〔深堀系圖證文記錄二佐賀文書纂所收〕下深堀彌次郎時継

可令早領知大隅國岸良村。（尾張前司高家（名越）跡）事

右以人、爲勤功之賞所宛行也、守先例可致沙汰之狀如件、

建武四年十二月廿六日　御袖判

〔南浦文集上〕國分新府記

大隅故州、國分新府、路通日向、地接薩摩、襟清水、而帯大津、顧其後背、有億丈之城、其爲主將者、不振兵威、以戒不虞、望其前面、有萬頃之田、其爲人民者、有勤農業、以樂有年、其食足兵足者、又非治國之具乎、此則新府之所以象有也、若夫八幡正宮之有乾門也、有護國靈驗之名、霧島權現之在艮關也、有安住不動之勢、地已靈、而人未傑者、爲可惜矣、慶長六年辛丑夏之仲、龍伯尊君相攸、鑿山通江、以欲營府第於

村里名邑

建久八年六月　日〈○署名略〉

〔南浦文集上〕隅州願成寺鐘銘
隅州帖佐鄉願成寺者、前薩隅日三州太守惟新尊君所草創之精廬、而運譽上人修念佛三昧之道場也、草創未幾、殿堂門廡漸成、庖廩井竈具備、

〔郡名一覽〕一大隅國〈隅州　東北二日〉八郡
高拾七万八百三拾三石四斗五升壹合　貳百三拾ヶ村
〈○中略〉●種子島〈熊州三万石〉種子島彈正〈○中略〉今出水〈同〉島津安藝〈○中略〉田井水〈同二万石〉島津美作
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕大隅　八郡二百三十村
高〈曾私領〉十七万八百三十三石四斗五升一合
菱刈郡十三村　桑原郡三十二村　始羅郡三十九村　囎唹郡六十三村
肝屬郡三十八村　大隅郡三十二村　熊毛郡九村　馭謨郡四村

〔地勢提要〈本邦〉〕郡邑島嶼奇名
大隅　肝屬(キモツキ)郡、邊田(ヘタ)村、富山(トヤマ)村、大始良(オアイラ)村、大隅郡、邊津加(ヘツカ)村、汀野迫(ミギハノサコ)村、大根古(オネシン)村、海潟(カイガタ)村、向面(ムカシン)村、囎唹(ソヲ)郡、廻(メクリ)村、佳例川(カレイカハ)村、下井村、始羅(アイラ)郡、日木山(ヒキヤマ)村、竹子(タカシ)村、桑原郡、高田(カウダ)村、見次(ミツキ)村、馭謨(ゴム)郡、安房(アンボウ)村、熊毛郡、西面(ニシオモテ)村、

〔萬葉集抄十三〕大隅國風土記云、必志里、昔者此村之中在海之洲、因曰必至里、海中洲者、隼人俗語云必至、

〔釋日本紀〈六述義〉〕先師申云、案風土記、日向國宮埼郡高日村、昔者自天降神、以御劍柄置於此地、因曰劍柄村、後人改曰高日村也云々、神世之昔、以劍之柄稱多加比、以之可知也、

〔薩藩舊記〈前集十三〉〕下可令早爲大隅國曾羽野村半分地頭代官職事

始羅郡ヲ今ノ始羅郡トイヘル證ハ、和名鈔始羅郡ノ郷名ニ、野裏、串伎、鹿屋、岐刀トアル野裏ハ今ノ内ノ浦郷ニテ、頭ニ裏或ハ内等ノ字アリシガ脱タルベシ、串伎ハ串良ナリ、伎ハ字書ニ妓ト同字ニテ、良ノ音ニ取レル事、神樂設樂ノ例ニ同ジ、鹿屋ハ今ノ鹿屋郷ナリ、岐刀ハ詳ナラザレドモ、其外ノ三ケ郷、今實地ヲ踏ニ、和名鈔ニ所謂始羅郡ニ非ズ、都テ肝付郡ナリ、又肝付郡ノ郷名ニ、桑原、鹿屋、川上、鴈麻トアル桑原ハ、同國國府郷ニテ、鹿野モ同國始羅郡清邊郷ナリ、川上ハ詳ナラザレド、同府郷ニ隼人城アリテ、書紀ニ所謂川上梟帥ガ居城ノ遺地アリ、此梟帥ガ居ヲ川上トイヘルモ、地名ニ因レル事疑ナケレバ、川上モ此アタリナルベシ、鴈麻ハ詳ナラズ、サレド其外ノ郷名ニテ肝付郡ナラザルヲ思フベシ、正本ニハ桑原云々ヲ始羅郡、野裏云々ヲ肝付郡ニ載セタリシガ、後世錯簡ケム、

〔萬葉集抄 三〕大隅國風土記、大隅郡串卜郷、昔者造國神、勅使者遣此村令見消息、使者報道有髪梳神云、可謂髪梳村、因曰久四良郷、

〔色川本島津文書 二〕御判

下　島津三郎左衛門尉

可令早領知大隅國桑東郷西事

右以人、爲勳功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

建武五年正月廿七日

裏判　花押　○今川貞世

裏判　花押

〔大隅國圖田帳〕大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領并本家領所地頭辨濟使等交名事　○中略

桑東郷　百八十九丁四段大　○中略　桑西郷　百五十六丁二段六十歩　正宮敷地　○中略　加治木郷　百廿一丁七段半　○中略

停多褹島隸大隅國事

右參議大宰大貳從四位下小野朝臣岑守等解偁、○中略須停島隸大隅國、計其課口不足一鄕、量其土地有餘一郡、能滿、合於馭謨益救、合於熊毛四郡爲二、於事得便者、○中略伏聽天裁、謹以申聞謹奏聞、

天長元年九月三日

〔延喜式 二十八 式部〕凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓、除同門外聽任、神郡、陸奥緣邊郡、大隅、馭謨、熊毛等郡者、不在制限、

帖佐郡

〔大隅國圖田帳〕大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領幷本家領所地頭辨濟使等交名事○中略

帖佐郡　二百七十一丁大○中略

建久八年六月　日○署名略

鄕

〔倭名類聚抄 九 大隅國〕菱刈郡　羽野　亡野○亡、高山寺本作出、大水、菱刈

桑原郡　大原　大分　豐國　答西○答、高山寺本作荅、稻積　廣田○田、高山寺本作西、桑善　仲川○國用中津川三字

囎唹郡　葛例　志摩○國用島字　阿氣　方之　人野

大隅郡　人野○人恐大誤　大隅　謂列○謂恐調誤　姶臈　禰寢　大河○河、原作阿、據高山寺本改、岐刀○刀、原作段、據高山寺本改、

姶羅郡　野裏　串伎○伎、高山寺本作占、鹿屋　岐刀

肝屬郡　桑原　鹿屋　川上　鹿麻

馭謨郡　謨賢　信有

熊毛郡　熊毛　幸毛　阿枚○有三鄕

〔地理纂考 三十一 國緣說〕熊曾國　大隅國

和名鈔ニ姶羅郡ノ次ニ肝付郡ヲ載タレバ、兩郡相接シタルガ如クナレド然ラズ、前ニ云ル如ク、姶羅郡ハ今ノ始羅郡ニテ、肝付郡トノ間ニ桑原贈於大隅ノ三郡隔リ、其間廿里ニ近シ、サク

續紀曰、和銅六年夏四月乙未、割日向國肝坏、贈於、大隅、姶孋四郡、始置大隅國ト見ユ、東ハ大隅國桑原郡、西ハ薩摩國鹿兒島郡ニ接シ、北菱刈郡ニ境ヒ、南ハ海ニ對ス、鄕數六（蒲生、加治木、帖佐、溝邊、山田、重富、）ナリ、サルヲ後世姶ノ字ヲ始ニ誤リテ、郡名ヲ始羅郡ト號セシ事、大隅國總說ニ委シク辨ジタルガ如シ、故ニ改テ姶羅郡トス、ソモ〳〵此郡ノ古ノ方域ハ、東贈於郡、西鹿兒島郡ニ堺ヒ、北ハ菱刈郡ニ接シ、南ハ海ニ連リケンヲ、後ニ贈於、姶羅ノ兩郡ノ間ニ桑原郡ヲ置レシヨリ、姶羅郡ハ大ニ縮マリテ、今ハ古ヘノ半ニモ過キザルナリ、（桑原郡ヲ置カレシハ、史ニ漏シタリ、）

〔地名字音轉用例〕入聲フノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

あひら　姶羅（隅郡）阿比良　姶ハ島合反ニテ、アフノ音ナルヲアヒニ用ヒタリ、

〔續日本紀十一聖武〕天平元年七月辛亥、大隅隼人姶禰郡少領外從七位下勳七等加志君多利、外從七位上佐須岐君夜麻等久々賣、並授外從五位下、

肝屬郡

〔地理纂考二十三大隅〕肝屬郡（和名抄曰、肝屬ハ岐毛豆岐、續紀肝衝、又肝坏ニ作ル、建久八年圖田帳ニ、肝付郡百三十町二反三丈ト見ユ、）

〔續日本紀一文武〕四年六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、衣評督衣君縣、助督衣君氐自美、又肝衝難波、從肥人等、持兵剽劫覓國使刑部眞木等、於是勅竺志總領、准犯決罰、

〔南浦文集下〕諫玄雄藏主文（出假、後於武州東禪寺、爲貨財燒却東禪、遂被殺之、）

故福田俊雄、隅州肝付郡人也、少之時入前瑞光太蚉翁之室、剃髮受具、年漸欲壯之時、背太蚉師之命、忘其厚恩、既而入日州大玆門下、爲沙彌矣、

熊毛郡　益救郡　馭謨郡　能滿郡

〔續日本紀十一聖武〕天平五年六月丁酉、多褹島熊毛郡大領外從七位下安志託等十一人、賜多褹後國造姓、益救郡大領外從六位下加理伽等一百三十六人、多褹直、能滿郡少領外從八位上粟麻呂等九百六十九人、因居賜直姓、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

空國自頓丘覓國行去、〇中略到於吾田長屋笠狹之碕矣、

(釋日本紀八述義)膂宍之空國

大問云、此國何國哉、先師申云、仲哀天皇欲討熊襲國之時、有神託宣曰、熊襲國者、膂宍之空國也、愈茲國有金銀寶國新羅國也云々、然則膂宍之空國者、熊襲國之號歟、將亦下國之總名歟、熊襲國者爲佐渡島一名之由、見舊事本紀耳、

(續日本紀三十九桓武)延暦七年七月己酉、太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國贈於郡曾乃峯上、火炎大熾、響如雷動、及亥時、火光稍止、唯見黑烟、

(類聚國史百九十風俗)延暦十二年二月己未、大隅國曾於郡大領外正六位上曾乃君牛養、授外從五位下、以率隼人入朝也、

大隅郡

(大隅國圖田帳)大隅國　注進　國中總田數寺社庄公領并本家領所地頭辨濟使等交名事

合田參仟拾漆町伍段大〇中略

曾於郡　二百廿九丁四段大〇中略

建久八年六月日〇署名略

(太宰管内志大隅國下)大隅郡

輿地圖を按ずるに、大隅郡東西南三方は海に至り、北は肝屬郡につけり、

姶羅郡

(太宰管内志大隅國下)姶良郡

日本輿地圖を按ずるに、姶羅郡、東は贈於郡、南は海、北は桑原郡、西は薩摩國鹿兒島郡に隣りて、東西五六里、南北七八里あり、(常足按ずるに、昔の給黎郡と云は、大隅肝付二郡の内にいりて、中比絶たりし郡なるを、近比に桑原郡を割て給黎郡を作りし也と聞ゆ、そは昔の郡名などを顧へ合せてしらる、)

(地理纂考十六大隅)姶良郡

東諸縣郡、南桑原郡、西始良郡、北薩摩郡ニ分界ス、郡內牛山、太良、菱刈ノ三鄕ヲ置ク、

桑原郡

〔續日本紀孝謙十九〕天平勝寶七歲五月丁丑、大隅國菱苅村浪浮九百三十餘人、言欲建郡家、許之、

〔地理纂考大隅十九〕桑原郡

和名抄曰、大隅國桑原郡、同書ニ大隅國桑原、久波々良、國府、後紀ニ、桑原郡蒲生驛、延喜式、桑原郡鹿兒島神社ナド、見ヘタリ、大隅國ハ始メ肝屬、大隅、囎唹、始羅ノ四郡ナルヲ、桑原郡ヲ置レシハ史ニ漏タリ、桑シクハ大隅國號ノ卷ニ云リ東贈於郡、西始羅郡、北菱刈郡ニ接シ、南面ハ海ニ對ス、郡內吉松、横川、栗野、踊、國府ノ五箇鄕ヲ置ク、

囎唹郡

〔麑藩名勝考二大隅〕囎唹郡舊作襲、曾、添、贈於、曾於、囎唹、曾於、襲、曾古之襲國也、和名抄囎唹、曾於、襲者、夫𮧡襲國之義、又曰膂宍之膂之義、

〔地誌纂考十七大隅〕贈於郡

此郡名ハ、日本紀ニ、襲高千穗峯トアル襲ヨリ出タリ、景行天皇紀ニ、悉平襲國トアル襲國ノ遺稱ニテ、和名抄ニ、大隅國囎唹曾於トアル是也、贈於トアルハ、紀國ヲ紀伊、穎ヲ穎娃ト書ルナド、同ジ、東北日向諸縣郡ニ界ヒ、南大隅郡ニ連リ、西北桑原郡ニ接ス、郡內八ケ鄕ヲ置ク、踊山、清水、國府、敷根、恒吉、市成、福山、財部、

〔地名字音轉用例〕韻ノ音ノ字ヲ添ヘタル例

ソ　囎唹大隅郡曾於　書紀ニ襲國トアル是也、サレバ曾ト注スベキ例ナルニ、曾於ト注セルハイカヾ

〔古事記上〕伊邪那岐命、中略○妹伊邪那美命、中略○御合、中略○次生筑紫國、此島亦身一而有面四、毎面有名、故中略○熊曾國謂建日別、曾字以音

〔日本書紀神代二〕皇孫乃離天磐座、天磐座、此云阿麻能以簸矩羅、且排分天八重雲、稜威之道別道別而、天降於日向襲之高千穗峯矣、既而皇孫遊行之狀也者、則自槵日二上天浮橋、立於浮渚在平處、中略○注而膂宍之

〔延喜式民部上〕大隅國、中、菱刈(ヒシカリ)　桑原(クハハラ)　贈於(ソオ)　大隅(オホスミ)　始羅(アヒラ)　肝屬(キモツキ)　馭謨(ゴム)　熊毛(クマゲ)〔中略〕右爲遠國、

〔和漢三才圖會八十大隅八郡略〕中　贈於　肝屬或爲肝坏　大隅　始羅　菱刈　桑原　熊毛　馭謨俗爲駒路　多褹島

〔皇國郡名志〕大隅國八郡

菱刈(ヒシカリ)　三ヶ村限　日薩界　　桑原(クハハラ)　●宮内　△鹿兒島社　日ト薩トノ間
囎唹(ソオ)　〈國府〉　日界　　大隅　●曽木、●大濱　●竹浦　●大泊　南出崎
始羅(アイラ)　●梶木　●脇本　薩界　　肝屬(キモツキ)　●内浦　●柏原　東出崎
馭謨(ゴム)　●宮浦　一郡屋久島ト云　　熊毛(クマゲ)　△赤尾木　一郡種子島ト云

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕大隅

書名			
六國史古書			
延喜式	菱刈(ヒシカリ)	桑原(クハハラ)	
倭名抄	同(比志加利)	同(久波々良)	
拾芥抄	同	同	
諸書	同(國充)	桑原(國充)	始羅(國郷充)
郡名考	同(ヒシカリ)	同(クハハラ)	同(アヒラ)
天保郷帳	同	同	同
明治沿革帳			
地誌提要	同(ヒシカリ)	同(クハバラ)	始羅(アヒラ)
郡區編制	同	同	始良

(續日本紀 六 元明)和銅六年四月乙未、割日向國肝坏、贈於、大隅、姶䆄四郡、始置大隅國、

(續日本紀 八 元正)養老四年二月壬子、太宰府奏言、隼人反殺大隅國守陽侯史麻呂、

(類聚三代格 五)太政官謹奏

停多禰島隷大隅國事

右參議大宰大貳從四位下小野朝臣岑守等解偁、謹撿案內、太政官去二月十一日符偁、件島南居海中、人兵乏弱、在於國家、良非扞城、又島司一年給物、准稻三万六千餘束、其島貢調鹿皮一百餘領、更無別物、可謂有名無實、多損少益、右大臣宜奉勅宜勘利害言上者、南溟淼々、無國無敵、有損無益、一如符旨、須停島隷大隅國、計其課口、不足一鄕、量其土地、有餘一郡、能滿合於馭謨、益救合於熊毛、四郡爲二、於事得便者、聖帝登極、聊期濟世、明王布政、理貴適時、臣等商量、昔漢元帝納賈捐之言、罷珠崖郡、前史以爲美談、後世稱其英烈、雖建國置疆非無分野、而郡民救急、暫棄州郡、況溟海之外、費損如此、加以往還之寔、深亡者多、運送之民、漂沒不少、守無益之地、損有用之物、求之政典、深違物議、伏望依件停隷以省邊弊、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

天長元年九月三日

(太閤記 十)大隅日向知行割之事

大隅八郡之内　七郡島津兵庫頭被下　一郡伊集院右衞門大夫被下

國府

(倭名類聚抄 五 大隅)大隅國(○中)桑原(久波々良、國府、)

(麑藩名勝考 二 大隅)桑原郡國分鄕府中村(府中村、古の大隅國府也、)

和名抄にも、桑原郡、府ありといふ、故に鄕名國分と云、

郡

(倭名類聚抄 五 國郡)大隅國(○)管八(○)菱刈(比志加里)桑原(久波々良、國府、)贈唹(曾於)大隅　姶䆄(阿比良)肝屬(岐毛都岐)馭謨(五)熊毛(久末介)

類甚多、是謂ニ隼人十衆帥ヿ、其不可レ當爲、十三年五月、隸ニ平ニ野國ヿ、

肝屬 三十八村 續紀作ニ肝杯ヿ

大隅 三十二村

熊毛 九村 古多褹島、或作ニ多䌫ヿ、天武紀十年八月、遣ニ多褹島使人等貢ニ多褹國圖ヿ、其國去レ京五千餘里、居ニ筑紫南海中ヿ、天長元年停ニ多褹島ヿ隸ニ大隅國ヿ、參議大宰大貳小野朝臣岑守等解偁、謹按ニ內太政官去二月十一日符ヿ偁、(中略)右大臣宣、奉レ勅宜、勅科害言上者、南溟淼々、有レ國無レ益、一如ニ符旨ヿ、須停ニ島隸ニ大隅國ヿ、計ニ其課口ヿ、不レ足ニ一郷ヿ、量ニ其土地ヿ、有レ餘ニ一郡ヿ、能滿合ニ於馭謨ヿ、益救合ニ於熊毛ヿ、四郡爲レ二、於レ事爲レ便、多褹島近世作ニ種子島ヿ、圖書寮作ニ多禰島ヿ、誤、島作ニ多尼ヿ、

馭謨(ゴム) 四村

益救(ヤク) 天長元年廢合ニ熊毛郡ヿ、推古紀作ニ掖久ヿ、或作ニ夜久ヿ、又夜句ヿ、續紀作ニ益久ヿ、唐書作ニ邪古ヿ、平濃錄作ニ養久山ヿ、

熊滿 天長元年廢合ニ馭謨郡ヿ、

串卜(クシウラ) 見ニ大隅國風土記ヿ、廢置未レ詳、

〔日本地誌提要 七十二 大隅〕沿革　和銅六年、日向ノ四郡ヲ割テ本州ヲ建テ、(後桑原菱刈二郡ヲ增置ス)國府ヲ噌唹郡ニ置、(今ノ國府郷府中村)天長元年、多褹島ヲ廢シテ其二郡(熊毛馭謨)ヲ本州ニ隸ス、鎌倉ノ時薩摩守護島津忠久、本州守護ヲ兼ネ、子孫多ク邑ヲ州內ニ食ム、建武中興、忠久ノ玄孫貞久ヲシテ守護ヲ兼ネシム、尋テ足利氏ニ應ズ、州豪肝付兼重高山(コウヤマ)城(肝付郡、伴兼貞長元中此城ニ移ル、因テ肝付氏ト稱ス、兼重ハ兼貞七世ノ孫ナリ、)ニ居リ、獨リ官軍ニ屬シ、島津氏ト相抗ス、正平十八年、貞久本州守護ヲ第四子氏久ニ傳ヘ、內城(ウチノ)(日向諸縣郡)ニ治ス、初平行盛ノ子時信、種子島ヲ領シ、北條氏ト稱シ、世々島津氏ニ隸セズ、是ニ至リ時信五世ノ孫顯時、始テ氏久ニ從フ、天授中、氏久從弟伊久(コレ)ト共ニ官軍ニ屬シ、弘和ノ初、再ビ足利氏ニ降ル、應永十一年、氏久ノ子元久、本州及日向守護ニ補シ、勢威頗ル振ヒ、肝付氏(兼重ノ孫兼元)遂ニ麾下ニ屬ス、元久ノ後、三世忠昌ノ時、管內大ニ亂レ、永正中、肝付兼久(兼元ノ曾孫)再ビ自立シ肝付大隅二郡ニ據リ、日向ノ伊東氏ト相結ビ、島津氏ト戰フ、其孫兼續勢漸ク强大ニシテ、永祿ノ初、廻(メグリ)城(噌唹郡踊山村)ヲ襲ヒ取ル、九年、兼續卒シ、其子良兼兼亮兄弟相繼ギ、僅ニ高山一城ヲ保ツ、天正八年、兼亮ノ子兼道降ヲ乞ヒ、本州永ク島津氏ニ歸ス、王政革新、熊毛、馭謨二郡ハ鹿兒島縣ニ隸シ、自餘六郡ハ都城縣ヨリ兼治ス、尋テ悉ク鹿兒島縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀 十國造〕大隅國造

纒向日代朝(景行)御世、治ニ平隼人ヿ同祖初小、仁德帝代者、伏布爲ニ日佐ヿ、賜ニ國造ヿ、

覽すべき程の風景の地名所舊跡もなく、鹿兒島の風景一日もはやく見まほしく、道をいそぎて、此日加治木の町に至りて止宿せり、

〔日本地誌提要七十二大隅〕形勢 東北西三面、山嶽回抱シ、南方尖長、海表ニ横出シテ西ニ裏海ヲ擁シ、遙ニ二大島ト相望ム、澗壑深阻ト雖ドモ、氣候極煖ニシテ、草木暢茂ス、

道路

〔日本實測錄七街道〕從肥後國坂梨歷高千穗至濱市 中略

大隅國噌唹郡田口村 至霧島神社一里二十二丁五十一間 三里二十一町三十五間半 桑原郡内村辻 至國府八幡社五丁二十三間 二十八町二十二間 濱市村、三十一度四十三分、至海岸一丁 從坂梨至濱市街道、通計七十里八町一十二間半、中略

從日向國麓村歷加久藤至中之村 中略

大隅國桑原郡鶴丸村 二里三十四町一間 小羽村 一里二十四町九間 中之村 從麓村至中之村街道、通計一十四里廿九町二十一間、

從日向國油津歷牛ヶ峠至廻村 中略

大隅國噌唹郡鶴木村小倉 一里三十二町四十四間 佳例川村 二里一十八町三十間 廻村 從油津至廻村街道、通計一十八里三十町六間、中略

從肥後國湯浦本村大口街道至鹿兒島 中略

大隅國菱刈郡湯尾村 三里一十一町四十五間 桑原郡中之村 三町一十五間 同横川 三十一度五十四分半、 二里一十六町一十八間 始羅郡有川村石原 三里六町一十二間 段土村浦町 又呼加治木 一里三十一町一十間 脇本村浦町、三十一度四十一分半、 三里二十七町一十九間 至國界白金峠二十七町四十四間 薩摩國鹿兒島郡鹿兒島車町 從湯浦本村至鹿兒島 街道、通計二十四里二十町三十七間、

地勢
風俗

の木を第一とし、樫の木棒腦尤よし、島の風俗、上世のかた殘りて、島人琉球のごとく有髮の者多し、牛は琉球の風有りと云々、

此島へ旅人の渡る事國禁にて、予〇古河辰も渡海せず、浦々にて屋久の島へ渡らんと聞は、尋よりて島風を聞し事也、信じがたき事は爰に記さず、

(日本書紀推古二十二)二十四年三月、掖玖人三口歸化、　五月、夜句人七口來之、　七月、亦掖玖人二十口來之、先後幷三十人、皆安置於朴井、未及還皆死焉、

(日本書紀舒明二十三)元年四月辛未朔、遣田部連闕名於掖玖、　二年九月、是月田部連等至自掖玖、　三年二月庚子、掖玖人歸化、

(日本書紀天武二十九)十一年七月丙辰、多禰人、掖玖人、阿麻彌人、賜祿各有差、

(續日本紀文武一)三年七月辛未、多褹、夜久、菴美、度感等人、從朝宰而來貢方物、授位賜物各有差、　八月巳丑、奉于南島獻物于伊勢太神宮及諸社、

(續日本紀孝謙十九)天平勝寶六年正月癸丑、太宰府奏、入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船、以去年十二月七日來着益久島、自是之後、自益久島進發、漂蕩着紀伊國牟漏埼、

(倭名類聚抄鱗介十九)錫貝　辨色立成云、錫貝、夜久乃斑貝、今按、本文未詳、但俗說、西海有夜久島、彼島所出也、

(萬國夢物語下)日夫南大隅ノ地ニ行、此國東南西ノ三方皆海也、北ニテ東ハ日向、西ハ薩摩、北ハ肥後也、東南海中廿里計ヲ隔テ列島其西ニ夜久島アリ、氣候南ノ端ニテ、鹿兒島ヨリモ又南ナレバ、餘程暖國ナリ、

(西遊雜記三)癸十七日に大隅に入りし也、此國も日向と同じ風土にて、上方筋中國筋にくらべ思へば、何といはんやよなき下國にて、人物言語賤敷、諸品不自由也、大隅は東西せまく、南北長き山國にて、東は日向、西は薩摩、南は海、北へは長々と肥後の求摩郡まで入込し國也、國中にさして一

混じ稱するものにして、今の馭謨郡一島を付言するものにあらず、通證曰、琉球上世與掖玖混同其名、所謂小琉球者、或指益久而言、世法錄海貝亦可證也、按今南島人、七島を指して土噶喇といふがごとし、土噶喇は其七島寶島の名也、掖玖又此方の陸に近き端島、故南島を呼て邪久といえり、當時南島の名稱未備ば也、

〔地理纂考二十四大隅〕馭謨郡　屋久島

鹿兒島ノ南ニ距ル事四十八里、周廻廿五里ナリ、村落十八、栗生村、永田村、吉田村、一湊村、白子村、宮之浦村、船行村、麥生村、小島村、楠川村、尾野間村、平内村、湯泊村、小瀬田村、中間村、安房村、原村、口永良部島村、高千三百四十五石　平民六千六百八十二人男三千三百十八人女三千三百六十四人　戸數千七十一

〔杜氏通典百八十六邊防〕東夷中略　琉球

煬帝大業初、海師何蠻等云、每春秋二時天清氣靜、東向依稀似有煙霧之氣、亦不知幾千里、三年、帝令羽騎尉朱寬入海求訪異俗、何蠻言之、遂與蠻俱往、因到流求國、言不相通、掠一人、幷取其布甲而還、時倭國使來朝、見之曰、此夷邪久國人所用也、

〔異稱日本傳上二〕今按、邪久者、唐書所謂邪古、日本書紀所謂掖玖也、字雖異、音通、邪久爲我西南小島、故使者知其布甲、

〔新唐書二百二十東夷列傳〕日本、古倭奴也、中略　其東海嶼中、又有邪古、波邪、多尼三小王、北距新羅、西北百濟、西南直越州、有絲絮怪珍云、

〔南朝平壤錄四日本〕西海道近瀏江山少、止養久山居海中、方圓二百餘里、竹中叢茂、多茶笋、又出多羅木、有地都守之、

〔西遊雜記四薩摩〕此地〇薩摩より屋久の島へ、海上二十里といへども遠し、此間に小島多し、さて屋久の島は、古しへ屋久國と稱せし一國にて、東西九里餘、南北五里、七里、或は二里、或は一里、名產には杉

〔續日本紀二文武〕大寶二年八月丙申、薩摩多褹隔化逆命、於是發兵征討、遂校戸置吏焉、

〔續日本紀六元明〕和銅七年四月辛巳、給多褹島印一面、

〔東大寺正倉院文書四十三〕筑後國天平十年正税帳

賣官馬牛皮入府、多褹島人貳拾捌人還歸本島、廿五日單漆伯人、食稻貳伯捌拾束、人別四把

得度者還歸本島多褹島僧貳軀廿五日單伍拾人、食稻貳拾束、人別四把

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年十月戊子、論定諸國出擧正税、毎國有數、但多褹對馬兩島者、並不入限、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年正月戊戌、太宰大貳從四位上佐伯宿禰毛人、坐道鏡左遷多褹島守、

〇守據日本紀略補

〔類聚三代格七〕太政官符

應郡以同姓人補主政主帳事

右撿天平七年五月廿二日格偁、終身之任、理可代遞、宜一郡不得并用同姓、如於他姓中无人可用者、僅得用於少領已上、以外悉停任、但神郡國造陸奧之近夷郡、多褹島郡等類、依先例者、今被右大臣宣偁、奉勅、一郡之人同姓尤多、或身有勞効、或才堪時務、而被拘格旨、不豪選擇、人之爲憂莫甚於此、宜改前例、依件令補、不得因此任譜第人、自今以後、永爲恒例、

弘仁五年三月廿九日

〔釋日本紀十四述義〕掖玖人　夜句人

私記曰、或本爲夜句、同也、掖玖者西海別島也、出美貝、今俗謂之夜句貝、但此島與大隅國相近耳、

〔麑藩名勝考二大隅〕益救島〈延喜式日本紀夜句、續紀夜久、益久、夜古、兩朝平攘錄、日本風土記並作益久山、海東諸國記作益島、圖書編作屋久島、琉球國志略作野古、〉

府南四十八里、周廻三十五里、港五、大小村落二十餘、所隷永良部島、

日本紀曰、推古天皇二十四年、掖玖人來、隋書琉求傳作邪久、唐書作邪古者、並に今の南海諸島に

庶而且富、嘗如播種之下一種子、而生々無窮、是故名焉、〇中略　和泉界有橘屋又三郎者、商客之徒也、寓止我島者一二年、而學鐵炮者、殆熟矣、歸旋之後、人皆不名、而呼曰鐵炮又矣、然後畿內之近邦、皆傳而習之、非翅畿內、關西之得而學之而已、關東亦然、〇中略　然則鐵炮之權輿於我種子島也、明矣、昔者採一稱子之生々無窮之義、名我島者、今以爲符其識矣、

〔麑藩名勝考 二 大隅〕多褹島（續日本紀明世法錄作多褹、日本紀作多禰者、指ス所今ノ琉球ナリ、後ニミユ、唐書作多尼、圖書編作多藝州、蒼霞草、明朝平攘錄並作多褹島、海東諸國記、日本風土記、武備志等並作種島、佗尼什麼、登壇必究等作種子島、是我今俗ノ所書ニ作レルナリ、）

府東南三十九里、周匝四十五里、西去益救島七里、　村數十八

古は今の屋久島を益救能滿の二郡として、多褹島に隷て一國とし、國造を置れき、多褹對馬並言こと、今の壹岐對馬のごとし、故に國史多褹島を係る事、比々枚擧に違あらず、

〔地理纂考 二十四 大隅〕熊毛郡　種子島（書紀多禰、或ハ多褹ニ作ル）

鹿兒島ノ南ニ距ル事三十九里、周廻三十六里廿三間、西距益救島七里ナリ、村落十六、（西表村、國上村、下中村、島間村、由久村、野間村、茎永村、納官村、安納村、古田村、坂井村、平山村、現和村、西野村、増田村、赤尾木村、）　此島上古、屋久島、口之永良部島ヲ合セ、益救、能滿、馭謨、熊毛ノ四郡ヲ置テ多褹國ト云ヒシヲ、天長元年十月大隅ニ隷ラレシナリ、

〔佐藤元海九州記行〕種兒島ハ、大隅ノ國佐多崎ヨリ東南十八里アリ、屋久島ハ正南二十里餘ト云フ、

〔日本書紀 二十九 天武〕十年八月丙戌、遣多禰島使人等貢多禰國圖、其國去京五千餘里、居筑紫南海中、切髮草裳、粳稻常豐、一殖兩收、土毛支子、莞子、及種々海物等多、　庚戌、饗多禰島人等于飛鳥寺西河邊、奏種々樂、

〔續日本紀 一 文武〕三年七月辛未、多褹、夜久、菴美、度感等人、從朝宰而來貢方物、授位賜物各有差、　八月己丑、奉南島獻物于伊勢太神宮及諸社、

くると取まわし、漁村數多有り、むかしは櫻木數千本ありて、花の名高し、此故いく櫻島と稱す國守の御茶屋も有なり、〈中略〉〈此島絶にて海上なめぐれば、十里ありと土人の言也、〉安永八年亥九月〈○九月、噴事作二十月一〉朔日より地動き、海底鳴りて、潮鼎の湧るごとし、こはいかならんと、浦人さわぎおどろきて漁船に乘て、地方へ渡らんとせしに、海底より潮を吹上る事強くて、自おもふ方へよする事叶はず、覆らんとす、兎や角とする内、志滿ケ嶽の頂より砂石を飛して、燃出る事夥敷、北方の漁村を埋む事百餘軒、死亡せるもの百六拾二人、窺つく者百餘人、鹿兒島を始め、近き所の濱浦の人は、二三里も逃去りぞく、〈下櫻島の漁失三四人に習しに、その話し聞じ、〉二十日計強く燃て、其後は煙り計立て今のごとし、又其頭海底より土砂吹上て、島となる所大小七ツ、大なるは周く二十町餘、小なるは一二丁、年々に高くなると、浦人の〆語りき、〈○中略〉すべて島の模樣、入海の眺望、勝景の地也、〈○中略〉眞言律宗邦光寺といへるは、小高き所[illegible]て、此境內より櫻島を見れば、風景一しほよし、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年十二月、是月、西方有聲似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、煙雲晦冥、奔電去來、七日之後、乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、沙石自聚化成三島、炎氣露見、有如冶鑄之爲、形勢相連望似四阿之屋、爲島被埋者、民家六十二區、口八十餘人、

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕遠要國〈○中略〉陸奧　出羽　佐渡　對馬　多褹〈○中略〉

併分國國〈○中略〉大隅〈中略〉天平元年月日、作二多褹島一、隷二大隅國一、〉

〔書言字考節用集 一 乾坤〕多褹島〈續日本紀作二多褹一、隅州屬島、〉

〔倭訓栞 中編 十三 多〕たねがしま　日本紀に多褹島、續日本紀に多褹島、武備志に種子島、唐書に多尼全浙兵制に種島に作れり、今大隅の國に屬り、南島志に琉球の内とせり、

〔南浦文集 上〕鐵炮記〈代二種子島久時一〉

隅州之南有二一島一、去レ州一十八里、名曰二種子一、我祖世々居焉、古來相傳、島名二種子一者、此島雖レ小、其居民

〔麑藩名勝考二大隅〕同郡隅○大櫻島。島。本朝文粹亦云向島、武備志同、是麑島に對備するの名なり、櫻島といふは、むかし櫻花一葉、海上に浮てよりなれる島ゆえ名づけしと云說あり、蓋木花開耶姫の名によりしなるべし、方角集に、薩摩の內に收めしは誤なり、

府東海上一里周廻七里

山上八分より上は、三條の外路なし、涉るを一里といひ、降るを十八丁と云、皆九折の嶮岨也、巓に湖あり、嶺に神祠あり、斎火々出見尊を祀る、又月夜見尊、火闌降命をも配祀すと云、故に兎を愛して、島民其名を諱て敬謹するものは、月夜見尊を奉祀するが故といふ、

〔地理纂考二十大隅〕大隅郡　櫻島

鹿兒島ヲ距ル事東方一里、四方海岸、周廻九里三十一町餘、村落十九、武村、古里村、湯ノ村、西道村、杉浦村、二俣村、白濱村、脇村、高免村、瀬戸村、黑神村、有村、野尻村、赤水村、橫山村、小池村、赤生原村、藤野村、沖之島村、高二千七百十七石五斗三升八勺一撮、○中略人員總計一万千四百二十九人、戶數二千百二十五軒、

島形大抵圓シ、中央ニ櫻島岳秀出ス、人家皆海岸ニアリ、南ニ沖子島アリ、西南ニ鳥島アリ、北ニ新島アリ、皆當島ニ屬ス、サテ此島俗ニ靈龜四年、或ハ養老二年、或ハ和銅元年ニ湧出ストイヘルハ、無稽ノ妄說ニシテ、兎角論ズルニ足ラズ、按ズルニ、續日本紀□□天皇天平寶字八年十二月、西方有聲似雷、非雷、時當大隅薩摩兩國界、煙雲晦冥、奔雷去來、七日後、乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、砂石自聚、化成三島、炎氣露見、有如治鑄之爲、形勢相連望似四阿屋、爲島被埋者、民家六十二區、口八十餘人云々トアルヲ訛レル事論ナシ、是ハ同紀ニ神造島トアリテ、今ノ國分鄕小島ナリ、サルヲ近世騷人文士等、妄リニ櫻島ヲ天平島、或ハ寶字峯ナドヽイヘルハ笑フニ堪ヘリ、神造島ノ事ハ、同國國分鄕ノ卷、小村ノ條ニ詳ナリ、白尾國柱曰、元帝紀云、靈龜四年向島湧出ス、或說養老二年、向島湧出ス、按ズルニ、二說恐ラクハ非ナリ、靈龜養老ノ間、天長時政錄等曲盡シテ遺サズ、櫻島ゴトキノ一島生出セムニ、圖史ニ是ヲ登載セザラムヤト云々、

〔西遊雜記四〕櫻島は、大隅薩摩の中央にありて、小ならざる島にて、山をさまケ撒といふ、麓はくる

經緯

山城　京　○度○○分○○秒略○中　大隅　佐多岬　西四度五四分○○秒

〔佐藤元海九州紀行〕一大隅國、東ハ日向ニ接シ、西ハ薩摩ニ連リ、南ハ大洋ニ岬出テ、北ハ肥後ノ球摩郡米良ノ深山ニ遠ク犬牙接壤シ、東西ハ短ク、南北ハ長シ、又南海中ニ種兒島屋久島アリ、此二島ハ頗ル大ニシテ、一國ノ如シ、皆此大隅ノ屬地ナリ、

〔日本地誌提要七十二大隅〕疆域　東ハ日向、西ハ薩摩、北ハ日向、薩摩、南ハ海ニ至ル、東西凡壹拾里、南北凡貳拾八里、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕大隅國所屬郡　實測　中島、周廻九町一十四間、　遠測　舟木礁　沖大菅礁　地大菅礁　天神島

大隅郡　實測　櫻島周廻一十里一町三十七間、　新島、大周廻一十九町四十四間、　新島、中周廻七町八間　新島、小周廻四町、（新島三、安永八己亥年十月湧出、）　ワコ島、周廻一十一町二間、　遠測　島瀨　枇榔島　大輪島　殷河洲　江之島　烏島　新島、燃　新島、沖（新島二、安永八己亥年十二月湧出、）　桑原郡　實測　邊田小島、周廻一十七町一十間、（從之南岬、至天神岬、六町三十三間、）　沖小島、周廻一十町五間、　遠測　一丕島

馭謨郡　實測　屋久島、周圍一十六里三十七間、吉田安房村、三十度一十八分、長田村、三十度二十四分、吉田宮之浦村、三十度二十五分、同小瀨田村、三十度二十三分半、（從宇生川口、至栗生村、一入丁一十六間、從島田村濱、至宮所、二丁一十五間、從島田岬、至御崎、三丁一十八間、從一湊村濱、至矢番崎、一十四丁四十間、）　遠測　口之永良部島　沖岩　七ッ瀨

熊毛郡　實測　種子島、周廻三十七里二十七町四十三間、西面村、赤尾木三十度四十三分半、國上村濱田三十度四十八分、同濱脇、三十度四十五分半、島間村古川、三十度一十七分、（從西面村赤尾木、至島間之島、種二十一里一十四丁四十六間、從國上村濱田岬、至三丁二十二間、從國上村濱島、至宮所、七丁二十八間、從納官村濱、至屋久濱、從西濱二里二十五丁三十間、）　遠測　馬毛島　アブノコ鼻　蠑螺瀨　山瀨（重本村）　竹瀨（納官村）　アキト瀨　沖ノ瀨　小瀨　竹瀨（重本村）　大島　岡島鼻　岡大瀨　沖島鼻　沖大瀨　一ッ瀨　中山瀨　沖山瀨　山瀨（納官村）

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕大隅（於保須美）

〔饅頭屋本節用集天地〕大隅（オホスミ）（隅州）

〔日本風土記一〕大隅（阿思米）（アウスウミイ）

〔易林本節用集下〕大隅（隅州）中、管八郡、東西二日、雖爲小國、食類豐、魚鼈類多、紙帛殊饒也、中上國也、

〔倭訓栞前編四十五〕おほすみ　大隅の國は、字の如く南海へさし出たる國にて、種が島、やく島なども此國に屬せり、

〔諸國名義考下〕大隅　和名抄に、大隅（於保須美、國府在桑原郡）、名義は日向國内にて、西南の隅に差出たるゆゑに、大隅郡と號しならむ、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度（附里程）

大隅邊津加村枝鄕大泊、極高三十一度一分、經度西四度五十六分、從薩摩鹿兒島（泊海）三十七里一十四町、（九州南極地）　四百一十九里四町四十三間半（○從東京）

大隅種子島、（西面村赤尾木村）極高三十度四十三分半、經度西四度三十六分半、從大泊（渡海直徑）一十里三十町、四百二十九里三十四町四十三間半（○從東京）

大隅屋久島、（吉田安房村）極高三十度一十八分、經度西四度五十五分半、從大泊（渡海直徑）一十九里二十四町、四百三十八里二十八町四十三間半（○從東京）

〔日本經緯度實測〕北極出地

大隅　波見村（肝屬郡）　三一度二一分〇〇秒　赤尾木（種子島）　三〇度四三分三〇秒

大泊　三一度〇一分〇〇秒　安尾村（屋久島）　三〇度一八分〇〇秒（○中略）

東西里差

ふ所にて、北かも汐南北よりさし込、要害風景もよき所なり、

名所

〔日本鹿子十四〕同國日向〇中名所之部

霧色の森　標島　雨の森　神路沖　みかさ　すうと　きり島など云所あり、北らぬひのつくしと云は當國のことなり、

右之外舊記にのする名所ありといへども、在所不分明なり、

雑載

〔延喜式兵部二十八〕諸國器仗略〇中　日向國甲二領、横刀六口、弓十五張、征箭廿五具、胡籙廿五具、

大隅國

大隅國ハ、オホスミノクニト云フ、西海道ニ在リ、元明天皇和銅六年四月、日向國肝坏、囎唹、大隅、姶羅ノ四郡ヲ割キテ始テ置ク所ナリ、東ハ日向、西ハ薩摩、南ハ日向、薩摩ニ界シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ十里、南北凡ソ二十八里、其地勢ハ東北西ノ三面、山嶽回抱シ、南方海表ニ横出シテ半島ノ狀ヲ成シ、西方薩摩ト相對シテ鹿兒島灣ヲ爲ス、此國ハ古ヘ國府ヲ桑原郡ニ置キ、菱刈、桑原、囎唹、大隅、姶羅、肝屬、馭謨、熊毛ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、始メ多褹島ハ多褹國トモ稱セシガ、仁明天皇天長元年、此國ニ隷屬セシメ、能滿郡ヲ馭謨郡ニ、益救郡ヲ熊毛郡ニ合ス、後世姶羅郡ヲ誤テ始羅郡ト稱セシガ、明治維新ノ後、其舊稱ニ復シ、新ニ大島郡ヲ置キ、囎唹郡ヲ東西ニ分チ、大隅郡ヲ南北ト爲シ、標島ヲ以テ其北郡ニ充テ、更ニ菱刈郡ヲ廢シテ薩摩國伊佐郡ニ併セ、北大隅郡ヲ薩摩國鹿兒島郡ニ併セ、南大隅郡ヲ肝屬郡ニ合セ、又日向國南諸縣郡ヲ東囎唹郡ニ合セテ、囎唹郡ト改稱シ、桑原、西囎唹二郡ヲ姶良郡ニ合セ、馭謨郡ヲ熊毛郡ニ併セ、凡テ五郡ト爲シ、鹿兒島縣ヲシテ之ヲ治セシム、

○按ズルニ、此人口總數、內譯ト合ハズ、恐ラクハ一誤アラン、

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 略○中

御料私領

一人數貳拾三万七百八拾三人　高三拾万九千九百五拾四石餘　日向國

内 拾貳万五千八百五拾六人 男 / 拾万四千九百貳拾七人 女 ○中略

諸國人數調 弘化三丙午年 略○中

御料私領

一人數貳拾四万七千六百貳拾壹人　高三拾四万百貳拾八石餘　日向國

内 拾三万六百八人 男 / 拾壹万六千拾三人 女

〔人國記〕日向國

日向國之風俗、無體無法之事ノミ多ハ、只氣之尖成ニマカセナ、己理ト見ル時ハ、非ト云人有トイヘドモ、且而不用、己非ト云フ時ハ、人來テ道理トイヘドモ且而不從、於是其理非ハ第二ニ而、其讒ズル處ノ人ト口論ニナリ、終ニ討果スノ類多キ風俗也、寔ニ偏卑之淺マシキ事、人倫ノ道理ヲ不知事、可歎所也、唯死スルヲ以テ善トスル事、危キ風俗也、可恐、

〔西遊雜記 三〕日向の國は略○中夏月に至りて、下民殘りなく裸身にて、男子はいふに及ず、婦人も緋の木綿下帶計にて居るなり、一村の里正は、女房など斯は有まじきと見るに、垢つかぬ二布をせしのみにて、娘小兒に至るまでも、裸にて近鄉一里ばかりもあるところへ、用事ありて行にも裸にて、たばこ入鼻紙入などは、二布の紐に差はさみ行事なり、はじめて行あひし時は、目なれざる體故に、おそろしくおもひし程なりき、凡て婦人耻敷といふ事更に知らぬ體なり、家居は、一家として上方中國筋に建し樣なる奇麗なるは、在々に於て更になし、雪隱などは、家陰に建て、壁もなき故取はなしの厠也、悉く記すに及ず、是等の事にて國風を察し知るべし、されども初めにいふごとく、人は武士にて、城下近くはさほどもなく、延岡などの市中は、餘程よき町にて、諸品大概調

人口

ニ向ヘリ、是以テ氣候融和ニ、土地肥沃ナリ、故ニ寶玉、諸金、諸石、諸礦、藥物、丹青、百穀、百菓、絹布、糸綿、木綿、枲麻、藍靛、紅花、紫根、漆樹、蠟油、材木、炭薪、蘭葉、蒲席、茶、紙、陶器、鳥獸、魚鼈ノ類ニ至ルマデ、凡人世必用ノ諸品、一トシテ産セザルモノナシ、且ツ又河ノ流レ甚ダ多クシテ、津出スルニ宜ク、殊ニ細島ト縣河ノ二處ハ、都合便要ノ海港ナレバ、若シ能ク鎔造ノ神意ヲ奉リ、事天ノ政教ヲ行ハヾ、其國內富豐ニシ、人民ヲ蕃盛センコト、掌ヲ返スヨリモ易シ、九州ノ諸國ノ中ニ於テ、物產ヲ興シ、交易ヲ結ブニ便利ナルコト、此國ニ勝レル者アルコトナシ、實ニ上々國ナリ、然レドモ此國ハ古來土地ヲ開拓セシコトモナク、國事ヲ經營シタルコトモナキヲ以テ、其出所ノ產物悉ク皆ナ粗貨ニシテ、極品ノ物アルコトナク、紙ヲ出スト雖ドモ、半切ハ佐土原飫肥ヨリハ遙ニ劣レリ、半紙ハ大洲岩國柳川等ニハ比スベキニモアラズ、茶ハ宇土八代相良ニモ及バズ、烟草ハ國府ハ勿論、大隅ノ產ニモ及バズ、其他ノ諸物モ此レニ准ジテ推察スベシ、此レ皆ナ事天ノ政事ヲ行ナハズ、鎔造ノ神意ヲ知ラザルヲ以テ、上下心ヲ一ニシテ、國事ヲ經營セザルノ致所ナリ、抑モ當國ハ西海無雙ノ上々國ナルニ、何ノ緣由ニテカ如斯ニ國土モ他國ヨリ稚ク、風俗モ就謨ナルヤト、熟々此ヲ稽ズルニ、昔シハ領主ノ度々替リタル處ナルガ故ニ、君侯モ士大夫モ土地ヲ開發シ、物產ヲ經營スルコトニハ心ヲ盡サヾリシニヤ、

〔日本書紀二十二推古〕二十年正月丁亥、置酒宴群卿、是日大臣上壽、歌曰、〇中略天皇和曰、摩蘇餓豫、蘇餓能古羅破、宇摩奈羅摩、辟武伽能古摩、多智奈羅磨、句禮能摩差比、宇倍之阿茂、蘇餓能古羅烏、於朋枳彌能、兎伽破須羅志枳、

〔續日本紀一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金青、〇中略常陸國〇闕恐衍備前、伊豫、日向四國、朱沙、

〔官中秘策五〕日向國　五郡〇中略

一人數貳拾貳万五千四百貳拾壹人　內 拾貳万六千四百九人男 九万九千九百人女

出擧稻　國產貢獻

〔萬國夢物語下〕日向ニ至、東ハ海濱、南ハ大隅、西ハ肥後也、氣候暖國也、北極出地卅一二度成ベシ、中、管五郡、臼杵、兒湯、那珂、宮崎、諸縣也、高廿九万千石餘、飯肥、高鍋、延岡三ケ所ノ城主高合十五万石餘、其餘ハ皆薩州鹿兒島ノ大守領之、佐土原ハ鹿兒島ノ分家也、城下ハ何モ皆海邊也、

〔日本鹿子十四〕日向國、五郡、中々國、四方三日、中略○　知行高二十八万五百八十石、

〔和漢三才圖會八十〕日向　五郡　高二十八万八千五百八十九石

〔官中秘策五〕日向國　五郡中略○

一石高三拾万九千九百五拾四石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調中略○

日向國御料私領　一高三拾四万百貳拾八石八斗六升壹合七勺九才

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻中略○

日向國、正税公廨各十五万束、國分寺料一万束、文殊會料一千束、修理池溝料二万束救急料四万一千束、俘囚料一千一百一束、

〔倭名類聚抄國郡五〕日向國　管五(中略)正公各十五萬束、本穎三十七萬三千百十束雜穎七萬三千百十束、

〔延喜式主計二十四〕日向　右廿五國中緣中略○

日向國行程上十二日、下六日、

調絲十八絢、自餘輸綿、布、薄鰒、堅魚、　庸輸綿、布、薄鰒、　中男作物、斐紙、麻、熟麻、茜、胡麻子、

〔毛吹草三〕日向

赤大米大隅薩摩三ケ國ニ作之　五倍子　黃檗　苦竹　松角　松板　五器　藤籠履枕トウニテスル枕也

○按ズルニ、和漢三才圖會ニハ、右ノ外ニ煎茶、漆、米眞等ヲ擧ゲタリ、

〔日向經緯記〕當國ハ部內山岳極メテ多クシテ、少ナシト雖ドモ東南ニ大海ヲ受ケテ、信ニ出ル日

殿下御領島津庄田代三千八百三十七町　一圓庄二千二十町（中略）
三俣院七百丁　右同郡（○諸縣）内　地頭同人（中略、忠久、）
寄郡千八百十七町（中略）
新納院百二十町　右兒湯郡内　地頭掃部頭殿（中略）　穆佐院三百丁　右諸縣郡内　地頭
同人（○忠久、右兵衛尉、中略、）　櫛間院三百丁　右同郡（○宮崎）内　地頭同人　救仁院九十丁　右諸縣
郡内　地頭同人　眞幸院三百廿丁　右同郡内　地頭同人（中略）
建久八年六月　日（名○署略）

藩封

（慶應元年武鑑）内藤備後守□□（帝鑑間、朝散大夫）　七万石　居城日向臼杵郡延岡（江戸ヨリ）海陸三百九十三里
（本名縣ト云、城主高橋右近居、慶長十九有馬左衛門佐直純、同左衛門佐康純、同佐渡守永純、元祿五、三浦壹岐守明敦、正德二、牧野備後守成英、同備後守貞通、延享四、内藤備後守政樹、以後領之、）
伊東左京大夫祐相（柳間、朝散大夫）　五万千八十石餘　居城日向那珂郡飫肥（江戸ヨリ）海陸三百四十三里
（飫肥トモ、小肥トモ云、油津ヨリ大坂迄船路二百八里、夏冬逸ハ不定、大坂ヨリ江戸迄陸百三十三里、又日向ヨリ近道、城主本道出之高、伊東氏代々領之、○節略）
（慶應元年武鑑）島津淡路守忠寛（大廣間、四品）　二万七千七拾石餘　居城日向那珂郡佐土原（江戸ヨリ）海陸三百九十三里
（當城代々島津氏領之、）
秋月長門守種殷（柳間、朝散大夫）　二万七千石　居城日向兒湯郡高鍋（江戸ヨリ）海陸三百八十二里半餘
（右兼出之高、慶長五年ヨリ秋月氏代々領之、○節略）

田數
石高

（倭名類聚抄五國郡）日向國　管五（田四千八百餘町）
（伊呂波字類抄比國郡）日向國（管五、中略、本田七千二百三十六丁○運歩色葉集、三十二作四十、）
（拾芥抄中末本朝國郡）日向（中遠）五郡（中略）田八千二百九十八町
（海東諸國記）日向州　郡五、水田七千二百三十六町、

院

三百丁　宮崎郡内　弁濟使故宇佐宮司公通宿禰後家　廣原庄百丁　右那河郡内　弁濟使七郎助綱〇中略　宮崎庄三百丁　右宮崎郡内　地頭前掃部頭殿〇中略
伊佐保府三十丁　右同郡〇諸縣内　弁濟使僧靜達〇中略
權門　八條女院御領國富庄田代千五百二町〇中略
前齋院御領田代二百七十八町
平郡庄百丁　右同郡〇那珂内　地頭預所右馬助殿廣時〇中略
殿下御領島津庄田代三千八百三十七町　一圓庄二千二十町〇中略
吉田庄三十丁　右同郡〇諸縣内　地頭同人〇忠久、中略
公領右松保田代廿五町　右同郡〇臼杵内　地頭土持太郎宣綱〇中略
建久八年六月　日〇名署

〔前田家所藏文書〇何事記録裏書文書〕日向國浮田庄内小松方并同國大墓別府、御當知行不可有相違之由、院宣所候也、仍上啓如件、
建武三年九月廿日　隆蔭
謹上東北院僧正〇興福寺覺圓御房

〔榎戸文書〕御領目録〇人給付之
一伏見御領〇依三旱水損年貢不足〇中略
一日向大島保〇貳千五百疋　茂成朝臣御恩五百疋〇中略
永享十二年八月廿八日　當知行分記之
後崇光院御判

〔日向國圖田帳〕日向國　注進國中寺社庄公總圖田町　合田數八千六十四町〇中略

莊保

ナリ、風土記云、俗語ニハ謂栗謂區兒、然則韓櫃生村ト云フ者、蓋云韓栗林歟ト云ヘリ、

(吾妻鏡三)壽永三年○元曆元年四月六日甲戌、池前大納言、竝室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、○中略

池大納言家沙汰○中略　國富庄日向　已上八條院御領

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月六日

(薩藩舊記前集十五)御領日州大田原村新助藏本

日向國凶徒肝付八郎兼重誅伐最中、於令住宅之輩者、可爲御敵之旨被定之處、國富庄名主庄官等、背制法、不馳參之上者、早馳向彼南北鄉、相催之、可被具參、若至不叙用族者、令放火住宅、可被召進其身也、仍執達如件、

建武五年九月廿日　判

土持新兵衛尉殿○宣綱

(日向國圖田帳)日向國　注進國中寺社庄公總圖田町　合田數八千六百六十四町

寺領田代二百三十八町○中略　安樂寺領六十三丁

馬關田庄五十丁　右諸縣郡內　地頭須江太郎不知實名○中略

社領田代二千百六町　宇佐宮領千九百十三町

縣庄百三十丁　右柏杵郡內　地頭故勳藤原衞門尉不知實名　富田庄八十丁　右同郡內　地頭同人　國富庄八十丁　右同郡內　辨濟使太郎宣綱○中略　田島庄九十丁　右同郡內　地頭故勳藤原左衞門尉不知實名　諸縣庄四百五十町　右諸縣郡內　地頭同人　浮田庄

村里名邑

八丁　右同郡内　地頭同人〇中略

右去元暦年中之頃、武士亂逆之間、於譜代國之文書者、散々取失畢、雖然寺社公總圖田大略注進如件、

建久八年六月日〇署名略

〔郡名一覽〕一日向國　日州　四方三日　五郡

高三拾万九千九百五拾四石五斗貳升八合壹勺四才　三百九拾八ヶ村

●延岡二百九十三里　●高鍋三百八十二里中　●飫肥三百四十三里

●佐土原三百九十三里　〼飫肥伊藤修理之助　〼●都城薩州三万八千石島津石見

△富高三百四十八里

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕日向　五郡、四百八十三村、

御料私領高三十四万百二十八石八斗六升一合七勺九才

諸縣郡百七十五村　宮崎郡二十九村　那珂郡七十八村　兒湯郡四十八村　臼杵郡百五十三村

〔地勢提要〕地邑島嶼奇名

日向　臼杵郡、大武町、伊福形村、庵川村、淸水谷村、落子村、荒生村、神門村、鬼神野村、大武島、海士取瀨、那珂郡、富士村、飫肥海北村、大納村、兒湯郡、都於郡町、諸縣郡、島中村、水流迫村、大川平村、杉水流村、枇榔村、

〔塵袋〕二一日向國ニ韓槵生村所アリトカヤ、コノ所ニ木槵子ノ木ノオヒタリケル歟如何、〇中略昔智隆武別ト云ケル人、韓國ニワタリテ、此菓ヲトリテカヘリテウヘタリ、此故ニ槵生村トハ云

開晴日月照光、因曰高千穗二上峯、後人改號智鋪、
〔薩藩舊記前集十三重久文書〕大隅國御家人重久大椽篤兼申、自最前爲御方、去正月廿八日、馳向日向國救二郷胡麻崎城、合戰追伐千種宰相〈〇忠顯〉家雜掌等、同廿九日、相向救二院志布志城、責落肝付八郎兼重與黨等時、親類彥次郎祐任令討死、若黨源六〈〇右口疵〉同大和房内經被疵〈右頰射疵〉條、被見知之上者、軍忠之次第、且賜一見狀、且可被申注進候、仍目安狀如件、
建武三年二月日　承了〈〇此ノ下虫損アリ〉

〔日向國圖田帳〕日向國　注進國中寺社庄公總圖田町　合田數八千六十四町〈〇中略〉
權門　八條女院御領國富庄田代千五百二町　一圓庄千三百八十二丁〈〇中略〉
國富本郷二百四十丁　右同郡〈〇宮崎〉内　土持太郎宣綱〈〇中略〉
寄郡百二十丁
穗北郷七十丁　右同郡〈〇兒湯〉内　地頭同人　鹿野田郷五十丁　右同郡内　地頭同人〈〇中略〉
殿下御領島津庄田代三千八百三十七町　一圓庄二千二十町
北郷三百丁　右諸縣郡内　〈前右兵衞尉地頭忠久〉　中郷百八十丁　右郡内　地頭同人　南中郷二百丁　右郡内　地頭同人　救仁郷百六十丁　右同郡内　地頭同人
財部郷百五十丁　右同郡内　地頭同人〈〇中略〉
寄郡千八百十七町〈〇中略〉
飫肥北郷四百丁　右宮崎郡内　地頭同人〈〇右兵衞尉忠久〉　同南郷百十丁　右同郡内　地頭同人〈〇中略〉
没官御領田代六十八丁　宇都宮所衆
三宅郷二十丁　右柏杵郡内　地頭信綱　三納郷四十町　右同郡内　地頭同人　間世田

りもあり、郡中山多く水田すくなし、又郡中に川あり、此川宮崎郡を流れて、(去川と云)東方海にいる、國中第一の大川なり、其源霧島山の南又北より出て、二十里をへて海にいる、

〔日本書紀 景行七〕十八年三月、天皇將向京、以巡狩筑紫國、始到夷守、是時於石瀬河邊人衆聚集、於是天皇遙望之、詔左右曰、其集者何人也、若賊乎、乃遣兄夷守弟夷守二人令覩、乃弟夷守還來而諮之曰、諸縣君泉媛、依獻大御食而其族會之、

〔續日本紀 聖武十一〕天平三年七月乙亥、定雅樂寮雜樂生員、(中略)諸縣舞八人、(中略)但度羅、諸縣、筑紫舞生、並取樂戶、

〔續日本後紀 仁明六〕承和四年八月壬辰、日向國(中略)諸縣郡霧島岑神預官社、

〔倭名類聚抄 日向九〕臼杵郡　氷上　智保　英多　刈田(高山寺本作刈、)

兒湯郡　三納　穗北　大垣　三宅　覩唹　韓家　平群　都野

那珂郡　夜開　新名　田島　於部(高山寺本作物、於)

宮埼郡　飯肥(高山寺本作飫、飯)　田邊　島江　江田

諸縣郡　財部　縣田　瓜生(宇利布乃、國加用野字、)　山鹿　穆佐　八代　太田　春野

〔日向之國縣記 上〕日向五郡

臼杵　高千穗、八戶、鹽見、日知屋、門川、山陰、山裏、縣、　兒湯　新納、穗北、壬生代、米良、椎葉、都於、

那賀　田島、飫肥、南鄉、福島、　宮崎　別府、清武、田野、浮田、久津羅、高濱、堤內、　諸縣　巢志、田綾、立笠、正木、庄內、志布志、大崎、

〔釋日本紀 述義八〕日向國風土記曰、臼杵郡內知舖鄉、天津彥火瓊々杵尊天降於日向之高千穗二上峯、時、天暗冥、晝夜不別、人物失道、(失原作共、據一本改、)物色難別、(色原作也、據一本改、)於茲有土蜘蛛、名曰大鉗小鉗二人奏言皇孫尊以御手拔稻千穗爲籾投散四方、必得開晴、于時如大鉗等所奏搓千穗稻爲籾投散、卽天

〔塵袋七〕一備ノカスヲ何ロト云フハ略○中日向國古。庚。郡。クキニハ見湯郡トカクニ吐濃峯トノミネト云フミネアリ、神オハス、吐乃大明神トゾ申ナル、略○下

那珂郡

〔太宰管内志日向三〕那賀郡

延喜式に日向國那珂郡あり、倭名抄に日向國那珂中とあり、名義は、仲臣の居たりし處などにて負せたるか、仲臣は姓氏錄に、神八井耳命之後也とあり、又古事記中卷に、神八井耳命者、阿蘇君、筑紫三家連等之祖也、また阿蘇社記に、健磐龍命者、神武天皇第二之子、神八井耳命第六之御子也などとあるを思ふに由あるべし、又は姓の仲もこゝより起れりしにてもあるべし、なほよく考ふべし、又按するに國帳覆鏡に、日向國那珂郡、古老傳云、大穴持命巡行此國、至此處詔曰之中、故云中郡ともあり、

宮崎郡

〔太宰管内志日向三〕宮崎郡

方位は、輿地圖に依て按するに、南方は那珂郡にとなり、西は諸縣郡にとなり、北は兒湯諸縣の二郡にとなれり、かくて東方は輿地圖に兒湯那珂二郡の土地、いりめぐりたる如くにかけれど、おぼつかなし、こはなほよくかの國人にたづねてさだむべし、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年九月辛巳、勅、略○中又同月○七十一日、得肥後國葦北郡人刑部廣瀨女、日向國宮崎郡人大伴人益所獻白龜赤眼、青馬白髮尾、並付所司令勘圖諜、

諸縣郡

〔麑藩名勝考二日向〕諸縣郡和名鈔、諸縣、牟良加多、日向風土記曰、此郡舊日無郷村里之名、唯聞耳有焉、國云、諸縣、鄕十二、莊三、今一郡所管十九鄕、六十四村、周圍九十五里七町十間、中、

〔太宰管内志日向三〕諸縣郡

方位は輿地圖に因て按するに、東方は宮崎、那珂の二郡にとなり、南方は海、又大隅國肝屬郡にいたり、西方は大隅國贈於郡、又桑原郡、又菱刈郡、又出水郡、又肥後國玖麻郡につらなり、北は玖麻郡より、當國兒湯郡にいたりて、南北三十里餘、東西ある處は十五六里、ある處は十里、又七八里ばか

諸縣(モロカタ)	宮崎(ミヤサキ)	那珂(ナカ)	管五
同	宮埼	同(中)	同
同	宮崎	同	五郡
同	同	那珂 那河 那賀	
同	宮埼(ミヤサキ)	那珂(ナカ)	同
同	宮崎	同	同
同	同(ミヤザキ)	同(ナカ)	同
同	同	同	同

臼杵郡

〔日向經緯略記〕日向州臼杵郡ノ地、東ハ鯖香取ノ東海岸（此所ハ相州浦賀ノ港ヨリ西ニ距ルコト六度二十八分、南ニ距ルコト三度零三分ニ當リテ、此郡内ノ中ニテハ、最モ東端ニシテ、海中ニ尖リ出タルトコロナリ、）ヨリ起テ、西ハ肥後ノ國八代郡阿蘇郡ニ界スルノ境、野嶽三國山等ノ諸山ノ中（皆浦賀ノ西七度零七分、或ヒハ八分、）ニ至リ、南ハ同國兒湯郡ノ界（赤道下ヲ北ニ距ルコト三十二度二十一分）ノ處ヨリ起テ、北ハ豐後ノ國大野郡ノ界ナル（三十二度三十一分）山ノ間ニ至ル、是レ此ノ郡内ニ於テ最モ幅ノ濶キ處ナリ、西ノ方ハ幅頗ル狹シ、肥後ノ國米良ニ界スル渡河村ヘ南山中（赤道ヲ北ニ距ルコト三十二度二十三分）ヨリ起テ、阿蘇郡ノ岩山村ニ界スル（三十二度二十一分）山ノ間ニ至ル、

兒湯郡

〔太宰管內志日向三〕兒湯郡

方位は東は海を限とし、南方は那珂諸縣二郡にとなり、西は肥後國玖麻郡にとなりて、大山をはさめり、○中略北は臼杵郡にとなりて東西十里餘、南北八九里あり、郡中山多く川二流あり、

〔日本書紀景行七〕十七年三月己酉、幸子湯縣、遊于丹裳小野、

〔續日本後紀仁明六〕承和四年八月壬辰、日向國子湯郡○子湯郡原脫、據一本補小都濃神妻神、○中略預官社、

國府

郡

ニ及ベリ、

〔倭名類聚抄五國郡〕日向國〈○中略〉兒湯〈古田(田恐由誤)國府〉

〔倭名類聚抄五國郡〕日向國 管五〈○注略〉臼杵〈字須岐〉兒湯〈古田(田恐由誤)國府〉那珂〈中〉宮埼〈三也佐岐〉諸縣〈牟良加多〉

〔延喜式二十二民部〕日向國、中、管 臼杵〈ウスキ〉兒湯〈コユ〉那珂〈ナカ〉宮崎〈ミヤサキ〉諸縣〈モロカタ〉〈○中略〉右爲遠國、

〔拾芥抄中末本朝國郡〕日向、中遠 五郡、臼杵、兒湯、府那珂、宮崎、諸縣、敎。貳。〈如之大也〉

〔皇國郡名志〕日向國 五郡

臼杵〈ウスキ〉●〔延岡〕●富高〈七山〉●桑木 ●細島 ●三江野 〈山陰〉七ヒラ 肥後ヨリ海ニ貫

兒湯〈コユ〉〔財部〕●津野 〈高城川〉 肥後ヨリ海ニ貫

那珂〈ナカ〉●〔飫肥〕●油津 ●宮浦 ●本郷 〔佐土原〕東海ヨリ南海ニ通

宮崎〈ミヤサキ〉●北方 〈宮崎〉〈神武帝社〉 國中

諸縣〈モロカタ〉●本庄 ●九島 ●綾谷 ●志布子 ●野尻 花堂 ●西キリシマ ●大久保 大隅薩摩肥後界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕日向

六國史		子湯
古書		
延喜式	臼杵〈ウスキ〉	兒湯〈コユ〉
倭名抄	同	同
拾芥抄	同	同
諸書	同	同
郡名考	同	同
天保郷帳	同	同
明治初年輯	同	
地誌提要	同	同
郡區編制	同	同

〔先代舊事本紀十國造〕日向國造

輕島豐明朝〈神○應〉御世、豐國別皇子三世孫老男定賜國造、

〔日本書紀景行七〕十三年五月、悉平襲國、因以居於高屋宮、已六年也、於是其國有佳人、曰御刀媛、〈御刀此云彌波迦志、〉則召爲妃、生豐國別皇子、是日向國造之始祖也、

〔續日本紀元明六〕和銅六年四月乙未、割日向國肝坏、贈於、大隅、姶羅四郡、始置大隅國、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年正月戊子、從五位下田口朝臣大戸爲日向守、

〔太閤記十〕大隅日向知行割の事

日向五郡之內　二郡島津兵庫頭息又一郎　二郡新納武藏守　一郡御藏入

〔島津記〕六月〈天正○十五年〉十五日には義久公鹿兒島を御立ありて上洛し給ふ、〈○中略〉扨又薩摩大隅は本の如し、日向諸縣郡計給はりけり、〈○中略〉日向國飫肥曾井清武は伊東に給ふ、同國縣三城宮崎は高橋に給ふ、高城財部は秋月に被下、都於郡佐土原、三納穗、北富は島津中務大輔家久に給ふ、眞幸院は兵庫頭嫡子又一郎に給ひけり、

〔日向經緯略記〕當國元龜天正ノ比迄ハ、豐後ノ大友家ノ管轄ニ屬セリ、天正六年ノ冬、大友家飫肥ノ伊東ガ爲ニ、薩摩ノ島津ト甘河ニテ戰テ大敗セシヨリ、暫ラク島津家ノ持トナリ、同十五年、豐臣ノ關白家、島津征伐ノ後チハ、領主シバ〱替リテ、慶長十九年ニ、有馬左衞門ノ佐直純、肥前ノ島原ヨリウツリ來リテ、此ノ國ノ主トナリ、元祿年中ニ至テ、有馬ハ越前ノ丸岡ニウツリ、三浦壹岐守明敬此ノ地ニ主タリ、其後チ正德二年ニ至リテ、三浦ハ作州ノ勝山ニウツリ、牧野備後守成英三州ノ吉田ヨリ移リ、御當家〈○內藤〉ノ領國トナリ、天正年中ヨリ延享四年マデ、凡ソ百七八十年ノ間ニ、此國ノ主ヲ替ヘルコト八九度ニ及ベルナリ、今ノ君侯ノ御先祖ハ、奧州ノ磐城平ヨリ移リテ、此ノ國ノ君ト成ラセ給ヘルコト、延享四年ヨリ此ノ文政八乙酉ノ年ニ至リ、既ニ七十九年

〔日本地誌提要七十一日向〕沿革　鴻荒ノ世、瓊々杵尊高千穗宮（今諸縣郡都城宮丸村其遺址ナリト云）ニ居ル、皇曾孫彦火々出見尊東征ノ師ヲ起シ、中國ヲ戡定ス、是ヲ神武天皇ト爲ス、後國府ヲ兒湯郡ニ置（府址佐土原ニアリ、今那珂郡ニ屬ス）、保元中、土持信綱ニ臼杵郡縣莊ヲ賜フ、源頼朝、薩摩守護島津忠久ヲシテ本州守護ヲ兼シム、建保ノ初、將軍實朝其兼職ヲ罷ム、建武中興、忠久五世ノ孫貞久再ビ守護ヲ兼ヌ、初頼朝伊東祐時ヲ以テ兒湯郡都於郷ノ地頭ニ補ス、足利尊氏ノ反スル、祐時ノ玄孫祐持、及ビ土持榮宣等皆之ニ屬ス、尊氏畠山直顯ヲ以テ守護トシ、來テ穆佐城（諸縣郡）ニ鎭セシム、正平五年、祐持ノ子氏祐、直顯ト共ニ足利直冬ニ應ジテ官軍ニ屬シ、島津氏ト戰フ、既ニシテ和ヲ講ズ、十三年、肥後ノ菊池武光來リ伐チ、大ニ直顯ヲ破リ、三股城ヲ拔ク、十六年、島津貞久直顯ヲ逐ヒ、悉ク諸縣郡ヲ併ス、應永中、氏祐ノ子祐安勢漸ク強大、島津氏ヲ破テ、赤江川南北ノ地ヲ取ル、寶德三年、將軍義政、祐安ノ孫祐堯ヲ以テ守護ニ補ス、祐堯遂ニ土豪十二黨ヲ滅シ、宮崎郡ヲ取ル、是ニ於テ土持宣綱（榮宣五世ノ孫）臼杵郡ニ據リ、島津氏亦諸縣郡ノ數城ニ據テ相持シ、本州ノ地三分ス、文明十七年、祐堯ノ子祐國那珂郡ヲ略シ、飫肥城ヲ圍ミ、島津氏ノ兵ト戰テ敗死シ、其孫義祐ニ至テ島津氏ト兵連テ解セズ、永祿四年、遂ニ飫肥城ヲ取ル、天正五年、島津義久大擧來リ侵シ、都於陷リ、義祐及ビ其嗣祐兵出テ豐津ニ奔リ、地皆島津氏ニ歸ス、土持親成（宣綱五世ノ孫）亦島津氏ニ屬ス、六年大友義鎭兵ヲ遣リ來攻メ、土持氏ヲ滅シテ其地ヲ取ル、俄ニシテ義久兵ヲ分テ大友氏ノ諸堡ヲ陷レ、全州ヲ併ス、豐臣氏ノ九州ヲ定ムル、地ヲ割テ祐兵ヲ飫肥ニ（五万七千石）、高橋元種ヲ縣ニ（五万石）、秋月種實ヲ高鍋ニ（三萬石）封ジ、諸縣郡ヲ島津氏ニ與フ、慶長八年、徳川氏島津以久ヲ佐土原ニ封ズ（三萬石）、十八年、高橋元種事ニ坐シテ除封シ、有馬直純代封セラレ、延岡ニ徙ル（後ニ内藤政樹代ル）、凡ソ四藩、王政革新悉ク之ヲ縣トシ、既ニシテ廢シテ美々津都城二縣ヲ置、（明治五年、肥後球磨郡米良拾四村ヲ兒湯郡ニ屬）ス、更ニ合併シテ宮崎縣ヲ置、

府村美々川口　三里二町四十九間（至石並川口一十三町五十一間）　苙（ウリウ）生村　三里一十六町二十八間半　蚊口浦　一里二十五町二十一間　富田村木付女（沿江、至富田渡場一里四町三十間半、從渡場至那珂郡下田島村一瀬川岸一里二十二町五十一間、又從渡場至洲崎一九町三十六間、）　一里一十五町一十八間半（從下田島村一瀬川口一里）　那珂郡下田島村大炊田　二里一十八町一十八間半　江田村檍（アフキ）ヶ原（至江田村宿所一十三町七間、）三十一度五十六分半、（從宿所至宮崎郡花ヶ島町六十三町六間、從花ヶ島至神武帝社一十三町一十七間、）　一十九町三十二間　新別府村赤江川口（沿川至恒久村城ヶ崎宿所一里三十町二十二間、北極高三十一度五十四分、）二十一町五十二間　田吉村津屋原（沿恒久村城ヶ崎二十六町二十二間）　二里二十八町一十四間半　加江田村折生迫　一里三十二町一十六間　同内海、三十一度四十五分半、　三里一十二町五十三間半　富上村小目井　二里一町一十二間半　宮之浦村大炊井、三十度三十八分半、　二里二十八町四十九間　平野村梅ヶ濱（至油津從測三町五十四間）　三十五町五十九間　同油津、三十一度三十五分半、　一里一十五町四十五間　下方村大堂津、三十一度三十三分半、　二里四町四十三間　中村觀音崎　一里一十町三十間半　潟上村外浦　二里二町三十一間　市木村藤（至市木村二十町五十五間）　三里二十九町一十一間半　御崎村（舊呼都井村野々杵、）　四里六町五十八間（至都井岬二十八町一十間）　崎田村長田崎　一里一十六町一十二間　南方村金谷　三里五町三十二間　諸縣郡夏井村　三十五町三十二間　志布志村浦町　四里五町三間（至國界三里三町三十二間半）　大隅國肝屬郡柏原村

宿驛

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬略○中

日向國驛馬（長井、川邊、刈田、美彌、去飛、兒湯、當磨、石田、救麻、救弐、亞榔、野尻、夷守、眞研、水俣、島津各五疋、）傳馬（長井、河邊、刈田、美彌、兒湯、去飛驛各五疋、）

建置沿革

〔日本國郡沿革考三西海道〕日向略○中　中國、管五郡、（拾芥抄六郡）四百八十三村、

諸縣（百七十五村、應神十一年紀、諸縣君、則出于此地之稱、）　宮崎二十九村　那珂七十八村　兒湯（四十八村、古國府、景行紀子湯縣、卽此地、埃諸抄作二古庾郡、）　臼杵百五十三村

救弐（拾芥抄載、延喜式和名抄不載、臆置未詳、）

飯野町　一里一十三町四十九間　中福良村加久藤　二里一十二町四十三間（至國界二里一十一丁四十二間）

大隅國桑原郡鶴丸村（中略）〇

從日向國油津歷牛ヶ峠至堀村、

日向國那珂郡平野村油津　二里六町九間　飫肥（オビ）本町、三十一度三十七分半、　一里一十七町一十五間　酒谷村　一里二十三町四間　同陣尾　三里一十三町三十間　諸縣郡寺柱村牛ヶ峠　一里二十一町四十六間　寺柱村　一里二十二町五十間　宮丸村（又界二郡境）本町（至鹿人町限五丁五十七間）　二里一十八町二十四間（至國界一里一十丁九間）　大隅國囎唹（ソオ）郡鶴木村小倉（中略）〇

從肥後國熊本歷椎葉山至才脇（中略）〇

日向國臼杵郡鞍岡村日向（ヒナタ）門水合屋　二里二十一町二十一間　椎葉山胡麻山村　一里一十九町五十一間　同十根川村　二里八町三十三間　同下松尾村　一里九町三十六間　同上松尾村篠野峠　三里一十四町五十七間　神門村米嶋　四里一十五町三間　坪屋村　三里六町九間　山陰村　二里二十三町　才脇村美々津川岸（從熊本至才脇、）街道通計三十八里三十二町一十一間、

（日本實測錄（沿海六））從豐前國小倉沿海至鹿兒島（中略）〇

日向國臼杵郡市振村直海　一里一十八間　同斗升（至斗升驛三町六間、）　一里一十六町一十間半　古江村濱（至古江村宿所五町五十七間）三十二度四十二分半、　一里一十九町一十五間半　同越濱（至鷹野江村、從濱九町五十八間）　三十五町二十六間　鷹野江村　二里九町四十五間　浦尻村江口（沿江至浦尻二十二町一十間）　三里一十六町二間半　川島村東海（ヒガシウミ）五ヶ瀨川口（沿江至延岡元町二里五町三十一間、此間有鹽濱、）　日知屋村前幡浦　七町九間　同細島町（至平野、至細島濱一十二町四十三間）　一里三十五町四十四間　同脇濱　二里三十七間半（至財光寺村、三十四町三十間）　平岩村金ヶ濱　三十二町三十七間半　才脇村美々津川口　一町一十一間半　兒湯郡上別

四間　富高村追分（至細島町平野十九丁二間半）二　二町六間　同新町、三十二度二十五分、三十三町二十七間　財光寺村　一十五町四間　平岩村俵野　一十一町二十九間　同金ヶ濱　一十一町三十三間　同境濱　二十町　才脇村美々津川岸　一町三十七間　兒湯郡上別府村美々津川岸一町二十七間　同美々津町、三十二度一十九分半、一十町五十四間　同石並川岸　二里九町三十六間　苽生(ウリフ)村都濃(ツノ)町華表前（至都濃神社一十八間）二　四町四十二間　同都濃町、三十二度一十五分、五町一十八間　苽生村（至海岸二十丁五十七間）　四里二町二十間　高鍋八日町（至蚊口浦苽ノ下十九丁一十五間）三町　同十日町、三十二度七分、（至高鍋城大手三丁一十五間）　三里九町一十三間　那珂郡上田島村佐土原曼陀羅町（至下田島村大炊田一里三十二丁三間）　二町九間　同大小路町、三十二度三分、（歷五日町至佐土原城大手二丁）　一町三十三間　同二町目　一里一十三町三十間　兒湯郡鹿野田村都於郡(トノコホリ)町　二里二十七町五十一間半　諸縣(キロガタ)郡本庄村六日町、三十一度五十八分半、　五町四十五間　同上之原（至八幡社一十丁六間）　一里三十五町二十三間　南方村揚(アゲ)（又呼紋）　三十一度五十九分、　二里一十七町四十九間半　紙屋村、三十一度五十七分半、　二里二十三町四十三間　麓村野尻　三里三十四町三十七間　蒲生田村狹(サ)野(ノ)（至霧島山神德院五丁一十五間、北極高三十一度五十三分半、）　五里二十一町四十六間半（至國界四里九丁四十八間半）　大隅國贈唹郡田口村　略○中

從日向國佐土原歷米良及間村至加久藤

日向國那珂郡佐土原大小路町二町目　二里三町一十五間半　兒湯郡妻万(ツマ)町　三里二十九町二十三間　三納(サンナフ)山尾泊　四里一十四町六間（至國界杉之本峠一里四丁二十四間、從峠至小川谷村障屋前、□里八丁一十八間）　肥後國球麻郡小川谷村　略○中

從日向國麓村歷加久藤至中之村

日向國諸縣郡麓村野尻　三里七町一十二間　細野村野町（又呼小森）　三里九町二十七間　原田村

從延岡薩摩道中

一延岡ヨリ伊福形ヘ二里　一伊福形ヨリ門川ヘ一里半　一門川ヨリ新町ヘ一里半　一新町ヨリ美々津ヘ二里　一美々津ヨリ津野ヘ三里　高鍋領一津野ヨリ高城ヘ三里半（此津野ヨリ二筋道有之、一筋ハ佐土原御料ヘ通、此道少シ近ク候得共、道筋宜キニ付、是ヘ廻ルベシ、末ニ記ス、）　高鍋領一高城ヨリ殿郡ヘ四里程　一殿郡ヨリ本城ヘ三里程　一本城ヨリ高岡ヘ一里　一高岡ヨリ佐利川ヘ一里餘（此所佐利川渡シ在之、川向ニ御番所有リ、船呼候得者、是ヨリ船差出候テ、切手請取、御番所ヘ持參之上見屆ケ、船ヲ渡、夫ヨリ商人宛通リ人出候テ、村繼ニ渡之サ、武士ハ銘テ持セ候、名ハ切手入不申候得共、諸又家來屆ケ候上、先觸出候テ通リ候由、）　一佐利川ヨリ高城ヘ二里半（前ノ高城トハ外也）　一高城ヨリ都子城ヘ三里ホド　一都子城ヨリ福山ヘ五里程　一福山ヨリ鹿兒島ヘ八里（是ヨリ入海船路ニテ、御城下ヘ船ニテ着候由、且陸路モ有之候得共、一切通不申候由、）　總道程五十三里餘有之由

宿々ノ間ニ小川有、少々モ雨天ノ節ハ、半日程充致逗留候由、何モ步渡、舟無之候由、

外佐土原通

一津野ヨリ高鍋ヘ四里　一高鍋ヨリ佐土原ヘ三里　一佐土原ヨリ都郡ヘ一里（是ヨリ右ニ記シ在之）

右海道平路タリトイヱドモ、少々充步渡リノ川ニ難所在之由、

（日本實測錄街道七）從肥後坂梨歷高千穗至濱市〇中略

日向國臼杵郡河內村、三十二度四十六分、　二里一十一町三間　下野村上組門、三十二度四十四分、　四里一十町三十九間（至七折峠二里二十二丁一十間）　七折村宮水門（從河內至七折、呼高千穗鄉、）　二里二十五町四十七間半　同船尾門、三十二度三十七分半、　二里六町四十五間　北方村三ヶ村門（八ヶ村ノ內）八峽川、三十二度三十六分、　二里一十一町四間半　同曾木門、三十二度三十四分、　三里二十一町四十三間半　岡富村延岡元町五ヶ瀨川岸　五町一十八間　岡富村延岡南町、三十二度三十四分半、　二里六町六間　土々呂村　六町四十五間　同ソウツ濱　三十四町　加草村（至濱岸四丁）　二十四町三十八間　門川村假屋迫（至尾末通六丁五十一間）　二十四町四十七間　川知屋村（至江口七丁九間）　一里一町一十

ツノ河南ニ流レテ、八戸(ハツト)村ノ西邊ニ來テ台シテ一河トナリ、南流シテ栗野名村ト河島村ノ間ヲ流レテ、遂ニ此ノ灣内ニ注グ、此ヲ以テノ故ニ、此海灣ハ頗ル運送便利ノ港ナリ、此ヲ縣(アガタ)河ノ港ト名ケ、亦東海港トモ云フ、又此ノ縣河港ノ南ミ五里許ニシテ、細(ホソ)島ト云フ處アリ、此處モ又一箇ノ海灣ニシテ、天然ニ成レル海港ナリ、凡ソ此ノ隣國ニ、細島ヨリ便要ナル港ハアルコトナシ、故ニ日向一國ノ諸侯、關東ヘ交代ノ砌リハ、上ルモ下ルモ皆此ノ處ヨリ舶ヲ出入ス、飫肥ノ伊東侯ナドハ、自國ニモ港ハ數ケ處アレドモ、此處マデ四日路來リナ船ニ駕ルコト常例ナリ、是ノミニテモ此ノ處ノ便要ナルヲ知ルベシ、故ニ此ノ細島ハ、諸國ノ海船輻湊シ、日州第一ノ都會ナリ、總テ當國ノ海濱ハ、豊後ノ界ヨリ耳河邊ニ至ルマデ、南北三十餘里ノ海上ニ、小島ノ在ルコト甚ダ多シ、而シテ其ノ諸島ノ中ニ、稍大ナル者ハ、北ニ島浦ト名クル者アリ、南ニ檳榔(ヒロウ)島アリ、大小碁列シテ、以テ此ノ國ノ藩屏ヲナス、故ニ眺望甚ダ美麗ニシテ、形勢極メテ雄壯ナリ、

〔日本地誌提要 七十一 日向〕形勢　地形南北ニ長ク、沿海ノ地、委蛇折轉シテ、東南ニ亘リ、頗平沃ノ壤アリ、山脈西北ヲ繞リテ南走シ、支脈州内ニ散布シ、西境尤嶮奥ナリ、風俗質樸、

〔日向之國縣記 上〕從延岡隣國行程

高鍋城迄十四里　佐土原迄十七里　飫肥迄卅一里　鹿兒島迄四十七里　球磨迄卅六里　熊本迄三十一里　竹田迄廿一里　佐伯迄十三里〇中略

隣國道程〇從延岡

財邊ヘ十四里　佐土原ヘ十八里　飫肥ヘ三十二里　米良ヘ十六里　奈須ヘ十五里　薩摩ヘ五十里、内八里船渡、　球磨ヘ四十里　天草ヘ五十八里、内七里舟渡、　長崎ヘ六十里、内七里舟渡、　大村ヘ五十八里、内七里舟渡、　柳川ヘ四十七里　佐賀ヘ五十四里　唐津ヘ七十里　平戸ヘ八十六里〇中略

〔日向經緯略記〕日向州、○中略此國ノ經緯ノ度數、東西ハ直徑三十九分、南北ハ西ノ境ニテ二十分、東ノ海邊ニテハ三十分アリ、天度一分ヲ地ノ二十町ニ當ルノ法ヲ以テ約スレバ、東ノ海邊ヨリ、肥後ノ山ノ奧マデハ、大抵二十里許リ、南北ハ西ノ境ニテハ十里餘リ、東ノ海邊ニテハ十五六里アリ、今地理平均ノ法ヲ以テ詳カニスルニ、四方一里ノ土地凡ソ二百許アリ、頗ブル廣キ、國土ナリ、當國ハ東一面ハ大海ニ臨ミ、其ノ東北ノ隅、豐後國界ノ海岸ニ巍然トシテ、海中ニ峙出タル秀嶺アリ、此ヲ大嶽ト名ク、西海ヲ航行ノ表的トスル所ナリ、此ノ大嶽ヲ初メトシテ、此ノ國ノ東北ヨリ北ナル豐後ノ界ハ、悉ク幾々タル山嶽相ヒ疊ナリ、其ノ勢ヒ恰モ波濤ノ如ク、其中ニ於テモ祖母嶽箱嶽等ハ、其ニ世ニ名アル大山ナリ、又西北ニ肥後ノ阿蘇郡ニ界スル處ト、西方肥後ノ八代郡ニ界スル處トハ、別シテ山疊リ、谷深クシテ、其ノ中ニハ極メテ廣大峻秀ナル山アリ、西南ハ肥後ノ米良郡ヲ界シ、西方モ又米良ニ界ス、此境ハ山遠ク谷幽ニシテ、人家アルコト稀ナリ、唯ダ東南ノミ高山少ナシト雖ドモ、然レドモ散漫タル小山極メテ多ク、中央及ビ東ノ海邊モ亦然リ、故ニ此ノ國内ニハ、平地ハ甚ダ少ナクシテ、山岳ノミ多シ、是ヲ以テ諸山ヨリ發源スル所ノ河モ、又甚ダ多ク、時々水難アリ、先ヅ南ノ境ニハ、神門河、小田河、瀬見河、神河等アリ、中央ニハ、成加河、伊鶴河、縣河等アリ、縣河ハ其ノ源ヲ肥後ノ國阿蘇郡ノ山々ヨリ發シ、東ニ流レテ此ノ國ニ入リ、境河内村ノ邊ニ來テ、椎岡萩原等ヨリ流レ來ル大小ノ諸河ノ水ヲ會シ、又東ニ流レテ、松戸河、龍[illegible]ケニ及ビ、霧ノ峯ノ諸山ヨリ出ル河ナリ日影河、竹木河、綱瀬河、細見河等ノ水ヲ混同シ、此ノ國ノ郡城ノ西邊ニ至リ、分レテ二岐ト爲リ、郡城ノ南北ヲ流レテ、遂ニ大海ニ注グ、頗ル大河ナリ、故ニ此ノ國ノ城下ハ、卽チ此ノ河ノ中ノ島ナリ、又此ノ河ノ注グ所ノ海ハ、自然ニ一箇ノ海灣ニシテ、且ツ此ノ國ノ北ノ境ヨリ流レ來ル祇子河、聞土野河等、皆ナ此ノ灣ノ内ニ注グ、此ノ聞土野河ハ、其源二箇アリ、共ニ豐後ノ國大野郡ノ諸山ヨリ出ヅ、西ヨリ流レ來ルヲ阿加河ト云ヒ、東ヨリ來ルヲ小出河ト云フ、此二

島嶼

地勢地味

拾七里、南北凡四拾里、

〔日本實測録（十一島嶼）〕日向國臼杵郡　實測　島野浦周廻二里三十三町三十二間、地下、三十三度四十分半、　高島（從二南岬一至二北岬一）一十町一十五間、　元方財島、周廻二十六町三間、　助兵衛島、周廻二十二町二十四間、　大武島、周廻一十八町三間、　乙島、周廻一十七町五十四間、　中島（從二東岬一至二西岬一）五町一十五間、　遠測　耳ボケ島　博奕礁　五條礁　海士取礁　沖小島　小島小　小島大　的礁　ミサコ礁　續礁　岩宮礁　島毛礁　向島　中島　松礁　筏島　枇榔島　兎礁　居首礁　竹島　傑島　沖鳶島（又呼二若島一）　神磯　黒島大　黒島中　黒島小

那珂郡　實測　二ッ立島（又呼二狐島一）周圍三十一町四十七間、　鼠島、周廻二十一町四十二間、　淡島、周廻八町二十七間、　野島周廻一十町一十七間、　兒島、周廻六町四間、　大島（從二北岬一至二觀音岬一）一里二町七間、　築島（從二北岬一至二南岬一）一十二町二十二間、　幸島、周廻二十二町五十一間、　鳥島（從二北岬一至二南岬一）四町三十間　地鬢垂島周廻七町四十三間、　沖鬢垂島、周廻六町一十間、　遠測　鵜石　雀礁　幸礁　地松礁　沖松礁　裸島大　裸島小　木場島　七ッ礁　大瀬　冠礁　瀬タテエ礁　アキト礁　鴻島　腕島　黒島　松島　頭似島　水島　銅島岬　立岩　唐船礁　烏帽子島

諸縣郡　實測　枇榔島、周廻二十二町、　遠測　ミサコ礁　辨天島　權現島

〔易林本節用集（下）〕日向（日州）中、管五郡、四方三日、桑麻五穀平均、乏二飢寒一依是也、中々國也、

〔西遊雑記（三）〕日向の國は、西のかた肥後の界まで、嶮山折重り〳〵、國人いづれにたづね聞ても、國の境を知るものなく、世にいふ隱れ里、肥後の米良山、五ケ庄といふにつゞきし深山なり、人物言語もいやしく、豊後を下國と思ひしに、今一段劣りし下々國なり、海邊には平地の所も見ゆれども、西のかたは山分に入りて、更に平地なし万物至て不自由の國にて、國不相應に人も少きゆへ、他國の人を買とつて下人とする國風有り、

故號₂其國₁曰₂日向₁也、

〔倭訓栞前編二十五〕ひうが　日本紀に日向をよめり、和名抄にひむかとも見えたり、朝日直刺夕日日照國なるよしも紀に見えたり、凡て神代は、皆日向の國に都したまへり、景行天皇も、行宮は高屋宮といふ、神代紀に、筑紫日向小戸橘之檍原と見えて、日向の名初て出たり、されど此事譜筑前にありて、日向ならざる歟、松平氏貝原氏などの說にくはしく見えて、日向を九國の總名などいへり、今文意を詳に考れば、日向の小戸は橘之檍原に對して、日向も橘も所謂枕詞也、日向は日に向ふ所をいふ也、一國の名にあらず、もとよりひむきとよむべし、

位置

〔地勢提要〕各國經緯度陸里程

日向高鍋町十日　極高三十二度七分半、經度西四度七分半、從₂小倉₁經₂香春岳面高千穗通₁　七十八里二十七町、三百六十一里三十五町三間半○從₂京都₁、

日向飫肥町木　極高三十一度三十七分半、經度西四度一十七分、從₂小倉₁經₂高鍋沿海₁　一百二里一十一町、三百八十五里一十九町一十四間○從₂京都₁、

〔日本經緯度實測〕北極出地

日向　延岡　三二度三四分三〇秒　佐土原　三二度〇三分〇〇秒

　　高　三二度〇七分〇〇秒　飫肥　三一度三七分三〇秒○中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　日向　延岡　西四度〇〇分五〇秒

〔萬國夢物語下〕日向佐賀關ナド見過テ、南日向ニ至、東ハ海濱、南ハ大隅、西ハ肥後也、氣候暖國也、北極出地卅一二度也ベシ、

疆域

〔日本地誌提要七十日向〕疆域　東南海ニ臨ミ、西ハ肥後、大隅、薩摩、北ハ肥後、豐後ニ至ル、東西凡晉

古事類苑

地部三十三

日向國

名稱

日向國ハ、ヒウガノクニト云フ、西海道ニ在リ、東南ハ海ニ臨ミ、西ハ肥後、大隅、薩摩ニ界シ、北ハ肥後、豐後ニ限ル、東西凡ソ十七里、南北凡ソ四十里、其地勢ハ、南北ニ長ク、沿海頗ル平沃ノ曠野アリ、山脈ハ西北部ヲ繞リテ南走シ、自ラ國境ヲ成ス、豐肥ト界スル所尤モ峻險ナリ、此國ハ古ヘ國府ヲ兒湯郡ニ置キ、臼杵、兒湯、那珂、宮崎、諸縣ノ五郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、明治維新ノ後、臼杵郡ヲ東西ニ、那珂郡ヲ南北ニ、諸縣郡ヲ東西南北ニ分割シ、凡テ十郡ヲ置キシガ、後更ニ、北那珂郡ヲ宮崎郡ニ合セ、南諸縣郡ヲ大隅國ニ屬セシメテ、囎唹郡ト改稱シ、宮崎縣ヲシテ全國八郡ヲ治メシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕日向比宇加

〔易林本節用集下〕日向日州

〔饅頭屋本節用集天地〕日向ヒウガ向州

〔日本風土記一寄語島名〕日向兒加ヒウカ

〔釋日本紀八述義〕日向國風土記曰、巻向日代宮御宇大足彥天皇〈○景行〉之世、兒湯之郡、遊於丹裳之小野、謂左右曰、此國地形直向扶桑、宜號日向也、

〔日本書紀七景行〕十七年三月己酉、幸子湯縣、遊于丹裳小野、時東望之、謂左右曰、是國也直向於日出方、

應停史生一員置弩師事

右得太宰府解偁、肥後國解偁、此國地接海崖、防備隣賊、雖有弩機無師講習、望請、省史生置弩師者、府依解狀、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、依請、

昌泰二年四月五日

風俗

内　三拾八万四千三百九拾六人　男
　　三拾七万千三百八拾五人　女

〔人國記〕肥後國

肥後國ノ風俗、大形肥前ニ似タリトイヘドモ、其勇之甲乙ヲ數フルニ、百ニ而其一也、武士之風俗ハ肥前ニ替リテ柔也、雖然其意地、筑前豐前兩國ヲ合タルヨリ上ト可知也、ナレドモ知有ヲ以テ分別多ク、思ヒ〳〵成所アルニヨリ、一和スル事スクナク、二ツ三ツニモ引分レテノ形儀ナレバ、肥前ニハル〳〵劣ルモノカ、

〔肥後國志一 國府〕肥後國元始大略

按ニ、(中略)上下トモニ才ノ有ル國ニシテ、人々不義ヲ惡ム風ナリ、去ルニ依テ、媚婦ヲ娶リ、入聟ナドスル者ニハ、座ニ列ナルヲ恥トセリ、

名所

〔日本鹿子十四〕同國(肥後)〇中名所之部

宇土の長濱　年中行事には筑後と見へたり、名所の記には當國に入れり、腹赤の御調此所より備るといへり、

八代池　野坂　足北　はだか島

肥後の國うとの内なるはだか島きたれる浪や衣なるらん

赤播山　平川　ヲ渡川　万里杜　龍尾川　松風ノ關　黑髮川　硯川　泪の浦　風流島　波の湊　此外、舊記のする名所多しといへども、いまだ在所不詳、

調度

〔延喜式 兵部 二十八〕諸國器仗(中略)　肥後國甲四領、横刀十口、弓廿張、征箭卅具、胡籙卅具、

〔續日本後紀 仁明 三〕承和元年五月癸亥、太宰府司公廨、元來班給六國、至天長八年、依民部省符、以停給六國、混給肥後國、至是勅曰、如聞、轉送之勞、民受其費、混給一國、事乖穩便、宜復舊給之、

〔類聚三代格 五〕太政官符

国產貢獻

〔倭名類聚抄五國郡〕肥後國 管十四(中略)正公各三十万束、本穎百五十七万九千百十八束、雜穎七十七万九千百十八束、

○按ズルニ、三十万束ハ、四十万束ノ誤、又延喜式ノ雜稻ヲ計算スルニ、此書ヨリ一束多シ、

〔延喜式二十四主計〕肥後略○中 右廿五國中綠略○中

肥後國行程、上三日、下一日半、

調絹二千五百九十三疋、綿紬廿五疋、貲布卅七端、布一百廿端、就羅鰒卅九斤、熬海鼠二百卅二斤十四兩、鯛腊三百卅二斤八兩、乾鮹一百六十六斤十三兩、雜魚腊四百三斤、自餘輸綿、絲、庸布八十端、自餘輸綿米、中男作物、木綿、麻、熟麻、席、韓薦、蒲薦、防壁、折薦、苫簀、黑葛、胡麻油、海石榴油、荏油、鹿脯押年魚、鮫楚割、鰒腊、煮鹽年魚、鮨年魚、漬鹽年魚、破鹽、

〔毛吹草三〕肥後

隈本キセル 皮籠 燒物 野鷹 鵰 潮煮貝 八代蜜柑 アイギヤウニ鮎ノ子ヲ鹽引シタルヲ云 同

切飯ウルカ篠ノ葉ニ卷テ用之 雲府板天ヨリフリタル板ト云 御免革鎧ノ革ノ如シ、武具又鞍ノ看等ニ用之、 相良燒物 漆布 高瀨

絞木綿當所ヨリ始 長洲腹赤鯛ヤキ鯛ニシテ京江戸ニ遣ス エズ鮒ブナ 菊地苔川ニ有之 百足苔海ニ有 天草砥海ニ有之

櫓櫂 鑓柄 胡麻 志岐白碁石 火川火打石 砥持茶 久保田野大根

人口

〔官中秘策五〕肥後國 十四郡略○中

一人數六拾貳万貳百四拾四人 内男三拾貳万九千貳百七拾五人 女貳拾九万九百六拾九人

〔吹塵錄五人口及國高〕文化元甲子年諸國人數調略○中

御料私領
一人數六拾七万千三百拾六人 高五拾六万三千八百五拾石餘 肥後國

内男三拾四万六千五百七人 女三拾貳万四千八百九人 ○中略

弘化三丙午年諸國人數調略○中

御料私領
一人數七拾五万五千七百八拾壹人 高六拾壹万千九百貳拾石餘 肥後國

田數石高

天正年中ヨリ小西攝津守行長居、慶長五、加藤肥後守清正、同肥後守忠廣領、寛永九、細川越中守忠利國□□□□□□□細川丹後守行孝、以後代々領之、
相良越前守〔柳間朝散大夫〕爲知 二万二千百石餘 居城肥後球磨郡人吉〔江戸ヨリ〕三百五十一里餘
本名球麻郡人吉城ト云、(中略)當城蓮出之高、慶長十ヨリ相良氏代々領之、○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕肥後國 管十四〔田二萬三千五百餘町〕

〔拾芥抄中末本朝國郡〕肥後〔上遠〕十一郡(中略)〔田萬三千四百六十二町〕

〔海東諸國記〕肥後州 有溫井、郡十四、水田一萬五千三百九十七町

〔肥後國志一國府〕肥 國元始大略

或記曰、肥後國十四郡、總高七十七万三千四百四十四石一升六合五勺三撮、此軍役高五十六万三千五百三石四升五合、總村數四千七百六十九ケ所、此内今郷村千六十四ケ所、同枝郷三百八十三ケ所、其外三千三百廿二ケ所ハ不載郷村帳ト云リ、當時十四郡之内、十二郡ハ細川家御領分、球摩一郡ハ相良氏、米良氏ノ領地、天草一郡ハ近來公料也、

〔日本鹿子十四〕肥後國、十四郡、大中國、四方五日、(中略)○知行高五十七万二千九百八十石、

〔官中秘策五〕肥後國 十四郡(中略)

一石高五拾六万三千八百五拾七石餘

出擧稲

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調(中略)○

肥後國〔御料私領〕 一高六拾壹万千九百貳拾石貳斗九升壹合壹勺

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻(中略)○

肥後國、正税公廨各卅万束、國分寺料四万七千八百八十七束、文殊會料二千束、府官公廨卅五万束、衞卒料三万五千七百九十五束、修理府官舍料一万束、池溝料四万束、救急料十二万束、俘囚料十七万三千四百卅五束、

落封

る土地故に、長たる五家も、哀れなる暮かたにて、熊の膽猪鹿の皮などを携へて、人吉へ折々出て、諸品に交易して歸ると云、予もあるじの物語りを聞て、行もおそろしく、止りし事也、今は肥前島原の御支配所となりて、年に一度は五家の內より一人づゝ、島原へ御禮として出仕する也、熊本侯相良侯へも右のごとし、

五ヶの庄の地方六里餘、人吉より行にも、人數にては中々行事ならず、巖石の上より綱に取付て下り、綱に取付て上る所もあり、又は熊狼に行逢ふ事も有といふ、さて五ヶの庄より、山奥にも一村有りて、他に出る事なし、此地は日向路へ山道有て、肥後の阿蘇郡の者と、交易の爲に稀に出ると、五ヶの庄の者語りしよし、或人語りし也、

〔閑田耕筆〕或說に、肥後東南五ヶ山といふは、平家の族遁隱れし所にて、村中皆先祖の稱號を傳へたり、其氏神と崇る社は安德帝を祭り、御璽は寶劍なりといへり、因に一說有、緒方三郎は無二の平家の方人なるに、俄に心變せしといふは、實は平家の勢とてもさゝふべからざるを知りて、帝をはじめ奉り、一門の然るべき人々を、此五ヶ山に隱せるがための謀なり、其後つひに戰まけて入水せるは、皆其さまを眞似たる人なりといへり、奥州の泰衡が賴朝卿に從ひて、却て義經を蝦夷に落せしといふ話似たり、是尤實否は今定がたき事なるべし、

〔慶應元年武鑑〕細川越中守慶順 大廣間 從四位上　五拾四万石　居城肥後飽田郡熊本 江戶ヨリ 海陸二百八十八里

天正五、佐々陸奧守成政居、後加藤肥後守淸正、同肥後守忠廣、寬永九、細川氏忠利、以後代々領之、

細川若狹守利永 柳間 朝散大夫　三万五千石　在所右本○熊之內新田

寬文年中ヨリ代々領之

細川豐前守行眞 柳間 朝散大夫　三万石　在所肥後宇土郡宇土 江戶ヨリ 海陸二百九十二里

後醍後所國大乍御領地之節、被御支配所に相成、所々に庄園を知行仕居候處に、何樣家衰微致候儀世、當時何之支配も無御座候、然處慶長十五年頃、肥後國大守加藤主計頭清正公より被召出、先規委細に被聞召上、先第々持掛り、山知行無相違之旨被仰付候、然處清正公無程御逝去に而、御跡肥後守忠廣公よりも同前に被仰出候、然處に忠廣公御國替に而、細川越中守忠興公熊本へ御入城之節、右之段委細申上候處、則而此節より御懇意被仰付、夫より越中守綱利公迄四代、綱正公より六代、被御支配に而、五人之地頭と被仰付、出仕にも御同座へ被召出、又は御自筆之御紙面も被下君之儀御座候處、聊之譯に付、被御支配被差除、貞享二丑年より、天草御代官服部六左衛門様御支配に相成候節より、大庄屋段格に而、庄屋に被成下、御運上銀額諸等も、此節より始而被仰付、尤村役人之儀は、苗字大小は前格之通御免被仰付候上、額諸は其節御斷可申上處、其儀無御座、其後今井九右衛門様御支配之節、右御斷申上候處、御沙汰に及可被下との御事に御座候節、御役替に付、其沙汰無御座、其後山木與左衛門様、竹村總左衛門様、小野朝之丞様、竹村太郎左衛門様、宣七郎左衛門様迄、御代官六代、享保五年迄御支配請申候、右は松平主殿頭御預所、肥後國八代郡五ケ庄以前遙見之節、書付差出由に而、村方に有之候舊記之寫、書面之通御座候、

松平主殿頭家來　川口長兵衛

子三月

御狩定所

〔西遊雜記　五〕五ケの庄の事を聞しに、奈須山と云より山道十三里といへども、難里有事にや、道もなき嶮岨の山を數峯も越へ行事也、此邊の者にても行し者は甚稀也、昔は色々の寄物も所持し、武器るいも有し所ながら、佐敷より小かしこき商人年々往來して、衣服などして、よき物は取盡して、今は何もなしと云、家數凡百餘軒、五家の長あり、今は三家は緒方氏二家はアゴク氏にて平家の子孫と稱す、[illegible]至ての僻地にて、米穀も山中の人の食事に不足す

せしかば、其勲功の賞として、後醍醐天皇より二箇所の所領を充行る、其綸旨云、

肥後國限牟田庄之內、大友千代松丸跡、同國守富庄地頭職、爲惟直惟成勲功之賞、可被知行者、天氣如此、悉之以状、

興國三年六月廿日　　左少辨判

阿蘇大宮司館

〔肥後國五箇庄覺書〕肥後國八代郡五ヶ庄、以前御巡見之節書付差出候由にて、村方に有之候舊記之寫、

松平主殿守御預所

一高一石七斗六升三合五勺　　久連子村（東西一里半餘、南北一里半餘）

一居村より　東球麻御預內江代村境峯分　　西同領宮箇村境川分
　南同領入鴨村境峯分　　北五ヶ庄椎原村境谷分

一居村より　五ヶ椎原村迄道法二里程　　肥後國八代郡栫迫村之內板木村迄三里程
　同國益城郡小川町上十一里程　　同國熊本迄拾八里程
　同國八代迄十五里程　　同國川尻迄十六里程
　同國天草迄富岡へ三十七里程　　肥前國島原へ三十里程

一高七斗一升三合　　肥後國八代郡椎原村（東西一里拾丁餘、南北二里餘）〇中略

一高九斗四升七合　　肥後國八代郡榎木村（東西三里半程、南北三里程）〇中略

一高四斗三升九合五勺　　肥後國八代郡葉木村（東西二里程、南北三里程）〇中略

一高六斗四合　　仁田尾村（東西一里半程、南北三里程）〇中略

〆高四石四斗六升七合

一是は先五家庄之儀、菅家平家兩家に而數代當所居住仕候處に、中古肥後國阿蘇宮大宮司殿、肥

〔詫磨文書 八〕□□

肥後國野原西鄕一方地頭小代左衞門八郞入道光信申度々軍忠事〈〇中略〉

一同〈〇建武三年〉五月十七日、三池一族等、相共押寄在々所々、燒拂凶徒等住宅了、隨而大將軍筑後國府御座之間、令馳參、付著到畢、

一廿日武敏以下凶徒等、楯籠菊池大林寺之間、屬于侍所佐竹與次〈〇重義〉手、於新寶原、令付著到畢、

〔小代文書 乾〕總門〈〇博多息濱〉警固事、肥後國野原西鄕小代長鶴丸代丹六義宗、以今月十六日一日一夜、令勤仕警固候訖、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月十六日　藤原義宗上

進上御奉行　承了〈花押〇佐竹重義〉

〔武雄社文書〈〇佐賀文書纂所收〉〕菊池武敏以下凶徒、打出肥後國山鹿莊、及合戰之由風聞、可被致誅伐精誠也、仍執達如件、

建武三年十月六日　沙彌〈〇一色道猷〉判

武雄大宮司殿

〔詫磨文書 三〕肥後國上小田、上鍋地、桑原、安永、小山田、豪北庄內野津彥太郞、谷山五郞左衞門入道、北島彌次郞入道、同八郞次郞、同七郞等跡事、爲兵粮料所、一族中〈除三角政、野原、鹿利、并惟所領人〉、宛行、所預置也、彌可被致忠、仍執達如件、

建武五年三月七日　太宰少貳〈〇賴尚〉在判

詫磨別當太郞殿

〔菊池傳記 一〕阿蘇惟澄被行忠賞附阿蘇先祖事

阿蘇大宮司惟澄は、此年ころ官軍に屬し軍功を勵し、殊更其子惟直惟成、多々良濱の合戰に討死

〔東寺百合古文書五〕最勝光院

注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事〇中略

一肥後國　神倉庄　　領家淨土寺僧正坊分

本年貢上絹百廿疋〇中略

右就所見、注進如件、凡近年背先例不被成返殘於執事公文間、御年貢濟否事委不存知之、

正中二年三月日　　公文左衛門少尉大江花押

〔詫磨文書三〕肥後國神藏莊內與安名內田地貳町石丸名內田地壹町、與安名內麥畠五段、已上坪付有別、詫磨彌次郞藤原直貞讓與處也、其忠者宗直今度安堵仕事、偏板井迫入道殿被致沙汰故也、仍乍爲從父兄弟、如此有忠之間、所讓與也、若背此狀者、以一倍可被申給也、爲仍後日讓狀如件、

建武元年十一月十三日　　藤原宗直〇詫磨在判

〔阿蘇文書一〕雜訴決斷所牒　　肥後國衙

當國阿蘇社大宮司惟直〇宇治中社領阿蘇莊四至堺事

右任承曆國宣、可打渡彼堺者、以牒、

元弘三年十一月四日　　右衛門大尉坂上大宿禰花押

左中辨藤原朝臣花押

〔大友文書二〕花押〇足利尊氏

下大友千代松丸

可令早領知肥後國山本莊千田莊健軍宮領等地頭職事

右以人爲勳功之賞所補任也、任先例可令領掌之狀如件、

建武三年三月十七日

郡預頼、高得名地頭馬部入道淨賢云云、廣元朝臣奉行之、

〔相良文書 一〕下　肥後國球磨郡内人吉莊

補任地頭職事　藤原永頼

右莊爲平家沒官領之間、可補地頭之由依申、殊施軍功之故、以永頼可令爲彼職之、但至有限之御年貢以下雜事者、地頭全不違亂、可存公平之狀、依鎌倉殿御下知如件、

元久二年七月二十五日　遠江守平朝臣〇北條時政御判

〔詫磨文書 一〕沙彌行西讓達

肥後國鹿子木東御庄内相傳村々田畠等事〇中略

右件行西私領者、元伍拾玖町餘也、〇中略仍爲後日證文讓文以解、

建永元年八月日　沙彌行西

〔東寺百合古文書 五〕七條院在御判

修明門院御處分御所庄々等〇中略

肥後國　神倉庄于御見ニ御管狀、　小野鰐庄可被止本所〇中略

安貞二年八月五日

七條院　在御判すめいしん

〔東寺百合古文書 二〕七條院御領十七ヶ所事〇中略

肥後國小野鰐庄〇中略

右庄々可有御管領之由、春宮令旨所候也、以此旨可令洩啓四辻入道親王給、仍執達如件、

正和三年七月三日　亮〇春宮亮長隆判奉

粟田口少將殿

壽永三年四月五日

〔玉海〕元暦二年(○文治元年)九月廿五日乙巳、頼朝令申云、伊豆國馬宮庄亂初之比、不知御領、寄進當國走湯山了、此條進退有恐、仍欲進其替、而八條院御領肥後國豐田庄所給預也、件所領家、有御沙汰、如何云云、此條子細有疑、件所自女院被給頼朝者、(○下略)

〔吾妻鏡六〕文治二年二月七日乙卯、今日廣元賜肥後國山本庄、是義經行家謀逆之間、計申事等始終符合、殊就被感思食、被加其賞之隨一也云云、

〔吾妻鏡十三〕建久三年十二月十四日壬子、一條前黄門書狀參著、以亡室遺跡廿箇所、讓補男女子息、爲塞將來之乖違、去月廿八日、申下宣旨訖、右中辨棟範朝臣傳宣、權中納言(兼光卿)宣奉、勅云云、是平家沒官領内、(○中略)肥後國八代庄、(○中略)已上廿箇所、先日被奉讓黄門室家(將軍家(源頼朝)御妹也云云)

〔名和文書〕肥後國八代莊地頭分内鞍楠村、寄進熊野那智山之由被聞食畢者、天氣如此、悉之以狀、

建武二年五月二十六日　大膳大夫(花押)

伯耆大夫判官館

〔中村井原文書(新見文書所收)〕肥後國八代庄幷球磨郡凶徒内河彦三郎(○義眞)多良木孫三郎須惠入道、永里、園本以下寵退治事、今月十七日、御教書如此、不日相催一族、屬今河藏人大夫(○助時)殿御手、可被致軍忠候、仍執達如件、

建武三十一月十八日　宣隆判

榊源三郎殿

〔吾妻鏡十八〕建仁四年(○元久元年)十月十七日丙午、大隅國正八幡宮寺訴申事、被經沙汰、是故右幕下御時、掃部頭入道寂忍、爲正宮地頭之處、宮寺依申子細、被停止其儀訖、其後又三箇所被補三人地頭之間、造宮之功、難成之由云云、仍今日所止彼地頭職等也、帖作郷地頭肥後坊良西、荒田庄地頭山北六

江戸ノ城郭ヲ見ガ如ク、本城ヲ中央ニシ、武家町、商家町ヲ外圍ニシテ、家居セシメタル地割ナリ、(中略)市中士民居住ノ町々ヲ熟視スルニ、福岡、廣島、岡山等ヨリハ甚ダ廣ク、商人モ多ク、豪家モ有ル由ナレドモ、草葺ノ貧家雜リテ見苦キ町多ク、人ノ通行スルモ、右ノ三城ニハ劣レル樣ニ見ユ、城外モ四方六七里ノ間ハ、原野能ク開ケ、田畠甚ダ多ク、海モ亦遠カラズ、古來肥後ヲ天府ノ國ト稱スルモ强言ニ非ズ、殊ニ此ニ熊本府ハ、九州二島ノ正中ニ在テ、分内モ亦狹カラズ、若シ今夫レ天下ノ形勢ヲ審ニ察シテ、西海ヲ鎭定スベキ節度府ヲ置ントスルトキハ、熊本ニ若クモノ有ルコト無レ、壯ナル哉、形勝ノ適ナリ、

(西遊雜記五)人吉は佐敷より山道八里と、道中記其外の板本にも記しあれども、三十六丁道につもりては、凡十五里有べし、道はさしてあしからず、佐敷より一の瀨へ三里半、甚だ遠し、五里も有べし、津け村と云所より相良侯の知行にて、番所ありて、往來切手を改、旅人壹人にても、村役人より壹人ツヽ番人を付て村送りにする事也、尤番當者、其地々々の村役にして、留守事にて、當代は勿論、末代も取らず、御領主より諸用は下さるゝ事と云、是は有がたき事ながら、旅人の御領内くわしく見る事のならぬ樣にせしもの也、(中略)

八代。八代は、熊本侯の一太夫(知行三万石)長岡何がしの居城地にて、大概よき城にて、薩摩口の堅めなるべし、八代川はよほどの大河にて、求麻の人吉まで十六里餘、川舟の往來有り、

(東鑑三)壽永三年(八月改元暦)四月六日甲戌、池前大納言並室家之領等、任平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲報故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、(中略)

池大納言沙汰(中略)球磨臼間野庄(肥後)

右庄園拾七箇所、被沒官注文、於彼所、給預也、然而如元爲彼家沙汰、有知行、勤狀如件、

〔郡國提要〕肥後　十四郡、千百十六村、
高御料私領六十一万千九百二十石二斗九升一合一勺
天草郡八十八村　葦北郡三十村　球麻郡七十二村　八代郡六十九村　益城郡二百八十七村　宇土郡四十九村　飽田郡九十四村　詫摩郡二十九村　合志郡六十村　山本郡三十三村　玉名郡百十村　山鹿郡四十四村　菊池郡六十七村　阿蘇郡八十四村

〔肥後國志一國府〕熊本府。。
飽田郡五町手永坪井村、池田手永宮内村、京町村、池田村、岩立村、横手手永横手村、筒口村、古町村、詫摩郡本庄手永、本庄村、本山村、山崎村抔ノ地方、粗府中町小路ノ内ニ掛レリ、當國府ハ、古モ當郡ニ有シト見ヘタリ、今横手手永、田崎宮寺村ノ邊、古ノ府中ト云傳ヘ、其節ノ在廳屋敷ノ迹トテ今ニアリ、其外古迹多シ、○中略熊本舊號隈本、○中略慶長四年、加藤氏城築ノ時、一國ノ府タル所、阝ニ畏ルト云文字ヲ忌テ、熊本ト改メ可稱由、國中ニ觸示サレシト云、

〔西遊雜記五〕市中○熊本殘りなく見めぐりしに、藝州の廣島、備前の岡山よりも甚廣くして、商人も多く、豪家も有る所ながら、間々に草葺の貧家も交る町にて、見苦き町も有り、人の通行も、廣島岡山ほどはなし、淋敷して、人物言語も劣りしやふに見え、何となく其邊鄙の風俗有り、人物には藪亦次郎といへる大儒有りて、學問を修行し、醫師には村井椿壽といふ學醫、此外市中にも人物なきにあらず、繁榮の地と稱し、世に知る事故に、爰に略しぬ、
名產には、ひやうたん細工に、色々の上品ありて、他國におゐて稀なりとす、又眞珠丸といふ小兒諸病の功有名法ありて是も他國になし、

〔佐藤元海九州記行〕熊本ノ城ハ、昔シ加藤肥後守清正ガ、數多ノ猛士ヲ帥テ自身ニ築ク所ニシテ、石疊ノ結構ナルコト、目ヲ驚カセシ普請ナリ、○中略都下ノ人家ハ、土民ヲ統テ二三萬モ有ルベシ、

村里名邑

一所五町　限崎鄉　一所五町　井手鄉　一所十町　小野田（下山田北西河島方上井手）鄉

同村分

一所五町　狩集村　一所一町三反　牛峯村　一所一町三段　金凝神護寺

一所五町　產山村　一所五町　山鹿村　一所十町　山田寺村

一西鄉（下田常陸今砂汰分）　一所十町　小倉鄉　一所十町　綾野小陣鄉

一所三十町（今ハ五町）　小里鄉　一所三十町（今ハ廿町）　湯浦鄉　一所六十町（今ハ五町）　倉原鄉

一所四十町　上竹原鄉　一所五町　下竹原鄉

同村分

一所三町三段　狩尾村　一所一町七段　的石村　一所　役犬原

一所　河詮流

右大略注文若斯

建武三年三月十一日

（佐々木系圖）光綱（佐々木五郎左衛門）

信盛（佐々木野村三郎）
近江住、依綱在鎌倉時子、爲光綱子、代々將軍家隨御教書、
畢、尊氏將軍御下向之時供奉、爲忠賞、肥後綾鄉給畢、
御料私領

（郡名一覽）肥後國　肥州　四方五日　拾四郡　千百貳拾四ケ村

高五拾六万三千八百五拾七石壹斗七升八合

●熊本　二百八十八里　●人吉　三百九十一里餘　○宇土　二百九十二里　⊠米良（無高）

來眞主膳　)(●八ッ代（熊本三万石）長岡帯刀　)(○大津（一門一万八千石）長岡監物

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

球麻郡　球玖　久米　人吉　東村　西村　千脱

〔日本靈異記下〕產生肉團之作女子修善化人緣第十九

肥後國八代郡豐服鄕人豐服廣公之妻懷任、寶龜二年辛亥冬十一月十五日寅時、產生一肉團、其妻如卵、夫妻謂爲非祥、入笥以藏置之山石中、逕七日而往見之、肉團殼開生女子焉、(下略)

〔公卿補任六條〕仁安二年

前太政大臣　從一位平清盛　五月十七日上表、辭太政大臣、并兵仗、(中略)肥後國御代郡南鄕、土比鄕等、爲大功田、傳子孫、

〔千家家譜三記〕寄進　杵築大社

肥後國八代莊高田鄕內志紀河內村事

右口社爲四季御供幷御神樂料所、永代所寄進如件、

建武二年五月十五日　　左衞門少尉義高(名和)判

〔阿蘇文書五〕寄進　肥後國阿蘇社領中司砂沙分之事

合

一東鄕　權大宮司砂汰分　一所七十町(今八五十町)南。坂。梨。鄕。　一所十町(太山寺淨土寺)

一所十町　赤。丹。鄕。西　一所三十町(今八二十五町)北。坂。梨。鄕。　一所十二町　古。宇。津。鄕。

一所十町　(東大三窪)豆札鄕　一所二十町　下。野。兩鄕

同村之分

一所五町　不作村　一所三町七段　松木村　一所四町　廣石村

一所四町　久家村　一所五町　國造神護寺　一所五町　大籠村

一所五町　西津籠村　一北鄕　(澀河兵庫助砂汰分)　一所二十町　野。中。鄕。

一所十町　赤丹鄕(原尻)　一所五町　大。門。鄕。　一所三十町　阿。蘇。品。鄕。

郷

小村多シト云、古來郷庄ノ名在ルヲ不知、當郡ハ千疊トシテ八方ヲ築リ、地體天ニ向ヒ、一條ノ河、(球磨川ト云、又熊川ト云、)數流ノ溪川、(里俗球磨川ヲ九万川ト云、水源九万ノ谷々ヨリ流出スル故、)郡中ニ縱横シテ、末ハ葦北八代ニ[illegible]出、八代郡ニテ木綿葉川トモ、熊川トモ云、八代郡ノ内麥島植柳村邊ニテ海ニ入ル、

〔西遊雜記 五〕求麻郡は、古は求麻國といひし一國にて、深山くるくと屏風を引廻しゝやう地理分明の所にて、其内の廣き事甚大ひ也、相良公二万餘の御知行にて、凡十万餘石の[illegible]いふ、

〔日本書紀 七景行〕十八年四月甲子、到熊縣、其處有熊津彦者、兄弟二人、天皇先使徵兄熊、則從使詣之、因徵弟熊、而不來、故遣兵誅之、

〔倭名類聚抄 九肥後國〕玉名郡　日置　爲太　石津　下宅　宗部　太町　大水　江田

山鹿郡　來民　䈎入(○入、高山寺本作人、)　溫泉　小野　夜開　杇納　津村　神西(○西、高山寺本作酉、)　諸繰　伊智

菊地郡　城野　水島　辛家　夜開(○開、高山寺本作閑、)　子養　山門　上甘　臼理　柏原

阿蘇郡　波良　知保　衣尻　阿蘇

合志郡　合志　水川　山道　島島　口岔　島取

山本郡　三重　高原　島田　山本　殖生　佐野　本井

飽田郡　宮前　加幡　小垣　私部　栗北　天田　川內　水門　殖木　下田　市田　蚕養

託麻郡　桑原　上島　津守　酒井　波良　漆島　下井　三宅

益城郡　當麻　子抜　加西　坂本　益城　麻部　富神　宅部

宇土郡　諫染　櫻井　林原　大宅

八代郡　肥伊　高田　豐福　木行　小川

天草郡　波太　天草　志記　恵家　高屋

葦北郡　葦北　桑原　伴　野行　巨野　川田　水俣

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜九年十一月壬子、遣唐第四船來泊薩摩國甑島郡、乙卯、第一船海中斷、舳艫各分、○中略判官大伴宿禰繼人、幷前入唐大使藤原朝臣河清之女喜娘等四十一人、乘其舳而著肥後國天草郡、

〔肥後國志九〕葦北郡

當郡總高一万九千四百零一石九斗七升六合一勺八撮、軍役高一万七千五百三十四石五斗六升、鄉村三十、枝村三十八ヶ所、其外不載鄉村帳村名ト云、此郡往古ヨリ鄉庄ノ名、倭名類聚抄ニ、葦北郡桑原鄉水脖ノ鄉ノミ也、有日奈久鄉津奈木鄉湯浦鄉等、往古ハ葦北國ト云テ、火ノ國トハ別也、舊事本紀、火國、葦北國、注作北國 阿蘇ノ國、天草國トアリ、後ニ火ノ國ヲ分テ肥前肥後ト號シ、阿蘇、葦北、天草三國ヲ郡トシテ肥後ニ加フ、同書葦分ノ國ノ下ニ、纏向日代朝ノ御世、吉備彥命ノ兒三井根子命ヲ定賜葦北國造トアリ、是葦北國司ノ始也、○中略 進氏家系、檜前政麿號堀河 下向肥後國、後領葦北七浦、七浦トハ、所謂水脖、網木、湯浦、佐敷、田浦、日奈久、百濟木也トアリ、鄉庄ノ名、今考所猶附錄、當郡ニ、田浦、佐敷、津奈木、久木野、湯浦、水俣等ノ六手永アリ、

〔日本書紀景行七〕十八年四月壬申、自海路泊於葦北小島而進食、時召山部阿弭古之祖小左令進冷水、適是時、島中無水、不知所爲、則仰之祈于天神地祇、忽寒泉從崖傍涌出、乃酌以獻焉、故號其島曰水島也、其泉猶今在水島崖也、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年九月辛巳、勅、今年七月八日、得參河國碧海郡人長谷部文選所獻白烏、又同月十一日、得肥後國葦北郡人刑部廣瀨女、日向國宮崎郡人大伴人益所獻白龜赤眼、靑馬白髮尾、○中略 宜免肥後日向兩國今年之庸、

〔肥後國志十七〕球磨郡

當郡總高二万二千百九十二石三斗二升、鄉村帳ニ村數四十一ヶ所、米良山四ヶ所、其外不載鄉帳

天草郡

民家四百七十餘區、人千五百二十餘口、被水漂沒、山崩二百八十餘所、壓死人四十餘人、並加賑恤、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月七日己亥、有大鳥集肥後國八代郡倉上、○下略

〔肥後國志十七〕天草郡

當郡總高二万千零六十六石七升一合、村數百六十三ケ所、此内今郷村七十八、枝郷六十一ケ村、其外ハ不載郷帳村名ト云、當郡ニ郷庄ノ名在之歟、未考之、天草郡ハ、元ト天草ノ國ト稱シテ、火國トハ別國也、書事本紀ニ、火國、天草國、葦北ノ國、阿蘇ノ國ト有リ、後年火ノ國ヲ分テ肥前肥後ト號シ、天草葦北阿蘇三國ヲ郡トシテ、肥後國ニ加ヘタリ、(何レノ時肥後國ニ加ヘタルカ未考之)同書ニ、天草國造ノ下ニ、志賀高穴穗ノ朝(人王十三代成務帝)御世、神魂命十三世ノ孫、建島松命ヲ定賜國造トアリ、是往古天草國司ノ始ト見ヘタリ、當郡ハ異邦ノ書ニモ多ク載タリ、圖書編云、薩摩北爲肥後、注横直五百里、其與爲牙子世六、爲阿麻國撤、蒼靈草ニモ阿麻國撤ト記ス、又登壇必究ニ、天草山ヲ載セ、海東諸國記ニ天草乙隔津ト書リ、○中略當郡主古來代々ノ姓名ヲ不知、天草記云、天草一島、五分ニテ立、而氏一ツヲ曰志岐、菊池氏是也、(菊池系圖云、菊池武隆ヨリ三代、民部大輔經頼二男、天草兵庫太輔經良、於北國討死、二十六歳云々、是其菊池氏ナルベシ、)一ヲ曰天草、大藏姓也、(漢書曾家ト云)末三分ハ天草ノ末裔也、一ヲ曰上津浦、一ヲ曰栖木、一ヲ曰大矢野トアレバ、大抵天草氏、志岐氏、上津浦氏、大矢野氏、栖本氏ナド分領スト見ヘタリ、天正十六年ノ夏、大閤秀吉公征西ノ後、小西攝津守行長ニ肥後國半國、當郡モ小西領トナル、而後慶長五年、行長石田治部少輔三成ニ與シ、東軍ノ爲ニ滅亡ス、同年寺澤志摩守廣高ノ領トナリ、其身ハ肥前唐津ニ在城シ、長臣三宅藤兵衞重利(土岐ノ種類、明智ノ親族)ヲ遣ハス、當郡ヲ守ラセ、寛永ノ耶蘇蜂起ノ時、彼レヲ拒ミ、廣高ノ男兵庫頭賢高、有故テ天草四万石ヲ減ゼラル、其後當郡ノ領主移リ換リテ、當時ハ公料也、

當郡ニ志岐組、二江組、御領組、本渡組、一町田組、大江組、久玉組、楠本組、砥岐組、大矢野組等ノ十組アリ、

地賜大瑞者、受賜獻受被賜可貴物、両在、是以改神護景雲四年爲寶龜元年、〇下略

宇土郡

〔肥後國志七〕宇土郡

總高三万五千百八十七石二斗七升七合二勺三撮、軍役高二万五千七百九石五斗八升五合、村數百八十八ヶ村、郷村四十八、枝村郷十、新田新村一ヶ所、其外ハ不載郷村帳村名ト云、此郡ニ宮ノ庄古保里ノ庄二庄、幷北浦南浦等アリ、〇中略當郡ニ松山郡浦ノ兩手永アリ、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月七日己亥、有大鳥集肥後國八代郡倉上、又宇土郡正六位上蒲智比咩神社前河水變赤如血、緣邊山野草木凋枯、宛如嚴冬、神祇官陰陽寮卜筮云、彼國風水火疾疫可成災、故神明示祐、

八代郡

〔肥後國志八〕八代郡

總高六万千六百四十石四斗零九合八勺三撮、公義軍役高四万二千八百七十七石四斗六升、村數六百二十六ヶ所、此內今郷村六十、枝郷二十三、新田新村四ヶ所、其外ハ不載郷帳村名ト云、古ハ高田郷、太田郷、三箇郷、小犬郷、道前郷、道後郷ノ六郷有リ、高田郷ハ和名類聚抄ニモ出タリ、亦圖書編云、薩摩之北爲肥後、注横直皆五百里、其奥爲牙子世六(ヤツシロ)ト云々、亦蒼霞草ニハ牙子世祿(ヤツシロ)ト書ス、〇中略胡蝶子里俗ノ說ヲ引テ、八代上古神所也、故ニ社ト云リ、後ニ八代ト爲ルナリ、檳榔ニ比佐ヲ盛テ神前供物トス、今八代海上ニ檳榔島アリ、比佐鯛モ多キハ其餘遺也ト云リ、當郡ニ野津高田種山ノ三手永アリ、

〔日本書紀七景行〕十八年五月壬辰朔、從葦北發船到火國、於是日沒也、夜冥不知著岸、遙視火光、天皇詔挾抄者曰、直指火處、因指火往之、即得著岸、天皇問其火光處曰、何謂邑也、國人對曰、是八代縣豐村、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年五月庚戌、肥後國雷雨地震、八代、天草、葦北三郡官舍、幷田二百九十餘町、

〔元亨釋書 十三 明戒〕釋俊芿、字不可棄、肥之後州飽田郡人、○中 建久九年、欲入宋、謂諸徒曰、我思赴異域、求肆法、若不精勵、豈堪傳授、我又自見志操、始十月十六、到一百日、絶眠精坐、○下

託麻郡

〔肥後國志 四〕詑摩郡

當郡總高三万五百四十八石七斗六升二合九勺四才、但軍役高一万九千八十八石二斗三升六合、村數七十八ケ村、此内今鄕村廿九、枝鄕十ケ所、其外ハ不數鄕帳村名ト云リ、此郡ニ本庄庄、安富庄、神倉庄ノ三庄有リ、　本庄田迎ノ二手永有、

益城郡

〔肥後國志 五〕益城郡

總高十八万六千八百六十一石一斗九合四勺八撮、軍役高十二万三千四百三十一（一本云、三石三斗八升、）六石、村數千四十九ケ村、此内今鄕村二百八十六、枝鄕三十八、新田一ケ所、其外ハ不數鄕帳村名ト云、此郡ニ、古ヘハ木山鄕、津森鄕、甲佐鄕、豐田鄕、守山鄕、砥用鄕、中山鄕、甘木庄、隈牟田庄、守富庄、豐福庄等、七鄕五庄アリ、（或説ニ、益城郡石津鄕トアリ、何レノ邊ヲ云ニヤ、）益城ノ地名俗説ニ、崇神天皇ノ御宇、健緒組命ニ命シテ、當郡朝來名ノ峯ノ兇賊ヲ誅シ玉フ時、官軍ノ屯日々倍セシカバ、城疊ノ地狹ク、後ニ城地ヲ倍シ廣メタルヨリ郡名トス、其城トイヘルハ、今也八幡原ト云所ノ邊ナリト云傳フ、鯰手永、沼山津手永、甲佐手永、木倉手永、矢部手永、中島手永、（中島手永、今ハ矢部手永ニ屬ス、以上六手永、上益城ト云、）杉島手永、廻江手永、中山手永、河江手永、砥用手永（以上五手永、下益城ト云、）等ノ十一手永アリ、

〔萬葉集 五 雜歌〕筑前國司守山上憶良敬和爲熊凝述其心歌六首幷序

大伴君熊凝者、肥後（肥後、原作肥前、據一本改、）國益城郡人也、年十八歲、以天平三年六月十七日、爲相撲使某國司官位姓名從人、參向京都、爲天不幸、○中 乃作歌六首而死、其歌曰、○下

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜元年十月己丑朔、卽天皇位於大極殿、改元寶龜、詔曰、○中 今年八月五日、肥後國葦北郡人日奉部廣主賣獻白龜、又同月十七日、同國益城郡人山稻主獻白龜、此則並合大瑞、故天

ノ郷名有之、日本紀持統天皇紀ニ、皮石ト記セリ、○中略當郡ニ竹迫大津ノ二手永アリ、

〔日本書紀三十持統〕十年四月戊戌、以追大貳授伊豫國風速郡物部藥、與肥後國皮石郡壬生諸石、幷賜人絁四匹、絲十絇、布二十端、鍬二十口、稻一千束、水田四町、復戸調役、以慰久苦唐地、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年九月九日癸未、太宰府言、肥後國獲白龜一、於是公卿抗表、慶賀言、臣聞云々、伏見參議太宰權帥從三位在原朝臣行平奏、管肥後國合志郡擬大領日下部辰吉、於所部正六位上奈我神社河邊獲白龜一、神乃助化、出必有時、○下略

山本郡

〔肥後國志十〕山本郡

總高二万六千二百零一石九斗七升七合九勺三撮、但軍役高一万七千三百八十七石一斗也、村數百八十一ヶ所、此内今郷村三十三、枝郷村十三ヶ所、不載郷帳村名ト云、○中略此郡古來郷庄ノ名有之歟、未考之、圓臺寺棟札ニハ、滴水庄天文年中ニ再興ノ文トアリ、賀茂ノ宮神領帳ニハ、肥後國山本郡吉松ノ庄神田一所ト有ト云、亦岩野村福照寺ノ梁牌ニハ、岩野庄ト有リ、今西郷東郷アリ、正院手永一郡一手永也、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年五月四日己未、分肥後國合志郡、始置山本郡、

飽田郡

〔肥後國志二〕飽田郡

總高七万零四百三十二石二斗三升六合二勺九撮、軍役高五万千三十三石四斗八升二合、村數三百八十二ヶ所、此内今郷村九十四、枝郷廿七ヶ所、其外ハ不載郷帳村名ト云、此郡、飽田郷、立田郷、鹿子木庄、池龜古活云庄、河尻庄等ノ二郷三庄有リ、往古飽田郷アル故郡名トスル歟、往昔ヨリ當郡ニ國府有之ト見ヘタリ、今也五町、池田、橫手、銭塘等ノ四手永アリ、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年三月丙申朔、肥後國飽田郡人從三位大藏卿平朝臣高棟家令正七位上建部公弟益、男女等五人、賜姓長統朝臣、貫附左京三條、

〔肥後國志十五〕阿蘇郡

高六万六千二石四斗三升五合五勺三才、但軍役高五万四千六百廿八石三斗二升、村數五百三十七ケ村、此內今鄉村八十四、枝鄉四十一ケ所、其外ハ不載鄉帳村名トス（云）リ、此郡ニ古來鄉庄ノ名有ル歟、未考之、俚俗今南鄉小國鄉ト二鄉ヲ稱ス、上古阿蘇國ト稱シテ、火ノ國トハ別國也、舊事本紀ニ、火ノ國、阿蘇國、葦北國、天草ノ國トアリ、後ニ火ノ國ヲ分テ肥前肥後ト號シ、右ノ阿蘇葦北天草ヲ郡トシテ、肥後國ニ加ヘタリ、同書ニ曰、國造紀阿蘇國造ノ下ニ、瑞籬ノ朝（人王十代崇神帝朝）後世、火ノ國造同祖、神八井耳ノ命ノ孫速瓶玉命定賜國造トアリ、是當郡守始ト見ヘタリ、阿蘇郡ノ事ハ、異域本邦ノ書籍ニモ載之、日本紀景行帝本紀ニモ阿蘇國トアリ、亦釋日本紀ニ引筑後風土記、肥後國閼宗ノ縣ト記セリ、當郡ニ內牧、坂梨、布田、高森、野尻、菅尾、馬場、北里、久住等九手永有リ、

〔西遊雜記五〕阿蘇郡にて、今二万八千石の地といへども、東西凡十里餘、廣大なりといへども、山ばかりにて原野も數多にて、笹倉などいふ原は、昔の武藏の、原と稱せしも、かゝる原ならんと思ふばかりの廣々とせしところ也と、土人物語には、開田せば阿蘇郡にて十餘万石も出來べき原地有所ながら、人のなき故に、古田も年々に荒はてるといひき、○中略此邊は纔り行ても、花咲草木なく、土色は黒く、水の流れも濁水にて清からず、谷々に於て蒿蒲の花を見しばかりにて、日本のうちにも、かゝる下々國もあるものかなと驚し所なり、○下略

〔釋日本紀十述義〕筑紫風土記曰、肥後國閼宗縣、縣坤二十餘里有一禿山、曰閼宗岳、○中略所謂閼宗神宮是也、

〔肥後國志十四〕合志郡

當郡惣高四万九千七百五十三石一斗一升四合七勺五撮、此軍役高三万四千六百九十一石一斗八升也、村數二百一ケ所、此內今鄉村六十、枝鄉十三ケ所、此外ハ不載鄉帳村名ト云リ、中ノ鄉、北

山鹿郡

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年六月廿日辛未、太宰府言、大鳥二、集肥後國玉名郡倉上、向西鳴、

〔肥後國志十一〕山鹿郡

總高三万五千九百四十一石二斗五升二合九勺四才、但軍役高三万三千百十六石九斗六升八合、村數三百三ケ所、此内鄕村四十四、枝鄕二十ケ所、其外ハ不載鄕帳村名ト云、此郡古ヨリ鄕庄ノ名有ル歟、未考之、倭名類聚ニ當郡温泉鄕載タリ、又異邦ノ書海東諸國記云、肥後有温井郡ト記ルハ是ナランカ、同書肥後國也望加ヤマカト書シタリ、里俗ノ諺昔里人、山中ノ鹿此所ニ來リ、身ヲ温ルヲ見テ温湯ヲ見出ス、因テ郡ノ名ヲ山鹿ト號ス、山鹿中村ノ兩手永有リ、

菊池郡

〔肥後國志四〕菊地郡

當郡總高二万八千五十一石五斗二升七合五勺八才、但軍役高二万六千四百六十三石二斗六升、村數百五十五ケ所、此内今鄕村六十七、枝鄕七ケ所、此外ハ不載鄕帳ニ村名ト云ヘリ、此郡ニ、古ヨリ鄕庄ノ名有之カ、未考之、里俗ノ説ニ、當鄕深川村ニ菊ノ池トテ菊花ノ形ニ似タル池有、故郡ノ名トストト云傳ヘタリ、

〔地名字音轉用例〕カノ行ノ音同行通用セル例

くゝち　菊池郡肥後　久々知チ神代紀ニ菊理媛ト云神名モアリ後ノ世ニ是ヲキクチト云ハ、字音ニ依テ訛レルモノナリ、

〔續日本紀文武一〕二年五月甲申、令太宰府繕治大野基肄鞠智三城、

〔文德實錄十〕天安二年閏二月丙辰、肥後國言、菊池城院兵庫鼓自鳴、

〔三代實錄清和二十七〕貞觀十七年六月廿日辛未、太宰府言、中略群鳥數百、嚙抜菊池郡倉舍葺草、

〔菊池系圖〕則隆太宰少監大夫將監

延久二年庚戌、初而肥後國菊池ニ下向、始菊池領主、

玉名郡

宇土	八代	葦北	球磨	天草	
		葦北	熊		
		葦分			
宇土	八代	葦北	球磨	天草	書十四
同	同	同	球麻	同	同
同	同	同	球磨	同	十四郡
同	同	蘆北　葦田　葦北	球麻　球磨	同	
同	同	蘆北	球麻	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	求麻	同	同
同	同	葦北	球磨	同	十五郡
同	同	蘆北	同	同	同

〔肥後國志十二〕玉名郡

總高十二万六千三石四斗四升四合九勺、(但軍役高七万三千九百廿石九升三合)村數五百六十八ケ所、内今鄕村百十、枝鄕八十三ケ所、其外ハ下鄕村帳村名ト云ヘリ、此郡古ハ山北鄕、伊倉鄕、寶ノ庄、東鄕、玉名ノ庄、大野庄、江田庄、臼間庄、野原庄等三鄕六庄有リ、玉名ノ庄有ル故郡名トスルニヤ、里俗說、嵯峨ノ帝御宇、玉世ノ姫ト云人、故有テ當國ニ下向ノ時、當郡ヲ化粧田トシテ賜之、其比迄ハ土車ノ庄ト云シヲ、玉世姫住セシ所ナル故、玉名郡ト改ム、彼姫其後菊池郡ニ移住有ト云、(追考)里俗說、當郡上古ハ、玉杵名郡ト云、(日本紀玉杵名トアリ)内田中、富尙園、小田坂下、荒尾等六手永アリ、

〔日本書紀七景行〕十八年六月癸亥、自高來縣渡玉杵名邑、時殺其處之土蜘蛛津頰焉、

玉杵名紀			玉名(タマナ)	同多万伊奈	同	同闕知元	同(タマナ)	同	同	同(タマナ/タマイナ)	同
			飽田(アキタ)	同安支多	同	同闕知元	同(アキタ)	同	同	同(アキタ)	同
			山鹿(ヤマカ)	同夜万加	同	同闕知元	同(ヤマガ)	同	同	同(ヤマガ)	同
鞠智紀			菊池(キクチ)	同久々知	菊池	菊池知　菊池闕元	菊池(キクチ)	同	同	同(キクチ/クヽチ)	同
	閼宗風土記逸文		阿蘇(アソ)	同阿蘇	同	同知闕元	同(アソ)	同	同	同(アソ)	同
皮石紀　合志三			合志(カハシ)	同加波志	同	同知闕元	同(カフシ)	同	同	同(カフシ/カハシ)	同
山本三			山本(ヤマモト)	同夜万毛止	同	同知闕元	同(ヤマモト)	同	同	同(ヤマモト)	同
			託麻(タクマ)	同多久万	同	託麻知　託摩闕元	詫摩(タクマ)	同	同	託麻(タクマ)	詫摩
			益城(マシキ)	同万志岐	同	同知闕元	同(マシキ)	同	同	上益城(カミマシキ)　下益城(シモマシキ)	同　同

託摩七郎殿〇之親

〔倭名類聚抄　五國郡〕肥後國　管十四〇中　玉名多伊奈万　山鹿夜万加　菊池久々知　阿蘇阿曾　合志加波志　山本夜末毛止　飽田安岐多　託麻多久萬　益城萬志岐國府、　宇土、　八代夜豆志呂　天草安萬久佐　葦北阿之木多　球麻久萬

〔延喜式　二十二民部〕肥後國、大、管　玉名タマナ　山鹿ヤマカ　菊池キクチ　阿蘇アソ　合志カウシ　山本ヤマモト　飽田アキタ　託麻タクマ　益城マシキ　宇土ウト　八代ヤツシロ　天草アマクサ　葦北アシキタ　球磨クマ〇中略

右爲遠國

〔皇國郡名志〕肥後國　舊十四郡　今十六郡

玉名タマナ　●南關　筑後界海ニ瀕

菊池キクチ　郡町無シ　豐筑界

合志カウシ　●內牧　國中

飽田アキタ　熊本　海ニ付小郡

益城マシキ　郡町無シ　緑川　國中

八代ヤツシロ　八代　以上十一郡各小郡也　宇土ニ並

葦北アシキタ　●佐敷　●水俣　薩界天草ニ向

米良メラ　山バカリ六ケ村　日向ニ入込郡也

今加ニ求麻五家二郡一

山鹿ヤマカ　●山鹿　筑後界

阿蘇アソ　●坂川　●阿ソノ宮　●大里　●豆原　日豐後界

山本ヤマモト　郡町無シ四ケ村　國中

託麻タクマ　郡町無シ五ケ村　國中

宇土ウト　宇土　飽田ニ並

天草アマクサ　●高濱　●志岐　●廣瀬　●土岐上下　一郡島也

球磨クマ　人吉　●白木　日界

五家ゴカ　山バカリ三ケ村　日界

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕肥後國

國府

一揆の四人には、一萬二三千石づゝ被遣候定、內藏助人數方々へちり可申と御意候て、內藏助被召出候間、右の內藏助は抱置候者は、國大名には猶以可被寄返し候へとの御制札、九州京境迄御立被成候、〇中略

一各歸陣故、海上も靜に御座候通被聞召屆候、〇中略其年八月に、肥後に一揆蜂起仕候と被聞召付、淺野彈正、福島大夫、加藤左馬助、同虎之助、後には主計と申候森勘八、此衆中被仰付、はや討取被申、〇中略

一上方より御下し被成候衆中無殘肥後へ御通り候、肥後國中仕置被成候內、其年たち申候、皆々肥後にて御越年に候、明れば天正十六年子の年、內藏助罷上り候へとの上意にて、尼ケ崎迄被罷上、法華寺に居被申候、〇中略御意には、去年九州へ御馬を被出候、西國の分は、目出度被相治候處に、又肥後の一揆蜂起の義は、內藏助仕置時分をはからはず、あらく申付候故、天下の騷ぎ仕出候、〇中略諸大名への自今以後見せしめの爲との上意にて、內藏助切腹被仰付候、

一肥後加藤主計殿へ、廿六萬石熊本城共に拜領なり、宇土の城廻りにて十二萬石、小西攝津守拜領也、扨殘る衆中皆々被罷出候事、

〔倭名類聚抄　五國郡〕肥後國〇中略益城國府、志岐、

〔伊呂波字類抄　比國郡〕肥後國〇中略飽田府アキタ

〔大日本史　國郡肥後　三十一〕和名鈔云、國府在益城郡、拾芥鈔云、府在飽田郡、今託麻郡有國府村、國分寺、是郡城有沿革、致異同也、

〔詫磨文書　三〕武重以下凶徒等、打出肥後國府、去八九兩日及合戰、引籠宇都宮大和太郞城之由、守護代宜兼馳申之間、相催軍勢可發向也、先不日馳向彼城、可被致軍忠、於訴訟事者、忩可有其沙汰、仍執達如件、

建武五年四月十一日　　　　　　　　大宰少貳 花押 賴尙〇

父隆直、源家在忠功、不幸而偶源義經、被誅、後頼朝公在懇歎之、子孫召鎌倉、爲肥後國所々知行、

隆繼　太郎　父先死去

能隆　彌二郎　實ハ隆繼子也、關東エ被召出、爲肥後國、承久亂高名、嫡孫タルニヨリ、爲祖父子繼家督、

（肥陽軍記四）肥後征伐之事

肥後國は、古より菊池殿領成しが、去ぬる永正二年、大友にほろぼされ、其後國主なくして年をへる、天文廿年、大友義鎭軍を出されける時、國中悉相隨かふ、大友則伯父義武を國主にすへ、菊池と號しけるが、此度大友衰て、義武力を失ひたちもちがたし、折を得て龍主先年より肥後を望り給ふ、城、赤星、心を通しければ、多く御支配と成たり、今年政家公家種を召させられ、二萬餘騎にて肥後國を治給ふ、信生公軍事を司さどり、筑後の諸侍を催し、軍粧きらを盡し、兵威山野をうごかして肥後國へぞ向はれける、（中略）島津屋形義久も、耳川利の後、日向を取のみならす、豐後肥後をあはせんとせらる、此時肥後に來りて龍家と和平をとゝのへらるゝにいはく、肥前筑前筑後豐前の四ケ國切取の國なれば、龍造寺の御支配たるべし、大薩日の三州は申におよばす、大友をほろぼし、豐後迄は島津より領し申べし、肥後國をば兩家より半國宛領し、九州の兩大將とあふがれ候べしと約諾畢て歸國す、卽龍造寺家晴を南の關に置、肥後の御仕置等を定られ、政家公は御歸城有、諸人參り集り、五州平均の事を賀申す、　古士の說に、肥後國は高洲川限と御約束有しと云々、

（川角太閤記三）一上樣、（○豐臣秀吉）夫より御人數一萬許りにて、加古島へ被成御座候、（中略）無程肥後國熊本へ被成御入、（中略）

一當國は、平和の者に被遣者ならば、一揆發すべき事必定なり、さらば佐々內藏助を被召出、此國にはめ可被置なりと思召被付、其時內藏助を被召出、ぬけめなしに一國內藏助に被宛行候、

本二縣ヲ置キ、尋テ八代ヲ熊本ニ併セ、改メテ白川ト稱ス、

〔先代舊事本紀〈國造十〉〕阿蘇國造

瑞籬朝〈○崇神〉御世、火國造同祖、神八井耳命孫速瓶玉命定賜國造、

〔古事記〈中神武〉〕神八井耳命〈中略〉火君、大分君、阿蘇君〈中略〉等之祖也、

〔日本書紀〈景行七〉〕十八年六月丙子、到阿蘇國也、其國郊原曠遠、不見人居、天皇曰、是國有人乎、時有二神、曰阿蘇都彦阿蘇都媛、忽化人以遊詣之曰、吾二人在、何無人耶、故號其國曰阿蘇、

〔阿蘇三社大宮司系圖〕神日本磐余彦尊〈神武天皇〉

神八井耳命 ─ 健磐龍命〈三社之内 正一位〉
　　　　　　　阿蘇都媛〈三社之内〉
　　　　　　　　├ 速瓶玉命〈三社之内 號國造〉

〔先代舊事本紀〈國造十〉〕葦分國造

纏向日代朝〈○景行〉御代、吉備津彦命兒三井根子命定賜國造、

〔日本書紀〈敏達二十〉〕十二年七月丁酉朔、詔曰、〈○中略〉先考天皇謀復任那、不果而崩、不成其志、是以朕當奉助神謀、復興任那、今在百濟火葦北國造阿利斯登子達率日羅賢而有勇、故朕欲與其人相計、乃遣紀國造押勝與吉備海部直羽島喚於百濟、

〔先代舊事本紀〈國造十〉〕天草國造

志賀高穴穗朝御世、神魂命十三世孫建島松命定賜國造、

〔續日本紀〈八元正〉〕養老二年四月丙辰、筑後守正五位下道君首名卒、首名少治律令、曉習吏職、和銅末出爲筑後守、兼治肥後國、〈○下略〉

〔菊池系圖〕隆定〈次郎〉

〔日本紀略 桓武〕延暦十四年九月乙卯、以肥後國為大國、

〔日本地誌提要 七十肥後〕沿革　古ヘ國府ヲ飽田郡ニ置、（今ノ古府中在國里數、及宮寺村等、其遺址ナリト云、）延久二年、藤原則隆菊池郡ヲ賜ヒ、菊ノ城ニ居リ、（今深川村）菊池氏ト稱ス、則隆五世ノ孫隆直、平氏ヲ援ケ州守ニ任ズ、後五世武房、蒙古ノ兵ヲ破リ、其功ヲ以テ州守ヲ襲グ、元弘中、其孫武時王事ニ死シ、子武重州守ニ任ジ、守護ニ補シ、隈部城（後隈府ト稱ス）ニ居ル、足利尊氏ノ反スル、西海諸州皆之ニ應ズ、武重獨リ官軍ニ屬シ、征西將軍懷良親王（後醍醐天皇第九子）ヲ迎ヘ、之ヲ高田（八代郡）ニ奉ズ、正平中、武重ノ弟武光、少貳大友二氏ヲ破リ、豐前ヲ略シ、筑後肥前ヲ併セ、日向ニ入リ、西海九州殆ンド官軍ニ屬ス、孫武朝ニ至リ、屢足利氏ノ將今川貞世、大内義弘等ト戰フ、既ニシテ官軍日ニ衰ヘ、諸州皆叛ク、元中講和ノ後、武朝本州ヲ領スル故ノ如シ、後八世武包ニ至テ州人服セズ、永正ノ末、武包出テ肥前ニ奔ル、州人大友義鑑ノ弟義武ヲ迎ヘ菊池氏ヲ繼ガシム、天文二十三年、大友義鎭義武ヲ誘殺シ、其地ヲ併セ、赤星親家ヲ隈府ニ置キ、州内ヲ鎭セシム、初阿蘇大宮司惟澄官軍ニ屬シ、戰功アリ、子孫阿蘇郡ヲ領ス、菊池氏ノ衰ルヤ、自立ス、天正ノ末、州ノ豪族志ヲ島津氏ニ通ジ、地皆其蠶食スル所トナル、豐臣氏西征シ、島津氏ノ侵地ヲ收メ、阿蘇氏ノ邑ヲ沒シ、佐々成政ヲ守護トシ、隈本（後熊本ニ改ム）ニ鎭ス、尋テ成政ヲ誅シ、加藤清正ヲ熊本（貳拾五萬石）ニ、小西行長ヲ宇土（貳拾萬石）ニ封ズ、關原ノ役、清正東軍ニ屬ス、德川氏行長ノ封ヲ收メテ之ヲ清正ニ與ヘ、天草郡ヲ寺澤廣高ニ加賜ス、（子堅高ノ時削封セラル、）寛永九年、清正ノ子忠廣罪ヲ獲テ國除シ、細川忠利代テ封ゼラレ、其弟立孝ヲ宇土ニ分封ス、忠利ノ子光尚、其弟利重ニ新田三萬五千石ヲ分ツ、又球磨郡ニ相良氏アリ、建久中、相良長頼始テ之ヲ領シ、人吉ニ居ル、其七世ノ孫定頼、其子前頼、共ニ官軍ニ屬ス、玄孫爲續ニ至リ、菊池氏ノ衰ニ乘ジ八代城ヲ取ル、其八世ノ孫長每ノ時、豐臣德川氏ヲ歷テ封邑故ノ如シ、凡ソ四藩、王政革新、熊本支封ヲ高瀬ト稱ス、既ニシテ皆廢シテ縣トナシ、更ニ之ヲ合併シテ八代縣

橋村　二里八町一十八間　宇土郡松合村西　三里一十五町一十間〈至西崎一里三十丁三十一間〉　郡浦村、三十二度三十七分、　二里二十七町一十九間半　波多村岩ノ脇　三里二十町七間半　網田村戸口浦、三十二度四十分、　四里一十町二十六間　飽田郡南走潟村〈沿緑川、至川尻町二里九丁一十九間、〉　三里一十三町二十二間半　方近村白川口〈至小島町二十二丁六間〉　一十七町三間　松尾村〈沿川、至高橋町一里七丁二十八間、〉　二里二十八町二十八間半　河内村船津、三十二度五十分、　四里一十一町七間半　玉名郡濱村〈沿川、至高瀬町一里九間半〉　三里三十五町三十間　長洲村、三十二度五十五分半、　一里三十二町九間　大島村　三十町二十五間半〈至國界八町五十六間〉　筑後國三池郡大牟田村諏訪川口

〔延喜式 兵部二十八〕諸國驛傳馬〈中略〉

肥後國驛馬〈大水、江田、坂本、三重、蚊藁、高原、蚕養、球磨、長埼、豐向、高屋、片野、朽網、佐職、水俣、仁主、各五疋、〉　傳馬〈大水、江田、高原、蚕養、球磨、豐向、片野、朽網、佐色、水俣驛各五疋、〉

〔日本國郡沿革考 三西海道〕肥後〈武備志作非谷、宋史作肥見、皆檀必先作肥后、〉延暦十四年九月、以肥後國爲大國、管十四郡、千百十六村〈貞觀十一年七月、肥後大風雨、田園數百里、陷而爲海、〉

天草〈八十八村、古天草國、見國造記、〉　蘆北〈三十村、古葦分國、見國造記、敏達紀作火葦北國、後爲郡、延喜式等作葦北、〉　球麻〈七十二村、延喜式等作球磨、景行紀熊縣卽此地、〉　八代〈六十九村、景行紀八代縣、卽是、圖書編作牙子世様、〉　益城〈二百八十七村〉　宇土〈四十九村、圖書編作督陀、〉　飽田〈九十四村〉　詫摩〈二十九村、延喜式等作詫麻、〉　合志〈六十村、持統紀作皮石郡、〉　山本〈三十三村、貞觀元年五月、分合志郡置、〉　玉名〈百十村、景行紀玉杵名邑、卽此地、〉　山鹿〈四十四村〉　菊池〈六十七村〉　阿蘇〈八十四村、古阿蘇國、見景行紀國造記等、筑前風土記作閼宗、〉

〔肥後地志略〕肥後大意

抑肥の後州は、もと肥前の國と一國なり、〈中略〉日本後紀に曰、延暦十四年十月乙卯、肥後國を以て爲大國、宋志には火兒と記し、武備志には非谷と書たり、往古は阿蘇の國、葦北の國、天草の國は火國と別國にて、各國造を置ると舊事記に見えたり、國造とは國の司といふ、後に阿蘇の國、蘆北の國、天草の國を、火の國に合せて一國とし、郡の名となせりとなん、後に火の字を肥にあらため、

肥後國玉名郡中山村　二里五町五十九間半　高瀬下町、三十二度五十五分半、　三町五十一間

桃田村　三里二十六町三十三間　山本郡瀬水村植木　從二八町島一至二植木一街道、通計二十里一十一

町五間、

從二肥後國熊本一歷二椎葉山一至二才脇一

肥後國飽田郡熊本寶町　一里二十二町七間半　託麻郡重留村　三里二十四町五十一間　益

城郡西上野村　二里二十五町三十六間　金内村　一里三十五町四十三間半　濱村濱町又矢部一

五里一町二十六間　阿蘇郡大野村馬見原　二里一十九町五十七間至二國界一二町二十一間　日向國

臼杵郡鞍岡村日向門水合屋略○中

從二肥後國湯浦本村大口街道一至二鹿兒島一

肥後國葦北郡湯浦本村　三里一十三町四十七間　久木野村、三十二度一十分半、　四里九間至二國

界一一里一十一町五十八間　薩摩國伊佐郡南榎原村

（日本實測錄六帖第）從二薩摩國鹿兒島一沿レ海至二長崎一略○中

肥後國葦北郡佐敷村　一里三十一町五十間至二湯村江口一一里八丁四十六間　濱村至二津内村水俣一四丁三十七間　三里二町三

十六間半　津奈木村櫻戸　二里二十四町九間　平國赤崎村　四里三町四十五間、寺川内村

至二湯浦本村一十一町三間　二十二町　佐敷村至二佐敷町一三丁三十間　四里七町五十九間半　小田浦村　一十一町

五十四間　小田浦村田浦川　三里四町五十七間　二見村洲口　一里二十町四十三間至二日奈久町一三

十丁一十八間　日奈久村　一里三十四町三間

八代郡植柳村球麻川口○此間有二鹽濱一　麥島村球麻川千檀渡　二十八町三十九間　岡前川口　二町

一十四間　八代札之辻　二里一十七町一十一間　古閑村水無川口至二植柳村一二十九丁三十九間　一里三

十三町五十四間　下有佐村至二高島村一三十二度三十二分半、瀧町五丁二十一間、　三里一十八町一十七間　宇城郡松

町目、三十二度四十八分、一十五町五十八間　同寶町　一里二十五町一十八間　川尻小路町、三十二度四十四分半、五町一十一間　同大渡町　一里三十四町四十二間（至宇土陣屋前一里三十一丁二十七間）宇土郡段原村宇土本町　三十四町四十二間　釜城郡松橋村、三十二度三十九分、二里二十一町三十三間　北小川村小川町　一里五町四十七間半　八代郡宮原村宮原町　二十七町四十五間　岡中村、三十三度三十二分、一里八町三十四間　下片野川村（至古麓村球磨川岸、九丁三間）一十八町五十間　横手村　一十五町九間　八代本町、三十二度三十分、六町九間（至八代城大手前、三町）同札之辻　二町一十四間　麥島村前川岸　五町三十二間　同球麻川千稙渡　二十四町五十八間　奈良木村（至萩原村上手町球麻川岸、三十二丁三十七間半）三十一町四十間　葦北郡日奈久村　二十六町二十五間　同日奈久町　三十町一十八間　二見村洲口　二里一十九町（至赤松太郎峠一里三丁五十六間半）小田浦村　一十三町二十一間　同坊ノ迫　一里二十一町五十四間（至佐敷太郎峠、三十一丁六間半）佐敷町　一町二十四間　同向町、三十二度一十八分半、九町二十三間半　佐敷村（至市野瀬村告二里三十三丁五十六間）三十四町三十一間半　湯浦本村　三里一十八町九間　障內村水俣　三町二十一間　障內村　三里一十四町二十間半（至國界一里三十四丁二十間）薩摩國出水郡鯖淵村米之津（〇中略）

從筑前國中牟田、歷日田及大津、至湯町（〇中略）

肥後國阿蘇郡宮原村宮原町、三十三度七分、四里三十五町四十二間（至長倉坂峠三里二十八丁四十八間）小里村　六町三十九間　內牧村上町、三十二度五十八分半、五里一十九町三十八間半　合志郡大津村大津町、三十二度五十三分、二町四十二間　大津村（歷瀬田村、至熊本京一丁目、四里二十四丁四十四間半）三里二十一町二十一間半　菊池郡正觀寺村隈府町、（至隈府町宿所、三町三十九間）三十二度五十九分、三里一十一町五十二間半　山鹿郡湯町（又呼山鹿）（從中牟田至湯町）街道、通計三十六里三十四町二十六間、（〇中略）

從筑後國八町島、歷久留米及柳河、至植木（〇中略）

四町三十八間　高森村高森町、三十二度四十八分半、　二里二十三町五十一間　草ヶ部村（至馬場宿所八丁、北極高三十二度四十六分半、）　二里一町（至國界一里二十二丁五十九間）　日向國臼杵郡河内村（略）○中

從日向國佐土原歷米良及間村至加久藤（略）○中

肥後國球磨郡小川谷村　二里七町一十五間（至天包山峠一里八丁二十四間）　津留谷村米良谷　一里一十九町五十七間　同板屋谷　二里四町四十二間（至一里山峠三十一丁五十一間）　同横谷　四里二十一町三十三間半　兎田村二子川　三里九町二十四間　間村七地赤池原　一里二十二町四十二間　大畑村　三里二十九町四十九間（至國界里丁（丁上有脱字）二十七間）　日向國諸縣郡中飯良村加久藤（經佐土原至加久藤）

街道通計二十九里一十八町七間、

從肥後國間村沿球麻川至麥島

肥後國球麻郡間村七地赤池原　一十八町五十間（至人吉城大手前一十四丁四十八間）　人吉九日町　三十二度一十二分半、（至新島橋六丁二十五間）　二里三町四十五間　渡村　一里一十一町一十間　一勝地谷村芋川岸　一里一十町八間半　一勝地谷村告（至草北市野瀬村宿所七丁八間、北極高三十二度一十六分半、）　一里二十一町三十三間　神瀬谷村　二里三十五町五十六間　葦北郡久多良木村鎌瀬　三里一十六町一十九間　八代郡下松球麻村段　一里六町二十七間　古麓村　五町三間　萩原村土手町　二十町六間　麥島村球麻川千橦渡（從間村至麥島）川岸、通計一十五里五町一十八間半、（略）○中

從筑前國山家驛州街道至鹿兒島（略）○中

肥後國玉名郡關村關町、（又呼南關）三十三度三分、　三町九間　同田町川岸（至平山村上山二里一十二丁一十九間、從上平山至平山村高所八丁五十間、北極高三十三度、又呼上平山、至大島村二里一十三丁四十間、）　四里一十一町七間半　山鹿郡湯町、（又呼山鹿湯）三十三度三十秒、　三里二十九町三十九間　山本郡滴水村植木村、三十二度五十三分、　二里二十二町六間　飽田郡熊本京一町目　六町五十一間　同二丸通（至熊本城大手、二丁三十間）　六町四十間　同新一

宇土郡　實測　戸馳島、周廻五里二十一町、　寺島、周廻八町二間、　中神島、周廻六町三十五間、
遠測　鈴島　小寺島　甲島　根島　荷島　風流島
飽田郡　實測　離島、周廻五町一十一間、
〔萬葉集抄三〕葦北乃（あしきたの）〇中略
風土記云、球磨乾七里、海中有島、稍可七十里、名曰水島、島出寒水、逐潮高下云々、
〔西遊雜記七〕天草島。　高四万餘石の地也、此時島原と兩所にて、四万餘人罪せられし事故に、田畑荒て漸壹万餘石の地と成、其以來他の島よりも渡りて田畑をひらきて、今二万餘石の地と成と、七人物語りぬ、有馬浦より島原の城下へ五里といふ遠し、島原の城下は、旅人の止宿、ゆかりなくては滯留ならず、返りがけに一見す、城は委敷見えず市中凡五千軒、大概の町也、度々いふごとく、上方筋の城下にくらべ見れは、草葺の家七八分もあれば見苦しく、當主松平侯（飛驒守）御知行七万石の城下なれども、御知行不相應に在中あり、〇下略

地勢氣候

〔肥後國志（一國府）〕肥後國元始大略
按ニ、當國モ大國ナリ、尤海濱多ク、山中亦夥シ、阿蘇求麻ナドハ、各別ノ國ノヤウナリ、尤暖溫ノ國ナリ、
〔日本地誌提要（七十肥後）〕形勢　三面重嶺綿亘シ、東南殊ニ峻險幽邃、人跡到ラザル所多シ、西方天草群島錯峙シテ、肥前島原ニ對シ、肥筑裏海ノ門鑰ヲ爲ス、河流南北二疆ヲ破シ、支派州内ニ徧ク、水利亦多シ、然ドモ海濱淺斥ニシテ、碇泊ニ便ナラズ、土壤膏沃、民物繁庶、嘉穀ノ產、隣州ノ仰給スル所トナス、風俗樸直勇敢、氣候極暑九拾六度、極寒四拾壹度、

道路

〔日本實測錄（七街道）〕從肥後國坂梨驛高千穗至濱市
肥後國阿蘇郡坂梨村柵門　二里五町二間半　色見村（至前野原宿所一十丁三十六間、北極高三十二度五十一分、）　一里二十

六町三十一間、前島周廻三十四町五十一間、池島大周廻九町二十五間、池島小周廻八町、小島(同村、從二四峠一至二東峠一)一町一十二間、横島(合津村)周廻七町一十間、中島周廻二十六町一間、樺島周廻五町二十五間、瀬島周廻二十一町四十一間、ツウツ島周廻一町一十二間、黒島(同村)周廻二町四十一間、水島周廻八町五十四間、永浦島周廻二里五町五十九間、野釜島周廻三十町一十間、湯島(又呼二談合島一)周廻三十一町一十一間、藤九郎島周廻二町一十七間、木島周廻一十五町五十九間、塔ケ崎島周廻一十一町一十二間、八木島周廻二十五町八間、横島(大矢野村)周廻一十一町二十八間、藏々千速島(ザウザウセンソク)周廻四里九町四十一間、遠淵　赤島(樋島)　黒島(樋島)　楠島　小島(樋島)　裸島(樋島)　小島(高戸村)　小島(浦村)　千島瀬(牧島)　コンキョウ島　赤島(御所浦島)　二子瀬(高島)　インノ瀬　小島(下浦村)　竹島(下浦村)　モツトウ島　五色島　山ノ瀬　宮島　上マチ島　下マチ島　ワコ島大　ワコ島小　二子島大(下須島)　二子島中　二子島小　カヲ瀬　片島　鴨瀬　中瀬　沖瀬　頓宮　赤島(魚貫村)　海老島　宮小島　竹島(久留村)　小島(今富村)　小ケ瀬　大ケ瀬　烏帽子瀬(島浦村)　舟穿窟　長磯　ノフ瀬　ピリヤウ島　八千古島　恵比須島　タウロキ島　赤島([illegible])　村　小島(敷木村)　源藏島　堂島　野島　太郎島　大松島　鼠島(合津村)　鼠島大　鼠島小　小島　前島　小島　遠島(遠島)　小島中　見堂島　目ハル島　宮山島　小坊島　手取島　小高目島　唐船島　黒島(野釜島)　羽干島　茶臼島　小島(中村)　小横島　和田島　篠島大　篠島小　犀島礁

島撫島

八代郡　實洲　大鼠藏島周廻一十町三十間、苦竹洲周廻一里一十四町三十二間、白島周廻五町三間、高島周廻九町二十二間、大島周廻三十町四十二間、產島(從二西峠一至二北峠一)七町二十四間、遠洲　水島　小鼠藏島　カウコ島　加賀島　三ツ島大　三ツ島中　三ツ島小　辨天島　大島　大築島　小島(築島)

村、三十二度一十一分半、魚貫村、三十二度一十四分半、下田、三十二度二十分、崎津村、三十二度一十九分、高濱村、三十二度二十二分半、富岡町、三十二度三十一分、御領村、三十二度三十分半、町山口村、三十二度二十七分半、從橋浦村舟津至宿所、一十一町二十四間、從中田村街道歷一町田村至下田、三里一十二町四十四間、從魚貫村沿江至東福津浦、一十四丁三十六間、又沿江至四福津浦、七丁五十六間、從大江村至黑濱岬、一十一町四十五間、從一町田村街道歷福連木村至都呂々村、五里六丁三十七間、從富岡東岬至白崎、一十二丁五間、從二江村街道歷新休村至木戸馬場村、三里三十四丁二十五間。大矢野島、周廻一十五里四間、從中村長砂連至湯岬、四丁五十一間。竹島鐵島周廻一十三町一十八間、捐島、周廻二十六町四十七間、赤島、周廻一十三町二十六間、與市ヶ浦島、周廻一里一十四町二十六間、横島、大道村周廻二十三町三十九間、平瀬島、周廻二十六町二十四間、楠盛島、周廻一里八町五十四間、瓢簞島、楠盛島周廻六町三十二間、荻島、周廻二十一町五間、猿子島、周廻六町一十五間、牧島、周廻六里四町三十三間、屑島、周廻一十七町一十三間、瓢簞島、御所浦島周廻三町三十三間、黑島、御所浦島周廻一十七町四十三間、竹島、御所浦島周廻一里九町五十二間、五百島、從北岬至東岬、三町二十四間、ヨンカ島、周廻八町三十七間、インセ島、周廻三町四十三間、葛篭島、周廻六町七間、横島、大多尾村周廻一里八町四間、相津島、周廻四町四十六間、產島、周廻一里一十三町五十一間、赤島、久玉村周廻一十一町五十三間、戸島、周廻二十九町二十六間、下須島、周廻五里一町五間、牛島、周廻一十六町五十六間、寶ヶ島、周廻二十町四十七間、築島、周廻一十五町五十五間、黑島、牛深村周廻一十一町五十九間、大島、牛深村周廻二十九町五十間、桑島、周廻一十八町五十六間、ヒレ島、周廻五町九間、通詞島、周廻三十二町一十八間、大島、御領村周廻一十三町一十六間、龜島、周廻一十一町三十五間、二色島、周廻九町五十九間、上チヽワ島、周廻一十四町二十六間、下チヽワ島、周廻一十四町一十八間、黑島、須子村周廻五町二十間、竹島、大浦村周廻一十四町二十九間、釘島、周廻一里一十五町四十一間、ウツ島、周廻六町一十九間、高目島、周廻一十五町五十四間、樋合島、周廻三十三町四十六間、佛島、周廻

肥後天草下島牛深村　極高三十二度一十一分半、經度西五度三十九分半、從小倉（自豐州街道久根村渡海）間八十三里三十町半（內渡海、直徑六里一十八町、）　三百六十七里二町四十二間〇從東京

〔日本經緯度實測〕北極出地

肥後　八代　三二度三〇分〇〇秒　人吉　三二度一二分三〇秒

御所浦　三二度二〇分〇〇秒　熊本　三二度四八分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　肥後　熊本　西五度〇〇分〇〇秒

疆域

〔箕國夢物語下〕肥後州ニ移ル、此國東ハ日向、豐後、北ハ筑後、西ハ海濱也、西ノ海中ニ天草島有テ、富岡大矢野杯云土地有、氣候日向ニ同暖國也、

〔日本地誌提要七十肥後〕疆域　東ハ豐後、日向、南ハ日向、薩摩、北ハ筑後、豐後、西ハ海ニ至ル、東西凡壹拾九里、南北凡貳拾八里、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕肥後國葦北郡　實測　小路島周廻二十五町四十六間　遠測　二子島　湯子島　男島　裸島　赤島　黑島　松崎小島　帆柱石　木島　野々島　竹島　唐船碆　戸ノ島

柴島　天草郡　實測　御所浦（又呼下甑）周廻六里二十七町一十三間、　本郷三十二度二十分、

樋島（又呼上甑）周廻三里四町三十九間、　樋島村三十二度二十三分半、　上島周廻三十七里四町四十六間、　大道村葛崎三十二度二十三分、　棚底村三十二度二十四分、　宮田村舟津三十二度二十三分半、　湯船原村三十二度二十四分半、　下浦村三十二度二十五分、　楠甫村三十二度二十九分半、　姫浦村三十二度二十六分、（從姫浦村街道、歴眞木村、至湯船原村、三里四十一間、從湯船原村街道、歴棚底村、至下津浦、二里一十八丁五十一間、從姫浦村街道、至眞木村、一里二十七丁三十五間、）　下島周廻七十里一十一町五十八間、　楠浦村三十二度二十四分半、

大多尾村三十二度二十一分、　中田村三十二度二十分半、　久玉村三十二度一十三分、　牛深

位置

〔日本風土記 一寄語島名〕肥後（ヒゴ 非谷）

〔易林本節用集 下〕肥後（肥州）大、管十四郡、四方五日、材木柴薪饒、五穀魚鼈紙綿多、大中國也、

〔釋日本紀 十述義〕公望私記曰、案肥後國風土記云、肥後國者、本與肥前國合爲一國、昔崇神天皇之世、益城郡朝來名峯有土蜘蛛、名曰打猴頸猴、二人率徒衆百八十餘人、蔭於峯頂、常逆皇命、不肯降服、天皇勅肥君等祖健緒組、遣誅彼賊衆、健緒組奉勅到來、皆悉誅夷、便巡國裏、兼察消息、乃到八代郡白髮山、日晚止宿、其夜虛空有火、自然而燎、稍稍降下、著燒此山、健緒組見之、大懷驚恠、行事既畢、參上朝庭、陳行狀、奏言云云、天皇下詔曰、剪掃賊徒、頗無西眷、海上之勳、誰人比之、又火從空下燒山亦恠、火下之國、可名火國、又景行天皇誅球磨贈唹、兼巡狩諸國云々、幸於火國、渡海之間日沒夜暗、不知所著、忽有火光、遙視行前、天皇勅棹人曰、行前火見、直指而往、隨勅往之、果得著崖、即勅曰、火燎之處此號何界、所燎之火、亦爲何火、土人奏言、此是火國八代郡火邑、但未審火由、于時詔群臣曰、燎之火非俗火也、火國之由、知所以然、因此等文、可謂有二義歟、

〔日本書紀 二十二推古〕十七年四月庚子、筑紫大宰奏上言、百濟僧道欣惠彌、爲首一十人、俗人七十五人、泊于肥後國葦北津、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度（附里程）

肥後熊本（新一町目）極高三十二度四十八分、經度西四度四十七分、從小倉（自長崎街道山家、薩州街道）四十三里九町半、　三百二十六里一十七町二十八間（○從東部）

肥後人吉（九日町）極高三十二度一十二分半、經度西四度五十八分、從小倉（經熊本八代、沿球磨川）七十里四町、　三百五十三里一十一町五十七間（○從東部）

肥後天草上島（楠甫村）極高三十二度二十九分半、經度西五度一十九分、從小倉（自薩州街道日奈久村、渡海至天草姫浦、三里三十五町、街道經敷良木村）六十四里二十九町、　三百四十八里一町一十一間半（○從東部）

鎮戍

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國器仗 中略 肥前國 甲三領、横刀八口、弓廿張、征箭卅五具、胡籙卅五具、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一人置弩師事

右得太宰府解偁、肥前國解偁、凡器仗之感、以弩爲本、防衛之要、莫不由斯、望請停史生一員任弩師者、府加覆審、理誠可然、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使源朝臣多宜奉勅、依請、

元慶三年二月五日

肥後國

肥後國ハ、ヒゴノクニト云ヒ、舊クハ、ヒノミチノシリト云フ、本ト肥前ト一國ニシテ、火國ト稱セリ、西海道ニ在リテ、東ハ豐後、日向、南ハ日向、薩摩、北ハ筑後、豐後ニ界シ、西ハ海ニ至ル、東西凡ソ十九里、南北凡ソ二十八里、其地勢ハ、三面重嶺連亙シ、東南殊ニ峻險ヲ極ム、而シテ西ニ天草群島アリ、肥前ノ島原半島ト相對峙シテ内洋ヲ成ス、此國ハ古ヘ國府ヲ益城郡ニ置キ、玉名、山鹿、菊池、阿蘇、合志、山本、飽田、託麻、益城、宇土、八代、天草、葦北、球磨ノ十四郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、明治維新ノ後、益城郡ヲ上下二郡ニ分チ、山鹿、山本ノ二郡ヲ合セテ鹿本郡ヲ置キ、合志郡ヲ菊池郡ニ合セ、飽田、託麻ノ二郡ヲ合セテ飽託郡ヲ置キ、新ニ熊本市ヲ設ケ、熊本縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五 國郡〕肥後 比乃美知乃之利

〔饅頭屋本節用集 比 天地〕肥後 肥州

濕土ニ生得ルトハ云ナガラ、百人ニシテ九十九人如斯也、若一人不勇ノ人アルハ、珍敷事ドモ也、武士之風俗猶以如此ト可知也、雖然無風ニ勇ヲ行フガ故ニ、温和之志ヲ不知ナリ、サレドモ上ト而ハ下ヲ哀ミ、下ト而ハ上ミヲ敬ヒ、主君之爲ニ命ヲ捨ン事ヲ常ニ願ヒテ、志ス事士ヨリ國民ニ至マデ皆如斯ナレバ、百姓町人ト云ヘドモ、義理ヲ强フ、而身ニ雖遁罪科有テ、死ニ究ルト知ル時ハ、男女ニ不限致死事、露程モヲシマザル也、音聲ハ卑劣ナリ、風儀ハ信州ニ而習之スクナキ國風ナレドモ、人之一和スルコトハ信州ニコヘタリ、

〔日本鹿子十四〕同國肥前〇中名所之部

川上　佐賀郡のうち也、神所也、緣記草創神社の部に有之、此所北は山也、北より南へ流たる川也、此川上にわれはむれともとよみしも此所也、

松浦山　是をひれふる山とも云といへり、此山より五りばかり未申のかたに、呼子といふ所有、此浦里の向に島あり、社もあり、夫婦石とて、松浦さよひめ渡唐船をこひし大臣の石となりて御座也、呼子と云所、此島より中間十町計也、定家卿のうたに、

せみのはの衣に秋を松浦かたひれふる山の暮ぞ涼しき

鏡の宮（カヾミ）　松浦山のひつじさるのふもと也、北西海也、宮より十町ばかり西に、南より北へ浦へながれ入たる壁入の大河二瀨あり、松原川また、鏡の渡り、ゝりや川とも云也、〇中略

玉島川　浮島との間、一り計の松原也、此川神功皇后の金魚釣給ふ所也、あがり給ふ石いまにあり、此石より三町計の間は、今も鮎をつる也、此川は草野の大村と云所也、

近の浦（チカ）　上松浦のうちに有之、また下松浦に見るめの浦と云有、

末那板原　有明の沖（アリアケノヲキ）

名所多有之といへども、在所分明ならざるゆへ除之、

縮綿紬十八疋、貲布廿六端、御取鮑三百六十四斤、短鮑五百卅四斤、長鮑廿四斤、羽割鮑廿四斤、熬海鼠三百一斤十四兩、雜腊五斛、自餘輸絹、絲、綿、席、薄鰒、　庸輸綿、米、薄鰒、　中男作物、斐皮、藁薦、苫、防壁、韓薦、蒲薦、折薦、簀、胡麻油、荏油、鮨鰒、腸漬鰒、

〔毛吹草　三〕肥前

白太米(しらいだ)　土器(秀吉公御入之時、天下一ニ號ス、)　佐賀疊表　東刀(是ヲ東ノカヌ)　有馬鍋燒　唐津今利ノ燒物　具

綿木綿　敲擂踏皮　雲紙(うんし)　紙帳　紙衣(かみこ)　唐蒔繪　土圭細工　繪簾　繪簾　竹曲物　十露盤

丸子(地名)　白多葉粉　蜜漬生姜　佛手柑　マルメロ　蜜柑　久我梨(くがなし)　薄荷　蓮芋　水瓜

ボブラ　鳳連草(ニアルヘイノ用之)　五島鯣　宇留鮔(がん)　文鰩魚(とびうを)　鹽鯨　鯨油　若和布　松苔　海

鹽　楊梅皮　車輪　杉牛引物　槙木　二神筆　平戸串鮑　赤鼻魚(鯛ニ)　野茂小鯛　寺井海

苴　海月　海鼠(肥前ニテ鼠ト云)　シタチ　鱵　ムツノ魚(鯛ニ)　メクハリヤ(貝)　アゲマキ(貝)

〔官中秘策　五〕肥前國　十一郡〇中略

一人數六拾三万貳千九百貳拾三人

内　三拾四万千八百八拾七人男
　　貳拾九万千三拾六人女

〔吹塵錄　五　人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)〇中略

(御料私領)
一人數七拾壹万貳千六百五拾四人　高五拾七万貳千貳百八拾四石餘　肥前國

内　三拾七万三千六百八拾壹人男
　　三拾三万八千九百七拾三人女　〇中略

(弘化三丙午年)諸國人數調〇中略

(御料私領)
一人數七拾壹万三千五百九拾三人　高七拾万六千四百七拾石餘　肥前國

内　三拾六万六千九百八拾貳人男
　　三拾四万六千六百拾壹人女

〔人國記〕肥前國

肥前國ノ風俗、山陰ヲ合タルヨリ、豐前國ニタリ、男ニ體ノ時ハ、義ヲ知タヒルム色ナレ、誠ニ其國之

人口

風俗

里（元祿二年ヨリ松浦大膳昌以後領之）

田數石高

〔倭名類聚抄 五國郡〕肥前國 管十一（田萬三千九百餘町）
〔拾芥抄 中末本朝國郡〕肥前（上遠）十一郡（中略）（田萬三千四百六十二町）
〔海東諸國記〕肥前州 有温井二所、郡十一、水田一萬四千四百三十二町、
〔日本鹿子 十四〕肥前國十一郡、中上國、南北五日、（中略）知行高五十六万千四百三十石、
〔和漢三才圖會 八十肥前〕十一郡 高六十七万千四百三十七石
〔官中秘策 五〕肥前國 十一郡（中略）
一石高五拾七万貳千貳百八拾四石餘
〔吹塵錄 五人口及國高〕天保度御國高調（中略）
肥前國（御料私領） 一高七拾万六千四百七拾石七斗貳升三合壹勺九才六札

出擧稻

〔延喜式 二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻（中略）
肥前國正税公廨各廿万束、國分寺料三万三千三百九十四束、（當國壹岐島各一万六千六百九十七束）文殊會料二千束、府官公廨十五万束、衞卒料一万八千一百五束、修理府官舍料六千束、池溝料三万束、救急料四万束、俘囚料一万三千九十束、
〔倭名類聚抄 五國郡〕肥前國 管十一（中略）（正公各二十萬束、本穎六十九萬二千四百九十九束、雜穎九萬二千五百八十九束、）
〇按ズルニ、延喜式ニ據レバ、雜稻二十九萬二千五百八十九束ナリ、此書九萬ノ上、二十ノ二字ヲ脱ス、又本穎ノ四百九十九束ハ、應ニ五百八十九束ノ誤ナルベシ、

國產貢獻

〔延喜式 二十四主計〕肥前（中略） 右廿五國中綠（中略）
肥前國（行程上一日、中、下一日、）

建武四年九月十一日　沙彌（花押）（○一色範氏）

城戸六郎左衛門尉殿

〔深堀系圖證文記錄 二佐賀文書纂所收〕肥前國伊佐早庄戸石村内（矢上空閑民部入道妻女跡）三田地捌町、湯江大野田崎村内（孫次郎同小次郎入道同跡）四田地玖町、長瀨村田中内（時津四郎入道跡）五田地四町（島地已下各可依田數）地頭職等事、爲勳功之賞所宛行也、早守先例可致沙汰、仍執達如件、

建武五年二月九日　沙彌（○一色範氏）判

深堀彌五郎殿（○政綱）

〔正閏史料 二之一〕判

下　開田出羽前司遠長

可令早領知肥前國加世庄地頭兼預所職、同國高來東鄕内三會村地頭預所所職、筑前國頓野鄕

地頭職事

右任父出羽權守貞長法師（法名行案）建武二年二月三日讓狀、可領掌之狀如件、

康永四年十月廿七日

〔島原記 一〕天草島原一揆蜂起幷吉利支丹濫觴之事

寛永十四年丁丑ノ秋、朝ニハ東方ノ雲赤ク燒ケ、暮ニハ西方ノ雲燒ケ、又所々ニハ不時櫻ノ花咲キ、春色ニ相似タリ、是天地ノ災變也ト風聞ス、其比島原ノ庄ニ隱レ居ル吉利支丹ノ張本人、大矢野松右衛門、千束善左衛門、大江源左衛門、山善右衛門、森宗意ト云五人ノ百姓、元來肥後國天草ノ内、大矢野千東村ノ者也、（○下略）

〔慶應元年武鑑〕松平肥前守茂實（大廣間 從四位侍從）（○中略）　三拾五万七千石餘　居城肥前佐賀郡佐賀（江戸ヨリ）海陸二百九十里

建武元年六月十八日　左兵衛尉原清

〔後藤文書佐賀文書纂所收〕橘薩摩還空申、長島莊〇肥前杵島郡内下村田畠等、本物返事、帯沽券狀正文、今月十日以前可參決之由、相觸勇猛寺大進法眼、同寺住僧上座、長田五郎次郎、片峯女房、岩永左衛門入道并遠江住人五郎四郎等、可執進請文、若不承引者、被起請詞可被注進也、仍執達如件、

建武元年八月四日　目代（花押）〇源直英

塚崎後藤斎三郎殿

〔深堀系圖證文記録二佐賀文書纂所收〕大友左近將監〇貞載、肥前守護、狀

肥前國彼杵莊南方地頭御代官賢法申、深堀孫太郎入道明意〇時通、略同子息彌五郎〇政綱、已下輩、於當莊日皮鹿皮村、致放火刃傷已下狼藉由訴狀副具書如此、度々被仰了、如狀者、遂檢見云々、早相催彼杵大村太郎〇中略以下近隣輩、早莅彼所、止明意等濫妨沙汰、居御代官於莊家、且云實檢、且文云狼藉人等、不日注進之、且企參洛可明申候由、相觸交名人等、可執進散狀之狀如件、

建武元年十月十七日　左近將監

守護代

〔深堀系圖證文記録二佐賀文書纂所收〕和與

肥前國彼杵庄南かたのうち、みえくろさきりやう所、ならびにさんやでんはくざいけとうの事、〇中略

建武三年十一月十九日　源景家判

〔後藤古文書〕後藤六郎朝明申、肥前國神邊庄、古飯藤次郎入道妻尼了一跡内、松吉名田地貳拾町島地田數可依分限、地頭職事、爲勳功之賞宛行訖、早原田々中三郎相共可沙汰付下地於朝明、至擬殘者、被起請之詞、可被注申、仍執達如件、

本年貢米五十石綾被物一重七月□講料
近年所濟代錢二十貫文、但文永七年以來寄寺於蒙古人令無所濟、而弘安三年十五貫文濟之、
近年一向無之、〇中略
右就所見注進如件、凡近年背先例不被成返殘於執事公文間、御年貢濟否事委不存知之、
正中二年三月日　公文左衞門少尉大江花押

〔高城寺文書〕佐賀縣所藏文書肥前國河。副。莊内高城寺領米津土居事、被帶綸旨入部于莊家之間、可令存知之由承了、此上者不可有子細、且又此子細正地頭殿可申入候、謹言、
元弘三十月十二日　相明花押
高城寺方丈

〔高城寺文書〕佐賀縣所藏文書勅願寺肥前國高城寺領、同國河。副。南。北。莊内、極樂寺免用漆町五段、幷江上藥師堂免田壹町、河上仁王講免田五段北分方、米津土居外旱潟荒野壹所見四至寄進狀等南方分事、當知行不可有相違之由、内大臣殿〇吉田定房御氣色所候也、仍執達如件、
建武元年十一月十二日　前伯耆守花押
高城寺方丈

〔後藤家古文書〕肥前國墓。崎。莊梅山以下總領地頭職、赤保院内同撿斷本司職、同國杵島北郷□□□母村大鎮石、幷松浦西郷瀨□浦等、後藤又次郎光□當知行、不可有相違者、天氣如此悉之、
建武元年五月一日　式部大丞花押

〔河上山古文書〕二花押
肥前國鎭守河上社免田佐。賀。上。莊。田地七町内五丁五反、當社座主增惠當知行之由被聞食畢、任先例可被致御祈禱之狀如件、

莊

ナリ、貞胎ニ生野松原ト云フ名所アリ、又末村ニ至ルニハ九里、末村ヨリ太宰府ニ一里半アリ、
〔西遊雜記　六〕大村。〈つほうこより半里〉此所は豪家も見え、町も商人多し、船人もあしからず、能所と見ゆ、土人の物語には、鎌倉時代より、舊領の地にして、西の方は海上とは云ながらも、凡三十里、島數多く運上金夥しく、東の方地方は七里計、十二三万石の御食地と云り、其故にや武家〈井〉町もよく、領分惡からず、城は通りよりは見えず、土人に尋しかど、委敷は語らず、寨る所、館造のかき上の城なるか、旅人は家中へ入る事ならず、城邊は勿論の事也、此地に義大夫といふ豪家ありて、近江より大村の長者と稱して、海濱島々の漁家仕送せし家也、今は昔と違て衰へし事也、此邊の山には水氣有て、思ひよらざる山の頂迄も、田として稻作あり、谷々も水澤山にて、流れ多し、地の利は案外の者にて、畿甸の目利には及がたし、經濟に志ある人、其地々々の地利を見る事肝要なるべし、
〔吾妻鏡　六〕文治二年二月廿二日庚午、神。崎。御。庄。兵粮米事、可停止之旨、以帥中納言被仰北條殿之間、今日且任府宣、且相尋子細、可致沙汰之由、被示遣天野藤内遠景、其上被申關東云云、　廿八日丙子、被申京都條々、有其沙汰治定云云、〈中略〉○
一肥前國神崎御庄、可停止武士濫行事、可被仰天野藤内遠景之許者、
〔背振山修學院古文書　佐賀文書纂所載〕背振山申、肥前國神崎莊內櫛島田島半分事、所被返付也、存其旨可令下知給之由、被仰下候也、仍執達如件、
建武元年十二月二十七日　隼人正〈花押〉
謹上　了明禪師庵
〔東寺百合古文書　五〕最勝光院
注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事〈中略〉○
一肥前國松。浦。庄。　領家曾三品

建武三年十一月十日　承了判重義判也

〔太閤記十三〕就高麗陣掟條々〇中略

同年〇文祿元三月廿六日、將軍〇豐臣秀吉都を立て打せ給ふ、〇中略卯月五日六日比に行滿ぬ肥前國名。護。屋。は、昔年松浦さよ姫がもろこし船をしたひし湊也、此所を旅館と被相定、九州勢として搆侍りぬ、

〔西遊雜記七〕名。古。屋の地は、北は大海にして朝鮮に相對し、南は山連々として要害の地也、秀吉公朝鮮の御征伐の時、諸侯在陣ありし屋敷跡、今は悉く畑と成て其形なし、去かれども爰かしこに墻取のこりて、むかしを思ふ情あり、

〔佐藤元海九州記行〕長。崎。ハ、彼杵郡長崎甚左衛門照威君ガ領セシ、元龜天正ノ頃マデハ、町數五六十ニ過ザリシトゾ、今ハ八十餘町ニテ、石高三千石餘リ、家數一萬千六十五軒、男女五萬二千七百二人アリ、町年寄八人、一丁毎ニ乙名庄屋各一人、組頭二人ヅヽ、御奉行所二箇所、御代官高木氏居館ハ勝山町ニ在リ、

〔西遊雜記六〕佐。賀。に至る、神崎より三里、昔時龍造寺隆信の居城ありし城にて、平城ながら要害あしからず見ゆ、外見せしに主圖合結の圖に同じ、市中十八町、六千軒の地と云、草葺の小家も交りて見苦敷町ながら、長々敷一筋の町も有所也、

〔佐藤元海九州記行〕唐。津。城ハ、秀吉公ノ築カレタルニテ、石疊ヲ海ニ築出シ、甚ダ堅固確壯ノ城ナリ、町家モ四五千軒モ有ルベシ、頗ル賑ナル所ニ見ユ、城外ニ唐津浦アリ、虹ガ浦トモ稱シテ、勝景ノ地ナリ、東西二里、北ハ朝鮮國ニ對シ、海面ハ玄海灘ニテ、潮水至テ深シ、海濱ハ白沙ノ干潟ナルヲ以テ、日ニ映ジテ極テ奇麗ナリ、並松ノ青々タルト、白沙ト、夕日浪ヲ照ス紅影ト、虹ヲ見ルガ如キヲ以テ名ヲ得タリ、且又巾振山、浮竹山、玉島川、大島山等ノ名所アリ、浮竹山ハ頗ル此邊ノ高山ニテ、北方遙ニ朝鮮ノ山ヲ見ルト云フ、絶景極テ多シ、唐津ヨリ福岡城下ニ行クニハ、十里ノ行程

郡、馬渡分村、新龍村、西葉村、母浦、青故浦、養父郡、幸津村、杵島郡、鳥海村、上瀧村、河良村、八並村、廿路村、遠江村、大原村、築切村、廻里村、

〔肥前風土記 松浦郡〕賀周里、在郡西北、昔者此里有土蜘蛛、名曰海松橿媛、纏向日代宮御宇天皇巡國之時、遣陪從大屋田子、日下部君等祖也、誅滅時、霞四含不見物色、因曰霞里、今謂賀周里訛之也、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十一月丙戌、是日大將軍東人等言、進士无位安倍朝臣黒麿、以今月二十三日丙子、捕獲賊廣嗣於松浦郡値嘉島長野村、詔報、今覽十月二十九日奏、知捕得逆賊廣嗣、其罪顯露、不在可疑、宜依法處決、然後奏聞、

〔東寺百合古文書 一〕奉寄進　東寺　肥前國彼杵庄日宇村内千松寺事
右寺者、當村地頭兵庫助平幸純先祖草創之寺院也、然而恐於後代、且爲檀越之子孫、且爲住持之末資、不莫廢絶之畏、仍永代奉寄附於東寺畢、早被廻末寺之眷顧、被扶寺院之廢絶、永修練東寺之密教、不攝住他門之群徒、奉寄進狀如件、
元弘三年三月廿一日　住持沙門重濟(花押)

〔武雄後藤文書 佐賀文書纂所收〕肥前國長島莊中村一分地頭秦氏女代後藤五郎次郎貞明、爲抽合戰忠勤、令馳參御方、候了、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
建武三年三月六日
進上御奉行所　承了(花押)(高師泰)

〔深堀系圖證文記錄 二佐賀文書纂所收〕肥前國高木村一分地頭深堀三郎五郎時廣申軍忠事
今年三月下給將軍家御教書、令發向玖珠城、於三月廿七日、致抽合戰之忠節、時廣(若黨)被疵畢、此等子細御的文爲分明歟、然早下給御判、備弓箭面目、向後彌抽軍忠、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

●佐賀　二百九十里　●唐津　三百十一里　●平戸　三百十九里

●大村　三百五十里　●島原　三百一里半　●五島　福江 三百九十五里餘

○館山　三百十九里 平戸新田也　○鹿島　三百四十七里　○蓮池　三百十三里

○小城　三百十三里　○富江　三百八十八里 五島伊賀守　○諫早　サガ 諫早豊前

○多久　同上 一万石 多久長門　○深堀　同上 一万石 鍋島越後　□長崎　三百五十二里 大坂ヘ二百十九里

△同所　△天草　出ヘリ 三百廿里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕肥前　十一郡、千四百村、
（御料私領）高七十万六千四百七十石七斗二升三合一勺九才六札
基肄郡二十二村　養父郡二十三村　三根郡四十八村　神崎郡百九村　佐嘉百七十二村
小城郡百四十四村　松浦郡四百八十六村　杵島郡百十四村　藤津郡七十九村　彼杵郡九十一村　高來郡百十二村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名
肥前　松浦郡、唐房村、馬部村、高野村、唐川村、神田村、養母田村、稗田村、府招村、木留村、相知村、簗木村、厳木村、調川村、星鹿村、深月浦、平戸島、田助浦、根獅子村、五島、小値賀、相河村、道土肥村、似首村、漁生浦、福江、黄島、久賀島、椛島、小値賀島、宇久島、漁生島（自二黄島一至二漁生島一六島屬二五島一）、生属島、的山大島（又呼二大島一）、苞島、斧落島、海士泊島、上海馬島、貝立島、度島、飯盛島、向島、馬渡島、加唐島、神集島、鯨島、祖父君瀬、黒母瀬、佐嘉郡、八戸村、下飯盛村、上黒外村、快万村、高來郡、遠武村、深浦村、小豆崎村、諫早町、唐須村、土黒島、千々石村、有喜村、久山村、栗西村、大渡野村、破籠井村、鳶石村、神崎郡、乙南里村、目達原村、西石動村、上松山村、彼杵郡、面高村、陌刈平村、相神浦村、破津浦、陰尾島、獨空島、鹿島、苺島、三根郡、大豆津村、千束村、宋津村、藤津

村里名邑

執達如件、

建武四年七月十三日　武藏權守〇高師直在判

宮內少輔太郎入道殿〇一色範氏

〔深江系圖〕佐賀縣深江家系圖所收

貞泰 安富三郎、左近將監、守直松丸、宗種入道、 肥前國竹村〇竹村郷之內、肥後國岩崎村、筑後國富尾別府等之地頭職、 ― 泰治 安富岩崎孫三郎、字熊房丸 肥前國竹村郷之內荒野、蒲田郷之內中島、倉戸郷之內荒木、並肥後國岩崎村等之給地頭職、元弘三年、博多合戰之抽軍忠、延文四年八月、於筑後國大原、屬菊地武光、討死、

〔光淨寺文書〕佐賀縣光淨寺所藏 うりわたしたてまつる肥前國西島郷大分名のうち、大分孫三郎入道殿居屋敷きた口作壹段壹杖事、〇中略

元弘三年八月二十一日　沙彌唯善 花押

〔深江文書〕佐賀縣深江文書所藏 雜訴□□□□

安富次郎泰重所

有馬彥五郎入道道惠與安富次郎泰重相論肥前國高來東郷內深江村事

右當莊事、道惠雖申子細、爲舊領事之間、不及御沙汰、可存知之狀、下知如件、

建武元年八月二十九日　左衞門權少尉中原朝臣 花押

〔小代文書〕肥後 今月八日、菊池八郎以下凶徒等、於後國豐福原打出之間、肥前國野原西郷一方地頭小代八郎次郎兵衞尉重貞、屬侍所手、抽合戰忠、候訖、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年五月十五日　藤原經資

進上　御奉行所 御侍所

〔郡名一覽〕一肥前國　肥州　南北五日　拾壹郡

高五拾七万貳千貳百八拾四石壹斗貳升三合壹勺　千四百拾八ヶ村

田郷訛也、○中略

宮處郷在郡西南

同天皇行幸之時、於此村奉造行宮、因曰宮處郷、

〔肥前風土記藤津郡〕能美郷在郡東

昔者纒向日代宮御宇天皇行○景行幸之時、此里有土蜘蛛三人、兄名大白、次名中白、弟名小白、此人等造堡隱居、拒皇命不肯降服、爾時遣陪從紀直等祖穉日子、令以誅滅、於茲大白等三人、但叩頭陳己罪過、共乞更入奉主人、因曰能美郷、

託羅郷在郡東臨海

同天皇行幸之時、到於此郷、御覽海物豐多、勅曰、地勢雖少、食物豐足、可謂豐足村、今謂託羅郷、訛之也、

〔肥前風土記彼杵郡〕浮穴郷在郡北

同天皇行○景在宇佐濱行宮、詔神代直曰、朕歷巡諸國、既至平治、未被朕治、有異徒乎、神代直奏云、彼煙之起村、未猶被治、即勅直遣此村、有土蜘蛛、名浮穴沫媛、捍皇命甚無禮、即誅之、曰浮穴郷、

周賀郷在郡西南

昔者氣長足姬尊○神功欲征伐新羅行幸之時、御船繋此郷東北之海、艫舳之杙化而爲磯、高二十餘丈、周十餘丈、相去十餘町、突出嵯峨草木不生、加以倍從之船、遭風漂波、於茲有土蜘蛛、名欝比袁麻呂、救濟其船、因名曰救郷、今謂周賀郷、訛之也、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年三月十三日辛丑、肥前國御家人、安徳三郎右馬允政康所領事、任舍兄政尙政家之例、除所職、再安堵下文之外、私領可召上肥前國三根西郷內刀延名三分一之由、越前兵庫助奉行、

〔薩藩舊記前集十四入來院文書〕澀谷河內入道宗眞申、肥前國三根國郷地頭職事、任御下文沙汰付候也、依仰

日理鄕(在郡南)

昔者筑後國御井川渡瀨甚廣、人畜難渡、於茲纏向日代宮御宇天皇(○景行)巡狩之時、就生葉山爲船山、就高羅山爲梶山、造備船、漕渡人物、因曰日理鄕、

狹山鄕(在郡南)

同天皇行幸之時、在此山行宮、徘徊曰、望四方分明、因曰分明村、(分明謂佐夜氣志)今訛謂狹山鄕、

(肥前風土記三根郡)物部鄕(在郡南)

此鄕之中有神社、名曰物部經津主之神、曩者小墾田宮御宇豐御食炊屋姬天皇(○推古)令來目皇子爲將軍、遣征伐新羅、于時皇子奉勅到於筑紫、乃遣物部若宮部立社於此村、鎭祭其神、因曰物部鄕、

漢部鄕(在郡南)

昔者來目皇子爲征伐新羅、勒忍海漢人、將來居此村、令造兵器、因曰漢部鄕、

米多鄕(在郡南)

此鄕之中有井、名曰米多井、水味鹹、曩者海藻生於此井之底、纏向日代宮御宇天皇(○景行)巡狩之時、御覽井底海藻、即勅賜名曰海藻生井、今訛謂米多井、以爲鄕名、

(肥前風土記神埼郡)三根鄕(在郡西)

此鄕有川、其源出郡北山、南流入海、有年魚、同天皇(○景行)行幸之時、御船從其川湖來、御宿此村、天皇勅曰、夜裏御寢、甚有安穩、此村可謂天皇御寢安村、因名御寢、今改寢字爲根、

船帆鄕(在郡西)

同天皇巡狩之時、諸氏人等、擧落乘船擧帆、參集於三根川津、供奉天皇、因曰船帆鄕、(○中略)

蒲田鄕(在郡西)

同天皇行幸之時、御宿此鄕、薦御膳之時、蠅甚多鳴、其聲大囂、天皇勅云、蠅聲甚囂、因曰囂鄕、今謂蒲

養父郡　狭山　屋田　養父(也布)　鳥栖(止須)

三根郡　千栗　物部　米多(女多)　財部　葛木(加都良木)

神埼郡　蒲田(加萬多)　三根(美禰)　神埼(加無佐岐)　宮所(美也止古呂)

佐嘉郡　城埼(木佐岐)　巨勢　深溝(布加無曾○此郷次、高山寺本有防所郷)　小津(乎都)　山田(也萬多)

小城郡　川上(加波加美)　甕調(美加都岐)　高來(多久)　伴部(止毛)

松浦郡　庇羅　大沼(於保奴)　値嘉(知加)　生佐(伊岐佐)　久利

杵島郡　多駄　杵島(木之萬)　能伊　嶋見(志萬美)

藤津郡　鹽田(之保多)　能美

彼杵郡　大村(於保無良)　彼杵(曾乃木)

高來郡　山田(也萬多)　新居(爾比井)　神代(加無之呂)　野鳥(乃止利)

〔肥前風土記基肄郡〕姫社鄉。此鄉之中有川、名曰山途川、其源出郡北、山南流而會御井大川、昔者此門之西有荒神、行路之人、多被殺害、半凌半殺、于時卜求祟由、兆云令筑前國宗像郡人珂是古、祭吾社、若合願者、不起荒心、覓珂是古、令祭神社、珂是古即捧幡祈禱云、誠有欲吾祀者、此幡順風飛往、墮願吾之神邊、使即擧幡順風放遣、于時其幡飛往、墮於御原郡姫社之社、更還飛來落此山途川邊之田村、珂是古自知神之在、家其夜夢見、臥機(謂久都毘枳)絡梁(謂多多利)儛遊出來壓驚珂是古、於是亦識女神、即立社祭之、自爾已來、行路之人、不被殺害、因曰姫社、今以爲鄉名、

〔肥前風土記養父郡〕鳥樔鄉。(在郡東)昔者輕島明宮御宇譽田天皇(應神)之世、造鳥屋於此鄉、取聚雜鳥、養馴貢上朝廷、因曰鳥屋鄉、後人改曰鳥樔鄉、

彼杵郡

（肥前風土記）彼杵郡　鄕肆所、里四十　驛貳所、烽參所、

昔者纏向日代宮御宇天皇、（巡行〇略）誅滅球磨噌唹之時、天皇在豐前國宇佐海濱行宮、勅陪從神代直、遣此郡速來村、捕土蜘蛛、於玆有人名曰速來津姬、此婦女申云、妾弟名曰健津三間、住健村之里、此人有美玉、名曰石上神之木蓮子玉、愛而固藏不肯示他、神代直尋覓之、超山逃走落石岑、（里以北之山）即追及捕獲、推問虛實、健三間云、實有二色之玉、一者曰石上神木蓮子玉、一者白、白珠、雖比鑄秩、願以獻之、亦申云、有人名曰箆簗、住川岸之村、此人有美玉、愛之固秘、定無服命、於玆神代直追而捕獲問之、箆簗云、實有之、以貢於御、不敢愛惜、神代直捧此三色之玉、還獻於御、于時天皇勅曰、此國可謂具足玉國、今謂彼杵郡、訛之也、

（三代實錄十三清和）貞觀八年七月十五日丁巳、太宰府馳驛奏言、肥前國基肆郡人川邊豐穗告、同郡擬大領山春永語豐穗云、（中略）將擊取對馬島、（中略）彼杵郡人永岡藤津等、是同謀者也、仍副射手四十五人名簿進之、

高來郡

（肥前風土記）高來郡　鄕玖所、里廿一　驛肆所、烽伍所、

昔者纏向日代宮御宇天皇、（巡行〇略）在肥後國玉名郡長渚濱之行宮、覽此郡山曰、彼山之形、似於別島、屬陸之山歟、別在之島歟、朕欲知之、仍勅神大野宿禰遣看之、往到此郡、爰有人迎來曰、僕者此山神、名高來津座、聞天皇使之來、奉迎而已、因曰高來郡、

（日本書紀景行七）十八年六月癸亥、自高來縣渡玉杵名邑、時殺其處之土蜘蛛津頰焉、

（三代實錄十三清和）貞觀八年七月十五日丁巳、太宰府馳驛奏言、肥前國基肆郡人川邊豐穗告、同郡擬大領山春永語豐穗云、（中略）將擊取對馬島、（中略）高來郡擬大領大刀主（中略）等、是同謀者也、仍副射手四十五人名簿進之、

郡

（倭名類聚抄九肥前國）基肆郡　姬社　山田　基肆（木伊）　川上　長谷

杵島郡

〔松浦系圖〕綱――――久松浦源大夫判官松浦麿、始住肥前國下松浦郡、號松浦氏、

〔肥前風土記〕杵島郡　鄕肆所、里一十三驛壹所、

昔者纏向日代宮御宇天皇、○景行巡幸之時、御船泊此郡磐田杵之村、于時從船牂牁之穴、冷水自出、一云、船泊之處自成一島、天皇御覽詔群臣等曰、此郡可謂牂牁島郡、今謂杵島郡訛之也、郡西有湯泉出之巖、岸峻極人跡罕及也、

〔日本書紀〕七景行十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、○中略爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、覆阿蘇山也、

〔萬葉集抄〕三〔肥前國風土記〕○中略杵島郡縣南二里、有一孤山、從坤指艮、三峯相連、是名曰杵島、坤者曰比古神、中者曰比賣神、艮者曰御子神、一名軍神、動則兵興矣、鄕閭士女、提酒抱琴、每歲春秋攜手登望、樂飲歌舞、曲盡而歸、歌詞云、阿羅禮符縷、耆資熊加多塏塢、嵯峨紫彌苦區縒刀理我泥底、伊母我提塢刀縷、(アラレフルキシマガタケヲサガシミトクサトリカネテイモガテヲトル)是杵島曲

〔三代實錄〕十八清和貞觀十二年六月十三日甲午、先是太宰府言、肥前國杵島郡兵庫震動鼓鳴二聲、決之耆龜、可警隣兵、

〔公卿補任〕六條仁安二年

前太政大臣　從一位平清盛　五月十七日上表、辭太政大臣、并兵仗、(中略)肥前國杵島郡(中略)等、爲大功田傳子孫、

藤津郡

〔肥前風土記〕藤津郡　鄕肆所、里九驛壹所、烽壹所、

昔者日本武尊巡幸之時、到於此津、日沒西山、御船泊之明旦遊覽、繋船纜於大藤、因曰藤津郡、

〔三代實錄〕十三清和貞觀八年七月十五日丁巳、太宰府馳驛奏言、肥前國基肆郡人川邊豐穗告、同郡擬大領山春永語豐穗云、與新羅人珍賓長共渡入新羅國、敎造兵弩器械之術、還來將擊取對馬島、藤津郡領葛津貞津○中略等、是同謀者也、仍副射手四十五人名簿進之、

而投鉤、片時果得其魚、皇后曰、甚希見物、希見、此云梅豆羅志、因曰希見國、今訛謂松浦郡、所以此國婦女、孟夏四月常以針釣年魚、男夫雖釣不能獲之、

(日本書紀 九神功)四月〇九年甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河之側、於是皇后〇神功勾針爲鉤、取粒爲餌、抽取裳糸爲緡、登河中石上、而投鉤、祈之曰、朕西欲求財國、若有成事者、河魚飲鉤、因以擧竿、乃獲細鱗魚、時皇后曰、希見物也、希見、此云梅豆邏志、故時人號其處曰梅豆羅國、今謂松浦訛焉、是以其國女人、毎當四月上旬、以鉤投河中、捕年魚、於今不絶、唯男夫雖釣、以不能獲魚、

(海東諸國記)肥前州　州有上下松浦、海賊所居、前朝之季、寇我邊者、松浦與一岐對馬之人率多、又有五島、一云五多島、日本人往中國者、得風之地、

(續日本紀 十三聖武)天平十二年十一月戊子、大將軍東人等言、以今月一日、於肥前國松浦郡、斬廣嗣綱手已訖、〇下略

(續日本紀 三十四光仁)寶龜七年閏八月庚寅、先是遣唐使船、到肥前國松浦郡合蠶田浦、積月餘日、不得信風、既入秋節、彌違水候、乃引還於博多大津、〇下略

(續日本紀 三十五光仁)寶龜九年十月乙未、遣唐使第三船到泊肥前國松浦郡橘浦、〇下略

(萬葉集 五雜歌)遊於松浦河序

余〇山上憶良以暫往松浦之縣逍遙、聊臨玉島之潭遊覽、忽値釣魚女子等也、花容無雙、光儀無匹、開柳葉於眉中、發桃花於頰上、意氣凌雲、風流絶世、〇中略遂申懷抱、因贈詠歌曰、

阿佐里須流、阿末能古等母等、比得波伊倍騰、美流爾之良延奴、有麻必等能古等、

(日本靈異記 下)假官勢非理爲政得惡報緣第卅五

白壁天皇〇光仁之世、筑紫肥前國松浦郡人火君之氏、忽然死、而至琰广國時、王校之不合死期、故更歎還、〇下略

昔者此郡有荒神、往來之人多被殺害、纏向日代宮御宇天皇〇景行巡狩之時、此神和平、自爾以來無更有殃、因曰神埼郡、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

肥前國　神崎郡八日　請文廿一日〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉秀明〇下略

佐嘉郡

〔肥前風土記〕佐嘉郡　鄉陸所里十九　驛壹所、寺壹所、

昔者樟樹一株、生於此村、幹枝秀高、莖葉繁茂、朝日之影、蔽杵島郡蒲川山、暮日之影、蔽養父郡草橫山也、日本武尊巡幸之時、御覽樟茂榮、曰、此國可謂榮國、因曰榮郡、後改號佐嘉郡、一云、郡西有川、名曰佐嘉川、年魚有之、其源出郡北山、南流入海、此川上有荒神、往來之人、半生半殺、於茲縣主等祖大荒田、占問、于時有土蜘蛛大山田女、狹山田女、二女子云、取下田村之土、作人形馬形、祭祀此神、必在應和、大荒田卽隨其辭、祭此神、神歆此祭、遂應和之、於茲大荒田云、此婦如是實賢女、故以賢女欲爲國名、因曰賢女郡、今謂佐嘉郡訛也、

〔日本靈異記〕下產生肉團之作女子修善化人緣第十九

大安寺僧戒明大德、任彼筑紫國府大國師之時、寶龜七八箇年比頃、肥前國佐賀郡大領正七位上佐賀君兒公、設安居會、請戒明法師令講八十花嚴〇下略

小城郡

〔肥前風土記〕小城郡　鄉漆所里二十　驛壹所、烽壹所、

昔者此村有土蜘蛛、造堡隱之、不從皇命、日本武尊巡幸之日、皆悉誅之、因號小城郡、

松浦郡
下松浦郡

〔肥前風土記〕松浦郡　鄉壹拾壹所里二十六　驛伍所、烽捌所、

昔者氣長足姬尊、〇神功欲征伐新羅、行於此郡、而進食於玉島小河之側、於茲皇后勾針爲鉤、飯粒爲餌、裳絲爲緡、登河中之石上、捧鉤祝曰、朕欲征伐新羅、求彼財寶、其事功成凱旋者、細鱗之魚吞朕鉤緡、既

基肄郡

〔肥前風土記〕基肄郡　鄕陸所、(里十七)驛壹所、(小路)

昔者纏向日代宮御宇天皇(景行)○巡狩之時、御筑紫國御井郡高羅之行宮、遊覽國内、霧覆基肄之山、天皇勅曰、彼國可謂霧之國、後人改號基肄國、今以爲郡名、

〔地名字音轉用例〕霧ノ香ノ字ヲ添ヘタル例

き　基肄(肥前郡名)　肄音イ也

〔續日本紀(文武一)〕二年五月甲申、令大宰府繕治大野、基肄、鞠智三城、

〔日本紀略(嵯峨)〕弘仁四年三月辛未、大宰府言、肥前國司今月四日解偁、基肄團校尉貞弓等、去二月廿九日解偁、新羅一百十人、駕五艘船、著小近島、與土民相戰、卽打殺九人、捕獲一百一人者、(○下略)

〔三代實錄(淸和十三)〕貞觀八年七月十五日丁巳、大宰府馳驛奏言、肥前國基肄郡人川邊豐穗告、同郡擬大領山春永語豐穗云、與新羅人珍賓長共渡入新羅國、敎造兵弩器械之術、還來將擊取對馬島、(○下略)

養父郡

〔肥前風土記〕養父郡　鄕肆所、(里十二)烽壹所、

昔者纏向日代宮御宇天皇(景行)○巡狩之時、此郡佰姓、擧部參集、御狗出而吠之、於此有一產婦臨見御狗卽吠止、因曰犬聲止國、於此訛謂養父郡也、

〔續日本後紀(仁明十八)〕嘉祥元年八月壬辰、肥前國養父郡人太宰少典從八位上筑紫公文公貞直、兄豐後大目大初位下筑紫公文公貞雄等、賜姓忠世宿禰、貫附左京六條三坊、

三根郡

〔肥前風土記〕三根郡　鄕陸所、(里十七)驛壹所、(小路)

昔者此郡與神埼郡、合爲一郡、然海部直鳥、請分三根郡、卽緣神埼郡三根村之名、以爲郡名、

〔日本書紀(雄略十四)〕十年九月戊子、身狹村主青等、將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所嚙死、(別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所嚙死、)

神埼郡

〔肥前風土記〕神埼郡　鄕玖所、(里二十六)驛壹所、寺壹所、(僧寺)

	藤津	高來	彼杵	松浦
				梅豆羅紀　上近三　下近三
	葛津[illegible]			末羅古事
管十一	藤津(フヂツ)	高來(タカク)	彼杵(ソノキ)	松浦(マツラ)
同	同布知豆	同多加久	同曾乃岐	同万豆良
十一郡	同	同	同	同
	同知元國	同知元國	同知元國	同知國元
同	同(フヂツ)	同(タカク)	同(ソノキ)	同(マツラ)
同	同	同	同(ソノギ)[illegible]	同
同	同	同	同	同
同	同(フヂツ)	同(タカク)	同(ソノキ)	同(マツウラ)(マツラ)
十六郡	同	北高來　南高來	西彼杵　東彼杵	東松浦　西松浦　北松浦　南松浦

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

(郡名異同一覽)肥前

	六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治十二年郡	地誌提要	郡區編制
基肄	基肄		基肄	基肄	基肄	基肆 基肄	基肄	同	同	同	同
養父			養父	同	同	同	同	同	同	同	同
三根	嶺		三根	同	同	同	同	同	同	同	同
神埼			神埼	同	神崎	神崎 神埼	神埼	神崎	同	同	同
佐嘉		榮	佐嘉	同	同	佐嘉 佐賀	佐嘉	同	佐賀	同	同
小城			小城	同	同	小城 小城	小城	同	同	同	同
杵島			杵島	同	同	同	同	同	同	同	同

の御家に相續せられて、松の葉のちりうせず、まさきのかづらながくつたへなば、幾代の春秋をむかへさせ給ひなんと、萬民いはひ奉る、

〔川角太閤記三〕一肥前は、鍋島加賀守居城に被遣候、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕肥前國略○中小城平岐國府、

〔伊呂波字類抄比國郡〕肥前國略○中佐嘉サカ國府、

〔大日本史國郡肥前三十一〕按今佐嘉郡國分村有府中地、而和名鈔云、在小城郡、蓋初置佐嘉郡、後徙小城郡也、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕肥前國、管十一、略○註基肄 養父夜不 三根岑 神埼加無佐木 佐嘉 小城平岐國府、松浦萬豆良 杵島岐志萬 藤津布知豆 彼杵曾乃岐 高木多加久

〔延喜式二十二民部〕肥前國、上、管 基肄キイ 養父ヤフ 三根ミネ 神埼カムサキ 佐嘉サカ 小城ヲキ 松浦マツラ 杵島キシマ 藤津フヂツ 彼杵ソノキ 高來タカク 中略○ 右爲遠國、

〔皇國郡名志〕肥前國十一郡

基肄キイ 二ヶ村 筑界小郡

養父ヤフ 中原外二ヶ村 筑界小郡

三根ミネ 三ヶ村 國中小郡

神崎カンサキ 蓮池外二ヶ村 筑後川ニ添テ小郡

佐嘉サカ [佐賀] 外二ヶ村 東海ニ向

小城ヲキ ●牛津外一村 以上六郡一處ニ有、各小郡也、佐賀ニ並

杵島キシマ ●園木 ●塚崎 東ノ入江ヨリ北ノ入江ニ貫

松浦マツラ [唐津] ●大川原 ●名古ヤ ●志佐 ●田中 [平戸] ●丸サウ泊 五島 [福江] ●トミエ 平戸ハ一島也、五島ハ東島、西島、奈留島、狐島、福江也、唐津地ハ筑界ヨリ北海ニ出張、田平ノ地ハ唐津ト入江ヲ隔テ平戸ニ向、

藤津フヂツ ●加島 東海

彼杵ソノキ ●嬉野 ●長崎 [大村] ●長井 ●大浦 ●野母 西海ニ向テ南ニ張出ス

高來タカキ [島原] ●諫早 ●森 ●水月 ●早サキ 陸續ニテ一カ口如島ノ東ニ張出ス

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶六年四月庚午、外從五位下黄文連水分爲肥前守、

〔松浦系圖〕興榮 松浦肥前守

爲肥前國務、國之一列之諸士、來勤平戸云々、　此時擧城濕到、今號肥前掾、國司興榮是也、

〔肥陽軍記 二〕隆信公繼村中正統事

一天文十七年三月廿二日、龍造寺の正統豐前守胤榮公卒去せらる、法名主善無量寺、此の人大内氏の吹擧により、肥前國の守護代にほせられ、五千町を加封し、人普く仰ぎ申せし也、其虚中は故家門公の御娘也、嫡一人おはして世を繼ぎ給ふべき男子なかりき、是によつて長臣小川筑後守と、龍造寺播磨守など相議し、還俗の君を以、龍造寺の嫡流を繼がせ申べしとて、則迎かへとり申、胤榮公の後婦人にあはせまひらせ、御家督とぞ仰ぎ奉ける、同十八年、大内義隆に加冠をこふて龍造寺山城守隆信公と申、

〔肥陽軍記 四〕信生公家業御相續御心遣之事

一天正十二年三月廿四日、島原の御陣やぶれ、五州二島之太守龍造寺山城守藤原隆信公、五十七歳にして御戰死有しかば、○中略御嫡民部大夫政家公佐賀城にまし〳〵けれは、諸侍の拜趨もありしにかゝはらず、先君の御舍弟龍造寺長信、同信周、江上家種、後藤家信、龍造寺家晴、以下御一家歷々補佐し奉り給ふ、かゝりしか共、尫弱の事上下に変り、薩州より近日よせ來るべしなど云沙汰して、周章するやからも多かりけり、○中略かくて薩州とは御和平有けるが、天正十五年、關白豐臣家九州入御の時、政家公、信生公、高良山に御在陣有、則先陣を被仰付、薩州に入て舊怨をむくひ給ふ、其後政家公御病氣故、天下の御官仕不叶、小早川殿を以鍋島加州太守直茂公に信生公也御家を御相續あるべきよし御訴訟有、殿下聞召入られ、政家公は久保田へ御隱居まし〳〵けり、つら〳〵往事を思ふに、藤原の季喜西國御下向より、五百餘國をへて國司とならせ給ふ、是より鍋島

征韓ノ師ヲ興シ、行臺ヲ名護屋松浦郡ニ築キ、大ニ海内ノ侯伯ヲ會ス、波多親罪ヲ獲テ收封セラレ、寺澤廣高之ニ代リ、從テ唐津ニ治ス、關原ノ役鍋島直茂款ヲ東軍ニ納レ、故封ヲ保チ佐賀三拾萬石世襲、其支封ヲ小城直茂ノ子勝茂第二子元茂、蓮池勝茂第三子直澄、鹿島直茂第四子直朝トス、大村嘉前、松浦鎭信、五島玄雅純玄ノ子亦皆西軍ニ屬セズ、封疆舊ニ仍ル、元和ノ初、有馬直純晴信ノ子ヲ日向ニ徙シ、板倉重政ヲ島原ニ封ズ、後松平忠知正保中、唐津ノ寺澤堅高、狂疾ヲ以テ國除シ、後易封數氏、最後ニ小笠原長昌ヲ封ズ、元祿二年、松浦棟鎭信曾孫ノ其弟昌ニ新田壹萬石ヲ分ツ、凡十藩、德川氏長崎奉行ヲ置キ、外國通商ノ事ヲ管ス、王政革新、長崎府ヲ置、既ニシテ廢シテ縣トシ、又合併シテ長崎、伊萬里、二縣トシ、後伊萬里ヲ從シテ、更ニ佐賀縣ヲ置、

〔先代舊事本紀國造十〕松津國造

難波高津朝御世仁德、物部連祖伊香色雄命孫金連定賜國造、

〔國造本紀考五〕松津は、肥前國の地名なるべけれど、いまだ考得ず、度會延佳云、松津は杵肄の誤にて、肥前國基肄郡乎とあれど、姓氏錄に松津首と云あり、其を上田百樹が按に、津は浦の誤にて、松浦首なるべし、和名抄肥前國松浦郡萬豆良これなり、國造本紀に、松津とあるも同じく誤也、さて彼本紀に、松浦末羅國造あり、されども如此同國造を二つ擧たる例もあり、内山氏もまた杵肄の誤也と云れたるは、共に誤也といへるを、信友云く、百木主の說諾ひがたし、其は國造本紀にも、又拾芥抄、また姓氏錄の諸異本どもにも、松津とあれば、誤とは思はれず、分類年代紀に、松津神鏡宮也、肥前國誤松浦明神、仲哀天皇弟雅武王也とあり、思ふには松浦の内の一區なるべし、猶松浦明神の在所、また以前社地などあらむには、考知らるべしとあり、後に熟考べき事也、

〔先代舊事本紀國造十〕末羅國造

志賀高穴穗朝御世成務、穗積臣同祖大水口足尼孫矢田稻吉定賜國造、○中略

葛津立國造

志賀高穴穗朝御世成務、紀直同祖大名草彥命兒若彥命定賜國造、

〔籠頭舊事紀十〕葛津立國造　今肥前國藤津郡

値嘉郡、更ニ二郡ヲ設ケ上近下近ト云フ、値嘉島ノ後號、未ダ詳ナラズ何時ニ、本居宣長曰、今五島平戸等之地、庇羅郡平戸

〔日本地誌提要 六十九 肥前〕沿革　古ヘ國府ヲ佐賀郡ニ置ク、遺址今久知井村ニアリ　嘉祿ノ初、鎌倉將軍頼經、少貳氏ヲシテ州事ヲ管セシム、足利尊氏ノ反スル、少貳貞經等之ニ屬ス、肥後ノ菊池武重、獨リ勤王ノ師ヲ起シ、州ノ豪族有馬(高來郡)大村(彼杵郡)二氏等之ニ應ズ、又千葉胤貞下總ヨリ來テ小城郡ヲ領シ、皆征西將軍ノ節度ヲ受ク、正平中、菊池武光盡ク全州ヲ徇フ、南朝因テ守護ヲ兼領セシム建德ノ初ヨリ、足利義滿、今川貞世大内義弘等ヲ遣テ、九州探題トナシ、菊池氏ヲ擊タシム、州内望族松浦諸黨首トシテ之ニ附シ、千葉大村諸氏皆之ニ降ル、應永三年、澁川滿頼九州探題トナリ、綾部城ニ居リ(養父郡)本州ヲ管ス、正長元年、其從子滿直之ニ代リ、子敎直ニ傳フ、文明中、敎直卒シ、嫡孫萬壽立、猶幼ナリ、少貳政資之ヲ逐ヒ、綾部城ヲ取ル、明應六年、政資大内義興ニ敗ラレ、奔テ多久城(小城郡)ニ據リ、終ニ自殺ス、九年、澁川敎直ノ孫尹繁探題ニ補シ、勝尾城(基肄郡)ニ居ル、少貳資元(政資ノ子)大友政親ノ婿トナリ、恢復ヲ圖リ、遂ニ義興ト和シ、州守ニ任ズ、天文ノ初、澁川義長(尹繁ノ子)園部城(基肄郡)ニ居リ、委靡振ハズ、資元ト相合シ、大内氏ト戰ヒ、義長敗死シ、資元和ヲ講ズ、是ヨリ先、千葉氏稍强大ニシテ、小城佐賀杵島三郡ヲ領ス、後分レテ二流トナリ、互ニ相鬪グ、少貳冬尚(資元ノ子)ノ弟胤頼、千葉喜胤ノ嗣トナリ、小城ニ居リ、同族胤連ト兵ヲ構フ、永祿二年、佐賀ノ龍造寺隆信、胤連ヲ援ケ、冬尚、胤頼ヲ擊テ之ヲ殺シ、遂ニ州東七郡ヲ取リ、佐賀城ニ居リ、壓威日ニ振フ、平戸ノ松浦隆信、岸嶽ノ波多親等、皆款ヲ送ル、有馬義直四郡ヲ領シ(高來、藤津、彼杵、杵島、)獨リ之ニ抗ス、天正五年、龍造寺隆信ト戰テ大ニ敗レ、義直僅ニ高來一郡ヲ保フ、隆信遂ニ筑後ヲ略シ、肥後ニ入ル、十二年、隆信、島津氏ト戰テ敗死ス、子政家不肖ナリ、其臣鍋島直茂代テ事ヲ視ル、十五年、豐臣秀吉西征シ、政家ニ舊領七郡ヲ與ヒ、有馬晴信(高來郡日野江)大村喜前(彼杵郡大村)松浦鎮信(松浦郡平戸)波多親(同郡岸嶽)五島純玄(南松浦郡福江)等、封邑ヲ領スル故ノ如シ、政家尋テ封ヲ鍋島直茂ニ讓ル、文祿ノ初、秀吉

十三町二十八間（至串崎一里二丁四十三間）　名古屋村串ノ浦　一里一十三町五十六間　波戸村（波戸岬越十二丁四十一）　五町二六間　一里六町五十間（至深崎八丁一十二間半）　名古屋浦　一十八町一十二間　名古屋村野本川　五町二十一間半　同野本　一里三町四十二間　横竹村（至呼子浦江頭川徑測一十五丁七間）　二十六町五十五間（至ウシトカ浦一十丁一十五間）　呼子浦江頭川口　五町四十八間　同浦町　四町一十五間　同中町、三十三度三十二分半、　二里三十四町四十六間　湊村　二里九町五十間　佐志村（至街道六丁五十一間）　三十五町一十五間半（至妙見浦一十八丁二十七間）　唐津西濱　一十三町二十九間半　唐津松浦川口　九町三十九間半　満島（ミツシマ）虹ヶ濱　三十四町一十九間半　濱崎村虹ヶ濱　一十四町二十三間半　淵上村玉島川口　二十九町一十二間（至國界一十八丁六間）　筑前國怡土郡鹿家村小島

宿驛

〔延喜式　二十八兵部〕諸國驛傳馬　○中略

肥前國驛馬（基肄十疋、切山、佐嘉、高來、磐氷、大村、賀周、逢鹿、登望、杵島、鹽田、新分、船越、山田、野鳥各五疋、）傳馬（基肄驛五疋）

〔肥前風土記　松浦郡〕逢鹿驛（在郡北）

昔者氣長足姬尊（神功）欲征伐新羅行幸時、於此道路有鹿遇之、因名遇鹿驛、○中略

登望驛（在郡西）

昔者氣長足姬尊、到於此處、留爲雄裝、御臂之鞆落此村、因號鞆驛、

建置沿革

〔日本國郡沿革考　三西海道〕肥前　古火國、分爲前後、未詳在何時、已（火前國之名、見神功紀、）景行十八年、天皇至此國、遙見火光、尋其處不得、乃知非人火、以名國、上國管十一郡、千四百村、

基肄（二十二村　延喜式、拾芥抄作基肆、）　養父　二十三村　三根（四十八村　紀、讖縣、卽此地、略）　神崎　百九村　佐嘉（二百七十村）

小城（百四十四村　古國府）　松浦（四百八十六村　古事記、國造紀作末羅、古梅豆羅國、○中略）　杵島（百十四村　萬葉集書賀嶋、卽此地、肥前地志門、吉志麻、後世曰吉志見、）

藤津（七十九村　古葛津立國、見國造紀、）　高來（百十二村　紀高來縣、卽是、景行）

値嘉島（チカ）（古事記作知訶島、日本紀作血鹿島、萬葉集作知可、釋日本紀引風土記云、勅云、此島雖遠見猶知近、可謂近島、因曰値嘉、或曰一百餘近島、或八十餘近島、貞觀十八年三月、松浦郡庇羅

一十六町四十四間（至カセイ崎一十二丁四十七間）同フセイ浦　一里二十町四十間半（至大屋浦一里一丁二十七間、）同姫ケ浦　二里二十町一間半（至黒崎一十三丁二十四間）江迎村濱　一里一十二間　江迎村、三十三度一十九分、一里二町九間半　深月浦　二里一十五町四十五間　田平村青佐崎　二十五町二十八間　日野浦、三十三度二十二分、（至釜田浦徑測一十三丁六間）一里三十三町二十六間（至初崎一里一十六丁一十五間半）釜田浦　三里一十五町三十九間（至成川一里七丁二十三間半）御厨村西ノ宮（至街道六丁一十五間）一里二十二町一十七間　星鹿村カノチカ浦（至星鹿浦徑測三丁三十五間半）二十町六間　星鹿浦　一里一間（至潤原邊田浦十一町三十間、）一御厨浦、三十三度二十二分半、二里八町二十間（至札場一丁四十五間、）志佐村（滑川、至街道四丁四間）二十四町五十二間半　調川村大坪川口　一里一十四町四十間　今福浦　九町二十一間　今福村　二里四町四十五間（至トウセ岬二十九丁三十九間半）今福浦浴榮、二里三町二十九間半　楠久村大崎　一里二十六町三十九間半（至楠村、二十丁一十六間半）大里村白幡　九町一十二間半（至大里村小田、七丁五十一間半）同有田川口　三十二町二十一間　伊万里町（至ト町一丁三十三間）一里一十三町三十三間半　喜須村瀬戸（堅早村新田、至北濱徑測八丁二十九間半、）一里一十一町一十二間　同北濱　二十四町二間半　小黒川浦（至小黒川村宮所三丁五間、北林島三十三度一十九分半、）一里三十四町二十五間　煤屋村黒上岬（黒上山岬三丁四十四間半）一里一十六町三十七間半

辻村畑津浦　三十三度二十三分　二里五町二十九間半　杉野浦（至宮津坊主町、二[illegible]一十三間）一里二十一町三十三間半　浦越村（鷹山越二丁二十六間）一里三十五町一十六間半　田野村（至鴨崎村徑測二十三丁一十五間）五町四十間半　同高串浦、三十三度二十六分、二里七町三十二間半　星賀村濱（至星賀村宮所五丁五十二間）三十三度二十六分半、二里二十七町四十四間　納所村大崎　二十九町四間　同京泊浦　一里九町四十四間　楠崎村　三十一町五十六間半　本形村大串新田　一里一十六町一十七間　假屋村十倉（至大園村濱三丁四十四間）三町三十四間　假屋浦、三十三度二十八分半、三十三町四十七間半　大園村　二里二十町九間（至浪崎一里十二丁二十一間）今村濱（至今村宮所三丁五十四間）三十三度三十分、一里二

里三十五町二十九間　喜々津村　一里七町四十八間
高來郡貝津村川口（沿川至街道二十丁二十九間、）　四十九間半　彼杵郡三浦村溝陸（沿川至橋本、二丁五十七間、）　二里一十
一町五十二間　鈴田村白濱　二十九町二十七間　大村久原　三十三町五十三間　同本町
一町目　二里二十八町三十三間半（至本町二丁目二丁二十五間半）　郡村松原、三十一町一十八間　江串村
三十一町五十一間　千綿村　二十三町四十八間　彼杵村彼杵町　一里一十六町四十二間
同小音琴（至川棚村一十四丁四十五間）　一十五町三十九間　川棚村川棚町（沿川至川棚村、八丁四間、）　三十三町一十五
間　同三ッ越、三十三度三分、九町　川棚村ウシナシ（至西濱徑潮三丁二十一間）　二里六町二十七間　同
西濱　二里六町二十九間（至深浦一里二丁六間）　宮之村釜ノ浦（至北濱三丁）　一十七町四十一間半　同北濱
一里一十三町四十二間　早岐村廣田大手原　三十四町一十二間（至小森橋南濱三十三丁）　同小森橋北
頭　九町二間半　早岐浦、三十三度八分、一町五十四間　同宮ノ下　一十七町二十三間　日
宇村田ノ浦　一里三十一町七間　日宇村岡杉尾川口　一里三十町一間半　同日ノ原崎（日原崎[illegible]四丁五十五間）　一里一十二町三十六間半　同ヒックシ浦　一十五町五十一間　同飄石　一里二町四
十間　佐世保村川口（至街道六丁三間）　二里一十一町三十一間半　同川ノ谷（至小島浦徑潮二丁）　二里一十八
町四十七間半　松浦郡相神浦村俵浦（至安塔寺浦徑潮四丁四十二間半）　二里三十一町九間半（至甲崎一里一丁四十七間）
同安塔寺浦　二里二十八町三十九間　同小島浦　一里四町四十二間　小佐々村淺子岬　一
十二町三十三間　同立石山（立石岬潮四丁二十三間）　一里三十一町四十三間　同臼ノ浦　三里一十三町
二十五間半（至瀬ノ元岬一里二十三丁一十九間半）　同岩井岬　二里二町六間　同九艘泊　一里三十五町四十八
間　同神崎（神崎鼻二丁四十三間半）　一里八町一十九間　同杉ノ浦　一里一十三町三十七間半（至[illegible]津浦矢岳浦舟引場、一十四丁三十六間、）　同矢岳（至土井ノ本徑潮三丁九間）　一里五町五十間（至ヒトニ崎一十五丁三間）　鹿町村（[illegible]呼船之村）　土井ノ本
一里二十四町二十間　同長串浦　二里八間（至サイホンカ浦二十一丁二十三間）　同後カセイ浦（至カセイ浦徑潮三丁六間）

數里、五丁四十四間、　二町二間半　同大波戸（從鹿見島、至長崎、）沿海、通計二百四十七里一十六町三十七間半、

從肥前國長崎沿海至小倉

肥前國彼杵郡長崎大波戸　一十七町二十七間　浦上村山里馬込鄉　一十町五十七間　同新土居浦上川口（沿川至大石(?)居、四丁三十二間、）　三十町五十九間　浦上村淵水浦鄉　二十七町二十九間　同西泊鄉　二十町三十間　同神崎　二里二町四間（至瀬音崎、二十四丁四十四間半）　福田村船津　三里三十三町四十一間半（至福田村鰺瀬、一里三十二丁五十九間半、）　式見村螺崎　二里二十七町九間　三重村大雄下　三里一十六町四十四間　神浦村、三十二度五十三分、　二里二十三町四十間半　瀬戸村瀬戸浦　一十九町三十四間　同板ノ浦　一十一町二十七間　瀬戸村（至小瀬崎、一十丁）　二里一十七町七間　多井良村樽浦（至七ツ釜浦、福田浦、五丁二十五間半、）　一里一十四町七間半（至名串崎、一十二丁一十間半）　同七ツ釜浦　一里二十町三十間半　中浦村　三里四町六間　天窪村黒口崎　一里八町一十二間　西高村中村　二十五町五十六間　同後濱　三十二町一十八間　横瀬浦村寄船　二里二町三十九間半　同鉄龜浦　二里六町二十六間半　同水之浦　二里二十町三十一間　川內浦村伊ノ浦　三里九町五十間半（至魚釣崎、一十三丁四十七間、）　大串村ケヤ岬　一里二十六町三十間　同鵜上リ岬　二里六町八間　同下竹　二里二十六町六間（至串表崎、一里二十二丁三十二間）　大串村宮ノ浦　一里二十三町三十七間半　同龜之浦　一里三十五町四十二間半　形上村元越（至猪ノ越、石[illegible]、七丁三間）　二里三十二町二十六間　同小口浦　二里三十町五十二間半　同猪ノ越　一十八町二十三間　形上村　二里二十六町一十二間　長浦村、戸根原川口（至大石古屋敷、一里二十一丁五十八間半）　一里二十八町三間半　同大瀬崎、　二里二十四町一十七間　同大石古屋敷　二里四町二十二間　西海村田浦崎　一里三十三町二十六間半　崎津村市場（至長崎大黒町、一里一十八丁九間、又至崎津村會所、二丁三十三間、北極高三十一度五十分、從會所至長與村[illegible]、[illegible]三十町五十一間、）　一里一十町四十三間半　同鶴野岬　一里一十六町一十九間　長與村無量　四里八町二間　登岐力村　二

北名、徑澗一里十丁五十六間、一　六町九間　同江口島原江湊三十丁四間半　一里一十一町三十間半　島原村今村名湊　一里二十一町三十四間　安德村北名　一里四町二十四間　布津村至大崎名、四丁一十五間、　三里一十二町二十四間　南有馬村北岡名至古園名八丁三十六間　二十五町一十二間　同浦田名至原城趾二丁一十六間半　二里一十二町四十八間半　口之津村大屋名眞米至白濱徑澗九丁三十二間　九町三十三間　同口之津町、三十二度三十六分半、　一里三十四町一十七間半　同白濱　二十六町二十四間　加津佐村至水月四丁十八間　一　三町一十二間　同小松川口至岩吼庵濱徑澗四丁一十間　九町　同岩吼庵濱　一里三十三町三十三間半　南串山村牟田尻　三里三十一町三十一間半　小濱村里至温泉山瀬戸原一里一十七丁四十間、從瀬戸原至四西宮、一十七丁一十五間半、又從瀬戸原至小地獄、七丁三十四間　一十六町四十七間　小濱村北野名至千々石村船津徑澗一里一十七丁五十間　一里三十五町二十五間　千々石村船津名至島原萬町街道五里四丁二十八間半　一里一十一町五十四間　愛津村釜床　一里一十七町三十一間　有喜村、三十二度四十七分、至諫早路道分二十丁六間　三里一十町九間　至江浦村船津一里二十三丁四十四間　田結村魚見　一里二十一町四十三間半　彼杵郡矢上町　六町　同東房濱至東房瀬三丁三間　九町二十三間半　高來郡日見村日井切至街道二丁四十間半　二里一町一十四間　茂木村飯香浦、三十二度四十三分、　一里一十七町一十二間　茂木村、三十二度四十二分半、茂木江瀬七丁三十六間　又至長崎出來鍛治屋町、一里一十三丁四十二間、　三里二十一町二十六間半　爲石村、三十二度三十八分、　二里二十五町三十間　脇御崎村、又呼脇津、三十二度三十四分半　一里一十一町九間半　彼杵郡野母村後濱　二里二町五十六間半　野母村、三十二度三十五分、　二里三十三町二十八間從野母村前濱、四丁二十一間、　高濱村投上石　二里六町一十一間　深堀村三十二度四十一分半、　三十二町九間　土井頸村黒口浦至網代浦徑澗二丁五十七間　二十二町三十五間　同網代浦　八町一間　土井頸村鹿尾川口堀江至鹿尾五丁六間　二十一町一十七間半　小嘉倉村　一十四町六間　戸町村女神崎　一里一十一町二十五間　同大浦　五町五十九間　長崎本籠町新地唐物庫澗四丁三十間　四町一十五間　同江戸町出島、阿蘭陀屋

一十一町四十五間　大川野村　一里五町三十間　杵島郡桃川村宿山（歴本部村川古、至川上村、二里四十七間半、從川上至北方町、二十七丁五十二間、又從川上至河瓦村、二十四丁一十三間半、）　二町二十四間　桃川村、三十三度一十六分半、　一里三十四町三十六間　松浦郡今嶽村　一十二町二十間半　伊万里上土居町（至下町、三十三間、北極高三十三度一十六分半、）一十六町三十四間半　大里村有田川口　一町二十一間　間小屋田　三里三十四町六間（至大里村白幡、七丁五十一間半）　今福浦滑栄（ナメリハエ）　二十四町三十四間半　今福村　九町二十一間　今福浦　三十四町一十二間半　調川（ツキノカハ）村上瀬大坪川岸（沿川岸、八丁、至海、）　二十八町二十七間　志佐村志佐川岸　里一十四町三十九間　御厨村中野（至御厨浦札場、四丁四十八間半）　一里二十九町一十間　田平村米之内

（從鷹原至田平、）街道通計三十八里二町一十六間、●

從肥前國大里歴早岐至日野

肥前國松浦郡大里村小屋田　二里七町五間　曲川村黒郷（至早岐村、二里二十四丁二十七間半）　三十町一十二間　外尾村　三里二十六町六間　彼杵郡川棚村川棚川岸　三町三十九間　川棚村、三十二度五十八分半、　二里一十七町一十九間半　早岐村小森橋南頭　九町二十九間半　同早岐浦中町、三十三度八分、　一町五十四間　同宮之下　一十七町三十間　日宇村田之浦　一里四町三十三間　日宇村里（沿杉尾川、至海岸、三丁四十五間、）　一里一十町五十八間半　佐世保村、三十三度一十分半、　一里三十一町四十二間　松浦郡相神浦村中里（至相神浦川岸、一十八丁一十二間、從川岸至陸津浦、七丁二十一間、）　一里二十七町九間　佐々村（沿佐々川、至海岸、六丁四十間半、）　二里五町四十五間　江迎村二股川岸　一里二十二町五十三間半　田平村米之内　二十一町五十六間　日野浦

（從大里至日野、）街道通計一十七里五町五十三間、〇中略

從肥前山口歴六角及鹿島至濱町

肥前國杵島郡山口村郷松　三十三町二十間　六角中郷村川岸（沿六角川、至郷司給村住江、一里三十四丁二十七間、）九

（津町、至大波戸、一十丁五十六間半、從大波戸、歷五島町、至大黒町限、一十四間、）二十四間　同南馬町馬場（至天神社、五丁三間、）二十六間半

同嬉柏町、三十二度四十五分、（至諏訪明神社、五十七間半、）（從小倉至長崎、）街道通計五十七里一町二十間半（略〇中）

從筑前國木屋瀬歷肥前及唐津至名古屋（略〇中）

肥前國松浦郡淵上村玉島川口（從川至南山村神功皇后社、二十四丁四十七間、）五町五十七間　濱崎浦、三十三度二十七分　一町二十一間　濱崎村橋本町（至玉島川岸、六丁三十二間、）五町五十一間　同西町（至鏡村、二里六丁、至山本村、五十三）間半、　四町四十二間　同虹之松原　三十四町一十九間半　濱島　四町四間　同松浦川岸（渡松浦川、）（原三丁一十八間、）一　六町二十九間　同滿渡　七町一十間（至唐津新堀松浦川渡、直徑五丁三十一間、）　唐津大石町　八町三十二間　同中町　一町三十間　同刀町、三十三度二十七分、　二町三十六間　同西寺町（至西濱、五丁二十七間、）　三十六間半　同坊主町　三十四町四十二間　佐志村　三十一町五十七間　馬部村（至呼子津、一里三十一丁三十二間、）　一里三十町三十間　名古屋村野本　五町二十一間半　同野本川岸　一十三町一十二間　名古屋村、三十三度三十二分、　一町六間　同城山遠見番所前（至名古屋串浦、一十六丁三十三間、）八町四十二間　名古屋浦（從木屋瀬至名古屋、）街道通計三十里三十四町五十七間（略〇中）

從筑前國金原歷川上及小城至平田（略〇中）

肥前國神埼郡三瀬山村、三十三度二十六分半、　三里七町五十七間（至峯屋峠、一里一十九町三十九間、）　佐嘉郡西松瀨山村三反田、三十三度廿一分半、　一里一十九町　川上村都渡木（歷嘉瀨村、至北村市河原、一十八丁一十二間、）一町二十一間半、　同川上社前、三十三度一十九分半、　一十七町一十五間　東山田村立石（至北山村市川原、一里一十一町五十七間、）十　一里二十三町五十四間　小城郡岡村小城下町　三十四町（至小城陣屋前、三丁六間、）　楠里村（至今津町、二十八丁二十八間、）十　一里一十三町五十一間　別府村　二里二十二町三十三間　松浦郡嚴木村　一里三十五町四十八間　馮場村（屬加知村、）　一里三十四町一十五間　山本村　五十一間　養母田村（至唐津大石町、一里十九町三十七間半、）一　一里八町三十八間半　德末村（歷府招村、至今坂村、三里三十二丁四十七間半、）　二里

（従二小郡一至二大盥石神社一二十二町四十三間半、又従二小郡一至二卜岩田村一二十四丁一十一間、）一十一町三十六間半　田代宿三十三度二十三分、
一町二十七間（〇此間有二盤減一）二十七町二十間．養父郡轟木町　一里二十二町二十六間半　三根郡姫方村中原驛、三十三度二十分半、　一里一十四町四十二間　神崎郡吉田村　一十一町一間半　田手村　二十二町五十四間　神崎町、三十三度一十八分半、　一里一十九町三十二間　境原町　一里九町四十五間半　佐嘉郡佐嘉呉服町、三十三度一十五分、　五町五十八間　同白山町　二十町四十一間（至二佐嘉城大手前一二十丁一十四間）　佐嘉長瀬町本庄川岸（従二本庄川一至二中原村一、一里）町（至二北村駄市川原一一里二十八丁一十五間半）　一里三十二町一間半　小城郡牛津町（至二横町一二十五間、北極高三十三度一十五分半、）　一十一町五十間（一十八丁五十間、）
同新町　一里一十二町三十六間　杵島郡山口村郷松　一十四町九間　上小田町、三十三度一十三分、　一里二十四町三十三間　志久村邊田（至二北方町一二十五丁三十七間、従二北方一至二河頁村一三十五丁二間半、従二河頁一歴二武雄村一至二西山村一、三十二丁三十三間、従二西山一至二藤津郡下村一、二里二十二丁四十二間、）　七町一十二間　蘆原村新橋分、三十三度一十二分半　二里三十一町九間　藤津郡鹽田町　三町四十二間　馬場下村　二里八町二十七間半　下村　一十九町三十四間　嬉野村、三十三度六分、　二里三十町三十六間　彼杵郡彼杵村彼杵町、三十三度二分、　一町四十三間　同本町　二十三町四十八間　千綿（チワタ）村千綿浦　一十三町三十九間　同駄地　一十六町一十八間　江串村　三十一町一十八間　郡村松原　六町四十七間　郡村馬場、（又呼二今津驛一）三十二度五十八分半、　二里三十五間　大村本町四町目、三十二度五十四分半、　一町四十一間　同三町目　二町二十五間半　同一町目　一町五十三間半　同田町通　二里二十六町三十一間　高來（タカク）郡榮田村永昌宿　一十町二十六間　小船越村、三十二度五十分半　七町二十一間　同追分（至二船越村樓津一二十七丁四十四間）　四町一十六間　貝津村　三里八町一十九間（至二井樋尾峠一一里九丁五十八間）　彼杵郡矢上町　一十八町四十二間　高來郡日見村、三十二度四十五分、　一里一十八町二十一間（至二日見峠一一十八丁九間）　彼杵郡長崎新大工町（歴二出來鍛冶屋町一至二大浦一、二十一丁二十六間、）　二町一十間　同南馬町（歴二外

道路

見にくき家居変りなし、是等も國風と思ひ侍りき地の利如何と心付見しに、五穀は勿論、瓜西瓜をはじめ、菜類となるものは、何にても他國よりも出來立よく、菓物はいふに不及、草木のそだち迄もあしからぬ國也、然るに貧家の多きいかならんと所々にてさぐり聞しに、當國には大一といふて、籤引に似て博奕よりも甚暴敷事の流行せるよし、此故を以て風俗までも古しへにかはりて、民家の體如此といひき、又云ふ、運上にて領主より御免とも聞し、○中略肥前の國は、愛へも彼所へも入海ちまたの如く、海と海との方を僅計切ぬきなば、舟通しの出來すべき所見ゆ、天へ上りて一眼に見おろしなば、地圖も委敷、入海々々の樣も正敷記すべきに、一度位の通行にては、此國の地利はまりがたく、十にして其一を記す也、海は中國筋の入江よりも深し、

（佐藤元海九州紀行）抑當國前〇[illegible]ハ、鎌倉時代ヨリノ舊領ニテ、西ハ海上トハ雖ドモ、小大ノ島數甚ダ多ク、凡ソ三十里程ノ間ニ散在シ、魚鹽ヲ始メ、物產ノ利頗ル大ナリ、東方陸地ハ五十町路ニテ、方七八里、土地亦極テ膏腴ナリ、且又當國ノ山ニハ水氣甚多ク、山頂マデモ水田ヲ開キ、稻ヲ作ルベシ、白堊赤堊ヒ多キヲ以テ、陶器ヲ燒キ出スモ極テ便ニ、石炭膏風多シ、薪炭ニ究スルノ患ヒ無シ、實ニ富豐ナルベキ國ナル哉、

（日本地誌提要肥前六十九）形勢　東北山ヲ負ヒ、東南河ヲ帶ビ、地勢二支ヲ分チ、西南海ニ突出ス、其西北一支、平戶島トナリ、五島群嶼ニ連ル、其南方一支、更ニ兩臓ヲ分チ、左ニ鯛浦ヲ抱キ、右ニ佐賀灣ヲ擁ス、灣ノ北方平衍、土壤肥沃九州ニ冠タリ、物產豐饒民俗巧慧頗ル稼穡ニ流ル、氣候極暑九拾六七度、極寒四拾度、

（日本實測錄七道）從豐前國小倉街道、至長崎、二中略

肥前國基肄郡宮浦村至三筑後國御井郡二十六丁三十間　二十八町四十八間　田代宿轟元寺町至三筑後國御原郡小郡町、十三丁二十間、

地勢
地味

略遂著等保知駕島、色都島矣、

〔三代實錄 清和二十八〕貞觀十八年三月九日丁亥、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平起請二事、○中略其二事、請令肥前國松浦郡庇羅値嘉兩鄕、更建二郡、號上近下近、置値嘉島、曰、撿案內、元有九國二島、至于天長九年、停多褹島隷大隅國、是只貢百領鹿皮、費三萬六千餘束稻之故也、今件二鄕、地勢曠遠、戶口殷阜、又土產所出、物多奇異、而從委郡司、次令聚斂、波上之民、厭私求之苛、切欲貢輸於公家、總是國司難巡撿、鄕長少權勢之所致也、加之地居海中、境隣異俗、大唐新羅人來者、本朝入唐使等、莫不經歷此島、府頭人民申云、去貞觀十一年、新羅人掠奪貢船絹綿等、其賊同經件島來、以此觀之、此地是當國樞轄之地、宜擇令長、以慎防禦、又去年或人民等申云、唐人等必先到件島、多採香藥、以加貨物、不令此間人民觀其物、又其海濱多奇石、或鍛錬得銀、或琢磨似玉、唐人等好取其石、不曉土人、以此言之、不委以其人之弊、大都皆如此者也、望請、合件二鄕、更建二郡、號上近下近、便爲値嘉島、新置島司郡領、任土貢、但其俸料、事定正稅公廨之間、令兼任肥前國權官、於是公卿奏議曰、臣聞、聖人濟世、以便物爲先、明王馭民、以制宜爲貴、今行平所請上件二條、漸欲省風浪運漕之費、存封疆任土之規、有以辭矣、臣等伏以、○中略合兩鄕號一島事、苟謂利公、豈期膠柱、請隨其所陳、將以改張、謹錄事狀、聽天裁、奏可、

〔北條九代記 下〕弘安四年、今年七月、大元賊徒自宋朝高麗、數千艘船寄來、數日漂對馬海上、而後群集肥前國鷹島之處、同卅日夜、閏七月一日大風、賊舟悉漂倒死者不知幾千萬、

〔易林本節用集〕肥前、肥州 上、管十一郡、南北五日、土厚種生百倍、桑柘農衣厚、魚鳥備食、中上國也、

〔西遊雜記 六〕肥前は、南方は海濱までも廣々とせし田所にて、上々國の風土也、北は山連りて、筑前の國につゞけり、九州にては肥前の國は上方とも稱し、見分せる所、風土上國と見ゆれども、民家の模樣宜しからず、宿々間の町々にても、家宅甚見苦敷、神崎といふ驛は、此邊の市中にて、神崎千軒とむかしよりも稱せる町にて、商人も數多にて、家作も大概よき所なれども、間々貧家の至て

〔肥前風土記松浦郡〕大家島〈在郡西〉
昔者纏向日代宮御宇天皇〈景行〉○巡幸之時、此村有土蜘蛛、名曰大身、拒皇命不肯降伏、天皇勅命誅滅、自爾以來白水郎等、就於此島造宅居之、因曰大家島、島南有窟、有鍾乳及木蘭、廻縁之海、鮑、螺、鯛、雜魚、及海藻海松、多之、
値嘉島〈在郡西南之海中、有烟火三所、〉
昔者同天皇巡幸之時、在志式島之行宮、御覽西海、海中有島、烟氣多覆、勅遣陪從阿曇連百足令察之、爰島有八十餘、就中二島、島別有人、第一島名小近、土蜘蛛大耳居之、第二島名大近、土蜘蛛垂耳居、自餘之島並人不在、於玆百足獲大耳等奏聞、天皇勅且令誅殺、時大耳等叩頭陳聞曰、大耳等之罪、實當極刑、萬被戮殺、不足塞罪、若降恩情得再生者、奉造御贄、恒貢御膳、即取木皮、作長鮑、鞭鮑、短鮑、陰鮑、羽割鮑等之様、獻於御所、於玆天皇垂恩赦放、更勅云、此島雖遠猶見如近、可謂近島、因曰値嘉島、則有檳榔、木蘭、枝子、木蓮子、黑葛、箟篠、木綿、荷莧、海則有鮑、螺、鯛、鯖、雜魚、海藻、海松、雜海菜、彼白水郎富於馬牛、或有一百餘近島、或有八十餘近島、西有泊船之停二處、一〈一處名曰相子之停、應泊二十餘船、一處名曰川原浦、應泊一十餘船、〉遣唐之使、從此停發、到美彌良久之濟、〈即川原浦之西濟是也、〉從此發船指西度之、此島白水郎容貌似隼人、恒好騎射、其言語異俗人也、

〔儀式十〕十二月大儺儀〈中略〉○事別天詔久、穢久惡伎疫鬼能所々村々爾藏里隱布留乎波、千里之外、四方之堺、東方陸奧、西方遠値嘉、南方土左、北方佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氐、〈下略〉○

〔續日本紀十三〕天平十二年十一月戊子、大將軍東人等言、〈中略〉○以今月三日、差軍曹海犬養五百依發遣、令追逆人廣嗣之從三田兄人等二十餘人、申云、廣嗣之船、從知駕島發、得東風往四箇日、行見島、船上人云、是耽羅島也、于時東風猶扇、船留海中、不肯進行、漂蕩已經一日一夜、而西風卒起、更吹還船、〈中略〉○

白瀬(相神浦村) 竹ノ子島(相神浦村) 鯨島(同上) タコ頭島 母島 ウチ瀬(高島) 下上ヶ瀬 小柱岩 西柱岩 平瀬(黒島) 小島(島頭島) トコイ瀬 千鳥島(牧島) 篠瀬(竹島) コウゴ瀬 千鳥瀬(小佐々村) 琵琶瀬(同上) バッチ瀬(小佐々村) 横瀬ヶ島 石白瀬 三體島 浮瀬(前島) 平瀬(ヒトニ島) 六ッ瀬 地中瀬(鹿町村) 沖中瀬(鹿町村) 小島(犬島) 一杯島 烏帽子小島(田島) ピクニ瀬 烏帽子瀬 白島 障子島 松瀬 メノ瀬 鯨石(深月浦) 白瀬(平田村) 大田助瀬 小田助瀬 裸瀬(紐差村) 御神島 ヲイトリ島 無名島(浦志自岐村) 黒碆(頭浦) 千鳥瀬(浦志自岐村) 早フク瀬 小アシカ島 瀬子島 丸子島(糸島村) 長江岩 ニルギ瀬 沖瀬(根獅子村) セノ平瀬 カブシ碆 獅子小島 皿岩 平瀬(生月島) 鯨島(生月島) 鵜瀬(古江) 鯨瀬(同上) 裸瀬(同上) 大瀬(同上) ギワン瀬 中高瀬 五貫島 加戸島 立瀬(平戸村) 杵瀬(横島) タカゾリ島 羽島(度島) 貝瀬(大島) 小島瀬(大島) 小二神島 カラウ瀬 廣瀬(日野浦) 兀島 長ス島 杓子島(佐志村) ホケ島(佐志村) 干切島(同上) 岩島(同上) 車瀬 松瀬(調川村) 小島(同上) 佛島(鷹島) コボ瀬 貝瀬(鷹島) 笠瀬(飛島) 五郎島 赤岩(福島) 松島(福島) 立木島 兄弟島 小島(福島) 新次郎カ島 トウノ瀬 横島 千理島 地ノヒサゴ瀬(福島) マキ子瀬 沖ノヒサゴ瀬(福島) 小タキ瀬 小瀬(カツラ島) 島瀬(同上) 辨天島(久原村) 團子島 小島地(福田村) 七ツ小島 赤島(福田村) 小島(同上) 雀島(福田村) 釜蓋瀬(同上) 日淵瀬 音ヶ瀬 ヘタノ赤瀬(満越村) 沖ノ赤瀬(同上) 沖小島(高串村) 帆立瀬(田野浦) 小松島(田野浦) 大松島(同上) 赤瀬(納所村) 木瀬 烏帽子瀬(向島) 瀬ヶ瀬(同上) 平瀬(馬渡島) 雷瀬、大瀬(馬渡島) 小竹島(寺浦村) ウケヤ島 王子島 クサ島 鳥之巣 裸瀬(假屋浦) 離疊 ヒナゴ瀬(假屋浦) ワクーウ瀬 中郷(濱野浦村) 平瀬(同上) 小松島(松島) セ瀬 カキ瀬(松島) ツシマ島 ユ、ノヲ瀬 黒瀬(加唐島) 臼島(呼子島) 女瀬(小川島) 尼形瀬 平瀬(呼子島) 兜岩(神集島) 弓張岩 鎧岩 山姥瀬 惠比須岩(妙見浦) 松浦岩

立瀬地　大毛通瀬　枇榔島　島原瀬　切瀬　大白瀬　小白瀬　鯨瀬津多真島　山
見瀬中　山見瀬小　布瀬琴石村　二子瀬地琴石村　二子瀬沖琴石村　苫瀬　美良島　立神瀬玉ノ浦
立瀬島山島　里瀬島山島　倉小島　二合半島　タハミ瀬　宮小島　鴨瀬一富船浦村　鴨浦二　鴨
瀬三　鴨瀬四　鴨瀬五　苫小島　小島土岐首村　赤小島　土岐首村　弁天小島奥津村　本能瀬　尻小島
大方村　小島六方村　観音小島同上　鵜瀬六方村　島小島柴嶋島　干切岬同上　黒瀬久留島　飛小島
久留島　中ツロ瀬中　中ツコ瀬中　中ツコ瀬小　三ツ瀬大　三ツ瀬中　三ツ瀬小　池ノ小島
平瀬樺島　草島　弁天島奈留島　小島同上　ノウ瀬　ケブタ瀬　沖瀬奈留島　先末津島　七
ツ山小島　島小島　セキカ島　釜蓋瀬　ヒツロ瀬　黒瀬若松島　沖ノ瀬同上　地深瀬同　セ
シリ瀬　昆布瀬　島帽子瀬有福島　天神島漁生島　鵜瀬若松島　彌五郎蹔上島　本久島　コウブ
ツ小島　地小島飯野浦村　沖小島同上　笹ノ瀬同上　土居小島　ミサコ瀬男島　カナワ瀬　平
瀬濃之浦　鍋島　裸瀬濃之村　タノム瀬　女瀬観音島　百貫瀬同上　ツボケ島　錠瀬立串村　ミサ
コ瀬津和崎村　小島同上　裸島津和崎村　丹瀬　堂瀬　松ケ輪一ツ瀬　マヽコ瀬　長瀬浦村　黒瀬浦
村　鋸島　祖父君瀬　源五郎島　中瀬有川村　小瀬同上　白瀬有川村　前小島同上　中小島同
上　沖小島同上　百貫瀬岩瀬浦村　女瀬同上　野首瀬　男瀬岩瀬浦村　ヒル瀬　高瀬岩瀬浦村　鹿瀬
三ツ瀬岩瀬浦村　鵜瀬上浦村　立瀬上浦村　平瀬岩瀬浦村　見付島　長瀬奈良尾村　中瀬同上　鯛瀬同上
ケブク島野崎島　黒達島野崎島　裸島六島　三ツ瀬小値賀島　ホケ島同上　貝瀬小値賀島　平島同上　ヒ
リヤウ島同上　鹿島同上　帆上瀬小値賀島　廣瀬同上　ウケヤ島　十瀬　相瀬宇久島　鴨瀬同上
二ツ瀬同上　古志岐瀬大　古志岐瀬中　古志岐瀬小　深瀬宇久島　黒母瀬又呼コロモ瀬　鶏トノモ瀬重
黒島・瀬崎・五島島　鞍懸島相神浦村　ワチカ島同上　大日島　トシヤク島　小島船越島　割石島　深代島
チタキ島　ワイタ島　小島船越島　大瀬同上　平瀬同上　小島島黒島　帆瀬相神浦村　蛇島小島

坊ケ崎ニ、ミナ島、福島周廻八町三間半、タケクラベ島、周廻三町四間、鵜瀬福島周廻三町六間半、カツラ島、大福島周廻一十三町一十九間、男島、周廻二町三十四間カツ。ラ島、小福島周廻二町一十三間ニ六、小島、久原村周廻六町一十九間、飯島、周廻四町四十二間、針島、周廻一十一町二十七間、七ツ島、一周廻三町三間、七ツ島、二周廻八町一十八間、七ツ島、三周廻五町一十六間七島、四周廻三町四十六間半、七ツ島、五周廻四町三十七間、七ツ島、六周廻三町四十五間、七ツ島、七周廻二町二十一間半、小島七ツ島周廻二町一十五間、金剛島、塩屋村周廻二十町三十六間、金剛瀬、塩屋村周廻三町一十五間、沖小島、福田村周廻三町二十五間、釜蓋瀬福田村、従西岬至東岬、四十八間、地小島、福田村、従北岬至南岬、三十間、茅島、周廻三町一十四間、雀島福田村、従北岬至南岬、三十六間、汐井崎島、又呼塩入島周廻三町一十四間、満切島福田村周廻四町二十間、竹ノ島柴屋村周廻三町二十九間大島、柴屋村周廻三町五十六間沖島、柴屋村周廻三町五十二間半、大瀬島、畑津岬周廻二町三十六間、小島、杉之浦周廻六町五十三間、帆立島、又呼帆立山周廻一十七町五十八間半、島山、周廻一十町一十四間、牛島、入野村周廻四町五十三間、向島、周廻二十町一十八間、馬渡島、周廻二里一十六町一十六間、竹之子島、鶴牧村周廻一十一町三間、丸瀬島、寺浦村周廻七町三十六間、ワナレ島、周廻一十一町一十八間、佛島、周廻八町四十六間、藤島、周廻三町三十一間、幸福島、周廻二町。二間、三島、仮屋浦周廻二町三十九間、辨天島、横竹村周廻一町一十九間、二子島、横竹村周廻一町一十三間、鷹島加部島、従北岬至南岬、四町、加部島、又呼田島周廻二里二町三十二間、松島、加唐島、従西岬屋盤至北岬二十四町三十六間、従西岬至縫、徑瀬五丁一十八間、加唐島、周廻二里一十四町四十九間、従江口泊江至大泊浦、三丁三十六間、小川島周廻三十二町四十六間、従納屋場至竹之岬、三丁四十二間神集島、周廻一里一十一町二十七間、従西岬至宮崎、七丁一十二間、大島、唐津村周廻一里一町五十六間、鳥島、同上周廻五町五十間、高島、鏡村周廻二十七町二十一間、遠瀬　トノモ瀬　トビ岩大　トビ岩小　館瀬　平瀬山崎村　立瀬大　立瀬中　立瀬小

周廻二町四十四間、下枯木島、周廻一十二町一十五間、トヤクノ島、周廻二十一町九間、高島、〈又呼二御下高島一〉周廻二十六町二十五間、中ノ島、〈又呼二中江ノ島一〉周廻一十二町一十一間、三島、〈浦志目崎村〉周廻三町四十八間、頭ノ島、周廻一十六町四間、上海馬島、周廻一十四町二十六間半、下海馬島、周廻九町一十二間、眞立島、周廻七町二十九間半、竹ノ子島、〈糸尾村〉周廻五町四十八間、立場島、周廻六町三十八間、竹ノ子島、〈鍋子村、從二東崎一至二西崎一〉三町二十一間、中江野島、〈從二東崎一至二西崎一〉四町二十四間、田原島、〈又呼二觀音島一〉周廻三町五十七間半、唐子島、周廻二町三十七間、小島、〈平戸村〉周廻二町一十間、兀〈ハゲ〉島、周廻二町三十二間、度島、周廻三里三町五間、〈瀬崎里三丁五十間、從二中瀬浦一至二イア田一、徑測六丁九間、〉横島、〈度島〉周廻一十四町一十九間、飯盛島、周廻九町一十九間、大小島、〈大島〉周廻六町二十五間、二神島、周廻一十八町六間、横島、〈釜田浦〉周廻二十町二十四間半、小島、〈御厨村大崎〉周廻一町四十五間、松島、〈寶亀村〉周廻六町三十三間、青島、周廻一里一十八町五十七間、伊豆島、周廻七町四十九間、松崎島、周廻五町二十四間、ヒキレ島、〈志佐村〉周廻一町一十五間、長崎島、周廻三町二十九間、惠夷須崎、〈又呼二ヘル島一〉周廻三町四間、ラコノ島、周廻一十五町一十三間、湯島、〈寶島〉周廻一里五町二十五間、拐島、〈寶島〉周廻三町二十一間、所島、周廻二町四間、濱ノ小島、周廻三町二十八間、松島、〈從二寶島北崎一至二南崎一〉三十三間、竹ノ子島、〈寶島〉周廻四町一十二間、二島、〈大寶島〉周廻三町四十三間、一島、〈小〉周廻三町一十五間、大飛島、周廻二十九町四十一間半、小飛島、周廻一十六町二間半、蛇島、〈今福村〉周廻二町四十九間半、鷹島、周廻一十里一十四町五十八間、〈大岩崎鷹一町五十七間〉竹ノ子島、〈鷹島〉周廻二町五十一間、小昇瀬、〈又呼二昇返瀬一〉周廻三町一十一間、ミナセ島、周廻二町四間半、小ミナ瀬、周廻二町三十一間、白岳島、周廻一町三十八間、十郎島、周廻七町五十八間、白岳崎、〈鷹島〉周廻三町一十一間、ヘゴ島、周廻四町八間、野島、〈鷹島〉周廻三町一十三間、牛島、周廻八町三十一間、コセ島、周廻三町五十二間、東ノ坊、周廻三町二間、中ノ坊、周廻五町二間、西ノ坊、周廻三町三十五間、〈從二東ノ坊一至二西ノ坊一、總間〉

町五十九間　カキ島周廻一十一町四十七間（從カキ島至端切岬二丁四十五間）、竹島（大相神浦村）周廻八町四十九間、
竹島（小相神浦村）周廻一町五十二間、前島（佐々村）周廻一十六町五十二間、野島（相神浦村）周廻一十五町
一十六間半、大淺島周廻二十三町三十八間、小淺島周廻一十一町九間、海賊島周廻一十六
町二十八間、前島（相神浦村）周廻三十二町一十二間、源五郎島周廻一町四十九間、横島（又呼九子島）周
廻六町九間半、ヒトニ島（又呼シト子島）周廻三町四十一間、麥島周廻五町五十九間、赤島（大島）周廻
一十六町四十一間半、小赤島周廻八町五十六間、大島周廻八町五十六間半、小島（大島、從南岬至北岬）
三十八間、丸小島（鹿町村）周廻二町二十九間、ミスコ島周廻一十二町一十六間、忠六島周廻五
町三間　忠六小島周廻五町三十三間、ノウ黒島周廻二十町四十四間半、フナトウカ島周廻
七町二十一間　半藏島周廻一十七町三十六間、無名瀬（鹿町村、從南岬至北岬）五十四間、烏帽子小島（從南
岬至北岬）一町六間、小島（牛藏島、從北岬至南岬）三十間、大島（鹿町村）周廻三十一町一十二間、彌太郎島周廻五
町四十二間、臼島（鹿町村）周廻六町四間、杵島周廻三町五十一間半、白水小島周廻二町一間、
鯨瀬小島周廻一町三十五間、エボ島周廻二町二十九間、小島（鹿町村）周廻二町一十間、大鹿島、
周廻二十七町一十六間、大次郎島周廻九町二十八間、氷島（大）周廻三町三十六間半、氷島（小、
從南岬至北岬）五十四間、島頭島（地）周廻七町九間半、島頭島（沖）周廻一十九町二十六間、小野島（從北岬至
南岬）五十四間、小島（島頭島地）周廻三町二十二間半、離小島（同上、從南岬至北岬）四十二間、田子島（大）周廻一町
五十六間、田子島（小、從北岬至南岬）二十四間、地クヅ島周廻六町一十七間、沖クヅ島周廻一十五町
四十八間、坊主岩島周廻二町五十二間半、海士泊島周廻一十一町四十一間、ツラレ島（從北岬至
南岬）一町二十五間、小島（海士泊島）周廻二町三十間、黒子島（平戸村）周廻六町一十七間半、平小島周廻
三町三十六間、鬼子島周廻二町二十七間、江ノ小島周廻七町一十三間半、黒ケ島（又呼上ヤギ島）周
廻一十町八間半、野島（又呼下ヤギ島）周廻一十二町二十八間、若宮島周廻四町一十八間、上枯木島、

島（相神浦村）周廻四町四十九間、沖小島（相神浦村）周廻四町八間、（從地小島至神小島續而黒小島、）斧落島周廻四町一十二間、高岩島周廻五町三十間、子抱島周廻五町四十七間、小島周廻二町二十六間、（從斧落島至小島、續瀬ワウタ島、）小島（土井ノ浦）周廻二町三十四間　宮ノ小島（土井ノ浦）周廻二町三間、ヤスカ島周廻三町五十二間、マノカ島周廻一町四十四間、シヤウノ島（又呼松浦ヶ島）周廻二里六町三十八間、満切島（ヤレウ島）周廻三町一十一間、ラキノ島周廻四町三十六間、更島（相神浦村）周廻一町四十一間、大深島周廻二町五十九間、小島（相神浦村）周廻五町三十九間、牧島周廻一里四町二十一間、カクラ島（牧島）周廻一十五町九間、元島（相神浦村）周廻二十四町四十二間、（從東濱至千切岬三丁三間）島鼠島周廻八町四十八間、アトウケ島周廻三町二間半、目干婆岬周廻六町一十五間、竹ノ子島（相神浦村）周廻二町二十一間、モトクリ島周廻五町三十三間、蛇島（相神浦津）周廻五町二十一間、カナシゲ島周廻一十五町一十四間、ベヾ島（從北岬至南岬）一町五十一間、恵比須島（相神浦村）周廻五町三十間、焼島（相神浦村）周廻一十一町二十二間、大船島周廻六町二十九間、鶴ノ子島周廻一十町四十二間、中瀬戸島周廻一十一町　棚方恵比須島周廻四町三十八間、小島（相神浦村アサル浦）周廻三町二間、下小高島周廻一十七町五十一間半、藻島（下小高島、從南岬至北岬）二町一十八間、上小高島周廻三十二町三十六間半、トウノ小島周廻七町三十間　黒島（又呼相神浦村船頭島）周廻六町八間、上管島（相神浦村）周廻四町五十五間、下管島（相神浦村）周廻四町三十五間、高島周廻四里一十二町三十二間（從前濱至後濱岬三丁一十二間）ノンタ島周廻二町一十一間、小島（高島）周廻三町四十間半、カウノ小島周廻七町三十四間、イ島周廻一十七町一十八間　樫ノ木島（小）周廻二町四十九間、樫ノ木島（大）周廻三町三間、樫ノ木島（中）周廻一町三十六間、トコイ島周廻三十一町二十間、満切島（大トコイ島）周廻四町四十一間、満切島（小トコイ島）周廻三町、メヘル島（又呼ナカ島）周廻二町一十一間半、エイノ島周廻三十町三十二間半、牧ノ島（相神浦村）周廻三十三町四十四間、沙一升島（又呼小島）周廻二町一間、小島（牧ノ島）周廻一

島（宿野浦村）周廻三十一町五十四間、裸島（宿野浦村）周廻三町三間、外籠島周廻五町三十四間半、荷島周廻五町三間、大鹿島周廻三町三十七間、霧ノ小島周廻一十一町四十三間、荒島周廻二十町九間半、上ケショク島周廻二町五十八間、下ケショク島周廻三町二十四間、アサ丸島周廻二十二町五十六間、下中島周廻一里九町七間半、上中島周廻二十八町九間半、經島（又呼經尾島）周廻六町五十四間、松中島周廻一十町五間、ヤツノフ島周廻九町三十九間、コンテイ島周廻二町一十四間、ヤク丸島周廻五町五間、ヒキレ小島（荒川村）周廻四町四十五間、鼡小島（荒川村）周廻一十二町二十八間、串ノ島（荒川村）周廻二里九町七間半、柏島（荒川村）周廻一十一町三十間、折島周廻二十四町二十四間、祝言島周廻一里三十一町四十三間半、下六島周廻一十四町五十二間、小島（小串村）周廻六町一十三間、竹ノ子島（榎津村）周廻六町四十間、上神島周廻四町三十間、下神島周廻四町一十六間半、野案中島（又呼沖案中島）周廻一十一町一十一間、山案中島（又呼邊田案中島）周廻一十町一間、轆轤島周廻一十七町三十八間、頭島周廻一里三十三町四十六間半、神山島周廻五町二十七間半、上子島周廻七町三十六間、畑島（有川村）周廻一十一町一十間、野崎島周廻四里一十町三十間（從野首至白濱、徑測六丁一十五間）、六島周廻二十七町五十四間、黒島（小値賀島）周廻二十五町四十四間半、小黒島（小値賀島）周廻九町二十八間、ウヽ島周廻一十七町五十間、大島（小値賀島）周廻三十四町二十八間、乙子島周廻六町五十間、コロ島周廻一十二町九間、藪路木島周廻三十町二十間、赤島（小値賀島）周廻一里三町二間半、斑島周廻一里一十五町八間半、納島周廻一里一十二町三十四間、手羅島周廻二里一町八間半（從納濱至後濱、徑測五丁九間）、北小島（手羅島）周廻四町一十九間、東小島周廻四町五間、ノリ瀬周廻七町一十九間半、前小島（宇久島）周廻六町二十八間、松ケ岬周廻五町三十六間（從柴螺島至松ケ岬、稱五島）、長碆島（柏神浦村）周廻三町四十七間、満切島（長碆島）周廻三町三十二間、枕島周廻五町三十九間、苞島周廻二町一間、地小島（柏神浦村）周廻六町二十間、中小

三度二十九分、從碎湍至浜口湍、徑測一十三丁五十九間、從洲岬至曲崎、二丁廿六間、鷹島、周廻一十里二十一町四十六間、阿翁浦、三十三度二十七分半、阿翁浦徑測七丁三十八間、榮螺島、周廻一里二十八町一間、赤島、崎山村周廻二十八町四十一間、小板部島、周廻六町五十五間、大板部島、周廻一十七町四十七間、黒島、富江村周廻一里二町四十二間、元小島、富江村周廻二町八間、太郎島、周廻一十九町二十六間、竹ノ小島、周廻二町三間、和島、周廻一十三町一十四間、津多羅島周廻三十一町三十九間半、島山島周廻四里一十六町四間、辨天島、玉浦、從北岬至南岬、一町九間、小島、荒川村周廻九町五十三間、權現島、周廻二町一十五間、嵯峨島周廻二里二町一十七間半、從前濱至後濱徑測四丁姫島、蚊宿村、從東岬至西岬、八町五十一間、黒小島、白石村周廻二町五十間、寺小島、白石村周廻四町二十二間半、地焚小島、從南岬至北岬、一町四十五間、沖焚小島、周廻四町一十三間半、前小島、蚊宿村周廻一十七町五十一間、大小島、奥浦村周廻四町二十六間、小島、奥浦村周廻四町四十五間、多々羅島、周廻一里五町三間半、屋根尾島、周廻一里一町二十四間半、竹ノ子島、六方村周廻一十六町一十間、庖丁島、周廻八町五十六間、辨天島、久賀島小周廻三町三十九間、辨天島、久賀島周廻二町二十三間、前小島、父呼浦小島周廻一十一町五十五間、津婦羅島、周廻二里八町三十五間、押通小島、從西岬至東岬、四十二間、大小島、父呼浦椎木島周廻一十一町三間、中小島、樽島周廻六町二十八間、二子島、樽島、從南岬至北岬、五町六間、奈留島、周廻一十七里七町九間半、從大崎徑一十六丁四十九間前小島、奈留島周廻三十三町五十二間半、元末津島、周廻一十一町三間、鮪小島、奈留島周廻九町四十九間、烏島、奈留島周廻一里五十四間、矢ノ小島、周廻九町五十六間半、員島、周廻七町一十一間半、相之島、日之島周廻一十三町四十九間半、有福島、周廻一里二十五町五間半、日之島、周廻一里二十町九間半、龍宮島、漁生島周廻三町五十三間、漁生島周廻一里三町四十八間半、若松島、周廻一十九里一十町一十四間、從若松村向濱至[illegible]本浦、徑測一十八丁二間半、田之子島、周廻三十四町一十八間、蕪小島、若松島周廻一町三十二間、へゞ島、若松島周廻六町四十九間半、桂

三十二度三十五分半、同深浦三十二度三十八分、玉之浦荒川村、三十二度四十分、（從深江酒屋町波戸場、至深江村三尾町、一十丁一十九間半、從深江村三尾野至寺山、九丁一十二間、從三尾野街道至大濱村、一里一十五丁三十間、從寺山街道歷山内村至荒川村、四里一十七丁二十一間、又從寺山街道至岐宿村川露、二里三丁四十四間、從田尾村街道至山内村、一里二十五丁二間、從山内村松山至小檐、二十七丁二十八間、從富江至富江村黑瀨、二十七丁三十間、從大寶村至佐夕目浦、徑測九丁九間、從荒川村中須至河原浦、徑測一十丁、從荒川村大地坊濱街道歷山内村及三本松至岐宿村川霧、三里一十三丁四十五間、從貝津村沿川至濱畔村、一里八丁五十五間半、從川原村内樋浦街道至奈切、從二十四丁五十七間、從川原村至岐宿村三本松、七丁五十七間半、從唐船浦村至戸岐首、徑測六丁九間、從奥浦村加志浦至大泊浦、徑測四丁一十三間半、）黃島周廻一里九町二十四間半、黃島浦、三十二度三十三分半、　久賀島、周廻一十三里四町二十四間、田之浦、三十二度四十六分半、（從前濱至田之浦、徑測四丁三十六間、）　樺島、周廻五里二十九町一十一間、北樺島村、三十二度四十六分、

中通島、周廻六十二里二十四町三十間、榎津村、三十二度五十九分、有川村、三十二度五十九分半、

同友柄、三十三度三十秒、（從似首村至奈摩村、徑測五丁四十八間、從魚之目浦至青方村、徑測一十二丁廿四間、從有川村蛤濱至太之浦、徑測一十八丁九間、從有川村茂串濱至蛤濱、徑測三丁一十二間、有川村徑測二丁五十六間、從道上肥村至今里村、徑測一十七丁一十四間、從道上肥村至濱野浦、徑測一十二丁五十九間、從青方村至奈摩村、徑測一里一丁一十四間、中串岬廻四丁三十四間半、千切崎廻、三丁一十四間、樽岬廻七丁二十三間、）　小値賀島（オヂカ）、周廻七里二十七町二十一間、笛吹浦、三十三度一十二分、（從笛吹浦濱至宿所三丁六間、從小値賀村至柳村、徑測廿六丁四十八間、從江川至友尻浦、徑測五丁廿四間、）　宇久島、周廻八里三十四町二十七間、平村、三十三度一十六分半、神浦村（カウノウラ）、三十三度一十六分半、（從深江島至宇久島、屬五島、）　黑島、（平戸島）周廻二里三十二町三十八間、本村、三十三度八分半、（從黑島濱至大鹿山、四丁）　平戸島、周廻四十三里二十間、平戸本町、三十三度、二十二分半、川内浦、三十三度二十分半、紐指村、（又呼下方）三十三度一十七分半、津吉村、三十三度一十二分半、（從平戸本町街道至中野村原方、一里一十二丁七間、從中野村原方至安満嶽、一里七丁四十四間、從中野村原方街道至糸屋村、三里三十一丁、從白濱浦至平戸七丁、從中野新田至街道、六丁三十六間、從紐指村濱至宿所五丁九間、津吉浦、徑測二丁三間、從津吉浦至糸屋村古田、廿三丁三十一間半、從宮之浦至福真浦、徑測七丁五十四間、從浦志自岐村至志自岐神社、一十八丁一十四間、從志自岐浦街道歷糸屋村古田、至古川口、三十二丁一十二間、從呂立浦至臨浦、徑測七丁一十二間、高針岬廻四丁五十六間、從薄香浦至平戸本町、一十二丁廿一間、從内田助至田助浦、徑測五丁廿六間半、長崎廻六丁五十六間、從平戸常盤町至白岳、一里一丁四十四間、）　生月島（イキツキ）、周廻六里二十六町二十三間、生月浦一部、三十三度二十四分、（從前濱至後濱、徑測三丁四十二間）　大島、（又呼的山大島）周廻八里一十七町七間半、神ノ浦、三十

エイノ岬、周廻六町二十三間、クラ島、(佐世保村)周廻五町四十二間、福石山、周廻四町三十二間、蛇島、(佐世保村)周廻五町三十三間半、遠測　小立神　大立神　田子島　三瀬(大)　三瀬(中)　三瀬(小)
中ノ島(中濱村)　端島　鷹瀬(鷹島)　下二子島(寒島)　鹿ノ子島　大瀬(深堀村)　小島(伊王島)　笠瀬(深堀村)
大瀬　平瀬(深堀村)　松島(香焼島)　ピシャコ島　裸島(深堀村)　女神島　明岩島　五郎江島　鬼塚
辨天島(土井首村)　裸島(浦上淵村)　身投岩　沖獨空島　千鳥瀬　小四郎島　地ヒサコ島　野島(福田村)
白瀬(式見村)　松島(式見村)　黒瀬(三重村)　小島(刈平間村)　龜甲島　西大瀬(大)　西大瀬(小)　ヲラヒ瀬　地
相撲島　沖相撲島　頭島　角瀬　髪島　宮ノ小島　沖小島　親島　女島(瀬戸村)　姥島　二子島　大(多以良村)　二子島(小)　鯨瀬(崎戸島)　兜瀬　妹瀬(崎戸島)　蟹瀬(蠣ノ浦島)　小立島(蠣ノ浦島)　色瀬　丸瀬(江ノ島)・相瀬　南瀬　黒島(江ノ島)　興吾島　黒島(江ノ島)　西小島　岳小島(大)　岳小島(小)
魚瀬　小瀬(江ノ島)　金頭瀬　燗鐵島　小島(平島)　崎瀬(大平島)　崎瀬(中)　崎瀬(小)　名乗瀬　カラ島　横島(寺島)　蓬萊島　蛎島　野島(大島)　三ツ子島(大)(大島)　三ツ子島(中)　三ツ子島(小)
赤瀬(大多和村)　蜂振瀬　裸島(大島)　前島(大島)　黒瀬(大島)　小島(大)(大島)　小島(小)(大島)　蟹瀬(大島)
浮瀬(大島)　玉子島　沖安甫島　地安甫島　有毛島　ハケ島　横島(大串村)　[illegible]島　小田島
布瀬(地)　布瀬(中)　布瀬(大)　布瀬(小)　赤島(大)(形上村)　赤島(小)(形上村)　赤瀬(形上村)　小島(形上村)　前島(形上村)　末島　天狗島　鵜島(形上村)　亂瀬　鵜瀬(形上村)　下竈乗島(大)　下竈乗島(小)　上竈乗島
赤瀬(小口浦)　辨天瀬(小口浦)　七百瀬　惠美須瀬(長浦村)　小島(長浦村)　裸島(長浦村)　トウノ瀬　竹島([illegible]カ村)　北島(喜々津村)　中ノ島(喜々津村)　サウケ島　辨天島(川棚村)　羽島([illegible])　鮎島　小島(佐世保村)　小島(針尾村)　惠美須島(針尾村)　遠測(彼杵郡松浦郡)　相ノ島
松浦郡　寶瀬　福江島、周廻六十里二十三町四十二間半、福江濱町三十二度四十一分半、大濱村、三十二度三十九分、富江濱之町、三十二度三十七分、富江村黒瀬、三十二度三十六分、玉之浦大寶村、

廻五町五十六間、鉢小島周廻二町一十七間、淨上島周廻二町一十五間、矢筈島周廻六町一十五間、長島（八木原村）周廻九町四十七間半、塔島周廻三町二十一間、千島島（八木原村、從東岬至西岬）一町二十四間、燒島（八木原村）周廻四町一十七間、前島（大串村）周廻八町九間、赤松島周廻九町四十間、筝島周廻二町一十一間半、竹島周廻二十四町一十八間半、神邊島周廻一十三町四十四間半、三島周廻一十四町三十七間半、前島（大串村）周廻三町、前島（中）周廻一町四十四間、前島（小）周廻一町二十四間半、橘島周廻二町二十間半、沖ノ裸島周廻四町三十二間半、地ノ裸島周廻五町四十一間、滿切島周廻二町三十間、池島（大串村）周廻二町三十間、大田島周廻一十一町五十二間、大寢島周廻四町五十七間、高島（大串村）周廻一十三町一間、燒島（形上村）周廻五町五十間、小島（大形上村）周廻六町四十六間、小島（形上村）周廻三町一十二間、イガ島周廻一町五十三間半、居島周廻一十八町三十三間、鵜瀨島（形上村）周廻一里三十七間半、大小島（長浦村）周廻五町六間、黑島（時津村）周廻七町二十二間、寺島周廻三町五十五間、辰島周廻一十八町二間、燒島（長浦村）周廻四町四間、グキク島周廻六町、前島（西海村）周廻三十一町五十七間、二島（水興村）周廻九町五十八間、高島（時津村）周廻一十七町一十間、清水島周廻六町二十六間、加島（大）周廻一十三町二間半、加島（小）周廻八町一十間半、鹽屋島周廻一町四十八間、葉島（喜々津村）周廻二町二十五間、臼島周廻一十一町一十七間　辨天島（臼島、從南岬至北岬）一町五十六間、カラウ島周廻五町二十六間半、箕島周廻一里二十二町一十六間、赤島（箕島、從南岬至北岬）一町五十六間、鹿島（郡村、從東岬至西岬）一町四十八間、中洲（川棚村）周廻二町三十間、片島（川棚村）周廻七町四十二間、瀨戶島（川棚村）周廻一十五町四十八間、戶尺岬周廻一十一町五間、橫島（江ノ上村）周廻八町三十間、大島（江ノ上村）周廻三十二町四十五間半、兎島（江ノ上村）周廻五町一十二間、鼠島（日宇村）周廻二町二十六間、高島（日宇村）周廻一十一町七間、釘島周廻一十町五十三間、大森島周廻三町五十七間、日之原岬周廻四町五十五間、

十九間、從針尾村大崎浦至大崎越、徑測五丁、從針尾村宮之浦至江上村里、徑測一十六丁一十八間半、從江上村庖之浦至有福牛島、徑測二十二丁四十五間、從江上村小瀨戶至大浦、徑測丁十一丁四十五間、從針尾村古里北濱至古里、徑測五丁三十六間、從針尾村先針尾至小名倉、徑測八丁五十四間、上二子島周廻四町五十八間半、鹿島周廻三十三町四十七間半從前濱至遠見番所、二丁二十四間、宮崎岬廻三丁一十間半、飛島宮島周廻四町五間、雀島、周廻二町三十六間、野島、周廻六町五十九間、ホケ島、周廻三町三十九間、黑島、宮島周廻四町五間半、橫島、大籠村周廻二町五十五間、香燒島、カウヤキ又呼島村周廻三里三十町四十間、ケンキウ岬廻二丁四十二間沖ノ島、周廻一里六町一十九間、伊王島、周廻一里一十七町一十六間半、カンタイ島、周廻四町三間、ケンキウ島從南岬至北岬五十六間、辨天島又呼女島周廻二町、眉島、周廻一町六間半、野牛島、周廻六町三十四間半、佐世婦島、周廻一町五十二間半、陰ノ尾島、周廻一里五十九間、四郎ケ島、周廻四町二十四間半、中ノ島、小寨倉村周廻五町三十三間、松島、小寨倉村周廻四町一十四間半、高鉾島、周廻六町五十間半、獨空島、周廻一町三十五間、神ノ島、周廻二十九町三十一間半、山神島、周廻二町二十五間半、鼠島、浦上村周廻四町三十八間、神樂島、周廻一十六町二十四間、母子島周廻六町四十間、大蟇島、周廻二十一町一十六間、小蟇島、周廻三町四十九間、池島、周廻一里二十八間、鵜島瀨戶村周廻一里二十町一十七間、椛島、周廻一十五町三十四間半、五郎ケ島、周廻三町二十三間半、燒島、瀨戶村周廻一十町四十四間、地小島、板ノ浦周廻三町一十七間半、柳ノ小島、周廻四町五十八間半、無田島、周廻九町八間、小島、知寨ノ浦島周廻三町一間半、崎戶島、周廻一里二町一十間、從前濱至後濱、徑測二丁御床島、周廻一十六町三十一間半、大立島周廻一十八町五十二間、江ノ島、周廻二里一十四町九間、從七郎濱至番所、三丁三間、惠比須島江島周廻三町二十五間半、大島周廻七里一十間半、從前濱至後濱、徑測二丁一十二間、大子島大島周廻一十六町二十二間、岩島、周廻二町二十七間半、鹿島、周廻二町五十二間半、崩島、從北岬至南岬、三十間、母島、ホヽ周廻四町九間、寺島、大島周廻一里二十一町四間半、片島、大島周廻九町一十三間、中ノ島、大島周廻一十一町三十七間半、濃島周

島原村周廻四町四十一間半、出外レ島、周廻二町七間、茂七島、周廻二町一十三間、木場島、周廻三町三十間、堂崎島、周廻五町六間、出口石島周廻二町四十九間半、横島島原村周廻三町四十六間半、水島、周廻一町四十間、沖杵島、周廻三町三間半、杵島、周廻六町三間、中南島、周廻二町五間、三ッ島上ノ島、周廻一町三十六間、三ッ島下ノ島、周廻一町二十五間、中ノ島安徳村周廻二町一十一間、岡ノ島、周廻一町四十二間半、三ッ島大島、周廻五町三十間、總兵衛島、周廻一町五十一間半、三ッ島南島、周廻一町五十三間半、三ッ島中島、周廻五十七間、天草島、周廻一町一十四間、南島、周廻五十九間半、北島、周廻一町五十間、横島安徳村周廻二町五十一間半、天草南島周廻一町三十一間半、湊島安徳村周廻四町五十九間、從島原村湊島至安徳村湊島、寛政四年壬子四月、山崩入海而所成之島嶼也、手先島又呼琵琶島周廻一十三町四十間、手先島又呼三味線島周廻七町二間、上島周廻一十二町四十間、前島、周廻七町二十七間、牧島、周廻二里一十八町一十七間半、津島、周廻四町一十二間、辨天島、周廻四町三十一間半、樺島、周廻二里四町二間半、遠測 目島 棚島 三ッ島又呼沖島 三ッ島又呼沖島 ソナレ磯 石島島原村 舟津瀬 中島口ノ瀬 馬島 有馬瀬 小中島 茂七島小 無名島島原村 埋瀬 草島 南大島 甲島 小中島 沖石島 中瀬 出口島 界瀬 三ッ島瀬 若葉山瀬 兜島 ヘタ山 中ノ小島 極樂瀬 石瀬安徳村從石島至石瀬、寛政四年壬子四月、山崩入海而所成之島嶼也、小島南串山村 鹽瀬 甲岩 立瀬 甲瀬樺島 一ッ瀬 中ノ島 樺瀬 簸瀬 貝瀬 仁兵衛瀬 五太夫瀬 唐船瀬

彼杵郡 實測 松島、周廻三里二十三町四十間、西泊三十二度五十六分、加喜ノ浦島、周廻六里一十三町二十八間、加喜ノ浦三十三度一分、從大アボ至土井之浦徑測七町、從鹽瀬ノ元至面見浦、徑測二町九間、從內鐵田浦至外鐵田浦徑測二町九間、平島、周廻四里一十四町一十八間、平島浦三十二度五十九分半、從黒崎至鎌泊徑測二町二十四間、針尾島、周廻一十六里一十八町五十六間、針尾村江下三十三度四分半、從針尾村江下至タレ石谷、徑測九丁四十八間、從針尾村大田至波口、徑測六町四

半、此地本邦極西 三百七十四里二十五町五十二間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

肥前　佐賀　三三度一五分〇〇秒　島原　三二度二七分三〇秒

長崎　三二度四五分〇〇秒　大村　三二度五四分三〇秒

平戸　三三度二二分三〇秒　唐津　三三度二七分〇〇秒

名古屋　三三度三三分〇〇秒　福江　三二度四三分三〇秒略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中

肥前　佐賀　西五度二四分〇〇秒　平戸　西六度〇九分三三秒

長崎　西五度四八分三〇秒　五島　西六度四八分〇〇秒

〔萬國夢物語下〕肥前州ニ至ル、此國東ハ筑前筑後ニ連リ、其外ハ皆海ニテ、土地五六方ヘ突出、海ノ入込色々ニアリ、氣候暖國也、夏暑熱強シ、

疆域

〔日本地誌提要六十九肥前〕疆域　東ハ筑後、北ハ筑前及海、西南及西ハ海ニ至ル、東西貳拾壹里、南北凡貳拾五里

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕肥前國佐嘉郡　實測　大山島周廻一里三町一十八間半、

藤津郡　實測　竹崎村、周廻一里一十二間、

高來郡　實測　兎島、周廻四町三十四間、　三ツ島、文字人島周廻一十町一十九間半、　湯島、島草村周廻六町三十九間、　中ノ小島、島草村周廻二町　馬島、周廻一十五町九間半、　惠比須島島草村周廻二町一十四間、　平島、島草村周廻三町二十五間、　國高島、周廻四町一間半、　大中島、周廻二町四十六間、　礫島、周廻一町四十六間、　沖島、島瓦周廻二町五十二間半、　沖高島周廻二町五十間、　長島、

位置

れす、かくてその二國に分たれし事は、他書どもには見へす、さてその前後の國號の古く書に見へたるは、神功紀に火前國松浦縣、推古紀に肥後國葦北津と記されたり、但しこは後の號を古にめぐらしていへる傳へによりて、書されたらむも知られねど、日本紀撰記されたる養老の頃より、はやく前後に分たれりし事は著し、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

肥前佐嘉、呉服町 極高三十三度一十五分、經度西五度二十二分、從小倉長崎街道二十八里一十三町、三百一十一里二十町五十六間從東都

肥前島原、堀町 極高三十二度四十七分半、經度西五度一十九分、從小倉長崎街道自諫早沿海六十三里二十一町半、三百四十六里二十九町二十七間半從東都

肥前長崎、爐粕町 極高三十二度四十五分、經度西五度四十八分半、從小倉長崎街道五十七里零町半、三百四十里八町二十九間半從東都

肥前野母村、極高三十二度三十五分、經度西五度五十五分半、從小倉同上自長崎大波戸沿海七十六里二十八町、三百五十里四間半從東都

肥前呼子浦中町 極高三十三度三十二分半、經度西五度四十九分半、從小倉自長崎街道木屋瀨經黑岡唐津三十六里二十二町、三百一十九里二十九町四十八間從東都

肥前平戶、木町 極高三十三度二十三分半、經度西六度一十分、從小倉同上自福岡經伊万里至日野浦渡海五十一里三十四町半、內渡海直徑二十四町三百三十五里六町三十五間從東都

肥前五島福江、濱町 極高三十二度四十一分半、經度西六度四十九分、從小倉長崎街道自長崎大波戸渡海九十里二十七町半、內渡海直徑二十三里二十七町三百六十三里三十五町二十九間半從東都

肥前五島玉浦、深浦 極高三十二度三十八分、經度西七度二分半、從福江街道至大濱沿海歷宮江一十里二十六町

も二國に分れたり、和名抄に、肥前比乃美知乃久知、肥後比乃美知乃之利とあり、わかれたるは何の時とも知れず、書紀神功卷に、火前國と見ゆ、後に火と云ことを忘て、肥字には改しなるべし、和銅六年五月の詔に諸國郡郷名著二好字一とあり、此時改まりしか、されど此記に既に肥字を書れば、彼より前に改まるか、但中卷に火君とあれば、本はこゝも火字なりけむを、後人の肥に改しにや、其例外にも見ゆ、上に筑紫島を有二面四一と云て、肥國を其一に取れり、然るに國圖を著るに、肥前と肥後とは海の隔りて地續かず、正しく二に分れたれば、當一ッには取がたき國形なり、故に考るに、右に引る書紀又風土記などの、火國の故事は、地名に依るに、皆肥後國の地なり、然れば肥國といひしは、初はたゞ肥後方のみにて、肥前の地は、本は筑紫國の内なりしが、やゝ後に肥國には屬しにやあらむ、肥前は筑前筑後と地續きて、此三國は當一にも取つべき國形にて、肥後とは遠く離れたればなり、されど此らは上代の事、さだかには辨へがたし、たゞ試みに驚しおくのみなり、さて日向の堺も、北方半國ばかりは、もとは此肥國の内なりけんを、肥後と日向とは、當一に取つべき地形なり、やゝ後に分れて一國にはなれるなり、

〔比古婆衣十五〕火國名號景行天皇の御船火國に著たる故事

肥前肥後の本名を火國と云る由緣は、〇中略書紀景行天皇十八年の下に、〇中略此時に國名を定給へる由に記されたるは、謬傳に依られたるなり、〇中略始て國名を定給へる由にはあらず、知二所以然一また知二其國由一と書る文に意を著べし、其は前に崇神天皇の火國と號給へる事をば知食つれど、その事の由をばいまだよくも尋ね給はで、そのかみ火國と號給ひしは、如此る神火の事の由によりて號給ひつらむと、をりにあひてふとなほざりに詔ひたりしなるべし、さるを書紀に云々、故名二其國一曰二火國一と記されたるは、そのかみその御なほざり言にすがりて、まがひたる謬說のありけるを正しあへずして、其說によられたるものなるべき事、上に事て論らひたるごとく、崇神天皇の御世に國名を定給ひたると、景行天皇の火光を覽そなはして云々と詔給へると、兩度の差別、兩國の風土記の傳相併に合ひて、いと明らかなり、〇中略

因に云、肥前肥後もと一國なりし由、風土記に相共に記して、肥前なるは健緒組の古事をいへる文に連ねて、後分二兩國一爲二前後一といへり、肥後なるも然ありけむを、今本書世に傳はらざれば知ら

瑞籬朝、○崇神大分國造同祖志貴多奈彥命兒遲男江命定賜國造、

〔日本書紀景行七〕十八年五月壬辰朔、從葦北發船到火國、於是日沒也、夜冥不知著岸、遙視火光、天皇詔挾抄者曰、直指火處、因指火往之、卽得著岸、天皇問其火光處曰、何謂邑也、國人對曰、是八代縣豐村、亦尋其火、是誰人之火也、然不得主、玆知非人火、故名其國曰火國、

〔西遊記一〕しらぬ火

筑紫の海に出るしらぬ火は、例年七月晦日の夜なり、むかしより世に名高き事にて、今も九州の地にては、諸國より此夜は集り來りて見る事なり、○中略夜半にもなりしかど、知らぬ火のさたなし、今年はじめて見る人は今宵はいかなる事ぞ、知らぬ火は出ざるや、但しはそらごとなりやなど口々にいふ、予○南谿もあやしみ居たりしが、八ッ近きころに、遙向ふに波を離れて、赤き色の火壹ッ見ゆ、暫して其火左右にわかれて、三ッになるやうに見へしが、それより追々に出る程に、海上わたり四五里ばかりが間に、百千の數をしらず、明らかなるあり、幽なるあり、滅るあり、燃る有、高き有、低き有、誠に甚見事にして目をおどろかせり、其火の色皆赤くして、灯燈の火を遠くのぞむが如し、たとへば大坂の天神祭りを夥敷集て見るに異ならず、實に諸國より來り見るもいたづらならず、所の人に問ふに、年によりて、多きことも少き事も定らずとぞ、今年はすぐれて多く出たるも、予が幸ひといふべし、廣き海中に出る事なれば、天草に限らず、肥後地よりも何れの浦にても皆よく見ゆるなり、しかれどもいかなるわけにや高山にのぼる程多く見事に見ゆるとて、此山なども群集せるなり、

〔古事記傳五〕肥國、○中略肥後風土記には、○中略國人の對奏せる語は、此是火國八代郡火邑、但未審火由、とありて、于時詔群臣曰、燎之火非俗火也、火國之由知所以然、とあり、火邑は、和名抄に肥後國八代郡肥伊、是なるべし、是等を合て思ふに、火てふ名は、國にまれ邑にまれ、既く崇神天皇の御世に始りしなりけり、さて此

故(中略)肥國謂建日向日豐久士比泥別、(自久至泥以音)

〔古事記傳五〕さて肥國と云より十三字、今は眞福寺本及一本に依れり、此處舊印本、及延佳本、又一本などには、肥國謂速日別、日向國謂豐久士比泥別と作り、されど如此ては、上に有面四云々とある數に合ざれば、(中略)○註日向國の無き方ぞ古本なるべき、然るに右の如く、日向國の加はりたる本は、舊事紀に依て、後入のさかしらに改めたる物とこそ思はるれ、(舊事紀に右の如くあるなり、其は此記を取て記すとて、日向の無きを疑ひて、かの日向日とある亦名を其として、下の日字を國に改め、その下に謂字を補ひて、豐久士比泥別を其日向國の亦名とし、又然爲るときは、肥國の亦名、建一字になりて足ざる故に、次の熊曾國の亦名に數ひて、日別二字を加へ、又まては熊曾のと全國じき數に、建を速に改めつる物なり、凡て後書は、かくさまのさかしら、いと多し、されど上の有國數とあるには心つかで、其をば改めずて、熊の漏れたるぞをかしき、○中略)抑日向國の此に入らざることは、上代に北地は、なほ肥國と熊曾國との內にありて、未別に一國には立ざりしなどの傳なるべし、

〔肥前風土記〕肥前國者、本與肥後國合爲一國、昔者磯城瑞籬宮御宇御間城天皇(崇神)之世、肥後國益城郡朝來名峯、有土蜘蛛打猴頸猴二人、帥徒衆一百八十餘人、拒捍皇命、不肯降伏、朝廷勅遣肥君等祖健緒組伐之、於玆健緒組奉勅悉誅滅之、兼巡國裏觀察消息、到於八代郡白髮山、日晚止宿、其夜虛空有火、自然燎稍々降下就此山燒之、時健緒組見而驚怪、參上朝廷奏言、臣辱被聖命、遠誅西戎、不霑刀刃、梟帥自滅、自非威靈、何得然之、更擧燎火之狀奏聞、天皇勅曰、所奏之事、未曾所聞、火下之國、可謂火國、即擧健緒組之勳、賜姓名、曰火君健緒純、便遣治此國、因曰火國、後分兩國、而爲前後、又纏向日代宮御宇大足彥天皇、(景行)○誅球磨贈於而巡狩筑紫國之時、從葦北火流浦發船幸於火國、度海之間、日沒夜冥、不知所著、忽有火光遙視行前、天皇勅棹人曰、直指火處、應勅而往、果得著崖、天皇下詔曰、何謂邑也、國人奏言、此是火國八代郡火邑也、但不知火主、于時天皇詔群臣曰、今此燎火非是人火、所以號火國、知其爾由、

〔先代舊事本紀國造十〕火國造

古事類苑

地部三十二

肥前國

肥前國ハ、ヒゼンノクニト云ヒ、舊クハ、ヒノミチノクチト云フ、本ト肥後ト合シテ火國ト稱セリ、西海道ニ在リテ、東北僅ニ筑後筑前ニ界シ、他ハ皆海ニ面ス、東西凡ソ二十一里、南北凡ソ二十五里、其地勢ハ、東北山ヲ負ヒ、東南河ヲ帶ビ、西南海ニ突出シ、形錯雜ヲ極ム、而シテ其嶼島ノ多キ、海內第一タリ、此國ハ古ヘ國府ヲ小城郡ニ置キ、基肄(キイ)、養父(ヤブ)、三根(ミネ)、神埼(カンザキ)、佐嘉(サガ)、小城(ヲギ)、松浦(マツウラ)、杵島(キシマ)、藤津(フヂツ)、彼杵(ソノキ)、高來(タカク)ノ十一郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、高來郡ヲ南北ニ、彼杵郡ヲ東西ニ、松浦郡ヲ東西南北ニ分劃シ、凡テ十六郡ヲ置キシガ、後更ニ三根、養父、基肄ノ三郡ヲ合シテ三養基(ミヤキ)郡ト稱シ、新ニ佐賀、長崎ノ二市ヲ設ケ、而シテ佐賀縣ヲシテ、佐賀市及ビ佐賀、神埼、三養基、小城、東松浦、西松浦、杵島、藤津ノ八郡ヲ治セシメ、長崎縣ヲシテ長崎市及ビ東彼杵、西彼杵、南高來、北高來、南松浦、北松浦ノ六郡ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕肥前 比乃三知乃久知

〔饅頭屋本節用集 天地〕肥前 比州 肥州

〔日本風土記 一寄語島名〕肥前 非前(ヒゼン)

〔日本書紀 九神功〕四月○仲哀九年甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河之側、

〔古事記 上〕伊邪那岐命、○中略伊邪那美命、○中略御合、○中略次生筑紫島、此島亦身一而有面四、毎面有名、

風俗にや、浦々島々に至る迄、飯もり茶たて女など、稱し、老女有所多し、右に圖○圖略せるごとく、

佐賀の關は勝景の地にして、九州にては東方の端にて、伊豫の佐田の岬へ海上六里餘といふ、

〔延喜式二十八兵部〕諸國器仗○中略 豐後國甲二領、横刀八口、弓十五張、征箭卅具、胡籙卅具、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年五月辛卯、太宰府言、豐後伊豫二國之界、從來置戍不許往還、但高下尊卑不須無別、宜五位以上差使、往還不在禁限、○中略許之、

名所

故ニ、其死ヲ不厭事如鴻毛也、別而武士ノ風俗如右ナレドモ、自然ニ國風ヲマヌカレント思フ人アレドモ、正智邪智ヲ不辨而、其辨ズルトコロニ從テ國風ヲ削ラントスルトイヘドモ、正道ニ至事不克而、或ハ不覺ヲ取リ、或ハ邪智ニ迷テ、臆病ヲナス人モ可有、多ハ勇勝而亟關キ形儀多シ、自然ト氣質之スナヲナル人モアルベクレドモ、稀ナリトシルベキナリ、

〔西遊雜記二〕豐後の國は、豐前よりも大國といへども、風土はおとりて宜しからず、在中に入ては、豪家と覺しき百姓一家もなく、白壁なる土藏などは遠見せし事なく、柿の木、橘、きんかん、柚なども見かけず、人物言語も中國筋とは甚劣りし事にて、在中山分に入ては、草履わらじもはかずして、外より歸りても洗ふといふ事もなゝ、其儘床上にあがる事なり、食物にも米を喰ふ事なく、粟の飯を以て上食とし、寺院軍正にても、平生の喰事は粟にして、五節句などに米の飯を食す事なり、是等の事を以万事の風俗を察して知るべし、周防長門より、豐後日向大隅などへ商人の入來る所にて、此者ども旅宿にて會せし時は、最早日本の地へ歸らんと互に戯れ笑ふと云り、然れども花は芳野人は武士にて、城下々々は人物言語もいやしからず、中國筋に替りし事なきなり、在在へ入りては、何といはんやふもなき僻地多し、宇佐より頸城へ出るは南西とゆくなり、

〔日本鹿子十四〕同〈豐後〉○國中名所之部

佐賀(サカ)の關　伊與の御崎より海上七り也

姫島(ヒメシマ)　北浦と云所也、東にみへたるはるかの沖也、松村々とうちつゞき、けいよき所也、

湯の嶽　府中より西なり、此山に溫湯あり、

三保浦　寶積　小竹島　高崎

〔西遊雜記二〕佐賀の關といふをば、外濱、内浦にては市中五百軒ばかり、よき船かゝりの湊ゆへに、日向大隅より洶ノ往來の船、日和待をする浦にて、淋しからぬ也、倡家も數軒みへ侍りぬ當世の

ナリ、アメニ似、　魴アブラコ川魚、富國ニ多、鯰ニ似、　イダ川魚、鯉ニ似、　佐賀關切熨斗　久多見鰻、　宇智山芥子　佐伯梅　中津大竹　姥嵩ガタケノキセル竹虎斑有之、　筆竺ザウ同上ニ

〔雍州府志 六土産〕鉛　多出自銀山之邊者爲好、豐後州之所出爲勝、其色似銀、新町二條北、及五條東以鉛造數品物、

人口

〔續日本紀 一文武〕二年九月乙酉、令近江國獻金青、〇中略豐後國眞朱、

〔類聚國史 百六十五祥瑞〕延曆二十一年八月壬辰、豐後國獻白雀、賜獲者稻五百束、

〔官中秘策 五〕豐後國　八郡〇中略

一人數五十〇十下脱二壹字參万千八百八拾人　内 貳拾七万三千百四拾五人男 貳拾三万八千七百三拾五人女

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 〇中略

御料私領
一人數四拾六万六千百六人　高三拾六万九千五百四拾六石餘　豐後國

内 貳拾四万四千貳拾三人男 貳拾貳万貳千八拾三人女 〇中略

諸國人數調 弘化三年 〇中略

御料私領
一人數四拾七万八百七拾五人　高四拾壹万七千五百拾四石餘　豐後國

内 貳拾四万貳千三百八拾壹人男 貳拾貳万八千四百九拾四人女

風俗

〔豐州志 十豐後〕風俗　習俗淳朴、信鬼佞佛、昇平之美、漸知尙名敎、

〔人國記〕豐後國

豐後國ノ風俗、其氣質之稟ル處、偏塞ナル事、百人ニ九十人如斯ト可知也、殘ル十人善トイヘドモ、氣質之偏屈成內ヨリ出生スルナレバ、如形之風儀也、譬バ子ヲマビクコト、聖德太子之宣フコト、出家セサセテ子孫ノ斷絶スル時ハ、其苗滅スル所以成ニ、是理ヲ穎却而、其生ズル處之子ヲ殺害スルノ類ニ心得タル者、今モ儘有之ト見ヘタリ、末世ニ至ルトモ此風儀成ベシ、如此ノ人之氣質

出擧稻

豐後國（御料私領）　一高四拾壹万七千五百拾四石貳斗貳升七合壹勺五才

〔延喜式（二十六主稅）〕諸國出擧公廨雜稻（○中略）豐後國、正稅公廨各廿万束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、府官公廨十五万束、衞卒料一万六千四百七十二束、修理府官舍料六千束、池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料三万九千三百七十束、

〔倭名類聚抄（五國郡）〕豐後國（○中略）管八（○中略）正公各二十萬束、本稻七十五萬（五萬四）三千八百四十二束、雜稻二十五萬三千五百四十二束、

〔東大寺正倉院文書（四十二）〕豐後國天平九年正稅帳

球珠郡

天平八年定、正稅稻穀壹萬漆仟貳伯貳拾斛陸斗捌升貳合貳勺、（○中略）

直入郡

天平八年定、正稅稻穀漆仟捌伯伍拾貳斛玖斗伍升貳合肆勺、（○下略）

國產貢獻

〔延喜式（二十四主計）〕凡貢夏調絲者、（○中略）豐後（○中略）右廿五國中絲、（○中略）並七月卅日以前納訖、（○中略）豐後國（行程、上四日、下二日、）

調、絹卅八疋、緋綿十七疋、貲布廿端、御取鰒五十二斤、短鰒七十二斤、薄鰒卅斤、羽割鰒十二斤、葛貫鰒十二斤、耽羅鰒十八斤、堅魚卅四斤十四兩、小町席廿張、自餘輸絹、綿、布、薄鰒、庸、輸綿布米薄鰒、中男作物、熟麻、穀皮、黑葛、漆、椒油、海石榴油、胡麻油、荏油、鹿脯、押年魚、堅魚、雜魚腊、鹿鮨、鮨年魚、煮鹽年魚、

〔毛吹草（三）〕豐後

鹽硝　水精　鍋　鉄　碁石（黑白ノ碁石アリ、白ノ碁石ハ濱ト云所ニアリ、）　藥（渡人旅行ニ用之）　黑紺布　紋木綿　海鼠　麥

赤豆　豆腐皮　青皮　陳皮　麻地酒（土產トモ云、博多ノ練酒ノ如シト云フ、）　鹽犬（當國ニ多シ、他國ヘモ送ル、）　川魚（鮎ノ）　椎茸魚（川魚）

〔慶應元年武鑑〕松平左衛門尉近説 帝鑑間 朝散大夫 ○中略 二万千二百石 居城豐後大分郡府内 江戸ヨリ海陸二百六十二里半餘 福原右馬介居、慶長二、早川主馬、同十、竹中伊豆守、同采女正、慶安五、日根野織部正吉明、万治元、松平左近將監忠昭、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕毛利伊勢守高謙 柳間 朝散大夫 二万石 居城豐後海部郡佐伯 江戸ヨリ 二百六十六里 慶長六年ヨリ、毛利氏代々領之、

久留島伊豫守□□ 一万二千五百石 在所豐後玖珠郡森 江戸ヨリ大坂迄陸百卅三里、大坂ヨリ、頭成迄舟路百廿六リ、頭成ヨリ森迄陸九里、合二百七十三里、當所差出之高、慶長十年ヨリ久留島氏領之、○中略

〔倭名類聚抄 五 國郡〕豐後國 ○中略 管八 田七千五百餘町

〔伊呂波字類抄 不 國郡〕豐後國 本田七千五百四十六歩

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕豐後 上 遠 八郡 中略 田七千五百七十町

〔運歩色葉集 諸國之郡名〕豐後 田數一万千二百廿八町

〔海東諸國記〕豐後州 有温井五所、郡八、水田七千五百二十四町、

〔豐州志 十 豐後〕租税

圖田牒曰、田六千八百七十參町、見稻簿曰、一万三千二百二十一町、三十七万八千五百九十二石、文祿二年、豐太閤使山口宮部二氏檢土地之肥瘠、所定是也、今官制據之不改、

〔日本鹿子 十四〕豐後國八郡、中上國、四方三日、○中略 知行高三十七万八千九百九十石、

〔官中秘策 五〕豐後國 八郡 ○中略

一石高三拾六万九千五百四拾六石餘

〔吹塵錄 五 人口及國高〕天保度御國高調 ○中略

說

志賀新藏人入道殿

〔本朝世紀〕天慶四年十一月廿九日乙酉、太宰府解文云、略〇中又斬獲同賊首桑原生行首副進也、同府解云、豐後國九月十三日解、同十六日到來偁、追討凶賊使權少貳源朝臣經基今日下文、同日到來云、賊徒今月六日、襲來當國海部郡佐伯院、爰始從申時至于酉剋合戰之間、生獲件生行、略〇下

〔三州志來因概覽三豐後國海部郡來因〕邑。知。院。二十四村、內二村公料、一村公私交領、一村公料土力無交會校ルニ古郷ノ邑知成ベシ、重レ志雄莊、曾原莊、生保、太田、富永保、稻長保、若部保、羽咋正院、皆此邑知院內ト、中古以來云傳フ、即チ二莊、四保、二院ハ皆操擴ス、然レバ此分古郷ノ邑知ノ郷內成ベシ、但シ羽咋正院ハ古郷ニ羽咋アレバ、若シハ古郷ノ羽咋ナルカ、明應八年十二月廿日、畠山義元有判、一宮氣多院ヘ寄進知日內ニ、邑智院トアリ、又應永廿八年十二月廿九日、臨信列舍ニテ能登國羽咋郡邑智庄內ナ天野ノ庶家ニ、郡慶長ヘ充行ヨト、能登ノ古記ニ見ユ、羽。咋。正。院。三村、邑知院內ト云、一宮氣多知行ノ內ニ、庶主納二百俵、羽咋村トアルハ是カ、又ハ今羽咋正院ノ內ニアル羽咋村ナルカ、富。來。院。二十六村、古郷ノ富來カ、一宮氣多知行主名領中ニ、富來納百俵ノ富木村トアリ、今富木村ナシ、此富木院ナ古ヘ富木村ト呼ルカ、三院アリ、院ト云、詳ドモ、ル不ニ院曾俊、今存院ト稱フルハ國ト國有也、

〔慶應元年武鑑〕柳間中川修理大夫久昭　七万四百四十石餘　居城豐後大野郡岡江戶ヨリ海陸二百七十一里十二丁慶長十年ヨリ重由之高、中川氏代々領之、

〔慶應元年武鑑〕柳間從五位上稻葉右京亮久道　五万六十石餘　居城豐後海部郡臼杵江戶ヨリ海陸二百七十八リ大友豐後守居之、後福原右馬介、太田飛驒守、慶長五年ヨリ稻葉右京亮貞通、以後代々領之、

帝鑑間四品松平中務大輔親良　三万二千石　居城豐後速見郡杵築江戶ヨリ海陸三百六十三里半杉原伯耆守長房、後細川越中守六万石ヲ增地、寬永九、小笠原壹岐守忠知、正保二松平市正英親、日向守英親、以後領之、

柳間從五位下木下飛彈守俊程　二万五千石　居城豐後速水郡日出江戶ヨリ二百六十二里右豐臣之高、慶長五ヨリ木下氏代々領之、略

藩封

〔都甲文書乾〕豐後國都甲莊。。半分地頭四郎惟世、於御方爲致軍忠馳參候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月十日　　大神惟世裏判

進上御奉行所　承了〇高師泰花押

〔都甲文書坤〕豐後國御家人都甲莊一方地頭惟世申、依入田左衛門藏人同新藏人已下凶徒等蜂起、就被成御奉書候、今月十一日馳參府中、罷付著到、就同十二日重御奉書、馳向入田軍陣候畢、早申賜御判、欲備後日龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年十一月廿六日　　大神惟世

承了沙彌幸乾花押

〔入江文書一〕豐後國稙田莊。。內領家職田地拾町、爲勳功之賞所宛行也、早任先例可被致沙汰、仍執達如件、

建武四年二月七日　　沙彌花押〇一色範氏

大友田原豐前藏人次郎入道殿〇直盛

〔集古文書十五判物〕大友氏泰判物肥後家臣志賀太郎助藏

豐後國日。出。庄。四分壹戸次筑前次郎朝臣跡事所預置也、上裁落居之程、可被沙汰、仍執達如件、

貞和四年六月二日　　式部丞花押

志賀藏人太郎殿

〔集古文書十七判物〕大友親治判物肥後家臣志賀太郎助藏

緒。方。庄。小河名之內小原神五郎跡百貫分坪付別紙在之事、預進し候、可有知行候、恐々謹言、

明應五年丙辰十一月三日　　親治花押

總處分　條々事〈○中略〉

一家地文書庄園事〈○中略〉　九條禪尼〈○中略〉　家領〈○中略〉　豐後國臼杵戸次庄〈○中略〉

建長二年十一月　日　　愚老〈在判〉

〔匡遠宿禰記裏書〕當莊年貢事一向無沙汰云々、太不可然、

雜訴決斷所牒

大內莊西方地頭

右當莊所務幷年貢事、雜掌申狀如此、何樣事哉、早帶文書正文、可令參對之狀如件、

建武元年二月二十二日

〔建武綸旨〕豐後國津寺莊向保內一法師半分〈領二家職 末女〉下田地等地頭職、首藤新左衛門尉俊秀當知行、不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月一日　　式部大丞〈花押〉

〔志賀文書二〕豐後國大野莊志賀村南方內泉名大窪屋敷〈○中略〉筑前國三奈木莊等地頭職、豐前慶人次郎入道寂性〈貞泰○志賀〉當知行不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月十三日　　式部大丞〈花押〉

〔入江文書一〕豐後國香賀地莊地頭職三分貳〈河越安藝入道跡〉為勳功賞可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年十一月二十五日　　左衛門權佐〈花押○略圖闕〉

大友豐前六郎〈○貞載〉館

〔阿蘇文書一〕〈編旨〉豐後國日田莊地頭職、為勳功賞可令知行者、天氣如此、悉之、

建武三年正月廿二日　　左少辨〈花押〉

阿蘇大宮司館

六月朔日岡に至る、(土人竹田と云、當城は中川侯御知行、)城岡の城は竹田城とも稱す、かねて聞及びしより嶮城にして、眼をおどろかせしなり、海内三嶮城の最上と稱せるもむべなり、○中略町は大概よき町にして、諸品自由の地也、是は四五里の間、商町一ヶ所もなき事にて、萬事此城下ならで調ひがたきゆへ、何に不足なきやうに、商人のたくはへ置と見えたり、寺院も數多見え侍りき、

〔豐州志豐後十七日田郡〕莊名　莊四(舊三莊、曰五馬、曰大山、曰大肥、後有津江、因爲四莊、)五馬、大山、(並因山名、)大肥、(因水名、)津江、(山勢似潰崩之形、亦以山名、)

〔豐州志豐後十八大野郡〕莊名　莊一、野津、(豐日志曰、西寒多神祠在大野、三重、今按、其舊址在野津寒田、然則野津舊三重之郡內也、圖田帳作野津院、今約稱之、蓋古設城院之號、猶如菊地由布之類、既置城院之後、遂分爲一莊、)

〔豐州志豐後十四海部郡〕莊名　莊二、(圖田帳併丹生爲三莊、然丹生舊鄉、)臼杵、(城東北里餘有祠、祭臼杵神、故名、蓋治城東北丹生鄉、所謂中臼杵境也、圖田帳曰、臼杵莊二百町、領家一條前殿下、丹生莊百五十町、領家高倉宰相家、是其莊園、雖知非大友氏私邑也、)佐伯、(豐日志曰、神護景雲中、豐後守佐伯宿禰久良麻呂居住于穗門、遂名其地、後世以爲莊、按今治城西南皆佐伯境、按圖田帳、佐伯本莊百二十町、佐伯彌四郎政直、八郎惟貴、豐田三郎惟光、二郎惟永等、一族皆領之、)

〔豐州志豐後十二速見郡〕莊名　莊二、(按圖田帳莊四、曰八坂、曰大神、曰竈門、曰石垣、但八坂大神舊鄉非莊、故以竈門石垣充莊、)竈門、(因山名、)石垣、(蓋此二莊、古朝見鄉管內也、又按圖田帳、以鶴見村屬由布鄉、恐非、續日本紀曰、寶龜三年、速見郡敵見鄉鶴見山崩、蓋鶴見山係于敵見而言、則今鶴見村、古敵見所管者必矣、且詳其地勢、則鶴見在朝見之域、故斷而從于古、又石垣莊內有別府、別府之訛也、職原抄以介爲別駕、是別駕所居、遂目成處之、別府或作辨府、每國往々有之、國府既廢、別府亦從之、)

〔豐州志豐後十一國東郡〕莊名　莊六、(莊者非古之制也、蓋王者政令廢弛、綱紀不密、位田職田途不敦、漸以爲私田、割鄉置之、是莊園名所由起、故莊或有大於鄉者、是以相混、竟以誤其稱也、圖田帳有四莊、今以田原香地二鄉爲莊、通得莊六、以復其舊云、)田原、都甲、草地、眞玉、臼野、香地、(土人相傳曰、國東古五鄉八莊也、其五鄉、安岐、武藏、國前、來縄、山鹿是也、蓋山香乃山香、屬速見郡非也、又曰、其稱六鄉、則加豐前國宇佐郡向津部、亦復非也、凡稱鄉數、豈有越國越郡之理哉、蓋是仁聞法師鄉二十八所之道場、名曰六鄉山、其境及速見、宇佐、故民俗傳此誤耳、)

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

〔入江文書 一〕豐後國岩室村地頭職、高政(規矩)跡、爲勳功賞、塚崎次郎貞重可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年十一月二十五日　左衛門權佐 花押

〔田文 四〕豐後國高田名門田邑知行坪付分錢

三拾貫文内　一上田四段半分錢六百二十文　爲成本〇中略

天文十八年丑八月廿五日　丹生田丹後守 在判

吉弘左近大夫

岡小田伊豫守殿

〔西遊雜記 二〕日出の城下に至、此所は木下侯の御居城也、千日御知行二万五千石の城下ながら、上方筋と違ひて宜しからず、土人の物語に、御領地十四ケ村にて、租米漸六七千石ならでは納らずといひぬ、御城は小城ながら四方の堅有所にてあしからず、頭成に行、此邊の交易所にて、商船の入津も見え、市中五百餘軒、日田御支配、玖珠領、久留島侯等入交の町也、久留島侯御參勤には、此湊より御船に乘らせ御登り有事也、

〔豐後紀行〕此百二十年前〇自元七年の事なりしに、別府の邊大地震して、古へ有し別府村悉く海と爲る、古への別府村は、今の町の數町東にあたる、其頃村の西なる溫泉は、今潮干の潟の中に出づ、

〔西遊雜記 二〕別府といふ町に至る、長々敷在町にて、家每に湯あり、此湯泉は熱からずぬるからず、疛膈物に功有とて、入湯のもの來ル所也、

〔西遊雜記 三〕佐賀の關より臼杵城まで行程五里といへども、定かならぬ山道濱道にて遠し、戸次村杯といふあり、大友家戸次氏の出所といふ、臼杵城は往昔大友の眞島と云し人の事跡ありとも云ひ、天文の頃は、府内大友の隱居城と稱して、宗麟も老後此地に居城有しといへども、四方のかためもよき要害の城にて、風景も圖略〇圖のごときの所なり、

目浦、戶穴村、狢出浦、米水津浦、波當津、大入村、烏屋島、沖吉島、篙島、八島、蛭子島、直入郡、白丹村、米納村、狹田村、石合村、大分郡、生石村、駄原村、戶次市村、楠木生村、稙田市村、雄城村、原村、日田郡、女子畑村、出口村、求來里村、月出山村、祝原村、用松村、上手村、

〔集古文書五十讓狀〕風早禪尼深妙配分狀大友能直室　肥後家臣志賀太郞助藏

嫡男大炊助入道分　相模國大友鄕地頭鄕司職

次男宅万別當分　豐後國大野庄內志賀村半分地頭職在別注文

大和太郞兵衞尉分　同庄內上村半分地頭職在別注文

八郞分　同庄內志賀村半分地頭職在別注文

九郞入道分　同庄內下村地頭職但故豐前々司墓堂寄附院主職也

女子大御前分　同庄內中村地頭職

女子美濃局分　同庄內上村半分地頭職在別注文

帶刀左衞門尉後家分數子在之　同庄內中村內保多田名

右件所領等者、故豐前々司能直朝臣、賜代々將軍家御下文、無相違所知行來也、而尼深妙得己夫能直之讓、賜將軍家御下文、所令領掌也、〇中略　但關東御公事被仰下時者、守嫡男大炊助入道之支配、隨所領多少、可致其沙汰也、仍爲後日證文總配分狀如件、

延應貳年四月六日　　尼　深妙花押

〔集古文書十三下文〕將軍宗尊親王下文肥後家臣志賀太郞助藏

將軍家政所下藤原泰朝可令早領知豐後國大野庄內志賀村半分地頭職除舍弟分事

右任祖母尼深妙前豐前守能直後家弘長二年八月六日讓狀、可令領掌之狀所仰如件、以下、

文永元年三月廿二日〇署名略

親[illegible]仲[illegible]說、[illegible]井鄉者、爲小所之間、所宛行子息九郎惟成也、是則元弘之最初、致軍忠賢也、○中略

正平十一年六月日

〔雜古文書十七 判物〕大友義鑑判物 肥後家臣志賀太郎助藏

安岐鄉諸田之內壹町七段、國東鄉之內三町三段分、坪付在別紙之事、預進し候、可有知行候、恐々謹言、

十二月廿三日　義鑑花押

志賀民部太輔許

村里名邑

〔郡名一覽〕豐後國 御料私領 豐州 四方三日 八郡

高三拾六万九千五百四拾六石七斗九升壹合六勺　千五百拾六ヶ村

●岡 竹田トモ 二百七十一里餘　●臼杵 二百七十八里　●日出 二百六十二里

●府內 二百六十二里半　●杵築 二百六十三里　●佐伯 二百六十六里

○森 二百七十三里　×立石 二百六十五里 木下次之助

ヘ日田 二百九十八里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕豐後　八郡、千四百七十三村、

高四十一万七千五百十四石二斗二升七合一勺五才 御料私領

國東郡百八十三村　速見郡百二十村　大分郡二百二十七村　海部郡百五十四村　直入郡

二百五十四村　玖珠郡四十八村　日田郡九十二村　大野郡三百九十五村

〔地勢提要〕郡邑島嶼音々

豐後　國東郡、堅來村、見龍村、櫛海村、向田村、富來村、古城村、野邊村、宇佐郡、岡村、速見郡、大神村、日出

貫井村、玖珠郡、戸畑村、魚返村、海部郡、[illegible]江村、海添村、警固屋村、淺海井村、[illegible]、狩生村、代後村、福良

野上總領孫太郎資親申、當國飯田鄕內野上村(四郎丸名)田畠山野、幷同名內上堤田屋敷尼持阿彌以下地頭職事、當知行無相違之由、令申之上者、早可令知行、若以不知行之地、構當知行之由、令掠申者可被處罪科之由、懇望之間、成賜安堵之旨國宣所也、仍執達如件、

元弘三年十一月十四日　散位長兼花押奉

進　豐後國御目代殿

〔薩藩逸史〕豐後國井田鄕地頭職、(高上丸跡)爲勳功之賞、可被知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年二月二十一日　左衞門權佐花押

島津上總入道館

〔集古文書(十七判物)〕大友義鑑判物(肥後家臣志太賀郞助藏)
井田鄕之內四拾貳貫分、小川名之內八貫分、爲代所直入鄕葎原名之內、志賀宮內太輔跡五拾貫分之事、預進し候、可有知行候、恐々謹言、

十二月三日　義鑑花押

志賀民部太輔許

〔志賀文書(二)〕豐後國大野莊志賀村半分(南方)幷下村泊寺院主職地頭職、同國笠和鄕富成名內勢久世宇屋敷鹽濱筑前國三奈木莊內田畠屋敷山野等、志賀藏人太郞忠能法師(法名正宝)當知行不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月一日　式部大丞花押

〔阿蘇文書(九)〕阿蘇筑後守宇治惟澄謹言上(中略)
一筑前國下座郡豐後國大佐井鄕事
右兩所者、前大宮司惟時、以去元弘三年可支配一族之由、忝賜綸旨之間、下座郡三百餘町者、令配分

風土記曰、郷四所、是爲正也、而有丹生、佐尉、穗門、而闕佐知、圓田、藤乃有佐賀、佐井二郷、而分佐井爲二郷、曰大佐井小佐井、又以丹生郷、佐尉、佐伯爲三荘、覓無穗門、正是佳也、割丹生爲二、曰作分穗門爲佐伯、蓋以知穗門、從爲一海島名已、

〔豐州志 十三 豐後大分郡〕鄉名　鄉九 風土記曰、郷九所、而郷名皆闕、按倭名抄郷名凡十、曰阿南、曰植田、曰津守、曰荏隈、曰判太、曰跡部、曰武藏、曰笠祖、曰笠和、曰神前、道曰判太跡部、笠祖、雖不知所在、笠祖雖漢篤笠田字、別爲一郷、武藏乃國東郡内郷名、神前今屬東郡中之國名、雖漢入于此、設除判太跡部武藏笠祖神前此五者、則屬阿南、植田、津守、荏隈、笠和、此五郷、今屬東郡、接圓國隱、但以笠和、荏隈、判太三郷、別有植田、戸次、高田、賀來、阿南、津守六、是爲荏、蓋此三郷大荏相屬得九、則風土記所云郷九所、與之相符、今土人是爲大分八荏、而其判太者不知所在、近世野史所謂有請田者、其境郷氏處、有十餘村、非郷非荏也、不知所云、判太相鄰、當爲請田名歟、請姑充判太以待後考已、其他大抵郡内諸村、各自有所屬、故今載收荏爲郷、以俟考云爾、

〔豐州志 十二 豐後速見郡〕鄉名　鄉五 按倭名抄郷五、曰朝見、曰八坂、曰由布、曰大神、曰山香、是也、風土記曰、郷伍所、唯有柚富郷、即由布也、而四郷名皆闕矣、

〔豐州志 十一 豐後速見郡〕鄉名　鄉六 按風土記曰、郷六所、而唯有伊美一郷、其餘皆闕矣、倭名抄有郷名七、曰武藏、曰來繩、曰國前、曰田染、曰阿岐、曰津守、曰伊美、蓋津守當在大分郡中、誤混于此、若除之、則是六郷也、由染當作田染、皆郷實所數也、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年十月丁巳、太宰府言上、去年五月廿三日、豐後國速見郡敵見郷、山崩塡澗、水爲不流、積十餘日、忽決漂沒百姓卌七人、被埋家卌三區、詔免其調庸、加之賑給、

〔大友文書 三 新修豐〕三聖寺嘉祥庵院主虚英謹言上 〇中略

校寮了 豐後國三。重。郷速城寺帶文書令相傳云々、當知行不可有相違、全寺用催來等令安堵、可抽丹誠之旨、天氣如此、悉之以狀、

元弘三年十一月十三日　式部大丞

速城寺長老

〔作原八幡宮文書 三〕依三重郷役五月會料物事、當郷地頭代請文如此候、此上者生石濱御放生會以下御神事、無爲可令執行給候哉、於郷役者、嚴密守先例、可致催促候、仍請文如件、

建武四年七月廿七日　沙彌寂圓 花押

〔野上文書 豐後國家文書所藏〕花押 ○壬生在豐坊

有臭、莫令汲用、因斯名曰臭泉、因爲名、今謂球覃郷者訛也、

〔豐後國風土記 海部郡〕丹生郷（在郡西）、

昔時之人取此山沙、該朱沙、因曰丹生郷、

佐尉郷（在郡東）、

此郷舊名酒井、今謂佐尉郷者訛也、

穗門郷（在郡南）

昔者、纒向日代宮御宇天皇（○景行）御船泊於此門、海底多生海藻而長美、天皇即勅曰、取最勝海藻（謂保都米）、便令以進御、因曰最勝海藻門、今謂穗門者訛也、

〔豐後國風土記 速見郡〕柚富郷（在郡西）

此郷之中、栲樹多生、常取栲皮、以造木綿、因曰柚富郷、

〔豐後國風土記 國東郡〕伊美郷（在郡北）

同天皇（○景行）在此村、勅曰、此國道路遙遠、山谷阻險、往還疎稀、乃得見此國、因曰國見村、今謂伊美郷、其訛也、

〔豐州志 十七 豐後日田郡〕郷名

郷五（按風土記曰、郷五所、唯有石井靫編二郷、而其三闕矣、倭名抄以日田五郷、誤入海部、而取區埼中、以爲日田郷、傳寫致之、）

〔豐州志 十六 豐後玖珠郡〕郷名

郷四（按、倭名抄郷三、曰今巳、曰小田、曰永野也、風土記曰、郷三所、而名皆闕矣、圖田牒有五郷、曰長野、曰山田、曰古後、曰帆足、曰飯田、正與今所稱相同、蓋長野即永野、今大隈塚脇二村地、實是長野郷也、後世割大隈爲二、以南北名之、屬帆足郷、分塚脇爲二、以上下呼之、屬古後郷、於此長野郷終廢矣、因爲四郷也、）

〔豐州志 十五 豐後直入郡〕郷名

郷四（按、風土記曰、郷肆所、唯有柏原球覃二郷、而其二闕矣、球覃郷即朽網也、今倭名抄有三宅直入三宅三郷、蓋一三宅恐衍、是亦二郷、且闕其二、今合二書得其全、曰柏原、曰朽網、曰直入、曰三宅是也、蓋直入後改曰入田、又按、倭名抄以來民朽網二郷、誤入于肥後國山鹿郡、校於彼則無此郷、而來民朽網一郷名、但文異已、皆傳寫所致也、）

〔豐州志 十八 豐後大野郡〕郷名

郷五（按、倭名抄郷四、曰田口、曰大野、曰緒方、曰三重是也、風土記曰、郷肆所、而郷名皆闕矣、今爲五者、後世有宇目郷、地境最廣、故加之、）

〔豐州志 十四 豐後海部郡〕郷名

郷四（按、倭名抄海部郡郷名凡十、曰佐加、曰佐井、曰丹生、曰穗門、此四郷即是也、其下併日田二字、凡六郷、皆日田郷名、誤混于此、蓋傳寫之所致也、）

郷

〔豐後國圖田帳〕宇佐宮御神領　千六百三十八町

國東郡　武藏郷三百町、宇佐宮領領主神官名主等、○下略

〔倭名類聚抄〕九豐後國〕日高郡　安伎　伊美　來繩○以上三郷國埼郡之郷名、誤入此、恐脫、田染　津守

球珠郡　今巳　小田　永野

直入郡　三宅○高山寺本、作二松納一、直入　三宅

大野郡　田口・大野　緒方　三重

海部郡　佐加　穗門　佐井　丹生　日田　在田　夜開○高山寺本、作二開日一、日理　父連○高山寺本、作二父久一、石井○日田郡下、入二日高郷一

大分郡　阿南　植田　津守　荏隈　判太　跡部　武藏　笠祖　笠和　神前

速見郡　朝見　八坂　由布　大神　山香

國埼郡　武藏　來繩○高山寺本、作二綱繩一、國崎　由染○高山寺本、作二染遠一、阿岐　津守　伊美

〔豐後國風土記　日田郡〕石井郷　在郡南

昔者、此村有土蜘蛛之堡、不用石築、以土、因斯、名曰無石堡、後人謂石井郷、誤也、○中略

靫編郷　在郡東南

昔者、磯城島宮御宇天國排開廣庭天皇欽明之世、日下部君等祖邑阿自、仕奉靫部、其邑阿自、久就、於此村、造宅居之、因斯名曰靫負村、後人改曰靫編郷、

〔豐後國風土記　直入郡〕柏原郷　在郡南

昔者、此郷、柏樹多生、因曰柏原郷、○中略

球覃郷　在郡北

此村有泉、同天皇景行行幸之時、奉膳之人、擬炊於御飲、令汲泉水、即有蛇龗、於箇美、於茲天皇勅云、必將

〔郡名考〕豐後　國崎(クニサキ)(クンサキ)

〔古事記中孝靈〕此天皇○中略娶意富夜麻登玖邇阿禮比賣命、生御子、○中略日子刺肩別命、○中略日子刺肩別命者、(中略)豐國之國前臣(中略)之祖也、

〔古事記傳二十一〕國前は、和名抄に豐後國國埼郡君佐木、(君字を書るは、たゞ久の假字には非ず、久牟と唱へし故なるべし、)是なり、書紀垂仁卷にも豐國國前郡とあり、さて景行卷に、十二年、熊襲反之、幸筑紫、先遣國前臣祖菟名手、云々、國造本紀に、○中略吉備臣と同祖と云るは異なる傳なり、

〔豐後國風土記〕國崎郡、鄕陸所、里十六一

昔者纏向日代宮御宇天皇、○景行御船從周防國佐婆津發而度之、遙覽此國、勅曰、彼所見者、若國之崎乎、因曰國崎郡、

〔豐州志豐後十一〕國東郡。○延喜民部省式郡次、以國埼爲第八、今官制爲第一、弘安圖田帳亦同、按日本紀舊事紀古事記皆作國前、延喜式倭名抄、及風土記拾芥抄並作國埼、今作國東、圖田帳亦同、蓋弘安時既作國東也、○中略

租稅　五萬四千一百五十三石七升餘(圖田帳曰、千六百三十八町、)

疆域　東北及西皆面海、惟南境與速見郡相接、其西南隅與豐前國宇佐郡爲界、

廣袤　東自國前鄕田深村海濱、西至來繩鄕高田村海濱、約七里而遙、南自速見郡界、(八坂鄕川村)北至伊美鄕伊美濱村海濱、八里而近、

形勝　三面頻海、南據大山、連亙爲固、水陸之要街、

〔日本書紀六垂仁〕二年、是歲任那人蘇那曷叱智請之、欲歸于國、(中略)一云、初都怒我阿羅斯等、有國之時、黄牛負田器、將往田舍、黄牛忽失、則尋迹覓之、跡留一郡家中、時有一老夫曰、汝所求牛者、入於此郡家中、然郡公等(中略)卽殺食也、若問牛直欲得何物、莫望財物、便欲得郡內祭神云爾、俄而郡公等到之曰、牛直欲得何物、對如老父之敎、其所祭神是白石也、以白石授牛主、因以將來置于寢中、其神石化美麗童女、於是阿羅斯等大歡之、欲合、然阿羅斯等去他處之間、童女忽失也、(中略)則尋追求、遂遠浮海以入日本國、所求童女者詣于難波、爲比賣語曾社神、且至豐國國前郡、復爲比賣語曾社神、並二處見祭焉、

形勝　山環三面、惟北瀕海、土闢田腴、足建國府、

〔日本書紀景行七〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、　十月、到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也、碩田此云於保岐陀、

〔續日本後紀仁明十八〕承和十五年六月庚寅、是日左大臣從二位兼行左近衛大將皇太子傅臣源朝臣常○中略等上表言、○中略伏見太宰大貳從四位上紀朝臣長江等奏偁、所管豐後國大分郡擬少領膳伴公家吉、於同郡寒川石上獲白龜一枚、○下略

〔豐後國風土記〕速見郡、鄕伍所、里一十三、驛貳所、烽壹所、

昔者、纏向日代宮御宇天皇、景行○欲誅玖磨贈於、行幸於筑紫、從周防國佐婆津發船、而渡泊於海部郡宮浦時、於此村有女人、名曰速津媛、爲其處之長、卽聞天皇行幸、親自奉迎言、此有大磐窟、名曰鼠磐窟、土蜘蛛二人住之、其名曰青、白、又於直入郡禰疑野、有土蜘蛛三人、其名曰打猿、八田、國摩侶、是五人、並爲人強暴、衆類亦多在、悉皆謠云、不從皇命、若強喚者、興兵距焉、於玆天皇遣兵、遮其要害、悉誅滅、因斯名曰速津媛國、後人改曰速見郡、

〔豐州志十二豐後〕速見郡延喜民部省式郡大、以速見爲第七、今官制爲第二、弘安圖田帳亦同、○中略

租稅　五萬三千一十四石一斗二升餘、圖田帳曰、千町餘五町、

疆域　東自海濱、西至豐前國宇佐郡界、南至大分郡、其西南玖珠直入二郡界、北至國東郡界、

廣表　東自深江海濱、西至豐前國宇佐郡界山香鄕大內平村、約四里餘、南自大分郡賀來鄕界柞木村立石村、北至國東郡界田染鄕田原木村山香鄕六太郎村、約七里許、

形勝　背嶺見嶽、而面臨富海、舟車之會、民以賴焉、

〔日本書紀景行七〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、　十月、到速見邑、有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕、而自奉迎之諮言、玆山有大石窟、曰鼠石窟、有二土蜘蛛、住其石窟、一曰青、二曰白、

此郡百姓、並海邊白水郎也、因曰海部郡、

〔豐州志 十四 豐後〕海部郡 延喜民部省式郡次、以海部爲第五、今官制爲第四、弘安圖田賬爲第五、按風土記闕、此郡並海邊白水郎也、因曰海部郡、按白水郎烏蜑戸也、倭名抄曰、白水郎、倭名阿萬、日本紀用漁人、或海人字、是也、〇中略

租稅 四萬八千四百三十五石八斗三升餘 圖田賬一日、八百三十一町、

疆域 東北至海、南至日向國臼杵郡界、西至大野郡界、西北至大分郡界、

廣袤 東自穗門海濱、西至大野郡界 三重郷神野村 西臼杵莊東神野村、約六里、南自日向國臼杵郡界佐伯莊波當津海濱、北至佐賀郷神崎村海濱、約十四里餘、

形勝 東北面海、西南倚山、山林之寶、海錯之貲、衆民取贍、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆四年正月癸亥、豐後國海部郡大領外正六位上海部公常山等、居職匪懈、撫民有方、於是詔並授外從五位下、

〔郡名考〕豐後 大分 チホイタ ナホタ

〔豐後國風土記〕大分郡、郷玖所、里二十五 驛壹所、烽壹所、寺貳所、僧寺、尼寺、

昔者、纏向日代宮御宇天皇、〇景行 豐前國京都行宮、幸於此郡、遊覽地形、嘆曰、廣大哉、此郷也、宜名碩田國、碩田謂大分、今謂大分、斯其緣也、

〔豐州志 十三 豐後〕大分郡 延喜民部省式郡次、以大分爲第七、今官制爲第三、弘安圖田賬爲第四、按舊名碩田國、(中略)又按日本紀文意、天皇自豐前國京都、先到碩田國、次到速見邑、遂誅直入土蜘蛛之賊、推驗其車駕經過之跡、則大分郡在速見南、與豐前國隔境、前後混淆、蓋上世之事、其詳不可得知耳、〇中略

租稅 六萬一千八百七十一石九斗七升餘

疆域 東至海部郡界、南至大野直入二郡界、西至速見郡界、北至海、

廣袤 東自海部郡界 佐井郷毛井村 戸次郷松岡村、西至速見郡界、由布郷小平村 阿南郷後田村、約八里半、南自大野郡界 大野郷黒岩村 戸次郷弓立村、北至笠和郷田浦村海濱、約四里餘、

昔者、郡東垂水村、有桑生之、其高極陵、枝幹直美、俗曰直生村、後人改曰直入郡、是也、

〔豐州志十五豐後〕直入郡 延喜民部書式郡次、以直入爲第三、今官制爲第五、弘安圖田帳爲第三、日本紀景行紀、作直入縣、萬葉集作名欲山、風土記曰、昔者郡東垂水村有桑生之、中略 按垂水村今屬直入郡、東有桑道村、又七里村有桑木原、或是其遺也、中略

租稅　三萬五千八百七十九石五升餘 圖田帳曰、二百七十町、

疆域　東至大野郡界、西至肥後國阿蘇郡界、南至日向國臼杵郡界、北至大分速見玖珠三郡界、

廣袤　地勢廣短袤長、東自大野郡界三宅鄉挾田村、西至肥後國阿蘇郡界柏原鄉恋津留村、約五里餘、南自日向國臼杵郡界嫗嶽之巓、北至大分郡界朽綱鄉上重村、約十二里許、

形勝　千山環列以爲城、百川縈帶以作池、險要可據、

〔日本書紀景行七〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、十月到碩田國、○中略 於直入縣禰疑野、有三土蜘蛛、一曰打猨、二曰八田、三曰國摩侶、

大野郡

〔豐後國風土記〕大野郡、鄉肆所、里十一 驛貳所、烽壹所、

此郡所部、悉皆原野也、因斯名曰大野郡、

〔豐州志十八豐後〕大野郡 延喜民部書式郡次、以大野爲第四、今官制爲第八、弘安圖田帳爲第六、○中略

租稅　五萬七千七百六十九石餘

疆域　東至海部郡界、西至直入郡界、南至日州臼杵郡界、北至大分郡界、

廣袤　東自海部郡界字目鄉見朋村、西至直入郡界緖方鄉木野村、約十一里餘、南自日州臼杵郡界字目鄉西山村、北至大分郡界大野鄉黒岩村、約十三里餘、

形勢　郡原平遠、百川四散、地方十有餘里、本州之一大郡、

海部郡

〔郡名考〕豐後　海部アマヘ

〔豐後國風土記〕海部郡、鄉肆所、里十二 驛壹所、烽貳所、

〔郡名考〕豐後　球珠クス

〔豐後國風土記〕玖珠郡、鄕參所、里九驛壹所、

昔者、此村有洪樟樹、因曰玖珠郡、

〔豐州志豐後十六〕玖珠郡延喜民部省式郡次、以玖珠爲第二、今官制爲第六、弘安圖田帳爲第八、按延喜式、倭名抄、風土記、皆作球珠、拾芥抄作救珠、圖田帳作玖珠、今同、風土記曰、昔者此村、有洪樟樹、因曰球珠郡、按郡南有山名洪樟、一名斷株、山高一里許、周廻二里餘、上平如臺、相傳、古昔有一大樟樹、樹高不知幾千尺、其樹自僵倒、土人伐之、斷株、遂根化爲石、卽北山也、故其名乎、(〔〕中略

租稅　二萬九千三百三十三石四斗九升餘圖田帳曰、三百八十町、

彊域　東至速見郡界、東南至直入郡界、西南至肥後國阿蘇郡界、西至日田郡界、北至豐前國下毛郡界、

廣袤　東自速見郡界由布鄕岩原村帆足鄕今宿村、西至日田郡界在田鄕[illegible]村山田鄕代太郎村、約徑六里餘、南自直入郡界朽網鄕山田鄕涌出山巓、北至豐前國下毛郡界古後鄕內匠村、約九里、

形勝　山勢峭拔、谿流清激、區域秀絕、其民敦素、

〔塵袋九〕昔豐後ノ國球珠郡ニヒロキ野ノアル所ニ、大分郡ニスム人、ソノ野ニキタリテ、家ツクリ田ツクリテスミケリ、アリツキテ家トミ、タノシカリケリ、酒ノミアソビケルニ、トリアヘズ弓ヲイケルニ、マトノナカリケルニヤ、餅ヲクヽリテ的ニシテイケルホドニ、ソノ餅白鳥ニナリテトビサリニケリ、ソレヨリ後次第ニオトロヘテマドヒウセニケリ、アトハムナシキ野ニナリタリケルヲ、天平年中遠見郡ニスミケル訓邇ト云ケル人、サシモヨクニギワヒタリシ所アセニケルヲ、アタラシトヤ思ヒケン、又コヽニワタリテ、田ヲツクリタリケルホドニ、ソノ苗ミナカレウセケレバ、オドロキヲソレテ又モツクラズ、ステニケリト云ヘル事アリ、餅ハ福ノ源ナレバ、福神サリニケル故ニオトロヘケルニコソ、

〔豐後國風土記〕直入郡、鄕肆所、里十驛壹所、

管八　同　八郡　同　同　同　同　十郡

日田郡

〔豐州志豐後十〕郡名　領郡八、〈郡次、〈延喜式與今制同、〉詳錄各郡之下、〉國東、〈郡在國北、〉速見、〈郡在國西北、〉大分、〈郡在國東北、〉海部、〈郡在國東、〉直入、〈郡在國西南、〉玖珠、〈郡在國西、〉日田、〈郡在玖珠西、〉大野〈郡在國南、〉

〔豐後國風土記〕日田郡、鄉伍所、〈里一十四、〉驛壹所、

昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇、〈○景行〉征伐玖磨贈於、凱旋之時、發筑後國生葉行宮、幸於此郡、有神名曰久津媛、化而爲人參迎、辨申國消息、因斯、曰久津媛之郡、今謂日田郡者訛也、

〔古事記傳十五〕豐後國郡名日高、比多と和名抄に見ゆ、風土記には日田とあり、是によりて思へば飛驒も日高國歟、

〔豐州志豐後十〕日田郡〈延喜民部省式郡次、以日田爲第一、今官制爲第七、弘安圖田帳同、按古事記作比多、續日本後紀作日高、和名抄作日田、(中略)豐西記曰、昔新羅凶賊之徒、來山東四郡、中有大湖、周千餘町、百餘社、注爲湖水、後有大靈、自東飛來、翔湖上、北向而去、候然地震鳴動、自日知暁、西岸崩裂、水傾潤竭、更作平野、所餘三閒龜立水濱、唯留一帶川、其南閒名日隈、北名月隈、西名星隈、川名三隈、國名日靈、又其飛去之國名靈羽、豐前國高羽郡是也、○中略〉

租稅　三萬一千四百九十石二斗二升餘〈圖田帳曰、五百六十町、〉

疆域　東至玖珠郡界、西至筑後國生葉郡、及肥後國菊池郡界、南至肥後國阿蘇郡界、北至豐前國下毛郡、及筑前國上座郡界、

廣袤　東自玖珠郡〈山田鄉代太郎村〉界在田鄉藪村、西至筑後國生葉郡界津江莊柚木、約五里餘、南自肥後國阿蘇郡界五馬莊出口村、北至豐前國田川郡界大肥莊鄂城檢阪、約八里許、

形勝　群山圍繞四面、大川橫流郡中、土田沃腴、人民富饒、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月庚寅、大宰府言、豐後國言、前介正六位上中井王、私宅在日田〈○田原作向、今從一本〉郡、及私營田在諸郡、任意打損郡司百姓、因玆吏民騷動、未遑安心、〈○下略〉

國埼	速見	大分	球珠	日田	直入	大野	海部
國前 紀 膝碕 紀		碩田 紀					
國前				比多			
國埼（クムサキ）	速見（ハヤミ）	大分（オホキタ）	球珠（クス）	日田（ヒタ）	直入（ナホリ）	大野（オホノ）	海部（アマ）
同	同	同	同	日高（比多）	同	同	同
國崎	同	同	救珠	日田	同	同	同
國崎　國埼　國東	同	大分　大方（オホガタ）	玖珠　球珠	日田　日高	同	同	同
國東（クニサキ）	同（ハヤミ）	大分（ヲイタ）	玖珠（クス）	日田（ヒタ）	同（ナヲリ）	同（ヲホノ）	同（アマベ）
同	同	同	同	同	同（ナヲイリ）	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同
同（クニサキ）	同（ハヤミ）	同（オホイタ）	同（クス）	同（ヒタ）	同（オホリ）	同（オホノ）	同（アマベ）
西國東　東國東	同	同	同	同	同	同	南海部　北海部

郡

に著けるを、永祿二年の秋より、豐後の府に著さしめられたりければ、都鄙遠國の商人きそひ聚りて、人馬常に驛鬧として、道を避るに地なく、港には入船出船舳艫をさしつて、舟子の叫聲雜沓として嘩し、富榮の謳歌巷に滿つ、誠に名に逢豐國の、榮る家こそ目出度けれ、

〔倭名類聚抄五 國郡〕豐後國○註略 管八○註略 日高比多 球珠久須 直入奈保里 大野於保乃 海部安萬 大分於保伊多 速見波夜美 國埼君佐木

〔延喜式二十二 民部〕豐後國上、管 日田 球珠 直入 大野 海部 大分 速見 國埼○中略 右爲遠國

〔皇國郡名志〕豐後國八郡

日高 ●梅野 ▵豆町 ▵隈町 肥後筑前後豐前四國ニ接ス、然ドモ小郡也、

球珠 ▵森 豐前界ヨリ肥後界ヘ貫小郡

直入 ▵白舟町 ▵岩戸川 ●久住 竹田 ●岡 ●田代 日肥後界

大野 郡町無シ ▵舟岡川 國中小郡

海部 佐伯 ●板關 ●トマスノ岬 ●西浦 ●蒲戸 ●長日 ●左志生 日界ヨリ南海ニ至

大分 府内 臼杵 ●今市 ●ノツ原 ●ツルサキ 國中入江ニ添

速見 日出 杵築 豐前界ヨリ入江ニ貫

國崎 ●ムサシ ●松尾 ●竹田 豐前界ヨリ南北ノ海ニ出ハル

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕豐後

六國史 古書 延喜式 倭名抄 拾芥抄 諸書 郡名考 天保鄕帳 明治舊本帳 地誌提要 郡區編制

國府

〔太閤記十四〕豐後守護大友統義御折檻之事

覺　　御使者福原右馬助、熊谷內藏允、

一先手之城々に有ㇾ之者、及二難儀一之折節、可二相救一ため、つなぎの城々拵置、人數を入置候義、其段何も存知之前也、然るを小西が急難百死一生なりと云共、不ㇾ及二助成一剩平壤之様子をも不二聞合一逃崩候事、前代未聞之仕立、不ㇾ及二是非一候事、

一秀吉若年之昔より、此道に携と云共、終に吾勢越度を取事なかりし、是は殊に大明勢との合戰なれば、日本のためかた〴〵以一きは可ㇾ盡二粉骨一之處、武名にも不ㇾ耻、忠義之心もなかりし事、武士たる上、絕二言語一事也、向後のため、一命をも可ㇾ被ㇾ果之義なりと云共賴朝卿より久しく傳りし家を、可ㇾ及二斷絕一も無道に違ふやうにも覺え侍るに因て、死罪を宥め畢、能武士之上を吟味し、悔二前非一可ㇾ申事、〇中略

一其身之事は、安藝宰相所に預置候事、〇中略

文祿二年五月朔日　　　　秀吉在判

高麗陣衆各御中

〔倭名類聚抄五〕國郡豐後國國府在二大分郡一

〔豐州志十三〕豐後大分郡府內城在二笠和郷一、府內郎府中、舊國府所ㇾ在、今之城地、慶長二年所ㇾ移、故呼二其地一曰二古國府一、乃任國司所ㇾ居也、建久以還大友氏就ㇾ之營ㇾ館、世居焉、稱曰二屋形一又曰二大友殿一、

〔豐薩軍記一〕大友家系譜事

能直より二十代の嫡孫をば、大友左衞門督義鎭とぞ申ける、父義鑑の時より數ヶ國を領し、殊に義鎭跨竈の才ありて、智謀いみじかりければ、武威列國に輝き、名ある武士皆其麾下に屬して、豐府の繁榮前代に超過し、京鎌倉にもをさ〳〵劣るべからず、異國の商舶、初めは筑前の博多の浦

削然、威震西土、其子義統文祿二年、朝鮮之役、有罪國除、慶元以降、天下偃武、循仍舊制、特改國大、爲第二、分治爲九、爲封八、（速見郡杵築城、日出城、立石陣屋、大分郡府内城、海部郡臼杵城、佐伯城、直入郡岡城、玖珠郡森陣屋、）布政所一、（日田郡永山）而定矣、

〔日本地誌提要 六十八豐後〕沿革　古ヘ國府ヲ大分郡ニ置、（今ノ古國府村）鎌府ノ初、大友能直ヲ以テ守護トシ、鎭西奉行ヲ兼シム、子孫守護ヲ世襲シ、府内ニ治ス、建武中興、能直五世ノ孫貞宗更ニ守護ニ補ス、其子氏時足利氏ニ屬シ、屢肥後ノ菊池氏ト戰フ、永正中、貞宗七世ノ孫義鑑、筑後ノ東境ヲ略有ス、天文ノ末、其子義鎭菊池氏ヲ滅シ、肥後ヲ併セ、大内氏ノ亡ブルニ乘ジテ、兵ヲ豐前筑前ノ間ニ出シ、毛利氏ト戰ヒ、其豪族ヲ懾服シテ二州ヲ略取ス、永祿中、筑後ヲ取リ、肥前ノ龍造寺氏ヲ降ス、是ニ於テ大友氏提封六州ニ跨ガリ、自ラ九州探題ト稱ス、義鎭封ヲ其子義統ニ傳フ、既ニシテ龍造寺氏先叛キ、肥前筑後諸族皆携貳シ、疆域日ニ蹙マル、天正十四年、島津氏來リ侵シ、府内陷リ、義統出奔ス、明年、豐臣氏西征シ、義統ノ封ヲ復ス、朝鮮ノ役罪アリテ封ヲ收メ、之ヲ周防ニ幽シ、其地ヲ割テ中川秀成ヲ岡城（大野郡）ニ、毛利高政ヲ佐伯城（海部郡）ニ封ジ、太田宗隆ヲ臼杵ニ、福原直高ヲ府内ニ、熊谷直陳ヲ安岐（國東郡）ニ、垣見家純ヲ富來（國東郡）ニ分封ス、關原ノ役、太田、福原、熊谷、垣見四氏皆亡ビ、毛利中川二氏舊封ヲ保ツ、其餘州内封ヲ受ル者、臼杵、（稻葉貞通）杵築、（初小笠原忠知、後松平英親、）日出、（木下延俊、）府内、（初竹中重成、後松平忠昭、）森、（久留島長親）トス、共ニ七藩、又郡代ヲ日田ニ置ク、王政革新、皆廢シテ縣トナシ、又改テ大分縣ヲ置、

〔先代舊事本紀 十國造〕國前國造

志賀高穴穗朝、吉備臣同祖吉備都命六世午佐自命定賜國造、

比多國造

志賀高穴穗朝（成務）御世、葛城國造同祖止波足尼定賜國造、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十年四月庚申、外從五位下陽侯史眞身爲豐後守、

宿驛

越浦至米水津浦小浦徑測二十一町一十一間　三十五町一十七間　同猿戸至米水津浦間越徑測八町二十五間　一里三十町二十四間　丹賀浦、三十二度五十七分、三里二十町二十六間半　米水津浦浦代浦又呼浦白、間越　二里一十七町二十六間半　同小浦　一里三十二町五十一間　米水津浦色利浦、三十二度五十三分半、四里一十九町四十八間　入津浦畑野浦、三十二度五十一分、二里三町二十五間半　同竹野浦河内至元猿徑測、一十三町五十二間　四里三十三町五十八間　同竹野浦濱至黑山岬一十二町一十間半　三町三十五間半　同大坂濱至黑山岬一十二町九間　四町四十間　同元猿　二十町二十七間　蒲江浦界濱至泊浦徑測一十八町五十八間　三十三町一十一間　同泊浦、三十二度四十七分半、三里二十八町二十五間　蒲江森崎浦越田尾至鵜羹岬二十九町四間　四町四間　同丸市尾至名護屋崎三町四十三間　一里二十一町三十九間至國界二町四十五間、　同波當津和田至和田岬一町四十九間　一里三十一町五十九間　日向國臼杵郡市振村直海

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〇中略

豐後國驛馬、小野十疋、荒田、石井、直入、三重、丹生、高坂、長湯、由布各五疋、傳馬、日田、球珠、大野、海部、大分、速見郡各五疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考三西海道〕豐後武備志作豐哥、上國、管八郡、千四百七十三村、

国來百八十三村、古國前國、見國造紀、垂仁紀延喜式等、作國崎、正德二年四月、令自今宜書國崎、而今猶作國來、　速見百二十村、豐後風土記作速水、景行十二年紀、速見邑、卽是、

大分二百二十七村、古碩田國、後爲郡、建國府于此、景行十二年紀、天皇到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也、　海部百五十四村　直入二百五十四村、景行紀、直入縣、卽是、豐後風土記云、郡東有桑生枝幹直美、俗曰直桑村、後人改曰直入郡、　玖珠四十六村、延喜式等作球珠、拾芥抄作救珠、　日田九十二村、古比多國、見國造紀、和名抄作日高、豐後風土記亦作日高、豐西記作日鷹、或肥多、　大野三百九十五村

〔豐州志十豐後〕建置沿革　古豐州之地、事詳于豐前國志、　豐後割州爲前後、始置豐後州、以隷西海道、國次第四、按延喜式爲第四、或爲第六、倭名類聚抄亦然、上、管郡八、建府於大分郡、倭名類聚抄曰、國府在大分郡、則今古國府地、置守及介掾目、管太宰府承事、古太宰府總掌九州二島之政、若單稱管內六國、則謂兩筑兩豐兩肥也、文治建久之間屬鎌倉府下、東鑑曰、賴朝知行國國、相模、武藏、伊豆、駿河、上總、下總、信濃、越後、豐後等也、使大友能直爲守護職、自是世世相襲、至親世、爲九州節度使、義鑑義鎮二世、乘足利氏之衰弊、篤父祖之

十七町一十八間半至魚町三丁三十間　眞那井村西浦川口　一里四町三十三間　大神村濱至深江一丁十
二間　一里七町一十五間　川崎村　一里一十六町四十二間半至浦川口三丁四十七間半　一里一十日出南町至
十四間一丁　四町一十四間半　同上町、三十三度二十二分半、三十一町二十七間至日出町限六丁八五十間　石
七間　辻間村　三町四十五間　同頭成町　三里二十一町二十八間半　別府村北濱至北濱道三十一間二丁半
二里二十五町九間至向濱九丁七間　大分郡勢家町仲濱　三里一十七町五十二間　乙津村　三十
三町二十四間至鶴崎白滝川口三十丁三十間　志村白滝川口沿川至鶴村九丁四十九間一十　三里一十一町三十八間　海
部郡神崎村、三十三度一十四分半、二里一十六町二十四間　佐賀郷關村上浦、三十三度一十五
分、至ト浦徑潮四丁八間　二里二十五町四十八間　同下浦　三里一十五町一十六間至佐賀郷一里二十六丁尾崎村三十
二間半　佐志生村、三十一度一十分半、一里一町四十五間　黒岩村至長崎七丁　二里一町四十七間
福良村平清水　三町一十間半　臼杵畳屋町至本町四丁至臼杵城大手四十六間　三町二十三間　同唐人町
二十三度七分、五町二十六間至大手前五丁二十四間　同侍小路至津久見一里二丁四十六間至松崎村　二里三十二町四
十一間半　深江村燒尾崎　三里一十五間半至津浦一丁八十一間里二十　長目村楠屋　三里八町四十
三間半　因屋村至松崎村同北徑高三十三度四分半、三十三度四分半　八町一十六間　津久見村至岩屋三十六間同北徑高三十三　
三度四分、　三里一十町三十六間半　同網代至津井浦十八丁三十二間一　三里一十二町一十四間半　鳩浦、三
十三度四分、　一里三十五町二十九間半　落野浦摺木　二里一十一町二十五間　鶴戸浦ノウ
カ内　二里三十二町三十六間半　津井浦、三十三度三分、　一里三十五町三十八間半　宮野内
浦至海崎村中河原三町三十間　一里八町一十六間半　海崎村中河原　二里八町五十六間　鹽屋村賀田
町至桝形三十九間八　八町三十八間　同中村桝形　三十二間　佐伯鶴屋中町至上中ノ島町一十四町四十間半
一町三十間　佐伯本町、三十二度五十七分半、　六町一間　同船頭町廣小路　三里五十二間
鹽屋村大江灘　三里二町四十八間　地松浦、三十二度五十六分半、　四里九町五十二間　中

豐前國下毛郡守實村（中略）○

從豐前國香春歷英彥山至渡里村（中略）○

豐後國日田郡中島村大肥川岸　二里一十二町一十二間　渡里村（從香春至渡里）街道、通計一十三里三十五町二十間、（中略）○

從筑前國中牟田歷日田及大津至湯町（中略）○

豐後國日田郡高野村茶屋瀨（至高野村宿所六丁五十一間、北極高三十三度二十分半、）　一里一十六町三十七間半　渡里村（ワタリ）三丁四十二間　陣屋廻村（又呼日田）小野川岸　三町二十七間　中城村豆田町　二町一十二間　堀田村　九町三十六間　庄手村、三十三度一十九分、　五町三十三間　竹田村隈町　二里二十二町五十三間半（至隈川岸二十四丁六間）　續木村、三十三度一十五分半、　二里三町五十七間　出口村、三十三度一十三分、　三里一十七町三間（至國界三十三丁三十二間）　肥後國阿蘇郡宮原村宮原町（中略）○

從豐後國竹田歷善導寺至平方

豐後國日田郡竹田村隈町　二里二十四町二十三間半（至國界一里一十町一十八里）　筑後國生葉郡山北村

〔日本實測錄（二十六沿海）〕從豐前國小倉沿海至鹿兒島（中略）○

豐後國國東郡高島村、三十三度三十三分半、　四里三町四十一間（至濱村二里一十町三十七間）　堅來村（カタク）濱、（至堅來村宿所四町六間、）三十三度三十八分半、　四里三十町一十八間（至香々地村二里四町四十間、）　竹田津村濱、（至竹田津村宿所汎瀨三町八間、）三十三度四十分半、　二里二十九町三十間　櫛來村（クシク）　二里一十一町一十間　小熊毛村、三十三度三十九分半、　四里二十三町四十五間（至內田村一里廿四町三十一間）　富來村（トミク）浦手、三十三度三十六分、　四里二十一町三十二間（至小原村一里二十七丁三間）　下原村浦下原濱（又呼）　二里三十四町二十八間半　守江村　一里一十九町五十六間半　速見郡（ハヤ）守末村（至杵築馬場尾口一十三丁廿五間、從馬場尾口至中町四丁一十五間、）　一十五町二十八間　杵築谷町（至中町二丁一十一間半、北極高、三十三度二十五分、）　一町二十一間　杵築志多町（至杵築城郭六丁五間）　三里一

四間）　一里七町五十七間　勢家沖濱町（至海岸一丁四十七間）　一十町一十三間　府内櫻町、三十三度一十四分半、　七町三十三間半　同稻荷町（至府内城大手一丁二十七間）　一十八町三十四間　下郡村六本木　一里一十三町五十九間半　光吉村、三十三度一十一分半、　二里八町四十二間　野津原村、三十三度九分半、　三里三十五町四十三間　直入郡石合村小無田　二里一町一十四間　上野村　二里二十町二十一間　久住村　二里三町五十八間半（至肥後界五里三十五町五十一間半）　肥後國阿蘇郡大利村大和川岸　略○中

從豐後國久住歷竹田及鶴崎至下郡

豐後國直入郡久住村　三里一十一町五十三間半　平村（至上野村二里一十三丁五十六間半）　二町五十七間　下木村（沿川至七里村八丁九間）、　四町二間　竹田本町、三十二度五十八分、　八町二十四間　同鷹匠町（至岡城大手一十二丁二十九間半）、　三町九間　七里村　四里二町四十二間　大野郡佐代村横枕　四里一十町一十間　下津尾村犬飼町　二里二十六町一十間半　大分郡戸次市村　二里二十二町一十二間　國宗村（沿川至寺司村十七丁三十八間）、　六町四十八間　鶴崎村白滝川口　一十七町二十一間半　寺司村裏川口　七町三十八間半　三川村　一里一十二町五十間　下郡村六本木（從久住至下郡）街道、通計一十九里三十八町一十八間。略○中

從豐前國樋田歷森至堀田　略○中

豐後國玖珠郡太田村　二里一十五町三十四間　森本町、三十三度一十八分、（至隣驛二丁三間）　一里二十八町三十六間　戸畑町　二里九町四十八間　日田郡月出山村　二里三十二町六間　堀田村（從樋田至堀山）街道、通計一十四里四町三十間半、

從豐後國陣屋廻歷宇曾至英彥山

豐後國日田郡陣屋廻村　三十三町一十一間半　財津村　三里三町一十一間（至國界一里一丁四十九間）一

島　松礁(大島)　地瀬　先瀬　伊賀礁　小貝礁　地黒　沖黒島　三ッ子(竹浦河內)　觀音礁　粒島
沖ノ島　赤礁(屋形島)　赤小島(小)　赤小島(大)　辨天島(猪串浦)　的礁　松礁(深島)　フウ　礁(深島)
シ礁　假礁(小)　假礁(大)　横島

地勢

〔豐州志十(豐後)〕形勝　西南隣肥日、萬山盤礴、東北瀕大海、百川叢會、土廣田少、四塞險固、

〔萬國夢物語下〕豐後州ニ行、此國九州ノ東面ニ在テ、海ヲ隔伊豫ニ對ス、伊豫州佐田岬ヨリ、此國佐賀ノ關迄海上七里許ナリ、北ハ豐前、南ハ日向、西ハ筑前、筑後、肥後三國ニ連ル、氣候前ニ同、〇(豐國)上、管八郡、日田、球珠、直入、大野、海部、大分、速見、國﨑也、高卅八万二千石餘、臼杵、竹田、木築、森、日出、府內、佐伯城下ニテ、高合廿三万六千石餘、大名領也、人氣都テ偏塞也、温泉五ケ所有、濱湯、鶴兄原、赤湯、玖倍里、別府、(此處數ケ所大湯有)岡、佐賀ノ關ナド見過テ、南日向ニ至、

〔日本地誌提要六十八(豐後)〕形勢　豐前ノ山彙北方ヨリ來リ、綿亘屈折シテ西南二方ヲ劃シ、地勢險隘肥瘠一ナラス、東方岬灣相錯シ港泊ノ便アリ、其佐賀關遙ニ伊豫ノ御崎ニ對シテ、內洋ノ一海門ヲナス、民產頗贍、風俗陋樸ニシテ佛ニ佞ス、

道路

〔豐州志十(豐後)〕路程〇(註略)　府內城、距筑之前州福岡城三十六里半、距筑之後州久留米城三十二里半、距肥之後州熊本城二十九里餘、距豐之前州中津城十九里半、距日向州延岡城二十六里、　海路府內城、至豐之前州中津城三十一里、至長州下關五十里、至防州上關三十五里、至岩國四十八里、至豫州高濱三十七里、(自是至松山城陸路三里)至長濱二十六里、(自是至大洲城陸路五里)至八幡濱三十七里、(自是至宇和島城陸路六里)至日州延岡城五十里、至攝州大坂百四十一里、

〔日本實測錄七(ハヤミ街道)〕從豐前國湯屋歷下郡及久住至小里〇(中略)

豐後國速見郡立石　四里八町五十間　辻間村原溝川　三町四十五間　同頭成町　三里九町三十五間　別府村、三十三度一十七分、　一里三十五町五間　大分郡白木村一軒家(至由原八幡社八丁五十)

島嶼

拾三里、南北凡貳拾七里、

〔日本實測錄 島嶼 十一〕豐後國國東郡　實測　姫島、周廻四里二十町四十七間、遠測　長崎　馬之脊島

大分郡　實測　徳島、周廻二十二町五十二間、小中島、周廻一里二町二十五間、家島、周廻二十二町三十七間、遠測　立岩　笠結島

海部郡　實測　大入島、周廻五里一十八町二十九間、高松浦三十三度三十秒、（從久保浦至片嶋浦竹ヶ谷擬測二丁二）十四間、高島、（從北嶼至東嶼）一里四町四十六間半、蔦島周廻一十七町二十一間、鼎島、（佐志生村）周廻一十一町四十六間、津久見島、周廻一十六町二十六間、鼎島、（長目村）周廻一十二町五十二間、箕島、周廻六町二十間、保戸島、（從南嶼至北嶼）三十四町四十一間、中島、（從南嶼至北嶼）二町三十間、產島、周廻二十一町四十六間、中方島、周廻三十一町四十二間、沖方島、周廻一里一十七町四十九間、長島、周廻一里一十町一十五間、黄島、周廻一十一町二十五間、島屋島、周廻一十三町三十二間、八島、（從西嶼至東嶼）一十八町、大島、周廻二里六町、（從鶴崎至赤鼻五町從南嶼至北嶼三町四十四間）小間島、周廻九町一十七間、高手島、周廻七町五十五間、横島、（從東嶼至南嶼）一十九町一十二間、屋形島、周廻一里七町五十五間、深島、周廻一里一十一町三十四間、遠測　牛島　無名島（高島）　海獺礁（アシカバエ）　夜礁　三ッ子島大（佐志生村）　三ッ子島中　三ッ子島小　殿礁　無名島（中津浦）　舟島　白石　黑石　小島大（長目村）　小島小（長目村）　地向島　沖向島　臺島　ウサイ島　小島（津久見村）　龍礁　辨天島（津久見村）　中ノ島（津久見村）　沖吉島（津久見村）　餅實島　前島　木船島　三子島（落ノ浦）　沖吉島（落ノ浦）　高井島　先小島　硯取礁　鴨礁　二見島　鉛礁　高甲島　汐トリ礁　小島（津井浦）　沖干島　千島　竹島（大入島）　玉角島　片白島大　片白島中　片白島小　東島　蛭子島　唐船礁　村礁　無名島（鶴屋）　無名島（久部村）　寶作島　濃地島大　濃地島中　濃地島小　竹ヶ島（鶴御崎）　島崎　小島（中鶴御）　宇戸

凡テ十郡ト爲シ、大分縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕豐後 止與久邇乃美知乃之利

〔假頭屋本節用集 不天地〕豐後 ブンゴ 豐州

〔日本風土記 一寄語島名〕豐後 奉晉 フォンゴウ

〔易林本節用集 下〕豐後、豐州

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

豐後府內 後町 極高三十三度一十四分半、緯度西四度五分半、從小倉 經宇佐 三十三里四町半、 三百一十六里一十二町三十四間半 ○從東京

豐後岡 竹田町本町 極高三十二度五十八分、經度西四度一十七分半、從小倉 經宇佐及府內 四十六里三町、 三百二十九里一十一町五間半 ○從東京

〔日本經緯度實測〕北極出地

豐後 府內 三三度一四分三〇秒 岡 三三度五八分〇〇秒

杵築 三三度二五分〇〇秒 臼杵 三三度〇七分〇〇秒

佐伯 三二度五七分三〇秒 ○中略

東西里差

山城 京 〇度〇〇分〇〇秒 ○中略 豐後 岡 西四度一六分五四秒

疆域

〔豐州志 十豐後〕疆域 東抵海濱、西抵肥之後州、及兩筑二州界、南抵日向州界、北抵海濱、及豐之前州界、

廣袤 東自海濱 海部郡佐賀關 西至筑之後州界 日田郡日田代村 南自日向州界 大野郡西山村 北至海濱 國東郡竹田津 東西三十里而近、南北三十三里而遠、

〔日本地誌提要 六十八豐後〕疆域 東北ハ海、南ハ日向、西ハ肥後、筑後、筑前、北ハ豐前ニ至ル、東西凡貳

歎峯、如群仙駢肩、露其半身、萬松振鬣、鼓濤於雲中、又如廿五菩薩奏樂而至也、遥下鼠智林、含公慮吾酒者預戒家僮、駄樽於馬來、取醉宿阿保村、翌歸寺、又三日辭去、踰海東歸自海雲中、顧望鎮西山岳、其高豐前者、皆有別態、耆山其尤大者、耶馬山脈水理、盡皆自耆山發、故獨絶耳、〇中略然目此山水、爲海内第一者、乃自賴子成始、〇下略

〔延喜式兵部二十八〕諸國器仗〇中略　豐前國甲二領、横刀八口、弓廿張、征箭卌具、胡籙廿具、

〔續日本紀文武三〕大寶三年九月癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也、

〔續日本紀元明六〕和銅七年閏二月壬寅、〇是月戊午朔、無壬寅、閏二月疑三月誤、隼人昏荒野心、未習憲法、因移豐前國民二百戸、令相勸導也、

〔類聚三代格五〕太政官符

應補筑後、肥前、肥後、豐前豐後五箇國醫師事、〇中略

承和十二年七月十七日〇全文載筑後國部、

豐後國

豐後國ハ、ブンゴノクニト云ヒ、舊クハトヨクニノミチノシリト云フ、本ト豐國ト稱シ、豐前國ト一國タリ、西海道ニ在リテ、南ハ日向、北ハ豐前、西ハ肥後、筑後、筑前ニ界シ、東北ハ海ニ臨メリ、東西凡ソ二十三里、南北凡ソ二十七里、其地勢ハ、山脈北方ヨリ來リ、連亘屈折國内節ル、平衍ナラズ、其海洋ヲ豐後水道ト稱シ、遙ニ四國ノ伊豫ト相對ス、此國ハ古ヘ國府ヲ大分郡ニ置キ、日田、球珠、直入、大野、海部、大分、速見、國埼ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世國埼ヲ改メテ國東トス、明治維新ノ後、國東郡ヲ東西ノ二郡ニ分チ、海部郡ヲ南北ノ二郡ニ割キ

余嘗讀昔人畫、疑其山貌太奇峭、恐非天壤間所有、畫人一時興到、鼓舞其筆墨耳、及觀耶馬溪、乃知造物奇怪畫手亦有寫不到者也、歲戊寅、〇文政元年遊鎭西、過海、南望彥山於雲際、已覺其有異矣、旣經二肥薩隅、還寓豐後隈邑、臘月五日、入豐前、過一水北來、蓋發源彥山者、沿焉而東數十里、昏黑覺左右峯巒皆非凡、山溪相迫處、鑿山腹為道、又穿牖取明、余買炬以入、過牖窺見月在溪水朗然、宿民家、翌大霰、待霽乃發、復沿溪東、愈東愈奇、群峯夾水攢竦、如春筍矗出、有土戴石者、石挾土者、全石者、全石破裂成洞穴者、兩石相鬭、其一欲仆者、石數層累、成夏雲狀者、而樹自石罅橫生縱生倒生而上指、叢生嵌石、如與石爭勢而欲勝之、石又自樹中奮躍而出、而石陰皆苔、紫綠相間、或沒石半面、或沒全身、又如攫樹攻石者、大抵峯勢石皴、如董巨刻意圖、時窮冬、多老木葉脫、槎牙瘦古、皆倪黃筆法、而苔枯蘚蒼渴者、王叔明也、古人筆墨不吾欺也、至柿阪憩孤店、店面石壁數丈、飛泉懸焉、仰則更有高峯、不知其幾十丈、余急釋所佩酒瓢、命燖之、巃突蒼然、會一獵師新獲豪豬、割而煑之、肪脆如水、連引數大白、又行、溪又數曲、隨峯勢上下、或激雷噴雪、或渟膏凝碧、峯影為之或碎或全、似水妬山而亂其影也、至屈智林、溪稍開、有小村、過一橋、自此行溪北、闢者益開、數十里、詣古城正行寺、寺主含公、余故人、竢余既久、余先詫曰、君州山水大奇、含公曰、更有奇者、使子目之、居二日、與含公南行、行田塍間、至仙人巖、巖石突立山頂、含公指示余、余不甚賞、其明又徑田塍、至羅漢寺、寺據山、鑿山作洞、窒橋梁狀、安五百像、余復不甚賞、宿寺前逆旅、挑燈而談、余曰、山不得水不生動、石不得樹不蒼潤、所以余賞馬溪而不賞仙巖、至於羅漢則人工耳、然皆馬溪之支裔矣、且馬溪溪山相迫、無田塍礙目、而其路坦夷、眞可遊也、然為二豐通道、過者慣看、況公等生長此土、宜不異其奇也、余則再遊不可期、將復溯之以諦觀之、含公奮袂與偕早發、過一水北出馬溪口、峯容樹色、忽覺迥別、自淺入深、自平入奇、泝前數曲者、一曲奇於一曲、比諸前遊更可喜也、復至絕壁下孤店、店主識余面、驚曰、是前喫猪客也、有何幹、再來此耶、余曰、欲看山耳、曰山有何好看、吾不解子看也、遂席溪畔、與含公傾瓢一醉、宿山寺、明雨、借轎西還、山峯得雨、皆變幻作態、或前以為一山者、分成

名所

亦自然ニ勤ル處之人有ハ、其氣質之汚レテ能ク削ル人ハ、其志之厚キ事專而可仰所ナリ、

〔日本鹿子十四〕同國(豐前)中名所之部、

規矩　郡也、高濱長濱など丶云有也、赤坂と小倉の間也、

是よりや天の河原につゞくらん星かと見ゆるきくの高濱

簑島(ミノシマ)　當國かんたと云所の東海上一り計也、無雙の景地也、

柴津山(シバツヤマ)　笠結島　古は大歌所の御歌

柴津山打出てみれば笠結の島こぎ歸る棚なし小舟

鏡の山　宇佐の宮井　文字の關

柳の浦　此浦にて、左中將清經身をなげむなしくなり給ふ所と云、

〔豐前國志一下〕門。司。が。關。

此古跡、今漁夫家あり、壽永戰亂記に、甲宗の濱と記せり、長門の赤間が關と遙向ひにあり、關所の跡詳ならず、上の山を筆立山と言、甲宗の社あり、古歌多く有、略す、

〔西遊雜記一〕或說に、文司ケ關の所は、往古は長門の地なりしに、神功皇后の御時に大に地震して大波來りて、今の如く地裂て海と成しと云、

〔豐前國志四下〕耶。馬。溪。

右同書(豐國記)に云、樋田の先一里、羅漢より五丁計前、左の方川に近所、大岩數十本欹てる所有、其高き事數十丈、或は八九丈、他郡にて未見大岩也、向にも又あやしき大岩あり、

此耶馬溪の名は、賴山陽が名けしと云、此大岩の間、今に赤松の大木立交り、眞に近國無雙の絶景の地也、

〔山陽遺稿七記〕耶馬溪圖卷記

客作兒（客作兒、原作二寄作兒一、今據二一本一改、）先潔濟齋戒、中二奏八幡大菩薩宮一、

〔佐藤元海九州記行〕一小。倉。城（豐前）ハ、細川三齋ノ所築ナリ、（○中略）物產ハ木綿布、及ビ火打鎌等世ニ名アリ、其他種々ノ物ヲ出ス、近來紙ヲ漉クコトヲ勵ミ、半紙ヲ出スコト多ク、且上品ナリ、

人口

〔官中秘策　五〕豐前國　八郡（○中略）

一人數貳拾四万貳千六百五拾三人　內（男拾貳万九千八拾六人　女拾壹万三千五百六拾七人）　高貳拾七万三千八百壹石餘　豐前國

〔吹塵錄　五人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）（○中略）

（御料私領）一人數貳拾三万五千九百五拾人　內（男拾貳万五千七百貳人　女拾壹万貳百四拾八人）（○中略）

（弘化三丙午年）諸國人數調（○中略）

（御料私領）一人數貳拾四万九千貳百七拾四人　內（男拾貳万九千四百四人　女拾壹万九千八百七拾人）　高三拾六万八千九百拾三石餘　豐前國

風俗

〔人國記〕豐前國

豐前國之風俗、譬バ如二馬、馬ニ名馬有、曲馬有、色々之毛品有、長ケ高ク、様子ウルハシク品能キ馬ノ如シ、然レドモ曲有之時雖レ用者也、然バ馬ニ比而是ヲ見レバ、如二曲馬一ト可レ知、亦曲馬ニ走ル有、止ル有、喰有、蹈有、其曲無ク中氣ナル有、サレバ是國之風儀、何レノ曲セ有ト考ルニ、唯中筋ノ如馬ニテ、眞實定リタル意地ナク、死生ヲ論ズル場ニ至ル時、人ト而死ハ重キト云事不レ知ト云事ナシ、然ドモ不レ得レ止時ハ、爲レ忠一命ヲ捨、爲レ孝死ヲ致シ、爲レ義命ヲ失フ事、常ノ習ヒ也ニ、是國之風俗、忠孝義理ヲ忘レテ命ヲ遁ルヽモノ、千人ニ七八百人如レ是也、サレバ是理ヲ不レ知カト思ニ、左ニハ非ズ、能ク知テ能ク失レ道者也、誠ニ一旦之恐ノ爲ニ命ヲクジク者、雖レ有レ之、義ニ因テ命ヲ捨ル所之者鮮シ、蓋是理ニ本ク人無ク而、唯氣質之儘ニ執行スル所ノモノナレバ、不義不理ナリ、曲馬國トモ可レ謂乎、

出擧稻

〔延喜式 主稅 二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻 中略

豐前國、正稅公廨各廿万束、國分寺料一万四千二百七十四束、文殊會料二千束、府官公廨□万束、衞卒料一万七千五百五十四束、修理府官舍料六千束、池溝料三万束、救急料四万束、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕豐前國 中略 管八 (中略)正公各二十萬束、本穎六十萬九千八百二十八束、雜穎二十萬九千八百二十八束、

國產 貢獻

〔延喜式 主計 二十四〕凡貢夏調絲者、中略 並七月卅日以前納訖、中略

豐前 中略 右廿五國中絲、中略

豐前國 行程、上二日、下一日、

調、綿紬十七疋、自餘輸絹、綿、絲、貢布、烏賊、雜魚楚割、

庸、輸綿、米、

中男作物、防壁、韓薦、折薦、黒葛、黄蘗皮、海石榴油、胡麻油、荏油、烏賊、雜魚楚割、鹿鮨、猪鮨、漬鹽年魚、鮨年魚、

〔延喜式 主稅 二十六〕凡鑄錢年料銅鉛者、中略 豐前國銅二千五百十六斤十兩二分四銖、鉛千四百斤、每年採送、卽以鑄錢司收文、進官、下所司、令勘會稅帳、

凡備中長門豐前等國、採銅鉛料稻、斤別充三束九把六分五毫七厘、

〔毛吹草 三〕豐前

芳來 小倉酒　木綿島　同帶　切熨斗　內裏馬刀 此外ニモ　文司關硯石　水精　ノガノ燒

物　彥山菅木　湯嶽硫黃

〔三代實錄 十六 淸和〕貞觀十一年六月十五日辛丑、太宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乘艦二艘、來博多津、掠奪豐前國年貢絹綿、卽時逃竄、發兵追、遂不獲賊、

〔三代實錄 三十三 陽成〕元慶二年三月五日辛丑、認令太宰府採豐前國規矩郡銅、充被郡鑄夫百人、爲採銅

藩封

田數石高

建武四年三月七日　源朝臣（花押〇足利直義）

〔慶應元年武鑑〕小笠原左京大夫忠幹（帝鑑間従四位侍従元治元子五月任）拾五万石　居城豊前企救郡小倉（江戸ヨリ）海陸二百六十六里餘

（冷泉五郎高祐居、後森壹岐守、同豊前守以後、黒田官兵衛孝高、同筑前守長政、慶長五、細川越中守忠興、同越中守忠利、寛永九、小笠原右近大夫忠眞以後代々領之、）

〔慶應元年武鑑〕奥平大膳大夫昌服（帝鑑間四品）拾万石　居城豊前下毛郡中津（江戸ヨリ）海陸二百六十八里

（天正八、黒田持、慶長五、細川領、寛永九ヨリ小笠原信濃守長次、同修理大夫長胤、元禄十三ヨリ小笠原信濃守長圀、同遠江守長邑、享保二ヨリ奥平大膳大夫昌成、以後代々領之、）

小笠原近江守貞正（帝鑑間）一万石　在所豊前小倉新田（〇節略）

〔倭名類聚抄　五國郡〕豊前國（〇中略）管八（田萬三千二百餘町）

〔伊呂波字類抄　不國郡〕豊前國（管八、中略）本田万三千二百七十八丁三反二百六十二歩

〔拾芥抄　中本末朝國郡〕豊前（上遠）八郡（中略）田萬三千二百卄一町

〔運歩色葉集　諸國之郡名〕豊前八郡（中略）田數一万千百六十五町

〔海東諸國記〕豊前州　郡八、水田一萬三千二百七十八町二段、

〔豊前志　一總論〕宇都宮家譜云、豊前國八郡、一萬五千餘町也、内三百三十餘町者、宇佐宮御領、同二千五十一町者、十六人地頭職世々配分之、或記云、豊前國總高二十七萬三千八百一石八斗四升八合三勺、（重春云、是は細川家より小笠原家に引渡されたる高なり、）

〔日本鹿子　十四〕豊前國八郡、大中國、南北四日、（〇中略）知行高三十三万七百四十石、

〔官中秘策　五〕豊前國　八郡（〇中略）

一石高貳拾七万三千八百壹石餘

〔吹塵録　五人口及國高〕天保度御國高調（〇中略）

豊前國（御料私領）　一高三拾六万八千九百拾三石六斗四升五勺

莊保

落サント、三浦策ヲ廻シケル、

〔地理纂鑑〕中津城

城地を扇ヶ城と號す、平城也、往昔より小館は有之といへども、城と云にもあらず、天正十五年、黑田官兵衛孝高居城とす、〇中略東は高田津、西は今井津也、其中央に有故に中津と云、此城海濱に據り、前後に川を帶、總堀繞郭、海に續たり、城門に假橋を懸け、往來の道とし、大船出入に便よし、大門三方に設たり、違干かたにしてよき城也、

〔志賀文書二〕筑前國嘉摩郡綸別莊內佐古名、豐前國上毛郡內本今吉名吉木壹丁、同國下毛郡安恒名、同國宇佐莊內蒔屋敷等、并田地豐後國安岐鄉內諸田名、松武名、諸田名、內龜丸名、田島屋敷、山野、荒野等、右所々宇佐氏女當知行、不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月一日　式部大丞花押

〔住吉神社文書〕寄進　筑前國一宮〇原書此下虫損

豐前國河崎莊地頭□□

右今度之義兵、達本□□新天下之安事家門□繁昌、所寄進如件、

建武三年三月八日

〔太宰管內志豐前四全徵部〕門司八幡社

尊氏卿寄附狀に寄附門司關八幡宮、豐前國苅田莊內光國保地頭職事、右爲新義兵之成戰、黎民之安全、當家之繁昌、子孫之長久、所寄附如件、建武三年卯月十一日、源朝臣判、

〔二階堂文書〕下　隱岐三郎左衛門尉行雄法師法名行存

可令早領知筑摩國阿多郡北方田布施鄉半分、豐前國金田庄內金田村半分地頭職事

右任代々下文、并延慶二年六月廿九日外題安堵、可領掌之狀如件、以下、

件、

建武元年十二月二十一日　　　　　　　　　　　彈正忠行〈花押〉

宇禮志野六郎殿〈直○進〉

〔大友文書　二〕雜訴決斷所牒　豐前國衙

狹間大炊四郎入道正供申當國御沓村地頭職〈基濟師勝法〉事

牒、任去月二十五日綸旨、宜沙汰居正供於下地之狀、牒送如件、以牒、

建武元年十二月二十二日　　　　左少史高橋朝臣〈春○俊〉判

〔豐前志　五仲津郡〕豐日別國魂宮〈○中略〉重春云、〈○中略〉吾が友神宗定〈當社祠官也〉が所藏せる小早川隆景主の制札の文云、

禁制　草場村　官幣大神宮

右諸軍勢甲乙人、濫妨狼藉、幷竹木採用之事、堅令停止畢、若於背此旨者、可處嚴科者也、仍下知如件、

天正十五年二月六日　　　　左衞門佐〈花押〉

〔西遊雜記　二〕小倉の城は、細川三齋翁の築き給ひし所にて、要害よき城なり、〈主圖合結の圖に適ふ事なし〉新城故にさしての舊跡なし、產物に小倉木綿といふあり、他國になき上品の木綿也、賣買には甚だ稀也、火打あり、是も產物とし、價金一分迄の火打有、火の出る事尤妙也、

〔安西軍策　六〕豐前小倉城合戰幷中國勢九州渡海事

天正十四年、九州先手之儀、毛利三家可有發向之旨、秀吉公ノ命ヲ承、先輝元朝臣ヨリ三浦兵庫ヲ爲大將、三刀屋彈正左衞門、桂兵部、福間彥右衞門等ヲ先トシテ、三千餘騎、豐前小倉へ差渡、門司ノ城ニ入置給、カヽリケル處ニ、高橋ガ端城小倉ノ城ヨリ足輕ヲ出シ迫合ケル間、先小倉ノ城ヲ攻

村里名邑

建武三年三月十五日　漆島清幹
進上御奉行所　承了（花押）高師泰〇

〔黑水文書〕花押
豊前國下毛郡穴。石。鄕。武行名内永町島町五町事、任父種榮之讓以下證文、領掌不可有相違之由、被仰下候也、仍執達如件、
建武四年三月廿九日　左近將監親貞奉
久保彥三郎殿

〔郡名一覽〕豊前國（御料私領）　豊州　南北四日　八郡
高貳拾七万三千八百石八斗四升八合三勺　六百六十八ケ村
●小倉　二百六十六里　●中津　二百六十八里　・∧四日市　二百八十八里
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國盧村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕豊前（御料私領）　八郡、六百七十七村、
高二十六万八千九百十三石六斗四升五勺
企救郡五十五村　田川郡六十三村　京都郡六十三村　中津郡七十四村
築城郡三十九村　上毛郡七十三村　下毛郡八十一村　宇佐郡百八十六村

〔地勢提要〕（坤）郡邑島嶼奇名
豊前　企救郡、大里村、柚杓田村、猿喰村、吉志村、朽網村、荒生田村、蒲津村、和合良島、天子島、藍島、飯瀨、京都郡、苅田村、上毛村、三毛門村、塔田村、築城郡、八田村、松江村、宇佐郡、高家村、下毛郡、冠石野村、田川郡、香原町、採銅所町、

〔曾野家古文書（佐賀文書纂所收）〕豊前國神崎村十七分壹地頭職、任綸旨可令知行之由、國宣所候也、仍執達如

鄉

(倭名類聚抄 九豐前國)田河郡 香春 雉怡 位登 城田

企救郡 長野 蒲生

京都郡 諫山 本山(○山、高山寺本作田、) 苅田 高來

仲津郡 呰見 務見(○見、高山寺本作野、) 城井 狹度 高屋 中臣 仲津 高家

築城郡 綾幡 桑田 桐木 大野

上毛郡 山田 炊江 多布 上身

下毛郡 山國 大家 麻生 野仲 諫山 穴石 小楠(○楠、高山寺本作橘、)

宇佐郡 野麻 酒井 葛原 封戶 向野 廣山 垣田 高家 深見 辛島

(東大寺正倉院文書 四十)豐前國仲津郡丁里戶籍

(繼目裏書)豐前國仲津郡丁。里。太寶二年籍

(東大寺正倉院文書 四十一)豐前國上三毛郡塔里戶籍

戶主丁勝馬手年肆拾肆歲 正丁 課戶(○下略)

(繼目裏書)豐前國上三毛郡塔。里。太寶二年籍

塔勝稻手年貳拾貳歲 兵士 寄口(○中略)

豐前國上三毛郡加目久也里戶籍

(繼目裏書)豐前國上三毛郡加。目。久。也。里。太寶二年籍

女河邊勝口口賣年拾歲 小女 口口口口(○下略)

(釋日本紀 十述義)豐前國風土記曰、田河郡鹿。春。鄉。、昔者新羅國神自度到來、住此川原、便卽名曰鹿春神、

(乙咩文書)八幡宇佐宮神官兼豐前國高。家。鄉。內、大太郎犬丸所名一方地頭、又五郎淸幹、馳參御方候訖、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

の頃までは、猶正しく唱へたりし成るべし、○中略或記云、細川家より御引渡の高、下毛郡四萬三千百九十二石四斗三升八合九勺九才、

〔續日本紀十三〕天平十二年九月己酉、大將軍東人等言、豐前國○中略下毛郡○郡原作野、據一本改、擬少領无位勇山伎美麻呂、○中略率郷官軍、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

豐前國○中略　下毛郡五日、請文十五日、○中略

寛正二年六月廿九日　備中守在判秀明○下略

宇佐郡

〔豐前國志四下〕宇佐郡

此郡の名義は、神武天皇菟狹に行幸し、時宇佐津彥命、宇佐津姬命、足一ッ騰の宮をまふけ、大饗を獻りし事見へ、其後景行紀菟狹川に至り云々、其後宇佐と云事所々に出たり、古き郡名と通ゆ、一の峯に斷り置し如く、全數の地よりは遵法も遠き所なれば、こまかに知得難く、百分の一をもと記し置此郡東は豐後遠見玖珠の兩郡、西は下毛郡に隣り、北は海也、郡內都て二百餘村有、當國第一の大郡なり、

〔豐前志九〕宇佐郡上十町廿、村二百○中略或記云、細川家より御引渡の高、宇佐郡七萬五千八百九十九石三斗六升八合五勺、

〔日本書紀三神武〕其年○中略太歲甲寅十月辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、○中略行至筑紫國菟狹、菟狹地名也、此云宇佐、時有菟狹國造祖、號曰菟狹津彥菟狹津媛、乃於菟狹川上、造一柱騰宮而奉饗焉、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

豐前國○中略　宇佐郡六日、請文十七日、○中略

寛正二年六月廿九日　備中守在判秀明○下略

（豐前志七）上毛郡〇鄕四、村七十三、中略

重春云、上毛を、今カウゲと唱ふは、音便に崩づれたるなり、或人が所藏せる正安四年の田地沽渡證文には、下毛をシモツミケと書けり、然れば、上毛をも其頃まではカムツミケと正しく唱へりし事著し、扨上毛、下毛と郡を、上下に分ちたるは、稍後世の事にて、往昔は、美毛郡と云ひたりけむ、そは上毛、下毛の郡界を流るゝ河を、景行天皇紀に御木川とあるにて知らる、總べて上下前後の名、郡國にあるは、後に別ちたるものにて、豐前豐後は、本豐國なるを前後に分ち、上野下野は、本毛野國なるを、上下に分てる類皆同じ、猶美毛の名義は、下毛郡大江社の下にて云はむ、

或記云、細川家より御引渡の高、上毛郡、三萬五百七十石八斗一升六合一勺一才、

（續日本紀十三聖武）天平十二年九月己酉、大將軍東人等言、豐前國〇中略上毛郡擬大領紀宇麻呂等三人、共謀斬賊徒首四級、

（大內家壁書）從山口於御分國中行程日數事〇中略

豐前國〇中略　上毛郡五日、請文十五日、〇中略

寛正二年六月廿九日　備中守奉　秀明〇下略

下毛郡

（豐前國志四下）下毛郡

此郡の名義は、和名抄下毛郡、万葉集略解にも上毛郡に付ての名成べしとあり、己も同考也、此郡も米の味美土地なれば、上下御膳の名あるものならん、

（豐前志八）下毛郡鄕七、村百、

和名鈔に、上毛を加牟豆美介と訓めれば、下毛には訓は無けれど、志毛豆美介と訓むべき事は推して察るべし、今はシモゲと稱ふなり、正安四年の古文書には、シモツミケノコホリと書けり、其

築城郡

〔郡名考〕豐前　築(筑)城ツイキ

〔豐前國志四上〕築城郡名義

此郡の名義は、古き書に見えたらず、和名抄筑城郡、續紀築城郡の擬少領云々、築城といふ稱いづれの比より起りしもの歟、其證を傳へず、西は仲津郡、北は海、南は下毛、東は上毛の三郡に隣り、山海相對したる縣なり、奥山に城の鄕と云岩山あり、絶景の地にて、日本圖にも出たり、

〔豐前志六〕築城郡○鄕四、村四十七、中略

重春云、天智天皇紀に、四年秋八月、遣達率憶禮福留達率四比福夫於筑紫國、築大野及椽二城と云ふ事あり、是れ和名鈔に出でたる大野椽木の二鄕なる由は、下に云ふが如し、築城と云ふは、此の城を築きしに因る稱なるべし、

或記云、細川家より御引渡の高、築城郡、二萬二百二十七石六斗六升七合一勺一才、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月己酉、大將軍東人等言、豐前國○中略築城郡擬少○少原脱、據一本補領外大初位上佐伯豐石兵七十人來歸官軍、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

豐前國○中略　築城郡四日、請文十三日、○中略

寛正二年六月廿九日　備中守在判秀明○下略

上毛郡

〔郡名考〕豐前　上毛カンツミケ　カフケ

〔豐前國志四上〕上毛郡名義

此郡の名義に、景行帝此國に久しく坐々て、上膳米を納めし所故、此稱起りし事に思ふ、筑後風土記に、石井の君皇風に反傚、豐前國上膳縣南山曲に終云々、亦御木川、御木村もあり、和名抄上毛郡今上毛郡と訓、古より來の上品所なる故の稱と通ゆる也、

砂交りに美敷く光りありて、明き土地なりけり、〈長峡の丘山四方に因りて山脈なし〉如長島、
〔日本書紀 景行七〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、到豐前國長峡縣、興行宮而居、故號其處曰京也、
〔日本靈異記 上〕非理奪他物、爲惡行受惡報示奇事緣第卅
膳臣廣國者、豐前國宮子郡少領也、藤原宮御宇天皇之代、慶雲二年乙巳秋九月十五日庚申、廣國忽死、逕之三日戊日申時、更甦之而語之曰、使有二人、一頂髮擧束、一小子也、〈○下略〉
〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年九月戊申、大將軍東人言、殺獲賊徒豐前國京都郡鎭長太宰史生從八位上小長谷常人、己酉、大將軍東人等言、豐前國京都郡大領外從七位上楉田勢麻呂、將兵五百騎、〈○中略〉來歸官軍、
〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〈○中略〉
豐前國〈○中略〉 京都郡四日、請文十二日、〈○中略〉
寬正二年六月廿九日 備中守〈判〉秀明〈○下略〉

仲津郡

〔豐前國志 三上〕仲津郡の名義
此郡の名義は、豐後風土紀に、豐前國仲津郡中臣村に云々、和名抄仲津郡、こゝは國の中央に有故の稱にして、三渠の中津环よめり、郡內に國分もあり、諸方へ街道の地にして、西は京都田川の二郡に堺ひ、北は海、東は築城郡下毛郡に隣る、分內も廣く、打開きたる土地なり、
〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年九月己酉、大將軍東人等言、豐前國〈○中略〉仲津郡擬少領无位膳東人兵八十人、〈○中略〉來歸官軍、
〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〈○中略〉
豐前國〈○中略〉 仲津郡四日、請文十三日、〈○中略〉
寬正二年六月廿九日 備中守〈判〉秀明〈○下略〉

企救郡

豐前國〇中略　田川郡四日、請文十三日、〇中略

寛正二年六月廿九日　備中守判　秀明〇下略

〔郡名考〕豐前　企救今規矩郡

〔延喜式二十二民部〕郡　註　企救郡、今書規矩郡、

〔豐前國志一上〕企救郡名義

此郡の名義は、舊事天神本紀天孫降臨之條、筑紫聞の物部と記され、又雄略天皇御卷に、其十八年、伊勢女郎反ク條、築紫聞物部大斧手と云人あり、其後企玖、規矩など書、今企救郡と書く、此郡は國の西北の方にあり、東北は海、西は筑前遠賀郡鞍手二郡に堺、南は田川京都二郡に隣る、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月戊申、大將軍東人等言、殺獲賊徒、豐前國〇中略企救郡板櫃鎭小長凡河内田道〇下略

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

豐前國〇中略　規矩郡三日、請文十三日、〇中略

寛正二年六月廿九日　備中守判　秀明〇下略

〔大友記〕豐州勢退散之事

鑑種〇高橋ハ豐前ノ國規矩郡フタマハツテ、小倉ニ在城ス、

京都郡

〔豐前國志三下〕京都郡の名義

日本紀景行天皇紀、幸筑紫到豐前國長峽縣、興行宮而居、故號其處曰京也と云々、此時より京都郡の名起れりと云、如本文長峽縣にいたりとあれば、是より前の名早く長峽縣と云ふ所と通ゆ、此處は平尾の小山長く引出てある故に、長尾と古くより唱來りしものならん、此郡は高山深山もなく分内も狹まし、昔より京都仲津の兩郡は國の中央にして、四方への衝の地なり、郡内土白く、

下毛紀	菟狹紀	
	宇沙古	
下毛	宇ウ佐サ	管八
同	同	同
同	同	八郡
同闕郷文	同闕郷文	
同ミゲ	同ウサ	同
同	同	同
同シモゲ シモツミケ	同ウサ	同
同	同	同

田河郡

〔郡名考〕豐前　田河川タカハ

〔豐前國志二上〕田川郡名義

此郡の名義は、景行天皇紀、十二年、高羽川、亦斎山紀鷹羽郡、和名抄田河郡、豐前風土紀田河郡云々、今田川郡と書く、此郡は當國西南の方にあり、西は筑前國上坐、嘉摩、鞍手の三郡に堺ひ、南は豐後國日田郡に隣る、東は京都仲津下毛の三郡にさこふ、北は企救郡にとなりて山深し、

〔日本書紀景行七〕十二年九月戊辰、到周芳娑麼、○中略爰有女人曰神夏磯媛、○中略參向而啓之曰、願無下兵、我之屬類、必不有違者、今將歸德矣、唯有殘賊者、一曰鼻垂、妄假名號、山谷響聚、屯結於菟狹川上、二曰耳垂、殘賊貪婪、屢略人民、是居於御木(木此云開)川上、三曰麻剝、潛聚徒黨、居於高羽川上、○中略其所據并要害之地、

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年十月壬戌、大將軍東人言、○中略降服隼人贈唹君多理志佐申云、逆賊廣嗣謀云、從三道往、○中略多胡古麻呂(不知所率軍數)從田河道往、

〔續日本後紀仁明六〕承和四年十二月庚子、太宰府言、管豐前國田河郡香春岑神○中略望預官社、以表崇祠、許之、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

下毛〔中津〕大郡ナレドモ山バカリニテ村被少シ　豐後界ヨリ海ニ貫

宇佐　●桑澤　●宇佐　○八幡社　豐後界

○按ズルニ本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國〔編〕郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕豐前

六國史古書		延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治撥革緯	地誌提要	郡區編制
闕 規矩	企救 聞	企救	同	同	同	同	同	同	同	同
		田河	同	同	田河 田川	田川	同	同	同	同
長峽 京	宮子	京都	同	同	同	同	同	同	同	同
		仲津	同	同	仲津 中津	仲津	同	同	同	同
		築城	同	筑城	築城 築城	筑城	築城	同	同	同
上毛	上膳	上毛	同	同	同	同	同	同	同	同

国府

にて十三萬石、豐前一國の內は大名衆竹中源助、扨其外御臺所入、

〔倭名類聚抄五國郡〕豐前國國府在京都郡

〔豐前志五仲津郡〕在廳屋鋪

草場村に、在廳屋鋪と稱ふ處あり、是れ國府の蹟なるべし、○中略按ふに、在廳は國府に在る土著の官人を云ひ、其の官人の居る府をも、在廳と云ふなり、神宗定○前記官幣宮司官豐日別國魂宮が所藏の天文十年、大內家の文書には、太宰府をも在廳と云へり、出雲風土記、兵部式、三代實錄等に、國廳と見えたるも、在廳と同じく國府を云ふなり、扨和名鈔に國府在京都郡とあるは、甚疑し、若くは誤には非るか、或は往方京都郡なりしを、後に此の郡に移せる事のありしか、後紀に、延曆廿三年正月壬寅、遷但馬國治於氣多郡高田鄕、同四年十一月乙酉、遷攝津國治於江頭など見えたるは、國府を遷せる例なり、三代實錄に、出羽國府を移せる事も見ゆ、但總社國分寺、續命院など、皆當郡にて、近く隣村なるに、京都郡には、然る名の存れる事も聞えざるは、是は必源順ぬしの誤とぞ所思る、且草場、國作兩村の西方に、高貴人の墳墓と思しきもの廿三あり、是れ國司四等の官人等を葬りたる所にても有りぬべく思ゆれば、旁國府は草場村なりし事、疑なかるべし、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕豐前國略○甘管八略○註田河 企救多岐 京都美夜古 仲津 築城豆伊岐 上毛加牟豆美介 下毛 宇佐

〔延喜式二十二民部〕豐前國上、管田河タカハ 企救キク 京都ミヤコ 仲津ナカツ 築城ツイキ 上毛カムツケ 下毛 宇佐○中略 右爲遠國

〔皇國郡名志〕豐前國八郡

田河タカハ ●猪膝 △彦山權現 山バカリ 筑前界

京都ミヤコ ●苅田 △ワナシキ天神 企救ニ並郡

築城ツイキ 山バカリ在郷無シ 國中

企救キク ●川原市 ●石ワリ 小倉 ●內裏 ●門司 筑前界長門內海ニ向

仲津ナカツ 山バカリ三ケ村 △彦山ヨリ出ル川郡ノ中央ニ流 國中傾ノ返シ

上毛カムツケ ●松江一村限 △高瀬川 下毛ニツヾク郡

〔先代舊事本紀國造十〕宇佐國造

橿原朝、〇神武高魂尊孫宇佐都彥命定-賜國造、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年九月己巳、從五位下大伴宿禰百世爲豐前守、

〔大友記〕大友由來之事

大友豐前守左近將監能直ト申ハ、右大將賴朝公之御息也、其謂ヲ尋ルニ、上野國大友四郎大夫經家之息女ヲ賴朝寵愛マシ〳〵、懷妊トナラセタマヒシ時、大友齋院之次官親義ニタマヒテ、後誕生ナリシオンナウシヲ、市法師殿ト申サレシハ此人ナリ、〇中略去程ニ、賴朝公富士之御狩ヲナシタマヒシ時、曾我兄弟カタキノ工藤祐經ヲ討取、剩御料之御陣ニ亂イル、賴朝公スグニ鎧ヲ著シ、打イダシタマフ所ニ、彼市法師殿、其比十一歲ニヲハセシガ、賴朝ノ御キセナガニトリツキ、君ハ是征夷大將軍ニテワタラセ給フニ、是程ノ夜討ナンドニ、カロ〳〵シク物ノ具メサルベキニ非ズト、頻ニ留メ給ヘバ、賴朝公尤ト思召トマヽリタマフ、其後幼少之モノヽ、キドクナル事ヲ申タルト御感アツク、豐後豐前兩國ヲタマハリ、豐前守左近將監能直ト號、官位五位上、大友ハ氏タリトイヘドモ、能直正ク賴朝ノ御子ナルニヨツテ、ミナモトノ氏ヲクダサレ、義直ヨリ源氏ニナリタマヒケリ、カクテ能直豐後國府内ニ下著アリ、累代年久ク、今ノ義鎭公マデ十八代、メデタクタナカニ給ヒケリ、

〔太閤記十一〕大隅日向知行割之事

七月〇天正十五年朔日、秀吉箱崎を御立なされ、宗像に御宿陣、三日、小倉之城につかせ給ふて、豐前八郡之内六郡、黑田勘解由に被下、二郡は毛利壹岐守に被下、則小倉を居城に致し可申旨也、黑田は馬嶽居城に宜しからんやと、自由せさせ給ふ、

〔川角太閤記三〕一豐前國小倉、森壹岐、六萬石、是は大坂へ御申被豐前親也、黑田官兵衞豐前の中津

豐前國驛馬社埼、到津各十五疋、田河、多米、刈田、築城、下毛、宇佐、安覆各五疋、

〔日本國郡沿革考三西海道〕豐前 古豐國安閑紀、國造紀、分爲前後、未詳在何時、豐前之名、既見景行紀十七年、上國、管八郡、六百七十七村、

企救九十五村、令義解作規矩、 田川六十二村、延喜式等作田河、景行紀高羽川即是、 京都六十三村、古國府、今昔物語作宮子、景行十二年紀、到豐前國長峽縣、興行宮、號其處曰京、即是、 中津七十四村、延喜式等作仲津、 築城三十九村 上毛七十三村、筑後風土記上膳縣即是、 下毛八十一村 宇佐百八十六村、古宇佐國、見國造紀、古事記作宇沙、景行紀作菟狹、

〔日本地誌提要六十七豐前〕沿革 古ヘ國府ヲ仲津郡ニ置、今草場村ニ在[illegible]屋敷アリ、蓋シ其遺址ナリ、建久六年、宇都宮信房ヲ以テ守護トシ、仲津郡城井郷ニ居ル、子孫因テ城井氏ト稱ス、其後大友能直、本州及豐後ノ守護トナリ、嘉祿ノ初ヨリ、少貳氏本州ノ事ヲ兼管ス、足利尊氏ノ反スル、城井冬綱信房五世ノ孫之ニ屬シ、因テ守護トナル、正平中、肥後ノ菊池氏日ニ強ク、來テ西境ニ據リ、新田義基ヲ馬嶽城京都郡大谷村ニ置キ、之ヲ鎭ス、天授ノ初、足利義滿、大内義弘ニ守護ヲ與ヘテ西伐セシム、九州平定ノ後、本州永ク大内氏ニ屬ス、天文ノ末、大内氏亡ビ、毛利元就將ヲ遣テ來リ窺フ、弘治ノ初、大友義鎭亦入侵シテ城井氏ヲ降シ、州ノ大半ヲ略シ、毛利氏僅ニ企救京都二郡ヲ得タリ、天正ノ末、島津氏州内ヲ侵擾ス、豐臣氏西征ノ後、黑田孝高ヲ中津ニ、六郡ヲ領ス毛利勝信ヲ小倉ニ封ズ、田川企救二郡ヲ領ス關原ノ役、黑田孝高、加藤清正ト共ニ東軍ニ應ジ、九州ヲ徇ヘ、勝信ヲ降ス、德川氏、孝高ヲ筑前ニ移封シ、細川忠興ニ全州ヲ賜ヒ、小倉ニ治ス、寛永九年、細川氏轉封ノ後、小笠原忠眞ヲ小倉ニ封ジ、九州探題ノ事ヲ司ル、忠眞其四子眞方ニ新田萬石ヲ分ツ、又小笠原長次ニ中津ヲ賜フ、八萬石五世長興、播磨安志ニ轉ジ、奧平昌成之ニ代リ、凡テ三藩、慶應ノ初、小倉藩毛利氏ニ陷サレ、徙テ香春ニ治ス、王政革新香春ヲ改テ豐津トシ、其支封ヲ千束ト稱ス、既ニシテ皆廢シテ縣トシ、又合併シテ小倉縣ヲ置、

五十二間、英彥山小貳川〈従陣屋至英彥山〉街道通計九里二十二町二間、

従豐前國香春驛英彥山至渡里村、

豐前國田川郡香春町　二里三十一町四十七間半　添田町　三里七町五十一間　英彥山小貳川　二里三町三十七間〈至國界一里二十八丁一十九間〉　筑前國上座郡小石原村

〔日本實測錄〈六沿海〉〕従豐前國小倉沿海至鹿兒島、

町豐前國企救郡小倉船頭町、三十三度五十三分半、一里二十一町四十四間〈至小倉門司口九町五十三間〉　大里村、三十三度五十五分、一里三十一町四十八間〈至錦原村錦濵一里一十一町十間〉　一門司村　一里一十八町二十四間　田野浦村　二里一十八町一十八間　大積村　一里二十三町一十四間半　柄杓田村　一里三十四町二十二間　恒見村、三十三度五十二分、二里一十七町五十九間〈至吉田村濱崎一里一十町三十三間〉　葛原村　二町二十四間　下曾根村、三十三度五十分半、三里一町五十四間　京都郡苅田村、三十三度四十七分半、一里三十四町六間〈至與原村一里二十四間〉　仲津郡大橋村小波瀨川口〈至今津一十三町九間半〉　三里二十四町三十間　築城郡湊村　二里六町五間　上毛郡八尾村　二里六町四十一間半　小祝浦見牛〈[illegible]川至小祝濵五町五十四間〉　一十一町三十六間　小祝浦　七町二十三間　下毛郡中津新博多町、三十三度三十六分半、二里二十五町五十一間　今津、三十三度三十四分半、二里二十六町二十三間　宇佐郡住江村、三十三度三十四分、四里一間〈至國界三里八町四十七間〉　豐後國國東郡高島村〈略〉〇中

従肥前國長崎沿海至小倉〈略〉〇中

豐前國企救郡平松浦〈至大門崎二丁三十間〉　六町二十七間半　小倉室町　一町九間　同船頭町〈長崎至小倉〉沿海通計二百六十一里五町二十四間、

〔延喜式〈二十八兵部〉〕諸國驛傳馬〈略〉〇中

從豐前國新村歷樋田至宇曾

豐前國企救郡新村　一里一十五町四十五間　葛原村　二町二十四間　下曾根村　一里二十九町四間　京都郡刈田村　一里二十四間　與原村　二十八町五十間半　仲津郡大橋村、三十三度四十四分、三里一十二町七間半　築城郡椎田村、三十三度三十九分半、四町四十二間湊村、三十三度三十九分半、二里六町五間　上毛郡八屋村濱　一町三十四間　八屋村、三十三度三十七分、二里一十三町三十九間半　下毛郡湯屋村　二里一十六町一十九間　樋田村、三十三度三十分半、二町六間　同高瀨川岸　一里二十三町二十一間　平田村、三十三度二十八分、二里一十一町一十八間　宮國村高瀨川岸、至宮國村宿所二丁三十三間三十三度二十五分、一里三十町三十三間　宇曾村　從新村至宇曾街道、通計二十一里一十八町五十二間半、

從豐前國湯屋歷下郡及久住至小里

豐前國下毛郡湯屋村　三十五町五十九間　福島村、三十三度三十四分、二里二十町三十三間宇佐郡四日市村　一里九町五十間　宇佐村御祓馬場、三十三度三十一分半、至宇佐八幡社二丁五十九間三里七町至國界二里七丁一十八間、從國界至立石障屋裏門前一里九丁三間　豐後國速見郡立石○中略

從豐前國樋田歷森至堀田

豐前國下毛郡樋田村高瀨川岸　二十町一十一間半　跡田村至羅漢寺一十丁四十間半　一里十七町四間西谷村、三十三度二十六分、二里二十五町一十間至國界亂橋二里二十五丁一間　豐後國玖珠郡太田村○中

略

從豐後國障屋廻歷宇曾至英彦山○中略

豐前國下毛郡守實村、三十三度二十三分半、三町三間　宇曾村　四里一十三町五十二間半田川郡英彦山豐前坊前至豐前窟下有壘滅○　二十七町五十二間半　同中谷町至女體嶽二十二町九間　一十二町

上毛郡　實測　鵜島（長三南岬至二北岬一）二町三十間、

下毛郡　遠測　龍宮島　中洲

地勢
氣候

（西遊雜記二）豐前國は海邊に寄程風土よくして、西國は山連々としてあらく、九州の内にては上國といへども、中國筋にくらべ見れば、人物言語劣りて、諸品の自由とも云がたし、

（萬國夢物語下）下之關ヲ經テ、小海三里ノ渡ヲ踰、九州ノ地ニ入、豐前ノ小倉ニ至ル、此州九州ノ西北ノ隅也、西南長門ニ對ス、東ヨリ南ヘ回テ、筑前ニ境、東ヨリ北ヘ回テハ豐後ニ境也、上管八郡、田河、企救、京都、仲津、筑城、上毛、下毛、字佐也、高卅二万六千石餘、中津小倉新田城下ニテ、高合廿六万石許、大名領也、氣候四國ニ似タルベシ、蕞國也、風俗義素者多ク、變轉常無シ、

（日本地誌提要六十七豐前）形勢　山脈北ヨリ起リ、東西ニ分チ、南走シテ筑前ヲ限リ、更ニ東折シテ豐後ノ界ヲナス、州ノ北角、僅ニ海峽ヲ隔テ長門ニ對シ、西海道ノ要衝タリ、地味豐腴、五穀ニ宜シ、風俗淳茂、氣候極暑九拾五度、極寒三拾六度、

道路

（日本實測錄七街道）從豐前國小倉街道至長崎

豐前國企救郡小倉船頭町、三十三度五十三分半、　一町九間　同室町　五町二十一間（至小倉城大手前三丁一十二間）　同大門町　二里四間（至國界一里一十五丁六間）　筑前國遠賀郡尾倉村（中略）

從豐前國小倉歷秋月至松崎

豐前國企救郡小倉船頭町　二十一間　同寶町（至門司口一十丁三間）　二十八町四十一間半　新村　一里九町八間　德力村　二里六町三十九間　呼野村　一里一十七町三十間半　田川郡採銅所　二里三十町　三十五町一十一間　香春町三十三度三十九分半、　二町四十八間　下香春村　二里三十五町四十五間半（至田川郡神社事負前五丁二十七間半）　猪膝町二里三十九間（至國界二十五丁十四間）　筑前國嘉麻郡大隈村大隈町

位置

志賀高穴穗朝御代(成務)、伊甚國造同祖宇那足尼定賜國造、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

豐前小倉町 船頭 極高三十三度五十三分半、經度西四度五十分、從東都(東海道西國街道、自赤間關渡海直徑三里、)二百八十三里八町八間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

豐前 中津 三三度三六分三〇秒 小倉 三三度五三分三〇秒 ○中略

東西里差 ○中略

山城 京 〇度〇〇分〇〇秒 ○中略 豐前 小倉 西四度四九分五八秒

疆域

〔豐前志 一 總論〕國の大體西北を首とし、東西を尾とす、東は豐後國速見郡に隣り、南は同國玖珠日田の二郡に連り、西は筑前國遠賀鞍手の二郡に接り、何れも山を境界とせり、北は海に屬けり、東西二十里、南北十里餘なり、

〔日本地誌提要 七十六 豐前〕疆域 東南ハ豐後、西ハ筑前、東北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾六里、南北凡壹拾五里、

島嶼

〔日本實測錄 十一 島嶼〕豐前國企救郡 實測 和合良島、周廻五町四十三間、 鐘ヶ崎島、周廻九町一十間、 馬島、周廻二十五町四十八間、 天子島、周廻三町二十間、 藍島、周廻一里一十三町二十一間、 中瀬戸島、周廻三町四十四間、 貝島、周廻四町二間半、 姫島、周廻一町三十間、 津村島、周廻六町四十七間、 間島、周廻八町三間、 遠測 片島 末ケ島 飯瀬 篠瀬(又呼二與兵衛瀬一) 桂子島 笠縫島 毛無島

京都郡 實測 神ノ島、周廻一十三町四十二間

仲津郡 實測 蓑島、周廻二十三町一十間、 遠測 小島(又呼二又神島一)

治豐國、往到豐前國仲津郡中臣村、于時日晩僑宿、明日昧爽、忽有白鳥、從北飛來、翔集此村、菟名手即勒僕者、遣看其鳥、鳥化爲餅、片時之間、更化芋草數千許株、花葉冬榮、菟名手見之爲異、歡喜云、化生之芋、未曾有見、實至德之感、乾坤之瑞、既而參上朝庭、擧狀奏上、天皇於茲歡喜之有、即勅菟名手云、天之瑞物、地之豐草、汝之治國、可謂豐國、重賜姓曰豐國直、因曰豐國、後分兩國、以豐後國爲名

〔倭訓栞中編十六登〕とよくに　豐かなる國の義也、神代紀に豐國主尊ましますり、九州の豐前豐後ももと豐國といひたり、義字の如し、

〔古事記傳五〕豐國は登與久爾と訓べし、何書にも皆然有り、登與乃久爾とはいはず、最も後に二國に分れて、和名抄に、豐前止與久爾乃美知乃久知豐後止與久爾乃美知乃之利とあり、分れしは何時ともしれず、さて書紀景行卷十二年下に、遂幸筑紫、到豐前國長峽縣、興行宮而居、故號其處曰京也、多十月到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也とあり、風土記にも此事あり、されば其國の大名を豐國と云も、此意なるべし、豐はゆたけく大きなる意なり、豐後國風土記の、豐國の名の故はいかゞ、碩田は後に郷となれり、和名抄に、豐後國大分郡にこれなり、又大隅國桑原郡にも、大分豐國てふ二郷ならびてあり、是は則ながら内あることなるべし、

〔豐前志總論一〕按するに、豐國の前後と二に分れしは、何の御世にかあらむ、先づ國史に見えたるは、日本紀景行天皇十二年の下に、遂幸筑紫、到豐前國、と有ぞ始なる、然れば其より以前か、將別れしは後なれど前へ及して如是は書る歟、古事記志賀宮巻に、定二國々之堺一と云ことあり、また姓氏錄、攝津國皇別に、坂合部、大彦命之後也、允恭天皇御世、造立國境之標、因賜姓坂合部連、と云ことも見えたり、かの二御世の際に、分られたるにてもありぬべし、

〔日本書紀景行七〕十二年九月、天皇遂幸筑紫、到豐前國長峽縣、興行宮而居、

〔古事記上〕伊邪那岐命○中略妹伊邪那美命○中略御合、○中略次生筑紫島、此島亦身一而有面四、毎面有名、故○中略豐國謂豐日別、

〔先代舊事本紀國造十〕豐國造

古事類苑

地部三十一

豐前國

豐前國ハ、ブゼンノクニト云ヒ、舊クハ、トヨクニノミチノクチト云フ、本ト豐國ト稱シ、豐前豐後一國タリ、西海道ニ在リテ、東南ハ豐後、西ハ筑前ニ界シ、東北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十六里、南北凡ソ十五里、其地勢ハ、山脈北ニ起リ、南走シテ筑前ヲ界シ、更ニ東折シテ豐後ヲ限リ、東北周防灘、及ビ馬關海峽ニ面シ、國内ノ諸水皆之ニ歸ス、實ニ鎭西ノ要衝タリ、此國ハ古ヘ國府ヲ京都郡ニ置キ、田河、企救、京都、仲津、築城、上毛、下毛、宇佐ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、築城上毛ノ二郡ヲ合シテ築上郡ト稱シ、仲津郡ヲ廢シテ京都郡ニ併セ、都テ六郡ト爲シ、新ニ門司、小倉ノ二市ヲ設ケ、田河、企救、京都、築上ノ四郡ト共ニ、福岡縣ヲシテ之ヲ治セシメ、宇佐、下毛ノ二郡ハ大分縣ニ隷屬セシム、

名稱

〔倭名類聚抄〕五國郡 豐前止與久邇乃美知乃久知、

〔倭頭屋本節用集〕天地不 豐前ブゼン 豐州

〔日本風土記〕一寄語島名 豐前孛前

〔易林本節用集〕下 豐前豐州 上、管八郡、南北四日、郡唐藥種重器充、以錦帛致貢也、大中國也、

豐國

〔豐後國風土記〕郡捌所、郷四十、里一百十、驛玖所、小路 烽伍所、下國 寺貳所、一僧寺 一尼寺

豐後國者、本與豐前國合爲一國、昔者纏向日代宮御宇大足彥天皇、○景行 詔豐國直等之祖菟名手、遣

高良(カウラ)山　御井郡のうち也、大明神の宮ゐ有、玉垂の社といふなり、

足代(アシ)山　石垣の里　金目川　三池　潘瀨山　琴引の宮　はやみの里

右之通名所多しといへども、いまだ不_二順見_一、

〔延喜式　二十八兵部〕諸國器仗〇中略　筑後國甲三領、横刀十口、弓廿張、征箭卅五具、胡籙卅五具、

名所

〔筑後志一風俗〕性寛舒質貞實、才慧敏智巧明成器有て、文武諸技に堪へ、工思有て能く物を換す、華麗を好尚し、滋味に厚し、些の英氣有て義理を好み邪妄を憎む、困勤を厭ひ、安逸を甘んず、凡そ州内の東塞(俚俗上筑後と稱す)の郷民、淳素勁勇、古風を存す、西郷(俚俗下筑後と稱す)の民心、疏闊爛情、義氣無し、嘗て先君春林公、(○有馬豐氏)丹州福知山より米府(○久留米)に轉住の後、府下の言語殆んど京語に近し、是丹州の本語を換するもの也、唯生業の山民のみ本土の故言を存して、頗る訛僻なり、俚俗これを生業ノ辭と云ふ、

〔西遊雜記六〕七月朔日筑後に入ル、堺に標木建、是より立花左近將監領分とあり、扨筑後は、山少く平地多く、所々に森村見え、焚木不自由ならず、水の流れもきよく、上々國の風土也、然るに在中廣く見渡すに、豪家と覺しき百姓一家も見えず、風俗肥後のごとく、十人に六七人までは、男女、ともに夏月は裸身にて、婦人などの人を恥る氣色更になし、風土は肥後よりも勝れてよき國ながら、人物言語の風俗はおなじ、初めにいふごとく、花は三芳野人は武士にて、城下近き村はいつしか見習ひて、中國筋の風俗におとらず、在々に入ては、中國上方筋の在とは大ひに劣れり、農具なども違ひしもの多し、中にも此邊の鍬は角にして方六尺餘、五穀類を日に干に、こぼれずして便理也、然れ共雨にても降る時は、壹人にて取入る事自由ならず、二人がゝりにて持はこぶ事なり、何事にても二ツながらよきはなきものなり、又へふりといふ農具あり、畑方三分、田方七分の國ゆへに、筑後川を堰て口またに小川あり、水損はいかならん、旱損はなき國と見ゆる、此川々に鮎多ク、網遣ひ村々に有、

〔日本鹿子十四〕筑後國(○中略)中名所之部

一夜川　俚俗に筑後川と云也

そのまゝに後の世もえらず一夜川渡るや何の夢路なるらん

水田北島陶、藍甕井筒、袮牟田土鍋爲天下美物、溝口漉紙、薄紙、奉書、十文字、杉原等多出、馬間田出疊面、三潴郡草場鰣魚、中島大根、同所蜜柑、西牟田郡角粽、正月所玩之童男幼女之羽子板、弓矢數万箇、及夏月所用之團扇數百本、三猪下郡鯽魚、其大者如鯉魚、自黑田村以河南濱村城島浮島榎津等生蘆葦、榎津河海所取之海茸水母、歲送于府、獻之東武、此外近年高良山松茸、山町煙草、新產出之者、下田浮島七島筵之類、南筑上妻郡北田温石、土窪松材木、下妻郡本鄉村藍染物、山門郡瀨高町挑燈、垂見疊、三池加留多、博奕所用之具同上卷具、三潴郡薄池村出土器、井牟田土鍋爲最第一、爲柳川領陶家長、

人口

〔官中秘策 三〕筑後國　十郡　○中略

一人數貳拾六萬八百七拾五人　内 拾五萬六千五百四拾六人 男／拾萬四千三百貳拾九人 女

高三拾三万千四百九拾七石餘　筑後國

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略

御料私領

一人數貳拾七万七千五百七拾九人

内 拾貳万五千七百貳人 男／拾壹万貳百四拾八人 女 ○中略

○按ズルニ、此人口總數、内譯ト合ハズ、恐ラクハ一誤アラン、

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略

御料私領

一人數貳拾九万九千四拾壹人

内 拾七万三百六拾七人 男／拾貳万八千六百七拾四人 女

高三拾七万五千五百八拾八石餘　筑後國

風俗

〔人國記〕筑後國

筑後國之風俗、筑前ニ替リ、實儀成者十人ニ八人如此、常ニ義理ヲ談ジ、得失ヲ沙汰シ、費ヲ愼テ、言語ヲ飾ル事猶以テ鮮シ、雖然下劣ハ一涯ニ而、非ヲ辨ル者スクナク、無體ノ事ノミ多シ、譬バ其堅固成事鐵石ヲ以テ是ヲ云ニ、鐵ニ非ズ而如石、其積レル事無フシテ、分レテ二度過フト云事ナキハ石ナリ、武士モ大形此風儀ニ和アルモノト可知、

出擧稻

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調略○中

筑後國私領御料　一高三拾七万五千五百八拾八石八斗九升七合八勺

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中

筑後國、正稅公廨各廿万束、國分寺料一万三千三百九十四束、修理觀世音寺料一万束、文殊會料二千束、府官公廨十万束、衛卒料一万八千一百五束、修理府官舍料六千束、救急料三万束、俘囚料四万四千八十二束、

〔倭名類聚抄國郡五〕筑後國略○　管十(中略)正公各二十万束、本穎六十二萬三千五百八十二束、雜穎二萬三千五百八十二束、

○按ズルニ、延喜式ニ據レバ、雜穎二十二萬三千五百八十一束ナリ、此書二萬ノ上二十ノ二字ヲ脫ス、而シテ延喜式ヨリ一束多シ、

國產貢獻

〔延喜式主計二十四〕筑後國行程一日

調、綿紬十八疋、貲布卅二端、自餘輸絹、絁、綿、布、　庸、輸綿、布、　中男作物、黑皮、席、防壁、苫、薦、黃、漆、胡麻油、猪石榴油、荏油、櫻椒油、脊脂、雜腊、雜魚楚割、雜鮨、押年魚、煮鹽年魚、鮨年魚、漬鹽年魚、鮨鮒、

〔毛吹草三〕筑後

紅花　蓀　芳米　淡武鍼　蠟燭　海茸　三俵鰡(九州ニハ當國ニ)　三池貨留多(カルタ)

〔筑後地鑑上〕一筑後十郡、土宜之所產者幷名物、御井郡三町鱣魚、國分切餅、北野牛蒡、(長者及三尺)此二種者爲九州名物、同所紅花、小森野大根、(小者似牛蒡、長者)宜香物、又宜圖子、鷺尾長大根不劣、蟾川大根其大圍尺餘、長又二尺餘、其近里數家邑、皆孟春出蕪菁、宜菹菜、仲夏出芥子、爲油運送于畿內、仲秋者生里芋、味美而其居民充饗殘、竹野郡石垣小海老、生葉郡星野山出砥石、上妻郡鹿子尾出硃、黑木生鳳蕈、大田生芹、(以味殊異他)草鑑生薯蕷、如意村薯生蓴菜、北川內鮎鮨、耳木催燈火薯、古賀河直上鷹川鮭、內田大崎馬場大竹藤田河原生栗栖、酒井田村作矢、每歲獻于府、納于武庫、高江村作硯箋、下妻郡

田數
石高

立花飛驒守鑑寛大廣間、従四位上少將、元治元子四月任、拾一万九千六百石　居城筑後山門郡柳河江戸ヨリ二百九十里餘

代々立花氏居之、慶長五、田中兵部大輔吉政、元和七、再城主立花飛驒守宗茂、以後代々領之、○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕筑後國○略　管十田萬二千八百餘町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕筑後上遠十郡〔中略〕田萬千三百七十七町

〔伊呂波字類抄知國郡〕筑後國管十四〔中略〕本田二万二千八百二十八町

〔海東諸國記〕筑後州　郡十、水田一萬三千八百五十一町八段、

〔筑後地鑑上北筑〕一北筑八郡之邑數凡五百三十、其民數男女老幼通計十三万六百五十餘人也、

〔筑後地鑑中北筑〕御井郡六十八箇村山口高三万六千七百八十石○中略御原郡三十五ヶ村山口高二万五千八十七石○中略山本郡三十三ヶ村山口高一万二千八百四十石○中略竹野郡八十三ヶ村山口高一万二千三百九十七石○中略生葉郡五十四ヶ村山口高一万二千六百七十五石○中略上妻郡九十一ヶ村山口高二万五千三百十三石○中略下妻郡二十五ヶ村山口高一万五千六百一石○中略三潴郡百二十四ヶ村山口高七万五千六百八十五石○中略凡八郡村數五百十三ヶ村今五百三十ヶ村山口高合二十一万六千三百七十八石

〔筑後地鑑下南筑〕山門郡八十四ヶ村山口高五万六千九百十五石○中略三池郡六十ヶ村山口高三万七千四百十八石○中略上妻郡十六ヶ村山口高、四千十三石三斗○中略下妻郡八ヶ村山口高五千九百十三石三斗○中略三潴郡十一ヶ村山口高一万四千三百六十石四斗○中略五郡合山口高十一万八千六百十七石有餘三池和泉守領分共　村數合百七十九ヶ村　田中代帳面松倉豊後竹中采女勤合

筑後十郡數合六百八十七ヶ村　山口高合三十三万四千九百九十五石　但寺社領除之

〔日本鹿子十四〕筑後國、十郡、大中國、南北五日○中略知行高三十萬二千八百八十石、

建長二年十一月　日　愚老在御判

〔西大寺文書三〕筑後國竹野莊地頭職、爲光明眞言之料所、所被付寺家也、可令存知者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年六月二十九日　式部少輔花押

西大寺長老

〔西大寺文書三〕西大寺雜掌僧範盛申、筑後國竹野新莊四箇鄕事、任建武三年三月廿四日御寄進狀、可沙汰付于當寺雜掌之旨、可被下知守護代之狀、依仰執達如件、

建武四年七月十三日　武藏權守花押

宇都宮常陸前司殿

〔薩藩舊記川島津文書三〕筑後國小家莊地頭職、三郞左衞門尉跡、爲勳功賞、大隅左京進入道道惠知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年十一月二十六日　左衞門權佐花押

〔集古文書十三雜訴決斷所下文〕陸奧國會津家臣大竹喜三郞

雜訴決斷所下安藝六郞藏人貞家所筑後國三池庄南鄕地頭職事

右件地頭職任近衞前宰相中將家之去四月十四日和與狀、宜令中分領知也、且不可違越之狀、下知如件、

建武二年八月四日　前筑後守藤原朝臣花押

藩封

〔慶應元年武鑑〕有馬中務大輔慶頼大廣間　從四位中將元治元子四月任　二拾一万石　居城筑後御井郡久留米江戸ヨリ海陸二百九十二里余

久留米ヨリ大坂迄海上百五十九里、大坂ヨリ江戸迄陸百三十三里、

領主毛利家小早川治部大輔秀包領之、慶長五、田中兵部大輔吉政、同筑後守忠政、元和七、有馬玄蕃頭豐氏、以後代々領之、

池大納言沙汰、（○中略）
三原庄（○筑後中略）

右庄園拾七箇所、載沒官注文、自於院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月五日

〔上妻文書〕將軍家政所下　筑後國上妻庄官等

可早令藤原家宗爲當庄內、今弘、光友、地久志部、豐福、多久万田、久米北田、境田等漆箇所地頭職事、

右人補任彼職之狀、所仰如件、以下、

建久四年六月十九日（○署名略）

〔上妻文書〕奏聞候了（花押 ○少貳貞經）

一品親王（○尊眞親王）去月二十六日、太宰府原山御坐之間、筑後國上妻庄一分地頭宮野四郎入道敬心、即馳參、賜陣屋、令勤仕大番候畢、以此旨可有御奏聞候哉、敬心恐惶謹言、

元弘三年六月　日　沙彌敬心上

〔吾妻鏡十八〕元久二年五月廿四日辛巳、安樂寺領、筑後國、岩田、田島兩庄事、就社僧等愁訴有沙汰、今日被付地頭職於社家云云、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年六月十六日甲寅、（○此月庚午朔、甲寅恐乙酉誤、）今日有評定、筑後國御家人吉井四郎長廣、與同御家人矢部十郎直澄相論當國生葉庄內得安名屋敷田畠事、稱當知行、掠給御下知奸謀之間、召返彼狀、任貞應御成敗、可爲本所成敗之由云云、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事（○中略）

一家地文書庄園事（○中略）　前攝政（○中略）　新御領（○中略）　筑後國三毛山門庄（○中略）

庄

く、市中三千軒餘、本町と云、商人も見えて、二三町計ふしき町有、
〔佐藤元海九州紀行〕柳川ノ城ハ、立花家ノ都スル所ニシテ、平地ナレドモ、城郭壯麗ニシテ、郡下ノ町家モ頗ル繁昌ナリ、
〔東寺百合文書一之六〕寶莊嚴院御庄園〔○中略〕
筑後國三潴庄　　隆季卿
　米六百石
　絹四百十一疋〔○中略〕
右注進如件
　平治元年閏五月　日
〔古今著聞集五和歌〕嘉應二年十月九日、道因法師人々をすゝめて、住吉社にて歌合しけるに、後德大寺左大臣、前大納言にておはしけるが、此歌をよみ給ふとて、社頭月といふを、
　ふりにける松物いはゞとひてましむかしもかくや住の江の月、かくなんよみ給ひけるを、判者俊成卿ことに感じけり、よの人々もほめのゝしりける程に、其比彼家領筑紫瀬高の庄〔○筑後國山門郡〕の年貢つみたりける船、播磨國に入らんとしける時、惡風にあひて、すでに入海せんとしける時、いづくよりか來りけん、翁一人出きて、こぎなをして別事なかりけり、舟人あやしみ思ふ程に、おきなのいひけるは、松物いはゞの御句面白う候て、此邊にすみ侍る翁の參つると申せといひてうせけり、住吉大明神の彼歌を感ぜさせ給ひて、御體をあらはし給ひけるにや、
〔吾妻鏡三〕壽永三年〔○元暦元年〕四月六日甲戌、池前大納言、竝室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〔○中略〕

〔歷世古文書一〕筑後國三潴莊木室村北方內田地事

合伍町四段餘者

右件地者、領家地頭折中之間、領家御進止分也、但此村者、南北共、去元亨元年被定置鷲尾金山院鎮守新春日社御供料所、今度世上動亂之刻、云領家云莊家、有御誓願子細之間、割分當村北方內田地伍町餘（中分狀相副之）被永代致寄附之畢、於今伍町餘者、更雖為一塵、不可被懸社役者也、然者旁不及異儀、早為彼寺領、盡未來際無退轉、彌可專御祈禱忠者也、仍末代龜鏡御寄進如件、

元弘三年十一月二十五日　　沙彌稱念判

前僧正法印大和尙位

〔松浦文書七〕筑後國下宇治村地頭職半分、為勳功賞松浦小次郎入道連賀可令知行者、天氣如此、悉之、

建武元年三月二十一日　　左衛門權佐〇（花押闕）

〔歷世古文書一〕筑後國淨土寺、幷寶琳尼寺雜掌快潤申、當國三潴莊八院村中分一方（領家方）田島屋敷、牟田荒野等事、解狀具書如此、白垣八郎入道致濫妨狼藉云々、早西牟田彌次郎入道相向莅彼所、鎮狼藉可沙汰居雜掌、若又有子細者、載起請之詞、可被申之狀如件、

建武三年七月廿二日　　沙彌判

守護代

〔筑後將士軍談二之三〕筑後國西牟田村寬元寺、右軍勢並甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可處罪科之狀如件、

建武五年五月日

〔西遊雜記六〕久留米に至る、大概の所也、上方邊の城下と違ひて、草葺の家宅數多なれば見分あし

村里名邑

蓮城寺長老

〔新編會津風土記 七〕讓與　助太郎貞元〈○安〉所

筑後國三〇池〇南〇郷〇總領分、同國竹野新庄得重金丸兩名〈○中略〉已下地頭職事

右云本領、云新恩、道寄〈○安貞〉領掌無相違地也、仍爲貞元嫡子、相副本證文、悉皆讓與之畢、子々孫々無他妨、可令知行之狀如件、

建武三年三月廿五日　沙彌道寄花押

〔筑紫古文書 池加〕讓與次郎貴經、筑前國夜〇須〇西〇郷〇地頭職、同國安園名地頭職〈○中略〉

右地頭職等者、所讓與貴經也、領掌不可有相違之狀如件、

建武三年二月五日　沙彌妙惠〈○貞經少貳〉在判

〔郡名一覽〕一筑後國〈御料私領〉　筑州　南北五日　拾郡

高三拾三万千四百九拾七石七斗六升九合　七百九ヶ村

●久留米　二百九十二里半　●柳河　二百九十里餘

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔庭園提要〕筑後　十郡、七百十村、

〈御料私領〉高三十七万五千五百八十八石八斗九升七合八勺

生葉郡五十四村　竹野郡八十九村　山本郡三十村　御原郡三十五村　御井郡七十一村

上妻郡百九村　下妻郡三十三村　三潴郡百四十一村　山門郡八十六村　三池郡六十二村

〔地勢提要 神〕郡邑島嶼奇名

筑後　御原郡、古飯村、御井郡、神代村、上津荒木村、大城村、三潴郡、甕赤村、上八院村、土甲呂村、小保村、下妻郡、久郎原村、竹野郡、中徳村、三池郡、下里村、生葉郡、

人、曰神夏磯媛、(○中略)參向而啓之曰、(○中略)二日耳垂、殘賊貪婪、屢略人民、是居於御木。(木此云開)川上、十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮踏其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰概能佐烏麽志、魔幣菟耆瀰、伊和哆羅秀暮、瀰開能佐烏麽志、爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、亦覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國。

〔倭名類聚抄(九筑後國)〕御原郡　長栖　日方　坂井(○坂、高山寺本作板。)　川口

生葉郡　大石　山北　姫治(○治、高山寺本作沼、註比女奴。)　物部　椿子　小家　高西

竹野郡　柴刈　二田　竹野　長栖　船越　川會

山本郡　土師　蒲田　古見　三重　芝浮

御井郡　節原　伴太　殖木　弓削　神氏(○氏、高山寺本作代、註久万之呂。)　賀駄　大城　山家

三瀦郡(○瀦原作猪)　高家　田家　三瀦(○瀦原作猪、據高山寺本改。)　鳥養　夜關(○高山寺本作開、註夜介。)　青木　荒木　管綜

上妻郡　太田　三宅　葛野　桑原

下妻郡　新居　鹿待　村部

山門郡　大神　山門　草壁　鷹尾　大江

三毛郡　米生(○高山寺本註與那布。)　十市　砥上　日奉

〔大友文書(三立花伯爵所藏)〕三聖寺(新券案)嘉祥庵院主處英謹言上(○中略)

下賜諸官御證判、欲備後代龜鏡、處英相傳領筑後國三。池。北。鄉。內帝尺寺、樋田野志、野尾井、長坂四箇村半分田畠在家、并同寺乃門田、坂本田新開田、以下山野江河等地頭職豐後國三重鄉達城寺(山號內)文書等事、(○中略)

元弘三年十一月十三日　式部大丞

景行紀、持統紀等ニ參考スルニ、舊クハカミツヤメ、シモツヤメト稱セシナラン、

下妻郡

〔太宰管内志筑後七〕下妻郡

方位は東北すべて上妻郡、南方は山門郡、西方は山門、三潴兩郡に隣りて、郡中に山なく田地廣し、

〔太宰管内志筑後七〕下妻郡

筥崎宮寄附狀に、去六日於多々良濱、逢一戰、與中黃、盡粉骨、忠功至奇特候、仍筑後下妻郡之地被宛行畢、聊於神前、可勵天下安寧之懇祈之狀如件、建武三年三月十一日、宮崎大宮司殿、源朝臣判、

山門郡

〔太宰管内志筑後八〕山門郡

名義は、山相對て門の如くなる處なるべし、〇中略地圖を按ずるに、山門郡地、東方上妻郡に隣り、南方三池郡に隣り、西方海濱、北方下妻、三潴二郡に隣て、郡中平地多く、東南の隅に山あり、

〔日本書紀九神功〕三月〇仲哀九年丙申、轉至山門縣、〇山原作小、門縣據一本改則誅土蜘蛛田油津媛、時田油津媛兄夏羽、興軍而迎來、然聞其妹被誅而逃之、

〔續日本紀三文武〕慶雲四年五月癸亥、讃岐國那賀郡錦部刀良、〇中略筑後國山門郡許勢部形見等、各賜衣一襲及鹽穀、〇下略

三毛郡

〔太宰管内志筑後八〕三毛郡

方位は東南總て肥後國にとなり、西は海を限とし、北は山門郡に隣りて、東南に山多く、西北に平地多し、

〔釋日本紀十述義〕公望私記曰、案筑後國風土記云、三毛郡云々、昔者楝木一株、生於郡家南、其高九百七十丈、朝日之影、蔽肥前國藤津郡多良之峯、暮日之影、蔽肥後國山鹿郡荒爪之山、云々、因曰御木國、後人訛曰三毛、今以爲郡名、欒木與楝木、名稱各異、故記之、

〔日本書紀七景行〕十二年七月、熊襲反之、不朝貢、八月己酉、幸筑紫、九月戊辰、到周芳娑麽、〇中略爰有女

〔太宰管內志筑後六〕上妻郡

名義は、景行天皇〈筑紫巡狩件〉に、十八年七月丁酉、到八女縣、〇中略水沼縣主猿大海奏言、有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名由此起也とあり、されば加牟豆万〈加牟都邪米のつゞまりたるなり、ヤメをつゞむればマとなるなり、さて此八女津媛の名の起り、いかなる由ともしりがたし、もしは地名を元にて負せたるを、其人廣く其邊を領ずるにつきて、人の名より又移りてそこの大名となれるにてもあらむか、〇中略〉方位事は東方豐後國に隣り、南方肥後國に隣り、西方山門、下妻、三瀦三郡にとなり、北は御井、山本、竹野、生葉四郡に隣りて、東西十一里余、南北三四里或五里あり、郡中大山多くして田地すくなし、

〔日本書紀景行七〕十八年七月丁酉、到八女縣、則越前山、以南望粟岬、詔之曰、其山峯岫重疊、且美麗之甚、若神有其山乎、時水沼縣主猿大海奏言、有女神、名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名由此起也、

〔日本書紀持統三十〕四年九月丁酉、大唐學問僧智宗、義德、淨願、軍丁、筑紫國上陽咩郡大伴部博麻、從新羅送使大奈末金高訓等、還至筑紫、

〔釋日本紀述義十三〕筑後國風土記曰、上妻縣、縣南二里、有筑紫君磐井之墓墳、高七丈、周六丈、墓田南北各六十丈、東西各卅丈、石人石盾各六十枚、交陳成行、周匝四面、當東北角、有一別區、號曰衙頭、〈衙頭政〔政下原有欸字、據一本刪〕所也〉其中有一石人、假容立地、號曰解部、前有一人、裸形伏地、號曰偸人、〈生爲偸猪乃擬決罪、〇擬恐擬誤〉側有石猪四頭、號賊〈〇賊原作賊、據一本改、下同、〉物、〈賊物盗物也〉彼處亦有石馬三匹、石殿三間、石藏二間、古老傳云、當雄大迹天皇〈〇繼體〉之世、筑紫君磐井、豪強暴虐、不偃皇風、生平之時、預造此墓、俄而官軍動發、欲襲之間、知勢不勝、獨自遁于豐前國上膳縣、終于南山峻嶺之曲、於是官軍追尋失蹤、士怒未泄、擊折石人之手、打墮石馬之頭、古老傳云、上妻縣多有篤疾、蓋由茲歟、

〇按ズルニ、倭名類聚抄ニ上妻ヲ加牟豆萬ト訓ミ、下妻ヲ上ニ准ズト記シタレドモ、右ニ引ク

竹野郡、太政官處分、依請、

山本郡

（太宰管内志筑後二）山本郡

名義は大山を負たる故なるべし、和名抄に、肥後國山本郡山本などもあり、鎌氏云、山本郡は耳納山麓にあれば、負せたるなるべし云々といへり、此說さもあるべし、○中略 さて地圖を按るに、山本郡、東竹野郡、南は上妻郡、西御井郡、北御井川を堺として、御井郡にとなりて、郡中に田地多くして、南方に箕尾山あり、土地狹少なる事、國中第一なり、

御井郡

（太宰管内志筑後三）御井郡

郡の方位は、東方山本、竹野二郡に隣り、西は三潴郡、又肥前國にとなり、北は御原郡にとなり、郡中に大川流れて、運送の便よく、三潴郡につぎて豐饒の地なり、

（日本書紀十七繼體）二十二年十一月甲子、大將軍物部大連麁鹿火、親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡、○下略

（日本紀略嵯峨）弘仁九年十一月丙午、筑後國御井郡高良玉垂命神爲名神、

三潴郡

（太宰管内志筑後五）三潴郡

美無万は美奴万を唱へひがみたる物と聞ゆ、古事記に美無瓜と云事あるべくもあらず、さて玉篇に、瀦は水所停也と見え、又和名抄に、安房國朝夷郡大瀦於保奴瓜とあり、式に、出雲國出雲郡美努麻神社、又阿波國麻殖郡天水沼間比古神社と云も有、名義は、沼に由有て負せたるべし、土地ノ樣もしか思はるゝ所なり、○中略 さて方位は東上妻下妻二郡に隣り、南山門郡に隣り、西は河を隔て肥前國に隣り、北は御井郡、又肥前國に隣りて、郡中に山なく、西北に大河流れて、諸品運送ノ便よく、豐饒土地にして、國中の大郡なり、

（日本書紀十四雄略）十年九月戊子、身狹村主靑等、將呉所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所囓死、別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所囓死、由是水間君、恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉、

上妻郡

（筑後志一郡名）上妻郡　倭名鈔加牟豆万、今讀て加宇豆万、

	御木紀	
山門ヤマト	三毛ミケ	管十
同	同三池	同
同	同	十郡
同	三毛 三池式	
同ヤマト	三池ミイケ	同
同ヤマト郡	同ミケ郡	同
同	同	同
同ヤマト	同ミケ	同
同	同	同

御原郡

〔太宰管內志筑後二〕御原郡

名義いまだ詳ならず筑後志に、里老語傳に、御原郡の內に、小郡野、山隈野、大保野、此三野原あるが故に、三原と云と云り、覺束なき說なり

生葉郡

〔太宰管內志筑後二〕生葉郡

さて地圖を按るに、生葉郡、東豐後國日田郡、南本國上妻郡、西竹野上妻二郡、北千年川を隔て、筑前國上座郡に隣れり、土地廣狹、事はいまだ考へず、

〔釋日本紀十述義〕公望私記曰、案筑後國風土記云、昔景行天皇巡國、既畢還都之時、膳司在此村忘〇忘原作忌、據一本改御酒盞云々、天皇勅曰、惜乎朕之酒盞、俗語云酒盞爲宇枳因曰宇枳波夜郡、後人誤號生葉郡、

〔日本書紀七景行〕十八年八月、到的邑而進食、是日膳夫等遺盞、故時人號其忘〇忘原作忌、據一本改盞處曰浮羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗、號盞曰浮羽、

竹野郡

〔太宰管內志筑後二〕竹野郡

さて地圖を按ずるに、竹野郡、東生葉郡、北筑前國夜須下座二郡、本國御原郡等、南上妻下妻二郡、西山本郡に隣りて、山多く平地少し、廣狹里數等いまだ考へず、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年三月四日庚辰、太宰府解偁、觀音寺講師傳燈大法師位性忠申牒偁、〇偁原脫、據一本補寺家人清貞宗位等三人從五位下笠朝臣麻呂五代之孫也、〇中略望請准據格旨、徙居貫附筑後國

〔郡名異同一覽〕筑後

六國史古書	水沼	御井				浮羽	上陽咩 八女	
延喜式	三潴	御井	御原	山本	竹野	生葉	上妻	下妻
倭名抄	同	同	同	同	同	同	同	同
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	同	同
諸書	同	三井 御井	三原 御原	山本 山下	同	生葉 生桑	同	同
郡名考	同	御井	御原	山本	同	生葉	同	同
天保郷帳	同	同	同	同	同	同	同	同
明治沿革綱	同	同	同	同	同	同	同	同
地誌提要	同	同	同	同	同	同	同	同
郡區編制	同	同	同	同	同	同	同	同

國府

郡

筑後國在國司、押領使兩職、爲本職之間、可知行之由雖申之、如此事非賴朝成敗候、御奉行之由承及候、有御奏聞、可充給永平候、恐皇謹謹言、

閏七月二日　　賴朝

進上　帥中納言殿

〔倭名類聚抄　五國郡〕筑後國國府在御井郡

〔筑後志　七附錄〕府中御井郡高良山麓、今宿驛アリ、古老傳テ云、古ノ國府ノ地ナリ、隣鄕國分村和泉村ノ田畠ヲ耕シテ、古瓦ヲ得ルコトアリ、青赤白色其形一ナラズ、表ニ數品ノ紋アリ、世ニ此瓦ヲ綱手ト名ク、又彼和泉村ノ中ニ、俗ニ長者屋敷ト稱スル所アリ、其邊ニ古井ノ跡アリ、俱ニ皆國府ノ舊址ナルベシ、國分ノ村名モ、國府ノ字ノ轉ゼルモ知ベカラズ、

〔倭名類聚抄　五國郡〕筑後國略○註管十略○註御原三波良生葉以久波竹野多加乃山本也萬毛止御井三井三瀦美無萬上妻加牟豆萬下妻准上山門夜萬止三毛三計

〔延喜式　二十二民部〕筑後國、上、管

御原ミハラ　生葉イクハ　竹野タカノ　山本ヤマモト　御井ミヰ　三瀦ミヅマ　上妻カミツマ　下妻シモツマ　山門ヤマト　三毛ミケ○中略

右爲遠國

〔皇國郡名志〕筑後國十郡

御原ミハラ　松崎　肥前筑前界

竹野タケノ　福ロタ一ケ村山バカリ　筑前界

御井ミヰ　田主丸　△善導寺　吉井　二ヶ村山計筑前界

上妻カムツマ　●杤来　山バカリ　國中

山門ヤマト　●江浦　西南海ニ向

生葉イクハ　△鷹山　△高井岳　山バカリ在郷無シ　筑前豐後界

山本ヤマモト　浦村　ナ・ヤ　山バカリ　筑前界

三瀦ミヅマ　●酒見　久留米　紋久　柳川　筑後川ニ沿テ肥前界

下妻　●内屋　△矢部川　肥後界

三毛ミケ　驛町無シ　肥後界西南海ニ向

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國綴喜郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

且曰、是神木也、是國宜、號二御木國一、

山門八十六村

御牧見二大内家日記一、雖レ未レ詳、

〔日本地誌提要 筑後 六十六〕沿革　古ヘ國府ヲ御井郡ニ置、今ノ府中驛是ナリ文治二年、草野永平ヲ以テ守護トナシ、子孫山本郡竹城ニ居ル、吉木村建武中興、少貳頼尚ヲ以テ州守ニ任ジ、守護ニ補ス、足利尊氏ノ反スル、頼尚首トシテ之ニ屬ス、正平ノ初、菊池武光頼尚ヲ伐テ之ヲ破リ、州ノ豪傑、草野、黒木、蒲池諸氏ヲ降シ、征西將軍懷良親王ヲ高良山ニ奉ジ、全州ヲ併セ、阿蘇惟澄ヲ以テ州守トナス、尊氏又州族高橋光種御原郡高橋ニ居ルヲ以テ檢斷使トナス、大内今川九州ヲ定メシ後、諸族更ニ探題澀川氏ニ隷ス、澀川氏衰フルニ及テ、草野氏、山本郡星野氏、生葉竹野二郡黒木氏、上妻郡高橋氏、御原郡筑紫氏、御井郡西牟田氏、三瀦郡蒲池氏、山門下妻二郡三池氏、三池郡等各郡邑ニ據リ、或ハ大内氏ニ屬シ、或ハ大友氏ニ附ス、永祿七年、大友義鎭大擧入侵シテ、盡ク全州ヲ併セ、天正中、島津氏ト日向耳川ニ戰テ敗績シ、州豪離叛、大率龍造寺氏ニ歸ス、俄ニシテ島津氏勢日ニ強大、國境皆爲ニ侵寇セラル、豐臣氏西征、本州ヲ分テ、生葉、竹野、御原三郡ヲ小早川隆景ニ加賜シ、立花宗茂ヲ柳河ニ拾三萬石、山門三瀦下妻三郡、毛利秀包ヲ久留米ニ三萬五千石、三瀦山本御井三郡、筑紫廣門ヲ福島ニ一萬八千石、上妻郡、封ズ、關原役畢リ、宗茂秀包廣門皆封ヲ失ヒ、田中吉政ヲ全州ニ封ジ、柳河ニ治ス、元和六年、其子忠政卒シ、子無クシテ國除シ、有馬豐氏ヲ久留米ニ封ジ貳拾萬石再ビ柳河ヲ宗茂ニ賜ヒ拾壹萬石其支封ヲ三池トス、立花種次、文化中、以二種善一陸奥下手渡ニ移リ、明治ノ初、又三池ニ還リ復封ス、凡テ三藩、王政革新皆廢シテ縣トナシ、又之ヲ合併シテ三瀦縣ヲ置、

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年八月丁巳、從五位下道君首名○首、一本作二名首一、爲二筑後守一、

〔吾妻鏡 六〕文治二年閏七月二日丙子、二品○頼朝令擧草野大夫永平所望事、依有殊功也、御書云、

平家背朝威企謀叛、鎭西之輩、大略與同、相從彼逆徒、筑後國住人草野大夫永平仰朝威、致無貳忠、仍

三潴郡上野町　三里八町四十七間　山門郡柳河外町至柳河村沖畑六丁四十三間、從沖畑至三潴郡橫津町一里四丁十八間半、從橫津至小保村宿所三丁二十一間、北極高三十三度一十二分半、從宿所至筑後川岸九丁三十九間、　四町一十四間半　同辻町　一町二十四間　同瀬高町、三十三度一十分、八町一十九間　藤吉村瀬高門　一十町二十間半　今古賀村　一里一十四町四十五間半　中島村　二十九町三十四間　三池郡江浦村至山門郡瀬高下莊村一里二十五丁四十二間　一里二十七町五十四間半　三池町村、三十三度三分半、一町三十七間半　同新町　一里三十町四間至國界一里一十六丁三十七間半

〔日本實測錄 六沿海〕從薩摩國鹿兒島沿海至長崎 略○中

筑後國三池郡大牟田村諏訪川口沿川至大島村二十三丁五十八間半　一十六町二十九間　大牟田村歷橫洲村至三池町、一里六丁二十七間、從橫洲至海岸六丁三十六間、　六町九間半　橫洲村　三里五町三十四間半　山門郡島堀切村瀬高川口　一里二十七町四間半　鹿尾村川口沿鹽塚川至德益村一里一十一町一十三間、　一里八町五十七間　矢留村川口沿沖端川至古賀村、二十丁二十八間、從古賀至吉留村宿所一十一丁四十九間、北極高三十二度一十分、又從古賀沿沖端川至柳河村、一十九丁四十四間、　二里三十一町二十八間至網干村住吉渡二里三十丁三十六間　三潴(ミノマ)郡小保(コボウ)村　九町三間　向島村若津町　二十二町一十八間

中古賀村筑後川口筑後川渡直徑　五町　肥前國佐嘉郡德富村筑後川口

宿驛

〔延喜式 二十八兵部〕諸國驛傳馬 略○中

筑後國驛馬御井、葛野、狩道各五疋、　傳馬御井、上妻、郡狩道驛各五疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考 二四海道〕筑後　上國、管十郡、七百十村、

生葉五十四村古作浮羽、景行紀云、到的邑而進食、是日膳夫遺盞、故時人號其遺盞處曰浮羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗號盞曰浮羽、即此地、新撰字鏡、的人姓、訓由久波、　竹野八十九村　山本三十村　御原三十五村　御井七十一村古國府　上妻百九村、古八女國、或爲縣、景行紀八女縣、即是、分爲上下二郡、未詳在何時、持統四年紀作上陽咩郡、景行十八年紀、到八女縣、詔曰、峯巒重疊、且美麗、神在此山乎、時水沼縣主奏言、有女神、名曰八女津媛、居此山中、故名八女國、　下妻三十三村

三潴百四十一村、景行紀、水沼縣主、即是、　三池六十二村、古御木國、延喜式等作三毛、正德二年四月、令自今宜書三毛、而今猶作三池、景行十八年紀、有僵樹、長九百七十丈、

筑後國御原郡上岩田村松崎町　一十二町二十四間　下岩田村　二十五町一十二間　御井郡平方村　二十三町三十三間　八町島村古賀茶屋　一里一町一十六間　府中町旗崎　五町四十九間　同上町（至高良玉垂社、一十四丁三十間、）　二十九町六間　上津荒木村二軒茶屋　一里一十二町五十七間　上妻郡一條村盛德（至福島古松町、二里三十四間、從古松町至唐人町一十丁五十八間、又從古松町至山門郡本吉村、二里一十七丁五十四間、從本吉至清水寺、一十五丁四間、又從本吉至上小川村、二十丁二十九間、）　三十二町五十四間　羽犬塚町　二里八町一十一間半　山門郡瀬高、上庄町村、　三町二十四間　同瀬高驛、三十三度一十分、　六町八間　瀬高下庄村　一十二町一十六間　上小川村　一里一十七町二十九間　原町村　一里三十四町三十七間半（至國界一里四丁一十五間）

肥後國玉名郡關村關町（中略）

從豐後國竹田歷善導寺至平方（中略）

筑後國生葉郡山北村　二里一十一町五十一間　吉井村（至若宮村八幡社、八丁一十二間、）　一里二十七町三十八間　竹野郡田主丸村主丸町　二里一十二町三十六間　山本郡飯田村善導寺門前（至府中町旗崎、一里一十二丁九間、）　二十五町一十三間　御井郡大城村（至豐比咩神社、二丁三十六間、）　一里一十六町二十四間　御原郡本鄕村上町　一里一十七町五十七間　御井郡平方村（從竹田至平方、）街道通計一十二里二十八町二間半

從筑後國八町島歷久留米及柳河至植木

筑後國御井郡八町島村古賀茶屋　三十五町二十一間　宮地村（至肥前國基肄郡水屋村、二十二町二十一間、從水屋至筑後川岸、三丁一十八間半、又從水屋至田代宿、一里一十四町、）　一十六町一十二間　久留米通町十町目外町（至府中町旗崎、二十七丁一十三間、）　一十三町三十七間　同三本松町（至新町一町四十八間、北極高三十三度一十九分中、又從三本松町至上町、四丁一十五間、從上町至瀨下濱町、一十一丁三十五間、從濱町、至肥前國三根郡石貝村、二十九丁一十五間半、從石見至千栗八幡社、四丁三十九間、又從石貝至神崎郡吉田村善野、一里三十三丁四十五間、）　二町四十六間　久留米原古賀町二町目（至上津荒木村二軒茶屋、一里五丁三十三間半、）　一里二十一町四十五間（至大善寺村高良玉垂社、一里一十八丁四十八間、）

〔日本地誌提要六十六筑後〕形勢　山嶽東南ニ亘リ、洪流西北ヲ繞リ、沿河迤南、土地平衍、海灣ニ接ス、五穀豐饒ニシテ運輸ノ便ヲ兼ヌ、但洪水氾濫ノ害ヲ免カレズ、民產頗富ミ、風俗質直温厚、

〔筑後地鑑中北筑〕一從久留米至豐前大里行程二十四里、小倉城東海濱一里許有名大里處、此則古之所謂豐前國柳浦者、而安德帝蒙塵之一所也、故後世也尙呼爲內裏、今作大里、我府若東竹乘船之津也、故構館多置船、至小倉津行程有兩道、曰八町越、曰冷水越、發久留米州內本鄕四里、筑前秋月三里、千津二里、小隈一里半、豐前猪膝二里、香春三里、採銅所一里、呼野二里、石原一里、小倉三里、凡九驛二十二里半、是曰八町越、冷水越自久留米當州御原郡横隈四里、筑前山江二里、內野三里、飯塚三里、小屋瀨五里、黑崎三里、豐前小倉三里、凡七驛二十三里、是爲冷水越、

一從筑前境本鄕至肥後境四ヶ村、凡十里有餘、此路北來自豐前小倉南至于薩州房津、本朝隣國已來之大路也、故道古昔自羽犬塚之驛亭渡長田川邊本吉邑至原野町驛邸、今也柳川立花公改替封內大路、自羽犬塚透瀨高兩庄驛舍至原野町、故行程自故道遠者一里、

一柳川海道者、先國司田中公入部後、令長子主膳亮守久留米城、故慶長年中、新經營此大路、行程五里、廣野無人家處及三里、因玆旅客行人恐夜行、故歸野間立町、爲往還之便、曰横溝町、大角町、土甲呂町、次山町、目安町、津福町、皆除市宅之租役至于今免之、

一從柳川歷福島至黑木行程六里餘、大路、田中公所營也、福島城主久兵衞、黑木城代辻勘兵衞爲往還行程者也、

一從久留米豐後海道至吉井、去久留米六里有餘、有兩道、山邊草野町驛、次中道田主丸町驛次之、

一從久留米福島道三里有餘、自福島未者至矢部、或至鹿子尾、又至星野金山、

一從久留米經城島二里半至榎津、行程五里十町、

〔日本實測錄七街道〕從筑前國山家薩州街道至鹿兒島〇中略

位置

〔日本書紀景行七〕十八年七月甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、

〔翰林本節用集下〕筑後、筑州上、管十郡、南北五日、穀與魚鼈不可勝計、珍寶器械多也、大中國也、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

筑後柳河瀬高町　極高三十三度一十分、經度西五度一十八分、從小倉長崎街道、自山家經筑州街道瀬高、自同所柳河街道二十九町二十間半、三百一十二里二十八町三十一間〇至東都

〔日本經緯度實測〕北極出地

筑後　梁川　三三度一〇分〇〇秒　久留米　三三度一九分三〇秒略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中

筑後　久留米　西五度一一分四八秒　梁川　西五度一八分三九秒

疆域

〔筑後地鑑上北筑〕一筑後之爲州也、東以豐後爲限、西與肥前阻河、南隣肥後、北接筑前、州内方十餘里、山少而田多、其國爲上國、分爲十郡、凡三十三万石有兩府、北名久留米、我有馬公所城也、生葉、竹野、山本、御井、御原、上妻、下妻三瀦等之八郡屬之、凡二十一万石有餘南名柳川、立花公之城也、山門、三池之二郡、及上妻、下妻、三瀦之内若干邑屬之、凡十万石有餘兩府相距五里、兩府各有府廣、北號松崎、在御原郡、屬久留米附庸、采地一万石、南號三池、在三池郡、屬柳川、三附庸一万石、

〔日本地誌提要六十六筑後〕疆域　東ハ豐後、西ハ肥前、南ハ肥後、北ハ筑前、西南ハ海ニ至ル、東西凡壹拾壹里、南北凡八里、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕筑後國三潴郡大野肥前國佐賀郡大多久島　島豐一島、周二地方一帶有各　周廻三里廿町廿六間

地勢

〔筑後志一形勝〕東南は山嶽の險に倚り、西北に淡河の阻を帶び、西南は海濱の際に接す、地勢廣濶土脈膏腴、穀稼多實、國民安樂にして、四方八達風氣和暖の佳境なり、

雜載

あすしらぬ老のすさみのかたみをや世をへて生の松にとゞめん

〔延喜式二十八兵部〕諸國器仗○中略 筑前國甲四領、横刀十口、弓廿張、征箭册具、胡籙册具、

〔萬葉集五雜歌〕日本挽歌一首

大王能等保乃朝廷等、斯良農比、筑紫國爾、泣子那須、斯多比枳摩斯提、伊企陀爾母、伊摩陀夜周米受、年月母、伊摩他阿良稱婆、○中略

神龜五年七月二十一日　筑前國守山上憶良上

筑後國

名稱

筑後國ハ、チクゴノクニト云フ、本ト筑前ト合シテ、筑紫國ト稱セシヲ以テ、舊クハ、ツクシノミチノシリトモ云ヘリ、西海道ニ在リテ、東ハ豐後、西ハ肥前、南ハ肥後、北ハ筑前ニ界シ、西南ハ海洋ニ面セリ、東西凡ソ十一里、南北凡ソ八里、其地勢ハ、山嶽東南ニ亙リ、洪河西北ヲ繞リ、土地廣潤ニシテ、山海ノ利頗ブル多シ、此國ハ、古ヘ國府ヲ御井郡ニ置キ、御原、生葉、竹野、山本、御井、三潴、上妻、下妻、山門、三毛ノ十郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世三毛郡ヲ三池郡ニ作ル、明治維新ノ後、御原、山本ノ二郡ヲ御井郡ニ合セ、竹野郡ト生葉郡ノ一部トヲ合セテ浮羽郡ト稱シ、生葉郡ノ一部ト、上妻、下妻ノ二郡トヲ合セテ八女郡ヲ立テ、凡テ六郡ト爲シ、新ニ久留米市ヲ設ケ、福岡縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕筑後 筑紫乃三知乃之利

〔饅頭屋本節用集天地〕筑後 筑州

〔日本風土記一寄國島名〕筑後 職骨

宮崎(ミヤザキ)　かしゐより當所の中間をたゝら潟とて、東へ遠き干潟也、在所は北南へ遠し、八幡宮たち給ふ、社壇西向也、神社の部にくはしく有之、こゝにしるしの松とて有、神前より水中に井垣あり、戒定惠(カイヂヤウヱ)の宮埋られし所と云々、依之宮崎と云り、松原北南一り、下は白砂也、無雙の松原也、博多ちかし、北は海也、此所を唐泊(カラドマリ)袖の港と云といへり、拾遺神樂のうたに、重之、

いく代にか語つたへんはこ崎の松のちとせの一ならねば

生松原(イキノマツバラ)　西南東陸、北は海なり、里有、博多より西也、中間一里なり、新古今別のうた、枇杷皇太后宮、

凉しさは生の松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

壺の社(ツボノヤシロ)　博多より東也、神社の部有之、

三笠山(ミカサヤマ)　森有之、鹿神生渦を此山にて召れしより、竈門山とも云也、

あやしくも我ぬれ衣をきつる哉三笠の山を人にかられて

西都(サイト)　宰府也　木丸殿　朝倉山　思川　染川　三笠の森

寶滿山竈也、天神の靈廟社壇南向也、府中の西のはし也、かるかやの關など、云も此所也、

蘆城山(アシキヤマ)　三笠山より東也、あしき山より府中へ三り也、右之外書記にとゞめし名所多有之といへども、あまねく人のしらざる分除之、

〔筑紫道記〕明れば廿九日二〇文明十年九月十生の松原へと皆同行さそひて立出侍るに、大なる川を打渡り、みれば右に一村の林有、則靈廟の御社なり、〇中略やがてかの松原に至る、大さ一丈ばかりにて、皆浦風にかじけたるも哀れなり、引入て社有、〇中略御神のいさよとてさし給ひけん松は早う朽て、その根を人守りにかけしなどかたるも、昔こひしきもよはしなり、社壇の右の方に、大き成松のしかもすがた常ならず神さびたる有、是は末遠くいきの松ともいふべかりけるとみるに、我齢の程たのむかげなきも心細くて、又はかなしことを、

中絶スル人ヲモ親ミ寄リ、親ヲ捨テヽモ其人ニシタシムノ風儀甚不可然ナリ、

〔日本鹿子十四〕同國筑前中名所之部

蘆屋　遠賀湊と云は、此所のこと也、北は海、東は入海也、西のかたに岡の松と云あり、無雙の景地也、水ぐきの岡の湊と云も、右の遠賀と云所也、松原有之北は海なり新拾遺集のうたに素暹法師

水ぐきの岡の湊の浪の上にかずかき捨てかへるかりがね

内浦濱　是も岡の續き也、濱邊なり、此濱を行ば宗像へ出るなり、

宗像　此つゞきに生松原と云あり、當國第一と申、神の植給ふ松也といへり、北より西へ海邊なり、東は山なり、宗像明神社有、神社の都にくはし、

桂潟　宗像より南也、間ちかし、遠干潟せ、神の代に異國をたがひ給ひて、かつら嶽と云山にのぼりて、軍にはかつら浦との給ひしより、勝浦と云也、その時の楯ほこ今に岩になりてあり、神代に放し給ふと云馬の牧有之たてさきの藥師と云も、右の岩のうへにたち給ふ也、

身の憂濱　かつら潟より南也、西は海也、間三りのはまなり、

志加島　あかはた山　東は磯邊山につゞく也、海の中道と云もちかし、はる〴〵と出たる島也、文珠堂有、志賀よりゑんくうの濱と云所まで三り也、拾遺戀の歌、

志賀の蜑の釣にともせるいざり火のほのかにいもを見るよしもがな

野古の島　志賀より未申のかた也

からどまりのこの浦浪たゝぬ日はあれども君を戀ぬ日はなし

香椎潟　志賀より中間三り也、西は海、東は山也、宮有之、神社の都有之、たぐひなき景地也、金葉雜のうたに、

ちはやぶるかしゐの宮の杉のはを二たびかざすわが君ぞきみ

人口

〔官中秘策〕五筑前國　廿一郡○中略

一人數三拾万七千四百三拾九人　内男拾七万千八百七拾八人女拾三万五千五百六拾壹人

〔筑前國續風土記〕一提要國中民戸

民戸凡五万六千六百五十八軒　此内　福岡町家數千五百廿五軒間數五千百三十七間五尺七寸○中略

國中人數

凡人數三十三萬四千二百十四人之內、男十八万五千五百六拾貳人、女十四万六千五百六拾三人、

社人四百三十九人　僧千三百八十八人　山伏二百人　神子六十二人　陰陽師

福岡町人數一万四千九百五人男八千百七十八人、女六千五百八十五人、僧百四十二人、

博多町人數一万九千五百十六人男一万九百十人、女八千四百五十二人、社人、七人、神子七人、僧百十人、山伏二十七人、○下略

○按ズルニ、此書ハ元祿十六年、貝原篤信ノ著ナリ、

〔吹塵錄〕五人口及國高文化元甲子年諸國人數調○中略

御料私領一人數三拾壹万三千四百貳拾人　高六十万六千九百八拾壹石餘　筑前國

内男拾七万八百三拾貳人女拾四万貳千五百八拾八人○中略

弘化三丙午年諸國人數調○中略

御料私領一人數三拾四万六千九百四拾貳人　高六拾五万千七百八拾貳石餘　筑前國

内男拾七万七千九百七拾八人女拾六万八千九百六拾四人

風俗

〔人國記〕筑前國

筑前國ノ風俗、大體飾リ多シ、人之心十人ハ十人ミナ思々ニ違リ、勇氣モ一應ハツトメトグルトイフトモ、カザリ有風俗故ニ、終ニハ何事モ成就ス間敷國風也、西國ニ珍敷キ花奢ノタニ色ヲ好ム事、千人ニ七八百人如此、總シテ此國ハ、萬事ノ風俗ワガ爲ニ德フタコトナレバ、我ガ親ミ

凡太宰府每年調絹三千疋、附貢綿使進之、又隼人調布除府家三箇年雜用料之外、付使進上、

凡太宰所收調絲、除儲料五百絇之外、每年附貢綿使進之、

凡太宰府年料、造進朱漆酒海六合〈三合徑二尺、三合徑一尺六寸、〉下食盤六十枚〈徑一尺七寸〉中盤八十八枚〈徑一尺〉飯椀一百口〈徑七寸〉羹椀二百口、〈百口徑六寸五分、百口徑六寸〉盤四百五十枚、〈卅枚徑七寸、二百廿枚徑六寸、二百枚徑五寸五分、〉盞二百五十口、〈百五十口徑五寸、百口徑四寸五分、〉墨漆提盞十四口、

右以正稅充料造進

諸國貢蘇番次〈略〉○中　太宰府七十壺〈十五口各大一升、卅五口各大五合、廿口各小一升、〉　右爲第五番〈己亥年〉○中略

交易雜物〈略〉○中　太宰府〈絹四千匹、履料牛皮廿四張、狸皮十張、銀三百兩、金漆五缶、朱砂一千兩、茜二千斤、紫草五千六百斤、猪膏二石、雜油卅石、檳榔馬簑六十領、同蠅簑一百廿領、簡帖笠一百背蓋、黑漆鞍十具、鐵鐙廿隻、〉

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子〈略〉○中　太宰府〈甘葛煎七斗、但木蓮子者、筑前國部內諸山及壹岐等島所出之中、擇好味者年中貢、〉

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥〈略〉○中

太宰府十二種　木蘭皮百五十斤、土依石膏各十斤、龍骨六十斤、皂莢卅斤、代赭、禹餘糧各一斗、鬼臼四升、狸骨三具、檳榔子、人參各廿斤、石斛十斤、

〔延喜式三十九內膳〕年料〈略〉○中　太宰府〈御取鰒四百五十九斤五壺、短鰒五百十八斤十二壺、薄鰒八百五十五斤十五壺、陰鰒八十六斤三壺、羽割鰒卅九斤一壺、火燒鰒三百卅五斤四壺、已上調物、鮨鰒一百七十八斤五缶、鮨鮑一百八斤三缶、腸漬鰒二百九十六斤九缶、甘窖鰒九十八斤二缶、已上中男作物、鮨年魚二百廿三斤大缶、煮鹽年魚八百卅九斤廿缶、內子鮨年魚卅六斤一缶、已上梁作、調醬四斗八升二缶、宍醬二斗三升一缶、蒜房漬一石五斗七升六缶、以上厨作、雉腊二與六十籠、別三翼、腹赤魚筑後肥後兩國所進出、其數隨得、已上別貢、〉

○按ズルニ太宰府管國ノ貢物ハ、各國ニ分載スルコト能ハザルヲ以テ併出ス、

〔毛吹草三〕筑前

野鴈　玉島川鮎　金崎鮑　鰤　名濱鹽　博多練酒　松露　帶〈絹也、ヲケ紋有、〉　島織物　折敷　蘆屋釜

出擧稻

年料別貢雜物

筑前國〈御料私領〉　一高六拾五万千七百八拾貳石貳斗七升八合四勺四才

〔延喜式 主稅 二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻〈○中略〉

筑前國正稅公廨各卅万束、國分寺料三万二千二百九十三束、修理觀世音寺料一万束、文殊會料二千束、府官公廨十五万束、衞卒料二万二千四百束、〈隨日數有增減、下皆同之〉修理府官舍料六千束、池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料五万七千三百七十束、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕筑前國〈○中略〉管十五、〈○中略〉正公各二十萬束、本頴七十九萬六十三束、雜頴三十九萬六十三束、

〔延喜式 主計 二十四〕筑前國〈去府行程一日〉

調、絲卅九絇、貲布卅五端、綿紬五疋、席三百六十三枚、大甕九口、小甕百九十五口、瓮一百九十五口、麻笥盤五十六口、水椀三百廿口、海石榴油一斛四斗六升四合、御取鰒二百六十斤、羽割鰒六斤、葛貫鰒一百八斤、蔭鰒一百卅五斤、鞭鰒廿四斤、腐耳鰒一百八十二斤、甘鮨一百廿八斤、鮨鮨二百八斤、海藻三百六十八斤二兩、自餘輸絹、布、鐵、短鰒、薄鰒、鮨鰒、火燒鰒、鹽、　庸、熬海鼠八百廿八斤、鹽三石九斗七升五合、自餘輸綿、布、鐵、米、鹽、薄鰒、火燒鰒、雜魚腊、　中男作物、木綿、穀皮、麻、席、防壁、薦席、韓竈、苫、薑、漆、胡麻油、海石榴油、荏油、鹿脯、鹿鮨、押年魚、烏賊、鯛腊、雜魚楚割、腐耳、鰒鮨、鰒腸、漬鰒、鮨鮨、甘鮨、鹽漬年魚、海藻、

〔延喜式 民部 二十三〕年料別貢雜物〈○中略〉　太宰府〈筆一千一百廿管、兎毛、鹿毛各五百六十管、墨四百五十廷、以上二種並韓樣、一合、紙二百張、麻紙二百張、檀紙二百斤、麥門冬二石二斗、紫草日向八百斤、大隅一千八百斤、青笠二百蓋、蘇木南嶋所進、其數隨得、〉

右別貢雜物並依前件、自餘雜藥見典藥式、其運送傭夫各給路粮、

太宰府〈綿八百五十兩、深紫絁五十疋、淺紫絁一百疋、深綠紬廿四疋、淺綠紬十六疋、緋紬十疋、深紫貲布廿端、淺紫貲布廿端、深綠貲布廿端、白貲布五十端、紫革廿張、緋革廿張、畫革廿張、洗革一百張、白革廿張、海石榴油十石、席二千枚、〉

右管國調物、依件染造、其雜綵并革等、並盛韓櫃、其運脚者並給功食、

〔筑前國續風土記一 提要〕總論
天文十二年、日本國中毎國の知行高をしるし、其簿を將軍家に獻す、是を民俗には天文の縄と云、筑前國三十三万五千六百九十石としるせり、小早川中納言秀秋、此國を領せられし時は、田畠の町數二万九千六百九十三町餘、田畠高三十万八千四百六十一石ありしとかや、是怡土郡公領を除ての數なり近きころに至つては、庶民太平の化に浴し、子孫増々しげくさかへて、年々に口數も增りぬれば、山をひらき野をあらきはりして、田圃年々に多く廣まれり、福岡、秋月、直方、及怡土郡公領、唐津領までかぞへては、田圃凡五萬町計成べし、○中略

筑前國十五郡田畠高

那珂郡　四万二千四百六十六石五斗餘　早良郡　四万五千九十五石七斗餘　志摩郡　四万三千七百九十三石九斗餘　怡土郡　一万八千三百九十四石餘　表粕屋郡　四万三百三石二斗餘　裏粕屋郡　二万三千百九十六石三斗餘　席田郡　九千八十四石三斗餘　御笠郡　三万七千四百七十四石餘　夜須郡　一万千九百三石餘　下座郡福岡領　一万五千百三十六石餘　上座郡　二万五千五百九十六石餘　嘉麻郡福岡領　一万九千八百八石餘　穗波郡　二万九千四百六十七石五斗餘　鞍手郡福岡領　三万四千六百九十二石餘　遠賀郡　四万七千六百二十七石七斗餘　宗像郡　五万六千二百五十八石餘

福岡領郡合田畠高五十万二百九十九石八斗八升餘　內畠高九万三百十九石九斗四升餘

〔日本鹿子十四〕筑前國十一郡、中上國、南北四日、○中略知行高五十二万二千五百十二石、

〔官中秘策五〕筑前國　廿一郡○中略

一石高六拾万六千九百八拾壹石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調○中略

豊後國大野庄志賀村南方内泉名、大窪屋敷、田畠、羽月屋敷朝倉名内吹追屋敷、津留屋敷、定蓮房屋敷付大竹屋敷、并田畠、荒野、筑前國愛。東。庄。等地頭職豊前藏人次郎入道寂性當知行、不ㇾ可ㇾ有ㇾ相違ㇾ者、天氣如ㇾ此、悉ㇾ之以ㇾ状、

　　建武元年五月十三日　　　　式部大丞花押

〔新編會津風土記三〕花押〇足利尊氏

下　三池査助入道々喜〇安藝貞鑒

　可ㇾ令ㇾ早領ㇾ知筑前國富。永。莊。并肥前國大村太郎跡事

右以ㇾ人爲ㇾ勳功之賞ㇾ所ㇾ宛行ㇾ也者、守ㇾ先例ㇾ可ㇾ致ㇾ沙汰ㇾ状如ㇾ件、

　　建武三年卯月五日

〔宗像文書〕筑前國楠。橋。莊。事、任ㇾ將軍家御下文之旨ㇾ可ㇾ被ㇾ領掌ㇾ候、仍執達如ㇾ件、

　　建武三年四月十九日　　　　大宰少貳花押〇少貳賴尚

藩封

〔慶應元年武鑑〕筑前宰相齋溥卿大廣下從四位元甫元千四月任　五拾二万石餘　居城筑前早良郡福岡江戸ヨリ海陸三百九十八里

當國名島金吾中納言秀秋居、慶長五、黒田筑前守長政賜國城地、代々領之、松平右兵衛佐忠之代、五万石、給甲斐守長興配分、御詰筑紫大夫

黒田甲斐守長德　五万石　居城筑前夜須郡秋月陣屋江戸ヨリ海陸二百八十八里

慶長五年ヨリ、黒田氏代々領ㇾ之、〇中略

田數　石高

〔倭名類聚抄五國郡〕筑前國〇中略　管十五五田一万八千五百餘町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕筑前上國十五郡中略田一万九千七百六十三町

〔海東諸國紀〕筑前州　有ㇾ山、距ㇾ海濱ㇾ三里、山頂有ㇾ火井、日正點、煙焰漲ㇾ天、水沸而從ㇾ岩面ㇾ爲ㇾ統ㇾ黄、凡產硫黄、島皆岡、郡十五、水田一萬八千三百二十八町九段、

建武四年十二月廿八日

〔内務省本宗像文書三〕雜訴決斷所牒

筑前國宗像社

右如彼社解者、當國宗像莊內曲村者、末社七十五社修理料所重色無雙之地也、而天下騷亂之刻、惡黨人等致濫妨狼藉之間、勒子細就經奏聞、當知行不可有相違之由、去年九月十七日被成下綸旨之處、猶以不叙用、致狼藉云々、爲事實者、太不可然、早止彼濫妨、任先度綸旨、全所務、可專神用、此上猶令違犯者、爲被處罪科、可注進交名者、以牒、

建武元年三月二十日

西市正中原朝臣有〇章 花押

右中辨藤原朝臣 花押

〔集古文書一肥後〕後醍醐天皇綸旨肥後家臣志賀太郎助藏

筑前國嘉摩郡綱別庄內佐古名、豐前國止毛郡內本今吉名吉木壹町、同國下毛郡安恒名、同國宇佐庄內蔀屋敷等、幷田地、豐後國安岐鄉內諸田名、松武名諸田名、內龜丸名田畠敷山野荒野等、右所々宇佐氏女當知行、不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月一日

式部大丞判 花押

後醍醐天皇綸旨肥後家臣志賀太郎助藏

豐後國大野庄志賀村半分南方幷下村泊寺院主職地頭職、同國笠和鄉富成名內勢久世宇屋敷壹濱、筑前國三桑木庄內田畠屋敷山野等、志賀藏人太郎忠能法師法名正玄當知行、不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年五月一日

式部大丞判

後醍醐天皇綸旨肥後家臣志賀太郎助藏

本年貢米三百石纔比物二重内(七月八日一重 九月八日一重)　關東備前守 小山出羽入道息女

七月兵士十人

近年所濟二十石内(東郷四貫文 西郷四貫文)令辨濟之處、文永七年以來寄事於蒙古人、一向無所濟、

右就所見注進如件、凡近年背先例不被成返殘於執事公文間、御年貢濟本事、委不存知之、

正中二年三月日　公文左衞門少尉大江(花押)

〔中村文書(見玉纏保集文書所載)〕筑前國怡。土。莊。光岡彌藤三郎入道道圓、去五月二十五日匠作英時誅伐之間令離參、自同二十六日、付於御着到候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年七月日　沙彌道圓上

進上　御奉行所

承了　沙彌(花押〇大友貞宗)

〔大泉坊文書〕公方御書下案一通、目安案一通所副下也、〇(花押)秘書

筑前國怡土莊智願寺雜掌法橋光心申、當寺塔免田末武名内田地五町事、香力六郎宗經申給奉書、致濫妨云々、寺家當知行之條、本主重文并下知狀以下分明上者、先沙汰付下地於寺家、於理非者被副下目安之上者、可有其沙汰之旨、被仰下處也、仍執達如件、

建武元年六月二十五日　左衞門尉(花押)

志摩方政所

〔大友文書二〕花押(〇足利尊氏)

下　大友孫太郎氏泰

可令早領知筑前國怡土莊(縫殿頭貞宗(大友)跡)事

右所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

筑前國　植木庄（法花堂）　可被止本所

　　安貞二年八月五日　　七條院　在御判

　　　　　　　　　　　　すめいもん

〔吾妻鏡二十七〕寬喜二年二月八日、勝木七郎則宗返給本領筑前國勝木庄也、此所中野太郎助能爲承久勳功賞、雖令拜領、依被賞子息兒童、給則宗畢、助能又賜替筑後國高津包行兩名、武州殊沙汰之給云云、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

　總處分　條々事

一寺院　東福寺（中略）　寺領（中略）　筑前國三奈木庄（中略）

一家地文書庄園事（中略）　尙侍殿（中略）　家領（中略）　別當三位讓進庄々（中略）　筑前國山鹿庄（中略）

（略）

　　建長二年十一月　日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　禪老（在御判）

〔集古文書二十六下知狀〕文永九年下知狀（紀伊國高野山三昧院藏）

　金剛三昧院領筑前國粥田庄事

右爲寺家沙汰、可令執行庄務之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

　　文永九年十月十六日　　　　　　　　　相模守平朝臣（花押）

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　左京權大夫平朝臣（花押）

〔東寺百合文書一ノ五〕最勝光院

　注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事（中略）

一筑前國　三原庄（東鄕西鄕）

庄

なり、長政公其本を思ひ出して、先祖の住給ひし所の名を用ひて、かく名付給ひしとぞ聞へし、〇中略

一福岡町数凡二十三町、其郭内に有町は、簀子町、大工町、本町、呉服町、西名島町、東名島町、是他國より城下を通る大道なり、都て六町通と云、西より東へ通る竪町なり、又其東に橋口町有、士の宅なり、是も六町通に續けり、大道なり、傍に有は魚町、萬町、此二町は南北に通ず、洲崎町、鍛冶町、西職人町、東職人町、濱町、紺町、材木町、此七町は東南に通ず、荒戸新町、横竪四町、以上十一町は、みな福岡の城の郭外にあり、唐人町、新大工町、西町、右は城の西郭外有、薬院町、紺屋町、春屋町、竪横數町、古は城東郭外にあり、

〔西遊雜記　七〕福岡の城は、昔し名島の地に有しを、黑田長政朝臣此地に移し給ひし故に、備前福岡の地名を取りて、此所の地名と號し給ふ事と云、筑前北向ふ國にして、朝鮮國に對し、國をうしろとせる國なれども、如何の地理にや風土至てよく、上國と云べし、博多とは僅の橋を以て隣とし、町續にして、雙方の地中口凡一万六千餘軒、人物言語もいやしからずして、諸品自由繁昌の所也、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年元曆元年四月六日甲戌、池前大納言并室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勳勞給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言沙汰〇中略

宗像社筑前　三箇庄同

已上八條院御領〇中略

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行勤狀如件、

壽永三年四月六日

〔東寺百合文書　一ノ五〕七條院　在御判

修明門院御處分御所庄々等〇中略

牒、件濫妨事、任去年九月十七日綸旨、今年三月二十日當所牒、止重恒之濫妨、宜令全所務者、仍牒送如件、以牒、

建武元年十二月二十七日　前筑後守藤原朝臣〇小田貞知

〔南狩遺文　一〕尾張三郎、備中權守、千手、秋月已下凶徒、打出筑前國長尾村、濫妨所々由、依有其聞、所被成御教書也、早馳向彼所、可被致軍忠、於恩賞者、可申沙汰候、仍執達如件、

建武四年四月十四日　顯康判

田口三郎殿

〔內務省本宗像文書　六〕藤原氏字伊毛申、亡父武藤孫太郎經顯〇少貳遺領、筑前國土穴村地頭職安堵事、申狀副具書如此、所申無相違否、云當知行之段、云可支申仁有無、載起請之詞、可被注申之狀依仰執達如件、

建武四年七月十六日　沙彌花押

武藤但馬權守殿〇少貳貞經

〔佐藤元海九州記行〕一太宰府ノ町ハ、三四百軒モ有ベキ、草葺家バカリニテ見苦キ所ナリ、至テ邊鄙ノ地ニシテ、菅公ノ神祀ノ無キ者ナラバ、絕テ人ノ來ルベキ里ニハ非ルベシ、

〔筑前國續風土記　二福岡〕福岡城城內本丸の西石垣の下ひきゝ所は早良郡に屬し、東は那珂郡に屬す、城外は簀子町より西の方早良郡に屬し、東は那珂郡に屬す、慶長五年、黑田長政公初て此國を領し給ひて、其年十二月上旬入國し、先名島の城に住給ふ、〇中略長政公未然を熟々考給ひ、此城地境かたよつて城下狹き故、亂世には宜しけれども、世治ては可久守地に非ずとて、其由を如水公と相議し、別に城郭に宜かるべき地を所々に見そなはし給ふ、〇中略終に那珂郡警固村の境內、福岡と云所に於て、新に城地を經營して、山に依りて城を築き、堀をほり廻し、郭を構へ、要害堅くし給ふ、〇中略抑此邑の名を福岡と號せしは、長政公先祖は江州佐々木の一族たりしかば、長政公の曾祖父黑田左近大夫高政公、故ありて備前國邑久郡福岡の產

筑前國博多息濱（早良郡）依勲功之賞、可令知行者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年八月二十八日　權左少辨（花押）

大友近江入道館

〔太閤記十〕大隅日向知行割之事

古しへは博多箱崎之在家十万間有て、泉州堺の津にもおとらざる富家おほかりしが、肥前龍造寺と豐後之大友宗麟と鉾楯及び、其亂十餘年に及しかば、形ばかりにあはれて、あはれに見えにけり、秀吉絶たるをおこさばやと覺され、竪横の町割十町づゝに定られ、博多の古老を呼出され打渡し給ふ、町人是は有がたき御再興かなと悦び、晝夜を分す家々のいそぎはなはだし、

〔萬葉集五〕謹通尊門記室

筑前國怡土郡深江村子負原、臨海丘上有二石、大者長一尺二寸六分、圍一尺八寸六分、重十八斤五兩、小者長一尺一寸、圍一尺八寸、重十六斤十兩、並皆墮圓、狀如鷄子、其美好者不可勝論、所謂徑尺璧是也、（或云、此二石者、肥前國彼杵郡平敷之石、當占而取之、）去深江驛家二十許里、近在路頭、公私往來莫不下馬跪拜、古老相傳曰、往者息長足日女命（神功皇后）征討新羅國之時、用茲兩石插著御袖之中、以爲鎭懷、（實是御裳中矣）所以行人敬拜此石、乃作歌曰、

可既麻久波、阿夜爾可斯故斯、多良志比咩、可尾能彌許等、可良久爾遠、武氣多比良宜弖、彌許々呂遠、斯豆迷多麻布等、伊刀良斯弖、伊波比多麻比斯、麻多麻奈須、布多都能伊斯乎、世人爾、斯咩斯多麻比弖、余呂豆余爾、伊比都具可禰等、和多能曾許、意枳都布可延乃、宇奈可美乃、故布乃波良爾、美弖豆可良、意可志多麻比弖、可武奈何良、可武佐備伊麻須、久志美多麻、伊麻能遠都豆爾、多布刀伎呂可毛、

〔宗像文書三（内閣本）〕雜訴決斷所牒　宗像社大宮司氏範

當社領筑前國山口村重恒濫妨事

右田地者、當社御寶前、爲毎月千度詣料田、可被致丁事御祈禱之状如件、

建武三年卯月十一日　　地頭御代官沙彌覺忍花押

〔郡名一覽〕一筑前國御料私領　筑州　南北四日　拾五郡　九百貳ヶ村

高六拾万六千九百八拾壹石四斗二升

●福岡　二百九十八里　●秋月　二百八十八里　〇皆木福岡一万八千石　黒田美作

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕筑前　十五郡、九百一村、

御料私領
高六拾五万千七百八十二石二斗七升八合四勺四才

遠賀郡九十五村　宗像郡六十四村　鞍手郡七十七村　穂波郡六十二村　嘉麻郡六十八村

上座郡三十八村　下座郡四十二村　夜須郡五十六村　御笠郡五十九村　糟屋郡八十四

村　席田郡九村　那珂郡八十一村　早良郡五十二村　志摩郡五十一村　怡土郡六十三村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

筑前　宗像郡、上八村、糟屋郡、上府村、志摩郡、芥屋村、女原村、怡土郡、神在村、周船寺村、松末村、大入村、鹿家村、遠賀郡上津役村、香月村、安屋村、葛島、又呼貸波島、中島、又呼河岬島、穂波郡、目尾村、樂市村、彌山村、御笠郡、山家村、早良村、金武郡、夜須郡、甘水村、下淵村、上座郡、古毛村、久喜宮村、

〔饅頭屋本節用集波天地〕博多

〔地名字音轉用例〕入聲クノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

はかた　博多和筑前

〔日本風土記一寄語島名〕花哈嗒

〔大友文書二〕包紙　大友近江入道宗〇貞館　權左少辨花押〇高倉光守

遠賀郡　埴生　恒前　山鹿　宗像　内浦　木夜

鞍手郡　金生(加奈布)　二田(布多)　生見(伊加美○伊以美、高山寺本作二久美一)　十市(止布知)　新分(爾比多岐)　粥田(加由多○加布多、高山寺本作二加以多一)

嘉麻郡　草壁(久佐加倍)　三緒　大村(於保無良)　綱別(都奈和岐)　馬見(牟末美)　碓井(宇須井○高山寺本此郡有二山田郷一)

穂浪郡　三坂(美佐加)　鷗田(古毛多)　土師(波之)　堅磐(加多之波)　穂波(布奈美○高山寺本作二保布奈一)

夜須郡　中屋　馬田　賀美　雲提　川島(○島、一本作レ刈、)　栗田(○栗、高山寺本作レ粟、)

下座郡　馬田(無末多)　青木(安乎岐)　蓼餐(久佐波)　三城(美都岐)　城邊(木乃倍)　立石(多天之○高山寺本此郷有二美嚢郷一)

上座郡　把伎(波木)　壬生(爾布)　廣瀬(比呂世)　作田　長淵(奈加布知)　何東(○高山寺本作レ河)　三島

御笠郡　御笠　長崗　次田　大野

〔東大寺正倉院文書三十八〕筑前國太寶二年戸籍

筑前國島郡戸籍川邊里。。　太寶二年

戸主卜部乃母曾年肆拾玖歲　正丁　課戸(以下略○)

〔吾妻鏡七〕文治三年八月三日辛未、筑前國宮崎宮宮司親重被レ行二其(當國那珂西鄕。。。精屋西郡郷等押レ)領之一云云、平氏在世之時、依レ抽二被斷祈一、日來御祈禱、有二御氣色一、所レ給二於神宮等事一者、一向可レ被レ從二鄕之由被レ思食定一云云、

〔新編禰寢氏世錄正統系圖二〕雜訴決斷所牒　禰寢院孫次郎清成所

大隅國禰寢院南俣地頭、郡司兩職、幷筑前國早良郡比伊。。。鄕田屋敷、同國長淵莊島地等事、

右件所々、當知行不レ可レ有二相違一者、以牒、

建武元年六月十六日　左少史高橋朝臣(在判)　左少辨藤原朝臣(花押○下略)

〔筥崎神社文書(見二玉蘊拾遺所引文書一)〕筥崎三所權現御寶前

爲毎月千度詣料足　戸粟鄕。。(○以下略)　久富名内(五段)ヒヤクト事

夜須に連り、峯を越て嘉麻郡に隣りし、西北那珂席田郡につゞき、粕屋には小山を隔てつゞけり、古昔は官府のありし地にして、異國の藩屛として、九州の政を統べ行ひし所なれば、太宰の帥以下、數多の官府しば〳〵交代せし故、遺蹤古蹟碁の如くしき、星の如くつらなれり、其地たる、東西に高峯連り聳へ、南北は他郡の平原の地に通せり、泉清く土肥たり、古代の遺風にや、民俗いやしからず、

〔日本書紀九神功〕九年○仲哀三月戊子、皇后○神功欲擊熊鷲而自橿日宮遷于松峽宮、時飄風忽起、御笠墮風、故時人號其處曰御笠也、

〔續日本紀四元明〕和銅二年六月乙巳、筑前國御笠郡大領正七位下宗形部堅牛、賜益城連姓、

〔大內家壁書〕従山口於御分國中行程日數事○中略

筑前國○中略　三笠郡五日、請文十五日、○中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明○下略

〔倭名類聚抄九筑前國〕怡土郡　飽田(安久多)　託杜(○高山寺本杜作社、)　大野(於保乃)　長野(奈加乃)　雲須(久毛波留)　良人　石田(伊之木○伊之木、高山寺本作以之多、)　海部

志摩郡　韓良　久米　登志(度之)　明敷(安加之岐)　雞永　川邊　志麻

早良郡　咩伊(比)　能解(乃計)　額田(奴加多)　早良(佐波良)　平群(倍久利)　田部(多倍○高山寺本此下有曾我部)

那珂郡　田來　曰佐　那珂　良人　海部　中島　三宅　山口(也萬久知)　板曳(伊多比岐)

席田郡　石田(伊之多)　大國(於保久爾)　新居(爾比井)

糟屋郡　香椎(加須比)　志阿　厨戶　大村(於保牟良)　池田　阿曇　作原(久波良)　勢門(世止)　敷梨

宗像郡　秋(安岐)　山田(也萬多)　怡土(伊度)　荒自(阿良之)　野坂(乃佐加)　荒木(安良木)　海部(安萬)　席內(牟之路宇知)　深田(布加多)　蓑生(美乃布)　辛家　小荒　大荒　津九

上座郡

寛正二年六月廿九日　　備中守奉　秀明略○下

〔筑前國續風土記十〕上座郡

此郡は筑前の東南の隅に在、南は筑後に隣りて、間に千年川を隔、川幅一町一間、深六尺、或七尺、東は豊後豊前に境ひ、北は嘉麻夜須郡に續き、山を隔て嘉麻に隣る、西は下座にならべり、國中第一の膏腴の地にして、種植の利他所に倍せり、福井寶珠山、佐田、黒川、赤谷、小石原など、深山幽谷有て、多く美材を出し、大河流て魚鼈多産す、誠に上郡なり、民俗質實にして、菲薄ならず、凡此郡に深山多き事國中第一なり、

〔文徳實錄七〕齊衡二年十一月癸丑、筑前國奏言、上座郡大領外從七位上前田臣市成、理郡年久、畜政日聞、百姓同辭、請之不須、請假外從五位下、積功爲眞、從之

〔十訓抄一〕天智天皇世につゝしみ給事ありて、筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に、黒木の屋を造りておはしけるを、木丸殿と云、圓木にて造故也、略○中さてかの木丸殿は用心をしたまひければ、入來の人かならず名のりをしけり、

朝倉や木の丸殿に我をれば名のりをしつゝ行くはたが子ぞ、是天智天皇の御歌也、

〔大内家壁書〕從山口、於御分國中、行程日數事、略○中

筑前國略○中　上座郡六日、請文十七日、略○中

寛正二年六月廿九日　　備中守奉　秀明略○下

御笠郡

〔筑前國續風土記六〕御笠郡

日本紀神功皇后紀に、仲哀天皇九年春二月壬申朔戊子、皇后羽白熊鷲を討んとて、橿日宮より松峽宮に遷り給ふ、松峽は蘆門山の西にあり、今有智村上にあり、時に飄風忽に起て御笠を吹落す、故に時の人、其所を號て、御笠といふ、此郡の名爰に起れり、御笠は訛て三笠と書りしに、寛文四年五月、台命によつて舊名に復す、此郡、南は肥前筑後に境、東は

へども、頗質實にして、厚きに近し、嘉麻穗波曾好郡とすべし、

〔日本書紀十八安閑〕二年五月甲寅、置筑紫穗波屯倉、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

筑前國○中略　穗波郡四日、請文十三日、○中略

寛正二年六月廿九日　備中守 在 秀明○下略

夜須郡

〔筑前國續風土記九〕夜須郡

日本紀を考ふるに、仲哀天皇九年春三月壬申朔辛卯に、神功皇后層増岐野にいたり、則兵を擧て羽白熊鷲をうつてこれをほろぼし給ひ、左右に謂て曰、熊鷲を取得て、我心則安しとのたまふ、故に其所を號て安と云よししるせり、此郡の號爰におこれり、後に二字に改て夜須と書るならん、此郡は、南は筑後に境ひ、東南は下座に連なり、東北は嘉麻穗波に、山を隔てゝつゞき、西北は御笠に隣れり、境内に山川有て、其利すくなからず、土地肥沃にして、米穀多し、順和名抄に、夜須郡は東西とあり、今も栗田より東を東郷と云、西を西郷と稱す、

〔日本書紀九神功〕九年○仲哀三月戊子、皇后○神功欲擊熊鷲而自橿日宮遷于松峽宮、辛卯、至層增岐野、卽擧兵擊羽白熊鷲而滅之、謂左右曰、取得熊鷲、我心則安、故號其處曰安也、

下座郡

〔筑前國續風土記十一〕下座郡

此郡筑前の南の方端なり、郡の形東西廣く、南北は狹し、南の方、及未申は筑後に隣て、千年川を界とす、寅卯辰巳は上座郡に境ひ、北は夜須郡に連れり、郡中に河流れて水利多く、土肥て播植しける、深山なくして美材ゆたかならずといへども、薪炭ともしからず、民俗朴直にして謙遜なり、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

筑前國○中略　下座郡六日、請文十七日、○中略

嘉麻郡

〔筑前國續風土記十一〕嘉麻郡

日本紀安閑天皇二年五月、筑紫穗波の屯倉、鎌屯倉をおくと有、嘉麻穗波の事國史に見えたる初なり、此郡は穗波郡と相ならんでつゞけり、恰一郡の如し、南は穗波の上流にありて穗波とならばや北は穗波と東西にならびて、嘉麻郡は東にあり、穗波は西にあり、凡穗波の東南に當れり、此郡の東は豐前田川郡につらなり、三方は大山あり、中に大河あり、薪材木ともしからず、山林の利多し、田畠肥饒なり、村里皆山中に有て、土民の風俗質朴なり、好郡といふべし、凡此郡に四河内あり、千手川は下臼井村にて大隈川に落る、長野河底千手是一河内なり、桑野河内より出る川は、大隈川にして、是本川なり、その東山田河内の川は、鴨生に出て、大隈川に落る、庄内河内の川は鹿毛馬勢田に出る、

〔萬葉集五〕神龜五年七月二十一日、於嘉摩郡撰定、筑前國守山上憶良、

伏辱来書、具承芳旨、忽成隔漢之戀、復傷抱梁之意、唯羨去留無恙、遂待披雲耳、略○歌

〔續日本紀三十七〕寶龜元年七月戊寅、筑前國嘉麻郡人財部宇代獻白雉、賜爵人二級稻五百束、

〔大内家壁書〕從山口、於御分國中行程日數事略○中

筑前國略○中　嘉摩郡四日、請文十三日、略○中

寛正二年六月廿九日　備中守平秀明略○下

穗波郡

〔筑前國續風土記十一〕穗波郡

此郡の名の初て國史に見えたる事、前○嘉麻郡にしるせり、嘉麻郡と同じ、此郡は嘉麻郡と相ならびてつゞけり、嘉麻は東南にあり、南郡一河内に有て、同郡の如し、但南の方は專ら嘉麻にて、北によりては嘉麻穗波東西にわかれ、嘉麻の東にあり、西は穗波なり、山深くして薪材ゆたかに、川流れて炎旱の憂なく、土地肥饒にして耕植の利多し、邊鄙にして民俗いやしく、言語つたなしとい

鞍手郡

遠賀郡と改む、此郡北に海あり、東は豐前企救郡に隣りて、大山をへて、西は宗像郡に對して、山を境とし、南は鞍手郡に平地つゞけり、山遠地平らかに、田地多くして境內廣し、土肥て穀ゆたかなり、大河あり、海近くして運漕の便よく、海味もともしからず、魚多く、國中第一の大郡なり、然れども深山すくなくして、水損多し、故に旱歲には他郡より豐作なれども、雨どしには凶饑にたえず、

〔日本書紀神武三〕其年〇甲寅十有一月甲午、天皇至筑紫崗水門、

〔日本書紀仲哀八〕八年正月壬午、幸筑紫、時岡縣主祖熊鰐、聞天皇車駕、〇中略參迎于周芳沙麼之浦、而獻魚鹽地、〇中略既而導海路、自山鹿岬、廻之入岡浦、〇下略

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年九月戊申、大將軍東人等言、〇中略間諜〇諜者名略申云、廣嗣於遠河郡家造軍營、儲兵弩、而擧烽火、徵發國內兵矣、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

筑前國〇中略　御牧郡三日、請文十一日、〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明〇下略

〔筑前國續風土記十二〕鞍手郡

此郡は東は豐前に境ひ、南は嘉摩穗波に向ひ、北は遠賀郡につゞき、西は山をへだて、、宗像柏屋に隣る、山高く大河流れて、山川の利少からず、土地肥饒にして、五穀ゆたかに、草木蕃茂して、薪材ともしからず、國中にて上座郡につぎては、上郡とすべし、中につゐて若宮吉川の河內は、たぐひまれなる佳境なり、聖德太子の傳に曰、守屋二男片野田連、四男辰狐連等を筑前國鞍手郡に流す、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

筑前國〇中略　鞍手郡四日、請文十三日、〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明〇下略

遠賀郡
御牧郡

じければ、文字相用るは常の事なり、宗像と名付し意は、宗像社記に云、筑前國風土記曰、宗像大神自居崎門山天降之時、以靑𤥨玉置奥津宮之表、以八坂瓊紫玉置中津宮之表、以八咫鏡置邊津宮之表、以此表成神體之形、而納三宮、即納隱之、因曰身形郡、釋日本紀云、先師說云、胸肩神體爲玉之由、見風土記、然則尋其由來、爲其神像者也、今この說によりて案するに、宗像と名付し事、三神の御身の形をもつて三宮に納しゆえ、身の形の社といふ、二神のいますところなる故、身形郡と號す、みのとむなと相通すればいにしへ和語のならひ、轉じてむなかたと名付しならん、

一凡此郡は北に海をうけ、海中に島あり、東は遠賀郡にとなりて、高山を以て限とし、南は鞍手郡にさかひて、また山を隔て、西は原野にて糟屋郡につゞけり、郡中にも山野多くして、所々に小川あり、凡河海の利乏しからず、只北海に近くして、時に颶風の災あるのみ、

〔續日本紀 一文武〕二年三月己巳、詔、筑前國宗形、出雲國意宇二郡司、竝聽連任三等已上親、

〔續日本紀 四元明〕和銅二年五月庚申、筑前國宗形郡大領外從五位下宗形朝臣等杼、授外從五位上、

〔筑前國續風土記 十三〕遠賀郡

日本紀に、仲哀天皇の八年春正月己卯朔壬午、筑紫に幸し給ふ時に、岡縣主の祖熊鰐と云し人、天皇の筑紫に幸し給ふ事を聞きて、周芳の沙麼の浦に參迎へ奉りしことあり、岡縣とは則此遠賀郡の事なり、遠賀とは岡の字を眞名假字に書たるなり、仙覺萬葉注に、筑前風土記を引て、塢舸縣と書けり、內浦の西原村より蘆屋までの海邊に高き岡つゞけり、故に其邊を岡と稱し、郡の名を是によりて名附しならん、又むかしは此郡所々に馬牧多くして、村井、館村、波津浦坏に牧ありし其跡あり、猶この外にも多かりしとかや、故に中頃より、此郡を御牧郡と稱せり、僧万里が梅庵集に、宗悅大人者、筑之前州御牧香月鄕其拾里とかけり、又天文年中、大內義隆大府定賜ふ、筑前御牧郡といへり、寛文四年に、國郡の名皆舊に復すべきよし台命あり、是よりして古き名にかへりて、

此郡は、御笠郡那珂郡と糟屋郡との間にはさまり、國中にて最小なる郡なり、只八村あり、八村皆東の山の麓に在て、南北に連れり、〇中略　篤信ひそかに謂、筵田郡は甚小にして、那珂、糟屋、御笠につゞけり、地勢を見れば、分つべき所にあらず、されども右三郡何れとも大なり、若其上に又席田郡に有所の戸數を加へば、千戸に過なん事をおそれて、戸數少なけれども、別に此郡を分ちたるならん、其故に此郡は甚小なるべし、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

筑前國〇中略　席田郡五日、請文十五日、〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉秀明〇下略

糟屋郡

〔筑前國續風土記十七〕糟屋郡

此郡東には高山有て、穗波鞍手の兩郡に隣り、南は御笠に接し、西南に席田郡有、西北に海をおふ、且裏粕屋は東は宗像郡に交れり、表裏を合すれば、南北は長く、東西は短し、土地肥饒して良田多し、山多く海廣く、川流れて魚鹽薪材とも乏からず、郡中に宿驛有て、諸方の旅人に對接し、且城邑に近くして便利多し、長政公入國の後、大郡なればとて表裏にわかれて、伊野香椎の山の南表糟屋とし、北を裏糟屋と稱す、

〔日本書紀十七繼體〕二十二年十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

筑前國〇中略　糟屋郡五日、請文十五日、〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉秀明〇下略

宗像郡

〔筑前國續風土記十五〕宗像郡

日本紀第一卷には胸肩と書り、舊事記には宗像とし、古事記には宗形とす、凡和語のならひ訓同

海なり、是他郡に同じからず、

〔地名字音轉用例〕篠ノ轉用

さはら　早良郡筑前　佐波良　ウノ韻ヲハニ用ヒタリ

〔日本紀略一醍醐〕延喜十六年八月廿二日甲辰、太宰府言上、筑前國早良郡司、今月八日解云、十〇作十誤卷郡司三宅春則宅、今月三日未剋、牝牛生犢、頭兩分、胸腹合體、前足有四、後脚有兩、圖其形體言上者、府令卜筮、

那珂郡

〔筑前國續風土記四〕那珂郡

日本紀神功皇后紀に儺縣とあり、是此郡の事國史に見えたる初めなり、日本後紀に、淳和天皇天長三年七月七日慶雲に筑前國那珂郡とあり、此時は已に那珂と書り、この郡西は早良郡に隣り、東は糟屋、席田、御笠郡に續き、南は山を隔て肥前に接し、北は海濱にいたる、東西短く南北長し、中に那珂川流れ、源より六里にして海に入る、水勢盛にして田地に漑事廣し、故に大旱の憂といへども旱損の愁なし、深山少くして美材乏し、然れども郡中に福岡博多有、故貨財を交易するに宜敷、大底國の東西の中央に有て、四方運送の便よし、國なかに有郡なれば、那珂と名付るにや、

〔日本書紀仲哀八年正月壬午、幸筑紫、　己亥、到儺縣、因以居橿日宮、

〔類聚國史八十七刑法〕延暦十二年八月戊辰、遞送筑前國那珂郡人三宅連真繼於本郷、真繼入京、以其在京中、屢有濫行也、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

筑前國〇中略　那珂郡五日請文十五日〇中略

寛正二年六月廿九日　備中守奉秀明〇下略

席田郡

〔筑前國續風土記五〕席田郡

れば、いにしへは怡土郡に屬せしを、近代志摩に入れしにや、いぶかし、凡怡土志摩は、その地相ならび隣りて、國の西裔にあれば、おなじくつらねて怡土志摩と稱す、然れば怡土郡は山川そなはり、薪材多く、平原ひろくして良田多し、此郡は海に近くして、所々に漁家あるゆへ鮮魚多し、海味ともしからず、運送の便よしといへども、山に林木なくして、柴薪材木ともし、山間及海濱に村里多くして、平原すくなく、地やけて良田すくなし、たゞ麥豆によろし、川小にして水災なし、怡土郡に比しがたきのみにあらず、國中の諸郡にたくらぶるに、最下郡とすべし、

〔日本書紀 推古二十二〕十年四月戊申朔、將軍來目皇子到于筑紫、乃進屯島郡、而聚船舶運軍粮、

〔東大寺正倉院文書 三十八〕筑前國太寶二年戸籍

筑前國島郡戸籍川邊里　太寶二年

戸主卜部乃母曾年肆拾玖歲　正丁　課戸 下略〇

〔續日本紀 元明四〕和銅二年六月乙巳、筑前國御笠郡大領正七位下宗形部堅牛、賜益城連姓、島郡少領從七位上中臣部加比中臣志斐連姓、

〔三代實錄 清和二〕貞觀二年正月廿二日己卯、大宰府言、筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴、庫中弓矢有聲聞外、

〔筑前國續風土記 十九〕早良郡

此郡福岡城下の西に有て近し、福岡の城も、町の西の方三分が一は早良郡に屬せり、此郡北に海ありて、三方高山あり、廣平の村里多く、水田多し、中に早良川流る、故に山林河海そなはりて、薪材乏しからず、魚鹽多し、河水多けれども、滯なくして水旱の患稀なり、されども平田は肥饒ならずして稼植豐ならず、凡此國の内、那珂、筵田、表粕屋、御笠、夜須、下座、上座の七郡は、南北に境つらなりて、其間に山隔たらず、嘉麻、穗波、鞍手、遠賀四郡も又しかり、宗像、裏粕屋は、東西並びつゞけり、怡土、志摩兩郡も南北に地つらなれり、只早良郡のみ、東西南三方には高山有て、他郡にへだゝり、北は

志摩郡

いとしまをかけてとぶとはまてやとりおにもはねにもことづたへせむ

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事略〇中

筑前國　怡土郡七日、諸文十九日、略〇中

寛正二年六月廿九日　備中守ヨ秀明略〇下

〔筑前國續風土記二十一〕志摩郡

續日本紀元明天皇和銅二年、筑前國嶋の郡の少領に姓を給りし事あり、是此郡の事國史に見えし始なり、また萬葉集の十五卷にも、筑前國志摩郡の韓泊とかけり、三代實錄卷二、貞觀元年正月、太宰府貳、筑前志摩郡兵庫鼓自鳴と云々、この郡を志摩と名附し事、むかしは今津のまへ、夏麼山の後の入海西へ通り、桑見元岡の前より前原にいたり、此間皆海にして、西北の諸村諸山みな海中にありしゆへ志摩とは名附けり、志摩とは、嶋の字をわかちて二字にかけるなり、百年以前入海漸田となりて、嶋にありし西北の諸村、今はみな陸地につらなれり、近年まで東西のはしは纔かたのこりしが、是又近年すでに新田となれり、むかしの入海より向ひに泊村あり、是むかしの海の入江にて、舟の泊りし所にして、唐船をもこゝにつなげりと云、田の字にも舶の字の付たる名多し、亦南に涌志村あり、是又海邊にありしゆへに名付しならん、此入海なりし所の田のそこをかへせば、今もかき蛤のから多し、陵谷變遷の理、古今そのためしすくなからず、昔の海なりし筋よりこなたにも、亦志摩郡の内、青木、如原、谷村、今宿、田尻、太郎丸、板持、高田、志登、池田、波多江、洞浦、志前原等諸村あり、すべて中通と云、此諸村はみなむかしの入海より東南にありて、怡土郡の方につらなり、嶋のかたにはつゞかざれど、入海のほとりに近ければ、志摩郡に屬しけるにや、また此諸村、むかしは怡土郡なりしを、後に亂世の時、みだりに領地をわかちとりて、志摩に屬しけるにや、されば延喜式神名帳に、志登神社を怡土郡とかきしも、志登村はむかしの入海より南にあ

言語賤しからず、頗る世事に馴れたり、只恨らくは風俗質朴ならず、誠實すくなし、

〔釋日本紀 十 述義〕筑前國風土記曰、怡土郡、昔者穴戸豐浦宮御宇足仲彦天皇、〇仲哀 將討球磨噌唹、幸筑紫之時、怡土縣主等祖五十跡手、聞天皇幸、拔取五百枝賢木、立于船舳艫、上枝挂八尺瓊、中枝挂白銅鏡、下枝挂十握劒、參迎穴門引島獻之、天皇勅問、阿誰人、五十跡手奏曰、高麗國意呂山自天降來日桙之苗裔五十跡手是也、天皇於斯譽五十跡手曰、恪手、謂伊蘇志 五十跡手之本土可謂恪勤國、今謂怡土郡訛也、

〔日本書紀 八 仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫、〇中略 筑紫伊覩縣主祖五十跡手、聞天皇之行、拔取五百枝賢木、立于船之舳艫、上枝掛八尺瓊、中枝掛白銅鏡、下枝掛十握劒、參迎于穴門引島而獻之、〇中略 天皇卽美五十迹手、曰伊蘇志、故時人號五十跡手之本土曰伊蘇國、今謂伊覩者訛也、

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜六年十月壬戌、前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備薨、〇中略 勝寶四年爲入唐副使、廻日授正四位下、拜太宰大貳、建議創作筑前國怡土城、寶字七年功夫略畢、

〔朝野群載 二十 大宰府附異國〕擊攻刀伊國賊徒狀

太宰府解　申請官裁事

言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀

右件賊船、五十餘艘、來著對馬島、劫略之由、彼島去月廿八日解狀、今月七日到來、〇中略 同日襲來筑前國怡土郡、經志摩早良等郡、奪人物、燒民宅、〇中略 且錄在狀、謹解、

寬仁三年四月十六日　正六位上行大典上毛野朝臣師善

〔檜垣嫗集〕いとのこほりに、ものいひし府官の心かはりて、めまうけて、そこにのみつきて、いとたまさかにおとづるゝに、たゞならんやは、おなじさまの人のみゆるに、いづちぞと、とへば、いとへぞまかる、とたはぶるゝに、このところをいとしまのこほりとぞいふかし、

上座	嘉麻	宗像	鞍手	遠賀	
	鎌	胸肩 宗形		岡 遠河	
		胸形 身形		瑦河	
上座(カミツクラ)	嘉麻(カマ)	宗像(ムナカタ)	鞍手(クラテ)	遠賀(ヲカ)	郡十五
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	十五郡
同	嘉麻 嘉摩	同	同	同	
同(ジヤウザ)	嘉麻(カマ)	同(ムナカタ)	同(クラテ)	同(ヲンガ)	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同(ジヤウザ)	同(カマ)	同(ムナカタ)	同(クラテ)	同(ヲンガ)	同
同	同	同	同	同	同

怡土郡

〔筑前國續風土記 二十〕怡土郡

日本紀には伊覩、伊都など書り、(中略)此郡は、南に高山長く連り、東に高祖山そびへ、其西北は廣平の田地にして、村里多く相ならべり、北に志摩郡ふさがるといへども、海遠からずして魚鹽とぼしからず、山野近くして薪木の便あり、川淺く下流塞がらずして、水患なし、多久村より西の方包石に至るまで、其行程五里は海に近し、此間は國の西脅にて、其形狹くせばし、凡國中にて、郡の長きは遠賀と怡土郡にしくはなし、此郡東は上原より、西は包石に至り、其長さ六里餘、南北は廣き所二里半計有、田地廣く、山川爽にして古跡まげし、村民に原田家司の子孫多し、田夫といへども

島		志麻（シマ）	志摩	同	同	同（シマ）	同	同	同（シマ）	同
伊覩 伊蘇 伊都 怡土	伊斗	怡土（イト）	同	同	同	同（イト）	同	同	同（イト）	同
		早良（サハラ）	同	同	同	同（サワラ）	同	同	同（サハラ）	同
儺		那珂（ナカ）	同	同	那珂 那賀	那賀（ナカ）	那珂	同	同（ナカ）	同
		席田（ムシロタ）	同	同	同	同（ムシロタ）	同	同	同（ムシロダ）	同
		御笠（ミカサ）	同	同	同	同（ミカサ）	同	同	同（ミカサ）	同
		糟屋（カスヤ）	同	同	糟谷 粕屋 糟屋	糟屋（カスヤ）	同	同	同（カスヤ）	同
穗波		穗波（ホナミ）	同	同	穗波 穗濱	穗波（ホナミ）	同	同	同（ホナミ）	同
安		夜須（ヤス）	同	同	同	同（ヤス）	同	同	同（ヤス）	同
朝倉		下座	同	同	同	同	同	同	同	同

郡

筑前のこふをぞ、御笠の山とはいひける、

〔倭名類聚抄五國郡〕筑前國管十五〇怡土以止志摩早良佐波那珂東西席田牟志呂多糟屋加須也宗像牟奈加多遠賀鞍手嘉麻加萬穗浪夜須東西下座下都安佐久良上座上都安佐久良御笠美加佐

〔延喜式二十二民部〕筑前國上管怡土イト志摩シマ早良サハラ那珂ナカ席田ムシロタ糟屋カスヤ宗像ムナカタ遠賀ヲカ鞍手クラテ嘉麻カマ穗浪ホナミ夜須ヤス上座カミツアサクラ下座御笠ミカサ〇中右爲遠國

〔日本廬子十四〕筑前國十一郡〇中略志麻　夜須　志賀島　御笠　宗像ムナカタ　遠賀　席田　稻波　早磨サワラ　那珂　糟屋

〔皇國郡名志〕筑前國十五郡

怡土イト　●吉井　●深江　肥界小郡
早良サハラ　●生ノ松原　脇山　志摩ニ並
席田ムシロタ　●青柳　外二ヶ村　國中小郡
宗像ムナカタ　●赤間　△[illegible]ロミ湊　●鐘岬　北ノ出崎
嘉麻カマ　●大隈　豐前界小郡
上座カミツアサクラ　驛町無シ　三ヶ村限　豐前筑後三國界ニテ小郡
御笠ミカサ　宰府　△天神社　肥前筑後界
夜須ヤス　秋月　●野町　筑後界
志摩シマ　●今宿　怡土ニ並島崎
那珂ナカ　●博多　箱崎　△八幡社　早良席田ニ並
糟屋カスヤ　驛町無シ　△香椎宮　箱崎ニ並出崎
鞍手クラテ　物瀬島一村限　小郡
穗波ホナミ　此郡山バカリニテ海二ヶ村　國中
下座　驛町無シ　筑後界秋月ニ並
遠賀ヲカ　●木屋瀬　●黒崎　豐前小倉界

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛宕郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕筑前

六國史　古書　延喜式　倭名抄　拾芥抄　諸書　郡名考　天保郷帳　明治改革後　地誌提要　郡區編制

景ノ嗣秀秋ヲ備前ニ從シ、黑田孝高ヲ全州ニ封ジ、福岡ニ城キ世襲、其支封ヲ秋月(黑田長興)直方(黑田高政、享保五年封收)トス、王政革新改テ福岡秋月二縣トナシ、尋デ秋月縣ヲ廢シ、福岡縣ニ併ス、

〔令義解一職員〕太宰府(帶筑前國)

〔續日本紀十四淳仁〕天平十四年正月辛亥、廢太宰府、遣右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂等四人、以廢府官物付筑前國司、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年十二月己未、罷筑前國官員、隷太宰府、

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月乙未、從五位下紀朝臣長田麻呂爲筑前守、是日置筑前國司介掾大少目各一員、先是令府官攝行國政、彼此相讓口非專一、事多廢闕、因茲改焉、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

省太宰府監典各二員、置筑前國司事

守一員　介一員　掾一員　大少目各一員

右謹案令條、太宰府帶筑前國、自爾已來或別或隷、至延暦十六年、又廢國隷府、○中略臣等商量、承前府帶之時、或下官符而定別當、或府司相量分置其人、同僚之官、兼預國務、勘責難息、不同比國、望請省大同元年所增監典便充補國司、庶令所守有別各濟繁劇、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

大同三年五月十六日

〔武藤系圖〕資頼(建久二年、補筑後守、○中略貞應元年、兼太宰府守護、)

〔倭名類聚抄五國郡〕筑前國(太宰府並國府在御笠郡、)

〔檜垣嫗集〕ゑりたる人のむかへたれば、筑前國にしばしあるほどに、○中略女出ゐて、かゝる雨には

いかでかなどいふに、むかへの人みのかさなどあり、○中略

ふらばふれみ笠の山のちかければみのしまゝではさしてゆきなん

肥前、壹岐、對馬ノ事ヲ管ス、弘安四年、蒙古大擧シテ入寇ス、資頼ノ子資能、西海諸將ト共ニ拒戰シ、疵ヲ蒙リテ卒ス、既ニシテ颶風大ニ作リ、悉ク蒙古ノ戰艦ヲ覆沒ス、五年、北條時宗、同族爲時ヲ以テ筑紫探題トナシ、博多ニ鎭ス、建武中興、少貳貞經、（資能曾孫）ノ大友菊池二氏ト共ニ探題北條英時ヲ滅ス、貞經因テ守護ニ補ス、足利尊氏ノ反スル、貞經首トシテ之ニ應シ、菊池武敏ト戰テ敗死ス、既ニシテ尊氏來奔シ、九州響應ス、尊氏貞經ノ子頼尚ヲ以テ守護ニ補シ、一色範氏ヲ留テ九州ヲ鎭セシメ、又一色頼行、仁木義長、高橋光種ヲ以テ筑紫三檢斷トシ、筑ノ前後州ニ居テ、頼尚ト九州ノ事ヲ協議セシム、正平九年、頼尚足利直冬ニ應シテ歸順シ、菊池武光ト共ニ範氏ヲ攻テ之ヲ逐フ、既ニシテ頼尚復畔ク、十四年、武光之ヲ討シテ筑後川ニ戰ヒ、大ニ之ヲ破ル、十六年、頼尚終ニ奔テ、宗像大宮司氏重ニ依ル、武光太宰府ニ入リ、征西將軍ヲ奉シテ博多ニ鎭ス、明年、足利義詮其將斯波氏經ヲ以テ探題トナシ、西侵シテ豐後ニ入ル、武光擊テ之ヲ却ク、建德二年、足利義滿其將今川貞世ヲ以テ探題トナシ、菊池氏ヲ擊ツ、九州大姓多ク之ニ應ス、文中元年、武光太宰府ヲ棄テ肥後ニ歸ル、貞世因テ府ニ入リ、頼尚ノ子冬資舊封ヲ復ス、尋テ貞世ニ殺サレ、弟頼澄代リ立ツ、應永ノ初、貞世東歸シ、澁川滿頼代テ探題トナリ、徙テ肥前ノ綾部城ニ治ス、永享五年、頼澄ノ孫滿貞復叛シ、大內持世ト戰テ敗死シ、二子嘉頼教頼對馬ニ奔ル、文明元年、教頼ノ子政資太宰府ニ入リ、大內氏ノ戍兵ヲ逐ヒ、故地ヲ復ス、明應中、大內義興、政資ヲ攻テ之ヲ殺シ、全州ヲ併ス、天文ノ末、大內氏亡ヒ、毛利元就大友氏ト本州ヲ爭ヒ、兵連ツテ解セズ、時ニ筑紫氏ハ筑紫城、（御笠郡）原田氏ハ高祖城、（怡土郡）秋月氏ハ秋月城、（夜須郡）宗像大宮司ハ宗像郡ニ據リ、各統屬セズ、後大友氏擊テ之ヲ降シ、或ハ之ヲ滅シテ、遂ニ全州ヲ併セ、立花宗茂ヲ立花城（糟屋郡）ニ置キ、之ヲ鎭セシム、天正十四年、島津氏九州ヲ蠶食スルニ及ヒ、立花城獨リ降ラズ、豐臣氏西征シ、宗茂ヲ筑後柳河ニ移シ、小早川隆景ニ全州ヲ賜ヒ、名島（糟屋郡）ニ治ス、關原役畢リ、德川氏隆

前府中にて十六万石の地を給ひ、彼地に移られしかば、此國には主なく成て、石田治部少輔三成代官として、三年の間かりに國の政事を取行ふ、今も國中農人の家に、三成下知の狀證文所々にあり、同四年正月、東照君の御侘言によりて、秀秋再此國主となれりける、同五年の秋、石田治部少輔亂を發し、天下麻の如く分れ、萬民累卵の憂をいだけり、されども東照君文武の德おはしまして、一度戎衣して天下を平げさせ給ひしかば、四海忽安靜にして、民今に至るまで其賜をうく、此時にあたりて、黑田孝高入道如水公、其子甲斐守長政公は、元來二心なく東照宮の御方に參て、父子ともに莫大の忠義を盡されしかば、其勳功の賞として、此國を以て長政に賜へり、如水公は英雄の才世をおほひ、明智の智衆に抽んでたりしかば、能功をなして其身を保ち給ふ、されば若きときは秀吉公を助けて非常の功を立、時機を見禍をさけて、四十餘り强壯の盛に早祿地を辭して、令子長政公にゆづり、年老て東照宮の御爲に兵を起して、大友を虜にし、筑紫をまづむ、長政公は若き時より日本朝鮮におゐて、數度の武功を立つ、只亂に勝の力群に越たるのみならず、治を致すの德も亦群衆に拔んで給ひしかば、古き道を開用ひて、國中の臣民にのぞみ、賞罰正しく、法制嚴にして、自儉約を守り、民の非を禁じて能國を治め給ひし故、國豐に民安くして、又むかしの世に立歸りぬ、長政公此國を治め給ふ事、慶長五年以來二十四年にして、元和九年閏八月四日、京都報恩寺にて逝去し給ふ、

〔日本地誌提要 六十五 筑前〕沿革　古ヘ筑紫ノ國、前後二州ヲ分ツ、齊明天皇西巡シテ、朝倉今上座郡須川村ヲ以テ行宮トナシ、師ヲ出シテ百濟ヲ救ヒ、唐人ト戰フ、天皇遂ニ行宮ニ崩ジテ師ヲ班シ、尋テ太宰府ヲ御笠郡ニ置キ、今觀世音寺村ノ西、府址アリ、國府亦同郡ニ置、遺址未詳、九州ヲ總轄セシム、壽永元年、平氏安德天皇ヲ奉ジテ來奔シ、太宰府ヲ以テ行在所トナス、州豪原田種直平氏ニ從ヒ功アリ、因テ州守ニ任ズ、既ニシテ平氏亡ビ、源賴朝天野遠景ヲ以テ鎭西奉行トナシ、太宰府ニ鎭ス、建久七年、武藤資賴之ニ代リ、太宰少貳ニ任ジ、子孫職ヲ襲ギ、少貳ヲ以テ氏トシ、內山ウチヤマ城御笠郡ニ居リ、本州、及豐前、

席田九村　那珂八十一村(和名抄作那珂、注東西、蓋中古分爲東西二郡、後復併爲一者、仲哀紀儺縣、即是地、)　早良五十二村　志摩五十一村(延喜式等作志麻、推古紀作島郡、)　怡土六十三村(古事記伊斗村、即此地、仲哀紀云、伊覩縣主祖五十迹手、參迎于穴門引島、天皇美曰伊蘇志、故時人號其本土曰伊蘇國、今謂伊覩者訛也、魏志作伊都國、)

〔筑前國續風土記一提要〕總論

むかしは、當國に太宰府あり、帥已下官人多く是に居て、九州二島の政事をとり行ひ、蕃客にも對接せり、故に西の都と稱して、富庶の所なりしとかや、源賴朝卿、總追捕使たりし後、關東の士武藤小次郎と云者、奉衡退治の時軍功あり、その恩賞として太宰少貳に任せられ、筑前豐前肥前壹岐對馬の守護職たり、其子孫世々少貳と稱、伏見院永仁元年に、鎌倉より探題職を此國に置て、九州二島の政事を司どらしめられしかば、猶いにしへにもをとらぬ繁華の地なりしが、天文の頃、天下大に亂れし頃、九州は偏地なれば、亂擾殊に甚し、天正の時に至り、薩摩に島津、肥前に龍造寺、豐後に大友、この三家、鼎のごとく持ちて、國をあらそひ境をおかして、合戰止時なく、中につゐて此國は攙斧の地なれば、戰陣のちまたとなりて、諸民居を安くせず、多くは家を出て、山林に身を隱し、侵掠にあふて資財を失ひ、終に壞亂の地となれり、國中にて、少貳、宗像、原田、秋月、麻生の五家大身にて、其家人をわかちて域を守らしめ、各郡村を爭ひ、戰鬪を事としてひなしき日なしが、ありし所に、天正十五年、秀吉公九州を征伐して、亂をしづめ治に復し、此國を以て、毛利元就の三男小早川左衞門佐(後任中納言)隆景に賜りける、隆景天性智慮深くして、よく民をなつけ、衆を撫られしかば、猶創世に近き時なれど、國中に叛逆なすものなく、四境の内治りて、百姓悅服しける、又廢たるを起し、絕たるをつぐ志有て、神社を貴び、造復せらる、されども國を治ること只八年にして、其養子秀秋にゆづりて、備後の三原に隱居せらる、秀秋天性昏愚の人にて、養父隆景の舊制にそむき國政正しからず、萬民困みあへり、此由秀吉公聞給ひ、隆景逝去の後、國を沒收し、慶長二年に、越

宿驛

二丁、（屋嶋ニ至ル國界、二十二丁、二十八間、）豐前國企救郡平松浦

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬○中略

筑前國驛馬（獨見、夜久各十五疋、島門廿三疋、津日廿二疋、席打、夷守、美野各十五疋、久爾十疋、佐尉、深江、比菩、額田、石瀬、長丘、把伎、廣瀬、隈埼、伏見、綱別各五疋、）傳馬（御笠郡十五疋）

〔萬葉集四相聞〕五年（神龜）○戊辰、太宰少貳石川足人朝臣遷任、餞于筑前國蘆城驛家歌三首、○二首略

天地之、神毛助與、草枕、羈行君之、至家左右、

〔古今著聞集十九草木〕經信卿太宰帥に任じて下向の時、八月十五夜に、筑前國篭田驛につきたりけるに、天はれ月あきらかなるに、館の前に大きなる槻ありけり、枝葉ひろくさしおほひて月をへだてければ、人をめしあつめて、たちまちに其木を切はらはせて、月にむかひて夜もすがら琵琶をかきならして、心をすまして、天あけぬればたゝれにけり、かゝるすき人も、今はなき世なりけり、

〔筑前國續風土記五席田郡〕篤信曰、篭田の驛、古へ此郡（席田）の內いづちにありしにや、今は其所しられず、若し今月隈と云所、彼經信の卿月を見られし所なるか、大なる槻の木有し由、著聞に記し侍れば、槻隈と書りしを、後訛りて月隈とかくにや、月隈は此郡の東山下に有、此所往昔の道有て、宿驛ありしにや、

建置沿革

〔日本國郡沿革考三西海道〕筑前　古筑紫國、或作筑志、又竺志、（國造記、杜氏通典作竹斯、筑前四部稿等作竺前、）分爲前後、末詳在何時、（筑紫後國之名、既見于景行十八年紀、蓋其前所分析、）延曆十六年九月、廢筑前隸于太宰府、大同三年五月再置、上國、管十五郡、九百一村、

遠賀（九十五村、神武紀作崗、筑前風土記所謂塢舸縣、即是、）　宗像（六十四村、萬葉集作宗形郡、筑前宗像社記、作胸形郡、）　鞍手七十七村　穗波（六十二村、延喜式等作穗浪、安閑紀穗波屯倉、即是、）　嘉麻（六十八村、安閑紀鎌屯倉、即是、）　上座三十八村　下座（度會延佳曰、竺志米多國造見國造紀、即下座郡馬田郷之地、）　夜須（五十六村、和名抄注東西、蓋中古分爲東西二郡、後復併爲一者、神功紀云、減無鹽我心則安、故號其處曰安、即是、）　御笠（五十九村、古太宰府及國府之地、按天平十年、廢太宰府、置鎭西府將軍、十七年、復太宰府、神功紀云、自橿日宮遷于松峡宮、時飄風忽起、御笠隨風散落、故時人號其處曰御笠、）　糟屋（八十四村、繼體紀糟屋屯家、即是、）

糟屋郡箱崎村　二十五町二十二間半　同多田羅川口（沿川至箱崎橋、二十二丁二間半）　一町二十四間　松崎村多田羅川口（沿川至多田羅村二十五丁）　二十三町三間（至辨天崎五丁二十四間）　同布橋　八町五十八間　香椎村（カシヒ）六町三十間　濱男村（ハヽヲ）、三十三度四十分、一里二十六町五十三間半　奈多浦寶ノ塚（至三苦村、徑測一十三丁五十一間）　三十五町四十五間　同鯨塚（コノシロ）（至北濱、徑測五丁四十二間）　二里三町一間半　那珂郡海中道洲岬（ウミノナカミチ）（至志賀島、六丁入間半）　一里一十二町五十四間　糟屋郡奈多浦鯨塚北濱　三十四町五十五間　三苦村　一里二町三十間半　新宮浦、三十三度四十三分、二里一十九町九間　宗像郡（ムナカタ）津屋崎浦、三十三度四十七分、二十九町五十間半　渡村梅津（至勝浦村鹽江濱、徑測一十丁一十四間）　一十一町七間　同勝山（至京泊、徑測四丁二十八間半）　一十三町二十三間　渡村（歴鐘崎山、至北濱八丁七間半）　三十四町五十四間　同北濱　三十五町一十七間半　同京泊　一十四町四十六間　勝浦村鹽江濱　一十二町三十間　同桂潟（至勝浦村宿所七丁一十七間、北極高三十三度四十九分半、）二十二町三十間　勝浦濱浦（至神湊浦四ッ塚、徑測三丁五十七間、）　一十九町五十三間半　神湊（カウノミナト）　一浦四ッ塚　四町一十五間　神湊浦濱（至神湊浦宿所一丁三間）　三十三度五十分半（從宿所至田島村宗像神社三十二丁三十九間、）　一里一十町五間　鐘ヶ崎浦、三十三度五十三分、八町三十間　上八村（歴織幡社前、至鐘ヶ崎織明宮、五丁三十三間、）　二町一十五間　同東濱（至鐘ヶ崎、二丁一十八間）　三里二十二町四十五間半（至平野村濱一里三十丁一十八間）

遠賀郡（ヲンガ）蘆屋浦（アシヤ）　遠賀川口（至蘆屋村市場一丁八間、北極高三十三度五十四分、從市場至赤間村、三里一十一丁五十八間、又從市場經江至猪熊村二十三丁四十一間半、從猪熊沿川至楠木村、三里二十二丁七間、又從猪熊至淺川村山鹿鍋、一十丁一十五間半）　三十六間半　山鹿村遠賀川口（至山鹿浦二丁二十七間、從山鹿浦沿江至後水、六丁二十四間半、又從山鹿浦歴後水至淺川村山鹿鍋、二十二丁一十二間、從山鹿鍋浦沿鴨生田川至本城村川口、一里一十九丁一間半）　一里一十七町二十七間（至柏原浦、八丁三十六間）　岩屋浦　一十二町一十五間（至妙見崎七丁一間、）　有毛村　一里三十町一十五間　脇ノ浦　一里三十町三十六間　若松村若松浦、三十三度五十四分、二里一十町四間（至二島村鴨生田川口、二里九丁三十八間、）　本城村鴨生田川口　一里二十町四十一間　藤田村（至黒崎宿二丁五十二間）　三十三町一十八間　尾倉村（至戸畑三丁四十一間半）　一里一十町五十六間　戸畑村　一里二十四町五十六間（至名護屋崎一十五丁五十九間、從名護

從筑前國中牟田歷日田及大津至湯町

筑前國夜須郡中牟田村石櫃　一里二十八町三十七間　依井村西口　一町九間　同追分　一十八町三十三間　甘木村嶺町　一里五町五十一間　下座郡三奈木村橫大道十文字（至桑原村宿所二十一丁三十六間、北極高三十三度二十三分、從宿所至片延村三奈木神社、一十八丁二十一間、）上座郡山田村恵蘇宿、三十三度二十二分、（至齊明帝陵一丁五十一間）　一十六町五十七間　志波村志波町（至麻底良布神社一十四丁四十八間）　二十六町三十六間　久喜宮町、三十三度二十一分半、　二里二十五町四間半（至國界一里九丁二十八間半）　豐後國日田郡高野村茶屋瀨

〔日本實測錄（六沿海）〕從肥前國長崎沿海至小倉（中略）○

筑前國怡土郡鹿家村小島　一里二十六町二十一間半（至鹿家岬一十八丁四十七間半、從鹿家岬至野島岬、一里五丁一十七間、）　福井村　三十一町二十三間半　大入村川口　二十六町四十四間半　大入村　一十七町一十八間（至雉琴川口、一十一丁六間、）　深江町　二町四十二間半　松末村下松末　二里八町三十二間半（至雉琴川口、五丁二十四間、從川口至松末村田浦、廿一丁二間）　神在村多久川口　四町四十五間　志摩郡荻浦村泉川口（從川至前原村、一十二丁三十九間、）　一里三十三町三十三間半　久家浦南濱　一里九町三十一間（至雉首岬、一十七丁四十五間）　同北濱　六町六間　久家浦、三十三度三十四分、　一十六町三十一間　岐志浦　二里二十二町二十八間（至佛崎一里一十九丁一十間、從佛崎至大戶岬、三十二丁三十六間、）　芥屋村、三十三度三十五分、　一里一十七町三十七間半　野北村野北浦　二里三町四十二間　西浦村前濱　三里五町五十四間（至西浦岬一十八丁五十九間半）　今津村野間（至今津浦、從瀬三丁三十間）　三十五町五十一間　濱崎浦（至洲岬三丁一十五間）　一十八町四十間半　今津浦　一里一十二町三十一間（至橫濱浦一里一十二間）　谷村今宿町　二十九町二十九間半（至長垂岬一十丁三十三間）　早良郡下山門村生松原　三十四町四十二間半　姪濱浦當方川口（從江至恵美須濱、六丁五十八間半）　四十八間　姪濱浦恵美須濱　三十二町三間　鳥飼村西新町濱　二十八町二十三間　福岡湊町　一十町三間半　同簀子町　一十八町四十七間（至中川口一十八丁五間）　那珂郡博多津綱町濱　二十二町二十七間

町二十七間　龜原村西新町　二十六町五十二間　姪濱村(メイノハマ)旦過町(タンガ)(至江邊二十二間)　一十九町四十間

下山門村生松原　二十九町二十九間半　志摩郡谷村今宿町　一町三間　同松原町、三十三度三十五分　一里一十一町四十八間　波多江村(至志登村一十一丁三十六間、至志登神社)　二十一町三十間　前原村前原町三十三度三十四分、　二十町三十三間　怡土郡神在村多久川岸(過川丁一十二間、至海岸、五)　一里一十四町三十三間　松末村下松末　二町六間半　深江町　一十七町九間半　大入村　一十六町四十七間半　同佐波　一十二町三十四間(至福岬濱二丁四十七間、從福岬至大入川岸、五丁一十八間半、)　福井村　一十四町二十一間　福井浦、三十三度三十分半　一里一町三十九間　鹿家村藤之谷(至海岸一丁三十七間半)　一十町五十七間　鹿家村小畑　二十九町一十二間(至國界一丁六間)　一十　肥前國松浦郡濱上村玉島川口

○中略

從筑前國博多、歷宰府、至朝日村、

筑前國那珂郡博多津呉服町　二里一十二町二十四間　井相田村雜餉隈(ザフヒヤウノクマ)　一里七町四十六間半　御笠郡坂本村關屋(至二日市村一丁一十五間)　一十七町三間　觀世音寺村象山(至都府樓跡一丁四十五間)　四町五十一間　觀世音寺村(至觀世音寺一丁三十九間)　四町一十九間　宰府村下町(至大町一丁十五間、從 北極高三十三度三十一分半、從)　一十(宰府前、至宰府天神樓門、四丁五間、從樓門至宰府村三條口、四丁二十三間半、從三條口至觀 門山寶滿宮、一里一十二丁一十六間半、又從三條口至糟屋郡宇美村八幡社、一里三十二丁、)七町一間　二日市村　二十八町二十二間　針摺村針摺町　二十六町五十一間　夜須郡朝日村二村町(從博多至朝日村、)　街道、通計六里三十七間半、○中略

從筑前國龜原、歷川上及小城、至田平、

筑前國早良郡龜原村西新町　一里一十六町一十八間　田村、三十三度三十二分、　一里一十九町五十六間　怡土郡飯場村　四町五十二間、　早良郡曲淵村(至曲淵村宿所一町三間)　三十三度二十九分半、

一里二十二町四十五間(至國界三十丁四十九間)　肥前國神崎郡三瀬山村○中略

從豐前國小倉歷秋月至松崎〇中略

筑前國嘉麻郡大隈村大隈町　二十三町三十六間　東千手村千手新町　二里二十一町一十九間　夜須郡下秋月村　一十六町二十間　秋月上町、三十三度二十七分半、（至下座郡三奈木村横大道十文字二里一十五丁二十二間）　一十五町二十八間半　千手村夫婦石（至甘木村横町一里八丁九間、從横町至筑後國下妻郡本郷村上町、一里一十四丁五十二間半、）　一里六町四十三間（至鷺水村大己貴神社前二十八丁一間）　依井村西口　一町九間　同追分　一十八町二十七間　依井村野中新町　一里五町四十五間半（至國界一十七丁三十間）　筑後國御原郡上岩田村松崎町（從小倉至松崎）街道、通計一十八里二十九町四十一間半、〇中略

從豐前國香春歷英彥山至渡里村〇中略

筑前國上座郡小石原村　二里一十五町五十二間半（至國界三里九丁四十九間半）　豐後國日田郡中島村大肥川岸〇中略

從筑前國木屋瀨歷福岡及唐津至名古屋

筑前國鞍手郡木屋瀨村　六町三十間　植木村　三里二十八町五十四間　赤間村　二里二町四十三間半　宗像郡畝町村　二里三町二十一間　糟屋郡青柳村青柳町　二里七町五間　濱男村　六町三十間　香椎村（至香椎社九丁二十七間）　八町五十八間　松崎村布橋　一十八町一十八間　多田羅村　一十八町一十五間　箱崎村箱崎橋　七町四十八間　箱崎宿馬場町、三十三度三十六分半、　二町三十間　同宮前町（至海岸四丁二十七間）　二十町一十八間半　那珂郡博多津呉服町、三十三度三十六分、　五町六間半　同橋口町（至海岸六丁六間、又從橋口町至櫛田社家町五丁五十二間、從社家町歷住吉村至住吉社、七丁四十八間、又從社家町至櫛田社、二丁一十三間半）・　二町八間　同中島町西中橋（至住吉村八丁三十間半）　七町三十二間　福岡萬町（歷脊振山至五箇山村、五里口丁五十間、從五箇山至國界、十八間、從國界至肥前國神埼郡田手村、二里二十五丁四十五間、）　七町二十七間　福岡本町　三町四間　早良郡福岡餌子町、三十三度三十五分半、　二十一町一十間　鳥飼村西新町（至海岸五丁二十一間）　一十

寶島　濱島の東にあり、石多し、（同郡○下略）

地勢

〔筑前國續風土記（提要一）〕總論

此國平地廣濶にして、村里絡繹せり、○中略北海を帶び、南山を負たれば、魚鹽多く、薪材乏しからず民部式に上國と定めしも宜成かな、且四方運漕の便よければ、此國の商賣さは〳〵諸國に往來して、有無を交易す、又京大坂諸州の商客も、多く此地に來りて、貨財を商ふ、長崎に近くして、異國の物產を求め買に便宜し、肥前、對馬、中國、四國、和泉、紀州、北國、出羽、奧州等諸國の客船も、其土物を載せて多く爰に至り集る故、民生日用のたから滿ちて乏しからず、故に九州二島の諸國の人は、此國の城下福岡博多を一都會として來りつどひ、萬の費用を買調ふ、誠に天府の國と云つべし、

〔日本地誌提要（六十五筑前）〕形勢　東西ノ連山、南走シテ更ニ西北ニ趨ク、沿海ノ地、岬嶴島嶼、參錯相望ム、曠衍ノ地少シト雖モ、東南二大河アリ、灌漑運輸兩ナガラ其利ヲ得、土宜富贍、紡織頗工ナリ、其俗南部ハ質實、瀕海ノ鄕ハ輕薄捷給ノ風アリ、

道路

〔引本實測錄（七街道）〕從豐前國小倉街道至長崎○中略

筑前國遠賀(ヲンガ)郡尾倉村　三十三町二十五間半　黑崎宿、三十三度五十二分、　三里五町二十一間　鞍手郡木屋瀨村、三十三度四十六分半、　四町三十九間　同追分　一里一十三町四十一間半　山邊村直方(ノオガタ)町　三里一十五町二間半　穗波(ホナミ)郡飯塚村、三十三度四十分、　一里一十三町五十四間　瀨戶村（至夜須郡下秋月村三里二十七丁二十二間）　二里二町四十四間　內野村　二里二十二町一十七間（至冷水峠三十三丁三十三間）　御笠郡山家(ヤンベ)村、三十三度三十分、　二町五十四間半　同追分　三町一十五間　同大殿　四町二十七間　夜須(ヤス)郡朝日村二村町　三十二町四十六間半　御笠郡原田村森之本（至針摺村針摺町三十五町四十四間）　四町二十三間　同原田驛、三十三度二十七分、　一里二町五十間半（至國界一十八丁五十一間）

肥前國基肄郡宮浦村○中略

十町、南北三十町二十一間、高二町十八間、町の長六町、後町もあり、商家海人相まじれり、

奥島、(同郡)島の周一里、民家なし、田畠なし、國君より島守を遣され、交替の番を勤む、大島より二十里ばかりあり、此島の前二十町計、島の巽の方に小屋島とて小島あり、周百間計、高さ水面より七丈許、皆岩なり、又荒船御社ある所も別の小島なり、おきの島の前にあり、

地島、(同郡)民家多し、田畠高百八十石、周一里十八町四十一間半、東西八町十八間、南北十五町、高さ一町二十四間、白濱といふ枝村あり、此所にも民家多し、

膳島、(同郡)民家二三戸有、周十六町四十九間、東西四町、南北七町、高さ五十間、

遠賀島郷　東西五里、南北一里、村數二十七、田畠高七十石、(遠賀との間入海道なり、其岡東の廣き所は大渡川と云、西のせばき所は洞のうみと云、)

白島雄島、(遠賀郡)雄島雌島二をすべて白島と云、二島脇田脇浦の沖にあり、雄島は東にあり、周二十一町十九間、東西三町廿四間、南北九町十八間、高さ四十八間、

白島雌島、(同郡)雄島相去事十八町、西に在、周二十一町、東西六町二十四間、南北三町六間、高さ二十八間、

巳上大島とす

小島の類

柱島　玄界の乾五町許に在、周三町許、高さ五十間許、皆石の柱を立たるなり、土なし、(志摩郡にあり)

釈迦牟尼島　俗に大机といふ、島の大さ方百間許、唐泊より乾の方二十七八町許、玄界より坤の方七八町、洞ありて北より西へ船通る、(同郡)

小机島　大机より南四五十間に在、東西二十四五間、南北十餘間、ひき、洞あり、小舟通す、(同郡)

烏帽子島　芥屋村より七里沖にあり、烏帽子の形に似たり、周五六町、土島なれども岩多し、畠なし、(同郡)

千草岩　倉良瀬　奥津島（又呼沖島）

遠賀郡　實渕　潮山島、周廻四町三十一間半、　葛島、（又呼實波島）周廻四町五十間、　二子島（地）周廻二町一十四間、　二子島、（沖）周廻一町三十七間、　鼠島、周廻一町五十間、　中島、（又呼河野島）周廻六町八間、　遠渕　潮山　前瀬　白島雄島　白島雌島　潮山島　千石島　中瀬　六良島　松瀬（大）松瀬（小）

〔筑前國續風土記　一〕海島（大島十三 小島廿三）合三十六、

志賀島、（糟屋郡）福岡より三里西北にあり、民家三百十二、　戸農商漁人相交れり、田畠高千七十三石、周二里七町十三間、東西十八町三十間、南北二十七町、高さ一町十二間に、勝馬と云枝村有、神社寺院有、

殘島、（早良郡）民家七十九戸田畠高四百二十八石、周二里二町十三間、東西十五町、南北三十町、高一町二十四間、神社寺院有、

玄界島、（志摩郡）福岡より六里、唐泊より一里、民家あり、周三十三町六間、東西十町、南北十町廿間、高さ一町五十四間、

姫島、（同郡）岐志の野逸崎より二里、福岡より十里、民家あり、田畠あり周二十六町五十八間、東西八町三十間、南北十町十二間、高さ一町三十六間、

於呂島、（同郡）西の浦より亥の方十三里、民家有、人口百人にたらず周二十六町七間、東西五町十八間、南北十一町、高さ五十七間、

阿部島、（糟屋郡）民家三十八戸、田畠高百八十石、周一里十四町二十六間、東西十六町三十間、南北十町三十間、高三十三間、今俗靈島とかく、

大島（宗像郡）神湊より三里北に在、民家二百餘戸、田畠高七百三十八石、周三里三十七間半、東西三

疆域

秋月　三三度二七分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　筑前　福岡西五度二〇分〇一秒

〔筑前國續風土記一提要〕總論

此國平地廣濶にして村里絡繹せり、北方には海を限、戌亥の方は遠く異國に向ひ、西は山を隔て肥前にさかひ、南は平田遠くつらなれり、山野つゞきて肥前筑後豐後豐前に隣りし、東も亦山つゞきて豐前に相並べり、東西二十六里、南北十二里あり、

〔日本地誌提要六十五筑前〕疆域　東ハ豐前、南ハ豐後、筑後、肥前、西ハ肥前及海、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾八里、南北凡壹拾七里、

島嶼

〔日本實測錄十一島嶼〕筑前國怡土郡　實測　羽島、周廻五町一十八間、遠測　一瀬　箱島

志摩郡　實測　姫島、周廻二十八町三十三間、玄界島、周廻三十五町二十六間、遠測　烏帽子島姫島　女瀬　コソ島　渡礒　烏帽子島櫻井村　雀島　釋迦牟尼島　机島　柱島　黑瀬　アンケン島又呼ニ寶ケ島一　小呂島

早良郡　實測　殘島、周廻二里九町四十八間、遠測　立岩　鵜來島

那珂郡　實測　志賀島、周廻二里一十四町一十七間半、志賀島浦三十二度三十九分半、遠測　沖津島　中瀬　虎島

糟屋郡　實測　妙見島、周廻三町二十三間、藍島周廻一里一十八町四十五間、遠測　ミツ瀬　ハナクリ瀬

宗像郡　實測　勝島、周廻一十九町一間半、大島、周廻三里一十四町八間、地島、周廻一里二十八町五十間、遠測　鞁島　立神岩　丸山　笠瀬　洞島　二俣瀬　大瀬地　大瀬沖　サヤ山

は、上代には無き事なり、

〔古事記上〕伊邪那岐命〈○中略〉妹伊邪那美命〈○中略〉御合〈○中略〉次生筑紫島、此島亦身一而有面四、毎面有名、故筑紫國謂白日別、

〔古事記中神武〕神倭伊波禮毘古命、與其伊呂兄五瀬命、〈上伊呂二字以音〉二柱坐高千穗宮而議云、坐何地者、平聞看天下之政、猶思東行、即自日向發幸御筑紫、

〔先代舊事本紀十國造〕筑志國造

志賀高穴穗朝〈○成務〉御世、阿倍臣同祖大彥命五世孫、田道命定賜國造、

〔日本書紀孝元四〕七年二月丁卯、立鬱色謎命爲皇后、后生二男一女、第一曰大彥命、〈○中略〉大彥命、是〈○中略〉筑紫國造、〈○中略〉凡七族之始祖也、

〔日本書紀十七繼體〕二十一年六月、筑紫國造磐井、陰謨叛逆、猶豫經年、恐事難成、恆伺間隙、新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍、於是磐井掩據火豐二國、勿使修職、〈○下略〉

〔古事記中仲哀〕故其政未竟之間、其懷妊臨產、即爲鎭御腹、取石以纒御裳之腰而渡筑紫國、其御子〈○應神〉者阿禮坐、〈阿禮二字以音〉故號其御子生地謂宇美也、亦所纒其御裳之石者、在筑紫國之伊斗村也、

〔地勢提要〕各國經緯度〈附里程〉

筑前國〈貫千町〉極高三十三度三十五分半、經度西五度二十分、從豐前小倉〈長崎街道自小倉至郡界、〉木一十九里二十六町半、三百二里三十四町三十六間半、〈○從二東都一〉

筑前宰府村大町、極高三十三度三十一分半、經度西五度一十一分、從東都、〈東海道西國街道、自小倉長崎街道、從山家宰府道、〉三百三里三十三間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

筑前　福岡　三三度三五分三〇秒　　宰府　三三度三一分三〇秒

の濱に石垣を多くつけり、其故につく石といへる心なるを、略してつくしと云成べし、雜書の說に、上古の時、西蕃の國より度々日本を侵したる事あり、其後仲哀帝も、異國より來り侵せし賊の流矢にあたりて崩じ給ふといへり、菅丞相のうたに、宮崎や千世の松原石だゝみ崩れん世まで君はましませ、是いにしへ筑前の海邊、宮崎博多のあたりに、石垣ありし證なり、昔より博多は唐土船の著し所にて、要害堅固にして、石垣多かりしにや、博多の別名を石城府といふ事、僧萬里の梅庵集、及異國の人作りし海東諸國記にも見えたり、近代龜山後宇多の御時、蒙古の賊兵多く攻來りしに、博多の濱に石垣をつきし事は、上代より有し石垣を修補したるなり、此時始てつきたるにはあらず、鎌倉の北條家より、筑前の太宰少貳に書を遣して、昔よりありし石垣を修復すべきよしを催せしを少貳より又此邊の士に下知せし證文あり、其石垣は今も博多の西、古道松原、生のまつ原、今津邊、所々に少殘れり、然れば昔この國をつくしと名付し事は、筑石といふことばをとれる成べし、是前人のいまだいはざる所、寛信が臆見なれど、しばらく記して識者の是正を待のみ、

〔古事記傳五〕筑紫國、萬葉五二十三丁に都久紫能君仁とあり、後に二國に分れたり、和名抄に、筑前筑紫乃三知乃久知筑後筑紫乃三知乃之里とある是なり、風土記に、筑後國者、本與筑前國合爲一國と云り、○中略さて如是二に分れしは何御代とも知れず、書紀景行卷十八年下に、筑紫後國とあれば、其より前か、はた分しは後なれど前へも及してかくは書るか、都久志と云名義は、筑後風土記に三說ある中の一に、昔この前と後との堺なる山に、荒ぶる神ありて、往來人多に取殺されき、故其神を人命盡神(ヒトノイノチツクシノカミ)となむ云ける、後に祝祭て筑紫神と申すとあり、此說さもありぬべく聞ゆ、今二の說も共に靈の意なれど、ひがごとゝきこゆ、又書紀私記に、國形の木兎(ツク)に似たる故とあるを、世の物知人も用たれど、此もひがごとゝきこゆ、式に筑前國御笠郡筑紫神社あり、此神なるべし、又近世に、貝原某が釋名てふ物に、古異國より冦來を防むがために、筑前の北方の海濱に石垣を多く築せ賜ひし故に、築石の意ならむと云る、是も由ありて思ゆれど、異國の賊を防がれしこと

〔地名字音轉用例〕タノ行ノ音同行通用セル例

つくし　筑紫〈國〉　筑〈又竺トモ作リ〉ツクニ用ヒタリ

〔釋日本紀〈五述義〉〕筑紫洲

私記曰、問、此號若有意哉、答、先儒之說有四義、一云、此地形如木兎之體、故名之也、木兎鳥之名、此云都久、二〈○二下恐脫云字〉公望案、筑後國風土記云、筑後國者、本與筑前國合爲一國、昔此兩國之間山有峻狹坂、往來之人所駕鞍韉被摩盡、土人曰鞍韉盡之坂、三云、昔此堺上有麁〈○麁原作鹿、據一本改、〉猛神、往來之人半生半死、其數極多、因曰人命盡神、于時筑紫君肥君等占之、今筑紫君等之祖甕依姬爲祝祭之、自爾以降、行路之人不被神害、是以曰筑紫神、四云、爲葬其死者、伐此山木造作棺輿、因玆山木欲盡、因曰筑紫國、後分兩國〈○國原脫、據一本補、〉爲前後、

〔筑前國續風土記〈一總論〉〕此國を筑前と名付し事、古は筑前筑後一國にして、これを筑紫といへり、故に日本紀等の古書に筑紫といへるは、多くは筑前筑後をさせり、又九國をすべて筑紫と稱し、或は九州の內筑前筑後の外をも、筑紫と云し事も間これあり、筑前は古へ官府のありし國にて、九州二島をすべてまつりごちし所なれば、その國の名をとりて、九國をもすべて筑紫といへり、たとへば大和に帝都在し故、日本をすべてやまとゝ稱せしがごとし、唐土にも亦いにしへかゝるためし多き事になん侍る、〈○中略〉筑紫と名付し意を考ふるに、釋日本紀にいはく、〈○中略〉右四說の內、初の說は此國の形、木兎に似たりといへり、今案するに、筑前筑後のかたち、木兎の形に似たりとも見え侍らず、九州の總圖を見るにも、其形木兎に似ず、然れば木兎に似たりと云說信じがたし、後の三說はみな盡の義をとれり、いにしへ筑紫と名付し事、一定の說なくして、民間にさまざま云傳へたる言ばを、風土記を作れる人考へに備んため、ことごとく載侍るならし、何れも決定すべき說なし、〈○中略〉ひそかにおもふに、いにしへ異國より賊兵襲來るをふせがんとて、筑前の北邊

古事類苑

地部三十

筑前國

名稱

筑前國ハ、チクゼンノクニト云フ、本ト筑後ヲ合セテ筑紫國ト稱セシヲ以テ、舊クハ又ツクシノミチノクチトモ云ヘリ、西海道ニ在リテ、東ハ豐前ニ接シ、西ハ肥前及ビ海ニ至リ、南ハ豐後、筑後、肥前ニ界シ、北ハ海ニ臨ム、東西凡ソ十八里、南北凡ソ十七里、其地勢ハ山脈東ニ起リテ南走シ、更ニ西北ニ趨キ、沿海ノ地、港灣多ク、島嶼參錯シ、全州概シテ山海ノ利ニ乏シカラズ、此國ハ、古ヘ國府ヲ御笠郡ニ置キ、怡土、志摩、早良、那珂、席田、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉麻、穗浪、夜須、下座、上座、御笠ノ十五郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世遠賀郡ヲ御牧郡ト稱セシコトアリシガ、明治維新ノ後、嘉麻、穗波ノ二郡ヲ合シテ嘉穗郡ヲ置キ、席田、御笠、那珂ノ三郡ヲ合シテ筑紫郡ヲ設ケ、怡土、志摩ノ二郡ヲ合シテ糸島郡ト稱シ、夜須、上座、下座ノ三郡ヲ併セテ朝倉郡ヲ立テ、新ニ福岡市ヲ設ケ、福岡縣ヲシテ一市九郡ヲ治セシム、

筑紫國

〔倭名類聚抄 五國郡〕西海國○中略 筑前 筑紫乃三知乃久知

〔饅頭屋節用集 天地〕筑前 筑州

〔日本風土記 一寄語島名〕筑前 職骨前

〔易林本節用集 下〕筑前 筑州 上、管十五郡、南北四日、米、粟、珍寶、器械備也、中上國也、

〔運歩色葉集 津〕筑紫

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒○中略 土佐國卅人○中略

諸國器仗○中略 土佐國甲一領、横刀六口、弓卅張、征箭十具、胡簶十具、

〔儀式十〕十二月大儺儀○中略

事別天詔久、穢久惡伎疫鬼能、所々村々爾藏里隱布留乎波、千里千里之外、四方之堺、東方陸奥、西方遠値嘉、南方土左、北方佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氐、○下略

管私領
一人數四拾万九千四百拾三人

　內　貳拾貳万千四拾九人　男
　　　拾八万八千三百六拾四人　女

高貳拾六万八千四百八拾四石餘　土佐國

〔南路志 八人數 國〕人數

文化三年改

一人高四十五万貳千四百七十一人　今文化三寅年分

人高四十五万五百卅一人は丑年分ニ引當

千九百四十人、今寅年分增、右之內　男九百貳拾六人　女千十四人　增

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略

管私領
一人數四拾六万千三拾壹人

　內　貳拾四万八千五百八拾六人　男
　　　貳拾壹万貳千四百四拾五人　女

高三拾三万貳拾六石餘　土佐國

風俗

〔人國記〕土佐國

土佐國之風俗、成程直ニ而、氣質スナヲナル國風也、是都テ士町人百姓ニ至ルマデ如此ナリ、別而

土佐長岡香川郡如此也、サレバ其氣質ハ鳥ケダモノニモ備ル物乎、猿モ是國ノ猿ハ別テ仕付ヨ

キナリ、サレドモ遠國ニシテ其言舌卑キナリ、心底ハ如形直ナリ、

〔土佐州郡志 風俗〕安靜無事之日、知有戰鬪攻掠之備、習俗淳朴、男勤耕稼、女事桑麻、

〔日本鹿子 十三〕同國 ○土佐 中名產物出所之部

土佐の海　當國の浦をなべて云といへり

名所

大崎　名越山　夢野　畑山　室の戶

〔和爾雅 一地理〕日本國名所

土佐國　土佐山　土佐海　鏡河（讀云鏡中）　名越浦　室戶　打山　大崎　御厩浦

年料別貢雜物略〇中土佐國零羊角四具、黄蘗六枚、〇中略

諸國貢蘇番次略〇中土佐國十壺四口各大一升、六口各小一升、右十四箇國爲第六番子年午年〇中略

交易雜物略〇中土佐國龜甲四枚、煮鹽年魚五缶、紫菜一百五十斤、苫廿五枚、編子四合、

〔延喜式二十四主計〕土佐略〇中右廿五國中綵略〇中

土佐　右廿九國緰絹

土佐國行程上卅五日、下十八日海路廿五日

調、絲帛卅疋、縹帛十五疋、堅魚八百五十五斤、自餘緰絹、庸、白木韓櫃十四合、自餘緰綿、米、中男作物、龜甲十枚、紙、胡麻油、堅魚、雜魚、腊、煮鹽年魚、鯖、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥略〇中

土佐國十三種　獨活、細辛各二斤、牛膝三斤、昌蒲、升麻各四斤、苦參九斤、木斛十三斤、栝樓七斤、署預一斗二升、桃人、車前子各四升、秦椒一升、決明子二升、呉茱萸二斗、

〔延喜式三十九內膳〕年料略〇中土佐國押年魚一千隻、煮鹽年魚五缶、

〔庭訓往來〕土佐材木

〔毛吹草三〕土佐

駒　猿　節鰹シクチ　同鹽引　同カラスミ鯔ノ子ヲリ宜ト云　猿貝　流貝　海苔ノリ　大米餅白米ナリ

ハツタイ　太布　色紙　本川ホンカハ青苔　西寺御綺硯石三月三日鹽干ニ海底ヨリ取也、時剋ニ西寺ノ僧經ヲ讀誦スル也、　志良賀

山檜柱　檜皮ヒワダ此外諸木多　明松アカシマツ　帆柱　スクリ舟ノ綱ニ用也、檜チ割タル物也、　野根山薄板　葛籠籐

人口

〔官中秘策五〕土佐國　七郡略〇中

一人數三拾六万八千百九拾貳人　內男拾九万六千五百七拾七人女拾七万千六百拾五人

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略〇中

國產貢獻

元祿十二年改

安藝郡貳萬二千百八拾壹石九斗九升九合　百十ヶ村
香美郡三萬九千六百十石九斗三升　百四十七ヶ村
長岡郡三萬六千五百四十九石四斗貳合　百四十七ヶ村
土佐郡貳萬七百八十四石九斗貳升　百三ヶ村
吾川郡貳萬千七百五十石四升九合　六十九ヶ村
高岡郡五萬七千三百廿八石九斗七升六合　貳百廿ヶ村
幡多郡七萬二百七十八石六斗四升八合　貳百八十ヶ村
郡合貳十六萬八千四百八十四石九斗七升四合　村數千七十六ヶ村

右者御國新御繪圖被仰付、依之長宗我部元親地撿帳を以相改之、右潰候村者揖除之、出來村者居之、新田之地高村附候處記加之候、以上、

元祿十二卯年十二月三日　渡邊又五郎〇以下五人略

(日本鹿子十三)土佐國七郡、中上國、東西二日、〇中略知行高二十万二千六百二十石、

(官中秘策五)土佐國　七郡〇中略

一石高貳拾六万八千四百八拾四石餘

(吹塵錄五人口及國高)天保度御國高調〇中略

土佐國官私領　一高三拾三万貳拾六石五斗貳升

(延喜式十五内藏)諸國年料供進〇中略　𦊆子(中略、土佐廿六甕、各四合)

(延喜式二十三民部)年料舂米〇中略　土佐國大〇中略四百石

年料粮舂米〇中略　土佐國〇中略五百石

内　貳万五千貳百三十九石八斗七合　田　六千三拾貳石三斗貳升八合　畠

外　四百八十六石八斗七合　新田

長岡郡二萬八千百八十八石八斗九升貳合　百廿七ヶ村

内　貳万貳千九百五十七石三斗八升六合　田　五千貳百三十一石五斗六合　畠

外　三千六十四石三斗八升九合　新田

土佐郡一万九千九拾石八斗三升四合　百貳ヶ村

内　壹万四千四百七拾貳石八斗五升六合　田　四千六百十七石九斗七升八合　畠

外　四千四百九十六石九升九合　新田

吾川郡貳万千四百廿一石貳斗三升貳合　六拾八ヶ村

内　壹万八千八百六十壹石貳斗三升三合　田　九千五百五十九石九斗九升　畠

外　三百九十貳石六斗六升　新田新潮田

高岡郡五萬六千百八十四石五升四合　貳百一ヶ村

内　四万三千九百七十五石九斗三升　田　壹万二千貳百八石壹斗貳升七合　畠

外　千貳百六十六石四升五合　新田新潮田

幡多郡六萬九千七百四石五斗九升一合　貳百五十三ヶ村

内　五万八千六百石貳斗六升　田　壹万千百四石三斗三升壹合　畠

外　四百十九石貳斗四升四合　新田新潮田

合貳拾四万七千五百八拾一石九斗八合

内　拾九万貳千九百五十八石三斗九升　田　五万四千六百貳拾三石五斗九合　畠

外　壹万八百九十石九斗六升六合　新田新潮田

領封　出舉稻　田數石高

〔南海通紀十七〕羽柴内府公四國配分記
土佐國　長曾我部宮内大輔元親ニ賜ル
〔慶應元年武鑑〕松平土佐守豐範大廣間 從四位少將元治元年七月任　二拾四万二千石、居城土佐土佐郡高智江戸ヨリ海陸二百三十五里、
城主長曾我部氏居之、慶長五年ヨリ山内土佐守一豐、以後代々領之、
山内攝津守豐福柳間 朝散大夫　一万三千石　在所土佐高智新田遠徒同席
元祿十一寅年ヨリ下總匝瑳郡小島代々領之、安永九子年十二月、土佐守豐雍依願新田一万石内證分、〇節略
〔延喜式主税二十六〕諸國出舉正税公廨雜稻〇中略
土佐國正税公廨各廿万束、國分寺料一万束、文殊會料一千束、修理安祥寺寶塔料五千束、修理池溝料二万束、救急料六万束、俘囚料三万二千六百八十八束、
〔倭名類聚抄五國郡〕土佐國〇略　註管七〈中略〉正公各二十萬束、本稻五十二萬三千七百三十八束、雜稻十二萬三千七百三十八束、
〔倭名類聚抄五國郡〕土佐國〇略　註管七田六千四百五十一町八步
〔海東諸國記〕土佐州　郡七、水田六千二百二十八町、
〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕九万八千二十石　土佐
〔南路志入國〕七郡地數
寛永十一年改
安藝郡二萬千七百廿石壹斗六升七合　九十七ケ村
内壹万五千八百五十石八斗三升七合　高田
五千八百六十九石三斗三升
外七百六拾七石七斗貳升貳合　新田
香美郡三萬千貳百七拾貳石一斗三升五合　百廿三ケ村

〔南路志二廿圖〕下總國香宗我部隼人所藏文書曰、有王宗親花押略可令早借禪源致沙汰土佐國大。里。庄。內若王子宮別當職事中略　弘安九年十二月〇中略

安藝郡崎濱村八幡宮鰐口銘曰、土州安喜郡佐。貴。濱。庄八幡宮神前、正慶元年壬申十月朔日、大勸進沙門圓眞敬白、

安藝郡西寺所藏文書曰、當國最御崎寺領室。津。濟。江。兩庄。事、任度々勅裁幷官符之旨、寺家知行不可有相違、仍執達如件、

建武二年四月十三日　　兼光　土佐守

謹上　淨印上人御房

〔壬生文書綸旨院宣御教書等〕陸奧國安達庄〇中略　土左國吉。原。庄。〇中略

右庄々知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月廿六日　　參議花押

大夫史殿〇壬生匡遠

〔攝津親秀讓狀〕讓與

一總領諸直分〇中略　土佐國田。村。庄。〇中略

曆應四年八月七日　　掃部頭親秀判

〔南路志一郡鄕〕香宗我部隼人所藏文書曰、

可早停止兵粮米催大炊寮使補土左國香。宗。我。部。保事

右件保重色異他、早可令停止兵粮米催、山下狠藉之狀、所仰如件以下、

承久三年八月一日　　武藏守平花押　相模守平花押

莊保

〔吾妻鏡二〕養和二年(〇壽永元年)九月廿五日癸巳、土佐冠者希義者、武衞弟也、(母季範女)去永暦元年、依坐左典廐(〇義朝)縁坐、配流于當國介良庄、處近年武衞於東國擧義兵給之間、稱有合力疑、可誅希義由、平家加下知、仍故小松内府家人、蓮池權守家綱、平田太郎俊遠(當國住人)、爲顯功擬誅希義、希義日來與夜須七郎行家(土州住人)依有約諾之旨、辭介良城向夜須庄、于時家綱俊遠等、追到于吾河郡年越山、誅希義訖、

〔吾妻鏡四〕元暦二年(〇文治元年)三月廿七日庚戌、土佐國介良庄住侶琳猷上人參上于關東、是有功于源家者也、　五月二日甲申、土左上人琳猷歸國、令止住關東、可掌一寺別當職之由、頻雖抑留給、於土左冠者墳墓、可凝佛事之旨申請之間、有御餞別會、又上人住所介良庄、恒光名津崎在家被停止萬雜事畢、加之此上人依訪故希義主夢後、爲酬其志、可賞翫之趣、被仰土左國住人等云云、

〔南路志(二莊園)〕高岡郡多郷村賀茂社本地佛裏書曰、土州高岡郡津野庄、多野郷加茂本地佛、寛永二年

正月日、(〇中略)

幡多郡足摺山所藏文書曰、寄進香山寺(〇在土佐國幡多郡御庄本郷内)領田參町事(中略)嘉禎三年(丁酉)十月十八日、法橋上人位(花押)

〔古文書類纂(上處分狀)〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事(〇中略)

一家地文書庄園事(〇中略)　前侍從殿(〇中略)　別當三位讓進庄々(〇中略)　土佐國安藝庄(〇中略)　前攝政

(〇中略)　新御領(〇中略)　土佐國幡多郡　本庄　大方庄　山田庄　以南庄(〇中略)

建長二年十一月　日　愚老(在判)

〔元亨釋書(十三明戒)〕釋忍性、姓伴氏、和州磯城島人也、(〇中略)性詣四天王寺、覩聖德太子四院(敬田、悲田、施藥、療病)志焉、自此處々構療病悲田之院、其桑谷療病所、二十歳間痊者四萬六千八百人、死者一萬四百五十人、已而活者殆五之四也、是役也、平副帥時宗聞之、性輔成之、故以土州大忍庄、充其費、遂至體事也、

安喜ノ東ニ野根山トテ、十里ノ大山ヲ越テ野。根。ト云所アリ、阿波ノ海部、宍咋ニ並ブト云ヘドモ土佐ノ内也、此領主ヲ野根殿ト云、

〔秦山集詩一〕宿。毛。

出府而今三十日、荷擔暫卸宿毛郷、野田昔日武平城、(野田甚左衛門古城)縄直準平樹蒼蒼、牛瀬(ハ宿毛東南)混混青於藍、鯉兮鰻兮肥逸狂、放舟直下是錦口、(宿毛西)歩亭仰看山嵂嶸、土豫噴薄天正役、烈風拂葉取新城、(卯峠嶢者)環海中心有大島、(卯島名、在錦南、)蛤蜊腸胃胎蟹鼈、(錦口大島洲渚往往有之、本草無此種、蓋此類歟、)南北東西一圓錢、篠峯突兀出翠黛、(自大島望北之狀)酣飲浩歌非無由、風物往往有姿態、邑士從來多文雅、好解衿勤且相對、

〔秦山集記四十四〕土佐國安藝郡白濱。五社明神社記(代明神氏)

白濱在土佐國安藝郡、三面阻山、一面向洋、土壤磽鹵、不生草木、境界荒僻、不育人物、眞所謂脊宍胸副國也、道喜昔上言國衙曰、臣少經行陳、性尤數奇、横槊枉革之懐、未嘗忘乎心腑、今此沙漠不毛之地、其在版圖也、雖肋且不齒、委之魑魅魍魎、於官何有、臣少祖聞古昔屯耕之緒餘、儻付臣以經畫之權、鹹原陟降、錢鎛庤父、臣雖不敏不敢辭也、若其國家昇平也、使丁男蠶婦、衣食壠畝、一日有儆也、率勵卒馬以赴武功、則於朝家不煩經費、而在臣足償宿心也、草莽賤士、未卜識嫌、而豈圖明鑒炤燭、芻蕘不遺、寛永壬申、(九年)○先邦君竹巖院忝賜臣御判、領知白濱一圓、除軍興外調、免諸役、國宜一降、惠流千載、臣不勝感激銘肝之至、道喜因念、白濱脊宍胸副國也、苟非生草生木生人生馬生鳥獸棹艫船、不能一朝居焉、非神明經營孰能與於此、乃相濱之日高、豫擬五社明神之社、所以萃聚天人寶其威靈也、海濱植松成林、外防瘴霧、内蓄風氣、所以醇生物之力也、松林以南作鹽竈、伐苴薪以煮海水、松林之北傍驛路、構聚落以比墟市、凡此皆所以招徠農商、安泊旅客也、施設苟完、三十有八年于茲、鹹鹻漸瀉瀦、淡水盎浸潤、秋穎八握、荏菽旆旆、竹樹茂密、華葉駢植、凡所食毛縛茅婚嫁往來者、幾四百餘人、宛然常世郷矣、○中略

寛文九年六月望日、白濱領主明神氏信勝入道道喜居士謹記、

在土左郷之西、中世分東西二村、西謂小高坂、東謂大高坂、大高坂今城府也、慶長七年、一豊君移浦戸城於此地、號河中山、寛永年中、忠義君又改高知山、

(土佐州郡志 土佐郡)高知 舊名國澤、後更高知、東西三十一町五十間、南北八町十間、諸士第宅縦横八町餘、其餘市井、分城東西、市中戸凡三千六十七、

府城　國君之常居也、山舊名大高坂、往昔大高坂長門守者據守此山、慶長中、一豊公始營修城隍、更名河中山、殿宇森嚴、規模壯麗、允爲億萬年之基、

(南路志 十六 土佐郡)高知　地千二百五十六石二斗三升六合、士屋敷、商家共町中、豎町東西道續三里二十丁三十三間一尺、下三十一町六、横町南北一里十八丁廿一間、町之東西二十八町、南北八丁、

一豊公、慶長六年辛丑六月、國澤之内、大高坂山を城地ニ被定、同八年癸卯、御本丸御成就ニ付、御城名可奉附眞如寺在川和尚江被仰付處、南北之川中之依爲城、河中と被奉附、慶長十五年庚戌年迄、度々南北之川洪水ニ付、再忠義公地鎭、五臺山空鏡上人江被仰付、城地高知山と空鏡上人

介良附

(平治物語 三)頼朝遠流事附盛安夢合事
今一人ノ男子ハ、駿河國ニ香貫ト云者掘出テ平家ヘ奉レバ、希義ト云名ヲ付テ、土佐國氣良ト云所ヘ被流テ御座ケレバ、氣良冠者トゾ申ケル、

(長門本平家物語 四)丹波少將は、備中のくに妹尾の湊ゆく井といふ所より御船に召して、波路はるかにこぎうかぶ、(中略)高くそびえたる遠山のはるかに見えければ、あれはいづくぞと少將問給へば、土佐のはたと申ければ、(下略)

(源平盛衰記 十三)熊野新宮軍事
所詮東國ノ勢ノ馳上ラヌ前ニ、宮(○以仁王)ヲ取奉テ、土佐ノ畑ヘ流シ奉ルベシトゾ被定ケル

(南海通紀 十二)東方野根城陥記

〔郡名一覽〕一土佐國（皆私領）　土州　東西二日　七郡

高貳拾六万八千四百八拾四石九斗七升四合　　千七拾六ケ村

●高智

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕土佐　七郡、千七十六村、

高（皆私領）三十三万二十六石五斗二升

安喜郡百十村　香我美郡百四十七村　長岡郡百四十七村　土佐郡百三村

吾川郡六十九村　高岡郡二百二十村　幡多郡二百八十村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

土佐　安喜郡、河內村、生見村、奈半利村、和食浦、蓊島、香我美郡、手結浦、夜須村、長岡郡、十市村、吸江村、介良村、土佐郡、下知村、高知、萠野村、宍崎村、吾川郡、御疊瀨浦、鐼島、高岡郡、新居浦、久通浦、多野鄕村、神田村、戶島、雙兒島、幡多郡、名鹿村、下茅浦、鍵懸村、久百浦、猿野渡、爪白村、小才角浦、古間目浦、一切浦、天地浦、大海浦、外浦、藻津村、蒲葵島、

〔南路志 二 莊園〕長岡郡吸江寺所藏文書曰、土佐國吾川山庄內上。谷。川。村。事、○中略

文和三年二月晦日　三浦下野守

〔秦山集 詩一〕中。村。

七曲秋高栗本城、黃粱漠漠紫茄傾、渡川無策比年溢、崩岸有舟盡日橫、三万石中平若掌、一條公跡絕存名、方今四海弟兄日、土左幡多見世情、（中村土佐國子城、所隷地三万石、國君親族領之、七曲地名、屬本古城、在其同、渡川崩岸皆水名、一條公所家、所冬、所基、禁室、內政也、考藤譜妙華院亦稱予此云、古城今名愛宕町、）

〔土佐𦾔考 土佐郡〕高坂。

天平勝寳四年十月廿五日〇署名略

〔土佐國幡多文書〕土佐國幡多郡上山鄕御地撿高目錄、
總田數合參百八拾四町九段四拾代四分勺内本田貮百六拾貮町三反廿七代出田百廿二町六反十三代四分勺〇下略

〔源平盛衰記十九〕文覺入定京上事
文覺〇中略角ナ兵衛佐殿〇源賴朝ノ許ニ行向ナ申ケルハ、〇中略ナレバ院宣ヲ急ギ給ラント思給ハヾ、高雄ヘ庄園ヲ寄進有ベシト云ケレバ、佐殿ハ我身ダニモ安堵セズシテ、イカニトシテ寄ベシト宣フ、〇中略文覺ハ、手ニトリ得ツレバ必惜キ事也、ナキ物ハ惜カラズ、國モ廣博也、所知ヲ十餘所寄進シ給ヘトテ、紙硯取向、〇中略土佐國ニハ高賀茂鄕ヲ始トシテ、十三箇所ヲ撰出シ、ソレソレト云ケレバ、〇下略

〔南路志二十一〕香宗我部隼人所藏文書曰
讓與　土佐國香美郡内香宗我部鄕地頭職事
鄕内在村々本鄕黃田遠手千頭新田須留以下
四至限東大忍庄堺深淵鄕野田川石切乃嶋限南大海限北立山横峯限西
右於當鄕地頭職者、元曆建久先祖秋家秋通令拜領右大將家〇源賴朝御下文以來、迄于性海七代、相傳知行無相違所領也、〇中略
康永四年九月廿六日
沙彌性海花押

〔寒山集四十七〕事告伊勢内外宮祝詞代橘倫氏
謹請再拜、再拜、元祿十六年癸未十一月十六日戊午、土佐國寧山内藏人橘倫氏、〇中略倫氏家世所知曰宿毛鄕、宿毛管内有柏島、其所轄百町、宿毛之有柏島、猶知手之有指、木之有枝、一體而不可相忘、數十年來、我親族保之、轉相繼承、遂成一家、〇下略

鄕

多中箭死者

〔桃華蘂葉〕一家領並散地等之事

土佐國幡多郡有諸村等村 當時雖有知行之號、有名無實也、但應仁亂世以來、前關白令下向于今在庄、被渴命者也、

〔南海通紀十六〕西伊豫群將住所記

土佐ノ元親、元龜年中ニ、幡多郡ヲ治メラレテ後ハ、西伊豫ニ隣シテ其行程近シ、

〔倭名類聚抄九土佐國〕安藝郡 奈半 室津牟呂都 安田也須多 丹生爾布 布師布〔布高山寺本作招〕乃之 和食和之岐 黑鳥久呂止利 玉造多萬都久利

香美郡 安須 大忍於保左比 宗我曾加 物部毛乃倍 深淵布加不知 山田也萬多 石村伊波牟良 田村多無良

長岡郡 登利鳥加利〇鳥加利、高山寺本作安賀利、 殖田宇惠多 宗部曾加倍 江村衣牟良 大角於保都 片山加多也萬 氣良 篠原志乃波良 大曾於保曾

土佐郡 土佐 高坂 鴫部 朝倉 神戸

吾川郡 仲村 桑原 大野 次田

高岡郡 高岡 吾川 海部 三井

幡多郡 大方 鯨野 山田 收田 宇和〇和、高山寺本作知、

〔釋日本紀十四述義〕土左國風土記曰、土左郡有朝倉鄕、鄕中有社、神名天津羽羽神、天石帆別命、今天石門別神子也、

〔東大寺要錄六〕造寺司 牒三綱所

合奉宛封一千戶〇中略 土佐國一百戶土左郡鴨部鄕五十戶 吾川郡大野鄕五十戶

以前寺家雜用料、永配封、當年所輸之物、爲始奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒

元親（長曾我部）土佐一國ヲ合セ取テ阿州ヲ窺ントス、是ニモ用心セズシテ野根甲ノ浦ヲ元親ニ取ル、此二ケ所ハ土佐ノ國ノ內ナレドモ、安喜郡ヨリ野之山トテ行程十里ノ山路難所ナレバ、取ツヾキ難キ所也、阿州海部ヨリ村里ツヾキテ一國ノ如シ、

〔南海通紀十二〕安岐山城守攻元親記
安岐郡ハ壽永ノ比、安岐ノ大領實康ヨリ不易ノ郡司也、采地五千貫領シテ土州ノ東端也、元親（○長曾我部）ト六里隔テ東西ニアリ、○略

香美郡

〔日本後紀十二（桓武）〕延曆二十四年五月戊寅、授土左國香美郡少領外從六位上物部鏡連家主爵二級、○下略

長岡郡

〔土佐國考〕香美郡○註略長岡郡○註略土佐郡○註略○中寶龜以來延喜以前、割土佐郡、建長岡、割長岡、建香美郡、○下略

土佐郡

〔釋日本紀十二（述義）〕土佐國風土記曰、土左郡家西去四里、有土左高賀茂大社、其神名爲一言主尊、
〔續日本紀二十九（稱德）〕神護景雲二年十一月戊子、土左國土佐郡人神依田公名代等卌一人賜姓賀茂、

香川郡

〔釋日本紀十（述義）〕土左國風土記曰、吾川郡玉島、或說曰、神功皇后巡國之時、御船泊之、○下略
〔吾妻鏡五〕元曆二年（○文治元年）十二月三十日己卯、令拜領諸國地頭職給之內、以土佐國吾河郡、令寄附六條若宮給、被宮者點、故廷尉禪室六條御遺跡、被奉勸請石淸水、以廣元弟秀最阿闍梨所被補別當職也、

高岡郡

〔續日本後紀十（仁明）〕承和八年八月庚申、土佐國吾川郡八鄕、各分四鄕、建二郡、新郡號高岡郡、司者分元四員各置二員、

幡多郡

〔三代實錄四（淸和）〕貞觀二年六月廿九日戊申、土佐國幡多郡地一十町賜施藥院、
〔日本紀略二（朱雀）〕天慶三年十二月十九日庚戌、土佐國言、八多郡爲海賊燒亡、合戰之間、御方人並賊類

安藝郡

吾川讀後	高岡讀後		
		波多	
吾川アカハ	高岡タカヲカ	幡多ハタ	皆七
同	高崗	同	同
同	高岡	同	七郡
吾川　吾河東	同	同	
吾川アカハ	同タカヲカ	同ハタ	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同アカハ	同タカヲカ	同ハタ	同
同	同	同	同

〔土佐幽考〕香美郡略○註　長岡郡略○註　土佐郡
上古蓋安藝、土佐、吾川、幡多四郡耳、續日本紀云、光仁天皇寶龜九年三月己酉、土左國言、去年七月風雨大切、四郡百姓産業損傷、加以人畜流亡、廬舍破壞、詔加賑給、此其證也、寶龜以來延喜以前、割土佐建長岡、割長岡建香美郡、如何者、鏡野諸村一堆長岡、而在香美長岡兩郡中央、東西二里許、南北十餘町、東自鏡河水涯、西至坂折山麓、遠望難極眼、南北斷岸巍立、直下近村、斯知長岡郡名起之、今三分二屬香美郡、依割長岡郡也、○中略

吾川郡　高岡郡
吾川高岡舊一郡也、郡中有吾川、是所謂贄殿川也、郡名起之、○中略高岡郡有吾川郷、此郷帶今訛稱波川村、割吾川郡之時、其地入高岡郡、○中略高岡郡中有高岡郷、正由之也、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年六月庚子、土左國安藝郡少領外從六位下凡直伊麻呂、稻二万束、牛六十頭、獻於西大寺、授外從五位上、

〔南海通紀十一〕阿波屋形長治不辨國家存亡記

〔延喜式民部二十二〕土佐國、中、管　安藝(アキ)　香美(カヽミ)　長岡(ナカヲカ)　土佐(トサ)　吾川(アカハ)　高岡(タカヲカ)　幡多(ハタ)　右爲遠國

〔皇國郡名志〕土佐國七郡

安藝(アキ)　田邊 ●竹ヤシキ △安田川 △アキ川　安藝 △東寺 △西寺 阿界

長岡(ナカヲカ)　●ヨチヤキ △本山　豫界

吾川(アカハ)　●通川　國中ヲ横ギル小原

幡多(ハタ)　●下山 ●伊田 △宿毛 △中村　南山崎

香美(カヽミ)　●富田 △物部川 ●ワシキ 朔府 阿界

土佐(トサ)　高知 ●寺川　豫界

高岡(タカヲカ)　●横山 △須崎川 △花山寺院 ●ユクハラ ●上ノカヤ 右ニ同 ●奥津

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕土佐

六國史古書				
延喜式	安藝(アキ)	香美(カヽミ)	長岡(ナカヲカ)	土佐
倭名抄	同	同(加々美)	同(奈加乎加)	同
拾芥抄	同	同	同	同
諸書	安藝(和) 安喜(古文)	香美(和) 香我美(古文)	同(古文)	同(古文)
郡名考	安喜(アキ)	香我美(カガミ)	同(ナガヲカ)	同(トサ)
天保郷帳	安藝	同	同	同
明治拾年編	同	香美	同	同
地誌提要	同(アキ)	同(カヽミ)	同(ナガヲカ)	同(トサ)
郡區編制	同	同	同	同

郡　國府

〔南海通紀七〕四國幷近國錯亂記

土佐國ハ七郡ニシテ、上世七人ノ郡司アリ、其下ニ七十二人ノ國人士アリ、昔賴朝卿ノ御時、香美郡ノ住人夜須七郎行宗ト云者、源家ニ忠アル故ニ、香美長岡二郡ヲ賜テ鎌倉殿ノ仕承トシテ、國中ノ成敗ヲ掌シム、行宗ハ同郡ノ曾我部ヲ以テ臣トス、香美郡ニ居ルヲ香曾我部トシ、長岡郡ニ居ルヲ長曾我部トス、行宗世々ノ後國務ニ惰リ、兩曾我部ヲ以テ七人ノ郡司ノ事ヲ掌シメテ、夜須氏ハ安佚ヲ旨トシ國中ノ事ヲ與聞事ヲ不得シテ二郡ノ權ヲ失フ、爰ニ土佐ノ幡多郡ハ四國ノ要地ニシテ公領タリシガ、應仁亂ノ後、將軍家ノ奉行人ナクシテ國政行レズ、故ニ細川執事ソ計トシテ、大永元年ニ、一條房家公ヲ申下シ、幡多郡一萬貫ノ地ヲ獻ジテ土佐ノ國司ト定メ、七郡ノ旗頭各一條殿ノ命ヲ奉シム、〇中略長曾我部元家遺恨ヲ起シ、一條殿ノ命ヲ不用シテ、私ノ弓矢ヲ取起シ、本山、吉良、大比羅ヲ攻伏、竟ニ一國ヲ合呑シテ土佐ノ幡多ニ至ル、〇下略

〔倭名類聚抄五國郡〕土佐國國府在長岡郡、行程上三十日、下十八日、

〔土佐日記〕ある人あがたのよとせいつとせはて、れいのことゞもみなしをへて、げゆなどとりてすむたちよりいで、ふねにのるべきところへわたる、

〔土佐國考長岡郡〕宗部郷曾我部

比江、國分、八幡三村是也、〇中略國分村國分寺在處、比江村古國府也、村後山在日吉社、故爲名、天正年中、秦氏地撿帳題當村作衙府中村、中有廳蹟、古瓦小片出其田底、土人謂其田字、西有總社、近世遷于國分寺境內、村良有大礎石、受柱圓穴亘二尺五寸、深三寸、於其中間又構小穴、亘五寸、深三寸、此處亦瓦片出、皆非近代物、往年里人堀出得菊花全紋瓦云、

〔倭名類聚抄五國郡〕土佐國〇中略管七〇中略安藝　香美加々美　長岡奈加乎可、國府、土佐　吾川安加波　高岡太加乎加　幡多波太

ラレ、子內政立、元親黨定ヲ豐後ニ逐ヒ、內政ヲ大津(長岡郡)ニ徙シ、終ニ全州ヲ奪ヒ、兵ヲ出シテ隣州ヲ侵シ、阿波ヲ取ル、八年、內政ヲ伊豫ニ放チ、一條氏亡ブ、(五百二年一)元親尋テ伊豫讚岐ヲ併セ、自ラ四國ノ主ト稱ス、十三年、豐臣氏將ヲ遣テ南征シ、其三州ヲ削リ、元親ニ本州ヲ與フ、文祿中、徙テ浦戶(香川郡)ニ治ス、慶長四年元親卒シテ子盛親嗣グ、關原ノ役、西軍ニ屬ス、德川氏其封ヲ奪テ之ヲ山內一豐ニ賜ヒ、高知ニ治シ、世襲、明曆二年、一豐ノ孫忠豐其弟忠直ヲ中村ニ分封ス、(後ニ收豐明年封セラル)安永九年、忠豐ノ後六世豐雍同族豐產ニ新田壹萬三千石ヲ分ツ、王政革新、廢シテ高知縣ヲ置、

〔先代舊事本紀 十國造〕都佐國造

志賀高穴穗朝(御世)〇成務 御代、長阿比古同祖三島溝杭命九世孫小立足尼定賜國造、

波多國造

瑞籬朝(御世)〇崇神 御世、天韓襲命依神教云定賜國造、

〔續日本紀 十五聖武〕天平十五年六月丁酉、外從五位上引田朝臣虫麻呂爲土左守、

〔吾妻鏡 十二〕建久三年十月十五日甲寅、左女牛若宮領、土佐國香河郡、京都大番役之外、被停止公事、但件役者爲別當秀厳(惟光子廣元舍弟)沙汰可催勤者、以其旨下知守護人中務丞經高云云、行政盛時等奉行云云、

〔吾妻鏡 十六〕正治二年八月二日乙酉、佐々木中務丞經高爲御氣色、淡路阿波土佐以上三箇國守護職以下所帶等、被召放之、以其恩所被申京都也、是日來聊依罪科、雖被經沙汰、勳功異他之間、暫相宥之處、爲洛中警衞之士、令驚京都、背叡慮之條、罪及於寬宥之旨、再往被經沙汰如此云云、

〔土佐軍記 上〕土佐守護

土佐七郡と申は、幡多、高岡、吾川、土佐、香我美、長岡、安喜七郡也、是に御所壹人、守護七人有、

土佐國驛馬 頭驛、吾椅、舟川各五疋。

〔日本國郡沿革考 南海道二〕土佐　古作ニ土左或都佐、國造紀 中國、管七郡、千七十六村、天武十三年十月地震、土左國田苑五十餘萬頃、沒爲レ海。

安喜 百十村、延喜式等作ニ安喜ニ　香我美 百四十七村、延喜式等作ニ香美ニ　長岡 百四十七村 古府治　土佐 百三村　吾川 六十九村　高岡 二百二十村 承和八年八月、分ニ吾川郡八郷、四郷ニ建ニ高岡郡ニ　幡多 二百八十村 古波多國、見ニ國造紀ニ、延喜式等作ニ播多ニ

〔日本地誌提要 六十四 土佐〕沿革　古ヘ國府ヲ長岡郡ニ置ク、今比江村ノ南ニ府址アリ 文治ノ末、源頼朝、佐々木經高ヲ以テ守護トナシ、豐島朝經、三浦義村等相繼テ職ヲ襲グ、承久ノ亂、北條義時、土御門天皇ヲ香美郡 岸本村常樂寺ヲ以テ行宮トナス ニ遷シ、尋テ阿波ニ遷幸ス、建武中興、藤原兼光ヲ以テ州守ニ任ズ、足利尊氏ノ反スル、其將細川定禪ヲシテ本州ヲ侵掠セシメ、州豪長曾我部、安藝、吉良諸氏ヲ降シ、因テ細川氏ヲシテ本州ヲ管セシム、天授ノ末、足利義滿、細川賴益ヲ以テ守護トナシ、田村城 香美郡 ニ治ス、應仁ノ亂、賴益ノ曾孫勝益上京シテ其宗家ヲ援ク、是ニ於テ州內携貳シ、長曾我部、長岡郡岡豐 本山、同郡本山 安藝 安藝郡土居 山田、香美郡山田 吉良、吾川郡弘岡 大平、高岡郡蓮池 津野、同郡羽山 七族、各郡邑ニ據ル、文明十年、左大臣一條教房、其子房家ト共ニ亂ヲ避テ來奔ス、長曾我部文兼等七族相議シテ、房家ヲ奉ジテ主トナシ、奏請シテ國司ニ任ジ、幡多郡中村ニ治シ、七族俱ニ政ヲ輔ク、永正中、文兼ノ孫兼序頗ル專橫、本山茂光、大平元國等ニ殺サル、一條房家、兼序ノ遺孤國親ヲ撫シ、其長ズルニ及テ舊邑ヲ與ヘ、本山茂宗 茂光ノ子 等ト和セシム、天文八年、房家薨ジ、子房冬、孫房基、相繼テ早世シ、曾孫兼定嗣ギ、一條氏稍衰フ、國親等七族互ニ相鬩ギ、二十年、國親山田元義ヲ擊テ之ヲ下シ、本山茂宗亦吉良氏ヲ滅シ、土佐吾川二郡ヲ併セ、朝倉城 土佐郡 ニ徙ル、永祿三年、國親死シ、子元親嗣ギ、勢漸ク强盛、本山茂辰 茂宗ノ子 ヲ逐ヒ、大平氏ヲ滅シ、十二年、安藝國虎ヲ殺シ、尋テ津野勝興ヲ下シ、悉ク六郡ヲ併吞ス、時ニ一條兼定僅ニ幡多一郡ヲ保シ、遊宴ニ耽ル、天正元年、兼定其下ニ廢セ

官驛

十四丁五十間半　泊浦　二里一十二町四十八間半　小壹浦榊浦田土　一里三十三町三十八間　小壹浦、三十二度五十三分半、五十間半　同七日島濱（至湊浦、但潮一十九丁五十四間半）　一里一十七町二十七間半　湊浦　一里三十四町五十九間　宿毛村濱、（至宿毛村宿所、汎潮一十丁四十八間）　三十二度五十七分、一里一町五十六間半　同加波　一十九町四間半（至加波崎、八丁四十三間）　同西濱　三十二町一十四間　同藻津、三十二度五十六分、一里二十七町四間半（至國界、九丁五十二間半）　伊豫國宇和郡外海浦臨本浦西泊（○中略）

從土佐國高知街道歷笹ケ峯至川之江、

土佐國土佐郡高知稱崎町　三里一十三町三十三間（至山田橋、七丁九間）　長岡郡比江村　二里二十二町五十一間　穴内村　三里三町一十二間（至國見峠、一里一十丁五十四間）　本山村　二里一十八町一十二間　川口村　二里八間半　立川村千本　三里二十九町六間（至國界笹ケ峯、二里一十五丁四間中）　伊豫國宇摩郡馬立村

〔南海通紀　一〕四國路徑記（○中略）通考

夫土佐國安岐郡ノ天山南海ノ中ニ出ル事七里ニシテ、阿波國ノ墻屏ヲ成ス、其灘ヲ廻ル事、險阻迂遠ニシテ通達シ難シ、故ニ上古ヨリ豫州ヲ經テ上京シ、土州ノ徭役ヲ勤ム、今是ニ因テ是ヲ言上シ、許ヲ蒙リテ山路ヲ作ル、險難ノ山ヲ切拔テ十一里ヲ經テ阿州ヘ出ル、四十八坂又大坂ヤ八坂坂半トシテ艱難ノ道也、今ニ之ヲ往來ス、人家モ無キ山中十一里ヲ經テ、阿州境ノ甲ノ浦ニ出ル也、

〔續日本紀　八元正〕養老二年五月庚子、土左國言、公私使直指土左、而其道經伊與國、行程迂遠、山谷險難、但阿波國、境土相接、往還甚易、請就此國、以爲通路、許之、

〔日本後紀　十二桓武〕延暦二十四年四月甲辰、令土左國帶驛路郡加置傳馬五匹、以新開之路、山谷峻深也、

〔延喜式　二十八兵部〕諸國驛傳馬（○中略）

二十一間　浦ノ内村出見、三十三度二十七分半、　二里二十一町三十一間　奥浦東分村横浪（歷西分村至神田村一里六丁三十間）　三里二町三十七間　浦ノ内村須浦　五里一町五十八間　井ノ尻浦　門里二十三町九間半　野見浦久通浦　四里二十九町五十一間半　大谷村　三里二十一町四十二間半（至神田村二里一十七丁四十二間半）　須崎浦、三十三度二十四分半、　一里二十六町一十五間　安和浦田之浦　二里二町二十六間　久禮浦　二里二十三町四十五間　上加江浦　二里二十七町二間　志和浦　三十三度一十四分半、　三里二十一町三十四間（至冠岬一里三十三丁二十二間半）　興津浦、三十三度一十分半、（至小室濱徑測七丁四十七間半）　一里四丁四十七間半　同小室濱　二里四町四十七間半　幡多郡鈴浦　二里四町四十二間　佐賀浦、三十三度五分半、　三里四町二十二間（至楫岬一里三十丁二十六間）　上川口浦、三十三度三分、　二里六町三十五間　入野村田ノ浦村　二里一町一十一間　下田浦（至四萬十川口渕岬五丁一十五間）　一里一十二町二十七間（至四萬十川口二十五丁三十六間半）　名鹿村四萬十川口　一里三十四町一十七間　布浦狩津　一里二十二里一十七間半　下茅浦、三十二度五十二分半、（至下茅岬四丁八間）　二里二十三町五十間半　以布利浦（至清水浦清水谷徑測二十二丁二十二間）　三十三町三十四間半　窪津浦、三十二度四十八分、　二里一十一町二十六間半　松尾浦蹉跎山、三十二度四十四分、　一里二十七町二十四間半　同臼碆　一里三十五町五十九間　清水浦湊　三十五町二十五間　同清水谷　四町一十二間　同鹽濱（至越浦徑測五丁一十二間）　六町五十三間　清水浦、三十二度四十七分、　一里九町五十間　越浦　二里一十六町六間　三崎浦、三十二度四十八分、（至當麻濱徑測八丁三十九間）　一里三十二町三十七間半（至戸崎二十丁三間）　三崎浦當麻濱　一里四町二十七間　下川口浦、三十二度四十六分、　一里二十五町五十三間　大津浦、三十二度四十六分、　二里二十九町一十七間（至尾朴崎一里二十九丁二十五間半）　周防形浦　一里二十五町一十四間　古間目浦、三十二度四十七分半、　一里三十町　一切浦（至柏島一里五十四間）　六町四十六間　同鯛ヶ濱（至龍ノ濱二十五丁二十八間半）　一里二十町四十四間　天地浦　三里一十間（至橋浦一二二

地勢
地味

〔秦山集詩一〕柏島。
柏島見來古壘基、郊舟郁度碧瑠璃、漁家寺院一隅集、土國書頭半局碁、
〔鳥林本節用集下〕土佐、土州中、管七郡、東西二日、土肥五穀純熟良材多、中上國也、
〔日本地誌提要六十四土佐〕形勢　西北伊豫ト其脊ヲ合セ、山嶽疊沓シ、東西兩岬南海ニ斗出シテ稗月狀ヲナス、地勢南スルニ隨ヒ漸ク低ク、大抵山谷林叢三分ノ二ニ居ル、但中間墾壙、稼穡ニ宜シク、海濱漁業ヲ力ム、風俗木強ニシテ頑固ナリ、氣候極暑九拾六度、極寒四拾度、

道路

〔和漢三才圖會七十九土佐〕高知有土佐郡、艮至江戸二百三十六里、但出浦戸湊、内海二里、自此至大坂海上百里、自大坂至江戸陸百三十四里、又出甲浦湊、陸二十四里餘、自甲浦至大坂海上七十里、然則至江戸都合二百二十八里餘、西至佐川七里、坤至窪川十五里、中西至中村廿七里、至宿毛三十三里、丑方至本山八里、酉至伊豫宇和島五十三里、北至伊豫境三十里、關至松山三十八里、中、但海上百十二里、至備前岡山九十七里、至播州姫路九十一里、至阿州徳島陸四十八里、
〔日本實測錄五〕從阿波國岡崎沿海至宇和島○中略
土佐國安喜郡甲ノ浦、三十三度三十三分半、至白濱浦徑瀨五丁四十五間　二十町二十二間至虞人岬二丁四十八間半　白濱浦　三十四町四十間　生見村至松ヶ岬六丁三十六間　二十二町三十三間　野根浦、三十三度三十一分、三里一十六町三十三間　佐喜濱浦、三十三度二十四分半、　三里一十一町三十九間　津呂浦、三津浦、三十三度一十八分、　二里二十六町二十二間至室戸岬一里五丁四十六間　室津浦湊川口　三里一十三町四十五間　羽根浦、三十三度二十二分、　二里二十二町三十間　田野浦、三十三度二十六分半、三里一十六町四十四間　安喜浦、三十三度三十分半、　三里二十四町一十八間　香我美郡手結浦　一里一十二町　赤岡浦、三十三度三十三分、　一里一十六町三十二間　長岡郡濱改田村二里一十八町四十八間　種崎浦　二里二十八町四十一間　土佐郡下地村至高知城下町、一十四丁二十四間北極高三十三度三十四分、三　三里三町八間半　吾川郡浦戸至南浦戸種崎三丁四十四間　二十町・十七間　同南浦戸二里三町二十四間半　仁野村二淀川口　一里二十七町二十七間　高岡郡新島浦　二里三町

日島、周廻六町二十六間、市島周廻九町六間、片島、周廻三十一町四十二間、大島、周廻一里六町五十一間、丸島、周廻九町三十五間、池浦島、周廻三十一町四十二間、咸陽島、従南岬至北岬五町三十間、桐島、周廻一十四町三十間、大藤島、周廻一十七町四十一間、渡小島、従西岬至東岬二町三十間、

遠測　辨天島白濱浦　衣掛礁　小島入野村　辨天島田ノ浦村　立石　水島　鹿子礁　松礁西泊浦

大島大　大島小　菅島　高礁　松礁周防形浦　犂島　蒲葵島ビロウ　小島一切浦　松島　小島泊浦

雲雀小島　烏帽子礁

實測土佐國幡多郡伊豫國宇和郡沖島、周廻四里一十八町二十四間、幡多郡廣瀨浦、三十二度四十三分半、中岬徑測三丁六間

遠測　姫島　左ノ瀨　黑礁　二並島大　二並島小　裸島　水島

〔釋日本紀十述義〕土左國風土記曰、吾川郡玉島、或說曰、神功皇后巡國之時、御船泊之、皇后下島休息磯際、得一白石、團如鷄卵、皇后安于御掌、光明四出、皇后大喜、詔左右曰、是海神所賜白眞珠也、故爲島名、云云、

〔今昔物語二十六〕土佐國妹兄行住不知島語第十

今昔土佐國幡多郡ニ住ケル下衆有ケリ、己ガ住浦ニハ非デ、他ノ浦ニ田ヲ作ケルニ、己ガ住浦ニ種ヲ蒔テ、苗代ト云事ヲシテ可殖程ニ成ヌレバ、其苗ヲ船ニ引入テ殖人ナド雇具シテ、〇中略十四五歲許有男子、其ガ弟ニ十二三歲許有女子ト、二人ノ子ヲ船ニ守リ目ニ置テ、父母ハ殖女雇乘ントテ陸ニ登リケリ、〇中略然テ其船ヲバ遙ニ南ノ沖ニ有ケル島ニ吹付ケリ、〇中略大ナル島也ケレバ田多ク作リ弘ゲテ、其妹兄ガ產次ケタリケル孫ノ、島ニ餘ル許成テゾ于今有ナル、土佐ノ國ノ南ノ沖ニ妹兄ノ島トテ有トゾ人語リシ、〇下略

〔土佐幽考〕妹背島　出宇治拾遺物語、或曰幡多郡西南海中有島、蓋是也、島中有名廣瀨所、是恐訛稱妹背歟、今此島伊豫土佐兩國中分之、

〔日本經緯度實測〕北極

土佐　甲之浦　三三度三三分三〇秒　高知　三三度三四分〇〇秒

窪津浦　三二度四八分〇〇秒　藻津浦　三二度五六分〇〇秒

岬浦　三二度四八分〇〇秒　栖島　三二度四七分〇〇秒（中略）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（中略）　土佐　高知　西二度一二分〇〇秒

疆域

〔土佐州郡志〕土佐國

南海道四國之一、東北至阿州界、西北至豫州界、南西環海、州內陸路東西五十六里、南北十七里、海濱路東西八十七里半、舟路東西九十一里十六町、

〔日本地誌提要 六十四 土佐〕疆域　西北ハ伊豫、東北ハ阿波、南ハ海ニ至ル、東西凡三拾五里、南北凡壹拾八里、

島嶼

〔日本實測錄 十島嶼〕土佐國安藝郡　實測　蔦島、周廻八町四十間、赤葉島、周廻九町四十六間、遠測　二子島

長岡郡　遠測　玄武島

吾川郡　實測　續島、周廻七町二十二間　遠測　玉島　裸島　ノウ島　桂島

高岡郡　實測　中ノ島（從北岬至西一）八町、戸島（從北岬至西一）一十七町、遠測　小島（浦之內村）　辨天島（浦之內村）　辨天島（奥浦）　小松葉島　神島　雙兒島大　雙兒島小　本ノ島　辨天島（久禮浦）　松嶋　不嶋　大嶋　雀嶋　小島（大井賀村）　二岩

幡多郡　實測　柏島、周廻二十八町三十間、柏島三十二度四十七分、鹿島（佐賀浦）周廻六町三十五間、鹿島（清水浦）周廻四町七間、辨天島（三崎浦）周廻四町六間、辨天島（竜之浦）周廻二町三十間　七

狹、故、遠狹之意也、

〔古事記傳五〕土左國、和名抄、土佐郡土佐鄕あれば、其より出たる國名なるべし、此土左鄕に土左大神社あり、此神は葛木一言主神なるを、雄略天皇御世に、故ありて此國へ移され給へること、續紀廿五。又此國の風土記などに見ゆ、(中略)然其神自言離之神葛木之一言主之大神と名告たまへり、此御名に因て思に、土左は許上左久の略たる名にもやあらむ、とも思へど、國名彼御世より先にこそあらめ、

〔倭訓栞前編十八〕とさ　國名に呼は土左郡土佐鄕倭名抄に見え、そこに土左大神社ましますをもて成べし、

〔南路志闔國一〕土佐

土佐故事類聚曰、或書云、土佐蓋渡狹之刻也、谷眞潮云、今一宮ノ地往古土左トイヘルナルベシ、其土左トイヘル名ハ、戸狹ニテ、孕ノ狹戸ニサシムカヒタルニヨリテ呼シ名カ、

古事記傳蛭藏尋曰、土左の條此土佐といふ名は、土左郡土佐鄕より出たることはもとよりにて、また其根元は彼鄕に南海よりいと長くさし入たる入海の有り、東西はいとみじかゝて津に山々の走り出たる所などは、門間のいと狹ければ、門狹の意にて鄕の名にも負しなるべしと、眞潮翁の考へ給ひし、實にさることゝ也、

〔古事記上〕伊邪那岐命、〇中略妹伊邪那美命、〇中略御合、〇中略次生伊豫之二名島、此島者身一而有面四、每面有名、〇中略土左國謂建依別、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

土佐高知種崎町極高三十三度三十四分、經度西二度一十分半、二百五十九里二十二丁一十三間、〇從東京

土佐蹉跎山足摺岬極高三十二度四十四分、經度西二度三十四分、三百一十一里三十丁三十六間、〇從東京

名所

〔日本鹿子十三〕同國○伊豫中名所
伊與の高根　島山あり、風早などいふ所あり、
岩木島　ウキの浦　矢の神山　湯桁、當國島後と云所にあり、　溫湯あり、湯宮の社あり、
三島　越智郡のうち也、明神の御社有、無雙の景島也、

〔和爾雅一地理〕日本國名所
伊豫國　伊豫高嶺　射狹庭岡　伊豫湯　石城島同　箱潟　熟田津　風早同嶋　橘島　津尾崎
野間郡　宇和郡　矢野神山　飽田津　由流伎橋　三島江　島山　菅生山

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　伊豫國五十人○中略
諸國器仗○中略　伊豫國甲五領、橫刀十口、弓卅張、征箭卅具、胡籙卅具、

土佐國

名稱

土佐國ハ、トサノクニト云フ、南海道ニ在リ、西北ハ伊豫、東北ハ阿波ニ接シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ三十五里、南北凡ソ十八里、此國ハ古ヘ國府ヲ長岡郡ニ置キ、安藝、香美、長岡、土佐、吾川、高岡、幡多ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、明治維新ノ後、新ニ高知市ヲ設ケ、高知縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕土佐
〔新撰類聚往來下〕國名○中略　土佐土州
〔日本風土記一國名〕土佐
〔土佐國考國名〕土佐者俊聰也、當國人心俊速聰明之稱也、或云、土者遠也、佐者狹也、國形東西遠、南北

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、(中略)宅常擔集諸國土産、貯甚豐也、所謂、(中略)伊豫手箱、又砥、又鰯、又簾、

〔庭訓往來〕伊豫簾

〔毛吹草三〕伊豫

半夏　胡麻　豆腐薮　一本瀬米　松山素麪　島後酒　帶　大津紫草　宇和島鰯(イハシ)(疊鰯、黒漬、素等、)
綾布　盆山石同敷石(五色ニ有)　塗板　奉書　椙原　島曲鮑(イサキアハビ)　ムロ鯵　來島白藻　白峯鶴

人口

〔官中秘策五〕伊豫國　十四郡(中略)

一人數四拾九万九千八百六拾人
内弐拾六万五千八百三拾四人男
弐拾三万四千弐拾六人女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)(中略)

御料私領
一人數五拾弐万九千八百弐拾九人
高四拾四万弐千百六拾三石餘　伊豫國
内弐拾七万九千六百八拾七人男
弐拾五万百四拾弐人女(中略)

諸國人數調(弘化三丙午年)(中略)

御料私領
一人數五拾九万丸千九百四拾八人
高四拾六万九百九拾七石餘　伊豫國
内三拾壱万弐千八百四拾四人男
弐拾八万七千百四人女

風俗

〔人國記〕伊豫國

伊豫國之風俗、大形半分半分ニ分レ、東郡七八郡ハ氣質柔ニ而、實儀強キ形儀也、夫ヨリ、西郡ハ都而氣強ク實ハ少ク見ユル也、古ヨリ是國ニハ海賊滿々而、往來ノ舟ヲナヤマス由聞及ブニ不違、今モ猶徒黨ヲ立テ一身ヲ立ル族多シ、誠ニ關東之強盜是國之海賊同ジ業ニ而、武士之風俗一段手强シトイヘドモ、武士道吟味無之故、危キコトノミ多キ風俗ナリ、末代モ人之氣質ニ替リハ有間敷モノナリ、

國産貢獻

〔吹塵錄 五人口及國高〕天保度御國高調 略〇中

伊豫國 御料私領 一高四拾六万九百九拾七石六斗三升九台三勺四才。

〔延喜式 十五内藏〕諸國年料供進 略〇中 樽(中略)伊豫十五箇國各二合

〔延喜式 二十三民部〕年料舂米 略〇中 伊豫國 大炊一千四百石、嬬廿石、〇中略

年料租舂米 略〇中 伊豫國 二千斛〇中略

年料別貢雜物 略〇中 伊豫國 筆一百管、櫃一櫃二百枚、牛皮三張、猪紙麻一百斤、〇中略

諸國貢蘇番次 略〇中 伊豫國十二壺 四口各大一升、八口各小一升、〇中略 右十四箇國爲第六番 子午年〇中略

交易雜物 略〇中 伊豫國 鹿革五十枚、鹿皮二十張、紙一百八十張、大豆十八石、海藻根十斤、鄕乃利曾五十斤、苫五十枚、樽二十合、胡麻子五石、醬大豆廿二石、隔一年進醬大豆五石、

〔延喜式 二十四主計〕伊豫 略〇中 右廿五國中絲 略〇中

伊豫 略〇中 右廿九國綸絹 略〇中

伊豫國 行程上十六日、下八日、 海路十四日

調兩面五疋、九點羅二疋、二窠綾、三窠綾各六疋、小鸚鵡綾二疋、七窠綾八疋、薔薇綾四疋、緋帛卅五疋、縹帛十疋、皂帛五疋、白絹十疋、長鰒卅六斤、短鰒三百卅斤、自餘輸帛、絹、鹽、 庸、白木韓櫃廿八合、自餘輸米、 中男作物、黃蘗百五十斤、紙、胡麻油、砥、短鰒、鮨鰒、煮鹽年魚、貽貝鮨、鯖、海藻根、海藻、雜海菜、

〔延喜式 三十四木工〕諸國所進雜物 魚卅七斛二斗 略〇中 伊豫國廿三斛六斗

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥 略〇中

伊豫國卅二種 獨活十七斤、牛膝、白朮各六斤、桔梗十斤、伏苓五斤、漏蘆、杜仲各三斤、苦參十斤、人參九斤、木斛二斤、藁本二斤四兩、細辛、枯樓、大戟各二斤、芍藥八斤、石南草四斤、升麻、天門冬各七斤、續斷一斤十四兩、瓜蔕二兩、署預八升六合、麥門冬、車前子、蔓青子各三升、附子二斗、牡荊子二升、蛇床子五合、麻子三斗、桃人、胡麻子各一斗、支子二斗五合、蜀椒四升、

里

〔慶應元年武鑑〕松平左京大夫賴英大廣間從四位少將文久二戌十二月任　三万石　御在城伊豫新居郡西條江戸ヨリ二百五リ餘、内大坂マデ百三十三

藤堂ヨリ領後、富田信濃守、寬永十二、勢州長島ヨリ松平美作守定房、以後代々領レ之、

七十二里、リ餘、海上

一柳監物眞盛、同丹波守直重、同監物直興居レ之、寬文年中、松平左京大夫賴純、以後代々領レ之、

伊達若狹守宗孝柳間朝散大夫　三万石　在所伊豫宇和郡吉田海陸二百七十五里

慶長十九ヨリ伊達遠江守秀宗、同宮内少輔宗純、以後代々領レ之、

加藤泰令柳間從五位上元治元子五月叙　一万石　大洲内分在所豫州喜多郡新谷江戸ヨリ二百三十里

一柳兵部少輔賴紹柳間朝散大夫　一万石　在所伊豫周布郡小松江戸ヨリ二百九里十三丁

寬永十年ヨリ一柳氏代々領レ之、〇知系代々節略

出擧稲

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

伊豫國正稅公廨各卅万束、大學寮料一万束、國分寺料四万束、文殊會料二千束、鑄錢司俸料二万八千束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料二万束、

田數石高

〔倭名類聚抄國郡五〕伊豫國〇略　管十四(中略)正公各三十萬束、本穎八十二(二恐一誤)萬束、雜穎二十二(二恐一誤)萬束、

〔倭名類聚抄國郡五〕伊豫國〇略　管十四田萬三千五百一町四段六步

〔海東諸國記〕伊豫州　郡十四、水田一万五千五百七町四段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕三十三万六千二百石

伊豫

〔日本鹿子十三〕伊豫國十四郡、大中國、四方二日、知行高三十八万六百四十石、

〔官中秘策五〕伊豫國　十四郡〇中略

一石高四拾貳万九千百六拾三石餘

（當宮縁事抄）當宮領伊豫國神崎出作保役夫工米事、先停止神部譴責、入弘安配符、否可注申之由、被仰下造宮所了、可令存知給之由、權大納言殿御消息候也、恐々謹言、

嘉元四　七月廿五日

八幡撿校法印御房

（攝津親秀讓狀）讓與略○中

一親憲分　伊豫國矢野保内南方但入道除之

右所讓與也、但違總領之命者、可申賜當所之狀如件、

曆應四年八月七日　掃部頭親秀

（南海通紀十七）羽柴内府公四國配分記

伊豫國　小早川左衞門佐隆景ニ賜三十五萬石　内二萬三千石安國寺恵瓊ニ賜　三千石德居加增ニ賜　一萬四千石久留島加增ニ賜

（慶應元年武鑑）松平隱岐守勝成溜間 從四位上少將元治元年四月任略○中　拾五万石　御在城伊豫溫泉郡松山江戸ヨリ海陸二百十八里五丁

城主加藤左馬介嘉明、奥州會津ニ替ル、寛永四、松平中務少輔忠知、同十二ヨリ松平隱岐守定行、以後代々領之、

（慶應元年武鑑）伊達遠江守宗德大廣間 從四位侍從安政五年十二月任　拾万石　居城伊豫宇和郡宇和島江戸ヨリ海陸二百七十八里

天正年中、戸田民部少輔居城、藤堂和泉守高虎、慶長十三、富田信濃守、同十九ヨリ伊達遠江守秀宗、同遠江守宗利、明暦三、宮内少輔宗純ニ二万石配分、元祿九、三万石新田改正、都合再拾万石、以後代々領之、

加藤遠江守帝鑑間 朝散大夫　六万石　居城伊豫喜多郡大洲江戸ヨリ二百三十一里

天正年中、宇津宮遠江守、同十三、戸田民部少輔、後藤堂和泉守高虎領、慶長十三、脇坂中務大輔安治、同淡路守安元、元和三、加藤左近大夫貞泰、以後代々領之、略○

（慶應元年武鑑）松平壹岐守勝吉帝鑑間 朝散大夫略○中　三万五千石　居城伊豫越智郡今治江戸ヨリ海陸二百七

〔集古文書二十五〕六波羅召符 伊豫國越智郡三島社藏

伊豫國三島大祝安俊代安衡申、鴨部庄住人祐賢濫妨日御料田等由事、重申狀如此、來月廿日以前、可催上狀如件、

正安二年三月十八日　右近將監 判

前上野介 判

地頭代

〔實簡集八〕注進　嘉禎御檢注目錄定

一請處在所

一所　伊與國ニイノ庄 綠江云々 ○中略

右大概注進如斯

正安二年六月廿九日　道空 花押

〔東寺百合古文書三〕東寺領伊與國弓削島庄田畠山林鹽濱以下所務條々下地等相分事、雜掌與地頭代被和與狀如此、子細見于狀候歟、急速可有申御沙汰候哉、恐々謹言、

正月二十日 ○乾元二年　法印祐遍

進上　陸田左馬助殿

〔後宇多院御領目錄〕廳分 ○中略 伊豫國新居大島　高田庄 ○中略 一安樂壽院領 ○中略 伊與國吉岡庄 ○中略

右所々可有御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年 ○德治元年 六月十二日　右衛門

高倉前宰相殿

より船にて城下に輸す、尤便利なり、是によりて人家繁榮して頗盛なり、殊に近世蠟、紙等の產物多く諸國に運漕する事、みな此海濱によれり、

〔愛媛面影〕五宇和郡吉田。。

萬治元年宇和、島城主伊達侍從秀宗朝臣三男宮內少輔伊達宗純朝臣に、吉田三萬石を分知し給へり、同二年正月十一日より普請をはじめ、同三年、家中造營成就せり、それより代々相續し給へり、外廓に河水を湛へて、おのづから城郭の勢を成せり、〇中略

宇。和。島。城

城山海岸に臨て、遠くより望めば風景殊にめでたし、山はさしも高からねども、西面に海上島々をめぐらして、おのづから要害の勢をなせり、慶長十九年、仙臺中納言伊達政宗卿男伊達侍從秀宗朝臣、新に拾萬石を賜はりて、此城に移らせ給ひしより此かた、連綿として相續したまへり、

〔賀茂注進雜記〕下神領同（壽永）三年（〇元暦元年）四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ケ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

伊豫國　菊。萬。庄。　佐。方。保。〇中略

壽永三年四月廿四日　　正四位下源朝臣御判

〔古文書類纂〕上處分狀後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事〇中略、

一寺院〇中略　院領〇中略　伊豫國吉。原。庄。〇中略

一家地文書庄園事〇中略　前攝政〇中略　新御領〇中略　伊豫國吉原庄（右衞門督入道民部卿寄進、御年貢五十石、）〇中略

建長二年十一月日　凪老（在判）

曰、正德ノ比、松山城下町數七十一町、家數千七百三十六軒有、內古町三十町ハ古來ヨリ年貢免許、外輪二十三町、水呑十八町ハ年貢地ナリ、

山之名ヲ改　老武○武恐譜誤曰、加藤嘉明勝山ニ城ヲ築、松山ノ城ト改シ事、是全ク八幡ヘノ恐ノ爲ニ非ズ、東照大權現天下ヲ治給フ節也、神君ノ御氏松平ト稱ス、依之松ヲ祝テ其比諸城ノ名ヲ改ム、奧州會津城ヲ若松ト改、信州川中島城ヲ松代ト改ム、松山モ亦此心也、

〔愛媛面影伊豫郡四〕郡中(ぐんちう)

米湊(こみなと)村と吾川(あかは)村との間に在る市町是なり、此所は山中より出る所の產物伊豫砥をはじめ、砥部の陶器、其外材木、綿、砂糖等、すべて此郡中に出して、それより船馬等にて諸國に運輸せり、因て旅客の往來常にたえず、商家も又日々繁榮して、人烟ますます盛なりと云、

〔愛媛面影喜多郡四〕新谷(にひや)

元和三年、加藤左近大夫貞泰朝臣、大洲六万石を賜はる、其後次男織部正直泰朝臣、新谷一萬石を分知すと俚諺集に見たり、其後代々相續し給へり、南に川あり、北に高山有て、海岸を隔る事二里許、自然要害の地なり、近世蠟紙等の產物多くして頗盛なり、殊に此邊田野開けて、喜多郡中尤豐饒の地なり、○中略

大洲城(おほずのしろ)

舊名大津にて、天正の頃迄、宇都宮遠江守居城なりしを、後に大洲と改めたり、元和三年より加藤侯代々是を領し給へり、前には比志川の流を引て、城郭の遠望殊にめでたし、大津大洲みな比志川によれる名なるべし、○中略

長濱(ながはま)

大洲城四里ばかり海濱なり、比志川の流此處に出て海に入、米穀の出入、魚鹽の運送、すべて此所

寛文年中、紀伊大納言宣賴卿の次男、松平左京大夫賴純少將、西條を賜はりて居城とせさせ玉ひしより、聯綿として繁昌の一在所となれり、

〔愛媛面影一周敷郡〕小松

領主一柳侯の居館、山に依り川を前にして、要害の一城郭なり、

河野家傳記ニ云、神戸城主一柳直盛死期ノ願ニ依テ、三男農人直賴ニ小松一萬石ヲ賜フと、夫より以來連綿として相續し給へり、越智姓にて千年以來祖先の舊領、伊豫に居住し玉へるは、めでたき限なるべし、

〔愛媛面影二越智郡〕○○今治城

慶長年中、藤堂侯國府城を移して、鎭玉へる所にして我實相院殿美作守侍從定房公、勢州長島より此城に移りたまひしより以來、しかも異姓を交へず、二百有餘年連綿として相續し玉へり、今治昔は入海にて、馬越村の邊まで潮汐來往せしを、あらたに築留たるによりて、今治と名くと云、古は今張と書しを、後に今治と改む、治は墾の義なり、山海ともに便利を得、舟車朝夕に輻湊して最繁榮の地なり、○下略

〔愛媛面影三温泉郡〕○○松山城

此山平田曠野の中間に特立して、海岸を隔る事二里許、南方に石手川の流あり、○中略舊は勝山といひしを、後に松山と更たりと云、○中略近世人家ますく繁榮して、此國第一の都會となりぬ、

〔八幡八社略說〕松山之城　傳曰、加藤嘉明○中略同○慶長七年正月十五日ヨリ温泉郡勝山ヲ轉ジ、城ヲ築ク、家中地割定テ後、同六月朔日ヨリ商家ノ地割有、四角四屋ト云事有タ、職屋町松屋町ヲ地割ノ始トス、次紺屋町竹屋町ヲ割、夫ヨリ段々地割定テ三十町也、内二十町ハ嘉明自身之縄張也、十町ハ家長個十歳是ヲ割シト云、寛永十二年、前大君勢州桑名ノ城ヨリ當城ニ移リ給フ、○中略本

〔郡國提要〕伊豫　十四郡、九百五十五村
御領私領 高四十六万九百九十七石六斗三升九合三勺四才
宇摩郡五十一村　新居郡五十二村　周布郡三十六村　桑村郡二十七村　越智郡九十二村
野間郡三十村　風早郡八十四村　和氣郡二十二村　温泉郡三十五村　久米郡三十一村
伊豫郡三十四村　浮穴郡九十九村　喜多郡八十三村　宇和郡二百七十九村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名
伊豫　宇和郡、蓏淵浦、久良浦、深泥浦、平城村、搨木村、魚神山嶋、鼬定村、浦知浦、鼠鳴浦、弓立浦、泥目木浦、田下浦、明越浦、大内浦、夏秋浦、結出浦、石應浦、坂下津浦、來浦、南君浦、渡江浦、安土浦、垣生浦、二及浦、馬目網代、夢永浦、破崎浦、卯來島、當木島、契島、遠渡島、御五神島、太良岬、水作島、喜多郡、出海村、櫛生村、上老松村、八多喜村、春村、今坊村、浮名郡、高川村、伊豫郡、米湊、吾川、和氣郡、興居島、風早郡、苞木村、鹿峯村、畑里村、野忽那島、二神島、油利島、怒和島、温泉郡、味酒村、野間郡、波止濱、弓杖島、來島、細島、越智郡、鳥生村、大三島、伯方島、大下島、生名島、部内島、新居郡、御代島、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月壬午、故老相傳、伊豫國神野郡、昔有高僧名灼然、稱爲聖人、○中略 先是郡下橘里。有孤獨姥、號橘媼、○下略

〔三代實錄 十四 清和〕貞觀九年十一月十日乙巳、下知攝津、和泉、山陽、南海道等諸國曰、如聞、近來伊豫國宮崎村、海賊群居、掠奪尤切、公私海行、爲之隔絶、○下略

〔豫章記〕新居ノ一黨モ八ヶ村有、所謂周敷、越智、今井、松本、難波江、德永、高部、新居八ヶ村也、

〔長門本平家物語 四〕丹波少將は備中のくに妹尾の湊ゆく井といふ所なり、御船に召して、波路はるかにこぎうかぶ、是は伊豫の國夏地につきてめぐられける、

〔愛媛面影 一 新居郡〕西條

右件御造營之段米、加院宣國宣、關東御敎書、幷六波羅殿御施行者、爲一國平均役云云、庄課云云、別納應分被支配、不致各意徑、備可奉偏之狀如件、

應長二年三月日

三島大祝三位越知花押

總大判官代散位紀朝臣花押

目代花押

（集古文書四十二寄附狀）總貫幸長寄進狀伊豫國越智郡三島社藏

奉寄進三島大明神御餝下地事　合壹段者高○橋○郷○地頭高内石田里寄六年

右意趣者、爲天下泰平、國土豐饒、別者心中所願成就也、仍爲後代龜鏡、寄進候狀如件、

建武二年十月廿三日

地頭藤原幸長奉押

三島大祝殿

（集古文書四十三寄附狀）文和二年寄進狀伊豫國越智郡三島社藏

奉寄進伊豫國三島大明神御神領田同國友國名内和介本郡内五段、幷志○○鄕○内五段等田地事、

右爲天長地久、國土安穩、所願成就、所奉寄附之狀如件、

文和二年卯月十五日

源朝臣義術書判

村里名邑

（郡名一覽）一伊豫國御料私領　豫州　四方二日　拾四郡

高四拾四万貳千百六拾三石五斗五升六合五勺三才　九百五拾九ヶ村

●松山　二百十八里半　●宇和島　二百七十八里　●大洲　二百五十一里

●今治　二百七里　●西條　二百五里　○小松　二百九里十九町

○吉田　二百七十三里　○新谷　二百三十里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

六月廿三日　通昭（花押）

謹上　大祝殿

（集古文書二十七下知狀）正安三年下知狀（伊豫國越智郡三島社藏）

伊豫國御家人三島大祝安俊代子息安胤、與同國恒弘東方地頭代重明、相論貞光名田地貳段事、
右番訴陳之處、如今年十月十五日和與狀者、壇生郷內三宅里卅四坪貳段、恒弘名東方地頭代重明
令押領之由就訴申、雖番訴陳、於彼坪貳段者、本自不押領之上、向後不可相綺之由、出狀之上者、兩方
以和與之儀令沙汰事口此上者不及子細之狀如件、

三年十一月七日　左馬助平朝臣（花押○北條基時）
陸奥守平朝臣（花押○北條宣時）

（大山積神社文書）

島山郷七石六斗五合　新居延吉弁正枝十石二斗八升三合　井出郷十二石八斗七升一合　周
敷北條二十二石八升　吉田郷九石四斗五升一合七勺　田乃郷九石四斗八升五合（加ニ別名井新名ー定）
池田郷十三石七斗一升五合　古田郷二十一石九斗六升六合　桑村本郷二十一石六斗六合（加ニ恒
文五十九反三百分）　櫻井郷九石二斗七升一合七勺（加ニ新名ー定）　拜志郷十一石五斗一升四合九勺　朝倉郷十
一石六斗五合　高市郷十七石三斗三升五合（加ニ有恒二丁中井新名ー定）　新屋郷五石二斗五升八合四勺　越
智本郷十九石九斗五升一合七勺　越智立花郷十二石六斗五升八合四勺（加ニ有恒四反大ー定加ニ來町島押領五反中ー定）
日吉郷十三石八斗五升六合七勺　英多郷十三石四斗八升六合七勺（加ニ有恒五反小ー定）　宅万郷九石
九斗六升一合七勺　高橋郷四石一斗六合六勺　同別名六石三斗五升六合七勺　大井郷八石
一斗八升三合四勺　那賀郷十七石一斗三升六合四勺（加ニ狐和島井新名ー定）　風早本郷二十八石四斗六升
八勺（加ニ新名ー定）　河刀郷六石三斗六升一合七勺

右任先例、以友國名内立花郷、不可引募之狀如件、

貞和四年十二月九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　越田所紀朝臣書判

〔當宮緣事抄左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論、企掠

領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　伊豫國　石城島〇中略　味酒郷〇中略

保元三年十二月三日　　　　　　　　　　　　　　　大史小槻宿禰在判〇下略

〔東寺百合古文書八十二〕奉寄附　東寺

伊豫國温泉郡味酒郷内上方地頭職事

右任已父民部大輔通元寄進狀之旨、爲天下安全、武運長久、國土靜謐之祈禱、奉寄附于當寺之狀如

件、

應仁二年五月十八日　　　　　　　　　　　　　　伊豫守通春花押

〔伊豫國田所注進田文〕郷々新田三十壹町二反六十步

字萬西條　四町貳反九十步　北條郷　壹町五反半〇中略　井上郷　壹町五反二十步

田乃郷　壹反　池田郷　二反〇中略

右注進如件、

建長七年十月日　　　　　　　　　　　　　　田所季光紀

〔豫古文書六十六〕重見通昭書伊豫國越智郡三島社藏

此間不申入候、義意之至候、仍三島大明神江屋形より、道前池田郷之内、恒久名新新進候、此内一町

は通昭分にて新進候、猶御神前精誠御祈念奉賴候、委細者長慶寺申候、恐惶謹言、

越智郡　朝倉(安佐久良)　高市(多希知)　櫻井(佐久良井)　新屋(爾比也)　拜志(波也之)　給理(○高山寺本註云古保利)　高橋(多加波之)　鴨部(○高山寺本註云

加毛倍)　日吉(比與之)　立花(多知花)

濃滿郡　宅方(○高山寺本方作萬、註云多久間)　英多(○高山寺本註云阿加多)　大井　貴多(○高山寺本註云歟賀多)　神戶

風早郡　粟井(安波井)　河野(加波乃)　高田(多加多)　難波　那賀

和氣郡　高尾(多加乎)　吉原(與之波良)　姬原(比女波良)　大内(於乎宇知)

温泉郡　桑原(久波良)　埴生　立花　井上(井乃倍)　味酒(萬左介○高山寺本萬上有无字)

久米郡　天山(○高山寺本註云安末也末)　吉井(○高山寺本註云與之爲)　石井　神戶　餘戶

浮穴郡　井門(○高山寺本註云爲度)　拜志　荏原(○高山寺本註云衣波良)　出部(○高山寺本註云伊豆倍)

伊豫郡　神前(加牟左岐)　吾川(和加波○高山寺本和作阿)　石田(伊之多)　岡田(乎加多)　神戶　餘戶

喜多郡　矢野(也乃)　久米　新屋(爾比也)

宇和郡　石野(伊波乃)　石城(伊波岐)　三間(美萬)　立間(多知萬)

〔豫章記〕河野系圖

孝靈天皇————伊豫皇子

豫州伊豫郡仁宮作天住御須、有神靈、則雲宮大神是也、故以此所神崎乃鄕土名久、

〔東大寺要錄　六〕造寺司　牒三綱所

合奉宛封一千戶(○中略)　伊豫國壹百戶(風早郡粟井鄕五十戶、温泉郡橘樹鄕五十戶、○中略)

以前寺家雜用料、永配封、當年所輸之物爲始、奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日(○署名略)

〔集古文書　十五　判物〕貞和四年判物(伊豫國越智郡三島社藏)

可早令引募三島宮封戶田一畑事　越智貞實所

郷

右得伊豫國解偁、彼郡解偁、桑村久米兩郡管郷各三、課丁或七百廿五、或七百二、皆有大少領、今此郡郷數既同、課丁三千二百八、徭貢調庸多倍彼郡、而只有領一人主帳一人、辨濟雜務、動致稽怠、望請因循彼例、置大少領者、國司覆審所申有實、望請官裁、准彼兩郡、新置少領、爲大少員者、右大臣宣、奉勅依請、

元慶八年十月十七日

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年二月廿二日己酉、伊豫國宇。和。郡。事、止薩摩守公業法師領掌、所被付于常磐井入道太政大臣〈○西園寺實氏〉家之領也、是年來被禪閤鍾愛、被望申之、公業先祖代々知行、就中遠江丞遠保、承勅定討取當國賊、是純友以來居住當郡、令相傳子孫年久、無咎而不可被召放之由、頻以愁歎、御沙汰難顧是非、無左右爲不被仰切之處、去比禪閤御書狀重參着、此所望不事行候、失老後眉目、於今者態令下向、可被申所存之趣被載之、御下向之條、還依可爲事煩、可有御管領之旨、今日被仰遣于彼家、可被陸奧入道理之許云云、

〔南海通紀十六〕豫州宇和郡記

豫州宇和郡ハ西園寺家ニ領掌シ給フ事年久シ、〈○下略〉

〔南海通紀十六〕土佐幡多西伊豫攻合記

宇和喜多ノ二郡ハ、土佐境ナル故ニ、幡多郡ヨリ取カタベキト聞ヘケレバ、豫州ニモ其備ヲ設ケ相保ツ、互ニ其隙ヲ窺フ、〈○中略〉宇和喜多ノ者ドモハ山國ナレバ、狩獵ニ習テ鐵炮上手也、〈○下略〉

〔倭名類聚抄九伊豫國〕宇摩郡　山田　山口〈也末久知〉　津根〈都禰〉　御井〈美井〉　餘戶

新居郡　新居　丹上〈○高山寺本丹作舟、注爲乃倍、〉　島山　花本〈○高山寺本作立花、〉　賀茂　神戶

周敷郡　田野〈○高山寺本注多乃、〉　池田　井出　吉田〈○高山寺本注與之多、〉　石井〈○高山寺本注以之井、〉　神戶　餘戶

桑村郡　籠田〈○高山寺本注古多、〉　御井〈○高山寺本注三井、〉　津宮〈○高山寺本注津乃美也、〉

伊豫郡

〔釋日本紀〕〔七述義〕伊豫國風土記曰、伊豫郡自郡家以東北在天山、所名天山由者、倭在天加具山、自天天降時、二分而以片端者、天降於倭國、以片端者、天降於此土、因謂天山本也、

〔豫章記〕河野系圖

孝靈天皇――伊豫皇子

豫州伊豫郡〔仁〕宮作〔赤天〕住御〔坐〕、有神靈、則靈宮大神是也、

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口〔中略〕屋壹拾壹口〔中略〕

伊豫國拾肆處〔中略〕伊余郡四處〔中略〕

天平十九年二月十一日〔署名略〕

喜多郡　宇和郡

〔延喜式〕〔二十二民部〕凡諸國貢調庸者、〔中略〕伊豫國限二月、但宇。和。喜。多。兩郡限三月、〔中略〕

凡未進調庸物、〔中略〕伊豫國宇和喜多兩郡、明年六月卅日、〔中略〕以前進訖、

〔日本書紀〕〔三十持統〕五年七月壬申、天皇幸吉野宮、是日伊豫國司田中朝臣法麻呂等、獻宇。和。郡。御馬山白銀三斤八兩、鉀一籠、〔下略〕

〔三代實錄〕〔十三淸和〕貞觀八年十一月八日己酉、割伊豫國宇和郡、爲宇。和。喜。多。兩郡、

〔類聚三代格〕〔七〕太政官符

應宇。和。郡。爲下郡、置大少領事

右得伊豫國解偁、件郡元三鄕、今戶口增益、新加一鄕、而有領一員、郡務難濟、望請依令爲下郡、置大少領、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十六年閏四月十九日〔中略〕

太政官符

應置喜。多。郡。少領事

和氣郡

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口（〇中略）

伊豫國拾肆處（中略）二處（〇和氣郡中略）

天平十九年二月十一日（〇署名略）

〔日本靈異記上〕憶持法花經得現報示奇異表緣第十八

昔大和國葛木上郡有一持經人（〇中略）于時夢見有人曰、汝昔先身生在伊豫國別郡早部猴之子、時汝奉讀法花經、而燈燒一文、故不得讀、今往見之、

溫泉郡

〔釋日本紀十四述義〕伊豫國風土記曰、湯郡、大穴持命見悔恥、而宿奈毗古那命欲活、而大分速見湯自下樋持度來、以宿奈毗古奈命而浴漬者、暫間有活起居、然詠曰、眞暫寢哉、踐健跡處、今在湯中石上也、凡湯之貴奇、不神世時耳、於今世染疹痾萬生、爲除病存身要藥也、天皇等於湯幸行降坐五度也、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年四月壬寅、伊豫國溫泉郡人正八位上味酒部稻依等三人賜姓平群

味酒臣、

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口（〇中略）

伊豫國拾肆處（中略）三處（〇溫泉郡中略）

天平十九年二月十一日（〇署名略）

久米郡

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年四月甲辰、伊豫國神野郡伊曾乃神、越智郡大山積神並授從四位下、充神戸各五烟、久米郡伊豫神、野間郡野間神並授從五位下、神戸各二烟、

浮穴郡

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口（〇中略）

伊豫國拾肆處（中略）一處（〇浮穴郡中略）

天平十九年二月十一日（〇署名略）

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十月廿三日甲午、伊豫國浮穴郡擬少領一員、

中納言兼民部卿藤原朝臣多緒宜、奏、勅依請、

元慶五年十月九日

越智郡

〔釋日本紀六述義〕伊豫國風土記曰、乎知郡、御島坐神御名大山積神、一名和多志大神也、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年七月甲申、伊豫國越智郡人越智直靜養女、以私物資養窮弊百姓一百五十八人、〇下略

〔吾妻鏡十五〕建久六年十一月廿五日丙午、伊豫國越智郡被停止地頭職、是殿下〇藤原兼實依可令領掌給也、

野間郡

〔釋日本紀八述義〕伊豫國風土記曰、野間郡熊野峯、所名熊野由者、昔時熊野止云船設此、至今石成在、因謂熊野本也、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕太政官符　伊豫國司

濃滿郡大領正六位上中原朝臣弘忠

右去年十二月廿八日補任如件、國宜承知依例任用、符到奉行、

修理左宮城判官正五位下行主計頭兼左大史算博士備後介小槻宿禰

康和二年二月廿六日

風早郡

〔日本書紀三十持統〕十年四月戊戌、以追大貳授伊豫國風速郡物部藥與肥後國皮石郡壬生諸石、〇下略

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口〇中略

伊豫國拾肆處(中略)風速郡二處〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔文德實錄十〕天安二年八月戊戌、内供奉十禪師傳灯大法師位光定卒、光定俗姓贄氏、伊豫國風早郡人也、

周敷郡

桑村郡

伊豫國拾肆處（〇神野郡一、中略）

天平十九年二月十一日（〇署名略）

〔日本靈異記　下〕智行並具禪師重得人身生國皇之子緣第卅九

伊與國神野郡鄉内有山、名號石鎚山、是卽彼山有石鎚神之名也、

〔續日本紀　二十淳仁〕天平寶字二年三月壬午、伊豫國神野郡人少初位上賀茂直馬主等、賜賀茂伊豫朝臣姓、

〔日本紀略　嵯峨〕大同四年九月乙巳、改伊豫國神野郡爲新居郡、以觸上諱（〇神野）也、

〔類聚三代格　七〕太政官符

應置新居郡主政事

右得伊豫國解偁、彼郡解偁、此郡鄉戶甚少、郡内曠遠、出擧收納、往還多劇、而郡司員少、勤致闕怠、望請始置主政之職者、國司覆審、所申有實、望請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁和二年十月廿三日

〔東大寺要錄　六〕一諸國諸庄田地（長德四年注文、〇中略）

伊豫國　新居郡庄田地九十六町六段百步

水田三町六段百步　陸地九十三町（〇下略）

〔續日本紀　二十五淳仁〕天平寶字八年七月己酉、伊與國周敷郡人多治比連眞國等十人、賜姓周敷連、

〔類聚三代格　七〕太政官符

應置久米郡大少領事

右得伊豫國解偁、彼郡司解偁、撿案内、桑村久米兩郡管鄉各三、人數共同、輸貢之物亦無增減、而桑村郡有大少領、至于此郡只有領職、望請准彼郡、置大少領者、國司覆審、所申有實、望請官裁者、正三位行

宇摩郡

神野郡 新居郡

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年十月癸巳、伊豫國宇摩郡人凡直繼人獻錢百万、紵布一百端、竹笠一百蓋、稻二万束、授外從六位下、○下略

〔河野文書〕壬位馬兩郡事、任先規旨可被全領知由、被對牛福丸殿被成御内書候、尤珍重存候、猶巨細之段、原右近大夫可申候、恐々不備、

十一月廿六日　宣超判

平岡大和守殿

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口○中略

宇和				喜多	
宇和				喜多	
宇和（ウワ）				喜多（キタ）	管十四
同				同	同
同				同	十四郡
同				喜多　喜田	
同（ウワ）				喜多（キタ）	同
同				同	同
同				同	同
同（ウワ）				同（キタ）	同
西宇和	東宇和	北宇和	南宇和	同	十八郡

桑村	越智	野間	風早	和氣	温泉	久米	伊豫	浮穴
			風速	別				
	小市	怒麻	同	同	湯	久味		
桑村クハムラ	越智ヲチ	野間ノマ	風早カサハヤ	和氣ワケ	温泉ユ	久米クメ	伊豫	浮穴ウキアナ
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	伊與	浮名
同	越智 越知	同	同	同	同	同	伊豫	浮名 浮穴
同クハムラ	越智ヲチ	同ノマ	同カサハヤ	同ワケ	同ウンセン	同クメ	同イヨ	浮名ウキナ
同	同	同	同	同	同	同	同	浮穴
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同クハムラ	同ヲチ	同ノマ	同カサハヤ	同ワケ	同ユ	同クメ	同イヨ	同ウキアナ
同	同	同	同	同	同	同	同	上浮穴 下浮穴

〔延喜式民部二十二〕伊豫國、上、管　宇摩　新居　周敷　桑村　越智　野間　風早　和氣　温泉　久米　浮穴　伊豫　喜多　宇和　○中　右爲遠國、

〔皇國郡名志〕伊豫國十四郡

宇摩　●長洲　●三キ　土阿讃界ヨリ東、海ニ向
周敷　小松　右ニ同
越智　今治　△新田義助墓　國中ヨリ東海ニ向
風早　●北條　小郡
温泉　松山　△道後ノ湯　小郡
浮穴　●[illegible]町　土界小郡
喜多　大洲　●長濱　△新谷　内子　宇和ト浮穴ノ間ニ有郡
新居　西條　△大山祇社　●三島　●大町　土界ヨリ東海ニ向
桑村　驛町無シ　小郡
野間　宮崎八十五六ヶ村隈リ今治ニ並小郡
和氣　●三津　小郡
久米　驛町無シ　國中小郡
伊豫　●小川、●イヨノ富士山　小シマ也　西北ノ海向小郡
宇和　、宇和島　△吉田　●城下町　土界西南海ニ向

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕伊豫

六國史古書	宇摩	神野	
延喜式	宇摩	新居	周敷
倭名抄	宇摩	同	同
拾芥抄	宇麻	同	同
諸書	宇麻　宇摩	同	周敷　周布
郡名考	宇摩	同	周布
天保郷帳	同	同	同
明治沿革帳	同	同	同
地誌提要	同	同	同
郡區編制	同	同	同

國府

郡

〔日本書紀三十持統〕三年八月辛丑、詔伊豫總領田中朝臣法麻呂等曰、讃吉國御城郡所獲白燕、宜放養焉、
五年七月壬申、是日伊豫國司田中朝臣法麻呂等、獻宇和郡御馬山白銀三斤八兩、鉚一籠、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年四月六日甲辰、伊豫國御家人河野四郎通信、自故幕下將軍(賴朝)御時以降、殊抽奉公忠節、間、不相從當國守護人佐々木三郎兵衛尉盛綱法師、奉行別可致勤厚、幷又如舊可相從國中近親幷郎從之由、給御教書、平民部丞盛時奉行之、○下略

〔南海通紀七〕四國幷近國錯亂記
伊豫國河野ハ世々越智ノ大領タリ、猶諸郡ノ大領ヲ兼テ賜ルコトモアリ、或ハ伊豫權介ヲ賜フ事モアリ、源賴義伊豫守タリシ時、源家ノ類族ト成テ其寵厚シ、此故ニ賴朝卿興起ノ時、源家ニ忠アリ、庄園數ケ所ヲ賜テ家門繁昌ス、大永享祿ノ間ニ河野四郎通直、我家ヲ厚シテ國中ヲ合ントス、豫州ハ舊邦ニテ故家舊姓猶多シ、皆河野ガ氏族ニ列ス、然ドモ大義不成シテ止ヌ、豫州宇和郡ハ上代藤原純友ノ伊豫ノ掾ニ在テ亂ヲナス時、遠江掾遠保勅定ヲ承テ、伊豫國ニ下リ、當國ノ凶賊ヲ討テ軍忠アリ、宇和郡ヲ賜テ當郡ニ居住シ、子孫相傳テ鎌倉將軍家ニ至マデ相續、北條泰時ノ執事タルニ至テ、常盤井ノ入道太政大臣強テ所望アルニ依テ彼地ヲ召放サレ、關白ノ家ニ附遣セラル、嘉禎二年丙申二月廿二日也、此後世々公家領タリ、應仁亂ノ後、細川管領家ノ執達ニ依テ、西園寺殿ヲ以テ當國ノ總兵官トス、是ヲ板島ノ屋形ト云也、河野、宇都宮、西園寺、三人ノ旗頭也、

〔倭名類聚抄五國郡〕伊豫國(國府在越智郡、行程上十六日、下八日、)

〔愛媛面影二越智郡〕國分山城址　國府城是なり、興國年中、脇屋刑部卿四國の大將にて當城に入給へり、○中略四方石垣今猶存して、古瓦夥し、

〔倭名類聚抄五國郡〕伊豫國○中略管十四○中略宇摩(仁井)新居(爾比)周敷(主布)桑村(久波)越智(乎知)野間(乃萬、今作二能萬一)風早(加佐波夜)和氣(和介)溫泉(湯)久米　浮穴(宇城安奈)伊豫　喜多(木多)宇和

ヒ、藤堂高虎代テ板島ニ封ゼラレ、七萬石、慶長五年、德川氏祐忠ノ封ヲ奪ヒ、之ヲ高虎ニ加賜シ、共貳拾萬石、徙テ今治ニ治ス、又加藤嘉明ノ邑ヲ增シ、貳拾萬石、徙テ松山ニ治ス、十三年、高虎ヲ伊勢ニ徙シ、富田知勝ヲ板島ニ封ジ、拾貳萬石、明年、脇坂安治ヲ大洲ニ六萬石、元和三年、加藤貞泰之ニ代ル、封ズ、十八年、知勝罪アツテ國除シ、伊達秀宗之ニ代リ、拾萬石、板島ヲ改テ宇和島ト稱ス、寛永四年、嘉明會津ニ徙リ、松平忠知蒲生氏之ニ代リ、十二年、嗣ナクシテ國除シ、松平定行ヲ松山ニ、拾五萬石、松平定房ヲ今治ニ、三萬石、一柳直盛ヲ西條ニ六萬八千石、後松平賴純之ニ代ル、封ズ、直盛尋テ二子直家ヲ川江ニ、貳萬八千石、寛永九年封チ收メラル、三子直賴ヲ小松ニ壹萬石、分封ス、其餘大洲ノ支封ヲ新谷壹萬石、加藤貞泰二男直泰、トナシ、宇和島ノ支封ヲ吉田三萬石、伊達秀宗五男宗純、トナス、凡テ八藩、王政革新、廢シテ松山宇和島二縣ヲ置、又改稱シテ石鐵(イシヅチ)、神山(カミヤマ)ト云、尋テ之ヲ合併シテ愛媛縣ヲ置、

〔先代舊事本紀十國造〕伊余國造
志賀高穴穗朝〇成務御世、印幡國造同祖敷桁彥命兒速後上命定賜國造、

〔古事記中神武〕神八井耳命者(中略)伊余國造(中略)等之祖也

〔先代舊事本紀十國造〕久味國造
輕島豐明朝〇應神御世、神魂尊十三世孫伊與主命定賜國造、

小市國造
輕島豐明朝御世、物部連同祖大新川命孫乎致命定賜國造、

怒麻國造
神功皇后御代、阿岐國造同祖飽速玉命三世孫若彌尾命定賜國造、

風速國造
輕島豐明朝、物部連祖伊香色男命四世孫阿佐利定賜國造、

之二一　伊豫三十四村拾芥抄作二伊余一　浮穴九十九村　喜多八十三村貞觀八年十一月、割二宇和郡一置　宇和二百七十九村

〔日本地誌提要六十三伊豫〕沿革　古ヘ國府ヲ越智郡ニ置ク今ノ古國分村是ナリ　天慶中、州掾藤原純友反シテ郡邑ヲ鈔掠ス、朝廷小野好古ヲ以テ追捕使トナシ、來リ討ジ、純友誅ニ伏ス、治承ノ初、州ノ豪族河野通清、高繩城風早郡河野郷ニ據リ、平氏ヲ拒テ殺サル、子通信、源頼朝ニ從ヒ守護ニ補ス、承久ノ役、官軍ニ屬シテ、封邑ヲ失ヒ、其少子通久、僅ニ久米郡石井郷ヲ領ス、蒙古ノ役、通久ノ孫通有戰功アリ、舊邑ヲ復シ、對馬守ニ任ズ、元弘ノ初、通有ノ子通盛、北條氏ニ附シテ收封セラル、其族得能通綱、土居通增、官軍ニ應ジ、長門ノ探題北條時直ヲ擊テ之ヲ破ル、足利尊氏ノ反スル、通盛之ニ屬シテ、湯月城溫泉郡ニ據ル、延元三年、朝廷四條有資ヲ以テ州守ニ任ジ、大館氏明ヲ守護ニ補シ、世田城桑村郡楠村ニ居テ四國ヲ經略セシム、得能土居二氏皆之ニ屬ス、興國元年、脇屋義助詔ヲ奉ジテ來リテ國府ニ居リ、南海ノ軍務ヲ督ス、俄ニシテ卒シ、尊氏ノ將細川賴春來リ侵シ、世田城ヲ陷イレ、氏明之ニ死シ、得能諸氏皆離散ス、正平六年、尊氏終ニ通盛ヲ以テ守護トナス、十九年、通盛ノ子通朝歸順シテ、細川賴之ト戰ヒ敗死ス、其子通堯後改通直筑前ニ奔リ、征西將軍懷良親王ニ從ヒ、其援ヲ乞テ故封ヲ復ス、天授中、通堯戰沒シ、其子通能再ビ足利氏ニ降リ、因テ守護ニ補ス、應仁ノ亂、通能ノ孫通直西軍ニ應ズ、其再從弟通春、湊山和氣郡三津濱ニ據リ東軍ニ屬ス、是ニ於テ河野氏二派トナル、永正中、通直ノ子通宣、通春ノ子通篤ヲ逐ヒ、悉ク其地ヲ併ス、是ヨリ先西園寺氏世々宇和郡ヲ領シ、松葉城ニ居リ、宇都宮氏喜多郡大洲ニ據リ、河野氏ト地ヲ爭ヒ戰鬪止マズ、天正中、土佐ノ長曾我部元親來リ侵シ、宇都宮豐綱ヲ逐ヒ、河野通直通宣曾孫ヲ降シ悉ク其地ヲ併ス、十三年、豐臣氏南征シ、元親ノ侵地ヲ削リ、河野氏通直西園寺公廣ノ地ヲ奪テ、小早川隆景ニ全州ヲ賜フ三十五萬石、十五年、之ヲ筑前ニ徙シ、福島正則ヲ湯月ニ十一萬石、後國府ニ徙ル加藤嘉明ヲ松前ニ六萬石戸田勝隆ヲ板島ニ封ズ、十八年、正則ヲ轉封シ、國府ヲ小川祐忠ニ賜フ七萬石、文祿中、勝隆封ヲ失

宮崎

建置沿革

重信川口　二里二十町二十間半　和氣郡三津町、三十三度五十二分半、（至温泉郡松山府中町一里一十九丁四十六間、北）（楢高三十三度五十一分半、從府中町至道後村二十九丁一十五間、從道後至堀江村二里一十丁）三町二十五間　三津町三津濱（沿江丁、五十二間、至柱町、五）二里一十九町二十九間　堀江村　二里九町三十間　風早郡辻村辻町、三十三度五十九分、三里八町　野間郡濱村、三十四度二分半、　二里二十町七間半　新町村（至今治室屋町二里六丁四十間、經濱）　一里一十六間　九王村、三十四度五分半、　二里四町七間（至明神村二里一十三丁一十五間）　宮崎村　三里三町一十三間　波止濱、三十四度七分、　二里一十二町五十九間　越智郡今治横町（至室屋町二丁五十六間、北極高三十四）（度五分、）　四里二十三町四十間　桑村郡壬生川村　一里一十二町二十八間　周布郡今在家村濱、（至今在家村宿所、汎測六丁）　三十三度五十五分半、　二里一十七間　新居郡喜多濱分本陣川口（至四篠本町、汎測一十二）（丁、北極高三十三度五十六分、）　二里三十二町五十六間　新居濱村　二里四十間　埴生村川口（沿川宿所、至埴生村九丁四十）（間）　三里一十九町六間　宇摩郡津根村高橋川口　三里二十五町四十二間　川之江村濱（至川之江村宿所四丁一十五間）　三十四度一分半、　二里二十二町四十七間　讃岐國豐田郡和田濱川口（略○中）

從土佐國高知街道、歷笹ヶ峯至川之江（略○中）

伊豫國宇摩郡馬立村　一里三十一町九間　岡水ヶ峯　二里四町四十一間半　川之江村（從高知至川之江）街道、通計二十一里一十三町五十三間、

〔延喜式　二十八兵部〕諸國驛傳馬（略○中）

伊豫國驛馬（大岡、山背、近井、新居、周敷、越智各五疋、）

〔日本國郡沿革考　二南海道〕伊豫　古作伊余（古事記、國造記）或伊與（清寧紀）上國、管十四郡、九百五十五村、

宇摩（五十一村、延喜式等作宇麻、）　新居（五十二村、本神野郡、大同四年九月、改神野郡爲新居郡、以觸上諱也、）　周布（三十六村、延喜式等作周敷、）　桑村　二十七村　越智（九十二村、古小市國、見國造記、後爲郡、建國府于此、）　野間（三十村、古怒麻國、見國造記、和名抄云、今作能萬、）　風早（八十四村、古風速國、見國造記、持統紀亦作風速、）　和氣（二十二村、日本紀伊豫別君、部出于此地之稱、）　温泉（三十五村、風土記作湯郡、伊豫）　久米（三十一村、古久味國、見國造記、清寧紀來目部、部出于此地）

從伊豫國宇和島沿海至岡崎

伊豫國宇和郡宇和島本町　三里一十八町五十六間　吉田（至穀町二丁四十五間半、北極高三十三度一十七分半、）　二里一十九町九間　奥浦中浦、三十三度一十七分半、　一十三町一十七間　同間口（大真崎[illegible]一里三十三丁一十一間）　一里三十二町二十一間半　白浦花組浦　三里四町五間半　狩濱浦、三十三度二十分、　三里三町四十九間　高山浦田之濱、三十三度二十分、　二里三十一町五十八間（至大崎二十三丁四間半）　皆江浦、三十三度二十一分半、　二里二十一町一十間　埴生浦　一里二十一町四十一間　周木浦三十三度二十三分半、　三里八町四十一間（至[illegible]崎二里二十二丁三十間）　川名津浦、三十三度二十六分半、　三里一十一町二十四間（至諏訪崎一里二十三丁三十七間半、）　八幡濱浦、三十三度二十八分半、　二里八町一十二間　川之石浦、三十三度二十九分半、　二里一十六町一十七間（至喜美郷崎一里二丁四十五間半）　伊方浦中浦（至伊方越浦陸路十九丁）（三十七間）　八町一十九間　同川永田浦、三十三度三十分、　二里二十三町五十四間（至女子崎一里三十三丁四十一間半）　九町浦、三十三度二十九分半、　一里二十九町一十一間　三机浦鹽成浦（至三机浦小フリ濱陸路四丁二十六間）　二里二十六町二十六間　三崎浦名取浦　三里一十一町九間半　三崎浦佐田浦　二里三十二町五十三間　同内野浦（至北濱陸路四丁二十六間）　二里一十八町四十四間　同北濱　三里二十一町（至松浦一里三十四丁四十間半）　同二名洲浦、三十三度二十四分半、　三里六町三間半（至三机浦[illegible]木二十二丁）　三机浦神崎浦　二里一十二町五十一間　同小島浦立岩　二里九町三十四間半　三机浦、三十三度二十八分、　一十三町一十四間半　同小ブリ濱　四里一町三間半（至二見浦大成濱一里一十三丁三十間半）　伊方浦伊方越浦　一里三十四町一十三間　喜木津浦、三十三度三十二分半、　一里五町四十一間　磯崎浦、三十三度三十三分半、　二里三十一町二十二間　喜多郡長濱、三十三度三十七分半、（經比地川至大洲本町四里二十丁一十二間、北極高三十三度三十一分半、）　二里八町二十九間半　浮穴郡串村　二里七町二十七間半　上灘村、三十三度四十二分、　二里二十町一十五間　伊豫郡米湊　一里一十六町五十七間　北河原村

四間半　同提浦小枝田　一里四町二十一間　外海浦船越浦（至西濱徑測三丁一十二間）　二里五十三間半（至ヌルミ岬・三十三丁二十六間）　同福浦三十二度五十二分半、二里三十町四間半　同加奈山濱　一里三十四町二十三間半　同中泊浦三十二度五十七分、一里九間　同船越浦西濱　八町一十一間半　同尻貝濱（至中浦尻貝・徑測七丁一十六間半）　三里二十七町二十九間（至鼻岬・一里一十間半）　内海浦中浦三十二度五十八分半、一十六町三十六間　同尻貝　一里二十九町一十間　同成川坊城村成川　一里二十六町一十四間半　内海浦平山浦三十二度五十九分、二里三十町三十七間　柏村　一里二十七町一十間（至権現岬一十八丁）　内海浦平碆浦（至鯖網代・徑測七丁二十二間半）　二十九町五十一間　同家串浦三十三度三分半、二里九町七間　同魚神山浦船越　一里二町三十六間　同魚神山浦三十三度四分、二里一十九町一十二間半　下灘浦須下浦押上岬（又呼由良岬）　二里一十七町二十九間半　同須下浦三十三度四分半、二里二十八町七間半　同柿浦鮪網代　一里二十三町一十四間　下灘浦鼠鳴浦三十三度六分、一里一十六町五十四間（至平井浦大崎・六丁五十八間半）　同泥目木浦大越　二里一十三町四十七間半（至曾根浦一里一十八丁五間）　北灘浦小提浦洲之濱　一里八町四間　同小提浦　一里二十八町二十九間　岩松村　二里七町五十四間半　北灘浦鵜濱浦三十三度九分、三里一十町三十八間　同福浦小濱　二里五町九間　下波浦結出浦三十三度一十一分、一十町五十五間半　同繁浦（至明神浦・徑測四丁二十四間）　三里（至大池岬・一里二十五丁三十二間半）　蒋淵浦横浦三十三度一十二分半、二里三十一町三十一間　上波浦津野浦赤崎　二里三十町三十間　同矢野浦三十三度一十二分、二里四町五十七間（至明神浦・一十六丁一十三間半）　三浦大内浦三十三度一十一分、二里一十三町二十六間　同弓立浦　二里二十七町五十三間半　九島浦小池浦島ヶ首岬　一里一町三十二間　同小濱浦三十三度一十三分、三里二十四町（至宇和島佐泊町・三里一十丁七間）　宇和島本町三十三度一十四分、（從関崎至）宇和島

沿海、通計二百六十七里二十七町四十一間、

ケ、地味膄沃、米麥豐饒ナリ、風俗淳直ナレドモ、固陋ノ弊ナキ能ハズ、氣候極暑九拾五度極寒四拾度

氣候

〔甲子夜話八〕大洲侯ニ謁退セシトキ、國々ノ寒暑ノ談ニ及ビ、我平戸ノ氣候ヲカタリ、扨豫州モ海近ケレバ、夏モ凉シカルベシト言シニ、侯ノ臣堀尾四郎次、其座ニアリテ曰ク、曾テシカラズ、暑至テ甚シ、盛暑ニ至リテハ途行スルニ、炎氣黄白色ヲナシ、空中ニ散流シ、人目ヲ遮リ、前行十歩ナル人ハ殆ド見ヘ分タズ、其蒸熱堪ガタシ、如斯ナレバ途行スルモノ、青傘(涼傘也、青傘ハ豫州ノ方言、)ヲ用ザレバ凌ガタシ、然ルニ近頃青傘ヲナスコト停止セラレシカバ、暑行尤難儀ナリト語リヌ、國々ニヨリテ暑氣ノ厚薄モアル中ニ、豫州ハ殊更ニ甚シク異ナルコト也、

道路

〔南海治亂記十三〕阿波大西白地豫州路程記
大西白地ヨリ豫州河江へ四里半、河江ヨリ八日市へ三里、八日市ヨリ西條へ六里、西條ヨリ小松へ二里、小松ヨリ今治へ五里、今治ヨリ松山へ十八里、松山ヨリ大津へ六里、東西凡ソ三十八里也、南北ハ豫州御津ノ濱ヨリ土州宿毛ノ邑マデ三十里ニ及ベリ、土州ヨリ豫州へ出ル山路多シ、豫州新居濱ヨリ土州長岡へ山路十三里有之也、

〔和漢三才圖會七十九伊豫〕松山(吉那至江戸二百十八里內、至三津一里半、自此至大坂海上八十三里、自大坂至江戸陸百三十三里中、坤至大洲十四里、艮至備後鞆二十五里、)
宇和島(一名板島、至江戸陸二百七十八里、書至吉田三里、實郷至土佐高知五十三里、)吉田(至江戸海陸二百五十九里、至大坂海上百二十五里、北至大洲七里、)大洲(至江戸海陸二百三十一里、)今治(至江戸海陸二百七里、至大坂海上七十三里中、東至河江八里、自河江、艮至讃州高松十五里、自河江、辰方至阿波德田十四里、)西條(至江戸二百五十九里、丑方至河江、)小松(至江戸二百九里十二町)

〔日本實測錄五〕從阿波國岡崎沿海至宇和島、〇中略
伊豫國宇和郡外海浦臨本浦西泊　二里一十四町五十一間半　同深浦宮山、三十二度五十七分
半　二里六町三十七間半　同久良浦(至雜浦小松田、濱九丁一十四間半)　二里一十一町一十間半(至天嶋、一里一丁三十一)

地勢
地味

て貢獻せし事みえたり、

〔宇和郡舊記 下〕沖之島出入之事

一正保二年に國により繪圖上り申時、鈴木治大夫、荻原仁左衞門、此島江渡り、境目被改候節、土佐領廣瀨庄屋與惣左衞門、新右衞門云者出逢申故斷申達、宇和領分之繪圖整申候、然所に正保三年秋、廣瀨庄屋助之允と云者、廣瀨之境目郡合川をこし、此方かし地の内大川を境姫島はきれと境と云、其後は姫島山の内に又境をたて、理不盡成儀申かくるより、雙方口論初るなり、〇下略

〔南海通紀 六〕豫州能島來由記

伊豫ノ國ノ海表ニ能島、來島、院島トテ三ツノ大島アリ、其ノ外小島十ニ餘レリ、豫州河野氏ノ部類ニシテ、周防山口ノ府ニ隣スル故、大内家ニ交接ス、〇下略

〔小早川什書 二〕安藝國沼田庄、同國乃美鄕、伊與國大島四分之一〇中略等、施行遵行事書等也、

小早川美作守持平知行分、伊豫國越智郡内大島四分壹地頭職事、早任去月廿七日御下文之旨、可被沙汰付下地於小早川又太郎熙平代之由所被仰下也、仍執達如件、

永享十二年七月六日　右京大夫判

河野九郎殿

〔島林本節用集 下〕伊豫州預上、管十四郡、四方二日、原野田畑多、桑麻藍草豐也、大中國也、

〔伊豫古蹟志外傳 上〕土壤考

伊豫之爲國也、多原野國田、自嘉穀桑麻藍草藥物銅坑釣漁、以主百貨財、皆產於此地、宇和喜多山海諸產亦多矣、因稱謂大中國、或謂上國三十五國之一也、

〔日本地誌提要 六十三伊豫〕形勢　石鎚ノ山脈、東南ニ連亘シテ土佐ヲ界截シ、支脈西北ニ走リテ、州中ヲ橫貫ス、北方島嶼錯列シテ、山陽ニ接シ、西方灘嘴參差、西海道ニ對ス、道後四郡、田野大ニ闢

〔古今著聞集十二博奕〕後鳥羽院御時、伊與國おふてらの島といふ所に、天竺の冠者といふもの有けり、○下略

〔古今著聞集二十魚虫禽獸〕安貞の比、伊與國矢野保のうちに黑島といふしま有、人里より一里ばかりはなれたる所也、

〔豫章記〕伊與見島ハ加茂領也、神書、東駒路屆程、西檜櫨及程、加茂御領ニアラズト云事ナシト見ニタリ、其儀ニヤ、此島本ハ加茂御領也、

〔東寺百合古文書百八十一〕東寺領伊豫國弓削島雜掌教念、與當島三分二地頭小宮兵衛次郎入道西縁今者死去子息又三郎親行代廣行、相論所務條々、○中略

永仁四年五月十八日　陸奧守平朝臣花押○北條宣時

〔太平記二十二〕大館左馬助討死事附篠塚勇力事

篠塚伊賀守、○中略追懸タル敵二百餘騎ニ、六里ノ道ヲ被追テ、其夜ノ夜半計ニ、今張浦ニゾ著タリケル、自此舟ニ乘テ隱岐島へ落バヤト志シ、船ヤアルト見ルニ、敵ノ乘棄テ、水主計殘レル船數タアリ、

〔愛媛面影二越智郡〕篠塚伊賀守墓　今治の海上沖島に在り、一社の傍に苔むしたる五輪塔是也、○中略

按、日本外史曰、賊不敢追、彊至今治浦、見賊空船、獨有舟人、篠塚舞而進之、跳入船、自名曰、送吾於隱岐、手拔繻樹櫓、登船屋斬睡、舟人畏怖、送至隱岐、以終焉といへり、太平記に所謂隱岐島は、即今治の沖島なるを、外史に隱岐國と爲すのは誤れり、

〔愛媛面影五宇和郡〕沖島

宇和島より廿五里南の海上に在り、是を土佐國の界とす、此島昔より橫濱樹を產せり、櫛に製り

カマキ島　横島　小島伊方村　小丸小島　東明小島　御堂小島　大角島　エン子島　ウメ
小島　辨天島　[illegible]島　京小島　小島沖島　白璧礁　小平市島　松島　地島　粒島
新居郡ニヰ　實測　大島周廻一里二十六町二十五間、大島浦三十四度三十秒、　御代島イヨ周廻二十二
町五十二間、　黒島周廻二十六町三十五間、　遠測　鵜島

〔愛媛面影三風早郡〕忽那島
北條の沖中に在り、俗に中島と云、此島十二浦有り、昔時二階堂信濃守民部入道此島に謫居せり、
子孫忽那を氏とす、俚諺集に見たり、此島古昔牛馬牧なりしを村民の訴によりて、其事を止られ
たり、

〔三代實錄二十九清和〕貞觀十八年十月十三日丙辰、伊豫國言、管風早郡忽那島馬牛、年中例貢馬四疋牛
二頭、其○其下原有遺字、據一本删遣馬三百餘疋、牛亦准之、島内水草既乏、春息滋夥、青苗初生、風逸踏破、翠麥將
秀、群入食損、百姓之愁、莫甚於斯、望請擬非年貢之餘、皆悉沽却、以其價直混合正税、詔從之、

〔忽那文書乾〕伊豫國忽那島地頭名、幷給田畠事、以申狀披露之處、不可有新儀、可依先例之由、鎌倉殿
仰候也、仍執達如件、
　建永二年○承元元年五月六日　散位花押

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕康應元年三月十九日、かまとの關より、周防國やしろの島、よこみいつゐあき
ふなこしなどいふ浦々島々とをらせ給、此南のかたにあたりて、伊豫國まさきかふろいはたう
のうらのせと、ふたかみまさかりのせと、はしかみのせと、ぬわこ○こ一本作くつなつわなといふ所に
は、島々いくらも四方にならびたり、

〔日本紀略二朱雀〕承平六年六月某日、南海賊徒首藤原純友結黨、屯聚伊豫國日振島、設千餘艘、抄劫官
物私財、○下略

越智郡　實測　岡村島、周廻二里一十七町五間、岡村三十四度一十分、　大三島、周廻一十四里三十一町七間、盛村三十四度一十八分、宮浦三十四度一十五分、（從盛村濱至宿所三町三十六間、從宮村濱至宿所八町）伯方島、（ハカタ）周廻一十里五町二十八間、伊方村三十四度一十四分、　大島、周廻一十一里一十五町四十五間、本庄村、三十四度九分半、　弓削島、周廻五里一町二十一間、下弓削浦、三十四度一十五分半、　小大下島、周廻三十五町二十四間、　大下島、周廻一里二十九町三十五間、　柏島、周廻二十町一十七間、　肥島、周廻二十一町五十七間、　三ッ子島、周廻二町四十六間、　鵜島、周廻五町二十六間、　大横島、周廻一里二町四十間、　小横島、周廻一十町二十八間、　幸嚴島、周廻六町四十七間、　棚林島、周廻九町二十九間、　松島、周廻九町一十九間、　古城島、周廻七町五十五間、　津島、周廻一里一十六町二十一間、　馬島、周廻三十二町五十四間、　小ツクマ島、周廻一十二町三十九間、　中渡島、周廻八町五十四間、　虫島、周廻一十四町三十二間、　小虫島、周廻五町二十四間、　津雲島、周廻五町二十一間、　見近島、周廻一十四町九間、　野島、（從東岬至西岬）四町、　宇島、周廻一里九町二間、　鵜島、周廻六町四十九間、　ツパ島、周廻一里九町一十一間、　赤穗根島、周廻一里二十町三十四間、　岩城島、周廻三里二十六町三十一間、　生名島、（イキナ）周廻三里二町七間、　部内島、（ヘナイ）周廻一十六町三間、　鵜島、周廻一十五町、　ツボケ島、周廻四町一十三間、　嚴島、周廻八町一十二間、　佐島、周廻二里二十六町四十四間、　百貫島、周廻七町五十三間、　高井神島、周廻一里一十二町三十九間、　沖島、周廻一里二十三町三十九間、　亖豊小島、周廻一十町二十七間、　江ノ島、周廻二十八町五十二間、　梶島、周廻二十町一十六間、　豊島、周廻一里一町八間、　化粧島、周廻八町一十六間、　小墨島、周廻一十六町一十間、　元島、周廻一里四十六間、　美濃島、周廻二十八町一間、　平市島、周廻一十三町四十九間、　比岐島、周廻二十六町二十九間、　小比岐島、周廻一十町四十二間、　遠測　毛無島　小毛無島　棚櫻島　名島　伯母島　龍神島　コフリ島　小島（沖浦）　四十島　小島（古城島）　鵜小島　小島（宮浦村）

シ島　猿島　子トコ島　中戸明神　クハ島　サスナ遊　水ノ子遊　大島　トウキリ島　室遊
高遊　赤遊　大小島　沖中遊　中島　長崎大小島　ミヂイ島大　ミヂイ島中　ミヂイ島
小二並　龍王礁　雨ヤトリ　小島明神浦　島ヶ原　龍王島獄浦　小島　小龍王島小漁浦　鍋島
坂ヶ遊　俵遊　小島白濱浦　立岩　兒島　水ノ子島波江浦　三ツ岩大　三ツ岩小　モシ遊　馬遊　地ノ島
沖ノ島　小高島　水作島　稲島　小島地大島　地カフ島　沖カフ島　鼠島　立神岩　島島伊カ
浦　雀遊　[illegible]子遊　大遊　大金遊　御鹽島　長遊神崎浦
喜多郡　實測　青島、周廻一里二町一十七間、
和氣郡　實測　與居島、周廻六里二十四町二十一間、円田、三十三度五十五分、　釣島、周廻二十六
町一十五間、　遠測　四十島　スクモ島　鴨島　犬島
風早郡　實測　津和地島、周廻三里四町二十三間、津和地浦、三十三度五十九分半、　中忽那島、一島四
地方ニ分各名ニ周廻七里三十二町二十八間　中島吉木村、三十三度五十九分半、忽那島大浦村、三十三
度五十九分半、　無須喜島、周廻二里一十四町一十一間、　野忽那島、周廻一里一十六町四十間、
鹿島、周廻一十二町三十四間、　高島、周廻一十一町四十五間、　二神島、周廻二里一十六町二十三
間、　油利島、周廻一里一十四町一十二間、　横島、周廻一十二町一十五間、　怒和島、周廻三里一十
二町四十二間、　クタゴ島、周廻八町一十四間、　流小島、周廻一十三町一十四間、　大館場島、周廻
一十三町四十五間、　小館場島、周廻九町二十一間、　遠測　小市島　中島　鴨脊島　前小島二神
島　上仁子島　下仁子島　前小島怒和島　竹ホ島　兒島　殿島　ノウソ島　小島吉木村　崩礁
小島粟井村　妹小島　田ノ島　小鹿島　大チギリ島　小チギリ島　小豎島　大豎島
野間郡　實測　弓杖島、從南嶺至北嶺四町、　來島、周廻七町四十六間、　小島、周廻一十六町五十二間、
遠測　餅島　怪島　筏礁　白石

疆域

〔名所方角抄〕伊豫國分　さぬきより西なり、豐後よりちかし、

〔日本地誌提要 六十三 伊豫〕疆域　東ハ讚岐、東南ハ阿波、南ハ土佐、西北ハ海ニ至ル、東西凡三拾五里、南北凡壹拾五里、狹處五里、

島嶼

〔日本實測錄 十 島嶼〕土佐國幡多郡 伊豫國宇和郡 沖島、周廻四里一十八町二十四間、○中略 伊豫國宇和郡　實測　日振島、周廻五里三十三町一十一間、明海浦、三十三度一十一分、戸島、周廻四里三町二十六間、戸島浦、三十三度一十三分、從西岬至長崎、五丁一十二間、沖大島、周廻一里七町二十五間、大島浦、三十三度二十四分、印來島、周廻一里一十六町九間、當木島、從東岬至西岬、一十二町、鹿島、周廻一里一十八町二十一間、横島、外海浦、從南岬至西岬、二十町、沙ゴ島、周廻一十町四十八間、小猿島、從南岬至北岬、三町、大猿島、從東岬至北岬、竹ヶ島、周廻一里六町五十八間、從東岬至東岬、九丁、從中島至高島、五十五間半、黒島、周廻一十七町一十六間、実島、周廻一十八町五十一間、遠渡島、周廻二十三町三十八間、嘉島、周廻二十五町四十一間、御五神島、周廻一里四町十八間、横島、日振島、從西岬至東岬、二十九町、沖ノ島、日振島、從東岬至西岬、一十一町、竹島、日振島、從東岬至西岬、五町、烏ヶ首島、周廻一十町三十四間、ピヤケ島、周廻七町二十五間、高島、上波浦、周廻一里三町一十八間、九島、周廻二里一十一町五十二間、小島、九島、周廻三町、從西岬至長立、二町五十七間半、野島、從東岬至西岬、一十二町、大良岬、周廻一里三十三町一十間、小島、奥浦、從東岬至西岬、二町、高島、加室浦、周廻九町一十九間、ヒリ島、從北岬至南岬、一十一町、地大島、周廻一里一十五町四十一間、山王島、從南岬至北岬、一町三十間、栗小島、從南岬至北岬、三町、左島、周廻二十三町二十六間、黒島、伊方浦、周廻二十四町二十九間、遠淵　松島大　松島小　睢鳩島　水子島村濱浦　能地島大　能地島　小ナイガノツフ　沖ノツフ　小地島　大地島　小横島　長濱鬼島村　黒濱中浦　黒島田崎　ホシノコ濱　三ツ畑田島　一ツ畑田島　小島長島村　觀音濱　長濱山島浦　寺口濱　一ツ濱　烏帽子濱　耳毛島　前島　裸島　小島民浦　員鵜ノ濱宿津浦　龍王濱島津浦　八町濱　沖クルシ島　クル

位置

河野〇中略ハ北伊豫十郡ノ主ナレバ、大郡ニテ押寄セ、殊ニ毛利家ノ援兵來ルト聞ケレバ、菅田大剛ノ者ナレドモ、陸戰スル事不能シテ、大津ノ城ニ引入ル、

〔南海通紀十四〕豫州河野兵革記

土州元親、東伊豫、新居宇麻二郡六人ノ兵將ヲ歸服セシメ、中伊豫河野ノ屋形ハ數代ノ大名ニテ優長ニ生長シケレバ、弓箭ノ術ヲ取失ヒ、諸作法亂テ正義ナシ、〇中略北伊豫十郡ハ宇摩、新居、周布、桑村、越智、野間、風早、和氣、温泉、久米、是河野領分也、〇下略

〔南海通紀十六〕西伊豫郡將住所記

西伊豫ト云ハ宇和喜多二郡ノ事也、其内往古ヨリ相續シ來ル大名ハ宇都宮西園寺也、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

伊豫松山、府中町 極高三十三度五十一分半、經度西二度五十七分半、二百七十九里七丁二十二間、〇從東都

伊豫宇和島本町二丁目 極高三十三度一十四分、經度西三度八分、三百二十八里二丁五十九間半、〇從東都

〔日本經緯度實測〕北極出地

伊豫　宮山　三二度五七分三〇秒　　福浦　三二度五五分三〇秒

宇和島　三三度一四分〇〇秒　　吉田　三三度一七分三〇秒

大洲　三三度三一分三〇秒　　松山　三三度五一分三〇秒

西條　三三度五六分〇〇秒　　垣生村　三四度〇〇分〇〇秒

大島　三四度〇〇分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　　伊豫　松山　西二度五七分三九秒

〔給師草紙〕當寺〈○法勝寺〉の上卿の節にまいりて、〈○中略〉まめやかに悲涙をながしつゝ申ければ、上卿いそぎ奏給ける勅答にはわにはれみおぼしめされけるにや、本の伊州を還給べきよしうけ給るこそ先畏おぼえしか、

〔伊豫古蹟志外傳上〕郡道郡管轄

以國統道、以道統郡、以郡統郷、以郷統邑矣、島嶼或屬于郡、或屬于郷、或屬于邑、今所管國分爲三矣、東。伊。豫。者二郡宇麻新居是也、西。伊。豫。者二郡、宇和喜多是也、中。伊。豫。者十郡、周布、桑村、越智、野間、風早、和氣、温泉、久米、浮穴、伊與是也、分爲郡者十四、屬于二道矣、以溫泉、和氣、久米、浮穴、伊與、宇和、喜多爲道。后。也、以越智、桑村、野間、風早、新居、宇麻、周布爲道。前。也、〈○下略〉

〔平家物語六〕飛きやくたうらいの事

ひごの國の住人ゐかの入道西じやくは、平家に心ざしふかゝりければ、其勢三千よきで、いよの國へをしわたり、道。前。道。後。のさかひなる、たかなうの城にをしよせて、さん〳〵にせめければ、河野の四郎通きよ討死す、

〔諸家文書纂十一〕伊豫國道後七郡之事、爲守護職可有管領、道前之事者、中村佐々木三郎盛綱候、諸事申合可有沙汰候、得他庭者事者勿論也、恐々謹言、

元暦二年〈○文治元年〉七月廿八日　頼朝御判

河野四郎殿〈○通信〉

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕康應元年三月十一日、安藝と周防のさかひの川の末の海づら過て、周防の國岩國ゆふむろ岡などいふ所々きたにみゆ、しろの島伊豫の國道。前。の山など南にあたりて霞つつ、波の上もうちけぶりたり、

〔南海通紀十〕豫州兵船渉豫州記

ノ二郡ヲ合シテ周桑郡ト爲シ、野間郡ヲ越智郡ニ、風早、和氣、久米、及ビ下浮穴ノ四郡ヲ温泉郡ニ併合シテ、凡テ十二郡ト爲シ、新ニ松山市ヲ設ケ、愛媛縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕伊豫伊與

〔新撰類聚往來下〕國名略○中伊豫與州

〔日本風土記一寄語島名〕伊豫伊右

〔豫章記〕抑當國伊豫云事、三島大明神天神第六代面足惶根尊也、天照大神宮御祖父也、然間當國御支配有時、伊豫御詔有、卽名伊豫ヲカレニアヅカルト讀也、預豫字訓同、與ヲ書モ略義ナガラ心ハ叶ヘリ、アタユル義也、略○下

〔倭訓栞前編三〕いよ　伊豫の國は大八洲の内に、第二次に出生の洲なれば、彌の義なりといへり、もと伊豫ノ二名洲と見えて、四國の本名なり、

〔古事記傳五〕伊豫國、中卷下卷には伊余と書り、此は伊豫郡より出たる名なるべし、式に例多し神名帳に彼郡に伊豫神社もあり、同郡に伊豫豆比子ノ神社と云もあり、こは地名より出たる神名なるべし名義思ひ得ず、愛比賣は、兄弟の女子を兄比賣弟比賣と云例多かれば、此國は女子の始の意にて、兄比賣か、書紀皇極卷に長女とも、伊世國多氣郡に兄國弟國てふ村の名もあり、又伊豫を元よりの大名にして見れば、彼大御歌略○中の如く彌二並宜島々の意にて、愛は宜き意か、古な愛といふ例多し、上文の愛宜登賣のたぐひなり、比賣は比古に對て、女を美て云稱にて、比は產巢日などの日の意なり、

〔古事記上〕伊邪那岐命、略○中妹伊邪那美命、略○中御合、生子、略○中次生伊豫之二名島、此島者身一而有面四、毎面有名、故伊豫國謂愛上比賣、

〔本朝續文粹六奏狀〕正四位下行伊豫守源朝臣賴義誠惶誠恐謹言略○中

右賴義、略○中去康平六年被任伊豫守矣、略○中去年二月適以入華、須倒虎符早赴豫州、略○下

内　男貳拾貳万八千四百九拾四人
　　女貳拾万五千三百八拾六人

風俗

〔人國記〕讚岐國

讚岐國之風俗、氣質弱ク、邪智之人百人ニ而半分如斯也、武士ノ風俗別而餡强ク、方便ヲ以テ立身ヲスベキナド、、思フ風儀之由、兼テ聞及ニ不替形儀ナリ、別而大内、寒川、三木、三野、山田郡如此也、

名所

〔日本鹿子十三〕同國讚岐〇略中名所之部

松山　當國海邊にある山也、浦有、〇略中

泊礒〇略中　綱の浦　駐打山〇略中　屛風の浦　琴引の松

〔和爾雅一地理〕日本國名所

讚岐國　泊礒　綱浦　青野山以上在鵜足郡　飯山在那珂郡　弦打山在香西郡　松山　阿野川以上在北條郡　松浦

筆山　筆海　狭峯島　佐美山　水莖岡　白嶺　善通寺在多度郡　十市池

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇略中　讚岐國一百人〇略中

諸國器仗〇略中　讚岐國甲二領、横刀七口、弓卅張、征箭卅具、胡籙卅具、

伊豫國

伊豫國ハ、イヨノクニト云フ、南海道ニ在リ、東ハ讚岐、東南ハ阿波、南ハ土佐、西及ビ北ハ海ニ面ス、東西凡ソ三十五里、南北凡ソ十五里、狭キ處五里、其地勢ニ由テ國内ヲ道前道後ニ分チ、後又東伊豫、中伊豫、西伊豫等ノ稱アリ、此國ハ古ヘ國府ヲ越智郡ニ置キ、宇摩、新居、周敷、桑村、越智、野間、風早、和氣、温泉、久米、浮穴、伊豫、喜多、宇和ノ十四郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、浮穴郡ヲ分チテ上下二郡ト爲シ、宇和郡ヲ東西南北ノ四郡ニ分チ、後又周布、桑村

人口

石蛤濱一所ニ有、太師封給故ニ、蛤ノ石ニ成ルト云傳侍ル　忘貝蛤ノナリテ紋アリ　ニ魚島鯛鮓　小豆島煎海鼠　引田海鼠腸

八島平家蟹　志渡浦濱松砂ニ生草也、料理ニ用之、

〔全讃史産物七下〕海鼠腸引田浦の名產　海膽引田松原より津田沙中名產　海松布志度浦　濱松志度浦　鑄鉢志度浦、眞川、古田、鹽屋、有ニ鑄物師、眞工也、世にいわゆる蘆屋釜も此地工人の鑄ル品也、　鍋釜同上　津田穂蓼　同鯷寒川郡津田浦の名產　神前新米寛永十九年六月朔日、神前村の庄屋某、新米を邦君へ獻ず、是ヨリ今に例となる、　播羅大根三木郡原村の名品　鹿庭大竹鹿庭村竹林多シ、一尺五寸まはりの竹ありと云、工人用ひて甚よしと云、　女井間　男井間の鯉魚　潟元鹽山田郡潟元也、凡テ是ヨリ東松原ヲ關ジ、　檀紙紙香西郡飯田郷檀紙村ニ漉紙工人アリ、檀紙ヲ以紙ニ作ル、名品也、慶長年中ニ絶メリ、　圓座河邊郷ニ昔テ以圓座とする工人有しが、是も慶長年中ニ絶メリ、　八十場の淸水阿野北天皇ニあり、茶によく合へり、　瀬島の金山鯛　鯡阿野北の海の名品　鯡子の唐墨是も瀬島の物也　乃生煙草阿野の生村　牛川牛房阿野南牛川村　敎　度の米山田村　宇多津の鍔鵜足郡宇多津工人ノ鍛ひし也、鍔は鵜匙の俗字也、　吉岡の甕土器村吉岡甕燒師多し、弘法大師土器を作り初メしより傳はれり、　金毘羅の寒飴生姜那珂郡金毘羅の土產物　瀧宮の白梅糕綾南瀧宮の產物也、昔神獻上のため製する也、　筆草宇多津濱の產也、此草有を以て筆の海と云、　白峯の磬石此石の音響、天下無雙也と云、

〔讃岐國總村高帳〕寛永拾六年卯三月朔日極リ帳奥書ニ

一侍數三百二十七人　但百石取以上　一國中人數拾五万九十三人内　男七万四千四百十二人　女七万五千六百八十一人

〔官中秘策五〕讃岐國　十一郡　○中略

一人數三拾五万七千三百貳拾六人　内　拾六万七千三百六拾壹(壹恐六誤)人女　拾八万九千九百六拾人男

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年　○中略

一御料私領人數三拾九万五千九百八拾人　高拾八万六千三百九拾四石餘　讃岐國

内　貳拾壹万百八拾七人男　拾八万五千七百九拾三人女　○中略

弘化三丙午年諸國人數調　○中略

一御料私領人數四拾三万三千八百八拾人　高貳拾九万千三百貳拾石餘　讃岐國

〔延喜式 二十四 主計〕讃岐〇中略　右廿五國中絲〇中略
讃岐〇中略　右廿九國輸絹
讃岐國 行程上十二日、下六日　海路十二日
調、兩面五疋、二窠綾十二疋、七窠綾、小鸚鵡綾各八疋、薔薇綾四疋、三窠綾五疋、白絹十疋、緋帛、縹帛各卅疋、陶瓮十二口、水瓮十二口、瓮八口、壺十二合、大瓶六口、有柄大瓶十二口、有柄中瓶八十五口、有柄小瓶卅口、鉢六十口、境卅合、麻笥盤五十口、大盤十二合、大高盤十二口、椀下盤卅口、椀三百卅口、盞坏一百口、大宮坏三百廿口、小宮坏二千口、自餘輸絹、鹽、阿野郡輸二熬鹽一
庸、白木韓櫃廿合、自餘輸米、
中男作物、黄蘗百五十斤、紙、胡麻油、乾鮹、鮹楚割、大鰯、鮨、鯖、海藻、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥〇中略
讃岐國卅七種　黄芩七十三斤五兩、藍漆二斤、茵蔯蒿、牛膝、茼茹、細辛、地楡、白薟各十斤、蛇銜二斤、白朮、桔梗各十二斤、黄菊花三兩、獨活、芎藭、升麻各廿斤、王不留行、玄參、白芷、白頭公各六斤、橘皮二斤十三兩、松脂、大戟、連翹、女萎各五斤、伏苓七斤、麻黄十六斤、夜干十五斤、天門冬十三斤、榧子二斗五升、薯蕷、麥門冬、胡麻子各一斗、蘇子、車前子各五升、桃人一斗五升、蛇床子、決明子各一斗六升、麻子二斗五升、莨菪子二升、亭藶子四升八合、半夏一斗三升、蜀椒二斗、牡荊子七升、鹿茸、鹿角各五具、椅杞十斤、朴消八升、

〔延喜式 三十九 内膳〕年料〇中略　讃岐國 細螺作廿籠、白干十二籠、
〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略　宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略　讃岐圓座、
〔庭訓往來〕讃岐圓座、同檀紙、
〔毛吹草 三〕讃岐

多度郡七鄕、〇中略右多度郡七鄕二十三村、古高一万四千六百七十六石八斗一升

三野郡七鄕、〇中略右三野郡七鄕五十七村、古高一万九千零四十三石七斗六升、

刈田郡六鄕、〇中略右刈田郡六鄕三十九村、〇註略古高一万千七百九十三石四斗八升、打出高二千零六十六石二斗七升、

右高總計十六万六千百十四石四斗四升一合、打出高五万二千四百十九石六斗六升五合、新開高二万四千三百九十五石、

右總合計二十四万二千九百二十九石一斗〇六合

東讃　古高十二万石、万治二年、寛文五年、打出高五万〇二百九十五石有奇、新開二万四千三百九十五石、

西讃　古高五万〇〇六十七石五斗、改出二千一百六十一石七斗七升七合、

東讃　總計十九万四千六百九十石有奇

西讃　總計五万二千二百二十九石二斗七升七合

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

讃岐國御料私領　一高貳拾九万千三百貳拾石貳斗五升六合四勺

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略　橘子(中略)讃岐(中略)土佐廿六箇國各四合

〔延喜式二十三民部〕年料舂米〇中略　讃岐國大炊一千四百石、糯廿石、〇中略

年料租舂米〇中略　讃岐國二千斛〇中略

年料別貢雜物〇中略　讃岐國紙麻百五十斤、牛皮十張、斐紙麻一百斤〇中略

諸國貢蘇番次〇中略　讃岐國十三壺各大一升、八口各小一升、〇中略　右十四箇國爲第六番〇子午年中略

交易雜物〇中略　讃岐國白絹十疋、鹿革廿張、苫廿五枚、菅圓座廿枚、橘子四合、鹿子皮十五張、金漆一斗五升、醬大豆廿二石、隔三年進、醬大豆五石、大豆十八石、

國產貢獻

拾五万二千三百石餘給知

〔日本鹿子十三〕讃岐國十一郡、大中國、東西三日、知行高十七万千八百十石、

〔官中秘策五〕讃岐國　十一郡略○中

一石高拾八万六千三百九拾四石餘

〔全讃史郡一略〕大内郡四鄕、略○中　右大内郡四鄕三十四村、古高一万石、打出高三千百九十石、新開高千六百三十石餘、

寒川郡七鄕、略○中　右寒川郡七鄕二十八村、古高一万三千六百石零々五升八合、打出高四千一百五十九石餘、新開高三千七百四十石餘、

三木郡八鄕、略○中　右三木郡八鄕三十五村、古高一万千六百十九石四斗餘、打出高三千十石五斗餘、新開高二千五百四十餘石、

山田郡十一鄕、略○中　右山田郡十一鄕三十八村、古高一万八千七百七十八石貳斗餘、打出高六千八百十一石七斗、新開高三千三百二十餘石、

香川郡十二鄕、略○中　右香川郡十二鄕五十村、古高二万零五百五十二石一斗二升、打出高一万二千三百七十七石八斗七升、新開高三千四百三十三石、

阿野郡九鄕、略○中　右阿野郡九鄕三十五村、古高一万七千六百三十九石二斗五升九合、打出高七千五百二十石七斗四升一合、新開高四千零七十二石餘、

鵜足郡八鄕、略○中　右鵜足郡八鄕二十九村、古高一万六千零三十九石七斗八升七合、打出高八千八百七十石二斗餘、新開高三千八百二十石餘、

那珂郡十一鄕、略○中　右那珂郡十一鄕五十一村、古高一万二千三百七十一石四升六合、打出高四千四百十八石九斗五升餘、新開高千八百四十石餘、内開千六百四十九石七斗四升九合餘

京極佐渡守朗徹　柳間　從五位上元治元子五月叙　五万千五百十二石餘　居城讃岐那珂郡丸龜　江戸ヨリ百八十四里半

往古仙石權兵衞秀久居之、天正十八、生駒雅樂頭一政、讃岐守後政、同壹岐守高俊、寛永十九ヨリ松平讃岐守賴重、以後代々領之、

京極壹岐守高典　柳間　朝散大夫　一万石　在所讃州多度郡多度津　江戸ヨリ百八十五里半

生駒雅樂頭政持、寛永十八、山崎甲斐守家治、同志摩守俊家、同虎之助、万治元、京極刑部大輔高和、以後領之、

元祿年中ヨリ京極氏代々領之

出擧稻

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻　中略

讃岐國正税公廨各卅五万束、國分寺料四万束、彌勒歸敬寺燈分料五百束、五大菩薩供養料二千束、文殊會料二千束、藥分料一万束、造院料一万束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料一万束、

〔倭名類聚抄國郡五〕讃岐國　略註○　管十一（中略）正公各三十五万束、本穎八十萬四千五百束、雜穎十八萬四千五百束、

田數石高

〔倭名類聚抄國郡五〕讃岐國　略註○　管十一　田萬八千六百四十七町五段二百六十六歩

〔海東諸國記〕讃岐州　郡十一、水田一万八千八百三十町一段、

〔菅家文草七祭文〕祭城山神文　爲讃岐守祭之

維仁和四年歳次戊申五月癸巳朔六日戊戌、守正五位下菅原朝臣某以酒果香幣之奠、敬祭于城山神、○中略　伏惟境内多山、茲山獨峻、城中數社、茲社尤靈、是用吉日良辰、禱請昭告、誠之至矣、神其察之、若八。十。九。鄕。二。十。萬。口。無損、一口無愁、○下略

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十二万六千二百石　讃岐

〔讃岐國總村高帳〕寛永十六年卯三月朔日極り帳奥書ニ

一御前帳拾七万千八百石　讃岐國總高

所務高合貳拾三万千石餘

内

七万九千七百口餘藏入

内
七万五百石　藏入
三千百七十石　新田藏入
六千六十石餘　書知藏入

本年貢石灰三十石　綾比物二重内七月御八講一重七月御月忌一重　十月兵士十人三人分○中略

正中二年三月日　　公文左衛門少尉大江花押

〔舟木氏系圖〕一從五位下右近將監源頼重者、○中略至後醍醐院御宇、蒙宣下、住讃岐國高松庄、管領諸郡、

〔太平記十四〕諸國朝敵蜂起事

カヽル處ニ十二月○建武二年十一日、讃岐ヨリ高松三郎頼重早馬ヲ立テ、京都ヘ申ケルハ、足利ノ一族細川卿律師定禪、去月二十六日、當國鷺田庄ニ於テ、旗ヲ揚ル處ニ、詫間香西コレニ與ミシテ、則三百餘騎ニ及ブ、○下略

〔南海通紀六〕香西氏園山田郡三谷城記

永正五年八月、香西豐前守元定、香東、香西、南條、北條四郡ノ兵二千五百人ヲ率シテ、山田郡ニ發向ス、○中略野原ノ庄ニ勢揃シ、木太鄕ニ打出、龜田池邊ニ陣ヲ居ヘ、牟禮高松志度ノ浦マデ手遣シ、由良山ノ城ニ押寄ル、

〔報恩院文書〕醍醐寺報恩院所司等謹解

欲早依相承理、且被優敍代讓持勤勞、預御吹擧、達理訴、全公家武家御祈禱、當院領攝津國平駄足庄讃岐國陶保等間事、○中略

建武四年十二月　日

〔南海通紀十七〕羽柴内府公四國配分記

讃岐國　仙石權兵衛尉秀久ニ賜　内二萬石十河民部大輔存保ニ賜

〔慶應元年武鑑〕松平讃岐守頼聰溜間從四位上少將元治元子四月任　拾二万石　御任城讃岐香川郡高松江戸ヨリ海陸百七十九里、[illegible]

上四十九里

右可為左大臣法印御房沙汰之狀、依將軍家仰下知如件、

建長四年九月十六日

相模守平朝臣判

陸奧守平朝臣判

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、烏帽相具御書、御手筥□□□存日予預置也參御所、〇中略女院御方自餘御書等、銘有御封、以檀紙被立文、悉盛宮(菖)、〇中略

一通〇中略銘曰禁裏　讚岐國豐福庄〇中略　右庄々所讓進也

嘉元三年七月廿六日　御判〇中略

一通〇中略銘曰さいこく[illegible]　さいこく　さぬきの國とみたの庄〇中略　ゆづりまいらせ候、御一期の後は、本家へまいらせられ候べく候、

嘉元三年七月廿六日　御判

〔後宇多院御領目錄〕處分〇中略　讚岐國姬江庄〇御管領中略　一安樂壽院領〇中略　讚岐國多度庄〇註

富田庄〇中略　蓮花心院領〇中略　讚岐國鶴羽庄〇中略　一興善院領〇中略　讚岐國長尾庄〇中略

一淨金剛院領〇中略　讚岐國大內庄〇中略　一非寺領庄々〇中略　讚岐國豐福庄〇吉田方中略　一今林

准后御領〇中略　一讚岐國〇中略　圓座保〇中略　陶保〇中略

右所々可令御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年〇德治元年六月十二日　右衞門

高倉前宰相殿

〔東寺百合古文書五〕最勝光院注進、寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事

一讚岐國

志度庄　領家東二條院御分

庄保

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮幷宿院極樂寺
應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠
領、兼又有由緒雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、
宮寺領略○中　讚岐國　草木庄略○中
保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判略下○
〔法然上人行狀畫圖三十五〕讚岐國子松庄におちつき給に空○中略けり、
〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年七月廿五日庚辰、石清水領讚岐國本山庄、被止足立木工助遠親知行地頭
職、一圓被付宮寺云云、
〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀
處分　條々事略○中
一寺院　東福寺略○中　八條禪尼寄進領略○中　讚岐國富田庄略○中
一家地文書庄園事　近衞北政所　讚岐國託間庄略○中　家領略○中　讚岐國子松庄略○中　前攝
政略○中　新御領略○中　讚岐國坂田庄法金剛院領　神前庄興福寺領　本山庄八幡三昧堂領　河津庄日吉
社領略○中　右大臣略○中　新御領略○中　讚岐國笠居御厨大神宮料　杵田庄被寄日吉中御供略○中
建長二年十一月　日　愚老在御判
〔當宮緣事抄〕八幡宮領讚岐國本山庄役夫公米事可停止之由、可令下知右冒院御氣色所候也、仍執
達如件、
正安四十月十四日　兵部大輔經世
謹上　權右中辨殿
〔壬生家文書四〕讚岐國神崎吉原兩庄地頭職事

弦打山ト云フ、又海西ニ佐見島有テ弦打山ニ相對ス、○中略此山大江ノ東ナレバ、江東ノハナト云ナリ、此山ト西濱ノ中間潮入ニテ、坂田室山ノ下マデ入海ナリ、東ハ野方口坂田中河原マデ潮ノサシ引アリ、中筋十八町白沙海中ニ入ル事、一筋ノ矢ノ箆ノ如シ、故ニ矢原ト名付ル也、○中略正規此所ヲ見立、地形ノ吉凶ヲ占ントテ相人ヲ召サルヽニ、○中略相人ト布テ曰、此地富貴繁昌トモニ備ハリ、四神相應ノ地ト云ツベシ、○中略土地ノ名ヲ目出度改メラルベキ歟、其謂レハ聖通寺ヨリ野原ヘ出シ給フ時ハ其詞凶シ、聖(ヒジリ)寺ヨリ通ジテ野原ヘ出ルト續ケレバ、野之名ヲ改テ、目出度唱ヘノ名ニナサルベキカト申上シカバ、正規尤ト有テ、東ノ方高松ノ名ヲ改メ城ノ名トシ、古高松ハ波ノ寄來ル所ナレバ、寄來村ト名付給フ也、

〔南海通紀二十〕城山長者之事

丸龜在二那珂郡一西讃之國都也、初全讃時、慶長七年、生駒一正公城二于丸龜山一爲藩屛一使二人代一之、○下略

〔玉勝間十一〕讃岐國に古へ矛竿を貢りしところの跡

讃岐國の事をしるせる物に、三野郡竹田村に當國忌部の庄とて殊勝の地あり、釋迦堂屋敷と唱ふ、五社大明神といふ社有て、村の氏神と崇む、此村往古、貢旗竿八百本上納せしに、今其竹枯失て、跡は田地となれり、この故に竹田村と號すといへり、かの國より矛竿八百竿を年毎に貢りし事、古語拾遺に見え、踐祚時祭式には桙木千二百四十四竿とあり、かの書に旗竿といへるは誤なるべし、

〔全讃史一郡鄕〕多度郡七郷○中略

仲村郷○中略　伏見　在岡此二村今日二善通寺村一○下略

〔西行一生涯草紙〕同國○讃岐善通寺と申て、弘法大師むまれさせ給たりける所に、心とまりていほりをむすびて、二三年すみ侍りけり、

曾我部ヨリ長尾ハイカツ兩大將ニテ三千餘騎ヲ差向、元吉ノ城ヲ圍シム、

〔南海通紀十三〕土佐元親發向讃岐財田記

天正六年ノ秋、土州元親五千餘人ヲ揚テ、讃州三野郡財。田。ニ發向ス、此財田ノ地ト云ハ、阿波ノ大西ニ隣リシテ西讃岐ノ圖也、此地ヲ得ルトキハ讃州ヘ入易シ、大邑二十五ケ所アツテ、山川ノ固メヨシ、〇下略

〔全讃史一郡一〕香川郡十二郷〇中略

篦原郷　篦。原。今之高松

〔全讃史一郡邑〕高松城

香東郡篦原郷に在て、東讃の治城なり、天正十八年八月、生駒雅樂頭正規、全讃十八万石の地に封せられ、初メ引田の城に入る、其東鄙にして不便なるを以て宇多津に移る、是亦西鄙にして不便なり、因て更に國の中央篦原郷をトして城を築き、高松三郎の城名を取て高。松。と號し、舊の高松を古高松と稱し、此城に移りけるに、其四世の孫壹岐守幼弱にして、內政不和なりし、寬永十七年、羽州由利に謫せられ、同十九年、水戶威公の御嫡子源英公東讃十二万石に封せられ、此城に修造を加へ入たもふてより、御子孫今に至る迄繁榮なり、

〔南海通紀二十〕讃州新高松府記

天正十五年、生駒雅樂頭正規、讃岐國ヲ賜テ當國ニ入部有リ、先引田ノ城ニ入給フ、其後國ノ中區ナレバ、鵜足郡聖通寺山ノ城ニ移リ給フ、正規曰、國中ニ有來ル所ノ城々ハ、皆亂世ノ要害ニシテ、治平ノ時ノ居城ノ地ニ非ズ、平陸ノ地ヲ設テ居住スベシトテ、其地ヲ求ラルヽニ、香川郡箆原郷ニ寬覓ノ地アリ、往古ヨリ河水ノ流久シク海中ニ入テ、地ヨリ八町濱ニ白沙築リ須賀ヲ生ジ、野原ノ庄ニ相續キ、西濱東濱トテ漁村アリ、又郡中ニ山有テ南北ニ横ハル、其形象梓弓ノ如ク、故ニ

〔南海流浪記〕仁治四年二月十四日、守護所之許ヨリ、鵜足津ノ橘藤左衛門高能ト云御家人之許ヘ被預、十五日、在家五六丁許引上リテ、堂舍一宇僧房少々有所ニ移シスヘラル、此所地形殊勝、望東孤山擧夜月、月勸輪觀之思、顧西遠島含夕日、催日想觀之心、後松山聳海中至、前湖滿時砌近搖入ル、

さびしさをいかでたへまし松の風浪もをとせぬすみかなりせば、サテ常ニ後ノ山ニ登リテ海上島々ヲ眺望、爲海中鱗類作自性能加持之法、有時浦ニ出テ昔向山々ヲ問ヘバ、備前小島備中備後迄見エ渡ル、〇中略或時山ニノボリテミワタシテ、

うたつかたこの松かげに風立ば島のあなたもひとつ白波

〔太平記二十三〕大森彦七事

此刀ハ、元暦ノ古ヘ、平家壇ノ浦ニテ亡シ時、惡七兵衛景清ガ海ヘ落シタリシヲ、江豚ト云魚ガ呑テ、讚岐ノ宇多津ノ澳ニテ死ヌ、〇下略

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕康應元年三月六日、ゐの時ばかりにおきの方にあたりて、むし火のかげ所々に見ゆ、これなむ讚岐國うたつなりけり、御舟程なくいたりつかせ給ぬ、七日は是にとゞまらせ給、此處のかたちは北にむかひて、なぎさにそひて海人の家々ならべり、ひむがしは野山のおのへ北ざまに長くみえたり、礒きはにつゞきて、古たか松かえなどむろの木にならびたり、〇下略

〔全讚史一郡邑〕多度津城

多度郡の多度津に在、貞治二年香川兵部少輔景房、封を三郡に得て、諸國通行の便を見て、此地に城を營せしより、天正年中迄二百餘年住居の地なれば、今に至る迄民屋繁昌せり、文政七八年より丸龜の支侯壹岐侯、復城居を營せり、

〔安西軍策五〕讚岐國元吉表合戰事

天正五年、讚州元吉ニ香川義景ト云者楯籠、隆景朝臣〇小早川ニ屬シ、志ヲ深シケルホドニ、土佐ノ長

佐婆部首、今牛養辛歸所、來、獲免負擔、雲雨之施、更無所望、但在官命氏、因土賜姓、行諸往古、傳之來今、其牛養等居處在寒川郡岡田村、臣望賜岡田臣之姓、於是牛養等戶二十烟依請賜之、

〔源平盛衰記八〕讃岐院事

鳥羽院ノ北面ニ佐藤兵衛尉義淸ト云シ者、道心ヲ發シ出家入道シテ西行法師ト云ケルガ、大法房圓意ト改名シテ、去仁安二年ノ冬ノ比、諸國修行シケルガ、〇中略讃岐國ヘ入テ松山ノ津ト云所ニ行ヌ、コヽハ新院崇德〇流サレテワタラセ給ヒケル所ゾカシト思出シ、〇下略

〔新葉和歌集雜七〕讃岐の國松山といふ所にゆきつきて、月日を送り侍りしに、入道大納言爲世の許より、松山はゝつくしにありとても名をのみきゝて見ぬぞ悲しき、と申し送りて侍りし返事に、　宗良親王

思ひやる心盡しもかひなきに人まつ山とよしやきかれに

〔平家物語十一〕大さかごえの事

明十八日のとらのこくに、さぬきの國引田と云所に着付て、人馬のいきをぞやすめける、それよりしろどりにうのや打過々々、八島の城へぞよせ給ふ、

〔源平盛衰記四十三〕落壇浦同意源氏附平家志度道場詣幷成直降人事

屋島ノ渚ヲ漕出テ、壇ニ引レ浪ニ浮、何ヲ指トハナケレ共、風ニ任潮引コソ悲ケレ、先帝〇安德ヲ始テ、女院二位殿女房男房宗徒ノ人々ハ、讃岐志度ヘゾ御座ケル、

〔南海通記二十〕香西藤尾八幡宮記

世俗ノ諺ニ曰、一ニ香西、二ニ鴨部ガ舊ヒ、遂テ成マイ志度ガロイト謳シハ、國中一ノ津ト云事ニヤ、鴨部ハ安富氏ガ居城ナリ、志度ハ領主ノ居所ニ有ラザレバ、遂テ繁昌ハスマジトナレドモ、能キ湊也トカヤ、

扨讃州山田郡植田鄕ハ山川ノ固メ能シテ、上世ヨリ要地トス、殊ニ阿波ノ重淸脇城ニ附テ路程モ近シ、四方深山ニシテ分内モ廣シ、讃州ニ事アル時、元親旗本ヲ居ベキニハ究竟ノ地也、コヽヲ以テ新城ヲ築キ、逞兵ヲ納テ守ラシム、

〔郡名一覽〕一讃岐國（御料私領）　讃州　東西三日　拾壹郡

高拾八万六千三百九拾四石四升一合　三百八拾五ケ村

●高松　百七十九里半　●丸龜　百八十四里半　○多度津　百八十五里半

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕讃岐　十一郡、三百七十七村、

（御料私領）高二十九万千三百二十石二斗五升六合四勺、

大内郡三十四村　寒川郡二十六村　三木郡二十村　山田郡三十村　香川郡四十七村　阿野郡三十五村　鵜足郡二十七村　那珂郡四十村　多度郡二十二村　三野郡二十七村　豐田郡三十九村　小豆島九村　鹽飽島十八村　直島三村　男木島　女木島

〔地勢提要〕（坤）郡邑島嶼奇名

讃岐　三野郡、生里浦、鵜足郡、柞原村、垂水村、苗田村、榎井村、土器村、阿野郡、乃生村、山田郡、庵治濱村、寒川村、鴨部下庄村、名子島、多度郡、龜笠島、鹽飽島、（不係郡島、屬鹽飽）（下五）岩黑島、沙彌島、瀨居島、歩渡島、佐柳島、直島、（不係郡）安野島、男木島、小豆島、（不係郡）豐島、四島、小豆島、

〔日本靈異記〕（中）依不布施與放生而現得善惡報緣第十六

聖武天皇御代、讃岐國香川郡坂田里有一富人、夫妻同姓綾君也

〔續日本紀〕（四十桓武）延曆十年十二月丙申、讃岐國寒川郡人外從五位下佐婆部首牛養等言、牛養先祖出自紀田鳥宿禰、田鳥宿禰之孫米多臣、難波高津宮御宇天皇（○仁德）御世、從周芳國遷讃岐國、然後遂爲

田中鄕〇中略　高岡鄕〇中略　野原鄕〇中略　高瀨鄕〇中略　垂水鄕〇中略

右所々可有御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年〇德治元年六月十二日　右衞門

高倉前宰相殿

〔太平記　四〕一宮幷妙法院二品親王御事

妙法院〇尊澄法親王ハ是ヨリ引別テ、備前國迄ハ陸地ヲ經テ、兒島吹上ヨリ船ニ召テ、讚岐詫間ニ著セ給、是モ海邊近處ナレバ、寒霧御身ヲ侵シテ、瘴海氣冷タ、漁歌牧笛夕ベノ聲、嶺雲海月秋色、總テ御耳ニ觸事、哀ヲ催シ、御涙ヲ添ル媒トナラズト云事ナシ、

〔壬生家文書　四〕讚岐國善通寺領同國弘田鄕事、故香川美作入道乍號代官、年貢未濟之間令改易處、同帶刀左衞門尉競望未休云々、太無謂、所詮不日退被妨、可致全所務之由所仰下也、仍執達如件、

文明六年三月十二日　大和守在判　和泉守在判

隨心院雜掌

〔南海通紀　十〕阿波屋形長治應狩讚州記

元龜三年冬、三好長治讚州ニ應狩センガ爲ニ、十河ノ城ニ來リ、國中ノ諸將來集ス、山田郡木太鄕ハ深江多クシテ、鳧鴨多ク翔ル所也、

〔南海通紀　十三〕讚州藤目城主賑從土州元親記

此藤目ノ城ハ、那珂郡眞野鄕七ケ村ノ内ニ、本目新目藤目山脇トテ、阿波ノ大西ノ地ニ隣シテ七里ノ山越也、

〔南海通紀　十四〕信長公四國征伐記

言上日吉社領讃岐國作田庄堺四至打牓示事
一四至　東限紀伊郷堺（苅田河以北者、紀伊郷堺、以南者姫江庄堺、）　南限姫江庄堺　西限大海（海面限伊吹島、）　北限坂本郷
堺（兩方共田地也、其堺東西行之畷正通之、）
一牓示四本　一本（長角五條七里一坪）　紀伊郷幷山本郷□本郷當庄四之辻打之、　一本（巽角井下村）　東南者
姫庄堺、其堺路之巽角打之、路者當庄内也、　一本（坤角濱上打之、海面限伊吹島、）南者姫江庄内埴穴堺、北者當庄
薗生村堺、　一本（乾角海面限參里、）北者坂本郷、南者當庄鈎洲濱打之、但艮牓示之本、與古作畷之末遠
連立火煙、追其通紀其堺打之、（中略）
右依去三月十四日宣旨、引率國使、堺四至打牓示畢、仍注進言上如件、
建長八年八月廿九日　國使散位布師
〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御齋、早旦著直衣、（烏帽）相具御書御手箱
□□□（存日予預置也、）參御所、（中略）女院御方自餘御書等、（或有御封、以檀紙被立文、之押折上下、又有銘等、）悉盛宮蓋、（中略）
一通（銘曰、西殿准后、[illegible]）　准后高倉殿（號西殿）　讃岐國宅間郷（中略）
これら御分にて候、後には尊治の親王にまいらせられ候べく候、
嘉元三年七月廿六日　御判
一通（銘曰、堀川准后、久我具守女、）　處分　堀川准后　讃岐國井戸郷
爲別納一期知行せられ候べく候（中略）
嘉元三年七月廿六日　御判
〔後宇多院御領目錄〕一今林准后御領（中略）　一讃岐國　飯田郷（實雅丸）　氷上郷（重方）（中略）　石田郷
（中略）高屋郷（中略）　井戸郷（中略）　詫間郷（中略）　多配郷（中略）　太田郷（中略）　山田郷（中略）　栗
隈郷（中略）　林田郷（中略）　一宮　邦家郷（中略）　良野郷（中略）　三木井上郷（中略）　生野郷（中略）

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔壬生家文書四〕廳宣　留守所

可早以良田郷內見作田參町充置善通寺御影堂修理用途料事、〇中略

嘉祿元年四月日

大介源朝臣〇中略

左辨官下讚岐國善通寺

應且爲佛法興隆、且爲鎭護國家、停止大嘗會役夫工造內裏以下恒例臨時勅院事、大小國役國使入勘幷別當妨、爲當寺金堂法華兩堂領、當國良田郷事、

四至(中略)南限生野郷堺(中略)北限葛原郷堺〇中略

弘安四年八月廿八日　大史小槻宿禰

權右中辨藤原朝臣

〔元亨釋書十三明達〕釋俊芿字不可棄、肥之後州飽田郷人、〇中略嘉祿三年春、寢疾、相國〇藤原道家聞疾、割讚州二村郷、以充寺供、芿報以宋本經王一部、且爲終贐、

〔壬生家文書四〕廳宣　留守所

可令早以生野郷西畔、准善通寺領所、相四至內永停止殺生、以境內公田拾貳町、致彼寺修造事、〇中略

右當寺者、弘法大師之草創、國中無雙之精舍也、而彼郷之山野、並境於咫尺、〇中略

寶治三年三月日

〔壬生家文書一〕注進

刈田郡　山本　紀伊　作田〈○高山寺本註云、久沼以多、〉坂本〈佐加毛止〉高屋〈多加也〉姫江〈比女乃江〉

〔東大寺要錄六〕造寺司　牒三綱所

合奉宛封一千戸〈○中略〉　讃岐國一百五十戸〈山田郡宮處鄕五十戸　香川郡中間鄕五十戸　鵜足郡川津鄕五十戸○中略〉

以前寺家雜用料、永配封、當年所輸之物爲始、奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日　主典從七位上阿刀連講主〈○下略〉

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年五月庚申、播磨國揖保郡大興寺賤若女、本是讃岐國多度郡藤原鄕女也、〈○下略〉

〔續日本紀考證十二桓武〕狩谷氏曰、訓カツラハラ、和名抄讃岐國鄕名多度郡葛原〈加都良波良〉是也、元融案、神龜四年十一月、改備前國藤原郡、爲藤野郡、寶字元年三月、改藤原部姓、爲久須波良部、但此地僻遠、當時未及改換、後日乃改葛原耳、

〔梅園奇賞二〕太政官符　治部省

口學僧空海〈俗名讃岐國多度郡方田鄕戸主正六位上佐伯直道長戸口同姓眞魚〉

右去延曆廿二年四月七日出家〈○此闕損〉　符到奉行、

口五位下守左少辨藤原貞嗣〈闕損〉　左大史正六位上武生宿禰眞家

延曆廿四年九月十一日

〔源平盛衰記四十二〕金仙寺觀音講附六條北政所使逢義經事

其日ハ阿波國坂東西打過テ、阿波ト讃岐ノ境ナル、中山山口ノ南ニ陣ヲ取、翌日ハ引田浦、入野、高松鄕ヲモ打過テ屋島城ヘ押寄ケリ、

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事〈○中略〉

一頰倒庄々〈○中略〉　讃岐國　寒川郡鴨鄕、墾田地二町、畠卅三町五段百卌九步〈○中略〉

刈田郡 豐田郡

鄕

〔全讚史一郡鄕〕刈田郡六鄕

右刈田郡六鄕三十九村(今。日。豐。田。郡。西部管轄也、○下略)

〔三代實錄六清和〕貞觀四年五月十三日庚辰、讚岐國刈。田。郡。人直講從六位上刈田首安雄、散位從七位上刈田首氏雄、阿波博士從八位上刈田首今雄等三人、改本居隷左京職、

〔南海通記十三〕香川信景降土州元親記

三ケ國ノ諸將土州ヘ拜禮ノ衆多シト云ヘドモ、香川ハ多度、三野、豐。田。ニ那珂郡ノ内ヲ加ヘテ四郡ノ主ナレバ、其所柄モ豐饒ニシテ、衰亂ノ世ト云ヘドモ、自餘ノ兵將ニ越タリ、○下略

〔倭名類聚抄九讚岐國〕大内郡　引田(比介多)　白鳥(之呂止利、○呂、高山寺本作眞、)　入野(爾布乃也)　與泰(與加、日闕、○高山寺本、皆上有二々字、郡泰曇字、)

寒川郡　難破(上闕本作)　石田(伊之多)　長尾(奈加乎)　造田(美夜岐)　鴨部　神埼(加無佐木)　多知(○知、高山寺本作和、)

三木郡　井門(井乃)　高岡(多加乎加)　氷上(比加美)　田中(多奈加)　井上(井乃倍)　池邊(伊介之倍)　武例(加無)　幡羅(波良)

山田郡　殖田(宇惠多)　池田(伊介多)　坂本(佐加毛止)　蘇甲(曾加波)　三谷(美多爾)　拜師(波也之)　田中　本山(毛止也萬)　高松(多加萬都)　宮(美也止古路)　喜多

香川郡　大野(於保乃)　井原(井乃波良)　多配(多倍)　大田(於保多)　笑原(乃波良)　坂田(佐加多)　成相(奈良比)　河邊(加波乃倍)　中間(奈加都萬)　飯田(比多)　百相(毛々奈美)　笠居(加佐乎利)

阿野郡　新居(爾比乃美)　山田(也萬多)　羽床(波由可)　甲知(加久知)　鴨部(加毛)　氏部(宇治倍)　山本(也萬毛止)　林田(波也多)　松山(萬都也萬)

鵜足郡　長尾(奈加乎)　小川(乎加波)　井上(井乃倍)　栗隈(久利久萬)　坂本(佐加毛止)　川津(加波都)　二村(布多無良)　津野(都乃)

那珂郡　眞野(萬乃)　良野(與之乃、○高山寺本、)　子松(古萬都)　高篠(多加之乃)　櫛無(久之奈之)　垂水(多留美)　喜德　郡家　柞原　金倉　智多

多度郡　生野(伊加乃)　良田(與之多)　葛原(加都良波良)　三井　吉原(與之波良)　弘田(比呂多)　仲村(奈加無良)

三野郡　勝間(加都萬)　高瀬(多加世)　熊岡(久萬乎加)　大野(於保乃)　高野　本山　託間

大將源朝臣多宜ㇾ奉ㇾ勅依ㇾ請、
元慶四年三月廿六日

多度郡

〔南海通記十一〕阿波讃岐違却記
香川方ヘモ阿州大西ヨリ手合トシテ、大西角養數百人ヲ以テ、讃州中通口ヨリ押出ス處ニ、仲郡。ノ小城持ドモ、長尾大隅守ニ馳加ヘテ、新目木目山脇等先鋒トシテ合戰ス、
〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口〇中略
讃岐國拾參處〔中略〕多度郡一處〇中略
天平十九年二月十一日〇署名略
〔今昔物語十九〕讃岐國多度郡五位聞法卽出家語第十四
今昔、讃岐國多度ノ郡ロロノ鄕ニ、名ハ不ㇾ知ズ源大夫ト云者有ケリ、
〔南海通記九〕阿州三好實休發向讃州記
香川氏〇景則ハ中略細川頼之ヨリ西讃岐ノ地ヲ賜テ、多度郡天霧山ヲ要城トシ、多度津ニ居住セリ、此地ヲ論ザレバ、三郡ニ入事ヲ不ㇾ得、是郡堅固ト云ベキ也、

三野郡

〔播磨風土記飾磨郡〕美濃里〈繼潮〉土中下　右號ㇾ美濃者、讃伎國彌濃郡人、到來居之、故號ㇾ美濃、
〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口〇中略
讃岐國拾參處〔中略〕三野郡一處〇中略
天平十九年二月十一日〇署名略
〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年三月辛酉、讃岐國三野郡人丸部臣豐抁、各以ㇾ私物ㇾ養窮民廿人已上、賜ㇾ爵人二級、
〔續日本後紀四仁明〕承和二年七月乙卯、賜讃岐國三野郡空閑地百餘町時子内親王、

〔南海通紀 二十一 奥書〕于時文化十有一甲戌年夷則、不揮拙筆一筆而寫之畢、　讃岐國綾南條郡新居村
甲賀郷神主　豊島筑前守豊原姓吉政什物

鵜足郡

〔播磨風土記 揖保郡〕飯盛山　讃伎國宇達郡飯神之妻、名曰飯盛大刀自、此神渡來、占此山而居之、故名飯盛山、

〔日本靈異記 中〕閻羅王使鬼受所召人之饗而報恩緣第廿五
讃岐國山田郡有布敷臣衣女、聖武天皇代、衣女忽得病、時偉備百味、祭門左右、賂於疫神而饗之也、閻羅王使鬼來召衣女、○中略 鬼語衣女言、我受汝饗、故報汝恩、若有同姓同名人耶、衣女答言、同國鵜垂郡有同姓衣女、○下略

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口○中略
讃岐國拾參處 ○中略 二處 鵜足郡 ○中略
天平十九年二月十一日 ○署名略

那珂郡

〔續日本紀 三 文武〕慶雲四年五月癸亥、讃岐國那賀郡錦部刀良、○中略 各賜衣一襲及鹽穀、○下略

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口○中略
讃岐國拾參處 ○中略 三處 那珂郡 ○中略
天平十九年二月十一日 ○署名略

〔類聚三代格 七〕太政官符
應加置那珂郡主政主帳各一員事
右得讃岐國解偁、彼郡解偁、新立一郡、曰所管稍多、而郡司少員、事多闕怠、檢案内、山田郡十鄕、餘戸、課口一千七百六十、既置主政二員、主帳二員、而此郡十鄕、課口二千八十、只置主政一員、主帳一員、望請因准彼郡、加置件職各一員、以濟雜務者、國加覆審、所申有實、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衛

〔古事記傳二十九〕讚岐綾君、綾は倭名抄に、讚岐國阿野綾郡これなり、今は綾ノ北條、綾ノ南條とて、二郡に分てり、

〔萬葉集雜歌一〕幸讚岐國安。益。郡。之時軍王見山作歌○中略

右撿日本書紀、無幸於讚岐國、亦軍王未詳也、但山上憶良大夫類聚歌林曰、紀曰、天皇○欽明十一年己亥冬十二月己巳朔壬午、幸于伊豫温湯宮云云、一書云、是時宮前在二樹木、此之二樹、斑鳩イカルガ此米二鳥大集、時勅多掛稻穗而養之、乃作歌云云、若疑從此便幸之歟、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口○中略

讚岐國拾參處(中略)阿野郡二處○中略

天平十九年二月十一日○署名略

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年九月戊寅、讚岐國阿野郡人正六位上綾公菅麻呂等言、己等祖、庚午年之後至于己亥年始蒙賜朝臣姓、○下略

〔南海通紀九〕阿州三好實休發向讚州記

三好豐前入道實休○中略讚州引田ノ浦ニ到リ、當國ノ兵衆ヲ聚ム、○中略香西越後守來謁シテ謀ヲ定、綾。郡。額ノ坂ヲ越テ仲郡ニ到リ、○永祿元年九月十八日、金倉寺ヲ本陣トス、

〔南海通紀十三〕讚州香西家內亂記

天正六年ノ夏、香西伊賀守夫妻ノ間不和シテ、妻女ヲ羽床ヘ送シム、羽床伊豆守大ニ怒テ旗下ヲ手切リシ、南。條。北。條。二郡ヲ合呑シテ自立セントス、○中略

香川民部少輔服從毛利家記

天正六年ノ夏、羽床伊豆守資載、不慮ノ變ニ依テ、息男忠兵衛尉、杌木ノ城ニテ、討死セシカバ、其鬱憤不止シテ、香西氏ト前代親好ヲ捨テ、羽床ニ自立センコトヲ欲ス、故ニ綾。ノ。南。條。北。條。ノ諸將ニ使ヲ馳テ廻文ヲ通ジ、我ニ服セシメントス、○下略

阿野郡
南條郡
北條郡

大野鄕、略○中井原鄕、略○中百相鄕、略○中多配鄕、略○中大田鄕、略○中篦原鄕、略○中坂田鄕、略○中成相鄕、略○中
河邊鄕、略○中中間鄕、略○中飯田鄕、略○中笠居鄕、略○中
右香川郡十二鄕、略○中從貞享元年分爲東西、坂田以下爲西、

○按ズルニ、本郡ヲ東西ニ分ツコト、貞享元年ヨリト爲セドモ、旣ニ拾芥抄ニ香東郡アリ、又寬永十六年ノ讃岐國總村高帳ニ、香東香西二郡ノ稱見エタリ、

〔續日本紀三十郡德〕神護景雲三年十月甲辰、讃岐國香川郡人秦勝倉下等五十二人、賜姓秦原公、

〔南海通紀十〕武田信玄間使來四國記

其使者略○武田信玄使者入道四郞守日向玄德齋讃州引田浦ニ着テ東ヨリフレ渡シ、香。西。郡。笠居鄕ノ末寺常福寺ニ來リ、暫タ留リ領主ニ達ス、

〔南海通紀十一〕阿波讃岐違却記

矢野駿河守ハ引田ノ城ヨリ寒川郡ニ打入リ、董庭ノ城ニ取向フ、略○中森飛驒守引田ノ浦ニカヽリ居ル、香西家ニ其聞ヘ有ケレバ、香。東。郡。ノ士民ノ子女ハ、坂田室山ノ城ニ入レ、貲財雜物ハ地中ニ埋タ、兵卒ハ佐料ノ城ニ集ム、

〔全讃史郡一鄕〕阿。野。郡。九鄕、略○中
新居鄕、略○中山田鄕、略○中羽床鄕、略○中甲知鄕、略○中鴨部鄕、略○中氏部鄕、略○中山本鄕、略○中林田鄕、略○中
松山鄕、略○中
右阿野郡九鄕三十五村、略○中勝代分爲二、甲知以上曰南。條。郡。、鴨部以下曰北。條。郡。、貞享元年改曰阿野南阿野北、

〔古事記中景行〕又娶吉備臣建日子之妹大吉備建比賣、生御子建貝兒王、一柱○中略凡是倭建命之御子等幷六柱、略○中建貝兒王者、讃岐綾君之祖、中略

山田郡

香川郡
香東郡
香西郡

（日本靈異記下）强非理以徵債取多倍而現得惡死報第廿六
田中眞人廣忠女者、讃岐國美貴郡大領外從六位上小屋縣主宮手之妻也、
（法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳）合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口（中略）
讃岐國拾參處（中略）三木郡三處（中略）
天平十九年二月十一日（署名略）
（日本書紀天智二十七）六年十一月丁巳朔、是月築倭國高安城、讃吉國山田郡屋島城、對馬國金田城、
（法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳）合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口（中略）
讃岐國拾參處（中略）山田郡一處（中略）
天平十九年二月十一日（署名略）
（南海通紀六）寒川氏讃州三谷合戰記
文明十一年九月廿五日、三谷兵庫頭景久兵ヲ潛ニシテ、寒川左馬允ガ居所ニ押寄セ夜戰ヲナシ、民屋ヲ放火シテ歸ル、是去年德政行ルヽニ依テ、凶賊邑里ニ起テ民間ノ禍害ヲナス、山田郡ト寒川郡ハ山里相續テ隣ヲナス故ニ盗賊止事ナシ、是ニ由テ領主ノ遺恨ニ及ベリ、
（南海通紀二十）香西藤尾八幡宮記
或人曰、此地ヲ香川ト云事ハ、上代風土記ヲ定メラルヽ時、國中ニ川アリ、水上南山ヨリ流テ末北海ニ入、其水清シ、又西山ニ花木アリ、西風ニ匂ヒ來テ此河水ニ薰ズ、因テ名トシテ香川ト云、其西山ヲ根香山ト云、是其因緣也、香川ノ流北海ニ入、是ヲ大江ト云、川ノ東ヲ郷東ト云、川ノ西ヲ郷西ト云、是其本義也、又川ノ東西ヲ分テ二郡トシ、香東香西ト云也、此例諸國ニモ多シ、香西ノ地勢勝レテ山川ノ固メヨシ、（下略）
（全讃史郡郷一）香川郡十二郷（中略）

大内郡

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合庄庄倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口〈中略〉

讃岐國拾參處〈大内郡一〇中略〉

天平十九年二月十一日〈署名略〉

〔續日本後紀〈十三仁明〉〕承和十年五月丙申、讃岐國大内郡小郡、只有領帳、領則領調入京、帳猶留國、症疹非常、移病无人從公、加之郷戸田數、既堪下郡、改小爲下、加領一員焉、

〔三代實錄〈四十八光孝〉〕仁和元年十一月十七日丁酉、讃岐國大内郡人正六位上行右少史兼明法博士凡直春宗、男女九人改居貫、附右京三條口坊、

〔南海通紀〈十〉〕天野駿河守守讃州引田城記

去ル元龜三年ニ、阿州篠原彈正入道紫雲ガ娘ヲ、讃州安富筑前守ニ嫁シテ婚姻ヲナシ、阿讃兩州ノ好ミヲ結ブ、然ル處ニ大内郡ハ寒川丹後守ガ領也、阿州ノ中間ニアツテ、通用自由ナラズ、〈中略〉安富分別シテ篠原入道ニ告ル、入道モ最ト同意シテ長治〈〇三好〉ヲ諭シ、長治モ同意シテ、寒川ヘ使節ヲ遣テ大内郡ヲ所望ス、寒川氏小身ナレバ力ニ不及シテ、大内郡四郷ニ引田ノ雲山ノ城、水主ノ虎丸城ヲ添テ三好長治ヘ獻ジ、其身ハ前山晝寢ノ城ニ入ル也、

寒川郡

〔續日本紀〈六元明〉〕和銅六年五月甲戌、讃岐守正五位下大伴宿禰道足等言、部下寒川郡人、物部亂等二十六人庚午以來、並貫良人、但庚寅校籍之時、誤渉飼丁之色、自加覆察、就令自理、支證的然、已得明雪、自厥以來、未附籍貫、故皇子命宮檢括飼丁之使、誤認亂等、爲飼丁焉、於理斟酌、何足憑據、請從良色、許之、

〔續日本紀〈四十桓武〉〕延曆十年九月丙子、讃岐國寒川郡人正六位上凡直千繼等言、千繼等先星直、譯語田朝廷〈敏達〉御世、繼國造之業、管所部之堺、於是因官命氏、賜紗拔大押直之姓、〈下略〉

三木郡

〔日本書紀〈三十持統〉〕三年八月辛丑、詔伊豫總領田中朝臣法麻呂等曰、讃吉國御城郡所獲白鷰、宜放養焉、

	山田	香川	阿野	鵜足	那珂	多度	三野	刈田		
			綾		那賀					
		香河	同	鵜垂						
	山田(ヤマダ)	香川(カガハ)	阿野(アヤ)	鵜足(ウタリ)	那珂(ナカ)	多度(タド)	三野(ミノ)	刈田(カタ)		管十一
	同	同	同	同	同	同	同	同		同
	同	香川 香東	同	同	同	同	同	豐田		十二郡
	同	香西 香東 香川	南條 北條 阿野	鵜足 宇足	那珂 仲	多度 多渡	同	同		十三郡
	同	香川(カガハ)	阿野(アノ)	鵜足(ウタ)	那珂(ナカ)	多度(タド)	同	同		十一郡
	同	同	同	同	同	同	同	同	小豆島	十二郡
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	小豆郡	同

國府

能島ニ與シテ貨利ヲ得ル故也、讃州ノ諸將外ハ細川家ニ服シ、內ハ大內家ニ倚テ能島ト語ラヒ、大明朝鮮ノ船ヲ渡シ、貨利ヲ得テ國用ヲ足シム、是亂世ニ國家ヲ保ツ一助也、〇下略

〔倭名類聚抄 五國郡〕讃岐國 國府在阿野郡、行程上十二日、下六日、

〔菅家文草 四詩〕丙午之歲 〇仁和二年 四月七日、予初莅境巡視州 〇讃岐 府、府之少北有一蓮池、池之近東有一長老、〇下略

〔南海流浪記〕十二日 〇仁治四年二月 サヌキノ國府ニイタル、路間六里、廳沙汰トシテ有祗候、

〔全讃史 一都邑〕上古國府　倭名抄云、國府在阿野郡、

阿野郡の何處に有事を知人稀なり、因て考るに、今の府中は古へ國府有を以て云ならん、古は此地を甲知と云、日本書紀には河內と云、是古名ならん、河內甲知國音同じ、然るに其府の所、定かに知がたし、按ずるに、菅家文草云、予初莅境巡視州府、府之少北有一蓮池、蓮池とは今の國分村の關の池なり、余 〇中村鼎 が壯年の時迄は鷺蓮子多かりき、今はなし、又云、開法寺在府衙之西、此二ツを以て考れば、蓋今の新宮の邊より綾河に跨て有と見ゆ、余往年新宮の山にて、古瓦の全形なるを得たり、甚偉矣、是古府の瓦ならん、此府讃留靈王より元弘建武の頃まで、王政の間の治府なり、

郡

〔倭名類聚抄 五國郡〕讃岐國 〇註略 管十一 〇註略 大內 於布知 寒川 佐無加波 三木 山田 夜末太 香川 加介波 阿野 綾 鵜足 宇多利 那珂 奈加 多度 三野 美乃 刈田 萬多

〔延喜式 二十二民部〕讃岐國、上、管 大內 オホチ 寒川 サムカハ 三木 ミキ 山田 ヤマタ 香川 カヘ 阿野 アヤ 鵜足 ウタリ 那珂 ナカ 多度 タド 三野 ミノ 刈田 カリタ 右爲中國、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕讃岐 上中 十一郡、大內、寒河、三木、山田、香川、鵜足、那珂、多度、三野、豐田、阿野、綾河野 香東、大野、

〔讃岐國總村高帳〕寬永拾六年卯三月朔日極リ帳奧書ニ

奪ヒ、仙石秀久ヲ封ジ、宇足津ニ治ス、又山田郡ヲ十河存保ニ賜フ、明年、秀久存保共ニ從テ、西征シ、存保戰沒シ、秀久節度ニ違ヒ、皆其邑ヲ收メ、之ヲ尾藤知宣ニ賜フ、尋テ罪ヲ獲、其封ヲ奪ヒ、生駒親正ヲ全州ニ封ジ、高松ニ(舊名野原ト云、親正ニ至リ改稱ス、)治ス、寬永十七年、曾孫高俊罪アリテ國除セラレ、松平賴重ヲ高松ニ封ジ、中國探題トナス、(拾貳萬石、)又山崎家治ヲ丸龜ニ封ズ、(五萬三千石、)三世嗣絕エ、萬治元年、京極高和之ニ代リ、元祿中、孫高或(タカモチ)、弟高道ヲ多度津ニ分封ス、凡テ三藩、王政革新、廢シテ縣トナス、既ニシテ改テ香川縣ヲ置、又廢シテ名東縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕讚岐國造

輕島豐明朝(○應神)御世、景行帝兒神櫛王三世孫須賣保禮命定賜國造、

〔日本書紀七景行〕四年二月甲子、天皇幸美濃、(○中略)仍喚八坂入媛爲妃、(○中略)次妃五十河媛生神櫛皇子、稻背入彥皇子、其兄神櫛皇子、是讚岐國造之始祖也、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年十一月十一日辛巳、先是正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏言、書博士正六位下佐伯直豐雄款云、先祖大伴健日連公、景行天皇御世、隨倭武命、平定東國、功勳蓋世、賜讚岐國、以爲私宅、健日連公之子、健持大連公子、室屋大連公之第一男、御物宿禰之胤、倭故連公、允恭天皇御世、始任讚岐國造、倭故連公、是豐雄等之別祖也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、從五位上大伴宿禰道足爲讚岐守、

〔吾妻鏡十六〕建久十年(○正治元年)三月五日丁酉、後藤左衛門尉基清依有罪科被改讚岐守護職、被補近藤七國平、幕下將軍(○賴朝)御時被定置事被改之始也云云、

〔南海通記七〕四國幷近國錯亂記

讚岐國六人ノ旗頭ハ、細川管領家ノ臣タリ、細川政元ノ變ヨリ大内家ニ服スト云ヘドモ、今大内細川和睦ノ故ニ細川晴元ニ歸服ス、然レドモ大内義隆ニ從事モ古ノ如シ、是舊道ヲ持者ハ豫州

宿驛

丸龜在二多度郡一、至二江戸一百八十四里半、坤至二金毘羅一三里、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬○中略

讚岐國驛馬刈田、松本、三谿、河内、甕井、柞田各四疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考二南海道〕讚岐　古作二讚吉一持統紀、武備志作二讚耆一、　上國、管十一郡、五島、三百七十七村、

大内三十四村　寒川二十六村拾芥抄作二寒河一　三木二十村持統紀作二御城郡一　山田三十村　香川四十七村　阿野三十五村古國府、古事記作二綾一、萬葉集作二安益一、　鵜足二十七村　那珂四十村文武紀作二那賀一、允恭紀長邑、即此地、萬葉集中之水門、亦指二此地一、　多度二十二村　三野二十七村　豐田三十九村本刈田郡、延喜式、和名抄共作二刈田一、豐中世改二今名一、

〔日本地誌提要六十二讚岐〕沿革　古ヘ國府ヲ阿野郡ニ置、今ノ府中村、保元ノ亂、崇德天皇ヲ寒川郡志度ニ遷シ、長寛二年崩ズ、元曆元年、平氏安德天皇ヲ奉ジテ來奔シ、行宮ヲ屋島山田郡ニ營ス、文治元年、源義經來リ攻メ、屋島陷リ、平氏尋テ亡ビ、源賴朝、佐々木盛綱ヲ以テ守護トナス、建久ノ末、近藤國平之ニ代ル、建武中興、舟木賴重ヲ以テ守護ニ補ス、足利尊氏ノ反スル、細川和氏ヲシテ四國ヲ略セシム、和氏ノ從弟定禪、賴重ヲ逐テ、高松城山田郡高松鄕喜岡、今之ヲ古高松村ト云、ニ據リ、遂ニ本州ヲ取ル、延元三年、和氏ノ弟賴春、州守ニ任ジ、守護ニ補ス、正平十六年、和氏ノ子淸氏吉野ニ歸順シ、高屋城阿野郡ニ據テ、四國ヲ經略ス、十八年、賴春ノ子賴之、淸氏ヲ襲殺シ、其弟詮春ヲ以テ守護トナシ、岡城香川郡ニ居リ、世々州守ニ任ジ、州ノ豪族、寒川、香川、香西、十河(ソガウ)諸氏ヲ服從ス、詮春ノ玄孫成(シゲ)之ニ至リ、阿波守護ヲ兼ス、成之ノ曾孫持隆ニ至リ委靡振ハズ、天文ノ初、阿波ノ三好長慶、細川氏ニ代リテ國柄ヲ執リ、其弟一存(カズマサ)ヲシテ十河氏ヲ繼シメ、山田郡十河城ニ居リ、州事ヲ管セシム、二十一年、三好之康、持隆ヲ弑シ、寒川諸族ヲ降シ、州東ノ地ヲ取ル、獨香川信景、天霧城多度郡ニ據リ、州西三郡多度、三野、豐田ヲ領ス、永祿四年、十河一存卒シ、養子存保(マサヤス)嗣ギ、天正五年、阿波ヲ兼領ス、七年、長曾我部元親、香川氏ヲ降シ、十一年、遂ニ存保ヲ逐ヒ全州ヲ併ス、十三年、豐臣氏南征シ之ヲ

〔日本實測錄　五〕從伊豫國宇和島沿海至岡崎○中略

讃岐國豐田郡和田濱川口（至和田濱宿所、汎測六丁三十間、北極高三十四度五分半、）　三里三十二町三十九間（至有明濱觀音寺川口、一里一十五丁二十四間）　三野郡仁尾村、三十四度一十三分、一里二十三町二十六間半　大濱浦（至船越汎測一十丁三十間）　四里四町四十間半（至箱崎二里一丁五十二間）　積浦、三十四度一十五分半、一里九町二十六間（至大濱浦和入丁二）　詫間村新濱（至羽府濱、汎測七丁三間）　一里五町一十八間（至高谷鼻、二丁四十六間）　同羽府濱　二里三十二町三十六間　松崎村、三十四度一十四分、二里五町二十間半　多度郡多度津濱町一里、一十三町一十四間、　那珂郡丸龜福島（至通町、四丁四間、北極高三十四度一十八分、從通町至金毘羅松尾町、三里一十五丁二十六間半、北極高三十四度一十二分、從松尾町至仁王門、三丁五十四間、）　三町三十間　鵜足郡丸龜平山　二十七町一十間（至土器川口、六丁七間）　宇足津村、三十四度一十九分、二里三十一町四十六間　阿野郡青海村大藪、三十四度二十二分、三里六町五十九間半　香川郡笠居村龜水（至生島、汎測三丁三十一間）　三十一町五十四間　同生島、（至生島宿所、汎測六丁）　三十四度二十二分半、　三里五町三間半（至高松西門、二里三十一丁四十九間）　高松通町（至東濱町、五丁一十二間、北極高三十四度二十一分半、）　一里六町五十四間（至東濱村新川口二丁）　山田郡潟元村新川口（至[illegible]汎測二十六丁一十七間）　二里二十五町四十五間（至屋島村檀浦、二里八丁二十一間半）　潟元村藤目橋　一里二十八町五間　庵治濱村、三十四度二十四分、　三里三十四町五十一間（至竹ケ浦、六丁四十四間半）　寒川郡志度村、三十四度二十分半、　二里四十四間半（至小串崎、一里一十一丁四十五間半）　鴨部、下庄村　二里二十八町五十間（至大串崎、一里五丁一十間）　小田村、三十四度二十一分、　二里二十四町四十九間半　津田村　三里一十一町三十間半（至江口、一里二十九丁一十四間半）　四度一十六分、　三里三十一間（至安戸龜口、一里三十五丁一十八間）　引田村、三十四度一十四分半、　二里八町一十八間（至國界、一里一丁四十二間）　阿波國板野郡折野村

〔和漢三才圖會　七十九讃岐〕高松（在香川郡、濱邊、至江戸百七十九里半、至八島一里半、中國巷丸龜六里、[illegible]）謂有道通、是具古語也、

どやこのてがしはのなかるらむとおぼゆ、〇下略

〔易林本節用集下〕讚岐、(讚州)上、管十一郡、東西三日、山川田畠均等、五穀豐、魚貝之類多、名人多出、是也、大中國也、

地勢

〔日本地誌提要六十二讚岐〕形勢 南方山ヲ負ヒ、北ハ瀨戸内海ニ面シ、群島棋錯、三備ニ連リ、景勝ノ地多シ、島民率ネ舟居業ヲ營ス、州内陂池數千灌漑ニ宜シク、瀕海平夷肥沃、魚鹽ノ利ヲ兼ヌ、風俗溫順、

道路

〔全讚史一〕讚岐上下道行程考

倭名鈔云、讚岐東西行程、上十二日、下六日、大凡讚岐國、南衿蒼山、而北帶碧海、則其水皆北走、故南爲上、而北爲下、其所言下道、則吾人所往還驛路所倚、行程三十里、于今彰々、昔在崇峻帝定驛亭爲六、與行程六日相符矣、其所言上道、則崇峻帝定讚之封境、官吏所往返之行道也、然而阿讚之分界、則皆深山而人迹所難至、故其迹鹵莽滅裂難知矣、因更推窮其迹、蓋發大内郡坂本、登柑子峯、下百折坂、渉結髻川、躋花折峯、過猿額龍王山、下近房、又西折泝狩井川、(鹽屋川上流)過行成與田山、登大奈良山、(寒川郡)又西登大窪山及中山、(三木郡)下津柳、經小簑、(瀑布所在)更南折過香嶽馬地作野、更西至鹽江、(香川郡香川之源委)復南折經樺川、升大瀧、西下内場、經別支小出河、至合栗、過二股二相上峯、(三野郡三河名山)下樫坂、(鵜足郡)至勝浦、登大鼓井、經家鼻木落、升大仙、經篠多峯、至石佛、(那珂郡)下鹽入、撿曲尾樫鉢杖立小沼、至山脇、經荒砥石野財田、(三野郡)至山本、(豐田郡)更南升巨鼇山、(雲邊寺山)下萩原、過和田、至鳥越、入豫章、其所由道、上峯下谷、沿川泝溪、或又回阿越嶺、崎嶇間關、行道甚難澀、是以行程經十二日也、(豫章)〇予老矣、不能遍窮其域、嘗採葉、從大内鹽屋南入山間、經小海、過東山、更西經與田大奈良、過大窪山、從小簑南折、經香嶽、過馬地作野、又西至鹽江、從樺川南升大瀧、西下内場、過別支小出川、更北過燒堂、又西折經甲斐股砥石、過樫原、又南升大仙、下中通、更西北隨河至金毘羅、經十有餘日而歸、故以意逆之、而記其大較如此云、(或云、從雲邊寺臨豫西行數里至鳥)

八には、備前國兒島郡小豆島とあり、今は讃岐(寒川郡)に屬り、〇中略名義未思得ず、字も正字か借字か定めがたし、

(南海通紀十六)仙石秀久攻高松城記
天正十一年ニ、仙石權兵衞尉秀久、讃岐ノ國ヲ賜テ小豆島ニ來リ、引田ノ浦ヲ取テ島ヨリカケ持ニシ、時變ヲ考フ、安富肥前守ハ元ヨリ秀吉公ヘ人質ヲ出シタレバ、土佐方ニ不從シテ、雨瀧ノ城ヲ明テ、小豆島ニ渉リ居ス、

(萬葉集二挽歌)讃岐狹岑島、視石中死人、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌
玉藻吉、讃岐國者、國柄加、雖見不飽、〇中略彼此之島者雖多、名細之、狹岑之島乃荒磯面爾、廬作而見者、〇下略

(源平盛衰記八)讃岐院事
新院讃州配流ノ後ハ讃岐院ト申ケルヲ、廿九日ニ御追號有テ崇德院トゾ申ケル、去ル保元元年七月ニ、當國ニ遷サレ御座テ、始ハ直島ニ渡ラセ給ケルガ、〇下略

(吾妻鏡三)壽永三年〇元暦元年九月十九日乙巳、平氏一族、去二月、被破攝津國一谷要害之後、至于西海、掠虜彼國云云、〇中略
讃岐國御家人　注進平家當國屋島落付御坐、捨參源氏御方、奉京都候御家人交名事、〇中略
元暦元年五月日

(吾妻鏡四)元暦二年〇文治元年二月十六日庚午、關東軍兵爲追討平氏、赴讃岐國、〇中略平家者結陣於前所、前内府〇平宗盛以讃岐國屋島爲城郭、

(鹿苑院殿嚴島詣記)康應元年三月廿二日、讃岐國にもなりぬ、やつまといふ島あり、此しまは人の家のつまむきに似たるゆへにいふとなり、二面といふこじまも侍り、松がへなどおひたり、な

三十四度二十九分半、（福田村金ヶ崎距二十五町四十四間、至洲崎村、沿川至土庄村、徑測一十五町五十三間、）豐島、周廻四里三十一町一十六間、甲生村三十四度二十八分半、四島、周廻一十七町四十二間、桂島、周廻二十二町二十九間、沖島、周廻二十七町二十五間、チブリ島、周廻九町三十一間、辨天島、周廻一十二町三十七間、城島、（又呼二小島一、）周廻五町五十三間、フノコ島、周廻一十一町五十七間、小島、（板木村、）周廻一十二町三十八間、大麁部島、周廻六町四十一間、小豐島、周廻一里一十二町九間、遠測小四島　中四島

大四島　小豆島　アハラ島　長礒礕　和島　小島（小海村、）　鍋島　中ノ島　大島　大島　小島

（小部村、）小麁部島　辨天島（草加部村、）　辨天島（蒲野村、）　辨天島（室生村、）

香川郡　實測　小槌島、周廻一十三町一間、

山田郡　實測　大島、周廻一里一十三町二十三間、兜島、周廻八町九間、鎧島、周廻一十六町一十間、稻木島、周廻一十一町二十七間、高島、周廻一十七町五十五間、遠測　口島　ユルブタ島　小島（又呼二小ユルブタ一、）　馬立石

寒川郡　實測　鹿島、周廻七町、遠測　猿子島（又呼二新珠島一、）　猿子島　白岩（大）　白岩（小）　名子島

大内郡　實測　女島、周廻七町三十六間、遠測　絹島　九神島　一ッ島　二子島　通念島　沖ノ島

〔日本國郡沿革考（三南海道）〕讃岐（○中略）

鷹島　小豆島（九村、續紀三十八屬二備前國鷹島一、蓋後世改屬二讃岐國一、）　鹽飽島（十八村）　直島（三村）　男木島　女木島（以上五島、）

（延喜式等不レ載、）

〔古事記上〕伊邪那岐命、（○中略）妹伊邪那美命、（○中略）御合、（○中略）然後還坐之時、（○中略）次生二小豆島一、亦名謂二大野手上比賣一、

〔古事記傳五〕小豆島は、備前と讃岐との間の海中に讃岐の方によりて在り、（淡路島の西、兒島ノ東なり）續紀卅

鹽飽島屬島（蓋無郡名）　實測　本島、周廻四里一十六町四間、泊浦、三十四度二十四分、佐柳島、周廻一里二十六町八間、佐柳浦、三十四度二十一分、向笠島、周廻二十四町四十五間、長島、周廻一十九町二十五間、廣島、周廻四里二十四町五十七間、手島、周廻二里二十八町五十一間、小手島、周廻三十四町一十五間、小島（佐柳島）周廻一十九町七間、高見島、周列一里一十三町三十五間、牛島、周廻三十町四間、櫃石島、周廻一里一十三町四十四間、岩黒島、周廻一十五町一十八間、羽佐島、周廻九町二十八間、與島、周廻一里一十二町三十五間、小與島、周廻二十町一十九間、室木島、周廻一十町七間、沙彌島、周廻二十二町二十九間、瀨居島、周廻三十一町三十五間、小瀨居島、周廻一十二町三間、　遠測　島小島　ハヅシ岩　下二面島　辨天島　雀小島　歩渡島
上二面島

直島屬島（蓋無郡名）　實測　本島、周廻四里一十六町五十一間、高田浦、三十四度二十八分、向島、周廻一里八町四十四間、尾鷹島、周廻六町五十六間、柏島、周廻二十七町一十二間、荒神島、周廻一里二十三間、葛島、周廻二十七町二十五間、牛首島、周廻三十町四十六間、喜平島、周廻一十九町三十六間、屛風島、周廻一十五町五十三間、辻影島、周廻七町四十四間、安野島、周廻四町四十九間、京上臈島、周廻二十七町一十三間、寺島、周廻二十町三十九間、局島、周廻二十町二十九間、家島、周廻二十一町五十二間、男木島、周廻一里九町二十四間、女木島、周廻二里三町四十二間、　遠測　上島　帆掛島　下島島（又曰下島）　上島島（又曰上島）　小島　丸山島　下ハタゴ島
上ハタゴ島　六郎島　箱島

小豆島屬島（蓋無郡名）　實測　本島、周廻二十九里五町五十八間、土庄村、三十四度二十九分半、淵崎村伊喜末、三十四度三十一分、小海村、三十四度三十二分半、福田村、三十四度三十三分半、草加部村坂手、三十四度二十八分半、草加部村、三十四度二十九分半、池田村吉野、三十四度二十八分、池田村

疆域

岡崎村沿海 三十九里二町半、前同〇従東郡自岡崎村沿海二百六里四町二十九間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

讃岐　和田濱　三四度〇五分三〇秒　積浦　三四度一五分三〇秒

粟島　三四度一六分三〇秒　丸亀　三四度一八分〇〇秒

松尾町金毘羅境内　三四度一二分〇〇秒　本島　三四度二四分〇〇秒

佐柳島　同三四度二一分〇〇秒　小豆島　無之

豐島　三四度二八分三〇秒　大藪　三四度二二分〇〇秒

高松　三四度二二分三〇秒　志度村　三四度二〇分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　讃岐　高松　西一度四一分一四秒

〔日本地誌提要六十二讃岐〕疆域　東ハ阿波、西ハ伊豫、南ハ阿波、北ハ海ニ至ル、東西壹拾八里壹拾貳町、南北壹拾里、狭處貳里貳拾八町

島嶼

〔日本實測錄十島嶼〕讃岐國豐田郡　實測　伊吹島、周廻一里八町一十二間、股島、周廻一十一町二十八間、遠測　小股島　圓上島

三野郡　實測　粟島、周廻四里六町一十間、粟島浦、三十四度一十六分半、小蔦島、従南岬至西岬一十一町、大蔦島、従西岬至南岬二十二町、丸山島、周廻一十二町一十二間、志々島、周廻三十三町四十九間、

遠測　天神山　唐島　岩島　津島

多度郡　實測　亀笠島、周廻八町四十七間、

那珂郡　遠測　下眞島

鵜足郡　遠測　上眞島

納とある、是に因て思ふに、牟禮國か、乃禮は岐と切り、乎を省るなり、

〔倭訓栞前編十〕さぬき　讃岐をよむは音也、大和の地名、上總の地名因幡の地名にもあり、國名も共に狹貫の義、地形をいふなるべし、一說に竿の調の義、矛竿を貢せし事、古語拾遺に見えたり、のつ反ぬを略する也といへり、

〔全讃史一郡鄕〕國郡名義

讃岐國ハ東西二十餘里ニシテ、南北廣キ所ニテモ十里ニ足ラズ、因テ綿狹キ心ニテ讃　トイヘリ、古ハ佐貫トカケリ、書紀ニハ讃吉トカケリ、

〔全讃史一郡鄕〕東讃。古高十二万石、○中略西讃。古高五万〇〇六十七石五斗、○下略

〔古事記上〕伊邪那岐命、○中略妹伊邪那美命、○中略御合、生子、○中略次生伊豫之二名島、此島者身一而有面四、毎面有名、○中略讃岐國謂飯依比古、

〔萬葉集二相聞〕讃岐狹岑島視石中死人、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌

玉藻吉、讃岐國者、國柄加、雖見不飽、神柄加、幾許貴寸、○下略

〔冠辭考五〕たまもよし　さぬき

萬葉卷二に、長歌玉藻吉、讃岐國者云々、玉藻與といひて、奴とつゞけたり、佐を發語のごとくつゞけなせるは、さねかづらを寢る事にいひなすが如し、其外を隱てつゞくるもつれの事なり、吉は例の借字にて、與は呼出す辭、志は助辭のみなる事既にいひたり、奴とは玉藻の波にぬえ臥をいへり、下の奈行に擧る奴要草の女にしあれば、夏草の相ねの濱夏草の奴島の崎などいへるは、草の偃をいひつる中に、奴とのみつゞけしをおもへ、ぬえ、なよゝか、なびく、ぬる、れ、るなど通へり、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

讃岐高松、町東濱極高三十四度二十一分半、經度西一度四十分半、從淡路洲本同上(洲本[illegible]渡海、至[illegible]

古事類苑

地部二十九

讃岐國

讃岐國ハ、サヌキノクニト云フ、南海道ニ在リ、東及ビ南ハ阿波ニ接シ、西ハ伊豫、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十八里餘、南北凡ソ十里アリ、此國ハ古ヘ國府ヲ阿野郡ニ置キ、大内、寒川、三木、山田、香川、阿野、鵜足、那珂、多度、三野、刈田ノ十一郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世香川郡ヲ分チ、香東香西ノ二郡トナシ、阿野郡ヲ南條北條ノ二郡トナシヽカ、後並ニ其舊稱ニ復ス、明治維新ノ後、小豆島、豐島等ノ諸島ヲ以テ一郡ト爲シテ小豆郡ト稱シ、又大内、寒川ノ二郡ヲ合併シテ大川郡ト爲シ、阿野、鵜足ノ二郡ヲ綾歌郡ト爲シ、那珂、多度ノ二郡ヲ仲多度郡ト爲シ、三野、豐田ノ二郡ヲ三豐郡ト爲シ、三木、山田ノ二郡ヲ木田郡ト爲シ、新ニ高松、丸龜ノ二市ヲ設ケ、香川縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕讃岐佐奴岐

〔新撰類聚往來下〕國名〇中略 讃岐讃州

〔日本風土記一寄語島名〕讃書山奴計

〔古事記傳五〕讃岐國岐は古へは濁りていひしなり 倭名抄に佐奴岐、この名義未ダ思ヒ得ず、強ていはゞ、古語拾遺、神武天皇御世の事どもを云る所に、又手置帆負命之孫造矛竿、其裔今分在讃岐國、毎年調庸之外、貢八百竿、是其事等之證也と見え、臨時祭式に、凡桙木千二百四十四竿、讃岐國、十一月以前差綱丁進

覺ゆ、

〔源平盛衰記三十九〕維盛出屋島參詣高野附粉川寺謁法然房事一

サテモ御舟ニ乘移リ給、昔ニ聞阿波ノ鳴戶ノ沖ヲ漕渡リ、紀伊路ヲサシテ棹ヲ取、○下略

〔太平記十八〕春宮還御事附一宮御息所事

此儀ゲニモトテ、小舟一艘引下シテ、水主一人ト、御息女トヲ乘セ奉テ、渦ノ波ニ漲テ、卷却ル波ノ上ニゾ浮ベケル、○中略是ハ浦ニモ非ズ島ニモ非ズ、如何ニ鳴渡ノ浪ノ上ニ、身ヲ捨舟ノ浮沈ミ、鹽瀨ニ回ル泡ノ消ナン事コソ悲ケレ、

〔四國御發向幷北國御動座事〕大將秀長○秀吉弟於淡路福良、艤船揃人數、欲渡鳴門、彼迫門三國一之大難、一日一夜、蓋差引十二度也、差塩引塩相逆、則前現太山、後生不測、漁人諺曰、越此門、命之背骨、一度遭則生一箇、二度越則生二箇、可知其勢而已、舟若逆此潮、則十之一不遂、七花八裂、殊頃大雨涉日、其餘波成風、雖然定日限、間、大船六百艘、小船百三艘、從殿下○豐臣秀吉定舟奉行、浦々船頭力者立雙、檣櫓櫂諸勢一度相計潮時、遂出鳴門沖、譬如千行鴻雁翔蒼天、

〔一宮巡詣記拔萃下〕阿波一宮板野郡大麻彥神社圖

廿六日○元祿十年四月辰剋舟を出す、おふけ島壹里半も波あり、大鳴戶、小鳴戶の間の島なり、淡路へ渡す所は、大鳴戶の西の方中程に、裸島、飛島あり、福良浦中の町に休む、

器仗

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　阿波國卅人○中略

諸國器仗○中略　阿波國甲二領、横刀七口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

阿波山　阿波島共云〇中略

鳴渡（ナルト）　大なると、小なるとゝて、南海へ船の往來大難所なり。

高和浦（タカワ）　櫻ヶ池など、云名所有之

〔阿波名所圖會上〕鳴門　阿波淡路の境にして、阿波の國板野郡撫養浦にあり、門の間十七八丁、大海より滿來る潮も、中國の海より干る汐も、滿干ごとに此門にあつまれば、汐のはやき事矢のごとく、水勢のつよき事、磐石の轉倒にたとへんもさらなり、されば順水にあらざれば、風帆も此門を渡事かたし、此門の間阿波地より淡路海へ瀨の巖つゞきて見ゆれば、水底深しとも見へざりき、瀨の左右は深き事底をしらず、此門干汐の時は一方ひくゝなりて、一方より落る水瀧の如く、滿汐の時は大海より汐みちくれば、瀨にあたりて立のぼる浪落れば、ことごとく渦となる、其高く卷あがりたる白浪に、朝日影のうつろふ景色、また門わたる舟の、汐にひかれて飛鳥のごとくなるありさま、畫にもいかでとおもふ絕景なり、尋常の汐の滿干だにかゝる状あり、三月三日の汐干は海原大に高下ありて、倭國第一の瀨戸なれば、鳴門の汐干とてなだゝり、

〔阿波志三板野郡〕山川

小鳴門　在北泊、距堂浦千八十歩許、此間兩岸對立如門、因名、〇中略

鳴門　在阿淡之間、古稱速吸名門、日本書紀、所謂伊弉諾尊往觀者是也、東岸斗出者、淡路行者嶼也、西距孫埼二千四百歩許、其間有石礎、稱中瀨、噴薄數百歩、波濤之激、盤渦輪轉、大者徑數十歩、行舟長之、颺風特起、潮水怒號、閧于四方、潮汛去則漁艇叢集、有島二、西稱裸島、勢面小、東稱飛島、險絕不可攀、裸島之南、礁石平數十餘丈、呼曰千疊礁、西畔平坦、有礁石、卽公駕遊憩之處、

〔土佐日記〕卄日承平五年一月〇夜なかばかりに舟をいだして、阿波のみとをわたる、夜なかなれば、にしひんがしも見えず、をとこ女からく神ほとけをいのりて、このみとをわたりぬ、

〔土佐日記考證下〕阿波のみとは、阿波のなるとをいへるにや、このつぎに奴しまとあるは、すでに淡路の國のぬしまが崎なれば、阿波のみとは阿波のなるとにて、道のほどもたよりありて

寛文十年、五萬十四戸、二十四萬八千三百七十五口、

寶暦十二年、六萬五千三十六戸、雜戸九百戸、三十三萬五千三百九十三口、雜戸五千五百七十一口、

寛政十二年、七萬九千七百十戸、三十四萬五千九百七十二口、雜戸八百八十六戸、六千九十口、

〔官中秘策 五〕阿波國　九郡 中略

一人數三拾六万貳千九百五人　内 男拾八万五千八百八拾壹人 女拾七万七千貳拾四人

〔吹塵録 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 中略

曾私領 一人數四拾貳万五千三百四人　高拾九万三千八百六拾貳石餘　阿波國

内 男貳拾貳万貳百五拾七人 女貳拾万五千百四拾七人 中略

弘化三丙午年 諸國人數調 中略

曾私領 一人數四拾四万八千貳百八拾七人　高貳拾六万八千八百九拾四石餘　阿波國

内 男貳拾貳万九千四百四拾四人 女貳拾壹万八千八百四拾三人

風俗

〔人國記〕阿波國

阿波國ノ風俗、大體氣スタヤカニ而、智モ有リ屆キタル意、十人ニ七八人モ如此也、然ドモ智有ヲ以テ、居タル意地ヲ忘却シテ、變道ヲ行フ事アルベシ、サレドモ人ヲタバカリ、盜竊杯ノ類ハ、究タル有間敷也、武士ノ風俗最如此ニ而意地强シ、雖然智遣而アダトナルベシ、三好、麻植、名東、名西郡ハ形儀一也、勝浦、那賀、板野、阿波、美馬之郡ハ少心細キカ、

〔阿波志 一 風俗〕士尚氣槩武技是勵、氣候溫暖、諸貨充足、運輸用舟、取諸浪速、南偏溫柔、不邇財幣、西偏質直、以田爲生、諸郡山居者、衣木皮、食草根、家作地爐、圍爐面居、未嘗絕火、大率不患寒、恐之如蛇蝎、有患者棄置不顧、往々貧、大寶文明四年、命源康俊誅除之事、見口山村尾形某所藏常建文書、

名所

〔日本鹿子 十三〕阿國 波〇 阿 中名所之部

阿波國〈行程上四日、下二日、〉海路六日

調、兩面五疋、四點羅二疋、一窠綾九疋、二窠綾五疋、七窠綾、薔薇綾各四疋、白絹卅疋、緋絲五十五絇、綠絲、縹絲各廿絇、皂絲五絇、練絲二百五十絇、絲一千五百絇、〈夏調〉御取鰒二百斤、細割鰒三百卅三斤、横串鰒卅九斤、堅魚五百卅五斤八兩、自餘輸絹絲、　庸、白木韓櫃十二合、自餘輸米、　中男作物、紙、黃蘖三百斤、龜甲十三枚、苦麻子、閉彌油、椒油、胡麻油、短鰒、猪脯、久惠鵬、鰒腸漬鮨、鰒鮨、年魚、煮鹽年魚、雜魚鮨、海藻、鹿角菜、凝海菜、

〔延喜式 三十三 大膳下〕諸國貢進菓子〈○中略〉　阿波國〈柑子二輿籠、數四百顆、甘葛煎一斗五升、〉

〔延喜式 三十四 木工〕諸國所進雜物〈○中略〉　庸米千斛〈○中略〉　阿波國三百斛　海藻二千九百五十斤〈○中略〉

阿波國千四百五十斤

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥〈○中略〉

阿波國卅三種　柴胡、黃菊花、澤瀉、橘皮各一斤、菫蘇、躑躅花、茵草各四斤、薺苨、芍藥、土瓜、牡丹各三斤、細辛九斤、大戟、狼牙、伏苓、連翹、女萎各二斤、升麻十兩、蒲黃八兩、天門冬五斤、寄生廿斤、榧子一斗三升、麥門冬、蛇床子各二升、桃人二斗、秦椒二斗五升、葵子五升、蒺蔾子一升、雞頭子五升、麻子三斗、胡桃子一斗、蜀椒八升、乾棗一斗五升、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〈○中略〉宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂阿波絹、

〔毛吹草 三〕阿波

材木〈其數多シ〉　鹿尾藻(ヒヂキ)　鳴門和布　火打崎燧石　撫養蛤〈碁石ニ用之〉

〔阿波志 一 土產〕鹽〈寶曆十三年、百二十六萬九千百八十七苞、明和元年、百三十三萬八千五百六苞、安永元年、百二十四萬九千百四十四苞、〉

〔阿波志 一 戶口〕慶長九年、里籍成、十六年、造戶籍、元和元年、閱口數、明曆中重閱、令有占田者爲農夫、去氏族、延寶中、有丁役者爲農夫、享保中又閱、一如延寶例、但祖山不改、與明曆以前同、

出擧稻

阿波國管私領　一高貳拾六万八千八百九拾四石三斗貳升九合

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中

阿波國正稅公廨各廿万束、國分寺料一万四千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、道橋料五百束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕阿波國略○中註管九（中略）正公各三十萬束、本穎五十萬六千五百束、

國產貢獻

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國司略○中

阿波國　那賀郡薄鮑廿二連半　鮑鮓七壺半　細螺棘甲・蠃石花相作十壺　麻殖郡忌部服布二丈一尺　木綿三斤　年魚七笯半　蒜根并七缶半　乾羊蹄七籠半　蹲鴟七籠半　橘子七籠半

右十二種國所造備略○中

以前得神祇官解偁、供奉大嘗會、其所由加物、依例所請如件者、國宜承知、依數造備進上、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進略○中　檳（中略）阿波伊豫十五國各二合略○中　紫藤香大廿四斤卅把（中略）阿波國廿四斤

〔延喜式二十三民部〕凡諸國所進兵庫寮修理甲料馬革者、略○中阿波十張、並以驛傳牧等死馬皮熟而進之、若不足者買備滿數、其直充正稅、略○中

年料別貢雜物略○中　阿波國筆八十管、紙麻七十斤、黃紙麻一百斤、馬革十張、略○中

諸國貢蘇番次略○中　阿波國十壺四口各大一升、六口各小一升、略○中　右十四箇國爲第六番子午年略○中

交易雜物略○中　阿波國絹三百疋、白絹十二疋、油三石四升、鹿六枚、鹿皮十張、鹿角廿石、小豆十六石、稻林大豆八十石、胡麻子四石、小麥□石、蕎麥七斗、青蓋廿斤、海藻根□□於朝集六斗、鹿角菜二石、吉廿五枚、二合、留大豆廿二石、隔三年進留大豆五石、

〔延喜式二十四主計〕阿波　右十二國並上絲略○中

阿波略○中　右廿九國綾絹略○中

藩封　田數石高

前廷尉康頼入道、亦捧訴狀、是阿波國麻殖保事、地頭刑部丞成綱、募武威不用保司之間、恩澤似無所據之、加之內藏寮濟物闕乏之故、可停止成綱地頭職之由、所被下院宣也云云、彼云、是二品令賞給、被補置地頭於諸國事、警衞朝廷、爲治國亂也、而抑留公物、不穩便之由有沙汰、成綱雖令領掌地頭職、不可相交領家方之旨、被仰下云云、

〔南海通紀十七〕羽柴內府公四國配分記

阿波國　蜂須賀彥右衞門尉正勝ニ賜　內一萬石、赤松次郞則房ニ賜、

德島江戸ヨリ海陸百六十六里餘、德島ヨリ大坂迄舟路三十八里餘、

天正十三年、蜂須賀阿波守家政ニ賜リ、代々領之、

〔慶應元年武鑑〕阿波宰相齋裕卿大廊下正四位上元治元子四月任　二拾五万七千九百石餘　阿波淡路兩國一圓領之、居城阿波名東郡

〔倭名類聚抄五國郡〕阿波國略○註管九田三千四百十四町五段五十五歩

〔伊呂波字類抄安國郡〕阿波國(中略)本田五千四百十四町五步

〔拾芥抄中本朝國郡〕阿波上中九郡(中略)田五千二百四十五町

〔海東諸國紀〕阿波州　郡九、水田三千四百十四町五段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十八万三千五百石　阿波

〔阿波志一貢賦〕元和三年九月五日、賜以阿波淡路二州、二十五萬七千石、阿波十八萬六千七百五十石、

但元祿十三年所閱、十九萬三千八百六十二石二斗八升五合、

〔日本鹿子十三〕阿波國九郡、中上國、四方二日、略○中　知行高十八万六千七百五十石、

〔官中秘策五〕阿波國　九郡略○中

一石高拾九万三千八百六拾貳石餘

〔吹塵錄五八口及國高〕天保度御國高調略○中

右所々可令御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年〇徳治元年六月十二日　右衛門

高倉前宰相殿

〔阿波將裔記〕足利義多々之系圖

一義多はじめて阿波國へ來りたまふ時、平島の內、西光寺に落着たまふ、依之西光寺領分田地貳町餘之年貢諸役物等、ともに赦免有て、家來兵庫入道善行方より紙面指遣す、文言

至阿波國平島庄西光寺、依被居御座、當寺領年貢諸公事物等、永代被免許訖、〇中略

天文十六年四月十三日　沙彌善行

西光寺參

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年六月五日丙辰、被加石淸水神領云云、

奉寄　八幡宮神領壹處

在阿波國三野田保者

右件保、所奉寄當宮神領也、早爲少別當任賢沙汰、知行保務、爲祈禱、以所當物可令神事用途之狀、奉寄如件、

元暦二年六月五日　前右兵衛佐源朝臣頼朝

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月廿二日癸卯、前廷尉平尉康頼法師、浴恩澤可爲阿波國麻殖保々司元平氏家人故入道仕之賞、所被仰也、

〔吾妻鏡八〕文治四年三月十四日庚戌、前廷尉康頼入道捧款狀、是去年拜領阿波國麻殖保々司職、仍雖遣使者、地頭野三刑部丞成綱、不能許容之間、乃貢空手之由載之、當保者、內豎寮濟物運上地也、成綱因仰留之間、度々被下院宣訖、然者除件所濟、而康頼可中分之旨、被下御書云云、　八月廿日癸未、

壽永三年四月五日

〔賀茂注進雜記下社領〕同〈○壽永三年、元暦元年〉四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〈○中略〉

阿波國　福田庄、〈○中略〉

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事〈○中略〉

一家地文書庄園事〈○中略〉　前攝政〈○中略〉　家領　女院方〈○中略〉　阿波國大野本庄〈寶莊嚴院領○中略〉　右大臣〈○中略〉　家領　女院方〈○中略〉　阿波國大野新庄〈○中略〉

建長二年十一月　日　愚老〈在御判〉

〔東寺百合古文書三〕寶莊嚴院領阿波國大野庄、本家方等守護押領事、賢俊僧正狀〈副親海法印狀、中狀具書、〉如此、子細見狀候歟、可尋沙汰之由、可被仰遣武家之旨、院御氣色所候也、仍執達如件、

六月二十一日〈貞和二年〉　權大納言實明

謹上　勸修寺前大納言殿

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣〈烏帽〉相具御書、御手筐□□□〈存日予預置也〉參御所、〈○中略〉女院御方自餘御書等之〈緣有御封、以檀紙被立文、押折上下、又有鈕等、〉悉整置、〈○中略〉

一通〈鈕日樂寓○中略〉　阿波國福井庄〈○中略〉　右庄々所讓進也

嘉元三年七月廿六日　御判

〔後宇多院御領目錄〕一安樂寺院領〈○中略〉　阿波國名東庄〈○中略〉

莊保

州河江ハ地續ニシテ同國ノ如シ、

〔宇野主水記〕一阿州ヘ秀吉舍弟美濃守殿、六月十〇天正三年十六日、木〇津〇城、七月五日落去、讚州阿州兩國手ニタツル敵ナシト云々、長曾我部自身、阿州一〇ノ〇宮〇迄木津ノ城ヲサヘノタメニ出ラルレドモ、何ノ不及行、土州ヘ打歸由也、

〔阿波志二城府〕德〇島〇城（中略）初名渭山、十三年（慶長）改名德島、幕府改渭津、寛六年十月、復改德島、

〔一宮巡詣記拔萃下〕土佐一宮土佐郡高加茂神社圖

十七日、〇元祿十年四月甲浦より五枚帆にて、德島城下へ出船、とも浦を通り、麥の大島へ留る、

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地〇長德四年注文定

新發田略〇中

阿波國名東郡新〇島〇庄〇田地八十四町七段七十五步

〔雲宮錄事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應〇永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企妨領、兼又有由緒、雖令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領略〇中　阿波國　萱〇島〇庄〇略〇中

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰本下略〇

〔吾妻鏡三〕壽永三年元〇元曆年四月六日甲戌、池前大納言并室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云々、而爲被優池禪尼恩德、申宥彼亞相勸賞給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言沙汰略〇中　小〇島〇庄〇阿波〇

右庄園拾七箇所、載沒官注文、自院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勸狀如件、

〔南海通紀十一〕阿波讃岐逵却記

矢野駿河守ハ引田ノ城ヨリ寒川郡ニ打入リ、晝寢ノ城ニ取向フ、阿波ノ撫養ニテ大船ヲ用意シ、粮米ヲ積テ來リ、○下略

〔南海通紀十一〕阿州大西覺養降土州元親記

此大西ト云ハ、土佐ノ岡豐ノ舟渡ヲ過テ山中七里ト云ヘドモ、道筋難所ニテ力業ニテハ行ガタキ所也、先ヅ上名ノ橋ト云ハ、大木一本ニ刻(キザ)ミ形ヲ付テ打渡、其上ヲ往來ス、其先ニ西宇トホゲトテ三里ノ大難所アリ、此路ハ岩滑ニ少宛足カヽリヲ切付、又梯ニ少ヅヽ刻ヲ附テ懸ケ、漸ク一人ヅヽハヒ渡リ通ル、他左空穗(ウツボ)、犬歸リ、歪リ嶝セナドヽ云切所アリ、其路ヨリ下ヲ見レバ川瀧千尋計ニ見ユル故ニ、氣モスミ渡リ心モ消々トシテ、山路ニナレザル者ハ一足モ行事ナラズ、○下略

〔南海通紀十三〕土佐元親出陣阿波大西邑記

天正五年春、阿波國內亂シテ三好屋形長治同州別宮ニテ自殺シ給ヒテ、逆臣井澤一宮ト屋形ノ舊臣ト雌雄ヲ諍フ半ナレバ、元親此時節ヲ得テ、阿波ノ大西ヘ兵ヲ出サントス、○中略元親不戰シテ大西ノ邑ヲ取リ、廣地ニ入テ險要ノ城邑ヲ得タリ、此地ヲ踏ヘテハ、阿波讃岐伊豫三ケ國ヘ勵ク故ニ、其根ヲ固シテ兵力强シ、是ソノ地利ヲ得ル者也、嘗テ論ズ、此大西ノ山邑ハ、四國ノ中間ニ在テ、東西二十餘里ノ山間ナリ、土佐ヨリ是ヲ得テコレヲ保ツ時ハ、三ケ國ノ兵ヲ合テモ攻ベカラズ、又三ケ國ヘハ出ルニハ利アリ、又三ケ國ハ何ノ國ヨリ持テモ兵ヲ用ルノ益ナシ、其地ヲ得ルニハ、分別アルベキ武士ニ問ヒ給ヘ、僧何ヲカ知ラン、先ニ君我ガ言ニ依テ阿州半國ヲ得給フ、豫岐兩州モ亦年數ヲ不經シテ治給フベシト申ケレバ、元親悅喜シテ愈計略ヲ回シ給フ、

〔南海通紀十五〕土佐元親調略於豫州記

阿波ノ大西ヨリ元親自ラ兵ヲ出ントス、彼大西ノ邑ハ四國ノ塊區ニシテ、四方戚山ナレドモ、豫

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕阿波　十郡、四百五十五村、
　高曾我領二十六万八千八百九十四石三斗二升九合
　三好郡二十八村　美馬郡二十一村　阿波郡三十二村　板野郡百一村　麻殖郡三十五村
　名西郡三十九村　名東郡五十四村　勝浦郡三十三村　那賀郡八十七村　海部郡二十五村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名
阿波　板野郡、明神浦、別宮浦、大毛山、那賀郡、芳崎村、工地村、西路見村、答島村、椿地村、大巫、海部郡、阿部郡、宍喰郡、鹿子居島、

〔日本書紀十三允恭〕十四年九月甲子、爰更集處處之白水郎、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、

〔日本靈異記下〕諦奉寫法花經女人過失以現口喎斜緣第廿
粟國名方郡埴村在一女人、忌部首字曰多夜須子、白壁天皇光仁〇中略代、是女奉寫法花經於麻殖菀山寺、

〔南海通紀九〕細川家舊臣謀實休記
板東郡芝原ト云所ニ、久米安藝守義弘ト云者アリ、〇中略佐野丹波守、野田內藏助、仁木日向守、小倉佐助心ヲ一ニシテ、勝瑞ノ事竊クル、〇中略芝原ト勝瑞ハ間ワヅカニ一里アレバ、互ニ是非ヲ告來ル事、梯ノ齒ヲ引ガ如シ、

〔三好家成立之事〕一三好修理大夫長慶、永祿年中病死セリ、〇中略亂國ノ最中ナレバ隱之、松永彈正相謀ヲ守、所々、先住國阿波ノ勝瑞ニハ、長治三好遠江守〇中略各守其所、

〔阿波藩實記〕足利義多々之系圖
義親　永祿九年十月廿日、阿波國撫養にて卒、

村里名邑

今廢、瀬詰村有二瀬立里一、川島今廢、川島村存、

〔阿波志八名東郡〕鄕名　名方今有二名東村一、西郡有二舊御名方祠一、因名、　新居今有二南北新居村一、　加茂今郡有二式埜村一、　井上今有二井戸村一、　八

萬今有二上下八萬村一、　雑栗今廢

〔阿波志九名西郡〕鄕名　埴土今廢、神領、入田恐此、蓋入者、埴生之轉也、　土師今廢、天神村恐此、垂仁天皇時、野見宿禰請而停レ殉、使下土工三百人作二埴像一以代上、天皇喜、賜二姓

土師一、其裔字庭爲二阿波守一、蓋所三以鄕名因起一也、　高足今廢、高磯村存、　櫻間村存

〔阿波志十麻植郡〕鄕名　篠原今本莊有二篠原里一、本莊潟上昔屬レ此、　託羅今廢、宮井村昔蓮華前有二田四十八萬歩一、稱二多加眞勝示一、　新居今有二新居見村一、　餘

戸小松島一名阿摩古、恐餘戸之轉、○下略

〔阿波志十一那賀郡〕鄕名　山代今稱二仁宇山一、　大野今廢、大野村存、　島根今廢、中島、平島等是也、　阪野今廢、阪野村存、　幡羅今廢、幡羅村存、　和泉

今廢、木莊村有二泉里一、

〔阿波志十二海部郡〕鄕名　和射今廢、日和射浦存、　海部和名抄所レ載、那賀郡凡八鄕、今餘二二鄕一、餘係二海部郡一、

〔東寺百合古文書六〕寶莊嚴院御庄園

阿波國大野庄　季○行鄕○

米二百五十六石四斗三升　油四石二斗四升九合○中略

右注進如レ件

平治元年閏五月日

〔阿波志一〕十郡鄕數　凡四十六　村數　慶長九年四百九、寛文中五百八、元祿中四百五十五、明和

五百六十五、

〔郡名一覽〕一阿波國皆私領　阿州　四方二日　拾郡

高拾九万三千八百六拾貳石貳斗八升五合　四百五拾五ヶ村

●德島　百六十六里餘

アリ、宍咋ヨリ國境ヘ二十三町、是土州本道ナリ、牛馬相通ズ、撫養ノ濱ヨリ是マデ二十六里アリ、又那賀郡山口村ヨリ海部ノ中間ニ路アリ、國境マデ十八里アリ、皆山中險阻ノ地ナリ、海部氏上世ヨリ此地ヲ領スル事、其幾バタ年ヲ不知、〈○下略〉

〔倭名類聚抄〕〈九阿波國〉板野郡　松島〈萬都之萬○高山寺本松作川、萬都作加波、〉　津屋〈都乃也〉　高野〈多加乃〉　小島〈乎之萬〉　井隈〈井乃久萬〉　田上〈○高山寺本注云、多乃加美、〉　山下〈也萬乃之多〉　全戸　新屋〈○高山寺本新屋次有松島、注云、万豆之末、〉

阿波郡　高井〈○高山寺本注云、多加井、〉　秋月〈安木都木〉　香美〈加々美○加々美、高山寺本作加久三、〉　拜師〈波也之〉

美馬郡　蓁原〈波都波良〉　三次〈美須木〉　大島〈於保之萬〉　大村〈於保無良〉

三好郡　三繩〈美奈波〉　三津〈美都〉　三野〈美乃〉

麻殖郡　呉島〈久禮之萬〉　忌部〈伊無倍〉　川島〈加波之萬〉　射立〈伊多知〉

名方西郡　埴土〈波爾〉　高足〈多加之〉　土師〈波之〉　櫻間〈佐久良萬〉

名方東郡　名方〈奈加多〉　新井〈爾比井〉　賀茂〈加毛〉　井上〈井乃倍〉　八萬〈波知萬〉　殖栗〈惠久利〉

勝浦郡　篠原〈之乃波良〉　託羅〈多加良〉　新居〈爾比乃井〉　餘戸

那賀郡　山代〈也萬之呂〉　大野〈於保乃〉　島根〈之萬禰〉　坂野〈佐加乃〉　幡羅〈波良〉　和泉〈伊豆美○高山寺本和泉作出水、在島根次、〉　和射〈○高山寺本注射讀、加左、〉

〔阿波志三板野郡〕鄕名　松島〈今廢、七條村屬是也、〉　津屋〈木津大津等、屬是、〉　高野〈今廢〉　小島〈今廢、又屬東貞方、〉　井隈〈長原、云、奥野東南、地名井隈、〉　田上　山下　全戸　新屋〈並廢〉

〔阿波志四阿波郡〕鄕名　高井〈今廢、井澤村存、〉　秋月〈今廢、村存、〉　香美〈今廢、村存、〉　拜師〈今廢、有西林東林二村、〉

〔阿波志五美馬郡〕鄕名　大島〈今廢、郡里等其地也、見續國史、〉　蓁原〈今屬拜原、〉　三次〈今廢〉　大村〈今廢〉

〔阿波志六三好郡〕鄕名　三繩　三津　三野〈並今廢、三野村存、〉

〔阿波志七麻殖郡〕鄕名　呉島〈今廢、呉島上下島宮島見島寺島三島鴨島等、續日本紀云、元明天皇七月壬午、…〉　忌部〈今廢、屬山崎、〉　射立

海部郡

〔南海通紀十七〕長曾我部元親守四國記

阿波ノ南方、那珂海部二郡ハ、險阨ノ地ナリ、○下略

〔南海通紀十一〕三好家兵將發向讃州寒川記

此トキ長曾我部氏、阿州宍咋海部ヨリ仁宇ノ山桑野ニ至マデ南方二郡ヲ取リ布キ、七城ヲ拔テ、香曾我部親泰ヲ郡代トシテ、茂木ノ城ニ居置テ歸ル、十河存保三好長治ハ、堺ヨリ書ヲ送テ曰、今度長曾我部阿州南方二郡ヲ掠ムル事ハ、是讃州寒川ガ領ヲ奪ントスル費ニアリ、讃州ヲ取ザル分ハ國ノ禍有ルベカラズ、南方ヲ取ルヽハ阿波ノ國ノ破トナル、

〔阿州將裔記〕足利義冬々之系圖

義冬　永正六年、京都にて生る、母は細川讃岐守成元の女、天文三年、都より阿波國へ下向して、那。東。郡。平島庄に居住す、

〔阿波志十二〕海部郡（東南瀕海、西南至土佐、西北至那賀郡、北至美馬郡、延袤二十餘里、）　建置沿革

海部舊爲鄕、屬那賀郡、（見倭名抄）後分爲郡、慶長九年、村凡二十四、元祿中、二十六、後爲五十八、

〔南海通紀十一〕土佐元親出陣阿州記

此海部郡ハ山中灘目遼遠ニシテ二十餘里ニ迄、村落百有餘アリ、由岐四村、木岐四村、日和佐八村、牟岐十三村、淺川五村、木頭廿四村、相川八村、海部十三村、宍咋十九村、凡如此也、灘目椿泊ハ那賀海部ノ境也、○中略椿水崎ハ海部ノ內也、紀州白井ノ水崎ヘ十里アリ、　由岐浦、舟カヽリ惡シ、灘目九村アリ、日和佐浦入海アリ、舟繫惡シ、那賀郡境ヨリ是マデ五里アリ、牟岐浦舟カヽリナシ、日和佐ヨリ二里アリ、沖ノ方三里ニシテ牟岐ノ大島アリ、　淺川浦入海アリ、○中略牟岐ヨリ一里アリ、鞆浦舟カヽリアリ、淺川ヨリ一里アリ、那賀郡荒田村ヨリ是マデ十三里アリ、　海部木村吉田城地也、那佐ノ入海アリ、○中略　宍咋浦那佐ノ海邊也、山中村里十里相ツヾク、鞆浦ヨリ一里十六町

寛平八年九月五日、分名方郡、爲名東名西兩郡、七郷屬此郡、見類聚三代格、而和名抄所載郷名六、元祿中、更以西郡、寛文四年有命復舊、慶長九年、村四十八、元祿中、五十二、今爲五十、

〔阿波志九〕名西郡東至名東郡、南至勝浦郡那賀郡、西至麻植郡、北至板野郡、延袤七里許、　建置沿革

寛平八年九月五日、分名方郡、爲名東名西二郡、昌泰元年七月十七日、省名東郡主帳一員、以加置于此郡、見類聚三代格、慶長九年、村三十七、元祿中、三十九、今復爲三十七、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十一月廿五日丙寅、勅阿波國名東郡、加置主政主帳各一人、

〔類聚三代格七〕太政官符

　應省名東郡主帳一員、置名西郡事

右得阿波國解偁、名西郡司解偁、名東名西二箇郡、元爲一郡之時、置件職二員、而依太政官去寛平八年九月五日符旨、分爲兩郡、七箇郷爲名東郡、四箇郷爲名西郡、而未置此職、已違令條、望請官裁、省彼一人、爲此郡員者、國加覆勘所申有道、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、奉勅依請、

　昌泰元年七月十七日

勝浦郡

〔阿波志十〕勝浦郡東至海、南至那賀郡、西至名西郡上山、北至名東郡、延袤十餘里、　建置沿革

貞觀六年四月、加少領一員、三代實錄慶長九年、村凡三十二、元祿中同、今爲三十九、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年五月辛巳、阿波國勝浦郡領長費人立言、庚午之年、長直籍皆著費之字、

〔三代實錄八清和〕貞觀六年四月十日丙寅、阿波國勝浦郡加置少領一員、

那賀郡

〔阿波志十一〕那賀郡東至海、南至海部郡、西至麻植郡平村、北至勝浦郡、又至名東郡、東西二十里許、南北五里、東三里、　建置沿革

海部、舊屬此郡、爲郷、後分爲二郡、慶長中、爲那東、那西、海部、三郡、凡十三郷、寛文四年、合那東那西爲一郡、元祿中、村凡八十八、今分爲百四十二、

を夾む、

阿波郡

〔阿波志　四〕阿波郡（東至美馬郡、北至讃岐、南至名方郡麻殖郡、西至美馬郡、北至讃岐、幅員四里許、）

美馬郡

〔阿波志　五〕美馬郡（東至阿波麻殖兩郡、南至土佐、西至三好郡、北至讃岐、延袤十五里許、西南至那賀海部兩郡、）　建置沿革（○中略）

和名抄所載郷名四、慶長九年、村落二十一、今爲二十五、國初稻田氏（稱修理）統治之、

〔東大寺要錄　六〕造寺司　牒三綱所

合奉宛封一千戸（○中略）

阿波國一百戸（○板野郡高野郷五十戸、美馬郡御津郷五十戸、○中略）

以前寺家雜用料、永配封、當年所輸之物爲始、奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日（○署名略）

三好郡

〔阿波志　六〕三好郡（東南至美馬郡、西接土佐伊豫、州、北至讃岐、東西延袤十餘里、）　建置沿革

貞觀二年三月二日壬子、割美馬郡置三好郡、見三代實錄、國初中村氏統治之、

〔三代實錄　四清和〕貞觀二年三月二日壬子、割阿波國美馬郡置三好郡、

麻殖郡

〔阿波志　七〕麻殖郡（東至名西郡、南至那賀郡、西至美馬郡、北至阿波郡、南北延袤十里許、）　建置沿革

在昔天富命與天日鷲命、殖穀麻于此、所以名麻殖也、慶長九年、村三十二、元祿中、三十六、今爲三十三、

〔續日本紀　二十九稱德〕神護景雲二年七月乙酉、阿波國麻殖郡人外從七位下忌部連方麻呂從五位上忌部連須美等十一人賜姓宿禰、

名方郡
名東郡
名西郡

〔續日本紀　二十八稱德〕神護景雲元年三月乙丑、阿波國板（○板原作奴、據一本改、）野、名方、阿波等三郡百姓言曰、（○下略）

〔延喜式　二十二民部〕寬平八年九月五日、分名方郡、爲名東名西郡、

〔倭名類聚抄　五郡〕阿波國（○國府在名東郡、本是名方郡也、今分爲東西二郡、）

〔阿波志　八〕名東郡（東至海、南至勝浦郡、西至名西郡、北至板野郡、延袤六里許、）　建置沿革

板野郡
板東郡
板西郡

伊豫國住人河野四郎通信ヲ責トテ、通盛教經二手ニ分テ四國ヘ渡ル、越前三位(○通盛)ハ阿波國北。郡。花苑ニ著給、

〔阿波志 三〕板野郡(東北接海、南限名東郡、西界阿波郡、東西八里餘、南北四里餘、)　建置沿革

此郡古爲一、中分爲東西二郡、寬文四年甲辰、有令、復合爲一郡、慶長九年、村凡八十、元祿中、百一村、今(○文化十二年)爲百二十三、(舊八十、新四十、)慶長八年癸卯、加賜祿稟一萬石、凡二十三村、(○下略)

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年三月乙丑、阿波國板(○板原作坂、據一本改、)野、名方、阿波等三郡百姓言曰、己等姓、庚午年籍被記凡直、唯籍皆著費字、自此之後、評督凡直麻呂等被陳朝廷、改爲粟(○粟原作費、據一本改、下同、)凡直姓、已畢、天平寶字二年、編籍之日、追注凡費、情所不安、於是改爲粟凡直、

〔西大寺文書 一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事(○中略)

一類個庄々(○中略)　阿波國　板野郡、水田四十七町五段三百五十三歩(三十五町二段三百步○中略)

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日(○署名略)

〔南海流浪記〕十日(○仁治四年二月)フタラヲタチ阿波ノ戸ヲワタリテ佐伊田ニワル海路三里餘、シマレマ入江々々ノ有樣悅目養眞、舟ヲ、リテ阿波國坂。東。郡。大寺ニ宿ス、

〔源平盛衰記 四十二〕金仙寺觀音講附六條北政所使逢義經事

其日ハ阿波國坂。東。西打過テ、阿波ト讃岐ノ境ナル中山、山口ノ南ニ陣ヲ取、

〔南海通紀 八〕阿波讃岐兵亂居城記

天文年中、細川管領家ニ隨從ノ諸將、阿波屋形ノ家臣居所其聞所ヲ以テ是ヲ記ス、先ブ阿波國屋形ハ坂東郡勝瑞邑也、

〔雲錦隨筆 二〕阿波鳴戸といふは、阿波國板東郡の端と、淡路國三原郡食崎(今鳴門崎)と、雙相迫りて海

〔先代舊事本紀國造十〕粟國造

輕島豐明御世、〇應神朝 高皇產靈尊九世孫千波足尼定賜國造、

長國造

志賀高穴穗朝〇成務御世、觀松彥色止命九世孫韓背足尼定賜國造、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年四月丁亥、從五位下菅生王爲阿波守、

〔吾妻鏡十六〕正治二年八月二日乙酉、佐々木中務丞經高蒙御氣色、淡路、阿波、土佐以上三箇國守護職以下所帶等被召放之、以其趣所被申京都也、〇下略

〔南海通紀七〕四國幷近國錯亂記

阿波國ハ四國ノ邊鄙ニシテ、麁暴勇悍ノ山人ナレドモ、細川刑部大輔賴春、其子右馬頭賴之二世ノ武德ニ化セラレテ、國中ニ兵革ヲ用ル事ナク、讚岐守詮春ヨリ以來、義之、滿久、持常、成之、政之、義春、之持マデ八代ノ間ハ、讚岐守屋形ト號ス、其武威アツテ國平也、然ト云ヘドモ大永享祿ノ比ヨリ國柄ヲ三好氏ニ致テ掌シメ給ヘバ、細川家ノ權漸々ニ衰、三好家ノ威日々ニ盛ニシテ、國家移替トイヘドモ、細川讚岐守持隆愚昧ニシテ其是非ヲ不弁、阿波國ハ細川屋形ノ領國ト云ヘドモ、三好家ノ有ト成テ、細川屋形ハ賓客ノ如ク、管領晴元ハ流浪ノ人ノ如ク、三好ハ亭主ト成テ奔走ス、終ニ國家三好ノ有ト成ン、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕阿波國國府在名東郡、本是名方郡也、今分爲東西二郡、行程上九日、下五日、

〔阿波志八名東郡〕村里 府中舊作國府

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕阿波國國府在名東郡、本是名方郡也、今分爲東西二郡、〇中略管九〇註略 板野乃伊太 阿波 美馬美萬 三好美與之 麻殖乎惠 名東 名西 勝浦桂 那賀

〔延喜式二十二民部〕阿波國、上、管 板野イタノ 阿波アハ 美馬ミマ 三好ミヨシ 麻殖ヲエ 名東ナノヒカシ 名西ナノニシ 勝浦カツラ 那賀ナカ 〇中略 右爲中國、

之功最多、因賜以本州、乃城德島、且分兵以戍南北、凡九城、樋口正直、長谷川貞安執政、寬永十四年、島原之役興、明年命墮九城、

〔日本地誌提要六十一阿波〕沿革　古ヘ國府ヲ名方郡ニ置ク、(今名東郡府中村)壽永中、州人田口成良、平氏ニ應ジ州內ヲ徇ヘ、因テ州守ニ任ジ、後源氏ニ降ル、正治二年、小笠原長清守護ニ補ス、貞應二年、土御門天皇土佐ノ香美郡ヨリ板野郡(池谷村)ニ遷幸シ、寬喜三年崩ズ、文永中、長清ノ子長房守護ヲ襲ギ、三好郡ヲ領シ、池田ニ居ル、其後ヲ三好氏トナス、建武中、細川和氏州守ニ任ジ、足利尊氏ノ反ニ應ジテ四國ヲ略ス、其弟頼春、代テ守護ニ補シ、勝瑞(板野郡)ニ治ス、其少子滿之職ヲ襲ギ州守ニ任ズ、後同族讃岐守成之守護ヲ襲ス、子義春ニ至リ、其宗家政元嗣ナシ、義春ノ子澄元ヲ養テ子トナス、永正四年、政元其下ニ弑セラレ、內訌大ニ興ル、三好長輝(長房九世ノ孫)澄元ヲ奉ジテ京師ニ入リ、亂ヲ討ジテ之ヲ擁立シ、其家政ヲ專ニス、既ニシテ澄元其義兄高國ト相鬩ギ、十六年長輝高國ニ殺サレ澄元來奔シ、尋テ卒ス、長輝ノ孫元長、澄元ノ子晴元ヲ奉ジテ主トナシ、享祿四年、高國ヲ攝津ニ伐テ之ヲ滅シ、晴元ヲ立ツ、是ニ於テ三好氏威權日ニ盛ナリ、元長ノ子長慶ニ至リ、終ニ細川氏ニ代テ政ヲ京畿ニ行フ、(長慶ノ嗣義繼河內ニ居リ、天正元年、織田氏ニ滅サル、)天文二十一年、長慶ノ弟之康、守護持隆(義春ノ孫)ヲ弑シテ勝瑞ニ據リ、全州ヲ領有ス、永祿三年、之康和泉ニ入リ、畠山高政ト戰テ敗死シ、子長治嗣グ、天正五年、其臣一宮成助、竊ニ款ヲ長曾我部元親ニ通シ、長治ヲ襲殺セシム、三好ノ舊臣等、十河存保(長治ノ弟)ヲ迎ヘテ主トナス、十年、元親又來リ侵シ、存保ヲ逐ヒ、遂ニ本州ヲ取ル、十三年、豐臣氏將ヲ遣テ南征シ、元親ノ侵地ヲ奪テ、蜂須賀家政ヲ全州ニ封ジ、德島ニ治ス、關原ノ役、東軍ニ屬シ、封疆故ノ如シ、元和元年、子至鎭淡路ヲ加封シ、世襲、至鎭ノ後三世綱矩ニ至リ、延寶六年、其叔父隆重ヲ富田(名東郡五萬石)ニ分封ス、(享保十年、隆重ノ孫宗員、宗家ヲ承テ合封ス、)王政革新、廢シテ德島縣ヲ置、又改テ名東縣ト稱ス、

阿波國板野郡折野村、三十四度一十四分、 一里二十八町五十一間 椿木村濱、至椿木村宿所汎測九丁 三十四度一十三分半、 二里六町一十二間 堂ノ浦、三十四度一十四分、 一里二十九町四十三間 岡崎村 從宇和島至岡崎、 沿海、通計一百八十三里一十二町三十五間、

驛馬

〔續日本紀八元正〕養老二年五月庚子、土左國言、公私使直指土左、而其道經伊與國、行程迂遠、山谷險難、但阿波國、境土相接、往還甚易、請就此國以爲通路、許之、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〇中略

阿波國驛馬各五疋、石隈、郡頭

建置沿革

〔日本國郡沿革考三南海道〕阿波 古粟國、國造記 上國、管十郡、延喜式等九郡 四百五十五村、

三好 二十八村、貞觀二年三月、割美馬郡置、 美馬 二十一村 阿波 三十二村、功紀作濱部 板野 百一村 麻植 三十五村、延喜式等作麻殖、

名西 三十九村、本名方郡、寛平八年九月、分爲東西二郡、 名東 五十四村、古國府、 勝浦 三十三村 那賀 八十七村、古長國、見國造記、

海部 二十五村、延喜式等不載、蓋未詳在何時、和名抄海部郷隷那賀郡、

〔阿波志一建置沿革〕上古大宜都比賣命爲阿波神、少彥名命畫野分土、年載悠久、不可得而詳焉、成務天皇詔毎國郡置造長、孝德天皇分郡爲三等、至文武天皇改爲五等、推古天皇時、國司國造並置、分國百三十、養老中、約爲六十四、高安王爲按察使、管阿波讚岐等、天平寶字中、葛井根主、豐野篠原爲守、以還連綿、名方郡爲府、國郡有司、學者博士、斯文郁々乎、保元以後、王室多事、聲敎不及、正治二年、源長淸爲四州守護、子孫相襲、及北條氏執權、改鄕爲莊、延元二年、源賴春來居勝瑞、管四州、但美馬三好二郡、並貫平勝占諸山、猶隷南朝、天文二十一年、持隆爲源義賢所弑、子眞之立、威權日去、遂避地于仁宇山、天正五年、長治攻之、不克而死、族存保襲職、十年弑其君亡何、秦元親自土佐入寇、十三年秋九月、豐臣公將平四州、命大和秀長、羽柴秀次爲將、自海路入瑞雲公自陸路、先拔木津城、秀長拔一宮城、江村親俊降、福聚〇蜂須賀正勝 瑞雲〇蜂須賀家政 二公共攻脇城、寨親吉逃、秦親康、吉田康俊、田中政吉、皆望風而去、吾二公

大西白地ヨリ同州池田ヘ二里、池田ヨリ重清ヘ三里、重清ヨリ脇城ヘ四里、脇城ヨリ蕗田ヘ七里、蕗田ヨリ勝瑞ヘ四里、勝瑞ヨリ津田口ヘ四里、津田口ヨリ小松島ヘ三里、小松島ヨリ中洲ヘ三里、東西三十二里也、南北ハ勝浦ノ撫養ヨリ海部ノ本越マデ廿六里也、

〔日本實測錄五〕從阿波國岡崎沿海至宇和島

阿波國板野郡岡崎村、三十四度一十一分半、　三里一十九町二十八間至大毛崎一十七丁、從毛崎至廣戸川口、二十丁四十三間、從撫戸川口至今切川口、一里二十九丁、　別宮浦從吉野川至宮島浦官所一十五丁四十四間、北極高三十四度六分、吉野川渡直徑　一十二町二十四間　名東郡沖洲浦岬　一十三町五十二間　同津田口從江至沖ノ洲浦三丁二十一間　三町　津田浦洲岬從江至南齋田村、一十九丁二十七間半、從南齋田至德島新魚町汎[illegible]一十八丁一十二間、北極高三十四度五分、　二里一十六町一十間　勝浦郡小松島浦根牛川口　三里二十二町二十一間至和田崎一里三十五丁六間　那賀郡今津浦濱至今津浦官所汎[illegible]八丁三十六間　三十三度五十八分半、　一里三十二町四十五間半　中林村　二里三十四町二十七間至答島村新濱一里三十一丁五十一間、　橘浦　一里三町一十八間　下福井村至椿地村後戸一里一十三丁五十一間　一里二十九町五十七間半至龍宮崎三十丁四十四間半　椿地村後戸　三里二十三町三間半　椿泊浦、三十一度五十一分半、　一里九町　椿村横尾至阿部浦、[illegible]二里四丁四十八間半　一里九町三十三間　同尻杭至椿泊浦九丁三十三間　二里三町三十三間、至金田崎三十二丁三十七間半　同橋杭　二里一十八町二十六間　海部郡阿部浦、三十三度四十八分、　二里三町四十七間　東由岐浦、三十三度四十七分、　三里二十一町八間至木岐浦小島崎二里七丁六間　日和佐浦　四里三十一町二十五間半　木岐浦　二里一十六町四十一間　淺川村粟之浦至伊勢田浦三丁二十四間　七町三間半　同伊勢田　二里四町四十五間　柄浦　一里二町六間半　宍喰浦那佐湊至乳ケ崎二十五丁五十四間半　二町四十二間　同府濱至鞆入二丁三間　一里五町三間　宍喰浦三十三度二十四分半、　一里二十五町四十一間半至國界一里一十二丁一十四間　土佐國安喜郡甲ノ浦○中

從伊豫國宇和島沿海至阿波國岡崎、○中

郡里越　阿州美馬郡郡里村ヨリ國境マデ二里、讚州香東郡安原鄉內羽村ヘ出ル、笑原鄉東濱ヘ八里、

重淸越　阿州美馬郡重淸村本道ヨリ國境マデ一里半、讚州香河郡ノ川上ヘ出ル、笠居鄉本津ヘ六里、

太刀山越　阿州三好郡池田本道ヨリ太刀山越國境マデ二里、讚州綾郡山分中熊村ヘ出ル、境目ヨリ松浦ヘ九里、又宇足郡山分中通ヘモ出ル宇足津ヘ十里、又那珂郡山分七ヶ村ノ內鹽入村ヘ出ル、

晝間山越　阿州三好郡晝間村本道ヨリ國境マデ一里三十町、讚州那珂郡山分七ヶ村ノ內山脇村ヘ出ル、境目ヨリ丸龜ヘ六里半、

箸倉越　阿州三好郡池田本道ヨリ箸倉越國境マデ二里、讚州三野郡山分財田內石野ヘ出ル、牛馬不通、境目ヨリ詫間ヘ六里半、

西山越　阿州三好郡西山本道ヨリ國境マデ二里半、讚州三野郡山分財田村ノ內入日村下篠村ヘ出ル、牛馬不通、

野地內越　阿州三好郡佐野村ノ內野地內ヨリ國境マデ一里半、讚州豐田郡山本鄉河內村ヘ出ル、境目ヨリ觀音寺ヘ四里半、

キンタガ峯越　阿州三好郡佐野村本道ヨリ國境マデ一里、讚州豐田郡和田鄉海老敎村ヘ出ル、境目ヨリ觀音寺ヘ三里半、以上讚州ノ分ナリ

伊豫境　阿州大西ノ內佐野村ヨリ國境マデ三十二町

〔南海通紀十六〕阿波大西白地豫州路程記

大西白地ヨリ豫州河江ヘ四里半、○中略松山ヨリ大津ヘ六里、東西凡テ三十八里也、○中略

北川二十一里、西距佐野二十一里、北距撫養四里餘、

南至田野二里、田野至岩脇一里、岩脇至桑野四里、桑野至由岐三里、由岐至日和射五里、日和射至牟岐五里、牟岐至淺川二里、淺川至柄浦二里、柄浦至宍食二里、　又至小松島二里半、小松島至大京原二里半、大京原至富岡半里、富岡至橘浦三里半、橘浦至椿泊二里許、

西至南岩延一里半、南岩延至川田六里半、川田至貞光三里、貞光至毛田二里、毛田至池田四里、　又至南新居一里半、南新居至拜原七里、拜原至脇町半里、脇町至重清三里、重清至足代三里、足代至州津一里、州津至池田一里、池田至山背谷三里、山背谷至西字三里、西字至下名三里、

〔南海通紀十三〕阿州大西本道ヨリ讃州ヘ越ル山路

大西本道　阿州撫養ノ海邊夷村ヨリ、伊豫境大西佐野村マデ廿一里、

大坂越　阿州板野郡吹田村ヨリ大坂越國境マデ一里、讃州大内郡引田郷坂本村マデ山坂一里、此所ヨリ上代四國遍見ノ勅使道アリ、道前道後ヲ分ツ驛所アリ、今ニ馬宅ト云、

黒谷越　阿州板野郡大西本道ヨリ黒谷越國境マデ二十四町、讃州大内郡引田郷川俣村ヘ出ル、

宮河内越　阿州岡郡本道ヨリ宮河内越國境マデ二里十二町、夫ヨリ讃州大内郡引田郷厩居川村ヘ出ル、

日開谷越　阿州阿波郡本道ヨリ日開谷越國境マデ四里、讃州寒川郡、田郷大槍村ヘ出ル、國境ヨリ鵜羽浦ヘ四里、

曾江谷越　阿州美馬郡岩倉本道ヨリ曾江谷越國境四里、讃州寒川郡長尾郷中山村ヘ出ル、又龍寺越ト、志度浦ヘ六里、仁木郡中山村山田郡十河ヘモ出ル、大山越トモ云、

大瀧寺越　阿州美馬郡脇ノ町本道ヨリ大瀧寺國境マデ二里、讃州香東郡安原郷加羽川ヘ出ル、安原郷東濱ヘ八里、山田郡植田ヘモ出ル、牛馬不通、

東南至椿泊、斗而入海、其左稱橘浦、其右稱由岐、

（日本地誌提要六十一阿波）疆域　東ハ海、西ハ伊豫、西南ハ土佐、北ハ讃岐ニ至ル、東西凡壹拾八里三拾三町、南北凡壹拾六里六町、

島嶼

（日本實測錄十島嶼）阿波國板野郡　實測　島田山、周廻三里二十五町七間、高島周廻二里二十九町三十間、大毛（オホゲ）山、周廻五里一十一町五十五間、遠測　鍛島　裸島　飛島　夷島　鍋島

勝浦郡　遠測　大巫　辨天島　小金礁　寶山

那賀郡　實測　鵜渡島、周廻六町二十六間、長島、周廻一十六町一十間、小勝島、周廻一里二十二町五間、高島、周廻一里四町一十八間、野々島、周廻一十八町一十二間、舞島、周廻二十九町二十四間、□島、周廻一里二十町三十七間、タロゴ山、（從西岬至東岬）八町、遠測　青島　三ツ石　沖津島　島帽子岩　小島（西路見村）　九島　辨天島　姥島　ウルメ島　赤礁　飛島　裸島　小島（椿村）

海部（カイフ）郡　實測　篋野島、（從北岬至南岬）六町、大島、周廻二里四町五十七間、津島、（從西岬至南岬）八町、出羽島周廻二十一町四十間、加島、周廻一十一町、サビ島、周廻六町二十三間、四島、（從南岬至北岬）二町、竹ケ島、周廻二十八町四十五間、遠測　女□岩　大礁　小礁　大眠　小眠　トウ島　布掛礁

中小島　小辰巳島　大辰巳島　辨天崎　立島　辨天島　小島（牟岐浦）　小津島　小島（靹浦）

二子島　鹿子ケ礁　鹿子居島　鵜礁島　棚礁　小島（宍喰浦）　鈴礁

地勢
地味

（易林本節用集下）阿波、（阿州）上、管九郡、四方二日、土厚稼稻豐稔、山深魚鱗禽獸之類多、中上國也、

（阿波志一形勝）東對紀淡、隔以積水、南漸南濱、浦潊迤邐、西連土豫、天險難超、斷長補短、廿里而遙、

道路

（阿波志一路程）府城、距京師五十二里、江府百六十六里、浪華三十九里、淡路由良十八里、讃岐高松亦十八里、伊豫河上二十六里半、土佐高知四十八里、東距津田港半里、南距由岐十里、西南宍食二十六里

椿泊浦　三三度五一分三〇秒　阿部浦　同三三度四八分〇〇秒
東由岐浦　三三度四七分〇〇秒　定唯浦　三三度三四分一〇秒
析野村　同三四度一四分〇〇秒　椨木村　三四度一三分三〇秒
堂之浦　三四度一四分〇〇秒〔中略〕

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〔中略〕　阿波　德島　西一度一二分〇〇秒

疆域

〔阿波志一疆域〕慶安二年五月十四日有旨、定阿讚之界、長阪由也、大田通昆與玆、以大恭浦當朶丘以東屬我國、北自板野郡大代至大恭浦、接讚岐大內郡引田鄕小恭浦、又自吹田至大阪嶺、接引田鄕阪本、又自犬伏至黑谷、接引田鄕川又、
西北自阿波郡廣永至宮河內、接引田鄕雁居川、又自香美至日開谷、接寒川郡長野村、又自美馬郡拜原至猪山、接寒川郡長尾鄕中山村、又自脇町至大瀧寺、接香東郡安原鄕藤生川、又自郡里至郡界、接安原鄕稻葉、又自重清至郡界、接香河郡明神村、
西自三好郡芝生至立野山、接阿野郡鹽尻、又自晝間至郡界、接那珂郡財田、又自西山至郡界、接三野郡本鑑、又自白地野路內至郡界、接豐田郡山本鄕河內村、又自佐野至曼陀嶺、接豐田郡和田鄕姫敷村、又自佐野至郡界、接伊豫奧下山、又自山城谷、循伊豫川至郡界、接上山村、又自山背谷粟山至郡界、接土佐太田林、又自下名横倉至郡界、接大砂子、又自美馬郡祖谷有瀨名至郡界、接岩原村、
西南自海部郡大小屋至郡界、接小石川山、又自久尾村至郡界、接竹節、又自船津村至郡界、接野根山、
南自宍食浦經元越至郡界、接野內村、又自宍食嶺至郡界、接甲浦、

名稱

三好、麻殖、名東、名西、勝浦、那賀ノ九郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世那賀郡ヲ割キテ海部郡ヲ置キ、更ニ又那賀郡ヲ那東、那西ノ二郡トナシ、板野郡ヲ板東、板西ノ二郡トナシヽガ、後海部郡ヲ除クノ外、皆其舊名ニ復セリ、明治維新ノ後、新ニ徳島市ヲ設ケ、徳島縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕阿波

〔新撰類聚往來下〕國名〇中略 阿波波州

〔武備志二百三十一日本考〕譯語島名 阿波挨懷

〔元亨釋書九感進〕釋妙達、住近州石山寺、誦法華有年矣、適赴波州、途有病、〇下略

〔倭訓栞前編二〕あは 阿波國も粟の義にや〇下略

〔古事記傳五〕粟國、即阿波國なり、粟は書紀神代卷にも粟田と云、神武卷大御歌にも阿波布をよみ賜ひて、〇中略 古に殊に多く作し物なり、故粟のよく出來る國なる故の名なるべし、〇中略 古語拾遺に、求肥饒地遣阿波國云々、こは穀麻を殖むためなれど、肥地ならば粟もよくみのるべし、伯耆風土記に、相見郡郡家之西北有粟島、少日子命蒔粟、秀實離々云々、故云粟島也、これも粟の名となれる思合べし、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

阿波徳島新魚町 極高三十四度五分、經度西一度一十分半、從東都測本街道、至新浦、渡海、至阿波岡崎村、直徑二里二十三町、自同所沿海一十二里三十四町、一百七十九里三十五町五十八間

〔日本經緯度實測〕北極出地

阿波	岡崎村	三四度一二分三〇秒	宮島浦	同三四度〇六分〇〇秒
	徳島	三四度〇五分〇〇秒	今津浦	三三度五八分三〇秒

〔萬葉集三雜歌〕羇旅歌一首并短歌

海若者、靈寸物香、淡路島、中爾立置而、白浪乎、伊與爾回之、座待月、開乃門從者、暮去者、鹽乎令滿、明去者、鹽乎令干、鹽左爲能、浪乎恐美、淡路島、礒隱居而、何時鴨、此夜乃將明跡、侍從爾、寢乃不勝宿者、瀧上乃、淺野之雉、開去歲、立動良之、率兒等、安倍而榜出牟、爾波母之頭氣師、

反歌

島傳、敏馬乃埼乎、許藝廻者、日本戀久、鶴左波爾鳴、

右歌、若宮年魚麻呂誦之、但未審作者、

〔保元物語三〕新院御遷幸事并重仁親王御事

彼ハ淡路國ト聞召バ、〇中略大炊廢帝〇淳仁ノ被遷テ、思ニ不絶無程失セ給ケン島ニコソト、昔ハ餘所ニ聞召シカ共、今ハ御身ノ上ニ思召コソ哀ナレ、

〔新葉和歌集十七雜〕正平廿年十二月、うへのをのこども題をさぐりて、七百首の歌つかうまつりける時、名所島を、　　後村上院御製

心あてにそこととはしるし淡路島まだ見ぬ人は雲かとや見む

眺望春といふ事を

朝日影さすか浪間にあらはれてかすめばきゆる淡路島山

阿波國

阿波國ハ、アハノクニト云フ、南海道ニ在リ、東ハ海ニ面シ、西ハ伊豫、西南ハ土佐、北ハ讃岐ニ接ス、東西凡ソ十八里餘、南北凡ソ十六里餘、此國ハ古ヘ國府ヲ名東郡ニ置キ、板野、阿波、美馬、

內　五万八千九百貳拾六人　男
　　五万三千五百貳拾三人　女　○中略

弘化三丙午年諸國人數調　○中略

[illegible]
一人數拾貳万貳千七百七拾三人　　高九万七千百六拾四石餘　淡路國

內　六万三千六百四拾壹人　男
　　五万九千百三拾貳人　女

風俗

〔人國記〕淡路國

淡路國之風俗、遠島之國ニ而、人ノ氣律儀ニ而、何事モ僞ル事スクナク、譬バ我ガ親類緣者トアレバ、其筋目ヲ正シ、タトヘ貧賤道路ノ乞人ニテモ、是ヲ正スノ風俗也、然ドモ都テ怠惰之氣甚キ國風ニテ、物ノシマル事スクナク、退屈ノ體ノミ多ク、武士ノ風俗モ質アリトイヘドモ、達人ノ可出國ニハアラズ、

名所

〔日本鹿子十三〕同國淡路○中名所之部

淡路島　ヲノコロ島　すべて當國をさしてかく云と云り、潟有、淡路がたと云也せとの流有、岩屋と云所有、

朝野原　○中略　野島ケ崎　○中略　繪島浦アハジ　岡礒とも云也、當國北の海邊也　○中略　水無瀨山　野島

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國儲兒　○中略　淡路國卅人　○中略

諸國器仗　○中略　淡路國　横刀四口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

〔日本書紀十三允恭〕十四年九月甲子、天皇獵于淡。路。島。時、麋鹿、猿、猪、莫莫紛紛、盈于山谷、焱起蠅散、然終日以不獲一獸、

〔續日本紀八元正〕養老三年十月戊戌、詔定京畿及七道諸國軍團幷大小毅兵士等數有差、但志摩若狹淡路三國兵士並停、

〔延喜式内膳三十九〕旬料略〇中　淡路國雜魚二擔半料一旬
節料略〇中　紀伊淡路兩國擔三節各五〇中略
凡淡路國進中宮御贄者、貢正月三節料、
〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也略〇中　宅常儲集諸國土產、貯甚豐也、所謂略〇中　淡路墨、
〔毛吹草三〕淡路
苦竹ガタケ　煎餅　餳アメ　武島女郎紫也　辛螺ニシ　栄螺　トベタ
〔淡路常盤草一淡路國總説〕土產　藤原明衡新猿樂記、諸國土產部淡路墨、今按るに、むかしは墨名物なりしにや、今はなし、俗間の書に淡路の土產を載す、武島女郎紫名也、辛螺、刺螺、光螺、苦竹、煎餅、餳などあり、これらはいふにたらぬものなり、土地米穀に宜しく、氣味甘美にして醞釀などに殊に佳也、鱗介は四方海邊に多し、鹽はむかし三原郡にて、江尻鹽濱などの近里に多く燒たれども今絶たり、近きころ福良湊などの地に燒所あれども、いまだ國用に足らず、山林多くは松あり、伐て阿波の鹽養、播磨の飾磨などの鹽木に賣なり、この外桑楮漆藍などは多く作らず、四木三草の類を植て、民用の助とせまほし、綿は桓武天皇の御時、淡路等の國々へ綿たねをたまひて植させられしかども、種蒔の法疎なりしにや絶にしが、近ごろ當分所々に作り侍れど、いまだ廣く作らず、民間に綿布多くおり出す、是多くは畿內のわたにて織なり、草綿なれども木綿布と呼なり、

人口

〔官中秘策五〕淡路國　二郡略〇中
一人數拾万七千百拾三人　內五万四千七百九拾貳人男　五万貳千三百貳拾壹人女
〔吹塵録五人口及國高〕文化元甲子年諸國人數調略〇中
淡路國
一人數拾壹万貳千四百四拾九人
高七万四百貳拾八石餘　淡路國

出擧稻

一石高七万四百貳拾八石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

淡路國 皆私領　一高九万七千百六拾四石七斗八升四合

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

淡路國正稅三万五千束、公廨四万五千束、國分寺料五千束、大和大國魂神祭料八百束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、救急料三万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕淡路國〇注略　管二(中略)正三万五千束、公四万五千束、本穎十二万(万下恐脫二六字一)千八百束、雜穎四万六千八百束、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年十一月庚辰、制、諸國公廨、〇中略　下國十万束、就中飛驒、隱岐、淡路三國各三万束、〇下略

國産貢獻

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國司〇中略

淡路國　御原郡釜十口受各一斗五升　比良加五十口受各一斗　壺百口受各一斗

右三種國所造備〇中略

以前、得神祇官解偁、供奉大嘗會、其所由加物、依例所請、如件者、國宜承知、依數造備進上、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略　蓽薩香大廿四斤卅把淡路國卅把

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀〇中略　淡路國一千六百斛〇中略

諸國貢蘇番次〇中略　淡路國十壺四口各大一升、六口各小一升、〇中略　右十四箇國爲第六番子午年

〔延喜式二十四主計〕淡路國

調、宍一斤、雜魚一千三百斤、自餘輸鹽、　庸、輸米、　中男作物、雜鮨、

〔延喜式三十四木工〕諸國所進雜物〇中略　魚卅七斛二斗〇注略　淡路國廿三斛六斗

田數石高

一歡喜光院略○中　淡路國内膳保略○中　一弘誓院略○中　淡路國福守庄略○中
右所々可有御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、
嘉元四年元○德治六月十二日　右衛門
高倉前宰相殿

〔古文書類纂上將軍家下文〕後伏見天皇正安元年征夷大將軍久明親王下文
將軍家政所下
可令早左衛門尉藤原宗秀領知略○中淡路國守護職并原上田兩保、同國東神代郷西神代郷略○註
淡村、賀茂郷、同國内膳庄略○註等地頭職事、
右任亡父左衛門尉宗泰法師法名覺蓮去弘安六年三月廿七日五通讓狀略○註守先例可致沙汰之狀所
仰如件、以下、
正安元年十二月六日　案主菅野略○下

〔勸修寺文書〕勸修寺領略○中
淡路國塩田庄略○中　以上十八箇所
建武三年九月十七日

〔倭名類聚抄五國郡〕淡路國略○註　管二田二千六百五十町九段百六十歩
〔拾芥抄中末本朝國郡〕淡路下近　二郡（中略）田二千八百七十町
〔海東諸國記〕淡路州　郡二、水田二千七百三十七町三段、
〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕六万二千四百四十石　淡路
〔和漢三才圖會七十六淡路〕二郡　高六萬三千六百二十一石
〔宮中秘策五〕淡路國　二郡略○中

神代郷○中略　西神代郷田四十八町三百卅歩○中略　湊村○中略　東神代保田廿六町五反四十歩

○中略　上田保田五十六町二反○中略　榎並村○中略　長田村田三町一反三百四十歩○中略　掃守

保田四十三町八反百四十歩○中略　庄分　河万庄田百三町（得長壽院并八幡宮御領）（本庄百町、沼島三丁、）○中略　浦二所○中略　賀集（安野實）

（持院御領）庄田百廿町○中略　（同御領）福良庄田廿町○中略　浦一所　（鳥羽勝金剛院領）國分寺庄田卅三町○中略　（最勝四天王院御領）津井伊賀新庄田十

九町○中略　浦二所　（弘誓院御領）掃守庄田十二町○中略　（修明門女院御領）慶野庄田六十町○中略　浦一所　（八幡宮御領）鳥飼庄田卅町○中

略　浦一所

右大略注進如件、但於庄園者、任建立最前立券文之旨、注進仕之間、有不審歟、於國領者、付當時文書

之旨、令注進之、仍言上如件、

貞應二年四月日　　散位藤原朝臣（花押）（○以下三名略）

〔東寺百合古文書百四十二〕七條院　在御判

修明門院御處分御所庄々等○中略

淡路國　菅原庄（可被止本所○中略）

安貞二年八月五日

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早且著直衣、（烏帽）相具御書御手筋

口口口（存日予預置也）參御所、○中略　女院御方自餘御書等、（有御封、以檀紙被立文、悉押折上下、又有銘等、）悉盛宮蓋、○中略

一通（銘曰、さいこく（御手跡女院御書云々）○中略

さいこく○中略　あはぢの國内せんの保○中略

ゆづりまいらせ候、御一期の後は、本家へまいらせられ候べく候、

嘉元三年七月廿六日　　御判

〔後宇多院御領目錄〕一安樂壽院領○中略　淡路國菅原庄○中略

國之間、郎從等亂入彼庄、妨乃貢、然仍仲賢王被申子細、更非改變儀、且可下知景時之由、今日被遣御教書、

(石淸水文書一)八幡宮寺領

淡路國　炬口庄　鳥養庄　牧石庄　御料右大將家被割　會料米卅石　中略

元曆二年正月九日

(吾妻鏡十二)建久三年十二月十四日壬子、一條前黃門書狀參着、以亡室遺跡廿箇所、讓補男女子息、中略　是平家沒官領內、中略　淡路國志筑庄、已上廿箇所、先日被奉讓黃門室家、將軍家御緣也云云

(淡路國大田文)淡路國二郡　注進國領并庄園田畠地頭注文事

合

津名郡　國領　郡志鄕田二十一町八反百五十步　中略　浦一所　郡家鄕田三十町三反　中略

賀茂鄕田廿五町六反廿步　中略　山田保田三十町六十步　即保地頭長尾平內　中略　柳澤草加地頭磯河入道　中略　浦一所草加分　室津保田廿一町七反二百步　中略　石屋保田六丁七反百四十步　中略　浦一所　三之崎保田廿七町百九十步　中略　庄分　廣田庄西宮御領田六十町　中略　內膳庄御厨子所御領田卅町　中略　物部庄御室御領田七十町　中略　由良庄圓林寺新熊野領田廿町　中略　浦一所　筑佐庄同御領田廿町　中略　炬口八幡宮御領庄田四十丁　中略　浦一所　安平庄一院御領田四十町　中略　浦一所　□田庄勸修寺御領田四十町　中略

志筑庄新熊野領田百町　中略　浦二所　生穗庄上賀茂御領田四十町　中略　浦一所　來馬庄松殿當正御房御領田六十町　中略　浦一所

中略　□養浦庄最勝四天王院御領田廿六町　中略　浦一所　□穗庄大傳法院御領田六十町　中略　浦一所　鮎原庄北野御領田卅五町

中略　牧石庄八幡宮御領田十三町　中略

三原郡　國領　笶原保田六十町一反二百五十步　中略　八木村　鹽濱村　八木村　中略　東西

領、兼又有由緒、雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　淡路國　炬口庄〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元暦元年四月六日甲戌、池前大納言并室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勳勤給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略池大納言沙汰〇中略淡路　由良庄〇中略

右庄園拾七箇所載沒官注文、自院所給預也、然而如元爲彼家沙汰、爲有知行、勘狀如件、

壽永三年四月五日

〔若王寺神社文書　一〕淡路國由良庄總地頭御代官職事、子息幸福丸下領候畢、於所務者不背先例可致其沙汰候、若致無忠者、彼職被取上仁一切不可申子細候、仍以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞和貳年九月三日　源政義〇在判

〔賀茂注進雜記　神領下〕同〇壽永三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ヶ所、任院廳御下文可止武家狼藉之由、有其沙汰云々

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

淡路國　佐野庄　生穗庄〇中略

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元暦元年四月廿八日丙申、平氏在西海之由風聞、仍被遣軍兵、爲征罰無事御祈禱、以淡路國廣田庄被寄附廣田社、其御下文付前齋院次官親能上洛便宜、可被遣神祇伯仲資王云云、

十月廿七日壬午、淡路國廣田庄者、先日被寄附廣田社之處、梶原平三景時、爲追討平氏、當時在彼

あり、寛永中、由良の故府をこゝに移してより以來、士民富庶なり、

〔南海通記十四〕羽柴筑前守調略淡州記

是ヨリ先ニ淡州ノ住人等、播州ヘ因ミ寄テ和平ヲナス故ニ、仙石權兵衞尉ヲ淡州ヘ渡海セシメテ、須本ノ城ニ居住セシム、夫ヨリ淡州ノ諸將ト相議シテ、阿州ノ援兵ヲ出サントス、〈中略〉三好存保、阿州勝瑞ノ城ヲ相渡スニ於テハ、仙石氏ハ淡州ノ諸將ヲ召連レ入城セシムベシ、其時ハ官兵衞尉〈黑田〉ハ淡州志智ノ城ニ移リ、阿州ノ兵將ノ人質ヲ取リ、悉ク志智ノ城ヘ送入テ相圖メ、丈夫ノ調略ヲナスベシト定ラル、

〔宇野主水記〕一七月十〈天正十三年〉三日、土州之長曾我部御成敗ニ付テ、今日秀吉御自身、淡州洲本迄被御進發云々、〈下略〉

〔淡路常磐草二津名郡〕由良浦　洲本府城を距ること三里、東南海濱にあり、紀伊國海部郡を去こと海程三里なり、長汀海に出て港中廣く、諸州の商船來り泊ること多し、國君里邸あり、漁家商家軒を雙ぶ、大なる鰹魚ありて港中に來往すれども、港を利して人を害する事なしと云、漁子は多く魚蝦を取て諸廣邑に行き、蜑婦は大石花を負戴して、國中に貨る、この物石花のごとく、凍子として酢醤に和して多く食すれども毒なし、畿内の人は食せずと聞り、また板海苔を出す、海菜を方に重ねて乾したる也、又白海苔あり、凍子となして大石花に勝れり、山中には駒島三光雲などあり、見覓捕て食にす、洲崎の砂松伴島の緑螺貴すべし、伴島は是より一里沖にあり、紀伊國に隸く、

〔阿州繪實記〕見利義多々之系圖

貴康　多康二男也、但猶子にて信康より年兄なるよし、號安宅河内守、淡州由良に居城す、

〔宮寺緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應、永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論、企

高七万四百貳拾八石壹斗　貳百三拾七ヶ村

)(●須本（阿州一万四千五百石　百五十七里）　稻田九郎兵衛

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕淡路　二郡、二百五十一村、

（皆私領）高九万七千百六十四石七斗八升四合

津名郡百二十二村　三原郡百二十九村

〔地勢提要（坤）〕郡邑島嶼奇名

淡路　津名郡　來馬村、生穗村、下司村、安乎下村、炬口浦、小路谷村、斗內浦、上原郡、來川村、城方村、油谷村、圓實村、土生村、仕頭村、阿万東村、福良浦、沼島

〔源平盛衰記（三十六）〕能登守所々高名事

子息ニ越前三位通盛、能登守敎經大將軍ニテ、船十餘艘ニ乘テ、押向テ散々ニ揆戰給ケレバ、在廳等被追散テ、ハカ〴〵シキ矢一ツモ不射、奥懸ニ淡路國福良ト云所ヘ著、

〔淡路常盤草（三原郡七）〕福良浦　本郡の南隅にあり、港中廣くして諸船を泊む、前後の山相對ひ、煙島洲崎海口に並びて中間湖水のごとし、阿波國板野郡撫養を距こと海程三里の渡口也、商家漁戶數坊あり、裙帶菜を鳴門の海に采り、海鰮を鱗鹹として福良鯷と稱す、海參などあり、支邑中山潟上鴉頬藻砥取などあり、又國君の行邸あり、

〔南海流浪記〕建長元年八月九日、子時許至淡路國賀集、（一里）同十四日、立賀集至由羅、（七里）同十五日立由良渡戶（三里、海路）至大谷、（十一里、阿波國陸地）

〔淡路常盤草（津名郡二）〕洲本府　物部鄕にあり、南は乙隈高隈曲田山に續き、東は海濱に至り、西北は物部川を環らして其流海に入る、中間嫁門臺の東を內町といひ、西を外町といふ、十八町の坊名

村里名邑

多　郡志（之豆）育波（以久波）來馬（久留末）郡家（久宇介）

三原郡（美波良）倭文（之止利）幡多（波多）養宜（夜木）榎列（江奈美）神稻（久末之呂）阿萬（阿末）賀集（加之ゆ）

〔淡路常盤草（三津名郡）〕志筑郷　津名郡の東の海邊にそひたる郷也

和名類聚抄曰、津名郡志筑郷和名志津奈、按するに、しつなとあるはいぶかし、奈は支の誤なるべし、郷廢して今志筑浦志筑濱村などの名遺る、

〔吾妻鏡十〕文治六年（○建久元年）四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州并當時俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟成敗所々事（○中略）

淡路國（○中略）　廣田郷　下知大和前司重弘、其狀相副之、（○中略）

文治六年四月十九日

〔淡路常盤草（四津名郡）〕伊佐奈岐神社（○中略）　元久の廳宣一通、加集山護國寺にあり、其文に曰、

廳宣　留守所

可令早引募一二宮法華併兩會舞樂料荒野拾町事

右兩會舞樂料田荒野拾町、可引募東神代八木兩郷等無催促之田代云云、早令開發榎列並兩神代之荒野、可引募彼料田之狀、仍執達如件、

留守所宜承知、敢勿違失、以宜、

元久二年四月

守藤原朝臣花押

〔郡名一覽〕一淡路國（淡州）　四方一日　貳郡

	御原	
津名ツナ	三原ミハラ	管二
同	同	同
同	同	二郡
同	同	
同ツナ	同ミハラ	同
同	同	同
同ツナ	同ミハラ	同
同	同	同

〔本朝文粹 六奏狀〕請殊蒙天恩因准前例依和泉國功補淡路守闕狀　源順

所濟功十二箇條

以前微功等謹頭錄如右、抑件淡路國、名雖一國實纔二郡、中略

天延四年正月廿八日　散位從五位上源朝臣順誠惶誠恐謹言

津名郡

〔淡路常盤草 二〕津名郡〇中略　按するに郡は、國の東北にあり、津名を上郡といふ、京幾に近ければなり、三原を下郡といふに對して稱する也、〇中略　廣田鄕と養宜鄕との間、南北に亘りて山を隔つ故に、廣田以東を津名とし、養宜以西を三原とする事、古規に合へり、中世已來廣田加茂二鄕を三原郡に隷する古制に非る也、〇下略

〔淡路國大田文〕淡路國　二郡　注進　國領幷庄薗田畠地預注文事

合　津名郡　國領〇中略　三原郡　國領〇中略

貞應二年四月日　散位藤原朝臣花押〇下略

三原郡

〔淡路常盤草 五〕三原郡　按るに、郡は國の西にありて下郡と稱す、州の東津名を上郡といふに對す、平安京に近きを上とする也、大抵上郡は山谷多く水東流し、下郡は平原多く水西流す、

郡

〔倭名類聚抄 九淡路國〕津名郡豆奈　津名郷奈　志筑之奈郷　賀茂加毛　平安高加〇高山寺本平安作安平　物部毛乃部　廣田比路

て國を領す、

〔倭名類聚抄五國郡〕淡路國〈國府在三原郡、行程上四日、下二日、〉

國府

〔淡路常盤草六三原郡〕養宜故邸　中八木にあり、大土居と稱す、邸地東西六十步、南北百二十步許、〈中略〉按るに源右大將鎌倉に幕府を開きてより、諸國に守護職を置り、養宜の邸も一國の守護所なり、〈中略〉仁治四年〈今年寛元と改名す〉僧道範が道の記に、養宜の國府と書たり、是は北條經時〈時賴の兄〉執權の時なり、然ればこれより先に、既に養宜の守護所ありし也、此時朝廷の政令行はれず、古の國府は、信衰廢して、養宜の地、國府の如く書しなるべし、〈中略〉○市村　舊國府の市といふ、古の國府の地なり、市場の址有因て名く、榎並十一ケ所三條とともに國府の地也、〈中略〉○國司館址　市村の中に、地名國衙といふ所あり、是國司館の故址なるべし、

〔南海流浪記〕同日〈〇仁治四年二月四日〉船ヲ下テ陸地三里行テ、淡路國府ニ至テ中一日ヲ經タリ、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕淡路國〈中略〉〇管二〈中略〉〇管　津名　三原〈美波良〉

〔延喜式二十二民部〕淡路國〈下管〉津名〈ツナ〉　三原〈ミハラ〉　右爲近國、

〔皇國郡名志〕淡路國二郡

津名〈ツナ〉〈一云津本〉〈●由良●竹口●クス本●岩屋●トメ田●郡志〉〈據播磨ニ向〉

三原〈ミハラ〉〈●三原●松木●福良●文州×鳴戸〉〈向阿波ノ國〉

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕淡路

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	[illegible]	地誌提要	郡區編制

年、長沼宗政之ニ代ル、足利尊氏ノ反スル、細川氏ヲシテ南海ヲ經理セシメ、細川師氏（相春ノ弟）ヲ以テ州守ニ任ジ、守護トナシ、養宜（三原郡八木村）中ニ治ス、永正中、其六世孫尙春、三好氏ニ弑セラレ、地總ニ三好氏ニ歸ス、天文ノ末、三好長慶ノ弟安宅冬康、由良城ニ居テ州主ト稱シ、又洲本ニ城ク、天正九年、冬康ノ子貴康、織田信長ニ降ル、十一年、豐臣氏南海ヲ定メ、仙石秀久ヲ封ジ、洲本城ニ居ラシム、十三年、秀久ヲ讃岐ニ徙シ、脇坂安治ヲ封ジ、（三萬石）又三原郡志知ヲ加藤嘉明ニ賜フ、慶長中、安治、嘉明皆封ヲ轉ジ、池田輝政ノ三男忠雄ヲ封ズ、元和元年、全州ヲ以テ蜂須賀至鎭ニ加封シ、世襲、其臣稻田氏ヲ洲本ニ置キ城代トナス、王政革新、廢シテ名東縣ニ隷シ、津名郡ヲ割テ兵庫縣ヨリ兼治ス、又改テ悉ク名東縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕淡道國造

難波高津朝（仁德）御世、神皇産靈尊九世孫矢口足尼定賜國造、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年十月壬申、從五位下佐伯宿禰助爲淡路守、

〔吾妻鏡十六〕正治二年七月廿七日辛巳、六波羅書狀等到來、佐々木中務丞經高、乍爲帝都警衞人數、事輕朝威條々也、（中略）加之令守護淡路國之間、蔑如國司命、妨國務之上、去九日催聚淡路、阿波、土佐等軍勢、各着甲冑令馳騷、依奉驚天聽、被尋聞濫觴之處、爲敵欲被襲之由、雖申之、更無實證、所行之企、奇怪非一、早可遂關東之旨、及勅命云云、上皇（後鳥羽）頗逆鱗云云、　八月二日乙酉、佐々木中務丞經高蒙御氣色、淡路、阿波、土佐、以上三箇國守護職以下所帶等、被召放之、以其趣所被申京都也、（下略）

〔淡路常盤草一淡路國總考〕武家守護職等　按するに、（中略）鎌倉の代佐々木氏、小笠原氏、相續て此國の守護となれり、皇威倍振はずして、國守の職廢れぬ、足利氏起りて室町の代、細川氏をして淡路の守護たらしむ、この時諸國分崩割據して戰國やまず、細川數世の後、三好氏に併はせられて、其族人この國に居れり、安宅氏、織田家の命に從ひ、豐臣氏に歸降せしより、仙石、脇坂、加藤、池田相繼

地勢

〔太平記十六〕兵庫海陸寄手事
敵御方ノ時聲、南ハ淡路繪島ガ崎、鳴戸ノ湊、西ハ播磨路、須磨ノ浦、東ハ攝津國生田森、四方三百餘里ニ響渡テ、苟ニ天維モ斷テ落、坤軸モ傾ク計ナリ、

〔南遊紀行諸州めぐり四紀伊〕淡島の奥に苫島(トマ)とて島二あり、西にあるを奥の島と云、奥の島の北の出崎の丸山を虎が鼻と云、北にあるを地の島と云、地の島の北の出崎の丸山を牛が背と云、其奥(オキ)に小島一有、おしまでと云、淡島より地の島へ一里、奥の島へ二里あり、是皆紀州の内也、苫が島に昔より大蛇ありと云、

〔淡路常盤草四津名郡〕富島(トシマ)　机浦(○育波邨)にあり
按るに播磨魚住泊(今の魚崎なるべし)より津國大和田泊(今の兵庫)まで、一日行の間には船を泊むべき所少し、東南の風あらき時、岩屋の迫門乘過しがたきには、富島野島などに船を泊めて風を待べき所也、この故にむかしは、富島野島の海濱に、堤防を築きて船を泊る所の入江となせしなるべし、因て築江と名づけたるを、机と訓通ずる故に、後世省文を以て机と書替たるなるべし、其堤防いつの世にか、風波に破れて富島野島の名のみ遺れる事、譬へば大和田の泊破壞して、築江の名存するが如し、再興修復して、舟人の漂没を救はゞ大なる仁恩なるべし、

〔淡路常盤草一〕淡路國　南海道にありて、畿内中洲を左にし、四國山陽を右にす、東は攝津、和泉、南は紀伊、阿波、西は讃岐小豆島、北は播磨、その海中の一洲にして、大八洲の中央に位せり、日月の照すところ、其宜にかなひて、寒暑酷烈ならず、土壤に水清く庶物生を安くす、瑞穗の國の關畔しも、この國よりぞはじめをなせりとぞ、

道路

〔和漢三才圖會七十六淡路〕須本(卯至江戸百五十八里、辰巳至大坂二十二里、午至由良三里、申酉至播磨五里、寅至千光寺一里、丑至岩屋八里、亥至志筑三里、)　由良(巳午至阿波撫養島十八里許、辰巳至紀州雜賀山海上五里、)　岩屋(北至播州明石海上一里)　凡南北十三里、東西五里餘、

〔土佐日記〕卅日（〇承平五年一月）阿波のみとをわたる、（〇中略）とらうの時ばかりに奴島といふ所を過て、田無川といふ所をわたる、

〔淡路常盤草（八三原郡）〕沼島浦　南洋の海中に土生を距こと一里にあり、島の周廻二里許、西北に漁商の家多し、浦の北を泊りと云、船を泊る所なり、南を流河（ナガレ）と云、魚蝦多し、或は伊勢の海對馬の海に行て釣漁する者あり、沼島を太平記に武島と書るは、沼武音訓近きを以て訛れる也、紀貫之土佐日記に阿波のみとをわたりて、とらうのときばかりに、ぬしまといふところをすぎてとあるは即此地なり、

〔太平記十八〕春宮還御事附一宮御息所事
其後波靜リ風止ケレバ、御息所（〇尊良親王妃）ノ御舟ニ、被乘ツル水主甲斐々々敷船ヲ漕寄テ、淡路ノ武島（ヌシマ）ト云所ヘ著奉リ、此島ノ爲體、回一里ニ足ヌ所ニテ、釣スル海士ノ家ナラデハ、住人モナキ島ナレバ、浪アバラナル葦ノ屋ノ、斐箇澁キ栖（スミカ）ニ入進セタルニ、（〇中略）一宮ハ唯御息所ノ今ダ世ニ坐ナヌ事ヲ歎思食ケル處ニ、淡路ノ武島ニ、未生テ御坐有ト聞ヘケレバ、急御迎ヲ被下、都ヘ歸上ラセ給フ、

〔淡路常盤草（三津名郡）〕繪島　同じ浦（〇岩屋）石屋神社の海畔の磯邊につゞけり、一塊の丹石にて赤珠の象凝れるごとし、石紋自ら人物花鳥の象ありて、彫がごとく繪くが如し、珍寶として愛すべし、海より寄くる波に、石面を磨して畫文を成せるにや、島の頂には一石塔を置り、何人の所爲なりや知らず、緑樹數株あり、庇暗して攀登りがたし、島の根盤（ノベ）は平にして席を設たるごとく、海潮に臨て潔し、雪月の時、尤賞遊すべし、

〔源平盛衰記七〕成親卿流罪事
淡路ノ繪島ヲ見給フニモ、昔厩太子ノ遊レテ、波ニ朽セヌ繪島ヲバ、誰筆跡ナテ寫ケント、昔語モイト悲シ、

淡路　湊浦　三四度二〇分〇〇秒　岩屋浦　三四度三六分〇〇秒
洲本　三四度二二分〇〇秒　由良浦　三四度一八分〇〇秒
沼島　三四度一〇分三〇秒○中略

東西里差
山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　淡路　洲本　西〇度四九分四四秒

〔名所方角抄〕淡路國分　南海道の內也、紀伊より西、海越なり、住吉よりも西なり、

疆域

〔日本實測錄五〕淡路國○中略　沿海周廻三十八里二十五町一十四間

〔日本地誌提要六十淡路〕疆域　四至皆海、北ハ播磨東南ハ紀伊、西南ハ阿波ニ對ス、幅員三拾六方里、周廻三拾八里貳拾五町壹拾四間、東西五里貳拾壹町、南北壹拾貳里貳拾八町、

島嶼

〔日本實測錄十島嶼〕淡路國三原郡　實測　沼島、周廻二里六町三十八間、沼島浦三十四度一十分半、
遠測　道立岩　洲崎島　煙島又呼天神島　沖刈藻島又呼大島　伊毘沖島　丸山沖島
津名郡　實測　成山島、周廻二十五町二十六間、從西岬至牛濱、一十六町一十五間　遠測　檜島　大和島

〔釋日本紀五述義〕礙馭盧島オノコロジマ
私記曰、問、此島有何意名之哉、答、是自凝之島也、猶如言自凝也、今見在淡路島西南角小島是也、云云、俗猶存其名也、或說、今在淡路國東由良驛下、或說云、淡路紀伊國兩國之境、由理驛之西方小島云云、然而彼淡路坤方小島乎、今得此號也、

〔日本書紀十二履中〕八十七年○仁德正月、大鷦鷯天皇○仁德崩、○中略爰仲皇子畏有事、將殺太子、○中略興兵圍太子宮、○中略故三人扶太子、令乘馬而逃之、○中略時有數十人執兵追來者、太子遠望之曰、其彼來者誰人也、何步行急之、若賊人乎、因隱山中而待之、近則遣一人問曰、曷人、且何處往矣、對曰、淡路野島之海人也、　元年四月丁酉、免從濱子野島海人等之罪、役於倭蔣代屯倉、

〔日本風土記一國郡島名〕歩路アハヂ

〔倭訓栞前編二〕あはぢ　淡路の國は吾恥の義なるよし舊事紀に見えたり、二尊みといまぐはひして、子を生しめたる初めなれば、かくはいへるにや、人の禽獸に異なる所も、また恥を知て欲を縱まゝにせざるに在のみ、されど阿波國へ渡る海路の義にて、みやこ路、山達道などいふに同じともいへり、

〔古事記傳五〕淡道は南海道の淡路國なり、和名抄に阿波知、書紀、應神天皇の大御歌に、阿波旋辭摩、名義は、阿波國へ渡る海道にある島なる由なり、（京路山路など）とあり、後に國となりても、なほ淡路島とのみ云ならへり、（繼體）佐渡も然り、など云は常なる中にも、万葉に淡路土左道ともよみ、又山跡道之島ともよめれば、阿波道之島うたがひなし、又津島の名の意も似たるをおもへ、さて次の國々の例によらば、生子淡道島、亦名謂穗之狹別とあるべきを、此島のみは、古より亦名をも引連て、唱來しなるべし、

〔夏林本節用集下〕淡路淡州下、管二郡、四方一日、國之母也、號二柱、衣服魚不乏、良材又多、小上國也、

〔古事記上〕於是天神諸命以、詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而言依賜也、（中略）久美度邇（此四字以音）興而、生子水蛭子、此子者入葦船而流去、次生淡島、是亦不入子之例、

〔日本書紀一神代〕伊弉諾尊伊弉冊尊、（中略）於是陰陽始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、

〔地勢提要乾〕各國經緯度（南里程）

淡路洲本（五丁目）極高三十四度二十一分、經度西五十分、從東都（[illegible]）一百六十七里二丁九間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

雜載

者沼々相及、至熊野者則少矣、豈以險之故耶、〇下略

〔後拾遺和歌集 七雜〕紀伊守爲光おさなき子をいだして、これいはひて歌よめといひ侍りければよめる、　清原元輔

萬代をかぞへむものは紀の國の千。尋。の。濱。のまさごなりけり

〔南方紀傳 上〕元弘元年七月三日、大地震、紀州千。里。濱。陸地成、二十餘町、

〔熊野遊記 上〕歷印南村、抵切目村、〇中略絕水南行上小陞、岩白海岸也、是曰千里濱、烟景與新晴相迎、蒼蒼可賞、倭歌者流所歌也、

〔南遊紀行 諸州めぐり 四紀伊〕瀨山あり、吉野川の中島也、名所也、萬葉集以下古歌多し、島長二町餘、横壹町許あり、河中にかゝる島めづらし、松さくら茂れり、美景也、櫻も所々さかりにみゆ、今朝あけぼのの景色ことによし、〇中略此山は川瀨の中にあれば瀨の山也、

〔延喜式 二十八兵部〕諸國健兒〇中略紀伊國六十人〇中略

諸國器仗〇中略紀伊國 甲二領、横刀五口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

淡路國

名稱

淡路國ハ、アハヂノクニト云フ、南海道ニ在リ、四面皆海ニシテ、北ハ播磨、東南ハ紀伊、西南ハ阿波ニ對ス、東西凡ソ五里餘、南北凡ソ十二里餘、周廻凡ソ三十八里餘、此國ハ、古ヘ國府ヲ三原郡ニ置キ、津名、三原ノ二郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、現今兵庫縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕淡路 阿波知

〔新撰類聚往來 下〕國名〇中略淡路 淡州

〔南紀諸州めぐり紀伊〕和歌浦に（和歌山より一里あり）東照宮右の山上に立玉ふ、宮作大にして甚美麗也、樓閣多く僧舍六坊有、是より和歌浦を望めば其景すぐれたり、今日は此邊櫻さかりにさきて光景もいとまされり、（中略）○是より少右の方へ行て漁人の町を過、和歌の浦の海べたに出づ、おきに島の島おきの島みゆ、和歌の浦は南をうけて入海なり、俗說に此浦におなみ有て、めなみなし、故に片男波と云、此說非也、男波とは大なみなり、め波とは小波也、われもとより其說を信せず、あめつちの內、などてかゝるつねの理にたがひぬる事やあるべきとおもひしかば、かへりて後人にもかたり其迷をさとさんため、わざと此濱邊にやすらひて心をとめて久しく見侍りしに、いさゝか俗說のごとくにはなし、只よのつねの所のごとくおなみめなみともにいくたびもたち來れり、和歌の浦にしほみちくればかたをなみと、古歌によめるは、俗說の意にあらず、しほみち來りて潟なくなると云意也、其故あしべの方にたづ鳴來れるといふ意明らかにきこゆ、萬葉集六卷に此歌あり、潟乎無美とかけり、此文字にて歌の意明らかなり、乎はやすめ字也、しほみちくれば潟なくなると云意也、いとまなみといへるもいとまなしと云意なり、此類萬葉の歌におほし、此浦の佳景聞しにまさりて目を驚かせり、我此景色をむさぼりみて海邊に躊躇し、去事をわすれて時をうつせり、（中略）○近年新しく名付し和歌の浦八景と云は、東照宮、天滿宮、玉津島、紀三井寺、妹背山、片男波、（又かたな鳴と云在所あり）布引の松、蘆邊寺是なり、蘆邊寺は妹背山の南辨才天のある所也、是亦人の歌によりて名づけしならん、八景の內玉津島を除ては、いづれも古來の名所にあらず、

〔武德編年集成三十一〕天正十三年三月、秀吉、築城（○岡山即和歌山）ヲ監臨ノ其序ニ玉津島ヲ遊覽シ、茶店ヲ營ミ能舞ヲ享レ、軍旅ノ勞ヲ慰ヒ、且倭歌ヲ賦ス、

打出ナ玉津島ヨリナガムレバミドリ立ソフ布引ノマツ

〔熊野遊記〕夫紀之勝、熊野以奇勝者也、和浦以遠眺勝者也、俱亡論、焉、絕景、蓋然四方之士登臨者

にぞなりぬる、○下略

〔紀伊國名所圖會一下和歌山〕吹上(フキアゲ)同濱、今府城の西南をいふ、また砂山とて、ちいさき岡のあるも、いにしへの遺跡なり、

此吹上の濱といふは、西南の風烈しきときは、白砂を高く吹上て、一夜のほどに一處に吹あつめて山をなし、又しばしが程に吹散して、もとの平地となり、こは常に風異砂をふき上る、これによりて吹上のはまとはいふなり、此地はむかしより月の名どころにして、文苑古詠かずかずあり、されば年歳累りて名所も廢して、蒼海三たび桑田となるのならひ、今は其俤さへも術士の甓を達て、出る月も家より出て家に入の風情とはかはりぬ、

〔枕草子九〕はまは　ふきあげのはま

〔後拾遺和歌集九羇旅〕熊野へまゐり侍りける道にて、吹上の濱を見て、　懷圓法師

都にて吹上の濱を人とはゞけふ見る計りいかゞかたらむ

〔紀伊國名所圖會二海部郡〕和歌浦今西南出島浦あり、上古はこゝの洲なくて、一めんの干かたなり、○中略

當浦は扶桑におゐて、名たる勝地にして、○中略東西廿餘町ありて、濱松の色濃、あしべの田鶴波間のちどり、江水は洋々たり、○下略

〔源平盛衰記三十九〕維盛出屋島參詣高野附粉川寺謁法然房事

權亮三位中將維盛ハ、○中略サテモ御舟ニ乘移リ給、○中略八重立霞ノヒマヨリ、御船汀ニ押寄タリ、爰ハイヅコナルラント尋給ヘバ、名ニシオフ紀伊國和歌浦トゾ聞給、夫ヨリ吹上ノ浦ヲ過給ケルニ、一門ヲ離、兄弟ニモ知(シラ)レテバ、一ハ慎ニ似タレ共、カヽラザラマシカバ、係名所ヲバ爭カ可見ト聊慰給ケリ、彼和歌浦ト申ハ、衣通姬ト居、山ノ岩松礒打波、沖ノ釣船月ノ影、シラヽノ濱ノ眞砂ニ、吹上ノ浦、濱千鳥、日前國懸ノ古木ノ森面白カリケル名所哉、サレバ衣通姬、玉津島姬明神ト彰テ、此所ニ住給ヘル理也トゾ思召、○下略

て、地藏の像を置りといへり、それを神倉權現といひて、其外に社はなし、かの高倉下命の、神劒を得たりし地は、こゝなりとぞ、熊野村は、新宮に、上熊野、中熊野、下熊野とて、三村あり、三輪が崎は、新宮より那智へゆく道の海べなり、新宮より一里半ばかりありて、けしきよき所なり、佐野は佐野村といふ有て、三輪崎のつゞきなり、佐野岡は、村より七八町北にあり、玉の浦は、那智山の下なる、粉白浦といふところより、十町ばかり、西南に有、離小島といへるは、玉の浦の南の海中に、ちりおりに岩あれば、それをいへるなるべし、其外には島はなし、熊野御崎は、那智山の下濱宮よりゆく海べの道を、大邊地といふ、その間に土野村といふあり、海中へ長くつき出たる崎にて、鹽の御崎とも鹽崎浦ともいへり、三前神社あり、少彥名命を祭る、此所の海は、のぼり潮くだり潮とて、年を重ねて、片潮に流れて、しほの滿干にかゝはらず、いと早く流るれば、海を渡る船人の、いたくおそるゝところなり、有馬村は、新宮より北の方へ、伊勢の方へ五里ばかり行て、木の本といふ所の廿町ばかり南にあり、そこに產田神社、又花の窟あり、里人說りて、大般若の窟といふ、此窟の山、高さ廿四五間、周三町ばかりあり、此窟は伊邪那美尊を葬奉れる所といふを、又或說には、いざなみの尊を葬奉れる所は、產田神社にて、花の窟は火神なりとも。いへり、楯が崎は、木本庄二木島といふところより、一里ばかり海中にあり、むかしは此所伊勢と紀の國の堺なりしと、里人いへり、錦の浦は、長島庄長島村の一里ばかり東なり、此地むかしは志摩國なりしとぞ、上件磯間浦よりこなたは、昔むろの郡なり、そも〳〵此きの國はふるき名どころども多くして、萬葉集にも殊におほく見えたるを、世の人は、いづれの郡にありとだに、えしらぬ所々の多かるを、此國にては、かくれなくて、みな人よくしれるなど、又さらぬも、書どもには、みなしるしたるが、見過しがたくて、その大かたを寫しおきつる中に、たしかならぬさまに聞ゆるをば、みなもらして、さらありぬべくおぼゆるかぎりを、それかれとえりいでゝ、しるせるはどに、此書は、すゞろに、きの國の名所集のやう

吹上社といふをも、並べ祭れり、或説には、吹上社は、關戸村の矢の宮なりともいへり、雜賀(サイカ)浦は、海士郡にて雜賀庄とて廣き所なる其中に、若ノ浦の西の方に雜賀崎といふところ有、此わたり雜賀浦なるべし、浦の初島は同郡濱中庄椒(ハジカミ)村の八町ばかり海中に、地の島といふ有、東西四町あまり、南北八町ばかりの島なり、其島の三町ばかり西に又島有て、沖の島といふ、東西五町に、南北六町ばかりあり、此二つの島を、浦のはつ島といふ、小爲手の山は、在田郡山保田庄に、推手(オシテ)村といふあり、これか、其村は伊都郡の堺にて、山のおくなり、白崎は、日高郡衣奈庄衣奈浦の東南の方に、衣奈八幡といふある、其社の緣起に、白崎といふこと見えたり、三穗の岩屋は、同郡三尾村の廿五町ばかり東南の海べに在、岩屋の中に、石の觀音の像あり、熊野道のうち、日高川鹽屋浦のあたりより、西の海べに、一里ばかりの長き松原有て、和田、松原といふ、此岩屋は、その西の際なり、野島阿胡根浦は、同郡鹽屋浦の南に野島里あり、その海べをあこねの浦といひて、貝の多くよりて集まる所なり、切目(キリ)山は、同郡熊野道の海べにて、切目坂、切目浦、切目村あり、山は村より一里ばかり東北なり、村の北に切目王子ノ社も有、磐代は同郡なり、切目を過て、切目川有て、次に磐代なり、西岩代、東岩代とて村有、岩代王子社、海べにあり、千里濱は、岩代の南の邊より、南部までのあひだ、一里半ばかりのところをいふ、むかし元弘元年七月三日、大地震にて、きの國千里の濱廿よ町がほど、たちまち陸となれるよし、太平記にしるせり、三名(ミナベ)部は、岩代の南なり、三名部村みなべ浦あり、その十町ばかり海中に島有、これ鹿島なり、さて三名部の南に、堺浦といふ有て郡堺なり、そこまでは日高郡、それよりあなたは牟婁郡なり、礒間浦は、田邊の王宿村の南、神子濱つゞきにあり、神島は、その一里ばかり海中にありて、かしまともいへり、白良濱は、湯崎鉛山と、瀬戸とのあひだに在て、里人は白濱といへり、此濱の眞砂、遠く見れば雪のごとし、神藏山は、新宮より二町ばかり東南（一書には西南）に有、社の說に、天照大神と、高倉下と、二神を祭といへり、石の階を、六間ばかりのぼりて、上に堂有

水をば人のむべからずといへり、○中略
藤代峠 京よりくまのへの順道也、眺望無雙の地なり、○中略
由良の御崎 藤代にちかし、由良の戸とも云也、○中略
若の浦 伊勢に同名有、藤代にちかし、○中略
吹上の濱○中略 吹井の浦 和泉丹後に同名あり、吹上の濱にちかし○中略
岩代山 有馬の王子とて社あり○中略 鹽屋津 鹽屋の王子とて社あり○中略
三熊野○中略
岩田川 熊野海道に此川有之○中略
千穂嶽 東屋の嶺○中略 糸鹿山○中略
音無川 音無の瀧同山同里 ひとつ所也、雄山といふ所にあり、○中略
妹脊山 妹山脊山二ツを、一ツに云也、○中略
妹が島 像見の浦 神島 磯間浦 結の浦 千尋の濱○下略

〔玉勝間 九〕紀の國の名どころども

待乳山に、大和國の堺にて、紀の國伊都郡なり、角田川は、待乳川のことなるべし、此川みなもとは、葛城山のうちより出て、北隅田庄を流れて、きの川におつるなり、紀の國は、和泉國よりきの國の名草郡にこゆる雄山に在て、南のふもとなる山口村にちかし、袖中抄に、雄山の關守とあり、白鳥關といへるも、此關のことなるべし、名草山は紀三井寺の山なり、飽等濱は海士郡賀田浦の南の方に、田倉崎といふ所ある、是なりと、里人のいひ傳へたりとぞ、吹上ノ濱は若山の西南にて、若ノ浦の北なり、雄水門は今若山の内に、湊といふ所に、小野町といふ有て、竈子ノ社ある、そこに雄之芝といふあり、五瀨命の墓ましゝ跡也といへり、小野町といふも、もと雄の一ツなりといへり、此竈子ノ社に

紀伊國ノ風俗、不律義第一ニ而、陽氣甚シクイヤシク、上ト而ハ下ヲ貪リ、下ハ上ミヲアナドリ、法令ヲ不入而更ニ言語ニ絶タリ、牟婁日高在田郡ノ人、別而我慢ニシテ、意地ヲ強ク立ルカト思ヘバ亦弱ク而、詰ル處之奥意不極シテ、昔バ昨日味方タリシ人之弱身ナレバ、今日ハ亦敵トナリ、其從フ處ノ人ニ大事有ト見レバ、サスガ本ヘモカヘル事ヲハヂ、頭ナシノ一揆ヲモ企ル如クノ風俗、言舌ニ顯然ト而備レリ、因茲見之バ、郡々ニ名主ト號シ、庄司殿ト是ヲ呼テ、是ヲ主君ノ如ク仰ギ、勢ヲ得ル時ハ是ヲ先立、後ルヽ時ハトモニ從テ蟄居スルノ類、治承之亂之時ヨリ而聞傳、其アリサマヲ見ルニ誠ニ、思ヒ當レリ、其氣ノカタクヘナク不頼カラ事、擧テ難云、扨亦伊都名草那賀海部郡之人ハ、南部ヨリハ氣柔也、然レドモ差掛リタル意地ノミニテ、是モ詰リタル心徹底モ無之トイヘドモ、善惡ヲ知リテ、多クハ惡意ニ從フ程ノ儀ハ無之ト見ヘタレドモ、慾深キ事、日本ニモ雙ブ國有間敷キ也、都而武士之風俗、身ヲ上分ニ持チナシ、常ニ戀慮ヲ盡而放逸ヲ不知、唯心之行處ニ從テ、利口ヲ面前ニ顯シ、律儀ト云コト實ト云コトヲ露ホドモ不用而、シカモ武之業ブ處ノ事ヲバ如形雖務、終ニ無實シテ其業數ヲ覺テ耻ヲカク之人、千人ニ九百九十人、如形爾伊丹石州之五ケ國ヨリハ意地強シ、碁石蕨蒜ハ吉、

〔日本鹿子十三〕同國〇紀伊中名所之部

紀の川　吉野の末也、西へ流たる川也、かぶろの宿と云所より五町計北也、此宿ゟ高野山へ三り也、不動坂と云へ上る也、

巨勢野　春野多野といふ所もちかし〇中略

紀の關　かぶろの宿と高野と中間に有之と云々、また蟻との渡りと云所也共云、

高野山　京より二十九り、大坂より十六り也、〇中略

玉川　金剛三昧院より奥の院へ一り也、彼院より南に玉川と云橋あり、奥の院西向也、又玉川の

名所

靑皮(サツヒ)　陣皮(チンヒ)　枳殼(キコク)　楊梅(ヤマモヽ)　蜜柑　若山忍多酒　延命酒　宮崎麥粉　紀伊川鯉　藤代馬刀(マテ)
烏帽子貝(ヨメイヲト云)　玉津島鯛　松江浦蛤　蜊(アサリ)・サヽラ貝、雜賀鹽　鯛　鱵(マガツヲ)　筋鰹　大鱠
大鱸(スヽキ)(此外魚類多々所也)　若浦海雲(モヅク)　鹿尾菜(ヒジキ)、鳥足(鳥ノ足ニ似タル藻也)　鼠藻　堅苔　三穗荒和布　賀太浦賀
太和布　蓬(舟ニ用之)　黑江澀地椀　熊野白蜜　櫁(クヤマ)　樣　楠板(舟木ニ用之)　櫃木(家普請ニ用之)　ユスノ木(櫛ニ用)
椎木　葛籠藤　矢篦竹　椋實　天狗矢根　燧　海鼠　酢貝　子安貝　鯨油　鯨骨　粉凝
草(ツトコロアンド一用之)、布苔　泥川鯛　玉置檜杖　檜笠(山伏用之)　根來椀　折敷(昔□□繁昌之時、寺ニ居ル□□□賣之、當時カ□□)
紛川紙(小奇獸馬ニ用之)　鮎白干　那智蒸石　金付石　神子濱砥　大崎庭石　淨石　神川弓　田
邊鉛　鴨谷森平墨・侍乳膏藥　大野穗蓼(鴨四季共ニ有ト云)　日高松茸　高野岩茸　干蕨　蘖(外ニ大ワヘ皆)
玉(フト云)　若提子　松煙　油煙　目藥(大師ノ夢想ノ藥ト云)　傘紙　菅笠

人口

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年五月己亥、令紀伊國奈我名草二郡停布調獻絲、但阿提飯高牟婁三郡獻綿
也、

〔官中秘策 五〕紀伊國　七郡(○中略)
一人數五拾万八千六○(六恐壹萬)百七拾四人
　內　貳拾八万貳千四百七拾五人　男
　　　貳拾貳万五千六百九拾九人　女
高三拾九万七千六百六拾八石餘　紀伊國

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)(○中略)
□□國
一人數四拾七万七千三百六拾壹人
　內　貳拾四万五千六百貳拾四人　男
　　　貳拾三万千七百三拾七人　女(○中略)
諸國人數調(弘化三丙午年)(○中略)
□□國
一人數四拾九万九千八百貳拾六人
　內　貳拾五万六千七百五拾壹人　男
　　　貳拾四万三千七拾五人　女
高四拾四万八百五拾八石餘　紀伊國

風俗

〔人國記〕紀伊國

卅石、胡麻子五石、醬大豆十石、隔三年進醬大豆三石、

〔延喜式 二十四 主計〕紀伊 略○中 右十二國並上絲 略○中

紀伊 略○中 右廿九國輸絹 略○中

紀伊國 行程、上四日、下二日、海路六日

調、兩面五疋、鼠跡羅二疋、一窠綾四疋、二窠綾五疋、薔薇綾三疋、白綾廿疋、練帛卅疋、緑帛十疋、緋絲卅五絇、縹絲、緑絲各廿絇、橡絲十絇、皂絲五絇、自餘輸絹、絲、綿、鹽、鮨鰒、堅魚、久惠腊、滑海藻、但浮浪人調庸輸錢、　庸、白木韓櫃五合、自餘輸綿米、　中男作物、黄蘗三百斤、龜甲十七枚、絹、綿、紅花、胡麻油、鹿鵩、鹿鮨、猪鮨、堅魚、押年魚、煮鹽年魚、鯛楚割、大鰯、海藻、滑海藻、

〔延喜式 三十三 大膳〕諸國貢進菓子 略○中 紀伊國 甘葛煎七升

〔延喜式 三十四 木工〕諸國所進雜物 略○中 海藻二千九百五十斤 略○註 紀伊國千五百斤

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥 略○中

紀伊國卅五種　獨活、松脂各十斤、牛膝、楡皮、厚朴各九斤、草薢五兩、白朮一斤、藍漆、芒茹、地楡各三斤、昌蒲六斤、玄參、葛花各十斤、苦參廿六斤、白芷一斤四兩、躑躅花二斤、木斛廿五斤、石斛二斤五兩、大青、伏苓各四斤、括樓一斤十四兩、升麻十兩、葛根十一斤、天門冬八斤、夜干一斤九兩、滑石一百廿斤、署預六升、桃人一斗、牡荊子二合、車前子、蜀椒各五升、菟絲子二升、麻子八升、亭歷子一升、桑椒三升、

〔延喜式 三十九 內膳〕旬料 略○中 紀伊國雜魚上中下旬各三擔半 司受取課丁七十四人、以其調物交易鮮物、備丁運進、略○中

節料 略○中 紀伊淡路兩國 三節各五擔 略○中

年料 略○中 紀伊國 鮨年魚二擔四壺

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、略○中 宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂 略○中 紀伊國縑、

〔毛吹草 三〕紀伊

出擧稻

〔日本鹿子十三〕紀伊國七郡、小下國、南北四日、〈略〉〇中知行高三十九万五千四百二十石餘、

〔官中秘策五〕紀伊國　七郡〈略〉〇中

一石高三拾九万七千六百六拾八石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〈略〉〇中

紀伊國〈曾弘領〉　一高四拾四万八百五拾八石三斗七升七合七勺壹才

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〈略〉〇中

紀伊國正稅公廨各十七万五千束、國分寺料二万束、金剛峯寺料五千六百十六束、國寺燈分幷佛聖料二千八百束、龍[illegible]〇粘[illegible]河寺料四百束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕紀伊國〈略〉〇註管七〈中略〉正公各十七萬五千束、本稻四十六萬八千八百十八束、雜稻十一萬八千十八束、

國產貢獻

〔儀式四〕踐祚大嘗祭儀下

太政官符諸國司

紀伊國　海部郡薄鰒二連　生鮑三籠　生螺三籠　都志毛三籠　古毛三籠　螺貝燒鹽五壺

右六種國所造備〈略〉〇中

以前得神祇官解偁、供奉大嘗會、其所由加物、依例所請如件者、國宜承知、依數造備進上、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〈略〉〇中

綿〈中略〉紀伊、阿波、伊豫十五屯、國各二合、

〔延喜式二十三民部〕年料舂米〈略〉〇中

紀伊國〈大炊二百石〉〇中略

年料別納租穀〈略〉〇中

紀伊國〇三千石〈中略〉

年料別貢雜物〈略〉〇中

紀伊國〈[illegible]七十斤、鐵[illegible]〉〇中略

諸國貢蘇番次〈略〉〇中

紀伊國七壺〈二口各大一升、五口各小一升〉〇中略

右十四箇國爲第六番〈子午年〉〇中略

交易雜物

紀伊國〈白綿十二屯、絹二百疋、鹿皮十張、[illegible]〉

可₂早弁₁濟御封米₁事

副下廳宣一通

右當國御封保、國司所₂被₁成₂廳宣₁也、○中略

久安三年十一月　日○署名略

藩封

（慶應元年武鑑）紀伊中納言茂承卿正三位元治元年五月被叙○中略　五十五万五千石　御在城紀州名草郡和歌山江戸ヨリ百四十六里餘

田數石高

桑山果根院居、慶長六、淺野紀伊守幸長、同但馬守長晟、元和五、紀伊大納言賴宣卿、以後被₂領₁之、

（倭名類聚抄五國郡）紀伊國略○註管七田七千百九十八町五段百步

（拾芥抄中末本朝國郡）紀伊上近七郡（中略）田七千百十九町

（海東諸國記）紀伊州　郡七、水田七千二百三町七段、

（紀伊續風土記二提綱）田制○中略

慶長六年撿地高

田　一萬九千十町八畝十一步　畠　一萬二百三十七町七段四畝二十二步　田畠總計

二萬九千二百四十七町八段二畝卅三步　田畠高　三十七万六千五百六十二石五斗八升

六合

今時○天保撿地高

田　二万五百五十五町八段五畝三步　畠　一萬三千三百九十九町六段五畝十九步　田畠總計　三萬三千九百五十五町五段二十二步　田畠高　四十一萬九千百三石餘

高野領撿地高

田畠總計　二千百四十三町八段六畝十三步　田畠高　二萬千三百石

〔後宇多院御領目錄〕配分　紀伊國荒河庄　神野眞國庄　印南庄〇中略

一歡喜光院〇中略　紀伊國三上庄〇中略

右所々可有御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年〇德治元年六月十二日　右衞門

高倉前宰相殿

〔古文書類纂廻下狀〕文殿廻　紀伊國高家庄內西庄原村池田事

宣旨局雜掌奉　義亨上人雜掌

右來廿四日可有其沙汰、兩方帶文書正文、巳一點、可令參對文殿之狀、所廻如件、

康永三年二月十二日

〔南方紀傳下〕南朝元中九年壬申北朝明德三年六月七日、南帝命刑部少輔顯達、以紀州南有本庄附紀伊國造、

〔應仁後記中〕赤澤宗益攻落高屋城事

畠山尙順ハ又此城〇高屋ヲ退去シ、再度紀州ノ廣ト云所エ落行キ、殘徒數多討捕ラレテ、細川方ノ軍兵數度ノ勝利ヲ得タリケル、〇中略尾張守尙順ハ紀州廣ノ庄ニ隱レ居テ今年十八歲、未ダ若冠ノ身ナレドモ剃髮ノ姿ト成テ、卜山入道ト號シケルガ、〇下略

〔續應仁後記三〕紀州兵亂事附畠山卜山禪門病死事

畠山卜山禪門ハ、紀州廣ト云所ニ閑居シテ在ラレケレ共、近年當國湯川ノ庄ノ住人ニ直光ト云者有テ、卜山ノ命ニ背キ騷動ニ及ブ、抑此湯川庄司直光ハ、昔ノ武田惡三郎信忠ガ末孫ニテ代々當國ニ居住シ、熊野八庄司ノ隨一ナリ、

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺政所下　紀伊國山田保

也、仍執啓如件、

後七月廿九日　　太宰權帥經房奉

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年五月廿九日壬午、御隨身左府生秦兼平、去比進使者、是八條院領紀伊國三上庄者、兼平譜代相傳地也、而自關東所被定補之地頭、豐島權守有經、於事對捍、抑留乃貢、早可蒙恩裁之由訴申、仍任先例可沙汰濟物之旨、給御下文之間、彼使者今日歸洛云云、

〔明惠上人傳記上〕建仁元年辛酉二月比、〇中略紀州保田庄ノ中、須佐明神ノ使者ト云者、夢中ニ來テ、住處ノ不淨ヲ歎キ、又一乘ノ法、傳授ノ志、甚深之由ヲ被述、

〔吾妻鏡二十六〕承久四年〇貞應元年四月廿七日、以鳥居禪尼所領、紀伊國佐野庄地頭職、尼一期之後、子息長詮法橋可相傳之由被仰云云、彼禪尼者、六條廷尉禪門〇源爲義妹、故右大將家〇源賴朝姨母也、仍令避數箇所地頭職給訖、而子息法橋行忠長詮兄背母命、押領當庄、剩去年兵亂之時、候仙洞致合戰、零落之後、猶立還當庄之由、長詮就訴申、如此、長詮者抽關東御祈禱之忠云云、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事〇中略

一家地文書庄園事〇中略　前攝政〇中略　家領　女房方〇中略　紀伊國井上本庄被寄月輪殿高野護摩用途〇中略

新御領〇中略　紀伊國三栖庄院御領〇中略　右大臣〇中略　家領　女院方　紀伊國井上新庄被寄進高野寺谷不斷念佛〇中略

建久二年十一月　日　　愚老在御判

〔吾妻鏡四十一〕建長三年八月六日甲午、勝長壽院小御堂者、故禪定二位家御遺跡、濫觴異他、然近年及破壞、其跡已欲改、仍爲被加修理、以紀伊國雜賀庄募料所、於不日可終功旨、今日被仰備後前司康持付云云、

合

相樂御庄　國懸宮神殿西端間內參尺付壇塲石　南部御庄　日前宮神殿東妻庇〇中略付壇塲石

治承二年閏六月廿一日　散位紀朝臣在判

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元暦元年二月廿一日庚辰、有尾藤太知宣者、此間屬義仲朝臣、而內々任御氣色參向關東、武衞今日直令問子細給、〇中略紀伊國田中、池田兩庄、令知行之旨申之、以何由緖令傳領哉之由被尋下、自先祖秀鄕朝臣之時、次第承繼處、平治亂逆之刻、於左典厩〇源義朝御方牢籠之後得替、就愁申之、田中庄者、去年八月木曾殿賜御下文之由申之、召出彼御下文覽之、仍知行不可有相違之旨被仰云云、

〔吾妻鏡　六〕文治二年八月廿六日庚子、於蓮華王院領紀伊國由良庄、七條細工宗紀太、構謀計致濫妨之由、領家範季朝臣折紙、並院宣到來之間、今日令下知給之云云、

下　蓮花王院御領紀伊國由良庄官

可早停止側細工字七條宗紀太妨事

右件御庄、停止彼細工之謀計、任院宣、領家可令知行庄務之狀如件、以下、

文治二年八月廿六日

廣由良庄濫妨事、折紙進上之、可令奏下給候、七條紀太丸之謀計殊勝候、尤可被處重科候也、凡領家者、基親朝臣云云、不知子細、田舍人猥以結構如此之狼藉候歟、以外事候、就中臨幸南山之由其聞候、彼庄相違候者、榑物具等不可叶候、年來持田畠勤仕件役、而被建立高雄寺庄候了、雖片時可被急仰下候歟、恐々謹言、

閏七月廿四日　木工頭範季上

蓮花王院領廣由良庄妨事、領家範季朝臣所進折紙副文案等如此、可被尋子細之由、內々御氣色候

下紀伊國阿氏河庄

可早停止旁狼藉如舊爲高野金剛峯寺領事

右件庄者、太師御手印、官府内庄也、而今自寂樂寺致濫妨云云、事實者不穩便事歟、御手印内、誰可成異論哉、早停止彼妨、如舊可爲金剛峯寺領之狀、如件、

元暦元年七月二日

(吾妻鏡十九)承元四年二月十日己巳、紀伊國安氏川庄地頭職者、故右大將軍御時、爲高野大塔造營奉行賞、賜高雄文覺房訖、御素意被改彼一身之處、此間湯淺兵衞尉宗光稱得上人讓狀、望申安堵御下文、被經御沙汰、以件地頭職、不申子細、無左右難讓補輙不可被許容之由、雖被仰之、宗光爲御家人有其功之上、准新恩可宛給之旨頻依愁申、今日被成政所御下文云云、

(壬生家文書二)日前國懸庄々請文案

謹請造日前國懸造營支配一紙

右國前庄所課、任配符之旨、來十月以前、可令取進木[　　]返抄之狀、謹所請如件、

治承二年閏六月　日　　預□僧在判

謹請靜川庄所課事〇中略

治承二年閏六月廿八日　　僧在判

謹請造日前宮課役事

生馬墾田庄三綱寺領

右任支配之旨、可令勤仕之由、可令下知庄司等所之狀如件、

治承二年閏六月廿六日在判〇中略

謹請造日前國懸宮殿舍相樂南部所課事

極樂寺領〈○中略〉　紀伊國　伊都野庄〈○中略〉

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰〈本注○下略〉

〔石淸水文書一〕太政官牒石淸水八幡宮護國寺　宮寺所所庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處之事〈○中略〉　紀伊國陸箇處　壹處　字野上庄　那賀郡〈○中略〉　壹處　字隅田庄　伊都郡　水田貳拾玖町〈○中略〉　壹處　字鞆淵庄　日高郡　水田參拾町　畠貳拾町〈○中略〉　壹處　字出立庄　牟婁郡〈○中略〉

一應停止庄拾參箇處事〈○中略〉　紀伊國壹處　字名手庄〈○中略〉

延久四年九月五日〈○署名略〉

〔源平盛衰記四〕殿下御母立願事

御託宣聞モタガハセ給ハズ、御願物イヘナセ給テ、御心地本復ナセ給ケレバ、紀伊國田中庄ハ、殿下〈○藤原師通〉寄庄也ケレ共、八王子ニ御寄附アリ、

〔壬生家文書二〕日前國懸庄々請文案

謹請川上御庄所課造日前國懸兩社殿舍修造請文事〈○中略〉

治承二年閏六月廿四日　雜掌藤原〈在判〉

謹請造日前宮法華寺御領阿氐川庄所課男客殿一宇切符事〈○中略〉

治承二年閏六月廿六日　預所〈在判〉

〔吾妻鏡三〕壽永三年〈○元曆元年〉七月二日戊子、成就院僧正房使者、去夜戌剋參著、是寂樂寺僧徒、令亂入高野山領紀伊國阿氐河庄、致非法狼藉之由依訴申也、則進覽當山結界繪圖、並大師御手印案文等、筑後權守俊兼、於御前讀申之、凡吾朝弘法者、偏爲大師聖跡之由、武衞有御信仰之間、不日被經沙汰、可止狼藉之旨、被下御書、其狀云、

莊保

轉じたるか、にしき島と云たるが、シの字の省りたるかなるべし、〈略〉○中　さて元來丹敷といへる地は、和名抄鄉名の部に、志摩國英虞郡の下に、甲賀、名錐、船越、道潟、芳草、二色、餘戶、神戶と出たるを考ふるに、英虞郡の東北に、今も甲賀と云あり、同東南海邊に波切と書て、なきりと稱する地名錐也、船越も其西にあり、道潟は和名抄今の印木道浮とあるは誤なり、今伊勢國度會郡に入たる、南の海邊に道方と云是なり、芳草は同其西に方座といへるにて、今の紀勢の國界に遠からず、次に二色とあるをみれば、東北より西南への順次なり、されば此二色鄉といへるは、今の錦浦二鄉村の邊より、ひろく南方古の國界なる二木島のあたりまでを云る名にて、上代大名にひろく云けん事察すべし、されば一名丹敷浦と傳へけんも、ひがことに非ず、後々詳細に地名出來て、和名抄の頃は令の定にて、北より南へ押かぞへて、今の錦長島の邊を二色の鄉とし、相賀、尾鷲の邊を神戶とし、〈略〉○註　曾根三木の邊を、餘戶と云わけしより、〈略〉○註　二色といへる舊來の大名は、纔に其鄉の東のはてなる浦の名にのみ殘りたるを、其地にのみ拘りて解せんとするより、不審多くなれるなり、丹敷戶畔は、則此上代大名にいへる二色鄉といへる程を、主領居たる者ときこゆれば、我領地の界に出て戰たりとみれば、則二木島の地にて、紀の堺もしか聞えたり、〈略〉○中　かく見れば二木島の名も丹敷の轉音にて、殘れる所緣も、又別にいへる二木島、古の國堺なりし事も、いよいよ明らかにて、すべて紀記の傳說同一に歸していぶかしき限もなかるべし、

〔宮寺緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緖、雖令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〈略〉○中　紀伊國　野上庄　鞆淵庄　衣奈園　隅田庄　出立庄

〔明德記下〕土丸ノ城ハ、暫ク合戰ナン共有ベシ、サラバ紀伊國ノ根來ヘ入進ラセロトテ、正月〇明德三年四日ノ暮程ニ、根來ヘ入進セタリケリ、

〔南遊紀行諸州めぐり四紀伊〕かだ。かだは民家千軒有と云、富人多し、此邊名草郡也、かだの先に舟泊あり、是にも民家多し、かだと淡島は民屋つゞけり、〇中略賀田の北の出崎を和田の崎と云、賀田淡島の前は入海也、此地佳景也、西國の商船泊る、近江などをのりて、江戸奥州に行舟は、苫が島とかだの間を通り、又苫が島の外をも通る也、淡島の前は灘よからずといへども、旅船の纜を繫ぐ所也、淡島かだの邊より阿波國もむかひに近く見ゆ、今宵はかだに宿す、旅舍は二階にて海にのぞめり、前に客船多く、むかひに辨才天の山そばたちて青く茂り、おきに苫が島二ながらはるかに見ゆ、風景よし、此所にかだめとて、わかめの名物有、めづらし、

〔紀伊國名所圖會三下海士郡〕松江。東松江中松江西松江あり、紀の川の海口より西の方木の島までの松原をいふ、舊名これを和田御崎松といふ、また東鑑とも和田浦としいへり、〇中略夫此地の風色たるや、北は峨々たる青山、日影を含で金碧の色を醸し、南は渺々たる蒼海丹明を浮べて、瑠璃の光を磨けり、松江の松の常盤なる、多の霜を凌ぎ、白濱の沙の鮮明なる、夏の雪ともうたがへり、千雉の都城は、雲外に聳へ、二子の島嶼波際に浮む、遠く水天の窮まる際を望に、阿土の二國は一刷の翠黛たり、范蠡が舟常に維がず子陵が釣もいとまなし、されば月に賦あり、雪に與あり、沙にひろふては、松露の蕈に醉をすゝめ、濱にとりては、あさり貝のあさからぬまで、風流俗子のわいだめなく、四時にかかれぬ遊地なるべし、

〔日本書紀三神武〕天皇〇中略帥軍而進至熊野荒坂津亦名丹敷浦因誅丹敷戸畔者、

〔南紀名勝略志牟婁郡〕錦浦
那智ノ庄、濱ノ宮村ノ南ノ海濱、長サ十二三町ヲ云也、或日本書紀ニ荒坂ノ津ト有、又ノ名ハ丹敷浦、

〔丹敷浦考〕紀に丹敷浦もあるは、今の二木島の事なりと思はる、にしきとにきしと音近ければ

新町と號す、又北の方鈴丸川を越て、中野島領の内に市廓を開きて北新町とす、これより城下の區域、北は宇治村の故地を盡して紀川堤を限り、東北隅は中野島村と人家相接ぎ、東は新内村より太田村の堺に亘り、南は吹上を盡して岡戸村と相隣り、西は湊川の岸に臨むを界とし、其中央を内郭とす、若山大名八所に分る、中に就て諸士の邸第五箇所、東に岡廣瀬あり、北に宇治あり、南に吹上あり、西に湊あり、工商の居五箇所、北に内町、東に廣瀬、新町北新町、西に湊あり、(工商の居五箇所壹町名あり、士邸五箇所總て名稱なし、)此其大略にて、士宅商屋其中に相間雜する者、亦其幾許處なることを知らず、凡城下の區域、街衢逼促、人戸闐溢して尺地の間隙なく、百工の所作商賈の所販、山物海物より諸製造の物に至るまで、雲の如く集り山の如く積て、南海の一大都會となれり、

〔紀州御發向之事〕秀長(○羽柴)常專軍忠禮臣下、猥不成憲法沙汰、依之小雜賀曰岡山所定居城、分入數成普請、彼岡國府中而平地獨秀城郭也、南和歌浦、西吹上濱、自東紀川北流入紀港、籠林深諸木交餘、塞萬景一覽之地致也、

〔武德編年集成 三十一〕天正十三年三月、秀吉、紀伊和泉兩國ヲ、舍弟小一郎秀長ニ授ケ、且紀州ノ中央岡山ノ城ヲ築キ、秀長ノ居城トス、(後年和歌山ノ城ト云)

〔南遊紀行 諸州めぐり 紀伊四〕紀三井寺の東一里に雜賀と云處あり、和歌よりうらつゞき也、

〔勢州兵亂記〕一天正六年、信雄朝臣より志州九鬼大隅守幷矢野衆等、船に而大坂へ被廻に雜賀に而船軍し、信長公の預御感也、九鬼は鳥羽が舊元熊野侍也、

〔宇野主水記〕一霜月(○天正十二年)一日、濱ニテ雜賀ヨリノ商船ニ、岸和田衆存分アリ、(○中略)

一雜賀ノ太田ノ城ニ楯籠タル者共、四月(○天正十三年)廿一日水ゼメニセラル、、

〔南遊紀行 諸州めぐり 紀伊四〕根來寺(○中略)和歌山より高野へ行に、根來によれば半里ばかり遠し、本道は紀の川の邊にあり、根來は河の西北の山下に有、

を吹上と云、吹上の町は和歌山とつゞけり、吹上にも士の屋宅有、寺院多し、○中略凡和歌山は天然の景色すぐれ、其上大國の城下なれば、神社佛寺いかめしく、其灑掃もきよければ、一入の光景をませり、

〔紀伊續風土記 四若山〕總論

若山或は和歌山とも書す、元祿年中、若山の文字に定めらる、若山の城地は、岡山又は吹上峯などいひし地にて、名草海部兩郡の界にして、雜賀庄に屬す、四面曠野の中、巋然として特起せり、南に長峯あり、北に葛城ありて、屏障を列するが如く、其中間鬱然として東に拓て、那賀名草の曠野一眸の中にあり、西蒼海に臨て、淡阿の諸山指點すべし、岡山近く南に連りて、萬松蓊鬱として龍蟠虎踞の勢あり、紀川東より來て、郭北を繞て襟帶の形をなせり、天正十三年、豐臣太閤根來寺を滅し、太田城を降し、國中を統一して、羽柴美濃守秀長に賜ふ、此地の體勢城地に宜きを觀察して、親く自繩張を命じ、三月二十一日、鍬初あり、藤堂和泉守、羽田長門守、一庵法印を普請奉行として、本丸、二ノ丸、其年の內工功竣る、秀長大和國郡山を居城とし、其臣桑山修理亮重晴（入道して法印宗仙といふ、若名小太郎、尾州愛知郡地士、三萬石を領す、）を以て、本國の城代として、同十四年より茲に在城して、若山の城と稱す、此地吹上濱の東に峙を以て吹上峯と號し、又岡山の北首にあるを以て岡。山。の名あり、然るに岡山の南和歌浦の諸山と其勢相接きて、和歌の名最四方に高きより、敢て若山と名づくといふ（若の字を和歌の義に用ること、貫[illegible]に、若干之[illegible]とあり、古事記萬葉集に、[illegible]の義に用ふ、○中略）慶長六年、町割ありて市鄽と改易し、商賈百工四方より來り集り、日を重ね歲を歷て、漸都會の地とはなれり、元和五年、南龍公（○德川賴宣）封を本國に受られて、五月十八日、初て入國せらる、以前の大手口を改めて北を以て大手とし、京橋門の北通衢を開て本町とす、其餘市鄽寺院の類しば〳〵移易あつて、各其便に就しめ、舊城下の區域、人民を容る丶に足ざるを以て、東の方廣瀨の川を越て、新內村中野島村邊に亘りて、市鄽を開きて

靈山五百六十町〇中略 二百町 在紀伊國海部郡加太村

〔平家物語 六〕ぎをん女御の事

有時白河院くまのへ御かうなる紀伊國いとかさかといふ所に、御こしかきすへさせ、しばらく御きうそく有けり、

〔源平盛衰記 四十〕維盛入道熊野詣附熊野大峯事

此ヨリ熊野參詣ノ志アリトテ、〇中略 紀ノ國三藤ト云所ヘ出給ヒ、藤代王子ニ參リ、

〔續寶簡集 五〕謹辭 相傳渡水田事

合壹段陸拾歩者字檀上

在紀伊國伊都郡高野山御領大谷村〇中略

元久貳年乙丑八月廿六日 僧長圓花押

〔寶簡集 三十〕粉河寺申紀伊國丹生屋村與高野山領名手庄相論條々事、西護院僧正御房御含副寺解

謹進上候、子細被載狀候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

閏七月〇寬元元年十七日 相模守平重時花押

〔續寶簡集 四〕寄進 御影堂陀羅尼田事

合壹段者在紀伊國伊都郡山田村字田尻、定田五斗七升、〇中略

進上 大夫僧都御房

永仁元年癸巳十一月日 大法師春助花押

〔南遊紀行 四〕諸州めぐり紀伊〕和歌山は淡島より三里あり、其間右の方の濱邊に松多し、此邊白浦なり、和歌山町の方へ行に、紀の川を舟にてわたる、是吉野川の下也、大河也、紀伊のみなと、云名所也、客船多し、和歌山の城は紀州君居給ふ、城下の境地ひろくゆたけし、和歌山と和歌浦の間の北の濱

〔日本靈異記下〕女人濫嫁飢子乳故得現報縁第十六

橫江臣成刀自女、越前國加賀郡人也、○中略紀伊國名草郡能應里之人、寂林法師、離之國家、經之他國、修法求道、而至加賀郡畝田村、逕年止住、○中略

未作畢捻攝像生呻音示奇表縁第十七

沙彌信行者、紀伊國那賀郡彌氣里人、俗姓大伴連祖是也、○中略

彌勒丈六佛像其頸蟻所嚼示奇異表縁第廿八

紀伊國名草郡貴志里有一道場、號曰貴志寺、其村人等造私之寺、故以爲字也、○中略

村童戯刻木佛像愚夫斫破以現得惡死報縁第廿九

紀伊國海部郡仁嗜之濱中村有一愚癡夫、姓名未詳也、自性愚癡不知因果、海部郡與安諦郡通而往還山有山道、號曰玉坂也、從濱中指正南而踰、到乎東里、○中略

刑罰賤沙彌乞食以現得頓惡死報縁第卅三

紀直吉足者、紀伊國日高郡別里椅家長公也、○中略

重病忽嬰身因之受戒行善以現得愈病縁第卅四

巨勢呰女者、紀伊國名草郡埴生里之女也、○中略

災與善表相先現而後其災善答被縁第卅八

山部天皇代○中略桓武、延暦六年丁卯秋九月朔四日甲寅酉時、○中略愛景戒聞之羅何而踰乞人者、有紀伊國名草郡內楢見粟村之沙彌鏡日也、

〔今昔物語二十〕紀伊國名草郡人造惡業受牛身語第廿二

今昔紀伊國ノ名草ノ郡三上ノ村ニ一ノ寺ヲ造テ名ヲ藥王寺ト云フ、

〔東大寺要錄十〕一諸國諸庄田地○長德四年注文定中略

〔南紀名勝略志牟婁郡〕熊野村
新宮ノ庄ニ上熊野村、中熊野村、下熊野村有、今ノ新宮村ト云モ元ハ熊野邑ノ内ナレドモ、新宮大神鎮座ノ以後所名トセルカ、諸書熊野村ト云ルハ此所ナルベシ、總ジテ牟婁ノ一郡ヲ熊野ト云ヘルハ、新宮熊野村ニ因テ云フト見ヘタリ、
〔熊野遊記上〕本宮者在熊野川上游、東南七里而至那智、又五里至新宮、新宮者在熊野川口、瀕于海焉、自紀北循海至新宮、曰大邊地、自田邊城折而左至本宮、曰中邊地、
〔熊野遊記下〕傍川○熊野川西北得華表入、是爲新宮、廟貌整麗、山輿城市、因以得名、迤東邊市街、民戸殷富、爲紀南一都會、命卿水野氏邑焉、
〔續千載和歌集雜十七〕那智にて庵の柱にかきつけける　前大僧正行尊○歌略
〔源平盛衰記十三〕熊野新宮軍事
那智新宮ノ者共、寄合寄合カクスヽト私語ケレドモ、○下略
〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月癸未、還到海部郡岸村行宮、
〔元亨釋書二十八寺像〕粉川寺者、寶龜元年建、○中略河內澀河郡有佐大夫者、一子沈痾、萬醫拱手、一日童子來舍、○中略大夫送門曰、恩意深不知謝、所住何處、願通音問、答曰、我住紀州那賀郡風市村粉河寺、語已辭去、不幾大夫牽婦子、向彼至風市村、無粉河寺者、○中略見林中有一宇、○中略中夜像前燈臺自然點火、堂內赫奕、大夫驚起見之、千手大悲宛然、○中略卽知童子此像之應化、感嘆敬禮、普告四來、於是伊都郡澀田村富家寡婦聞此事、捨住宅改精舍、爾來靈應日新、
〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年六月辛亥、紀伊國名草郡人外少初位下神奴百繼等言、己等祖父忌部支波美、自庚午年至大寶二年之籍、並注忌部、而和銅元年造籍之日、據居里名、注姓神奴、望請從本改正者、許之、

村里名邑

〔積翠閣集 六〕奉寄進　御影堂陀羅尼田事
在紀伊國毛原鄉内字永長　定田六斗者〇中略
嘉曆三年戊辰七月十日　定盛花押

〔集古文書 十御教書〕南朝　御教書所藏不詳
紀伊國布施屋鄉地頭職半分、為兵粮料所、可令知行之由其沙汰也、仍執達如件、
正平六年十月三日　大判事花押
二見左衛門大夫殿

〔郡名一覽〕紀伊國 管郡領　紀州　南北四日半　七郡
高三拾九万七千六百六拾八石壹升九合　千四百拾三ヶ村
●和歌山 百四十六里餘　)(●新宮 紀州三万七千石 百十五里　水野飛驒守
)(●田邊 同三万五千石 百四十二里　安藤帶刀　)(〇貴志 同一万六千石 一里　三浦壽監
〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國舊村里條ニ　タ所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕紀伊 管郡領　七郡、千三百三十七村、
高四十四万八百五十八石三斗七升七合七勺一才
伊都郡百四十七村　那賀郡二百四十八村　名草郡百五十村　海部郡五十九村
在田郡百三十七村　日高郡百四十八村　牟婁郡四百四十八村

〔地勢提要 紳〕郡邑島嶼奇名
紀伊　牟婁郡、島ノ勝浦、周參見浦、朝來歸村、男床島、海士郡、椒濱浦、雜賀崎浦、

〔日本書紀 神武三〕戊午年六月丁巳、軍至名草邑、則誅名草戸畔者、戸畔此云妬鼙、遂越狹野、到熊野神邑、

〔日本紀略 前篇一〕延喜六年八月七日戊子、紀伊國言、管牟婁郡熊野村、去四月十八日化牛產犢〇下略

在紀伊國海部郡木本鄕佰柒拾町略○中

合今請墾田地玖佰玖拾肆町略○中

紀伊國伍町

海部郡木本鄕葦原中○略

天平十九年二月十一日名○略署

〔日本靈異記〕下〕漂流大海敬稱尺迦佛名得全命緣第廿五

長男紀臣馬養者、紀伊國安諦郡吉備鄕人也、小男中臣連祖父麿者、同國海部郡濱中鄕人也、

〔國造家所藏文書〕日前國懸社御遷宮時四面四至札定鄕々事

艮　他領　直川庄上芝原　松島鄕　栗栖庄細工谷　神領　有間鄕　永沼鄕　西方寺免島

東　他領　湯橋庄　岡崎庄堺之尾　東頭起　神領　忌部鄕　借綱寺山峯筋　神前鄕　[illegible]

飯峯筋

巽　他領　冷水鄕　海之沖洲　神領　舟尾鄕　海擔子洲

南　他領　冷水鄕　塩津庄海　神領　毛見鄕　海三井之神山頂上少シ見ユル堺

坤　他領　大崎海　雜賀庄海　神領　毛見鄕　海擔子洲於當東小島甲崎於當丑方堺

酉　他領　雜賀庄　園豆　鈴丸　神領　小宅鄕　西島　西島　太田鄕　西島　吉田鄕

本島　新島

乾　他領　北有本鄕道　同ジク有本鄕　神領　本有本鄕　刀禰名島

北　他領　六十谷庄道　神領　蕪津鄕　若島ガ島

右嘉禎元年、御遷宮時之四面四至、任先例、同四年九月廿五日、依被札定、令注進之狀如件、

嘉禎四年戊戌九月廿五日　紀伊國司從五位下源長信

〔續日本紀 二文武〕大寶元年九月丁亥、天皇幸紀伊國、　十月丁未、車駕至武漏溫泉、　戊申、從官幷國郡司等、進階幷賜衣衾、及國內高年給稻、各有差、勿收當年租調幷正稅利、唯武漏郡本利並免、曲赦罪人、

〔空穗物語 吹上之下〕かくて紀伊國むろのこほりに、かみなひのたねまつといふ長者、かぎりなきよらのわにて、たゞいま國のまつりごと人にて、かたちきよげにて心つきてあり、

〔大和物語 上〕おなじ男、紀伊國にくだるに、さむしとて、きぬをとりにをこせたりければ、女、

紀伊國の室の郡に行ながら君とふすまのなきぞかなしき

きの國のむろのこほりに行人は風のさむさもおもひしられじ、返しおとこ、

鄉

〔倭名類聚抄 九紀伊國〕伊都郡　神戶　賀美(○美、高山寺本作萬、)村主　指理　桑原

荒賀郡　神戶　右手(○右、高山寺本作石、)　福門(○福、高山寺本作幅、)　那賀　荒川　山埼　埴埼(○高山寺本注、和佐岐、)

名草郡　大屋　直川　苑部　大田　大宅　忌部　誰戶　断金　驛家　野應　津麻(○麻、高山寺本作摩、)

神戶　國懸　島神戶　有眞(○高山寺本注、アリマ、)　大屋　八山(○八、高山寺本作宇、)荒賀　大野　旦來(○旦、高山寺本作朝、)　日

前神戶　伊太祁曾神戶　須佐神戶

海部郡　賀太　濱中　余戶　驛家(○驛字、恐誤、)

在田郡　吉備　溫笠　英多　糸鄉　須佐

日高郡　財部　淸水　內原(○原、高山寺本作厚、)石淵　南部　余戶

牟婁郡　岡田　牟婁(無音)　栗栖　三前　神戶

〔古語拾遺〕仍令天富命(太玉命之孫)率手置帆負彦狹知二神之孫、以齋斧齋鉏、始採山材、構立正殿、(○中略)故其裔今在紀伊國名草郡御木、麁香二鄕、(古語正殿謂之麁香)採材齋部所居謂之御木、造殿齋部所居謂之麁香、是其證也、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合墾田地玖佰參拾貳町

て、其地の嶮なるより起れる稱ならむ、大和物語に、きの國のむろの郡に行く人は風の寒さも思ひ知られじ、其邊しに、紀の國のむろの郡に行ながら君とふすまの無きぞかなしき、其地を除く外は、盡熊野の地にして、大抵今の富田抔より東の方其地曠大にして一邦域をなせり、其名義、熊は隈にて古茂累義にして、山川幽深樹木蓊鬱なるを以て名づくるなり、○中略孝德帝の御世、國郡を分ち給へる時、熊野國を廢して牟婁の地を加へて一郡とし、本國に隸し、牟婁郡と名づけ、郷を分けて岡田、牟婁、栗栖、三前、神戸の五郷とす、其帝の記には牟漏郡と書けり、五郷の地今これを地形に考ふるに、岡田、牟婁、栗栖、三前の四郷は、今の口熊野の地なり、唯神戸の一所熊野の神領にして、今の奥熊野をいふに似たり、神武紀に神邑とある即其地ならん、○中略又中世以後五郷の名も絶えて、郡中自然に區分し、遂に四十三莊となれり、又其地の大きなるより、大名も自から二に分れて、東の方を奥熊野と稱し、西の方を口熊野と稱す、其奥口の界、大抵郡の中央にてわかる、郡中第一の大嶽を大塔峯といふ、此山奥口の中央に在て東西を隔絶して、蟠根は十里の外に跨がり、其枝峯蔓嶽遠く彌延するを以て、中間十里許の地、人行絶えて通せず、其勢東西を分ちて、口奥の稱を立ざる事を得ず、故に熊野の街道に二條ありて、一は中邊地といひ、一は大邊地といふ、中邊地といふは、山中を行きて大塔峯の西より北へ回る道をいふ、大邊地といふは、海濱に沿ひて大塔峯の南より東へ出る道をいふ、大邊地中邊地と兩道に分るゝは、大塔峯中央に在て隔るの故に由るなり、

〔熊野遊記上〕牟婁者紀之南陲、遐睨四島、邇臨八東、撫勢負和、炎壤以窮、名山大川、錯綜乎其間、土毛水產、殷充於其中、上古未立郡、稱爲熊野、孝德帝時、定爲牟婁郡、有三山、曰本宮也、新宮也、那智也、是曰三熊野、實鎭南方、

〔日本書紀三十持統〕六年五月庚午、御阿胡行宮時、進贄者、紀伊國牟婁郡人阿古志海部河瀨麻呂等兄弟三戸、復十年調役雜徭、復免挾抄八人今年調役、

賀國伊賀郡身野二萬頃、置守護人、准河内國大島郡高脚海、

〔續日本紀聖武十一〕天平三年六月庚寅、紀伊國阿氐郡海水變如血色、經五日乃復、

〔日本後紀平城十四〕大同元年七月戊戌、改紀伊國安諦郡、爲在田郡、以觸渉天皇諱也、

〔續日本後紀仁明十八〕承和十五年五月癸酉、紀伊國在田郡、爲上郡、以戸口增益、課丁多數也、

日高郡

〔紀伊續風土記日高郡六十三〕總論

日高郡は在田郡の南にありて、南は牟婁郡と界し、東は大和國吉野郡十津川と境を接し、西は海に瀕す、其廣袤東西十八里、南北十里、日高の名義を考ふるに、日の高く天の眞秀に坐して、照輝く義にして、山あれども高からず、よく日をうくる地の美稱なり、取りて直に郡名とせるならん、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年七月丁未、先是從二位文室眞人淨三等奏曰、伏奉去年十二月十日紀寺奴益人等訴云、紀袁祁臣之女粳賣嫁木〇木原作本、一本改國氷高評人内原直牟羅、生兒身賣狛賣二人、

牟婁郡

〔紀伊續風土記牟婁郡六十九〕總論

牟婁は日高郡の東南に續きて、其地の延袤、伊都、那賀、名草、海部、在田、日高の六郡を合せても、其大きさに較ぶべきにあらず、長短相補ひて、其廣さをいはゞ、東西三十五里、南北十二三里許なるべし、六郡の地は、大抵大和國の西にあり、當郡は大和國の南より東に繞りて吉野郡を包みて、北の方伊勢國と境を接す、東南は大瀛に向ひて、其際涯を知る者なし、萬國圖を閲るに、本國より東南隔八丈島を除きて、其外に國あらず、實に洋溟に瀕すといふべし、此地上古は熊野といふ、今に至りても是を通稱とす、牟婁の名は初めて齊明紀及萬葉集に出で、往古は僅に郡の西邊、今の田邊近邊の稱にして、後の牟婁郡の地卽其地なり、（牟は田邊在、論に詳なり）其名義は館の義にして、海津官舍あるより起れる稱ならむか、（播磨室津、周防室積なども同じ、又尾張鳴海をむろ崎ともいふ、是も皆海邊なればおなじ義ならむ）又は溫暖の義にし

阿提郡
在田郡

一區域にして、名草在田二郡に接し、衣奈、由良二莊は一區域にして、在田、日高二郡に接せり、一郡七莊の地を通考すれば、東は名草、在田二郡に界し、西は海を隔て丶、阿波淡路に對し、南は日高郡に接し、北は和泉國日根郡に接す、其地長きを斷ち短きを補ひて、大抵方三里許なり、海部は海人部の界にして、漁鹽を營む者の部をいふ名なり、古事記書紀に、諸國の海部見えたり、○中略欽明天皇十七年の紀に、紀伊國置海部屯倉とあり、是本國海部の見えたる始なり、○中略郡中は皆海濱なれば、山川明媚にして、土壤清麗勝景の地多く、和歌吹上加太の名、最古今に高く、田野沃腴、人民繁富にして、富邑大村多く、農民少くして漁戸多く、各莊少異同あれども、大抵其俗奢侈狡險なり、藤賀木本の二莊、紀川の海口にありて、洪波の爲に變遷し、地形屢改革せり、

〔續日本紀九元正〕神龜元年十月壬寅、賜造離宮司及紀伊國國郡司幷行宮側近高年七十已上祿、各有差、百姓今年調庸、名草海部二郡田租咸免之、

〔今昔物語二十〕長屋親王罰沙彌感現報語第廿七

今昔、聖武天皇ノ御代ニ奈良ノ宮ノ時、○中略彼長屋ノ口口ヲ紀伊國ノ海部ノ郡ノ椒抄ノ奧ノ島ニ置ク、

〔紀伊續風土記五十七在田郡〕總論

當郡は阿提郡といふ、阿提或は阿氐又は安諦と書す、阿提は卽英多にして原一鄕の名なり、郡名を定めらる丶時、擧げて大名とせられしならむ、○中略郡の廣袤東西九里許、南北五里許、東は伊都郡及大和國吉野郡に界し、南は日高、海部二郡に讓り、北は伊都、那賀、名草、海部四郡と接す、三方山を阻して西の方海に面す、

〔日本書紀三十持統〕三年八月丙申、禁斷漁獵於攝津國武庫海一千步內、紀伊國阿提郡那耆野二萬頃、伊

し、紀ノ川郡の中央を流るゝを以て、郡中堰渠を所々に作りて、灌漑の利あり、田畑皆沃腴にして、五穀の性少し伊都郡に讓るといへども、名草に勝れり、且川あるを以て運漕の便あり、又山あるを以て薪柴乏しからず、通じてこれを論ずるに、民の生産宜しといふべし、郡中商賈多くして、經濟の風あり、山中の諸村といへども、又大に窮乏に至るものなし、粉河あり、根來あり、高野の街道にして、中世天子の臨幸、公卿の參詣屢なりし故、郡中繁昌して舊跡等も亦多し、

〔續日本紀 九元正〕神龜元年十月癸巳、行至紀伊國那賀郡玉垣勾頓宮、

〔東大寺要錄 六〕别功德分庄

紀伊國那賀名草兩郡十二町九段廿步

名草郡

〔紀伊續風土記 六名草郡〕總論

孝德天皇の御代國郡を定め給ひしより、名草を以て郡名とし給ひしなり、國造書記曰、十九代大山上臣爲立二名草郡一とあるは、則是なり、其名義は詳ならず、或說に、楠の義ならむといへり、謹、和名鈔續詳註云、一說、一書曰、諸、和名桑木左とあり、木と久とは轉通ひて、古の地郡に續ればよしありげにきこゆ、郡の廣袤東は那賀郡に接し、西南は海部郡に接し、北は和泉國日根郡に界す、東西行程六里餘、南北三里半、○中略古より諸郡の中にて、田野平曠にして、播種地に宜く、五穀蔬菜より草蔬桑草に至るまで、生殖せざる物なし、人民富庶にして、鄉里の數も他郡より多き事數倍す、官知神も亦多し國中福漢の地なること知べし、故に古より國造こゝに居し、國府を此郡に建られ、宮川庄府中村守護も亦是に居れり、大野庄大抵國中の貴族著姓父に出ざる者なし、○下略

〔續日本紀 九元正〕養老七年十一月丁丑、下總國香取郡、○中略紀伊國名草郡等少領已上、聽連任三等已上親、

海部郡

〔紀伊續風土記 二十一海部郡〕總論

當郡總て七莊、名草、在田、日高三郡の瀕海の地にして、疆域三瞬して接續せず、加太、木本、雜賀三莊

谷の間に散在す、川南を高野領とす、古の神戸郷是なり、川北は古の賀美村主掛理桑原四郷の地なり、川南峯巒重疊して、盡深山幽谷にて少の平野なし、然れども地の大さ郡中三分の二に居る、是古の丹生神地なり、○下略

〔紀伊國名所圖會 三編 二〕伊都郡　東は大和國宇智吉野兩郡、西は本國那賀郡、南は有田郡、北は河内國錦部郡、和泉國泉南郡に接す、

〔日本書紀 二十九 天武〕八年　是年、紀伊國伊刀郡貢芝草、其狀似菌、莖長一尺、其蓋二圍、

〔東大寺正倉院文書 十二〕山背國愛宕郡雲下里計帳 ○神龜三年

戸主少初位上出雲廣足、年陸拾玖歲、○中略

　女出雲臣乎美奈賣、年伍拾壹歲　丁女　和銅五年、逃紀伊國伊刀郡、

〔東大寺正倉院文書 三十七〕紀伊國正稅帳

紀伊國司解　申天平二年收納大稅并神稅事 ○中略

伊都郡

天平元年定大稅稻穀伍阡參伯肆拾斛漆斗漆升漆合 ○下略

〔紀伊續風土記 二十七 那賀郡〕總論

疆域、東は伊都郡に接し、西は名草郡に接し、南は有田郡と界し、北は和泉國泉南日根二郡に界す、其廣袤大抵東西四里餘、南北六里餘、紀ノ川其中央ヲ貫きて東西に流れて、川の北は二里にして葛嶺を界とし、川の南は四里にして、遠く長嶺を以て界とす、那賀は舊鄕名なり、今の長田ノ莊邊の名にして其義なるべし、其地平廣にして長の名に應せり、○註略 郡名を定らる丶時、取りて大名とせられしなり、○中略 大寶に當郡をして絲を獻せしむるを見れば、當郡蠶桑に宜しき地なる事知べし、今猶郡中多く棉花を作り、木綿并に、紋羽を織るを婦女の業とす、古絲を作りし遺意といふべ

牟婁　武濱　牟漏	
牟婁	管七
同	同
同	七郡
室	
牟婁	同
同	同
同	同
同	同
南牟婁　北牟婁　西牟婁	十郡

伊都郡

〔牟山紀聞 一〕物の名

仲文集に、紀の國の郡どもをよめる、いと伊都なか那賀なくさ名草ありた在田あま海部ひたか日高むろ牟婁

いとながき夜はなくさますあまりありたえすひたかんむろにすきばや

三十一字の中に、七郡十七字をかくしたるは、やすからぬ事なり、

〔宇野主水記〕一紀伊國奥郡湯川中務大輔直春、此比御無音也、十一月(天正十一年)十八日御書ノ御日付也

〔紀伊續風土記 四十二 伊都郡〕總論

當郡は那賀郡の東にありて、東は大和國宇智吉野兩郡に界し、南は在田郡に接し、北は河内國錦部郡に界す、其廣袤東西六里、南北九里、伊都の義詳ならず、按するに、伊都は綿の義なるべし、本國に綿の縁ある事は、延喜式に、凡貢夏調綿云々、紀伊等十二國並上綿とあり、○中略當郡の形勢を考ふるに、葛城峰北に連なり、長峯南に連なり、中間紀川東西に貫き流る、又東は大和の界眞土山あり、西は那賀の界背山ありて東西を塞ぎ、郡中卸一嶋谷の如し、村邑川に傍ひて參布し、又山壑錯

●新鹿●三鬼●ナアシ●尾鷲[新宮]●カリ村
伊和ノ界ヨリ東南西ノ海ニ貫、紀ノ國七分ノ一郡也、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕紀伊

六國史古書			奈我	伊刀	阿提	日高 飯高 氷高	
					安諦 在田		
延喜式	名草ナクサ	海部アマ	那賀ナカ	伊都イト	在田アリタ	日高ヒタカ	
倭名抄	同	同	同	同	同	同	
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	
諸書	同	海部 海士	同	同	有田	同	
郡名考	同ナクサ	海部アマ	同ナカ	同イト	在田アリタ	同ヒタカ	
天保郷帳	同	同	ナガ郡 同	同	同	ヒダカ郡 同	
明治拾年帳	同	同	同	同	有田	同	
地誌提要	同ナクサ	同アマ	同ナカ	同イト	在田アリタ	同ヒタカ	
郡區編制	同	同	同	同	有田	同	東牟婁

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕紀伊國國府在名草郡、行程上四日、下二日、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月廿八日庚申、紀伊國司言、今月二十六日亥時、風雨晦暝、雷電激發、震於國府廳〇中略事及學校幷倉屋、被破官舍二十一宇、緣邊百姓三十三家、〇下略

〔紀伊續風土記九名草郡〕府中村

直川村の東十四町餘にあり、和名抄國府在名草郡、行程上四日、下二日、とある地即是なり、故に今に至るまで古名を存して府中といふ、往古は此邊の總名を直川鄉といふ、〇中略當村國府のありし所なるを以て府中といふ、〇中略

國府遺蹟　其地今詳ならず、按するに村中に平林といふ少し高き地あり、永野大夫の別業の地なり、古より無高の地にして、堀耕するものなし、此地官府ありし跡ならん、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕紀伊國〇略註管七〇略註伊都　那賀知賀奈　名草國府奈久佐、海部阿末　在田阿天利太　日高比太加　牟婁牟呂

〔延喜式二十二民部〕紀伊國、上、管伊都イト　那賀ナカ　名草ナクサ　海部アマ　在田アリタ　日高ヒタカ　牟婁ムロ〇中略　右爲近國、

〔皇國郡名志〕紀伊國七郡

伊都イト　●學文路　●花坂　●大畑　△高野山　●大野　●橋本　●兎　●二鬼賀　●紀谷　和泉界

那賀ナカ　●志賀　△根來山　●大津　●高野社　△粉川寺　泉界

名草ナクサ　和歌山　●入軒屋　●岩手　泉界

海部アマ　●加田　有田郡　△黒島社　ヲ隔テ、六七郷　△和歌ノ浦　在家此郡ニ屬、△紀ノ川　西北ノ海ニ向

在田アリタ　●カモ谷　●ヒヘリ山　和界ヨリ細長ク海ニ實

日高ヒタカ　●御坊　△道成寺　●小松原　△日高尾　●ノマ　在田ニ堡

牟婁ムロ　●田邊　●豊達　●江ノ川　●有田浦　●潮岬　●發心門　●字ウカ　●本宮　●ヲノイ　△那智山　●ミリウキ　●小口　●富山　△三熊野社　●新宮　●有馬　●ノロウ

善降附シ、故封ヲ保ツ、豐臣氏、畠山氏ノ故地ヲ以テ、其弟秀長ニ加賜ス、其子秀俊卒シテ國除ス、和歌山ヲ桑山重晴ニ賜フ、關原役後、堀內氏舊ノ封ヲ收メ、桑山氏ヲ大和ニ徙シ、淺野幸長ヲ全州ニ封ズ、元和五年、其弟長晟安藝ニ徙リ、德川頼宣代テ封ゼラレ、和歌山ニ治ス、安藤直次ニ田邊ヲ賜ヒ、水野重仲ヲ新宮ニ封ジ、以テ其相トナス、皆世襲ス、王政革新、田邊安藤直行新宮水野忠幹直ニ藩列ニ加ハル、既ニシテ皆改テ縣トナシ、又廢シテ和歌山一縣ニ併ス、

〔先代舊事本紀十國造〕紀伊國造

橿原朝〇神武御世、神皇產靈命五世孫天道根命定賜國造、

熊野國造

志賀高穴穗朝〇成務御世、饒速日命五世孫大阿斗足尼定賜國造、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年九月戊午、外從五位下井上忌寸麻呂爲紀伊守、

〔紀伊續風土記一提綱〕守護　佐原十郎左衞門尉義連

義連は三浦大介義明の三子にして、從五位下和泉守左衞門尉となる、〇中略元暦元年攝州一ノ谷鵯越の先陣をなし、和泉紀伊兩國の守護となる、三浦家系圖

〔吾妻鏡十八〕建永二年〇承元元年六月廿二日丙寅、坊門亞相信清卿使者參著、所被進仁和寺御室令旨也、是紀伊國土民等、亂入高野山、企狩獵押妨寺領、和泉紀伊國守護代爲其張本、爲關東御沙汰可被止猥藉之趣、有寺門愁訴之間、御室以件金剛峯寺所司等狀被仰合坊門、仍又被傳申其旨云云、廿四日丙戌、就御室仰坊門亞相被執申高野山愁訴、紀伊國土民猥藉事、於御所有其沙汰、和泉紀伊兩國守護者、佐原十郎左衞門尉義連職也、義連卒去之後、未被補其替、向後兩國爲院御熊野詣驛家雜事、自今以後無指事外、不可置守護人、就之諸事可爲仙洞御計之由被定之、仍義連代、早可召上之由、所被遣御書於掃部入道寂忍之許也、廣元朝臣奉行之、

高野ヨリ紀伊ノ路ニ懸リ、千里ノ濱ヲ打過テ、田邊ノ宿ニ逗留シ、渡海ノ舟ヲ沈へ給ニ、(下略)

〔南遊紀行諸州めぐり紀伊四〕なて、市場、(紀川より一里)宿驛也、今日すでに暮ぬれば、なての市場に宿す、(中略)か。ふろの宿(高野より三里あり)俗にいへるかるかや道心の妻の墓あり、其事はかるかやと云うたひにつくりて詳也、其外に小寺あり、常念佛なり、

〔日本國郡沿革考三南海道〕紀伊　古木國、上國、管七郡、千三百三十七村、
伊都(イト)(百四十七村、日本紀作伊刀、)　那賀(ナガ)二百四十八村　名草(ナクサ)(百五十村古國府)　海部(アマ)五十九村　在田(アリタ)(百三十七村本安諦郡、日本紀作阿提、續紀作阿氐、大同元年七月、改爲在田郡、以觸天皇諱也、)　日高(百四十八村、續紀氷高評、郡是、)　牟婁(四百四十八村、續紀作牟漏、渡會郡佳曰、熊野國造郡牟婁郡、熊野之地、)

〔日本地誌提要紀伊五十九〕沿革　古ヘ國府ヲ名草郡ニ置ク、(今ノ直川(ナヲカハ)庄府中村)鎌府ノ初、佐原義連ヲ以テ守護トス、延元正平ノ際、州豪湯淺、保田、貴志、鹽、多ク官軍ニ屬ス、足利尊氏、畠山國清ヲ以テ守護トナシ入侵ス、官軍ノ將四條隆俊、名草郡ニ駐テ州兵ヲ招諭シ、楠正儀ト相控援シテ國清ヲ禦ギ、阿瀬河僅ニ保ツ、後官軍ノ衰ル、足利氏、山名義理ヲ以テ守護トシ、藤白(フヂシロ)(名草郡大野庄)ニ治ス、元中ノ末、其族滿幸ト倶ニ叛ス、將軍義滿、大内義弘ヲシテ之ヲ討ゼシム、義理逃亡ス、義滿因テ本州ヲ以テ義弘ニ賜フ、應永六年、義弘誅ニ伏シ、畠山基國代テ守護トナリ、河内ニ居テ之ヲ併領ス、文安中、楠氏ノ餘黨、皇孫義有王ヲ奉ジテ、湯淺城(在田郡)ニ據ル、畠山氏擊テ之ヲ平グ、基國ノ曾孫政長、義就、嫡ヲ爭フニ及ビテ、州族各之ニ分屬ス、政長ノ子尚順、義就ノ子義豐ヲ滅シ、河内ヲ子稙長ニ讓リ、來テ廣城(在田郡)ニ居ル、大永ノ初、州人湯川直光叛テ尚順ヲ逐フ、天文中、堀内氏虎、牟婁郡ノ諸族ヲ脅制シ、新宮ニ居ル、永祿ノ末、尚順ノ孫高政、遂ニ河内ヲ棄テ來奔ス、根來、雜賀ノ黨、高政ノ從子貞政ヲ奉ジテ州主トシ、岩室城(在田郡)ニ居ル、天正ノ初、堀内氏善(氏虎ノ子)伊勢ノ北畠氏ト戰ヒ、志摩ノ三郡ヲ取ル、(曾根浦以東ノ地是ナリ、皆後世牟婁郡ニ屬ス、)十三年、豐臣氏將ヲ遣テ地ヲ略ス、貞政出亡シ、氏

孝子越　貴志ノ荘中村より葛城を越て、和泉ノ國日根郡中孝子深日村に至る、路程二里、山路平坦なり、此道舊は笠木越、又笠道ともいふ、古和泉國へ踰る本道なり、聖武稱德二帝、此道を踰給ひ、其後關白賴通公大納言公任卿も、和歌浦遊覽に此道を踰らる、〈事は貴志荘中村の條に見ゆ、府下より貴志荘平井村に至り、夫より泉州へ踰る道あり、上孝子越といふ、路程近し、〉

淡路街道〈或いふ根來街道〉　海部郡木ノ本村より東行して、貴志荘園部村に至りて一里半、夫より山口荘谷村に至りて一里三十町、夫より那賀郡山崎荘に至り、根來扮河に通ず、是古の南海道の官道にして、大和より伊都郡萩原驛に至り、郡中名草驛を經て、海部郡加太驛に至れるなり、今淡島街道といふは、其神佛に詣するを以てなり、

熊野古道　和泉國日根郡山中村より山口荘雄山を越て南行し、大野荘藤白村に至りて、今の熊野街道と合ふ、土俗此道を小栗街道といふ、

○按ズルニ、本書他郡ニモ高野街道、熊野街道、伊勢街道、龍神街道、桃崎道、大木越等ヲ載セタレド、今省略ニ従フ、

〔延喜式〈兵部〉二十八〕諸國驛傳馬〈○中略〉

紀伊國驛馬〈萩原、賀太各八疋、〉

〔續日本紀〈文武〉二〕大寶二年正月戊寅、始置紀伊國賀陀驛家、

〔日本後紀〈嵯峨〉二十一〕弘仁二年八月丁丑、廢紀伊國萩原、名草、賀太三驛、以不要也、

〔日本後紀〈嵯峨〉二十二〕弘仁三年四月丁未、廢紀伊國名草驛、更置萩原驛、

〔平治物語〕一〕從六波羅紀州へ被立早馬事

去程ニ十日ノ晩、六波羅ヨリ立シ早馬、切目ノ宿ニテ追付タリ、

〔太平記二十二〕義助豫州下向事

境、　有田郡宮原（一里廿町、在二鍼村雲雀山一、）　湯淺（三十二町、在二由良寺一、）　井關（二里、在二鹿背山一、自レ此有田日高之郡境、）　日高郡原谷（一里廿八町）

小松原（三里十六町、在二道成寺一、）　印南（イナミ、三里、在二切目王子岩代之松一、）　南部（ミナベ、二里、坂井村有二鶴峯岩一、日高牟婁郡境、）　田邊（一里廿七町、在二鹽合現及湯崎之温泉一、）

三栖（ミス、二里十五町、自レ此本宮道皆山中也、）　芝（二十二町、在二岩田川一、）　高原（二里十町、在二十様坂、曾深山一、）　近露（二十九町）　野中（三里廿九町、在二清水、發心門村一、）

伏拜（一里）　本宮

本宮（ホングウ、九里八町、晉熊野川、）　新宮（一里半、飛鳥神倉、）　三輪崎（半里、鈴島内宿、）　宇久井（半里、目覺山、）　濱宮（一里半）　那智

右自二和歌山一至二本宮一、高三十一里十八町（山中道路）

那智（ナチ、一里半）　濱宮（半里）　天滿（半里）　湯川（半里）　橋川（十町）　二河（一里温泉）　市屋（十町）　和田（十町）

庄村（一里）　浦神（一里）　下田原（三十町）　津賀浦（十七町）　古屋（十町）　神川浦（二十六町）　伊串（二十六町）　姫浦

二十町　鬮川（二十町）　二色（十町）　二部（フタベ、一里）　田辨（タナベ、半里）　江田（半里、此浦潮岬不レ得二干潟片一、俗謂二日本之南限一、）

和深（三十町）　里野（二十八町）　江住（二十町）　見老津（一里半）　和深川（一里）　周參見（スサミ、一里半）　安居村（三里）

富田（一里）　朝來（アツソ、一里半）　田邊

右自二那智一至二田邊一二十四里（海邊大道路）

〔紀伊續風土記（名草郡）〕郡中街道

上方街道　府下○和歌山より艮の方山口莊山口驛に至りて三里、夫より山口峠を越て泉州に入り、山中信達貝塚堺の四驛を經て大坂に至る官道なり、各驛舍封境あり、

伊勢街道　府下より東の方那賀郡岩手ノ莊清水驛に至りて四里、夫より名手驛、伊都郡橋本驛を經て和州に入り、越部驛家の二驛を經て、勢州公領に至る、是を川俣街道といふ、各驛舍境あり、

熊野街道　府下南の方神宮下鄕内原驛に至りて一里十町、夫より海部郡在田日高の三郡を經て、本宮郡田邊城下に至る、夫より道二筋に分れ、東北に向ひて三栖莊に至るを中へちといひ、南に向ひて富田莊に至るを大へちといふ、各驛舍封境あり、

嘗て役の角仙足跡を著しより、遂に修驗道の行所となれり、今にいたつて聖護三寶兩院の配下、爰に來て修行をなすこと嘗て懈ることなし、其島都て三つあり、地島、沖島神島なり、其形をいはゞ地島沖島は、鳥の翼を張れる勢をなして、譬へば左右の眉の人の面にあるがごとくしかり、神島は其眉のうへに、黒子を添たらんごとゝや、西南のかたに浮出たり、先加太にて舟をやとひ、直に牛が首にいたつて、上る所の者是地島なり、陸にちかきをもて、さは呼べるなるべし、島の周廻やがて二里にも足りなん、青松蓊蔚として、嘗て他の雜樹なし、〇中略神島は其周廻三百歩に過ず、〇下略

地勢

〔易林本節用集下〕紀伊紀州 上、管七郡、南北四日半、三方海、欠平地、五穀不熟、小下國也、

〔紀伊國名所圖會一上和歌山〕郡分之事

按するに、當國京畿を去ること遠からず、東北は和河泉勢の四國に界を接し、西南は蒼海に濱せり、郡縣郡而重嶺を隔て鳥道を通じ、河水おの〳〵分流して海に朝す、山河の險隘魚鹽の豐饒、まことに天府の國といふべし、

道路

〔和漢三才圖會七十六紀伊〕和歌山城爲親山、艮至江戸百四十六里、寅卯至橋本十一里中、同至和州高取十七里、艮至和州郡山二十一里、子丑至泉州大坂十六里、至泉州岸和田九里、乾至淡州由良海上五里、　新宮乾至和歌山三十九里、亥子至本宮九里、至那智山四里半、艮方至勢州田丸二十八里、〇中略

自弱山行攝州大坂道凡十六里許、但五十町爲一里、

弱山ヨワ一里半、此間有坂有渡、　山口一里半、有坂、紀州泉州界、〇中略

自弱山行伊勢山田道

弱山ヨワ三里　三軒屋四里　名手ナテ四里半　橋本五里、有大岡眞土村、〇中略

自弱山至熊野三山道

海部郡和歌山至内原一里半、在海部郡和歌浦紀三井寺、　内原二里、有藤屋川藤白峠、此峠海部名草二郡之境、　名草郡加茂谷一里二十五町、在蕪坂、海部有田之

ツヽキ島　千島濱　大島　大イツキ　小イツキ　丸山島(道瀬浦)　雀島(道瀬浦)　乙島(白浦)　夕岩
黒岩　木生島　二股島　寺島(島勝浦)　サマル島　投石　大石(小山浦)　ワレカミ島　雀島(尾鷲浦)
丸山(大曾根浦)　毛ナシ　氏神島　桃頭島　ハトカ島　カヽリカツキ　ツホマ　篠野島　獅子島
マミルカ島　箱島(古泊浦)　イ島　鈴島　久島　中山島　久石　大和島　メナメ島　駒ヶ崎
屛石　海老島　長島　丸島(宇久井浦)　小平石　大平石　鍋島　立島　ナコ平岩　帆立岩　大磯
岩　寺島(勝浦)　元太島　丸戸島　鶴島　乙島(勝浦)　姥島　雀島(勝浦)　鰹島(太地浦)　大石(太地浦)　千島
島　トベラ島　ヒナゴ島　黒石　カントリ島　笠島　立石　男床島　島島　鹿島　ワヤ島
(浦上浦)　鵜殿島　烏帽子島　箱島(西向浦)　黒ノ島(西向浦)　琵琶島　橋杭岩　鰹島(大島)　タス島
ワヤ島(大島)　笠島　雙島　横島　ハヤマ島　夷島　地黒島　沖黒島　鰹島(周參見浦)　赤島　黒島
(周參見浦)　高島　シツフ島　メド岩　丸山島(瀬戸村)　馬見島　畑島　神樂島　神島(瀬戸村)　田所島
本島　内座岩　沖島
日高郡　遠測　鹿島　霞石　松魚島　海士取島　中ノ磯　有島　ヒシキ島　畑島(神谷浦)　畑
島(大引浦)　藻瀬島　鷲島　黒島
有田郡　遠測　高島　刈藻島　毛無島
海士郡　實測　地友島、周廻一里一十五町二十三間、沖友島、周廻二里二町五十一間、遠測
小刈藻　大刈藻　毛無島　地ノ島(又野之島)　沖ノ島　野島(大崎浦)　辨天島　野島(冷水浦)　野島(舟尾浦)
太ナ島　二子島　神島
〔紀伊國名所圖會三下海士郡〕友が島(また苫がしまとも、土俗これを苫がしまといへり、古名錄がしまと、下に記せる地しま神しまの外に、新聞の集店より西南にのぞむところのしまをいふ、加見浦の續、神島を加へてすべて三島なり。)
友が島の勝景たるや、古しへ傳へて神仙の窟栖とし、敢て窺ひ探るもの一人もあることなし、

島嶼

十里餘、日高の東南に續きて、北は大和伊勢に界し、東南大洋に向ふ地を牟婁郡とす、○略 註牟婁の海濱鹽ノ御崎最南の極にして、鹽ノ御埼より日高郡比井御埼は乾位に當り、伊勢國度會郡は艮位に當る、牟婁郡一國の半を占めて、六郡を併せて大抵相對すべし、其地高峯峻嶺重疊連綿して、諸川其間を分畫す、北にあるを富田川といひ其以南にあるを日置川といひ、其東なるを大田川といふ、舟行通ずる處皆七八里なり、其東なるを熊野川といふ、最大にして東南に流れて海に入る、舟行通ずる處十四五里なり、其路程南より東に回りて、日高の界より熊野川に達するまで三十里許、北の方大和の國界より南の方海に至るまで十五六里、熊野川より北皆大和を背にして、東の方海に面す、其地形東西廣さ四五里、南北長さ二十里許、北の端伊勢と相接す、國中の幅員長短平均して、大抵東西五十里餘、南北三十里餘、極星地を出る度數を測るに、若山にありて三十四度半弱なり、本國の地は即上世大八洲國の內、大日本豐秋津洲の最南の一區域にして、舊其大名を東の方を熊野國といひしを、後熊野を併せて、木國を以て總名とす、

〔日本地誌提要 五十九紀伊〕疆域　北ハ和泉、河內、大和、伊勢、東西南ハ海ニ至ル、東西凡貳拾七里、狹處凡八里、南北凡三拾里、狹處凡七里、

〔平治物語 一〕從六波羅紀州致立早馬事

大將清盛○平以下皆淨衣ノ上ヘ鎧ヲ著敬禮、熊野權現今度ノ合戰無事故、討勝サセ給ヘト祈精シテ、引懸々々打程ニ、和泉ト紀伊國トノ境ナル、鬼ノ中山ニテ、鹿毛ナル馬ニ乘タル者、早馬ト覺シクテ、揉ニ揉デ出來タリ、○下略

〔日本實測錄 九島嶼〕紀伊國牟婁郡　實測　アカノ島、周廻一里二町、從北岬至南岬一十八町一間、　鈴島從北岬至南岬一十九町四十四間、　中島、周廻九町三十間、　向島、周廻一十一町五十六間、　大島、從樫岬館山至大島浦一里二十八町四十八間、從樫野浦至街道八丁二十四間、從須江浦至街道二十四丁二十四間、　稻積島、從東岬至西岬五町、　遠測　蛇島　米島

疆域

〔日本經緯度實測〕北極出地

紀伊　新宮　三三度四三分三〇秒　三浦　三四度一〇分〇〇秒

長島浦　三四度一二分三〇秒　和歌山　三四度一三分三〇秒

田邊　三三度四四分〇〇秒 略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒 略〇中　紀伊　和歌山　西〇度三四分三〇秒

〔紀伊續風土記 提綱一〕總論

本國は上國にして、南海道の首に居りて、近國なり、管する所總て伊都、那賀、名草、海部、在田、日高、牟婁、總て七郡 延喜式 和名抄 七郡の疆界名號は、大抵孝德天皇の御世定め給ふなるべし、七郡統る所合せて五十三鄕、略〇 註 これ又大化年間より仁明天皇の御世 略〇 註 比までに備はりしならむ、其七郡國界の四至は、北は和泉河內二國と界し、夫より大和國吉野郡の西南東三面を繞りて、北の方伊勢と境を接し、其大形半璧の如く、東西及南の三面皆海に瀕して、西は阿波土佐と海を隔て相對し、東南は大洋に向ひて際涯を知らず、和泉河內二國との堺、葛城の連峯列障の如くにして、其南に四郡東西に列せり、伊都郡其東首に在りて、大和國宇智吉野兩郡と接せり、略〇 註 伊都の西を那賀郡とす、那賀の西を名草郡とす、名草の西海濱にあるを海部郡とす、此四郡北に葛城あり、南に長峯あり、長峯とは東は大和國に起りて、西は海部郡に至りて海に入る連峯をいふ、紀川其中央を貫きて西に流れて海に入る、舟行通する所十四五里、大和國に至れり、四郡の地の延袤を量るに、東西十三里許、南北六七里なり、又長峯の南に在るを在田郡とし、又其南にあるを日高郡とす、並に東は大和國十津川と界し、西の方海に瀕す、各大川ありて其郡中を貫き、在田にあるを在田川といふ、舟行通する所五里、日高にあるを日高川といふ、舟行通する所七里、二郡の延袤南北十四里許、東西近き所十五六里、遠き所二

〔萬葉集四相聞〕神龜元年甲子冬十月、幸紀伊國之時、爲贈從駕人所誂娘子、笠朝臣金村作歌一首并短歌

天皇之行幸乃隨意、〇中略麻裳吉、木道爾入立、眞土山越良武公者、〇下略

〔冠辭考一〕あさもよし（木ひと　きぢ　城のべの宮）

萬葉卷一に、（大寶元年調淡海が歌）朝毛吉、木人乏母、亦打山（中略）（是までは紀伊の國にかゝれり）卷二に、朝毛吉、木上宮乎（中略）さて（是は大和國の城戸なり）こは淺茂てふ色の事なるを、上に淺よといひて、茂とつゞけしならんか、〇中略毛與志の毛と志はたゞ助辭のみ、與は呼出す辭也、〇中略

又或人、集中に、麻衣きればなつかし木の國のいもせの山にあさまけわぎもとよめると、又眞間の娘子をよめる歌に、ひたさ麻を裳には織きてなど有を以て、紀の國よりよき麻裳を出せし故によめるかといへど、總て國つものを以て、冠辭とせしはなきよしは、上下にいふが如し、その上この冠辭は、紀伊のみにもあらず、山との城戸にもつゞけたれば、此說は違へり、

位置

〔十寸穗の薄一〕紀伊國

一天經、北極卅四度、

〔地勢提要乾〕各國經緯度（附里程）

紀伊和歌山、（港久米町）極高三十四度一十三分半、經度西三十四分半、從東都（東海道經大坂）一百六十八里三丁四十一間半、

紀伊新宮（船川）極高卅三度四十三分半、經度東一十四分、從東都（東海道自日永追分參宮街道經山田及鵜万村沿海）二百一十八里二丁五十間半、

紀伊田邊、（本町）極高三十三度四十四分、經度西二十二分半、從東都（同上）二百一十里七丁三十間、

へをこせて侍りければ、いと心うきことかなと、いひ遣はしたりける返事に、

紀の國の名草のはまは君なれやことのいふかひありと聞つる

〔倭訓栞前編七〕きい　紀伊はもと木國と書たるを、和銅年間に好字を撰み、二字を用ゐさせられしよりかく書也、伊は紀の音の轉なり、

〔古事記傳十〕木國、名義此字の如し、○中略　書紀に、素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國云々、初五十猛神天降之時、多將樹種而下、然不殖韓地、盡以持歸、遂始自筑紫、凡大八洲國之內莫不播殖而成青山焉、所以稱五十猛神、爲有功之神、卽紀伊國所在大神是也、○中略　さて右の如く木種を分播たまふ神の坐ば、故に、木ノ國とは名けしなり、

〔紀伊續風土記總一〕總論

本國の地は卽上世大八洲國の內、大日本豐秋津洲の最南の一區域にして、舊其大名を東の方を熊野國といひしを、後熊野を併せて、木國を以て總名とす、木國は古事記神世に、大穴牟遲神の事を書して、速遣於木國之大屋毘古神御所、とある木國なり、木を以て國號とせし由は、五十猛命二妹とともに、素戔嗚尊に從ひ天降り給ひし時、樹種を大八洲國に播殖し給ふ、當國は其三神鎭坐ありし地なれば、樹木の暢茂せし事、他の國よりも殊に勝れたれば、木國とは名づけしなり、又熊野の名も山林鬱茂の義にして、五十猛命の父神櫛御氣野命(素戔嗚尊の一名なり)の鎭まり坐せる地なるより其名起れり、○註略　木國の名と其義の本づく所は一なり、木は其物を以て名づけ、熊野は形狀につきて呼ぶなり、○中略　美材の出る事、今に至りても、他の國に勝れたれば、木の國と名づけし、誠に稱へりといふべし、元明天皇和銅五年、文字を紀伊國と改めらる、故に日本書紀神代卷以下、當國の名を皆紀伊國と書す、神代卷に伊弉冉尊崩御の事を書して、葬於紀伊國熊野有馬村焉とある、此本國の事の史に見はるゝ始なり、

古事類苑

地部二十八

紀伊國

紀伊國ハ、キイノクニト云ヒ、略シテハ、キノクニト云フ、南海道ニ在リ、北ハ和泉、河內、大和、伊勢ニ接シ、東西南ノ三方ハ海ニ面ス、東西凡ソ二十七里、南北凡ソ三十里、此國ハ古ヘ國府ヲ名草郡ニ置キ、伊都、那賀、名草、海部、在田、日高、牟婁ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、在田郡ハ、原ト安諦郡ナリシヲ、平城天皇ノ大同元年、御諱ヲ避ケテ在田ニ改ム、明治維新ノ後、牟婁郡ヲ東西南北ノ四郡ニ分チテ、東牟婁、西牟婁、南牟婁、北牟婁トシ、又名草郡、海部郡ヲ合シテ海草郡ト爲シ、新ニ和歌山市ヲ設ケ、和歌山縣ヲシテ一市及ビ伊都、那賀、海草、在田、日高、東牟婁、西牟婁ノ七郡ヲ治セシメ、三重縣ヲシテ南牟婁、北牟婁ノ二郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕紀伊

〔新撰類聚往來 下〕國名 〇中略 紀伊 紀州

〔日本風土記 一 寄語島名〕紀伊 乞奴寄國

〔平家物語 五〕てうてきぞろへの事

抑我朝に、てうてきのはじまりける事は、むかし日本いはれみこと〇神武の御宇四年、きしう名草の郡たかをの村に一つのちゝう有、身みじかく手足長して、力人にすぐれたり、

〔後撰和歌集 十七 雜〕紀のすけに侍りける男のまかり通はずなりにければ、彼男の姉のもとに、うれ

雜載

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國健兒 ○中略 長門國五十人 ○中略

諸國器仗 ○中略 長門國 甲二領、横刀五口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

長門國　高四拾万四千八百五拾三石餘

内　拾三万三百三拾七人　男
　　拾壹万六千六百七拾五人　女〇中略

〔諸國人數帳　弘化三丙午年〕〇中略

一人數貳拾六万千百人　[illegible]

内　拾三万七千貳百九拾壹人　男
　　拾貳万三千八百九人　女

風俗

〔人國記〕長門國

長門國ノ風俗、毎物眞事差掛リタル事無之也、サレバ人之皆聲モ下音ニ而上拍子成事無而、人吾ヲ頼ムトイヘドモ、輕ク請ル事スクナク、思慮ヲ而後ニ是ヲ答、或亦人ニ事ヲ談ズルニモ、十之物七ツ八ツニ而差切タル事ナキ風俗ニシテ、別而武士之風儀喜ニモ非ズ、惡ニモ非ズ、我ハ人ヲ頼、人ハ我ヲ頼ニシ、タガヒニモタレ合テ毎物遠慮過テ、大事ニ怖ルニ、人ノ過チアル時、人是ヲ詩ル(誹ル)ヲ以、如斯之意地ヨリ出ル形儀也、サル程ニ諸藝ヲ學ブニモ、一花勤ル樣ナレドモ、氣ニ引放タル意地無之故、惰之氣頓而發シテ、中途ニ而差捨ル人、百人ニ六七十人、如斯也、是皆勤ル意地スクナク、萬ヲ憤之氣弱キノ故也、因玆武士之風俗善ト難云、若シ此意地ヲ發明而是ヲ勤行スル人アラバ、國風ノ垢自ラ去リテ、名ヲ呼ブ程ノ人モ可成也、無左士ハ隨分利根也トモ用テ偖ニ當ルベキトイワン哉、

名所

〔日本鹿子十二〕長門國〇中略　名所之部

安武の松原　當國の北、安武の郡にあり、ひろき松原也、世俗にあんの郡と云、〇中略

豐浦島　當國の府中也、宮有之、皇居の社檀は南向也、東西に遠干潟あり、奧津平津とて、島二ツ有、干珠滿珠の二珠を納給ひしと云、滿干の島と云也、

赤間關　俗に下の關といふ、もと山といふ所より七里あり、

門司關　此所に硯切石あり、靡逸也、〇中略　當井湯　土蛛島

〔延喜式 主計二十四〕長門〈○中略〉　右廿五國、中〈○中略〉
長門國〈行程上廿一日、下十一日、海路廿三日〉
調、綿、絲、雜鮹、但大津阿武兩郡浮浪人調充採銅鉛料、　庸、綿、米、　中男作物、紙、胡麻油、薄鮹、雜腊、海藻、

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥〈○中略〉
長門國十三種　牛膝、芎藭、伏苓各三斤、白朮二斤、藍漆、巴戟天、茜根各一升、細辛七斤、白礬石三斤、蛇床子五升、桃人四升、亭藶子、蜀椒各二升五合、

〔延喜式 内膳三十九〕年料〈○中略〉　長門國〈稚海藻一百四籠〉

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〈○中略〉定常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂〈○中略〉長門牛、

〔毛吹草 三〕長門
銀　銅　長登綠青　萩燒物　鏡〈諸國參宮道者用之〉　蜜柑　長府素麪　下關鯨〈ブアト〉　蛸　横首鯸〈カヤブカ〉　紫硯
同水入等　筋濱黑碁石　舟木石炭〈干漆ニ仮、當所薪灯ニ用之、〉　櫛〈太閤薩摩入之時、天下一ニ譽、〉　向津奥苔〈ムカフツノヲクト云、向津ノ奥ノ入江ノサノリ浪ニ入〉
苔〈カタアマノ袖ヤスレケン、人丸ノ詠歌ト云、〉　隼人明神和布苅　埴生鳥賊〈ハブイカ〉　火打鮑　三島貝〈大鮑ナリ〉　吉見川捜鯑〈サグリアユ〉

〔和漢三才圖會 長門七十九〕國土產
磁器〈茶碗皿鉢等出於萩、不上品物、〉　綠青　索麪〈長府〉　鰒〈フク下關〉　章魚〈タコ〉　鯸〈スルメ〉　硯石〈紫色出於赤間關〉　碁石〈出於筋濱〉　石炭〈舟木村出於土中、詳于石類石炭下、〉　大鮑貝〈出於入島〉　鮎〈アイ吉見川〉　烏賊魚〈埴生〉　印籠　苔〈出於向津奥〉　鰤〈瀬戸崎〉

人口

〔官中秘策 五〕長門國　六郡〈○中略〉
一人數貳拾貳万六千九百三拾四人　内〈拾貳万貳千貳百七拾四人男　拾万四千六百六拾人女〉

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調〈文化元甲子年〉〈○中略〉
一人數貳拾四万七千拾貳人〈皆私領〉　長門國　高拾六万六千六百貳拾三石餘

目錄○中略

長門國一國　阿武郡貳拾貳箇村　高三万八千五百拾五石三升　大津郡拾五箇村　高壹万八千貳百拾四石壹斗三升七合　美禰郡拾五箇村　高三万千九百貳拾壹石七斗四升五合　厚狹郡三拾貳箇村　高三万貳千三百六石四斗六升三合　豊浦郡六拾五箇村　高四万五千八拾貳石貳斗貳升九合　見島郡　高五百八拾四石四升壹合○下略

〔日本鹿子十二〕長門國六郡、中上國、東西二日半、○中略知行高十三万四千五十石、

〔官中秘策五〕長門國　六郡○中略

一石高拾六万六千六百貳拾三石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

長門國皆私領　一高四拾万四千八百五拾三石三斗三升三合

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻○中略

長門國正税公廨各十一万束、國分寺料一万束、文殊會料一千束、修理官舍料二万束、池溝料一万束、救急料六万束、兵粮料四万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕長門國○註略管五、中略正公各十一萬束、本稻二十六萬千束、雜稻十四萬千束、

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀○中略　長門國二千石○中略

年料別貢雜物○中略　長門國牛皮八枚○中略

諸國貢雜器次○中略　長門國入壹量小一升○中略　右十四箇國爲第六番○中略

年料雜器○中略　長門國瓷器、大椀五合、徑各九寸五分中椀十口、徑各七寸小椀十五口、徑各六寸茶椀廿口、徑各五寸花盤口、徑各五寸五分花形盤坏十口、徑各三寸瓶十口、大四口、小六口○中略

交易雜物○中略　長門國商布廿段、綿一百五十斤、綿廿斤、席廿五枚、鐵廿斤、丹六十斤、胡麻子兩合、

藩封

田數石高

〔吾妻鏡　十五〕建久六年十一月四日乙酉、嘉祥寺領長門國棚庄事、守護人妨、領家所務之由、被仰下之間、此所事、去文治年中、依院宣、停止地頭職訖、今更違亂之條、招罪科歟、早可停止之旨、今日所被仰下也云云、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事
長門國（中略）　美禰郡一日（但厚保一日路守、請文八日、○中略）
寛正二年六月廿九日　　備中守（奉）秀明（○下略）

〔慶應元年武鑑〕松平大膳大夫□□　三拾六万九千石餘　（周防長門兩國一圓領之）居城長州阿武郡萩（江戸ヨリ）二百七十里
（毛利中納言輝元、慶長年中、移當城以後代々領之、）

毛利左京亮元周　五万石餘　居城長州豐浦郡府中（江戸ヨリ）海陸二百八十里
（當所毛利甲斐守秀元、同和泉守光廣、同甲斐守綱元、同又四郎元朝、同右京元矩、享保三、毛利甲斐守匡廣、從清末移于當所、）

毛利讃岐守元純　一万石　在所長門豐浦郡清末（江戸ヨリ）二百八十里（○略）

〔倭名類聚抄　五〕長門國（○略）　（佳）管五　（田四千六百三町四段二百三十一步）

〔伊呂波字類抄　（长部）〕長門國（管五（中略）本田四千七百六十九町下上十廿一大國國）

〔海東諸國記〕長門州　產銅及刃鐵、郡五、水田四千九百二町四段、

〔新關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十三万六百六十石　　長門

〔寛文印知集　三〕周防國貳拾万貳千七百八拾七石餘、長門國拾六万六千六百貳拾三石餘、（○中略）事、任元和三年九月五日、寛永十一年八月四日兩先判之旨、宛行之訖、全可領知之狀如件、
寛文四年四月五日御判
長門侍從どのへ
（筆者）森新兵衞

莊園

處、猶絕無₂船、不₁慮之逗留及₂數日₁、〇下略

〔安西軍策〕三大內義長山口沒落附最期事

弘治三年、〇中略義長〇中略長府勝山ヘ落給フ、元就朝臣此由ヲ聞給ヒテ、〇中略渡邊左衞門、赤川左京

市川式部等ニ數千騎ヲ相添、大友後詰ノ押トシテ下關ニ置給フ、

〔北轅文草〕四西海紀行

六日、〇天明元年五月朝到₂下關₁、西海北路極₂于此₁、一都會也、是爲₂平氏殲亡之迹₁、〇下略

〔吾妻鏡〕四元曆二年〇文治元年三月廿一日甲辰、廷尉〇源義經爲₁攻₂平氏₁、欲₁發₂向壇浦₁之處、依₁雨延引、

廿四日丁未、於₂長門國赤間關壇ノ浦海上₁、源平相逢、各隔₂三町₁、艚₂向舟船₁、

〔玉海〕元曆二年〇文治元年四月四日丁巳、頭辨光雅朝臣來臨、〇中略光雅仰云、院宣云、追討大將軍義

經去夜進₂飛脚₁、相副札申云、去三月廿四日午剋於₂長門國團₁合戰、於₂海上₁合戰云々、自₂午正₁至₂晡時₁、〇下略

〔和漢三才圖會〕七十九長門深川〈有₂溫泉₁、二里、作₂湯本₁、畔出₂之、〉

〔中國治亂記〕義隆卿〇大內ハ不₁叶シテ自害アルベキトテ、九月〇天文二十年朔日ノ巳ノ刻ニ、深川大寧寺

ノ於₂佛前₁、燒香シテ心靜ニリンジウノツトメアリ、

〔大內義隆記〕義隆モカチ地ニテ長州岩永ヘゾ落玉フ、

〔石清水文書〕一八幡宮寺領

御制〇右大將家御時中略

長門國　大美禰庄〇中略

元曆二年正月九日

〔吾妻鏡〕六文治二年八月五日己卯、帥中納言奉書、被₂進御請文₁、是新日吉領、武藏國河越庄年貢事、

并長門國向津庄預所事等也、平五盛時染筆云云、〇下略

其節までは古萩宍戸民部屋敷なり、

〔和漢三才圖會 長門 七十九〕長府。至江戸二百八十里、西至大坂二里、乾至川棚三里、至瀧部四里、至下關一里、南至小倉四里、

〔西遊雜記 二〕長府は毛利侯の御在所にて、甲斐守御知行五万石 御知行よりも能所也、風景も能、圖の如く〇圖略 千珠島、滿珠島、すべての海濱きれいにして、勝地といふべし、

〔大内義隆記〕同八年〇大永即享祿元年 四月上旬ニハ、肥前ノ國龍造寺ノ一揆ノ時ハ、義隆御發足ノ事ナレバ、入道〇道麒 先陣仕リ、屋形ハ長府ノ修禪寺ニヒカヘサセ玉ヒツヽ、〇中略 同三年〇天文 十一月ニ、悦ノ旗ヲアゲ、屋形ハ長府ヲ御開陣、道麒ハ明ル二月ニ、シツハライシテ關ノ戸ヲ歸レバ、〇下略

〔安西軍策 三〕大内義長山口沒落附最期事

弘治三年、〇中略 義長今ハ元就ヲ退治スベキ行ハナシ、〇中略 内藤彈正杉民部已下二千餘騎ヲ隨テ、長府勝山ヘ落給フ、元就朝臣此由ヲ聞給ヒテ、〇中略 長府ヘハ福原左近丞ヲ大將トシテ、五千餘騎被差向、勝山ヲ取圍、

〔和漢三才圖會 長門 七十九〕赤。間。關。〇俗云下關 往昔赤間門司共續於長門地一處、而神功皇后朝鮮渡海後此地成海、今卽門司屬於豐前海上去一里、而和布苅神社亦門司地云云、紫硯石出於此、

〔海東諸國記〕長門州〇中略

忠秀　丁亥年〇應仁元年 遣使來賀觀音現像、書稱長門州赤間關鎭守高石藤原忠秀、

〔日本書紀通證 七〕宗因曰、赤女以色名之、鯛中一種、西海多產之、云笛吹是也、長門赤間關以赤女多名之、見風土記、

〔西遊雜記 二〕長門國豐浦郡赤間ケ關、下ノ關ともいふ、時には赤間ケ關とかく、 西國第一の湊にして、浪華より中國に及び、九州北國船路往來の咽首にて、諸州の廻船よらざるはなし、市中一万に餘り書賈あしからず、諸國への便りも至て能繁昌の富饒の地といふべし、

〔吾妻鏡 四〕元曆二年〇文治元年 正月十二日丙申、參州〇源範賴 自周防到赤間關、爲攻平家、自其所欲渡海之

〔郡國提要〕長門　六郡、百五十村、
（皆私領）高四十万四千八百五十三石三斗三升三合
豐浦郡六十五村　大津郡十五村　美禰郡十五村　厚狹郡三十二村　見島郡一村　阿武郡二十二村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名
長門　厚狹郡奥檀村、豐浦郡、涌田村、滿珠島、干珠島、六連島、角島、蓋子島、大津郡、向津具村、津黄村、青海島、阿武郡、生雲村、藏目木村、明木村、干島、

〔和漢三才圖會七十九長門〕萩。（至江戸二百五十九里、坤至下關二十八里、自此至大坂百四十五里、自萩中國十一里、巳午至至三見二里、至日置五里、至神田十里、坤至島府十七里、東至石見津和野十八里、）

〔長門金匱〕一萩の地は大内家時節、吉見氏の領知の由なり、（中略）
一當所を萩と申事は、今古萩と云所に人家あり、今の田町通りより南東は皆沼にて、蘆原の水溜りなり、田も疎々無之、よき道もなし、東北の方當萩村と云、後總名萩と云、本の名所を古萩と云なり、（中略）
一萩を世人當島と云、河上水西北へ分れ口の名を川島と云、夫南方の川内の地は河島之庄と云、（手木の庄とも云）依之萩にての諺に、當島と云萩は河内の島なり、
一往古萩八景と云所は　鶴江夕照（鶴江なり）　鶴江秋月（玉江川尻）　鶴江暮雁（[illegible]しの所なり）　萩津江暮雪（今渡時浦ある處なり）　得江歸帆（御國元の所なり）　三江晴嵐（金谷天神）　二江夜雨（渡り口の邊）　椿江晩鐘（にごりぶち）
一後に云萩八景、詩は山田原欽、歌は安部吉左衛門尊貞に命ず、
一宗瑞樣御一亂以後、初て御國へ御下なされ候て、山口の糸米に被成御座、（糸米と云）萩を御城下に御取立なされ候付、諸事爲御見合、初て萩へ御越なされ候時は、常念寺を御宿になされ候、常念寺

見島郡

長門國略○中　阿武郡細田至テハ二日、小川至テ二日路中、購文十一日、椿三見仙原得作生見一日、購文七日、○中略

寛正二年六月廿九日　備中守幸秀明略○下

〔寛文印知集三〕目錄略○中

長門國一圓略○中　見島郡　高五百八拾四石四升壹合略○中

寛文四年四月五日

松平大膳大夫殿

郷

〔倭名類聚抄八長門國〕厚狹郡　見禰　小幡乎多波　厚狹安佐　郡　久喜　二處布多井○二處、高山寺本作二家、布多井作不多閉　神戸

驛家　良田與之多　松室萬都也

豐浦郡　田部多倍　生倉伊久木○高山寺本、久下有眞字　室津無邑　額部奴加倍○奴加倍、高山寺本作加久无　驛家　栗原久利八眞　日内宇都比

神田加無多

美禰郡　美禰　諸鋤須々木○諸、高山寺本作諸、須々木作久之波　位佐井左　作美　賀萬　驛家

大津郡　三隅美須美　深川布加波○高山寺本作布加々波　日置比於木　三島　向國武加津久爾　二處　神戸　驛家　稻妻伊奈女

阿武郡　阿武　椿木都波木　大原於保波眞　宅佐　多萬　住吉須美與之　神戸　驛家

村里名邑

〔郡名一覽〕一長門國皆私領　長州　東西二日半　六郡

高拾六万六千六百貳拾三石六斗四升五合　百七拾三ケ村

●萩　二百七拾里　●府中　二百八十里　○清水　二百八十里　)(○右田一萬万石　毛利

内匠　)(○吉浦一萬万石　毛利藏主　)(○三ツ尾一萬万石　宍戸美濃　)(○須佐一萬万三千石

益田丹後　)(○舟木一萬万石　福原豐前

○按ズルニ本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

美禰郡　大津郡　阿武郡

〔吾妻鏡六〕文治二年八月五日己卯、武衞中納言奉書、被進御請文、○中略 六月一日御教書、七月廿八日到來、謹以令拜見候訖、○中略 同日○吉書 御領長門國向津奥庄地頭職狼藉人、豐西郡司弘元之所帶候、○下略

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

長門國○中略 豐東郡二日、請文九日、 豐西郡二日但高賀河ニ逗テハ二日路中、請文十一日、○中略 豐田郡二日但綿田間川原野逗テハ二日路中、請文十一日、○中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明○下略

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

長門國○中略 美禰郡一日但厚保一日路中、請文八日、○中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明○下略

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

長門國　大津郡二日路中、請文十一日、○中略

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明○下略

〔吾妻鏡九〕文治五年二月卅日壬寅、長門國阿武郡者、爲沒官領內之間、爲勳賞被賜土肥彌太郎遠平、爲御造作材取可去進地頭職之由、依有勅定、可退出之由、被仰之處、遠平代官于今居住之由、及遠聞之間、重被遣御書、

下　長門國阿武郡前地頭遠平代官可令早退出郡內事

右件地頭職、可令停止之由、被成下院廳御下文之處、遠平代官于今掩留致濫妨之由、有其聞、所行之實、甚以不當也、早可令退出郡內之狀如件、以下、

文治五年二月卅日

〔大內家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

豐浦郡　豐東郡　豐西郡　豐田郡

長門國豐浦、厚狹等郡、宜養賢、〇下略

〔中國治亂記〕伯州守〇杉伯耆守重矩ハ佐渡郡ノ内大﨑ト云處ニ有リシガ落ケルヲ、長門國原〇原恐厚誤狹郡長興寺ニテ押ツメ腹ヲキラセ、首ヲバ義隆ノ御廟ノ前ニ掛ラレケル、ニクマヌ者モナカリケル

〔長門國守護職次第〕長門國平家以往守護職、元者號押領使職、

豐西郡司三代同御祈禱師一宮大宮司次第〇中略

五、厚東郡司武光、同重貞、〇下略

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事〇中略

長門國〇中略　厚狹郡二日但津布同坂生至二日路中、請文十一日、〇中略　吉田郡二日請文七日　厚東郡一日、請文七日、〇中略

寬正二年六月廿九日　備中守秀明奉〇下略

〔東大寺正倉院文書三十七〕長門國正稅帳

合伍郡天平八年定正稅穀壹拾貳萬漆佰肆斛伍升貳合〇中略

豐浦郡

天平八年定正稅穀叁萬叁仟漆拾捌斛玖斗伍升漆合〇下略

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月戊申、大將軍東人等言、殺獲賊徒豐前國京都郡鎭長太宰史生從八位上小長谷常人、〇中略仍差長門國豐浦郡少領外正八位上額田部廣麻呂將精兵四十人、以今月二十一日發渡、〇下略

〔長門國守護職次第〕長門國平家以往守護職、元者號押領使職、

豐西郡司三代同御祈禱師一宮大宮司次第〇中略

四、豐東郡司元家、　此時大宮司重貞

麻山獲賊、

國府

〔續日本紀文武二〕大寶二年正月乙酉、從四位上大神朝臣高市麻呂爲長門守、

〔長門國守護職次第〕佐々木四郎左衞門尉高綱自大將殿（源賴朝）文治二年給之、七月十三日下國、爲守護職、

〔倭名類聚抄國郡五〕長門國國府在豐浦郡、行程上二十一日、下十一日、

〔伊呂波字類抄國郡奈〕長門國（中略）豐浦府

〔源平盛衰記四十一〕義經拜賀御禊供奉、附實平自西海飛脚事

源氏此事ヲ聞テ、○中略長門國ニゾ着ニケル、當國ノ國府ニハ三ノ御所アリ、

〔道ゆきぶり〕又山路になりて、小島といふうらざとに出たり、松原をはるかに行過て、長門國府になりぬ、北はまとて東南にむきて家居あり、○下略

郡

〔倭名類聚抄國郡五〕長門國○中略管五○中略厚狹安豆佐 豐浦止與良、國府、美禰美禰 大津於保都 阿武 見島

〔延喜式民部二十二〕長門國、中管 厚狹アツサ 豐浦トヨウラ 美禰ミネ 大津オホツ 阿武アム 右爲遠國

〔拾芥抄中末本朝國郡〕長門中遠 五郡、厚狹、豐浦府 美禰、大津、阿武、見島、

〔皇國郡名志〕長門國舊六郡今入郡

厚西アツサノニシ ●吉田本郷 ●厚狹 南海ニ向

厚東 ●木山 ●宇部 〈舟木 ●山中 ●加川 防界南海

豐西トヨラノニシ 〈川棚 西海ニ向

豐東 ●下ノ關 ●西山中 長府 ●神月 南海ニ向

大津オホツ ●瀬山 ●正明市 ●中村 西北海ニ向

美禰ミネ 〈大嶺 〈長登町 國中ニヨリ防界ニ通

阿武アム 〈生雲 ●三見 ●萩 ●大井 ●木與 ●徳江 〈須佐 ●江崎 ●下田方 ●明木 阿武松原 石防界北海ニ向

豐田トヨタ ●西市 ●嶋戸 西海ニ向

今厚狹豐浦各分東西ニ、舊市ニ見島郡、今之ヲ加ニ豐田郡、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛宕郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ

豐浦(トヨウラ)六十五村、古國府、仲哀紀豐浦津、卽此地、　大津十五村　美禰(ミネ)十五村　厚狹(アサ)三十二村　見島一村延喜式不載、未詳、

大津本阿武郡、和名抄、大津郡、三島郡、所謂　阿武二十二村、古阿武國、見國造本紀、　豐東已下五郡、見長門國大内氏日記、蓋析豐浦郡、爲豐東豐西二郡者、書未詳、延喜式不載、　豐西上同、未詳、　豐田就豐浦郡、未詳、延喜式不載、　厚東厚狹郡、上同、疑析所

也、　吉田同上、和名抄厚狹郡、吉田郷、

〔日本地誌提要 五十八長門〕沿革　仲哀天皇ノ熊襲ヲ征スル、行宮ヲ豐浦ニ營シ、從御八年ニシテ崩御、後國府ヲ豐浦郡ニ置ク、卽豐浦ニシテ、仲哀天皇ノ行宮址ニアリ、文治元年、平氏安德天皇ヲ奉ジ、讃岐ヨリ航海來奔シ、壇浦ニ至リ、源軍ニ迫ラレ、天皇海ニ崩ジ平氏亡ブ、鎌府ノ初、佐々木高綱ヲ以テ守護トナス、北條時宗執權タルニ及テ、始テ警固使ヲ置ク、北條實政ヲ以テ之ニ任ジ、後同族交代シ、遂ニ中國探題ト稱シ、山陰山陽ヲ控制ス、元弘中、北條氏亡ビ、探題北條時直王師ニ降ル、建武中、厚東武實ヲ以テ守護トス、足利尊氏ノ反スル、武實之ニ應ズ、正平十三年、大内弘世、武實ノ孫義武ヲ滅シ、遂ニ本州ヲ取ル、相傳ル七世、義隆ニ至リ、家臣陶隆房ニ弑セラル、毛利元就、隆房ヲ誅シ、其地ヲ併ス、元就ノ孫輝元ノ封ヲ削ラルヽニ及テ、僅ニ本州及周防ヲ領シ萩ニ鎭ス、輝元地ヲ分テ、養子秀元ヲ府中後豐浦ト稱スニ封ジ、秀元六世ノ孫師就、其弟政苗ヲ清末ニ分封ス、文久中、毛利敬親元慶親、十三世萩城ヲ徹シ、徙テ山口周防ニ治ス、王政革新、廢シテ豐浦清末二縣ヲ置、又改メテ山口縣ヨリ管治セシム、

〔先代舊事本紀 國造本紀十〕穴門國造

纒向日代朝景行御世、櫻井田部連同祖邇伎都美命四世孫速都鳥命、定賜國造、

阿武國造

纒向日代朝御世、神魂命十世孫味波波命、定賜國造、

〔日本書紀 二十五孝德〕白雉元年二月戊寅、穴戸國司草壁連醜經獻白雉曰、國造首之同族贄、正月九日於

田鄕村特牛(コツトヒ)濱、三十四度一十九分、二里一十八町二十間半至島戸浦小島崎二里一町一十四間　神田鄕村折紙折紙岬至三町三十二間半　二里二十九町二十五間半至阿川村三十四町四十二間　粟野村　二里一十九町十一間　大津郡河原村濱至河原村宿所汎濱七町一十二間　三十四度二十一分半、又從河原村濱歴久富村至日置庄村黄和戸口一里三十四町一十二間半、　一里二十二町三十七間　黄小田村濱至黄小田村宿所四町三間　三十四度二十四分半、又從黄小田村濱至向津具村堀切七町一十五間半　一里二十六町四十七間　向津具(ムカツク)村大浦　三十四度二十四分、二里八町二十八間至船越南濱六町三十間　同船越北濱　二里三十三町二十六間至川尻岬一里一十四町五間半　同堀切　五里一十六町五十二間半至黄波戸口三里一十七町二十二間　瀬戸崎村、又呼仙崎　三十四度二十四分、一里四町五十一間半至深川庄村白潟二十三町四十間半　三隅庄村淺田　三里二十一町四十間半至小島洗濱三十四町五十二間　同野波瀬　四里一十二町一十一間至萩松本川口三里一十町四十四間　阿武郡濱崎町濱至濱崎本町三町二十八間　一里三十一町五十二間　椿鄕村東分越ケ濱浦　三十四度二十七分、三十五町二十四間　同越ケ濱虎ノ岬虎ノ岬遊二町二十六間半　三里二十一町四十五間半至越ケ濱北浦四町四十八間從北浦至大井ケ濱、一里一十四町三十七間、　奈古村、三十四度三十分至モトロ岬一里一十八町五十七間、　一里五町一十間　同北濱至カセ濱三町　一里一十二町四十一間半至宇田村ヒツアヒ一里六町一十三間半　總鄕村至金崎一里四十八間　二里五十七間　須佐村至津岸三町四十四間、從須佐津岸至深沈一里九町一十八間、又從須佐津岸歴玉島至大黑岬、一里三十三町三十七間、　一里二十一町五十六間半　同江津至赤島岬二十七町三十九間　四町　江崎村、三十四度三十八分、至田方村新山岬二十六町卅一間　三十四町六間　田方村湊浦至ツブ崎七町七間　一里八町一十八間至國界佛須崎十六町一十七間

石見國美濃郡飯浦村

容驛

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〇中略

長門國驛馬阿潭、厚狹、埴生、宅賀、臨門各廿疋、阿津、鹿野、意福、田宇、三隅、參美、垣田、阿武、宅佐、小川、各三疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考三山陽道〕長門　古作穴戸、國造記　弘仁九年三月、改長門國爲鑄錢司、拾芥抄　後復爲國、管

六郡延喜式、和名抄、共五郡、百五十村、

五丁二十七間　椿郷東分松本橋沿鶴江川、至川口、一十九丁二十二間　一十町五十九間　椿郷東分松本　一里三十三町三十間　福井郷下村福井市　三里二十五町三間　生雲村生雲市　一里一十五町五十三間
地福村黨巢　從吉田、至黨巢、街道、通計二十二里一十六町一十四間、

從長門國小月、歷三隅、至萩

長門國豐浦郡小月村　一里一十町二十一間　田部村田部市　三里四町三十一間至中山村、一里一十丁二十一間　矢田村西市　二里一十二町一十間半　地吉村法ヶ原　一里二十二町二十七間　大津郡俵山村湯町　二里四町二十三間半至大寧寺峠、一里二十丁五間中　深川庄村大寧寺門前　一里一十四町一十二間　同正明市、三十四度二十一分半、　二里四町一十七間半　三隅庄村三隅市　二里二十四町三十六間　三見村三見市　一里二十五町五十七間至玉江浦、一里五丁二十一間、從玉江、至椿郷、一十二町、　椿郷西分　從小月、至萩、街道、通計一十八里一十四町五十五間半、

〔日本實測錄卷一中〕從大坂沿海至赤間ヶ關略○中

長門國厚狹郡宇部郷村　四里三十二町三十八間　須惠村大瀨崎　三里二十町三十間　千崎村　四里二十二町二十九間半　豐浦郡小月村吉田川口至街道、四町二十七間　二里一十九町　豐浦本府　二里三町五十六間半至前田村、一里一十一町五十二間、從前田、至赤間關後地、九町五十五間、　赤間關南部町、三十四度五十七分半、從大坂、至赤間關、沿海通計三百一十二里三十二町一十六間、

從赤間關沿海至觜山未實

長門國豐浦郡赤間關南部町　一里九町一十五間　大坪村小戶岬　四里三十三町一十六間半　正吉浦網代岬　三里九町二間半　室津下村鑵ヶ瀬至小浦、四町五十間　一里一十町三間半至小串川、一十七町三間　湯田村至湯玉浦、五十八間　一里二十二町四十三間至湯玉、一町一十二間　小串村、三十四度一十分半、　一里五町五十七間　宇賀湯玉、三十四度一十三分、　五里一町四十七間至二見浦、二十一町三十間　特

貞成　己丑年（〇文明元年）遣使來朝、書稱長門州三島尉伊賀羅駿河守藤原貞成、

〔島林本節用集下〕長門（長州）中管六郡、東西二日半、南海、北山、魚鹽充、稷穀倍他國也、中々國也、

地勢　〔日本地誌提要五十八長門〕形勢　山脈石見ヨリ來リ、橫ニ周防ニ界ス、西南隅豐前ニ對シテ、海門逼窄山陽要害、此ヲ以テ最トス、赤間關乘船ノ碇泊スル所、民戶富贍ナリ、土壤膏腴播稼ニ宜シ、東北磽确冱寒、五穀熟セズ、風俗樸陋、

道路　〔日本實測錄四街道〕從攝津國西宮中國街道至赤間關（〇中略）長門國厚狹郡山中村下山中、三十四度三分、二里二十町二十四間半　船木村　一里一十五町六間　鴨庄村厚狹市　二里三十三町一十三間半（至吉田村萩道追分二里三十二丁二十五間半）　吉田村、三十四度五分半、一里七町三十九間　豐浦郡小月村　一十七町三十間　清末鞍馬（至清末陣屋三丁一十五間）　二里二町三十二間半　豐浦（本府中）　中濱町（歷一ノ宮至赤間關後地村國田、二里七丁四十五間半、）　一里四十九間　前田村　二十町九間　赤間關後地村國田　一十二町五十六間　同南部町（從西宮至赤間關）　中國街道通計一百三十三里一十四町一十一間、（〇中略）

從長門國吉田歷萩至鹿集、

長門國厚狹郡吉田驛　三里一十一町一十六間（至豐見峠一里三丁二十五間）　美禰郡麥小野村四郎ヶ原宿、三十四度九分、一里一町一十八間　大嶺村吉則、三十四度一十分半、一里一十五町三十五間　同河原驛　一里二十一町五十二間　秋吉村、三十四度一十三分、二里一十二町三間　赤鄉村　繪堂村、三十四度一十六分、二里三十一町四十五間（至明木村橫瀨二里二丁二十四間）　阿武郡明木村　三町四十八間　同明木市、三十四度二十分半、一里二十三町四十間　椿鄉西分　七町八間半（至椿町木戸三十丁二三間半）　萩椿町大橋西頭（沿川至日安古河岸、三十一丁三十七間、又沿川至松本橋、一十六丁二十七間、）　一十町五十間半　同東田町　七町三十三間（至萩馬場町限）（歷西田町至濱崎本町一十丁七間、北極高三十四度二十五分、從本町至鶴江川口三丁二十八間、從西田町歷日安古河岸至橫本川口二十四丁八間、）

島、周廻六町五十一間、　遠測　男柱島　女柱島　黒島　丸山島　丸島　タシトコ島　ウツ瀬

女鹿島　ヒシヤコ瀬　カセケ瀬　横ブセ　赤瀬字田村沙瀬　小平瀬　板ワキ瀬　赤瀬岩

[illegible]村松ケ島　名島　赤島　辨天島

見島郡　實測　見島、周廻四里三町三十一間　遠測　カキタタ島

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年二月十六日庚午、前内府以讃岐國屋島為城郭、新中納言知盛相具九國官兵、固門司關、以壹島定營、相待追討使云云、

〔源平盛衰記四十一〕義經拜賀御禊供奉附實平自西海飛脚事

新中納言知盛は、長門國壹島ト云所ニ城ヲ構タリ、是ヲバ引。島。トモ名附タリ、

〔道ゆきぶり〕まことやこのひ。く。ぇ。まと、宍戸の江のはやとものわたりのあはひ、まことにひきわかれて侍ならば、ぇまの長さとはやとものわたりのひろさは、同ほどぞ侍らん、おぼつかなしとて、いづれの代にて侍りけるやらん、國司出て引島の長さを、縄してとりて、はやとものわたりにをしあてがひて侍りければ、ちうばかりもす法たがはず侍りけるとなん、いと興ある事なるべし、此事は此皇后〇神功宮の宮司として、老て侍るが語侍る也、

〔大内家壁書〕寄事於左右、殺害人之間御定法之事

飯田大炊助貞家郎從石川助五郎、爲長門國三隅庄平氏左衛門三郎男、去十七日夜被殺害之事、右〇中略貞永式目之旨にまかせ、流刑に一定せしめ訖者、早件之兩人を長門國見。島。に可遂遣之狀如件、

寛正三年八月晦日　　[illegible]山[illegible]御判

內藤下野守殿盛世也

〔新東鑑圖記〕長門州〇中略

疆域

島嶼

〔名所方角抄〕長門國分〇中略、長門は西南はうみ也

〔日本地誌提要五十八長門〕疆域 東ハ周防石見、南ハ周防及海、西北海ニ至ル、東西凡壹拾九里餘、南北凡壹拾三里、

〔日本實測錄九島嶼〕長門國厚狹郡 遠測 竹子島 龍王岩

豐浦郡 實測 滿珠(マンジユ)島、周廻四町二十八間、干珠(カンジユ)島、周廻四町一十四間、船島、周廻七町二十間、引島、周廻六里一十五町五十一間、無子島、周廻五町三十間、城子島、周廻二町二十九間、竹子島、周廻二十二町二十二間、六連(ムツレ)島周廻三十二町七間、黑島、周廻六町二十五間、蓋井島、周廻二里一十七町、厚島男島、周廻二十二町五十二間、厚島女島、周廻一十二町五十二間、鼠島、周廻五町二十間、角島周廻三里二十一町五十一間、遠測 クルミ瀨 鴨瀨 イセ礁 水島瀨 櫻瀨 イツヽ島 壁島小串村 國瀨 壁島宇賀本郷 壁島神田木郷 金子島 鍋島 雙子島 鳩島 イセ島瀨

大津郡 實測 竹島、廻島六町二十五間、青海島、周廻九里六町四十六間、大島、周廻二十八町二十七間、幸島、周廻一十二町四十六間、篠島、周廻八町三十四間、遠測 行堂島 蛭子島伊上村 手長島 小島 江之島 船瀨 俵島 小瀨 平瀨 高原瀨 ミタレ瀨 大島向津久村 畑島 嚴島青海村 小丸島 戎島小島村 松島 嚴島大日比浦 大立瀨 瀨ムラ島 小立瀨 大島大日比浦 鹿島 壁岩

阿武郡 實測 鯖島、周廻二十町五十三間、相島、周廻二里四町五十六間、尾島、周廻一十九町四十九間、羽島、周廻一十七町二十間、干(ヒ)島、周廻一十九町二十二間、櫃島、周廻二十九町四十四間、大島、周廻一里三十一町六間、男鹿島、周廻三町二十七間、野島、從南岬至北岬七町、宇田島周廻一十町、姬島周廻九町、小島周廻四町 天神島從南岬至北岬九町、中島周廻三町一十三間 平

や云めり、潮の滿干のほどは、宇治の早瀬よゝも猶落激りためり、さても穴門豊浦の都と申し侍ることは、今の赤間の關と門司の關とのあはひは、山ひとつなる其中に、わづかに潮のみちひの路ばかり、穴のやうにて侍るに、其岸の東西に、人家しげかりけり、穴戸とはさて云なりけり、其を皇后の軍の御舟、通り難かりけるに、御舟よそひて後、一夜のほどに、此穴戸の山引分れて今のはやともの渡りになりぬ、此山さながら西の海中によりて、島となれり、此島の向ひは柳の浦とて、昔里内裏のたちたりける所なるべしと云り、此穴門の名の說、國人の古く語傳へたるを聞て記せるなるべし、[illegible]其岸の東西に、人家しげかりけり、穴戸とはさて云なりけりと云るは、古言に、[illegible]穴門な戸と云しことを知らずして、戸な[illegible]戸の意と思ひ誤りて云るひがことなり、穴の如くなる[illegible]戸と云意なる物なや、(中略)なほ内山氏說が言に云く、長門の說[illegible]と[illegible]の早鞆崎との門の海[illegible]、人は一里ありと云なれども、いと近くしてわづかに五六町ばかりなり、離れたるて島彼續と早鞆と[illegible]關ひたる、關方の山の岸、離れ續たる路なるを見るに、上代には島島長門と豊前とつゞきたる[illegible]山にて、其下に潮ありて、東西細り、潮急ふ瀧ありて、絶も往來ひつらむ[illegible]に、穴戸とは云なるべし、神[illegible]天皇紀に、關[illegible]とあるも島なり、(中略)と云り、宣長陸に島等[illegible]の記せる瀬戸と、大かた假たり、關[illegible]と云は久枝は久具[illegible]にて、山下の關なくゞりて、舟の往來し故の名なるべし、○下略

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

長門萩(濱崎町) 極高三十四度二十五分、經度西四度二十分、從東京(京橋)上(東海道、山陽道)自名古屋、廣島、山口、 二百七十二里一十町一十五間、

同赤間關(南部町) 極高三十三度五十七分半、經西四度四十七分、從東京上(同上) 二百八十里八町〇八間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

長門　赤間關　三四度五七分三〇秒　萩　三四度二五分〇〇秒
　　向津具村　三四度二四分〇〇秒　奈古村　三四度三〇分〇〇秒(〇中略)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(〇中略)　長門　萩　西四度一八分〇〇秒

兵器　　名稱

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國健兒 中略〇 周防國五十人 中略〇

諸國器仗 中略〇 周防國 甲二領、横刀五口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

長門國

長門國ハ、ナガトノクニト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ周防、石見、南ハ周防及ビ海ニ接シ、西北ハ海ニ面ス、東西凡ソ十九里餘、南北凡ソ十三里餘、此國ハ古ヘ國府ヲ豐浦郡ニ置キ、厚狹(アツサ)、豐浦(トヨラ)、美禰(ミネ)、大津(オホツ)、阿武(アム)ノ五郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、後世厚狹郡ヲ割キテ厚東吉田ノ二郡ヲ置キ、豐浦郡ヲ分チテ豐東、豐西、豐田ノ三郡ト爲シ、新ニ見島郡ヲ建テシガ、後更ニ厚東吉田ノ二郡ヲ厚狹郡ニ併セ、豐東、豐西、豐田ノ三郡ヲ廢シテ豐浦郡ヲ復セリ、明治維新ノ後、見島郡ヲ阿武郡ニ合セ、新ニ下關市ヲ設ケ、山口縣ヲシテ一市五郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕長門 奈加度

〔運歩色葉集 郡〕長門 長州

〔日本風土記 一 國郡島名〕長門 奴嘉乞

〔日本書紀 八 仲哀〕二年三月、是時熊襲叛之不朝貢、天皇於是將討熊襲國、則自德勒津發之、浮海而幸穴門、九月、興宮室于穴門而居之、是謂穴門豐浦宮、

〔古事記傳 二十七〕穴戸は長門國と豐前國との間の海門にて、筑前國の北面の海より山陰道の南面の海に入る門なり、穴門とも名に負たるゆゑは、源貞世 今川了俊と云し人 が道ゆきぶりと云物に云く、霜月の廿九日、長門の國府を出て、赤馬の關に移り著ぬ、ひの山とかやいふ嶺の荒磯を傳ひて、はやともの浦にゆくほどに、向ひの山は、豐前國門司の關の上の峯なりけり、海の面は八町とか

名所

タル風俗也、能キ人出來ル事希ニシテ惡事モスクナク善事モ亦希ナリ、然ドモ是國之人ハ氣少キ故、ワレナクシテ不敵ナル意地ハ少モコレナシ、

〔日本鹿子十二〕周防國〇周防中名所之部

室積　竈戸　むろせき海邊也、普賢井の堂あり、無雙の景地也、傍に竈戸をはらみの關と云、〇中略

岩國山　安藝國いつくしまより、海上五里ばかり西に、小方といふ宿より、小山ひとつ越て、をせ川と云西より、當國のうち也、をせ川より南へ大山あり、これを岩國山と云、海邊もいわくにのうち也、〇中略

祝島　大島　可良浦　靜間浦

〔西遊雜記二〕廿三日、室積を一見せんとて左邊へいり宿なくして大ひに屈し、神田村といふ所のはにふの軒に夜をあかしぬ、廿四日、室積にいたる、此浦はいたつて古き所にて、書寫上人の事跡、世にいふ普賢菩薩遊君に化して、書寫上人に對面せしと云地にして、今に大黑屋惠比須屋といふ倡家殘りて、書寫上人の時代より續きし家なりと、土人のいひ傳ふ事なり、風景能浦にて、江の浦といふ處に、元信古法眼の事也筆捨松と稱す名木も有り、〇下略

〔一宮巡詣記下〕石見國一宮安濃郡物部神社圖

十七日朝〇元祿九年十一月岩國今津町へ上り、是より城下迄一里ほどあり、錦見町と横山町の間岩國川、そり橋五ツ珍敷橋也、

〔西遊雜記一〕廿日、岩國にいたる、世に名高き錦帶橋十露盤橋といふ也と一見せしに、よくエみしもの也、〇中略岩國山は周防の名所にて、昔は大山楓の樹ばかりにして、紅葉貴にして錦の如し、このゆへを以て岩國川を錦川とも稱し、錦見の里、錦帶橋、岩國山の紅葉より名付しもの也、しかるに今は名のみにて、山を開きて畑となし、楓木一樹もなし、おしむべき事ながら、花より團子なるべし、

人四升五合、呉茱萸四升、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂○中略周防鯖、

〔易林本節用集下〕周防、周州上、管六郡、東西三日、草賣鱗甲之類多、土產十倍他國、以鯖施名也、中上國也、

〔毛吹草三〕周防

山代半紙　椙原　鳥子　漆　蒐蘿玉　鹿皮　鮎　山口結鹿子　紫染　蒟蒻　小荷駄荷鞍大諸名衆僧ノ爲ニ求レ之

香積寺三重鐶　湯田二月箏

人口

〔續日本紀文武一〕二年九月壬午、周芳國獻銅鑛、

〔官中秘策五〕周防國　六郡○中略

一人數貳拾八万九千三百九拾貳人　内拾五万貳千六百六拾人男　拾三万六千七百三拾貳人女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年○中略

皆私領

一人數三拾五万八千七百六拾壹人　高貳拾万貳千七百八拾七石餘　周防國

弘化三丙午年諸國人數調○中略

内拾五〔五拾八脫〕万八千五百七拾三人男　拾七万百八拾八人女○中略

皆私領

一人數四拾三万五千百八拾八人　高四拾八万九千四百貳拾八石餘　周防國

内貳拾貳万七千三百人男　貳拾万七千八百八拾八人女

風俗

〔人國記〕周防國

周防國之風俗ハ、律儀第一ナレドモ、吉敷佐波都野三郡之者ハ、義理少ク、昨日マデ傍輩ト肩ヲ雙ブル人ヲモ、今日仕合ヨケレバ、主君ト仰グ風俗ニテ、常之律儀モ利慾之爲ニ無ニナリ、法ヲ背ク人、百人ニ七八十、如レ此殘而二三十人ノ人柄ハ、如レ形嗜ム樣ナレドモ、終ニハ右ノ人ニ從フ故ニ、皆其風俗ト成ベシ、大島玖珂熊毛三郡之人ハ、兩郡ノ人ヨリ少ハマシ也、然ドモ是モ墮落ノ方ニ付

百九拾壹石壹升四合　吉敷郡〈貳拾箇村〉高三万八千六百三拾五石三斗四升六合

〔日本鹿子十二〕周防國、六郡、中上國、京西三日〈略〇中〉知行高十六万四千四百二十石

〔官中秘策五〕周防國　六郡〈略〇中〉

一石高貳拾万貳千七百八拾壹石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高國〈略〇中〉

周防國〈管郡六〉一高四拾八万九千四百貳拾八石六斗七升七合

出擧稻

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻〈略〇中〉

周防國正稅公廨各廿一万束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、鑄錢司俸料二万八千束、修理池溝料一万束、救急料八万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕周防國〈略〇註〉管六〈(中略)正公各二十一万束、本稻五十六万束、雜稻十四万束、〉

〔延喜式內藏十五〕諸國年料供進〈略〇中〉榧子〈(中略)周防(中略)土佐廿六箇國各四合〉

調庸貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料別貢雜物〈略〇中〉周防國〈鐵鍬鐵二百斤〇中略〉

諸國貢蘇番次〈略〇中〉周防國六壺〈壺小一升〇中略〉右十四箇國爲第六番〈子午年〇中略〉

交易雜物〈略〇中〉周防國〈鹿革[illegible]張、席三百五十枚、苫廿五枚、榧子四合、〉

〔延喜式主計二十四〕周防國

調、短席六百卅枚、自餘鍬、綿鐵　庸、鍬、綿、米、　中男作物、紙、茜、黄蘗皮、海石榴油、胡麻油、煮鹽年魚、鯖、比志古鰯、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〈略〇中〉

周防國十九種　獨活八斤、牛膝七斤、白朮一斤四兩、薑、石斛、升麻各五斤、苦參十斤、茵蔯四兩、細辛一斤八兩、巴戟天、伏苓各一斤、夜干卅斤八兩、防己六斤、滑石廿斤、榧子五升、薯蕷八斗、麥門冬七升、桃

藩封

田數石高

建長二年十一月　日　　愚老在御判

〔和簡禮經五〕一打渡之狀事(中略)
周防國與田保。。。武者六郎入道跡地頭職爲料所被預置、曾我左衞門尉師助由事、任去貞和三年十二月二日
御敎書之旨、並被所沙汰付下地於師助代候訖、仍所打渡之狀如件、
貞和四年三月晦日　　左衞門尉定盛判

〔慶應元年武鑑〕毛利淡路守廣篤　四万拾石　居城周防都濃郡德山
當所毛利日向守就隆、以後代々領之、

〔倭名類聚抄五國郡〕周防國(略)○註管六、田七千八百三十四町三段二百六十九歩

〔伊呂波字類抄國郡〕周防國管六(中略)本田七千六百五十八丁、下上七十九町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕周防上遠六郡(中略)田七萬(萬恐千)六百五十七町

〔海東諸國記〕周防州　産荷葉綠、有溫井、郡六、水田七千二百五十七町九段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十六万七千八百二十石　周防

〔寬文印知集三〕周防國貳拾万貳千七百八拾七石餘(中略)事、任元和三年九月五日、寬永十一年八月
四日兩先判之旨、宛行之訖、全可領知之狀如件、
寬文四年四月五日御判　　筆者森新兵衞
長門侍從どのへ

目錄
周防國一圓　玖珂郡三拾六箇村高五万三千五百三拾貳石七斗八升壹合　大島郡貳拾七箇村
高壹万三千百九拾石六斗壹升五合　熊毛郡貳拾六箇村高三万五千七百拾八石九斗三升壹
合　都濃郡貳拾五箇村高三万四千九百拾三石九斗八升三合　佐波郡拾八箇村高貳万六千七

周防國賀川別庄〈○中略〉

嘉元四年〈○後二條〉六月十二日

〔東寺百合古文書〈五〉〕最勝光院　注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散状事〈○中略〉

一周防國　美和庄

本年貢米五十石綾比物〈綿七月御八講一重、同月〉〈○中略〉

領主佛師　法印

正中二年三月日

公文左衞門少尉大江〈在判〉

〔宮寺緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓状、或稱相傳文書、致異論、企妨領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〈○中略〉

周防國　石田保〈○中略〉

保元三年十二月三日

大史小槻宿禰〈在判〉〈○下略〉

〔毛利文書〈一〉〕將軍家政所下　周防國安田保住人補任下司職事、

藤原爲資

右人補任彼職之状、所仰如件、住人宜承知勿違失、以下、

建久四年四月十六日〈○署名略〉

〔古文書類纂〈上處分状〉〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分状

總處分　條々事〈○中略〉

寺領〈○中略〉　周防國得地上保〈○有德地山〉〈○中略〉

一家地文書庄園事〈○中略〉　家領〈○中略〉　周防國屋代庄〈○中略〉

文治二年九月五日

〔吾妻鏡八〕文治四年十二月十二日癸酉、因幡前司廣元使者、自京都到來、略○中 次廣元知行、周防國島末庄事、女房三條局、捧折紙所望之間、爲帥中納言之奉行、被尋知行由緒之間、注子細進狀、早定直被仰下歟、爲被知食廣元言上之樣、進彼狀案文之由云々、

周防國島末庄地主職事

右件庄者、彼國大島之最中也、大島者平氏謀反之時、新中納言構城、居住及旬月之間、島人皆以同意、自爾以降、爲二品哀御下知件島被置地主職之許也、毎事守庄務之例、更無新儀之妨、被尋捜之處、定無其隱歟、但於別御定者、不及左右候、早隨重仰可進退候、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十八日丁卯、御家人内藤六盛家、去年春以後、令亂入于周防國遠石庄內石清水別宮領、刃傷神人友國、抑留神税、略○下

〔東寺百合古文書百四十二〕七條院　在御判

修明門院御處分御所庄々等

周防國　東荷庄略○中

安貞二年八月五日

〔東寺百合古文書三十〕院宣案

周防國秋穗二島庄所被宛置長日愛染王護摩并六月八日前宜陽門院御忌日菩提院結縁灌頂用途也、略○中

文永二年七月九日　權大納言在判

菩提院法印御房

〔後宇多院御領目錄〕一安樂壽院領略○中

〔中國治亂記〕豐後ヨリハ橫爪美濃守吉弘、右衞門大夫御供トシテ、天文廿一年三月朔日、三田尻ニ御著、○下略

〔長門金匱〕一御城地之儀、防州三田尻にて桑山を要害に被仰付、御城可被仰付やとの御事に候處、桑山は山上水不自由に付、三田尻の御繩は止申の由、○下略

〔西遊雜記〕二三田尻に至る、此浦は長州侯の御下館ありて、市中も繁昌の所也、近年いかゞの事にや、御館造りの御普請ありて、其結構いはんかたなし、土人のいひしには、國主の御隱居館といふ、此地より萩の城下まで十七里といふ、

〔南留別志〕五一周防國に畜生谷といふ里あり、母子兄弟の間にて婚姻をなすといふ、平家の餘類なるべし、敵をさけて、人の通はぬ所に隱れ居て、子孫を長じたらんは、おのづからに一族の外に婚姻すべき族なかるべければ、里のならはしとなりしなるべし、

〔東大寺要錄〕六一諸國諸庄田地○長德四年注文定

新勅田略○中

周防國　吉敷郡椹野庄田九十一町六段六十九步

〔賀茂注進雜記〕下神領同○壽永三年○元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國、可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、略○中

周防國　伊保庄　矢島　柱島　竈戶關　略○中

壽永三年四月廿四日　　正四位下源朝臣御判

〔賀茂別雷神社文書〕下　周防國伊保庄竈戶關　矢島柱島等住人

可早停止土肥實平妨、並土人大野七郎違正不當、從領家進止事、略○中

なり、海魚はいふに及ばず、鯉鮒鮎たくさんの所なり、昔時は此地に楮のなかりし所なりしに、吉川家の士何某といふ人、地の利をさぐり、百姓に楮の木を植させ紙をすく事をならわしむ、是よりして此邊の民家富饒となりし事也、〇中略岩國の地川を界、東西山つらなり、海近く、要害もつともよし、〇中略岩國より西國海道へいづる道すじ、宇治の里といふ所あり、茶を以て名産とす、城州宇治の茶も此所よりなるべし、地名も同名にて茶を名産とするゆへあるべし、

〔和漢三才圖會〕七十九周防上關カミノセキ本名二竈戸一、在二大島郡一島也、至二下關一海上三十五里、至二安藝蒲苅一海上二十里、

〔海東諸國記〕周防州〇中略

義就　丁亥年〇應仁元年遣使來賀觀音現像、書稱周防州上關太守鎌苅源義就、

正吉　戊子年〇應仁二年遣使來賀觀音現像、書稱周防州上關守屋野藤原朝臣正吉、

〔九州道の記〕十一日、〇天正十五年七月晩田ゑまを出で、其日は上の關と云所に船をかけて、明行空をもまたで、塑にひかれて船出をもよほし行に、〇下略

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕十三日、〇康應元年三月この國〇周防の國府の南たかはまといふ浦はたのみたじりといふ松原に御旅所をたてたり、此松原はいそのかみ嚴島の明神こゝにあまくだりまして、今のいつくしまにはうつらせ給ければ、げにぞ神さびたるや、鍬をしけるやうなるいさご、西東のすさきの中を入江のやうに二すぢばかりしほさし入て、浦松のいたくこだか〻らで、枝ざし老かがまりて、木だちこくろへるやうなるむら〳〵おひて、其中にちいさき社のふりたるぞおはします、〇下略

〔陰德太平記〕一將軍赴西國給事

多々良ノ浦ニ漕入レバ、名モムツマシキ都濃ニ著給テ、〇中略頓テ所ノ者ヲ召レ、爰ハイヅクトカ云ト尋サセ給ヘバ、サン候俗傳ニハ三田尻ト申候、物府ノ浦ト申モ一說ニハ此地ヲ申候、〇下略

頃年諸國兵革繁キ中ニ、殊更今年ハ防州山口ニ於テ大動亂有リ、〇中略多年ノ兵亂ニ京都ノ住居ナラザリケル公家ノ面々數輩、山口ノ城下ニ蓄來テ身ヲ寄セ居住ノ人多シ、其比山口ノ繁昌、昔ノ京都鎌倉ニ不劣富饒也、

〔中國治亂記〕御子義隆ノ御時、〇中略京都亂ニテ帝位モヲダヤカナラズトテ、周防ノ山口、内裏ヲ建立シ、天子モ此方ヘ移幸ルベキ由、大内殿クワコウアリケレバ、二條殿轉法輪三條殿持明院中納言殿、其外ノ公家衆、皆山口ヘ下向アリ、花洛ト申トモ爭カ愛ニマサルベキ、

〔安西軍策二〕義隆卿山口沒落事附於大寧寺自害事

義隆卿大ニ驚、山口中ノ軍兵ヲ催セトテ、六千餘騎ヲ集ケル、如案杉内藤ハ陶ニ一味シ不馳來、黒川岡邊ナド云ケルハ、〇中略築山ニ籠居テハ適マジ、一先當ノ法泉寺ヘ義隆卿ヲ退申、敵ヲ引受合戰致ナント云ケレバ、〇下略

〔和漢三才圖會七十九周防〕徳山。至江戸陸二百五十一里、至大坂海上百五十五里、到府一本宮市、自此宮至水上四里、富子至山口四里、至長門萩十八里、至安藝廣島二十七里、

〔西遊雜記二〕徳山は毛利侯御知行三萬石御在所にて、市中もあしからず、人物言語大坂にて儲品とはしからず、

〔中國治亂記〕陶尾張守入道ハ安藝ノ境周防ノ岩國ト申處ニ在陣アリ、

〔安西軍策一〕尼子晴久敗北事

去程ニ尼子方ヨリ周防ノ物聞ニ作リ山伏共ヲ置ケルガ、其夜陣所ヘ立歸リ、大内義隆數萬ノ軍兵ヲ率シ、防府ニ著陣シ、青景、弘中、右田、岡田ノ者共、已ニ防州岩國マデ襲來候トゾ申イ〇下略

〔西遊雜記一〕岩國は吉川の城地にして、むかしは山にありて要害もよき城なりしよし、今は麓に僅なるかきあげ城なり、分内せまきゆへに諸家中川の東にあり、〇中略産物半紙と稱せる紙上品

〔大内義隆記〕誠ニ由來ヲ申セバ、百濟國ノ王子琳聖太子ト申セシガ、日本周防國多々良ノ濱ヘ定居二年ニ來迎シ、大内ニ住居シ玉ヒ、○下略

〔中國治亂記〕抑大内介ト申ハ、其先祖ハ百濟國爾利久牟王ノ御子、琳聖太子、本朝欽明天皇ノ御時日本ニ渡リ、多々良濱ニ居住アリ、種々ノ珍寶ヲ奉獻ケレバ、則チ多々良ノ姓ヲ賜リ、多々良濱ヨリ富田ノ奥ノ大内畑ト申ス所ニ移リ、乘福寺ト云處ニ居住アル、今モ大内ト號ジ、舊跡アリ、

〔陰德太平記十九〕山口興廢之事

抑此山口ト申ハ、琳聖太子已來既ニ二十九代星霜一千餘載ニ及ヌ、○中略民俗讓長ケル故、四方ノ商賈ハ願藏於其市、天下ノ旅客ハ願出於其路、村民肥テ貢物闕如無レバ、廩庾畜七年糧、錢緡累鉅萬タリ、○中略代々ノ築山ノ館ニ増飾崇麗、○中略弘世○大内愛ノアマリニ、サラバ都ヲ此地ニ遷スベシ、○中略其外洛中洛外所有寺社一字モ不殘移サレタリ、田舍ハ人ノ心頑ニ詞ダミテ聞惡シ、京人ニ交ヘナバ、麻ノ中ノ蓬ノ曲ル心モ直ク、訛聲モ聞ヨクゾ成ンズラントテ、町一町ニ京童六人宛喚下シテ置レ、諸藝ノ堪能諸職ノ名人、縫物、組物、織染、彫刻ノ類迄、其家々ヲ呼下サル、又小路小路モ石交ラネバ車ヌカリテ難通トテ、山口五里四方ニハ深サ五尺許ニ小石ヲ埋レタリ、家々門前ノ柳、道ノ邊リ園生ニ咲ル千本萬種ノ櫻花、錦繡ノ色深ク、織自何絲、唯暮雨、栽無定樣、任春風、○下略

〔海東諸國記〕大内殿

多々良氏、世居州大内縣山口、俗訓也麻仇知管周防長門豐前筑前四州之地、兵最强、

〔日本風土記一〕寄語島名山口即周防、羊馬富諸

〔應仁後記下〕大内介義興歸國事

抑此大内介ハ防州吉敷郡山口ノ城主トシテ、累代ノ大名也、

〔續應仁後記六〕防州山口亂事

佐波郡　牟禮　多良（○多、高山本作遠、）佐波　日置（比於木）　玉祖（多万乃於也）　餘戶　神戶　勝間（加都万）

吉敷郡　八田　宇努　仲河　益必（比止介）　神前　多寶　八千　賀寶　淨因（○淨、伴作淨）　廣伴

〔郡名一覽〕（竹苞樓）一周防國（防州　東西三日）　六郡

高貳拾万貳千七百八拾七石六斗七升　百七拾八ケ村

○德山　二百五十三里　（●岩國）（長州六万石）二百四十一里　吉川監物

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕周防　六郡、百五十二村、

（竹苞樓）高四十八万九千四百二十八石六斗七升七合

大島郡二十七村　都濃郡二十五村　佐波郡十八村　玖珂郡三十六村

吉敷郡二十村　熊毛郡二十六村

〔地勢提要〕（神）郡邑島嶼奇名

周防　佐波郡、富海村、吉敷郡、秋穗本郷村、都濃郡、金峯村、大島郡、八代（ヤシロ）島、沖家室（オキカムロ）島、平郡島、情娑島、熊毛郡、大水無瀨島、

〔東寺百合古文書〕（九十七）在判

下周防國美和庄□方

石口村吉行有近□遠阿鑄田島等事（○中略）

右於被田島等者、所宛行也、（○中略）

康安六年八月十日

〔周防國一宮領打渡坪付〕防州佐波郡大崎村內一宮領（打渡坪付）事（○中略）

天正拾七年六月八日（○署名略）

佐波郡

同(推古)十七年己巳、周防國都濃郡鷲頭庄青柳ノ浦ノ松ノ梢ニ大星降テ七晝夜放光、(○下略)

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平正稅帳

佐波郡

天平五年定正稅穀簸振量定貳萬壹仟漆伯捌拾參斛壹斗貳升(○下略)

吉敷郡

〔續日本紀十聖武〕天平二年三月丁酉、周防國熊毛(○熊毛原作能野、據一本改、)郡牛島西汀、吉敷郡達理山所出銅、試加冶練、並堪爲用、(○下略)

〔應仁後記下〕大内介義興歸國事

或時大内家ノ老臣鷲津刑部少輔弘爲ト云フ者、謀叛ヲ企テ彼家ヲ傾ケルニ、盛見(○大内)郎兵ヲ起シ、合戰數度ニ及テ、終ニ防州吉敷郡淺倉ト云所ニ於テ弘爲ヲ討捕、

周防郡

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年六月辛酉、周防國周防郡人外從五位上周防凡直葦原之賤男公、自稱他戸皇子、誑惑百姓、配伊豆國、

〔大内義隆記〕石田(○左馬助)ノ家ト申セシハ、陶總領ノユカリナレバ、上座ヲセントノタクミニヤ、太守ニヨリ〳〵讒訴シ、尾州ノ知行領地德地三千貫、小周防百町ノ事、昔ハ南都東大寺領ナリケレバ、還補サセラレ候ヘト武任(○相良)頻ニ申ケリ、

〔大日本史國郡周防二十六〕熊毛郡(○中略)周防(今小周防村、在郡西北、按寶龜十年紀、有周防郡人周防凡直葦原、周防郡諸書無所見、疑古有周防郡、後廢爲郷耶、附以備考、)

郷

〔倭名類聚抄八周防國〕大島郡 屋代 美敷 務理

玖珂郡 玖珂 柞原 餘戸 野口 多仁 由宇 大野 伊賓 驛家 石國

熊毛郡 周防 熊毛(久萬介) 多仁 美和 全戸 驛家 波濃(○濃、高山寺本作瀨、)

都濃郡 久米 都濃 富田(止多) 生屋 驛家 平野 驛家

熊毛	玖珂	大島	
熊毛	玖珂		
熊毛	玖珂	大島	書大
同	同	同	同
同	玖珂	同	大寫
同	玖珂	同	
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同
同	同	同	同

大島郡

〔東大寺正倉院文書 三十五〕周防國正稅帳

大島郡

天平九年定正稅壹拾萬玖仟肆伯肆拾玖束伍把伍分略○下

玖珂郡 熊毛郡

〔續日本紀 八 元正〕養老五年四月丙申、分周防國熊毛郡、置玖珂郡、

〔續日本紀 十 聖武〕天平二年三月丁酉、周防國熊毛郡○熊毛原作毛野、一本作熊毛、今從之牛島西汀、吉敷郡達理山所出銅、試加冶練、並堪爲用、便令當國採冶、以充長門鑄錢、

都濃郡

〔吾妻鏡 七〕文治三年四月廿三日甲午

周防國在廳官人等　言上二箇條

一爲得善末武地頭筑前太郎家重令濫行事、乃一郡打開官庫、押取所納米、狩獵爲宗、惱害公民、擬滅郡任、自由押妨農事、略○中

文治三年二月日　　散位賀陽宿禰弘方略○下

〔陰德太平記 六〕大内先祖之事

佐波、吉敷、與之

〔延喜式二十二民部上〕周防國上管　大島(オホシマ)　玖珂(クカ)　熊毛(クマケ)　都濃(ツノ)　佐波(サハ)　吉敷(ヨシキ)○中略　右爲遠國

〔皇國郡名志〕周防國六郡

大島(オホシマ)　●大島　一郡ノ島也

熊毛(クマケ)　●室津　●室積　南海郡

玖珂(クカ)　●廣セ　岩國　●高守　●錦メイ綱　〈吹河木郡　●柱野　●小瀬　東海郡

都濃(ツノ)　●夜市　都山　●富田　●今市　〈下松　〈奥大町　●花園　●峰市　國中

佐波(サハ)　●宮市　●富海　〈仁保　國中

吉敷(ヨシキ)　〈山口　●小郡　●小殿　●宮市　●大海　長界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕周防

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革續	地誌提要	郡區編制
	吉敷(ヨシキ)	同	同	同	同(ヨシキ)	同	同	同(ヨシキ)	同
沙麼紀　沙陛紀　娑婆紀	佐波(サハ)	同	同	同	同(サハ)	同	同	同(サハ)	同
角紀　都濃古　都怒異	都濃(ツノ)	同	同	同	同(ツノ)	同	同	同(ツノ)	同

國府

郡

子敬應ヲ德山ニ分封ス、文久二年、毛利敬親〈初慶親〉徒テ山口ニ治ス、王政革新、山口ノ附庸岩國〈古川氏〉〈經幹〉ヲ藩屏ニ列ス、尋テ敬親封土ヲ奉還シ、山口岩國二縣トナス、又岩國ヲ山口縣ニ合併ス、

〔先代舊事本紀〈國造十〉〕大島國造
志賀高穴穗朝〈御世〉、〇〈成務〉以二无邪志國造同祖兒多毛比命兒穴倭古命一定二賜國造一、

波久岐國造
瑞籬朝〈御世〉、〇〈崇神〉以二阿岐國造同祖金波佐彥孫豐玉根命一定二賜國造一、

周防國造
輕島豐明朝〈御世〉、茨城國造同祖加米乃意美定二賜國造一、

都怒國造
難波高津朝〈御世〉、〇〈仁德〉以二紀臣同祖都怒足尼兒田鳥足尼一定二賜國造一、
〇按ズルニ、度會延佳ノ說ニ、波久岐可レ作二與之岐一、疑今周防國吉敷郡〈與〉之ト云ヘリ、

〔續日本紀〈三文武〉〕慶雲三年七月己巳、周防國守從七位下引田朝臣秋庭等、獻二白鹿一、

〔諸家系圖纂〈二十六大內〉〕盛房〈周防權介〉―弘盛〈周防權介〉滿盛〈爲大內介、永年中、始〉―弘成〈周防權介〉
―弘貞〈周防權介、住吉宮神主〉―弘家〈矢田太郎、號二大內宮注〉―重弘〈周防權介、貞定入道〉―弘幸〈周防權介〉
―弘世〈周防權介、從五位上、周防長門石見守護〉―義弘〈孫太郎、周防權介、左京權大夫〉

〔倭名類聚抄〈五國郡〉〕周防國〈國府在二佐波郡一、行程上十九日、下十日、〉

〔伊呂波字類抄〈國郡〉〕周防國〈略〇中〉佐波〈府〉

〔道ゆきぶり〕廿四日〈月〇入〉周防の國府につき侍、〈略〇中〉此坂〈坂〇略〉越過て雨のふもとに入海有、〈略〇中〉北のいそぎはに人の家ゐありて、爰を國府と申也、

〔倭名類聚抄〈五國郡〉〕周防國〈略〇注〉管六〈略〇注〉大島〈於保之末〉玖珂〈久加〉熊毛〈久末計〉都濃

郡大海村赤崎（至秋穂本郷村鹽濱、二十六町八間）　一里五町五十九間半（至秋穂本郷村鹽濱、卅四町五十七間半）　秋穂本郷村青江（至秋穂本郷村、一十六町四十三間）　三里一十三町三十七間（至赤石崎、一里一十四間半）　秋穂本郷村、三十四度三十秒、　二里二十四町一十五間（至秋穂二島村、一十八町二十七間）　秋穂二島村長濱　二里一十八町四十二間　同小郡川口　二里一十町　阿知須村ト口石川口　二里六町三十三間　岐波村（至三神社島礁七町四十三間）　三里二十四町五十二間（至國界小黒崎、二里一十五町四間）　長門國厚狹郡宇部鄉村

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬○中略

周防國驛馬（石國、野口、周防、生屋、平野、勝間、八千、賀寶、各廿疋、）

〔日本國郡沿革考山陽道三〕周防　古作周芳、（天武紀）上國、管六郡、百五十二村、

大島（二十七村　古大島國、見國造紀、）　都濃（二十五村　古紀角國、見雄略紀、國造紀、作都怒、）　佐波（十八村　古國府、景行紀作沙波、推古紀作娑麼、）　玖河（十三六村　延喜式作玖河、和名抄作玖珂、又作玖賀、養老五年四月、分熊毛郡置、）　吉敷（ヨシキ　二十村）　熊毛（二十六村）

熊野（見續紀、廢置未詳、）

〔日本地誌提要五十七周防〕沿革　古ヘ國府ヲ佐波郡ニ置、（今東佐波令國衙村）壽永ノ初、源頼朝ノ平氏ヲ伐ツ、州ノ望族大内滿盛、功有ルヲ以テ周防權介ニ任ジ、子孫職ヲ襲ギ、山口ニ治ス、北條氏ノ末、六世ノ孫弘幸、守護トナリ、建武中、足利尊氏ニ屬ス、正平中、子弘世歸順シ、終ニ長門ヲ略取ス、後叛テ足利義詮ニ降ル、子義弘功ヲ積テ六州（周防、長門、石見、豐前、和泉、紀伊、）ノ守護トナリ、應永中、謀反シテ誅セラル、將軍義滿其舊勳ヲ思ヒ、義弘ノ子持世ヲ本州及長門豐前ノ守護トナシ、三世ニ傳ヘ、義興ニ至リ、永正中、將軍義稙ヲ輔テ京ニ入リ管領ニ補シ、石見安藝筑前ヲ兼領シ、子義隆ニ至テ、餘烈未ダ衰ヘズ、遂ニ備後ヲ取リ、七州ヲ領ス、天文二十年、家臣陶隆房、義隆ヲ弑シ、大友義鎭ノ子義長ヲ迎ヘ、陽尊シテ主トナシ、其故封ヲ擁有ス、弘治元年、毛利元就來リ討ジ、隆房誅ニ伏シ、義長自殺シ、其地悉ク毛利氏ニ歸ス、關原役後、孫輝元、譴ヲ受テ六州ヲ削ラレ、本州及長門ヲ領シ、後次

間半　佐波郡富海村、三十四度三分半、　二里二町三十六間半（至宮市天神社前二里一町二十二間、）　東佐波令、宮市町、三十四度三分半、　五町三十間　西佐波令　四里二十六町二十五間（至小俣村臺道二里六丁四十二間）　吉敷郡小郡村小郡驛、三十四度六分、　三里一十四町二間（至國界二里三十三町五十二間）　長門國厚狹郡山中村下山中（中略）

從安藝國宮内歷津田至津和野

周防國玖珂郡大原村　三里一十六町二十四間（至國界星坂峠一里一丁五十七間）　石見國鹿足郡六日市村（中略）

從安藝國津田歷山代至七房（中略）

周防國玖珂郡秋懸村亀尾川、三十四度二十分半、　二里五町九間　本郷村本郷市（又呼山代本郷）　二里三十四町一十八間（至府谷村西村一里二十丁五十一間）　廣瀬村　二里一十四町三十六間　都濃郡須万村（至宮原市三丁三十間、北極高三十四度一十一分半、）　一里二十七町三十六間　金峯村郷、三十四度一十一分半、　二里一十三町三十間　鹿野上村鹿野市　六町二十四間　鹿野上村、三十四度一十三分半、　二里一十二町五十四間　大潮村　三里四町五十九間　佐波郡柚木村　六町二十一間　同鬼ヶ平（至國界二十五丁四十八間、從國界至長門國阿武郡地福村懸ノ一里二丁二十五間、）　一里三十町三十二間　野谷村　一里一十四町　船路村前原（至御坂神社四丁九間、）　一里三十四町四十五間　引谷村立岩（歷湯尾峠至堀村庄方一里一十丁一十五間半、）　一里二十七町三十三間、（至石坂峠二十五丁四十五間）　吉敷郡仁保村仁保市　一里三十間　宮野村七房（從津田至七房）街道、通計二十七里三十三町四十四間、

從周防國鹿野歷下右田至山口

周防國都濃郡鹿野上村鹿野市　一里一十二町五十一間　佐波郡　巣山村仁保津　一里二十九町五十四間　串鈍河内村（又呼串）　三十四度一十一分、　一里三十町一十二間　堀村伏野　二十七町四十二間　堀村庄方　二十町五十一間　伊賀地村西大津、三十四度九分半、　一里一十二

道路

島、周廻六町三十八間、横島、周廻四町二十六間、當島、周廻八町五十九間、大津島、周廻四里六町四十七間、五ッ島、周廻五町一十三間、馬島周廻一里六町五十間、洲島、又呼小洲島、周廻一十三町一十二間、遠測　梅カナチ　上カウツ瀬　下カウツ瀬　白石　沖筏　ツクチ岩　沖磯瀬

佐波郡　實測　平島、周廻一十一町、沖島、周廻一十町一十間、野島、周廻一里八町二十六間、向島、周廻三里二十一町五間、鯖島、周廻六町四十四間、遠測　ホコ岩　長スナ島　雀島　ウチ石

吉敷郡　實測　竹島、周廻一十町二十間、遠測　蛤ケ瀬　平目瀬　立石　臼石　小島　鍋瀬

戸石島　鍋島

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕十九日、○康應元年三月かまどの關より周防國やしろの島、よこみ、いつゐ、おきふ、なこしなどいふ浦々島々とをらせ給、

〔道ゆきぶり〕此坂○中略過て西のふもとに入海有、東西に山さしめぐりて、其前に島あり、西ひんがしのゐはひに、二のわたり有て、舟ども是を出入なめり、猶おきのかたにあたりて、木まげりたる小島ども七八ばかりならびてみゆ、

〔日本實測録四街道〕從攝津國西宮中國街道至赤間關○中略

周防國玖珂郡關戸村、三十四度一十一分、一町五間　關戸村追分（至岩國錦帶橋東詰二十三丁二十四間、從錦帶橋東詰至岩國驛二十五間、）四里七町五十六間半　玖珂村玖珂驛　二十五町二十一間　楊森村高森驛　二里三町三十九間　熊毛郡樋口村今市驛　一十六町二十九間　呼坂村呼坂驛　一里二十三町四十四間　都濃郡河内村久保市　三十一町二十五間　末武村花岡驛　二十四町五十間　久米村久米市　一里五町一十間（至德山村遠石二十丁五十間）　德山本町、三十四度三分、（至德山驛三十三丁一十間）　一里一十二町一十三間　富田村新町　二十七町四十五間（至福川村福川驛二十九丁二十一間）　福川村　二里二十一町五十五

間、情島、周廻一里二十二町五十二間、諸島、周廻一十九町四間、片山島、周廻一里七町六間、篠島、周廻一十二町一十八間、大水無瀬島、周廻一里一十二間、小水無瀬島、周廻一十七町二十四間、沖家室（ヲキカムロ）島、周廻一里一十四町三十九間、立島、周廻一十八町三十七間、カケズ島、周廻二十九町三十二間、平郡（ヘグリ）島周廻七里一十九町五十三間、三島、（從北岬至西岬）六町、上荷内（カミニナイ）島、（又呼水津島）周廻一十三町三十七間、下荷内島、（又呼宜崎）周廻二十町五十一間、笠佐島、周廻三十四町四十八間、野島、周廻五町三十八間、屋島、周廻四里二町三十七間、横島、周廻三十四町一十五間、鍋島、（上關島）周廻四町四十一間、小山島、周廻三町三十五間、佐郷島、周廻一里一十三町四十間、馬島、周廻一里二十五町三十五間、牛島、周廻二里二十一町四十六間、尾島、周廻一十七町三十九間、鼻栗島、周廻一十二町一十三間、天田島、周廻二里三町五十六間、宇和島、周廻二十一町五十五間、岩見島、（又呼祝島）周廻三里七町四十五間、小島、（岩見島）周廻四町四間、小岩見島、周廻二十七町一十六間、遠渕　大礒　カウツ瀬　幣振島　幣振小島　小白礒　生島　裸島　九石碆　カンセウ島　長ツカ島　ハゲ島　四子島　白髮石　沖礒碆　大タソ碆　辨天島　雀礒　ホウシ岩　黒岩　ハントウ岩　雜石　カナ瀬　叶島　高須　中岩　ホウシロ島

熊毛郡　實測　スロ島、（又呼鳥島）周廻六町二十四間、阿多田島、周廻一十二町一十四間、大水無瀬島、周廻一十九町三十一間、小水無瀬島、周廻四町二十二間、遠渕　辨天島　阿多田小島　龍神島

都濃郡　實測　笠戸島、周廻九里六町三十一間、小島、周廻四町五十四間、火振崎島、周廻三町三十一間、古島、周廻一十三町一十間、袷島、周廻二十五町五間、岩島、（從北岬至南岬）八町、蛇島、周廻一十四町一十四間、仙島、周廻二里四町四間、竹嶋、周廻一十四町三間、鍋島、周廻二町三十四間、中之島、周廻八町四十四間、西島、周廻六町四十二間、黒神島、周廻一里三十二町二間、蛙

疆域

山城　京　○度○○分○○秒〇中略　周防　德山　西四度○三分四六秒

（吾妻鏡四）元暦二年〇文治元年正月廿六日庚戌、爰三州〇周防長門豐前曰周防國者、西隣宰府、東近洛陽、自此所遣子細於京都與關東、可廻計略之由、有武衛兼日之命、〇下略

（日本地誌提要五十七周防）疆域　東ハ安藝及海、西ハ長門、北ハ長門、石見、南ハ海ニ至ル、東西凡貳拾里餘、南北凡壹拾貳里餘、

（筑紫道記）はるかに過行ば、けはしからぬ程の道のほとりに、小松むら立て、手向の神にやと、大なる石に木綿かけたる有、こゝなん周防長門の境といへり、

（長門金匱）一周防國玖珂郡柏崎と藝州との境に小瀬川の末、昔より論有之所にて、平清盛詩歌あるによりて周防の地となるなり、

島嶼

（日本實測錄九島嶼）周防國玖珂郡　實測　柱島、周廻二里二町四十六間、久波美村、三十四度一分、保高島、周廻一十一町五十八間、手嶋、周廻二十一町二十九間、端島、周廻一里二十一町五十四間、帆掛島、周廻一十三町三十九間、續島、周廻二十二町二十五間、長島、周廻一十三町三十八間、福良島、周廻一十一町五十四間、鞍掛島、周廻一十三町卅六間、黑島、周廻三十三町五十三間、伊勢小島、周廻九町五間、遠島　中小島

大島郡　實測　八代島（又呼大島）周廻三十里三十三町四十二間、屋代庄村小松開作、三十三度五十六分、和田村、三十三度五十六分、上關嶋（又呼長島）周廻九島一十六町四十二間、天神町、三十三度五十分、

福島（又呼小福島）周廻五町三十五間、前島、周廻一里一十八町一十六間、飛瀬島、周廻九町五間、戎島、周廻一十町二十一間、前小島、周廻四町一十四間、中小島、周廻四町一十七間、乙小島、周廻五町三十五間、浮島、周廻一里三十四町四十七間、頭島、周廻一里三町二十九間、鍋島（八代島）周廻二町四十間、道島、周廻三町四十三間、泉島、周廻二町二十間、金九島、周廻三町二十四

位置

〔新撰類聚往來下〕國名〇中略周防防州

〔古事記傳七〕周芳（スハウノ）國造（書紀ノ仲々にも芳ノ字をかけり）師は須波（スハ）と訓れき、信に万葉などにも、芳は波の假字に用ひ、又須波宇と云むよりは、古言の體（サマ）なり、されど此國ノ名を、正しく然云る例を未ダ見ず、（万葉四に、周防在磐國山（スハウナルイハクニヤマ）とよめるも、須波那流（スハナル）か、須波宇那流（スハウナル）か定めがたし、）和名抄にも周防（須波宇）とある故に、今も然訓つ、名ノ義いまだ考へ得ず、

〔諸國名義考下〕周防

和名抄に周防、（須波宇、國府在佐波郡、）名義しれがたし、〇中略意麻呂强て考るに、佐婆の轉りなるべし、日本書紀を始として、佐婆郷のみ多く物に見えて、他郷の名はいと／＼まれなり、和名抄にも國府在佐波郡とあり、佐と須とは常にしたしく通ふ音なり、防も芳も波の假字なることうつなし、されど證なければおしていふべくもあらず、藤原明衡新猿樂記に、集諸國土產云々周防鯖とあり、また或書に、草薺鱗甲之類多、土產十倍他國、以鯖施名也と云るは、よしありとおもはる、

〔日本書紀八仲哀〕八年正月壬午、幸筑紫、時岡縣主祖熊鰐、聞天皇車駕、〇中略參迎于周芳沙麼（麼原作磨、據[illegible]行紀改）之浦、而獻魚鹽地、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

周防山口（西川前町）極高三十四度一十分半、經度西四度一十五分半、從東都（同上（東海道西國街道）自宮市山口街道）二百六十三里二十八町三十八間半、

同岩國（錦見町）極高三十四度一十分、經度西三度三十二分、從東都（同上（東海道西國街道）自關戶岩國街道）二百四十一里一十四町一十一間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

周防　岩國　三四度一〇分〇〇秒　德山　三四度〇三分〇〇秒〇中略

東西里差

嚴島

名稱

〔寛政隨筆 八〕嚴島

此島は我國三景の中にして、無雙の神島也、略○中 嚴島とは市杵島姫命を祭る名也、宮島とは此神の宮地なる故也、略○中 御社の後は山にして前は海、左は野、右は松原、略○下

○按ズルニ、嚴島ノ事ハ、尚ホ島嶼ノ條ニ在リ、參照スベシ、

〔延喜式 二十八兵部〕諸國健兒 略○中 安藝國卅人 略○中

諸國器仗 略○中 安藝國 甲三領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡簶廿具、

〔日本書紀 三神武〕十有二月 ○甲寅歲 壬午、至安藝國、居于埃宮、

〔日本書紀 十一仁德〕三十八年七月、天皇與皇后、居高臺而避暑、時 略○中 因語皇后曰、於此有懷抱、聞鹿聲而慰之、今推佐伯部獲鹿之日夜及山野、即當鳴鹿、其人雖不知朕之愛、以適逢獮獲、猶不得已而有恨、故佐伯部不欲近於皇居、乃令有司移鄕于安藝渟田、此今渟田佐伯部之祖也、

周防國

周防國ハ、スハウノクニト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ安藝及ビ海ニ接シ、西ハ長門、北ハ長門、石見ノ兩國ニ接シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ二十里餘、南北凡ソ十二里餘、此國ハ古ヘ國府ヲ佐波郡ニ置キ、大島、玖珂、熊毛、都濃、佐波、吉敷ノ六郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、現今山口縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕周防 須波宇

〔運步色葉集 國〕周防

〔元亨釋書 十一〕釋基燈、周州大島郡人、略○下

一人數三拾九万六千八百七拾八人　内貳拾万二千四十人男 拾九万四千八百三拾八人女　高貳拾六万九千四百七拾八石餘　安藝國

〔吹塵錄入ヨ口及國高〕文化元甲子年諸國人數調○中略

皆私領
一人數四拾九万九千八拾壹人　内貳拾六万三百拾貳人男 貳拾三万八千七百六拾九人女○中略

弘化三丙午年諸國人數調○中略

皆私領
一人數五拾五万三千七百八人　内貳拾八万六千四百貳拾貳人男 貳拾六万七千二百八拾六人女　高三拾壹万六百四拾八石餘　安藝國

風俗

〔人國記〕安藝國

安藝國之風俗ハ、人之氣質實多キ國風ナレドモ、氣自然ト狹ク而、我ハ人ノ言葉ヲ待チ、人ハ我ヲ先ニセシ事ヲ常ニ風儀ニ而、人之善ヲ見テモサシテ褒美セズ、惡ヲ見テモ誹ル儀モナク、唯己々ガ一分ヲ作廻(フルマ)フ意地ニ而、拔出タル人千人ニ十人ト無之レテ、世間之嘲所ヲモ不厭ル風儀也、侍之形儀取分如斯ナリ、因玆穎ミナキ樣ナレドモ、底意ハ實儀ヨリヲコリタル事ナレバ、善キ處多シ、此氣質ヲ離タル人出來バ、名人トモ可謂人出ル國風也、別而佐伯沼田加茂郡之人、律儀强クテ心表裏スクナク形儀ヨキナリ、

〔藝備國郡志上安藝風俗〕人性寛舒而無疏豪之氣、國多文雅之士而有才藝之人、

名所

〔日本鹿子十二〕同國○安藝中名所之部

嚴島　辨才天の社あり、西面は遠干潟也、汐みつれば廻廊の下までさし上る、此所むかしはおんが島と云しを、明神此島の山なみ嶺の爲體、石ふみいつくしと仰有しより、いつく島と號と也、鹿多し、無雙の景地也、

佐伯　出合の清水　鷺の森　小万里　木の島

人口

年料租舂米〈○中略〉 安藝國〈一千斛○中略〉

年料別貢雜物〈○中略〉 安藝國〈零羊角四具○中略〉

諸國貢蘇番次〈○中略〉 安藝國八壺〈二口各大一升、六口各小一升○中略〉 右十四箇國爲第六番〈子午年○中略〉

交易雜物〈○中略〉 安藝國〈白絹十二疋、綿八百屯、木綿二百五十斤、油三石四升、席廿五枚、榧子四合、鹿皮廿張、鹿革廿張、〉

〔延喜式〈二十四主計〉〕安藝〈○中略〉 右十二國輸上絲〈○中略〉

安藝〈○中略〉 右廿九國輸絹〈○中略〉

安藝國〈行程、上十四日、下七日、〉 海路十八日

調、兩面五疋、一窠綾十七疋、二窠綾三窠綾各四疋、薔薇綾三疋、白絹十疋、帛四百疋、緋絲卅絇、綠絲十絇、縹絲廿絇、橡絲卅絇、縹絲二百五十絇、絲五百絇、鹽、自餘輸絹絲鹽、 庸、白木韓櫃十合、自餘輸綿鹽、

中男作物、紙、木綿、紅花、茜、黑葛、胡麻油、鼈、比志古鰯、

〔延喜式〈三十七典藥〉〕諸國進年料雜藥〈○中略〉

安藝國卅二種 黃連四斤十一兩、前胡、柴胡、白朮、藍漆、昌蒲、商陸各六斤、獨活、牛膝各十八斤、桔梗廿一斤、黃檗廿斤、玄參、藁本、白頭公、夜干各三斤、細辛十五斤、苦參、當歸、茜根各十斤、石斛卅斤、地楡續斷各二斤、天門冬十二兩、榧子二斗、署預、吳茱萸、蜀椒各一斗、桃人三升、麥門冬一升六合、五味子三升、葶藶子四合、白殭蠶二兩、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〈○中略〉 宅常滿、集諸國土產、貯甚豐也、所謂〈○中略〉 安藝榑、

〔毛吹草〈三〉〕安藝

廣島紙子 木地 葛籠 鹽硝 水晶 豆腐姥 雷師（カミナリ）〈メバルノ子ト云〉 蒲苅薑辛 野路浮鯛 新婦

山葵 西條柿 諸口紙

〔官中秘策〈五〉〕安藝國 九郡〈○中略〉

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕十九万四千百五十石　安藝

〔藝備國郡志上安藝郡名〕安南郡凡邑數計三十八、田通算二萬五千三百五十六石零、佐西郡凡邑數計六十三、田通算三萬六千九十五石零、佐東郡凡邑數計一十、田通算一萬六千五百五石零、安北郡凡邑數計三十二、田通算一萬六千百九十三石零、豐田郡凡邑數計五十六、田通算五萬千四百十四石零、賀茂郡凡邑數計八十八、田通算四萬九千二百九十八石零、高田郡凡邑數計六十二、田通算四萬三千七十五石零、山縣郡凡邑數計六十四、田通算二萬八千五百十八石零、今合八郡、田通算二十六萬五千百五十石零也、八郡戶十萬二百九十二、口二十五萬六千三百十二、牛馬二萬八千百七十四也、蓋今府治廣島城下之戶口非此限、別載之可幷按、

〔日本鹿子十二〕安藝國八郡、大下國、南北二日半、〇中略、知行高二十五万九千三百八十石、〇圖花萬蠶記、四石多、

出擧稻

〔官中秘策五〕安藝國　九郡〇中略

一石高貳拾六万九千四百七拾八石餘

〔藝藩通志一安藝〕田畝歲額

田畝總數三萬千八百六十四町五段二畝九步

歲額總數三十萬九千三百八十三石六斗五升九合九勺

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

安藝國皆私領　一高三拾壹万六百四拾八石四斗八升九合

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

安藝國正稅廿三万束、公廨廿二万八千八百束、國分寺料三万束、文殊會料二千束、修理池溝料一万束、救急料十万束、驛子糧料三万一千二百束、

〔倭名類聚抄五國郡〕安藝國〇註略管八(中略)正二十三萬束、公二十二萬八千百束、本穎六十三萬千三百束、雜穎十七萬三千二百束、

國產貢獻

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略榲子(中略)安藝(中略)土佐廿六箇國各四合

〔延喜式二十三民部〕年料舂米〇中略安藝國大炊六百石〇中略

藩封

田數石高

〔石淸水文書一〕八幡宮寺領

御判右大將家御判〇中略

安藝國　吳保。。　松崎別宮〇中略

元曆二年正月九日

〔藝藩通志〕十八安藝國嚴島古文書寄附嚴島大明神

安藝國造果保。。。

右爲天下泰平所願成就、爲當社造營料、令寄附之狀如件、

建武三年五月一日　源朝臣花押

〔壬生文書〕主殿寮諸領綸旨院宣府書主殿寮領〇中略

安藝國入江保。。。〇中略

右所々如元知行、不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月廿七日　參議花押

大夫史殿〇壬生匡遠

〔慶應元年武鑑〕松平安藝守茂長大廣間從四位上少將元治元子五月任　國拾二万六千石餘　居城安藝沼田郡廣島江戶ヨリ海陸二百三十一里

城主毛利中納言輝元、慶長五年關ヶ原ノ役後、福島左衞門大夫正則、元和五年ヨリ淺野但馬守長晟、以後代々領之、

〔倭名類聚抄〕五國郡安藝國〇註略管八郡田七千三百五十七町八段四十七步

〔伊呂波字類抄〕安藝國〔中略〕水田七千四百八十町一段廿八步

〔拾芥抄〕中本國郡部安藝上八郡〔中略〕田萬七千八十四町

〔海東諸國紀〕安藝州　郡八、水田七千二百五十町九段、

右所々可有御管領之由、院宣所候也、以此旨可令申入昭慶門院給、仍執達如件、

嘉元四年〈○徳治元年〉六月十二日　右衛門

高倉前宰相殿

〔東寺百合古文書　一〕東寺領安藝國新勅旨田雜掌頼有謹言上、爲同國志芳庄一方地頭肥後五郎左衛門尉致行違背宣旨幷關東御下知事〈○中略〉

應長元年六月日

〔壬生文書　綸旨院宣御教書等〕陸奥國安達庄〈○中略〉安藝國世能荒山庄〈○中略〉

右庄々知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月廿六日　參議〈花押〉

大夫史殿〈○壬生匡遠〉

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕合〈○中略〉

拾貫文〈○中略〉　小早川備後守殿〈藝州沼田庄段錢○中略〉

三貫文〈○中略〉　小早川安藝殿〈藝州竹原庄段錢〉

〔續應仁後記　六〕防州山口亂事

安藝國住人ニ毛利備中守元就ト云者有リ、先祖ハ前代鎌倉ノ執事因幡前司廣元ノ後胤也ト云フ、此元就元來智勇拔群ノ者也シガ、藝州多智見ノ庄ニ於テ僅三百貫ノ領主ナリシニ、〈○下略〉

〔宮寺縁事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企違領、兼又有由緒雖令傳領子孫斷絶處々付本所事、

宮寺領〈○中略〉　安藝國　三入保〈○中略〉

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰〈在判○下略〉

安藝國廣島の城下其繁華美麗なる事、大坂より西にてはならぶ地なし、其町にぶた多し、形牛の小さきが如く肥ふくれて、色黒く毛はげて、ふつゝかなるものなり、京などに犬のある如く、家々町々の軒下に多し、他國にては珍らしき物なり、

○按ズルニ、廣島ノ名ハ築城ノ時ニ、毛利氏ノ祖大江廣元ノ廣ト、當時ノ普請奉行福島大和守ノ島トヲ採リテ名ツケタリト云フ俗說、虛實見聞記等ニアレドモ今採ラズ、

〔藝備國郡志 上安藝山川〕草津　在佐西郡海濱、是亦船舶之所輻湊、而商賈之會津也、自古傳石州濱田之人、嘗此泊於我藝陽、常繫船以使舵工守之矣、　登壇必究日本考、所草津曰窟做子、

大竹村　在佐西郡海濱、而與周防州臨村相逆、大竹村有海無山、臨村有山無海、古來互以其所有、易所無之物、故二村民人蒙魚共得其便、近世爭其利、互絕交易、大竹川在此村外、因號大竹村、(中略)

穴村　山縣郡中自穴村到吉木村、自此出本地、轉通高田郡多治井村、其間經歷嵒曲、相比大行羊腸之險、厭此地通出雲石見二州、

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事(中略)

一類例庄々(中略)　安藝國

安藝郡牛田庄、墾田七十九町(中略)

一類例庄々(中略)　安藝國

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日(署名略)

〔吾妻鏡十八〕建仁四年(元久元年)七月廿六日丙戌、安藝國壬生庄地頭職事、山形五郎爲忠與小代八郎等相論之間、就守護人宗左衞門尉孝親注進狀、今日於御前被一決、(下略)

〔後宇多院御領目錄〕國分(中略)　安藝國安摩庄　能美庄　可部庄　開田庄(中略)

一安樂壽院領　安藝國田門庄(中略)

一興善院領　安藝國後三條本勅旨　氣比庄(中略)

輝元卿〇毛利常ニ宜シハ、國君ノ所居ハ萬人ノ所都會也、サルニ今ノ吉田ハ其地偏狹ニシテ、備藝兩州ナドヲ領シタル將ノ爲メ相應也、八州ノ太守可居地ニ非、山中ニシテ海路ヲ隔タレバ、敵ノ推來ヲ防拒センニ便リ惡ク、又他國ヘ軍ヲ出スニモ不自在也、況今京都ノ往來盛キニハ、殊ニ萬事ニ妨ゲアリ、何處ニモアレ於當國善成昭德スル地ヲ擇テ、城郭ヲ移シ人民ヲ安ンズベキト、求給ケルニ、二宮信濃守、己變ノ川口ノ五箇ノ庄コソ、田河帶江、環山據險、形勝堅壯ノ所、子孫永ク武備ノ業ヲ可傳地ナレト申ニヨツテ、幸ニ黑田孝高新庄ニ逗留アレバ、輝元ヨリ地形ノ可不可覽ミナ給候ヘト、頼給ケル程ニ、孝高頓テ五箇ノ庄ノ蘆原ニ行至テ相宅給ケルニ、美哉山河ノ固、可比魏國之寶、可幷金陵之麗、體國經野、設官分職ニ、究竟無上ノ地ナリト被申ケリ、サレバトテ天正十六年十一月初旬ヨリ、二宮信濃守ヲ奉行トシテ、孝高ノ指麾ヲウケ、土方氏ニ命ジテ以土圭致日景辨方、右社後市ノ位ヲ正シ、剃其草刈繁蘆、匠人投鉤繩審方面勢覆、量高深遠近、銀城鐵郭巍然トシテ、厚棟大厦爽庭儀門、依其利迎其勢、大木爲宗細木爲桷、欂櫨侏儒各得其宜、工巧成テ燕雀聚リ賀セシカバ、同十九年四月吉日良辰也トテ、入城ノ佳處ヲ披露ケリ、其地ヤ東ニ瀨野ノ大山トテ三里ノ間、石梯懸棧百歩ニ九折シテ、仰望ムニ垂線續、南ニ草津ノ海、仁保ノ入江有テ、潟鹵數里、北ニ新山阿生ノ大山有テ、鐘山龍盤石頭虎踞ノ形象アリ、可部川北ヨリ來テ西東ヲ周廻シ、不測ノ淵ニ望タレバ、不用利田三而守獨以一面、山河之形勢、田里之上腴、可謂金城千里天府之國也、廣ノ名ヲ廣島ト號ス、蓋吾朝ヲ豐蘆原ノ中津國ト號スル例ヲ逐時ハ、今ノ廣島誠ニ准據スルニ堪タリ、日本ノ在ン限ハ絕セジト、民人常ニ歌ヒ市ニ抃フ、

〔豐鑑 四 高麗之亂〕夫より中國をへてなごやに趣給ふ、〇豐臣秀吉 安藝の廣島には毛利氏輝元住所なればー日二日やすらひ給ふ、

〔西遊記 五〕家孫

負ヲ窺居ヲ元就ニ與スル者モ無所ニ、宍戸安藝守我身ハ居城五龍ニ居ナガラ、嫡子雅樂頭隆家ニ軍卒百餘差添ヲ、吉田郡山ノ城ヘ差籠ラル、

〔藝備國郡志安藝上城邑〕廣島城、今府治而屬安南郡、斯地元五箇村之一村而連于海、潮汐登還、舳船往來、曾毛利輝元見地之利、埋海以築城、中架五重之樓、其外大小城樓百三十六、城之内外羅自之壁圍、合八千二百間餘、闕門二十餘、石壁屹立而環以深池、板橋圯路通四方、食祿之家千三百五十餘、市中之街衢縱橫七十町餘、農工商之戸三千五百四、口三萬六千百四十二、祠廟四處、寺觀百七箇寺、僧千七十口、市中之板橋七條、其中大者號京橋通京西、橋以東則安南郡也、橋以西則佐東郡也、○下略

〔藝藩通志安藝六〕廣島府　疆域形勢

廣島府は地安藝沼田二郡に亘る、大抵京橋川より東は安藝郡、西は沼田郡なり、舊稱五箇庄、○註略其廣島と名けしは、その地廣く四方水にて繞れるを以なるべし、俗傳る說あれども今取らず、抑も此府は天正文祿の比、毛利氏數州を幷呑して、高田郡吉田に在しが、その地狹く且邊僻なるをもて、新にこの城郭市邑を創造して移り居しが、慶長庚子、○五年福島氏これに代り、ますます城池を修め、遂に全備に至る、元和丙辰、○二年本藩紀伊より封をこゝに移し給ひ、すべて舊制に依り、おのづから一藩の鎭府となり、永く帶礪の盟を保てり、

府の地廣平沃衍にして、四方皆封内の郡邑なれど、三隅は岡巒立並びて府を遮衞し、南の一隅は江海外に環り、島嶼亘帶して遂に屛障をなせり、巨川北より來り、直に郛郭を衝くが故に、城北にて數派に分ち、水勢を殺げり、城の左に二派、右に三派を通ず、本末東西の別ありといへども、並に南流して海に入る、城南更に二港を鑿ち、海に通じて舟運に便す、國民繁殖百貨輻湊し、實に中州の重鎭にして、山陽第一の都會たり、

〔陰德太平記七十五〕輝元朝臣夢、城於廣島事

〔藝藩通志 十八 安藝國嚴島古文書〕立券

水越村　壹處貳段 田常荒也　簗原村　壹處伍段 田常荒也　須澤村　壹處壹町陸拾歩 中略

諸木村　壹處壹町肆段佰貳拾歩 中略

仁平肆年拾月拾壹日　圖師和泉 下略

〔東寺百合古文書 八十二〕安藝國井原村事、地頭高藤二入道號二神官一不レ勤二警固役一云々、甚無二其謂一、早可レ令レ催二促一、且相二尋當村知行之由緒一、可レ令レ注二進之狀一、依レ仰執達如レ件、

建治二年八月廿四日　武藏守 在判

相模守

武田五郎次郎殿

〔藝藩通志 十八 安藝國嚴島古文書〕寄二進安藝國己斐村一除二五分壹一事

右爲二嚴島社廻廊以下造營料所一、奉レ寄如レ件、

貞和四年八月廿六日　正二位源朝臣

〔道ゆきぶり〕五月十九日、備後の尾道より安藝國ぬたといふ所にうつり侍、道は南東へ出たる山あり、ひがたをへだてたり、いぬゐにそひていそ路はるかにゆくに吉和といふ所あり、中略はつきの廿九日、あきの國ぬたのさとをたちて、入野といふ山ざとをとをり侍るに、此所はむかし小野のたかむらの故郷とて、やがてたかむらともをのとも申侍るとかや、大なる山寺あり、今夜は高谷といふさとにとゞまりぬ、中略此山〇大山こえすぎて瀬野といふさとあり、こゝもみなやまあひのほそ路なり、

〔安西軍策 一〕尼子發向吉田之事

同年〇天文九年八月、尼子民部大輔晴久朝臣、藝州吉田へ發向ス、中略毛利家與力ノ藝陽ノ侍共モ、勝

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國舊村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕安藝　八郡、四百三十六村、

高三十一万六百四十八石四斗八升九合 皆私領

沼田郡三十三村　佐伯郡六十三村　豐田郡五十六村　山縣郡六十四村

高宮郡三十二村　加茂郡八十八村　安藝郡三十八村　高田郡六十二村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名

安藝　安藝郡、海田村、蒲刈下島、佐伯郡、虫所山村、平良村、嚴島、宮島又野島、大那砂美島、能美島、山縣郡、加計村、高田郡、佐西村、高宮郡、南原村、豐田郡、生名島、大崎下島御手洗、宿根島、大久野島、高根島、大母島、豐宮島、沼田郡、江波島、

〔嚴島文書〕嘗生凡貞行解申沽渡進私領水田事

合貳拾貳町陸段　在風早郷本垣中千原村略〇中

承保三年二月十日　凡 花押下略〇

〔嚴島文書〕高田郡司解申口進先祖相傳所領島立券事

合

三田郷　矢奈原村略〇中　貝村略〇中　井村略〇中　驚越村略〇中　須佐渡村略〇中　波多久比村中〇略　諸木村略〇中　加津見村略〇中　山越村略〇中　古井村略〇中　新潟村略〇中　加矢村略〇中　野原村略〇中　久馬兜谷村略〇中　雀々部村略〇中　伊久志多村略〇中　小宮家村略〇中　佐々井村中〇略　深州村略〇中　中井村略〇中　高山村略〇中　熊埼村略〇中　甬道村略〇中　小田村略〇中　神田村略〇中　恵道村略〇中

康德二年三月十六日　散位藤原朝方略〇下

立券　言上一宮御領志道原御倉敷畠代入替吉次領畠事
合壹町陸段貳佰肆拾歩　在佐東郡桑原郷内○中略
仁安元年十一月十七日　　　　訴公文散位佐川末利

立券　言上一御社御領志道原御庄御倉敷牓示内畠在家撿注帳事
合　畠貳町陸段○中略
右御倉敷佐東郡内伊福郷堀立江上、牓示一所打定如件、
仁安元年十一月十七日　　　郡公文佐伯末利　使權介藤原忠信

〔源平盛衰記二十六〕宇佐公通脚力附伊豫國飛脚事
安藝ニ通清○河野ガ子息ニ四郎通信、高繩城ヲ逃出テ安藝國ヘ渡テ、奴田郷ヨリ三十艘ノ兵船ヲ調ヘ、纜船ノ體ニモテナシ、忍デ伊豫國ヘ押渡、○下略

〔東寺百合古文書七十二〕安藝國福村郷事、前司知廣不申入子細、無左右寄進○中略
永仁五　四月二十四日　　治部少輔光定
覺以上人御房

〔東寺百合古文書二〕當寺領○中略　安藝國三田郷平田郷高屋餘田等、任後宇多院御起請、爲御下文院宜知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、
建武三年十二月八日　　　藤隆朝　參議判
謹上　東寺供僧學衆御中

〔郡名一覽〕一安藝國　皆私領　藝州　南北二日半　八郡
高貳拾六萬九千四百七拾八石三斗壹升　　四百三拾六ケ村
●廣島　二百卅一里　（○五日市）　二万石　上田主水

佐伯郡　養我　種箆　緑井〇緑、高山寺本作緑、　若佐　伊福　桑原　海〇海下恐有脱字　晧〇晧、高山寺本作晧　濃　建管〇管、高山寺本作舘　驛家　大町　土茂

山縣郡　長茂　壬生　山縣　品治　宇岐

高宮郡　刈田加無多〇加無多、高山寺本作葛太、　內部宇知倍　竹原多加波眞　高宮多加美也　丹比多無比〇無、高山寺本作知、　訓覚久留倍木

高田郡　三田美多　豐島止之島　風速加佐波也　麻原　川立加波多知　船木布奈木　粟屋安波也

豐田郡　豐田　登能　能美　調芳　安宿　椹梨

〔嚴島文書〕伴利重解　申沽度私領水田事

合伍段　右風早鄕內字柏木〇中略

治暦元年十月三日　　　　伴花押

〔嚴島文書〕安部延武解　申沽度遣所領古作田事

合參段〇中略　件田在高田郡三田鄕山本村字〇中略

延久五年三月十三日　　　　阿部延武〇以下二人署名略

〔東寺百合古文書三〕和與　東寺勸學會料所安藝國三田鄕雜掌行胤、與同鄕惣領地頭市河又五郎入道行心代孫子頼行相論年貢所務檢注以下事、

右當鄕者、爲勸學料所、御寄附當寺以後、云所務、云年貢、地頭令抑留之由、雜掌訴之、〇中略

嘉暦二年八月二十七日　　　　地頭代藤原頼行花押

雜掌僧行胤花押

〔嚴島文書〕寄進　私領田畠桑林等事

合陸町〇中略　在佐東郡若狹鄕內〇中略

長寛二年四月廿一日　　　　淸宗嫡男淸原花押

安元二年七月日

大介藤原朝臣

〔藝藩通志安藝八十七〕豐田郡　疆域形勢風俗土產附

豐田郡は國の東邊にありて備後と界す、藩府を距ること十三里餘、當郡の名、延喜式、拾芥抄には沙田とあり、倭名抄の註に今沙改豐とあり、嘉名に改められしなるべし、郡の廣四里、東は沼田下村より、西は田萬里村に至る、袤三里半、南は忠海村より、北は大草村に至る、此餘海上生口大崎大長豐島などの諸島、みな當郡に屬す、四隣東北は備後國御調、世羅、三次三郡、南は海上にて、伊豫の島嶼に接す、西は賀茂、高田二郡なり、沼田本鄕驛を郡本とす、○中略

按に倭名抄所載の鄕名によりて考るに、上古の豐田郡は西北の方のみにて、東南の地、過半は沼田郡なり、中古いかなる故にや、沼田の名を廢して、其地を豐田に倂せければ、當郡の地は大に上古の地に增しぬ、又入野のあたりは、古賀茂郡に屬し、造賀も亦賀茂郡造賀村の一谷別れて、此郡に入りて一村をなせり、又土所小林中野三村を今土倉鄕とよぶ、此地は御調郡羽倉村に連りて舊は一鄕のよし、然ば昔は土倉鄕は御調郡に屬せしが、抑御調の羽倉村當郡に入しにや、又吉名木谷二村離れて賀茂郡の內に在ることも亦疑べし、

〔文德實錄五〕仁壽三年十月癸酉、安藝國佐伯、山縣、沙田三郡、今年徭役俭(一)窮民(一)也、

〔倭名類聚抄安藝八國〕沼田郡　今有(二)沼田(一)　船木(布奈)　安直(安加)(知)　眞良(萬良)(真)　梨葉(奈之)(波)　都宇

賀茂郡　賀茂　志芳(之波)　造果(佐加)(宇)　高屋(多加)(也)　入農(伊(伊、高山寺本作)(鑁)比)(乃)　訓養(久萬、(萬、高山寺本作)(奈))(也)　香津　木䑓

大弓

安藝郡　漢辨(加倍)(○高山寺本註)　彌理(美利)　河內(加布)(知)　田門(多土)　幡良(波良)(真)　安藝　船木(布奈)(木)　養隈(也乃)　安満(安)

驛家(萬)　宗(○宗、高山寺本作)(字)山

高田郡

表五里五町、南は馬木村より北は鈴張村に至る、四隣東は賀茂、高田二郡、南は安藝郡、西は沼田郡、北は山縣郡なり、可部町を以郡本とす、〇中略按に當郡上古は、今の高田郡の內にありて、別に一郡たりしが、いつの頃よりか高宮を併せて高田一名となりしを、後高宮の名を復せらるゝに及て、安北郡の地は高宮の名を襲らしめられたれば、今此郡の地は上古の安藝郡の內にして、中古の安北郡なり、高宮の舊地は今高田郡の西半分の地と見えたり、

〔三代實錄 六 清和〕貞觀四年七月十日丁丑、安藝國高宮郡大領外正八位下三使部直弟繼、少領外從八位上三使部直靜雄等十八人、復本姓仲縣國造、

〔藝藩通志 六十四 安藝〕高田郡　疆域形勢 風氣沿革附

高田郡は國の東北邊にありて、藩府を距る七八里なり、其地高き故に高田とは名づけられたるにや、廣三里半、東は小原村より西は土師村に至る、袤七里、南は三田村より北は生田村に至る、四隣東南は賀茂、豐田二郡、西南は高宮郡、西は山縣郡、北は石見邑智郡、東北は備後三次郡なり、吉田町を以郡本とす、〇中略按に當郡の地、上古は東邊を高田、西邊を高宮とす、後合せて一郡となりければ、今の地は古に倍す、故に倭名抄高田郡所管の七鄕、高宮郡の六鄕、今並に當郡の內にあり、又按に安藝郡田所家古文書、及び豐田郡樂音寺神名帳などを見るに、吉田郡といへるあり、其郡內に綱村、志路村、石浦村などの名も見ゆれば、中古彼あたりを吉田郡と稱せし事もありしと見ゆ、されど外に古記の左證もなければいぶかし、姑く附して後考を待のみ、

〔藝藩通志 十八 安藝國 嚴島古文書〕廳宣　留守所

可早任散位中原朝臣業長寄文狀、爲伊津岐島御領高田郡諫ヶ鄕狀〇中略

〔安西軍策二〕赤穴合戰事

此外藝州佐藤〇假名佐東郡ノ人々ハ、八重垣、吉川治部少輔輿經ハ、平原ニ陣ヲトラレケリ、

〔陰德太平記四〕藝州西條鏡山城沒落事

渠内〇大筑前ニ在陣ノ中、急ギ當城ヲ攻破、佐西郡へ打入ベシト、晝夜ヲ不分攻ラレケリ、

〔安西軍策一〕佐藤銀山之城幷櫻尾城沒落事

櫻尾ノ城ヘハ大内勢相向、嚴島ノ神主佐伯式部大輔輿藤子息四郎ヲ大將トシテ、佐西郡ノ者共五百餘騎楯籠リケルガ、若命ヤ助ルト、神主父子ヲ討テ出ス、

山縣郡

〔藝藩通志安藝九十八〕山縣郡　疆域形勢風氣附

山縣郡は國の西北にありて、今の藩府廣島を去ること八里餘、もと山中の縣なるを以名づけられたるなるべし、既に縣といひ、また郡といへる、重複にわたれども、本朝中古國郡の名皆二字を嘉らしめられければ、如此なりたるにや、廣十三里餘、東は木次村より西は戸河内村に至る、袤十里餘、南は坪野村より北は大塚村に至る、四隣東は高田郡、南は高宮、沼田、佐伯の三郡、西北は石見の國なり、本地村を以郡本とす、〇下略

〔藝藩通志十八安藝國嚴島古文書〕言上　公家幷建春門院御祈禱料安藝國伊都伎島社御領壬生庄田畠在家等事、

在管山方郡内、〇中略

嘉應三年正月　公文凡〇下略

高宮郡

〔藝藩通志安藝七十一〕高宮郡　疆域形勢風氣沿革附

高宮郡は藩府の東北四里許にあり此地中古の安北郡にて、上古安藝郡の半に當れり、高宮郡の本地は、今高田郡の内にこもれり、〇中略今郡境廣四里七町、東は狩留家村より西は飯室村に至る、

佐伯郡
佐東郡
佐西郡

井ル程ニ候キ、

〔藝藩通志安藝五十一〕佐伯郡　疆域形勢風氣沿革附

佐伯郡は國の西邊にありて、今の藩府廣島の西郊より卽其地なり、〇中略廣八里東は己斐村より西は中道村に至る、袤八里半、南は大竹村より北は麥谷村に至る、四隣東は府市、西は周防玖賀郡、石見美濃郡、南は海を隔て、伊豫風早郡に對し、北は山縣沼田二郡なり、廿日市を以郡本とす、〇中略按に當郡、上古は、今の沼田郡、及府城の地を併せて佐伯一郡たり、中古東邊の數鄕をわかちて佐。東。郡とし、其餘を佐。西。郡とせらる、近古佐東を沼田として、佐西のみを佐伯郡とせられしかば、當郡上古の地その首領を失へり、姑く今制にしたがひて私に改めず、

〔日本後紀二十一〕弘仁二年七月己酉、安藝國佐伯郡速谷神、伊都岐島神、並預名神例、稟四時幣、

〔東寺百合古文書百八十一〕東寺雜掌申、安藝國衙領內佐。東。郡東原鄕安南郡新勅旨田柚村綠井鄕八木村溫科等事申狀具書如此、武田治部少輔同遠江守、品河近江入道、香河修理亮、大藏少輔、金子大炊介以下輩押領云々、〇中略

康平元年十一月廿五日　左衛門佐判

森宮內少輔殿

〔嚴島文書〕謹解解申請遣平行釜私領田畠等事

合貳拾肆町、〇中略在佐東郡內八木村者、〇中略

仁平二年三月八日　平判

〔嚴島文書〕讓渡　いつくしまの御神りやうの內さ。ん。と。う。の。こ。う。り。みどろいのがうの內のりす

へ名事合一所者、〇中略

ちやうわ二年八月十三日　左衛門尉重直在判

西條郡

安藝郡
安南郡
安北郡

の地なりしや、或は此あたり、上古沼田郡の內、今の豐田の地に接きしにや詳ならず、姑く記して後考を竢のみ、

〔日本後紀 十三 桓武〕延曆廿四年八月壬子、安藝國賀茂郡地五十町賜₂仲野親王₁、

〔大內義隆記〕大永七年八月ニ、尼子伊與守安藝國西條郡鏡山ヲ切取テ、引足ニ備後國和知又九郎豐里ガ城ニ押寄テ、○下略

〔藝藩通志 三十七 安藝〕安藝郡　疆域形勢 風氣沿革附

安藝郡は國の中央にありて、昔國府をもこゝに置かれければ、國郡名を同じくすと見へたり、今の藩府廣島の東にあり、府市京橋以東は此郡の內なりしが、今は管を異にす、廣四里半、東は上瀨野村より西は牛田村に至る、袤五里半、南は警固屋村より北は畑賀村に至る、但し離島をば除ていふなり、四隣東は賀茂郡、西は府郭新田及び沼田佐伯二郡、南は海を隔て、伊豫國風早郡、北は高宮郡なり、故府廢すること久し、今海田を郡本とす、○中略按に當郡の地、上古は境界太廣し、中古割て二郡とし、南を安。南。北を安。北。とよびたり 安南或は安郡阿譜などともあり 後に安北を高宮郡とし、又安南を以安藝郡とせられければ、今當郡の地は中古安南の地のみにて、上古疆界の半を失ひぬ、

〔三代實錄 六 清和〕貞觀四年七月廿七日甲午、安藝郡始置₂主政一員₁、

〔東大寺百合古文書 三十七〕新勅旨田解申注進永仁四年損得注[　]帳事○中略

安。南。郡。八丁五反三百分○中略

永仁四年 丙申 十二月日　　公文佐伯清基 花押

〔陰德太平記 三〕上野民部大輔下向藝州之事

此直時、安藝國ノ守護職ニ被₂補、安。南。安。北。二郡ヲ領シ候ニ仍テ、安藝ニ熊谷、周防ニ大內トテ、肩ヲ

賀茂郡

八木村より西は吉山村に至る、袤五里餘、南は打越村より北は小河内村に至る、四隣東は安藝郡南は府治の地なり、それを隔て、江波島なり、南より西は佐伯郡、西より北は山縣高宮の二郡なり、祇園町を以て郡本とせり、○中略

按に當郡上古は佐伯郡の内なり、中古分ちて二郡とし、東を佐東、西を佐西とよべり、後佐西郡を以佐伯郡とし、佐東郡を沼田郡となせり、然るに沼田は日本紀、倭名抄、皆安藝國東境の地となせれば、今の豐田郡、南のかたと見へたり、

〔日本後紀五桓武〕延曆十五年十一月己酉、安藝國沼田郡采女佐伯直那賀女授外從五位下、

〔藝藩通志七十八安藝〕賀茂郡　疆域形勢風氣沿革附

賀茂郡は上古京都賀茂神領の地なるを以、此名を得たりといふ、○中略藩府の東七里許にありて、安藝豐田二郡の間にあたれり、廣七里許、東は下野村より西は津江村に至る、袤四里餘、南は三津村より北は造賀村に至る、四隣東北は豐田郡、西は安藝郡、西北は高田、高宮二郡、南は海なり、西條四日市を以郡本とす、

當郡東北及び西は群山環り峙つ、南一面は海に沿ひ、安藝豐田の諸島に對す、郡の諸水は多く北より南に流れ、黒瀬川を大なりとす、陸路には西に瀬野大山、東に冤迫、中に松子山あり、海路は西に猫門ありて、東は隣郡高崎の門に通ず、皆其險要なり、○中略

按に當郡沿革考べからずといへども、倭名抄所載當郡郷名に入農造果といへるあり、入農は今の豐田郡入野村是ならむ、古賀茂の地にて、後に豐田に入れるなるべし、造果は今の造賀なるべし、此村今賀茂豐田兩郡の界にありて、雙方各同名の村あり、然るに倭名抄の造果當郡にのみ係て、豐田になければ、是又むかしは皆當郡の所部なりしにや、是古今疆界の異るなり、且吉名木谷二村、今豐田に隷すれど、其地は遙に豐田を離れて賀茂の内に錯入たれば、かの二村も古は當郡

			管八	同	八郡		八郡	同	同	同	同
		阿岐	安藝	同	同	安北 高宮	同	同	同	同	同
			高宮	同	同	高田	同	同	同	同	同
			高田	同	同						
			賀茂	同	加茂	同	賀茂	同	同	同	同
			山縣	同	同	同	同	同	同	同	同
			佐伯	同	同	佐東 佐伯	同	同	同	同	同
						佐西 沼田	同	同	同	同	同

沼田郡

〔花營三代記〕康曆二年五月廿八日、大内新介〔義弘、左京權大夫〕與舍弟三郎於藝州內郡〔〕合戰〇下略

〔藝藩通志〕四十五 安藝 沼田郡 疆域形勢 風氣 沿革 附

沼田郡は藩府の西北にありて、府も舊當郡の内なれど、今別管となれり、郡の所管廣四里許、東は

牢を失ひ、沼田高宮も亦みな其故地にあらずとて、高田豊田二郡は、沼田、高宮の地を併せもちて還さゞりければ、郡名は古に復しけれど、名實相亂る是慨むべきのみ、今時定る所の郡の次第は安藝、沼田、佐伯、山縣、高田、高宮、賀茂、豊田、府城に近きを首とし、左旋して東に終るなり、猶各郡に詳なり、

〔皇國郡名志〕安藝八郡

山縣ヤマガタ　●大朝　●有田　石界

佐東　廣島　[illegible]

安南　●海田市　廣島ニ達

賀茂カモ　●西條　●竹原[illegible]　南海

佐西サヘキノニシ　●小方　●玖波　●宮内　●草津　●宮島　防界南海向

安北アキノキタ　∧可部　●上根川　國中

高田タカタ　∧吉田　石備後界

沙田ヌタ　∧忠海　●ヌタ本　∧本郷　備後界

〇按ズルニ本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕安藝

書名			
六國史古書	淳田		
延喜式	沙田ヌタ	沼田ヌタ	
倭名抄	同	同	
拾芥抄	同	同	
諸書	沙田	豊田　豊田	安南　安藝
郡名考	同トヨタ		同アキ
天保郷帳	同		同
明治[illegible]	同		同
地誌提要	同トヨタ		同アキ
郡區編制	同		同

〔倭名類聚抄 五國郡〕安藝國 略○註 管八 略○註 沼田奴太 賀茂 安藝 佐伯佐倍木 山縣夜萬加多 高宮太加三也 高田太加太 沙田高須多、今沙田作豐、止與太

○按ズルニ、沙田ハ本書郷名ヲ記セル條ニ、豐田郡ヲ揭ゲテ、沙田ノ稱ナシ、

〔延喜式 二十二民部〕安藝國、上、管 沼田ヌタ 賀茂カモ 安藝 佐伯サヘキ 山縣ヤマカタ 高宮タカミヤ 高田タカタ 沙田マスタ 略○中 右爲遠國、

〔伊呂波字類抄 安國郡〕安藝國 管山陽 上八郡

沼田ヌマタ 賀茂カモ 安藝 高宮タカミヤ 佐伯サヘキ 山縣ヤマカタ 高田 吉積

〔易林本節用集 下〕安藝 藝州 上管八郡、略○中 沼田、高田、豐田、沙田、賀茂、佐伯、安藝、高宮、嚴島、郡外

〔藝藩通志 一安藝〕郡邑建置沿革考

安藝國郡を置こと古今大抵八郡なれど、其名其地は同じからず、略○中 其次第を考るに、東を首として左旋して北東に終る、古の沼田郡は國の極東にありて、賀茂安藝に續て西す、中古安藝郡を分て二郡とし、南を安南郡、北を安北郡とす、佐伯郡を分て二郡とし、東を佐東郡、西を佐西郡とし、沼田を廢して豐田に併せ、高宮を廢して高田を廣くす、されど八郡の數は變せず、嚴島棚守家に藏せる長元永承間の國解、みな安南、安北、佐東、佐西の郡名を載て、沼田高宮は見えず、其時既に八郡たり、蓋二大郡を分ちて二小郡を廢し、戸口の多寡を均くせるにや、但故府田所家に藏、保安比の免田錄に、吉田郡ありて、沼田郡なければ、九郡とす、又豐田郡樂音寺古神名帳には、沼田吉田二郡倶に存し、餘郡猶八名あれば、そのかみ十郡の例亦證とすべきに似たり、然に吉田郡は他書に見へず、おもふに高宮の名忌み避ることありて、一時權に置き、易ふるに吉田を以せるにや、今高田郡の内に吉田村あり、卽古の高宮郡の地たり、寛文四年、郡名復古の命ありて、安南、安北、佐西、佐東の稱を止めて、安藝、佐伯とし、沼田、高宮の名も再出て各一郡となりければ、和名抄所載八郡の稱には復しけれど、安北は高宮となり、佐東は沼田となりければ、安藝佐伯二郡は、各その故境の

文祿二年、徙ヲ廣島ニ治ス、關原ノ役、西軍ニ黨シ、敗後降ヲ乞フ、徳川氏其封疆ヲ削リ、更メテ長門周防ヲ賜ヒ、福島正則ヲ本州ニ封ズ、元和中、罪アリ國除シ、淺野長晟代テ封ゼラレ、廣島ニ治シ、世襲、王政革新、廢シテ廣島縣ヲ設、

國府

〔先代舊事本紀 十國造〕阿岐國造
志賀高穴穗朝〈御世〉〈○成務〉天湯津彦命五世孫飽速玉命定賜國造、
〔續日本紀 八元正〕養老四年十月戊子、從五位上忍海連人成爲安藝守、
〔尊卑分脈 十二源氏〕武田信義――信光〈承久亂之時、賜安藝國守護職了、〉
〔倭名類聚抄 五國郡〕安藝國〈國府在安藝郡、行程上十四日、下七日、〉
〔拾芥抄 中末本朝國郡〕安藝〈○中略〉　安藝〈府〉
〔藝備國郡志 上安藝國郡〕八幡　在安南郡、此地古之安藝國府也、故俗稱國府八幡、
〔藝藩通志 一安藝〕國府
安藝國府は今の安藝郡府中村是なり、〈○中略〉本藩毛利氏の舊に仍りて廣島に府を開く、故府を距ること一里許、亦要衝の地なり、
〔安西軍策 一〕惠林院義植卿賴大内義興事
永正三年十一月二十六日、義植卿〈○足利〉山口ヲ打出給ニ、大内〈○義興〉ハ防長豊筑ノ軍兵二萬餘騎ヲ相隨、安藝國府ニ著給フ、
〔嚴島道芝記 五〕田所屋敷
安藝郡府中にあり、國府上卿三宅氏是也、〈○中略〉延喜帝の御宇、中納言藤原助隆卿を定勅となし、安藝國府を領してこれを上卿とす、代々府中に居住せり、田所は是を職とも云傳ふ、又國府は九條殿舊領なりしとかや、

之貫物饒足、故名曰饒國云云、今改稱安藝、饒與安藝、倭語相同故然也、上世安藝國分八郡、曰沼田、曰賀茂、曰安藝、曰佐伯、曰山縣、曰高宮、曰高田、曰沙田、田通計萬七千八十四町云云、類聚國史、源順倭名鈔、延喜式、拾芥鈔等之所載悉如此、後世改沙田郡號豐田郡、割安藝郡爲安北安南二郡、佐伯郡亦今分爲佐西佐東兩郡、賀茂山縣高田、通計爲八郡、古所謂沼田不知今之沼田也否、按日本紀使佐伯氏居淳田云々、然則佐伯郡之稱號本于此乎、淳田者蓋今之沼田乎、續日本紀曰、元正天皇養老三年、令備後國守正五位下大津宿禰宿奈麻呂管安藝周防國、又曰、聖武天皇天平六年九月、割安藝周防二國、以大竹河爲國界也云々、到今從其制之所定也、○下略

〔日本地誌提要 五十六安藝〕沿革 古ヘ國府ヲ安藝郡ニ置、(府中村是ナリ)平氏ノ盛ナル、其管國タリ、後之ヲ納テ院ノ御領トナス、承久中、甲斐ノ守護武田信光、軍功ヲ以テ本州守護ヲ兼ヌ、其五世孫信武足利尊氏ニ從ヒ、再ビ守護ヲ兼領シ、之ヲ三子氏信ニ傳ヘ、歷世金山(カナヤマ)ニ治ス(佐東郡、今沼田郡東山本村、)永享十二年、氏信ノ曾孫信榮、若狹ヲ加封シ、其弟信賢嗣ギ、文明中、子國信、若狹小濱ニ移リ、其弟元綱ヲ以テ本州守護代トナシ、金山ニ治ス、既ニシテ州ノ豪族、毛利、吉川、熊谷諸氏各一隅ニ據リ、武田氏ノ威令行ハレズ、永正ノ末、元綱ノ子元繁、兵ヲ起シテ諸族ヲ攻擊ス、毛利元就(吉田城主)元繁ヲ擊テ之ヲ殺シ、其近隣ヲ略ス、大永三年、尼子經久本州ヲ徇フ、元就及元繁ノ子、光和、吉川興經、(山縣郡小倉山城主)熊谷信直等、皆之ニ屬ス、明年、大內義興來リ攻メ、元就ニ破ラレテ歸ル、是ニ於テ元就兵威日ニ振ヒ、信直等之ニ附ス、天文三年、光和之ト戰ヒ、克タズシテ死シ、姪信實嗣ギ、其黨皆散ジ、信實金山ヲ弃テ若狹ニ奔リ、其地皆元就ニ歸ス、後元就、大內義隆ニ附ス、九年、尼子晴久大擧シテ來リ侵シ、元就ヲ吉田ニ攻ム、義隆之ヲ援ヒ、共ニ晴久ヲ擊テ大ニ之ヲ破リ、州豪皆大內氏ニ屬ス、二十年、義隆、其臣陶隆房ニ弑セラル、元就、隆房ヲ誅シ、悉ク大內氏ノ故地ヲ併ス、永祿九年、尼子氏ヲ滅シ、提封十州ニ連ル、(安藝、周防、長門、備後、備中、石見、出雲、伯耆、隱岐、豐前、)元龜二年、元就卒シ、嫡孫輝元封ヲ襲ギ、

り、元來山國なれば直には付がたき道を、山に登り谷に下りて、無理に近道に作りなせり、余(〇南畝)かねて聞居しは、日本の道路は、其始大かた行基菩薩の差圖なりといふ事なりしが、いづれの國の道も、山あれば其裾を通りまはりて、谷をつたひ行き、なるたけは山坂を登りくだらず、平坦の所をかよふ様に付たるものなり、只藝州に成てはまはり道なく、大方直に行やうに、山谷も厭はず、登り下りて道は付たり、他の國の道をひらける心とは、格別のやうにみゆれば、これかならず平相國清盛の改め給ひしか、又ちかき頃の福島正則か、何れ豪雄の氣象の人のなす事なるべしとおもひしが、其後此隱戸の瀨戸の事を聞て、彼陸地も平相國の手なるべしと思ひし、

安藝

〔延喜式 二十八兵部〕諸國驛傳馬 〇中略

安藝國驛馬(眞良、梨葉、都宇、鹿附、木綿、大山、荒山、安藝、伴部、大町、種篦、濃唹、遠管各廿疋、)

〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年十月十日己未、免安藝國遠管驛々子當年調、

〔安西軍策 三〕隆元赴防州事附大友毛利和睦事

隆元ハ周防ヲ打立、雲州ヘ上リ給ケル處ニ、藝州佐々部ノ宿ニ於テ俄ニ煩給、同(〇永祿)六年八月四日、行年四十一ニシテ終ニ逝去シ給ケリ、

國號沿革

〔日本國郡沿革考 三山陽道〕安藝　古作阿岐(古事記、國造本紀、)天平六年九月、勅、安藝周防二國、以大竹河爲國界、

上國、管八郡、四百三十六村、

沼田(ヌタ)(三十三村、仲哀紀、渟田門、國造、)　佐伯(サヘキ)六十三村　豐田(トヨタ)(五十六村、本沙田郡、延喜式等作沙田、和名抄云、今沙作豐、)　山縣六十四村

高宮(タカミヤ)三十二村　加茂(八十八村、延喜式等作賀茂、)　安藝(三十八村、古國府)　高田六十二村

〔藝備國郡志 上安藝〕建置沿革

日本紀云、神武元年十有一月、天皇至筑紫國崗水門、十有二月、至安藝國、居于埃宮、云云、今考埃宮、不知其處、矣、國名風土記云、神功皇后曾欲征三韓、經西海道、王師所到、糧食盡罄以餉之、到斯邦則國方

安藝國佐伯郡宮內村　一里三十四町四十五間　友田村里地川岸　一里一十六町二十六間
津田村十王堂市　二十九町三十七間　同岩倉　三里一十三町四十四間（至國界二里一十四丁二十三間）　周
防國玖珂郡大原村（中略）
從安藝國津田歷山代至七朋
安藝國佐伯郡津田村十王堂市　二里一十六町三十三間（至國界龜尾川峠一里一十四丁一十二間）　周防國玖珂郡
秋縣村龜尾川
〔日本實測錄一沿海〕從大坂沿海至赤間ヶ關（中略）
安藝國豐田郡忠海濱町、三十四度二十分半、　三里一町四十五間半　加茂郡下市村（至竹原町一十町五間）
四里一十五町七間半　豐田郡吉奈村キサン岬　二里二十三町四十四間　加茂郡三津村、三
十四度一十九分半　三里一十二町一十六間　內海村濱（至內海村宿所六間）三十四度一十七分半、　一里
一町一十八間半　阿戸村大歲原（至鹽屋濱徑潮一十四町五十九間）　三里三十五町五十三間半（至鹽屋濱二里三十一町五十三間）
半　川尻村、三十四度一十四分半、　三里二十町四十九間　廣村　六里八町三十四間（至隱戸瀨戸四里二
十町一十二間）　安藝郡宮原村奥町、三十四度一十四分半、　六里二十三間半（至吉浦村三石峠一里三十五町三十九間半）　坂、
村橫濱　三里三町五十四間（至橫濱北浦一里一十三町二十九間）　海田村　二里一十三町四十七間（至府中村往還橋傍二里
一十二町五十六間）　府中村　三里三十二町三十四間半（至仁保島村大河浦一里三十三町二十二間）　沼田郡船入新開　二里
五町、一十三間　川田村己斐川口　二里三十三町五十七間（至皆賀村一里三十一町一十一間）　佐伯郡廿日市
五里二十六町二十六間（至地御前村三十五町三十二間、從地御前至大野村丸石峠三里三十一町二間）　玖波村　三里二十町四十一間
（至黑川村一十六町五十四間半、從黑川至小方波田村九町一十九間、從小方波田至國界一里五十八間）　周防國玖珂郡今津村
〔西遊記續篇三〕隱戸の瀨戸（中略）
藝州の陸地を通りし時、其大道のつくりやうを見るに、他の國とは違ひて、多くは眞直に作りた

從備後國三次歷吉田至下町屋略○中

安藝國高田郡上甲立村〔至上甲立本町五丁一十四間半〕　一里三十二町一十五間　吉田十日市村樋本町　一里三十四町三十四間　長屋村渡橋北頭　二里九町一十八間　上根村　二里一十町五十五間　高宮郡下町屋村横川　〔從三次至下町屋〕街道通計一十二里四町五十九間

從安藝國廣島歷可部及新庄至佐摩

安藝國沼田郡廣島境町二町目　一里三十四町四間半〔至下安村渡場、一里一十五丁二十一間半〕　高宮郡北之庄村古市　二里六町四十三間　可部町尾村　二十町四十九間　下町屋村横川　三里二十三町二十五間〔至可部渡場、二里八丁二十七間〕　山縣郡本地村　二里一十九町四十二間半　蔵迫村　一里一町九間　中山村　二十町一十五間　新庄村宮庄　三里二十町五十四間〔至國界、一里二十一丁二十四間、從國界至龜谷村、一里二丁四十八間、〕　石見國邑智郡出羽市略○中

從安藝國新庄歷市木至淺井

安藝國山縣郡新庄村宮庄　一十三町二十八間　新庄村新庄市　二十八町一十一間　大朝村　二里二十九町二十二間〔至國界、一里二十三丁三十六間〕　石見國邑智郡市木村略○中

從安藝國新庄歷加計至津田

安藝國山縣郡新庄村新庄市　一里三十一町二十四間　都志見村　一里二十八町三十間　戸谷村小戸谷　三里三十六間　加計村加計市　三里六町〔至加計村太田川岸、四丁三間、從川岸至龜渡、二里九丁五十七間、〕　筒賀村　一里三十一町一十二間　岡板原　一里一十九町一十二間　佐伯郡吉和村[illegible]　三里二十七町三十二間　虫所山村　二十六町二十七間　津田村岩倉　〔從加計至津田〕街道通計一十七里二十六町五十三間、

從安藝國宮內歷津田至津和野、

道路

林魚鹽の利も亦厚し、

〔易林本節用集下〕安藝州(藝州)上、管八郡、南北二日半、山深而材木多、海近而鹽苔饒也、五穀不秀、大下國也

〔類聚國史八十三政理〕弘仁十年七月辛丑、勅、安藝國土地墝薄、其田下下、百姓農作未有豐備、是以去大同□限六箇歲、國內田租率十分免四、〇下略

〔日本實測錄四街道〕從攝津國西宮中國街道至赤間關〇中略

安藝國豐田郡本鄕村(又呼本鄕宿) 三十四度二十四分半、 三里三十三町三十三間 田万里村、三十四度二十五分、 二里二十二町三十六間半 加茂郡西條四日市、三十四度二十五分半、 三里二十町二間 安藝郡上瀨野村一貫田、三十四度二十五分半、 二里二十七町四間半 海田村(又呼海田市) 一里九町三十一間(至府中村社還橋一里一丁五十七間) 府中村岩鼻 一里四町四十八間(至廣島城大手前一里一町三十四間半) 沼田郡廣島中島本町猫屋橋(沿本川至舟入新開一十一丁三間) 三町三間半 同堺町二町目 二町一十二間 廣島堺町四町目、三十四度二十分、 一十一町三十九間 川田村己斐川岸 一里三十町四十四間半 佐伯郡晉賀村 一里二町三十四間(至五日市二十六丁五十五間) 廿日市、三十四度二十分半、 一里九町二十四間 宮內村 三里六町四十一間 玖波村、三十四度一十五分半、 二里二十二町二十五間半(至黒川村二十一丁二十七間、從黒川至小方波田村九丁一十九間、從小方波四至國界小瀬川岸一里三丁三十五間半) 周防國玖珂郡關戸村〇中略

從備後國吉舍歷志和堀至岩鼻〇中略

安藝國豐田郡乃美村乃美市 二里三十二町五十七間 上竹仁村 一里二十町三十三間 加茂郡志和堀村、三十四度二十九分、 三里二十七町一十一間 高宮郡福田村、三十四度二十六分半、 二里一十八間 安藝郡府中村(至總社一十四丁三十六間) 四町三十間 同岩鼻 (從吉舍至岩鼻)街道、通計一十七里二十七町三十三間、

〔安西軍策一〕大内藝州銀山櫻尾圍兩城事
大永四年五月二十日、大内義興息周防介義隆、防長豐筑ノ勢三萬餘騎ヲ率、周防ニ打出、岩國永興寺ニ著陣シ、茲ニテ二手ニ分、〇中略一方ハ義興自大將トシテ、一萬餘騎、草津二保島ノ城ヲ攻寄、ソレヨリ櫻尾神主ガ城ニ寄テ攻戰フ、

〔安西軍策二〕三浦越中仁保島合戰事
同年〇弘治元年陶入道全薑、防長豐筑ノ勢ヲ催シ、先嚴島仁保廿日市邊ノ城ノ樣體爲見計トテ、三浦越中守ニ究竟ノ兵四五百騎相添、舟數艘ニテ差遣ス、草津廿日市ノ沖ヲ漕廻、仁保ノ島ヘ漕寄上リケリ、

〔道ゆきぶり〕備後の尾道より安藝國ぬたといふ所にうつり侍る、道は南東へ出たる山あり、ひがたをへだてたり、いぬゐにそひていそ路はるかにゆくに、吉和といふ所あり、〇中略其海中に木ぶかき小島二ならびたり、是なんくぢら島といふなり、年ごとのしはすに、くぢらといふうをを多くよりきつゝ、又のとしのむ月に又かへり侍るとなん、是はこゝにいます神の誓にてかく侍ると、海人どもの申也、其より猶南に大海に出るさかひをば、めかりの瀬とぞいふなる、〇歌略北より南にさし出たる山さきに、松や檜原しげりて、いとおもしろきおのへあり、いとさきとぞいふ、〇歌略むかひにひがたをへだてたる山を、ゐんの島といふ也、

〔藝備國郡志上安藝形勝〕地勢廣潤、風氣和暖、二川交流、夾灌州境、田宅豐饒、國民安逸、

〔藝藩通志一安藝國〕疆域形勢
およそ山陽の國勢は、皆山に背き海に向ふ、當國も亦しかり、長山うしろに横りて、山陰道を隔、海水前に繞りて南海道に接す、大抵北は高く、南は低し、氣候南北同じからざれど、多くは和暖なり、田地山間に在、狹くして美からず、北境は民戸稀少にて、鐵を採て生理を助く、南方は民戸稠密山

の崎と、此島のあはひ二十餘町ばかりへだてたる中に、小じまのさと〳〵ゑげにて、みゆるひとつ侍、これなんこぐろ島といふなるべし、此島のあたりをばあたとゝぞいふなる、

島もりにいざことゝはんたがために何のあたとゝ名にしおひけむ、その南にあたりて、かすめる島々あり、まさかりのせとゝぞ申なる、此國と伊豫の國とのさかひにて侍るとかや、海のうへに國のさかひのみゆるこそめづらかなれ、○中略島の四方に入江どももあまた有て、見所かぎりなく侍るなり、百浦侍るとぞ申、

〔嚴島道芝記　一〕いつくしまは、安藝國佐伯郡の海の中にあり、めぐり七里、東西北の三方、地を相さる事、遠きは四五里、ちかきは一里ばかりなり、南の方は、はるかに伊與の二名のしま、つくしの海までも見ゆ、山そびえ、江めぐり、くま〳〵まで松おひしげり、うら〳〵の名所、岡谷の舊地、百にあまれり、○中略もとはおんがのしまと名づけ、宮ゐしたまへる所をば、みかさのはまといふ、おんがといへる事は、明神鎭座おはしまして、神の御香のふかきゆへなりとかや、○中略又みやゐまといへるは、此神の宮地の島なるゆへに稱せる名なり、○下略

〔嚴島圖會　一〕嚴島は安藝の國西海中にあり、府城廣島を去ること五里、佐伯郡に屬せり、島周廻七里、西北を面とし、東南を背とす、遠くは伊豫周防の地を望み、ちかくは佐伯郡の地方に對せり、舊島號は恩賀島、また御香島、あるは霧島、我島など稱へりといふ説あれどさだかならず、おもふにこの島、もとはさせる名もなかりしに、御神の鎭坐し後、その神號の市杵とかよはして、頓て伊都岐島とは號たるならん、類聚國史、延喜式、三代實錄、山槐記、拾芥抄等の諸書、みな伊都岐島とあり、後世專ら嚴島(イツクシマ)と稱へたり、是もまたその音のかよへるゆゑなり、○註略また宮島といへるも、其唱既に久しくして、高倉帝御幸記及び殊域の書、登壇必究、圖書編等にもみな宮島とかけり、島のうちに七浦八景の稱ありて、日本三名區の其一なり、○下略

似島　在安南郡海中、古稱二島、後世島之形容以似富士山、改字號似島、二與似倭語相同故然也、一說、島形似側箕、故號箕島云々、未知孰是、

鐵輪島　在安南郡海中、倭俗鐵輪爲坐、竪焦三脚小鐵柱、脚如小屈之以置爐中、安釜或鐺以煮物、是曰鐵輪、是島形容似是、故曰鐵輪島、元赭赤地也、近世種松子、今蕃茂成林矣、略○中

倉橋島　在安南郡海中、周廻七里餘、民家數百宇、農商雜居、

江田島　屬安南郡、周廻七里、田圃多、略○中

能見島　周圍七里許、屬佐西郡、農工商並宇連聯、船匠造船賣四方、

大崎島　周廻七里、屬豐田郡、年々出田租、收海賦、

瀨戸田島　屬豐田郡、西州來往之船舶多繫焉、此處多船匠、造大船小艇、以賣于四方、

〔藝藩通志安藝國三十八〕安藝郡　島嶼門附

仁保島　周廻四十五町、略○中　江田島　周廻七里、略○中　宇品島　鐵輪島名○の西にあり、高一町、周廿六町、居民四十戸あり、　似島　宇品の南にあり形富士に似たり、俗に小富士とよぶ、高四町、周九十町、居民五十戸あり、

〔大内家壁書〕從山口、於御分國中、行程日數事、略○中

安藝國略○中

日當島七日請文十九日　吳島五日請文十五日　蒲刈島六日請文十七日　能美島四日請文十三日略○中

寬正二年六月廿九日　備中守奉　秀明略○下

〔道ゆきぶり〕廿日は嚴島にまうで侍、此島は峯三四ばかりそびえあがりて、み山木の年ふりたるうちに、ましりて、老たる松の岩上に生かたぶきつゝ、磯ぎはまでさげりたり、東にさし出たる山

村周廻五町五十間、似島周廻三里一十六町一十六間、峠島周廻一十九町四十八間、金輪島、周廻一里一十一町五十六間、宇品島周廻二十七町四十六間、大カタマ島周廻六町二間、遠測　大荷内島　小荷内島　馬島　小島蒲刈島　ヒクベ島　マナイタ石　清盛塚　スヽカ島　小島室尾　續島　カシノコ島　小島大那　鍋小島　ウルメ島　小カクマ島

實測　安藝國佐伯郡江田、東能美島、一島、因地方異各名　周廻二十八里一十六町一十七間、東能美島大原三十四度一十分半、

沼田郡　實測　江波島周廻二十九町一十四間、南濱三十四度二十二分、

佐伯郡　實測　嚴島周廻七里三十一町五十九間、大西町三十四度一十八分、　引島周廻四町二十六間、　長島周廻一十八町、　片島周廻一里二十一町二十二間、　大黑神島周廻三里一十九町一十七間、　小黑神島周廻一十六町五十九間、　大那砂美島周廻一里九町六間、　小那砂美島周廻一十三町二十二間、　猪子島周廻一十四町二十六間、　阿多田島周廻二里一十一町三十三間、　壁島周廻七町四十一間、　遠測　小島大　離岩　白石大黑神島　白石阿多田島　小島小

アントウ島　築楳島　丸子島

實測　安藝國佐伯郡周防國玖珂郡　甲島周廻二十二町五十九間、　安藝國豐田郡伊豫國越智郡　黑島又呼狐島　周廻五町五十四間、

〔藝備國郡志上安藝山川〕氏。名。島。　在江波之海面、屬安南郡、往來船舶之泊所也、上世所謂我島、即今之氏名也、氏與我字形相似、誤我作氏乎、一說、佐西郡海上有島名我島、是則古所謂我島也、今西州往來之船、直過蒲刈之海路者、不繫我島、經隱渡而赴西島者、必繫船於此島以待順風、〇中略

仁。保。島。　屬安南郡、與氏名島相比、漁人在海濱、農家在山門、秋米二千石零、島周廻二里許、四方有七浦、〇中略

町一十八間、箱島周廻六町五十七間、向山島周廻一里二十八町二十六間、上島周廻三町一十四間、鎌島周廻一町四十六間、女子島周廻一十四町二十五間、長島周廻一里二十八町八間、小アイカ島周廻四町三間、大アイカ島周廻一十三町一十一間、ツノカ島周廻一十三町三十間、ヘラ島周廻一十一町二十九間、中ノ島周廻一十三町二間、小島周廻九町六間、三日田島周廻一里一十三町二間、黒島周廻一十三町三十五間、豊島周廻二里一十三町七間、ツタヒ島周廻一里六町五十五間、齋宮島周廻一里六町三十四間、遠測 小島大田浦村 小島小田浦村 牛踏 唐島 小島阿波島 唐船島 大礒 九島 鷹島 鼻クリ島 鍋島 鴫瀬

加茂郡 實測 吉良崎島周廻一十一町二十八間、菅島周廻一十二町四十七間、龍王島周廻一十二町四十五間、大芝島周廻一里一十九町二十三間、小芝島周廻八町二十四間、馬島周廻二十六町五十九間、小鹿島周廻一十六町一十間、柏島三津口村周廻一十五町三十二間、横島周廻八町五十九間、柏島川尻村周廻二十四町五十二間、情島周廻一里三町四十六間、小情島周廻七町五十三間、遠測 ハリ石瀬 女猫島

安藝郡 實測 蒲刈下島周廻四里七町三十一間、三之瀬町、三十四度一十二分、瀬戸、倉橋、田原、早瀬、渡子、島、一瀬島、又云ニ鹿老渡方、瀬ニ各名ハ周廻二十五里二十五町二間、倉橋島鹿老渡浦、三十四度四分半、大子島周廻五町三十六間、蒲刈上島周廻七里三十七間、大松島周廻三町一十四間、小松島周廻二町四十七間、大黒島周廻二十八町四十八間、小黒島周廻二十三町二十七間、辨天島周廻二町一十二間、鹿島又呼ニ鹿島周廻二里一十二町二十七間、羽山島周廻一十町四十四間、横島周廻一里五間、情小島周廻六町二十八間、黒島周廻一十八町五十三間、長島周廻七町五十一間、中ノ島渡子村周廻一十二町四十一間、情島周廻五町四十九間、島小島周廻三町二十六間、中ノ島吉浦

島嶼

安藝國は〈略〉○中四隣、東は備後、西は周防、北は石見、南は海を隔て、伊豫に對す、東西廣凡十七里、東は高田郡高田原村より、西は佐伯郡中道村に至る、南北袤凡十五里餘、南は賀茂郡廣村海邊より北は山縣郡大塚村に至る、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平六年九月甲戌、制、安藝周防二國、以大竹河爲國堺也、

〔日本地誌提要 五十六 安藝〕疆域　東ハ備後、西ハ周防、北ハ石見、南ハ海ニ至ル、東西凡貳拾里、南北凡壹拾六里、

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕それよりおかだとかや云はおほたき川とて、安藝と周防のさかひの川の末の海づら過て、周防の國岩國ゆふむろ岡などいふ所々きたにみゆ、

〔西遊雜記 一〕安藝周防の界ひは小瀬川といふ川を以て堺とせり、此川より長門赤間ヶ關〈下の共〉迄三十六里といふ、

〔日本實測錄 九 島嶼〕安藝國豐田郡　實測　生口島、周廻六里三十四町五十五間、御寺浦、三十四度一十七分、瀨戸田浦、三十四度一十八分、　大崎上島、周廻一十二里一十一町七間、東野浦、三十四度一十六分半、　大崎下島、周廻五里二十七町四十九間、御手洗浦、三十四度一十分半、　宿根島、周廻四町五間、　小佐木島、周廻三十二町二十一間、　佐木島、周廻三里二十一町四十九間、　下小佐木島、〈從二東岬一至二西岬一〉三町、　剸石島、周廻二十一町五十四間、　高根島、周廻二里二十六町二十四間、　木子島、周廻三町一十二間、　大久野島、周廻一里二町一十七間、　小久野島、周廻一十六町二間、　棚林島、周廻六町三十間、　阿波島、周廻一里九町六間、　左組島、周廻二里二町三間、　大毎島、周廻一十四町一十六間、　小毎島、周廻七町三十間、　生野島、周廻三里一十町四間、　大桐島、周廻一十一町五十九間、　柏島、周廻七町三十間、　鍋島、周廻二町四十七間、　船島、周廻二十三町一十五間、　木臼島、周廻九町三十七間、　臼島、周廻一里六町二十八間、　美島、周廻六町五十間、　折目島、周廻一十三

神と云も見えたり、岐字濁て讀べし、藝も濁音に用ふ字なり、

〔倭訓栞前編三〕あき　秋をいふ、飽の義なり、百穀已に成て、萬民飽足の時なればおかいふめり、此國を千秋長五百秋長〇中略瑞穗國と名づけたまひしも其義成べし、安藝の國も同義なるにや、

〔諸國名義考下〕安藝

和名抄に、安藝國府在安藝郡、名義は、鯛より負し名なるべし、同抄に、鯛本朝式云、多比魚類也とあり、日本書紀、仲哀天皇二年夏六月、皇后從角鹿發而行之到渟田門、食於船上、時海鯽魚多聚船傍、皇后以酒灑鯽魚、鯽魚卽醉而浮之、時海人多獲其魚、而歡曰、聖王所賞之魚焉、故其處之魚、至于六月、常傾浮如醉、其是之緣也とあり、〇中略さて此國に、安藝郡安藝鄕あり、三代實錄には、安藝津彥神といふもあり、こも伊勢津彥伊賀津姫吉備津彥などの如く、此國に坐し故に然負せしならむ、

〔地勢提要乾〕各國經緯度帶星經

安藝廣島、革町極高三十四度二十四分、經度西三度一十七分、從東都同上〇東海道、白川、南村、山陽道、二百三十里一十二町一十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

安藝　廣島　三四度二四分〇〇秒　嚴島　三四度一八分〇〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　安藝　廣島　西三度一五分〇〇秒

〔藝備國郡志上安藝形勢〕西隣周防、北環出雲石見、東接伯耆備後、南連伊豫、西北枕山嶽之險、東南帶江海之固、

〔藝藩通志一安藝〕疆域形勢

古事類苑

地部二十七

安藝國

名稱

安藝國ハ、アキノクニト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ備後、西ハ周防、北ハ石見ニ接シ、南ハ海ニ面ス、東西凡ソ二十里、南北凡ソ十六里、此國ハ古ヘ國府ヲ安藝郡ニ置キ、沼田、賀茂、安藝、佐伯、山縣、高宮、高田、沙田ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世高宮郡ヲ高田郡ニ併セ、沙田郡ヲ豐田郡ト改メ、更ニ沼田郡ヲ廢シテ其地ヲ合ス、安藝郡ハ、始メ分チテ安南安北ノ二郡ト爲シ、ガ後安南郡ヲ安藝郡トシ、安北郡ヲ高宮郡トス、佐伯郡モ亦佐東、佐西ノ二郡ト爲シヽガ後、佐西郡ヲ佐伯郡ト爲シ、佐東郡ヲ沼田郡ト爲ス、而シテ高宮、沼田ノ二郡ハ、並ニ古名ヲ用キタレドモ、固ヨリ其舊地ニハ非ズ、明治維新ノ後、沼田、高田二郡ヲ合セテ、安佐郡ト爲シ、新ニ廣島、吳ノ二市ヲ設ケ、廣島縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕安藝

〔運歩色葉集阿〕安藝六郡

〔新撰類聚往來下〕國名〇中略安藝藝州

〔日本風土記一晉語島名〕安藝阿計

〔古事記傳十八〕阿岐國は、山陽道なる安藝國なり、名ノ義未思得ず、山城國相樂郡の和伎は、崇神紀に伎ば我君の義なり、是に准へば、此國名も若くは我君歟、さる由縁ありてや名けゝむ、安藝郡安藝鄕もあれば、其より出たる國ノ名なるべし、三代實錄十四に、此國に安藝郡座

雜載

よりちかし、〇中略

密語(ささやき)の橋　府中にあり、同名奥州にもあり、

鞆山　鳳早浦　在所未詳也

〔延喜式　二十八　兵部〕諸國健兒〇中略　備後國五十人〇中略

諸國器仗〇中略　備後國甲五領、橫刀卅口、弓卅張、征箭卅具、胡籙卅具、

〔吹塵錄〕五人口及國高

文化元甲子年諸國人數調略○中

一人數三拾壹万八千五百七拾七人　　高貳拾九万五千六百七拾八石餘　備後國

内　拾六万五千九拾六人　男
　　拾五万三千四百八拾壹人　女

弘化三丙午年諸國人數調略○中

一人數三拾六万八百三拾貳人　　高三拾壹万貳千五拾四石餘　備後國

内　拾八万五千貳百八拾五人　男
　　拾七万五千五百四拾七人　女

〔藝藩通志〕三備後國戸口

家四万六百五戸　人十七万九千四百七十八口　三原府、九百二戸、六千三百七十八人　尾道町、二千九百二十六戸、九千四百八十八人　御調郡、一万三千三百五十四戸、六万三百四十五人　甲奴郡、九百四十一戸、四千百十四人　世羅郡五千三百四十二戸、二万五千五百四十九人　三谿郡、三千六百十八戸、一万六千二百九十四人　奴可郡、三千四百二十戸、一万三千四百四十六人　三上郡、二千百二十一戸、八千九百十一人　三次郡、四千七百九十一戸、二万二千七十八人　惠蘇郡三千百九十戸、一万二千八百七十五人

風俗

〔人國記〕備後國

備後國ノ風俗ハ人之氣實儀ニ而、一度約ヲシタル事ハ變カヘヲスル事鮮シ、然レドモ愚痴成事多々故、不實成事ヲモ不辨而ウケ合、終ニ惡名ヲ取ル事多カルベキナリ、大體ハ西備中之風俗也、武士之風儀モカタノゴトク也、

〔藝備國郡志〕下備後風俗人性柔慧、民専漁鹽之利、俗事商賈之業、

名所

〔日本鹿子〕十二同國後○備中名所之部

柄の海　宮野　尾の道にちかし尾の道は東西に連る宿也、北方は山、南は海也、宮野といふも是

備後（〇中略）　右廿九國輸絹（〇中略）

備後國（行程、上十一日、下六日、）海路十五日

調、白絹十疋、帛一百絇、絲九十絇、緜絲廿絇、自餘輸絹、鍬、鐵、鹽、　庸、白木韓櫃三合、自餘輸米、鹽、鐵、鍬、

中男作物、紙、木綿、紅花、黄蘗皮、黒葛、漆、胡麻油、押年魚、煮鹽年魚、許都魚皮、大鰯雜腊、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥（〇中略）

備後國廿八種　白頭公五斤、石斛卌九斤、桔梗卌五斤、白朮卌四斤六兩、細辛卌斤、昌蒲四斤、黄蘗十斤、當歸六斤、薺苨廿三斤、芎藭二斤、木斛十五斤、伏苓五斤、升麻一斤、紫菀十三斤、夜干廿一斤、赤石脂三斤八兩、桑螵蛸十兩、薯蕷一斗四升、麥門冬三斗六升、桃人一斗一升、車前子二斗三升、蒺蔾三升、麻子一斗四合、葶藶子一斗六合、蜀椒一斗三升、獺肝三具、猪蹄五具、朴消大三斗、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、（〇中略）宅常擁、集諸國土產、貯甚豐也、所謂（〇中略）備後鐵、

〔毛吹草 三〕備後

疊表　同表振土　柳籠履　矢箆島篦竹　柄尻切　編笠　尾道酒　三原酒　田島鯛（三月大網ニテ多取）

人口

〔類聚三代格 八〕太政官謹奏

備後國神石、奴可、三上、惠蘇、甲努、世羅、三谿、三次等八郡、調絲相換鍬鐵事、

右件國百姓彫弊、積有歲年、雖加存濟、猶未復舊、而前件八郡、僻居山間、土宜採鐵、不便養蠶、所輸絹絲、營求多苦、因玆承前國司、屢請停絹絲、令輸鐵、伏望永停絹絲、令輸鍬鐵、謹以申聞、謹奏者、奉勅依奏、

延曆廿四年十二月七日（〇又見日本後紀）

〔官中秘策 五〕備後國　十四郡（〇中略）

一人數三拾万六千八百拾八人　内（拾五万八千百貳人男、拾四万八千七百拾六人女）

[illegible]

（藝備國郡志下備後郡名）御調郡（凡邑數計五十九、田畠算二萬九千二百六十九石零、）二世羅郡（凡邑數計四十九、田畠算二萬九千五百七十一石零、）三谿郡（凡邑數計三十八、田畠算一萬八千百五十六石零、）奴可郡（凡邑數計三十八、田畠算一萬七千四百六十一石零、）三上郡（凡邑數計十七、田畠算一萬二千七百八十石零、）甲奴郡（凡邑數計八、田畠算四千五百十三石零、）六郡合十二萬石零、戸三萬五千七百七、口十萬四千六百七、牛馬合二萬四千百五十六

（日本鹿子十二）備後國、十四郡、中上國、東西二日餘、知行高二十三万八千八百九十石、

（官中秘策五）備後國　十四郡（略○中）

一石高貳拾九万五千六百七拾八石餘

（吹塵錄五人口及國高）天保度御國高調（略○中）

備後國（御料私領）　一高三拾壹万貳千五拾四石九斗三升貳合

（延喜式二十六主税）諸國出擧正税公廨雜稻（略○中）

備後國正税公廨各廿四万束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、鑄錢司俸料二万八千束、修理池溝料一万五千束、救急料八万束、

（倭名類聚抄五國郡）備後國（略○中）管十四（中略）正公各二十四萬束、本稻六十二萬五千束、雜稻十四萬五千束、

（延喜式十五內藏）諸國年料供進（略○中）　鐺子（中略）備後（中略）土器廿大鐺國各四合（○中略）　壺[illegible]　甕（中略）備後二升

（延喜式二十三民部）年料舂米（略○中）　備後國（大炊一千一百九十五石、四斗三升五合○中略）

年料租舂米（略○中）　備後國（一千石○中略）

年料別貢雜物（略○中）　備後國（鐵鍬二百斤○中略）

諸國貢蘇番次（略○中）　備後國七番（二口各大一升、五口各小一升、○中略）　右十四箇國爲第六番（子午年○中略）

交易雜物（略○中）　備後國（白[illegible]十二尺、綿二石、[illegible]子四合、鹿角十枚、大豆十六石七斗、小豆一石七斗、胡麻子二石、醬大豆六十石、隔三年、醬大豆十石、）

（延喜式二十四主計）備後（略○中）　右十二國遠上錄（略○中）

藩封

田數 石高

一家地文書庄園事〇中略　新御領〇中略　備後國奴可東庄　別當三位讓進庄々〇中略　備後國小豆庄〇中略　前攝政〇中略　家領　女院方〇中略　備後國坪生庄(最勝金剛院領)〇中略

建長二年十一月　日　愚老(在判)

〔桃華蘂葉〕一家領幷敷地等之事

備後國坪生庄　山名被管人大田垣爲代官、其後平賀預申之、毎年年貢三千五百疋從等也、〇下略

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合

九貫八百七十文　等持寺領(備後國信敷庄段錢)　五貫文　伊勢備後入道殿(備後國志摩利庄段錢)　五貫文　杉原左京亮殿(備後國杉原本庄段錢)〇節略

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緖雖分傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　備後國　相原保〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰(在判)〇下略

〔師守記〕貞和三年二月十七日庚寅、今日新左衞門尉國兼爲御使下向備後國栗原保、

〔慶應元年武鑑〕阿部主計頭正方(帝鑑間　四品元治元子五月叙)　拾一万石　居城備後深津郡福山　江戸ヨリ百五十四里半

(輝元領、慶長五、福島左衞門大夫正則、元和五、水野日向守勝成、同美作守勝重、同日向守勝定、同美作守勝慶、元祿十三、松平下總守忠雅、寶永七、阿部備中守正邦、以後領之、)

〔倭名類聚抄五國郡〕備後國〇略　註管十四(田九千三百一町二段四十六步)

〔伊呂波字類抄比國郡〕備後(管十四(中略)本田九千六百五十八丁(上九日下五日))

〔拾芥抄中末本朝國郡〕備後(上中)十五郡(中略)田九千二百九十八町

〔海東諸國記〕備後州　產銅、郡十四、水田九千二百六十九町二段、

蘆品

〔備中兵亂記〕元親謀叛之事附藝陣寄來事
親成〇三村父子驚キ、天正二年十一月七日ノ夜、急ギ鞆ノ津ニ馳參ル、

〔安西軍策〕一尼子發向吉田之事
扨藝州ヘ推入ントスル道ハ、幸ニ三吉式部少輔味方ニ屬ケレバ、三吉口ヨリ入ベシ、事ノ樣體ヲ伺見ヨトテ、尼子紀伊守、同下野守、同式部大輔ヲ大將トシテ三千餘騎、天文九年六月下旬ニ、備後國三吉ヘ差向ラル、

〔賀茂注進雜記〕下神領同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ケ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國、可早任院廳御下文、停止方々狼藉、偏遂神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略
備後國　有福庄〇中略
壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔又續寶簡集〕百四十二大塔領之書類集備後國大田庄、寄附高野、被宛不斷兩界供養法用途料了、是依爲重願也、而實平押領之由、依聞食及、被尋仰之處、申狀副進實平請文如此、件庄本自不入沒官注文、令散誓狀之條、非啻忽緖綸旨、已是罪業之因緣也、早可停止違妨之由、可加下知給者、依院宣執達如件、
七月〇文治二年七日　太宰權帥在判
謹上　源二位殿〇賴朝

〔吾妻鏡〕六文治二年七月廿四日己亥、爲仙洞御願、爲被宥平家亡魂、於高野山被建立大塔、自去五月一日、被行嚴密御佛事、而供料所、以備後國大田庄、加御手印、今日所被奉寄也、〇下略

〔古文書纂〕上處分狀後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀
總處分　條々事〇中略

三原府は、御調郡西のかたにありて、別に一城市をなせり、もと木梨庄に屬す、今の藩府廣島を去る十六里、和名抄に作原（みはら）〈美波良〉と出これなり、作をみと讀む、其義詳ならず、抜に字書に除木曰作とあれば、或は神祠のために、草木を芟除て、神の御原とせしよりいふならんか、國史に載る清御原の類考合すべし、木梨庄といふも、無木庄なるべし、又此地に八幡原の名もあれば芟除の義おもひあはさる、姓氏に御原三原あり、此地の名後世專ら三の字を用ふれど、古は御の字を用ひしも知るべからず、地の疆界古今のかはり考へがたし、今西野村の内に三原さめとよぶ地あり、西の界なりしにや、〈○中略〉今は只城市の地のみを三原と呼ぶ、其地廣廿一町餘、表は東にて五町餘、西にて五十町餘あり、郡內、東野、西野、木原、山中の四村、豐田郡須波村、此五ヶ村を合せて三原城屬とす、通じて計れば廣二里餘、東は木原村より、西は西野村に至る、表三里餘、南は須波村より、北は山中村に至る、〈○中略〉地の形勢、海を前にし山を後にし、東に米田山、鉢峯あり、〈○中略〉南は海に[illegible]、櫓水城をめぐり、西にいり海あり、〈○中略〉此地海に面ひ山を負ひたれば、風氣和暖なり、海水常に穩にして、朝に風あれど、夕は必なぐ、俗にこれを三原夕和（ゆふなぎ）といへり、〈○下略〉

〔風雅和歌集〈旅九〉〕九月十三夜、いつく島へ參りけるに、備後のともといふ所にて、海邊月といふことをよめる、　藤原公重朝臣

あたら夜の月をひとりぞながめつる思はぬ磯に波枕して

〔太平記〈十六〉〕將軍自筑紫御上洛事附瑞夢事

新田左中將〈○義貞〉ノ勢已ニ備中備前播磨美作ニ充滿シテ、國々ノ城ヲ責ル由聞ヘケレバ、柄ノ浦ヨリ左馬頭直義ヲ大將ニテ、二十萬騎ヲ差分テ、徒路ヲ上セラレ、將軍〈○足利尊氏〉ハ一族四十餘人、高家一黨五十餘人、上杉ノ一類三十餘人、外樣ノ大名百六十、兵船七千五百餘艘ヲ漕雙テ、海上ヲゾ上ラレケル、同〈○延元元年五月〉五日備後ノ柄ヲ立給ヒケル時、一ツノ不思議アリ、〈○下略〉

と云を以、名づけしにや、土人おもへらく、地もと玉を出す、古歌に詠玉浦これなりと、海東諸國記に、尾路關とあり、圖書編、三才圖會、登壇必究、並に和奴密智と書す、皆此地を云なり、別に市令を置て是を治む、市街及び左右は曾郡村の所管なり、東西北は背後地村の地續りて、村の諸山列り、南は海にて向島と對す、その間纔に六町を隔つ、この地山を負ひ海に臨みて、人家櫛の如く立ちならび、中に官道あり、縱橫に街巷を分つ、源貞世、道ゆきぶりに、北にならびてあさぢ深く、岩ほこりしける山あり、ふもとにそひて家々ところせくならびて、網ほすほどの庭だにすくなしといへり、貞世の時既にかくのごとし、今は實に尺寸の地をあまさず、諸國往來の舟船こゝに輻湊し、百貨交易便を得て富商多く、西國の一都會なり、

〔太平記十六〕本間孫四郎遠矢事
本間孫四郎重氏、中略湊ナル船ニ向テ、大音聲ヲ擧テ申ケルハ、將軍足利尊氏筑紫ヨリ御上洛候へバ、定テ鞆尾道ノ傾城共多ク被召具候覽、其爲ニ珍シキ御肴一ツ推テ進セ候ハン、下略

〔道ゆきぶり〕備後になりては、中々名高きかたよりも、面白きところこそおほかりけれ、入海うちつゞきて礒ぎははるかに行めぐるに、あまのすみかどもの、山もとちかきも、げにかたゝよりありと見ゆ、足引のやまわけくだりて、おのみちのうらにいたりつきぬ、この所のかたちは、北にならびてあさぢふかく、岩ほこりしける山あり、ふもとにそひて家々所せくならびつゝ、あみほすほどの庭だにすくなし、西よりひんがしに入うみとをく見へて、朝夕しほのみちひもいとはやりかなり、下略

〔藝備國郡志下備後土地〕三原、在御調郡、西洋往還之街衢、而舶船之所輻湊也、城外阡陌四通也、土地坦平、天候和暖、民人庶富、

〔藝藩通志十一〕三原府　疆域形勢

村里名邑

〔郡名一覽〕一備後國 御料私領 備州 東西二日半 拾四郡

高貳拾九万五千六百七拾八石八斗八升八合 四百九拾四ヶ村

●福山 百九十四里半)(●三原 廣シマ三万七千石 淺野甲斐 〈上下 二百五里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕備後 十四郡、四百九十四村、

御料私領高三十一万二千五十四石九斗三升二合

御調郡五十九村 世羅郡四十九村 三谿郡三十八村 三上郡十八村 奴可郡三十九村

甲奴郡三十二村 沼隈郡四十三村 深津郡三十二村 安那郡二十九村 品治郡二十一村

蘆田郡二十八村 神石郡三十八村 三次郡四十三村 惠蘇郡二十五村

〔地勢提要〕坤郡邑島嶼奇名

備後 沼隈郡、水吞村、柄、御調郡、蘆田郡、行縢村、品治郡、万能倉村、三谿郡、木乘村、志幸村、神石郡、花濟村、三次郡、

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕合

壹貫文 大和兵庫助殿 備後國 尾道〇戶村〇段錢 三貫貳百廿文 大和彌九郎殿 備後國 十田〇村〇段錢 參貫文

杉原新藏人殿 備後國 草〇原〇村〇段錢〇節略

〔藝備國郡志 下 備後土地〕尾〇道〇 屬御調郡、四民並居雜品之具無不有、西洋海陸之通衢、而海客商夫必投宿於此、而資用於此、 登壇必究曰、尾道曰和奴密知、

〔藝藩通志 三十三 備後〕尾道 疆域形勢

尾道町は御調郡の東南にありて、一大市聚たり、藩府廣島を去る十九里半、廣十町餘、袤五町餘、尾道の名義詳ならず、おもふに此地もとは海涯の地甚狹く、山足にそひて往來すれば、山の尾の道

鄉

〔日本後紀 桓武十三〕延暦二十四年十二月壬寅、備後國○中略三上、三次等八郡、調糸相換鍬鐵、

〔倭名類聚抄 備後國八〕安那郡　天家○高山寺本作大、高迫　三郷　拔屋○高山寺本作原、大坂　驛家

深津郡　中海　大野　大宅

神石郡　神石　志○下所引東大寺寶龜五年文書、有備後國神石郡志麻郷云々之文、高市　三坂

奴可郡　刑部　道俗　斗意　三上

沼隈郡　津宇　赤坂　春部　諫山

品治郡　驛家　品治　狩道　佐我　石茂○高山寺本作道、神田　服織

葦田郡　佐味　廣谷　葦浦　都禰○高山寺本作彌、葦田　驛家

甲奴郡　矢野　甲奴　田總

三上郡　多可　信敷　土木　神代　三上

惠蘇郡　惠蘇　春部　刑部

御調郡　伯多　作原美夏古　者度伊都土　佳質加土之　小國乎久爾　周島乃之萬○高山寺本周作國、島作田、萬作末、歌島宇多乃之萬

世羅郡　桑原　大田　津口　鞆張

三谿郡　三谷　松部　江田　額田　刑部

三次郡　上次　播次　下次　布努

〔東大寺正倉院文書 四十七〕謹啓　申可買勘絲沙彌等事

沙彌慈歡 備後國神石郡志麻郷○戸主物部水部戸口物部多麻○中略

寶龜五年三月十二日

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合略○中

一貫文 ○中略　宮五郎左衞門殿 備後國神石郡高光郷段錢

禪師放濟者、百濟國人也、當百濟亂時、備後國三谷郡大領之先祖爲救百濟遣軍旅、時發誓願言、〇下略

〔藝藩通志 百二十八 備後國三次郡〕疆域形勢 風俗附

三次郡は、備後の極西にて、今の藩府廣島の東北十七里にあり、三次美與之と訓す、倭名抄に見ゆ、同じ抄當郡の鄕名、上次、播澤、下次とあり、此三次を以て郡名とせられしなるべし、但次をよしと訓する義、いまだ詳ならず、按に次は日本紀に須岐とよめり、阿波國に三次鄕あり、倭名抄美須木と訓せり、次はやどるの義にて、古やどるをすきといへり、薩摩國に揖宿郡あり、倭名抄以夫須木と訓せり、されば三次は三宿の義にて、三夜須木といふべきを、須木の反、之なれば三よしと呼ばれしにや、今當郡に畠敷といふ村あり、中古、八次、幡次など丶書たることもありたりといふ、倭名抄にいへる、播次の轉訛にて、今も古名の遺れる考ふべし、されば上次はかみすき、下次はしもすきといひたるなるべければ、三次を合せて阿波のごとく三すきといふべきを、此國にみつきといふ郡もあれば、まぎらはしき故、となへを變られたるにや、拾芥抄には三狹とあり、こは字の誤なるべし、中古三吉に作りしは、訓にて通用せしと見ゆ、廣凡四里半、東は東入君村より、西は伊賀和志村に至る、袤凡六里、南は大力谷村より、北は櫃田村に至る、四隣、東は惠蘇郡、南は、世羅、三谿二郡及び安藝國、豐田高田二郡、西は石見國邑智郡、北は出雲國、飯石郡なり、當郡古は王邑たること、諸郡に同じ、中古以來、三吉氏の所領となる、世々畠敷村に城居す、後上里村、寺戶、又比熊山に移る、慶長の頃は、福島氏の封疆となりて、其重臣を置て守らしめたり、我藩第二世君藝備に封せられ給ふの後、庶子長治君を三次惠蘇二郡、五萬石に分封なされ、上里村比熊山の下に府第を置き、家臣の館舍市街寺社など、それぞれかたのごとく設られぬ、大むね三吉、福島の舊規によりて、增益の事多し、後三世を歷て、嗣なくして絕へ、封邑臣庶みな宗藩に還り、今は諸郡と同じけれど、舊府の地には別に市令を置て治せしめらる、郡村は、上里村を郡本とす、〇下略

ひし時、木梨眞人といへるもの、御舶へ水を獻しより水貢といふ義にて、水調の郡名を得たりともいひ傳れど、其事國史に見へず、延喜式、倭名抄等の諸書、皆御調に作れり、當郡は今の藩府廣島の東十五里にありて、東北は藤山側に接く、廣六里餘、東は後地村より西は泉村に至る、海上に、因島、向島などありて、皆當郡に屬す、四隣、東は沼隈郡、東北は蘆田郡、二郡共に山側西は豐田郡安藝國北は世羅郡、南は海上にて伊豫國に接く、三原尾道も皆當郡の內なれども、所管異なれば地志もまた別にす、今後地村を以て郡本とす、榜示嶺に、藤山側分界の石表を立、番所を置る、○下略

（萬葉集十五）備後國水調郡長井浦船泊之夜作歌三首○歌略

世羅郡

（藝藩通志百五備後國世羅郡一）區域形勢風俗附

世羅郡は國の中央にありて、今の藩府廣島を去ること十六里許、廣八里、東は小谷村枝郷入田原谷より、西は上野山村に至る、袤三里半、南は上徳良村より、北は徳市村に至る、四隣、東南は御調郡、東北は甲奴蘆田二郡に接し、北は三谿郡、西は三次郡、西南安藝國豐田郡なり、甲山町を以郡本とす、○下略

（日本後紀十三桓武）延暦二十四年十二月壬寅、備後國○中略世羅、三谿、三次等八郡、調糸相換鍬鐵、

三谿郡

（藝藩通志百十一備後國三谿郡一）區域形勢風俗附

三谿郡は、名義未詳、或は水谷深谷などの義ならむか、或はいふ當郡郷名に古三谷といへるあり、其地三備の谷あるを以、郷の名とす、因て遂に一郡の總稱ともなりしにやと、地は備後の中央少し西にありて、今の藩府廣島を去ること、東北十六里許、廣四里三十三町餘、東は灰塚村より、西は有原村に至る、袤四里三町餘、南は壯村より北は和知村にいたる、四隣、東は甲奴郡、南は世羅郡、西は三次郡、北は三次、惠蘇、三上三郡の界なり、吉舍を郡本とす、○下略

（日本靈異記上）願覺令放生得現報緣第七

木屋村枯木に至る、袤五里、南は矢野村伊尾村越より、北は稻木村一の渡に至る、五里の内にも、又他領二里許も入交れり、管内四隣、東は郡内にて公邑、また中津領の村なり、南より西は世羅郡、西は三谿郡、北は三上郡なり、稻草村を郡本とす、○下略

〔日本後紀桓武十三〕延曆二十四年十二月壬寅、公卿奏議曰、○中略備後國神名、奴可、三上、惠蘇、甲努、世羅、三谿、三次等八郡、調糸相換鍬鐵、

三上郡

〔藝藩通志百二十二備後國三上郡〕疆域形勢風俗附

三上郡、郡の名義詳ならず、古歌に千早振みかみ山などゝつゞけたるを見れば、御神(みかみ)の義にてもあるべきか、郡の名神に、蘇羅津彥もおはし、鄉名にも神代宮内などいふもあり、考ふべし、地は國の西北邊に近くして、今の藩府廣島を去る二十里の東にあり、廣三里、東は本村より、西は庄原村に至る、袤三里半、南は春田村の飛鄉山津田より、北は川西村に至る、四隣、東北は奴可郡、正南は三谿郡、西は惠蘇郡なり、庄原村を以て郡本とす、○下略

〔日本後紀桓武十三〕延曆二十四年十二月壬寅、備後國○中略三上○中略三次等八郡、調糸相換鍬鐵、

惠蘇郡

〔藝藩通志百三十四備後國惠蘇郡〕疆域形勢風俗附

惠蘇郡は、出雲風土記には、惠宗の字に作る、並に名義詳ならず、國の西北にありて、藩府廣島を距る東北二十五里なり、廣凡五里、東は小和田組より西は竹地谷村に至る、袤凡五里、南は尾引村より北は和南原村に至る、四隣、東は奴可郡、東南は三上郡、南は三谿郡、西は三次郡、北は出雲國飯石郡仁多郡に接す、比和村を以郡本とす、○下略

〔日本後紀桓武十三〕延曆二十四年十二月壬寅、備後國○中略惠蘇○中略三次等八郡、調糸相換鍬鐵、

御調郡

〔藝藩通志九十六備後國御調郡〕疆域形勢風俗附

御調郡は萬葉集に水調郡と書けり、御水、文字異なれども讀同じ、神功皇后當郡長井浦に到り給

郡なり、西城町を以郡本とす、〇下略

〔日本國郡沿革考 三山陽道〕備後〇中略

沼隈郡　沼隈 四十三村

〔續日本紀 四元明〕和銅二年十月庚寅、備後國葦田郡甲努村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費太多、仍割品遲郡三里、隷葦田郡甲努村、

品治郡　〔三代實錄 九淸和〕貞觀六年十一月廿日癸巳、備後國品治郡人左史生從八位上品治公宮雄、改本居、貫山城國葛野郡、

葦田郡　〔續日本紀 四元明〕和銅二年十月庚寅、備後國葦田郡甲努村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費太多、仍割品遲郡三里、隷葦田郡甲努村、

〔續日本紀 八元正〕養老三年十二月戊戌、停備後國安那郡茨城、葦田郡常城、

〔日本靈異記 下〕髑髏目穴笋揭脫以祈之示靈表緣第廿七

白壁天皇世、寶龜九年戊午冬十二月下旬、備後國葦田郡大山里人品知牧人、爲買正月物、向同國深津郡於深津市而往、中路日晩、次葦田郡於葦田竹原、〇中略從市還來、次同國竹原、時彼髑髏及現生形、而語之言、吾者葦田郡屋穴國鄕穴君弟公也、〇中略我父母家有于屋穴國里、〇下略

甲奴郡　〔藝藩通志 百二備後國甲奴郡〕疆域形勢 風俗附

甲奴郡は元明天皇の御字より置かれしと見ゆ、按に續日本紀に、和銅二年冬十月庚寅、備後國蘆田郡甲努村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費大多、仍割品遲郡三里、隷蘆田郡甲努村とあり、貞本に末の甲努村の上に建郡於の三字あり、類聚三代格、三代實錄、並に甲努に作り、今は努の字を用ふ假名抄甲努に作り、加不乃と訓せり、されば今もかふのといふべし、奴は古は野の訓にも用ゆ、三次郡布努を布野とよむ類なり、甲努の名考ふべからず、神野、河野などの義にてもあらんか、今の郡府廣島の東廿一里にありて、全郡は他領入交りて、藩の所管は廣一里餘、東は稲草村關岩より、西は

安那郡

（續日本紀 元正 八）養老三年十二月戊戌、停備後國安那郡茨城、葦田郡常城、

（古事記 中 孝昭）兄天押帶日子命者、（中略）阿那臣（中略）之祖也

（古事記傳 二十一）阿那臣、阿那は書紀孝德卷十三に穴海、安閑卷に穴(六)網、國などある地にして、和名抄、備後國安那(ヤスナ)郡(夜須奈)これなり、夜須奈とは安那と云を誤りて、後に唱へたるものなり、此例他國にもあり、（下略）

深津郡

（續日本紀 元正 八）養老五年四月丙申、分備後國安那郡、置深津郡、

（日本靈異記 下）髑髏目穴笋揭脫以祈之示靈表緣第廿七

白壁天皇世寶龜九年戊午冬十二月下旬、備後國葦田郡大山里人品知牧人、為買正月物、向同國深津郡深津市而往、（下略）

神石郡

（日本書紀 天武 二十九）二年三月壬寅、備後國司、獲白雉於龜石郡而貢、乃當郡課役悉免、

（日本後紀 桓武 十三）延曆二十四年十二月壬寅、備後國神石、奴可、三上、惠蘇、甲努、世羅、三谿、三次等八郡調糸、相換鍬鐵、

（三代實錄 清和 十一）貞觀七年八月十七日乙丑、備後國神石、奴可、甲努、惠蘇、世良、三谿、三次、三上八郡、居山聞土宜採鐵、連年旱疾、率庶斃亡、四年之間、毎年四郡更復課役、

奴可郡

（藝藩通志 百十七 備後國奴可郡）疆域形勢 風俗附

奴可郡は國の北にありて、藩府廣島を去ること二十四里、郡名文字、倭名抄、拾芥抄等、皆奴可なり、中古或は怒哥、奴哥に作る、皆假字にて、原は額なるべし、郡內に奴可村額部といふ地あり、廣五里、東は小串村より、西は栗村大戸に至る、袤四里、南は末渡村より、北は小鳥原村に至る、四隣、東は備中國哲多郡、南は同川上郡、備後神石甲奴二郡、西は三上惠蘇二郡、北は出雲國仁多郡、伯耆國日野

品遲	同 品治	品治	同	同	同	同	同	同	同	同
		蘆田	同	同	蘆田 蘆田	蘆田	同	同	同	同
甲努		甲奴	同	同	甲奴 甲怒	甲怒	同	甲奴	同	同
	水調	御調	同	同	同	同	同	同	同	同
世良		世羅	同	同	世羅 世眞	世羅	同	同	同	同
	三谷	三谿	同	同	同	同	同	同	同	同
		三上	同	同	同	同	同	同	同	同
		奴可	同	同	奴可 [illegible]	奴可	同	同	同	同
		惠蘇	同	同	同	同	同	同	同	同
		三次	同	同	三次 三吉	三次	同	同	同	同

領也、

〔皇國郡名志〕備後國十四郡

安那（ヤスナ）　驛町無シ　備中界
深津（フカツ）〔福山〕　●神ナヘ　備中界東南海ニ向
神石（カノシ）　驛町無シ　備中郡
奴可（ヌカ）　●東條　伯界
沼隈（ヌノクマ）　●今津　∧鞆町　南海郡
品治（ホンチ）　驛町無シ　國中
葦田（アシタ）　驛町無シ　國中
甲奴（カウヌ）　驛町無シ　國中
三上（ミカミ）　∧庄原　國中
惠蘇（エソ）　驛町無シ　雲界
御調（ミツキ）　∧尾ノ道　藝界南海ニ向
世羅（セラ）　∧甲山　藝界
三谿（ミタニ）　∧古金　國中
三次（ミツギ）　∧三次　藝石雲三國界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕備後

	安那	深津	神石	沼隈
六國史	安那 紀	深津 紀	龜石 紀 神石 三	
古書	穴			
延喜式	安那（ヤスナ）	深津（フカツ）	神石（カノシ）	沼隈（ヌノクマ）
倭名抄	同 夜須奈	同 布加都	同 加女志	同 奴乃久萬
拾芥抄	同	同	同	同
諸書	同 [illegible]	同 [illegible]	上石 [illegible] 神石 [illegible]	同 [illegible]
郡名考	同（ヤスナ）	同（フカツ）	神石（ジンセキ）	同（ヌマクマ）
天保郷帳	同	同	同	同
明治沿革編	同	同	同	同
地誌提要	同（ヤスナ）	同（フカツ）	同（カメイシ）	同（ヌノクマ）
郡區編制	同	同	同	同

〔吾妻鏡三〕壽永三年〈〇元暦元年〉二月十八日丁丑、武衞〈〇源頼朝〉被發御使於京都、是洛陽警固以下事所被仰也、又〈〇中略〉備後、已上五箇國、景時〈〇梶原〉實平〈〇土肥〉等、遣專使、可令守護之由云云、

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕備後國〈國府在葦田郡、行程上十一日、下六日、〉

〔伊呂波字類抄比國郡〕備後國〈中略〉葦田〈府〉アシタ

〔藝藩通志三備後〕國府

備後國府、古は葦田郡に在、今府中村是なり、今東には福山城、西には三原城を置く、〈〇下略〉

〔安西軍策二〕備後三吉合戰事

天文十三年七月、晴久〈〇尼子〉七千餘騎ヲ率、備後ノ國府ニ出張、〈〇下略〉

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕備後國〈〇註略〉管十四〈〇註略〉安那〈夜須〉深津〈布加津〉神石〈加女志〉奴可〈奴加〉沼隈〈奴乃久萬〉品治〈保牟知〉葦田〈安之太〉甲奴〈加不乃〉三上〈美加三〉惠蘇〈衣〉御調〈三豆木〉世羅　三谿〈美多爾〉三次〈美與之〉

〔延喜式二十二民部〕備後國上〈管〉安那ヤスナ　深津フカツ　神石カメシ　奴可ヌカ　沼隈ヌマクマ　品治ホムチ　葦田アシタ　甲奴カフノ　三上ミカミ　惠蘇エソ　御調ミツキ　世羅セラ　三谿ミタニ　三次ミスキ　右爲中國

〔藝藩通志三備後〕郡邑建置沿革考

備後國上古郡を分つの制いまだ詳ならず、按に續日本紀、和銅二年冬十月庚寅、備後國葦田郡甲努村相去郡家、山谷阻遠、百姓往還煩費太多、仍割品遲郡三里、隷葦田郡甲努村、この時いまだ甲努郡を置かれざるに似たり、然るに日本後紀延暦廿四年奏書に、既に甲努郡の名あれば、史に明文はなしといへども、和銅延暦の間と見ゆ、又は和銅二年品遲郡を割き、葦田郡甲努村に隷するといふは卽別郡として、甲努郡と呼けるやも知べからず、又續日本紀養老五年夏四月丙申、分備後國安那郡、置深津郡、とあり、和名抄所載十四郡、〈〇中略〉今に至かくのごとし、拾芥抄には別に吉刀郡を加へて十五郡とす、いまだ何の據を知らず、今時御調、甲奴、世羅、三谿、奴可、三上、三次、惠蘇の八郡、本藩に屬し、その餘六郡は、福山及び中津領も交れり、又甲奴郡も八村當領にて、其餘は公邑と小гу

原景時ヲ守護トス、建武中、足利尊氏反シテ西ニ奔ル、朝廷淺山條範ヲ以テ守護トナシ、神邊ニ治ス、既ニシテ尊氏東上シ、州ノ豪族、宮、三吉諸氏、悉ク之ニ應ズ、正平四年、尊氏其庶子直冬ヲシテ鞆ニ居ラシメ、中國探題ト稱シ、州事ヲ知ル、後吉野ニ歸順シ、京師ニ入リ、兵敗レテ石見ニ奔ル、十七年、山名時氏本州ヲ略定シ、終ニ足利義詮ニ降ル、明德ノ初、子氏淸謀反シテ誅セラレ、備中守護細川滿之、其子基之、相繼テ守護ヲ兼攝ス、嘉吉中、時氏ノ曾孫持豐、赤松滿祐ヲ誅スル功ヲ以テ守護ニ補シ、次子是豐ヲ遣テ神邊ニ治ス、文明中、宗家政豐（是豐姪子）ノ次子俊豐入テ守護ヲ襲グ、傳ヘテ山名氏政ニ至リ、天文七年、大内義隆ニ滅セラル、時ニ尼子經久、亦北疆ヲ蠶食ス、安藝ノ毛利元就、大内氏ニ附シ、宮、三吉、杉原諸氏ヲ降ス、天文ノ末、大内氏亡ビ、全州皆毛利氏ニ歸ス、關原役畢リ、德川氏、毛利氏ノ地ヲ削リ、本州ヲ以テ福島正則ニ賜フ、元和ノ初、罪有テ其封ヲ收メ、八郡ヲ割テ淺野長晟（アキラ）ニ賜ヒ、又水野勝成ヲ福山ニ封ズ、寛永九年、長晟其次子長治ヲ三次ニ分封ス（後三世長經卒シテ嗣ナク、宗家ニ併ス）、元祿中、水野勝岑（勝成ノ玄孫）早夭シテ封除シ、松平忠雅代リ封ゼラル、寶永中、之ヲ桑名ニ徙シテ阿部正邦ヲ封ズ、王政革新、福山縣トナス、尋テ深津縣ト改稱シ、又之ヲ廢シ、小田、廣島二縣ヨリ分治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕吉備穴國造

纏向日代朝（○景行）御世、和邇臣同祖彥訓服命孫八千足尼定賜國造、

吉備品治國造

志賀高穴穗朝（○成務）多遲麻君同祖若角城命三世孫大船足尼定賜國造、

〔國造本紀考四〕吉備穴は景行紀に、日本武尊云云到吉備、以渡穴海、安閑紀に婀娜國などある地にして、和名抄に備後國安那（夜須）郡これ也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、正五位上佐伯宿禰麻呂爲備後守、

四度二十五分、　三里一十一町三十八間（至木原村一里一十七町一十二間、從木原至糸崎八幡社一里四十一間半、從三原至）　三原驛師町　二十三町三十三間半　同中河原（至中町三町三間）　四里一十四町三十四間半（至國界、從國界至田川口入町七間半、從田川至三鳥坂村驛町、）一里二十二町三十一間半　安藝國豐田郡忠海濱町、三十四度二十分半、

宿驛

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國驛傳馬 ○中略

備後國驛馬（安那、品治、者度各廿疋、）

〔藝藩通志 三 備後〕驛程驛郵考

延喜式に、備後國驛馬、安那、品治、者度各二十匹と見ゆ、今官道の所經既に古に異にして、驛を神邊、今津、尾道、三原に置く、

國郡沿革

〔日本國郡沿革考 三 山陽道〕備後　上國、管十四郡、四百九十四村、

御調（五十九村、萬葉集作水調郡、）　世羅（四十九村）　三谿（三十八村）　三上（十八村）　奴可（三十九村）　甲奴（十三二村、續紀云、和銅二年十月、備後國葦田郡甲奴村、相去郡家、山谷阻遠、百姓往還、煩費太多、仍割品遲郡三里、隸葦田郡、建郡甲努村、）　沼隈（四十三村）　深津（三十二村、續紀、養老五年四月、割安那郡、置深津郡、）　安那（二十九村、古事記作穴、和名抄訓夜須、古吉備穴國、見古事記、安那、國造本紀作吉備穴國造、）　品治（十二一村、古品治國、見國造本紀、古事記、舊紀等作品遲、）　蘆田（二十一村、古國府、延喜式等作葦田、）　神石（三十八村、天武紀作神石、）　三次（四十三村）　惠蘇（二十五村）

〔藝備國郡志 下 備後州沿革〕日本紀曰、神武天皇乙卯春三月、徙入吉備國、起行宮以居之、是曰高島宮、積三年間、備舟檝、蓄兵食、將以一擧而平天下也、其後吉備國三分之、曰備前、曰備中、曰備後、即今備後也、古管十五郡、曰安那、曰深津、曰神石、曰奴可、曰沼隈、曰品治、曰葦田、曰甲奴、曰三上、曰惠蘇、曰御調、曰世羅、曰三谿、曰三次、曰吉刀也、田計九千二百九十八町、其內御調郡、世良郡、奴可郡、三上郡、甲奴郡、爲藝州之附傭、安藝八郡與備後六郡、田總計三十七萬石也、

〔日本地誌提要 五十五 備後〕沿革　古ヘ國府ヲ葦田郡ニ置ク、（國府中村ト稱ス、今府川村是ナリ、）今ノ鎌府ノ初、土肥實平備

飯石郡赤名驛（○中略）

　從備後國下加茂、歷東城及正原、至石塚、

備後國安那郡下加茂村　一里三十五町五十二間　品治郡服部水谷村　三里一十五町　神石郡井關村、三十四度四十二分半、　二里一十四町四十間　東油木村宇多　二町五十九間　東油木村、三十四度四十七分、　二里八町五十九間　新免村　一里二十五町四十四間　奴可郡川西村東城町　三里二十一間　見登村帝釋　二里二十九町一十八間　三上郡本村　一里三十二町七間　正原町　三町　同本町　一里一十七町六間　惠蘇郡川北村伊勢町、三十四度五十三分半、　三里二町四十二間　比和村比和町　二里七町二十七間　湯川村　一里一十六町九間　高山村新市驛（至功德寺、四丁）　三里三十二町四十五間（至國界牧峠、一里二十五丁五十一間）　出雲國仁多郡上阿井郡（○中略）

　從備後國吉舍、歷志和堀、至岩鼻、

備後國三谿郡本村吉舍宿　三里一十町　世羅郡津田下村　二里二十七町五十四間　吉原本鄉、三十四度三十五分半、　一里一十二町九間（至國界、六丁四十二間）　安藝國豐田郡乃美村乃美市（○中略）

　從備後國三次、歷吉田、至下町屋、

備後國三次郡原村三次十日市本町　一里六町三間　志和地村渡川岸　二里一十九町五十四間（至國界、二十五丁五十七間）　安藝國高田郡上甲立村

〔日本實測錄沿海〕從大坂沿海至赤間ケ關（○中略）

備後國深草郡引野村（至福山深津町一十七町四十四間、北極高三十四度三十分半、）　四里二十一町四十間（至芦田川口一里四十二間半、從芦田川、至田尻村鳳呂崎、二里三町四十六間半、）　沼隈郡鞆　四里一十三町四十九間半（至阿武兎觀音前、一里八町一間半、）　浦崎村　三里六町四十六間　今津村（沿川、至今津宿、八町四十二間、）　三里一十六町四十七間半　御調郡尾道浦藥師堂町、三十

〔藝備國郡志下備後〕形勢　西北山峙、東南海通西州往來之衝也、西隣安藝、北接出雲、東通美作伯耆、南出備中也、（略）○（中）

〔日本地誌提要五十一備後〕形勢　群嶺北方ニ聳峙シ、東南稍平曠、土壤膏腴、瀕海魚鹽利漕運ノ便アリ、西北諸郡民産瘠薄、多ク採礦ヲ業トス、風俗質直、亦頑陋ヲ免レズ、

道路

〔日本實測錄四備後〕從攝津國西宮中國街道至赤間關（略）○（中）

備後國安那郡下御領村　二十七町二十二間　川北村、三十四度三十三分、　一十八町三十九間　神邊（カンナベ）驛（至福山深津町一里一十六丁二十二間）　一里二十八町四十四間　沼隈郡山手村、三十四度三十分、　二里八町五十八間　今津村川岸　一里三十一町三十一間　御調（ミツギ）郡尾道久保町（至尾道[illegible]町一丁五十四間）　三里一十二町五間半　三原東町、三十四度二十四分半、　三里三町二十四間（至中町一十一丁二十間半、從中町[illegible]）（界二十五丁一十六間）　安藝國豐田郡本鄉村（略）○（中）

從備後國下御領驛、吉舍及三次、至大森、

備後國安那郡下御領村　一里九町二十一間　下加茂村　一里三十二町二十八間　品治（ホンヂ）郡新市村（至宮内村吉備津社一十五町三十六間）　一里八町二十五間　蘆田郡府中市村、三十四度三十五分、　二里二十八町五十二間　行縢（ムカバキ）村　二里一十三町一十九間（至井永村一里三十四丁五十六間）　甲奴郡上下町　二里一十三町四十四間半　世羅郡鶴賀村、三十四度四十二分半、　一里一十一町四十八間　三谿郡本村　九町六間　吉舍（キサ）宿　三玉村（至甲奴郡[illegible]村、三里一十丁五十一間、至北[illegible]高三十四度五十一分、從三田原市至三原町三里二十二丁三十二間、）　一里一十五町三間　見羅坂村、三十四度四十六分、　二里一十七町一十六間　三次（ミヨシ）郡南畠敷（ハタシキ）村（[illegible]木戸村、至正原町、）（三里三十二丁五十四間、）　二十八町四間半（至十日市上町二十二丁四十間半）　原村三次十日市本町　四町二十間　同五日市本町　三里一十二間半（至五日市[illegible]町一里八丁二十五間）　上布野村布野宿　二里一十二町四十六間（至[illegible]峠一里[illegible]）（二十六丁五十八間）　横谷村室市、三十四度五十六分半、　一里二十七町一十七間（至[illegible]界一十六丁三十九間）　出雲國

〔日本地誌提要備後五十五〕疆域 東ハ備中西ハ安藝、北ハ伯耆、出雲、西北ハ石見、南ハ海ニ至リ、群島相連ナリテ伊豫ニ接ス、東西凡壹拾三里、南北凡壹拾九里、

〔日本實測錄島嶼九〕備後國沼隈郡 實測 田島、周廻四里一十町四十四間、田島浦、三十四度二十二分、 裴島、周廻二里一十一町二間、 仙醉島、周廻一里一十八町、 小島、從北至南三町、 百貫島、周廻二町四十五間、 皇后島、周廻六町一十間、 跡隅島、周廻三町二十二間、 鍛冶島、周廻五町五間、走島、周廻一里三十三町四十二間、 袴島、周廻一十町五間、 宇治島、周廻一里一町二十七間、 玉島、周廻三町五十七間、 壽賀留島、周廻三町四十二間、 矢篦島、周廻六町四十一間、 橫島周廻二里一十五町五十六間、 アテキ島、周廻六町五十三間、 百島、周廻二里三十二町一十七間、 遠測 モミノ小島 小島 浦崎島

御調郡 向島、周廻六里二十九町四十三間、富濱島崎、三十四度二十四分、 院島、周廻一十里一町四十三間、重井浦、三十四度二十一分、三庄村、三十四度一十八分半、 加島、周廻二十四町五十七間、 上惠府島、周廻七町四十七間、 下惠府島、周廻四町二十一間、 岡島、周廻六町五十四間、 編島、周廻一里三十三町四間、 大鯨島、周廻三町三間、 大細島、周廻一里一十一町四十五間、 小細島、周廻二十町四十三間、 遠測 笹島 大八重子島 小八重子島 四十島

〔藝備國郡志備後土地下〕向島。 與尾道相對、中間有海隔、故號向島、因島。 在御調郡、島中加宇輔浦、小民汲潮燒鹽、以足國中之用、

〔源平盛衰記三十六〕能登守所々高名事
河野四郎此事ヲキヽ、安藝國奴田太郎ハ源氏ニ志アリ、一ニ成テ軍セント思テ、奴田尻ヘ渡リケルガ、今日ハ備後裴島ニ懸テ、翌日ハ裴島ヲ漕出シテ、奴田尻ニ著、

〔易林本節用集下〕備後、備州上、管十四郡、東西二日、餘、田畔長阡陌繁、五穀早熟而酒醨久、中上國也、

〔萬葉集略解十一上〕續紀、養老五年、分備後國安那郡置深津郡、○中略此みちのしりは備後也、下に其地名をいふ時に、路の後、道の口とのみいへり、

〔毛利元就記〕石見國と備後半國內郡。の分は、雲州の尼子晴久に從ふ、○中略元就の妾に御子四人あり、○中略一人は女子也、○中略備後の國外郡。に上原元祐と云人あり、甲山の城主也、右の御むすめを元祐へ約して聟にし給へば、それより備後外郡の諸士、悉く元就へ相從備後一國御手に入ける、

〔陰德太平記十八〕備後國志川瀧山落城之事
備後國外郡ノ志川瀧山ノ城可被攻トテ、同○天文二十年七月、毛利右馬頭元就、○中略三千八百餘騎ニテ彼表へ打出給、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程
備後鞆山深津郡 極高三十四度三十分半、經度西二度二十一分半、從東京〔東海道西國街道〕自日本橋川南村、鞆山街道二百〇四里一町三間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地
備後　鞆山　三四度三〇分三〇秒　三原　三四度二四分三〇秒
　　　北條濱　三四度二〇分三〇秒○中略

東西里差
山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　備後　鞆山　西二度二一分三一秒

疆域

〔藝藩通志三備後〕疆域形勢
備後國は山陽道に屬して、八ヶ國の一たり、四隣東は備中、西は安藝、北は出雲、伯耆、南は海を隔て伊豫讃岐國なり、東西廣十五里餘、東は奴可郡三坂村より、西は三次郡[illegible]田村に至、南北袤十七里南は御調郡木原村より、北は三次郡[illegible]田村に至、形勢氣候生產等は、粗安藝國に同じ、

ハ安藝、北ハ伯耆、出雲、西北ハ石見ニ接シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ十三里、南北凡ソ十九里、此國ハ、古ヘ國府ヲ葦田郡ニ置キ、安那、深津、神石、奴可、沼隈、品治、葦田、甲奴、三上、惠蘇、御調、世羅、三谿、三次ノ十四郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、安那、深津ノ二郡ヲ合セテ深安郡ト爲シ、品治、葦田ノ二郡ヲ合セテ葦品郡ト爲シ、三谿、三次ノ二郡ヲ合セテ雙三郡ト爲シ、三上、奴可、惠蘇ノ三郡ヲ合セテ比婆郡ト爲シ、新ニ尾道市ヲ設ケテ、廣島縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕備後吉備乃美知乃之利

〔倭頭屋本節用集天地比〕備後備州

〔日本風土記一寄語島名〕備後逼臥

〔藝藩通志三備後〕國名考

吉備の國名は舊事紀に始て見えたり、曰生吉備兒島、その吉備と名ける義考ふべからず、或曰、其土黍稷を種るによし、黍の訓吉備なる故なりと、又此國を備前備中備後と分けられしことを按るに、安閑天皇本紀に、既に備後國後城屯倉と出、又和銅元年、佐伯宿禰麻呂を備後守とすとあず、前中後三に分けられしこと、いづれの代なりや知るべからず、或人國名考を著し、總國風土記を引て、曰寶龜辛亥、勅して兩國に分ち、靈龜乙卯に分て三國とすと、此說據をしらず、且寶龜靈龜の次第さへ既に差へり、備後を萬葉集には路後に作り、和名抄には吉備乃美知乃之利と訓せり、吉備の字或は寸簸、岐備、黃薇、黃備、など作る、備後を武備志日本考には、逼臥に作る、西人の誤聞なるべし、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕寄物陳思

路後、深津島山、暫、君目不見、苦有、。。

名所

〔日本鹿子十二〕同國○備中名所之部

吉備中山　此山は備前備中のさかい、吉備津宮とて、此山の尾を隔て東西は備中の宮也、鳥居も程ちかく二ツ立たり、

細谷川　此川吉備の中山の麓にあり、○中略

二万里　板倉橋といふ所宿あり、海道也、吉備津宮より西也、○中略

長田山　嶺あり、二万里ちかし、○中略

神島　南備山　竹の里　高倉山　松山　ヲコトノ里

〔古今和歌集二十大歌所御歌〕かへしもの、歌

まがねふくきびの中山おびにせる細谷川の音のさやけさ

此歌は承和のおほむべのきびの國の歌

〔源平盛衰記十一〕丹波少將上洛事

丹波少將○藤原成經、中略御墓○父藤原成親ハ、何所ヤラント問給ヘバ、有木別所ト云山寺也ト申、是ヤコノ備中ト備前トノ境ナル、吉備ノ中山打過テ、細谷川ヲ分登給ヘバ、秋ノ空ニハアラネドモ、草葉ニ袖モヌレシホレ、落ル涙ニ曙ケリ、

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　備中國五十人○中略

諸國器仗○中略　備中國甲四領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

備後國

備後國ハ、ビンゴノクニト云ヒ、古ハ、キビノミチノシリト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ備中、西

嵩一斤八兩、厚朴二斤、卷柏六斤十兩、伏苓一斤二兩、白蘞七斤、黃芩八斤五兩、雄黃一斤、石膏六十六斤、鍾乳床六十斤、桑螵蛸十兩、秦皮一斤八兩、麥門冬、桃人各一斗、薯預五升、決明子一斗二升、牡荊子一升四合、草蔛子一升、吳茱萸三升、蜀椒六升、獺肝三具、猪蹄二具、鹿角二具、朴消大三斗、

〔延喜式 三十九 内藏〕年料〇中略 備中國 漬鹽年魚八斛

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略 宅常擁集諸國土產、貯蓄豐也、所謂〇中略 備中刀、

〔毛吹草 三〕備中

檀紙　相原　小菊紙　漆　楊梅皮　燕栗　帝釋天登山敷砂

人口

〔官中秘策 五〕備中國　十二郡〇中略

一人數三拾六〇六恐壹誤万五千四百拾人　内 拾四万貳千三百九拾六人 男 拾七万三千拾四人 女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 〇中略

御料私領
一人數三拾貳万八千四百八人　内 拾七万四千(千下恐脱二壹百二字)九拾七人 男 拾五万四千貳百拾壹人 女 〇中略

高三拾貳万四千四百五拾五石餘　備中國

弘化三丙午年諸國人數調〇中略

御料私領
一人數三拾四万六千九百貳拾七人　内 拾八万三千三拾壹人 男 拾六万三千八百九拾六人 女

高三拾六万三千九百拾五石餘　備中國

風俗

〔人國記〕備中國

備中國之風儀、都而意地强ク、侍ヲ初ト而、百姓男女マデモ、勇氣ノ義理ヲハゲマス心常ニ有、雖然不斂成意地有故ニ、道理ヲ不辨事多フ而、譬バ兄弟口論ヲナシテ、兄ハ弟ヲ哀マズ、弟亦兄ヲ敬ト云心ヲ不辨、一氣勢ニ隨テ、兄弟ト而切結、終ニ討果スノ類、儘有ト見ヘタリ、然レドモ此國ノ内備前堺ヨリ半國ハ風儀不正、繕ヒノ風流ナル所有故ニ、眞實ハ西郡程ニハ中々無之、

出擧稻

調庸貢獻

(延喜式二十六主税)諸國出擧正税公廨雜稻〈略○中〉
備中國正税公廨各卅万束、國分寺料三万束、定額寺料一千束、文殊會料二千束、修理池溝料一万七千束、驛家料一万束、救急料八万束、俘囚料三千束、

(倭名類聚抄五國郡)備中國〈略○中〉管九〈(中略)正公各三十萬束、本穎七十四萬三千束、雜穎十四萬三千束、〉

(延喜式十五内藏)諸國年料供進〈略○中〉 榧子〈(中略)備中(中略)土佐廿六箇國各四合○中略〉 蜜蠟〈諸國所進〉 蜜〈(中略)備中國一升〉〈略○中〉

(延喜式二十三民部)年料舂米〈略○中〉 備中國〈大飯一百五石五斗九升、糯廿石、○中略〉

年料租舂米〈略○中〉 備中國〈一千石○中略〉

年料別貢雜物〈略○中〉 備中國〈鐵九十斤○中略〉

諸國貢蘇番次〈略○中〉 備中國十壺〈二口各大一升、八口各小一升、○中略〉 右十四箇國爲第十六番〈子午年○中略〉

交易雜物〈略○中〉 備中國〈白絹十二疋、油一石四升、[illegible]一百斤、小豆一石六斗、酒[illegible]廿五枚、[illegible]子四合、鹿皮五十張、大豆廿八石、[illegible]大豆[illegible]四石、[illegible]三斗、[illegible]大豆七石、小豆十六石、〉

(延喜式二十四主計)備中〈略○中〉 右十二國並上絲〈略○中〉

備中〈略○中〉 右廿九國輸絹〈略○中〉

備中國〈行程上九日、下五日、海路十二日〉

調、緋帛十五疋、綠絲六十絇、縹絲、纐絲各十絇、黄絲卅絇、息絲五絇、蘇絲五十絇、自餘輸絹、鍬、鐵、鹽、 庸、白木韓櫃六合、自餘輸絲、米、鐵、 中男作物、黄蘗三百斤、胡麻油、櫻椒油、漆、搗栗子、許都魚皮、押年魚、煮鹽年魚、大鰯、比志古鰯、

(延喜式三十三大膳)諸國貢進菓子〈略○中〉 備中國〈甘葛煎一斗、○中略〉

(延喜式三十七典藥)諸國進年料雜藥〈略○中〉
備中國卅二種　黄連卅二斤、女萎四斤、前胡、藁本、升麻各三斤、白朮卅六斤、黄蘗十斤、蛇銜八斤、桔梗廿八斤、茵芋八兩、枸杞、地楡各一斤、白頭公三斤、狼牙、續斷、貫衆各五斤、紫菀、當歸各六斤、白歛五斤、[illegible]

田數石高

木下備中守利安（柳間朝散大夫）　二万五千石　在所備中賀陽郡足守江戸ヨリ百七十八里
慶長五年ヨリ木下氏代々領之、○節略
〔慶應元年武鑑〕板倉攝津守勝弘（菊之間朝散大夫）　二万石　在所備中加陽郡庭瀬江戸ヨリ百七十五里
貞享四、松平中務大輔信通住、羽州上ノ山替、元祿十二、板倉越中守重高以後領之、
關伊勢守長克（柳間従五位上元治元子五月叙）　一万八千石　在所備中阿賀郡新見江戸ヨリ百九十二里
元祿十二、作州ヨリ移之、關氏領之、○節略
〔慶應元年武鑑〕伊東播磨守長壽（柳間朝散大夫）　一万三百四拾三石　在所備中下道郡岡田江戸ヨリ海陸百八十里
慶長五年ヨリ伊東氏代々領之
蒔田相模守廣孝（菊之間朝散大夫）　一万石　在所備中賀陽郡淺尾江戸ヨリ百八十里
慶長年中ヨリ蒔田氏代々領之、○節略
〔倭名類聚抄五國郡〕備中國○略註管九田萬二百二十七町八段二百五十二歩
〔伊呂波字類抄比國郡〕備中國八管、（中略）本田七千四百八十一丁、上下九五日日
〔海東諸國記〕備中州　產銅、郡九、水田一万二百二十七町八段、
〔拾芥抄中本國郡〕備中上中　九郡（中略）田萬八百八十三町
〔日本鹿子十二〕備中國九郡、大上國、東西三日餘、○中略　知行高二十二万七千八百九十石
〔官中秘策五〕備中國　十二郡○中略
一石高三拾貳万四千四百五拾石餘
〔吹塵錄五人口及調高〕天保度御國高調○中略
備中國御料私領　一高二拾六万三千九百拾五石六斗壹升四合貳勺壹才

一通（〈裏日新院判〉〈方〇中略〉）　備中國深。江。庄。

右庄々可讓進也、輕微之至、雖有其憚、爲顯志不顧恐者也、

嘉元三年七月廿六日　　　　御判

〔太平記十六〕將軍自筑紫御上洛事附瑞夢事

角テ舟路ノ勢已ニ備前ノ吹上ニ著ケバ、歩路ノ勢ハ、備中ノ草。壁。ノ。庄。ニゾ著ニケル、

〔攝津親秀讓狀〕讓與（〈略〇中〉）

一松王丸分

備中國隼。島。庄。（〈略〇中〉）

曆應四年八月七日　　　　掃部頭親秀　判

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕一合四貫八百八十文　　花嚴院領（〈備中國水。田。庄。段錢〉）　　參貫貳百五十文　　鴨社領（〈備中國宮。田。庄。水上之段錢〉）　　拾三貫三百十九文　　右兵衞佐殿（〈備中國多。氣。庄。同國安賀在分、〇中略〉）（〈御國〉）

〔當宮緣事抄〕左辨官下　　石淸水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論、全掠領、爰又有由緒、歟、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領（〈略〇中〉）　　備中國　　吉。川。保。（〈略〇中〉）

保元三年十二月三日　　　　大史小槻宿禰（〈花押〇下略〉）

〔慶應元年武鑑〕板倉阿波守勝靜（〈備中國從四位侍從文久二戌六月任〉）　　五万石　　居城備中上房郡松山（〈江戸ヨリ〉）　海陸百八十六里

（〈按、元和三、池田備中守長幸、同出羽守長常、寛永十六、水谷伊勢守勝隆、同左京亮勝宗、同出羽守勝美、元祿八、安藤對馬守重博、同右京進信友、正德元、石川主殿頭總慶、延享元、板倉周防守勝澄、領之、〉）

莊保

一本田分陸拾伍町漆段十五代○中略　殘定田四十四段十五代　吉野村田五十四段卅代○中略

文永八年七月日○署名略

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合○中略

六貫六百七十五文○中略　高喜久鶴殿○備中國大井村段錢

〔豐鑑一秀吉〕輝元が知所の國、備中伯耆を境て、西は長門を限れり、備中の國高松といふ城を堅して守れり、秀吉の軍、備中國に望み、すくも塚、かは田が城などいふを、時の間に責破りて、高松の城へよせ圍ぬ、

〔戸川記下〕一內府公○徳川家康御入洛○中略　花房助兵衛本知高七千石、備中高松に於被下、

〔備中府志三〕松山

一國の府中也、大松山たかくそみへて、其前に小松山横をりにせめ、峯に聖廟の社頭有、又湧水のきよき有、

〔備中兵亂記〕元親謀反之事附鶴陣寄來事

爰ニ源家ノ末葉、備中ノ守護松山ノ住三村修理進元親、先父親ノ亡魂ヲ休メンガ爲ニ、ヨシナキ謀叛ヲ企ヲル、

〔古文書類纂上〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事○中略

一家地文書庄園事○中略　右大臣○中略　家領　女院方○中略　備中國驛里庄○安樂壽院領○中略

建長二年十一月日　愚老○在御判

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、烏帽相具御書、御手箱口口口○存日下預置也、參御所、○中略　女院御方自餘御書等、○錄有御封、以檀紙被立文、之押折上下、又有銘等、悉盛宮蓋、○中略

村里名邑

ならす。○下略

〔戸川記下〕一内府公○徳川家康御入洛、○中略摂肥後守○戸川達安は本知高二萬五千石にて備中の内庭瀬。郷。を賜、

〔備中府志三〕備中十一郡七十二郷の中、今四百邑餘に分れて、其村號、倭名類聚抄、拾芥抄の記す處、是を考るに多は今の稱する所に違ふ、○下略

〔郡名一覽〕一備中國　御料私領　備州　東西三日半　拾壹郡

高三拾貳万四千四百五拾五石六斗貳升三合　　四百六拾八ヶ村

●松山　百八十八里　　○足守　百七十八里　　○庭瀬　百七十五里

○新見　百九十二里　　○岡田　百八十里　　○鴨形新田　百七十三里

又成羽　百八十七里　山崎豐丸　又撫川　百八十里　戸川彌正　〈倉敷　百七十五里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國倉村里條ニ引タ所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕備中　十一郡四百八十四村

御料私領
高三十六万三千九百十五石六斗一升四合二勺一才

上房郡二十七村　阿賀郡三十四村　哲多郡二十九村　川上郡五十四村　小田郡七十一村

後月郡三十六村　下道郡十七村　賀陽郡七十八村　都宇郡四十三村　淺口郡四十九村

窪屋郡四十六村

〔地勢提要六〕郡邑島嶼奇名

備中　都宇郡、撫川、窪屋郡、子位主村、小田郡、生江濱村、小戸洲村、後月郡、加陽郡、美袋村、宍粟村、日近村、阿賀郡、下呰部村、川上郡、[illegible]數村、[illegible]地村、阿部村、

〔備中國新見庄作田目錄〕備中國新見御庄　文永八年辛未御檢注作田目錄事

候ひし、備中のせのおと云所は、馬の草かひよき所にて候、御邊申て給はらせ給へ、あん內者せんと云ければ、くらみつ三郎木曾殿に此由を申す、〇下略

〔神護寺文書〕未申承候之處、如此事令申候之條、憚思給候、極恐候也、〇中略備中國足守郷を御知行之由承之候、其內に相傳の所領田畠を別結解に可申請候也、〇中略

十月十八日　刑部丞平三花押

進上高尾聖人御房政所

〔南禪寺文書〕備中國三成郷〇中略

右所々任代々勅附、知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十一月廿七日　參議花押

南禪寺長老清拙上人禪室

〔東福寺文書〕備中國上原郷領家職事、御寄進之院宣分明之上者、全知行可被致御祈禱之忠候、恐々敬白、

正月〇曆應二年十六日　知任

東福寺長老上人御房

〔攝津親秀讓狀〕讓與

一總領能直分〇中略　備中國船尾郷〇中略

曆應四年八月七日　掃部頭親秀判

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕〇中略

十二貫二百九十文〇中略　等持寺領備中國〇日羽郷段錢中略　參貫文〇中略　大澤長門入道殿〇備中國木田郷段錢

〔戶川記上〕一備中國撫川郷定場城秀安一手を以攻之、小城ながら地輸に泥有、道狹くて駈引自在

臣去寛平五年、任備中介、彼國下道郡有邇磨郷、爰見彼國風土記、皇極天皇六年大唐將軍蘇定方率新羅軍伐百濟、○中略時天智天皇爲皇太子攝政、從行路宿下道郡、見一郷戸邑甚盛、天皇下詔、試徴此郷軍士、即得勝兵二萬人、天皇大悦、名此邑曰二萬郷、後改曰邇磨郷、其後天皇崩於筑紫行宮、終不遣此軍、然則二萬兵士彌可蕃息、而天平神護年中、右大臣吉備朝臣以大臣兼本郡大領、試計此郷戸口、纔有課丁千九百餘人、貞觀初、故民部卿藤原保則朝臣爲彼國介時、見舊記此郷有二萬兵士之文、計大帳之次、閲其課丁、有七十餘人、某到任、又閲此郷戸口、有老丁二人、正丁四人、中男三人、去延喜十一年、彼國介藤原公利任滿歸都、清行問邇磨郷戸口當今幾何、公利答曰、無有一人、謹計年紀、自皇極天皇六年庚申、至延喜十一年末、纔二百五十年、衰弊之速亦既如此、以一郷而推之、天下虚耗指掌可知、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔吾妻鏡　四〕元暦二年○文治元年四月廿九日壬午、今日以備中國妹尾郷、被付崇德院法華堂、是爲沒官領、武衞○源頼朝所令拜領給也、仍爲奉資彼御菩提、被宛衆僧供料云云、

〔源平盛衰記　七〕丹波少將召下事

少將ハ○中略妹尾ヲ召、仰ラレケルハ、如何ニ兼康、汝ガ候妹尾ヨリ、大納言殿○成親ノオハスラン所ヘハ、如何程カアルト問給ヘバ、大納言ノオハスル有木ノ別所高麗寺ト申ハ、備前ニ取テモ備中ノ境、妹尾ト云ハ備中ニ取テモ備前ノ境也、兩國ノ間ニ御部川ト云川ヲ一ツ隔タリ、其間ハ纔ニ三十餘町有ケルヲ、知ラセ事タハ悪カリナントヤ思ケン、大納言殿ノ御渡候所ヘハ、行程十三日トゾ申ケル、

〔平家物語　八〕せのおさいごの事

今度御合戰候はゞ、命をばまづ木曾殿○源義仲に奉らん、それに付候ては、先年かねやすが如行し

白。髪。部。郷。○中略　川邊里戸物部赤猪○中略

御。賀。郷。○中略　勝部里戸主縣直表○中略　拜師里戸私部黒麻呂口私部首身賣○中略

賀夜郡○中略

庭。瀬。郷。○中略　三宅里戸主忍海漢部眞麻呂○中略　山埼里戸忍海漢部得島口忍海漢部麻呂○中略

略

板。倉。郷。○中略　板倉里戸主鳥取部伎美麿口山部島賣○中略　委文里戸中臣忌寸連鯨口中臣忌寸連荒鹿火○中略

葦。守。郷。○中略　三井里戸弓削部連田道○中略　猪見里戸主建部臣大山口建部臣惠師賣○中略

大。井。郷。○中略　田後里戸生部首加都良○中略　栗井里戸東漢人部刀良手○中略

阿。蘇。郷。○中略　宗部里戸西漢人部麻呂○中略　答原里戸主史戸阿遲麻佐口西漢人部事无賣○中

略

八。部。郷。○中略　美濃里戸主賀陽臣惠理麻呂口賀陽臣路○中略

日。羽。郷。○中略　宍粟里戸主川人麿口川人部大伴○中略　狹野里戸主賀陽臣小牧口白髪部臣眞虫賣○中略

多。氣。郷。○中略　物部里戸主物部得安口物部阿曇○中略　由義里戸主犬甘部首土方口山守部身足○中略

有。漢。郷。死亡貳人　免稅壹伯捌拾束○下闕

〔今昔物語 十七〕備中國僧阿清依地藏助得活語第十八

今昔、備中國窪屋ノ郡大。市。ノ郷。ニ一人ノ古老ノ僧有ケリ、名ヲバ阿清ト云ケリ、

〔本朝文粹 二 意見封事〕意見十二箇條　善相公 清行

淺口郡　河智(○河、高山寺本作阿、注云安知)　間人(馬無土、○馬無土、高山寺本作波之布止)　船穗(布奈保)　占見(宇良美)　川村(加波無良)　小坂(乎佐加)　林(林、高
山寺本作二寧郎一、入也之)　大島(於保之萬)

小田郡　實成(美奈利)　拜慈(波也之)　草壁(久佐加倍)　小田(乎多)　甲努(加布乃)　魚緒(緒、高山寺本作二諸、伊保魚家)　驛家(○家、高山寺本作鳥、注云无末也、)　出
部(伊倍)

後月郡　荏原(江波良)　縣主(安加多)　出部(以天倍)　足次(安須波、○波、高山寺本作寶、)　驛家

哲多郡　石蟹(伊波加爾)　新見(爾比美)　神代(加無之呂)　野馳(乃知○高山寺本、作馳、乃知作二乎多一、)　額部(奴加多倍)　大飯(於保比)

英賀郡　中井(奈加都井)　水田(美多)　眘部(安多○高山寺本、作眘、安多作二安倍一、)　刑部(於佐加倍)　丹部(多知倍)　林郷

(東大寺正倉院文書三十五)備中國大税負死亡人帳

備中國司解　申天平十一年大税負死亡人事

合九郷死亡人壹伯貳拾漆人　免税稻肆伯漆拾玖束漆把(略○註)

都宇郡(略○中)

建。部。郷。(略○中)　岡本里戸丸部時麻呂西漢人志卑賣(略○中)

河。面。郷。(略○中)　神沼里戸主津臣金麻建部猪麻(略○中)　辛人里戸主秦人部稻麻口秦人部鯖島(中○
略)

撫。川。郷。(略○中)　鳥羽里戸主上道臣意彌口服部首入千石(略○中)

深。井。郷。(略○中)　岡田里戸津臣鯖島口津臣酒見(略○中)

窪屋郡(略○中)

輕。部。郷。(略○中)　鳥(?)實里戸輕部首三狩口輕部首若賣(略○中)　曾里戸主輕部毛智口輕部得万賣(中○
略)

美。和。郷。(略○中)　曾生里戸主物部麻(略○中)　市忍里戸主下道朝臣加禮比口出雲部刀(略○中)

淺口郡　小田郡　後月郡　哲多郡英賀郡　郷

海ヲ開キ發シ、田地トスルノ故ニ、郡ハ下ニ細長ク成ルノ故、各川島河ノ川ノ上ノ方ノ下道郡、川ノ下ノ方ノ下道郡ト云フ樣ニナルニ付、國府廳所ニテ、下道郡ヲ川ノ上ト川ノ下ニテ分チ、改メテ川上郡ト名付ケタリ、今ノ川上郡ハ大古ノ下道郡ナリ、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年八月癸亥、備中國淺口郡犬養部雁手、昔配飛鳥寺燒塵戶、誤入賤例、至是遂許免之、

〔日本靈異記上〕邪見折破乞食沙彌以現得惡死報緣第廿九

白髮部猪麿者、備中國少(○少、今昔物語作小)田郡人也、

〔吉備國史二〕國郡涌成(○中略)

一小田郡ヨリ後月郡ヲ割リテ、各公廳所ニテ改メ名付ケタリシヅミ郡トハ小田郡ハ東西ニ細長ク、新開ノ出來シノ故ニ西ヲ尻トシ東ヲ頭トスルノ理ニテ、シリニツヾキタル郡ト云フ事ヲ略シテ、後月郡トハ名付ケタリ、

〔日本書紀十八安閑〕二年五月甲寅、置(○中略)備後國後城屯倉

〔書紀集解十八安閑〕類聚抄曰、備中國後月郡七豆木、

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年十月八日己卯、下知備中國哲多英賀兩郡百姓、給復二年、以旱疫也、

〔倭名類聚抄八備中國〕都宇郡　河面(加波毛)　撫河(奈天加波)　深井(布加井)　驛家

窪屋郡　大市(於布知)　阿智　三須　美簀(○簀恐箐誤、高山寺本註國用三須)　眞壁(萬加倍)　輕部(加留倍)

賀夜郡(○高山寺本註國用賀陽)　庭妹(爾比世○高山寺本、妹作扶、比作波)　板倉(伊多久良)　足守(安之毛利)　大井(於保井)　阿宗(安曾)　服部(波止利)　八部(也多倍)

生足　刑部(於佐加倍)　日羽(比波)　多氣　有漢(宇萬)　巨勢　大石(於保之)

下道郡　穗北(保伊多)　八田(也多)　邇磨(爾萬○高山寺本、萬下有國用二万四字)　曾能　秦原(波多八里)　水内(美乃知)　劔代(久之呂○高山寺本、呂下有國訓字三字、)　近似(知加乃里)　成羽(奈波)　之　弟翳(勢)　穴田(安奈多)　湯野(由乃)　河邊(加波乃倍)　呉妹(○高山寺本、妹作呈、註且末、)　田上(多加美)

	後城	
哲多	後月	
同	同	同
同	同	十二郡
哲多 哲田	同	
哲多	同	同
同	同	同
同	同	同
同	同	同
同	同	同

都宇郡

〔三代實錄陽成三十一〕元慶元年四月十九日庚寅、卜定、〇中略主基備中國都宇郡、並卜食、

窪屋郡

〔三代實錄陽成四十〕元慶五年十月十六日辛卯、備中國窪屋郡人眞髮部成道、故殺大市貞繼、〇下略

賀陽郡

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年六月辛酉朔、備中國賀陽郡人外從五位下賀陽臣小玉女等十二人賜姓朝臣、

上方郡

〔拾芥抄中末本朝國郡〕備中〇中略　河上　上方。

〔吉備國史二〕國郡通載〇中略

一賀陽郡ヨリ上房郡ヲ出シ名付ケタリ、是賀陽郡河ノ上ヨリ海濱マデ、餘リ細長キノ故、國府廳ニテ川島川ノ川カミノ部分ノ賀陽郡ヲ上方ト名付ケタリ、後ニ世移リ來タ、文字ヲ誤リタ、上房ノ字ニ書キ改メシ故ニ、今ハ大古ノ樣ノワカラヌヤウニ成レリ、

〔備中府志一〕上房　六鄕　刑部　日羽　多氣　有漢　巨勢　大石

下道郡

〔續日本後紀仁明一〕天長十年十二月己酉、卜定大嘗會事、〇中略備中國下道郡爲主基、

河上郡

〔拾芥抄中末本朝國郡〕備中　河上。　上方

〔吉備國史二〕國郡通載〇中略

一下道郡トハ上道ニ對シタノ名、謂ハユル古事記所謂食道ノ口トスルニ據ヨレリ、此郡モ下ハ

國府

郡

瑞籬朝〈○崇神〉御世、神魂命十世孫明石彦定賜國造、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、從五位上多治比眞人吉備爲備中守、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年二月十八日丁丑、武衞〈○頼朝〉被發御使於京都、是洛陽警固以下事所被仰也、又〈○中略〉備中〈○中略〉已上五箇國、景時〈○梶原〉實平〈○土肥〉等、遣專使、可令守護之由云云、

〔倭名類聚抄 五國郡〕備中國〈國府在賀夜郡、行程上九日、下五日、〉

〔易林本節用集 下〕備中〈○中略〉賀屋〈カヤ〉府

〔倭名類聚抄 五國郡〕備中國〈○中略〉管九〈○中略〉都宇〈津〉窪屋〈久保〉賀夜　下道〈之毛豆美知〉淺口〈安佐久知〉小田〈乎太〉後月〈七豆木〉哲多　英賀〈阿加〉

〔延喜式 二十二民部〕備中國、上、管 都宇〈ツウ〉窪屋〈クホヤ〉賀夜〈カヤ〉下道〈シモツミチ〉淺口〈アサクチ〉小田〈ヲタ〉後月〈シツキ〉哲多〈テタ〉英賀〈アカ〉〈○中略〉右爲中國、

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕備中、〈上中〉九郡、都宇、窪屋、賀陽、下道、淺口、小田、後月、哲多、英賀、〈或〉河上〈或〉土方、

〔皇國郡名志〕備中國　〈舊九郡今十郡〉

都宇〈ツウ〉　〈早島　備前兒島郡ニ接ス小郡〉

窪屋〈クボヤ〉　〈倉敷　●ト道、河邊　南都ニ向〉

加夜　〈庭瀬　〈足守　〈大井　◦吉備宮　備前界〉

下道〈シモツミチ〉　〈中村　●矢掛　〈山田町　國中〉

淺口〈アサクチ〉　〈玉嶋　備後ニ接、南海ニ向〉

小田〈ヲダ〉　〈●笠岡　〈笠岡町　國中〉

後月〈シツキ〉　〈●七日市　●高屋　備後界〉

哲多〈テタ〉　〈成羽　●青木　〈天神山　備後伯界〉

英賀〈アガ〉　〈[illegible]尾　〈弓社　〈刑部　作界〉

上房〈ジヤウバウ〉　〈[松山]　●平川　國中〉

今加ニ上房郡、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕備中

家親毛利氏ノ援ヲ乞ヒ、莊高資(爲資ノ子)ヲ殺シテ松山ニ據リ、勢漸ク強大ナリ、九年、美作ニ入リ、宇喜多直家ノ刺客ニ殺サレ、子元親嗣グ、元龜元年、直家來リ侵シ、鴨方ヲ攻メ、細川通政ヲ殺シ、元親ヲ松山ニ圍ム、毛利氏兵ヲ遣テ之ヲ救ヒ、直家ヲ擊テ之ヲ却ク、天正二年、織田信長西伐ヲ圖リ、元親ヲ誘降ス、明年、毛利氏ノ兵松山ヲ陷イレ、元親ヲ殺シ、細川通董ヲ降シ、盡ク全州ヲ併ス、十年、豐臣秀吉大擧シテ來リ伐チ、高松(賀陽郡中島村)ヲ圍ム、毛利氏終ニ河邊川以東ノ地ヲ割テ和ヲ講ズ、後秀吉其地ヲ以テ宇喜多秀家ニ加賜ス、關原役畢リ、德川氏、毛利氏ノ地ヲ削リ、秀家ノ故地ヲ收メテ、小早川秀秋ニ與ヘ、又戶川達安ヲ庭瀨ニ、(後板倉重高)木下家定ヲ足守ニ、蒔田廣定ヲ淺尾ニ封ズ、(後子弟ニ分封シテ藩列ヲ除ス、文久中、裔孫廣孝ニ至リ藩ニ復ス、)秀秋卒シテ封除シ、(其五萬石ノ地ヲ池田忠繼ニ賜フ、)小堀政次ヲシテ松山城ニ在テ、州務ヲ掌ラシム、子正一ニ至テ職ヲ罷ム、元和ノ初、池田長幸ヲ松山ニ、(後板倉勝澄)伊東長實ヲ岡田ニ封ジ、寬文ノ末、池田光政、新墾田ヲ其二子政言(貳萬五千石、後鴨方藩、)輝祿(壹萬五千石、後生坂藩、)ニ分與ス、元祿中、關長治ヲ新見ニ徙封ス、(舊美作ノ宮川)凡テ八藩、王政革新、松山ヲ改メテ高梁ト稱シ、成羽藩(山崎治祗)ヲ立テ、倉敷縣ヲ置、尋テ皆廢シテ縣トナシ、又之ヲ深津縣ニ併セ、更ニ改メテ、小田縣ヲ置、

〔先代舊事本紀 十國造〕下道國造

輕島豐明朝(○應神)御世、元封兄彥命亦名稻建別、定賜國造、

加夜國造

輕島豐明朝御世、上道國造同祖、元封中彥命、改定賜國造、

笠臣國造

輕島豐明朝御世、元封鴨別命八世孫笠三枚臣、定賜國造、

吉備中縣國造

十四間半〈至松山路追分、四十一間〉　下道郡川邊村、三十四度三十九分、一町二十六間　川邊村追分〈至岡田陣屋、一〉
十丁四十五間〉　三里一十二町三間　小田郡矢懸町、三十四度三十八分、三里一十一町二間　後月〈シツキ〉郡
七日市驛、三十四度三十六分半、一里五町二十三間　高屋村　三十五町三十四間〈至國界七丁二十二間〉

備後國安那郡下御領村〈中略〉○

從備中國板倉歷高梁〈松山本〉及新見至東城

備中國加陽郡板倉宿　三十四町四十五間　門前村　一里三十町一十三間　井手村市場　三
十町一十一間　井尻野村湛井〈タヽイ〉〈至寶福寺、四丁一十五間〉　一十七町二十六間　宍粟村〈至豪溪、一里三十三丁五十五間〉　二
里一十二町一十九間半　美袋〈ミナキ〉村　二里一十二町四十九間　上房郡高梁〈松山本〉西村〈至下原上町、一里二十一
丁一十八間半、從上町歷地頭村、至東油木村、九里八丁一間〉　二十七町四十五間〈至高梁東町、一十四丁五十九間〉　高梁本町、三十四度四十八
分半、二十八町二十一間〈至高梁町、六丁五十七間〉　今津村知久〈歷法曾村、至新見、八里二十丁一十二間、〉　二里七町二十九間
片岡村　二里三町五十六間　阿賀郡下中津井村　二里一町二十四間　阿口村〈歷赤馬村三尾寺、至比實〉
〈坂鍾乳穴神社、三十町四十五間〉　二里二十一町二十五間　小坂部村〈至小坂部市、一十八丁五十一間〉　一里三十町一十一間
上熊谷村、三十五度一分半、二里一十二町一十三間　新見〈ニヒミ〉　二里一十五町六間　哲多郡下〈ヒヤ〉
神代〈カウシロ〉村　二里七町四間　矢田村　二里四町三十八間半〈至國界、一里一十一丁四十五間〉　備後國奴可郡川西
村東城町　〈從板倉、至東城〉街道、通計三十里九町一十六間半、

〔日本實測錄〈一沿海〉〕從大坂沿海至赤間ヶ關〈中略〉○

備中國都宇郡帶江沖新田〈至早島沖新田、一十七町、北極高、三十四度三十六分、〉　二十七町三十八間〈至國界、二十六町一十九間〉　備前
國兒島郡天城村〈中略〉○　備中國窪屋郡福井村松山川口〈歷倉敷村及濱川、至庭瀨、三里三十五町二十六間、從庭瀨、至備前國岡山、一里二十八
町四十九間、〉　一十三町　淺口郡大江村濱〈至大江村宿所、汎測五町三十間〉　三十四度三十四分、五里二十四町三十
間、〈至西之浦川口、一里一十八町五十間半、從西之浦川、至玉島村、二里二十二町三十五間、〉　黑崎村濱〈至黑崎村宿所、汎測九町三十六間〉　三十四度卅二分、四

島嶼

（日本地誌提要 五十四 備中）疆域　東ハ備前、西ハ備後、北ハ伯耆、美作、南ハ海ヲ隔テ、讃岐ニ對ス、東西凡壹拾壹里、南北壹拾七里餘、

（日本實測錄 九 島嶼）備中國淺口郡　實測　下水島、周廻一十四町三十五間、寄島、周廻二十五町八間、遠測　杓子大　杓子小　丸山　三郎島

小田郡　實測　白石島、周廻二里二十一町十八間、白石濱、三十五度二十九分、眞鍋島、周廻二里一町一十二間、本浦、三十四度二十一分半、小戸洲島、周廻四町二十間、大戸洲島、周廻九町五十間、木ノ子島、周廻一町六間、片島、周廻一里九町五十四間、神島、周廻四里二十六町三十五間、ナスラ島、周廻一十一町一十六間、名字島、周廻一十九町四十一間、稲積島、周廻五町二十二間、大高島、周廻一里二十一町一十六間、小高島、周廻一十三町三十八間、カシ島（又孫子島）、周廻一十四町五間、北木島、周廻五町三十六間、大島、周廻三十一町二間、元小島、周廻五町三十五間、トイノ島、周廻四町七間、小飛島、周廻二十三町四十間、大飛島、周廻一里一十五町二十二間、六島、周廻一里七町一間、遠測　孫戸洲島　伊吹山島　島山　コ、チ島　沖白石　高島　長ノ瀬　タイ岩　立石　カトリ島　タブ島

（備中府志 三）高島

小田郡神島と、白石の間に有小島也、

地勢 形勢

（島林本節用集 下）備中州 上管九郡、東西三日半、利刀耘耨多、五穀蠶布充滿國、日用美食大上國也、

（日本地誌提要 五十四 備中）形勢　地形北ニ至リ漸ク縮リ、備後作伯ニ連リ、大川中央ヲ貫流シ、瀕海

土壤膏沃、人民富饒、北備寒冱ニシテ、米麥ノ產ニ乏シト雖モ、採礦ノ利頗ル饒シ、

道路

（日本實測錄 四 道程）從攝津國西宮中國街道、至備後國界（〇中略）

備中國加陽郡宮內村（至吉備津社五丁四十二間）　六町四十四間　板倉村　三十四度四十一分、　三里三町五

前、西ハ備後、北ハ伯耆、美作ニ接シ、南ハ海ヲ隔テ、讚岐ニ對ス、東西凡ソ十一里、南北凡ソ十七里餘、此國ハ古ヘノ吉備國ノ一部ニシテ、國府ヲ賀夜郡ニ置キ、都宇、窪屋、賀夜、下道、淺口、小田、後月、哲多、英賀ノ九郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世下道郡ノ一部ヲ分チ河上郡ヲ設ケ、賀夜郡ノ一部ヲ割テ上方郡ヲ置ク、明治維新ノ後、更ニ都宇、窪屋ノ二郡ヲ合セテ都窪郡ト爲シ、賀夜、下道ノ二郡ヲ合セテ吉備郡ト爲シ、英賀郡ヲ二分シテ、其一部ヲ上方郡ニ併入シ、其一部ヲ哲多郡ト合セテ、阿哲郡ト爲シ、岡山縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄　五國郡〕備中〈吉備乃美知乃奈加〉

〔饅頭屋本節用集　天地〕備中〈比州〉

〔日本風土記　一寄語島名〕備中〈逼塗〉

〔日本書紀　十一仁德〕六十七年、是歲、於吉備中國川嶋河派、有大虬、令苦人、〈○下略〉

位置

〔地勢提要　乾〕各國經緯度〈附里程〉

備中松山〈本町〉極高三十四度四十八分半、經度西二度一十分、從東都〈岡上(東海道西國海道)自板倉松山街道〉一百九十八里三十五町二十八間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

備中　松山　三四度四八分三〇秒〈○中略〉　入江新田　三四度二九分三〇秒〈○中略〉

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〈○中略〉　備中　松山　西二度〇六分五五秒

疆域

〔備中州巡禮略記〕備中國十一郡方寸

東西九里廿九丁貳拾間〈東賀陽郡宮内村備前境、西後月郡高屋村備後境、〉南北貳拾三里三拾四丁三拾間〈南玉島村川口、北阿賀郡實村之内小原村伯耆境、〉

名所

健兒

ニフケラカシテ、而モソノ奥意之至公處處ハ夢ニモ不ㇾ知而、如ㇾ斯ニモテナシ、或ハ武ノ用ル兵器兵書ヲカザリ立テバ、心掛之深キ侍ト、人ニ用ラレン事ヲ好ム風儀、都而皆如ㇾ此ニ而、寔ニ名利ニツナガレ、實ヲ失ヒ虚ヲフルマイ、不ㇾ及ㇾ是非、雖然不智不學不志之人ニタクラベテ是ヲ見ル時ハ、事理トモニハルぐ\上也、若シ能キ人有テ、是氣質ヲ離ル丶工夫ヲナサレメバ、百人ニ而一二人モ其處ニ可ㇾ能カ、多クハ諂ヒ有テ、皆有國風ナレバ、五十年ニモ及ビナバ、其風儀直ニ成ベキカ、不ㇾ好風儀ナリ、

〔國花萬葉記十三〕備前國中名所之部

神村山略〇中　唐琴の浦からことの泊、略〇中　神島略〇中　大島の瀬略〇中　虫明のせと略〇中　小島略〇中　牛窓略〇中　藤戸の渡

凡そ當國名所おほからざるにや、所見するものすくなし、猶好士にうかゞふべし、

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒略〇中　備前國五十人略〇中

諸國器仗略〇中　備前國甲二領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔源平盛衰記七〕丹波少將召下事

筑紫ヨリ鎮ノ使ノ上ルコソ、行程十五日トハ聞エシカ、是ヨリ奥鎮西ナンドヘ下ランコソ、假令十二三日ニモ行ンズレ、備前備中ナレモノ大國トハ聞ザリシモノヲ、父ノ御座所ヲシラセジトテ、角ハ云ヨト被ㇾ思ケレバ、其後ハ又問事モナカリケリ、

備中國

備中國ハ、ビツチユウノクニト云ヒ、略クハ、キビノミチノナカト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ備

井小石(ジャリ)　一北浦の濱あみ　一八木山石(色白き石也、細工に用る也、)　一虫明恭石　又淬麁石片々

〔類聚三代格 八〕太政官符

應停止備前國進鍫鐵事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、納貢之本任土宜、物非所出民是爲患、今聞件國元無鍫鐵、毎至貢調常買比國、自今以後、宜停收鐵、非絹則絲隨便輸、

延暦十五年十一月十三日(〇又見日本後紀)

人口

〔官中秘策 五〕備前國　十一郡(〇中略)

一人數三拾貳万貳千五(〇五恐九誤)百八拾貳人　内　拾七万四百四拾五人男　拾五万貳千五百三拾七人女

〔吹塵錄 五人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)(〇中略)

(皆私領)
一人數三拾壹万八千貳百七拾三人　高貳拾八万貳千貳百貳拾四石餘　備前國

内　拾五万貳千貳百人男　拾四万六千七拾三人女

諸國人數調(弘化三丙午年)(〇中略)

(皆私領)
一人數三拾壹万五百七拾六人　高四拾壹万六千五百八拾壹石餘　備前國

内　拾六万五千七百三拾八人男　拾四万四千八百三拾八人女

風俗

〔人國記〕備前國

備前國ノ風俗、上下トモニ利根之故ニ、利根ヲ先ト而、萬事執行フニ仍テ言行之相違スル事、十ニ而五ツ六ツ、如此別而諂フ心强ク而、上ニ諛ブ所之儀ヲバ、善惡邪正ヲ不撰而、スキ好ムガ如クニモテナシ、内心ハ佞ヲ含ミテ誹謗スル事、主ハ被官ヲ減ヲ以、是ヲフサエントシ、被官ハ主ニ從フ如クナレドモ、害テ内心不快而善ト見ユルトイヘドモ、其善不積而名利ノ爲ニナス所多シ、譬バ詐術ヲ執行フニ、十人ガ九人善惡ニ不構、其事ヲ成就セシメテ、是ヲ朋友ノ於前ニハ、我一人之機

大壺廿四合、中壺卅二合、小壺六十合、酢瓶卅口、麻笥盤十六口、洗盤六十口、片盤二百十四口、椀四百六十合、片椀卅合、脚短坏廿六口、様足短坏二百八十口、窪坏四百廿六口、凡片坏一千五百六十口、自餘輸絹、絲、綿、

庸、白木韓櫃十三合、自餘輸米、鹽、

中男作物、絹、苫、胡麻油、許都魚皮、押年魚、煮鹽年魚、雜魚鮨、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子〇中略　備前國甘葛煎

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〇中略

備前國卌種　柴胡十斤、白朮卅斤、黃蘗、烏賊骨各十斤、王不留行、瞿麥各八斤、獨活五斤、蛇銜、芎藭、地楡、升麻、馬刀各三斤、桔梗五十斤、薺苨、龍膽、白頭公各二斤、昌蒲一斤、黃耆九斤、茵草十一兩、商陸四斗、漏蘆七斤、松脂六斤、大戟、牡丹、天門冬、桑螵蛸各一斤、榧子一斗五升、署預、牡荊子各四升、麥門冬、秦椒各二升、桃人、車前子、葶藶子、蜀椒各六升、呉茱萸三斗、乾薑八升、白芷四斤、澤瀉十斤、白殭蠶二兩、

〔延喜式內膳三十九〕年料〇中略　備前國(水鹽十笞二度)

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也〇中略　宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂〇中略　備前海糠(アミ)、

〔毛吹草三〕備前

海月　海糠魚(アミ)　ソコニベ　鯧(マナカツヲ)　ハイ貝　藤戸苔　川口鱸　鱧　牛窓烏賊　下津井蛸　堅鯖

白瓷　小島酒　伊部燒物(瓶壺德利鉢等)　岡山素麪　石戸米

〔吉備古今鑑〕當國〇前略　備の名物

一伊部燒物　一長船打太刀刀　一周遊鼻紙〇註略　一和氣絹　一牛窓虎石　一喜河煙草〇註略

一稲岡素麪　一藤戸苔　一奥津龍驚朵〇註略　一佐伯鳶巢　一兒島綿白　一大川尻の白魚

〇註略　一八濱鰻鱺　一宇殿木綿　一河津海月　一北浦女冠者　一兒島(註略)そこにべ　一下津

出擧稻　風產貢獻

備前國管。私。領。　一萬四拾壹万六千五百八拾壹石八斗五升四合

〔郡名一覽〕管私領　伊賀　志摩　尾張　若狹　加賀　越中　因幡　伯耆　出雲　備前　安藝　周防　長門　紀伊　淡路　阿波　土佐　大隅　薩摩　壹岐　對馬　合貳拾壹ケ國

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中

備前國正稅公廨各卅八万一千一百五十束、國分寺料四万束、淨福寺料七千束、文殊會料二千束、造院料一万束、大學寮料一万一千束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料四千三百卅束、修理驛家料一万束、

〔倭名類聚抄國郡五〕備前國略○　註管八、（中略）正公各三十八萬千百五十束、本穎九十五萬六千六百四十束、雜穎十九萬四千三百四束、

〔延喜式內藏十五〕諸國年料供進略○中　備前國　榧子（中略）備前（中略）土佐廿六斛、國各四合、○中略　黑米二百斛（中略）美濃、丹波、備前三國各廿石、

〔延喜式民部二十三〕年料舂米略○中　備前國內藏廿石、大炊一千一百七十石、○中略

年料租舂米略○中　備前國二千石○中略

年料別貢雜物略○中　備前國筆一百管、紙麻五十斤、牧牛皮六張、○中略

諸國貢蘇番次略○中　備前國十壺二口各大一升、八口各小一升、○中略　右十四箇國爲第六番子午年○中略

交易雜物略○中　備前國絹三百疋、白絹十二疋、油三石四升、胡麻子三石、楡子四合、苫十五枚、鹿革廿[illegible]、鹿皮十張、鹿角十二枚、小豆十九石七斗、醬大豆廿五石、大豆卅四石七斗、[illegible]料八十石、隔三年進醬大豆十石、

〔延喜式主計二十四〕備前略○中　右十二國並上絲略○中

備前略○中　右廿九國輸絹略○中

備前國行程上八日、下四日、海路九日

調、白絹十疋、橡絲廿絇、甕一口、[illegible]八口、由加八口、瓮六十六口、水瓮八十四口、[illegible]瓮八口、陶瓮卅三口、御瓫二百口、[illegible]研十八合、小[illegible]廿四口、[illegible]十二口、臼廿四口、負瓶六口、水瓶、大酒瓶、平瓶、宮瓶、各廿四口、

田數石高

城主宇喜田和泉守直家、同中納言秀家、慶長五、金吾中納言秀秋、同八、池田三左衞門輝政、同十八、二男松平左衞門督忠繼、元和二、同舍弟宮内少輔忠雄、其子勝五郎光仲代因州鳥取ニ替ル、寛永五ヨリ松平新太郎光政、以後代々領之、

備岡 朝散大夫 池田信濃守政詮　二万五千石　在所備前岡山新田江戸ヨリ百七十三里

備岡 朝散大夫 池田丹波守［　］　一万五千石　在所備前御野郡新田江戸ヨリ百七十三里

(倭名類聚抄 五國郡)備前國 略○中 註 管八、田萬三千百八十五町七段三十二歩

(伊呂波字類抄 比國郡)備前國 管八、(中略)水田一万三千二百六十(十 拾芥抄[illegible]

(海東諸國記)備前州　郡八、水田一万三千二百十町二段、

(日本鹿子 十二)備前國 十一郡、中上國、四方三日餘、略○中 知行高二十八万六千二百石、

(吉備古今鑑)御當家御領郡之村附 略○中

一備前國八郡、村數合七百三拾五ケ村、

高合貳拾八万六千貳百石　直高合四拾五万三千四百四拾三石七斗五升但レ沖新田共

八郡村數高分リ　六万六千四百六拾四石八斗　御野郡七十九ケ村　五万四千五拾五石

五斗五升　津高郡百貳拾四ケ村　五万六千貳拾六石五斗六升　赤坂郡百ケ村　三万

六千貳百三拾石　磐梨郡六十五ケ村　三万三千百拾九石貳斗四升　和氣郡九十四ケ村

七万八千七拾石九升　邑久郡七十六ケ村中島新田共　八万七千九百六拾四石四斗七升　上道郡

百壹ケ村外ニ沖新田分九ケ村倉田倉富倉安三ケ村　四万千五百拾貳石八斗貳升　兒島郡八十五ケ村 略○下

一石高貳拾八万九千貳百貳拾四石餘

(官中秘策 五)備前國　十一郡 略○中

(備前國誌 一)備前國 略○中　高二十八万九千二百二拾四石七斗壹升

(吹塵録 五人口及國高)天保度御國高調 略○中

藩封

一通（銘曰乗墓）　備前國長田庄（二品一期可被免知行、〇中略）
右庄々所讓進也
嘉元三年七月廿六日　御判
〔古文書類纂 上 和與認可状〕和與　額安寺領備前國金岡東庄内地頭鹿子五郎長綱（號宮鶴丸）跡尼了明分領事〇中略
元亨三年二月五日
地頭代紀政綱 花押
預所藤原義幸 花押
〔壬生文書 綸旨院宣御教書等〕陸奥國安達庄、備前國白笠庄、〇中略
右庄々知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、
建武三年十二月廿六日　參議 花押
大夫史殿〇壬生国遠
〔吾妻鏡 八〕文治四年二月二日戊辰、所々地頭等所領已下事、自京都或属強縁、或獻消息、愁申人々多之、仍有御沙汰、〇中略
公朝
備前國吉備津宮領、西野田保地頭職貞光事、任道理停止論人之妨、如本無相違、欲令知行事、已上所々、尤可有御成敗之處、〇中略以條々令沙汰者、世間人定似偏頗之由、令存歟、仍今度無御沙汰、也、
〔赤松再興記〕一長祿三年六月廿日、赤松與備前國三箇保へ入部ス、三箇保トハ三石藤野吉永也、
〔慶應元年武鑑〕松平備前守茂政（大廣間、從四位上少將、元治元子四月任）　三拾一万五千二百石　居城備前御野郡岡山（江戸ヨリ）海陸百七十二里〇中略

庄保

〔賀茂注進雜記〕下略同〇壽永三年〇元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國、可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、略〇中

備前國 山田庄 竹原庄 略〇中

壽永三年四月廿四日　　正四位下源朝臣御判

〔石淸水文書 一〕八幡宮寺領

御判〇右大將家御判 中略

備前國 牛窓別宮 鹿島別宮 片岡別宮 肥土庄 御封舍米二百石 略〇中

元暦二年正月九日

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年五月一日癸未、武衞〇源頼朝被奉御書於左兵衞佐局、是備後院法華堂領新加市也、去年以備前國福岡庄、被寄進之處、年貢之間取替之、被進妹尾郷、爲供佛施僧之料可被寄附御菩提之趣被載之、

〔西大寺文書 一〕注進 西大寺所領諸庄園現存日記事 略〇中

備前國 豆田庄 田畠五十七町、略〇中

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日 略〇署名

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年七月廿五日戊申、冷泉宮令遷于備前國豐岡庄兒島給、佐々木太郎信實法師受武州命、令子息等奉守護之云云、

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分遣故院御書、早且尋直衣、烏帽 相具御書、御手箱□□□今日子細不見參御所、略〇中 女院御方自餘御書等、之雖有封、以權用之、上下又有錯、立文、悉置眞、略〇中

村、

〔備前國津高郡菟垣村常地畠賣買劵〕菟。垣。村。口口漢部阿古麻呂解　申依正税不成常地賣買畠口

略○中

寶龜五年十一月廿三日略○署名

〔古文書類纂上和與限可狀〕備前國金岡東庄内地頭庶子道性分領田地領家地頭分文事

合領家方　鹽。屋。里。　二坪　壹段　下國重作　竹。屋。里。　十七坪　拾伍代　下國重作　金。岡。里。

廿五坪　壹段不　淸二作略○中

一地頭方　海。面。里。　卅坪　壹段參拾伍代　圓性作　金。岡。里。廿五坪　參段不　藤三郞略○中

右領家地頭分文如件

元亨參年五月七日

地頭代紀政綱花押

預所藤原義幸花押

〔備前國誌二〕岡。山。府。

東西凡二十餘町、南北凡一里餘、諸士の第宅商賈の肆店有り、西大川をまたがりて、西は御野郡に屬す、東は上道郡に屬す、西國往來の巷にして、通船の運送あり、繁榮の地なり、

〔櫻雲記中〕正平八年北朝文和二年正月十日、備前國岡山ニ於テ、南朝ノ兵上神太郎兵衞尉高直戰死ス、

〔戸川記上〕一右の後は毛利より備中境目を侵し、備前の内一宮のまへ辛川表迄も責入に付、直家兵を出し戰て是を追退く、略○中常山城に籠る組頭中島左馬進廣戸某抔より岡山へ注進して加勢を乞、直家聞之驚、略○中先秀安が一左右を待て出勢可然と猶豫する所に、聖旦秀安が注進狀到來、急ぎ披き見れば、決して御出勢不可有、是は敵の手だてにて岡山より當城への加兵を出させ、其上にて兒島と岡山の舟手を取切、岡山の無勢成虛を見て、本城岡山を攻る術と存候、略○下

村里名邑

〔文德實錄 二〕嘉祥三年八月丙辰、公卿抗表曰、○中略備前國守從四位下藤原朝臣諸成等奏偁、所管磐梨郡少領外從八位上石生別公長貞、於郡下石生鄕雄神河、獲白龜一枚、○下略

〔吾妻鏡 八〕文治四年六月四日戊辰、所々地頭沙汰之間事、注條々、令付帥中納言、經房給之處、被返報、今日到着、於勅答之趣者、爲謙于綸旨、所副獻權右中辨定長朝臣奉書也、○中略

備前國宇甘鄕事

委尋被之條、尤神妙、以此旨、被仰沙汰畢、○中略

五月十二日　　權右中辨

〔郡名一覽〕一備前國　備州　四方三日　八郡

高貳拾八万貳千貳百貳拾四石七斗壹升　　六百四十六ケ村

●岡山　百七十三里　)(○天城　同上三万石　池田出雲　)(○金川　同上一万六千石　日置元八郎

)(○佐伯　同上一万石　土倉市正　)(○蟲明　同上三万石　伊木長門　)(○周匝　同上二万五千石　池田

大和　)(○建部　同上一万石　池田隼人

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕備前　八郡、六百七十三村、

高四十一万六千五百八十一石八斗五升四合

御野郡六十三村　津高郡九十三村　赤坂郡九十四村　磐梨郡六十四村

和氣郡八十九村　邑久郡七十八村　上道郡百八村　兒島郡八十四村

〔地名提要 ○備前〕郡邑島嶼奇名

備前　和氣郡、日生村、寒河村、伊部村、香々登本村、河本村、鹿久居村、大多府島、香島、鴻島、津高郡、宇甘上村、紙工村、赤坂郡、周匝村、邑久郡、北忍村、兒島郡、稗生村、胸上村、太濃地島、上道郡、百枝月村、乙多見

郷

〔古事記 下仁德〕大后爲將豐樂而、於採御綱柏、幸行木國之間、天皇婚八田若郎女、於是大后御綱柏積盈御船、還幸之時、所駈使於水取司、吉備國兒。島。之仕丁、是退己國、於難波之大渡、遇所後倉人女之船、○下略

〔日本書紀 十九欽明〕十七年七月己卯、遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒島郡、置屯倉、○下略

〔倭名類聚抄 八備前國〕和氣郡　坂長佐加奈加　藤野布知乃　益原萬須波良　新田爾布多　香止加々止

磐梨郡　和氣　石生伊波奈須　那磨　肩背加多世　磯名　物部　物理毛土呂井

邑久郡　邑久於保久　靱負由介比　土師反之　須惠　長沼奈加奴　尾沼乎奴　尾張乎八利　杯梁○高山寺本杯梁作柘梁、註都奈之、　石上伊曾乃加美　服部波土里

赤坂郡　周匝○高山寺本註須佐比　宅美○高山寺本註多久三　輕部　高月　鳥取　葛木

御野郡　枚石比良之　廣世比呂世　出石伊豆之　御野美乃　伊福伊布久　津島都之萬

津高郡　驛家　賀茂　津高　健部

兒島郡　三家美也介○介、高山寺本作希　都羅○高山寺本註豆良　賀美○美、高山寺本作鷹、　兒島古之萬

上道郡　宇治　幡多○高山寺本註波多　可知○高山寺本註加知　上道　財田○田、高山寺本作部、　居都○高山寺本註古豆　日下　那紀○高山寺本註奈岐　寄田○寄田、高山寺本作豆田、註末女多、

〔續修東大寺正倉院文書 四十七〕謹啓　申可爲勘籍沙彌等事
沙彌慈良備前國邑久郡。磯。梨。郷。戸主藤造國足戸口秦部國人○中略

寶龜五年三月十二日

〔唐招提寺文書〕備前國津高郡津高郷陸田實買券
津。高。郡。津。高。郷。人夫解　申進廰根實買陸田券文事○中略

寶龜七年十二月十二日○署名略

津高郡

兒島郡

御野郡五十町長江東限東丹比眞人墾田西津高界江南溝北石木山之限○中略

天平十九年二月十一日○署名略

(續日本紀二十九)神護景雲三年六月壬戌、備前國○中略御野郡人物部麻呂等六十四人、賜姓石生別公、

(備前國誌五上)津高郡

東は西大川を限り、御野赤坂兩郡、美作國久米南條郡に隣り、北は西大川に至り、同國久米北條郡眞島郡の境にいたり、西は備中國上房、加陽、都宇三郡にさかひ、南は海にいたる、山多く平野少し、

(大安寺伽藍緣起幷流記資財帳)合今請墾田地玖佰玖拾肆町○中略

備前國壹佰伍拾町開田廿三町未開一百廿七町○中略

津高郡五十町比美奈原東堺江西備中堺南溝北山幷百姓墾田塩之限○中略

天平十九年二月十一日○署名略

(備前國誌十一上)兒島郡

此島凡東西九里、南北二里、城府の南二里に有り、此島の北を内海と云、いにしへは西國往來の舟路なりしが、年歴て後干潟となり、中比墾田して備中の地につらなる、山間所々田野多く、海上運送魚鹽の利多し、依て民豐饒なり、

(古事記傳五)吉備兒島、○中略兒島は高津宮ノ段にも見ゆ、吉備國に兒の如く附る故の名なるべし、或說に、昔百濟國の人兄弟三人、いまだ兒なりしとき、吾朝に來り、吉備國にして、一つの島にとゞまれり、其後繁昌にみな兒と云字をまるしたる故に、その島を兒島となづく、其兄弟住宅を姓とし、宇喜多としなのれり、これ此ノ國の宇喜多ノ家の先祖なりと云るは、凡て信られぬことなり、万葉六ノ巻に歌あり、後に備前ノ國の郡になれり、書紀欽明巻に備前兒島郡とあり、和名抄に兒島古之末郡是なり、さて書紀には、此島大八洲の一ツに入れり、

應置赤坂郡主政一員事

右得備前國解偁、件郡郷六、戸二百九十三、課丁千七百卅六、調庸租稅各有其數、與御野、磐梨郡、賦稅殆益、望請准彼兩郡、加任主政者、正三位行中納言兼右近衛大將皇太后宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣良世宣、奉勅依請、

元慶五年十一月三日

上道郡

〔備前國誌十上〕上道郡

東は邑久郡に隣り、東川を境とし、北は磐梨郡赤坂兩郡の界に至り、西は御野郡に隣り、西大川に界ひ、南は海に至る、いつの頃よりか奥口と二ッに分れり、

按るに、天文元和の頃、撿地帳に上東郡の名有り、郷庄多くは、今は上道郡の名也、上道郡を分て、上東郡を置か、又上道を上東と書しにや不詳、

山少く平野多し、尤膏腴の地なり、

〔大安寺伽藍縁起幷流記資財帳〕合今請墾田地玖佰玖拾肆町(〇中略)

備前國壹佰伍拾町(開廿三町 未開一百廿七町)

(上道郡五十町大邑夏峯原東山守江、西石間江 南海北山〇中略)

天平十九年二月十一日(〇署名略)

御野郡

〔備前國誌五下〕御野郡

東は上道郡にさかひ、西大川に至り、今は川筋替はりて、竹田村、西河原村、東河原村、濱村此川の東にあり、西北は津高郡に隣り、南は海に至る、平野多く山少し、尤膏腴の地なり、古は三野と書り、

〔大安寺伽藍縁起幷流記資財帳〕合今請墾田地玖佰玖拾肆町(〇中略)

備前國壹佰伍拾町(開廿三町 未開一百廿七町〇中略)

水、公私難通、因茲江西百姓更爲公務、請河東依舊爲和氣郡、河西建磐梨郡、其藤野驛家遷置河西、以避水難、便均勞逸、許之、

〔類聚三代格　七〕太政官符

應加置磐梨郡主政一員事

右得備前國解偁、被案内、件郡元與和氣郡爲一郡、而其間有一大川、吏民往還有煩、仍以去延暦七年六月十三日、申官分置件郡、即管郷六、戸二百九十七、課丁二千三百六、但進調庸出擧官稻、郡司少員、濟事乏人、望請、因循御野郡、被置件員、令濟郡務、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宣、奉勅依請、

元慶四年十一月五日

邑久郡

〔備前國誌　九上〕邑久郡

西は東川に至り、上道郡に隣り、北は和氣郡の界にして東南は海に至り、平野多く山少く、尤膏腴の地也、大川を帶、海濱多して商舶通路便して、富饒民多し、

〔續日本紀　十五聖武〕天平十五年五月丙寅、備前國言、邑久郡新羅邑久浦漂着大魚五十二隻、長二丈三尺已下、一丈二尺已上、皮薄如紙、眼似米、聲如鹿鳴、故老皆云、未嘗聞也、

赤坂郡

〔備前國誌　六〕赤坂郡

南は上道郡にさかひ、東は磐梨郡の境に至り、東北は粟川をさかひ、和氣郡作州英田郡に隣り、北は作州久米南條郡にさかひ、西は津高郡にいたり、西大川をさかひとす、山多く平野少し、

〔續日本紀　二十九稱德〕神護景雲三年六月壬戌、備前國藤野郡人別部大原〈○中略〉賜姓石生別公、〈○中略〉赤坂郡人外少初位上家部大水〈○中略〉六人石野連、

〔類聚三代格　七〕太政官符

和氣郡
藤原郡
藤野郡

〔備前國誌 八上〕和。氣。郡。
東は播州赤穂佐用兩郡にさかひ、北は作州英田勝南兩郡に隣り、西は東川に至り、赤坂磐梨兩郡にとなり、南は邑久郡に界ひ海に至る、山多く平野少し、
〔續日本紀 八元正〕養老五年、四月丙申、分備前國邑久赤坂二郡之鄕、始置藤。野。郡。
〔大日本史 國郡二十六備前〕養老五年建藤原郡、(本書原作野、今據聖武紀訂、後改藤野、尋改和氣、)
〔續日本紀 九聖武〕神龜三年十一月己亥、改備前國藤原郡名爲藤。野。郡。
〔備前國誌 八上和氣郡〕按るに元正天皇養老五年藤野郡を置と有り、藤原郡と云ふ事は外に見えず、疑ふべし、
〔續日本紀 二十七稱德〕天平神護二年五月丁丑、太政官奏曰、備前國守從五位上石川朝臣名足等解偁、藤。野。郡者、地是薄塉、人尤貧寒、差科公役、觸途忩劇、承山陽之驛路、使命不絕、帶西海之達道、迎送相尋、馬疲人苦、交不存濟、加以頻遭旱疫、戶纔三鄕、人少役繁、何能支辨、伏乞割邑久郡香登鄕、赤坂郡珂磨、佐伯二鄕、上道郡物理(モトロギ)、肩背(カタセ)、沙石三鄕、隸藤野郡、又美作國守從五位上巨勢朝臣淨成等解偁、勝田郡塩田村百姓、遠闊治郡、側近他界、差科供承、極有艱辛、望請隨所住處、便隸備前國藤野郡者奏可、
〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲三年六月乙丑、改備前國藤野郡爲和氣郡、

磐梨郡

〔備前國誌 七〕磐梨郡
南は上道郡にさかひ、東は和氣郡に隣り、東川を境とし、西北は赤坂郡の境に至る、古へは石生の字を用ひ、又古事記に石無の字を用ゆ、山多く平野少なし、
〔續日本紀 三十九桓武〕延曆七年六月癸未、美作備前二國國造中宮大夫從四位上兼攝津大夫民部大輔和氣朝臣清麻呂(○和以下七字原脫、據一本補、)言、備前國(○備前國三字原脫、據一本補、)和氣郡河西百姓一百七十餘人款曰、己等元是赤坂上道二郡東邊之民也、去天平神護二年、割隸和氣郡、今是郡治在藤野鄕、中有大河、每遭雨

史料	邑久	赤坂	和氣	磐梨	上道	御野	津高	兒島	
六國史			藤原 藤野			三野			
古書	大伯			石无		同			
延喜式	邑久	赤坂	和氣	磐梨	上道	御野	津高	兒島	[illegible]入
倭名抄	同	同	同	同	同	同	同	同	同
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	同	同	入郡
諸書	同	同	同	磐生 磐梨	同	御野 三野	同	同	
郡名考	同	同	同	磐梨	同	御野	同	同	同
天保郷帳	同	同	同	同	同	同	同	同	同
明治十一年郡村名	同	同	同	同	同	同	同	同	同
地誌提要	同	同	同	同	同	同	同	同	同
郡區編制	同	同	同	同	同	同	同	同	同

國府　郡

〔倭名類聚抄〕備前國國府在御野郡、行程上八日、下四日、

〔伊呂波字類抄〕備前國〇中略 御野府

〔倭名類聚抄〕備前國〇中略 管八〇中略 和氣 磐梨伊波奈 邑久於保久 赤坂安加佐 上道加無豆美知 御野美乃 津高豆加太 兒島古之末

〔延喜式〕備前國、上、管 和氣 磐梨 邑久 赤坂 上道 御野 津高 兒島 右爲近國、

〔易林本節用集〕備前、備州 上、管十一郡、〇中略 小島、和氣、磐梨、邑久、赤坂、上道、御野、兒島、小足、津高、釜島、

〔備前國誌〕備前國〇中略 郡〇中略 雜書に十一郡と有て小豆、釜島、小島の三郡の名あり、據をとらず、按るに日本紀其外諸書に、備前國小足島といふ事見へたり、足豆字に似たり、小豆島の事ならん、釜島郡といふは、下津井の迫門に釜島といふ小きしまあり、此あたりの事を云ふにや、小島といふ處をとらず、皆考べからず、

〔皇國郡名志〕備前國 舊八郡 今九郡

郡			郡		
和氣	＾島田町 ＾片上 ＾伊部 ＾八木山 ＾粟町 ＾三石 ＾鹽田町	作播界	磐梨	＾島田	國中
邑久	＾牛窓 ＾笠加新町 ＾神崎 ＾正濡 ＾山田	南海郡	赤坂	＾白石 ＾スサイ町	作界
上道	驛町無シ	國中郡	上東	＾西大寺 ＾藤井	上道皇
御野	岡山 ＾大島井	國中	津高	＾金川 ＾建部	備中界細長ク遶ル郡
兒島	●下津井 ●藤戸 ●常山	此郡備前地ヲ離レテ備中ニ續、岡山入江ニ向島ノ如シ、			

今增二上東郡一

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕備前

三野國造

輕島豐明朝御世、元封弟彥命次定賜國造、

〔新撰姓氏錄右京皇別下〕和氣朝臣

垂仁天皇皇子、鐸石別命之後也、神功皇后、征伐新羅凱旋、明年車駕還都、于時忍熊別皇子等、構逆謀、於明石堺備兵待之、皇后覺之、遣弟彥王於針間吉備堺、造關防之、所謂和氣關是也、太平之後、錄從駕勳、酬以封地、仍被賜吉備磐梨縣、始家之焉、光仁天皇寶龜五年、改賜和氣朝臣姓也、續日本紀合、

〔日本書紀應神十〕二十二年九月丙戌、天皇狩于淡路島、○中略天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆島、庚寅、亦移居於葉田葉田此云簞葦守宮、時御友別參赴之、則以其兄弟子孫爲膳夫而奉饗焉、天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀、而有悅情、因以割吉備國、封其子等也、則分川島縣、封長子稻速別、是下道臣之始祖也、次以上道縣、封中子仲彥、是上道臣、香屋臣之始祖也、次以三野縣、封弟彥、是三野臣之始祖也、復以波區藝縣、封御友別弟鴨別、是笠臣之始祖也、卽以苑縣、封兄浦凝別、是苑臣之始祖也、卽以織部縣賜兄媛、是以其子孫、於今在于吉備國、是其緣也、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月丙戌、大友皇子○中略弘文遣佐伯連男於筑紫、遣樟使主盤磐手於吉備國、並悉令興兵、仍謂男與磐手曰、其筑紫大宰栗隈王與吉備國守當摩公廣島二人、元有隸大皇弟、○天武疑有反歟、若不服色卽殺之、

〔日本書紀天武二十九〕八年三月己丑、吉備大宰石川王、病之薨於吉備、

〔續日本紀文武一〕四年十月己未、直廣參上野朝臣小足爲吉備總領、

〔續日本紀文武三〕大寶三年七月甲午、正五位下猪名眞人石前爲備前守、

〔吾妻鏡三〕壽永三年元暦元年二月十八日丁丑、武衞○源賴朝被差御使於京都、是洛陽警固以下事、所被仰也、又○中略備前○中略已上五箇國、景時、○梶原實平○土肥等、遣專使可令守護之由云云、

スル、州豪田井飽浦等之ニ應ズ、高德之ヲ討シ克タズ、盛朝亦賊ニ降ル、尊氏其族石橋和義ヲシテ三石(和氣郡)ニ據ラシメ、以テ官軍ニ抗ス、新田義貞其弟義助ヲシテ來リ伐タシム、利アラズシテ歸リ、闔州悉ク尊氏ニ歸ス、後尊氏、赤松則祐ヲ守護トシ、傳ヘテ孫滿祐ニ至リ誅ニ伏シ、山名持豐代テ守護ニ補ス、應仁二年、赤松政則、其臣浦上則宗ヲシテ山名ノ守護代(小鴨大和守)ヲ逐ヒ、其地ヲ併セ、則宗ヲ守護代トシ、三石城ニ治シ、松田元隆ヲシテ西方四郡ヲ管セシメ、金川(津高郡)ニ治ス、文明ノ初、則宗京都所司代トナリ、元隆守護代ノ事ヲ行フ、五年、元隆卒シ、子元成襲ギ、頗ル專恣、近邑ヲ攻略ス、十五年、赤松政則之ヲ擊テ克タズ、元成遂ニ自立シテ四郡ニ據ル、永正ノ末、則宗ノ子村宗亦叛シ、赤松義村ノ(政則嗣)ヲ弑シテ州東四郡ヲ奪フ、其子宗景ニ至リ、天神山ノ城ニ移リ、(和氣郡)勢漸ク衰フ、其臣宇喜多直家、沼城ニ據リ、(上道郡)永祿中、松田元堅(元成玄孫)ヲ殺シテ其地ヲ併セ、終ニ全州及美作ヲ擴有シ、宗景僅ニ一城ヲ保ツ、天正元年、直家岡山ニ移リ、五年、宗景ヲ逐テ自ラ國主ト稱ス、豐臣秀吉ノ西伐スル、直家款ヲ納レ、其封疆ヲ保ツ、九年、直家卒シ、子秀家嗣グ、關原ノ役、秀家西軍ノ元師トナリ、兵敗レテ出亡ス、(後八丈島ニ謫死ス)德川氏、小早川秀秋ヲ本州及美作ニ封ズ、秀秋卒シテ國除シ、慶長八年、池田輝政ノ子忠繼ヲ分封シ、其弟忠雄ニ傳ヘ、寬永九年、子光仲ノ時因幡ニ徙リ、光仲ノ從兄光政代リ封ゼラレ、岡山ニ治シ、備中五郡ノ內ヲ併領ス、

王政革新、改テ岡山縣ヲ置、

〔續日本紀(六元明)〕和銅六年四月乙未、割備前國六郡、始置美作國、

〔先代舊事本紀(十國造)〕大伯國造

輕島豐明朝(應神)〇御世、神魂命七世孫佐紀足尼定賜國造、

上道國造

輕島豐明朝御世元封中彥命兒多佐臣始國造、

延喜式曰、備前國驛馬、坂長、珂磨、高月、各二十匹、津高十四匹、

接するに、坂長の驛は、今の三石の驛なり、珂磨驛は磐梨郡にあり、既に廢して村里となれり、高月の驛は志坂郡にあり、既に廢す、今和田、村河本村立川村是なり、津高驛は既に廢して、今いづれの所といふ事をしらず、疑ふらくは津高郡辛川村の事ならん歟、皆其ところ路にかゝぐ延喜式の驛路を考がふるに、坂長の驛より可眞驛にいたり、（此間野谷村今谷村より、吉田村藤野村、和氣村にいたり、東川を渡り磐梨郡吉原村直水村を歷る、）可眞驛より高月驛に至る、（此間赤坂郡日古木村、二井村、上市村、下市村を歷る、）高月驛より津高驛にいたる、（此間吉田村辛佐村西大川を渡り、御野郡杉若郷を過り、三野村より福林寺嶺へいたり、津高郡富原村を歷て辛川村に至る、）

（太平記 七）赤松蜂起事

赤松二郎入道圓心、播磨國苔縄ノ城ヨリ打テ出テ、山陽山陰ノ兩道ヲ差塞ギ、山里梨原ノ間ニ陣ヲトル、爰ニ備前、備中、備後、安藝、周防ノ勢共、六波羅ノ催促ニ依テ、上洛シケルガ、三石ノ宿ニ打集テ山、里ノ勢ヲ追拂テ通ントシケルヲ、（〇下略）

（日本國郡沿革考 三山陽道）備前　古吉備國之地、分爲前中後三國、未詳在何時、（備後之名、既見安閑紀、然則分爲三國、亦尙矣、）管八郡、六百七十三村、

御野（六十三村、古三野國、見國造紀、後爲郡、建國府于此、）　津高（九十三村）　赤坂（九十四村）　磐梨（六十四村、延曆七年、六月、割和氣郡置、從和氣清麻呂之議、）　和氣（八十九村、本藤原郡、養老五年四月、分備前國邑久赤坂二郡之鄕、始置藤原郡[illegible]是、神龜三年十一月、改爲藤野郡、天平神護二年五月、割邑久郡香登鄕、赤坂郡珂磨佐伯二鄕、上道郡物理肩背沙石三鄕、隸藤野郡、神護景雲三年六月、改爲和氣郡、）　邑久（七十八村、古大伯國、見國造紀、）　上道（百八村、古上道國、見國造紀、）　兒島（八十四村）

（日本地誌提要 五十三 備前）沿革　上古吉備ト云、後三州ニ分チ、國府ヲ上道郡ニ置、（今ノ國府市村是ナリ）鎌府ノ初、土肥實平梶原景時ヲシテ守護タラシメ、佐々木盛綱ニ兒島郡ヲ賜フ、北條氏ノ末、加治長綱ヲ以テ守護トナス、建武中興、松田盛朝ヲ守護トシ、兒島高德ニ兒島郡ヲ賜フ、足利尊氏ノ反

宿驛

十九分半、一里一十七町三十八間　奥浦村至牛窻紺浦一十町三十一間、從紺浦至鹽濱二丁、又從紺浦至鹿忍村西上手一十五町四十三間、二里一十町四十八間　牛窻西町、三十三度二十七分半、一十二町四十四間　牛窻綾浦、至西濱三町三間半　一里六町四十七間至綾浦西濱七町五十八間半、從西濱至紺浦鹽濱四町三十九間、從鹽濱至鹿忍村西土手二十五町二十八間半、三　鹿忍村至ヤヲル濱徑測一十三町三十間、　三十一町五間至ヤヲル濱二十三町一十二間　同國師宮歷四隣至東片岡村徑測二十七町五十六間、　一里三十五町三十一間至東片岡村二十三町三十間、從東片岡至立石岬一里一十二町五十間、　南幸田村、二十四度三十六分半、二里三十町三十八間至西大寺川口二里一十八町三十間半　上道郡西大寺村、三十四度三十九分半、三里一十三間　沖新田一番、三十四度三十六分半　二十三町四十四間　平井村沿旭川至岡山小橋町、一里二町五十八間、　一里一十四町五十四間　御野郡米倉村笹瀬川口至米倉村宿所六町四間、北極高三十四度三十八分半、二里二十一町至國界一町五十一間　備中國都宇郡帶江沖新田○中略　備前國兒島郡天城村沿界川至帶江有城村二十三町五十八間、　一十一町五間　藤戸村藤戸川口至藤戸村宿所一十二町一十六間半、北極高三十四度三十三分半、從宿所至帶江有城村、一十二町三十四間半、從有城至福井村、一里三十三町四十三間、　二十九町五十五間半　䖝崎村濱、至䖝崎村宿所一町三十三間　卅四度五十一分半　三里九町四十八間　八濱村、三十四度三十二分半、五里八町五十二間半　小串村米崎　四里一十九町一十七間至胸上村、一里廿一町四十六間半　沼村岬　二里一十町二十三間　田井村ウラウ岬　五町三十八間半　同木崎至田井村一十町二十五間　五里九町一十九間半　日比村、三十四度二十八分、二里一十一町五間　田之口村濱、至田之口村宿所、汎測六町二十四間　三十四度二十八分、三里一十六町二十四間至田之浦岬三里一町二十一間　下津井村中町、三十四度二十六分、五里一十一町四十七間半至福田新田四里十六町五十一間、從福田新田至國界、三十町五十五間、　備中國窪屋郡福井村松山川口

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬○中略

備前國驛馬坂長、珂磨、高月各廿疋、津高十四疋、

〔備前國誌一〕古大路

從美作國津山歷福渡乃金川至北方（中略）○

備前國津高郡中田村建部新町　一里四町三十九間　菅村（歷鐵工村至備中國加陽郡足守、四里三十八丁四十九間、北緯高三十四度四十四分半、從足守至門前村、二十九丁一十二間、）　二十町四十八間　金川村、三十四度四十八分半、　三十町五十一間　小山村（從旭川至牟佐村、二里三十一丁六間、）　三里八町一十九間　御野郡北方村（從津山至北方）街道通計一十四里一十町五十八間、（中略）○

從備前國吉井沿吉備川至津山

備前國上道郡吉井村（至石津宮二町三十九間）　二十五町二十四間　和氣郡坂根村宇治（至坂根村、四町三十九間）　三里八町五十六間　和氣村、三十四度四十八分、　四里七町一十四間半　赤坂郡稲田村　二十一町四十三間　周匝村上町　一町四十九間　同追分（歷倉敷至北山村日脚、四里二十三丁一十八間）　二里二十五町五十一間半（至國界六丁一十九間）　美作國久米南條郡大戸下村

〔日本實測錄一（沿海）〕從大坂沿海至赤間ヶ關（中略）○

備前國和氣郡日生村（ヒナセ）鬼石（至日生村、從測四町二十四間中）　二十町四十六間半（至鬼石崎、一十一町一間）　日生村、三十四度四十四分半、（至鶴田村木生、[illegible]町一十三間）　四里一十八町三十八間（至鶴田村木生、二里九町一十六間）　西片上村、三十四度四十四分半、　二十七町二十五間　浦伊部村（至久々井村、從測一十一町三十五間中）　三十町四十四間（至久々井村、二十六町五間）

久々井村脇之田（至鶴海村從測、一十町一十三間、）　一里六町五十九間　邑久郡鶴海村（至虫明村、從測三十五町一十九間、從虫明至鳥谷村國口、五町四十四間半、又從虫明至虫明村濱、五町三十六間中、）　三里一十六町四十一間　虫明村濱（ムシアゲ）、三十四度四十一分半、一里一十六町一十八間半（至[illegible]ンア、二十二町三十間、從セシア至鳥谷村國口、一十九町五十二間、）　鳥谷村、（ホトリ）（カトリ岬、二町一十八間）一十一町一十四間半　同タチバナ（至[illegible]ヶ濱從測、六町五十一間）　八町四十二間（至[illegible]ヶ濱、八町二間）　同下、[illegible]（至[illegible]ノ濱從測、三町三十二間、）九町四十七間（至[illegible]ノ濱、三町五十一間）　同知尾（至尻海村從測、二十二町一十一間半、）　一里一十四町五十一間半（至[illegible]岬一十四町、從[illegible]至[illegible]濱、三十五町三十七間半）　尻海村片見濱　一十六町三十五間半（至[illegible]濱、三町五十八間半）　尻海村、三十四度三

逸、時取童子等、擲入海中、〈○下略〉

〔續日本紀 三十八 桓武〕延暦三年十月庚午、勅、備前國兒島郡小豆島所放官牛有損民產、宜遷長島、其小豆島者、住民耕作之、

〔源平盛衰記 七〕成親卿流罪事

備前國阿江ノ浦ヨリ内海ヲ通テ、兒島ト云所ニ著給フ、

〔鹿苑院殿厳島詣記〕廿四日〈○康應元年三月〉出給て、かのやしまといふかたなど見わたして、備前國よもぎ島といふ所になりぬ、

いく藥とらましものをよもぎ島をよぶばかりに濟わたる哉

地勢

〔易林本節用集 下〕備前〈備州〉上、管十一郡、四方三日餘、帶南海暖氣、草木五穀先秋致實早、利刀銳戟帛多、中上國也、

〔日本地誌提要 五十三 備前〕形勢 東西兩河美作ヨリ來リテ、州内ヲ貫流シ、兒島一郡、海灣ヲ抱テ備中ニ連リ、島嶼碁布、讃岐ニ接シ、運輸ニ便ナリ、北方山多ク平地少ナシ、南方稍衍沃、瀕海ノ民彙テ漁業ヲ營ス、風俗浮薄ニシテ修飾ヲ好ム、

道路

〔日本實測録 四 街道〕從攝津國西宮中國街道至赤間關〈○中略〉

備前國和氣郡三石村、三十四度四十八分半、　二里三十一町二十一間　西片上村中町　二里一十九町三間半　上道郡吉井村吉備川岸　六町一十五間　一日市村〈ヒトイチ〉〈沿吉備川至西大寺、二里五丁三十一間半〉　一里三十三町二十八間　藤井村、三十四度四十二分、　二里二町二十二間半　岡山小橋町〈至西大寺村、二里二十三丁三十間半〉　六町一間　御野郡岡山西大寺町　三町九間　岡山下之町、三十四度四十分半、　四町一間　同上之町　一里二十三町五十間半　津高郡一ノ宮村〈至吉備津社、四丁〉　一十九町四十七間〈至國界、一十六丁一十八間〉　備中國加陽郡宮内村〈○中略〉

五十八間、大多府島、周廻一里二町四十七間、頭島、周廻三十五町五十二間、會島、周廻一里二十七町五十一間、香島、又香凪島、周廻一里一十六町三十八間、梶島、周廻二十八町四間、遠測　小鶴島　カモメ島　辨天島　荒神島

邑久郡　實測　鬮島、周廻七町、長島、周廻四里二十二町五十四間、沖喜島、周廻一十二町八間、地喜島、周廻一十二町一十八間、大島、尻海村周廻六町四十三間、前島、周廻二里一十七町二間、大島、牛窓周廻二十町五十九間、木島、周廻三十五町二十間、黒島、周廻一十三町八間、中小島、周廻三町五間、端小島、周廻一町五十九間、沖ノ鼓島、周廻一十二町四十三間、犬島、又呼之地犬島、周廻一里四町五十一間、犬島、周廻一十町二十六間、沖竹子島、在北岬屬南岬、地竹子島、在北岬屬南岬、遠測　唐島　横島　鍋島　辨天島　鼠島　上篠　下篠　イモリ山　臼島

兒島郡　實測　高島、宮浦村周廻二十一町六間、鋒島、周廻五町四十八間　野小島、周廻二町一十六間、登場島、周廻一十三町二十四間、釜島、周廻二十六町二十四間、松島、周廻九町二十七間、六口島、周廻一里一十四町四十九間、上濃地島、周廻六町三十間、大濃地島、又呼之下濃地島、周廻八町一十七間、細濃地島、周廻七町四十五間、イサコ濃地島、周廻四町四十九間、葛島、周廻七町八間、上水島、周廻一十九町二十五間、高島、通生村周廻一十一町四十八間、大島、周廻二十八町一十三間、遠測　辨天島　鳩島　坊主島　石篠　大蛭　小蛭　投石　源太夫瀬　神馬島　杓子大　杓子小　長島　ウブメ島　鼻タリ島

實測　備前國兒島郡、讚岐國直島　石島、亘一島、兩方各名　周廻二里一十町三十七間半、備前國兒島郡、讚岐國香川郡、大槌島、周廻一十五町一十九間半、

〔日本靈異記〕上　贖龜命放生得現報龜所助緣第七

禪師弘濟者、百濟國人也、○中略　仰備人舟、將童子二人共乘度海、日晚夜深、舟人起欲、行到備前骨島之

〔古事記 仁德下〕爾天皇聞看吉備海部直之女、名黑日賣、其容姿端正、喚上而使也、〇中略於是天皇戀其黑日賣、欺大后曰、欲見淡道島、〇中略乃自其島傳而、幸行吉備國、爾黑日賣、令大坐其國之山方之地、而、獻大御飯、〇下略

〔日本書紀 雄略十四〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、與百寮辭訣、握手歔欷、崩于大殿、〇中略是時征新羅將軍吉備臣尾代、行至吉備國過家、〇下略

〔日本書紀 欽明十九〕十六年七月壬午、遣蘇我大臣稻目宿禰、穗積磐弓臣等、使于吉備五郡、置白猪屯倉、

〔日本書紀 敏達二十〕三年十月丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部、〇下略

〔日本書紀 天武二十九〕十一年七月戊午、是日、信濃國、吉備國並言、霜降、亦大風五穀不登、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

備前岡山、下之町 極高三十四度四十分半、經度西一度四十八分、從東都 東海道西國海道 一百八十六里三十四丁五十六間半

〔日本經緯度實測〕北極出地

備前　牛窓　三四度三七分〇〇秒　岡山　三四度四〇分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中略　備前　岡山　西一度四八分〇〇秒

疆域

〔備前國誌 一〕備前國 東京師に至る事四十四里餘、江都にいたる事一百六十三里餘、東は播州の境に至り、北は作州にさかひ、西は備中に隣なり、南は海にいたる、

〔日本地誌提要 五十三 備前〕疆域　東ハ播磨、西ハ備中、北ハ美作、南ハ海ニ至ル、東西凡壹拾貳里、南北凡壹拾壹里、

島嶼

〔日本實測錄 九島嶼〕備前國和氣郡　實測　鹿久居(カクヰ)島、周廻七里三町一十六間　鶴島、周廻一十七町

〔松の落葉 一〕吉備國のみつにわかれし時代
おのれ〈○藤井高尚〉がすゝめる此吉備國のかくくち中しりとわかれしはいつのころなりけん、國史にしるしもらされたれば、さだかにはしりえがたし、日本書紀の仁德天皇の卷に、於吉備中國川嶋河派有大虬令苦人といふこと見えたれど、こは神武天皇の御船の難波之碕にいたるとしるされたるごとく、縣守が虬をきりしところ、きびの國のみつにわかれたるのちにては、みちの中なるがゆゑに、さやうにかきたまへるにて、仁德天皇の御代に、みつにわかれてありしとはしりがたし、又同書の欽明天皇の卷に、遣蘇我大臣稻目宿禰等於備前兒島郡置屯倉とあるもかみに同じ、さて同書の天武天皇の卷に、吉備太宰石川王病之薨於吉備、又遣樟使主磐手於吉備國と見え、又吉備國守當麻廣島ともあれば、此ころまではわかれざりしことしりぬべし、續日本紀の元明天皇の卷に、割備前國六郡置美作國とありて、和銅のころには、わかれてありし事さだかなれば、持統天皇の御代にわかれしならんと、おほよそにはしられつ、文武天皇の御代にてはあらじとさだめたるゆゑは、もしその御代にわかれたらんには、續日本紀にしるさるべし、此紀はかかる事までも、もらさずかゝれたる例なればなり、

〔古事記 上〕於是伊邪那岐命、〈○中略〉妹伊邪那美命、〈○中略〉如此言竟而御合、〈○中略〉然後還坐之時、生吉備兒**島**、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、〈○中略〉其素戔嗚尊斷蛇之劒、今在吉備神部許也、

〔日本書紀 三神武〕乙卯年三月己未、徙入吉備國、起行宮以居之、是曰高島宮、

〔古事記 中孝靈〕大吉備津日子命、與若建吉備津日子命、二柱相副而、於針間氷河之前、居忌瓮而針間爲道口以、言向和吉備國也、故此大吉備津日子命者、〈○吉備上道臣之祖也〉次若日子建吉備津日子命者、〈○吉備下道臣、笠臣祖、〉

〔日本書紀 七景行〕二十七年十二月、日本武尊〈○中略〉從海路還倭、到吉備以渡穴海、

古事類苑

地部二十六

備前國

備前國ハ、ビゼンノクニト云ヒ、舊クハ、キビノミチノクチト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ播磨、西ハ備中、北ハ美作ニ接シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ十二里、南北凡ソ十一里、初メ備前、備中、備後ヲ汎ク吉備國ト稱ス、後之ヲ備前、備中、備後ノ三國ニ分チ、元明天皇和銅二年更ニ備前ノ六郡ヲ割テ美作國ヲ置ケリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ御野郡ニ置キ、和氣、磐梨、邑久、赤坂、上道、御野、津高、兒島ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、磐梨、赤坂二郡ヲ合セテ、赤磐郡ト爲シ、御野、津高二郡ヲ合セテ、御津郡ト爲シ、新ニ岡山市ヲ設ケ、岡山縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕備前 岐比乃美知乃久知

〔運歩色葉集 比〕備前 備州

〔日本風土記 一寄語島名〕備前 避然

吉備國

〔倭訓栞 前編七〕きび 吉備の國も、黍のよき國なるよしふるくいへり、今前、中、後の三國に分てり、

〔古事記傳 五〕吉備兒島、吉備は後に三國に分る、○中略 吉備中國、書紀仁德卷に見ゆ、此はそのかみ既に三ツに分れてありしにや、但し此ノ後も多く吉備國とのみあり、天武上卷に、吉備ノ國ノ守なる人見えたるは、三國を統たる守にや、又同卷に吉備太宰と云職も見ゆ、又和銅六年に、備前國の六郡を分て美作國とせられたり、名は黍より出たるなるべし、和名抄に、黍は木美とあれども、美と備は古へ常に通はしいへり、

健兒

き、おきしくめのさら山こえゆかん道とはかねて思ひやはせし

〔延喜式 兵部二十八〕諸國健兒 中略○ 美作國五十人 中略○

諸國器仗 中略○ 美作國 甲三領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

御料私領
一人數拾五万三千三百九拾七人　　　高貳拾五万九千三百五拾三石餘　美作國

弘化三丙午年諸國人數調〇中略
内　八万五千百八拾八人男　六万八千貳百九拾人女〇中略

御料私領
一人數拾六万五千四百六拾八人　　　高貳拾六万貳千九拾九石餘　美作國
内　八万七千六百九拾人男　七万七千七百七拾八人女

風俗

〔人國記〕美作國

美作國之風俗ハ、百人ガ九十人ハ萬事之作法卑劣ニ而、欲心深ク、譬バ借物ヲ而夫ヲ返納セズ而、手柄之樣ニ覺ル風儀ニ而、片意地强ク、我ハ人ニマサラン事ヲ思ヒ、過チ有テモ夫ニ數調ヲ加ル人アレバ、却而夫ヲ邪智ヲ以テ、過チ無ガ如クニ云ナシ、似タル事ナレバ、我ガ過チヲ人ノ過チノヤウニ仕ナシテ、我ガ意地ヲ可レ立トスル事、上下皆是風俗也、然ドモ侍十人ノ内三四人ハ心掛如レ形ノ人モ有、奥意ニハ變ジ安キ所モアルナレバ、頼モシカラザル所アリトイヘドモ、石州ニハマサレリ、

名所

〔日本鹿子十二〕同國〇美作中名所之部
久米(クメノ)更山(サラ)〇中略　宇那提森(ウナテノモリ)　眞島〇中略　漆森　靈峯山　勝間田池　増田池　此外舊記にのする名所ありといへども、在所不二分明一、

〔古今和歌集二十大歌所御歌〕かへしもの、歌
美作やくめのさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代迄に
これは水の尾の御べの美作國の歌

〔增鏡十九くめのさら山〕やよひ〇元弘二年のはじめの七日に、宮こをいでさせ給、〇中略後醍醐、くめのさら山といふ所こえさせ給ふとて、

諸國貢蘇番次（略○中）美作國十一壺（三口各大一升、八口各小一升、○中略）右十四箇國爲第六番（子午年○中略）

交易雜物（略○中）美作國（絹四百七十五疋、油三石、猪脂一斗、榲子四合、鹿革十張、鹿皮廿張、鹿角十枚、大豆十五石、小豆六石、醬大豆廿石、隔三年進醬大豆十五石、）

〔延喜式二十四主計〕美作（略○中）右十二國並上絲（略○中）

美作（略○中）右廿九國輸絹（略○中）

美作國（行程上七日、下四日、）

調、白絹十疋、緋帛廿五疋、緋絲卅絇、緑絲、縹絲、皂絲各五絇、黄絲、橡絲各廿絇、練絲二百絇、自餘輸絹、鐵、庸、白木韓櫃九合、自餘輸綿米、中男作物、紙、茜、苫、黒葛、搗栗子、胡麻油、漫椒油、

人口

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子（略○中）美作國（搗栗子七斗、甘葛煎、）

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥（略○中）

美作國卅一種　黄連十斤五兩、前胡、龍膽、人參各三斤、王不留行七斤、獨活九斤、桔梗八斤、香薷、商陸各五斤、藍漆二斤六兩、昌蒲二斤、細辛、芎藭各十斤、當歸廿一斤、漏蘆、地楡各六斤、白朮十斤、黄蘗四斤、薺苨八兩、芫花、蘭茹各一斤六兩、白芷十四斤、大戟二斤四兩、厚朴、紫菀各二斤十兩、升麻十斤、澤瀉一斤三兩、黄精三斤十兩、茵芋十一兩、桑茸二斤、榧子一斗三升、署預十五兩、秦椒、蜀椒各七兩、麥門冬二斗四升、桃人七升、車前子三升、呉茱萸一斗、乾棗一斗五升、鹿角一具、白殭蠶二兩、

〔延喜式三十九内膳〕年料（略○中）美作國（鮨鮎）

〔毛吹草三〕美作

壇紙　木地　高田硯　誕生寺誕生木（數珠ニ用之、法然上人誕生所也、）

〔官中秘策五〕美作國　七郡

一人數拾七万五千百六拾八人（文化元甲子年）　内（九万九千七拾九人男、七万六千八拾九人女）

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調（略○中）

國產貢獻

出擧稻

〔美作䕫鏡〕總高　合貳拾五万九千七百八拾六石七斗八升六合　譯　高二万六千三百卅五石八斗四升四合　津山御領西西條郡　高壹万四百八拾七石七斗八升四合　同西北條郡　高壹万五千百二十石八斗三合　同東北條郡　高壹万六百五十四石一升三合　同東南條郡　高二万三百五十一石九斗六升五合　大庭郡　高二万四千五百四十石四升四合　勝南郡略〇中、高二万二千七百七拾七石五升九合　久米南條郡略〇中　高三万三千二十七石五斗九升八合　眞島郡略〇中　高二万八千八百五石三斗五升　久米北條郡略〇中　高一万三千六百二十八石一斗二升四合　英田郡略〇中　高三万四千百拾二石四斗七升一合　勝北郡略〇中　高一万九千九百四拾五石九升四合　吉野郡

〔官中秘策五〕美作國　七郡略〇中

一石高貳拾五万九千三百五拾三石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調略〇中

美作國御料私領　一高貳拾六万貳千九拾九石九升八合

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正稅公廨雜稻略〇中

美作國正稅公廨各卅万束、國分寺料四万束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、道橋料一千束、救急料八万束、俘囚料一万束、施藥料一千束、

〔倭名類聚抄五國郡〕美作國略〇註　管七(中略)本穎百二十二萬千束

〔延喜式十五内藏〕諸國年料供進略〇中　緇子(中略)美作、(中略)土佐廿六箇國各四合、〇中略

〔延喜式二十三民部〕年料舂米略〇中　美作國大炊一千百石、糯十石、〇中略

年料租舂米略〇中　美作國一千斛〇中略

年料別貢雜物略〇中　美作國筆六十管、紙麻七十斤、〇中略

山陽道ニハ同年〇康安二年六月三日ニ、山名伊豆守時氏五千餘騎ニテ、伯耆ヨリ美作ノ院庄ヘ打越テ、國々ヘ勢ヲ差分ツ、

〔桃華蘂葉〕梅津是心院〇中略寺領者〇中略美作國打穴庄興禪寺開山塔崇壽院有契約、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月八日丙子、梶原平三景時、原宗四郎行能、押領於最勝、尊勝等寺領之由、有寺家訴之旨、被仰下之間、就被尋、兩人各獻陳狀、以之可被付職事云云、

平景時謹陳申　尊勝寺御領美作國林野英多保事

右下給候之折紙、謹以令拜見候畢、先度被仰下之刻、子細言上畢、御年貢以下雜事、任先例令辨勤候也、於代官改補條者、不可及寺家訴、其故者先例限候、御年貢雜事不致懈怠者、不可爲訴歟、只爲令停止景時沙汰、如此候歟、〇中略

文治三年八月五日　平景時

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年四月十九日壬寅、内宮役夫大工、作料未濟、成敗所々事、〇中略

美作國　平大納言信國知行分、地頭前隼人佐康清、古岡北保、地頭相逢使令辨濟事

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平三河守慶倫大廊下正四位上中將元治元子五月任　拾万石御在城美作西北條郡江戸ヨリ百七十一里

當國浮田中納言秀家、慶長年中、森美作守忠政、同大内記長繼、同美作守長武、同美作守長成、元祿十二、松平越後守宣富、以後代々領之、雁間朝散大夫

三浦備後守弘次　二万三千石　居城美作眞島郡勝山江戸ヨリ百八十四里餘

明和元、三浦志摩守明次依台命、領之、〇下略

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕美作國〇中略管七田數千二十一町三段二百五十六步

〔伊呂波字類抄國郡〕美作國管八(中略)本田一万一千六百十六丁下上國近國

〔海東諸國記〕美作州　郡七、水田一万一千二十二町四段、

〔日本鹿子十二〕美作國七郡、上國、東西三日半、〇中略知行高二十八万六千二百石、

莊保

村、庄屋百三人、　高田御支配二十六村、庄屋二十三人、　坪井御領分十二ヶ村村大庄屋二人庄屋十二人　都合六百九十一村、分郷トモ、

〔出雲路日記〕十日〇三月、中略、くれはて、みまさかの國勝山の里にいたり川ちかき家にやどる、

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應﹅永停﹅止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號﹅有﹅先祖讓狀﹅或稱﹅相﹅傳文書﹅致﹅異論﹅企﹅掠領﹅、兼又有﹅由緖﹅雖﹅令﹅傳領﹅子孫斷絕處々付﹅本所﹅事、

宮寺領中略〇　美作國　大吉庄、　梶並庄、中略〇

極樂寺領中略〇　美作國　伊志庄、中略〇

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔賀茂注進雜記神領下〕同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任﹅院廳御下文﹅可﹅止﹅武家狼藉﹅之由、有﹅其沙汰﹅云々、

下﹅諸國﹅　可﹅早任﹅院廳御下文﹅停﹅止方々狼藉﹅備﹅進神事用途﹅賀茂別雷社御領庄園事、中略〇

美作國　倭文庄、　河內庄、中略〇

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔法然上人行狀畫圖一〕抑上人は、美作國久米の南條稻岡庄の人なり、

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現在日記事中略〇

一顚倒庄々中略〇　美作國　苫田郡知和庄、中略〇

右依﹅宣旨﹅注進如﹅件

建久二年五月十九日〇署名略

〔太平記三十八〕諸國宮方蜂起事附備前軍事

大庭郡　六郷　田原庄　河内庄　久米保　布施庄　大庭郷　吉野郷
眞島郡　十郷　井原郷　月田郷　岡大井郷　栗原郷　鹿田郷　垂水郷　眞島郷　建部郷
高田庄　美甘郷
久米北條郡　六郷　久米庄　打穴郷　大井庄　倭文庄　錦織郷　垪和庄
久米南條郡　三郷　弓削庄　長岡庄　稲岡庄

村里名邑

〔郡名一覽〕御料私領　一美作國　作州　東西三日餘　拾貳郡
高貳拾五万九千三百五拾三石七斗壹合　五百九拾貳ヶ村
●津山　百七十一里餘　●勝山　百八十四里　〈下町　百七十四里
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕御料私領　美作　十二郡、六百二十八村、
高二十六万二千九十九石九升八合
東南條郡十四村　東北條郡三十二村　西西條郡五十一村　久米北條郡五十村　勝南郡七十村　勝北郡五十七村　大庭郡四十七村　眞島郡九十六村　英多郡六十四村　吉野郡六十四村　西北條郡二十三村

〔地勢提要續〕郡邑島嶼奇名
美作　西西條郡、神戸村、東南條郡、野介代村、久米南條郡、神目中村、久米北條郡、下打穴中村、眞島郡、美甘村、延風村、神代村、勝北郡、馬桑村、

〔美作雙紙〕國中村數并御支配分ケ
津山御領分二百十九村大庄屋二十人、中庄屋四十四人、外二分郷四十邑村庄屋二百六十五人、　古町御支配百十八村、庄屋百卅六人、
鹿田御支配五十二村、庄屋五十四人　土居御支配百廿一村、庄屋百廿六人、　倉敷御支配百三ヶ

又參訴之間、可致不日沙汰之旨、下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州、幷盛時、俊兼等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工、作料未濟、成敗所々事、〇中略

美作國〇中略

西〇高〇田〇鄉　在下文

布〇施〇鄉〇　下知親能畢

西美和　下知畢〇中略

文治六年四月十九日

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕〇中略

三貫文〇中略　伊勢田彈入道殿心慶　作州〇神戸〇鄉〇北高田庄々段錢〇中略　壹貫貳百五十八文〇中略　佐野孫次郎殿　美作國月〇田〇鄉〇段錢

〔美作鬢鏡〕十二郡庄鄉保

東北條郡　六鄉　賀茂鄉　青柳庄　北高田庄　美和庄　高倉庄　綾部鄉

東南條郡　三鄉　高野鄉　苫田鄉　林田鄉

吉野郡　六鄉　大野鄉　大原保　吉野保　弘山鄉　粟井庄　讃甘庄

英多郡　六鄉　江見庄　林野保　巨勢保　平野別府　楢原鄉　英多保

勝南郡　七鄉　河邊庄　飯岡鄉　鷹取庄　和氣庄　勝田庄　豊國庄　鹽湯鄉

勝北郡　七鄉　廣野庄　弘岡庄　勝賀茂庄　植月鄉　小吉野庄　天野保　新野庄

西北條郡　四鄉　田邊鄉　田ノ邑庄　田中鄉　香々美庄

西々條郡　五鄉　野介庄　吉原庄　神戸四鄉　天野鄉　圓宗寺別府

百六十餘斛、山川峻遠、運輸大難、人馬並疲、損費極多、望請、輸米之重、換綿鐵之輕、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年七月廿二日己未、復美作國大庭、眞島兩郡百姓課役一年、以山谷之間黎庶貧弱也、

〔陰德太平記五十三〕浦上宗景幷宇喜多直家事

宗景ガ家臣ニ、作州大庭郡久世ノ多田山ノ城主、沼本新右衛門景直トテ、智深ク勇勝レタル士アリ、

〔倭名類聚抄八美作國〕英多郡　英多・　閣武（〇高山寺本作江見、注云衣美、）吉野　大野　讃甘（〇高山寺本注云佐奈保、）大原　粟井（〇粟、高山寺本作栗、）廣井　楢原　林野　巨勢　川會

勝田郡　勝田（加都多〇加都多、高山寺本作加豆未太、）飯岡（〇高山寺本注云以保加、）豐湯（〇高山寺本注云之保由、）塩月（〇塩、高山寺本作哹、注云宇倍津岐、）香美（〇高山寺本注云加々美、）吉野　廣岡　豐國　新野（〇高山寺本注云爾比乃、）賀茂　廣野　河邊　鷹取　和氣

苫東郡　苫田（土毛多〇高山寺本作止方多、苫田大有高田、）高野　綾部（〇高山寺本注云安也倍、）美和（〇高山寺本注云三禾、）賀和　賀茂　林園（〇高山寺本作田、注云波以多、）高倉

苫西郡　田中　田邊　田邑（〇高山寺本注云多乃无良、）布原（〇高山寺本注云與之波良、）能爨（〇高山寺本注云乃許、）大野　香美

久米郡　大井　倭文（〇高山寺本注云之止利、）錦織　長岡　賀美（〇美、高山寺本作萬、）弓削　久米

大庭郡　大庭　美和　河內　久世　田原　布勢

眞島郡　眞島（高眞）之　垂水　鹿田（〇高山寺本作鴻田、）大井　栗原　美甘（〇高山寺本注云三賀毛、）健部　月田　井原　高田

〔文德實錄二〕嘉祥三年八月丙辰、公卿抗表曰、（〇中略）伏見美作國介從五位下藤原朝臣貞道等奏偁、所管英多郡大領外從八位上財田祖麻呂、於郡下川會鄕英多河石上、獲白龜一枚、

〔吾妻鏡十〕文治六年（〇建久元年）四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使

英多郡	吉野郡	勝田郡 勝南郡 勝北郡	苫田郡 苫東郡 苫西郡 苫南郡 苫北郡 東南條郡 西北條郡 東北條郡 西西條郡	久米郡 久米北條郡 久米南條郡	大庭郡 眞島郡

管七　國　十郡　十二郡　同　同　同　同

〔日本靈異記下〕將寫法花經建願人斷肉暗穴賴願力得全命緣第十三
美作國英多郡部內、有官取鐵之山、略○下

〔三代實錄四清和〕貞觀二年六月廿三日壬寅、皇太后宮職水田九町、在美作國英多郡、今相轉勝田郡公田、以英多郡地狹田少、給民口分、常煩不足故也、

〔美作古城記〕吉野郡　粟井庄中村淡相城

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年五月丁丑、太政官奏曰、略○中又美作國守從五位上巨勢朝臣淨成等解偁、勝田郡鹽田村百姓、遠隔治郡、側近他界、差科供承、極有艱辛、望請隨所住處、便隸備前國藤野郡者、奏可、

〔美作古城記〕勝南郡元勝田郡南分　飯岡鄉飯岡村鷲山ノ城略○中　勝北郡元勝田郡北分　小吉野庄河內村河內山ノ城

〔拾芥抄中末本朝國郡〕美作略○中苫西略○中苫東略○中苫南、苫北、

〔郡名考〕美作　苫東(トマノヒカシ、トマヒカシ)　苫西(トマノニシ、トマニシ、トマニシ計)　東南條(トウナンデウ)　西北條(サイホクデウ)　東北條(トウホクデウ)　西西條(サイサイデウ)

〔三代實錄七清和〕貞觀五年五月廿六日戊子、分美作國苫田郡、爲苫東苫西郡、

〔美作古城記〕西々條郡　古稱苫西郡略○中　西北條郡　古稱苫南郡

〔郡名考〕美作　久米(クメ)　久米北條(クメホクデウ)　久米南條(クメナンデウ)

〔三代實錄六清和〕貞觀四年三月十六日甲申、美作國久米郡始置主政一員、

〔續日本紀十武〕神龜五年四月辛巳、太政官奏曰、美作國言、部內大庭、眞島二郡、一年之內所輸庸米八

勝馬 三	勝田 三	苫東 三	苫東		苫西 三				
勝田		苫東		苫西		久米		大庭	眞島
同		同		同		同		同	同
同		苫北	苫東	苫南	苫西	同		同	同
同 勝南	勝北	東苫田 東北條 苫北	東南條 苫東	西苫田 西北條 苫南	西西條 苫西	同 久米南條	久米 久米北條	同	同
同	同	東北條	東南條	西北條	西西條	久米南條	久米北條	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

〔拾芥抄中末本朝國郡〕美作近大　七郡、英多、勝田、苫西、久米、大庭、眞島、苫東府、用野、苫南、苫北、吉野、加之十一也、

〔寛文印知集三〕目錄

美作國一圓　英田郡略○中　吉野郡略○中　勝田郡略○中　苫東郡略○中　苫北郡略○中　苫南郡中○略　苫西郡略○中　久米郡略○中　大庭郡略○中　眞島郡略○下

〔皇國郡名志〕美作國　舊七郡今十郡

英多アイタ　〈土井　備前播界

勝北　●新野　因界

苫田東　●高野　因界

久米南　●弓削　〈法然出生誕生寺　備前界

眞島マシマ　〈勝田　〈ミカモ町　備中伯ノ三國ニカヽル　〈勝山　〈新庄

今久米勝田各分二南北一テ加二吉野郡一

勝南カツタノミナミ　●勝間田　國中

苫田西トマタノニシ　津山　〈院庄町　〈二宮町　因界

久米北クメノキタ　●坪井　國中

大庭オホバ　●湯本町　勝山　●勝山　●久世　國中ヨリ伯界ニ至ル

吉野ヨシノ　●坂根　因幡界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕美作

六國史		
古書		
延喜式	英多アイタ	
倭名抄	同英伊多	
拾芥抄	同	吉野
諸書	英田 同	同
郡名考	英田アイタ	同ヨシノ
天保郷帳	同	同
明治滑革幀	同	同
地誌提要	同アイタ	同ヨシノ
郡區編制	同	同

國府

郡

スル、之ヲ赤松則祐ニ與フ、正平十六年、山名時氏、南朝ニ歸順シ、大擧シテ來攻メ、諸城ヲ拔キ、悉ク全州ヲ併ス、既ニシテ足利義詮ニ降リ、因テ守護トナリ、子氏清ニ傳フ、元中八年、氏清誅ニ伏シ、將軍義滿再ビ則祐ノ子義則ヲ以テ守護トナス、義則ノ子滿祐誅セラレ、山名持豐ノ弟教高、代テ守護トナル、文明ノ初、州内擾亂、赤松政則隙ニ乘ジテ來襲ヒ、遂ニ之ヲ取ル、子義村、其臣浦上村宗ニ弑セラレ、村宗後藤氏(美作守)ト各半州ニ據ル、天正ノ初、浦上ノ家臣宇喜多直家、後藤勝基ヲ誘殺シ、盡ク全州ヲ奪フ、關原ノ役、宇喜多氏亡ビ、德川氏、小早川秀秋ニ加賜ス、秀秋卒シ、森忠政代リ封ゼラレ(高十八萬石)津山ニ治ス、元祿中、國除シ、松平宣富ヲ津山ニ封ズ(高十萬石)、寳曆中、三浦明次、勝山ニ封ゼラレ(後眞島ト改ム)共ニ二藩、慶應三年、松平武聰、石見ノ濱田ヨリ鶴田(シヅタ、久米北條郡和田南村)ニ徙リ、三藩トナル、王政革新、皆改テ縣トナシ、又廢シテ北條縣ヲ置、

〔續日本紀 元明 六〕和銅六年四月乙未、割備前國六郡、始置美作國、

〔伊呂波字類抄 國郡 見〕美作國(管八、舊記云、和銅六年癸丑四月、依備前守百濟南典介堅身等解、割備前國六郡、始置美作國云々、但風土記以上毛野堅身爲國守、又或古記云、百濟南典者、)

〔續日本紀 元明 六〕和銅七年十月丁卯、從五位下津守連通爲美作守、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年(○元曆元年)二月十八日丁丑、武衞(○源賴朝)被發御使於京都、是洛陽警固以下事、所被仰也、又播磨、美作、(○中略)已上五箇國、景時(○梶原)實平(○土肥)等、遣專使、可令守護之由云云、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕美作國(國府在苫東郡、行程上七日、下四日、)

〔伊呂波字類抄 見 國郡〕美作國(中略)府苫東(トマヒンカシ)

〔倭名類聚抄 五 國郡〕美作(○註略)管七(○中略)英多(安伊多)勝田(加豆萬多)苫田(今分爲東)苫田(西)久米　大庭(於保婆)眞島(志萬)

〔延喜式 民部 二十 二〕美作國上(管)英多(アイタ)勝田(カツマタ)苫東(トマノヒカシ)苫西(トマノニシ)久米　大庭(オホハ)眞島(○中略)右爲近國、

建置沿革

水田井尾村、四里三十二丁五十四間、從二井尾一至二片間一、二里三十三丁六間、　一里一十四町三十六間　眞島郡高田村眞島山本陣　新町
五町五十九間至二眞島川岸一五丁八間　本鄕村　一里一町二十一間　神代村至二若代村一一里一十四丁一十五間、從二若代一至二小原市一、一里
二十八丁三十四間半、又從二若代一至二河口村一、二里二十七丁五十一間、　二里二十町二間半　美甘村　一里二十四町一十五間　新
庄宿　二里一十一町一十八間至二國界一六丁三十三間一里一十　伯耆國日野郡坂井原宿○中略

從二美作國津山一經二福渡及金川一至二北方一

美作國西北條郡津山宮脇町　三里三町二十七間至二津山總地丁限一三丁五十一間　久米南條西幸村　二十五
町五十七間　北庄里方村至二瀧生寺一五丁　三里七町四十三間至二上二ヶ村一一里四丁五十七間、　福渡村　一里一十七
町一十四間至二國界西川岸一二丁三十四間半　備前國津高郡中田村建部新町○中略

從二備前國吉井一沿二吉備川一至二津山一○中略

美作國久米南條郡大戸下村至二大戸下村宿所一四町三十九間　三十四度五十九分、　二里三十五町一十五間　西
北條郡津山京町從二吉井一至二津山一川岸、通計一十四里一十八町一十三間、

〔日本國郡沿革考二山陽道〕美作　和銅六年四月、割二備前國六郡一置、上國、管十二郡延喜式等七郡、拾芥抄十一郡、六百
二十八村、
東南條十四村古吉田郡之地、後分爲二二郡一、延喜式載二苫東苫西二郡一、和名抄載二苫田郡一、注二東西一、其分置、在二延喜以前一也、其後又分二析苫東郡一、爲二東南條、東北條二郡一、分二析苫西郡一、爲二西々條、西
北條二郡一、共分析未レ詳レ在二何時一、拾芥抄載二苫南苫北一、即謂二東南條西北條一也、　東北條三十二村本苫田郡之地、說詳二上文一、　西々條五十一村同上　久米北
條五十村本久米郡、延喜式等載、分爲二北條、南條二郡一、未レ詳レ在二何時一、　久米南條六十村說詳二上文一　勝南七十村本勝田郡、延喜式等作二勝田一、分爲二南北二郡一、未レ詳レ在二何時一、
勝北五十七村說詳二上文一　大庭四十七村　眞島九十六村　英田六十四村延喜式等作二英多一　吉野六十四村延喜式、和名抄、不
載、蓋中世割二英多郡一所レ置、和名抄吉野鄕隸二英田郡一、　西北條二十三村說詳二上文一　用野見二拾芥抄一、廢置未レ詳
〔日本地誌提要五十二美作〕沿革　和銅六年、備前六郡英田、勝田、苫田、久米、大庭、眞島、ヲ割キ、本州ヲ置キ、國府ヲ苫田
郡ニ定ム、今西北條郡小原村總社村、其遺址ナリ　鎌府ノ初、土肥實平、梶原景時ヲシテ守護タラシム、足利尊氏ノ反

道路

〔日本實測錄四街道〕從播磨國福崎新村歷知頭及鳥取至豐田略〇中

美作國吉野郡辻堂村歷米田村及栗弁中村至檜原中村、五里一十町一十四間、　六町九間　辻堂村又呼島根　九町四十八間

古町村又呼小原　二里二十四町一十八間　坂根村　二十八町二十八間至國界人八丁一十大間　因幡國知

頭郡駒歸村略〇中

從因幡國知頭歷馬桑至野介代略〇中

美作國勝北郡馬桑村、三十五度九分、　二里三十四町四十八間　廣戸村市場分日本野、三十五度

六分半、　三里二町五十三間　東南條郡野介代村從知頭至野介代街道、通計一十里九町五間、

從因幡國岡田歷犬狹峠至本鄕略〇中

美作國大庭郡下長田村　三里八町五十一間　湯本村　二十町一十五間　社村至檜見神社一十二丁二十七

間、從檜見神社至村郡神社、九丁二十一間、　一十八町四十二間　釘貫小川村　一里七町六間至高田川畔、三十間　眞島郡仲

間村湯眞賀　二里二十八町一十八間　本鄕村從岡田至本鄕街道、通計一十三里三十五町一十四

間半、

從播磨國手野歷津山及米子至松江略〇中

美作國英田郡土居町　二里九町四十八間　楢原上村、三十五度一分半、　一十三町四十五間至楢

原中村一十二丁五十一間　勝南郡北山村日神　一里一十六町一十七間　勝間田村、三十五度二分、　二里

一十五町　東南條郡野介代村　二十二町三十間至津山京町七丁六間半、　西北條郡津山京町　三十六

間　同界町、三十五度三分半、　二町三十間　同元魚町　二十一間　同元魚町本通至同町陸七丁八間半、橋

町陸至山北村入丁一十七間、從山北至一ノ宮中山神社二十八丁三間、又從山北至總社三丁三十間、　五町四十五間　同宮脇町田中川岸　一里

八町一十七間至津山安岡町限七丁三十間　西西條郡院在村至後醍醐帝行宮跡、六丁四十五間　一里三十一町四十八間　久

米北條郡郡井下村又呼井宮　三里一十町至上河內村畔一十五丁九間　大庭郡久世村原方又呼久世町、[illegible]會町及[illegible]

位置

〔諸國名義考 下〕美作

和名抄に美萬佐加、國府在苫東郡、名義いまだ考へ得ず、強ていはゞ、美和坂にてはあらざるか、此國はもと備前國より分れたり、苫東郡に美和郷あり、延喜神名式に、備前國邑久郡美和神社あり、かゝればいにしへはかなたこなたおしなべて美和と云けむを、續日本紀、元明天皇和銅六年夏四月乙未、割備前國六郡、始置美作國、とあり、この時美和郷は分たる境なるべければ、名に負いて美和境(ミワサカ)と云るか、これらはおのが强說なり、立入信友は眞島郡に美甘郷あれど、和名抄に訓法なし、もし美字麻なるか、又は美万なるか、國人に問まほしか、らば美甘坂ならむかともいへり、

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

美作津山 坪町 極高三十五度三分半、經度西一度四十三分半、從東都同上(東海道西國海道)下毛野村、歷千本佐用自一百八十八里四町三十二間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

美作 津山 三五度〇三分三〇秒〇 中略

東西里差

山城 京 〇度〇〇分〇〇秒〇 中略 美作 津山 西一度四三分一〇九秒

〔名所方角抄〕美作國 分 丹後境なり、酉申の方より也、

疆域

〔日本地誌提要 五十二 美作〕疆域 東ハ播磨、西ハ備中、伯耆、南ハ備前、北ハ伯耆、因幡ニ至ル、東西凡壹拾四里、南北凡壹拾壹里、

〔易林本節用集 下〕美作 州 作 上、管七郡、東西三日餘、四境國寒〇寒恐害誤 无風、草木衣食繁多、中上國也、

地勢

〔日本地誌提要 五十二 美作〕形勢 山嶽四疆ニ連亘シ、自カラ州界ヲナス、南方地勢漸ク低ク、河水盡ク備前ニ奔注ス、地味膏腴、米麥能熟シ、北方之ニ反ス、民俗樸陋、

〔孔雀樓文集二〕杜播口占上二兄

人謂播州好、桑梓更鍾情、春風花發日、只是不同行、

美作國

美作國ハ、ミマサカノクニト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ播磨、西ハ備中、伯耆、南ハ備前、北ハ伯耆、因幡ニ接ス、東西凡ソ十四里、南北凡ソ十一里アリ、此國ハ元明天皇和銅六年、備前國六郡ヲ割キテ置ク所ニシテ、國府ヲ苫東郡(舊稱苫田郡)ニ置キ、英田、勝田、苫東、苫西、久米、大庭、眞島ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世英多ヲ分チテ英田、吉野ト爲シ、勝田ヲ分チテ、勝南、勝北ト爲シ、苫東、苫西ヲ分チテ苫東、苫南、苫西、苫北ト爲シ、更ニ又東北條、東南條、西北條、西西條ト爲シ、久米ヲ久米南條、久米北條ト爲セリ、明治維新ノ後、吉野郡ヲ英田郡ニ合セ、勝南、勝北、及ビ久米南條、久米北條ノ各二郡ヲ合セテ勝田、久米ノ舊稱ニ復シ、東北條、東南條、西北條、西西條ノ四郡ヲ合セテ苫田郡ト爲シ、大庭眞島ノ二郡ヲ合セテ眞庭郡ト爲シ、岡山縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕美作(美萬佐加)

〔運歩色葉集見〕美作

〔易林本節用集下〕美作(美作州)

〔日本風土記一倭語國名〕美作(迷馬薩家)

〔倭訓栞前編三十〕みまさか　倭名抄に美作をよめり、まは助辭、さかはさくの轉也、もとは見まく坂の義なるべし、

雜載

ほやたるみといふ所、おかしきをとはせ給へば、さなんと奏するに、名をきくよりからき道にこそとのたまはせて、さしのぞかせ給へる御さま、かたちふりがたくなまめかし、けぢかきかぎりはあはれにめでたうもと思ひきこゆべし、大くら谷といふ所すこしすぐるほどにぞ、人丸のつかはありける、あかしの浦をすぎさせ給に、島がくれゆく舟ども、ほのかにみえてあはれなり、〇歌略野中のしみづ、ふたみのうら、高砂の松など名有所々、御らむじわたさるゝも、かゝらぬ御ゆきならば、おかしうもありぬべけれど、〇下略

〔播磨名所巡覽圖會三〕高砂〇中略慶長六年、丑年當村祠造營の時迄は、民家は今洲にありて、官家の傍尾上高砂の間也、其後官家廢して民家は殘り、諸國の通商大場の湊と成りて、大廈つらなり、上に川あり、下に海あり、高船の出入に便よくて遠く交易す、元より本邦出群の名所なれば、名にしおふ風流の名家も多し、今松林を倉庫に換て風藻を改めしは、惜むべきに堪たり、〇下略

〔散木弃謌集六悲歎〕又の日高砂にまかりて、船よりおりて濱にこゝろなぐさめけるに、名にきこゆる松はいづれぞとたづねければ、かれて久敷なりぬといふを聞て、

高砂の松におくれてたつなみのかへるけしきぞ我身成ける

〔播磨名所巡覽圖會二〕舞子濱（たるみの西はづれより山田村迄の間、東西十五六丁、南北五六丁の松林なり、）此地古歌なければ、必名所といふには非ず、されども名高き事、天下に聞へたり、是正に砂色松の翠色、物に異なるが故也、砂は雪より白く、數千株の松に高低なく梢を等ふして、丈に不過、枝幹屈曲をのづから見所ありて、葉の色殊に深くして、鴨の毛のごとし、いかさま高砂尾上住のえといへども、是に一變して獨松林の賞すべき者也、

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略播磨一百人〇中略

諸國器仗〇中略播磨國（甲三領、横刀廿口、弓卅張、征箭卅具、胡籙卅具、）

尾上の松　高砂より龜どまりもいふ所へこゆる間、川より東のかたにあり、

曾根の松　曾根村と云所の海邊にある松也、太サ五かゝえ程ありて、枝々四方にわかれ、無雙の名木也、

〔源平盛衰記十七〕人々見名所名所月事

八月〈〇治承四年〉十日餘ニ成テ、新帝〈〇安德〉ノ供奉ノ人々ツレ〴〵ヲ慰傾、名所ノ月ヲ見ントテ、思々ニ行別ル、〈〇中略〉或源氏大將ノ跡ヲ追、須磨ヨリ明石ニ浦傳フ人モアリ、〈〇下略〉

〔吾妻鏡四〕元暦二年〈〇文治元年〉八月廿四日甲戌、下河邊庄司行平、歸參御免、自鎭西去夜參著、是相副參州、發向西海、竭軍忠訖、〈〇中略〉仰曰、西國者大底見之歟、依今勳功欲宛行一國守護職、何國哉可請者、行平申云、播磨國、有弥猪明石等之勝地、有如書寫山之靈場、尤所望云云、早可有御計之由、被諾仰云云、

〔平家物語一〕すゞきの事

ある時たゞもり、びせんの國よりのぼられたりけるに、鳥羽の院、あかしのうらはいかにと仰ければ、忠盛かしこまつて、

有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよるとみえしか、と申されたりければ、院大きに御かん有て、やがて此歌をばきんえうしうに入られける、

〔源平盛衰記四十三〕安德帝不吉瑞幷義經上洛事

九郎判官義經、虜ノ人々ヲ相具シテ、播磨國明石浦ニ著、名ニシオフ名所ナル上、今夜ハコトニ月隈ナクサヘツヽ、秋ノ空ニモ劣ラズ、深行儘、女房達額ナシツドヘテ、旅寢ノ空ノ旅ナレバ、夢ニ夢見ル心地ニテ、終夜打マドロム事モナシ、

〔增鏡十九くめのさら山〕福原の島より宮〈〇尊良〉は御舟にたてまつる、〈〇中略〉はりまの國へつかせ給て、え

播磨ノ風俗智惠有テ義理ヲ不知、親ハ子ヲタバカリ、子ハ親ヲダシヌキ、主ハ被官ニ領地ヲ鮮ク與ヘテ好ヲ人キ掘出シ度ト志シ、亦被官ト成ル人ハ、主ニ奉公ヲ勤ル事ヲ第二ニ而、調儀ヲ以所知ヲ取ラント思ヒ、悉皆盜賊ノ振舞也、侍ハ中々不好、不及是非也、若キ侍ノ風上ニモ可置國風ニアラズ、偏ニ是國ハ上古ヨリ如此ノ風俗、終ニ暫クモ善ニ定ル事ナシ、

〔日本鹿子十二〕同國〇播磨中名所之部

垂水　須磨と大倉谷との中道也、明石のうち也、うたにたるみの上のさわらびとよめるは、此所のことなりと云り、

明石浦　ほの〳〵とあかしのうらと詠せし、此浦也、大倉谷より十町ばかり西に松一村立て、人丸の塚今にあり、〇中略

印南野　大倉谷より人丸塚を西に見てくだれば、かにが坂といふ所を過て、清水の里、野口などいふ所有、印南郡のうち也、〇中略

野中の清水　印南の在所の前に有之、此清水の流海へ通ふ也、細き流也、海道より此川を渡て行也、十町ばかり北野中に池有、それを清水といふ也、印南の北は美作也、山本はるかに見えたる也、

藤江の浦　ひかさの浦など云は、明石にもちかし、蔦の細江といふ所もあり、〇中略

飾磨里　印南野より西也、〇中略之かまのかちと詠せしは、褐色染のことゝ也、此所の名物也、

室津　かく川といふ宿の、未申のかた也、

高砂〇中略

青山　かく川の宿より西なり、海道也、宿有、

夢前川　書寫山より南のかた也、北より南へ流たる川也、

懸の濱　懸の松原とも云也、當國と備前の堺也、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略○中
播磨國五十三種　青木香、芎藭、白薇各二斤、前胡、藍漆、伏苓、鬼箭各四斤、桔梗卅斤、細辛五十斤、柴胡、栝樓、當歸各十斤、王不留行廿五斤、獨活卅六斤、茹蕷、鷄腸花各六斤、芎藭、桑根白皮各廿斤、昌蒲六斤、香薷、烏賊骨各十六斤、龍膽、石韋、連翹各八斤、苦參七十一斤、白朮九十二斤八兩、玄參一斤十四兩、商陸、杜仲各七斤、松脂、厚朴、貫衆各五斤、升麻卅斤、白蘞三斤十二兩、白芷十一斤、地楡九斤、黄耆三斤四兩、天門冬三斤十兩、茵芋十四斤、鋼牙一斤、署預九斤、桃人二斗、秦椒一升五合、蔓荊子五升、呉茱萸三升五合、薺葉子、蜀椒各三升、車前子一斗、獺肝二具、鹿茸一具、鹿角一具、白殭蠶二兩、

〔延喜式內膳三十九〕年料略○中　播磨國鮨年魚二擔四壺

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、略○中　宅常擁、集諸國土產、貯甚豐也、所謂略○中　播磨針

〔毛吹草三〕播磨

野里鍋　小鹽鏡　完粟鐵　刃金　鋤　鍬　炭　栗柱　簀木　煎茶　清水折敷　北條蓋　書

寫紺　飾磨褐色染　東條莚　室滑　同枕　馬皮　老海鼠ホヤ　鰈　高砂飯蛸　二見蜂蛸　明石

赤目張　赤石貝赤貝也　阿古鹽　龍野米　津田穗蓼年中有ト云

人口

〔吹塵錄五人口及國高〕文化元甲子年諸國人數調略○中
御料私領
一人數五拾九万九千四百壹人　高五拾六万八千五百拾七石餘　播磨國
内　三拾壹万四千四百九拾人　男
　　貳拾八万四千九百拾壹人　女○中略
弘化三丙午年諸國人數調略○中
御料私領
一人數五拾九万四千五百六拾人　高六拾五万千九百六拾四石餘　播磨國
内　三拾万七千五百拾八人　男
　　貳拾八万七千四拾貳人　女

風俗

〔人國記〕播磨國

年料舂米〈○中略〉播磨國〈内藏寮石、大炊一千一百石、糯廿四石、○中略〉

年料租舂米〈○中略〉播磨國〈二千石○中略〉

年料別貢雜物〈○中略〉播磨國〈筆一百卅管、墨三百五十廷、紙麻二百十斤、搗鹽二石、馬革廿二張、柏一百俵、○中略〉

諸國貢蘇番次〈○中略〉播磨國十五壺〈六口各大一升、九口各小一升、○中略〉　右十四箇國爲第六番〈子午年○中略〉

交易雜物〈○中略〉播磨國〈白絹十三疋、絹三百五十疋、大豆廿六石、胡麻子三石、油二石、鹿革五十張、櫑二合、小豆三石、鹿角菜二石、青苔卅斤、於胡菜廿斤、那乃利曾卅斤、〉

〔延喜式主計二十四〕播磨〈○中略〉右廿五國、中絲、〈○中略〉

播磨〈○中略〉右廿九國輸絹、〈○中略〉

播磨國〈行程上五日、下三日、〉海路八日

調兩面十疋、九點羅二疋、一窠綾十疋、二窠綾、三窠綾、小鸚鵡綾、薔薇綾、各二疋、吳服綾四疋、白絹十疋、緋帛卅疋、纈帛、皂帛、各十疋、綠帛廿疋、帛百五十九疋、池由加五口、〈受二石五斗〉中由加五口、〈受二石一斗〉甕二口、瓱卅八口、小由加十六口、酒壺四合、缶一百七十五口、著乳瓮十八合、洗盤七十七口、有柄大瓶卅九口、大壺、中壺、各八合、負瓶二口、大高盤九十九口、有柄中瓶卅口、叩瓮八十七口、麻笥盤四口、大盤七十五合、臼卅六口、鉢卅二口、有柄酢瓶廿口、無柄酢瓶卅口、筥坏二百九十口、様筥坏凡坏各八十口、椀五百五十合、片椀百五十二口、小碟廿口、小盤有蓋八十合、無蓋椀五十口、片盤六十七口、椀下盤、各五十口、深坏五十九口、大筥坏卅口、小筥坏、菓坏、各七十一口、盌坏八十合、燈盞八十口、赤土五斛一斗、自餘輸絹、布、鹽、　庸、韓櫃卅二合、〈塗漆著鏁五合、白木廿七合、〉自餘輸米、　中男作物、紙、薄紙、簀、黑葛、蜀椒、胡麻油、雜腊、煮鹽年魚、鮨年魚、

〔延喜式大膳三十三〕東宮青槲干槲各日別廿五把、荷葉卅枚、侍從所青槲干槲各日別十五把、

右〈○中略〉干槲播磨國所進〈○中略〉

諸國貢進菓子〈○中略〉播磨國〈椎子一擔、搗栗子、〉

飾西郡略○中　小以三萬千五百六十三石四斗四升二合　飾西郡　七十九ヶ村

揖東郡略○中　小以四萬八千四百九十石九升六石　揖東郡　百三十四ヶ村

揖西郡略○中　小以二萬九千六百五十八石七斗三合　揖西郡　百二ヶ村

赤穗郡略○中　小以三萬八千八百六十八石三升六合　赤穗郡　百三十二ヶ村

佐用郡略○中　小以二萬三千三百五十石三斗四升四合　佐用郡　八十八ヶ村

完粟郡略○中　小以三萬八千三百二十四石四斗二升一合　完粟郡　百四十ヶ村

高都合　五十六萬八千五百十七石五斗七升九合　千八百ヶ村

元祿十五壬午年二月

〔官中秘策四〕播磨國　十四郡略○中

一人數五拾五万千三百九拾三人　内貳拾六万五千七百六拾壹人女貳拾八万五千六百三拾貳人男

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調略○中

播磨國私領御料　一高六拾五万千九百六拾四石八斗壹升三合五勺

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中

播磨國正稅公廨各卅四万束、國分寺料四万束、文殊會料二千束、平等寺料一千束、施藥院料一万束、藥分料一万五千束、學生料一万五千束、修理驛家料四万束、池溝料四万束、道橋料一万束、救急料一十二万束、俘囚料七万五千束、

調庸貢獻

〔倭名類聚抄五國郡〕播磨國略○　管十二(中略)正稻各四十四萬束、本稻百二十二万束、雜稻三十三萬束、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進略○中　交易雜物○六百五十疋(中略)百疋○播磨一　櫃(中略)播磨(中略)各二合○中略　黑米二百斛(中略)播磨國卅石

〔延喜式二十三民部〕凡諸國所進兵庫寮修理甲料馬革者略○中　播磨卅二張、略○中

カバ、天平年中ニハ田代七千餘町、畠三千六百餘町ト注サレケルガ、白河院御治世寛治年中、諸國總撿云、田九億四萬六千餘町ノ時ハ、當國總田數二萬一千百三十六町ト云、關東御放書ニテ、嘉禎三丁酉年ニ、田所等ヲ注進ニハ、總田數壹万六千七百十八町七段二十五代、內御放書ニテ、建治二年、兩廳宣兩田所ガ注進ニハ、壹萬七千四百四十九町二段五代也、

〔播磨鑑〕一天正年中、秀吉公之御時爲高播磨國中、高五十五万七百石壹升九合也、其後池田輝政御時、高六十貳万八千九百十一石六斗八升(慶長年中改ノ時ノ高也)又延寶九年辛酉秋九月、公儀御目付衆改之時、大上國、四方三日半國中高五十四万貳千八百八十八石餘、〇下略

〔日本鹿子十二〕播磨國十四郡、大上國、四方三日半、〇中略知行高五十二万千三百石、

〔播磨國石高記〕播磨國　明石郡〇中略　小以五萬二千四百一石四斗四升六合　明石郡　百四十九ケ村

美囊郡〇中略　小以四萬九百七十五石三斗九升　美囊郡　百五十五ケ村

加古郡〇中略　小以三萬六千八百九十四石六斗七升一合　加古郡　九十八ケ村

印南郡〇中略　小以三萬五千八百十九石四斗六升二合　印南郡　百十四ケ村

加東郡〇中略　小以五萬百十六石五斗六合　加東郡　百四十七ケ村

加西郡〇中略　小以三萬八千八十五石七斗七升二合　加西郡　百二十二ケ村

多可郡〇中略　小以三萬三千八百八十七石一斗一升一合　多可郡　百二十四ケ村

神東郡〇中略　小以二萬二千五十六石五斗三升七合　神東郡　七十九ケ村

神西郡〇中略　小以一萬八千百六十四石五斗二升四合　神西郡　六十七ケ村

飾東郡〇中略　小以二萬九千八百六十一石一斗一升八合　飾東郡　七十ケ村

田數 石高

慶長五、池田家臣荒尾但馬居、元和三、小笠原信濃守長次、寛永九、京極刑部大輔高知、同備中守高豐、万治元以後中絶、寛文十二築之、脇坂中務少輔安政、以後代々領之、

柳間 朝散大夫 森美作守忠典　二万石　居城播州赤穗郡赤穗江戸ヨリ百五十五里

城主松平右京大夫政綱、同右近大夫輝興領、正保二、淺野內匠頭長直、同采女正長友、同內匠頭長矩、元祿十五、永井伊賀守直敬、信州飯山替、寶永三、森和泉守長直、以後領之、

柳間 從五位上元治元子五月叙 森對馬守俊滋　一万五千石　在所播州佐用郡三ケ月江戸ヨリ百六十五里

元祿十二、作州ヨリ移之、森氏領之、○郡略

〔慶應元年武鑑〕本多肥後守忠鄰帝鑑間 朝散大夫　一万石　在所播州宍粟郡山崎江戸ヨリ海陸百六十四里

延寶七ヨリ本多氏忠英以後領之

帝鑑間 小笠原幸松丸　一万石　播磨宍粟郡安志江戸ヨリ海陸百六十里

享保二ヨリ小笠原氏領領之

帝鑑間 朝散大夫 丹羽長門守氏中　一万石　在所播州加東郡三草江戸ヨリ百三十里

元文四、越後高柳ヨリ美作エ移、寛保二、爰ニ移、

柳間 朝散大夫 建部三二郎　一万石　在所播州揖東郡林田江戸ヨリ百六十里餘

元和三年ヨリ建部氏代々領之

柳間 朝散大夫 一柳對馬守　一万石　在所播州加東郡小野江戸ヨリ百四十七里廿七町

寛文年中、豫州西江ヨリ移之、○郡略

〔倭名類聚抄五國郡〕播磨國略○註 管十二田二萬千四百十四町三段三十六步、

〔伊呂波字類抄波國郡〕播磨國管十二(中略)本田二万一千二百四十六丁上國近國

〔海東諸國紀〕播摩州　郡十二、水田一万一千二百四十六町、

〔拾芥抄中末本朝國郡〕播磨大近　十四郡(中略)田二萬千二百廿六丁

〔峯相記〕又問云、郡郷田地ノ樣御存知候哉、答云、若ク候シ時、府邊ニテ人々集會ノ場ニテ問候シ

藩封

南禪寺長老消搊上人禪室

〔賢俊僧正日記〕貞和二年四月廿九日丁丑、洞院左府、執權、久我相國等謌向、田。中。庄事、大概召文書了、五月一日己卯、今日播州田中庄事、被逐評定云々、雜掌及晩歸來、宜雲透也云々、四日壬午、田中庄勤裁、今日到來得理了、仰付奬親了、仲村事、奬親請文書進之、又所務法式被仰了、下御敎書了、公用又三千匹、就之沙汰了、六日甲申、田中庄事爲悅申、洞院、執權、久我以下方ニ罷向了、面々悅申了、

〔峯相記〕又問曰、所々靈場本緣起承度候、答云、中略魚吹八幡者、是ヲ推スルニ、大菩薩初而御上ノ時、當國神達、賀古郡ニ詣テ集リ、御迎ニ伊保川ノ邊ニ參會シテ、神樂祭禮ノ儀有キ、中略其時神集會ノ所ヲメ神。。。出ノ保。ト云也、

〔榎戸文書〕御領目錄人給付之

一伏見御領依旱水損年貢不足 中略 播磨國　別納十ケ所中略　一玉。造。保。二千五百疋 庭田大納言中略

永享十二年八月廿八日　當知行分記之　後崇光院御判

〔慶應元年武鑑〕酒井雅樂頭忠績從四位少將元治二丑正月任溜間　拾五万石　居城播州飾東郡姫路江戸ヨリ百五十七里餘

永祿年中、小寺職隆居、天正八、秀吉公羽柴美濃守秀長、同肥後守家定、同右衞門佐勝俊、慶長五、池田三左衞門輝政、同武藏守利隆、元和三ヨリ本多美濃守忠政、同中務大輔忠刻、同甲斐守政朝、寛永十六、松平下總守忠明、同下總守忠弘、慶安元、松平大和守直基、同藤松、慶安二、松平式部大輔忠次、榊原刑部大輔政房、同熊之助忠倫、寛文七、松平大和守直矩、天和四、本多中務大輔政武、同吉十郎忠孝、寶永元、榊原式部大輔政邦、同式部大輔政祐、同式部大輔政岑、寛保元、松平大和守明矩、同喜八郎朝矩、寛延二ヨリ酒井雅樂頭忠恭、以後代々領之、

〔慶應元年武鑑〕松平兵部大輔慶憲從四位上少將文久元酉十二月任大廊下　拾万石御格八万石　御在城播州明石郡明石江戸ヨリ海陸

百四十一里餘

住古別所山城守居、後黑田甲斐守長興、元和三、小笠原右近將監忠眞、寛永九、松平丹波守光重、同十八、大久保加賀守忠季、慶安二、松平山城守忠國、同日向守信之、貞享元、本多出雲守政利、天和二、松平若狹守直明、以後、代々領之、帝鑑間朝散大夫

脇坂淡路守安斐　五万千八十九石餘　居城播州揖西郡龍野江戸ヨリ百六十里

日御下知狀云、東保先例事、無相違、於經年序者、限本給屋敷何及子細乎、早任東保之例、可致沙汰云々、〇中略

以前拾壹箇條、且任關東去四月十九日御教書之旨、且就東保地頭所務之例、下知如件、

天福元年九月十七日　播部助平花押〇下略　駿河守平花押〇下略

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事〇中略

一家地文書庄園事〇中略　新御領〇中略　播磨國厚利庄〇中略　新御領〇中略　播磨國佐用庄内

東庄、西庄、本位庄、新位庄、豐福庄、〇中略　同國神戸庄、石山尼濃國、姫君御方領家職三位殿備領之、〇中略

建長二年十一月　日　愚老在御判

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

サシモノ軍忠有シ、赤松入道圓心ニ、佐用庄一所計ヲ被行、播磨國ノ守護職ヲバ、無程被召返ケリ、

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早且著直衣、烏帽相具御書御手筥

□□□存日下預進也、參御所、〇中略女院御方自餘御書等、有御封、以檀紙立文、押紙之上下、又有銘等、悉進置之、〇中略

一通餘日新院御方　播磨國多可庄〇中略

右庄々可讓進也、輕微之至、雖有其憚、爲顯志不聊恐者也、

嘉元三年七月廿六日　御判

〔南禪寺文書〕播磨國矢野別名　同國大塩庄〇中略

右所々任代々勅附、知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十一月廿七日　參議在判

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡 六〕文治二年四月十三日庚申、北條殿〇時政自京都參著、京畿沙汰間事、條々有御問、〇中略次播磨國守護人、妨國領由事、在廳注文、景時代官狀、雖被下之、未申切是非、次今南、石負兩庄、幷弓削、杣兵粮事、度々被下院宣之間、早可停止之由、捧請文下向畢、　六月九日乙卯、去四月之比、政道事、殊可致興行之趣、付議卿令奏聞給了、勅答之條々、執職事目錄、帥中納言被進之、今日所到來也、

條々〇中略

一播磨國武士押領所々事

委細成敗之條、返々所感思食也、人々愁已散歟、但持捍〇恐拵誤保、桑原、五箇庄、上鴨、東這田庄等、猶令召進去文給、式或國領眼也、或雖去思食、凡景時申狀、一旦雖似有其謂、張行國中之時、爲免一日之命、有寄附所、或自由有押領之地、以之稱相傳歟、安田庄、宮領家若狹局雖稱預給、全不然、以之察、可被男一類偏蔑如國務、早可被誡仰也、於此國一國者、可然者可去進由、今被仰也、度々可隨仰之由言上訖、仍仰能保朝臣、被遣仰畢、一旦雖進去、猶隱居傍庄、催當國之輩、伺隙又致濫妨、能々可被誡仰也、桑原事殊有被仰之旨、

〔十六夜日記〕のころよもぎとかこちけるといふ所のうらがきに、くわうたいこぐうの大夫まゆんせいの卿の御むすめ、ちゝのゆづりとて、はりまのくにこしべのまやうといふところをつたへまられけるを、さまたげおほくて、むかしむさしのせんじ〇北條泰時へ、ことなるそせうにはあらで、まいらせられけるうた、まんちよくせんにも入とやらん、〇下略

〔神護寺文書〕神護寺領播磨國福井庄西保沙汰人　地頭非法條々

一下司公文給田屋敷事

右對決預所法橋有全與地頭代右兵衛尉賴康、令進覽申詞記於關東之處、去貞永元年九月廿四

莊保

〔川角太閤記　一〕一御内證には、上様（○織田信長）は御切腹の事に候へば、此頸の實撿可有者なしとて、播州姫地に被召置候御留守居三吉武藏殿え、此頸姫地のらんかん橋に被掛候へ心持候事、

〔祖父物語〕虎之助高麗ニナリテ、市松モ御一家、我等モ御爪ノハシナリ、何トテ二千石オトリタルゾ、今度ノ鎗ニ市松ニ少モ劣ラズ、伯耆ニカヘストテ、朱印ヲイタヾカザリケル、其聲高ケレバ、太閤キコシ召、虎之助ハ總ジテウツケモノナリ、汝アヅカリオキ、以來ハ市松ト同樣ニトラセント仰ケル、後ニ播州姫路ニテ御加恩アリテ、都合五千石ノ地ヲ下サレケル、

〔峯相記〕又問云、郡鄕田地ノ樣御存知候哉、答云、○中略郡（○播磨）ハ元十二郡、今十七郡ト申ス、○中略庄ハ一百三十九、鄕保ハ八十九所也、

〔東大寺要錄　六〕一諸國諸庄田地（○長德四年注文定）○中略

新發田○中略　播磨國　多河郡栗生庄田廿九町七段百四十四歩

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒寄令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領○中略　播磨國　鞍庄　船曳庄○中略

極樂寺領○中略　播磨國　蟾原庄　松原庄　赤穗庄○中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰（在判○下略）

〔賀茂注進雜記（神領下）〕同（○壽永）三年（○元暦元年）四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文可止武家狼藉之由有沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、○中略

播磨國　安志庄　林田庄○中略

〔千載和歌集雜十四〕崇德院に百首歌奉りける時、戀の歌とてよめる、　皇太后宮大夫俊成

戀をのみしかまの市にたつ民もたえぬ思に身をやかへてん

〔播磨名所巡覽圖會五〕室津　室の泊　室の浦

當津は、播州の一都會にして、西國大名參勤往來の着岸と定め、又乘船の津とも定む、帝畿を去事四十二里、山は三面に裹みて、江灣は一方に泓り、海上百里美景を觀望し、泊船は池中に遊ぶがごとく、旅客は波上に枕を安んず、峯には樵夫の斧を響し、岸には遊女の糸竹に鞴き、國守の艤に海士の網手を寄せ、誠に貴賤苦樂窮覽の界なり、室とは人の居室の事也、故に此江の取まはしこもりたるにたとへていへり、

〔播磨めぐり〕室津　姫路より五里、網干より二里に近し、西國よりの船着にて、はんじやうの湊なり、

〔續應仁後記一〕柳本彈正遭殺害事附播州騷亂事

大永二年二月廿七日ノ夜、村宗情無クモ花房沓野岩井ナンド、云者共ヲ遣シテ、播州ノ室ノ津ニテ、怨主君義村入道定印ヲ弑シケリ、

〔播磨名所巡覽圖會四〕姫路鎭城、(中略)姫山の麓に三村あり、所謂宿村中村國府寺村是也、輝政入府の後、此三村を都て姫地と號す、(後姫路と改む)

〔播磨めぐり〕姫路　御城は山手にあり、城下町多し、はんじやうの所なり、

〔豐鑑一長濱濱砂〕小寺官兵衞申しは、此所(○三木)は播磨にとりてはかたつかたなり、我すみぬる姫路こそ國の中にして、舟の便もよし、此國をしらん人は此所こそよかるべけれ、姫路にうつり住給ふべしと、しきりにいひければ、秀吉内々よかるべき所になんと思ひ給へりければ、姫路にうつり給ひぬ、

伊和村（本名神酒）大神釀酒此村、故曰神酒村、又云於和村、大神國作訖以後、云於和等於我美岐、故曰於和、

〔播磨風土記 神前郡〕堲岡里、（中略）下屎之時、小竹彈上其屎、行於衣、故號波自加村、（中略）

蔭山里、（中略）爾除道刃鈍、仍云磨布理許、故云磨布理村、

〔播磨風土記 託賀郡〕賀眉里、（大海山、荒田村、）（中略）所以號荒田者、此處在神、名道主日女命、无父而生兒、爲之釀盟酒、作田七町、七日七夜之間、稻成熟竟、乃釀酒、集諸神、遣其子捧酒而令養之、於是其子向天目一命、而奉之、乃知其父、後荒其田、故號荒田村、

〔播磨風土記 賀毛郡〕玉野村、所以號然者、意奚袁奚二皇子等、坐於坐美囊郡志深里高宮、遣山部小楯、誂國造許麻之女根日女命、於是根日女已依命訖、爾時二皇子相辭不娶、于日間、根日女老長逝、于時皇子等大哀、卽遣小立勅云、朝日夕日不隱之地、造墓藏其骨、以玉飾墓、故緣此墓、號玉丘、其村號玉野、

〔日本書紀 六垂仁〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、（中略）一云、初天日槍、乘艇泊于播磨國、在於宍粟邑、（中略）仍詔天日槍曰、播磨國出淺邑、淡路島宍粟邑、是二邑、汝任意居之、（下略）

〔峯相記〕又問曰、所々靈場本緣起承度候、答云、（中略）次ニ妙德山者大納言範□卿ノ息慶芳内供、最初建立、一條三條兩帝御願所也、彼内供西國巡禮ノ次ニ、正曆二年三月八日、田原庄有井村ニ一宿ス

〔古文書類纂 上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分（中略）

一家地文書庄園事（中略）　新御領（中略）　播磨國佐用庄内（中略）　江河村　赤松村　千草村　土萬村（中略）

建長二年十一月　日　　愚老（在御判）

〔枕草子 一〕市は（中略）えかまの市、

越部里（舊名皇子代里）土中中、所以號皇子代者、勾宮天皇（○安閑）之世、寵人但馬君小津、蒙寵賜姓、爲皇子代君、而造三宅於此村、令仕奉之、故曰皇子代村、後至上野大夫結卅戸之時、改號越部里、（一云、自但馬三宅越來、故號越部村、）○中略

狹野村、別君玉手等遠祖、本居川內國泉郡、因地不便遷到此國、仍云此野雖狹猶可居也、故號狹野、○中略

酒井村、右所以稱酒井者、品太天皇之世、造宮於大宅里、闢井此野、造立酒殿、故號酒井野、○中略

伊都村、所以稱伊都者、御船水手等云、何時將到於此所見之乎、故曰伊都、

〔播磨風土記讃容郡〕凍野、廣比賣命、占此土之時凍冰、故曰凍野凍谷村、（村原脫、據一本補、）○中略

鹽沼村、此村出海水、故曰鹽沼村、

〔播磨風土記宍禾郡〕宍禾郡、所以名宍禾者、伊和大神國作堅了以後、堺此川谷尾、巡行之時、大鹿出己舌、遇於矢田村、爾勅云、矢彼舌在者、故號宍禾鹿村、名號矢田村、○中略

宇波良村、葦原志許乎命占國之時、勅此地小狹如室戶、故曰表戶、

比良美村、大神之褶、落於此處、故云褶村、今人云比良美村、

川音村、天日槍命宿於此村、勅川音甚高、故曰川音村、

庭音村（本名庭酒）大神御粮枯而生麴、即令釀酒、以獻庭酒而宴之、故曰庭酒村、今人云庭音村、○中略

鹽村、處々出鹹水、故曰鹽村、牛馬等嗜而飮之、○中略

土間村、神衣附土上、故曰土間、

敷草村、敷草爲神座、故曰敷草、○中略

波加村、占國之時、天日槍命先到此處、伊和大神後到、於是大神大恠之、云非度先到之乎、故曰波加村、○中略

島、揖西郡、小神村、金剛山村、下芥原村、地唐荷島、加東郡、河高村、印南郡、梓爪村、生石村、明石郡、和坂村、
多可郡、仕出原村、神西郡、森垣村、仁豊野村、完粟郡、土万村、

〔播磨風土記賀古郡〕昔大帶日子命、〇中略、巡行、達到赤石郡厨御井、供進御食、故曰厨御井、爾時印南別孃、聞驚畏之、即遁度於南毗都麻島、〇中略、天皇知在於此小島、即欲度、到阿閉津、供進御食、故號阿閉村、〇中略、達到迎印南六継村、始成密事、故曰六継村、勅云、此處浪響鳥聲甚譁、南遷於高宮、故曰高宮村、是時造酒殿之處、即號酒屋村、造贄殿之處、即號贄田村、造宮之處、即號館村、

〔播磨風土記印南郡〕益氣里、土中上、所以號宅者、大帶日子命、〇中略、造御宅於此村、故曰宅村、

〔播磨風土記飾磨郡〕伊和里、〇中略、一云、韓人等始來之時、不識用鎌、但以手刈稻、故云手苅村、〇中略、
巨智里、〇草上村、〇中略、所以云草上者、韓人山村等上祖、柞臣智賀那、請此地而墾田之時、有一聚草、其根、尤臭、故號草上、〇中略、
安相里、〇中略、所以號長畝川者、此川生蒋、于時、賀毛郡長畝村々人到來苅蒋、爾時此處石作連等爲家相闘、仍殺其人、即捉棄於此川、故號長畝川、〇中略、
枚野里、〇新良訓村、〇中略、所以號新良訓者、昔新羅國人、來朝之時、宿於此村、故號新羅訓、〇山名亦同、中略、
小川里、〇中略、所以稱高瀬者、品太天皇、〇中略、登於夢前丘而望見者、北方有白色物、云彼何物乎、即遣舍人上野國麻奈毗古令察之、申云、自高處流落水是也、即號高瀬村、所以號豐國者、筑紫豐國之神在於此處、故號豐國村、〇中略、
英保里、土中上、右稱英保者、伊豫國英保村人到來、居於此處、故號英保村、

〔播磨風土記揖保郡〕佐々村、品太天皇、〇中略、巡行之時、猿嚙竹葉而遇之、故曰佐々村、阿笠村、伊和大神巡行之時、苦其心中熱、而控絶衣紐、故號阿笠、一云、昔天有二星、落於地化爲石、於此人衆集來談論、故名阿笠、〇中略、

村里名邑

永享十二年八月廿八日　　當知行分記之

後崇光院　御判

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合○中略

五貫文○中略　富永彌六殿段錢播州○布施鄕○

〔桃華蘂葉〕嵯峨禪惠院○中略　寺領者○中略　播磨國明○石○鄕○明石郡也等也、此亂世以後有名無實也、○下略

〔郡名一覽〕一播磨國御料私領　播州　四方三日半　拾六郡

高五拾六万八千五百拾七石五斗七升九合　　千八百ヶ村

●姫路　百五十七里廿七町　●明石　百四十一里　●龍野　百六十里

●赤穗　百五十五里　○林田　百六十里　○小野　百四十七里廿七町

○山崎　百六十四里　○三草　百三十里　○安志　百六十里

○三日月　百六十五里　⊠福本　松平彈正

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕播磨御料私領　十六郡、千七百九十六村、

高六十五万千九百六十四石八斗一升三合五勺

明石郡百四十七村　美嚢郡百五十七村　加古郡九十九村　印南郡百十六村　加東郡百五十一村　加西郡百二十三村　多可郡百二十四村　神東郡七十九村　神西郡六十九村　飾西郡七十七村　飾東郡七十一村　揖東郡百三十村　揖西郡百一村　赤穗郡百二十五村　佐用郡八十七村　宍粟郡百四十村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

播磨　飾東郡、飾万津、赤穗郡、相生浦、坂越浦、島撫村、有年宿、鬘島、揖東郡、鵤村、街崎村、男鹿島、家島、太

〔法隆寺伽藍縁起并流記資財帳〕合食封貳佰戸（永年在二四國一者）
播磨國揖保郡林田郷五十戸○中略
右天平十年歳次戊寅四月十二日、納賜平城宮御宇天皇（○聖武）者、○中略
天平十九年二月十一日（○署名略）

〔東大寺要録六〕一諸國諸庄田地（○長徳四年注文定）○中略
新發田○中略
鹽山五百六十町
三百六十町　在播磨國明石郡垂水郷

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事○中略
一[illegible]飼庄々○中略　播磨國　赤穂郡榎尾塔山、二百卅五町九段百八十歩、揖保郡越部浦上二郷、
水田二町七段四歩、○中略
右依宜旨注進如件
建久二年五月十九日（○署名略）

〔太平記十一〕書寫山行幸事附新田注進事
五月二十七日ニハ、播磨國書寫山へ行幸成テ、先年ノ御宿願ヲ被果、○中略主上（○後醍醐）不斜信心ヲ傾ナセ給テ、則當國ノ安室郷ヲ御寄附有テ不斷如法經ノ料所ニゾ被置ケル、

〔板戸文書〕御領目錄人給付之
一伏見御領（○中略）（依早水損年貢不足）
一播州佐保社郷（三百疋）曇華院御喝食進之
播磨國　別納十ケ所　一石見郷（七千餘貫）太通院御寄進○中略

條布里、(土中中)(條恐倏誤)所以號條布者、此村在井、一女汲水、即被吸沒、故號曰條布、(○中略)

三重里、(土中中)所以云三重、昔在一女、拔筍以布裹三重食居、不能起立、故曰三重、

檜原里、(土中中)所以號檜原者、柞生此村、故曰柞原、(○中略)

起勢里、(黑川、巨江、)土下中、右號起勢者、巨勢部等居於此村、仍爲里名、(○中略)

山田里、(猪飼野、)土中下、右號山田者、人居山際、遂田爲里名、(○中略)

端鹿里、(土下上)今在其神、右號端鹿者、昔神於諸村班菓子、至此村不足、故仍云間有哉、故號端鹿、此村至于今、山木無菓子、(生眞木、檜、杉、)

穗積里、(本名鹽野、小目野、)土上下、所以號鹽野者、鹹水出於此村、故式鹽野、今號穗積者、穗積臣等族、居於此村、故號穗積、(○中略)

雲潤里、(土中中)右號雲潤者、丹津日子神、法太之川底、欲越雲潤之方、云爾之時、在於彼村、大水神辭云、吾以宍血佃、故不欲河水、爾時丹津日子、云此神倦堀河事、云爾而已、故號雲彌、今人號雲潤、

河內里、(土中下)右由川爲名、(○中略)

川合里、(腹辟沼)土中上、右號川合者、端鹿川底與鴨川會村、故號川合里、

〔播磨風土記(美囊郡)〕志深里、(土中中)所以號志深者、伊射報和氣命、御食於此井之時、信深貝、遊上於御飯筥緣、爾時勅云、此貝者於阿波國和那散我所食之貝哉、故號志深里、(○中略)

高野里、座於祝田社神、玉帶志比古大稻女、玉帶志比賣豐稻女、

志深里、座於三坂神、八戶挂須御諸命、大物主、葦原志許、國堅以後、自天下於三坂岑、

吉川里、所以號吉川者、吉川大刀自神在於此、故云吉川里、

枚野里、因體爲名

高野里、因體爲名

〔播磨風土記神前郡〕堲岡里、注略土下々、所以號堲岡者、昔大汝命與小比古尼命相爭云、擔堲荷而遠行、與不下屎而遠行、此二事何能爲乎、大汝命曰、我不下屎欲行、小比古尼命曰、我持堲荷欲行、如是相爭而行之、經數日、大汝命云、我不能忍行、卽坐而下屎之、爾時小比古尼命笑曰、然苦、亦擲其堲於此岡、故號堲岡、又下屎之時、小竹彈上其屎、行於衣、故號波自加村、其堲與屎成石、于今不亡、一家云、品太天皇巡行之時、造宮於此岡、勅云、此土爲堲耳、故曰堲岡、〇中略

川邊里、勢賀川　川邊山土中下、此村居於川邊、故號川邊里、〇中略

高岡里、神前山　奈具佐山土中々、右云高岡者、此里有高岡、故號高岡、〇中略

多駝里、注略土中下、所以號多駝者、品太天皇巡行之時、大御伴人佐伯部等始祖阿我乃古、申欲請此土、爾時天皇勅云、直請哉、故曰多駝、〇中略

蔭山里、蔭岡　胄岡土中下、云蔭山者、品太天皇御蔭墮於此山、故曰蔭山、又號蔭岡、爾除道刃鈍、仍云磨布理許、故云磨布理村、〇中略

的部里、石坐神山　高野社土中々、右的部等、居於此村、故曰的部里、

〔播磨風土記託賀郡〕賀負里、大海山　荒田村土下上、右因居川上爲名、〇中略

黑田里、袁布山、支閇岡、大羅野、土下上、右以土黑爲名、〇中略

都麻里、注略土上下、所以號都麻者、播磨刀賣與丹波刀賣堺國之時、播磨刀賣到於此村、汲井水而飡之、云此水有味、故曰都麻、

法太里、甕坂、花波山、土下上、所以號法太者、讚伎日子與建石命相闘之時、讚伎日子負而逃去、以手匍去、故云匍田、

〔播磨風土記賀毛郡〕上鴨里、土中上下鴨里、土中中右二里所以號鴨里者、已詳於上、託賀郡但後分爲二里、故曰上鴨下鴨、〇中略

桑原村主等、盜讚容郡桉見將來、其主認來見於此村、故曰桉見、

〔播磨風土記讚容郡〕讚容里、事與郡同、土上中、○中略

速湍里、土上中、依川湍速爲名、○中略

邑寶里、土中上、彌麻都比古命、治井飡糧、卽云吾占多國、故曰大村、治井處號御井村、○中略

柏原里、由柏多生、號爲柏原、○中略

中川里、土上下、所以名仲川者、苫編首等遠祖大仲子、息長帶日賣命、○神功度行於韓國之時、船宿淡路石屋之、爾時風雨大起、百姓悉濡、于時大中子、以苫作家、天皇勅云、此爲國富、卽賜姓爲苫編首、仍居此處、故川號仲川里、○中略

雲濃里、土中中、大神之子、玉足日子、玉足比賣命、生子大石命、此子稱於父心、故曰有怒、

〔播磨風土記宍禾郡〕比治里、土中上、所以名比治者、難波長柄豐前天皇○孝德之世、分揖保郡、作宍禾郡之時、山部比治、任爲里長、依此人名、故曰比治里、○中略

高家里、土下中、所以名曰高家者、天日槍命告云、此村高勝於他村、故曰高家、○中略

柏野里、土中上、所以名柏野者、柏生此野、故曰柏野、○中略

安師里、本名酒加里、土中上、大神飡於此處、故曰須加、後號山守里、所以然者、山部三馬、任爲里長、故曰山守、今改名爲安師者、因安師川爲名、其川者因安師比賣神爲名、○中略

石作里、本名伊和、土下中、所以名石作者、石作首等居於此村、故庚午年爲石作里、○中略

雲箇里、土下々、大神之妻、許乃波奈佐久夜比賣命、其形美麗、故曰宇留加、○中略

御方里、土下上、所以號御形者、葦原志許乎命與天日槍命、到故曇志爾嵩、各以黑葛三條著足投之、爾時葦原志許乎命之黑葛一條、落但馬氣多郡、一條落夜夫郡、一條落此村、故曰三條、○中略　一云、大神爲形見植御杖於此村、故曰御形、○中略

故號都可村、以後石川王爲總領之時、改爲廣山里、

麻打里、昔但馬國人伊都志君麻良比、家居此山、二女夜打麻、卽置麻於己胸死、故號麻打山、于今居此邊者、至夜不打麻矣、○中略

枚方里、土中上、所以名枚方者、河內國茨田郡枚方里漢人來到、始居此村、故曰枚方里、○中略

大家里、舊名大宮里、土中上、品太天皇○應神巡行之時、營宮此村、故曰大宮、後至田中大夫爲宰之時、改大宅里、○中略

大田里、土中上、所以稱大田者、昔吳勝從韓國度來、始到於紀伊國名草郡大田村、其後分來、移到於攝津國三島賀美郡大田村、其又遷來於揖保郡大田村、是本紀伊國大田以爲名也、○中略

石海里、土上中、右所以稱石海者、難波長柄豐崎天皇○孝德之世、是里中有百便之野、生百枝稻、卽阿曇連百足、仍取其稻獻之、爾時天皇勅曰、宜墾此野作田、乃遣阿曇連太牟、召石海人夫、令墾之、故野名曰百便、村號石海也、○中略

浦上里、土上中、右所以號浦上者、昔阿曇連百足等、先居難波浦上、後遷來於此浦上、故因本居爲名、○中略

萩原里、土中中、右所以名萩原者、息長帶日賣命、○神功韓國還上之時、御船宿於此村、一夜之間生萩、根高一丈許、仍名萩原、○中略

少宅里、本名漢部里、土下中、所以號漢部者、漢人居之此村、故以爲名、所以後改曰少宅者、川原若狹祖父娶少宅秦公之女、卽號其家少宅、後若狹之孫智麻呂任爲里長、由此庚寅年爲少宅里、○中略

揖保里、土中中、所以稱粒者、此里依於粒山、故因山爲名、○中略

出水里、土中中、此村出寒泉、故因泉爲名、○中略

桑原里、舊名倉見里、土中上、品太天皇御立於欟折山望覽之時、森然所見倉、故名倉見村、今改名爲桑原、一云、

故曰小川、〇中略

英保里、土中上　右稱英保者、伊豫國英保村人到來、居於此處、故號英保村、

美濃里、繼潮　土中下、右號美濃者、讃伎國彌濃郡人到來居之、故號美濃、〇中略

因達里、土中中　右稱因達者、息長帶比賣命〇神功　欲平韓國、渡坐之時、御船前伊太代之神、在於此處、故因神名、以為里名、

安師里、土中中　右稱安師者、倭穴无神、神戸託仕奉、故號穴師、〇中略

漢部里、多志野、阿比野、手招川、　里名詳於上、

胎和里〇下略

〔播磨風土記 揖保郡〕香山里、本名鹿來墓　土下上、所以號鹿來墓者、伊和大神占國之時、鹿來立於山々岑々、是亦似墓、故號鹿來墓、後至道守臣為宰之時、乃改名為香山、〇中略

栗栖里、土中中　所以名栗栖者、難波高津宮天皇、〇仁徳　勅賜刊栗子若倭部連池子、即將退來、殖生此村、故號栗栖、〇中略

越部里、舊名皇子代里　土中中、所以號皇子代者、勾宮天皇〇安閑　之世、寵人但馬君小津、蒙寵賜姓、為皇子代君、而造三宅於此村、令仕奉之、故曰皇子代村、後至上野大夫、結卅戸之時、改號越部里、一云、自但馬三宅來、故號越部村、

〇中略

上岡里、本名林田里　土中下、菅生山邊、故曰菅生、〇中略

日下部里、土中々、因人姓為名〇中略

林田里、本名淡奈志　土中下、所以稱淡奈志者、伊和大神占國之時、御志植於此處、遂生楡樹、故稱名淡奈志、

〇中略

廣山里、舊名握村　土中上、所以名都可者、石比賣命、立於泉里波多為社而射之、到此處箭盡入地、唯出握許、

六繼里、土中中、所以號六繼者、已見於上、○載、村里條所引播磨風土記六繼村下、中略

益氣里、土中上、所以號宅者、大帶日子命、造御宅於此村、故曰宅村、○中略

含藝里、本名瓶落、土中上、所以號瓶落者、難波高津御宮天皇○仁德御世、私部局取等遠祖他田熊千、瓶酒著於馬尻、求行家地、其瓶落於此村、故曰瓶落、○中略

〔播磨風土記飾磨郡〕漢部里、土中上、右稱漢部者、讃岐國漢人等到來居於此處、故號漢部、

菅生里、土中上、右稱菅生者、此處有菅原、故號菅生、

麻跡里、○飾磨郡、割下同、土中上、右號麻跡者、品太天皇○應神巡行之時、勅云、見此二山者、能似人眼割下、故號目割、

英賀里、土中上、右稱英賀者、伊和大神之子、阿賀比古、阿賀比賣二神、在於此處、故因神名以爲里名、

伊和里、○註略 土中上、右號伊和部者、積幡郡伊和君等族到來居於此、故號伊和部、

賀野里、幣丘 土中上、右稱加野者、品太天皇巡行之時、此處造殿、仍張蚊屋、故號加野、○中略

韓室里、土中々、右稱韓室者、韓室首寶等上祖、家大富饒、造韓室、故號韓室、

巨智里、○註略 土中下、右稱巨智者、巨智等始祖、屋居此村、故因爲名、○中略

安相丘、長畝川 土中々、右所以號安相里者、○中略 但馬國朝來人到來居於此處、故號安相里、本名沙部云、後改里、名、依改字二字、注爲安相里、○中略

枚野里、○註略 右稱枚野者、昔爲少野、故號枚野、○中略

大野里、砥堀 土中々、右稱大野者、本爲荒野、故號大野、志貴志貴二字、原本在多下、今改、嶋宮御宇天皇○欽明之御世、村上足嶋等上祖、惠多請此野而居之、乃爲里名、○中略

少川里、○註略 土中々、本名私里、右號私里者、志貴志貴二字、原本在下、今改、嶋宮御宇天皇之世、私部弓束等祖田又利君鼻留、請此處而居之、故號私里、以後庚寅年、上大夫爲宰之時、改爲小川里、一云、小川自大野流來此處、

飾磨郡　曾生須加布　餘戸　英賀安加　伊和　辛室加良牟呂　大野於保乃　英保安母　三野美乃　穴無安奈之　迎達伊多知
巨智古知　平野比良乃　草上久佐乃加三　周智
揖保郡　粟栖久留須　香山加古也萬、○加古也萬、高山寺本作二加字一也萬、　越部古之倍　林田波也之多　桑原久波波良　布勢　上岡加無都乎加、高山寺本作乎加
揖保伊比保　大市於布知　大田於保多　新田爾比多　餘戸　浦上宇良加三　小宅古伊倍○古伊倍、高山寺本作二乎也計一、　廣山　大宅於保也介
石見伊波美　中臣　神戸
赤穗郡　坂越　八野　大原　筮磨○筮、高山寺本作蓑、註都久末　野磨　周勢　高田　飛取○取、高山寺本作鳥、
佐用郡　佐用佐與　江川○高山寺本註衣賀八　廣岡　速瀨　柏原　大田　中川　宇野
完粟郡　三方○高山寺本註美加太三字　高家○高山寺本註多以倍　比地　狛野○高山寺本狛作柏、又註有加之入乃　安志　石保○高山寺本、保作作、註以之都久利
伊和　土方○高山寺本方作万、註比知末
神崎郡　埴岡○高山寺本註波爾乎賀　蔭山○高山寺本註加介也末　川邊○高山寺本註加波乃倍、圖用川邊　的部○高山寺本註以久波　槻田
多可郡　荒田　賀美○高山寺本註國用上字　那珂○高山寺本註國用中字　資母○高山寺本註國用下字　黑田○高山寺本註久呂太　蔓々○々、高山寺本作田、註波布田、圖用遲田、
賀茂郡　三重○高山寺本註美倍　上鴨○高山寺本註加无都加毛　穗積　川内　酒見　大神　住吉　川合　夷俘
美嚢郡　志深之々美　高野多加乃　平野比良乃　吉川與加波　夷俘

〔播磨風土記賀古郡〕望理里、土中上　大帶日子天皇○景行巡行之時、見此村川曲、勅云此川之曲甚美哉、故曰望理、

鳴波里、土中中　昔大部造等始祖古理賣、耕此之野、多種粟、故曰粟々里、○中略

長田里、土中中　昔大帶日子命、幸行別嬢之處、道邊有長田、勅云長田哉、故曰長田里、

驛家里、土中中　由驛家為名、

〔播磨風土記印南郡〕大國里、土中中　所以號大國者、百姓之家多居此、故曰大國、○中略

宍禾郡

〔日本書紀 二十七天智〕七年〇齊明七月丁巳、崩、〇中略、是歳播磨國司岸田臣麻呂等獻寶劍言、於狹夜郡人禾田穴内獲焉、

〔播磨風土記〕宍禾郡 所以名宍禾者、伊和大神國作堅了以後、堺此川谷尾、巡行之時、大鹿出己舌、遇於矢田村、爾勅云、矢彼舌在者、故號宍禾鹿村、名號矢田村、

比治里土中上 所以名比治者、難波長柄豐前天皇〇孝德之世、分揖保郡作宍禾郡之時、山部比治任爲里長、〇下略

神埼郡

〔播磨風土記〕神前郡 右所以號神前者、伊和大神之子建石敷命、在於神前山、仍因神在爲名、故曰神前郡、

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年五月丙辰、播磨國神埼郡荒廢田卅三町賜宗康親王、

多可郡

〔播磨風土記〕託賀郡 右所以名託賀者、昔在大人常勾行也、自南海到北海、自東巡行之時、到來此土云、他土卑者常勾伏而行之、此土高者申而行之、高哉、故曰託賀郡、

賀茂郡

〔播磨風土記〕賀毛郡 所以號賀毛者、品太天皇〇應神之世、於鴨村雙鴨作栖生卵、故曰賀毛郡、

〔續日本紀 十一聖武〕天平元年四月壬戌、播磨國賀茂郡加主政主帳各一人、

美嚢郡

〔播磨風土記〕美嚢郡 所以號美嚢者、昔大兄伊射報和氣命〇履中堺國之時、到志深里許曾社、勅云、此土水甚美哉、故號美嚢郡、

〔續日本紀 四十桓武〕延曆八年十二月乙亥、播磨國美嚢郡大領正六位下韓鍛首廣富、獻稻六万束於水兒船瀨、授外從五位下、

郡

〔倭名類聚抄 八播磨〕明石郡 葛江布知衣 明石安加之 住吉須美與之 神戸 邑美於布美 垂見〔見、高山寺本作水、多留美〕 神戸

賀古郡 望理 長田奈加太 住吉須美與之 餘戸〇高山寺本、餘戸次有賀古

印南郡 大國於保久爾 益氣〇高山寺本、益作益、田、注云、末須太 含藝〇高山寺本、注云、加牟奈 餘戸 佐突〇高山寺本、作佐與、注云、佐土

飾磨郡

〈播磨風土記〉飾磨郡　所≷以號≷飾磨≷者、大三間津日子命、於≷此處≷造≷屋形≷而座時、有≷大鹿≷而鳴之、爾時王勅云、牡鹿鳴哉、故號≷飾磨郡≷、

〈東大寺正倉院文書十二〉山背國愛宕郡雲下里計帳
（縫目裏書）山背國愛宕郡出雲鄉雲下里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

戸主出雲臣宿奈麻呂年參拾捌歲〇中略

秦前大結賣年參拾肆歲　丁女

秦前稻結賣年參拾肆歲　丁女　上件二口、和銅四年、逃≷播磨國忠〇磨〇郡≷、

揖保郡

〈播磨風土記〉揖保郡

事〇郡名明≷下〇中略　揖保里土中中　所≷以稱≷粒者、此里依≷於粒山≷、故因≷山爲≷名、

〈壬生家文書〉左辨官下≷播磨國≷

應≷且任≷舊跡≷糺≷定四至堺≷、且免≷除雜徭≷、殺倉院領當國小犬丸保事

在≷〇〇揖西郡布施鄉內≷〇中略

建久八年四月卅日　右大史三善朝臣

右少辨平朝臣

赤穗郡

〈大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〉合今請墾田玖佰玖拾肆町〇中略

幡磨國壹拾伍町未開六町　未開九町
印南郡五町伊保東松原　赤穗郡十町
多太野東檳村前〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

佐用郡

〈播磨風土記〉讃容郡　所≷以云≷讃容郡≷者、大神妹妋二柱、各競占≷國之時、妹玉津日女命、捕≷臥生鹿≷、割≷其腹≷而種≷稻其血≷、仍一夜之間生≷苗、卽令≷取殖≷、爾大神勅云、汝妹者五月夜殖哉、卽去≷他處≷、故號≷五月夜郡≷、

八郡、在三木ノ城、得武將譽、其門葉繁昌ニシテ風俗異于他、○下略

(播磨鑑二飾東)姫路御城主御代々始記

東播八郡トハ所謂三木郡、明石郡、加古郡、加東郡、加西郡、印南郡、多可郡、神東郡以上八郡也、

明石郡

(日本書紀十五清寧)二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡、縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市邊押磐皇子億計弘計、○下略

賀古郡

(播磨風土記)望覽四方云、此土丘原野、甚廣大而見此丘如鹿兒、故名曰賀古郡、

(續日本紀九元正)神龜三年十月辛酉、行幸、○中略行宮側近、明石賀古二郡百姓、高年七十已上、賜穀各一斛、○下略

(法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳)合庄庄倉捌拾肆口　歷壹佰拾壹口○中略

播磨國叁處(明石郡一處、賀古郡一處、揖保郡一處)○中略

天平十九年二月十一日○署名略

印南郡

(播磨風土記)印南郡○印南郡原缺、據一本補、　一家云、所以號印南者、穴門豐浦宮御宇天皇○仲哀與皇后○神功俱欲平筑紫久麻曾國、下行之時、御舟宿於印南浦、此時滄海甚平、風波和靜、故名曰入浪、

(法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳)山林岳島等貳拾陸地○中略

播磨國貳拾壹地

揖保郡五地○註略　印南郡飾磨郡內島林十六地○中略

天平十九年二月十一日○署名略

(續日本紀三十九桓武)延曆五年四月乙亥、播磨國言、四天王寺飾磨郡水田八十町、元是百姓口分也、而依太政官符、入寺訖、因茲百姓口分、多授比郡、營種之勞、爲弊實深、其印南郡戶口稍少、田數巨多、今乞班田、請還飾磨郡、畫印南郡、許之、

	多可	神東	神西	宍粟	揖東	揖西	赤穗	佐用
					飯粒(イヒホ)記			狹夜記
					粒(イヒホ)			佐用
管十二	多可(タカ)	神崎(カムサキ)		宍粟(シサハ)	揖保(イヒホ)		赤穗(アカホ)	佐用(サヨ)
同	同	神埼		完粟	同		同	同
十二郡	同	神崎		同	揖保		同	同
	同	神東 神崎	神西	同	揖東 同	揖西 揖保	同	同
十六郡	同(タカ)	神東(ジントウ)	神西(ジンサイ)	同(シソウ)	同(イフトウ)	揖西(イツサイ)	同(アカフ)	同(サヨ)
同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同(タカ)	同(ジントウ)	同(ジンサイ)	宍粟(シサハ)	同(イフトウ)	同(イフサイ)	同(アカホ)	同(サヨ)
同	同	同	同	同	同	同	同	同

〔別所長治記〕別所小三郎長治ハ、村上源氏具平親王廿六代ノ孫赤松入道圓心ガ末葉也、領。播。州。東。

〔郡名異同一覽〕播磨

六國史	赤石	鹿子					賀茂	
古書	明石						鴨	
延喜式	明石	賀古	印南	飾磨		美嚢	賀茂	
倭名抄	同	同	同	同		同	同	
拾芥抄	同	同	同	飾摩		同	同	
諸書	同	加古	同	飾東 飾磨	飾西	美嚢 三木	加西 賀茂	加東 賀東
郡名考	同	同	同	飾東	飾西	美嚢	加西	加東
天保郷帳	同	同	同	同	同	同	同	同
明治前本帳								
地誌提要	同	同	同	同	同	同	同	同
郡區編制	同	同	同	同	同	同	同	同

分テ揖東揖西トス、神崎ヲ分テ神東神西トス、加茂ヲ分テ河東河西トストスト云ヘリ、剰ヘ近ク飾東西ノ間ニ中條郡トテ有之也、

〔易林本節用集　下〕播磨（播州）大、管十四郡、（略）○中明石、賀古、（東西、）賀茂、印南、飾磨、揖保、（東西、）赤穂、佐用、完粟、神崎（東西、）多河、美嚢、揖西、揖東、

〔和漢三才圖會　七十七　播磨〕十二郡（略）○中
明石　賀古　印南　飾磨（後分爲二郡、稱二飾東飾西一、）　揖保（爲二拾芥抄用二穗字一、後分爲二二郡一、稱二揖東揖西一、）　赤穂（今訓二阿古一）　佐用　宍粟（今訓二之曾一）
宍粟（古字、今誤用二完字一、完音相、全也、）　神崎（後分爲二二郡一、稱二神東神西一、）　多可　賀茂（後分爲二二郡一、稱二賀東賀西一、）　美嚢（今略稱二三木一）

〔皇國郡名志〕播磨國（舊十二郡　今十六郡）
明石　［明石］　〇人丸社　●大久保　攝界淡路島ニ向
賀古　●高畑　●野口　●上田　南海小郡
三木　●北萩原　攝界
赤穂　赤穂　●東有年　●西ウ子　備前界
佐用　〈三日月　●佐用平フク　作界小郡
多可　●野村　●總社　丹但界
揖西　［立野］　●室津　●片島　●正條　●千本　赤穂ニ並郡
揖東　〈新宮　〈林田　●石倉　●山田　揖西ニ並郡
飾西　●手野　〇書寫山　揖東神西ノ間細長ク海ニ至ル
飾東　●飾萬津　［姫路］　●飾著　南海ニ向
神西　●眞弓　但界
神東　〈福本　〈粟加　國中
賀西　●法花山　ハン昌　但界
賀東　〈小野　〈坂本、　丹界
印南　●福泊　●志方　●加古　●高砂社　〇曾根社　〇石寶殿　南川海郡
宍粟　〈山崎　〈安和　因但界
今揖保、飾磨、神崎賀茂、各分二東西一、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

國府

郡

針間鴨國造
志賀高穴穗御世、上毛野同祖御穗別命兒市入別命定賜國造、
明石國造
輕島豐明朝御世、(○應神)大倭直同祖八代足尼兒都彌自足尼定賜國造、
(播磨名所巡覽圖會 二)播磨國は山陽道八州の首也、上古は飾磨郡より西を針間の國といひ、加茂郡多賀郡を鴨の國といひ、赤石郡加古郡印南郡などを明石の國といひて、三郡の國なりしを、後世十二郡に分ち、播磨を以て一國の名とす、(○下略)
(續日本紀 四元明)和銅元年三月丙午、正五位上巨勢朝臣邑治爲播磨守、
(吾妻鏡 三)壽永三年二月十八日丁丑、武衞(○源賴朝)被發御使於京都、是洛陽警固以下事所被仰也、又播磨、(○中略)已上五箇國、景時(○梶原)實平(○土肥)等遣專使、可令守護之由云云、
(倭名類聚抄 五國郡)播磨國(國府在飾磨郡、行程上五日、下三日、)
(忠見集)播磨のこうにやどれるに、時鳥のなくを、
誰をかはこうの山べのほとゝぎす草の枕にたび〳〵はなく
(倭名類聚抄 五國郡)播磨國(○註略)管十二(○註略)明石(安加志)賀古(加古)印南(伊奈美)飾磨(國府)揖保(伊比保)赤穗(阿加保)
佐用(佐與)宍粟(志佐波)神埼(加無佐岐)多可　賀茂　美囊(美奈木)
(延喜式 二十二民部)播磨國、大、(管明石(アカシ)賀古(カコ)印南(イナミ)飾磨(シカマ)揖保(イヒホ)赤穗(アカホ)佐用(サヨ)宍粟(シサハ)神埼(カムサキ)多可(タカ)賀茂(カモ)美囊(ミナキ)○中略)右爲近國、
(拾芥抄 中末本朝國郡)播磨(大近)十四郡　明石　賀古　賀茂　印南　飾磨(府)　揖保(東西)　赤穗　佐用
宍粟　神崎　多可　美壺(○[illegible])　揖西　揖東
(峯相記)又問云、郡郷田地ノ樣御存知候哉、答云、(○中略)郡ハ元ハ十二郡、今十七郡ト申ス、元ハ明石、賀古、印南、飾磨、揖保、神崎、赤穗、佐用、宍粟、多可、加茂、美囊、是也、今ハ飾磨ヲ分テ飾西、飾東トス、揖保ヲ

天皇ノ裔ヲ以テ州守ニ任ジ、子孫赤松莊赤穗郡ニ居ル、因テ赤松氏ト稱ス、源頼朝平氏ヲ滅シ、土肥實平、梶原景時ヲシテ、本州及美作三備ノ守護ヲ兼シム、建久四年、季房ノ曾孫赤松則景州守ニ任ジ、守護トナリ、白旗城赤穗郡ニ治ス、建武中興、其玄孫則村、勤王ノ功ヲ以テ守護ニ補ス、尋テ事ニ坐シテ罷ラレ、之ヲ新田義貞ニ賜フ、則村遂ニ叛シテ足利尊氏ニ屬ス、義貞西征シ、則村ヲ白旗城ニ圍ミ、克タズシテ歸ル、尊氏則村ヲ以テ守護トナス、子則祐苔縄城赤穗郡ニ居リ、備前ヲ加封シ、其子義則又美作ヲ加賜シ、提封三州ニ跨カル、嘉吉元年、義則ノ子滿祐、將軍義教ヲ弑シ、奔リテ城山城揖西郡ニ據ル、將軍義勝、諸將ニ命ジテ之ヲ誅シ、本州ヲ山名持豐ニ賜フ、應仁ノ亂、滿祐ノ從孫政則、細川勝元ニ黨シテ故封ヲ復シ、姫路ニ居ル、尋テ又置鹽飾西郡ニ城キ、之ニ徙リ、同族別所則治ヲシテ、三木ニ居シメ、東境八郡ヲ管シ、小寺豐職ヲシテ姫路ニ戍セシム、永正十七年、政則ノ嗣義村、其臣浦上村宗ニ弑セラレ、封疆日ニ蹙マル、享祿四年、義村ノ子晴政、村宗ヲ殺シテ故地ヲ復シ、置鹽ニ居ル、子義祐ニ至テ、國勢日ニ衰フ、天正五年、織田信長、豐臣秀吉ヲ本州ニ封ジ西伐セシム、義祐ノ子則房款ヲ納レ、小寺政職備後ニ奔ル、別所長治、獨秀吉ト相抗スル四年ニシテ亡ブ、秀吉則房ヲ阿波ニ徙シ、全州ヲ併セ姫路ニ治ス、十三年、木下家定ヲ姫路ニ封ズ關原役畢リ、德川氏池田輝政ヲ全州ニ封ジ、姫路ニ治ス、元和三年、其孫光政ヲ因幡ニ移シ、本多忠政ヲ姫路ニ、拾五萬石、後酒井忠恭、小笠原忠眞ヲ明石ニ、拾萬石、後松平直明、封ズ、爾後龍野、初小笠原長次、後脇坂安政、赤穗、初池田輝興、後森長直、林田、建部政長、小野、一柳直次、山崎、池田恆之、後本多忠英、三日月、森長俊、安志、小笠原長興、三草、丹羽氏蕃、ノ八藩ヲ建テ、共ニ十藩、王政革新、福本藩ヲ置、鳥取ノ支封池田德潤、既ニシテ廢シテ縣トナシ、更ニ合併シテ姫路縣ヲ置キ、改テ飾磨ト稱ス、

〔先代舊事本紀十國造〕針間國造

志賀高穴穗朝、成務○　稻背入彦命孫伊許自別命定賜國造、

〔續日本後紀　仁明〕承和六年二月戊寅、播磨國印南郡佐。突。驛家依舊建立、

〔太平記　四〕備後三郎高德事附吳越軍事

臨幸餘ニ運カリケレバ、人ヲ走ラカシテ、是ヲ見スルニ、警固武士、山陽道ヲ不經、播磨今。宿ヨリ山陰道ニカヽリ、遷幸成奉ケル間、高德ガ支度相違シテケリ、

〔太平記　八〕摩耶合戰事附酒部瀨河合戰事

天運ノ助ニヤ懸リケン、何レモ無恙シテ、御方ノ勢ノ小。屋。野。ノ。宿。ノ西ニ、三千餘騎ニテ引ヘタル、其中ヘ馳入テ、虎口ニ死ヲ遁レケリ、六波羅勢ハ昨日ノ軍ニ敵ノ勇鋭ヲ見ルニ、小勢也トイヘドモ、獸キ難シト思ケレバ、瀨。河。ノ。宿。ニ引ヘテ進ミ得ズ、略○中　赤松三千餘騎ニテ敵ノ陣ヘ押寄テ、先ヅ事ノ體ヲ伺ヒ見ニ、瀨河ノ宿ノ東西ニ、家々ノ旗二三百流、梢ノ風ニ飜シテ、其勢二三萬騎モ有ント見ヘタリ、

〔日本國郡沿革考　山陽道　三〕播磨　古作針間、（姓氏錄、國造紀、風土記云、息長帶日賣命御世、宿於一村、其夜間萩生、高一丈計、仍名其里曰萩原里、闢ニ御井、謂ニ之針間井、）大國、管十六郡、千七百九十六村、十二郡（延喜式）

明石（百四十七村、見清寧紀、赤石、古明石國、見國造紀、）　美嚢（ミナギ　百五十七村）　加古（カコ　九十九村、延喜式作賀古、）　印南（イナミ　百十六村、古事記作伊那毘、萬葉集所謂伊奈美國波頂、或日野式稻見之嶋、會此埔、巳注東西、前其巳稱可知、）　加東（カトウ　百五十一村、古針間鴨國、見國造紀、延喜式作賀茂、今分東西、正德二年四月、今白今宜、在東、西今仍作加東、拾芥抄）

加西（カサイ　百二十三村、延喜式不載、說詳ニ上文、）　多可（タカ　百二十四村）　神東（カンサキヒガシ　七十九村、延喜式作神崎郡、後分爲東西、未詳在何時、）　神西（カンサキニシ　六十九村、說詳ニ上文、）

飾西（シカマニシ　七十七村、古飾磨郡、延喜式作餝磨、拾芥抄作飾摩、後分爲東西、未詳在何時、）　飾東（シカマヒガシ　七十一村、說詳ニ上文、）　揖東（イヒボヒガシ　百三十村、古揖保郡、延喜式、拾芥抄作揖穗、注東西、蓋中世所析置、）　揖西（イヒボニシ　百一村、說詳ニ上文、）　赤穗（アカホ　百二十五村）　佐用（サヨ　八十七村、天智紀作狹夜、）　宍粟（シサハ　百四十村、宍禾邑見于孝仁三年紀、德後建保、郡）

〔日本地誌提要　五十一　播磨〕沿革　古ヘ國府ヲ飾磨郡ニ置、（今飾東郡國分寺ノ東國府寺村ナリ、）鳥羽天皇ノ時、源季房（上村

宿驛

十八間至國界万能峠一里一十七丁二十四間　美作國英田郡土居町

〔日本實測錄 一沿海〕從大坂沿海至赤間ヶ關○中略

播磨國明石郡大藏谷　五里二十二町五十六間　加古郡高砂南濱町至北木町三町一十一間、北極高卅四度四十五分、七町五十六間至燈明堂三町　高砂浦至洲崎一十六町四間　三町三十九間　同堀切川口至南濱町燈明堂九町二十七間　二十町三十間　荒井村沿川、至魚崎村一十七町五十二間、　一里三町四十九間半　印南郡的形村磯至小島一十一町七間、北極高三十四度四十七分、從小島至宇佐崎村二十九町二十五間半　二里一十九町一十八間半至宇佐崎村二十八町二十九間半　飾東郡飾万津至英加町一十二町五十一間、北極高三十四度四十八分、　二里三十五町二十五間　揖東郡新在家村至餘子濱村一十一町一十七間、北極高三十四度四十八分、　一里一十二町四間至揖保川口八町　揖西郡苅屋村歷稻富村至伊津村、三十一町四十四間半　二里一十七町二十二間至伊津村一里三町二十五間半、從伊津村至室津カメコシ、二十三町五十七間、　室津中之町、三十四度四十六分半、歷島屋町至カメコシ一十一町五十一間　一十一町二間　室津大浦歷野瀨村至相生浦一里一十五町　二里二十九町四間至金崎一里五町三十二間半　赤穗郡相生浦、三十四度四十八分半、　一里九町一十六間　佐方浦歷高野村至坂越浦、一里六町五十間半、從坂越村至加里屋、一里六町一十三間半、　三里一十七町四十一間至ホフシ崎一里廿五町一十七間　坂越浦至街道五町五十九間　一里三十五町四十二間至新濱浦福浦一里二十四町三十八間　新濱浦、三十四度四十四分半、　一里一十五町八間　加里屋浦至加里屋一十八町五十五間　二十二町二十間半北極高三十四度四十五分半、從加里屋至織方村二十六町、　一里一十六町四十二間至織方村、一里八町、　鳥撫村至鹽濱徑湖六町四間半　二十二町二十間半至鳥撫村鹽濱一十二町五十五間半　眞木村至備前國和氣郡福浦村一十六町三間半、北極高三十四度四十五分半、從福浦至寒河村徑湖一里八間、　四里九町九間半至國界一十九町一十間、從國界至寒河村、二里二十四町四十八間、　備前國和氣郡日生村鬼村

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國驛傳馬○中略

播磨國驛馬明石卅疋、賀古卌疋、草上、大市、布勢、高田、野磨各廿疋、越部、中川各五疋、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜四年二月己未、先是播磨國言、飾磨郡草上驛、驛戸便田、今依官符、捨四天王寺、

○下略

從攝津國湯山歷坂本至姫路略○中

播磨國美嚢郡淡河町　三里一十一町五間至三木大塚町二里三十二丁五十五間　三木上町　二里三町四十三間至三木下町限七丁三十二間　加東郡太郎太夫村至小野陣屋一十五丁一十八間　一里九町四十四間半　印南郡國包村三里二十三町五十七間至三木松新村一里二十七丁五間　加西郡法華山村坂本村、三十四度五十二分、　二十八町六間　印南郡畑村野深　二里一十四町五十五間半　飾東郡姫路國府寺町從湯山至姫路街道、

通計一十七里三十三町二間、

從播磨國福崎新村歷知頭及鳥取至豐田

播磨國神西郡福崎新村又呼新町　一里二十三町九間　飾西郡前之庄村　二里一十五町二十九間半至野畑村一里二十四丁一十一間半　宍粟郡安志至林田本町二里一十六丁六十間、從本町至追分村二十丁五十間、山崎又呼宍粟山田町至須行名村一宮伊和神社三里一町四十二間　三町　山崎本町　三里一十五町三十九間至山崎民新町限四丁一十二間　下三河村　一里三十一町一十八間　佐用郡口長谷村至[illegible][illegible]崎、至下德久村一里二十四丁二十間　一十町四十二間　平福村南新町　二里三十一町二十一間至平福北新町限七丁一十八間、從町限至國界一里一十丁六間、　美作國吉野郡壮堂村略○中

從播磨國手野歷津山及米子至松江

播磨國飾西郡下手野村　二十町四十一間　飾西村、三十四度五十一分半、　一里一十七町三間

揖東郡追分村　三十四町四十八間　觜崎宿村至龍野横町二十九丁三十三間、北極高三十四度五十二分半、從横町至正條宿一里九丁三十五間半、　二里一十四町三間至新宮横町二十七丁四十八間　揖西郡千本村、三十四度五十六分半、　一里三十二町一十八間至三日月上町一里二十九丁四十八間　佐用郡三日月中町　一十六町六間　乃井野至乃井野陣屋凡[illegible]五町　一里三町　下德久村　三十四町二十九間半　佐用宿、三十五度、至佐用郡比賣神社一十三丁二十一間、　一里一十一町九間　早瀬村從千種川至赤穗郡上郡村宿所、三里三十五丁六間、北極高三十四度五十二分半、從上郡至原村、一里一十六丁五十七間、　一里三十一町一

里丁二　一十九町五十七間半　攝西郡片島村（又呼片島郷）　三里一十五町　赤穗郡原村千種川岸一町五十四間　有年宿、三十四度五十分、　三里一町四十一間半（至國界一里二六丁二十八間）十　備前國和氣郡三石村〇中略

從但馬國和田山歷生野至仁豐野〇中略

播磨國神西郡眞弓村　三十町一十八間　多河郡猪篠村（又呼上野）　一里三十四町四十八間　神東郡粟賀町村　一十一町三間　福本　一里一町五十四間　屋形村　二里一十四町六間　神西郡福崎新村（又呼新町）　二里六町一十五間　仁豐野村市川岸　（從和田山至仁豐野）街道、通計一十四里二十一町三十間半、〇中略

從丹波國栢原歷酒見及仁豐野至姫路〇中略

播磨國多河郡中村町、三十五度二分半、　二里一十七町二十七間（至桃屋町一十四丁二十七間）　加西郡明樂寺村　一里一十四町六間　殿原村（至上野村礒部神社七丁）　一里四十五間　市場村、三十四度五十六分、　二町二十七間　寺内村加西町（又呼酒見北條郷、歷酒見神社、至酒見寺二丁五十七間、）　三里四町一十二間（至山下村一里五丁二十四間、從山下至市川岸、一里三十四丁一十二間、）　神西郡仁豐野村市川岸　一里三町三十九間　飾東郡東中島村（歷白國村及廣領至書寫山東坂本村宿所、二里八町四十三間、北極高三十四度五十三分、從坂本至書寫山圓教寺、一十九町一十六間、又從白國村至白國神社、七丁五十四間、）　二十四町九間半　姫路大黒町　（從栢原至姫路）街道、通計一十五里一十町五十四間半、〇中略

從攝津國瀨川歷有馬至坂本〇中略

播磨國加東郡清水寺　二十九町五十四間半　上鴨川村、三十四度五十九分、　二里一町一十五間　上三草　三十二町二十三間半　社村　二里一十二町一十六間半　加西郡繁昌村、三十四度五十四分、　一里三十町八間　法華山坂本村　（從瀨川至坂本）街道、通計二十三里三十二町四十五間半、

地勢

道路

〇中略

雀島、所以號雀島者、雀多聚於此島、故曰雀島、(不生草木)〇中略

家島、人民作家而居之、故號家島、(生竹黑葛等)

神島、伊刀島等、所以號神島者、此島西邊在石神、形似佛像、故因爲名、〇中略

韓荷島、韓人破船所漂之物、漂就於此島、故號韓荷島、

高島、高勝於當處島等、故號高島、

〔易林本節用集 下〕播磨州(播州) 大管十四郡、四方三日半、土暖不見霜雪、絹布紙帛多、衣食足、大上國也、

〔孔雀樓文集 四〕靜好室記

五播距京師二百餘里、居山陽上游、面海背山、沿海一帶三百餘里、三藩封焉、西北又多侯藩、而邑之麗於官有司者、相接其中、氣候適均、山水秀麗、其壤膏、其田腴、斧於山、煮於海、地四通五達、豪農巨商居焉、唯其海陸形便、穀貨所殖、是以藩封之外、巨聚大邑、應接不遑、官道官驛之外、路之爽而理者、屋之修而深者、隨處而在、唯其生理饒貲奉足、是以觴與奢、不期然而然、素封之家、土木服玩、聲色飲食、是競者有焉、肝穀肝金、億巨萬財、聚散於一呼吸者有焉、卽使其中有緣飾詩書者、或以多能技藝聞者、〇下略

〔日本實測錄 四 街道〕從攝津國西宮中國街道至赤間關、〇中略

播磨國明石郡大藏谷、三十四度三十九分、　一町五十八間　大藏谷人麿社前(至人麿社五丁四間)　一十一町五十八間(至明石城大手前九丁二十九間)　明石東樽屋町　一里一十六町一十一間半　大久保町、三十四度四十一分、　三里二十三町一十三間半　加古郡加古川驛　一里三町三十四間半　印南郡魚橋村(至石寶殿、至曾根天神社、一里三丁二十九間半、)　二里二十九町三十五間　飾東郡姬路國府寺町　二町二十七間　同大黑町　九町四十五間(至姬路城大手前九丁四十間中)　同本町(至飾万津長加町、一里一十七間)　一町二十一間　同鄕町、三十四度五十八分半、　一里六町二十間半　飾西郡下手野村　三里三町二間半　正條宿(至室津、二

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒　　播磨　姬路　西一度〇〇分二二秒

疆域

〔名所方角抄〕播磨國分　美作はうしとらなり、北は山也、みなみは攝津の國より西なり、

〔日本地誌提要五十一播磨〕疆域　東ハ攝津、西ハ備前、美作、北ハ因幡、但馬、東北ハ丹波、南ハ海ニ至ル、東西凡貳拾里、南北凡壹拾四里餘、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕播磨國揖東郡　實測　家島、周廻四里九町三十間、宮浦、三十四度四十一分、太島從南岬至西岬八町　黑島、從東岬至西岬六町、　男鹿ダンカ島、周廻二里二十町三十一間、　坊勢島、周廻二里二十一町五十二間、　高島、周廻二十町二間、　西ノ島、周廻五里一十八町二十七間、　松島、周廻二十九町二十五間、　長島、從北岬至東岬九町、　屋島、周廻六町一十九間、　院下島、周廻二十七町一十一間、　遠測

上島　鞍掛島　宇和島　加島　矢篦島　裸島　ヨコ島　桂島　小ツブラ島　大ツブラ島

三頭島　黑ツゴ島　高山　金子島　小松島　ヤケ島

揖西郡　實測　地唐カラニ荷島、周廻五町三十一間、　中唐荷島、周廻二町一十八間、　沖唐荷島、周廻四町三十五間、　君島周廻三町五十二間、

赤穗郡　實測　蟹カツラ島、周廻八町二間、　二子島、周廻一町三十二間、　野島、周廻二町四十五間、　鍋島、周廻五町五間、　生島、周廻十四町二間、　取上島、周廻一町四十九間、

〔播磨風土記賀古郡〕所以號褶墓者、昔大帶日子命、〇中略誂印南別孃之時、〇中略爾時印南別孃、聞而驚畏之、卽遁度於南毗都島、〇中略乃天皇知在於此少島、卽欲度、對阿閉津、〇中略此津遂度相遇、勅云、此島隱愛妻、仍號南毗都麻、〇下略

〔播磨風土記印南郡〕郡南海中有小島、名曰南毗都麻、

〔播磨風土記揖保郡〕伊刀島、諸島之總名也、品太天皇〇應神立射目人於飾磨射目前、爲狩之、於是自我馬野出牡鹿、過此阜、入於海、泳渡於伊刀島、爾時翼人等望見相語云、鹿者既到、就於彼島、故名伊刀島、

位置

まなげあり、

〔古事記中仁德〕爾遣山邊之大鶙(此者人名)令取其鳥、故是人、追尋其鵠、自木國到針間國、

〔古事記傳二十一〕針間(○中略)國名義は、此國風土記に、萩原里、土中有井、所以名萩原、息長帶日賣命、韓國還上之時、御船宿於此村、一夜之間、生萩根、高一丈許、仍名萩原、卽闢御井、故云針間井とあり、是に國名の始とは謂ざれども、云針間井とあるは、何とかや國名も是より出たりげに聞ゆ、若然らば榛木に由れる名なり、(又谷川氏云、(中略)針によれる名なるべしと云り、是も捨がたし、上代より針を出しゝこととも知がたし、)

〔豐鑑一〕天正五年十月、播磨の國を信長より秀吉に預給へば、彼國へ行向ぬ、東播はみな隨ひつきし中にも、小寺官兵衞はもとより心ざしふかゝりけり、西播佐用上月の輩などはあふがざりければ、彼輩に軍を向、(○下略)

〔日本書紀十一仁德〕十六年七月戊寅朔、天皇以宮人桑田玖賀媛示近習舍人等曰、朕欲愛是婦女、若皇后之妬不能合、以經多年、何徒棄其盛年乎、(○中略)於是播磨國造祖速待獨進之歌曰、瀰箇始報、破利摩波揶摩智以播區嬬輸、伽之古俱等望、阿例揶始儺破務、

〔釋日本紀二十五和歌〕瀰箇始報如報(三日潮也、私記曰、御饌三日之潮、其歌意、[illegible]之數、豐此言乎、)

〔地勢提要乾〕各國經緯度(附里程)

播磨姬路二階町、極高三十四度五十分半、經度西一度一分半、從東都(東[illegible])西一百六十六里二十九町二十間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

播磨	高砂	三四度四五分〇〇秒	姬路	三四度五〇分三〇秒
	室津	三四度四六分三〇秒	赤穗	三四度四五分三〇秒(○中略)

東西里差

古事類苑

地部二十五

播磨國

播磨國ハ、ハリマノクニト云フ、山陽道ニ在リ、東ハ攝津、西ハ備前、美作、北ハ因幡、但馬、東北ハ丹波ニ接シ、南ハ海ニ至ル、東西凡ソ二十里、南北凡ソ十四里餘アリ、此國ハ古、國府ヲ飾磨郡ニ置キ、明石、賀古、印南、飾磨、揖保、赤穂、佐用、宍粟、神崎、多可、賀茂、美囊ノ十二郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、後世飾磨ヲ分チテ飾東、飾西ト爲シ、賀茂ヲ分チテ加東、加西ト爲シ、神崎ヲ分チテ神東、神西ト爲シ、揖保ヲ分チテ揖東、揖西ト爲シ、總テ十六郡ト爲ス、明治維新ノ後、飾東、飾西、神東、神西、及ビ揖東、揖西ノ各二郡ヲ合セテ其舊稱ニ復シ、新ニ姬路市ヲ設ケ兵庫縣ヲシテ之ヲ治セシム

〔倭名類聚抄〕五國郡 播磨波里萬

〔運歩色葉集〕葉 播磨ハリマ 播州

〔日本風土記〕一寄語島名 播磨法里馬ハリマ

〔和漢三才圖會〕七十七播磨 播磨、本用針間或張孫字、而景行天皇立播磨稻日大郎姬、爲皇后、日本武尊之母 今單用播磨字、爲山陽道八箇國之首、

〔倭訓栞〕前編二十四波 はりま 播磨と書り、古事記に針間と見ゆ、新猿樂記に播磨針といひ、赤染衞門集に、はりまより來る人、針をおこせてと見えたれば、針によれる名なるべし、相撲の手にはり

上也、

名所

〔日本鹿子十一〕同國〇隱岐中名所

杖ケ嵜　海邊知夫の郡のうちに有山也〇中略

隱岐の海　小島とも云〇中略

松山　三島など云名所あり

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　隱岐國卅人〇中略

諸國器仗〇中略　隱岐國横刀四口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

人口

風俗

調、御取鰒、短鰒、烏賊、熬海鼠、鮪腊、雜腊、紫菜、海藻、烏蒜、　庸、綸布、　中男作物、雜腊、紫菜、

〔毛吹草 三〕隱岐

和布　串鮑　鯣　海馬　灯松　桐板 島桐ト云テ木ノ目宜シ　桑板

〔倭訓栞 中編 三十 於〕おきろく　隱伎椽とかけり、線青にて畫具に用う、いにしへ隱伎國の產を佳とせしにや、奈良の大佛の腹中はこれをもて埋たりといふ、今東大寺の寶藏にあり、

〔隱州視聽合記 三 島後紀〕島後中　男五千六百二人　女五千五百六拾四人　僧百六人　合壹萬千二百七拾貳人

〔隱州視聽合記 四 島前紀〕島前　男二千二百八拾八人　女二千二百九拾一人　僧五十人　合四千六百三十九人也

〔官中秘策 四〕隱岐國　四郡 ○中略

一人數壹万八千九百三拾壹人　內 九千五百貳拾九人 男　九千四百貳人 女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元子年

一人數貳万千六百六拾人 書物料　高壹万貳千百六拾五石餘　隱岐國

內 壹万八百八拾貳人 男　壹万七百七拾八人 女 ○中略

諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略

一人數貳万六千貳百八人 書物料　高壹万貳千五百五拾九石餘　隱岐國

內 壹万三千貳百六拾壹人 男　壹万貳千九百四拾七人 女

〔人國記〕隱岐國

隱岐國之風俗、柔弱ニ而放逸成國也、知夫利之郡之者ハ實儀ニシテ頗布所有、海部周吉穩地之郡ハ風ニ從草之如ク、善ニモ惡ニモ否ト不謂而相從之風俗也、遠島ナレドモ、石州ヨリハハルく

田數
石高

（郡國提要）隱岐　四郡、六十一村、
高（御料）一万二千五百五十九石六斗
海士郡八村　知夫里郡五村　越智郡十六村　周吉郡三十二村
（地勢提要坤）郡邑島嶼奇名
隱岐　越智郡、都萬（ツマ）村、周吉郡、卯敷（ウヅキ）村、犬來（イヌキ）村、津井村、飯美（イビ）村、
（倭名類聚抄五國郡）隱岐國（略）○註　管四（田五百八十五町二段三百四十二步）
（伊呂波字類抄於國郡）隱岐國（管四（中略）本田（田下癸既二六字）百廿四町）
（海東諸國記）隱岐州　郡四、水田五百八十四町九段、
（拾芥抄中末本朝國郡）隱岐、（下遠）四郡（中略）田六百廿四町
（日本鹿子十一）隱岐國四郡、小下國、四方二日、知行高壹万千八百石、
（官中秘策四）隱岐國　四郡（○中略）
一石高壹万貳千百六拾壹石餘

出擧稻

（吹塵錄五人口及國高）天保度御國高調（○中略）
隱岐國（御料）　一高壹万貳千五百五拾九石六斗
（郡名一覽）皆御料。　隱岐　飛彈　佐渡　合三ケ國
（延喜式二十六主稅）諸國出擧正稅公廨雜稻（○中略）
隱岐國正稅二万束、公廨四万束、國分寺料五千束、文殊會料一千束、修理池溝料三千束、救急料一千束、
（倭名類聚抄五國郡）隱岐國（○略註）　管四（中略）正二萬束、公四萬束、本穎七萬束、雜穎萬束、

國產
貢獻

（延喜式二十四主計）隱岐國（行程、上卅五日、下十八日、）

鄕　村里名合

海部郡天平三年正税穀簸振量定漆仟參伯陸拾伍斛壹斗漆升漆夕壹撮○中略

周吉郡天平三年正税穀簸振量定玖仟壹伯玖拾斛捌斗玖升貳合肆夕捌撮○中略

役道郡天平三年正税穀簸振量定肆仟壹伯壹拾貳斛貳斗玖升陸合參夕肆撮

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年五月丙辰、前遣渤海使外從五位下内藏宿禰賀茂麻呂等言、歸鄕之日、海中夜暗、東西掣曳、不識所著、于時遠有火光、尋逐其光、忽到島濱、訪之是隱岐國智夫郡、其處無有人居、或云、比奈麻治比賣神常有靈驗、商賈之輩、漂宕海中、必揚火光、賴之得全者、不可勝數、神之祐助、良可嘉報、伏望奉預幣例、許之、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年九月乙巳、隱岐國智夫郡由良比賣命神、海部郡宇受加命神、穩地郡水若酢命並預官社、

〔倭名類聚抄 八隱岐國〕知夫郡　宇良　由良　三田美多

海部郡　布勢　海部安末　佐作

周吉郡　賀茂　奄可安無加　新野比乃

穩地郡　都麻　河内加知無　武良

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年八月五日丙辰、三島上皇○三島院後鳥羽上皇、誤、遂著御于隱岐國阿摩郡苅田鄕、仙宮者改柴棟紅閨於柴扉桑門、所者亦雲海沈沈而不辨南北、雁書青鳥之便、烟波漫々而迷東西之故也、不知像見赤島行度、只隱宮之悲、城外之憤、增惱叡念御斗也云云、

〔郡名一覽〕一隱岐國 御料　隱州　四方二日　四郡

高壹万貳千百六拾五石貳斗三合　六拾壹ヶ村

但一圓松江御預所　〈山島　百十七里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

知夫郡 海部郡
周吉郡 隱地郡

參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕隱岐

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治沿革編	地誌提要	郡區編制
	知夫(チブリ)	同	同	同	知夫里(チブリ)	同	同	知夫(チブリ)	同
	海部(アマ)	同	同	同	海士(アマ)	同	同	同(アマ)	同
	周吉(スキ)	同	同	同	同(シユキツ)	同(スキツ)	同	同(スキ)	同
	穩地(オンチ)	隱地	穩地	越智	越知(エチ)	越智	同	穩地(オチ)	同
	管四	同	四郡		同	同	同	同	同

〔東大寺正倉院文書三十四〕隱伎國正稅帳元年天平
○○周吉郡天平元年見定稻穀玖伯壹拾捌斛參斗伍升玖合○中略

〔東大寺正倉院文書三十四〕隱伎國正稅帳
(續目裏書)隱岐國正稅收納帳大初位上行目縣犬養宿禰大萬侶天平五年二月十九日
○○智夫郡天平三年正稅穀篋振量定肆仟玖伯伍拾柒斛○中略

極忠高之ニ代リ、嗣ナク國除シ、松平直政ニ命ジテ、島事ヲ管攝セシム、王政革新、鳥取藩ヲシテ之ヲ管セシメ、尋テ隱岐縣ヲ置、既ニシテ廢シテ大森縣ニ併セ、更ニ島根縣ニ併セ、又改テ鳥取縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕億岐國造

輕島豐明朝〇應神御代、觀松彥伊呂止命五世孫十挨彥命定賜國造、

國府

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年四月庚戌朔、外從五位下下道朝臣黑麻呂爲隱岐守、

〔吾妻鏡十三〕建久四年十二月廿日癸丑、佐々木左衞門尉定綱本地行之地悉返給、其上七箇國內、各被加一所、於隱岐國者不交他人之沙汰、一國拜領地頭職、

〔倭名類聚抄五國郡〕隱岐國國府在周吉郡、行程上三十五日、下十八日、

〔隱州視聽合記二周吉郡〕西鄕　西鄕ノ古府ハ矢尾村ノ西、下西村之東、其山ヲ甲ノ尾ト云、所謂庄野五郎ガ古城ナリ、松杉參差トシテ九折三四町、峻ニ天府ノ要害ナリ、今ハ此地ニ八幡宮ヲ奉ズ、

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕隱岐國〇註略管四〇註略　知夫　海部　周吉　隱地

〔延喜式二十二民部〕隱岐國下、管　知夫チフ　海部アマ　周吉スキ　穩地ヲチ　右爲遠國、

〔易林本節用集下〕隱岐、隱州、下、管四郡、〇中略　知夫チフリ、海部アマベ、周吉スキ、穩地ヲチ、

〔郡名考〕官用ヒル今ノ郡名

隱岐四郡　海士アマ　知夫里チブリ　大本書無　越知ヲチ　周吉スキ

〔皇國郡名志〕隱岐國四郡

知夫チブリ　●知夫　○黑木御所後醍醐帝行在一郡ノ小島也　海部アマベ　●北方　○後鳥羽帝古跡國社一郡ノ小島也

周吉スキ　●湊　●府中　●津井　東南北ニ跨ル　隱地ヲチ　●郡方　西部ニ向

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ

五十八間　津井村　二里二十一町一十九間半（至二東郷村一二里一丁二十七間）　矢尾村、三十六度一十二分、（至二目貫村一四丁五十間）一里四町一十一間　今津村（至二戸谷村一徑側二十一丁三十六間半）　三里五町三十四間（至二四郷岬一一里三十二丁二十一間）中　岸濱村、三十六度一十分、一十三町五間　箕浦村（至二高取岬一一十三丁二十六間）　四町四十六間　加茂村（至二高取小岬一四丁四十間）　二里一十四町一十五間半　蛸木村、三十六度九分半、二里二十六町五間　越智郡都万村　沿海周廻三十里一十七町五十四間半

〔日本國郡沿革考（三山陰道）〕隱岐　古作二淤岐島一、或隱伎、（古事記）意岐、（國造記）下國、管四郡、六十一村、

海士（八村　延喜式等作二海部一）　知夫里（五村　延喜式等作二知夫一）　越智（十六村　延喜式等作二穩地一、和名抄作二隱地一、）　周吉（三十二村　古府治）

〔日本地誌提要（五十隱岐）〕沿革　古ヘ國府ヲ周吉郡ニ置、（府址八尾村ノ國ニアリ）建久四年、源頼朝全島ヲ以テ佐佐木定綱ニ授ク、尋テ其弟義清ヲシテ、出雲守護ヲ以テ兼領セシム、承久三年、後鳥羽法皇、北條義時ヲ討ジテ克タズ、義時、法皇ヲ島前海士郡（海士村森森里）ニ遷シ、後十八年ニシテ崩ズ、元弘二年、北條高時、後醍醐天皇ヲ知夫郡別府村（或ハ國郡知夫湊、亦皇居ノ址アリト云、）ニ遷シ、義清ノ玄孫清高ヲシテ之ヲ監護セシム、明年、天皇伯耆ニ遷幸シ、王師四起シ、北條氏亡ビ、出雲守護鹽冶高貞ヲシテ守護ヲ兼ネシム、高貞讒死ノ後、足利尊氏之ヲ佐々木高氏ニ加賜ス、正平中、山名時氏全島ヲ略取シ、之ヲ其孫氏之ニ傳フ、元中七年、將軍義滿、氏之ノ封ヲ收メ、其弟滿幸ニ授ク、既ニシテ義滿、滿幸ヲ誅シ、再ビ之ヲ高氏ノ孫高詮ニ賜フ、高詮、島ノ豪族隱岐氏（義清ノ裔孫）ヲ以テ守護代トシ、周吉郡宮田ニ居ラシム、大永天文ノ際、同族島前島後ニ分據シテ鬪爭ヤマズ、隱岐清政、甲尾（古府ノ別稱）ニ城キ、援ヲ尼子經久ニ乞テ島内ヲ平定シ、終ニ其麾下ニ屬ス、孫爲清ニ至テ尼子氏亡ビ、毛利元就ニ附ス、永祿ノ末、尼子勝久恢復ヲ圖リ、故黨ヲ募ル、爲清之ニ應ジ、兵敗レテ自殺シ、其弟清家代リ立ツ、天正十年、從子經清ニ弑セラル、毛利氏ノ兵來リ伐チ、經清ヲ誅シ、戍ヲ八尾ニ置キ、後吉川廣家ヲ分封ス、關原役畢リ、德川氏、廣家ノ封ヲ收メ、堀尾吉晴ニ加賜ス、孫忠晴卒シテ封絶ユ、京

知夫里郡知夫里島知夫里村大江、三十六度三十秒、二里三町四十四間　竹島岬　二里一十七町五十七間（至竹濱、二十五丁五十二間）　ハナレ岬　二里九町三十八間　知夫里村夫江　沿海周廻六里三十一町一十九間

同西之島浦之郷村、三十六度五分半、三里三町五十八間　同赤灘浦　三里九町二十八間　同國川　二里三町二十間　美田村舟越北濱　三里二十一町五十八間　宇賀村濱之浦　二里三十三町三十二間半　宇賀村、三十六度六分半、三里一十一町六間半　美田村樫浦　一里二十二町一十六間半　同舟越　二十九町一十七間　浦之郷村　沿海周廻二十里二十六町五十六間半

海士郡中之島知々井村、三十六度四分半、三里三町四十九間半（至鼻前崎、一里三十五町一十二間）　崎村、三十六度二分半、四里八町四間半（至飯知岬、一里二十九丁五十四間半）　福井村眞珍岬　二里三十五町五十九間（至福井村豐村、二十町半）　海士村北分　二里一十八町四十二間半（至海士村二子、一里一十丁五十一間半）　豐田村　三里二十六町三十五間半（至知々井村保々美、一里七丁二十二間半）　知々井村　沿海周廻一十六里二十一町一十一間

以上三島、總稱隱岐國島前、

隱岐國島後（自島前海士郡知々井村、至島後越智郡都万村、波濤直徑四里三丁、）

越智郡都万村、三十六度一十一分、三里三十三町五十二間半　北方村長尾田（至北方岬、三丁七間）　一十八町三十六間　同竈浦（至竈浦岬、二十三丁四十二間）　三十二町二十間半　北方村（至烏帽子岬、一十九丁三十六間半）　一十七町四十九間　代村（至鍋代岬、一十一丁一十間）　二十四町二十一間　代村吉浦（至代村岬、九丁四十五間）　六町一間　久見村（至久見崎、一十五丁三十六間）　一里二十八町五十五間半（至伊後村西之浦、三十三丁三十二間半）

周吉郡西村白島岬　一里一十六町五間　中村濱（至中村宿所、五丁五間）　一里二十町七間　飯美村（至飯美岬、三丁三十間）　二里四町四十二間　印敷村辨天岬　二里九町五十一間　犬來村斗大崎　二里三町

拾町、島前海士郡知々井村ヨリ島後穩地郡都萬村ニ至ル、海上直徑四里三町、

島嶼

〔日本實測錄十〕隱岐國知夫里郡　實測　波嘉島、周廻一十六町五十一間、竹島、周廻二町四十間、島津島、周廻二十九町五十一間、淺島、周廻八町二十五間、カン島、周廻八町五間、大桂島、周廻四町五十三間、遠測　小波嘉島　渡リガミ　ワスゲ　ヲトリカケ　離島　ウテ島　辨天島　俵島　小桂島　見付島　大島　冠島　星神島　立島宇賀村　立島別府村
海士郡　實測　ヒイコ島、周廻八町二十九間、松島、又呼二島山一周廻一里九町四十四間、遠測　井島
自島　小森島　二股島
越智郡　實測　大森島、周廻一十五町五十七間、四敷島、周廻五町四十二間、遠測　小ウッ
大ウッ　東桂島　西桂島　番部島　桂島　辨天島　烏帽子島　黑島　立島　松島
周吉郡　實測　松島、周廻一十町一十九間、長島、周廻五町二十五間、遠測　赤豆島　松島加茂村　赤島箕浦村　鼠島　女龜島　男龜島　經ヶ島　船島　立岩　鹿尾菜島　雀島釜村　立岩
沖津之目島　前津之目島　大島　釣島　赤島大久村　カビ島　クル島　松島卯敷村　沖平　辨天島　シブ島　平島　松島布施村　大黑島　小島　琴島　釜島　雀島西村　小白島　田島
沖島　松島西村　黑島中村

地勢

〔笈埃隨筆八〕隱岐
隱岐の國は北海中の一國にして、島前島後東西に分れ、其間三里の渡口、潮勢迅速にして大河の逆卷が如し、
〔日本地誌提要五十隱岐〕形勢　出雲ノ正北ニ位シ、四島嶼ヲ以テ一州トナス、其三小島鼎立スル者ヲ島前ト稱シ、其東北一大島ヲ島後ト稱ス、中間礁嶼相接ス、地質磽确、

道路

〔日本實測錄五〕隱岐國島前從二出雲國島根郡三保關一至二隱岐國知夫里郡知夫里村一、渡海直徑一十四里二丁、

書に、當國在伯耆出雲石見等之沖國也、故曰隱岐國云々など云る義なるべし、夫木集に、立浪に鼓の音を打そへてから人よせぬ瀬の島守などよめり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

隱岐前島知夫里村、極高三十六度三十秒、經度西二度四十一分半、從出雲三保關、渡海直徑一十四里二町、前同〇從東京、至三保關、渡海二百四十八里三十四町三十二間、

同島後都万村、極高三十六度一十三分、經度西二度二十九分半、從三保關、渡海直徑一十七里二十一町、前同〇從東京、二百五十二里一十七町三十二間、

〔日本經緯度實測〕東西里差〇此國北極出地不載

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〇中時

隱岐　島前　西二度四一分一二秒　島後　西二度二三分一八秒

疆域

〔隱州視聽合記一國代記〕隱州在北海中、故隱岐島、按隱國海中言遠置故名歟其在巽地言島前也、知夫郡海部郡屬焉、其位震地言島後也、周吉郡穩地郡屬焉、其府者周吉郡南岸西郷豐崎也、從是南至雲州美穗關三十五里、辰巳至伯州赤崎浦四十里、未申至石州溫泉津五十八里、自子至卯無可往地、戌亥間行二日一夜有松島、又一日程有竹島、俗言磯竹島、多竹魚海鹿、此二島無人之地、見高麗如自雲州望隱州、然則日本之乾地以此州爲限矣、

〔日本地誌提要五十隱岐〕疆域　知夫島ハ出雲島根郡加賀浦ノ正北壹拾壹里三拾町ニアリ、周回六里三拾壹町壹拾九間、東西壹里壹拾五町、南北貳拾五町、西ノ島ハ東北一峽ヲ隔テ知夫島ニ對ス、周回貳拾里貳拾六町五拾六間半、東西三里貳拾町、南北貳里、中ノ島ハ西島ノ東壹拾貳町ニアリ、周回壹拾六里貳拾壹町壹拾壹間、東西壹里三拾町、南北壹里貳拾四町、以上三島ヲ島前ト云、島後一島ハ中島ノ東北三里餘ニアリ、周回三拾里壹拾七町五拾四間半、東西四里、南北四里三

名稱

知夫島、西島、中島ノ三小島ヲ島前ト云ヒ、其東北ニアル一島ヲ島後ト云フ、此國ハ古ヘ國府ヲ周吉郡ニ置キ、知夫、海部、周吉、穩地ノ四郡ヲ管シ、延喜ノ制、下國ニ列ス、明治維新ノ後、島根縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕隱岐 於岐

〔運歩色葉集 遠〕隱岐 四 隱州

〔日本風土記 一寄語島名〕隱岐 和計

〔易林本節用集 下〕隱岐 州隱、下、管四郡、四方二日、五穀乏、藻鹽多、以鹽稱名也、小下國也、

〔和漢三才圖會 七十八隱岐〕當國伯耆出雲石見等海濱所在島也、故爲濱置州、後改用隱岐字、

〔日本書紀纂疏 上二〕億岐者奧之義、五音相通、此洲在北海之西北、如人家之有奧、言奧深也、

〔倭訓栞 前編四十五於〕おき　隱岐國は北海山陰道の濱中にある國也、神代紀に億伎三子洲といへるは、知夫島前國府如子ならべり、

〔古事記 上〕於是伊邪那岐命 中略 妹伊邪那美命 中略 如此言竟而御合、生子、中略 次生隱伎之三子島、亦名天之忍許呂別、許呂二字以音

〔古事記傳 五〕隱伎之三子島、下には游岐島と書り、名義は海原の奧中にある島と云なり、書紀口決に、奧也、西北之隅、濱二之奧とあるは、似たることながら、漢書にかゝれる故に事違へり、纂疏の說も同じ、三子島とは、或人、此國三島ある故に云と云り、今國圖を考るに、まづ此國四島に分れたる、其中に東北方に在て大きなるを、俗に島後と云ひ、其西南ノ方に今ノ道五里ばかり離れて天之島、向之島、知夫島とて三ツあり、此三ツノ島を統て島前と云なり、島後に比ぶればいづれも小しければ、三ツ子とは、まことに此を以て云なるべし、

〔諸國名義考 下〕隱岐

和名抄に隱岐 於岐、國府在周吉郡、名義は日本紀纂疏に、隱岐者奧之義也云々、此洲在北海之西北とあり、或

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略○中
御料私領
一人數貳拾四万五千貳百三人　高拾四万貳千四百九拾九石餘　石見國
内拾貳万八千百六拾三人男
　拾壹万七千四百拾人女
弘化三丙午年諸國人數調略○中
御料私領
一人數貳拾三万六千九百六拾三人　高拾七万貳千貳百九石餘　石見國
内拾貳万貳千八百七拾八人男
　拾壹万四千八拾五人女

風俗

〔人國記〕石見國
石見國之風俗ハ、丹後ノ國ニ不異而、僞計ニテ實アル人稀也ト可知、是モ隼應ハ吉シ、人ノ風俗曾テ不可好也、實有人ハ千人ニ一人モ稀也、智有人ハ日々夜々ニ惡心ヲ挾、言語道斷ト可知、

名所

〔日本鹿子十一〕同國石見○中名所
石見海　潟あり、石見川波の山ちかし、略○中
高角山　人丸の古跡あり、社有て西向の所也、うみべ也、松むら〳〵有之、砂の吹上山あり、略○中
高田山　高馬山　屋代山　など云名所あり略○中
比禮振岑

器械

〔延喜式二十八兵部〕諸國儲兒略○中　石見國卅人略○中
諸國器仗略○中　石見國甲二領、横刀五口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

隱岐國

隱岐國ハ、オキノクニト云フ、山陰道ノ海中ニ在リ、出雲ノ正北ニ位シ、四個ノ島嶼ヨリ成ル、

〔吹塵錄 五 人口及國高〕天保度御國高調 ○中略

石見國 御料私領 一高拾七万貳千貳百九石七斗六升八合三勺貳才

出擧稲

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税公廨雜稻 ○中略

石見國正稅公廨各十五万五千束、國分寺料二万束、文殊會料一千束、修理池溝料二万束、救急料四万束、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕石見國 ○中略 管六 正公各八萬千束、本稻三十九萬千束、雜稻八萬千束、

調庸貢獻

〔延喜式 十五 內藏〕諸國年料供進 ○中略 櫑子 (中略)石見(中略)土佐廿六箇國各四合

〔延喜式 二十三 民部〕年料別納租穀 ○中略 石見國 二千五百石 ○中略

諸國貢蘇番次 ○中略 石見國 八壺 二口各大一升、六口各小一升、 右十箇國爲第四番 戊年 ○中略

交易雜物 ○中略 石見國 絹六百八十七斤八兩、青苔[illegible]斤、海松一百斤、海藻根十斤、鳥坂苔五斤、紫草一百斤、櫑子四合、鹿革卅張、

〔延喜式 二十四 主計〕石見國 行程、上廿九日、下十五日、

調、庸、並輸綿、 中男作物、紙、紅花、薄鰒、雜腊、紫菜、

〔延喜式 三十七 典藥〕諸國進年料雜藥 ○中略

石見國十四種 前胡一斤四兩、獨活、伏苓各六斤、牛膝、桔梗、白朮各三斤、藍漆一斤十五兩、黃檗四斤、細辛、當歸各十五斤、桑螵蛸九兩、射干一斤、署預一斗二升、蜀椒三斗五升、

〔毛吹草 三〕石見

白壺　防風　檻柱　銀　チカサノ錫鉛　濱田折敷　高津白黑碁石

人口

〔官中秘策 四〕石見國　六郡 ○中略

一人數貳拾壹万九千五百拾貳人　內 拾壹万貳千五百八拾三人 男 拾万七千五百貳拾九人 女

○按ズルニ、此人口總數、內譯ト合ハズ、恐ラクハ一誤アラン、

〔中國治亂記〕小幡山城守ハ石州ノ津和野ヘ落ラレシヲ追カケ、總佐ニテ腹ヲキル、

保

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緖、雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領略○中　石見國　大國保略○中

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判下略○

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年五月十一日乙酉、故左衛門尉坂上明定子息左兵衛尉明胤、領掌亡父遺跡事、不可有相違之由、含嚴旨、是石見國長田保、播磨國巨智庄地頭職略○中等事云云、

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平右近將監武聰大廣間從四位侍從安政元　六万千石　御在城石州那賀郡濱田江戸ヨリ海陸二百四十七里

往古吉見元領、元和五年、古田大膳大夫重治、同兵部少輔重恒、慶安二、松平周防守康映、同周防守康寶、同周防守康員、同周防守康豐、同周防守康福、寶曆元、本多中務大輔忠敞、同中務大輔忠盈、同平八郎忠丘、明和六、松平周防守康福、同周防守康定、同周防守康任、同周防守康爵、天保七ヨリ松平右近將監齊厚領之、

龜井隱岐守茲監大廣間從四位侍從元治元子五月任　四万三千石　居城石州鹿足郡津和野江戸ヨリ二百四十七里

舊元領、吉見出羽守正賴居、元和三ヨリ龜井豐前守政矩、以後代々領之、〇節略

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕石見國略○註　管六田四千八百八十四町九段四十二步

〔伊呂波字類抄伊國郡〕石見國管六(中略)本田(田下略)四千八百八十四町九段四十二步

〔海東諸國記〕石見州　郡六、水田四千九百十八町

〔日本鹿子十一〕石見國六郡、中下國、南北二日、知行高十三万七千三百七十石、

〔官中秘策四〕石見國　六郡略○中

一石高拾四万貳千四百九拾九石餘

村里名邑

山巖石峭嶸、榮繚數十里、銅工臈伴案麻呂、眞髮部廣世等言曰、此山出銅、仍採礦石、試以鼓鑄、遂得眞銅、

〔郡名一覽〕一石見國 御料私領 石州 南北二日半 六郡

高拾四万貳千四百九拾九石貳斗三升五合　四百八拾九ケ村

●濱田　二百四十七里　●津和野　二百四十七里　∧大森　二百三十里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕石見　六郡、四百五十一村、御料私領

高十七万二千二百九石七斗六升八合三勺二才

安濃郡三十村　邇摩郡四十六村　邑智郡百二村　那賀郡百十六村　美濃郡九十六村　鹿足郡六十一村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

石見　邑智郡、志君村、湯抱村、八色石村、川下村、邇摩郡、大家本鄉、白杯村溫泉津村溫泉里村、靜間村、安濃郡、刺賀村、鹿足郡、美濃郡、寺垣內村、那賀郡、下府村、渡津村、

〔和漢三才圖會 石見 七十九〕津○和○野○東至江戶二百四十七里、亥子至濱田十八里、東至安藝廣島十四里、辰巳至大坂方至大坂　濱○田○東至江戶二百四十七里、巽至廣島二十三里、

〔安西軍策 一〕大內龍豐寺和平附石州濱田合戰事

大內○義興ハ國中ヲ隨ヘテ、頓テ濱田ヘ陣易シ、尼子勢ヲ待カケタリ、角テ尼子モ此由ヲ聞、急濱田ニ打出、敵陣五十餘町ヲ隔、對陣シテ暫ハ合戰モ無ク候、

〔毛利元就記〕石見國と備後半國內郡の分は、雲州の尼子晴久に從ふ、しかれ共石見の內津○和○野○の三本松の城主吉見正賴一人は、昔より防州の大內義隆に從ふ、

安濃郡

〔文德實錄二〕嘉祥三年八月丙辰、公卿抗表曰、〇中略石見國守從五位下笠朝臣岑雄等奏偁、所管安濃郡川合郷甘露降、〇中略謹詣闕庭、隨貢以聞、矜謙而不當、

邇摩郡　那賀郡

〔三代實錄四十九光孝〕仁和二年五月十二日庚寅、先是石見國邇摩郡大領外正八位上伊福部直安道、那賀郡大領外正六位下久米岑雄等、發百姓二百十七人、帶兵仗圍守從五位下上毛野朝臣氏永、奪取印匙驛鈴等、授傷吏、

邑知郡

〔日本國郡沿革考三山陰道〕石見〇中略邑智百二村　式等作邑知延喜

鹿足郡　美濃郡

〔續日本紀二十九高野〕神護景雲二年二月癸未、石見國美濃郡人額田部蘇提賣、寡居年久、節義著聞、量復殖而能散、所濟者衆、復其田租終身、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年五月丙申、石見國美濃郡分割爲二郡、本郡依舊爲美濃郡、新郡取邑號爲鹿足郡、其職員者准小郡、析元四員、分取一人、更加一員、總置二員、本郡則准下郡、置三員、

〔三代實錄十四淸和〕貞觀九年十月十九日甲申、石見國言、鹿足郡倉庫自燒、

鄕

〔倭名類聚抄八石見國〕安濃郡　波禰　刺鹿　安濃　静間　高田多加多　川合〇會高山寺本作合、　邑陀　佐波

邇摩郡　託農多久乃　大國　湯泉由　杵〇杵、高山寺本作津、道都知　大家於保伊倍　都治〇邇、高山寺本作都、

那賀郡　都農都乃　都於　石見　周布主不　三隅美須三　杵束木都賀　伊甘伊加無　久佐

邑知郡　神稲久末之呂　邑美於布美　櫻井佐久良井　都賀都加波　佐波

美濃郡　都茂都毛　吞氣　山田也末太　山前也末佐木　大農於保乃　美濃　小野乎乃　益田末須太

鹿足郡　鹿足　能濃

〔文德實錄二〕嘉祥三年八月丙辰、公卿抗表曰、〇中略石見國守從五位下笠朝臣岑雄等奏偁、所管安濃郡川合郷甘露降、〇下略

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月七日乙卯、散位從五位上陽侯忌寸永岑言、石見國美濃郡都茂郷丸

	安濃	邇摩	邑知	那賀	美濃	鹿足	
六國史	安農タ						
古書							
延喜式	安濃(アノ)	邇摩(ニマ)	邑知(オホチ)	那賀(ナカ)	美濃(ミノ)	鹿足(カナシ)	管六
倭名抄	同	同	同(於保知)	同	同	同(加乃阿之)	同
拾芥抄	同	同	同	同	同	同	六郡
諸書	同(國知元)	同(國知元)	邑知(知國) 邑智(元)	同(國知元)	同(國知元)	同(國知元)	
郡名考	同(アノ)	同(ニマ)	邑知(ヲウチ)	同(ナカ)	同(ミノ)	同(カノアシ)	同
天保郷帳	同(アンノ郡)	同	邑知	同	同	同(カナレ郡)	同
明治沿革編	同	同	同	同	同	同	同
地誌提要	同(アノ)	同(ニマ)	同(オホチ)	同(ナカ)	同(ミノ)	同(カノアシ)	同
郡區編制	同	同	同	同	同	同	同

〔續日本後紀 六 仁明〕承和四年正月辛卯、在石見國五ケ郡中神總十五社、始預官社、

○按ズルニ、五ケ郡ハ安濃、邇摩、那賀、邑知、美濃ノ五郡ヲ云フナリ、

國郡

四萬千石 三五年、古田重治ヲ濱田ニ封ズ、後易封數氏、最後ニ松平齊厚封ヲ受ケ、六萬千石 慶應中、美作ノ鶴田ニ徙ル、其餘郡邑、代官ヲ大森ニ置テ之ヲ治ス、王政革新、大森縣ヲ置キ、尋テ濱田ニ徙シ、又津和野藩ヲ廢シテ濱田縣ニ合併ス、

〔先代舊事本紀 國造十〕石見國造

瑞籬朝〇略御世、紀伊國造同祖蔭佐奈朝命兒大屋古命、定賜國造、

〔續日本紀 淳仁二十四〕天平寶字七年九月甲寅、以從五位下紀王爲石見守、

〔吾妻鏡 十三〕建久四年十二月廿日癸丑、佐々木左衛門尉定綱本知行之地、悉返給、〇中略 至長門石見兩國者、所被補守護職也、

〔倭名類聚抄 五國郡〕石見國 國府在邇摩郡、行程上二十九日、下十五日、

〔倭名類聚抄 五國郡〕石見國〇註略 管六〇中略 安濃 邇摩 那賀 邑知 於保知 鹿足 加乃阿之 美濃

〔延喜式 民部二十二〕石見國 中、管 安濃アノ 邇摩ニマ 那賀ナカ 邑知オホチ 美濃ミノ 鹿足カノアシ〇中略 右爲遠國、

〔易林本節用集 下〕石見 石州 中、管六郡、〇中略 安濃 近摩 那賀 邑智 美濃 鹿足、

〔皇國郡名志〕石見國 六郡

安濃アノ ●河合 ●吉永 ●鳥井 郡界 邇摩ニマ ●福田 ＜波積 ＜仁万 ＜宅野 北海ニ面

那賀ナカ 〔濱田〕 ＜長濱 ●今市 ＜長濱 ●三隅 ＜江田町 ●周布 ●小濱 郡界ヨリ西北海ニ貢

邑知オホチ ●市木 ●大林 ●日貫 ●吉石 ●中野 ＜久喜 郡界 鹿足カノアシ ●吉賀 〔津和野〕 ●日原 ●直地 ●横道 防長藝三國界

美濃ミノ ●益田 ●津田 ＜益田 ●高津山 郡界ヨリ西北ノ海ニ貢

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕石見

十八間半 三十五度六分、一十九町七間 同橋ケ濱 五里二十三町一十八間半 磯竹村大浦、三十五度一十一分、三里三十三町四十二間（至波根湖畔三里一十七町二十四間半） 安濃郡波根東村 三里二十二町三十八間（至仙山村島津屋數三十二町二十八間、從島津屋數至國界二十四町五十七間、從國界至久村二里二町五十間、） 出雲國神門郡板津村板津濱

宿驛

〔延喜式 二十八 兵部〕諸國驛傳馬 ○中略

石見國驛馬（波禰、託農、樟道、江東、江西、伊甘各五疋、）

建置沿革

〔日本國郡沿革考 三 山陰道〕石見 中國、管六郡、四百五十一村、

安濃 三十村　邇摩（四十六村 延喜式作近摩）　邑智（百二村 延喜式等作邑知）　那賀（百十六村 古府治）　美濃（九十六村）　鹿足（六十一村 承和十年五月割美濃郡置）

〔日本地誌提要 四十九 石見〕沿革 古ヘ國府ヲ那賀郡ニ置ク（今ノ下府村是ナリ）建久四年、源頼朝、佐々木定綱ヲ以テ守護トス、建仁二年、藤原國兼守護ニ補シ、子孫邑ヲ州内ニ食ム、是ヲ益田三隅福屋三氏ノ祖トナス、正平ノ初、三隅兼春遙ニ足利直冬ニ應ジテ高師直ヲ討ツ、師直其弟師泰ヲシテ來リ攻メ、克タズシテ去ル、後直冬來奔シテ三隅氏ニ依ル、十九年、足利義詮、大内弘世ヲ守護トシ、子義弘職ヲ襲グ、應永中、義弘誅死ス、將軍義滿其守護ヲ褫フ、應仁ノ亂起ルニ及テ、吉見（鹿足郡三本松）福屋（那賀郡本明城）三隅（同郡三隅城）益田（美濃郡益田城）諸氏各一方ニ據ル、大永ノ初、大内義興、尼子經久ト本州ヲ爭ヒ、義興遂ニ吉見三隅等ヲ降シ、殆ント全州ヲ併ス、天文十二年、義興ノ子義隆、尼子晴久ヲ出雲ニ伐チ敗レ還ル、晴久勝ニ乘ジテ入侵シ、江川以東ノ地ヲ略ス、陶隆房、大内義隆ヲ弑スルニ及ビ、吉見正頼、毛利元就ニ附シ、隆房ヲ討テ之ヲ滅シ、正頼遂ニ元就ニ屬ス、時ニ益田藤兼既ニ三隅兼隆ヲ滅シ、福屋隆兼ト各自立ヲ圖ル、本莊常光（須佐城主）安濃郡ニ在リ、獨リ尼子氏ニ附ス、永祿ノ初、元就益田ヲ降シ、福屋ヲ滅シ、終ニ本莊ヲ降シ、悉ク全州ヲ平定ス、關原役畢リ、德川氏、毛利氏ノ地ヲ削リ、坂崎成正ヲ津和野（鹿足郡三本松）ニ封ズ、元和三年、罪アリテ自殺シ、龜井政矩之ニ代ル

二間　長濱村　一里一十五町四十間（至濱田繪物屋町一里八丁一十間）　濱田新町、三十四度五十三分半、一里五町五十七間（至淺井村七丁九間半）　下府村　二里二十二町三十間半　上有福村（至濱谷七丁一十六間半、北極高三十四度五十七分、）　三里一十四町二十九間　邑智郡市山村　三十五町七間　谷住郷村　三里九町二十九間　三原村　一里二十六町五十七間　邇摩郡大家本郷　二里九町二十二間（至川上峠一里四丁三十六間、從峠至渡馬場峠二十丁二十二間、）　佐摩村銀山町（至西田村至溫泉村一里二十四丁四十八間、從溫泉至溫泉津村一十七丁二十一間半、又從溫泉里至龍神社二十五丁三十六間）三十三町一十八間　同大森駒之足町　六町四十八間半　同大森下町、三十五度七分半、一里一十三町三十間　久利村　三十一町三十三間　行恒村（至川合村一宮物部神社、三十四丁九間半）　一十九町一十五間　安濃郡大田南村大田町（至八幡社四丁四十五間）　一里四十八間　刺賀村（至刺賀神社六丁五十四間）　九町五十四間　波根西村（至宗田神社三丁一十二間）　二十四町五十七間　波根東村、三十五度一十四分半、一里一十二町一十二間　仙山村島津屋鋪　一十一町二十七間（至國界六丁九間）　出雲國神門郡口田儀村田儀町

〔日本實測錄卷一〕從赤間關沿海至鞆山〇（本數實中寄）

石見國美濃郡飯浦村、三十四度四十分、（至タラ峠六町一十五間、）　三里一十四町一十九間　高津村濱、（至高津村宮所八町六間）　三十四度四十一分、（又從[illegible]至潮峠八町二十六間）　二里一十一町（至津田村一里二十四町至[illegible]半、從津田、至木部川口六町四十二間、）　木部村大濱（[illegible]四町二十六間）　三里二十六町三間　那賀郡西河內村淺浦、三十四度四十七分、一里三十一町三十五間半　折居村吉浦　二里六町一十八間　津摩村白島峠　二里二十二町四十七間半（至長濱村二里四町一十七間）　濱田青口（至濱田濱、至余峠二十一町四間）　一十町一十二間　同新町　一十三町三十四間　原井村　二里一十町二十六間　下府村濱（至一宮一十七町一十九間半）　五町　國分村唐鐘浦（至久代村二十六町六間）　四里一十九町四十二間半（至久代村二十九町一十七間）　鄕田村、三十五度三十秒、四里六町五十六間半、邇摩郡福光本領（至小濱村[illegible]二十二町五十五間半）　一里一十三町三十三間　溫泉津村濱（至溫泉津村宿所、四町四

從安藝國廣島歷可部及新庄至佐摩○中略

石見國邑智郡出羽市　二里三十町一十五間（至三日市二丁九間、從三日市至高見村一里二十丁五十四間）八色石村八色石市　二里二十七町三間　川本村川本市　二里三十二町二十一間（至郷川岸二丁四十五間）祖式村　一十三町二十四間　邇摩郡白坏村（至三瀬八幡社七丁三十間）　一里八町一十九間半　佐摩村（從廣島至佐摩街道、通計二十六里六町二十四間半、

從安藝國新庄歷市木至淺井○中略

石見國邑智郡市木村　一里九町三十九間　同越木坂　二里一十八町五十五間　那賀郡今市村　二里三十五町五十間半　佐野村　二里一十町五十六間　淺井村（從新庄至淺井街道、通計一十三里二町二十一間半、）○中略

從安藝國宮內歷津田至津和野○中略

石見國鹿足郡六日市村　一里二十町五十四間　七日市村　二里一十四町三十三間（至田丸村二十四丁四十五間、從田丸至吉賀川岸一里二十四丁三十九間、）柿木村　三里一十五町三十九間（至福川村一里八丁二十七間）津和野高崎町（從宮內至津和野、街道、通計一十八里一十八町二間、）○中略

從周防國小郡歷石見國至松江○中略

石見國鹿足郡津和野高崎町　一十一町二十三間　同森町、三十四度二十八分、　二里一十一町一十八間（至津和野鐵砲町限一里二十丁二十四間半）宿谷村　一里二十五町三十九間　青原村上市、三十四度三十五分、　一里二十町二十七間　美濃郡横田村　二里一町五十一間　須子村（至高津村一丁四十八間、從高津村至高津町、五丁、又從高津村、至人丸社二丁、）三十四町二十二間　益田村三十四度四十一分（至瀧藏權現社八丁四間）　一里二十七町三十二間　木部村木部川口　二里五十八間　那賀郡岡見村三十四度四十六分、　一里六町二十六間　岡崎村上市町（又呼三隅郡）　一里二十七町四十五間　折居村折居橋　二里一十二町一十

しまめぐり五里ありて、四方のめぐりは、いづこも〱みないみじく高き岩にて、岸なる海深く、船よせがたし、もし船はつれば、岩のうへに大きなる材をたて、、大綱もてそのふねをつりあげおくなり、然せざれば浪風に岩にふれて、船くだくるよしなり、此島山林木竹多し、島のみ有て田はなし、人の家はたゞ七戸ありしが、今は十戸に分、たりとぞ、兄弟をぢめひなどもとづきて、一戸に三夫婦四夫婦などもすめりとぞ、かくて此島には、鼠のいと〱多く有て、物をくひそこなひ、人をもくふこと、よのつねならず、一とせ濱田より、人をつかはして、からせられけれどもかりえず、力およびがたかりしとぞ、いとあやしきことなり、さてこのしま人、男も女も髮あかく、いと賤しげなるさまなり、米もなく、牛馬などもなし、みつぎ物には、たゞ鮑を濱田へ奉る、はまだは此島の事とるつかさ人も、代官とてありとぞ、さて此島に、嚴國宮といひて、氏神とする社有、いかなる神を祭るにか、さだかならず、其祭にとなふる詞あり、その詞、ひろたけの、綿の木は、かれてもにほひ、かうばしや、おやどりあれや此宿の、さのみはないそどめされそ、かく唱へて、綿の木を祭るとなり、かの國人小篠御野がものがたりなり、

〔和漢三才圖會石見七十九〕石見　當國有高角山、岩崎山、岩奈仁山等之峻組、而岩石峻險、故號石見國、

形勢

〔日本地誌提要石見四十九〕形勢　山脈南方ヨリ來リ、州内ニ連亘シ、嶂巒相望ミ、平坦ノ地少ナク、江川其東北ニ縈紆貫流シ、山陰第一ノ巨流タリ、海濱低卤、運輸ニ便ナラズ、

道路

〔日本實測録四 石見〕從備後國下御領驛、吉舍及三次、至大森、〇中略石見國邑智郡酒谷村　一里一十六町二十四間　九日市村　二里七町一十二間　濱原村、三十五度四分半、　一十九町九間　粕淵村又呼小原驛、　一里三十町二十一間　別府村至小松地村留原驛五丁三十三町北極高三十五度五分半、　二里一十三町五十四間　邇摩郡佐摩村　六町二十四間半　佐摩村大森驛之足町經下御領至大森驛、街道、通計三十五里三町五十八間、〇中略

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

石見濱田、新町極高三十四度五十三分半、經度西三度三十八分半、從東都東海道自西國街道經安藝廣島可部二百五十六里三町五十三間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

石見　濱田　三四度五三分三〇秒　　高津　三四度四一分〇〇秒中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒中略　　石見　濱田　西三度三八分二八秒

疆域

〔日本地誌提要四十九石見〕疆域　東ハ出雲、東南ハ備後、南ハ安藝、周防、西ハ長門、西北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾壹里、南北凡壹拾三里、東北ヨリ西南ニ亘ル凡三拾里、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕石見國美濃郡　遠測　山根島又呼ミル島　松島津摩村　朝鮮岩　女島　男島　松島西平原村　二ツ島　ソ礁

那賀郡　實測　馬島、周廻一十七町五十三間、矢野島、周廻一十二町四十二間、瀬戸島、周廻二十二町四十五間、ヲ島、周廻四町三十間、遠測　高島周見村　大島　松島周見村　加島　鮫島　松島西村　黒島西村　アゴ島　小島　天神島　鶴島　柱島　沖柱島　男島下府村　女島下府村　高丸岩　黒島下府村　犬島　宰島　高島浅利村　女島小濱村　平島　ヒデクリ　エビス島

邇摩郡、遠測　松島　ヤエ島　烏帽子島　蛇島　黒島　唐人島　キフ小島　カンハタ尾崎　鵜島　トタイ島　宰島　ソ礁　雀島　小立島　大立島　小神島　神島

安濃郡　遠測　神岩

〔玉勝間七〕石見の海なる高島

石見國の濱田の海中に、高島といふ島あり、濱田より五里なりといへど、七八里ばかり有とぞ、此

〔倭名類聚抄 五國郡〕石見 以波美

〔運歩色葉集 伊〕石見 石州 十三郡

〔日本風土記 一 國名〕石見 一

〔易林本節用集 下〕石見 石州 中、管六郡、南北二郡、蒲布塩利多、税貢倍他國也、中下國也、

〔倭訓栞 前編 伊 三〕いはみ　石見と書り、此國に高角山岩崎山、或は銀山など、皆險石の山なるをもて名とすといへり、又曲齋九州道ノ紀に、石見の海のあらきといふふることどもたがはず、磯の巖そばだちたるあたりを潜行とあれば、其義によるにや、床の浦のあたり、げに疊を敷たる如き岩なりといへり、

〔諸國名義考 下〕石見

和名抄に石見（以波美、國府在那賀郡）名義は字の如くなるか、又は石群（イハムレ）の約りにてもあらむか、すべて此國は岩多き國なれば、萬葉集に、角障經（ツノサハフ）石見之海乃（イハミノウミノ）、言佐敝久（コトサヘク）、辛乃埼有（カラノサキナル）伊久里爾曾（イクリニゾ）云々とある伊久里も石の名なり、○中略小篠御野は、この國の海邊おしなべて岩なれば、石海（イハウミ）國ならむともいへり、さもあるべし、

〔冠辭考 六〕つぬさはふ　いはのはめ　いはみの海　いはれのいけ

万葉卷二に、人麻呂 角障經（ツヌサハフ）石見之海（イハミノウミ）○中略こは巖道石（イハミチイシ）とつゞきたる也、伊の語よりいへることく、古へは角（ツヌ）綱（ツナ）、巖を相通はしていふが故に、巖を都奈とも都奴ともいへり、かの岩綱と書たるを、岩巖の事也といひしに同じ、さてこゝに莵都怒瑳破赴といふは、奴瑳の反奈なれば、莵奈の奈を略て、莵都瑳といひ、破赴は蔓の這也、且その莵奈と同じき事、右にいふが如くて、巖道岩てふこと也けり、（綱を略ていふは、綱なすけき、なきましといへる類なり、）且万葉に、角障經と書たるハ、例の借字也、字に泥て誤べからず、

出雲國之風俗、萬事ナス所之業、實儀ニ勤ル事、百人ニ而六七十人如此、然ドモ明聞之詮儀疎ニ而、其道理ヲ不辨而、善惡邪正トモニ佛神ニ祈願ヲ而祈レバ、必成就スルト思フノ風俗也、愚蒙之意地也、サレバ謀計雖爲眼前之利潤、必當神明罰、正直雖非一旦之依怙、終蒙日月之憐トアル託宣ヲ不知、又神ハ不受非禮、舍正直首トイヘバ、吾心惡意ヲ畜而佛神ヲ祈リタリトモ、何ゾ加護アランヤ、古今神明ヲ重ンズル事、和朝之例タレドモ、於此國ニハ中々上下トモ如斯ニシテ、神明ヲ不知ナリ、

名所

〔日本鹿子十一〕同國〇出雲中名所之部
出雲宮〇中略　手間關〇中略　佐太浦　此所に明神の社あり、無雙の景地なり、
杵築　御崎　此間に鬼の燒食岩と云大岩あり、其外御經島たゝみ岩など云多く、めいよいろいろ有、
水江　吉野川　關山　枕木山　楯縫里

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　出雲國一百人〇中略
諸國器仗〇中略　出雲國甲五領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

石見國

石見國ハ、イハミノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ出雲、東南ハ備後、南ハ安藝、周防、西ハ長門ニ接シ、西北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十一里、南北凡ソ十三里、此國ハ古ヘ國府ヲ那賀郡ニ置キ、安濃(アノ)、邇摩(ニマ)、那賀(ナカ)、邑知(オホチ)、美濃(ミノ)、鹿足(カノアシ)ノ六郡ヲ管シ、延喜ノ制中國ニ列ス、其鹿足郡ハ仁明天皇承和十年、美濃郡ヲ分割シテ設置スル所ニ係ル、明治維新ノ後、島根縣ヲシテ之ヲ治セシム、

膠四斤、藍漆一斤八兩、昌蒲一斤、白芷、拔葜、桑耳各三斤、零陵香十兩、白朮五斤、狼牙一斤、龍膽一斤、玄參一斤十兩、藁本、松蘿、松脂、地楡、卷柏、女萎各一斤、款冬花二兩、澤瀉一斤二兩、商陸一斤五兩、細辛一斤八兩、瞿麥一斤六兩、白頭公二斤三兩、伏苓六斤、續斷一斤、白薇一斤、當歸一斤六兩、夜干二斤、黃精二斤、蒲黃十二兩、桑螵蛸二兩、榧子一斗、署預六升、麥門冬五升、百部根二斗、赤箭一合、牡荊子、亭歷子、柏子人各一升、桃人、車前子各四升、蜀椒五升、決明子、莵絲子各二升、吳茱萸五升、

〔毛吹草三〕出雲

鐵　紺染　杵築酒　友島鯖　白潟鱸　松江鱸　鯉　鮒　タチ貝　十六島苔　作　加々浦加加布

人口

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、令大倭參河並獻雲母、○中出雲黃樊石、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年六月二日甲辰、伊賀、○中略出雲、○中略土佐等十九國貢絹、色惡特甚、不如舊日、勅諸國宰、採取正倉舊樣絹、毎國賜一疋、依舊樣作、

〔官中秘策四〕出雲國　十郡○中略

一人數貳拾三万四千八百九拾六人　内 男拾貳万三百五拾四人 女拾壹万四千五百四拾貳人

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年○中略

一人數貳拾七万九千百七拾七人　高貳拾八万貳千四百八拾九石餘　出雲國

内 男拾四万六千百貳拾貳人 女拾三万三千五拾五人○中略

弘化三丙午年諸國人數調○中略

一人數三拾万九千六百六人　高三拾万貳千六百貳拾七石餘　出雲國

内 男拾六万千百七拾九人 女拾四万八千七百貳拾七人

風俗

〔人國記〕出雲國

出擧稻

出雲國（管稻郡）　一萬三拾万貳千六百貳拾七石四斗六升五合

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

出雲國正稅廿六万束、公廨卅万束、國分寺料四万束、文殊會料二千束、藥分料一万束、修理池溝料三万束、救急料四万束、俘囚料一万三千束、

〔倭名類聚抄五國郡〕出雲國〇中略　管十（中略）正二十六萬束、公三十萬束、本稻六十九萬五千束、雜稻十三萬五千束、

國產貢獻

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進〇中略　交易絁〇六百五十疋（中略）出雲（中略）上野七箇國各五十疋〇中略　橘子（中略）出雲（中略）土佐廿六箇國各四合

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀〇中略　出雲國四千五百斛〇中略

年料別貢雜物〇中略　出雲國筆五十管〇中略

諸國貢蕃次〇中略　出雲國十一壺三口各大一升、八口各小一升〇中略　右十箇國爲第四番辰戌年〇中略

交易雜物〇中略　出雲國絹二百卌七疋四尺、鹿革廿張、席三百枚、青苔卌斤、海松一百斤、海藻根十斤、烏坂苔五斤、紫草一百斤、鹿皮廿張、橘子四合、

〔延喜式二十四主計〕出雲〇中略　右廿五國、中絲、〇中略

出雲〇中略　右廿九國、絁、絹、〇中略

出雲國行程、上十五日、下八日、

調、白絹十疋、緋帛廿疋、縹帛十疋、纁帛八十疋、橡帛十二疋三丈、帛一百疋、緋絲十五絇、縹絲、緑絲、橡絲各五絇、皂絲五絇、烏賊廿斤、鰒廿四斤、自餘輸絹絲、　庸、白木韓櫃十二合、自餘輸綿、　中男作物、紙、海石榴油、荏油、胡麻油、薄鰒、雜腊、紫菜、海藻、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子〇中略　出雲國甘葛煎二斗

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥〇中略

出雲國五十三種　前胡、萆薢、橡皮、連翹各二斤、王不留行一斤七兩、獨活、苦參各十一斤、枸杞九兩、牛

公方家御下知御教書有ト云ヘ共、更ニ不レ用レ之而、剰地下人等ニ心ヲ合セ、皇家ノ御代官ヲ追出シ畢

〔今井軍記〕當國諸侍に赤松常陸彦五郎謀反に同心せしめ國一揆と號し、上意を違背せしむといへども、高遠一人同心せしめず、然ば上意寶生寺殿生觀御下向を相待中、私宅に五十ケ日御座あり、月瀬御退治を加へられし時、七百三十餘人御被官に參り、其時十三箇郷地頭職仰付られ、出雲國佐田庄、朝山分本領たる間返下され、○下略

藩封

〔慶應元年武鑑〕松平出羽守定安（大廣間　從四位上少將　元治元子四月日）　拾八万六千石、御在城出雲島根郡松江（江戸ヨリ）二百廿三里餘

松平佐渡守直已（帝鑑間　朝散大夫）（慶元慶長五、堀尾帶刀、同信濃守、同山城守、以後京極宰相高次、寛永十五、松平出羽守直政、以後代々領レ之、）　三万石　御在城雲州能義郡廣瀬（江戸ヨリ）二百廿二里

松平主計頭直哉（帝鑑間　朝散大夫）（寛文年中ヨリ松平上野介近榮、以後代々領レ之、）　一万石　御在所雲州能義郡母里（江戸ヨリ）二百三十三里（寛文年中ヨリ領レ之、○中略）

田數石高

〔倭名類聚抄　五　國郡〕出雲國○中略　管十、（田九千四百三十五町八段二百八十五歩）

〔拾芥抄　中本　諸國部〕出雲　中　十郡（中略）（田九千九百六十八町）

〔海東諸國記〕出雲州　郡十、水田九千四百三十町八段、

〔日本鹿子　十一〕出雲國、十二郡、大上國、東西二日半、知行高二十二万三千四百七十石、

〔官中秘策　四〕出雲國　十郡○中略

一石高貳拾八万貳千四百八拾九石餘

〔吹塵錄　五　人口及國高〕天保度御國高調○中略

〔石清水文書一〕八幡宮寺領
　　　御判　右大將家賴朝　〇中略
出雲國　安田庄　橫田庄〇中略　石坂保〇中略
　　元暦二年正月九日

〔吾妻鏡六〕文治二年七月十八日癸巳、出雲國園山庄、前司師兼爲任意大德親昵、此間朝夕祗候、雖無日來之功、殊蒙御芳志、而望申出雲國園山庄下司職之間、可被還補件本職之由、今日賜御消息於師兼、可付都督之由云云、　十月一日甲戌、賀茂別當領出雲國福田庄、石見國久永保、參河國小野庄等、成御下文、被遣社家、當宮事二品御歸依異他之故也、

〔吾妻鏡十〕文治六年四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨下知給、於有子細所々者、今日令注進京都給、因州幷廣時俊兼等奉行之、其狀云、
　　內宮役夫大工作料未濟成敗所々事〇中略
出雲國　飯生庄　在下文〇中略
　　文治六年四月十九日

〔太平記二十一〕鹽冶判官讒死事
三月晦日ニ、鹽冶出雲國ニ下著シヌレバ、〇中略三百餘騎ニテ同國屋杉庄ニ著給フ、

〔應仁廣記三〕山名家由來事
宮內少輔時照右馬頭氏幸ガ領地ヲ召放サレテ、隱岐出雲ヲ滿幸〇山名ニ賜ル、滿幸ハ元來本領丹後伯耆ヲ取リ、合セテ四箇國ノ大守ト成リ、一家ニハ總領也、又々侈ヲ恣ニシケル程ニ、出雲國橫田庄ハ仙洞後圓融帝ノ御厨領ニシテ、守護不入ノ所ナルヲ、滿幸是ヲ押領ス、急ギ可返上由、度々

庄保

●松江　二百二十三里餘　○廣瀬　二百二十二里　○母里　二百三十三里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕出雲　十郡、五百四村、

高三十万二千六百二十七石四斗六升五合（皆私領）

島根郡五十一村　秋鹿郡二十村　楯縫郡二十三村　出雲郡十九村　神門郡八十五村　飯石郡六十一村　仁多郡七十二村　大原郡五十八村　能義郡七十七村　意宇郡三十八村

〔地勢提要〕（坤）郡邑島嶼奇名

出雲　神門郡、三狐村、遙堪村、出雲郡、美談村、楯縫郡、十六島浦、秋鹿郡、島根郡、手角村、意宇郡、宍道村、下來待村、竹矢村、白石村、出雲々村、揖屋村、能義郡、飯生村、祖父谷村、野外村、門生村、安來村、大原郡、木次村、

〔和漢三才圖會〕（七十八出雲）○松江○（東至江戸二百六里、中方至石見濱田三十四里、東方至伯耆米子、海上五里、）

〔懐橘談〕（上島根郡）末次は此島根郡なり、末次明神座す、白潟は意宇郡なり、此二邑は今松江といふ、唐松江に地境相似て、鱸魚蓴菜また多し、故に先國主堀尾出雲守忠氏、富田城を此地へ移し、松江と名付ぬ、今に國司の府城也、宇賀明神も城の北に有、湖水を東西南北にほり入たれば、船の往來自由にして、商賈運送に便あり、誠に本朝無雙の金城、中國第一の天險なり、

〔賀茂注進雜記〕（神領下）同（永〇中略）三年（〇元暦元年）四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下賜國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、（〇中略）

出雲國　福田庄、（〇中略）

壽永三年四月廿四日　　正四位下源朝臣御判

神財鄕、而今人猶誤故、云神原鄕耳、

屋代鄕、郡家正北一十里一百一十六步、所造天下大神之染立射處、故云矢代、神龜三年、改字屋代、卽有正倉、

屋裏鄕、郡家東北一十里一百六十步、古老傳云、所造天下大神、令殖矢給處、故云矢內、神龜三年、改字屋裏、

佐世鄕、郡家正東九里二百步、古老傳云、須佐能袁命、佐世乃木葉頭刺而踊躍爲時、所刺佐世木葉墮地、故云佐世、

阿用鄕、郡家東南一十三里八十步、古老傳云、昔或人此處山田佃而守之、爾時目一鬼來而、食佃人之男、爾時男之父母竹原中隱而居之、時竹葉動之、爾時所食男、云動動、故云阿欲、神龜三年、改字阿用、

海潮鄕、郡家正東一十六里卅三步、古老傳云、宇能治比古命、恨御祖須我禰命、而北方出雲海潮押止、〇止當作上、漂御祖之神、此海潮至、故云得鹽、神龜三年、改字海潮、〇中略

來次鄕、郡家正南八里、所造天下大神命詔、八十神者不置青垣山裏詔而、追廢時此義迨以生、〇義迨以生恐處迨次生誤、故云來次、

斐伊鄕、屬郡家、樋速日子命坐此處、故云樋、神龜三年、改字斐伊、

〔東大寺正倉院文書 三十一〕出雲國天平十一年大稅賑給歷名帳

漆沼鄕 深江里 工田里 犬上里 河內鄕 伊美里 大麻里〇節略

〔東大寺正倉院文書 三十二〕出雲鄕 朝妻國〇國恐里誤 伊知里 杵築鄕 因佐里 神門郡 朝山鄕 稗原里 加夜里 日置鄕 在原里 桑市里 細田里〇節略

〔東大寺正倉院文書 三十三〕伊秩鄕 坂本里 坂奈里 池井里 阿爾里 多叔里〇節略

〔吾妻鏡 三〕元曆二年〇文治元年 正月廿二日丙午、以出雲國安東鄕、先日令寄附于鴨社神領給訖、〇下略

〔郡名一覽〕一出雲國 皆私領 雲州 南西二日半 拾郡

高貳拾八万貳千四百八拾九石七斗三升九合 五百四ケ村

多伎郷、郡家南西廿里、所造天下大神之御子、阿陀加夜努志多伎吉比賣命坐之、故云多吉、(神龜三年改字多伎、)

〔出雲風土記仁多郡〕三處郷、即屬郡家、大穴持命詔、此地田好、故吾御地古經(○古經恐田經誤)故云三處、

布勢郷、郡家正西一十里、古老傳云、大神命宿坐處、故云布世、(神龜三年改字布勢、)

三津郷、郡家西南廿五里、大神大穴持命御子、阿遲須枳高日子命、御須髮八握于生、晝夜哭坐之辭不通、爾時御祖命、御子乘船而率巡八十島宇良加志給鞆、猶不止哭之、大神夢願給、告御子之哭由、夢爾願坐、則夜夢見坐之御子之辭通、則寤問給、爾時御津申、爾時何處然云問給、即御祖前立去於(○於恐出誤)坐而、石川度坂上至留、申是處也、爾時其津水沼於(○於恐出誤)而、御身沐浴坐、故國造神吉事奏參向朝廷時、其水沼(○沼恐誤)出而用初也、依此今産婦彼村稻不食、若有食者所生子已(○已恐亡)云也、故云三津、(神龜三年改字三澤、)即有正倉、

横田郷、郡家東南廿一里、古老傳云、郷中有田四段許、形聊長、遂依田而故云横田、即有正倉、

〔出雲風土記飯石郡〕熊谷郷、郡家東北廿六里、古老傳云、久志伊奈太美等與麻奴良比賣命、任身及將産時、求處生之、爾時到來此處、詔甚久久麻麻志枳谷在、故云熊谷也、

三屋郷、郡家東北廿四里、所造天下大神之御門、即在此處、故云三刀矢、(神龜三年改字三屋、)即有正倉、

飯石郷、郡家正東一十二里、伊毘志都幣命、天降坐處、故云伊鼻志、(神龜三年改字飯石、)

多禰郷、屬郡家、所造天下大神、大穴持與須久奈比古命、巡行天下時、稻種墮此處、故云種、(神龜三年改字多禰、)

須佐郷、郡家正西一十九里、神須佐能袁命詔、此國者雖小國、國處在、故我御名者、非著木石詔而、即已命之御魂鎭置給之處、然即大須佐田、小須佐田定給、故云須佐、即有正倉、

波多郷、郡家西南一十九里、波多都美命天降坐處在、故云波多、

來島郷、郡家正南卅六里、伎自麻都美命坐、故云支自眞、(神龜三年改字來島、)即有正倉、

〔出雲風土記大原郡〕神原郷、郡家正北九里、古老傳云、所造天下大神之御射(○射恐財誤)積置給處、則可謂

等、參集宮處杵築、故云寸付、（神龜三年、改字杵築、）

伊努郷、郡家正北八里七十二歩、國引坐意美豆努命御子、赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命之社、卽坐郷中、故云伊努、（努、目錄作農、神龜三年改字伊努、）

美談郷、郡家正北九里二百四十歩、所造天下大神御子、和加布都努志命、天地初判之後、天御領田之長供奉坐之、卽彼神坐郷中、故云三太三、（神龜三年、改字美談、）卽有正倉、

宇賀郷、郡家正北一十七里廿五歩、所造天下大神命、誂坐神魂命御子、綾門日女命、爾時女神不肯、逃隱之時、大神伺求給所、是則此郷、故云宇賀、

〔出雲風土記神門郡〕朝山郷、郡家東南五里五十六歩、神魂命御子眞玉著玉之邑日女命坐之、爾時所造天下大神大穴持命、娶給而、每朝通坐、故云朝山、

日置郷、（○日置原作置、據東大寺正倉院文書、和名抄改、下同、）郡家正東四里、志紀島宮御宇天皇（○欽明）之御世、日置伴部等、所遣來宿停而爲政之所、故云日置郷、

鹽冶郷、郡家東北六里、阿遲須枳高日子命御子、鹽冶毗古能命坐之、故云止屋、（神龜三年、改字鹽冶、）

八野郷、郡家正北三里二百一十歩、須佐能袁命御子、八野若日女命坐之、爾時所造天下大神大穴持命、將娶給爲而令造屋給、故云八野、

高岸郷、郡家東北二里、所造天下大神御子、阿遲須枳高日子命、甚晝夜哭坐、仍其處高屋造而坐之、卽建高椅而、登降養奉、故云高岸、（神龜三年、改字高岸、）

古志郷、卽屬郡家、伊弉那彌命之時、以日淵河築造池之、爾時古志國人等、到來而爲堤、卽宿居之處、故云古志、

滑狹郷、郡家南西八里、須佐能袁命御子、和加須世理比賣命坐之、爾時所造天下大神命、娶而通坐時、彼社之前有磐石、其上甚滑也、卽詔滑磐石哉詔、故云南佐、（神龜三年、改字滑狹、）

大野郷、郡家正西一十里廿步、和加布都努志能命、御狩爲坐時、卽郷西山狩人立給而、追猪犀、北方山之、至河内谷而、其猪之跡亡失、爾時詔、自然哉猪之跡亡失詔、故云内野、然今人猶誤大野號耳、

伊農郷、郡家正西一十四里二百步、出雲郡伊農郷坐、赤衾伊農意保須美比古佐和氣能命之后、天甕津日女命、國巡行坐時、至坐此處而詔、伊農波夜詔、故云伊努、神龜三年、改字伊農、

〔出雲風土記楯縫郡〕佐香郷、郡家正東四里一百六十步、佐香河内百八十神等集坐、御厨立給而、令釀酒給之、卽百八十日喜讌解散坐、故云佐香、

楯縫郷、卽屬郡家、說名如郡、○中略

玖潭郷、郡家正西五里二百步、所造天下大神命、天御飯田之御倉將造給並處、○並處誤倒覓巡行給、爾時波夜佐雨久多美乃山詔給之、故云忽美、神龜三年改字玖潭、

沼田郷、郡家正西八里六十步、宇乃治比古命以爾多水而、御乾飯爾多爾食坐詔而、爾多負給之、然則可謂爾多郷、而爾、○爾原作與、一本改、今人猶云努多耳、神龜三年、改字沼田、

〔出雲風土記出雲郡〕健部郷、郡家正東一十二里二百廿四步、先所以號宇夜里者、宇夜都弁命、其山峯天降坐之、卽彼神之社、主○主當作至今猶坐此處、故云宇夜里、而後改所以號健部之、○之當作者纒向檜代宮御宇天皇、○景行勅不忘朕御子倭健命之御名、健部定給、爾時神門臣古禰健部定給、卽健部臣等、自古至今猶居此處、故云健部、

漆沼郷、郡家正東五里二百七十步、神魂命御子、天津枳値可美高日子命御名、又云薦枕志都沼値之、此神郷中坐、故云志司沼、○司當作豆神龜三年、改字漆沼、卽有正倉、

河内郷、郡家正南一十三里一百步、斐伊大河此郷中北流、故云河内、○中略

出雲郷、卽屬郡家、說名如郡、

杵築郷、郡家西北廿八里六十步、八束水臣津野命之國引給之後、所造天下大神之宮將奉、而諸皇神

追猪犬像、長一丈、高四尺、周一丈九尺、其形爲石、无異猪犬、至今猶在、故云宍道、

〔出雲風土記島根郡〕朝酌鄕、郡家正南一十里八十四步、熊野大神命詔、朝御饌勘養、夕御饌勘養、五贄組之處定給、故云朝酌、

山口鄕、郡家正南四里二百九十八步、須佐能烏命御子、都留支日子命詔、吾敷坐山口處在詔而、故山口負給、

手染鄕、郡家正東一十里二百六十四步、所造天下大神命詔、此國者丁寧所造國在詔而、故丁寧負給而、今人猶誤、謂手染鄕之耳、卽在正倉、

美保鄕、郡家正東廿七里一百六十四步、所造天下大神命、娶高志國坐神、意支都久辰爲命子、奴奈宜置○置恐衍波比賣命、而令産神、御穗須〻美命、是神坐矣、故云美保、

方結鄕、郡家正東二十里八十步、須佐能烏命御子、國忍別命詔、吾敷坐地者、國形宜者、故云方結、

加賀鄕、郡家北西二十四里一百六十步、佐太大神所坐也、御祖神魂命御子、支佐加比比賣命、闇岩屋哉詔、金弓以射時、光加加明也、故云加〻、

生馬鄕、郡家西北一十六里二百九步、神魂命御子、八尋鉾長依日子命詔、吾御子平明不憤詔、故云生馬、

法吉鄕、郡家正西一十四里二百卅步、神魂命御子宇武賀比比賣命、法吉鳥化而飛度、靜坐此處、故云法吉、

〔出雲風土記秋鹿郡〕惠曇鄕、郡家東北九里卅步、須佐能乎命御子、磐坂日子命、國巡行坐時、至坐此處而詔、此處者國稚美好、有國形如畫鞆哉、吾之宮者是處造事者詔、故云惠伴、神龜三年、改字惠曇、

多太鄕、郡家西北五里一百廿步、須佐能乎命御子、衝杵等乎而○而恐衍留比古命、國巡行坐時、至坐此處而詔、吾御心照明正眞成、吾者此處靜將坐詔而靜坐、故云多太、

仁多郡　三處　布勢　漆仁　三澤　阿位　横山（山、出雲風土記作田、）
大原郡　神原　屋裏　潮海　佐世　阿用　來次　斐甲（甲、出雲風土記作伊、）　大原（高山寺本、大原次有屋代二字、）
〔出雲風土記意宇郡〕母理郷、郡家東南卅九里一百九十步、所造天下大神大穴持命、越八國平賜而還坐時、來坐長江山而詔、我造坐而命國者、皇御孫命平世所知依奉、但八雲立出雲國者、我靜坐國、靑垣山廻賜而、玉珍置賜而守詔、故云文理、（神龜三年、改字母理、）
屋代郷、郡家正東卅九里一百二十步、天乃夫比命御伴天降來社、伊支等之遠祖天津日子命詔、吾靜將坐志（○志、恐衍）社詔、故云社、（神龜三年、改字屋代、）
楯縫郷、郡家東南卅二里一百八十步、布都怒志命之天石楯縫直給之、故云楯縫、
安來郷、郡家東南二十七里一百八十步、神須佐乃烏命、天壁立廻坐之、爾時來坐此處而詔、吾御心者安平成詔、故云安來也、（○中略）
山國郷、郡家東南卅二里二百卅步、布都努志命之國廻坐時、來坐此處而詔、是土者不止欲見詔、故云山國也、卽有正倉、
飯梨郷、郡家東南卅二里、大國魂命天降坐時、當此處而御膳食給、故云飯成、（神龜三年、改字飯梨、）
舍人郷、郡家正東廿六里、志貴島宮御宇天皇（○欽明）御世、倉舍人君等之祖、日置臣志毘、大舍人供奉之、卽是志毘之所居、故云舍人、卽有正倉、
大草郷、郡家南西二里一百廿步、須佐乃乎命御子、靑幡佐久佐日古命坐、故云大草、
山代郷、郡家西北三里一百廿步、所造天下大神、大穴持命御子山代日子命坐、故云山代也、卽有正倉
拜志郷、郡家正西廿一里二百一十步、所造天下大神命、將平越八國爲而幸時、此處樹林茂盛、爾時詔、吾御心之波夜志詔、故云林、（神龜三年、改字拜志、）卽有正倉、
宍道郷、郡家正西卅七里、所造天下大神命之追給猪像、南山有二、（一長二丈七尺、高一丈、周五丈七尺、一長二丈五尺、高八尺、周四丈一尺、）

大原郡

〔三代實錄 九 清和〕貞觀六年十月甲寅朔、是日復出雲國仁多飯石兩郡百姓課役二年、以不宜農蠶也、

〔出雲風土記〕大原郡

所以號大原者、郡家正西一十里百一十六步、田一十町許平原、(○原下、一本有故字、)號曰大原、往古之時、此處有郡家、今猶追舊號大原、(今有郡家處、號云斐伊村、)

〔出雲風土記抄 四 大原郡〕大原郡家者謂斐伊村(○中略)今考、自斐伊郡家正西今之一里廿五町餘、飯石郡三刀屋鄕殿河內村當焉、今此所無平原、且他郡所謂大原、意不可郡家正西、却一里五町正東、當仁和寺與前原之間耶、此處平野曠然、樹林蓊鬱、蓋是可爲古之大原、然卽西宇東之島焉必矣、又此原震者大東下分村、兌者大西村、離前原、坎仁和寺村、此側有遠所村、有幡屋村、

〔三代實錄 六 清和〕貞觀四年二月十六日乙卯、出雲國出雲大原兩郡、去年風水殞稼、多被損傷、詔復課役一年、

鄕

〔倭名類聚抄 八 出雲國〕能義郡　舍代(○代、高山寺本作人、)　安來　楯縫　口縫　屋代　山國(○山、高山寺本作母、)　母理　野城　賀茂　神戶

意宇郡　宍道　來待　拜志　神戶　忌部　山伐(○伐、高山寺本作代、)　大草　筑陽

島根郡　朝酌　山口　千染(○千、出雲風土記作手、)　美保　方結　賀知　多久　生馬　法吉　千酌

秋鹿郡　惠曇　多太　大野　伊農

楯縫郡　佐香　楯縫　玖澤(○澤、出雲風土記作潭、)　沼田

出雲郡　建部　漆沼　河內　出雲　許筑(○許、高山寺本作杵、)　伊勢　美談　宇賀

神門郡　朝山　日置　鹽沼(○沼、出雲風土記作治、)　商岸(○商、高山寺本作高、)　南佐　多伏(○伏、出雲風土記作伎、)　伊秩　狹結　古志　渦狹(○渦、高山寺本作塌、)　八野

飯石郡　能石　三屋　草原　飯石　多禰　田井　須佐　波多　來島

雲の字を吳音にいへばをう也、出の字をつむるひゞきにて、をうをとうと云なれば出をう郡といひしを、俗の丁備に、雲の字にとうの聲なしとおもひて、東の字に改め書たる成べし、

○按ズルニ、出東郡ハ、中世私ニ出雲郡ヲ東西ニ分チタルトキノ稱ナラン、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年七月壬寅、出雲國司言、構𢖍出雲二郡、雷雨異常、山岳頽崩、壞廬舍、埋田畝、

神門郡

〔出雲風土記〕神門郡

所以號神門者、神門臣伊賀曾然之時、神門貢之、故云神門、卽神門臣等、自古至今、常居此處、故云神門、

〔出雲風土記抄三神門郡〕有古志川東側舊塚、俗呼號神門塚、蓋昔在神門臣等葬埋之地乎、往々而今有神門氏者、往古神門等之裔孫乎、或土民、或巧匠等也、

〔日本書紀二十二推古〕二十五年六月、出雲國言、於神戶郡、有瓜大如缶、

飯石郡

〔出雲風土記〕飯石郡

所以號飯石者、飯石鄕中、伊毘志都幣命坐、故云飯石、

〔懷橘談下飯石郡〕今の俗說に云ふ、飯石とは託和と云ふ所に、飯を堆く盛たるやうの岩あり、故に郡の名とすといへり、託和の社說にみえたり、

〔出雲風土記抄四飯石郡〕此郡家者、多根鄕掛谷村中、今呼曰郡之處是也、從此郡中方隔相應矣、

〔文德實錄三〕仁壽元年十二月壬子、遣使者、〇中略賜出雲國飯石仁多兩郡百姓復一年、

仁多郡

〔出雲風土記〕仁多郡

所以號仁多者、所造天下大神大穴持命詔、此國者非大非小、川上者木穗刺加布、川下者阿志波布這度之、是者爾多志枳小國在詔、故云爾多、

〔出雲風土記抄四仁多郡〕爾所以號仁多者、由有詔爾多志枳小國也、今見有橫田鄕竹埼村田嶋之中曰小國之處、呼餘玄古書名、誠以異乎哉、

島根郡

〔出雲風土記〕島根郡

所ニ以號一島根一者、國引坐八束水臣津野命之〇之下有ニ脫文一詔而負ニ給名一、故云ニ島根一、

〔出雲風土記抄二島根郡〕以ニ郡中諸方所一レ經之路程方隅上而今稽ニ考之一、此郡家者、今本庄新庄兩村中路正當矣、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年八月癸卯、出雲國島根郡人外從六位上神掃石公文麻呂〇中略賜ニ姓大神掃石朝臣一、

秋鹿郡

〔出雲風土記〕秋鹿郡

所ニ以號一秋鹿一者、郡家正北秋鹿日女命坐、故云ニ秋鹿一矣、

〔出雲風土記抄二秋鹿郡〕按此記之趣、秋鹿日女二所明神祠則在ニ于秋鹿村一、蓋當ニ此社南地一爲ニ右之郡家一耶、從ニ此以東十七八町許、乃長江洲渚、今猶呼曰ニ郡埼一、意郡家隣、且長江亦秋鹿一村也、

楯縫郡

〔出雲風土記〕楯縫郡

所ニ以號一楯縫一者、神魂命詔、五十足天日栖宮之縱橫御量、千尋栲繩持而、百結ニ八十結ニ下而、此天御量持而、所レ造ニ天下一大神之宮造奉詔而、御子天御鳥命楯部爲而、天降下給之、爾時退下來坐而、大神宮御裝束楯造始給所是也、仍至レ今楯桙造而、奉ニ於皇神等一、故云ニ楯縫一、

出雲郡

〔出雲風土記〕出雲郡

所ニ以號一出雲一者、說名如ニ國也、

〔懷橘談下出雲郡〕郡を出雲と名付る故に、風土記にも說名國のごとしと書たり、然れば今の俗、出東と書、國の東にもあらず誤りなるべし、又ゑゆつをうといふは、いかなる故にや、出雲郡といへば國の名にまぎる丶ゆゑに、音にてゑゆつをうといふなるべし、雲は音うん、漢音には音つむ、呉音には聲をう、我國まづ呉國へ通じたれば、今に至るまで國人の言葉、多くは呉音也、故に

而、三自之綱打挂而、霜黒葛闇ニ耶ニ爾、河船之毛ニ曾ニ呂ニ爾、國ニ來ニ引來縫國者、自手波〇波恐誤縫之打絶而、闇見之國是也、亦高志之都ニ之三埼矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胸鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須ニ支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黒葛闇ニ耶ニ爾、河船之毛ニ曾ニ呂ニ爾、國ニ來ニ引來縫國者、三穗之埼也、持引綱者、夜見島是也、固堅立加志者、有伯耆國大神岳是也、今者國引訖詔而、意宇杜爾御杖衝立而、意惠登詔、故云意宇、所謂意宇杜者、郡家東北邊田中在塾是也、圍八步許、其上有木以茂、

〔出雲風土要抄 一 意宇郡〕按、意宇郡乃出雲村、今爲魚簗之處是也、志羅記之三埼、又高志之都ニ三埼蓋島根郡三保埼也、去豆乃打絶楯縫郡今古津浦也、八穗米支豆支乃御埼、大社邊也、雲石兩國堺佐比賣山、今三瓶山是也、園長濱、神門郡今園村海濱也、今有妙見社乃敷神門郡、曰水海與大海之間有山、長二十二里二百三十四步、廣三里、此者意美豆努命之國引坐時之綱矣今俗人號云園松山云々、北門佐伎國、今神門郡鷺浦也、多久打絶、島根郡今講武村、中世曰國屬寺村、上多久下多久乃是也、挾田之國、蓋秋鹿郡佐太大明神所座處也、北門良波國、蓋島根郡野浪浦也、闇見國、同郡今新庄村久良谷邊也、夜見島、伯耆國弓濱、火神岳、是亦指同國大山也、

〔出雲風土記解 上 意宇郡〕北門は新羅をさすか、出雲國の北には、新羅當懐につゞきて東北蝦夷流國有ときけば、廣く北門といへる成べし、〇中略佐伎は埼なり、又新羅の地名か、〇中略狹田國は秋鹿郡なり、佐太社、佐太川、佐田海等あり、

〔日本書紀 二十六 齊明〕五年、是歳、命出雲國造、修嚴神之宮、狐嚙斷於友郡役丁所執葛末而去、

〔續日本紀 一 文武〕二年三月己巳、詔筑前國宗形、出雲國意宇二郡司、並聽連任三等已上親、

能義郡

〔懷橘談 上 意宇郡〕能儀郡、或は能美に作る、風土記に能儀郡見えず、思ふに聖武天皇の御宇天平の後、意宇郡を割分て兩郡とせしか、まれる人に尋ぬべし、安來はむかし意宇郡に見えたり、今は能儀郡に屬し侍れば、後世二郡とせし事著明なり、意宇の社あれば郡の名とせり、

		神戸 記		
大原（オホハラ）	仁多（ニタ）	神門（カムト）	飯石（イヒシ）	管十
同 於保波良	同 爾以多	同 加無止	同 伊比之	同
同	同	同	同	十郡
同 知元	仁多 知元　仁田 圖	同 知元圖	同 知元圖	
同（サホハラ）	仁多（ニタ）	同（カンド）	同（イヽシ）	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同（オホハラ）	同（ニタ）	同（カンド）	同（イヒシ）	同
同	同	同	同	同

意宇郡

〔出雲風土記 上〕意宇郡

所以號意宇者、國引坐八束水臣津野命詔、八雲立出雲國者、狹布之稚國在哉、初國小所作、故將作縫詔而、栲衾志羅紀乃三埼矣、國之餘ニ有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須ニ支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黒葛闇一〇闇原作聞、據一本改、下同、ニ耶ニ爾、河船之毛ニ曾ニ呂ニ爾、國ニ來ニ引來縫國者、自去豆乃打絶而、八穗米〇米恐衛誤支豆支乃御埼也、此而堅立加志者、石見國與出雲國之堺有、名佐比賣山是也、亦持引綱者、薗之長濱是也、亦北門佐伎之國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須ニ支穗振別而、三自之綱打挂而、霜黒葛闇ニ耶ニ爾、河船之毛ニ曾ニ呂ニ爾、國ニ來ニ引來縫國者、自多久乃打絶而、狹田之國是也、亦北門良波乃國矣、國之餘有耶見者、國之餘有詔而、童女胷鉏所取而、大魚之支太衝別而、波多須ニ支穗振別

神門(カムト)〈鈴見 ●山口 ●今市 石見界小郡 ●奥田儀〉
仁多(ニイタ) ●亀田 ●横川上 ●呉谷原 備後界
飯石(イヒシ) ●大津 〈須賀 ●上熊谷 ●赤穴 備後石見界
大原(オホハラ) ●頓[illegible] 國中小郡

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引タ所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〈郡名異同一覽〉出雲

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	節書	郡名考	天保鄉帳	明治初年帳	地誌提要	郡區編制
		島根(シマネ)	同	同	同	同	同	同	同	同
		能義(ノギ)	同	同	能義 能儀	能義(ノギ)	同	同	同	同
淤宇	飫宇	意宇(オウ)	同	同	同	同	同	同	同	同
		秋鹿(アイカ)	同	同	同	同	同	同	同	同
		楯縫(タテヌイ)	同	同	同	同	同	同	同	同
		出雲(イヅモ)	同	同	出雲 出東	出雲	同	同	同	同

國府　郡

ヲ更置ス、

〔先代舊事本紀國造十〕出雲國造

瑞籬朝、御世、○崇神以天穗日命十一世孫宇迦都久怒、定賜國造、

〔續日本紀元明四〕和銅元年三月丙午、正五位下忌部宿禰子首爲出雲守、

〔倭名類聚抄國郡五〕出雲國國府在意宇郡、行程上十五日、下九日、

〔倭名類聚抄國郡五〕出雲國○略管十○略註意宇於字能義乃木島根之末秋鹿安伊加楯縫多天奴比出雲神門加無止飯石伊比之仁多仁多以大原於保波良

〔延喜式民部二十二〕出雲國上、管意宇能義島根秋鹿楯縫出雲神門飯石仁多大原右爲中國

〔易林本節用集下〕出雲、雲州上、管十郡、○中略意宇府、能美、島根、秋鹿、楯縫、出雲、神門、飯石、仁多、大原、

〔出雲風土記〕玖郡、郷陸拾壹、里一百七十九、○中略

意宇郡、郷壹拾壹、里卅三、餘戸壹、驛家參、神戸參、里六、

島根郡、郷捌、里廿五、餘戸壹、驛家壹、

秋鹿郡、郷肆、里十二、神戸壹、里一、

楯縫郡、郷肆、里十二、餘戸壹、神戸壹、里二、

出雲郡、郷捌、里廿三、神戸壹、里二、

神門郡、郷捌、里廿二、餘戸壹、驛家貳、神戸壹、里一、

飯石郡、郷肆、里十九、

仁多郡、郷肆、里十二、

大原郡、郷捌、里廿四、

〔出雲風土記解意宇郡上〕此記は九郡なるを、後に能義郡を置て、延喜式以後は十郡也、

〔皇國郡名志〕出雲國十郡

意宇　●三日市　〈湯町　●伊井川　湖水ヨリ入江ニ屬ス

島根　松江　●美津　●三保關　東北ノ出崎

楯縫　●平田　●十六島　右ニ並郡

能義　〈廣瀬　〈母里　入杉　伯界

秋鹿　●鹽津　●佐田　北海ト湖ノ間楯縫ニ並小郡

出雲　●杵築　●宇龍　△大社　△日御崎社　●米[illegible]　△弁慶古跡鰐淵寺　四北海ニ出張ル

〔日本國郡沿革考三山陰道〕出雲　上國管十郡、五百四村、

島根五十一村出雲小補記云、島根山開、被分ニ島根、楯縫、秋鹿、三郡、　秋鹿二十村　楯縫二十三村　出雲十九村　神門八十五村　飯石六十一村　仁多七十二村　大原五十八村　能義七十七村　意宇三十八村齊明紀作於友、萬葉集飫海、郡是、古府治、御國高國輔作ニ意多、疑寫誤、

〔日本地誌提要四十八出雲〕沿革　古ヘ國府ヲ意宇郡ニ置、今ノ下出雲郷町　建久中、源頼朝、佐々木義清ヲ以テ守護トシ、子孫職ヲ襲ギ、世神門郡鹽冶郷ニ居ル、其孫頼泰始テ鹽冶氏ト稱ス、建武中興、頼泰ノ孫高貞、守護ヲ襲グ故ノ如シ、後叛シテ足利尊氏ニ屬ス、延元三年、讒ニ罹テ自殺シ鹽冶氏亡ブ、義清ヨリ五世　尊氏、佐々木高氏ヲシテ守護ヲ兼シム、正平中、山名時氏、高氏ニ憾アリ、終ニ其地ヲ掠奪シテ吉野ニ歸順シ、復畔テ足利義詮ニ降リ、因テ守護ヲ領シ、傳ヘテ孫滿幸ニ至リ、元中ノ末、罪アリテ守護ヲ奪ハレ、尋テ誅死ス、將軍義滿、再ビ高氏ノ孫高詮ヲシテ之ヲ兼領セシメ、孫持清ニ至リ、從父尼子持久ヲ守護代トナシ、富田能義郡廣瀬ノ南ニ城址アリニ鎭セシム、其孫經久ニ至リ職ヲ褫メ、鹽冶掃部之ニ代ル、文明十七年、經久兵ヲ擧ゲ、鹽冶ヲ逐テ富田ニ據リ、自立シテ守護ト稱シ、終ニ伯耆隱岐ヲ併セ、石見、備中、備後、安藝ヲ蠶食ス、孫晴久、毛利元就ト石見ヲ爭ヒ、兵連テ解セズ、永祿三年、元就大擧シテ富田ヲ攻ム、五年、晴久卒シテ子義久嗣ギ、僅ニ富田一城ヲ保ツ、九年、義久出テ降リ、尼子氏亡ビ三世凡八十二年　其地皆毛利氏ニ歸ス、天正十九年、豐臣氏、元就ノ孫輝元ニ命ジテ半州ヲ割キ、吉川廣家ニ畀ヘ、富田城ニ居ル、關原役畢リ、德川氏本州ヲ削奪シ、廣家徙テ周防雲國居ル　ニ堀尾吉晴ヲ封ジ、松江ニ治ス、島根郡末次、意宇郡白潟ヲ改稱ス、寛永十一年、孫忠晴卒シ、子ナクシテ國除シ、明年、京極忠高代リテ封ゼラレ、十四年、亦嗣ナクシテ封絕エ、十五年、松平直政ヲ封ジ、世襲、其支封ヲ廣瀬直政第二子近隆　母里直政第三子隆政　トナス、凡三藩、王政革新、改テ縣トナシ、尋テ合併シ、島根縣

宿驛

五度三十三分半、五里二十二町五十八間（至二屋輔九町四十一里二十七間半）下宇部尾村釣瓶　三里二十九町七間（至二手角村一十九町四十六間）大海崎村　二里二十五町三十四間半　西川津村（沿二小川一至二洲崎一十一町、又至二新田洲崎一七町一十二間、又從二西川津一沿川至二津田村一三十二町六間半）一里一十四町一十二間半　松江末次本町　一里一十九町一十四間半（至二八軒屋町一町三十二間半、從二八軒屋町一至二白潟魚町一二町一十六間、從二魚町一至二天神橋一一町二十八間半）意宇郡山代村矢田、三里一十三町二十九間半　能義郡荒島村　二里一十六町五十二間半　安來村　二里五十七間（至二十神山一一十町一間半、從二十神山一至二東濱一一十五町四十六間、從二東濱一至二畑一六町二十十九間、從二畑一至二永代山一一十町二十二間、十三町八間半、從二東濱一至二アイロ峠一三十二町一十三間）黑島村（至二東濱一四町二間）二里二十三町四十八間（至二長尻峠一、至二東濱一二）門生村　一里四町五十三間半（至二國界一二十三町四十九間）伯耆國會見郡米子

紙國前

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬（○中略）

出雲國驛馬（野城、黑田、宍道、狹結、多伎、千酌各五疋）

〔出雲風土記意宇郡〕野城驛、郡家正東二十里八十步、依二野城大神坐一、故云二野城一、

黑田驛、郡家同所、今郡家西北二里有二黑田村一、土體色黑、故云二黑田一、（舊此處有二是驛一、即號曰二黑田驛一、今郡家屬東、今猶追二舊黑田號一耳、）

宍道驛、郡家正西卅口里、（說名如郷）

〔出雲風土記島根郡〕千酌驛、郡家東北一十九里一百八十步、伊佐奈枳命御子、都久豆美命此處坐、（○坐一本作生）然則可謂二都久豆美一、而今人猶千酌號耳、

〔出雲風土記神門郡〕狹結驛、郡家同所、古志國佐與布云人來居之、故云二最邑一、（神龜三年、改二字狹結一也、其所以來居者、說如二古志郷一也、）

多岐驛、郡家西南一十九里、（說名、改字、如二多伎郷一也、）

〔東大寺正倉院文書三十三〕出雲國大税賑給歷名帳

[illegible]
出雲國天平十一年大税賑給歷名帳大初位下守目大嶽伊美吉神主

郡、至松江街道、通計七十一里一十二町五十六間、

〔太平記十三〕龍馬進奏事

其比佐々木塩冶判官高貞ガ許ヨリ、龍馬也トテ月毛ナル馬ノ三寸計ナルヲ引進ス、〇中略今朝ノ卯剋ニ出雲ノ富田ヲ立テ、酉剋ノ始ニ京著ス、其道已ニ七十六里、鞍ノ上閑ニシテ、徒ニ坐セルガ如シ、然共旋風面ヲ撲ニ不堪トゾ奏シケル、

〔日本實測録一出雲〕從赤間關沿海至鵜山〇本教賀中略

出雲國神門カンド郡板津村板津濱　一十町四十八間　板津村至佐志武神社、五町二十四間、　五町　同小川口沿川至街道、一十二町　二里一十二町四十二間　杵築宮内村濱至杵築大土地町、三町五十一間　一十四町四十五間半　同鷺見山至宇龍浦、徑測一里一十七町三間半　一里一十五町二十四間　日御碕至御碕明神社前、至宇龍浦、徑測九町八間半　二里一十七町四十間至宇龍浦一十四町四十七間半　鷺浦　二里二十六町四十九間　楯縫タテヌヒ郡十六ウップルヒ島浦御經島岬　三里八町一間半　小伊津浦　二里七町一十八間、秋鹿アイカ郡魚瀬鎌田浦、三十五度三十分半、　一里二十三町四十七間　江角浦至佐田川、至濱佐田村、二里五町五十六間　二里二十四町五十七間　島根郡水浦　二里二十三町三十五間　加賀浦濱至加賀浦會所、四町一十一間、三十五度卅三分半、　二里一十四町一十七間半　野波浦至瀬崎、徑測一十二町三十三間　一里二十二間　多古津至沖泊、徑測六町八間半　四里一町五十四間至沖泊至沖泊、二十三町二十九間、從沖泊至瀬崎二十九町三十三間、從瀬崎至笠浦船繋二十一町四十一間　北浦至手角村、徑測三十二町一間　一町一十間半　同稻積至東濱、徑測四町一十間　一里三十町四十二間至[illegible]東濱、二十三町二十間　片江浦至[illegible]各濱、徑測五町四十四間　二里三十三町四十七間半至稻各濱、一里一十二町二十二間半　七類浦總津至七類浦、徑測八町九間　六町四十七間　同[illegible]渡　二十六町三十九間半　七類浦金碕至崎一町一十一間、龜ダ崎鵜一十八町四十二間　一十四町三十二間半　七類浦、三十五度三十四分、　二十八町五十一間半　諸喰モロクヒ浦至沖ノトド四町一十六間半　二里二十二町至雲津浦、一十二町二十五間半　三保關佐井野濱至春各峠七町一間、從峠至三保關三町四十六間、又從峠至日和山三町五十二間、　一里八町三十二間至地藏崎二十四町二十間　三保關、三十

從備後國下御領歷吉舍及三次至大森〇中略

出雲國飯石郡赤名驛　一里二町三十一間至國界二十九丁五十八間　石見國邑智郡酒谷村〇中略

從備後國下加茂歷東城及正原至石塚〇中略

出雲國仁多郡上阿井村三十五度八分、二里三十二町四十五間至下阿井村二十四丁三十三間　原田村三澤町　三里二十一町五十四間　大原郡木次町八日市　一十七町五十七間　日井鄉村至斐伊神社三丁五十八間　一十二町三十六間半至日野川岸一十一丁三十三間　飯石郡給下村至三刀屋神社一十五丁九間　一里二十六町一十八間　神門郡上之鄉村日野川岸、至上之鄉村四丁一十五間宿所　三十五度二十分　一里二十八町　石塚村

從下加茂至石塚街道、通計四十二里一十六町五十一間半〇中略

從周防國小郡歷石見國至松江〇中略

出雲國神門郡口田儀村田儀町至多岐藤神社二十九丁三十間　一里一十六町一十間　多岐村至多岐藤神社四丁五十一間　一十四町一十八間　久村至國村神社二丁三十間　二十五町五十四間　大池村至彌久賀神社七丁一十二間　五町五十三間半　板津村板津濱　二十八町　神西村沖　一里六町四十五間　古志村至比布智神社九丁五十一間　六町三十九間　同古志町　一十一町四十二間　鹽冶村鹽冶町至神門寺五丁三十三間、從寺前至鹽冶神社一十丁三十三間、　二十町六間　今市村中村町　五町八間　同今市町、三十五度二十一分半、至山王社六丁　一十九町一間　石塚村日野川岸　五町一十八間　神立村至神代神社五丁三十三間　一里三町一十七間　出雲郡直江村直江町至御井神社一十四丁一十二間　一十六町一十五間半　庄原村上分　三十四町二十八間至庄原町二十丁二十七間　意宇郡伊志見村至伊甚神社六丁四十八間　一十七町三十三間　宍道村宍道町至宍道神社二十丁五十四間　一十八町三十間　白石村至佐爲高守神社一十九丁二十四間　二里九町五十間至林村島ヶ崎一里二十四丁四十七間　湯町村至玉造八幡社七丁九間、從社前至玉造湯神社一十四丁一十八間、　二十二町五十七間　布志名村至布自奈大穴持神社五丁三間　二十九町三十三間　乃木村至野城神社四丁一十八間　一十一町四十五間至松江分六丁五十四間　松江白潟才賀町從小

十一間　一十九町五十七間　柚屋町　一里一町四十八間　八幡村　二十八町三十三間　津田村東分（至雲田神社、六丁）　二十六町二十一間　松江白潟立町　四町五十九間半　同白潟才賀町　八町五十四間（至天神橋、二丁九間）　同八軒家町大橋南頭　一町三十二間半　島根郡松江末次本町　一町九間　同御子町、三十五度二十七分半、（從手野至松江）街道、通計五十四里一十二町五十九間、○中略

從出雲國門生驛廣瀬至松江

出雲國能義郡門生村　一十五町六間　同坪坂（至清水寺一十丁一十二間）　二十三町三十六間　野外村（至北安田村二十丁四十二間、從北安田至伯里八軒小路、二十五丁一十八間、北極高三十五度二十一分、又從北安田至田圓神社、九丁五十一間、）　二里二十二町二間（至石原村二十三丁八間、從石原至廣瀬臺町一十丁四十五間、）　廣瀬本町（至郡神志呂神社二丁二十七間）　六町三間　同清水町（至神日神社四丁三十三間）　二里三十一町三十間　意宇郡熊野村、（至熊野村宿所一十一町二十四間）　三十五度二十二分、（從宿所至熊野權現下宮四丁四十八間、從下宮至上宮、四丁四十七間、）　一里一十一町三十三間　吉村（至[illegible]門神社、四丁三間）　九町九間　大草村（至山代村眞名井神社、九丁二十一間）　四町一十八間　大庭村（至神魂神社、七丁一十二間、又至佐草村佐久佐神社、一十五丁五十七間、）　一里五町三十九間　古志原（至山代村一十三丁五十四間、從古志原至松江白潟二十四丁一十二間、）　松江白潟立町　（從門生至松江）街道、通計九里二十町五十六間、

從出雲國松江驛鰐淵寺及杵築至今市

出雲國島根郡松江末次本町　三十三町三十五間半　濱佐田村　四里二間半　楯縫郡國村　一里一十一町一間半　平田村　三十五度二十六分、（至島田一里七丁七間）　一里一十五町五十七間半　神門郡武志村（至石塚村二十一丁五十七間、又至遙堪村一十一丁三十三間半、）　一里一十六町三十九間　楯縫郡鰐淵寺、三十五度二十五分、　一里一十一町三十六間　神門郡遙堪村　一十四町四十七間半　入南村（至遙堪村阿須伎神社、一十丁一十八間）　二十八町三十九間　杵築矢野村（至大社四丁六間半）　四町九間　同宮内村越峠町（至大土地町二丁、北極高三十五度二十三分半、）　一里六町一十五間　松寄下村　一里一十町五間半（至天神村二十八丁五十四間）　今市村今市町　（從松江至今市）街道、通計一十四里一十八町四十八間、○中略

二百廿步、出雲郡家東邊、即入正西道也、總枉北道程九十九里一百一十步之中、隱岐道、一十七里一百八十步、
正西道、自十字街西一十二里、至野代橋、長六丈、廣一丈五尺、野代川又西七里、至玉作街、即分爲二道、一正西道、一正南道、
正南道、一十四里二百一十步、至郡南西堺、又南廿三里八十五步、至大原郡家、即分爲二道、一南西道、一東南道、
南西道、五十七步、至斐伊川、渡廿五步、渡船一、又南正廿九里一百八十步、至飯石郡家、又自郡家南八十里、至國南西堺、通備後國三次郡、總去國程一百六十六里二百五十七步也、
東南道自郡家去廿三里一百八十二步、至郡東南堺仁多郡比比理村、○仁以下七字、據出雲風土記補、正又東南一十六里二百四十六步、至仁多郡家比比理村、○比比理村四字恐衍分爲二道、一道東方卅八里一百廿一步、至仁多郡家、○仁多郡家四字恐衍國東南堺、通伯耆國日野郡、○國東南堺以下十一字、據訂正本補、又一道南方卅八里一百廿一步、備後國堺至遊託山、
正西道自玉作街西九里、至來待橋、長八丈、廣一丈三尺、來待川又西廿三里卅四步、至出雲郡家、又自郡家西二里六十步、至郡西堺出雲河、渡五十步、渡船一、又西七里廿五步、至神門郡家、即有河、渡廿五步、渡船一、自郡家西三十三里、至國西堺、通石見國安農郡、總者○者當作去國程一百六里卅四步、
自東堺去西廿里一百八十步、至野城驛、又西廿一里、至黑田驛、即分爲二道、一正西道、一渡隱岐國道也、隱岐道、去北卅四里一百三十步、至隱岐渡千酌驛、又正西道卅八里、至宍道驛、又西廿六里二百廿九步、至狹結驛、又西一十九里、至多岐驛、又西一十四里、至國西堺、

〔日本實測錄四街道〕從播磨國手野、歷津山及米子、至松江、○中略

出雲國能義郡門生カドフ村　一里二十町三十二間至黑島村一里三丁五十六間　安來東町、三十五度二十五分、　五町五十七間　安來村至野外村一里三丁五十一間　二里一町四十一間　意宇郡意東村又呼意東町　下分至筑陽神社五丁二

加茂島（既礒）　子島（既礒）　羽島（有椿、比佐木、多年木、蕨、薺頭蒿、）　鹽楯島（有蓼螺子、）

○按ズルニ、本書此外ニ各郡所屬ノ島嶼ヲ掲ゲタレドモ、今之ヲ省ク、

〔懐橘談 下〕十六島、此島を俗うつぷるひ島と云、十六善神影向の地なりとぞ、水底に氣味よろしき海草あり、三瓶山に雪ふり、此浦へ陰うつろふ時に、此海苔をとれば宜しと語る、世に是をうつぷるひのりといふ、古記に北海の雜物を注すといへど、十六島と云のりなし、此郡の海に在所の雜物は、海草、海松、紫菜、凝海菜とあれば、紫菜の類にや、予（○黒澤三右衞門）按するに、かの海底の海苔を取て、露打ふるひ〱日に乾しければ、うちふるひのりといふを、だみたる聲にて、うつふるひといひ、十六善神島海苔と文字に書ては、餘長々しき故に、善神を略して、かの俗言のうつふるひといふを、その儘文字によみならはしたりとみえたりと、いへば、人みな點頭しぬ、

地勢

〔出雲風土記〕國之大體、首震尾坤、東南山、西北屬海、東西一百卅七里一十九歩、南北一百八十三里一百九十三歩、（○此間有缺字）一百歩（○此下恐脱東南道三字）七十三里卅二歩

〔日本地誌提要 四十八出雲〕形勢　山嶺疊層、南方ニ亘リ、山陽ト背脊ヲ分チ、西石見ニ連ル、北方地勢狹長横出シ、東伯耆ニ對シテ海ヲ抱キ、西方湖ヲ挾ミ、松江湖海ノ中間ニアリ、市廛鱗次湖山映帶、山陰第一ノ勝地タリ、

道路

〔出雲國風土記〕自國東堺、去西廿里一百八十歩、至野城橋、長卅丈七尺、廣二丈六尺、（飯梨川）又西廿一里、至國廳意宇郡家北十字衢、即分爲二道、（一正西道、一枉北道、）枉北道、去北四里二百八十歩、至郡北堺朝酌渡、（渡八十歩、渡船一、）又北一十里一百卅歩、至島根郡家、自郡家去北一十七里一百八十歩、至隱岐渡千酌驛家濱、（渡船）又自郡家西一十五里八十歩、至郡西堺佐太橋、長三丈、廣一丈、（佐太川）又西方八里三百歩、至夜（○夜恐衍）秋鹿郡家、又自郡家西方一十五里一百歩、至郡西堺、又西方八里二百六十四歩、至楯縫郡家、又自郡家西方七里一百六十歩、至郡西堺、又西方一十里

出雲 松江 西二度三九分三七秒

山城 京 ○度○○分○○秒○中略

（出雲風土記解上）東は伯耆國堺手間剗を道のくちとし、西は石見國堺多枳々山の剗を道の後とす、○中略南は飯石郡來島郷赤穴村を限、西南の通路備後國三次郡横谷村へ通、

疆域

（日本地誌提要四十八出雲）疆域 東ハ伯耆西ハ石見南ハ備後北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾七里餘、南北凡壹拾五里、

島嶼

（日本實測錄九島嶼）出雲國神門郡 實測 權現島、周廻六町五十間、遠測 赤島 黑島日御崎 友島 經ケ島 平島 黑島鷺浦 柏島 鵜島

楯縫郡 遠測 ヲ島

秋鹿郡 遠測 三島 ハナクリ 辨天島 寺島 大島 松島 岩島 中ノ島

島根郡 實測 桂島、周廻一十三町五十九間、久島、周廻三町四十九間、築島、周廻二十六町、沖ノヲト島、從法田岬至北岬四町二十四間、辨天島、周廻四町三十一間、遠測 小島 猿渡島 島帽子島大蘆浦 辨天島大蘆浦 馬島 カヤ島 島帽子島加賀浦 黑島野波浦 大津島 ハナヲ島 松島 矢島 二ツ島 ハチ島 黑島千酌浦 辨天島千酌浦 白髮島七類浦 黑髮島 ハチス島 中島 黑島七類浦 立石島 ハ島 赤島 地ノイチメ島 沖ノイチメ島 高バ島 ワクワウ島 辨天島雲津浦 青島 ヒシヤコ島 竹島 黑島雲津浦 沖御前 地御前 辨天島三保關 鯨島 入道クリ 野島 鷲島島 島帽子島新庄村 辨天島別齣村

意宇郡 實測 大島、周廻五町五十一間、大根島、周廻二里三十町三十一間、江島、周廻二十一町一十六間、遠測 カンドリ島 續島 辨天島羽根尾 渡島 辨天島小曾井 長島 馬島

能義郡 遠測 龜島 マナイタ島 松島 カヤ島 佛岩

（出雲風土記意宇郡）粟島有椎、松、多年木、小竹、眞前葛、砥神島周三里一百八十歩、高六十丈、有椎、松、莘、薺頭蒿、都波、師太等草木也、

佐五

〔倭訓栞前編三〕いづも　國名の出雲はいづくもを約ればづなり、素戔嗚尊の出雲八重垣の神詠に起れり、その事出雲風土記に見えたり、

〔出雲風土記上〕所以號出雲者、八束水臣津野命詔、八雲立詔之故、云八雲立出雲、

〔古事記上〕故大神初作須賀宮之時、自其地雲立騰、爾作御歌、其歌曰、夜久毛多都、伊豆毛夜幣賀岐、都麻碁微爾、夜幣賀岐都久流、曾能夜幣賀岐袁、

〔古事記傳九〕伊豆毛は出雲にて、伊傳久毛の傳久を約て、豆となれるなり、○中略さて此御歌詞より起りて、國名を出雲と負り、さるからに八雲立と云言も、其枕詞となれるなり、風土記に、所以號出雲者、八束水臣津野命詔、八雲立詔之故、云八雲立出雲、また八束水臣津野命詔、八雲立出雲國者云々とあるは、臣津野命は此の御歌詞に因て、後に詔へるなり、須佐之男命の、八雲立出雲とよみ賜へる此國はと云意なり、よく〱文義を味ひて知べしさて臣津野命の如此詔へるによりて、遂に國名にはなれるなり、臣津野命は、須佐之男命の四世の御孫にて、次に出たり、また諸國の例に依に、郷名を取て郡名とし、郡名を國名とせるが多ければ、此國も、出雲郡出雲郷あれば、始は此郷より出たる國名なるべし、其は彼臣津野命の、八雲立出雲國者と詔へる、廣く一國を指てなれども、然言へりしは、出雲郡出雲郷のあたりにての事なりし故に、先其處の名に負るが、後に大名にもなれるなり、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

出雲松江末次本町極高三十五度二十七分半、經度西二度四十分、從東都同上(東海道)自西國街道、自下手野村、歴津山、二百二十二里一十二町四十間、

出雲三穗關、極高三十五度三十三分半、經度西二度二十五分、自東都同上自下手野村、歴津山、至松江港、二百三十四里三十二町三十二間

〔日本經緯度實測〕北極出地

出雲　杵築　三五度二三分三〇秒　松江　三五度二七分三〇秒

東西里差

風俗

〔人國記〕伯耆國

伯耆國之風俗、都而半實半虛ト可知也、三日善ヲ勤メテ三日惡ツ習ノ風儀也、譬バ貴キ人ニ交ル則ハ、其氣忽然ト而實ニ從、亦其人ヲ離レテ三日不親則ハ、本性ニ還而惡心ヲ發而、心之趣ク所ニ從テ、不道ナリト知リナガラ、而モ行ヒ不義ト見テモ是ニ與シ、一生迷闇ノ地ニ有テ、定ル心総ニ無之風俗也、サレバ今世下劣ノ言葉ニ、物之執行ニ進テ怠リ安キ者ヲ三日ソウト云事、是國ノ風儀ヨリ始ト也、知テ不勤而怠ルハ、大ニ勇氣ノ不足スルトコロナリ、

雜載

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒〇中略 伯耆國五十人〇中略

諸國器仗〇中略 伯耆國甲四領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔日本鹿子十二〕同國〇伯耆 中名所なしと名寄に見えたり、撿見すべしといへり、名所なきにや、

出雲國

出雲國ハ、イヅモノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ伯耆、西ハ石見、南ハ備後ニ界シ、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十七里、南北凡ソ十五里、此國ハ古ヘ國府ヲ意宇郡ニ置キ、意宇、能義、島根、秋鹿、楯縫、出雲、神門、飯石、仁多、大原ノ十郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、意宇、島根、秋鹿ノ三郡ヲ合セテ八束郡ト爲シ、楯縫、出雲、神門ノ三郡ヲ合セテ簸川郡ト爲シ、新ニ松江市ヲ設ケ、島根縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名所

〔倭名類聚抄五國郡〕出雲以豆毛

〔日本風土記一寄語島名〕出雲因字木

〔易林本節用集下〕出雲雲州 上管十郡、東西二日半、樹木瓜蓏相交、野菜土産多、鐵農器絹布多、大上國也、

人口

伯耆略○中 右廿九國、綾絹略○中

伯耆國行程上十三日、下七日、

絁白絹十疋、緋帛縹帛各廿五疋、橡帛十二疋三丈、皂帛廿疋、帛二百六十疋自餘輸絹綿鍬鐵、 庸白木韓櫃九合、自餘輸綿鍬、 中男作物紙、紅花、席、椎子、鮎皮、煮乾年魚、雜腊、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略○中

伯耆國廿種 獨活十二斤、藍漆四斤、牛膝五斤、白朮十斤、昌蒲、桑根、白皮各一斤、薺苨三斤、杜仲、伏苓、紫菀各二斤、石斛廿四斤、松蘿一斤、升麻九斤、榧子二石六斗、署預九升、呉茱萸三斗九升、蜀椒九升、硫黃七升、百合一斗一升、

〔延喜式內膳三十九〕年料○中 伯耆國楊梅薦一擔十籠、諸蕎根一擔十籠、

〔毛吹草三〕伯耆

鐵 熊膽 大山黑皮茸

〔和漢三才圖會伯耆七十八〕土產 鐵 銅 熊膽 革茸出於大山 鮑熨斗出於米子

〔官中秘策四〕伯耆國 六郡略○中

一人數拾四万七百拾九人 內壹(壹拾七萬)万五千三百六拾貳人男 六万五千三百五拾七人女

高拾九万四千四百拾六石餘 伯耆國

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年

皆私領一人數拾六万九千五百七拾人 內九万四百四拾貳人男 七万九千百貳拾八人女

弘化三丙午年諸國人數調略○中

皆私領一人數拾七万七千四百貳拾人 內九万千七百四拾貳人男 八万五千六百七拾八人女

高貳拾壹万七千九百九拾石餘 伯耆國

田數石高

（梅松論上）去程に御座船は、伯耆國奈。和。庄。野津鄕と云所に著給ふ、

（倭名類聚抄五國郡）伯耆國○中略註　管六　田八千百六十一町十段八十八步

（伊呂波字類抄波國郡）伯耆國　管六、（中略）本田八千六百六十步

（海東諸國記）伯耆州　郡六、水田八千八百三十町、

（拾芥抄中末本朝國郡）伯耆上　六郡（中略）田八千八百四十二町

（和漢三才圖會七十八伯耆）六郡　十三万千六百四十九石

（日本鹿子十一）伯耆國六郡、中々國、南北二日半、知行高十七万五千三十石、

（官中秘策四）伯耆國　六郡○中略

一石高拾九万四千四百拾六石餘

（吹塵錄五人口及國高）天保度御國高調○中略

伯耆國管私領　一高貳拾壹万七千九百九拾石八斗貳升貳合貳勺

出擧稻

（延喜式二十六主稅）諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

伯耆國正稅公廨各廿五万束、國分寺料三万束、藥分料一万束、文殊會料二千束、修理池溝料二万束、救急料八万束、俘囚料一万三千束、

（倭名類聚抄五國郡）伯耆國○中略註　管六（中略）本稻六十七萬二千束、雜稻十七萬二千束、

國產貢獻

（延喜式十五內藏）諸國年料供進○中略　櫑子（中略）伯耆（中略）土佐廿六箇國各四合

（延喜式二十三民部）年料別納租穀○中略　伯耆國四千六百斛斛○中略

年料別貢雜物○中略　伯耆國筆八十管、紙、麻七十八斤、○中略

諸國貢䋵番次○中略　伯耆國十一壺三口各大一升、八口各小一升、○中略　右十箇國爲第四番庚戌年

（延喜式二十四主計）伯耆○中略　右廿五國、中絲、○中略

〔地勢提要 二〕郡邑島嶼奇名

伯耆　久米郡國府村、下神村、會見郡、車尾村、勝田村、藤地村、汗入郡、御來屋村、八橋郡、下甲村、

〔和漢三才圖會 伯耆 七十八〕米子 東至江戸百八十三里、西至出雲松江、津上五里餘、南至美作津山三十三里、東至因幡鳥取二十三里、

〔安西軍策 四〕尾子勢所々合戰事

隱岐隱岐守清〇爲逆意ヲ企、米子町ヲ燒立レバ、〇下略

〔中村一氏記〕一慶長八年十一月十四日、伯耆國米子ニテ、一學村〇中略内膳頓直シノトキ、一學十四歲、

〔日本鹿子 十一〕伯耆國

米子之城　江戸ヨリ百八十三里　當國者往古毛利氏領之　城主之次第　加藤左近大夫貞泰 元和三年伊豫大洲ヱ所かへ　元和三年ヨリ　松平新太郎光政　寛永九年　松平相模守光仲 因州鳥取ヱ所かへ　當城主　同伯耆守綱清 綱清家臣預之 荒尾但馬

〔賀茂注進雜記 下 諸國〕同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國　可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事〇中略

伯耆國　星河庄　稻積庄〇中略

壽永三年四月廿四日　正四位下源朝臣御判

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年十一月六日丙辰、今日騎馬勇士在門前、警衛也、〇中略義盛〇和田郎從等濫取之、問子細之處、大舍人允藤原泰頼也、承鎌倉殿御上洛事、爲御迎參向、且爲愁申伯耆國長田庄得替事也、全不知御旅館之由陳謝之、

〔吾妻鏡 十八〕元久二年九月十九日壬寅、以伯耆國宇多河庄地頭職、被施入大原來迎院、云々、廣元朝臣奉行之、

汗入郡　會見郡　日野郡

家主女姉妹男女等一烟、改ニ本居ニ貫ニ附右京三條一坊一、

〔釋日本紀七述義〕伯耆國風土記曰、相見郡一之家、西北有ニ餘戸ニ里有ニ粟島一、少日子命蒔ニ粟、莠實離々、卽載ㇾ粟、彈渡ニ常世國一、故云ニ粟島一也、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月甲申、伯耆國會見郡荒廢田百廿町賜ニ有智子內親王一、

〔三代實錄五淸和〕貞觀三年六月九日壬子、伯耆國八橋、汗入、會見、日野四郡、去年九月遭ニ水災一、百姓被ㇾ損者多、詔復優二箇年、

郷

〔倭名類聚抄八伯耆國〕河村郡　笏賀　舍人　多駄　埴見〈○埴、高山寺本作ㇾ壇、〉　日下〈著佐加倍〉　河村　竹田　三朝

久米郡　八代　立縫〈○立、高山寺本作ㇾ楯、〉　山守〈○守高山寺本作ㇾ守〉　大鴨　小鴨　久米　勝部　神代　下神　上神

八橋郡　方見　由良〈○良、高山寺本作ㇾ見、〉　荒木　古布　八橋〈也八之〉　篦津

汗入郡　東積　汗入〈安世利〉　奈和　尺度　高住　新井

會見郡　日下　細見　美濃　安曇　巨勢　蚊屋　天萬　千太　會見　星川　鴨部　半生

日野郡　野上　葉侶　神戸　阿太　武庫　日野〈○高山寺本、武庫次有ニ布勢、野坂(乃左加)刑部、大坂、日置、勝部、十五字一〉

村里名邑

〔郡名一覽〕皆私領一伯耆國　〈伯州南北二日半〉　六郡　七百拾ヶ村

高拾九万四千四百拾六石五斗六升七合

)(●米子〈因州一万五千石〉　荒尾近江　)(○倉吉〈同上一万石〉　荒尾志摩

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕伯耆　六郡、七百五十四村、

皆私領高二十一万七千九百九十石八斗二升二合二勺八才

河村郡百四村　久米郡百十九村　八橋郡百七村　汗入郡七十四村　會見郡百七十三村

日野郡百七十七村

國府　郡

〔續日本紀 八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、〇中 出雲國守從五位下息長眞人臣足管伯耆石見二國、

〔太平記 十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事
諸軍勢ノ恩賞ハ、暫ク延引ストモ、先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可被行トテ、〇中略 名和伯耆守長年ニ因幡伯耆兩國ヲゾ被行ケル、

〔倭名類聚抄 五國郡〕伯耆國 國府在久米郡、行程上十三日、下七日、

〔倭名類聚抄 五國郡〕伯耆國 〇略 註管六 〇略 註河村 加波無良 久米 國府 八橋 夜波之 汗入 安世利 會見 安不美 日野 比乃

〔延喜式 二十二民部〕伯耆國 上管 河村 カハムラ 久米 クメ 八橋 ヤハシ 汗入 アセリ 會見 アフミ 日野 ヒノ 〇中略 右爲中國

〔易林本節用集 下〕伯耆 伯州 ハウキ 上、管六郡、〇中略 河村 カハムラ 久米 クメ 八橋 ヤハシ 汗入 アセリ 會見 アフミ 又美 日野 ヒノ

〔皇國郡名志〕伯耆國 六郡
河村 カハムラ ●穴鴨 ●吉原 ●泊 ●木地山 ●本泉 作因 ●長瀬 界東 海ニ 淘　久米 クメ ●湯關 ●倉吉町 ●吉川 作界ヨリ東海ニ貫
八橋 ヤハシ ●今西 ●八橋町 ●八橋野 ●赤碕 作界ヨリ海ニ貫 ●タ子　汗入 アセリ ●木宮 ●日原 ●逢坂 ●淀江 作界ヨリ北海ニ貫
會見 アフミ ●二部 米子 ●山市場 ●舟上 ●外江 雲界西北ノ海ニ出崎
日野 ヒノ ●生山町 ●谷掛 ●三平 ●多里 ●木谷 ●黒坂 作備中後雲ノ四國ニカヽル ●溝口 ●根雨 ●坂屋原

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕伯耆

六國史
古書
延喜式
倭名抄
拾芥抄
諸書
郡名考
天保郷帳
明治郷村帳
地誌提要
郡區編制

日野　百七十七村

〔日本地誌提要　四十七伯耆〕沿革　古ヘ國府ヲ久米郡ニ置ク〈今ノ國府村ナリ〉元弘三年、後醍醐天皇隱岐ヨリ本州ニ潛幸ス、州人名和長年、船上山ニ奉迎シ、勤王ノ師ヲ興ス、因テ州守ニ任ジ、守護ニ補ス、延元元年、長年京師ニ戰死シ、嗣顯興職ヲ襲ギ、尋テ征西將軍懷良親王ニ從テ西海ニ赴ク、興國元年、足利尊氏、山名時氏ヲ以テ守護トス、正平中、時氏吉野ニ歸順シテ、丹波、丹後、但馬、因幡、出雲、隱岐六州ヲ併セ、再ビ足利義詮ニ降リ、諸子ヲ分封シ、本州ヲ長子師義ニ與フ、師義卒シテ、其子氏之嗣ギ、河村郡松崎ニ治ス、元中七年、其弟滿幸之ヲ將軍義滿ニ讒シ、襲テ之ヲ走ラス、義滿因テ滿幸ヲ以テ守護トナス、滿幸尋テ誅セラレ、義滿、氏之ヲ復封シ、久米郡倉吉ニ居リ、子孫ニ傳フ、七世澄之ニ至リ、國勢日ニ衰ヘ、大永四年、尼子經久ニ滅サル、經久終ニ羽衣石〈○ニ河村郡村〉ノ南條宗勝、岩倉〈久米町〉ノ小鴨氏等ヲ逐ヒ、全州ヲ併ス、永祿中、毛利元就本州ヲ略定シ、宗勝等ヲ納レ、杉原盛重ヲ泉山ニ置キ、州內ヲ鎭セシム、天正八年、豐臣秀吉西伐シ、宗勝ノ子元續ヲ誘降ス、十年、元就ノ孫輝元、秀吉ト講和シテ、本州及備中ノ半ヲ割テ之ヲ納ル、明年、秀吉、元續元清兄弟ニ羽衣石、岩倉二城ヲ分チ與フ、十九年、秀吉本州ノ半ヲ吉川廣家ニ賜フ、關原役畢リ、德川氏、廣家及南條氏ノ封ヲ收メ、中村一忠ヲ全州ニ封ジ、米子城ニ治ス、慶長十四年、一忠卒シ、嗣ナクシテ國除ス、明年、加藤貞泰ヲ米子ニ〈六萬石〉、關一政ヲ黑坂ニ〈日野郡五萬石〉封ズ、元和中、貞泰大洲〈伊豫〉ニ轉ジ、一政卒ニ坐シテ封除シ、池田光政ニ全州ヲ賜フ、寬永九年、光政備前ニ徙リ、從弟光仲之ニ代リ世襲、王政革新、廢シテ鳥取縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀　十國造〕伯岐國造
志賀高穴穗朝〈○成務〉御世、牟邪志國造同祖兄多毛比命兒大八木足尼定賜國造、

〔續日本紀　四元明〕和銅二年十一月甲寅、從五位下金上元爲伯耆守、

宿驛

町一十五間　岡田村　一十四町一十二間　國府村至國分寺五丁四十二間　三里六町五十四間至國分寺村七丁三十六間　八橋郡上伊勢村　一里二十二町二十七間　赤崎村　一里二十八町三間　波田井村　一里四町三十二間　大山（ダイセン）至大山寺九丁一十五間　三里二町五十一間　會見郡尾高村至大神山神社三丁一十二間　一里二十七間　四日市村豐田日野川岸從福崎新村至豐田街道、通計五十六里一十三丁三十二間。○中略

從播磨國手野、歷津山及米子至松江。○中略

伯耆國日野郡板井原宿　一里三十五町三間　根雨宿　二里四町三十九間　二部宿　一里二十四町　溝口村　三里六町二十一間至馬場村二里六丁三十三間　會見郡四日市村豐田日野川岸　三町四十六間　車尾（クヅマ）村日野川岸　二十五町五十一間至米子傳勢町一十九丁　米子道笑町　一十九町四十二間　陰田村　二十七町九間至國界七丁一十五間　出雲國能美郡門生村

〔日本實測錄一沿海〕從赤間關沿海至物山。○本敎賀中略

伯耆國會見郡米子（アワイ）祇園前至陰田村一十町五十二間　一十六町一十一間　米子灘町至道笑町一十二町四十八間　二里一十町三十四間　葭津村至和田村徑渡一十九町三十七間　四里三十三町五十七間至境村二里二十六町五十五間　和田村　二里一十六町四十七間半　海池（カイチ）村沿日ノ川至車尾村二十七町　三里三十町五十間　汗入（アセリ）郡御來屋（ミクリヤ）村　四里四十五間半至甲川口二里二町四十七間半　八橋（ヤバセ）郡赤崎村、三十五度三十分半、五里一十七町三十一間至八橋二十七町四十二間半、從八橋至天神川口四里九町六間半　河村郡湊村又呼橋津濱、至湊村宿所五町四十七間半　三十五度二十九分半、三里二十一町至國界二里二十五町五十四間半　因幡國氣多郡蘆崎村

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬。○中略

伯耆國驛馬、笏賀、松原、清水、和奈、相見各五疋、傳馬、河村、久米、汗入、會見、八橋郡各五疋。

建置沿革

〔日本國郡沿革考三山陰道〕伯耆　古作伯岐。紀、國造　上國、管六郡、七百五十四村、

河村百四村　久米百十九村古府治　八橋百七村三代實錄作八幡郡、疑誤。　汗入七十四村　會見百七十三村伯耆風土記作相見。

位置

〔諸國名義考下〕伯耆

和名抄に伯耆（波々岐、國府在久米郡）名義考（得す。○中略）或書に引る風土記には、手摩乳足摩乳娘稲田姫、八頭之蛇欲呑之、故逃入山中、于時母遲來、姫曰母來云々、故號母來國、後改爲伯耆國云々ともあり、

〔地勢提要乾〕各國經緯度（附里程）

伯耆湊村橋津、極高三十五度二十九分半、經度西一度五十一分、從東都（御國上（東海道下野村歷下總久村辻堂村知須宿）自鳥取歷倉吉）二百一十二里一町四十一間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

伯耆　赤崎村　三五度三〇分三〇秒　　橋津村　三五度二九分三〇秒

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（○中略）　　伯耆　米子　西二度二一分〇〇秒

經緯

〔名所方角抄〕伯耆國（○中略）　備中の北也

〔日本地誌提要四十七伯耆〕疆域　東ハ因幡、西ハ出雲、南ハ備後備中美作、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾七里、南北凡八里、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕伯耆國河村郡　遠測　烏ケ島

地勢

〔爲林本節用集下〕伯耆（州的）上、管六郡、南北二日半、山深土厚、正穀衣帛二輪轉、中々國也、

〔日本地誌提要四十七伯耆〕形勢　大山中央ニ挺立シテ、支脈左右ニ蜿蜒シ州ノ西北一隅斗出シテ出雲ノ東隅ニ對シ、中海ヲ擁ス、西北平坦、稍沃饒ニ屬ス、

道路

〔日本實測錄四道路〕從播磨國龜崎新村歷知頭及鳥取至豐田（○中略）

伯耆國河村郡門前村　三里二十八町一七二間（至倉吉町三里二十四丁二十九間半）　久米郡倉吉横町（至上井手村二十七丁）　一十七

一十二間、（從上井手村至長瀬村、一里三十二丁二十二間半、又從上井手村至東郷羅漢一里六丁六間、從湯梨濱谷村至東郷羅漢、一十九丁二十四間、從濱谷至東郷羅漢五丁二十七間、）

古事類苑

地部二十四

伯耆國

伯耆國ハ、ハウキノクニト云ヒ、舊クハ、ハヽキノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ因幡西ハ出雲、南ハ備中、備後、美作ニ界シ、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十七里、南北凡ソ八里アリ、此國ハ、古ヘ國府ヲ久米郡ニ置キ、河村、久米、八橋、汗入、會見、日野ノ六郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、河村、久米、八橋ノ三郡ヲ併セテ東伯郡トシ、汗入、會見ノ二郡ヲ西伯郡トシ、鳥取縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕伯耆 波々岐

〔運歩色葉集 葉〕伯耆 ハウキ 伯州 ハクシウ

〔日本風土記 一寄語島名〕伯耆 花針

〔倭訓栞 中編二十波〕はゝき○中略 伯耆國のかなも同じ、和名抄に見えたり、古事記に伊邪那美命を葬於出雲國與伯耆國堺比婆之山と見えたれば、母君の國也といへり、或伯耆國に川村之郡波々伎神社あり、

〔古事記 上神代〕故其所神避之伊邪那美神者、葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也、

〔古事記傳 五〕伯伎は和名抄に伯耆 波々岐 神名帳に彼國川村郡に波々伎神社もあり、名義[illegible]らず、若箒より出たる由など有にや、或ハ此ハ伊邪那美ノ命の事によりて、母君國なるべしと云るはいかゞ、

一人數拾貳万五千八拾五人　内六万六千九百九人男五万八千百七拾六人女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略○中
曾私領一人數拾貳万八千六百四拾三人　高拾七万七百貳拾八石餘　因幡國
　内六万八千三百貳拾人男六万三百拾四人女

諸國人數調弘化三丙午年略○中
曾私領一人數拾貳万七千七百九拾七人　高拾七万七千八百四拾四石餘　因幡國
　内六万五千九百拾四人男六万千八百八拾三人女

風俗

〔人國記〕因幡國

因幡國ノ八上、地頭、邑美之三郡ハ、實ニ而シカモ勇有テ約ヲ不變形儀也、高草、氣多、法美、巨濃之郡之風儀ハ、如形佞ニテ邪智多フ而丹波ノ風俗ニ似タリ、武士ハ名利利欲ニカヽハリテ德之ツク方ニ從フ風俗也、一國之内ニ如斯風儀之替ル事、寔ニ天性自然ノ理トハ云ナガラ、氣質之裏ル所之正不正ニ因テ如斯成事可見也、

名所

〔日本鹿子十一〕同國略○因幡中名所之部

因幡山　美濃國ニ同名あり、當國現在稻葉の里といふあり、

器仗

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒略○中　因幡國五十人略○中

諸國器仗略○中　因幡國甲三領、横刀七口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月壬申、因幡伯耆隱岐三國、蝗損禾稼、

各四合

人口

〔延喜式 二十三民部〕年料舂米 ○中略 因幡國 大炊四百石 ○中略

年料別納租穀 ○中略 因幡國 二千五百斛 ○中略

年料別貢雜物 ○中略 因幡國 筆八十管、紙、麻七十斤 ○中略

諸國貢蘇番次 ○中略 因幡國十一壺 三口各大一升、八口各小一升 ○中略 右十箇國爲第四番 辰戌年 ○中略

交易雜物 ○中略 因幡國 絹二百疋、白絹十二疋、席三百五十枚、荒莒廿五合、鳩子四合、鮐皮八百廿五斤、醬大豆廿六石、隔三年進醬大豆五石、鹿皮十張、

〔延喜式 二十四主計〕因幡 ○中略 右廿五國中緣 ○中略

因幡 ○中略 右廿九國輸絹 ○中略

因幡國 行程上十二日、下六日、

調、白絹十疋、緋帛卅疋、縹帛黄帛各十疋、橡帛十二疋、皂帛十五疋、帛二百疋、自餘輸絹、庸、白木韓櫃八合、自餘輸綿、　中男作物、紙、席、紅花、胡麻油、黒葛、漆、海石榴油、平栗子、火乾年魚、鮐皮、雜腊、海藻、

〔延喜式 三十三大膳〕諸國貢進菓子 ○中略 因幡國 甘葛煎一斗、平栗子五斗、椎子一擔、栗子二擔、柑子干棗、

〔延喜式 三十七典藥〕諸國進年料雜藥 ○中略

因幡國廿種　前胡、伏苓、續斷、藍漆各二斤、獨活、白朮、當歸各十斤、牛膝二斤四兩、秦梁、香僕奈各一斤、草薢十斤四兩、槀本二斤一兩、木斛十三斤、栝樓七斤、桑螵蛸十斤四兩、榧子一石、署預四斗、桃人一斗、蜀椒四升、甘葛煎三升、白殭蠶二兩、

〔延喜式 三十九內膳〕年料 ○中略 因幡國 稚海藻十二籠、生鮭三捧十二隻三度、山薑一斗五升三度、

〔毛吹草 三〕因幡

蟯　稍木　木地山木地　海索麪 藻也　鯮白干　ツノ字　家奥相原　引田鼻紙　細川梅

〔官中秘策 四〕因幡國　七郡 ○中略

八幡檢校法印御房

(明德記下)濟寺名○山ハ因州。。。宿屋庄。○庄一本作城トト云所へ主從二十三騎ニテ著給ヒケルトカヤ、

藩封

(慶應元年武鑑)松平因幡守慶德 大廣間下 從四位上中將文久元酉十一月任　三拾二万五千石因幡伯耆領之　居城因州邑美郡鳥取江戸

〃〃陸百八十里、鳥取〃〃大坂海陸出舟路五十里、

輝元領、天正九、宮部善祥坊、慶長五、池田三左衛門尉輝政、同舍弟備中守長吉、同備中守長幸、元和三、松平新太郎光政、寬永九、松平相模守光仲、以後代々領之、

柳間　松平主稅　三万石　在所因州新田　江戸〃〃百八十里

柳間朝散大夫　松平內匠頭德風　一万五千石　在所因州新田　江戸〃〃百六十里○中略

田數石高

(倭名類聚抄五國郡)因幡國○中略　管七 田七千九百十四町八段二百八步

(海東諸國記)因幡州　郡七、水田八千一百二十六町、

(拾芥抄中末本國部)因幡上國 七郡(中略)田八千十六町

(日本鹿子十一)因幡國七郡中々國、南北二日、知行高十三万千六百四十石、

(官中秘策因)因幡國　七郡○中略

一石高拾七万貳拾八石餘

(吹塵錄五人口及國高)天保度御國高調○中略

因幡國 舊高舊領　一高拾七万七千八百四拾四石六斗三升四合

出擧稻

(延喜式主稅二十六)諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

因幡國正稅公廨各卅万束、國分寺料三万束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料四万二千八百七十八束、俘囚料六千束、

國產貢獻

(倭名類聚抄五國郡)因幡國○中略　管七(中略)正公各三十一萬束、本穎七十一萬八百七十束、雜穎十一萬八百七十八束、

(延喜式二十四主計)諸國年料供進○中略　交易絹○六百五十疋(中略)因幡(中略)上野七當國各五十疋○中略　鵝子(中略)因幡(中略)土佐廿六箇國

註

●鳥取　百八十里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕因幡　八郡、五百五十三村、

皆私領高十七万七千八百四十四石六斗二升四合

岩井郡五十村　法美郡六十村　八東郡八十八村　八上郡六十村

知頭郡九十八村　邑美郡三十五村　高草郡八十村　氣多郡八十二村

〔地勢提要 坤〕郡邑島嶼奇名

因幡　智頭郡、用瀬(モチガセ)、樟原村(クヌギハラ)、高草郡、古海村(フルミ)、氣多郡、末用村(スエモチ)、河村郡、布河村(フゥカワ)、田後村(タジリ)、岩井郡、陸上村(クカミ)、

〔安西軍策 五〕因州鳥取合戰事

同年〇天正二年九月二十二日、山中鹿助、〇中略三千五百餘騎、毛利入道淨意ガ籠タル鳥執ノ城ヘ押寄、天王ノ尾マデ追上ル、

〔豊鑑 一長濱眞砂〕秀吉〇中略其より因幡國にうち越、山名禪高のふまへし鳥取の城をかこまんとし給ふ、〇天正八年正月

〔東大寺要錄 六〕一諸國諸庄田地〇長德四年注文定

新發田〇中略

因幡國　高庭庄田十二町一段百八十六步

〔石淸水文書 一〕伏見天皇綸旨

當宮領因幡國宇治庄內、安元久元兩名事、如此事社家可相計之由、先々被仰下候歟、任道理可令成敗之旨、天氣所候也、仍執達如件、

永仁元年十二月廿三日　右大辨俊光

氣多郡

〔因幡誌九郡鄕〕氣多郡

一當郡ハ高草郡ノ西ニ雙ビテ、伯耆國ノ東ニ隣ヲナセリ、南ニ鷲峯山アリ、其西ノ谷ヲ河内ト云フ、土俗ニ鹿奴河内ト稱スル是ナリ、

〔續修東大寺正倉院文書四十五帙五〕雜物請用帳

四百八十五斤二兩一分一朱租交易（中略）○

二百卅二斤十四兩二分五朱、因幡國氣多郡封、（中略）○

六百八十屯（綿）○封調庸租交易

二百七十八屯、因幡國氣多郡調、（中略）○

百廿六斤、因幡國氣多郡租交易、（已上寶字三年料）

鄕

〔倭名類聚抄八因幡國〕巨濃郡　蒲生　大野　宇治　日野　風城（度木）　廣田

法美郡　大草（於保加也）　石井　高野　津井（都乃井）　稻羽（伊奈波）　服部（波止利）　廣西（比呂倍）

八上郡　若櫻　丹比　刑部　曰理　日部　私部　土師　大江　散岐　佐井　石田　曳田

知頭郡　美成　佐治　土師　日部　三田

邑美郡　美和　古市　品治　鳥取　邑美

高草郡　神戸　委文（之土利）　味野（安知乃）　古海（布留美）　能美　布勢　野坂（乃佐加）　刑部（於佐加倍）

氣多郡　大原　坂本　口沼（○口沼、高山寺本作日治、）　勝見　大坂　日置　勝部

〔今昔物語十七〕養造地藏佛師活人語第廿五

今昔、因幡ノ國高草ノ郡野坂ノ鄕ニ一ノ寺有リ、名ヲバ國隆寺ト云フ、

村里名邑

〔郡名一覽〕一因幡國（皆私領）　四州　南北二日　八郡

高拾七万七百貳拾八石貳斗八升九合　五百三拾五ケ村

智頭郡

〔因幡誌六郡郷〕智頭郡

一當郡ハ八東ノ西、八上ノ南ニ在テ、東南ハ美作國ニ隣レリ、其ノ西隅氣多郡ニツヾキテ、國中一二ノ大郡也、然レ共其地山深シテ平地少ナキ故、田租ノ高モ少シ、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月壬申、省因幡國八上郡莫男驛、智頭郡道俣驛馬各二匹、

邑美郡

〔因幡誌七郡郷〕邑美郡

一當郡ハ巨濃郡南西ニ隣リテ、其界摩尼山ヲ詰リトス、谷筋艮ヨリ坤ニ開ケテ、北ハ梵字坂ヲ界トス、其麓ニ覺寺村アリ、海邊ハ濱坂旁爾東濱ヲ域リトス、東南法美郡ノ美和郷越智谷ヲ域リテ、其以下長砂大路郷山吉方村アリ、東ハ鳥取郷小西谷ヲ域リトス、南ハ八上郡ニ接壤テ、其界ニ八坂國安村アリ、西ハ高草郡ニ並ビテ、千代川ヲ界トス、河上ハ國安流下ハ加露ノ港ニ至レリ、凡ソ數郡ニ挾レタル小キ郡ナリ、サレドモ鳥取山下三方打開ケテ、大半平地ニ屬シ、山川海陸ノ便リ最モヨシ、天正年中以降、鳥取郷ヲ國ノ本府トスルモ、天然ノ理ナルベシ、

高草郡

〔因幡誌八郡郷〕高草郡

一當郡ハ邑美郡ト千代川ヲ隔テ西ニアリ、其西ハ氣多郡ニツヾキ、南ハ八上郡ニ隣テ、北ハ加露湊ヲ域トス、郡中平地多キユヘ、田租ノ高モ國中第一ノ郡ナリ、

〔東大寺正倉院文書東南院雜櫃一〕因幡國司牒

東大寺三綱務所　墾田劵文壹紙部下高草郡田者

牒、得寺去三月十四日牒偁、得彼郡高草郡國造難磐之妻子解狀云、上件墾田永賣寺家、欲足損物者、三綱依解狀、檢領已訖、仍注事狀、便付廻使僧慶淨、以牒、

天平神護元年四月廿八日

大國師法師玄藏

法美郡

（因幡誌三郡）法美郡

一當郡ハ邑美ノ東ニ隣テ、其訪リハ但馬國二方郡ノ界ナル扇ケ山ヲ域トス、南ハ八上八東ニ並テ、北ハ巨濃郡ナリ、

（續日本後紀十八仁明）嘉祥元年七月甲申、因幡國法美郡无位宇倍神奉授從五位下、即預官社、以國府西有失火、隨風飛至、府舍將燒、國司祈請、登時風輟火滅、靈驗明白也、

八上郡

（因幡誌四郡）八上郡

一凡ソ當郡ハ一國ノ中央ニ在テ、數郡ノ中ニ狹マレタル郡ナリ、

（東大寺要錄入）勅旨　可有封庄事之中、

金光明寺宛食封一千戸　略○中

因幡國八上郡五十戸　略○中

奉今月廿一日勅偁、件封宛金光明寺、其收倖期更待後勅者

天平十九年九月廿六日

（續日本紀三十三光仁）寶龜五年二月壬辰、因幡國八上郡員外少領從八位上國造寶頭賜姓因幡國造、

八東郡

（因幡誌五郡）八東郡　東西八里、南北一里半

一當郡ハ元八上郡ヲ分タル郡ノ名ナリ、故ニ古書ニ載ル處、因幡國七郡ノ內八東ト云フ郡ナシ、八上ハ往昔國中ノ大郡ニテ十二郷ヲ統タリ、然ルニ中古是ヲ割テ二郡トス、倭名鈔所謂八上郡條下ニ、若櫻、丹比、刑部、日理、日下部、私部、土師、大江、散岐、佐井、石田、曳田、已上十二郷是ナリ、而シテ其東ノ方、若櫻以下私部以上ノ六郷ヲ八東郡トス、云意ハ八上ノ東郡ト云フ義ナリトゾ、又西ノ方土師以下六郷ハ、舊ノ名八上郡ト云ヘリ、是何レノ世ノ制度ニテ是ヲ分ケ侍リシニヤ、郡中ノ古刹新興寺ノ什物、安元三年ノ筆記ニ、八東川ト云フ文出タレバ、其比既ニ二郡タリシト見ユ、

巨濃郡
石井郡

高草	八上	八東	氣多	知頭	
高草(タカクサ)	八上(ヤカミ)		氣多(ケタ)	知頭(チツ)	書七
同(多加久佐)	同(夜加美)		同	同(知豆)	同
同	同	八東(刊本誤作二入東一)	同	同	入郡
高草 竹草(國用光)	同(國用光)	同(國用光)	同(國用光)	同(國用光)	
高草(タカクサ)	同(ヤカミ)	同(ハツトウ)	同(ケタ)	知頭(チツ)	同
同	同	同	同	智頭	同
同	同	同	同	同	同
同(タカクサ)	同(ヤガミ)	同(ハフトウ)	同(ケタ)	同(チヅ)	同
同	同	同	同	同	同

〔因幡誌二郡部〕巨濃郡今洲石。井。郡。

一書郡ハ一國ノ東ニ居テ、但馬國二方郡ニ隣レリ、南ハ法美ニ並ンデ、其界ニ十王嶺アリ、是大草郷雨龍谷ノ境ナリ、其以下宇倍山ノ峯通リヨリ榎嶺ニ至テ、鹽見谷ヲ境ニテ、海濱ハ湯山村ヲ域リテ、西ハ邑美郡ナリ、但馬國ノ界ハ、洗井鳥越ニ牛ケ峯アリ、蒲生ニ蒲生嶺、長谷ニ橋嶺、田ノ河内ニ鳥籠尾嶺、陸上ニ嵐嶺等、皆境ノ高山ニテ北ハ大洋ナリ、

〔三代實錄六清和〕貞觀四年七月廿八日乙未、因幡國巨濃郡人中宮大屬正六位上物部門起、貫附右京職、

ク、草ノミ生茂ケル故、高草郡ト云トイヘリ、サレド國號以前ノ書ニ高草ノ名記シアレバ、偶ニ附會ノ說トミヘタリ、證據用ニタラズ、但此郡ノ鄕名ドモ皆野ノ字ヲツケテ呼ベバ、サモアランカ、略〇

〔皇國郡名志〕因幡國 管七郡 今八郡

法美(ホフミ) ●サクラ谷 ●百谷 ●山根但界 ●上地
智頭(チヅ) ●駒歸 ●慶野 作界
高草(タカクサ) ●吉岡 ●加留 ●尾崎 ●伏里 國中ヨリ北海ニ向
八東(ヤトウ) ●福井 ●討來 ●安井 ●郡折 ●徳丸 但界 ●若櫻 ●吉川
八上(ヤカミ) ●河上 ●眞野 〈舟岡 ●水谷 〈八 ●鎌谷町 國中ヨリ ●袋原 作伯界ニ至ル
邑美(オウミ) 〔鳥取〕 ●安國 ●吉川 國中ヨリ北海ニ向
氣多(ケタ) ●田原 〔鹿野〕 ●シヤカタ 伯界 ●青屋 〈青屋町
岩井(イハイ) 〈湯町 ●細川 ●浦住 但界峯ニ向

舊有巨濃郡、今書之而加入東岩井二郡、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛宕郡條ニ引タル所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕因幡

六國史			
古書			
延喜式	巨濃(コノ)	法美(ハフミ)	邑美(オフミ)
倭名抄	同	同	同
拾芥抄	同 石井	法味	同
諸書	石井 岩井	法美	上美 邑美
郡名考	岩井(イハヰ)	同(ホフミ)	邑美(オウミ)
天保鄕帳	同	同	同
[illegible]	同	同	同
地誌提要	同(イハヰ)	同(ハフミ)	同(オフミ)
郡區編制	同	同	同

字ヲモ書チガヘ、古書ノ趣ニ違フコトヲホシ、巨濃郡ヲバ今岩井郡ト云、八上ノ一郡ヲ二郡トナシ、八上八東ト云、邑美郡ヲ上美郡ト云、巨濃郡ヲ岩井ト云ハ、郡ノ内本庄河崎邊ヲ岩井ノ庄トミヘタリ、其邊ニ岩井ノ水ト云所モアリ、古キ感状等ニモ、此邊ノ軍ニ岩井表ノ合戰トアリ、シカレバコノ邊ヲ岩井ト云コト紛ナシ、然ルニ近代イツノ程ニカ此郡ノ總名トシ、終ニ巨濃ノ名ヲバウシナヘリ、ソレニ近キ比ハ郡ノ内殊ニ湯村ヲサシテ岩井トノミ云ヤウニミヘタリ、誤ノ内ノ誤也、八上ヲ分二郡トナスコト昔ノ法トハミヘズ、イツノ比ヨリ分來ト云コト明ニ考ガタシ、郡ノ内新興寺ニツタハル古キ記文ノ内ニ八東川ト云コトアリ、シカレバソノ比ヨリ若櫻口ヲバ八東トハ云トミヘタリ、然ドモ郡ノ名トスルコト古書ニテ未ミズ、上美郡是ハ國民邊鄙ノ語音ニテアフミト云ベキヲワアミト云、ソノ語音ヲウケ、文字ニウツシ、如此カキ違ユルトミヘタリ、又拾芥抄ノ説ニ、因幡國近上七郡、法味府、邑美、八東、八上、知頭、高草、氣多、或本八郡、巨濃、石井、除八東、田八千十六町トアリ、和名抄ノ趣ニハ違タル事ヲヽシ、法美ヲ法味トシ、巨濃ヲバ不入、八東ヲ加タリ、八東ヲ八東ト書ルコト東字イカナルギ共會通シガタシ、八東トハ八上郡國中ニテ大ナル郡故二ツニ分、一郡ハ本名ヲ用、一郡ハ八上ノ東郡トノギニテ、カク名ルトミヘタリ、シカレバ東字必定東ノ字ノ誤書トミヘタリ、又或本ノ義ヲ擧八郡トシ、巨濃石井ヲ入、八東ヲ除ケリ、巨濃石井ハ一郡ナルヲ、二郡ノ如ク用入タルコト、大ナル差誤也、田ノ數モ和名抄トハ少不同アリ、此拾芥抄説錯亂謬妄信ズルニ足ズ、シカルニ寬文年江都政事府ヨリ當國郡名古代ノ誤ヲ正シ、岩井ヲ石井トシ、上美ヲ邑美トシ、八東ヲ八東トナスベキ由下知セラルルニヨリ、國中今是ヲ用ラル、考フルニ拾芥抄ノ説ヲ用ラルヽトミヘタリ、八東ノ字別有一義歟、雖心得事也、又當國ニテ土民ノ傳説ニ、高草郡昔ハ野方ノ郡ト云ケルニ、圓融院御宇松上神霊天台座主某當國ニ下リ現人神トナリ、松上山ニ栖、事々布祟ヲナサレシカバ、郡中ニ栖者ナ

國府

志賀高穴穗朝〈○成務〉御世、彦坐王兒彦多都彦命定賜國造、

(續日本紀十三聖武)天平十年八月乙亥、從五位下當麻眞人鏡麻呂爲因幡守、

(倭名類聚抄五國郡)因幡國〈國府在法美郡、行程上十一日、下六日、〉

(因幡民談二)因幡國郡鄉村里廣狹路程等事

一當國ノ府、古書ニ法美郡ニアリトアリ、今ソノ所ノコリ、國府トナヅケテ舊名傳レリ、ソノ所ハ曠平ニシテ、マコトニ昔ノ國衙ノ地トミヘ、國ノ一宮モ此所ニアリ、國分寺ノアトモ近邊ニアリ、在名ヲモ因幡ノ鄉ト云、コノ所ニ町屋ト云村モアリ、是昔ノ官市ノ跡ニテアル歟、丁ト云村アリ、廳ノ字ニテ上古政皇家ヨリ出シ時ノ官ノ廳ノ跡ナル歟、〈○下略〉

郡

(倭名類聚抄五國郡)因幡國〈○中略〉管七〈○中略〉巨濃〈古乃〉 法美〈波不美、國府、〉 八上〈夜加美〉 智頭〈知豆〉 邑美〈於不美〉 高草〈多加久佐〉 氣多

(延喜式二十二民部)因幡國、上、管 巨濃〈コノ〉 法美〈ハフミ〉 八上〈ヤカミ〉 智頭〈チヅ〉 邑美〈オフミ〉 高草〈タカクサ〉 氣多〈ケタ〉 右爲近國、

(拾芥抄中本東國郡)因幡〈近、上、〉七郡、法味〈府、〉 邑美、八東、〈○東恐東誤〉 八上、智頭、高草、氣多、 或本八郡、巨濃、石井、除八東、

(和漢三才圖會七十七因幡)巨濃 法美〈府〉 八上 知頭 邑美 高草 氣多

按拾芥抄除巨濃加八東、或除八東加巨濃石井、爲八郡、〈今無巨濃、有石井入東、疑八郡、入東之東字、譌作東、〉

(郡名考)官用ヒル今ノ郡名

因幡　八郡

岩井〈イハイ〉 法美〈ホウミ〉 八東〈ハツトウ〉 八上〈ヤカミ〉〈林本調無〉 知頭〈チヅ〉 邑美〈ヲウミ〉 高草〈タカクサ〉 氣多〈ケタ〉

(因幡民談二)因幡國郡鄉村里廣狹路程等事

一當國郡名古書ニヨイテ明ニコレヲ記シヲケリ、然ルニ今國中ニ言傳ルハ、樣々ニ言チガヘ、文

岩井五十村延喜式等不載、拾芥抄或説載之作石井、蓋中世析法美郡所置　法美六十村古府治　八東八十八村延喜式等不載、蓋中世析八上郡所置、拾芥抄作八東誤、　八上六十村　知頭九十八村延喜式等作智頭　邑美三十五村　高草八十村　氣多八十二村

巨濃延喜式等載、後廢、未詳在何時

〔日本地誌提要四十六因幡〕沿革　古ヘ國府ヲ法美郡ニ置、今ノ稻葉郷宮下村建武中興、伯耆守名和長年ヲシテ守護ヲ兼シム、延元元年、王事ニ死ス、興國元年、足利尊氏、山名時氏ヲ以テ本州及伯耆ノ守護トス、正平八年、時氏歸順シ、尋テ復足利義詮ニ降リ、守護タル故ノ如ク、三子氏冬ニ傳フ、嘉吉三年、氏冬ノ孫熙貴、赤松ノ亂ニ死シテ嗣無シ、宗家持豐ノ三子勝豐後ヲ承ケ、布施城ニ治ス、高草郡天文中、其曾孫誠通、鳥取ニ築テ之ニ移ル、既ニシテ宗家祐豐持豐玄孫ト隙ヲ生ジ、兵ヲ交テ敗死ス、子幼ナル、ヲ以テ、家臣和ヲ祐豐ニ納ル、祐豐弟豐定ヲ遣テ國ヲ監セシメ、布施城ニ居ル、豐定卒シテ子豐數代立ツ、永祿中、家臣武田高信誠通ノ二子ヲ弑シテ、鳥取城ニ據テ叛ク、豐數之ヲ伐ツ、克タズ、元龜二年、豐數卒シ、弟豐國立ツ、天正二年、尼子勝久ニ合シテ高信ヲ誅ス、既ニシテ毛利氏來リ攻メ、豐國終ニ毛利氏ニ屬ス、八年、豐臣秀吉來テ鳥取ヲ圍ム、豐國出テ秀吉ニ投ズ、山名氏十二世、凡二百六十一年、豐國後德川氏ニ仕ヘ、邑テ但馬村岡ニ受ク、其遺臣、毛利氏ノ將吉川經家ヲ奉ジテ城守ス、九年、秀吉之ヲ陷レ、悉ク本州ヲ定メ、明年、宮部繼潤ヲ鳥取ニ、五萬石、明年封ヲ加ヘテ貳拾萬石トナス、龜井茲矩ヲ鹿野ニ壹萬三千石封ズ、慶長五年、德川氏繼潤ノ子定行ヲ陸奧ニ謫シ、池田長吉ヲ鳥取ニ六萬五千石山崎家盛ヲ若櫻ニ八東郡三萬五千石封ズ、元和三年、鳥取池田長幸若櫻山崎家治鹿野龜井政矩三藩ヲ他州ニ徙シテ、池田光政ヲ本州及伯耆ニ封ジ三拾貳萬石鳥取ニ治ス、寛永中、備前ニ徙リ、其從弟光仲代テ封ヲ二州ニ受ケ、子仲澄清定ヲ分封シ、凡ソ三藩、王政革新、支封二藩ヲ稱シテ、鹿奴舊鹿野若櫻ト云、既ニシテ改テ縣トナシ、又之ヲ廢シテ鳥取ニ併ス、

〔先代舊事本紀十國造〕稻葉國造

宿驛

諸國沿革

十八間　伯耆國河村郡門前村〇中略

從因幡國知頭歷馬桑至野介代

因幡國知頭郡知頭宿　一里三十町九間　野原村、三十五度一十三分、　二里一十三町一十五間至國界一里二丁六間、　美作國勝北郡馬桑村〇中略

從因幡國岡田歷犬狹峠至本郷

因幡國久米郡岡田村　二十一町三十九間　市場村至中河原村八丁一十八間　一里二十九町二十四間

湯關村　三里八町五十九間半至國界一里九丁四十七間、　美作國大庭郡下長田村

〔日本實測錄沿海一〕從赤間關沿海至鞠山〇本敎賀中略

因幡國氣多郡濱崎村、三十五度一分、歷長尾峠至姫路村船磯一十九町五十三間、　五里一十四町四十間歷長尾岬至船磯一里五町六間半、從船磯至叢草川口一里一十七町五十八間、　高草郡加路村千代川口歷小川口至邑美郡鳥取一里二十三町三十八間、從小川口至湖山池傍三十三町二十七間半、　二里六町二十間　岩井郡岩戸村至岩戸岬三町二十八間　一里一町三十一間半　濱大谷村至網代岬五町六間　一里七町五十七間半　本浦富村、三十五度三十五分、至田後村ケオトシ岬九町二十四間　二十九町一十三間至牧谷村一十五町　小羽尾村至大羽尾村岬一十町一十四間半　二十五町二十五間至國界二十五町二十四間　但馬國二方郡居組村

七坂峠

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬〇中略

因幡國驛馬山崎、佐尉、敷見、柏尾各八疋、傳馬巨濃、高草、氣多郡各五疋、

〔續日本紀九元正〕養老七年八月辛亥、加置因幡國驛四處、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月壬申、省因幡國八上郡莫男驛、智頭郡道俣驛馬各二匹、

〔日本國郡沿革考三山陰道〕因幡　古作稻羽、古事記或稻葉、國造記上國、管八郡、延喜式等七郡、拾芥抄載爲八郡、　五百五十三村、

一國中田土磽瘠ノ地多シテ京畿膏腴ノ類ニアラズ、故ニ米穀稼穡ユタカナラズ、租稅ノ免高カラズ。○下略

氣候

〔因幡民談二〕因幡國郡鄕村里廣狹路程等事

一國ノ風氣畿内中國トハ少替リタル事モアリ、四時共ニ京畿中國ヨリ雨シゲクシテ、冬ハ十月十一月ノ比ヨリ雪フリ、十二月明ル正月二月比マデ消ヤラズ、サレドモ京畿餘州ヨリ甚寒スルコトハスクナク、冬ノ内アタヽカ也、然ニヨリテ東北國ナドノゴトク甚シク、氷ツラヽナドノ結ブコト少ナシ、雪ノ深キコト古今都鄙ノ不同アリ、昔ハイカナル所モ五尺七尺山中ナドハ程モナク降ケルトイヘドモ、近年四五年コノカタ、里邊城下ナドハ毎年大概二尺三尺ノ内外ナリ、又山中深山ノ間ハ七尺八尺一丈モフル所多シ、ツネニ雨氣ガチナル故ニ、耕作日損ハ少クシテ、雨シゲキ年ハ田畠必ミノルコトナシ、年ニヨリ洪水ノ患アルコトアリ、大キナル暴風ナドハ吹コト希也、地震ハ昔ヨリ大ニユルコト更ニナシ、只毎年春ヨリ夏ノ初ニ至テアタタカナル南風吹テ、跡ニ雨フルコト度々ニテ、此節殊ニ天氣ナシ、

道路

〔日本實測錄四街道〕從播磨國福崎新村歷知頭及鳥取至豐田。○中略

因幡國知頭郡駒歸村　二里三十五町三間　知頭宿三十五度一十六分半、　三里二町三間　用瀨(モチガセ)村、三十五度二十分半、　一里三十一町五十七間　八上郡曳田村(至八上姬神社一十三丁二十四間)　八町五十一間　谷一ツ木村川原、三十五度二十四分、　二里三十四町九間　邑美郡鳥取元町(歷川外大工町、至御弓町一十丁、從御弓町至一ノ宮宇神社一里一丁一十二間)、　三町四十三間半　同新品治町(至元禮物師町三丁三間、北極高三十五度三十分、從元禮物師町至御弓町一十五丁三十三間)、　二十四町一十五間　高草郡德尾村(至野見宿禰神社二丁三十三間)、　二里五十七間　湯村(又呼吉岡)　二里四町五十七間(至志加奴村鍋屋町一里三十二丁二十四間)　氣多郡志加奴村山根町、三十五度二十八分、　一里一町五十一間(至志加奴大工町限三丁三十六間)　鷲峯村來日(至志加奴神社三丁五十一間)　二里三十三町四十二間(至國界二十四丁一里)

こし、但馬口より因幡國中へ亂入、桶川式部少輔楯籠とつとり之城、四方離れて嶮しき山城也、因幡の國は北より西は滄海漫々たりとつとりと西之方海手との真中廿五町程隔、西より東南町際へ付て流る丶大河有、此川舟渡し也、とつとりへ廿町程隔、川際につなぎの出城有、又海之口にも取續要害有、藝州よりの味方可引入行として二ケ所拵置たり、とつとり之東に七八町程隔て並程之高山有、羽柴筑前守彼山へ取上り是より見下、

〔因幡民談〕二因幡國郡鄕村里廣狹路程等事

一當國ハ略○中四方ナル國ニテ西南北廣狹大略ミナ相同ジ、國中指ワタシノ通ノ行程十三四五里ノ内外タルベシ、八上郡最勝寺ヲ以、國ノ中トストイヘリ、此所ヨリ四方へ大ガイ七八里バカリ也、

一當國郡ノ數、古書ニハ七郡トアレドモ、近代用ル所ハ八郡也、巨濃、法美、八東、知頭、邑美、高草、氣多、八上也、其地形東ノ端海濱ハ巨濃ニナラビ、南ノ方ハ法美郡法美ニナラビ、南ノ方ハ八東郡八東ニナラビ、西ノ方ハ知頭郡ノ法美ニナラビ、西ノ方ハ邑美郡邑美ニナラビ、西ノ方ハ高草郡高草ニナラビ、西ノ方ハ氣多郡、知頭ノ北、八東ノ西、法美ノ南三郡ニハサマレタルハ八上郡、八上ト邑美ハ國ノ中ニアリ、右以上八郡也、八郡ノ内廣狹知頭八東大也、次ニ高草氣多大也、巨濃ハスコシチイサシ、次法美チイサシ、次ニハ八上チイサシ、邑美ハキハメテ小キ郡也、知頭ハ深山ノミ、平地ノ所ナシ、氣多ニハ平地少々アリ、高草ニハ平地尤多シ、故ニ田租ノ高第一ニヲホシ、八上モ平地ノ所スクナカラズ、法美ニモ平地アリ、邑美ハ山ナク平地ノミ也、巨濃ニモ平地少々アリ、巨濃高草氣多三郡ハ海濱アリテ、鹵斥ノ地少々アリ、略○中

一國中ナセル大河ナク、四方大形嶮シキ山ノミニシテ、平地曠野ノ所キハメテ少シ、略○中國ノ北邊海濱多トイヘドモ、曲浦廻島スクナキ故、魚類必多カラズ、又用ニ乏キコトモナシ、略○中

餘、南北凡壹拾貳里壹拾八町餘、

〔因幡誌 一〕國立位並ニ土界 京ヲ去ル事、北へ六十三里ナリ、國ノ接壤ハ、但馬ノ西、伯耆ノ東ニ隣テ、東南ハ播磨、南西ハ美作、北ハ大海也、其土界東ヨリ巽ニ並テ、巨濃、法美、八東ノ三郡アリ、巨濃ノ海畔嵐嶺ノ峯通ヨリ奥ハ、扇鏡尾嶺、矢倉嶺、蒲生嶺、牛ガ峯ニ至テ、但馬二方郡ノ界トス、其並ニ法美ニ扇山、(無通路、)八東ニ豹山アリ、同國七美郡ノ界ナリ、又戸倉嶺、(山ノ名四箇山、菅山、)又大通嶺、小通嶺アリ、(小通リ或ハ若杉峠、山ノ名ハ田山、又云沖ノ山、屬ニ智頭八東兩郡、)戸倉大通ハ播磨國宍粟郡ノ界也、小通ヨリ南ハ美作國ノ界ニテ、智頭郡ニ人坂嶺アリ、(就中駒道山、小通リ以下爲ニ美作國吉野郡界、)其並ニ白坪嶺、(或ハ云右手嶺、)草原嶺、黑尾嶺アリ、(或ハ云、眞桑峠、屬ニ郡山、以上爲ニ同國勝北郡界、)又物見嶺物見坂アリ、(或ハ堂館峠、屬ニ槻櫃山、)佐治鄕ニ大株香嶺、(或ハ云、險所峠、)大杉越八本嶺、(以上爲ニ同國東北條郡界、)又田角嶺アリ、(同國西西條郡界、以上屬ニ佐治鄕、)其西三角ニ峙タル高山ヲ三國山ト號ス、因作伯ノ三州ニ跨タル大山也、是ヨリ西ハ氣多郡ノ域ニ、佐谷嶺、滑石坂、河上越西坂(或ハ云、境尾、)等ノ險アリ、各伯耆國河村郡ノ界ナリ、國ノ地形ハ大抵四方ニシテ八上郡ヲ中位トス、其接壤邑美、高草二郡ハ、巨濃氣多ノ間ニ並テ、共ニ北ニ亘テ大海ニ至ル、行程諸書ニ南北二日トアリテ、東西ヲ注サズ、今其里數ヲ度ルニ、東ハ播磨境戸倉嶺ヨリ、西ハ伯耆境西坂嶺マデ、百三十六里百十四歩、南ハ美作境人坂嶺ヨリ、北ハ但馬境嵐嶺ニ至テ、百十里百九十九歩、是古ノ法ニ據モノナリ、人國記所謂當國ハ海近シテ山深シト、凡三方列岳聳、山脈險ク繞テ、一方ハ荒磯ナリ、地利尤天府四塞ト謂ベシ、

島嶼

〔日本實測錄 九島嶼〕因幡國氣多郡 遠測 烏帽子島

高草郡 遠測 沖島 平島 赤島 辨天島

岩井郡 遠測 大島 松島 宮島 丑振島 天神島 ヒク島 四十八鼻

地勢 地味

〔易林本節用集 下〕因幡(因州、イ)上、管七郡、南北二日、北海近山深、而海藻絹布多、中々國也、

〔信長公記 十四〕天正九年六月廿五日、羽柴筑前守秀吉中國へ出勢、打立人數二萬餘騎、備前美作打

三郡ヲ合セテ岩美郡ト爲シ、八上、八東、智頭ノ三郡ヲ併セテ八頭郡ト爲シ、高草、氣多ノ二郡ヲ併セテ氣高郡ト爲シ、新ニ鳥取市ヲ設ケ、鳥取縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄　五國郡〕因幡以奈八

〔運歩色葉集　伊〕因幡八郡　因伯因幡伯耆

〔日本風土記　一國郡島名〕因幡奕奴白

〔倭訓栞　前編三伊〕いなば　因幡の國は古事記に稻羽に作れり、法美郡郷名にも稻羽見ゆ、

〔古事記　上〕故此大國主神之兄弟八十神坐、然皆國者避於大國主神、所以避者、其八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負帒、爲從者率往、

〔古事記傳　十一〕稻羽は因幡ノ國なり、彼ノ國法美郡に稻羽伊奈波郷あれば、是より出たる國ノ名なるべし、名義は稻葉よりは出けむ、

位置

〔地勢提要　乾〕各國經緯度附里程

因幡鳥取城址鍋物町　極高三十五度三十分、經度西一度三十分、從東都東海道自西國街道播州下手野村歴下徳久村辻堂村知頭宿一百九十六里三十一町三十五間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

因幡　鳥取　三五度三〇分〇〇秒　浦留村　三五度三五分〇〇秒中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒中略　因幡　鳥取　西一度三〇分〇〇秒

疆域

〔因幡民談　二〕因幡國郡郷村里廣狹路程等事

一當國ハ中略國ノ方位、東ハ但馬、西ハ伯耆、東南ハ播磨、南西ハ美作、北ノ方ハ大洋也、

〔日本地誌提要　四十六因幡〕疆域　東ハ但馬、西ハ伯耆、南ハ播磨美作、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾貳里

風儀也、

〔但馬考一制度〕風土

土地ノ風ハ土地ニアラズ、人ノ風ニヨリテシラル、ナリ、中古ハ國府氣多郡ニアリ、衣冠ノ往來リテコレヲ治ム、其文物ノ盛ナル思ヒヤリヌベシ、鎌倉ヨリコノカタハ、守護地頭ト稱スルモ、武邊ノ人ニアラザルハナシ、且其守護ナルモノ俸祿甚輕シ、太田氏ノ類ワヅカ出石山ノ中ニアリ、別ニ風雅ヲ樹ルニタラズ、百年以來、出石豊岡ノ大藩、巍然トシテ文獻ノ域トナル、コレ最明寺殿ノシラザルコトナリ、大抵人オホキ處ハ、風俗都カニシテ情ハ輕薄也、人少キ地ハ風俗鄙クシテ情スナホナリ、タヾ言ヒノミゾ、ニワカエウツシガタシト見ユ、柴ノ折レヲ但馬ニテハ木ナダセト云、ワケモナイトイフヲ、ツガモナイト云ナド、男重寶記ニカキヲケリ、

名所

〔日本鹿子十一〕同國但馬○中名所之部

朝來山○歌略、下同、　二見浦　雪の白濵　詠寄川　五師の里　出石の宮

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　但馬國五十人○中略

諸國器仗○中略　但馬國甲三領、橫刀八口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

因幡國

因幡國ハ、イナバノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ但馬、西ハ伯耆、南ハ播磨、美作ニ界シ、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十二里餘、南北亦之ト相若ク、此國ハ、古ヘ國府ヲ法美郡ニ置キ、巨濃、法美、八上、智頭、邑美、高草、氣多ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後ニ巨濃郡廢シテ岩井郡トナリ、又別ニ八東ノ一郡ヲ增ス、蓋シ八上郡ヲ分割セシナラン、明治維新ノ後、岩井、法美、邑美ノ

但馬國廿一種　黃連十八斤三兩、白芷三斤五兩、前胡、杜仲、細辛各一斤十兩、獨活、藍漆、滑石各五斤、白朮、藁本各二斤十兩、石斛十斤九兩、升麻六斤十兩、當歸十斤、梔子四斗、署預、蜀椒、柏子人各一斗、桃人一斗五升、麥門冬八升、牡荊子三升、白殭蠶二兩、

〔延喜式三十九内膳〕年料略〇中　但馬國（鮮鮭四擔十六觔、生鮭三擔十二隻、三度、鮨年魚二缶、山薑一斗五升三度、）

〔毛吹草三〕但馬

小人參　芎藭　黃連　白朮　粒半夏　茜　干蕨　同繩　簾　糸　綿　亭　柳籠履　温石

銀　底　鞍牛　朝倉山椒　出石絹　諸識延

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年六月二日甲辰、伊賀略〇中但馬略〇中土佐等十九國貢絹、麁惡特甚、不ㇾ如ㇾ昔日、勅ㇾ諸國宰、採ㇾ取正倉舊樣絹、每ㇾ國賜ㇾ一疋、依ㇾ舊樣ㇾ作、

人口

〔官中秘策四〕但馬國　八郡略〇中

一人數拾五万六千六百拾三人　内（八万三（三イ）六（或）千三百六拾七人男、七万五千貳百四拾六人女）

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）略〇中

（御料私領）一人數拾六万七千五百四拾九人　内（八万七千貳百五拾三人男、八万貳百九拾七（七イ六或）人女）　高拾三万六百七拾三石餘　但馬國

諸國人數調（弘化三丙午年）略〇中

（御料私領）一人數拾七万三千五百七拾三人　内（八万九千八拾壹人男、八万四千四百九拾貳人女）　高拾四万四千三百拾三石餘　但馬國

風俗

〔人國記〕但馬國

但馬國ノ風俗ハ、丹後丹波ヨリハマサレリ、根性ニ實儀有、取分出石、氣多城崎二方ノ郡ハ、願倍數意地有、朝來養父郡之者ハ、意地キタナク盜人多シ、雨丹ノ風俗之中分ニシタ、善ニモ惡ニモ從フ

國產貢獻

但馬國正稅公廨各卅四万束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、修理池溝料二万束、救急料一万八千束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕但馬國 ○中略 管八（中略）正公各三十四萬束、本穎七十二萬束、雜穎六萬束、

〔延喜式 內藏 十五〕諸國年料供進 ○中略 交易絁 ○中略 六百五十疋（中略）但馬二百疋 ○中略 交易絲 ○中略 一千五百九十四絇（中略）八百卅四絇、但馬國所進、

〔延喜式 民部 二十三〕凡諸國所進兵庫寮修理甲料馬革者、○中略 但馬十一張 ○中略 並以驛傳牧等死馬皮、薰而送之、若不足者、買備滿數、其直充正稅、

年料舂米 ○中略 但馬國 大炊五百石 ○中略、

年料別納租穀 ○中略 但馬國 二千九百石 ○中略

年料別貢雜物 ○中略 但馬國 筆八十管、紙麻七十斤、馬革十一張、○中略

諸國貢蘇番次 ○中略 但馬國 十一壺 三口各大一升、八口各小一升、○中略 右十箇國爲第四番 辰戌年、○中略

交易雜物 ○中略 但馬國 絹七百廿七疋、綿一千斤、鹿皮一百五十斤、醬大豆廿六石、隔三年進醬大豆五石、

〔延喜式 主計 二十四〕但馬 ○中略 右十二國並上絲 ○中略

但馬 ○中略 右廿九國輸絹 ○中略

但馬國 行程、上七日、下四日、

調、九點羅二疋、一窠綾十三疋、二窠綾九疋、三窠綾三疋、薔薇綾四疋、白絹十疋、緋帛卅疋、纁帛十五疋、皂帛五疋、帛三百卅疋、自餘輸絹、 庸、韓櫃十合、塗漆韓櫃五合、白木五合、自餘輸絹、 中男作物、黃蘗二百斤、紙、漆、胡麻油、椶椒油、搗栗子、煮鹽年魚、雜腊、鮐皮、海藻、

〔延喜式 大膳 三十三〕諸國貢進菓子 ○中略 但馬國 搗栗子七斗、甘葛煎、

〔延喜式 典藥 三十七〕諸國進年料雜藥 ○中略

始羽柴美濃守秀長、後前野但馬守長康、文祿四、小出大和守吉政、慶長五、同右京大夫吉英、同十八、小出信濃守吉親、元和五再城主、小出大和守金英、同播磨守英長、同久千代、元祿十、松平伊賀守忠徳、寶永三、仙石越前守政明、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕京極飛驒守高篤 柳間 朝散大夫 略○中 一萬五千石　在所但馬城崎豐岡 江戸ヨリ 百五十三里

往古羽柴美濃守秀長領、後前野但馬守長康以後中總、寛文八、京極飛驒守高直、以後代々領之、

田數 石高

〔倭名類聚抄 五國郡〕但馬國 略○註 管八 田七千五百五十五町八段五歩

〔拾芥抄 中末本朝國郡〕但馬 近上 八郡（中略）田七千七百四十三町

〔伊呂波字類抄 大國郡〕但馬國（中略）本田八千八百四十一丁

〔海東諸國記〕但馬州　郡八、水田七千一百四十町、

〔但馬考 一 制度〕墾田　今ノ見數

朝來郡　二万三百八十八石五斗二升一合　養父郡　二万六百七十五石二斗七升五合

出石郡　二万四千七百三十五石九斗七升五合　城崎郡　一万九千八百九十九石三斗八升九合　氣多郡　一万七千五百四十九石一斗七升七合　美含郡　一万千九十四石六斗八升五合　二方郡　七千九百二十六石七斗三升五合　七美郡　六千七百石

通計拾貳萬八千九百六十九石七斗五升七合

〔日本鹿子 十一〕但馬國、八郡、中上國、東西二日、知行高十二万三千九百六十石、

〔官中秘策 四〕但馬國　八郡 略○中

一石高拾三万六百七拾三石餘

出擧稻

〔吹塵錄 五人口及國高〕天保度御國高調 略○中

但馬國 御料私領　一高拾四万四千三百拾三石八升四合三才

〔延喜式 二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻 略○中

滯封

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰〈在判○下略〉

〔源平盛衰記 三〕左右大將事
重盛ノ左ニ御座ケルヲ辭申テ右ニウツシ、實定卿ヲ舉申テ事成、左大將、イツシカ同〈○治承元年〉五月八日、御悦申アリ、今日佐藤兵衛近宗ヲ左衛門尉ニ成レケル上、但馬國キノ崎ト云大庄ヲ賜ハル、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〈○元暦元年〉四月六日甲戌、池前大納言〈○平頼盛〉竝室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、〈○中略〉
山口庄〈但馬○中略〉
壽永三年四月五日

〔吾妻鏡 十四〕建久五年閏八月十二日己巳、以但馬國多々良岐庄、始爲地頭補任之地、可被付熊野鳥居禪尼云云、是依所望也、　九月廿三日庚戌、但馬國多々良岐庄者、源宰相領所也、而熊野鳥居禪尼〈故左典廐姨公〉日者強所望彼邊事、異他之間、被遣地頭補任御下文、但於有限領家乃貢課役等者、不可有懈怠之由、今日被遣御消息云云、

〔南禪寺文書〕但馬國池寺庄〈○中略〉
右所々任代々勅附〈○附、符假借〉知行不可相違者、院宣如此、執達如件、
建武三年十一月廿七日　參議〈花押〉
南禪寺長老清拙上人禪室

〔但馬國大田文〕養父郡〈○中略〉
大藪保　十四丁　百五十分　地頭肥塚三郎跡七人分領〈○中略〉
城崎郡〈○中略〉
相博保　三十九丁四反二百四分　地頭蛭河左衛門尉〈○中略〉
得次保　十四丁五反六十分　地頭西條十郎太郎

〔慶應元年武鑑〕仙石讚岐守久利〈○中略〉〈柳間同散大夫〉
三万石　居城但馬出石郡出石〈江戸ヨリ〉百四十九里

村里名邑

〔但馬考三地理〕朝來郡　山口鄕

此鄕ハ國ノ南境ナリ、上古浪華平城ノ都ヨリ當國ノ往來、ミナ播磨路ヲ通リシユヘ、此鄕ヲ但馬ノ入口トスルナリ、延曆年中、都ヲ平安城ニ遷サレテモ、中古マデハカタアリシト見ユ、順德院ノ八雲抄ニ、二見浦ヲ播磨トシ、但馬ノ温泉ヘ向フ道ナリト記サセ玉ヒシモコレユヘ也、

〔郡名一覽〕一但馬國御料私領　但州　東西二日　八郡

高今三万六百七拾三石貳斗三升五合　六百貳拾七ケ村

●出石　百四十九里　○豐岡　百五十三里　又村岡百六十四里山名氏領　△生野　百七十里餘

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國舊村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕但馬御料私領　八郡、六百二十三村、

高十四万四千三百十三石八升四合三才

朝來郡九十村　養父郡百村　二方郡五十四村　七味郡七十三村

氣多郡七十五村　城崎郡七十九村　美含郡七十二村　出石郡八十村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名

但馬　出石郡、南尾村、水石村、水上村、養父郡、餓屋米地村、網場村、八尾村、宿南村、九鹿村、万久里村、來里村、土田村、城崎村、樂々浦村、田結村、大磯村、來日村、簸磯村、津居山島、竹野郡、聞人村、久儒村、朝來郡新井村、粟鹿村、早田村、末歲村、氣多郡、竹貫村、八社宮村、美含郡、餘部村、鬮谷村、田久日村、加佐郡、蛇島、

莊保

〔當宮緣事抄〕左辨宮下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先租讓狀、或稱相傳文書、致異論、企掠領、爰又有由緒、雖分傳領、子孫斷絕處々村、本所庄、

宮寺領略○中　但馬國　菅庄略○中

但馬國朝來郡枚田。鄉。五十戶〇中略

右天平十年歲次戊寅四月十二日、納賜平城宮御宇天皇〇聖武者、

〔東大寺正倉院文書 東南院塵附錄九〕但馬國司解　申進上奴婢事

合進上奴婢伍人略〇中

奴池麻呂略〇中　右出石郡少。坂。鄉。戶主外從七位下宗賀部乳主之奴

奴精麻呂略〇中　右同郡穴。見。鄉。戶主大生直山方之奴

奴藤麻呂略〇中　右同郡穴。見。鄉。戶主土師部美波賀志之奴

婢田吉女略〇中　右朝來郡桑。市。鄉。戶主赤染部大野之婢

婢小當女略〇中　右二方郡波。大。鄉。戶主采女直眞島戶采女直玉手女之婢略〇中

天平勝寶二年正月八日名〇略署

〔今昔物語二十六〕於但馬國鷲爴取若子語第一

今昔但馬國七美郡川。山。ノ鄉。ニ住ム者有ケリ

〔但馬國大田文〕弘安八年之注進太田太郎左衛門尉政頼

朝來郡略〇中　枚。田。鄉。略〇中　東。河。鄉。略〇中

養父郡略〇中　安。美。鄉。略〇中　大。惠。本。鄉。略〇中

氣多郡略〇中、　高。生。鄉。略〇中　日。置。鄉。略〇中　高。田。鄉。略〇中　氣。多。鄉。略〇中　上。鄉。略〇中　下。鄉。略〇中

狹。治。鄉。略〇中　八。代。鄉。略〇中　下。賀。陽。鄉。略〇中

出石郡略〇中　出。石。鄉。略〇中　神。戶。鄉。略〇中　小。堤。鄉。略〇中　下。里。鄉。略〇中　安。美。鄉。略〇中

城崎郡略〇中　田。結。鄉。略〇中

美含郡略〇中　竹。野。鄉。略〇下

美含郡　二方郡　七美郡　郷

〔平陶叢〕但州西光寺化緣疏幷序

但州路木崎郷西光數寺、乃般舟三昧古道場也

〔三代實錄〕二十七清和貞觀十七年十月八日丁巳、但馬國飾婚美含郡人日置部小手子叙位二階、

〔三代實錄〕三十七陽成元慶四年六月十七日己亥、但馬國言、管二方郡百姓等、遙望海中、有物形似小島、長可十丈、前後之端有物透出、高可五六尺、疑是船之舳艫也、中央有隨風搖動之物、疑是帆席也、○中略其數三也、○中略疑是他國船也、○下略

〔日本靈異記上〕嬰兒鷲所攫以他國得逢父緣第九

飛鳥川原板蓋宮御宇天皇○皇極之代、癸卯年春三月頃、但馬國七美郡山里人家有嬰兒女中庭匍匐、鷲擒騰空、指東而翥、

〔倭名類聚抄八但馬國〕朝來郡　山口也末久知　桑市久波伊知　伊田　賀都加都　東河土加　朝來阿佐古　粟鹿安波加　磯部以曾

養父郡　糸井伊土井　石禾伊佐波　養父　輕部○高山寺本注加流倍　大屋　三方三加太　遠屋　養耆也木　淺間安佐末　遠佐

出石郡　小坂乎佐加　安美　出石以都之　室野無呂乃　埴野波爾乃　高橋多加波之　資母

氣多郡　太多　三方三加太　樂前佐々久万乃　高田多加多　日置比於木　高生多加布　狹沼佐乃　賀陽加也

城崎郡　新田爾布多　城崎木乃佐木　三江美衣　奈佐　田結多由布　餘戸

美含郡　佐須　竹野多加乃　香住加須美　春舍三久美　長井奈加井　餘戸

二方郡　久斗久土　二方布多加多　田公多木美　大庭於保波　八太波多　陽口　刀岐　熊野　溫泉由

七美郡　兎東土加　七美之都美　小代乎呂　射添伊曾布　驛家

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合食封貳佰戸國永年書在〻國〕中略

朝来郡
養父郡
出石郡
氣多郡

城崎郡

朝来(アサコ)	書八
同	同
同	八部
同	
同(アサコ)	同
同	同
同	同
同(アタゴ)	同
同	同

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國正税帳〇天平九年

朝〇來〇郡〇押坂神戸租代稻九束九把(中略)養〇父〇郡〇養父神戸租代百稻五束五把　出〇石〇郡〇出石神戸租代四百卅五束六把、

〔東大寺要錄八〕勅旨可ㇾ有₂封庄₁事之中

金光明寺宛食封一千戸〇中略

但馬國百戸氣〇多〇郡〇五十戸、朝〇來〇郡〇五十戸、〇中略

奉₂今月廿一日勅₁偁、件封宛金光明寺其收傳期更待₂後勅₁者、

天平十九年九月廿六日

〔類聚國史四十後宮〕嵯峨天皇弘仁四年正月丁丑、制令₃伊勢國壹志郡、尾張國愛智郡、常陸國信太郡、但馬國養父郡、貢₂郡司子妹年十六已上廿已下、容貌端正、堪₁爲₂采女₁者各一人、

〔應仁廣記三〕諸國亂逆事

同年〇應仁二年、三月廿日、細川方ノ長九郎左衞門、并丹波ノ内藤孫四郎、疋田夜久ノ壹人數ヲ催シ、山名家ノ領地、但馬國朝來郡へ亂入、一品粟鹿磯邊ナンドニ充滿タリ〇中略朝來郡ハ播磨丹波ニ境居タレバ、郡中ノ者共、勤者敵ヲ可₂引入₁ノ由聞ヘシ程ニ、守護代大田垣土佐守ガ計ラヒトシテ、城子新左衞門宗朝ニ一手柄サスベシト、但州へ差下ス、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月乙亥、但馬國氣多郡山神、雷神、戸神、蜀椒神、城埼郡海神等五前並預₂官社₁、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕但馬

六國史古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	節書	郡名考	天保郷帳	[illegible]	地誌提要	郡區編制
	城崎	城崎	同	同	城埼	城崎	同	同	同
	出石	同	同	同	同	同	同	同	同
	美含	同	同	同	同	同	同	同	同
	二方	同	同	同	同	同	同	同	同
	氣多	同	同	同	同	同	同	同	同
	七美	同	同	七美 七味	七味	同	同	同	七美
	養父	同	同	同	同	同	同	同	同

國府

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月壬寅、從五位上阿倍朝臣安麻呂爲但馬守、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年八月十七日辛酉、法橋昌明者、幕下將軍〇源賴朝之時有功者也、今度逆亂、雖有勳功、其意如緩、曾不乖關東、此事既達二品禪尼之聽之間、昌明雖未申子細、但馬國守護職、幷庄園等成下文、去月遣訖、于時昌明不辨之以前、同月廿三日狀、註申功事、其狀今日到來鎌倉、二品禪尼披覽之、殊所令感歎也、

〔倭名類聚抄五國郡〕但馬國國府在氣多郡、行程上七日、下四日、

〔伊呂波字類抄太國郡〕但馬國（中略）氣多

郡

〔日本後紀十二桓武〕延曆二十三年正月壬寅、遷但馬國治於氣多郡高田鄉、

〔倭名類聚抄五國郡〕但馬國（中略）〇註管八（中略）〇註朝來安古佐養父不夜出石伊豆志氣多城崎支乃佐木美含美久美二方布太加太七美志豆美

〔延喜式二十二民部〕但馬國、上、管朝來アサコ養父ヤフ出石イツシ氣多ケタ城崎キノサキ美含ミクミ二方フタカタ七美シツミ右爲近國、

〔皇國郡名志〕但馬國八郡

朝來アサコ　∧竹田　●和田山　●ヤナセ　●白井　丹播界

養父ヤフ　[尾崎]　●高柳　●網場　●メカメ　國中ヨリ播界ニ亙

出石イツシ　●岩サキ　●大河内　∧山下　●出谷　[出石]　●鹿森　●大谷　●久畑　丹波丹後界

氣多ケタ　●三原　●松岡　國中

城崎キノサキ　∧豐岡　●飯比　●森津　∧湯島　∧溫泉　丹後界

美含ミクミ　●余部　●矢田　●矢坂　北海郡

二方フタカタ　●湯村　●前崎　因界因北海邊

七美シツミ　●大久保　●和田　∧藤岡　∧村岡　∧百姓町

ス、因テ守護ヲ領シ、相傳ル數世ニシテ守延ニ至ル、元弘中、北條高時、皇子靜尊ヲ本州ニ幽ス、既ニシテ王師興ル、守延靜尊ヲ奉ジテ京師ニ入リ戰死ス、後州豪或ハ官軍ニ屬シ、或ハ足利氏ニ屬シテ擾亂數年、正平八年、山名時氏吉野ニ歸順シ、山陰ヲ略シ、國州ヲ取ル、十九年、叛テ足利義詮ニ降リ、伯耆ニ居リ、第五子時義ヲ本州ニ封ジ、出石郡此隅山ニ治ス、後時義嫡宗ヲ承ケ、最勝塞、元中六年卒シ、子時熙封ヲ襲グ、將軍義滿其强盛ヲ惡ミ、時熙ノ叔父氏淸、從兄滿幸ニ命ジテ之ヲ伐シム、時熙削髮出亡シ、氏淸代テ守護トナル、八年、氏淸誅死ス、義滿、時熙ノ無罪ヲ憫ミ、之ヲ復封ス、子持豐ニ至リ、赤松氏ノ亂ヲ討ジ、功ヲ以テ播磨美作備前三州ヲ加封ス、應仁元年、持豐細川勝元ト難ヲ京師ニ構ヘ、接戰凡七年、文明五年卒シ、其孫政豐嗣ギ、黨援皆散ジ、僅ニ本州ヲ保ツ、後三世祐豐ニ至テ、日ニ、衰微弱、天正二年、徙テ出石ニ治ス（初メ有子山ト云）五年、豐臣秀吉西伐シ、八木城ヲ拔キ、朝來養父二郡ヲ取ル、八年、再ビ來攻メ出石陷リ、祐豐降ヲ乞ヒ山名氏亡ブ（山名氏七世、凡二百二十八年）豐臣氏、其弟秀長ヲ封ジ出石ニ鎭シ、宮部繼潤ヲ テ豐岡ヲ守ラシム、既ニシテ秀長ヲ大和ニ徙シ、前野長泰ニ出石ヲ賜フ、文祿中、事ニ坐シテ除封シ、小出秀政之ニ代リ（五萬石）子吉政嗣ギ、德川氏ニ至テ封故ノ如シ、後六世英及、元祿中夭シテ嗣絶エ、松平忠德ヲ封ズ、寶永ノ初、仙石政明之ニ代ル、繼潤豐岡ニ在ル三年ニシテ因幡ニ轉ク、杉原長房之ニ代ル、後二世重元嗣ナクシテ收封セラレ、寬文中、京極高盛之ニ代ハ、凡テ二藩、王政革新、村岡藩ヲ建テ（山名義濟）三藩トナシ、別ニ生野縣ヲ置ク、既ニシテ藩ヲ改テ縣ト爲シ、又皆廢シテ豐岡縣ヲ更置ス、

〔先代舊事本紀十國造〕但遲麻國造

志賀高穴穗朝（成務）○御世、竹野君同祖彥坐王五世孫船穗足尼定賜國造、

二方國造

志賀高穴穗朝御世、出雲國造同祖遷狛一奴命孫美尼布命定賜國造、

町三十間　村岡至二伊津岐社一四丁四十二間　一里六町　入江村従二堀畑一至二入江一街道、通計九里一十二町一十二間半、

〔日本實測錄一沿海〕従二赤間關一沿海至二鞠山一○本教賀中略

但馬國二方郡居組村七坂峠至二丸山峠一五町四十間　一十八町三十二間　居組村至二居組岸一三町四十八間　二町一間

同穴見至二穴見岬一八町一十四間　一里一十四町一十九間半　諸崎村雪ノ浦至二燈明堂一二町八間　二十町一十七間

至二諸崎村古城山一一十町三間　蘆屋村至二古城岬一三町二十間　八町　濱坂村濱、至二濱坂村宿所一三町二十六間　三十五度三十七分、　四里

四町一十三間至二赤崎村三尾一二里五十四間　美含（ミクミ）郡餘部（アマルベ）村、三十五度三十八分半、　一十九町三十八間　鎧村、

至二大崎一七町三間、又至二鼓ヶ岬一三町六間、　三十四町三十六間半　下濱村合土川至二海岸一三町五十九間　二十四町二十七間

一日市（ヒトイチ）村　二十五町二十三間至二一日市村東浦一一十四町一十一間半　沖浦村至二丹生濱一至二魚見崎一一十二町一間　一十五町五十四

間　上ヶ村至二湯上岬一一十四町四十三間半　一里四町三十六間半　訓谷（クンタニ）村、三十五度三十八分半、　二里一十

七町三十三間半至二濱安木村一一十八町一十二間半、従二濱安木一至二竹野村鹿島崎一一里二十五町四十七間、　竹野（タカノ）村　二里三町五十一間半

城崎郡瀬戸村至二ナマチ岬一一十二町三十八間　九町五十二間半　小島村豊岡川口至二湯ノ島村一三十一町五十間　二町一間

氣比村沿二豊岡川一至二戸島村一、一里二十六町二十九間半、　一十八町三十七間　田結（タヒ）村至二スチヶ岬一一十九町三十四間　一里九陌間至二

界一二十二町六間　丹後國熊野郡蒲井村

宿驛

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬○中略

但馬國驛馬、粟鹿、郡々、養耆各八疋、山前五疋、面沼、射添各八疋、春野五疋、傳馬、朝來、養父、二方、七美郡各五疋、

建置沿革

〔日本國郡沿革考三山陰道〕但馬　古作二多遲摩一古事記　或但遲麻、國造記　上國、管八郡、六百二十三村、

朝來九十村　養父百村　二方五十四村古二方國、見二國造記一　七味七十三村延喜式等作二七美一　氣多七十五村古府治　城崎

七十九村　美含七十二村　出石八十村日本紀、垂仁八十八年、天日槍昔孫清彦所レ獻小刀名出石、則地名所レ出云、

〔日本地誌提要四十五但馬〕沿革　古ヘ國府ヲ氣多郡ニ置、今ノ府市場村承久ノ亂、州人太田昌明鎌倉ニ屬

間、從唐川至坂井村三里二十丁二十四間 二十三町一十五間　口矢根村　三十三町四十五間　寺坂村　二十四町四十七間至出石新町一十五丁五十間　出石上魚屋町至宗鏡寺三丁四十八間　二町二十四間　同八木町歴出石城大手前、至柳町、一十九町九間二丁二十七間　四町三十七間至鍛冶丁橋二丁四間、　同河原町至柳町四丁六間、從柳町歴来地蔵至養父市場村三里一十二丁三十四間半、　一十九町九間　宮内村至伊豆志彌神社七丁四十五間　二里一町四間半　城崎郡大磯村　九町五十四間至豐岡京口町一丁四十五間　豐岡中町、三十五度三十三分、二里三十四町四間至六地蔵橋八丁三間　湯島村、又呼城崎三十五度三十七分、從豐岡至城崎畢、街道通計二十四里一十八町四十三間、

從丹波國大澤歴栢原及養父市場至大磯中略○

但馬國朝來郡粟鹿村至粟鹿神社五丁三間、　二十四町五十間　矢名瀬村、三十五度一十九分半、三十二町五間半　和田山村　一里一十八町八間半　養父郡堀畑村　一十七町一十八間　養父市場村追分　三町一十二間　養父市場村、三十五度二十三分半、一里二十五町五十四間至八木川岸一里一十一丁六間　上小田村　五町三十三間　下小田村　一里一十六町五十七間　氣多郡宵田村　五町一十五間　江原村至那布村一丁三十間、從那布至高柳村二里二十六丁二十四間、又從那布歴水上至上石村二里九丁一間、　三十三町三間　手邊至宮内二十二丁四十二間半　一十四町二十七間　上石村　一十一町四十二間　城崎郡佐野村至雷神社六丁二十一間　一里一町四十五間至九日上ノ町一十六丁三間　大磯村至大澤大磯、街道通計二十里一十五町五十間、

從但馬國和田山歴生野至上豐野、

但馬國朝來郡和田山村　一里一十町二十四間半　竹田中町　一里二十町三間　山口村　一里二十三町　生野銀山廻　一十三町三十三間至國界三丁二十四間　播磨國神西郡眞弓村中略○

從但馬國堀畑歴村岡至入江、

但馬國養父郡堀畑村　二里五町至大屋川岸三十三丁七間、從川岸至廣谷村二丁四十五間　高柳村　二十四町一十八間

上八木村　三里一十八町二十四間半至關宮村一里三十丁三十間半　七味郡[illegible]岡村至八幡社二丁四十五間　一里三十

但馬豐岡（中町）極高三十五度三十三分、經度西五十二分、從東都（同上（東海道自京師）歷笹山及福知山）一百七十二里一十七町

〔日本經緯度實測〕北極出地

但馬　豐岡　三五度三三分〇〇秒　出石　三五度二〇分〇〇秒（中略）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（中略）　但馬　豐岡　西〇度五四分〇七秒

疆域

〔日本地誌提要（四十五但馬）〕疆域　東ハ丹波、丹後、西ハ因幡、南ハ播磨、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾五里餘、南北凡壹拾貳里、

島嶼

〔日本實測錄（九島嶼）〕但馬國二方郡　遠測　大振島　小振島（居組村）　赤島（居組村）　白島　赤島（諸寄村）　幸島　仙コリ島　小振島（諸寄村）　キモン崎岩　黑島　シヤウノゲ島　大島　立ケ島

美含郡　實測　鹿島小島、周廻六町四十九間、　遠測　トボシ岩　辨天島（下浜村）　白石　ヒスケサキ島　臼浦島　大島　辨天島（鎧谷村）　鍋タキ島　小島　松山島　鰯島　鹿島　冠島　カゴ島

城崎郡　實測　津居山島、（從東崎至西崎）二十六町　小島（從北崎至南崎）七町三十間、　菊屋島、（從北崎至南崎）八町四十八間、　遠測　辨天島　三ツ子　メヲト島

地勢

〔易林本節用集（下）〕但馬（タジ）（但州）上、管八郡、東西二日、田厚宏、粟稗繁多而柴木繞繞也、中上國也、

〔日本地誌提要（四十五但馬）〕形勢　山脈丹波播磨ヨリ因幡ニ連リ、西方一帶、山谷險隘ニシテ平地少ナシ、其東邊河流縈紆シテ灌漑ヲ資リ、民業農商相半シ、風俗淳朴、古風ヲ存ス、土地險濕、

道路

〔日本實測錄（四街道）〕從丹波國東岡屋、歷福知山及出石、至城崎（中略）

但馬國出石郡久畑村　一里三十五町一十八間　小谷村　一十六町六間　出合村（至唐川村十七丁三十一

位置

とも云べけれど、然にはあらじ、

〔日本書紀垂仁六〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、將來物略○中幷七物、則藏于但馬國、常爲神物也、

〔但馬考一〕國名

此國ノ名、古書ニ數ルトコロ、其文字同ジカラズ、舊事紀ニ但遲麻トシ、古事記ニ多遲麻トシ、日本紀ニ田道間トシ、舊事大成經ニハ鷄間トス、タヾタヂマト云ノミゾ、古來定リタル本名ニシテ、其他ハ訓ノ通ズル文字ヲ用ヒタルナリ、明ノ茅元儀ガ武備志ノ譯語ニハ、達什麼トカケリ、コレハ此方ノ訓ヲ華音ニ寫シテ、萬葉假名ニシタルナリ、

〔諸國名義考下〕但馬

和名抄に但馬太知馬、國府在氣多郡、名義は播磨國風土記に、但馬國者、往昔桑田大連所領行也、山路多而通行在于馬、故名達馬也、今謂但馬、則其訛也とあり、又は田路端前後の中間の意にて、田路間にてはあらざるか、こはこゝろみに云のみ、又思ふに、橘の實を麻にかよはして、茶を略きたるならむ、新羅國の王子天日矛この皇國にきたり、この國に留り子孫つゞきしこと、國史に見えたり、代々但馬某と號したる中に、田路間守ぞ田路間の始にて、その四代以前より但馬某と號しは、後を前にめぐらして、國史にはしるされたるなるべし、そのよしは、古事記、玉垣宮段に、天皇以三宅連等之祖名多遲摩毛理、遣常世國、令求登岐士玖能迦玖能木實、故多遲摩毛理、遂到其國、採其實云々、是今橘者也云々略○中とあるなどを思へば、田路間守は橘守にてはあらざるか、姓氏錄左京諸蕃新羅の部に、橘守三宅連同祖天日桙命之後也とあり、されど古事記傳には、橘は多遲麻花なるべしとあり、かゝれば我推量はうらうへの違ひなり、

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

橋立の磯邊は村々有、文珠堂のあたりはみな松原なり、○中略

成相　府中の西一里あまりなり、よさの海を東に見て眺望無雙、

梶島　枯木島　水口　水口といふは、うら島が住し所なり、　浦島　古事不及注言、

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒○中略　丹後國卅人○中略

諸國器仗○中略　丹後國甲三領、横刀四口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

但馬國

但馬國ハ、タヂマノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ丹波丹後、西ハ因幡、南ハ播磨ニ界シ、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十五里、南北凡ソ十二里、此國ハ、古ヘ國府ヲ氣多郡ニ置キ、朝來(アサコ)、養父(ヤフ)、出石(イヅシ)、氣多(ケタ)、城崎(キノサキ)、美含(ミクミ)、二方(フタカタ)、七美(シツミ)ノ八郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、氣多、美含ノ二郡ヲ城崎郡ニ併セ、又二方、七美ノ二郡ヲ合セテ美方郡ト爲シ、兵庫縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄五國郡〕但馬太知萬

〔運歩色葉集多〕但馬八郡　但州但馬

〔日本風土記一寄語島名〕但馬達什摩

〔倭訓栞前編十四多〕たぢま　但馬と書り、田道間守が住し國なる事、垂仁紀に見えたり、但馬の字は演繁露に見えたり、

〔古事記中應神〕於是天之日矛、聞其妻遁、乃追渡來、將到難波之間、其渡之神塞以不入、故更還泊多遲摩國。

〔古事記傳三十四〕多遲摩(タヂマ)は但馬なり、名義未考得ず、(天日矛の子孫の世々の名、多遲摩某とあるを以て見れば、彼人々の名に因れる國ノ名か

人口

〔三代實錄 五十 光孝〕仁和三年六月二日甲辰、伊賀、略○中丹後、略○中土佐等十九國貢絹、麁惡特甚、不如昔日、勅諭國宰、擇取正倉舊様絹、毎國賜一疋、依舊様作、

〔官中秘策 四〕丹後國　五郡略○中
一人數十三万四千四百七拾六人　内 六万八千六百九拾八人男 六万五千七百七拾八人女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 略○中
御料私領一人數拾四万七千四百三人　内 七万四千八百五人男 七万貳千五百九拾八人女　高拾四万五千八百貳拾壹石餘　丹後國
諸國人數調 弘化三丙午年 略○中
御料私領一人數拾五万四千三百八人　内 七万八千貳百壹人男 七万六千百七人女　高拾四万七千六百拾四石餘　丹後國

風俗

〔人國記〕丹後國
丹後國ノ風俗、上下男女共ニ千人萬人之内ニ邊テモ、一人モ好人稀也、氣質不直而氣弱ク、勇氣寡ク實寡フ而、我邪智有テ、聊モ取リテ可用様ナク、唯隼鷹ノミヨシ、人ハ氣質直ナレバ勇氣ナク、勇氣アレバ邪智有、亦愚智也、實アレバ氣不叶、兎角擧テ難用國也、是レ根本水土ノ不然所以也、

名所

〔日本鹿子 十一〕同國 丹後○中名所之部
與謝海　吹井浦　郡の名與謝といふあり、此郡のうちに入海あり、是を與佐の入海といへば、與佐の海といふは、此郡のうちの浦をさるのごとくよびはべると見えたり、略○中
內外濱 ウチト 略○中　與佐ノ大山略○中
天橋立　神代九世にあたりて出來る間、九世戸とも云也、文珠の御座所と丹後の府との中間也、東西遠サ一里也、南北は海也、橋立の東よりに三町ばかり舟渡あり、北より南へ是を入海といふ、

〔延喜式十五內藏〕諸國年料供進略〇中 樽（中略）丹後（中略）伊豫、十五箇國各二合

〔延喜式二十三民部〕年料舂米略〇中 丹後國大炊五百石〇中略

年料別納租穀略〇中 丹後國九百八石〇中略

諸國貢蘇番次略〇中 丹後國八壺二口各大一升、六口各小一升、〇中略　右十箇國爲第四番辰戌年〇中略

交易雜物略〇中 丹後國絹二百五十疋、白絹十二疋、鹿革十二張、樽二十合、小鰯腊十二籠、

〔延喜式二十四主計〕丹後略〇中 右廿五國中絲略〇中

丹後略〇中 右廿九國輸絹

丹後國行程、上七日、下四日、

調、兩面五疋、二窠綾五疋、三窠綾、七窠綾、薔薇綾各三疋、小鸚鵡綾一疋、白絹十疋、緋帛、縹帛各廿疋、自餘輸絹綿、　庸、白木韓櫃廿合、自餘輸綿米、　中男作物、紙、黑葛、漆、胡麻油、椎子、烏賊、雜魚腊、海藻、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子略〇中 丹後國甘葛煎一斗

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥略〇中

丹後國廿四種　黃連卅八斤十四兩二分、白朮四斤十一兩、藍漆五斤八兩、昌蒲四斤、黃蘗廿斤、龍膽一斗三升、苦參、木斛各十斤、白芷十斤、伏苓七斤三兩、升麻二斤八兩、蛇脫皮二兩、榧子一斗一升、署預一斗、麥門冬大一斗三升五合、桃人一斗五升、車前子一斗六升、亭歷子二升三合、吳茱萸、蜀椒各一斗七升、乾棗一斗、細辛十五斤、甘葛煎三升、白殭蠶二両

〔延喜式三十九內膳〕年料略〇中 丹後國生鮭三擔十二後三度、氷頭一壺、背腸一壺、山薑一斗五升三度、小鯛腊一石二斗、

〔毛吹草三〕丹後

浦黃　胡麻　葛籠　撰糸　紬草物ニ用之　切門文珠貝松海嘯トモ云　伊禰浦鰤　鰤　老海鼠　海鼠

目指　沖島隼　久美海松　內堅苔　河守矢根

田數石高

出擧稻

津ニ轉、享保二、青山大膳亮幸秀、同大膳亮幸道、寶曆八年ヨリ、松平宮之助資昌、以後領レ之、

〔慶應元年武鑑〕牧野河内守誠成 雁間 朝散大夫　三万五千石　居城丹後加佐郡田邊 江戸ヨリ百四十五里

天正十一、細川領、慶長九、京極修理大夫高三、同豊後守高什、寛文八、牧野佐渡守親成、以後代々領レ之、

京極主膳正高富 帝鑑之間 朝散大夫　一万千百四十四石餘　在所丹後中郡峯山 江戸ヨリ百五十里餘

當所元和八年ヨリ、京極氏高通以後代々領レ之、○京極略

〔倭名類聚抄 五國郡〕丹後國 ○略 註管五 田四千七百五十六町百五十五步

〔伊呂波字類抄 太國郡〕丹後國 〔中略〕本田五千五百三十七丁

〔海東諸國記〕丹後州　產深重靑銅、郡六、水田五千五百三十七町、

〔丹後國田數目錄帳〕注進丹後國諸庄鄕保總田數帳目錄

總都合田數四千六百六拾七町四段九拾三步也 ○略

合

正應元年八月日 人皇九十一代伏見院御宇戊子年也

〔日本鹿子 十一〕丹後國五郡、中上國、南北一日半、知行高十二万三千百五十石、

〔官中秘策 四〕丹後國　五郡 ○中略

一石高拾四万五千八百廿壹石餘

〔吹塵錄 人口及國高 五〕天保度御國高調 ○中略

丹後國 私領 御料　一高拾四万七千六百拾四石八斗四合四勺六才

〔延喜式 主稅 二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻 ○中略

丹後國正稅公廨各十七万束、國分寺料二万束、文殊會料一千束、大學寮料八百束、修理池溝料一万束、救急料六万束、

〔倭名類聚抄 五國郡〕丹後國 ○略 註管五 〔中略〕本頴四十三萬千八百束

藩封

すみけるが〇下略

〔吾妻鏡十五〕建久六年八月六日戊午、丹後國志樂庄、幷伊禰保領家雜掌解到來、地頭後藤左衞門尉基淸致濫妨狼藉之由云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年十月十一日壬子、丹後國倉我鄕庄者、依爲後白河院法華堂領、不被補地頭、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事〇中略

一家地文書庄園事〇中略　前攝政〇中略　新御領〇中略　丹後國丹波庄〇中略

建長二年十一月　日　愚老在二御判一

〔明德記下〕播州〇山名滿幸ハ丹波ニ足ヲモタメズ、丹後國ニ馳付テ、當國ノ木津細陰ノ庄〇庄、原作レ城、寛永二立籠テ、討手ノ下向ヲ相待ベシト評定シ給シカ共、〇下略

〔丹後國田數目錄帳〕注進丹後國諸庄鄕保總田數帳目錄

加佐郡〇中略

一池內保　拾九町貳段內〇中略　一氣多保十二町五段內〇中略

與佐郡

一味佐保拾四町五反三拾六步　御厩御領所〇中略　一豐富保　拾壹町四反三百貳拾四步〇中略

一永久保　拾三町七段百五十六步　片岡與五郞　一波見保　拾壹町貳百四拾八步

成相寺　一細工所保　三拾四町壹反六拾七步〇下略

〔慶應元年武鑑〕松平伯耆守宗秀　雁間　從四位侍從　文久二戌六月任　七万石　居城丹後與佐郡宮津　江戸ヨリ　百四十九里餘

一色左京大夫、天正十八、細川兵部大輔藤孝、同越中守忠興、慶長五、京極丹後守高廣、寛永九、永井右近大夫尚征、同信濃守尚長、延寶九、阿部對馬守正邦、元祿十、奧平大膳大夫昌春、中

宮津

山ニミ城跡アリ、今ノ宮津ノ城地往昔ハ田邊領ニシテ、平田民家ノミナリ、寛永二年乙丑、京極高廣始テ城ヲ築キテ城下屋敷ヲ經營シ、町家ヲ割リ渡シ、人ヲ田邊ヨリ移サシム、故ニ今ニ至テ田邊引越ノ者ト、宮津土着ノ者ト、新古ノ差別アリ、〇中略宮津城下東西三十二町卅八間、南北十二町十六間、東ハ若狹海道、西ハ但馬海道、南ハ京海道、北ハ與謝ノ入海也、地形東南西ハ環テ山ナリ、北一方ハ海上ヲ受タリ、

〔丹州三家物語〕國中の城々を割て當國に六城立る事

永祿元龜の比より、當國殊に騷しく成て、既に天正の比は丹後一州を地侍共、三十六人として分領し、〇中略天正九年、細川父子此國に來りしより同十年に、丹州五郡悉手に入ければ、〇中略在々所々のかきあげ共悉破却て、宮津田部は根城にて、其外四ヶ所に城を立、宮津は忠興居城とす、田部は藤孝隱居城、峯山は細川玄蕃、久美の城には松井佐渡、中山には有田四郎右衞門、河手は國侍上京德審軒が居城なり、

〔蔭林政類記〕兩京兆談合有テ、畠山修理大夫奉公衆御供申、同〇永正八年八月十六日、將軍京都ヲ御取ノキ、丹後國上吉ト云所ニゾ御座有ケル、

〔當宮縁事抄〕左辨官下　石清水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、幷又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　丹後國　佐野庄　杉板別宮　黑戶庄〇中略　極樂寺領〇中略　丹後國　平庄〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔法然上人行狀畫圖十九〕丹後志樂の庄に彌勒寺といふ山寺の一和尙なりける僧の、むかしは天台山の學徒、のちには遁世して、上人〇法然の弟子となりて、一向に念佛して、五條の坊門富小路に

等云、思老夫老婦之意、我心無異荒鹽者、仍云比沼里荒鹽村、亦至丹波里哭木村、據槻木哭、故云哭木村、復至竹野郡船木里奈具村、卽謂村人等云、此處我心成奈具志久、〈古事平善者云奈具志〉乃留居此村、斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命也、

〔三代實錄 七淸和〕貞觀五年十一月十七日丙午、先是丹後國言、新羅國人五十四人來著竹野郡松原村、問其來由、言語不通、文書無解、

〔丹州三家物語〕國中之地侍進退之事附細川丹後國主と成事
加佐郡には頭立たる城持八人〇註略有けるが、藤孝〇細川家臣石寺治右衞門を、先田邊尾安の何がしが許へつかはして、宮津より西北四郡治めぬる條、加佐郡の各、はや〱宮津へ出て禮會可有哉と申つかはしたりければ、〇中略田邊より舟に乘、宮津をさして濟行ける、

〔細川大心院記〕大心院殿〇政元ハ高津ニ陣ヲメザレバ、澄之ハ牧ト云所ニ宿陣ス、澄元ハ丹後國田邊ト云所ニ陣ヲ取ラル、

〔田邊府志 一〕八田村地頭之事
今此處田邊といへる町地は、いにしへは八田村といひて、野村民家の居せしところなり、〇中略長岡藤孝此處に城郭を築き、市街をひらき、田邊と名づけ給へるを稽見るに、昔日田邊小太夫といひて、此處の地頭たりしが、圓隆寺を信敬ありて、諸堂も建立ありしとなり、このゆへに、其芳名を久しくつたへ、めでたき人なれば、處の名とせられたりと見へたり、

〔丹州三家物語〕細川父子丹後國入來之事
細川父子〇藤孝、忠興の人々、天正九年の三月、宮津に至り、八幡山へ入城せられけるが、兼て河守邊より奥宮津までの地侍百姓等、細川に隨ひけり、

〔丹後國宮津志〕宮津城　古來宮津城ノ名アリト云ヘドモ、今ノ地ニ非ズ、上宮津ニ城跡アリ、八幡

與佐郡九十二村　加佐郡百三十七村　中郡三十三村　熊野郡五十三村　竹野郡七十三村

〔地勢提要 中〕郡邑島嶼奇名

丹後　與謝郡、弓木村、蒲入村、波路村、島陰村、中郡、新治村、熊野郡、品田村、多紀郡、安口村、八上上村、不來坂村、道入村、加佐郡、田邊、大丹生村、

〔釋日本紀 五述義〕丹後國風土記曰、與謝郡郡家東北隅方有速石里、此里之海有長大石、前長二千二百廿九丈、廣或所九丈以下、或所十丈以上廿丈以下、先名天椅立、後名久志濱、然云者國生大神伊射奈藝命、天爲通行而椅作立、故云天椅立、神御寢坐間仆伏、仍怪久志備坐、故云久志備濱、此中間云久志、自此東海云與謝海、西海云阿蘇海、是二面海、雜魚貝等住、但蛤乏少、

〔釋日本紀 十二述義〕丹後國風土記曰、與謝郡日置里、此里有筒川村、此人夫日下部首等先祖、名云筒川嶼子、爲人姿容秀美、風流無類、所謂水江浦嶼子者也、

〔元元集 七〕丹後國風土記曰、比沼山頂有井、其名云眞井、今既成沼、此井天女八人降來浴水、于時有老夫婦、其名曰和奈佐老夫、和奈佐老婦、此老等至此井、而竊取藏天女一人衣裳、卽有衣裳者皆飛上、但無衣裳女娘一人、卽身隱水、而獨懷愧居、爰老夫謂天女曰、吾無兒、請天女娘、汝爲兒、天女答曰、妾獨留人間、何敢不從、請許衣裳、老夫曰、天女娘何存欺心、天女云、凡天人之志、以信爲本、何多疑心、不許衣裳、老夫答曰、多疑無信、率土之常、故以此心爲不許耳、遂許、卽相副而往宅、卽相住十餘歲、爰天女善爲釀酒、飮一坏吉萬病悉除之、其一坏之直財積車送之、于時其家豐土形富、故云土形里、此自中間至于今時、便云比沼里、後老夫婦等謂天女曰、汝非吾兒、暫借住耳、宜早出去、於是天女仰天哭慟、俯地哀吟、卽謂老夫等曰、妾非以私意來、老夫等所願、何發厭惡之心、忽存出去之痛、老夫增發瞋願去、天女流涙微退門外、謂鄕人曰、久沈人間、不得還天、復無親故、不知由所居、吾何々々哉、拭涙嗟嘆、仰天歌曰、阿麻能波良、布、理佐氣美禮婆加須美多智伊弊治麻土比天、由久弊志良受母、遂退去而至荒鹽村、卽謂村人

丹波郡　大野　新沼〇本作沼、高山寺本作拾、丹波　周枳　三重　神戸　口杉

竹野郡　木津〇高山寺本註ニ岐部一　納野　鳥取　小野　間人　竹野

熊野郡　田村　佐濃　川上　海部　久美

〔續續修東大寺正倉院文書四十六〕造寺司　牒三綱所

合奉充封東仟戸〇中略　丹後國伍拾戸竹野郡網野郷〇中略

以前寺家雜用料、永配件封、當年所輸之物、爲始、奉充如件、今以狀牒、牒至准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日〇署名略

〔丹後國田數目錄帳〕注進丹後國諸庄郷保總田數帳目錄

加佐郡〇中略

一田。邊。郷。　百九拾九町五段貳歩　細川讃州〇中略

一有。道。郷。　五拾貳町六反百壹歩〇中略

與佐郡〇中略

一山。田。郷。　貳拾七町三拾四步内〇中略

〔郡名一覽〕一丹後國御料私領　丹州　南北一日半　五郡

高拾四万五千八百貳拾壹石壹斗八升二合　三百九拾貳ケ村

●宮津　百四十九里三町　●田邊　百四十五里　〇峯山百五十里餘

〈久美濱　百三十九里

〇按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕丹後　五郡、三百八十八村、

御料私領高十四万七千六百十四石八斗四合四勺六才

與謝郡

〔東大寺正倉院文書二十九〕但馬國正稅帳（○天平九年）

貲太政官遞送疫病者給粥糧料符來使單壹拾日（使五日、將從五日）

丹後國與謝郡大領外從八位上海直忍立、將從一人、合二人、經二日、日別給米三升五合、酒一升、

〔日本書紀（雄略十四）〕二十二年七月、丹波國餘社郡管川人、水江浦島子乘舟而釣、（○下略）

〔日本書紀（顯宗十五）〕穴穗天皇（○安康）三年十月、帳內日下部連使主（○注略）與其子吾田彥（吾田彥使主之子也）竊奉天皇與億計王、避難於丹波國余社郡、（○下略）

丹波郡

〔續日本紀（桓武三十七）〕延曆二年三月庚寅、丹後國丹波郡人正六位上丹波直眞養任國造、

中郡

〔丹州三家物語〕細川父子丹後國入來之事

一色殿は代々丹後の國主として、一色五郎近年は宮津八幡山に居城たりしが、天正三年、父左京大夫卒去の後國中の諸士、五郎殿を背き、我々にして曾以不敬時節なれば、本意にはあらねども、波に棹さす心地して、光秀（○明智）が計ひにぞ任らる、中郡竹野郡熊野郡は一色殿、與佐郡加佐郡は細川とさだめ、（○下略）

竹野郡　熊野郡

〔東大寺奴婢帳〕丹後國司解　申進上奴婢事

合賤肆人（奴二婢二）　價稻肆仟束（口別一千束○中略）

婢眞玉女年貳拾陸（○印日置部黑子、竹野郡戶主家部廣足之婢）　價稻壹仟束（○中略）

奴倉人年貳拾陸（○印左嬪黑子、熊野郡戶主大私部廣國之奴）　價稻壹仟束（○中略）

天平勝寶元年十二月十九日（○署名略）

郡

〔倭名類聚抄（丹後國）〕加佐郡　志樂（○高山寺本注之萬久）　高橋　大內　田造（○高山寺本作造）　餘戶　凡海（於布之安末）　志託（○高山寺本注之多加）　有道（○高山寺本注安里知）　川守　神戶

與謝郡　宮津　日置　拜師（○高山寺本注波也之）　物部　山田　謁叡（○高山寺本注安知江）　神戶

阿沙(紀)	餘社(紀) 余社(紀)				
伽佐					
加佐(カサ)	與謝(ヨサ)	丹波	竹野(タカノ)	熊野(クマノ)	管五
同	同(與佐)	同	同(多加乃)	同(久末乃)	同
同	同	同	同	同	五郡
賀佐(國) 加佐(知文)	與謝(知) 與佐(國文)	丹波(知) 中(國文)	同(知國文)	同(知國文)	
加佐(カサ)	與佐(ヨサ)	中(ナカ)	同(タクノ)	同(クマノ)	同
同	同	同	同	同	同
同	與謝	同	同	同	同
同(ワサ)	與佐(ヨサ)	同(ナカ)	同(タカノ)	同(クマノ)	同
同	與謝	同	同	同	同

加佐郡

〔東大寺奴婢帳〕丹後國司解　申進上奴婢事
合賤肆人(奴二婢二)　價稻肆仟束(口別一千束)
奴津麻呂年貳拾漆(印左口黶下黶子)(加佐郡主戸外正八位上椋椅部乙理之奴)　價稻壹仟束○中略
婢衣太須伎女年貳拾(印右高頰黶子)(加佐郡戸主漆君三使之婢)　價稻壹仟束○中略
天平勝寶元年十二月十九日○署名略

〔日本書紀二十九天武〕五年九月丙戌、神官奏曰、爲新嘗卜國郡也、○中略次(次此云須岐也)丹○波○國○訶○沙○郡○並食卜

〔類聚國史八十三政理〕大同二年正月辛丑、免丹後國加佐郡百姓租調、以水災殊甚、

國府
郡

諸良朝〈明〇元〉御世、和銅六年、割丹波國、置丹後國、

〔續日本紀 十武〕神龜四年十二月丁亥、先是遣使七道巡檢國司之狀迹、〈〇中略〉其犯法尤甚者、丹後守從五位下羽林連兄麻呂處流、

〔倭名類聚抄 五國郡〕丹後國〈國府在加佐郡、行程上七日、下四日、〉

〔倭名類聚抄 五國郡〕丹後國〈〇中略〉管五〈〇中略〉加佐　與謝〈與佐〉　丹波〈太迩波〉　竹野〈多加乃〉　熊野〈久萬乃〉

〔延喜式 二十二民部〕丹後國〈中〉管　加佐〈カサ〉　與謝〈ヨサ〉　丹波〈タニハ〉　竹野〈タカノ〉　熊野〈クマノ〉〈〇中略〉右爲近國、

〔拾芥抄 下〕丹後〈タンシウ丹州〉中、管五郡、〈〇中略〉加佐〈カサ〉、與謝〈ヨサ〉府、丹後〈タンゴ〉、〈〇後當作波〉片野〈カタノ、片又作竹〉熊野〈クマノ〉、

〔郡名考〕官用ヒル今ノ郡名　丹後　五郡　與佐〈ヨサ〉　加佐〈カサ〉　中〈ナカ〉　熊野〈クマノ〉　竹野〈タカノ〉

〔皇國郡名志〕丹後國　五郡

加佐〈カサ〉　●由良　田邊　●川尻　白澤　●中山　●市場　●松尾　●タワミ　丹波若狹界ヨリ東海ニ向

與謝〈ヨサ〉　●傍谷　宮津　●加悅　栗田　●岩瀧　●座頭コロビ　●引木　●經岬　但界ヨリ東北ノ海ニ貫　○水ノ江　浦島　○天ノ橋立

丹波　〈峯山〉　●是岡　○衛坂　國中

竹野〈タカノ〉　●夕日　○夕日ケ浦　浦島社　西北ノ海邊小郡

熊野〈クマノ〉　●久美　○佐野

丹波郡一曰中郡、

〇按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕丹波

六國史古書	延喜式倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革編	地誌提要	郡區編制

丹後國、驛馬、勾金五疋

〔日本國郡沿革考 三 山陰道〕丹後 和同六年四月、割丹波國五郡置、中國、管五郡、三百八十八村

與佐 九十二村 延喜式等作與謝、續紀作餘社、 加佐 百三十七村 古府治、天武紀作買沙、 中 三十三村 延喜式等作丹波郡、改今名、未詳在何時、 熊野 五十三村 竹野 七十三村

〔日本地誌提要 四十四 丹後〕沿革 和銅中、丹波五郡ヲ割テ本州ヲ置キ、國府ヲ與謝郡ニ設ク、今ノ府中驛 足利尊氏ノ反スル、一色範光ヲ以テ守護ニ補ス、正平中、山名時氏歸順シ、本州ヲ定メ、再ビ畔テ足利義詮ニ降リ、因テ守護トナル、子師義、孫滿幸、職ヲ襲グ、滿幸叔父氏淸ト共ニ叛シテ誅死ス、將軍義滿、復守護ヲ範光ノ孫滿範ニ授ケ、田邊ニ治ス、應仁ノ亂、孫義直、山名持豐ニ黨ス、文明ノ初、細川勝元ノ黨、若狹守護武田信賢、將軍義政ノ命ヲ以テ、本州守護ヲ兼ネ、一色氏ト兵ヲ交ル連年、終ニ入ル能ハズ、義直ノ玄孫義道殘虐、天正六年、織田信長、細川藤孝ヲ本州ニ封ジ、義道ヲ伐シム、義道敗死シ、子義俊弓木城與佐郡ニ居リ、猶三郡ヲ領ス、與佐、熊野、竹野九年、藤孝ノ子忠興、義俊ヲ誘殺シ、全州ヲ併セ、一色氏亡ブ、一色氏十世、凡二百四十餘年、慶長五年、德川氏、忠興ヲ豐前ニ徙シ京極高知ヲ封ズ、元和八年、高知卒ス、遺命シテ地ヲ三子ニ分ツ、嫡子高廣ヲ宮津ニ、七萬三千石二子高三ヲ田邊ニ、三萬五千石養子高通ヲ峯山壹萬三千石ニ封ズ、寛文六年、高廣ノ子高國、罪有テ國除シ、後封ヲ易ル者數氏、寶曆中、松平資昌封ヲ受ク、高三ノ孫高盛、豐岡但馬ニ轉ジ、牧野親成之ニ代ル、獨高通ノ後世襲シ、凡テ三藩、王政革新、田邊ヲ改テ舞鶴ト云ヒ別ニ久美濱縣ヲ置ク、既ニシテ藩ヲ廢シテ縣トナシ、又更ニ豐岡縣ニ合併ス、

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年四月乙未、割丹波國五郡、始置丹後國、

〔續日本紀考證 三 元明〕五郡 五上、一本有加佐與佐丹波竹野熊野十字、

〔先代舊事本紀 十 國造〕丹後國造

十八分、三里二十三町一十七間半（至濱宮村瀬戸口七町四間、從瀬戸口至北濱一十六町三十七間半、從北濱至夕日濱、一里一十六町廿五間半、）竹野郡淺茂川村　八町二十八間　小濱村（至網野村汎測一十五町、北極高三十五度四十分、）二里一十三町一十三間（至小濱村下四町三十五間）間人村、三十五度四十四分、（至若宮峠四町五十六間）三里三十四町三十三間半（至竹野村川口二十二町五十一間半）袖志村（至經ヶ岬一十四町五間）一里三町五十八間　與謝郡蒲入村（至ヘタノ濱七町七間半）一里一十町二十一間　本庄濱村（至濱尻一十五町二十五間半）二里三十二町一十三間半　龜島村立石（至鷲ヶ岬二十八町三十九間）三里一十三町六間半（至日出村三十三町四十間半）日置濱村、三十五度三十五分半、二十八町一十三間半　江尻村（歷天橋立至文殊門前二十七町四十間）九町　中野村（至廣相寺二十町五十九間）三里二十三町一十六間（至岩瀧村一里六町七間、從岩瀧至文殊門前、一里二十九町四十五間、）宮津魚屋町、三十五度三十二分、（歷本町及大手前、至大手橋外一十四町四十二間半）二十二町六間（至大手橋外七町五十八間）波路村（至上司町徑測二十三町二十三間）一里三十町四十間（至片島岬一里一十五町三十七間半）田井村（至元田井徑測五町三十四間）一里一十七町（歷黒崎、至元田井一里一十二町五十三間）同小濱（至島陰村徑測五町二十八間）一十六町五十五間半（至島陰村九町四間半）島陰村越濱（至小田村徑測八町三十一間）二里一十三町五十一間半（至無雙ヶ岬二十二町四十八間、從無雙ヶ岬至小田村一里六町四十一間半）上司町、三十五度三十二分半、一里二十七町五十八間　加佐郡由良村大川口、（至由良村宿所四町二十三間）三十五度三十分半、（從宿所沿川至上原井村、二里二十一町四十間、）四里二十一町四十五間（至下原井村四里九町三十五間半）田邊西町　二里一十二町一十八間半（至木無月社一十一町四十六間半、從社前至長濱村一里七町一十七間半、）長濱村五森（至北吸村徑測四町六間）三里一十九町二十二間（至北吸村二十三町二十四間）溝尻村（至泉源寺村市場五町一十六間、北極高三十五度二十八分半、）中田村（歷原村、至田井村徑測、二里一十六町三十八間、）八町四十二間　平村、三十五度三十分半、二里二十七町一間　千歲村（至潮崎三町一十四間）二里二十三町七間半（至博奕岬二十九町）小橋村（愛宕山麓三町二十七間）三十一町三間　野原村（至田井村徑測、二十七町五十五間半）一里二十五町四十七間　同梅ヶ谷（至野原峠一十町二十八間）一里三町四間　田井村、三十五度三十四分、一里五町一十七間半（至國界一里三十間）若狹國大飯郡上瀬村

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬〇中略

加佐郡　實測　戸島、周廻二十二町一十二間、　乙島、周廻八町五十八間、　アシヤ島、周廻七町、桂島、周廻一十一町三十一間、　毛島、（從南岬至北岬）三十一町、　遠測　蛇島　烏島　沖カツラ島　高島片島　馬立島　沖島　小島

地勢

〔易林本節用集下〕丹後、（丹州タンシウ）中、管五郡、南北一日半、魚鹽桑麻饒、以精好爲國產、中上國也、

〔日本地誌提要四十四丹後〕形勢　東西二隅相抱テ兩灣ヲナシ、山脈丹波ヨリ來リ、州内ニ散布シテ、西北ニ走リ、但馬ヲ界ス、地勢北スルニ隨テ漸ク卑ク、諸水皆北流ス、港市ノ地、頗ル繁富、景勝亦多シ、地味磽薄、居民農暇、蠶織ヲ業トス

道路

〔日本實測錄四街道〕從丹波國檜山、歷宮津及峯山、至久美濱、○中略

丹後國加佐郡舞鶴（本田邊）新町（至本町二丁四十八間、北極高三十五度二十六分半、又歷舞鶴城大手前及安久川、至木無月社、一十四丁六間、）三町五十一間　舞鶴西町　二十四町一十八間（至下福井村一十二丁五十七間）　上福井村　一里一十三町五十七間　桑飼下村　三里六町三十三間　河守（カウモリ）町關　九町二十七間　天田内（アマタウチ）村（至外宮二丁三十三間）　二十七町三十三間　與謝（ヨサ）郡宮村（又呼木伊勢、至内宮三丁二十一間、從内宮至天岩戸四丁三十間、）　二里九町五十七間（至普甲峠一里三十一丁二十一間）　小田村岩洞　一里二十九町六間（至宮津松原町一里一十五丁三十六間）　宮津本町　六町三十三間　宮津川本町　中一里一十九町五十四間（至須津村六丁三十六間）　弓木（ユキ）村（至中野村籠神社一里二十三丁三間）　二里三十五町三十六間　中郡峯山白銀町（至下町二丁三十三間、從下町至不斷町五丁一十八間、又從下町至竹野村四里一十六丁二十六間、）　一里四町五十一間　二箇村　一里三十町九間　熊野郡佐野村　二里二十三町五十一間　坂井村　三十五町三十九間　久美濱村（從檜山至久美濱）街道、通計三十一里二十二町九間、

〔日本實測錄一沿海〕從赤間關沿海至鞆山、○中略

丹後國熊野郡蒲井村（至旭濱一十五町五十七間）　三里二十六町三間（至大向村瀬戸口二十三町二十間）　久美濱村（至神谷神社三町四十七間）　二里七町四十九間半　湊宮村濱（至北浦徑測五町二十間）　一十四町五十六間　湊宮村、三十五度三

〔倭名類聚抄〕（これは誤り）

〔倭頭屋本節用集（天地）〕丹後（タンゴ）（丹州）

〔日本風土記（一　寄語島名）〕丹後（丹哥）

〔諸國名義考（下）〕丹後

さて丹波を前（ノチノタンバ）といはで、たゞに此國を丹後といへる事、前後の例にたがへり、

位置

〔地勢提要（乾）〕各國經緯度（附里程）

丹後宮津（魚屋町）極高三十五度三十二分、經度西三十一分半、從東京（同上（東海道）龜山、歴鈴鹿山）一百六十八里三十四町半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

丹後　宮津　三五度三二分〇〇秒　上司町　三五度三二分三〇秒

　　　田邊　三五度一六分三〇秒　由良村　三五度三〇分三〇秒（時〇中）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（時〇中）　丹後　宮津　西〇度三二分一五秒

疆域

〔日本地誌提要（四十四　丹後）〕疆域　東ハ若狹、西ハ但馬、南ハ丹波、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾三里餘、南北凡壹拾壹里餘、

島嶼

〔日本實測錄（九　島嶼）〕丹後國熊野郡　遠測　二島　カタ岩　女夫岩　モロコシ　八類　瓶島　三島　愛宕島　沖島　出島　角島

竹野郡　實測　三島（周廻四町二十八間、）遠測　大島　愛宕島　瓶島　小島　赤島　屛風岩

犬ヶ島　鷲嶋島　大チ島　千疊岩　舟タリ岩

與謝郡　實測　青島（從東岬至西岬二八町一十三間、）遠測　辨天島（蒲入村）　トヤ島　書籠岩　辨天島

（天橋）蓬萊岩　鈴島

名所

〔西北紀行上〕凡此國は京にちかくして、大江の坂の山一つへだゝりぬれど、民俗人家すべて畿内には大にかはりて、いぶせくいやし、

〔日本鹿子十一〕同國波〇丹中名所

大江山 京より未のかた也、山陰道へ下れば此山を越る也、京より行程五り餘也、西の裾に追分とて宿有、それまで七り也、あなうの里といふあり、三十三所の觀音立給ふ、追分より十八町西也、〇中略

生野 大江山より北、丹後さかいなり、〇中略

子年山 櫻山〇中略 村雲山〇中略 雲田村〇中略

坂田山 朝倉山 笛吹松 入佐山 桂山 青葉山 高倉山 鞍山

雜載

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒〇中略 丹波國五十人〇中略

諸國器仗〇中略 丹波國甲四領、横刀六口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

丹後國

丹波國ハ、タンゴノクニト云ヒ、舊クハ、タニハノミチノシリト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ若狹、西ハ但馬、南ハ丹波ニ界シ、北ハ海ニ面ス、東西凡ソ十三里餘、南北凡ソ十一里餘ナリ、此國ハ元明天皇ノ和銅六年、丹波國ノ五郡ヲ割テ置ク所ニシテ、國府ヲ加佐郡ニ置キ、加佐、與謝、丹波、竹野、熊野ノ五郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、後世丹波郡ヲ中郡ト改ム、明治維新ノ後、京都府ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕丹後太迩波乃美知乃之利

人口

〔宮中秘策 四〕丹波國　六郡〇中略

一人數貳拾七万六千三百三拾六人　内拾四万三千六百貳拾人 男 / 拾三万貳千七百五人 女

〔吹塵錄 五 人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 〇中略

御料私領

一人數貳拾八万貳千四百九拾三〇一恐三誤人　高貳拾九万三千四百四拾五石餘　丹波國

内拾四万六千七百八人 男 / 拾三万五千七百八拾三人 女

諸國人數調 弘化三丙午年 〇中略

御料私領

一人數貳拾八万九百四拾七人　高三拾貳万四千三拾六石餘　丹波國

内拾四万三千八百九拾壹人 男 / 拾三万七千五拾六人 女

風俗

〔人國記〕丹波國

丹波國之風俗ハ、人ノ氣隨弱、面々格々ニシテ、十人ハ十樣ニ而、我ガ身ヲ自滿シ、人ヲ誹リ、人之譽レ有ヲ可譽トハセズ、而偉之人之、夫ヨリ譽レ多キニタクラベテ是ヲ誹ルノ類ニテ、悉皆女人ノ風俗ニ不異、下劣モ從テ己ガ日夜勤ル處ノ耕作ノ道ハ第二ニ而、商賣ヲ本トスル事、偏ニ身之榮花ヲセン事ヲ常ニタクミ、都而勇寡フ而貉强タ、昨日味方ニ有シ人モ今日ハ敵トナリ、亦敵ニナリ替リ渡世スル類之風俗、最衰レ成形儀、不及是非ドモ也、雖然自然ニ能キ人出生セバ、氣ノ柔ナル意地ヨリ、成立風儀ナレバ、雙ブ方ナキ程ノ人モ出來ベシ、天下亂レテ是國ヲオサメバ、五日之内ニ可從ナリ、

〔改正人國記 下 丹波〕按に、當國は四方山々にて、皆谷間の人家なり、寒雪も、北國ほどはなけれども尤烈し、山谷の内の民なれば偏屈にせばかるべき事なれども、本書に說ごとく懦弱なる所以は、此國城州に隣て都に近が故、上邦の風俗を見に馴て、自氣の情出て、木强の質を失へり、婦人の風俗一入取しめなくして、疎末なる所なり、

丹波國（行程、上一日、下半日、）

調、両面五疋、小許春羅一疋、一窠綾七疋、二窠綾七窠綾各五疋、白絹十疋、綠帛十疋、帛二百廿疋、自餘輸絹綿、　庸、韓櫃卅二合、（塗漆著鏁五合、白木卅七合、）自餘輸米、　中男作物、黃蘗四百斤、紙、黒葛、漆、胡麻油、蜀椒、平栗子、搗栗子、

〔延喜式三十三大膳〕諸國貢進菓子（略○中）　丹波國（甘葛煎六升、甘栗子二捧、搗栗二石一斗、平栗子、椎子、菱子二捧、）

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥（略○中）

丹波國卅三種　芎藭、石韋、桔梗、石南草、升麻、夜干各十斤、黃連三斤二兩、前胡、藁本、秦皮各五斤、柴胡十二斤、王不留行十九斤、獨活卅四斤、茹莓五斤、草薢六斤、白朮十二斤三兩二分、藍漆十五斤八兩、漏蘆十三斤、人參三斤、龍膽、商陸各七斤、玄參四斤、黃檗廿四斤、白芷、蛐楡各九斤、石解廿七斤、厚朴廿斤、芎藥、恒山各八斤、連翹四斤八兩、地脫皮五兩、榧子五斗五升、署預二斗二升二合、麥門冬一斗、桃人六升、車前子二斗五升五合、菟絲子二升一合、麻子三斗五升、鬼箭一斗三升三合、呉茱萸二斗二升、蜀椒二升、鹿角一具、白殭蠶二兩、

〔延喜式三十九內膳〕年料（略○中）

丹波國（生鮭三擔六隻、三度、鮨年魚二擔四壺、鹽塗年魚二擔、入二折櫃一）

〔毛吹草三〕丹波

前胡　桔梗　茯苓　柴胡　款冬　似人參（ホタリニンジン）　莉安　椿灰　辛灰（ミサ、キノ灰）　蠟　松茸

又旅　獨活　大納言小豆　林檎　木瓜實　梨　鮎　山椒魚　鹿皮　疊表　龜山花落米　山國楮丸太（是ヲ嵯峨ニ出ス故ニ、サガ丸太トモ云、）　杉皮　筆柿　弓削山弓　紘葉（正月用之）　和智糸　綿　煎茶　胡桃

父打栗　野々村多葉粉　箸木　梢木　雀部矢根　鑓　刀ノミガキ（カザノ名ロ人ト云）　鬮　太布　前垂

蚊帳（麁相物也）　旅簾　佐伯砥　柏原墨（墨ニヤリト云）　葉茶壺　山椒　䌹皮

（海東諸國記）丹波州　郡五、水田一千八百四十六町九段、

（日本鹿子十一）丹波國六郡、中上國、四方二日、知行高二十八万五千七十石、

（官中秘策四）丹波國　六郡〇中略

一石高貳拾九万三千四百四拾五石餘

（吹塵錄五人口及國高）天保度御國高調〇中略

丹波國御料私領　一高三拾貳万四千百三拾六石貳斗六升八合六勺七才

出擧稻

（延喜式二十六主稅）諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略

丹波國正稅廿三万束、公廨廿五万束、國分寺料四万束、文殊會料二千束、國成寺料一千束、鷄園寺料一千束、修理池溝料三万束、救急料四万束、修理驛家料二万束、官舍料四万束、造院料一万束、

（倭名類聚抄五國郡）丹波國、〇中略　管六（中略）正公（公各廿字）二十三萬束、公廿五萬束、本穎六十六萬四千束、雜穎十八萬四千束、

（延喜式十五內藏）諸國年料供進〇中略　墨黑葛百斤（中略）廿斤〇中略丹波國　交易錦〇中略　一千五百九十四絢、七百五十絢、丹波國所進、

國産貢獻

（延喜式二十三民部）年料舂米〇中略　丹波國內藏廿石、大炊五百石、廿六石、〇中略

年料租舂米〇中略　丹波國一千石〇中略

年料別貢雜物〇中略　丹波國墨二百廷、紙麻七十斤、漆二升、七升、紬一百廿鐵、以五十把、筥、綾、把、別紙五十枚、箸、蠟一石、鐵、紙麻一百斤、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略　丹波國十一壹三口、大一升、八口各小一升〇中略　右十箇國爲第四番（庚戌年）〇中略

交易雜物〇中略　丹波國白絹十二疋、緋絹五百五十疋、綿七百五十屯、油三石、東革十張、席十石、大豆脊石、綱麻二千五石、黑千斛、石、鹼、黑葛廿斤、苅安草五百圍、隔三年進、曾大豆五石、

（延喜式二十四主計）丹波〇中略　右廿五國中綠〇中略

丹波〇中略　右廿九國纐絹〇中略

藩封

〔慶應元年武鑑〕青山左京大夫忠敏雁間四品元治元子五月叙○中略六万石　居城丹波多記郡笹山江戸ヨリ東海道、百廿七里餘、木曾路百四十五里餘

前田主膳正居、慶長十三、松平周防守康重、元和二、松平丹波守康長、同五、松平伊豆守信吉、同山城守忠國、慶安二、松平若狹守康信、同駿河守典信、同紀伊守信岑、寬延元、青山因幡守忠朝、以後領之。

〔慶應元年武鑑〕松平豐前守信義從四位侍從　五万石　居城丹波桑田郡龜山江戸ヨリ百廿八里

當城信長時代、明智日向守光秀居、後前田德善院玄以、慶長十四、岡部內膳正長盛、元和七松平右近將監成重、寬永十一、菅沼織部正定昭、慶安元、松平伊賀守忠晴、同伊賀守忠昭、貞享元、久世出雲守重之、元祿十、井上大和守正峯、常州笠間ヨリ替、同十五、青山因幡守忠重、同因幡守俊春、同因幡守忠朝、寬延元ヨリ松平紀伊守信岑、以後領之。

朽木近江守綱張雁間朝散大夫　三万二千石　居城丹波天田郡福知山江戸ヨリ百四十二里

當國者信長時代、明智領、後秀吉領、天正八、杉原七郎左衞門家次、同十八、小野木縫殿介、慶長三、有馬玄蕃頭豐氏、元和七、岡部內膳正長盛、寬永元、稻葉淡路守紀通、慶安二、松平主殿頭忠房、寬文九、朽木伊豫守植昌、以後代々領之。

小出伊勢守英尙柳間朝散大夫　二万六千七百拾一石餘　在所丹波船井郡園部江戸ヨリ百三十一里

當國者明智日向守光秀領、天正十八、丹波少將秀勝持、元和五、小出伊勢守吉親、以後代々領之、

織田山城守信民柳間從五位上元治元子五月叙　二万石　在所丹波氷上郡栢原江戸ヨリ百三十六里

元祿年中、和州宇田ヨリ移之、○節略

〔慶應元年武鑑〕九鬼大隅守隆備柳間從五位上元治元子五月叙　一万九千五百石　在所丹波何鹿郡綾部江戸ヨリ百四十里

往古別所豐後守居、寬永年中ヨリ九鬼氏領之。

谷大膳亮衞滋柳間朝散大夫　一万八十二石餘　在所丹波何鹿郡山家江戸ヨリ百三十九里

寬永年中ヨリ、谷氏代々領之。○節略

田數石高

〔倭名類聚抄五國郡〕丹波國○中略管六田萬六百六十六町二百六十二步

〔伊呂波字類抄太國郡〕丹波國○中略本田一万八百五十五丁

〔拾芥抄中末本朝國郡〕丹波上近六郡○中略田萬八百五十町

丹波國賀舍庄○中略

建長二年十一月　日　　　　愚老在御判

〔當宮緣事抄〕當宮神官久弘忠康法師相論、丹波國栢原庄所職等事、如此神領下職之類、非聖斷之限、可存知之旨、御意色所候也、仍執達如件、

弘安九三月十二日　　皇后宮大進顯範

八幡別當法印御房

〔東寺百合文書せ二十八之三十八〕丹波國葛野庄實莊嚴院寺用事、院宣并申狀副具書謹下預候畢、近年當庄下司季正押妨所務、打止本所年貢公事之間、被申下遠勅院宣、被經御沙汰最中候、仍爲得御意、院宣并武家奉書案進覽之候、爰如申狀者、寺用之足以外加增參差候歟、所詮御沙汰落居候者、任先例可令勤仕候、以此趣可被仰含寺用方之雜掌候哉、恐惶謹言、

貞和二年十月十九日　　實信請文

〔安國寺文書乾〕寄進　丹州安國寺本號光福寺　同國春日部庄內中山村事

右爲當寺興隆所寄附也者、早守先例可被致沙汰之狀如件、

貞和二年十二月廿八日　　正二位源朝臣○足利尊氏

〔嘉吉記〕竹下ノ合戰ニ貞範○赤松圓心次男無比類忠戰ナレバ、建武二年十二月十二日、貞範ニ播磨國并丹波國ノ內春日部ノ庄ヲ下シ賜フ御教書ヲ給ケリ、

〔六波羅御下知〕嚴神院領丹波國波波伯部保下司氏澄代良盛與雜掌觀囲相論下司職名田畠、并刃傷狼藉等事、○中略

正安元年十二月廿三日　　右近將監平朝臣判

前上野介平朝臣判

豫州逐電以後、可返上由被申之處、本自豫州者、傳領之主也、爲本主有寄奉志由、被仰遣畢云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年十月廿五日壬午、於勝長壽院、有如法經十種供養、是故鎌田兵衛尉正清息女所修也、且爲奉訪故左典廐〇源義朝御菩提、且爲加亡夫追福、一千日之間、於當寺屈淨侶、令行如說法華三昧云云、〇中略彼女性父、左兵衛門正清者、故大僕卿功士也、遂於一所終其身、仍今將軍家〇源賴朝殊令憐愍給之間、雖被尋遺孤、無男子、適此女子參上、以尾張國志濃幾、丹波國田名部兩庄地頭職、令恩補給訖云云、

〔古文書類纂上下知狀〕可早停止守護所使入部丹波國上林庄事

右任度々下知狀、停止彼使入部、謀反殺害躰出來之時者、爲庄家之沙汰可召渡守護所之狀、依鎌倉殿仰下知如件、

寬喜元年四月十日

武藏守平花押

相模守平花押

神主賴康花押

〔松尾神社文書一〕

讓與 丹波國雀部庄事

右件庄者、親父賴親神主起請云、當神領者、入功力所申達也、雖非總官、依賴親之讓可知行也者、相賴法師依父讓、多年無他坊領掌畢、仍相副公驗幷起請、永所讓與男櫟谷禰宜相久也、但於年貢者、任賴親之起請、可進上社家狀如件、

建久八年二月廿五日

沙彌證阿相賴也花押

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分 條々事

一寺院〇中略 東福寺〇中略 院領〇中略 丹波國賀舍庄〇中略 侗侍殿〇中略 家領 女院方〇中略

用院宣、縱不遑重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日　　正四位下源朝臣御判

(神護寺文書)院廳下　丹波國吉富庄官等

可早以當庄爲神護寺領事

右件庄內、於宇都鄕者、依爲源氏當領、前兵衞佐賴朝朝臣申請所寄彼寺也、至于庄者、有別御願、同所被施入也者、以件鄕幷庄、可爲神護寺領之狀、所仰如件、庄官等宜承知勿違失、故下、

元曆元年五月十九日　　主典代織部正兼皇后宮大屬大江朝臣(花押)○下略

(吾妻鏡六)文治二年三月二日庚辰、今日故前宰相光能卿後室比丘尼阿光、去月進使者於關東、相傳家領丹波國栗村庄、爲武士被成妨由訴申之、仍早可停止濫吹之趣被仰云云、

(龜山院御凶事紀)嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、烏帽相具御書、御手箱□□□(右日予預置也)參御所、○中略女院御方自餘御書等、(各有御封、以檀紙被立文、其押折上下、又有銘等、)悉盛宮蓋、○中略

一通(銘曰書院御方)

播磨國多可庄　丹波國栗村東西庄○中略

右庄々可讓進也、輕微之至、頗雖有其憚、爲顯志不顧恐者也、

嘉元三年七月廿六日　　御判

(吾妻鏡六)文治二年三月八日丙戌、源藏人大夫賴兼愁申、丹波國五箇庄事、二品(賴朝)○源可令執申京都給之由、及御沙汰、是入道源三位卿(賴政)家領也、治承四年、有之之後、屋島前內府知行之、今度沒官領內、被付賴兼、而可爲仙洞御領之由有仰歟、　廿六日甲辰、以紀伊權守有經爲御使、被充申丹波國篠村庄於松尾延朗上人、本是三位中將重衡卿所領也、後爲義經之勳賞地也、而豫州事寄附上人、上人雖辭依不等閑、領納之後、爲令富慰民戶止乃貢、勸百姓令唱彌陀寶號、隨其數反出返抄用所濟云云、

莊保

に至參著、次日廿七日に龜山より愛宕山へ佛詣、一宿致參籠、〇中略五月廿八日、丹波國龜山へ歸城、

〔丹州三家物語〕細川父子丹後國入來之事

丹波福知山の住人細川兵部大夫藤孝子息與一郎忠興、丹後入國の由來をくはしく尋るに、〇下略

〔東大寺要錄 六〕一諸國諸庄田地〇長德四年注文定中略

新發田〇中略

丹波國　多紀郡後河庄田廿八町三段二百五十六步　氷上郡佐比庄

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論企掠領、兼又有由緒雖令傳領、子孫斷絕處々付本所事、〇中略

極樂寺領〇中略　丹波國　賀美庄〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判〇下略

〔神護寺文書〕寄進　神護寺領事

在丹波國宇都庄壹處者

右件庄者、相傳之所領也、而殊爲興隆佛法、限永代所寄進彼寺領也、〇中略

壽永三年〇元曆元年四月八日　前右兵衛佐源朝臣花押

〔賀茂注進雜記 神領下〕同〇壽永三年〇元曆元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十二ケ所、任院廳御下文可止下諸國、可早任院廳御下文、停止方々狼藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事、〇中略

武家狼藉之由、有其沙汰云々、

丹波國　由良庄〇中略　私市庄〇中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不

〔郡國提要〕丹波　六郡八百八十村

高（御料私領）三十二万四千百三十六石二斗六升八合六勺七才

桑田郡二百十五村　船井郡二百三村　何鹿郡七十一村　氷上郡百七十三村　多紀郡百十四村　天田郡百四村

〔地勢提要特〕郡邑島嶼奇名

丹波　桑田郡、綱川村、弓槻村、並河村、中地村、火太村、笑路村、神地村、何鹿郡、天田郡、土師村、船井郡、大朴村、横生村、氷上郡、野上野村、歌道谷村、荒川村、朝坂村、石負村、氷間下村、栗住野村、拳田村、

〔日本書紀六垂仁〕八十七年、昔丹波國桑田村、有人名曰甕襲、○下略

〔千載和歌集十賀〕平治元年、大嘗會主基方稻春歌、丹波國雲田村をよめる、　刑部卿範兼

あめつちのきはめも知らぬ御代なれば、雲田の村のいねをこそつめ

〔新古今和歌集七賀〕仁安元年、大嘗會主基方稻春歌、丹波國長田村をよめる、　權中納言兼光

神代よりけふのためとややつかほになが田のいねのしなひ初けん

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月十四日壬子、丹波國篠村領、○中略先日被奉讓實門室家、將軍家御乳母云々

〔新撰長祿寬正記〕同年○寬正三年十月朔日、土一揆ノ大將蓮田、篠ニ通ル、處ナクシテ淀ニテ誅ラレケリ殘黨ドモ丹波國須智村ニテ皆被誅、

〔兩丹縣指掌多紀郡一〕一篠山城町元黑岡村の土地なり、古城の麓、城下上川原町中以東は、元澤田村の土地なり、○中略

篠山町○中略

總町筋千貳百九間壹尺五寸　總町數貳拾町九間壹尺五寸

〔信長公記十五〕天正十年五月廿六日、惟任日向守○光秀中國へ爲出陣坂本を打立、丹波龜山之居城

〔倭名類聚抄八丹波國〕桑田郡 小川（乎加波） 桑田（久波多） 漢部 宗我部 川人（加波比土） 荒部 池邊 弓削

山國（有頭、○頭、高山寺本作ㇾ頭） 横作 佐伯

船井郡 刑部 志麻 船井（布奈井） 出鹿 田原 餘戸 城崎 野口 須知 鼓打 木前

多紀郡 草上（久佐乃加美） 宗部 眞繼 河內 神田 榛原 餘戸 日置

氷上郡 前山（佐木也末） 竹田 美和 春部（加須加倍） 船城（布奈木） 佐沼 伊中 賀茂 氷上（比加美） 石生（伊曾布） 餘戸

天田郡 六部 土師 宗部 雀部 和久 拜師 奄（○奄、原作ㇾ畜、據二高山寺本一改）我 川口 夜久 神戸

何鹿郡 賀美 拜師 八田 吉美 物部 吾雀 小幡 高殿 私部 栗村 高津 志麻

文井 後（○高山寺本作ㇾ漢）部 餘戸 三方

〔千載和歌集十賀〕白川院の御時承保元年、大嘗會主基方稻舂神。田。鄕。をよめる、　前中納言匡房

ちはやぶる神田のさとのいねなれば月日とともに久しかるべし

〔細川勝元記〕丹波ノ守護代內藤備前守、此由ヲ聞テ、兼テ思ヒ儲シ事ナレバ、國（○但馬）境夜。久。鄕。迄打出シテ、回天ノ力ヲ出シ、爰ヲ先途ト防ギ戰フ、

〔郡名一覽〕一丹波國（御料私領）　丹州　四方二日　六郡

高貳拾九万三千四百四拾五石五斗四升七合四才　九百貳ケ村

●笹山（東海道百廿七里餘木曾路百四十九里）　●亀山 百二十八里　●福智山 百四十二里

○園部 百三十一里　○綾部 百四十里　○柏原 百三十六里

○山家 百三十九里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

貢、附左京一條二坊、

氷上郡

(丹波志)氷上郡

此郡國中ノ低地ナリ〇中略

四疆、東ハ多紀郡、南及西ハ播磨國多可郡、西北ハ但馬國養父郡、北及東北ハ但馬國養父郡、北及東北ハ天田郡、各山ヲ以テ境フ、

(日本書紀二十九天武)十三年十二月己卯、丹波國氷上郡言、有十二角犢、

天田郡

(丹波志)天田郡

四疆、東ハ船井郡、東北ハ何鹿郡、東南ハ多紀郡、氷上郡、西ハ但馬國出石郡、北ハ丹後國、

(東大寺要録八入)勅旨可有封庄事之中

金光明寺宛食封一千戶〇中略

丹波國天田郡五十戶〇中略

奉今月廿一日勅偁、件封宛金光明寺、其收停期更待後勅者、

天平十九年九月廿六日

(續日本紀二十七稱德)天平神護二年七月己卯、散位從七位上昆解宮成、得似白鑞者以獻、言曰、是丹波國天田郡華浪山所出也、

何鹿郡

(丹波志)何鹿郡

四疆、東北ハ若狹國大飯郡、東南ハ桑田郡及船井郡、西南ハ天田郡、西北ハ丹後國加佐郡、

(三代實錄七清和)貞觀五年六月三日甲午、以丹波國何鹿郡佛南寺爲眞言院、即付國司檢校、

(細川大心院記)五月〇永正四年中旬ノ比、若狹國ヲ御立アリテ、丹波國何鹿郡高津ト云所ニ御陣ヲメサル、

〔日本書紀十七繼體〕八年○雄略十二月壬子、大伴金村大連議曰、○中略今足仲彥天皇○仲哀五世孫倭彥王、在丹波國桑田郡、○下略

〔續日本後紀七仁明〕承和五年二月庚寅、丹波國桑田郡空閑地三十町賜諱、○文德田邑

船井郡

〔丹波志〕船井郡

四疆、東ハ幸田郡、南ハ攝津國能勢郡、西ハ多紀郡、天田郡、何鹿郡、北モ亦何鹿郡、皆山ヲ以テサカユ、

但桑田郡川關以北、山科以南ノ間ハ然ラズ、樹ヲ植準シ境トス、是ヲ見分ノ松ト云、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年十月十九日甲戌、太政官奏、沙彌敎豐、俗名上毛野豐麻呂、沙彌善福、俗名水取貞江、於丹波船井郡、率徒僧四十餘人、殺勸學院使日奉全吉、支解其體、行火燒民屋二家、

多紀郡

〔丹波志〕多紀郡

此郡國中ノ高地ナリ、因テタカ郡ト呼ベキヲ、通音ヲ以テタキ郡ト號ス、松下五右衛門ノ話ナリ、又一說ニ、此郡ニ瀑布アリ、因テ號ス、○中略

四疆、東ハ船井郡、南ハ攝津國能勢郡及有馬郡、南西ハ播磨國加東郡、西ハ播磨國多可郡及氷上郡、北ハ天田郡、東北モ船井郡、各山ヲ以テ境フ、但天田郡菟原ノ道境ハ、平地ニ岩在テ境トス、

〔東大寺正倉院文書十二〕山背國愛宕郡雲下里計帳

(續日裏書)

山背國愛宕郡出雲鄕雲下里神龜三年史生從八位下閒人宿禰男君

戸主上毛野君族長谷年伍拾壹歲○中略

從父妹出雲臣子足賣年參拾參歲　丁女　右人但波國多。矣。郡。草上鄕在○中略

戸主出雲臣馬養年參拾肆歲○中略

・母出雲臣依賣年陸拾陸歲　耆女　頸黑子、丹。波。前。國。多。貴。郡。、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年八月癸卯、丹波國多紀郡人、齋院主典從七位上常澄宿禰成主、改本居、

國府	郡

以ノ子茂勝、襲心シテ收封セラレ、松平康重之ニ代リ、徙テ篠山ニ治ス、後ニ青山忠朝 其餘、州內封ヲ受ル者龜山、岡部長盛、後松平信岑、園部、小出吉親 柏原、織田信休 綾部、九鬼隆秀 山家、谷衞好 凡七藩、王政革新、改テ縣トナシ、又廢シテ京都府及豐岡縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕丹波國造

志賀高穴穗朝○成務御世、尾張同祖建稻種命四世孫大倉岐命定賜國造、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、從五位上大神朝臣狛麻呂爲丹波守、

〔倭名類聚抄五國郡〕丹波國國府在桑田郡、行程上一日、下半日、

〔伊呂波字類抄太國郡〕丹波國(中略)桑田府

〔倭名類聚抄五國郡〕丹波國○略○註 管六○註略 桑田國府、久波太、 船井不奈井 多紀 氷上比加三 天田安多 何鹿伊加留加

〔延喜式二十二民部〕丹波國、上、管 桑田 船井 多紀 氷上 天田 何鹿○中略 右爲中國、

〔皇國郡名志〕丹波國 六郡

桑田 ●本目 ●鳥羽 龜山 穴太 ●板橋 城攝界、江若ヘモカヽル

多紀 ●市原 ●古市 ●福住 ●籾井 篠山 攝界

天田 福知山 ●生野 ●矢原 國中

船井 園部 須知 ●檜山 ●水呑 ●下闢 國中郡

氷上 ●竹田 ●小高 ●追入 柏原 ●石貫 ●遠坂 國中ヨリ但播界ニ至

何鹿 綾部 ●物野邊 ●梅迫 山家 丹後界

○按ズルニ、本書及●次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕丹波

官驛

建置沿革

〔信長公記十五〕天正十年六月朔日夜に入、丹波國龜山にて惟任日向守光秀企逆心、(中略)信長を討果し、天下主と可成調儀を究、龜山より中國へは三草越を仕候、老之山へ上り、右へ行道は山崎天神馬場攝津國皆道也、左へ下れば京へ出る道也、

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬(中略)

丹波國驛馬(大枝、野口、小野、長柄、星角、佐治各八疋、日出、花浪各五疋、)傳馬(桑田、多紀、氷上郡各五疋、)

〔日本國郡沿革考三山陰道〕丹波　古作旦波(古事記)　上國、管六郡、八百八十村、

桑田(二百十五村垂仁紀桑田村、卽此地、)　船井(二百三村)　何鹿(七十一村)　氷上(百七十三村)　多紀(百十四村)　天田(百四村)

〔日本地誌提要四十三丹波〕沿革　古ヘ國府ヲ桑田郡ニ置、(遺址、今船井郡屋賀村ニアリ、)鎌府ノ時、土肥實平守護ノ事ヲ行フ、建武中興、參議源忠顯ヲ國司ニ任ジ、碓井盛景守護代トナル、足利尊氏ノ反スル、仁木頼章ヲシテ州內ヲ徇ヘシメ、頼章ノ子義尹ヲ以テ守護トナス、正平中、山名時氏吉野ニ歸順シテ本州ヲ略定ス、既ニシテ山陰諸州ヲ以テ畔キ、足利義詮ニ降リ、因テ守護ヲ領ス、時氏卒シテ第四子氏清職ヲ襲グ、元中八年、謀反シテ誅ニ伏ス、將軍義滿、細川頼元ヲ以テ守護トナシ、子孫ニ傳フ、五世政元ニ至リ、高國、澄之澄元ヲ義子トシ、守護ヲ澄之ニ傳フ、永正四年、政元其下ニ弑セラレ、澄之代リ立ツ、澄元入テ亂ヲ討ジ、澄之ヲ殺ス、明年、高國、將軍義稙ヲ奉ジテ兵ヲ擧ゲ、澄元ヲ走ラシ、其地ヲ併ス、大永中ニ至リ、八上城主波多野稙通、(多紀郡)高國ノ令ヲ奉ゼズ、近郡ヲ鈔略シ、遂ニ自立シテ州主ト稱ス、傳ヘテ秀治ニ至ル、天正七年、織田信長、其將明智光秀ヲシテ來リ伐タシム、光秀秀治ヲ誘殺シ、悉ク州內ヲ平ラグ、信長光秀ヲ封ジ、龜山ニ治ス、十年、光秀誅死シ、豐臣氏養子秀勝ヲ封ジ、福知山ニ鎭セシメ、(拾萬石)前田玄以ヲ八上ニ封ズ、文祿中、秀勝卒シテ嗣ナシ、福知山ヲ小野木公鄕ニ賜フ、(三萬千石)關原役後、公鄕ノ封ヲ沒シ、有馬豐氏ニ賜フ、(後ニ徙木福島)玄

間三十一町四十二間（至粟住野村一十二丁二十四間）佐治新町（至佐地神社二丁五十七間）一里二十八町三十六間
遠坂村、三十五度一十七分半、一里二十六町三十六間（至國界三十二丁三十間）但馬國朝來郡粟鹿村（中略）

從丹波國栢原歷酒見及仁豐野至姬路

丹波國氷上郡栢原下町三里七町三十三間（至佐野村一里二十四丁三十六間）和田村二里一十二町三十六間（至國界小野尻峠一里二丁三間）播磨國多河郡中村町（中略）

從丹波國龜岡（本龜山）歷檜山及綾部至粟野

丹波國桑田郡龜岡河原村一里一十六町三十三間（至宇津根村四丁二十七間、從宇津根至並河村、一十六丁九間）千原村（又呼高本都婆）二十町二十間船井郡八木村八木町一里一十八間鳥羽村一里三町五十九間半（至國部新町三十一丁一十四間半）國部本町（至國部陣屋三丁）一里三十三町四十八間（至須知村本町一里二十八丁一十二間）須知村新町一里二十一町三十九間（至須知村久保町限五丁二十一間）橋爪村檜山二里七町三十二間下大久保村一里五町三十間天田郡菟原下村一里五町九間千束村一里二十四町三十間宮村岩崎一里九町一十二間土師村新町七里二十一間同大川河原（至大河内一丁三十六間）三里三町六間（至觀音寺村一里一十四丁四十一間、從觀音寺村至綾部西新町、一里二十六丁五十八間、）何鹿郡綾部本町二里九町五十七間天田郡大原村二里四町一十二間船井郡粟野村（從龜岡至粟野）街道通計二十二里二十九町七間、

從丹波國檜山歷宮津及峯山至久美濱

丹波國船井郡橋爪村檜山一里四町五十七間粟野村三里一十三町（至和知川岸三里一十一町六間）何鹿郡山家中町一里二十七町三間安國寺村梅迫三里一十九町五十四間（至國界一里一十六丁三十間）
丹後國加佐郡舞鶴（本田邊）新町（中略）

從攝津國瀨川歷有馬至坂本（中略）

丹波國多紀郡立杭村一里六町五十七間（至國界二十四丁一十三間）播磨國加東郡清水寺

熊村　三里一十二町二十七間（至蒲生村二十一丁九間）　多紀郡福住村　三里六町三十六間（至大芋川岸二里二十丁五十七間）　篠山二階町、三十五度四分半、一里一十五町五間半（至東岡屋村一十二丁三十九間）　大野村　二里二十九町三十五間半　古市村（歷董木庄村至廣野村三里一丁五十三間半）　一里二十六町二十七間　市原村、三十五度、二十六町四十七間（至國界三丁九間）　播磨國加東郡清水寺　（從龜岡至清水寺）街道、通計一十六里一十九町一間、

從丹波國東岡屋歷福知山及出石至城崎

丹波國多紀郡東岡屋村　一里三町二十七間　宮田村　二里五町一十八間　氷上郡國料村、三十五度九分、一里一十二町三間半（至大多利村一里六丁六間半）　小多利村、三十五度一十二分、一里二十四間　岡本村　一里三町五十七間　下竹田村　一里一十三町一十二間　天田郡土師村　八町四十五間　堀村蛇ヶ端　四町三十九間（至福知山京口門二丁三十間）　福知山呉服町（歷鍛町至寺町六丁二十一間）　五町一十五間　同下紺屋町（至養老町三十三間、北極高三十五度一十七分半）　二町二十八間　同寺町　三十一町（至鍛物師町二丁四十二間）　荒河村狹間（歷下天津村至河守町二里二十丁四十四間）、　二十五町二十四間　立原村　五町四十八間　野花村　七町一十八間　夷村　三十二町三間　一ノ宮村　一里三町三十三間　上佐佐木村（又呼小野原）　一里九町四十五間（至國界登尾峠一十丁一十二間○中略）　但馬國出石郡久畑村（○中略）

從丹波國大澤歷栢原及養父市場至大磯

丹波國多紀郡大澤村、一里一十六町二十四間　大山下村北野（歷木之部村至宮田村二十一丁二十七間）、　三十町五十七間　追入村、三十五度七分、七町一十二間　同追分（至國料村三十一丁四十八間）　一里一十二町四十二間（至栢原新町一里一丁四十五間）　氷上郡栢原本町（至八幡社三丁六間）　二町五十七間　同下町、三十五度八分半、二十一町三十三間　石負村（至黑江村一里一十丁五十二間、從黑江至大多利村三十二丁、又從黑江至兵主神社九丁一十二間、）　二里四町　伊佐口村方町　四町四十八間　御油村（至圓通寺一十一丁一十五間）　一十四町一十二間　沼村（至東蘆田村高座神社九丁一十五

福知山　三十五度一十七分三〇秒（〇東四里差閥）

疆域

〔丹波志（多紀郡一）〕四疆、東北ハ近江、東ハ山城、南ハ攝津、西南ハ播磨、西ハ播磨及但馬、北ハ丹後、若狹ナリ、

〔日本地誌提要（四十三丹波）〕疆域　東ハ山城、東北ハ近江、西ハ但馬、西南ハ播磨、西北ハ丹後、南ハ攝津、北ハ若狹ニ至ル、東西凡壹拾四里壹拾八町、南北凡壹拾貳里、

地勢　地味

〔易林本節用集（下）〕丹波（タン州丹）上、管六郡、四方二日、王城附庸之國、穀米柴薪多、中上國也、

〔日本地誌提要（四十三丹波）〕形勢　山脈近江若狹ヨリ來リ、縱横分布、地形高隆、南北二隣ノ諸水、多ク源ヲ茲ニ發ス、東北ハ樹稠ク谷邃シ、西南稍平曠ナリ、地質肥瘠一ナラズ、

道路

〔日本實測錄（四街道）〕從西京歷小野至鳥羽（中略）〇

丹波國桑田郡浮井村　二里一十九町三十九間　船井郡殿田村　二里二十八町三十二間　鳥羽村

（從西京至鳥羽）街道通計一十二里一十三町四十六間、

從山城國朱雀歷龜岡及能勢至十日市（中略）〇

丹波國桑田郡王子村峠、（又呼老坂）三十四度五十九分半、一里二十二町一十八間　龜岡旅籠町、三十五度一分、四町五十一間　同紺屋町　二十七町三十間　穴太（アナフ）村　二里二十四町九間　牧村、三十四度五十六分半、八町三十間（至國界七丁）　攝津國能勢郡餘野村（中略）〇

從山城國山崎歷愛宕山至高卒都婆（中略）〇

丹波國桑田郡馬路村、三十五度三分、二十一町三十九間　千原村（又呼高卒都婆）

（從山崎至高卒都婆）街道、通計八里一十八町五間半、

從丹波國龜岡（本龜山）歷笹山至清水寺

丹波國桑田郡龜岡紺屋町　九町五十一間　同河原町　三里一十二間（至餘部町限八町九間）　船井郡赤

位置

名義は田庭なるべし、度會の外宮の豐受大神、此國にましまして、內宮の皇大御神の朝夕の大御食奉り給ふ故に、しかおひし名なるべし、延暦儀式帳に、天照坐皇大神云々、大長谷天皇〇略御夢爾誨覺賜久、吾高天原坐氐、見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴、然吾一所耳不坐波甚苦、加以大御饌毛、安不聞食坐故爾、丹波國比沼乃眞奈井爾坐、我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支、爾時天皇驚悟賜氐、即從丹波國令行幸氐、度會乃山田原乃下石根爾、宮柱太知立、高天原爾比疑高知氐、宮定齋仕奉始支、是以御饌殿造奉氐、天照坐皇大神乃朝御饌夕大御饌乎、日別供奉云々、とあるにて、朝夕の大御饌を主り給ふ神の坐しゝ國なるが故に、田庭と號けゝむ、庭とは平かに廣きをいふ、齋清めたる稻を忌庭之穗といふにてもしらる〇下略

〔古事記中開化〕此天皇、娶旦波之大縣主名由碁理之女、竹野比賣、生御子比古由牟須美命、〇中略次山代之大筒木眞若王、〇中略此王娶丹波之遠津臣之女、名高村比賣、生子、〇下略

〔古事記傳二十二〕旦波タニハ(中略)さて此名は多邇波なるを、後ノ世にタンバと唱るは、字音に牽れて訛れるものなり、邇をンと轉るから、音便に波をも濁るなり、名義未思得ず、

〔松井家日記一〕織田信長丹波國附屬明知光秀事
十兵衞ハ、丹波ハ信長ニモラヒ申トテ、万事ヲサシオキ、東丹波ノハシノ桂川邊ニ討テ出候テ、東方ノ先鋒衆ト度々弓矢致シ候、〇下略

〔地勢提要一〕各國經緯度附里程
丹波笹山町二階極高三十五度四分半、經度西三十一分、從東都東海道自京師歷龜山一百五十里一十九町一十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地
丹波　笹山　三五度〇四分三〇秒　　龜山　三五度〇一分〇〇秒

古事類苑

地部二十三

丹波國

名稱

丹波國ハ、タンバノクニト云ヒ、舊クハ、タニハノクニト云フ、山陰道ニ在リ、東ハ山城、東北ハ近江、西ハ但馬、西南ハ播磨、西北ハ丹後、南ハ攝津、北ハ若狹ニ界ス、東西凡ソ十四里餘、南北凡ソ十二里、此國ハ、古ヘ國府ヲ桑田郡ニ置キ、桑田(クハタ)、船井(フナヰ)、多紀(タキ)、氷上(ヒカミ)、天田(アマタ)、何鹿(イカルカ)ノ六郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、桑田郡ヲ南北ノ二郡ニ分チ、京都府ヲシテ南桑田、北桑田、船井、天田、何鹿ノ五郡ヲ治シ、兵庫縣ヲシテ多紀、氷上ノ二郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄〈五國郡〉〕丹波〈太邇波〉

〔運歩色葉集〈多〉〕丹波〈六郡〉　丹州

〔饅頭屋本節用集〈天地〉〕丹波(タンバ)〈丹州〉

〔日本風土記〈一　俗語島名〉〕丹渡〈波誤〉〈塔波丹白〉

〔和漢三才圖會〈七十七　丹波〉〕山陰道八箇國之首、爲王城附庸之國、初用谿羽(タニハ)字、後爲丹波十一郡、割五郡爲丹後、

〔倭訓栞〈中編十三　多〉〕たには　和名抄に丹波をよめり、谷端の義なるべし、四方に山々重なれり、今たんばと呼るは、文字によりて正意を失へるなるべし、はぬる字は、にとおさふるは和語の例なり、

〔諸國名義考〈下〉〕丹波

諸國器仗〇中略　佐渡國甲一領、横刀四口、弓十張、征箭十具、胡籙十具、

〔儀式十〕十二月大儺儀〇中略

事別天詔久、穢久惡伎疫鬼能、所々村々爾藏里隱布留乎波、千里之外、四方之堺、東方陸奥、西方遠値嘉、南方土左、北方佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登、定賜比行賜氐、〇下略

一人數九万四百七拾六人　内四万六千八百六拾七人男　四万三千六百九人女

〔吹塵錄五人口及國高〕文化元甲子年諸國人數調略○中

皆御料一人數九万貳千四百拾人　高拾三万三百七拾三石餘　佐渡國

内四万六千九百拾七人男　四万五千四百九拾三人女

弘化三丙午年諸國人數調略○中

皆御料一人數拾万貳千貳百六拾五人　高拾三万貳千五百六拾五石餘　佐渡國

内五万千貳百三拾壹人男　五万千三拾四人女

風俗

〔人國記〕佐渡國

佐渡國之風俗、越後ニ似テ、人ノ氣狹ク而、伸ヤカ成事不克而心愚也、意地強シトイヘドモ、善トシガタシ、

〔類聚三代格五〕太政官符

應置醫師一員事、

右得佐渡國解偁、此國本夷狄之地、人心强暴、動忘禮義、常好殺傷、望請、准出雲隱岐等國、置醫師一員、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣奉勅依請、

元慶四年八月七日

名所

〔日本鹿子十〕佐渡國中名所之部

越の湖　布勢海　うらみても何にかはせんあはでのみ越のみづうみ見るめなければ

•雪の高濱　降積る雪の高濱はるぐ〵と木かげも見えぬ越のうら風

葉枯の浦　屛風岩

健兒

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒略○中佐渡國卅人略○中

一石高拾三万三百七拾三石餘
〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調略○中
佐渡國御料　一高拾三万貳千五百六拾五石四斗九升壹合

出擧稻

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻略○中
佐渡國、正稅三万八千束、公廨八万束、國分寺料一万束、同寺新造藥師佛燈分料五百束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、救急料三万束、俘囚料二千束、
〔倭名類聚抄五國郡〕佐渡國　管三（中略）正三萬八千束、公八萬束、本穎二十五萬千五百束、雜穎十三萬三千五百束、
○按ズルニ、延喜式ニ擧グル所ノ雜稻合セテ五萬三千五百束ナリ、此ニ雜穎十三萬三千五百束トアルニ合ハズ、蓋シ雜穎十三萬三千五百束トアルハ、公廨八萬束ヲ誤テ合算シタルニテ、本穎ノ二十五萬千五百束トアルハ、實ハ拾七萬千五百束ノ誤ナラン、

國產貢獻

〔延喜式主計二十四〕佐渡國行程、上卅四日、下十七日、海路卅九日
調庸並輸布　中男作物、布、鰒、
〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略○中
佐渡國四種　黃連十五斤十兩、藍漆廿五斤、細辛卅八斤、蜀椒三斗、
〔延喜式內膳三十九〕年料略○中　佐渡國稚海藻一擔十二籠
〔毛吹草三〕佐渡
金銀　細辛　黃連　弦藻　小鍋　御松日蔭蔓カケノ松ト云、數珠ニ用之、
〔三代實錄清和十七〕貞觀十二年二月廿九日辛亥、佐渡國獻奇龜一、其爲形也、鳥嘴赤甲黑質也、
〔鈴鹿家記〕永享二年八月朔日、上杉殿ヨリ佐渡炭十枚、綿ツムギ廿タン、才所參、私、時政炭三枚給ル、

人口

〔官中秘策四〕佐渡國　三郡略○中

羽茂郡（○中略）

以上六拾ケ村、田八百七拾、八町九段餘、畠千八拾九町九段餘、種額貳萬千七百拾貳石七斗九升七合、

三郡貳百六拾四村、通計田六千四百拾四町四段餘、畠三千八百七拾九町八段餘、種額拾三萬貳千三百八拾六石貳斗壹升八合、

〔佐渡志（二戸口）〕總テ國ノ盛衰ヲハカリ知ルハ、目ノアタリ民ノ聚散ヲ見ルニシクハナシ、古ヘノトキ、戸口ノ籍ヲ重ゼラレシモ、（今按）恐ラクハコレガタメニゾ有ベキ、此邦ノ戸口、天正ヨリ前ハイカニヤアリケム、イヒモツタヘズ、越後ノ上杉地頭ヲホロボシテノチ、戸數ワヅカニ一萬ニミタズ、國ノウチ荒野ノミ多カリシトイヘリ、關東ノ敎トナリシ初メ、金銀山ノ盛ンナルニツキテ、國國ヨリ人多ク來リアツマリヌル（武徳編年集成）ソレヨリ元和ノ頃マデ戸數ハ知レズ、口數ハ既ニ二十萬ニ係リキ、（官庫文書）寛永ノ末、正保ノ初メヨリシテ漸々減ジ、慶安明暦ニ至テ、益減ゼシヨシヲ語傳ヘタレド、簿籍皆燒失セタレバ、委シクハ知ガタシ、サレド今ヨリ考ルニ、昔ニ相川市中ニ人ノ多カリシノミナラズ、郷村ニモマタ家居多カリケルニヤ、農家ノ廢跡トテ官籍ニ載セラレシ所、今モ猶四百戸ニ餘レリ、コレヲ方言ニ伏セ棟ト唱ル也、寛保コノカタハ明ラカニ記セシ者アレバ採テコヽニ出セリ、

寛保元年辛酉　戸壹萬九千百貳拾六

口九萬三千三百九拾四（男四万八千百五拾七、女四万五千貳百三十七）○中略

文化十二年乙亥　戸壹万九千五百拾六

口拾万六拾壹（男五万八百七拾五、女四万九千百八拾六）

〔官中秘策（四）〕佐渡國　三郡（○中略）

同ジキ六年辛丑、關東ノ御料ニ併セラレテ、萬制度モ立タレド、イマダ撿地ナドイフ事ニモ及バズ、只幾千幾百苅ヲ何石何斗ノ稱ニ改メタルマデニアリケム、其後元和三年丁巳、國中屋敷撿地アリ、近世マデモ此國ト隱岐トハ、田租ノミアリテ、圃ノ租税ハナカリシトイフ說アリ、田圃說 此近世トイヘルハ、イツノ頃ヲサスニヤ詳ナラズ、元和七年辛酉ノ收納ヲ記セルニ、米貳萬千三百五十八石四斗三升八合ノウチ、千五百拾石一斗六升ハ永引ト云モノニテ、殘ル貳萬八百四十八石貳斗七升八合ヲ定納トス、此外銀納アリシトイヘドモ、イクバクニヤ記セシモノナシ、後慶安ノコロ新田年々ニ開ケ、元祿改元ニ及デ、收納ノ米貳萬四千三百貳拾九石五斗五合八勺ノ內、千貳百九拾七石貳升七合貳勺ハ永引、殘ル貳萬三千三拾貳石四斗七升八合六勺、此外ニ山役米トイフモノ八拾八石貳斗貳升七合、及ビ地子ト云モノ貳千六拾壹石四斗九升四合八勺ノ內百拾八石四斗七升壹合五勺ハ永引ニテ、殘ル千九百四拾三石二升三合三勺ヲバ銀ニカヘテ納ムトイヘリ、同キ六年癸酉、國司荻原重秀ウケタマハリテ一國撿地アリ、其事ニアヅカレルモノ甚多ク、內藤兵右衛門山田與次兵衛トイフモノコレヲ總ブ、翌七年甲戌、其功ヲ終ヘテ、田六千三百九拾三町四段五畝貳拾五步圃三千四百拾三丁七段貳拾九步、總テ九千八百七町壹段六畝貳拾四步、糧額拾三萬三百五拾五石九斗八合トナレリ、委シクハ官ノ薄籍ニ載セラレタレバ、コヽニ出サズ、是ヨリ後開墾シタルヲバ皆新田ト唱フルナリ、今國中ノ田圃ノ廣狹左ノ如シ、

雜太郡 略○中

以上百壹ヶ村、田三千三拾壹町四段餘、圃千四百七拾九町六段餘、糧額六萬三千貳百六石三斗壹合、

加茂郡 略○中

以上百三ヶ村、田貳千五百四町餘、圃千三百拾町壹段餘、糧額四萬七千四百六拾七石壹斗貳升、

田數石高

三分二地頭職事、

右任亡父有泰應安二年六月十日讓狀、可領掌之狀如件、

康曆二年六月二日〈略〇中〉

本間太郎左衞門尉泰直申、佐渡國梅津保〈付淸川濟、吉平三跡、〉地頭職事、預訴狀〈具書副〉如此子細、見狀歟、請文、其沙汰訖、所詮貞治以來、度々擧狀被仰、不出帶證跡云々、不日沙汰付下地於泰直代、可被執進請取、更不可緩怠之狀、依仰執達如件、

永德元年十二月　　左衞門佐判

畠山播磨入道殿

(本間系圖 佐渡本)佐渡國和泉保四分一、〈號二方一也〉同保內、田壹町屋敷一所事、任當知行旨、本間四郎左衞門尉末長、領掌不可有相違之狀如件、

應永廿九年十二月十二日　判〈足利義持〉

(倭名類聚抄 五 國郡部)佐渡國〈略〇〉管三〈田三千九百六十町四段〉

(拾芥抄 中末 本朝國郡)佐渡〈中國〉三郡〈中略〉田〈四千八百七十町〉

(運歩色葉集 諸國之郡名)佐渡　三郡、田數三千八百七十町、

(海東諸國記)佐渡州　郡三、水田三千九百二十八町三段、

(佐渡志 田一土)天正十七年己丑、上杉家コヽヲ併セ領セシヨリ、貫苅トイフヲモテ稱セシト見エタ、其年霜月、黑金尙信ガ波太郎熊野ノ祠官ニアタヘシ狀ヲ初トシテ、〈熊野祠ノ條ニ出セリ、〉悉クシカリ、百苅トイフハ、京升ニテ八斗四升ナリトイヘリ、〈古文書〉慶長三年戊戌、上杉家所領ヲ奥ノ會津ニ移サレタ、此國豐臣家ニマキラセシ後モ、租稅ノコトハモ舊キニ依シトゾ見ユ、〈略〇中〉

保

合一所

右所者、泰秀子なき間、舍弟六郎を養子として、吉良殿よりの御下知之狀相副て、永代讓上せ不可有他妨者也、仍爲後日之狀如件、

貞和二年五月十八日　源泰秀判〇中略

讓渡佐渡國長江村一圓事

右當所者、有直拜領相傳のしよだいなり、しかるを子息本間山城彌二郎季有ねゑいたいをかぎりて、ゆづりあたうる物者、またくたのさまたげ有べからず候、仍ゆづりわたす狀如件、

貞治五年三月十日　有直判

〔佐渡志二官員〕本間源八郎子共に讓渡竹井保事、子共おさなく候はんほどは、後家尼御前もちて、公方の御公事等を沙汰し、子どもをもすごさるべく候、〇中略仍爲後日讓之狀如件、

興國元年七月七日　沙彌道昭判〇中略

ゆづりわたす所領の事

ゆづりわたすさどのくにかまやのほう三分二、ふなしろのほうのうち、上村なかへのむら、子息本間の山城の彌二郎ニゆづりわたすところじちなり、たのさまたげあるべからず候、仍爲後日、ゆづり狀如件、

貞治五年六月十八日　源有直判

任此狀、領掌不可有相違之狀如件、

貞治五年十二月廿八日〇中略

判

下　本間加賀次郎兵衛尉直泰、可令早領知佐渡國ニ宮浦保、寺田半分、新宮保西方三分貳、久知鄕

村里 名邑

康永參年四月日　一貼代貞泰（下略）

〔本間系圖佐渡本〕佐渡國石田郷金丸半分、長宇補半分、長池、關浦等事、任當知行之旨、本間太郎左衛門尉季直領掌、不可有相違狀如件、

永享十年二月廿二日　判（足利義教）

〔郡名一覽〕（普御料）一佐渡國　佐州　四方三日半　三郡

高拾三萬三百七拾三石九斗壹升壹合　貳百六拾ケ村

口相川　（江戸ヨリ海陸百八里廿四町、内越後柏崎ヨリ小木迄海上廿一里）

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國鷹村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕佐渡　三郡、二百六十一村、

（御料）高十三万二千五百六　五石四斗九升一合

加茂郡百村　雜太郡百村　羽茂郡六十一村

〔地勢提要持〕郡邑島嶼奇名

佐渡　羽茂郡、強清水村、木流村、背合村、五十里村、北狄村、石花村、後尾村、入川村、小田村、五十浦村、大河村、多田村、

〔日本書紀十九欽明〕五年十二月、越國言、於佐渡島北御名部之碕岸、有肅愼人、乘一船舶而淹留、春夏捕魚充食、彼島之人言非人也、亦言鬼魅、不敢近之、島東禹武邑人、採拾椎子、爲欲熟喫、著灰裏炮、其皮甲化成二人、飛騰火上一尺餘許、經時相鬪、邑人深以爲異、取置於庭、亦如前飛相鬪不已、有人占云、是邑人必爲鬼魅所迷惑、不久如言被其抄掠、於是肅愼人移就瀨波河浦、浦神嚴忌、人不敢近、渴飲其水、死者且半、骨積於巖岫、俗呼肅愼隈也、

〔佐渡志二言巳〕雜太佐渡國高家村事

雜太郡　関　石田　與知　高家（多分皆）　八多　竹田　小野　雜田（佐渡多）

賀茂郷　升栗（〇高山寺本注云、栗久利）　賀茂　勳知（〇勳、高山寺本作勲）　大野　佐爲

（佐渡志二官員）可令早本間左衛門四郎有綱、例知佐渡國波多郷内、本間十郎左衛門入道忍蓮女子跡、山城九郎左衛門入道審要　次郎兵衛尉女子跡、（號小田女子）　並孫太郎入道跡代官職事、

右守先例、可令領掌之状、如件、

元亨三年十二月十六日　　左馬助平朝臣判〇中略

本間新兵衛尉貞忠申、佐渡國泉保新宮保金丸郷宇津尾保青木郷事、守貞和五年十一月十三日御下文、可被沙汰付貞忠代之状、依仰執達如件、

觀應二年六月二十七日　　筑後守判

本間刑部左衛門入道殿〇中略

讓與領地之事

補任

長木保參分壹　參宮保肆分壹　中興保捌分壹　金丸保半分　大浦郷　雜太郷拾貳分壹　宿禰宜浦

本間左衛門太郎有泰讓與所也、若於致被所妨子孫可爲不孝之子、早任先例、可令有泰領知、仍爲後日讓狀如件、

應永十四年七月二日　　左衛門詮忠判

（本間文書）注進　佐渡國石田長木二宮三ヶ郷御年貢結解狀事

一石田郷〇中略　一長木郷〇中略　一二宮保〇中略

右勘定注進如件

雑太郡　加茂郡　羽茂郡

〔佐渡志一形勝〕雑。太。郡。東ニ長谷小倉ノ山々續キテ、北ハ名ニシオフ北山ノ峯秀デタリ、其西ノ錠コソ相川ノ銀山ニハアリケレ、浦ハ西南ニ折レテ、南ニ入海ノ眺望アリ、西ハ大海ソノ限ヲ知ラズ、象綿家ガ言ニヨルニ、マサシク異邦ノ地ナルベシ、

加。茂。郡。東ニ米山、國見山アリ、北ニ大山、嶺山、金剛、檀特ノ諸山競ヒタテリ、東ノハヅレ水津ノ岬ヨリ南ニ續クル浦々ハ、越後國ト海ヲ隔テ、相ノゾミ、北ノハヅレ鷲岬ノ彈野トイフ所ヨリハ、出羽ノ山々仄カニ見エテ、中ニモ聳ヘタルハ鳥海山ナリ、西ノ方、海ノ限リヲ知ラザルコトハ、雑太郡ニ同ジカルベシ、此郡ニ湖アリ、海ヲ隔ツルニ只一條ノ長洲ヲ以テ、其洲ノナカバニ橋アリテ、水ト湖ト相通ヘルサマ、殊ニメヅラカ也、

羽。茂。郡。山必ジモ高カラネド慶泰山、新倉山ノタグヒ、觀ツベキ所殊ニ多シ、加茂郡ニ續キタル方ハ、近ク越後ノ浦々ヲ望ムコト亦同ジサマナリ、三岬トイフアタリヨリ、遠ク越中能登ノ山々マデヲ望ム、此郡ニ小木ノ浦アリ、海門トザセルガ如ク、浪常ニ穩ナレバ、國々ノ船ドモ來リ湊ヒテ、有ヲ以テ無ニ易フ、此國ノ咽喉ナド、モイフベキニヤ、但路程ノ長短、海難ノ險峻ニイタリテハ、タトヒ筆力ヲツイヤストモ、容易ク其眞ヲ述ルコトアタハズ、

〔續日本紀八元正〕養老五年四月丙申、分佐渡國雑。太。郡。始置賀。母。羽。茂。二郡、

〔三代實錄三十六光孝〕元慶三年十二月十五日庚子、太政官奏曰、○中略佐渡國浪人高階眞人利風、圍殺雑太團權校尉道公宗雄、及盜取高階眞人有岑財物、賀。茂。郡。人神人勳知雄道古、今人爲圍殺之從、○下略

〔倭名類聚抄七佐渡國〕羽茂郡　越太　大目於保女　駄太　菅生須加布　八桑也久波　松前萬都佐木　星越保之古之　高家多加倍　水渚美奈也、○渚、高山寺本作渚、

郡

葉シニケリ、コノ歌ヨリ出テ、世ニ行ル、播曲ニモ、榎風トイフ一闋アリ、彼ノ鄕ノ息阿新、仇ヲ報ヒシコトヲ演ベタリ、古府ヨリ西ノ方ニ、城戸街道トイフ處アリテ、今小川内ノ眞樂寺コレナリ、

〔倭名類聚抄五國郡〕佐渡國〈佐渡〉〇管三〇羽茂　雜太〈サハ　佐波太　國府〉　賀茂

〔延喜式二十二民部〕佐渡國、中、管羽茂〈ウモ〉　雜太〈サハタ〉　賀茂、右爲遠國、

〔皇國郡名志〕佐渡國三郡

羽茂〈ハモチ〉〈小木、●高崎、〈金山、〈赤岩、〈小泊、●城山、東ノ海邊ヨリ郡長南ニ出崎

雜太〈サハタ〉〈羽田、〈カウヤ町、〈相川、〈石花、●二見、●澤崎、西南郡

加茂〈カモ〉●矢柄、●木津、●小田、●湊、〈夷、●鷲崎、〈吉井、〈金北山、北海ニ向郡、●大野、〈順徳院陵

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕佐渡

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄕帳	明治沿革	地誌提要	郡區編制
雜太〈續〉		雜太〈サハタ〉	同〈佐波太〉	同	雜太〈簡允〉 雜田〈佐渡志〉	雜太〈サワタ〉	同	同	同〈サハタ〉	同
羽茂〈續〉		羽茂〈ウモ〉	同	同	同〈簡允〉	同〈ハモ〉	同〈ハモチ歟〉	同	同〈ハモチ ハモ〉	同
賀茂〈續〉		賀茂	同	同	加茂〈大全〉	賀茂〈カモ〉	加茂	同	同〈カモ〉	同

國府

右件兩國僻在遠遠、官員乏少、居上之人、若有事故者、則典代之事印、求之道理、良不穩便、伏乞、更置件員、以備職務、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

大同四年二月十九日

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年十二月己巳、佐渡國言、國例、每郡郡司一人、專當貢賦、多中助備、夏日上道、而或遭風波、留連海上、或供相摸節、不得早歸、此際無人、充用郡政擁滯、請正員外每郡置權任員、支配雜務、許之、

〔三代實錄 三十二 光孝〕元慶元年十二月廿一日丁亥、能登佐渡兩國并始置檢非違使各一人、帶劔把笏、

〔太平記 二〕長崎新左衛門尉意見事附阿新殿事

君〇後醍醐御謀叛ヲ申勸ケルハ、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也、各死罪ニ行ルベシト、評定一途ニ定テ、先去年ヨリ佐渡國へ流サレテヲハスル資朝卿ヲ斬奉ベシト、其國守護本間山城入道ニ被下知、

〔日本鹿子 十〕佐渡國 小木 江戸ヨリ海陸百八里二十四丁 出雲崎ヨリ船路十八里 内 三千石

御代官 鈴木三郎九郎

〔倭名類聚抄 五 國郡〕佐渡國 國府在雜太郡、行程上二十四日、下十七日、

〔佐渡志 三 古蹟〕古府

古ヘノ國府、雜太郡ニ置レシコト、源順朝臣ノ和名類聚抄ニ載ラレ、遊行八世渡船上人、文和年中渡海記ニモ、府中ニ移リシトキ、本間ガ一族渴仰シケルヨシヲ記シ、殊ニハ國分寺モ古ヘヨリ雜太郷ノ内ニアリテ、今モ國分寺村トテ一村アレバ、カタガタ雜太郡今地名、民間ニ澤田ト唱フルトコロ是ナリト見エタリ、檀風ノ古城ハ、今ノ竹田村ノ田間ニ古跡アレドモ、コヽモ澤田ノ中央ナリ、コノ城ヲ古ヘ檀風トイヒシ事ハ、資朝卿ノ歌ニ、秋タケシ檀ノ梢フタカゼニ澤田ノ里ハ紅

同郡羽茂、羽茂郡新穂、加茂郡數邑ニ居ル、天正五年、上杉輝虎伐テ之ヲ降ス、養子景勝封ヲ襲グニ及テ、羽茂ノ本間高貞、約束ヲ受ケズ、十七年、景勝將ヲ遣テ之ヲ伐チ、高貞ヲ殺シ、河原田本ノ間高綱ヲ降シ、全州ヲ併ス、慶長ノ初、豐臣氏、景勝ヲ會津ニ移封シ、吏ヲ遣テ州事ヲ管セシム、關原役後、德川氏奉行ヲ置キ、河原田古城ニ治ス、後ニ相川ニ徙ス、王政革新、佐渡縣ヲ置、既ニシテ改テ相川縣ト稱ス、

〔日本書紀神代一〕伊弉諾尊、伊弉冊尊、中略　先以淡路洲爲胞、中略　廼生大日本日本此云耶麻騰、下皆效此、豐秋津洲、中略　次雙生隱岐洲與佐度洲、世人或有雙生者象此也、中略　由是始起大八洲國之號焉、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命、先言阿那邇夜志愛袁登賣袁、後妹伊邪那美命、言阿那邇夜志愛袁登古袁、如此言竟而、御合生子、中略　次生佐度島、中略　故因此八島先所生、謂大八島國、

〔古事記傳五〕此島のみ亦名のなきは、古より脫たるなるべし、口決、また元々集などに、書日紀にも佐度島とあれど、是は書紀に、次に雙生億岐洲與佐渡洲とあるを取て云るなれば、依るに足らず、舊事紀には、此記に佐度島に亦名の無を疑て、又舊事紀には、後の九洲に無き名なれば、此を佐度のことかとしるして、おしあてに、一云佐渡島と云るなれば、例の妄り言なるをや、又口決に一本に、建日別とも有るは、後の竄しあやまりなり、

〔先代舊事本紀十國造〕佐渡國造

志賀高穴穗朝成務御世、阿岐國造同祖久志伊麻命四世孫、大荒木直定賜國造、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年二月辛巳、以佐渡國幷越後國、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年九月丁卯、渤海使輔國大將軍慕施蒙等、著于越後國佐渡島、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年十一月乙巳、復置佐渡國、守一人、目一人、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年正月戊寅、外從五位下生江臣智麻呂爲佐渡守、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

佐渡國今儀掾一員、中略

宿驛

沿革附

十五町四十間半、雜太郡新町濱、至新町宿四丁二間所、三十七度五十七分半、從宿所至雜太郡四十一間、從新町至加茂郡二里一十五町、二十四間、又至加茂郡二里二十四町一十八町四十三間、至宿所一里一十九丁二里一十五町七間、至河原田町一里四丁四十五間、澤根町、三十八度三十秒、至西川町一里一十九丁二里一十二町四十三間、橘村、三十七度五十九分、二里三町二十一間

相川濁川町、三十八度二分、四里三十一町三十三間半、至鷲津村一里二十八丁三十三間中、北片邊村、二里三十五町五十一間、至千木村一里一十一丁一十八間、加茂郡小田村、六里二十一町四十九間、至真更川村一里一十三丁四十九間、至三十九丁三十七間、至鵜島村二里、鷲崎村、三里二十五町二十八間、至見立村三里三丁四十三間、浦川村、三里二十六町

一十九間、至白瀬村二里五丁五十間、夷町、三十八度四分半、四里九町五十二間、水津湊、三十八度四分、一里二十五町五十九間、野浦村、三十八度一分半、三里一十一町二十九間、羽茂郡松ヶ崎湊、三十七度五十四分半、二里三十二町四十四間、赤泊湊、三十七度五十一分半、一里二十七町五十間、赤岩村、三十七度四十九分、一里三十二町四十七間、小木湊、沿海周廻五十三里一十町五十二間半、

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬〇中

佐渡國驛馬松埼、三川、雜太各五疋、傳馬

〔日本國郡沿革考二之雜道〕佐渡、古佐渡島、紀日本天平十五年、併越後國、天平勝寶四年十一月復置、中國、管三郡、二百六十一村、

加茂百村郡、置、延喜式等作賀茂、養老五年四月、分雜太郡、　雜太百村古府治　羽茂六十一村養老五年四月、分雜太郡置、

惠臥見于扶桑略記、蓋羽茂、詳在何時、

〔日本地誌提要四十二佐渡〕沿革　古ヘ國府ヲ雜太郡ニ置、今ノ竹田村ノ地ナリト云、鎌府ノ初、相模人本間能忠來テ國府ニ居リ、世々澤谷、雜原、土屋三氏ト各地頭トナル、承久ノ亂、北條義時、順德天皇ヲ雜太郡村ニ遷シ、仁治三年崩ズ、後本間氏守護ヲ領シ、徒テ河原田雜太ニ居リ、羽族分レテ澤根、

經緯

〔日本經緯測實度〕北極出地

佐渡　小木湊　三七度四八分三〇秒　　相川　三八度二〇分〇〇秒

　　　松崎湊　三七度五四分三〇秒　　夷川　三八度〇四分三〇秒（中略）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（中略）　　佐渡　相川　東二度五五分二二秒

〔日本實測錄五〕佐渡國（中略）沿海周廻五十三里一十町五十二間半

〔日本地誌提要四十二佐渡〕疆域　越後新潟ノ西少北、海上壹拾壹里餘ニアリ、周回五拾三里壹拾町

五拾貳間半、東西凡七里餘、南北凡壹拾壹里、

島嶼

〔日本實測錄十島嶼〕佐渡國雑太郡　遠測　大島

加茂郡　遠測　鵰島　二ッ龜　沖瀬

地勢

〔易林本節用集下〕佐渡、（佐州）中、管三郡、四方三日半、草木勝地、牛馬不ㇾ知ㇾ貴、魚鼈五穀多、中上國也、

〔佐渡志一形勢〕此國ノカタチ、山マタ山ツラナリテ、海ノ面ニ臥横タハレルガ、其中斷テ坦カナル所

ニ、田多ク開ケ、湖潮湛エヌ、遠ク是ヲ望ムニ、其地勢二ツニ分レタルガ如シ、サテコソ土人ノ詞ニ、

大。佐。渡。小。佐。渡。トモイヒ習ハシタルニヤ、大概山深カラズトイヘドモ、必險シク川淵カラズトイ

ヘドモ、必清ラカ也、國ノ周リニアル村里、多クハ山ニ背キ海ニ向ヒ、或ハ岸ソバダチ巖スルドニ、

或ハ汀淺ク石出デ、潮ノ聲常ニ怒リ、大船ヲヨスベキ所殊ニ少シ、實ニ天下ノ絶險トヤイフベカ

ラム、今ノ府治ハ舊知島ノ郷相川里（古加茂郡ノ地ニシテ、今ハ雑太郡ノ内ニトナリス、委シクハ建置ノ條ニ出セリ、）ニアリテ、東ノ方銀山

ニ倚リ、西ノ方大海ニ臨ミ、南北皆潤ヲ帶テ、七十餘街其中ニ開ケリ、

道路

〔日本實測錄五〕佐渡國（從越後國三島郡出雲崎至佐渡國羽茂郡小木湊、渡海直徑一十口里三十三丁、）

羽茂郡、小木湊、三十七度四十八分半、　五里六町一十九間半（至澤崎村二里九丁一十五間半）　龜脇村　三里一

間、一小平地ヲ開キ、之ヲ國中ト稱ス、國中ノ左右ハ海水灣入シ、島狀殆ド二箇ノ連結ヨリ成ルモノヽ如シ、而シテ土俗其前後ヲ分チテ、大佐渡、小佐渡ト稱ス、此國ハ、古ヘ國府ヲ雜太郡ニ置キ、羽茂、雜太、賀茂ノ三郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、明治維新ノ後、三郡ヲ合シテ一郡トシ、之ヲ佐渡郡ト稱シ、新潟縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五國郡〕佐渡

〔運歩色葉集 佐〕佐渡　佐州

〔饅頭屋本節用集 天地左〕佐渡 佐州

〔日本風土記 一寄語島名〕佐渡 沙亭度

〔倭訓栞 前編十佐〕さど　佐渡の國は、狹門の義也といへり、

〔古事記傳 五〕佐度島、名義は狹門か、此島へ舟入る、水門のせばきにや、凡て海に、島門、水門、迫門など云ること多し、なほ國形をよく尋て定むべし、

〔類聚名物考 地理一〕佐渡國　北陸道

この國は、北國の越後の後より、海をわたりて行國なれば、その海道の間せまくあれば迫門なるを、世と佐とは音の通へばいふなり、すべて海の狹く、兩傍にはさまれたる所を迫門と云ふ、萬葉集にかく書るは、世末里止の意にて、門戸はみな止といふ、狹戸といふに同じ、

〔諸國名義考 下〕佐渡

名義は、○中略中川顯允は、海中に放れたる國なれば、離所の略かりならむといへり、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

佐渡相川 雜太郡相川町 極高三十八度二分、經度東二度三十五分、從越後出雲崎、至佐渡小木湊、渡海直徑一十一里三十三町、前同○距東京一百九里九町十九間、

遠近なし、

其六　無縫塔は、蒲原郡河内谷陽谷寺門外、溪流數十尋の淵回りて百歩ばかりの間岸平かに亂石磊落たり、此寺住僧入寂三年の前、必此淵より墓所の印となせる石一ツ岸の上にあぐること也、其石常體の石に異なるにもあらねど、自然にして來往の人、誰いふとなく、是こそ無縫塔なりと、衆目のさす所、皆一なり、其奇怪いかなることゝも量がたし、一トたび衆人の名付るより、其石幾度淵に抛入れども、一夜にしてまたもとの所にあげをくとなり、○中略

其七　火井、三條の南一里ばかり山の麓入方村（即入方寺村なり、又妙法寺又如法寺といふ、）某といふ百姓の家爐の角に石臼をおき、其穴に竹をさし火をかざせば、即聲ありて、火うつり盛に然ること尺ばかりならん縱横に竹をくみあぐれば、其竹の孔ごとに皆火もゆる、竹を少引あぐれば、夾は火絶てなく、上にばかり火さかんなり、皆土中より登れる氣のもゆるなるべし、○中略

新撰七奇

石鏃　鎌鼬

（此二奇、古の海鳴、白兎に易る、新潟海鳴は常に聞くべからず、白兎は、近國餘類はなはだおほきがゆへ除ㇾ之、）

火井　燃土　燃水　胴鳴　無縫塔

（此五奇は、古より賞稱するところなるあらためず、）

佐渡國

佐渡國ハ、サドノクニト云フ、北陸道ニ屬シ、越後國新潟港ノ西方凡ソ十一里ノ海中ニ在リ、東西凡ソ七里、南北凡ソ十一里、周廻凡ソ五十三里餘、其地勢ハ、二條ノ山脈ヨリ成リ、兩者ノ

蝦虫の火　多雷　逆竹　風穴　沸壺　白螺　土用清水　四蓋波　箭根石　三度栗　無縫塔　沖の題目　八房梅　即身佛〇中略

予爰に於て古の七奇を辨じ、今の七奇を撰せんとす、希くは四方の好事家爲之説論せよ、古の七奇、

燃土　燃水　白兎　海鳴　胴鳴　火井　無縫塔

其一　燃土は燃土なり、米山の陽西北の濱海町のほとり、鯖の池、朝日の池、同柿崎の裏田の沼より出る、又三島郡竹森と云る所用水の溜池、及田の沼より出づ、其外所々に多し、〇中略

其二　燃水は草生津の油、即臭水の油なり、頸城郡凡六ヶ所、然れどもその大なるものは、蒲原郡草生津村、同新津村、同柄目木村、同黒川館村等なり、出雲崎の上、蛇崩といふ所、海中に出づ、如此所々水中より油まじはりて、沸出るを草にしみ付とることも、然れどもいかなる油なることをしらず、水の臭きがゆへに、くさ水の油と稱す、〇中略

其三　白兎は諸州共に是ありといへども、他邦の白兎は、即其質にして生る、より白く、冬夏ともに相同じ、灰色なるはその常なりと、越國に產する所は、春の末より秋の終りまでは、盡く灰毛にして、白は絶てなし、冬は即清白に雪の凝れるがごとし、〇中略

其四　海鳴は晴天といへども、雨ならんとするとき、已海潮の響、五六里に聞へわたりて南にあり、風雨の日も晴んとするときは北に聞ゆ、是をもつて國人陰晴を占ふ、今九州灘に是と類する所ありといへり、〇中略

其五　胴鳴は秋晴の日、風雨ならんとするとき、必是をきく、たとへば雲中より雷の轟き落るごとく、雪の高山よりなだれ落るがごとき聲ありて、いづくとも定めがたし、頸城郡には黒姫嶽といひ、蒲原、古志の邊には蘇門山濱ヶ嶽ともいふ、又岩船郡には村上外道山ともいへり、其響處に

出るといふべし、されば此邊の人は他國にて田地山林などを持て家督とする如く、此池一ッもてる人は、毎日五貫拾貫の錢を得て、殊に人手もあまた入らず、實に永久のよき家督なり、此ゆゑに池の賣買甚貴し、今年も油よく湧池一ッ拂物に出たりといひしまゝ、いかほどの價にやと尋しに、金五百兩なりしといふ、〇中略

一鎌鼬といふことあり、是は越後の國中に、いづれの所にも折節有る事也、老少男女の差別なく、面部又手足抔を太刀にて切りたる如く、おのれと切るゝ事なり、〇中略此事越後にも限らず、奧州、出羽、佐渡などにもありといへば、北地陰寒の癘毒、人にあたるにやといふ、〇中略

一波の題目といふは、寺泊りの海中にあり、むかし日蓮上人佐渡へ配流の時、海上に書給ひし、妙法蓮華經の文字、今に殘りて、法華信心の人、船に乘りて其所に至れば、波の上に題目あらはるゝとなり、

一逆様竹は、むかし親鸞上人此國へ配流の時、携へ來り給ひし杖を、さかさまに地にさし、我說所の法、世に弘らば、此杖の竹再び榮ゆべしといひ置給ひしに、其杖さかさまながらに枝葉しげり、其後其根に生ずる所の竹、皆逆様なりしとなり、今は其跡のみ鳥屋野といふ所に殘れり、

一八ッ房の梅は、文田と云所にあり、一ッの臺に花實八ッ咲みのる不思議のものとて、もてはやせしに、近き頃は座論梅とて、上み方にも多くなりぬ、是等をあはせて七不思議とはいふなり、

〔北越奇談 二〕七奇辨

越後に、古より七不思議といへることあり、今倘諸方の遊客好事の人、此國に尋來て其奇を探んとす、〇中略近世諸家の記行に載る所、各其名目に別異ありて、論說する所も又おなじからず、〇中略凡諸家の雜記紀行にあぐる所と、國人家々に論說する所を合せ見るに、今倘二十有四奇あり、

神樂嶽の神樂　海鳴　胴鳴　燃土　七ッ法師　八ッ瀧　白兎　鎌鼬　火井　鹽井　燃水

凡日本國中に於て、第一雪の深き國は越後なりと、古昔も今も人のいふ事なり、しかれども越後に於も、最雪のふかきことは一丈二丈におよぶは、我○鈴木牧之住魚沼郡なり、次に古志郡、次に頸城郡なり、其餘の四郡は、雪のつもる事三郡に比すれば淺し、是を以論すれば、我住魚沼郡は、日本第一に雪の深降所なり、○中略さて我　澤は、江戸を去こと僅に五十五里なり、直道を量ばなほ近かるべし、雪なき時ならば健足の人は四日ならば江戸にいたるべし、○中略そも〳〵我里の元日は、野も山も田圃も里も、平一面の雪に埋り、春を知るべき庭前の梅柳の類も、去年雪の降ざる秋の末に、雪を厭て丸太など立て、縄餝に遇たるまゝ、雪の中にありて、元日の春をしらず、されば人も三四月にいたらざれば梅花を不見、○下略

〔東遊記 五〕七不思議

越後國頸城の驛より南に入る事五里にて、三條といふ所あり、甚繁華の地なり、此三條の南一里に、如法寺村といふ所あり、此村に自然と地中より火もえ出る家二軒あり、百姓庄右衛門といふ者の家に出る火もつとも大なり、○中略其昔はいつのころより出そめしと尋るに、正保二年酉三月、此家にてふいごを吹しことあり、其時ふと地中より出しこのかた、今天明六年丙午の年に至り、百四十二年の間、一日も絶ることなく出るなり、初て出し時に、挽臼をふせしかば、是を取らばもしや絶ることも有べきやと氣遣ひて、此家普請などある時といへども、此挽臼を動かすことなしといへり、誠に數代が間、此家のみ油火を用ることなく、又少しの物をば煮、或は燒にも事足りて大なる寶といふべし、○中略

一臭水の油は、○中略此油灯火に用うるに、松脂の氣ありて甚臭し、故に臭水と名く、灯火の光りは甚明らかなれど、油のへること速にして、しかも少し臭氣あれば、價は常の油の半ばかりとぞ、然れども此所より毎日數十斛の油出るゆゑ、此國にては、多く此油を用う、誠に地中より寶のわき

姫川　京より江戸まで、北陸道をへて越る往還、遠海と云所より京井川と云宿の中間に此川あり、舟渡しなり、
黒姫山　當國糸魚川より、信州のじりの宿へ越る中間、右のかたに此やま見えたり、
妙香山　關の山と云所よりちかし
かめわり坂　そのかみ源九郎よしつね奥州にをち行給ふとき、此所にてみだい所御産のひもとかせ給ふ所といへり、

雑載

〔令義解五軍防〕凡〇中略貢人、〇中略不得取三關、及太宰部内、陸奥、石城、石背、越中、越後國人、
〔延喜式二十六主税〕諸國運漕雜物功賃
越後國　海路自蒲原津湊漕敦賀津船賃石別二束六把、
〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　越後國一百人〇中略
諸國器仗〇中略　越後國甲三領、横刀六口、弓卅張、征箭卅具、胡簶卅具、
〔續日本紀四元明〕和銅二年三月壬戌、陸奥越後二國蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使徴發遠江、駿河、甲斐、信濃上野、越前越中等國、以〇中略民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯為征越後蝦夷將軍、内藏頭從五位下紀朝臣諸人為副將軍、出自兩道征伐、因授節刀并軍令、
〔類聚三代格五〕太政官符
應省史生一員置弩師事
右得越後國解偁、此國東有夷狄之危、北伺海外之賊、防敵之兵弩是為勝、望請省史生員、永置件師、教習其道、以備不虞、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宜、奉勅依請、
元慶四年八月十三日
〔北越雪譜二編一〕雪の元日

は、室町殿の營中の事どもを記錄せられたる伊勢家の書にも、越後布といふ事あまた見えたり、されぱむかしより、縮は此國の名產たりし事あきらけし、

人口

〔官中秘策　四〕越後國　七郡〇中略

一人數九拾七万百八拾五人　内　五拾壹万（万下恐脱ニ八千二字）七百三人　男　四拾五万千四百八拾貳人　女

高八拾壹万六千七百七拾五石餘　越後國

〔吹塵錄　五〕人口及國高　御料私領　諸國人數調　文化元甲子年　〇中略

一人數百七万貳千九百四人　内　五拾五万三千四百七拾七人　男　五拾壹万九千四百貳拾七人　女

高百拾四万貳千五百五拾五石餘　越後國

御料私領　諸國人數調　弘化三丙午年　〇中略

一人數百拾七万貳千九百七拾三人　内　五拾九万貳千三百三拾七人　男　五拾八万九百三拾六人　女

風俗

〔人國記〕越後國

越後國之風俗、千人ガ九百人ニ負ル事ヲ嫌テ、勝フ事ヲ好ミ、假初ニモ勇ヲ嗜ミ、痛キト云事ヲバカニキト云、途中ニテケツマヅキテ倒レ、痛キト云事ヲ不云而、意得タリ、皷鬼目抔ト、幼キ者ノ育ニモ致ル風俗ニ而、ナシカヽリタル意地多ク、後道ノツマリヲ不考人多シ、ナルニ因テ、感スル氣ノ人事タ而、差カヽリタル分別ノミニシテ、義理ノ心強ク、主ハ被官ヲ哀ミ、被官ハ主ヲ賴ミ、意地嗜麗ナレドモ、物ノ理ニ至ル人鮮フ而、其執行之道ニ赴ク人無之ト見ヘタリ、故ニ名人ト名ヲ呼人スクナカルベシ、去程ニ勝事ヲ好ム時ハ、必我ガ非ヲ不知ル者ナリ、唯我善惡ヲ知テ、道理ニ從フ志アラバ、無雙國ノ風俗ナルベキヲ、尤殘多キ事ナリ、

名所

〔日本鹿子　十〕越後國中名所　當國はさして名所なし、可見と舊記にも見えたり、

岩木山（イハキヤマ）　布引　米山（ヨネヤマ）　有明濱（アリアケノハマ）

〔延喜式 宮内三十一〕諸國例貢御贄 中略〇 越後國 甘葛煎

〔延喜式 大膳三十三〕諸國貢進菓子 中略〇 越後國 甘葛煎一斗

〔延喜式 典藥三十七〕諸國進年料雜藥 中略〇

越後國七種 細辛、黄蘗各十斤、僕奈二斤十三兩、伏苓三斤、蜀椒八升、羚羊角卅具、

〔延喜式 内膳三十九〕年料 中略〇 越後國 楚割鮭八籠八十隻、鮭兒、氷頭、背腸、各四麻笥、別一斗、

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、中略〇 宅常擔集諸國土產、貯甚豐也、所謂 中略〇 越後鮭、文漆

〔毛吹草 三〕越後

鉛 漆 蠟燭 白兎 白菘 松山白布 網苧 米山當歸 彌彥貢蓮 臭水津油 地ヨリ湧出 糸魚川糸魚 直江川八目鰻

〔日本書紀 天智二十七〕七年七月、越國獻燃土與燃水、

〔三代實錄 光孝五十〕仁和三年六月二日甲辰、越後 中略〇 等十九國貢絹、麁惡特甚、不如昔日、勅譴國宰、採取正倉舊樣絹、每國賜一疋、依舊樣作、

〔北越雪譜 初編中〕越後縮

縮は、越後の名產にして、普く世の知る處なれど、他國の人は、越後一國の產物とおもふめれど、さにあらず、我〇鈴木牧之住魚沼郡一郡にかぎれる產物也、他所に出るもあれど、僅にして其品魚沼には比しがたし、そも〳〵縮と唱ふるは、近來の事にて、むかしは此國にても布とのみいへり、布は紵にて織る物の總名なればなるべし、今も我があたりにて、老女など、今日は布を市にもてゆけなどやうにいひて、古言ものこれり、東鑑を案るに、建久三壬子の年勅使歸洛の時、鎌倉殿より餞別の事をいへる條に、越布千端とあり、猶古きものにも見ゆべけれど、さのみは索ず、後のものに

〔日本鹿子十〕越後國、七郡、大々上國、四方六日、知行高四十五万六千石、

〔官中秘策四〕越後國　七郡略○中

一石高八拾壹万六千七百七拾五石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調略○中

越後國御料私領　一高百拾四万貳千五百五拾五石五斗三升五合八勺五才

出擧稻

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻略○中

越後國、正税公廨各卅三万束、國分寺料二万束、京法華寺料一万八千四百五十五束、西隆寺料、一万束、神宮寺觀音院料四千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料九千束、

〔倭名類聚抄國郡五〕越後國、略○註管七(中略)正公各三十三萬四十五束、本穎八十三萬三千四百四十五束雜穎十七萬三千四百四十五束

○按ズルニ、正公各三十三萬四十五束トアルハ、三十三萬束ノ誤、四十五ノ三字宜ク削ルベシ、又雜稻ノ數、延喜式ノ擧グル所ト十束ノ差アリ、今孰カ正ナルヲ知ラズ、

國産貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀略○中　越後國七千斛○中略

年料別貢雜物略○中　越後國䨏羊角六具

諸國貢蘇番次略○中　越後國十一壺四口各大一升、七口各小一升、○中略　右十箇國爲第四番、○庚寅年中略

交易雜物略○中　越後國布一千段、漆五斗、鍋子四合、履料牛皮八枚、

〔延喜式主計二十四〕越後略○中一　右廿五國中絲略○中

越後略○中　右廿九國輸絹略○中

越後國行程、上卅四日、下十七日、海路卅六日

調、白絹十疋、絹、布、鮭、　庸、白木韓櫃十合、自餘輸狹布、鮭、　中男作物、黄蘗三百斤、布、紙、漆、鮭内子、并子、氷頭、背腸、

田高石數

村上周防守居、元和四、堀丹波守直寄、同兵部少輔直次、同千之丞直定、正保元、本多能登守忠義、慶安二、松平大和守直矩、寛文七、榊原式部大輔政倫、同式部大輔政邦、寶永元、本多吉十郎忠孝、同中務少輔忠曆、同七、松平右京大夫輝貞、高崎替、享保二、間部越前守詮房、同下總守詮言、享保五、内藤豐前守式信、以後領之。

柳間 朝散大夫 堀左京亮直賀　三万石　居城越後蒲原郡村松 江戸ヨリ信州通百七里、三國通八十三里、

元和三ヨリ堀兵代々領之○節略

〔慶應元年武鑑〕井伊兵部少輔□□ 帝鑑間　二万石　居城越後三島郡與板 江戸ヨリ信州通百三里、三國通九十二里半餘、

従遠州掛川、寶永三、井伊氏領之、

菊之間 朝散大夫 牧野伊勢守忠泰　一万千石　在所越後蒲原郡三根山 江戸ヨリ三國通八十三里十三丁、信州通百二里半九丁、

寛永十一戌年ヨリ播磨定成、以後代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕松平日向守□□ 帝鑑間 朝散大夫　一万石　在所越後頸城郡清崎 江戸ヨリ信州通九十六里

元和五、越前宰相忠昌持、同九、越後中將光長持、家臣秋田主馬居、貞享二、稻葉丹後守正通領、元祿十四、本多若狹守利久、享保二、松平信濃守直之、以後領ス

帝鑑間 柳澤伊勢守光昭　一万石　在所越後蒲原郡黒川 江戸ヨリ九十七里

帝鑑間 柳澤彈太郎德忠　一万石　在所越後蒲原郡三日市 江戸ヨリ九十二里

朝散大夫 堀右京亮之美　一万石　在所越後刈羽郡椎谷 江戸ヨリ九十六里、三國通八十八里、

越州之内三島郡蒲原郡三箇所ニテ領之、○節略

〔倭名類聚抄 國郡五〕越後國 ○註略 管七、田萬四千九百九十七町五段二百七步

〔伊呂波字類抄 國郡〕越後國　本田二万三千七百三十八町 ○又見拾芥抄

〔海東諸國記〕越後州　郡七、水田一萬四千九百三十六町五段、

〔越後名寄 一〕田畝古来　一万三千七百三拾九町　高四拾五万六千石九斗

上杉家領國慶長之時代百万石ト申傳

近世津々浦々ニ出集ル處ノ米高ヲ以テ相計ルニ、大抵凡百五十万石、

藩封

元弘三年十月日

（越後檢地帳）長尾彈正左衛門尉方分大島庄。。

一本田貳万八千參百拾五束苅　被官市川修理進代官

堵分　貳万八千四百貳拾苅　合伍万六千七百參拾五束苅○下略

（村山文書）越後國頸城郡内顯田保。。地頭職事

任綸旨國宣之旨、所打渡村山彌次郎隆義状如件、

建武元年八月二十三日　左兵衛尉花押

（仁木文書）道氏花押

下　仁木彌太郎義有可令早領知○中略越後國松山保。。。市島時房跡○中略地頭職事、

右以人爲勳功之賞、所宛行也者、守先例可被沙汰之状如件、

建武四年卯月廿一日

（慶應元年武鑑）榊原式部大輔政敬溜間格從四位侍從　拾五万石　居城越後頸城郡高田江戸ヨリ信州越七十二里、三國通九十一里、景勝領、慶長三、堀左衛門督秀治、同十五、松平上總介忠輝、元和二、酒井左衛門尉家次、同宮内大輔忠勝、同五、松平伊豫守忠昌、同九、越後中將光長、貞享二、稲葉丹後守正通、元祿十四、戸田能登守忠眞、寶永七、松平越中守定重、同越中守定輝、同越中守定儀、同越中守定賢、寛保元ヨリ榊原式部大輔政永、以後領之、大廣間四品

溝口主膳正直諒　拾万石　居城越後蒲原郡新發田江戸ヨリ若松通八十九里五丁、三國通八十五里廿七丁、信州通百二十里、

當國者上杉中納言景勝領、慶長三、溝口伯耆守秀勝、以後領之、○中略

（慶應元年武鑑）牧野備前守忠恭從四位侍從　七万四千石餘　居城越後古志郡長岡三國通七十六里十九丁、信州通九十四里餘、奥州若松通百十二里餘、

上杉領、慶長三、堀左兵衛督秀治、同越後守忠俊、同十五、松平上總介忠輝領時、元和三、堀丹波守直寄、同四、牧野駿河守忠成、以後代々領之、

帝鑑間

内藤豊前守□□　五万九十石餘　居城越後岩船郡村上江戸ヨリ奥州通、九十里餘、三國通百一里半

以前條々、以此趣可被計達之由、御氣色候、恐々謹言、

五月十二日　　權右中辨

〔西大寺文書　一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事（○中略）

一顆倒庄々（○中略）　越後國　櫻井庄三千百五十七町九段二百六十四歩、（在家百八）（○中略）

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日（○署名略）

〔古文書類纂（上）（處分狀）〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事（○中略）

一家地文書庄園事（○中略）　姫君（○中略）　越後國白河庄（○中略）

建長二年十一月　日　　恐老（在御判）

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早且著直衣、（烏帽）相具御書、御手箱

□□□（存日預置也）（予）參御所、（○中略）女院御方自餘御書等（有御封、以檀紙立文、懸紙上下又有御銘等、之押折）、悉遂宮置、（○中略）

一通（銘日、紫嘉）（○中略）　越後國佐橋庄　右庄々所讓進也

嘉元三年七月廿六日　　御判

〔色部文書〕任今年七月二十六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

元弘三年十二月十四日　　源朝臣（花押）（○新田義貞）

越後國小泉莊内加納色部總領地頭色部三郎長倫謹言上、欲早下賜安堵國宣、全知行當莊内色部條總領職、并粟島地頭職事、

右地頭職者、長倫重代相傳、當知行無相違之地也、其子細色部又五郎泰忠、同四郎太郎長秀等、進上請文上者、不可有御不審者哉、然者早下賜安堵國宣、爲令知行、恐々言上如件、

中宮(上西門院御領)
右注進如件、
文治二年二月日
〔吾妻鏡 八〕文治四年二月二日戊辰、所々地頭等所領已下事、自京都或風聞、或就消息、愁申人多之、仍有其御沙汰、〇中略
實殿(御本書云)
越後國奥山庄地頭不當事〇下略

〔伊佐早文書〕越後國をく山の莊のうち、黒河條の地頭しきは、圓心かくべちさうでんの所領なり、しかるをかりやく三年八月の、ち、圓心所勞の時、わらはにてうとのせうもんを相そへて、一圓にゆづりたびて候を、そに外題安堵を申給て、知行さをいなく候を、なんほの三郎ゑもんのくら人しげさだ、をいたるうゑ、心ざしあさからざるによりて、さゝき入道のゆづり狀にはんをくはゑて、かの所を一ゑんにゆづり候ところ、又わらはの狀をとりそへて、かさねてゆづり候、わらは一ごの外は、はんぶんのねんぐをさたして、上げてたび候、わしんへんかい候まじき事は、しげさだのせい狀のしやうに見へて候うゑは、心やすく候べく候、一ごのうちは、一ゑんにてうとの證文をあひそへて、知行さをいあるまじく候、この外いかなる物出きたりて、しさいを申といふとも、とかく申をこなはれ候べく候、よつてじひちの狀如件、
けんむ貳年(壬)十月二十五日　平氏(在判)

〔吾妻鏡 八〕文治四年六月四日戊辰、所々地頭沙汰之間事、注條々、令附帥中納言(經房)給之處、御返報今日到著、於勅答之趣者、秀讓子細所副獻權右中辨定長朝臣奉書也、〇中略
八條院領〇中略
越後國　太面庄〇中略

事ナリ、御用絹ハ、東武表ノ商人ヲ以テ御買上、〇中略

三條 同郡〇頸城 大槻庄

毎七月、諸方ノ商人来リ集リ、甚賑ハシ、又下田ノ山里ヨリ炭ヲ背負テ賣ル、片手ニ古臈指ヲ提ヘ、乍立商買ス、昔者今日ノ市ニ名作ヲ得シ事間々アリ、

〔東大寺要録 六〕一諸國諸庄田地〇長徳四年注文定 中略

越後國 頸城郡石井庄田六十五町一段七十三歩 同郡眞沼庄田廿六町八段八十一歩 同郡吉田庄田十一町九段百八十歩〇中略

別功德分庄〇中略

後國 古志郡土井庄田二百町卅歩〇中略 十月十五日僧適料

右諸國庄家田地目錄如件

〔吾妻鏡 六〕文治二年三月十二日庚寅、關東御知行國々内、乃貢未濟庄々、召下家司等注文、被下之、可加催促給之由云云、今日到來、

注進 三箇國庄々事 下總、信濃、越後等、國々注文、〇中略

越後國

大槻庄 院御領　福雄庄 上西門院御領　青海庄 高松院御領　大面庄 鳥羽十一面堂領

小泉庄 新釋迦堂領、預所中御門大納言　豐田庄 東大寺　佐橋庄 六條院領、一條院女房、右衛門佐局沙汰　白河庄 殿下御領

奥山庄 殿下御領　比角庄 穀倉院領　宮河庄 前齋院御領、預所前治部卿沙汰　大島庄 殿下御領

白鳥庄 八條院御領　吉河庄 高松院御領　加地庄 金剛院領、堀河大納言家沙汰　石河庄 賀茂社領

於田庄 院御領、預所中前司信忠、　佐味庄 鳥羽院十一面堂領、預所大宮大納言入道　菅名庄 六條院領、預所岐列官代惟業、　波多岐庄

紙屋庄 殿下御領、預所播磨局　彌彥庄 三位大納言家領　志度野岐庄 二位大納言家領　大神庄 前齋院御領

佐渡島可撫矣、是此港之概略也、

〔東遊記後編二〕新潟

越後國新潟は、信濃川其外の川に落合て海に入る所なり、海口近くの一二里の所は、川幅廣き事一里二里ばかり、渺々として湖の如く入り海の如し、岸より岸まで水甚深く、淺瀬といふものなし、千石二千石の大船といへども、いづくまでも自由に出入りす、誠に川湊にては日本第一ともいふべし、○中略新潟の町より舟を浮め、荷華を賞し、又は納涼など甚繁華といふ、扨船中より四方を見渡すに、西南より東北へ六七十里を見渡して山なし、西北には二十五里の所に佐渡山見ゆ、東方に奥州會津の山見ゆる、かくの如く四面打開きたる地にて、北海の廻船出入の大湊なれば、越後第一の繁華の地にて、青樓多くしてにぎやかに、又越後一國の米不殘此湊に由るゆゑ、諸大名藏多く建つ、只北方雪國の事ゆゑ、冬に成ぬれば河水氷閉て、舟の通行絶へ、陸地も雪深く、海上は十月より三四月頃までは、廻船も出る事あたはざれば、夏一季住べき國といふべし、

〔越後名寄六〕直江。港　頸城郡

直江今町ト云此所ハ上越後也、湊ヘ落ルハ荒川也、委ク川ノ部ニ有、居家千軒餘、棚ヲ並テ賑ヒ侍、川道高田城下迄二里、舟ノ往來アリ、

〔越後名寄七〕長岡。市　古志郡

千手町ニ、毎七月七日ヨリ十三日迄日市立、諸方遠近ノ商人入集リ賑シ、中ニモ十日ノ日ニハ同町内ニ観音堂有テ、俗ニ欲詣ドテ、參ル序ニ市ニ立故別テ賑フ　ヘ近キ村里ノ農民、古脇指刀ヲ賣ニ持出ル、其中ニ折節名作ノ有ト申ス

小千谷。　魚沼郡

毎四月ヨリ七月迄、縮布ノ賣買市ヲ成ス、江戸京諸方ノ商客來リ、甚ダ繁昌賑ヒ侍ル、最夥シキ商

新發田　五萬石　同郡奥山庄、平城也、家中郭ノ旋ニ有、町家三千軒之餘有、江戸（江）信州街道（百十七里）三國通（九十六里二十七町）奥州通（八十里）高原通（八十二里九町）

館　壹萬石　同郡加地庄、役所陣屋有、江戸（江）奥州道（八十一里）信州通（百十八里）

黑川　壹萬石　同郡同庄、役所陣屋有、江戸（江）奥州通（八十五里）信州通（百二十二里）

高野　三千石　同郡同庄、役所有、黑川ノ西十町、此ヲ以テ江戸行程可計、

村上　五萬石　磐船郡小泉庄、山城也、家中山足ニ有、江戸（江）奥州通（九十里）信州通（百二十七里）

〔越後名寄（六）〕新潟港　蒲原郡

下越後也、上古土生田里ト云、中昔ハ船江津ト云、今新潟ト云ヘリ、寛永年中、河口變リテ今ノ地ニ引移セリ、居家三千軒有餘、檐ヲ並テ繁華也、信濃河ノ落尻ニテ、水上ハ大野川ト、信州ヨリ流レ來ル筑麻川ト、川口ノ驛ニテ會シ、大水ト成ル、川ノ部ニ委シ、俗ニ八千八川ノ流水ト云ヘリ、此ニ到リテ最大河ト也、當國第一ノ湊也、港ノ水口ノ淺深、川水ノ增減、海ノ荒ト浮ニテ大ニ違ヒ有、依之客船ノ入來ル事自由ナラズ、故ニ水口數ノ舟六艘宛、常ニ出シ置、川道水上六日町ノ驛迄、凡三十八里、船ノ往來滯リナシ、

〔新潟繁昌記〕越之爲州、東南皆山、西帶海而北走、所謂沃土千里百二之國、米山嶺自海幅起、橫絕州之中央、嶺北隔十餘驛彌彥角田兩岳屹立聳空、阿賀川自奥來、信濃川自信至、聞信濃川合八千八水、到新潟而入海、新潟原一沙嘴、舊稱船江、桑海之變、沙漸隆、地漸拓、明曆年間、民棄原村徙焉、（原村今不詳其所）當時開莽者三氏、曰齋藤、曰宮川、曰伊藤、（伊藤氏今絕）太平之澤、被及海隅、人戸漸密、生齒漸滋、萬治年中、開渠控信濃川、竪三橫五、以界坊、船隻之便、四方往還坐而達、街南爲頭、北爲尾、五道分達、西一道曰寺坊、以佛刹櫛比也、其東一道曰古坊、此爲驛路、又東二道曰片原、曰新坊、（或曰本坊）極東一道曰他門、坊凡三十餘、他門東北、隔渠得二洲、曰搽林、曰毘沙門、人戸通計一萬、寺坊之西瀕海、有村曰寄居、負龍推出推、卽海

院大小三百箇寺有、人ノクハヒモ賤シカラズ、國中第一ノ風俗也、○中略

高田　拾五萬石　頸城郡關庄、國衙平城也、町家六千軒餘有、萬端事足處也、此當リヲ稱上。越。後。、
江戸江驛路信州街道、七十三里

糸魚川　壹萬五千石　同郡山之下有、役所陣屋町家千五百餘、町數八町有、延寶年中、高田退散之砌、當城明渡相濟、即郭破却、其百姓地ニ下賜リ、今無城、江戸江信州通、九十六里

柏崎　八万石　奥州白川領　刈羽郡鵜川庄役所陣屋有、町家二千軒餘、江戸江信州道、八十四里
白川表江津川通、六十四里多雪途ニハ上州佐野通、百三十里餘

春日　五千石　刈羽郡、惡田川邊近シ、役所有、村有、江戸江信州通、八十六里

脇之町　三萬石　山州淀領　三島郡、山之上ニ役所陣屋有、村町アリ、江戸江信州通、九十六里三國
街道、七十三里三十四町淀江中仙道、百三十三里三十四町北陸道、百三十五里半十六町

與板　貳萬石　同郡吉川庄山足ニ屋鋪家中アリ町屋有、江戸江信州通、九十七里三國通、七十里十四町三
亦此當リヲ中。越。後。ト云、

長岡　七萬四千二十石　古志郡川崎鄉、大島庄、平城四方家中ナリ、町家三千軒餘、江戸江信州
道、九十四里三國通、七十一里三十四町

峯山　六千石　蒲原郡彌彥庄、同山ノ上ニ役所家中アリ、江戸江信州通、百四里三國街道、八十一里三十
四町

村松　三萬石　蒲原郡菅名庄、極樂平城也、町家有、江戸江信州道、百七里三國通、八十七里此邊ヨリ下。
越。後。ト云リ、

澤海　七千石　同郡同庄、役所陣屋有、江戸江信州通、百十里三國通、九十里

池端　五千石　同郡同庄、役所陣屋有、江戸江信州道、百十五里半三國通、九十四里二十七町奥州商、七十八里半

●高田 七十二里三國通九十一里
●村上 奥州通九十里餘、三國通百一里半、
○糸魚川 九十六里
○黒川 九十七里
△出雲崎 七十五里
□新潟 八十四里

●長岡 三國通七十六里十九丁、信州通九十四里餘、若松通百十二里、
●新發田 三國通八十五里廿七丁、信州通百二十里、
○村松 八十三里
○三日市 九十二里
△脇ノ町 九十二里

⊡與板 三國通九十二里信州通百三里、
○椎谷 八十八里
△水原 九十五里
△川浦 七十五里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕越後　七郡、四千五十一村、
御料私領高百十四万二千五百五十五石五斗三升五合八勺五才
頸城郡千九十八村　苅羽郡百九十村　魚沼郡四百九村　古志郡二百六十八村
三島郡二百二十四村　岩船郡二百五十村　蒲原郡千六百十二村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名
越後　頸城郡、糸魚川町、能生町、蒲原郡、新潟、柿日木、

〔北越雪譜二編一〕越後の城下
城下は、岩船郡に村上、内藤侯、五万九千石餘、蒲原郡に柴田、溝口侯、五万石、黒川、柳澤侯、一万石、陣營、三日市、柳澤彈正侯、一万石、陣營、三島郡に與板、井伊侯、二万石、刈羽郡に椎谷、堀侯、一万石、陣營、古志郡に長岡、牧野侯、七万四千石餘、頸城郡に高田、榊原侯、十五万石、糸魚川、松平日向侯、一万石、陣營、以上城下の外、頗豐饒を爲す處、魚沼郡に小千谷、古志郡に三條、三島郡に寺泊、出雲崎、刈羽郡に柏崎、頸城郡に今町なり、蒲原郡の新潟は北海第一の湊なれば、福地たる事論を俟ず、此餘の豐境は姑略す、

〔越後名寄雜章三十一〕一高田町屋凡六千軒餘、無地子ノ處也、江戸、京、大坂三所ノ外ニハ稀ナルベシ、寺

〔日本書紀孝德二十五〕大化三年、是歳、造渟足柵、置柵戶、

磐船郡

〔越後名寄郡一〕磐船郡

國ノ北ノ果ニテ、中郡也、山多シ、東ハ奥州、南ハ蒲原郡、西ハ海、北ハ羽州也、

〔日本書紀孝德二十五〕大化四年、是歳、略〇中治磐舟柵、以備蝦夷、遂選越與信濃之民、始置柵戶、

刈羽郡

〔越後名寄郡一〕刈羽郡

此郡、古昔ハ三島郡ノ内ノ邑名ナリシニ、天和ノ後、郡ト稱ス、中郡也、山ト平地相對スベシ、東北ハ三島郡、南ハ頸城郡、西ハ海也、今世一國ノ土地也、荒濱村近ク刈羽村アリ

三島郡

〔越後名寄郡一〕三島郡

國ノ中ニシテ、略西ノ方中郡也、山ト平地ト相對ス、東ハ古志郡、南ハ魚沼郡、西刈羽郡ニ對シ、西ハ海、北ハ蒲原郡也、

郷

〔倭名類聚抄七越後國〕頸城郡　沼川奴乃加波　郡字　栗原久里波良　原木阿良木〇高山寺本原木作荒木　板倉以多久良　高津多加都　物部　五公以木美　真守比奈毛里　佐味佐美

三島郡　三島美之高　高家多加也　多岐

魚沼郡　賀嗣　那珂　剌上　千屋知也

古志郡　大家　栗家　文原　夜麻

蒲原郡加無波良　日置比於木　櫻井佐久良井　勇禮以久禮　青海安乎美　小伏

磐船郡　佐伯　山家　利波　坂井　餘戸

沼垂郡　足羽安須波　沼垂奴多利　賀地加知

村里名邑

〔郡名一覽二御料並領〕越後國越州　南北九日　七郡

高八拾壹万六千七百七拾五石七斗三升七勺六才　三千九百六拾四ケ村

頸城郡

〔越後名寄 一郡〕頸城郡

又伊保野ト云、國ノ西南ニ有、最大郡也、山多シ、東ハ刈羽郡、南ハ信州、西ハ越中ノ國、北ハ海也、

〔日本靈異記 中〕智者誹妬變化聖人而現至閻羅闕受地獄苦縁第七

釋智光者、河内國人、略○中時有沙彌行基、俗姓越史也、越後國頸城郡人也、略○中天平十六年甲申冬十一月、任大僧正、於是智光法師發嫉妬之心、略○下

〔三代實錄 十四 清和〕貞觀九年五月十七日乙卯、節婦越後國頸城郡人高志公今子、叙二階、免戶内課役、以表門閭、

古志郡

〔越後名寄 一郡〕古志郡

國ノ半ニテ、東ノ方ニ有、最小郡也、山多シ、東ハ奥州、南ハ魚沼郡、西ハ三島郡、北ハ蒲原郡也、海ナシ

魚沼郡

〔越後名寄 一郡〕魚沼郡

又魚治ト云、國ノ南ニ有、大ノ中郡也、山多、東ハ奥州、南ハ上野、西ハ信州ト頸城郡、北ハ古志郡三島郡也、國中第一深雪也、海ナシ、

蒲原郡

〔越後名寄 一郡〕蒲原郡

國ノ半ヨリ北ニ有、甚大郡也、山ト原野相對スベシ、東ハ奥州、南ハ古志郡、三島郡、西ハ海、又北ノ果ニテハ磐船郡也、沼垂郡之近クニ蒲原村有、

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆三年十月戊子、越後國言、蒲原郡人三宅連笠雄麻呂、蓄稻十萬束、○東原奪、據一本補積而能施、寒者與衣、飢者與食、兼以修造道橋、通利艱險、積行經年、誠令擧用、授從八位上、

沼垂郡

〔越後名寄 一郡〕沼垂郡

今世不相知其處、蒲原郡、新潟ヨリ東、河向ニ沼垂ト云ヘル里在、是ヲ親村トスレバ、彼里ノ四方周リノ村里皆蒲原ニテ、沼垂村モ又屬蒲原、

○按ズルニ、此時未ダ越後ノ名ナシト雖モ、當時新郡ヲ置キタルハ、蓋シ後ノ越後ノ地ナラン、

〔東大寺要錄 六〕造寺司牒三綱所

合奉宛封一千戶

越後國貳伯戶(頸城郡板倉鄕五十戶、賀茂郡[illegible]鄕五十戶、古志郡山家鄕五十戶、雜太郡[illegible]多鄕五十戶、)

以前、寺家雜用料、永配件封、當年所輸之物、爲始奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日　主典從七位上

○按ズルニ、賀茂雜太ノ二郡ハ、佐渡國ノ郡名ナレドモ、當時佐渡國ハ越後國ニ併セラレ居リシガ故ニ、本書ハ之ヲ以テ越後國ト記シシナリ、

〔北越雪譜 二編 一〕越後の城下

越後の國、往古は出羽越中に距りし事、國史に見ゆ、今は七郡を以て一國とす、東に岩船郡(古くは石に作る、海による、)蒲原郡(新潟の湊あり、郡に屬す、)西に魚沼郡(海に遠し、)北に三島郡(海による、)刈羽郡(海に遠し、)南に頸城郡(海に近き處あり、)古志郡(海に遠し、)以上七郡也、

〔明治十四年東京地學協會報告〕國郡沿革考第三回　塚本明毅

越後(中略)

戰國ノ時、三島郡ヲ改テ刈羽郡トナシ、沼垂郡ハ金津莊ト稱シテ、郡名自カラ廢シ、又古志郡ノ西方ヲ稱シテ山東郡ト云フ、寬永十一年、松平越後守光長ニ賜フ所ノ領知目錄ニ、頸城魚沼二郡一圓刈羽山東二郡內云々トアリ、寬文中、山東郡ヲ改テ三島郡トナシ、(嗚呼ハ當ニ作ルベシ)刈羽郡ヲ沼垂郡トナス、既ニシテ、沼垂ノ古稱ニ非ザル事ヲ知リテ、再ビ刈羽郡ニ改メ、沼垂郡遂ニ廢セリ、

(中略)

三島郡三鄕、今皆刈羽郡トナル、三島(今[illegible])多岐(今[illegible]村)猶遺名ヲ存セリ、

〔日本書紀二十九天武〕十一年二月甲申、越蝦夷伊高岐那等、請俘人七千戸為一郡、乃聽之、

	久比岐		
管七	頸城(クビキ)	魚沼(イヲヌ)	沼垂(ヌタリ)
同	同	同(伊乎乃)	同(奴太利)
七郡	同	同	同
	同(知元)	同(知元)	同(知元)
同	同(クビキ)	同(ウホヌマ)	
同	同	同	
同	同	同	
同	同(クビキ)	同(ウヲヌマ、イヲノ)	
十五郡	西頸城 中頸城 東頸城	中魚沼 南魚沼 北魚沼	北蒲原 南蒲原

石船（イハフネ）　●黒川　●大殿　ヒラ　村上　●瀬波　●武跡　羽界　●大澤
刈羽（カリハ）　●鯖波　●妙法寺　ヘ柏崎　ヘ椎谷　●石地　出雲崎　國中西濱ニ向

今加刈羽郡

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕越後

書名						
六國史	磐舟（紀）					渟足（紀）
古書						
延喜式	石船（イハフネ）	三島（ミシマ）	古志（コシ）		蒲原（カムハラ）	
倭名抄	同	同	同		同	
拾芥抄	同	同	同		同	
諸書	岩船（文）		古志（文）　山東（吾妻鏡）　三島（文）		同（文）	
郡名考	岩船（イハフネ）	刈羽（カリハ）	同（コシ）	三島（サントウ）	蒲原（カンバラ）	
天保郷帳	同	同	同	同	同	
明治[illegible]	岩舟	同	同	同	同	
地誌提要	岩船（イハフネ）	同（カリハ）	同（コシ）	同（サントウ）	同（カムハラ）	
郡區編制	同	同	同	同	東蒲原　西蒲原　中蒲原	

郡

〔越後名寄雜草三十一〕一慶長年中、松平忠輝君福島ノ部ヲ菩提ガ原ヘ移轉シ、號高田、國衙繁花ノ地トナル、春日山、福島、高田共ニ其間不遠、古昔ヨリノ府中也、年來凡百四十餘年ニ及ベリ、高田ヲ鵜ノ城、又鮫ガ城ト云リ、

〔源平盛衰記二十七〕信濃横田川原軍事

越後國住人ニ城太郎資職ト云者アリ、後ニハ資永ト改名ス、中略資永ハ四萬餘騎ヲ相具シテ、今日ハ越後國府ニ著、

〔承久軍物語三〕去ほどに、しきぶのせうども、時は五月廾日えちごのこうにつきて、せいぞろへして、ゑちごゑつ中のさかいなる、かんばらといふ所につき給ふ、

〔廻國雜記〕宮崎を立て、界川、たもの木、かざはみ、砥並、黑岩などいふ所を打ち過、中略七月十文明十八年五日、越後の國府に下著、

〔倭名類聚抄五國郡〕越後國中略管七中略頸城久比　古志　三島美之末　魚沼伊乎乃　蒲原加無波良　沼垂奴太利　石船伊波布祢

〔延喜式民部二十二〕越後國上管　頸城クビキ　古志コシ　三島ミシマ　魚沼イヲヌ　蒲原カンバラ　沼垂ヌタリ　石船イハフネ〇中略　右爲遠國

〔皇國郡名志〕越後國舊七郡今八郡

頸城クビキ　糸魚川　●鬼谷　●能生　●木立　●有馬川　●長濱　●今町　●ノロ井　●梶崎　●松崎　高田　●關山　●山渕　●市振　●直海　●關川　信越中界

古志コシ　●妙見　●長澤　●チゲヤ　●大白川　長岡　●見付　國中郡

三島ミシマ　●山田　△弘智法印古セキ　北海小郡

魚沼イヲヌ　●淺見　●五日市　●三條　●堀之内　●湯澤　●鹽澤　〈赤澤　上奧界

蒲原カンバラ　●黑水　新發田　村松　●五十マキ　●柄目木　●アレヤ　●芝山　●荒屋　●カチ　●中條　奧界

沼垂ヌタリ　●彌彦　●條口濱　●赤塚　●桃崎　新潟　●沼メリ　●松崎　北海塙重細長郡

國府

（續日本紀四元明）和銅元年九月丙戌、越後國言、新建出羽郡、許之、

（續日本紀五元明）和銅五年九月己丑、太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴、設官撫民、文敎所崇、其北道蝦狄、遠憑阻險、實縱狂心、屢驚邊境、自官軍雷擊、凶賊霧消、狄部晏然、皇民無擾、誠望便乘時機、遂置一國、式樹司宰、永鎭百姓、奏可之、於是始置出羽國、

（續日本紀十五聖武）天平十五年二月辛巳、以佐渡國并越後國、

（續日本紀十八孝謙）天平勝寶四年十一月乙巳、復置佐渡國、

（續日本紀三文武）慶雲三年閏正月庚戌、以從五位上猪名眞人大村、爲越後守、

（古京遺文）小納言正五位下威奈卿墓誌銘并序

卿諱大村、檜前五百野宮御宇天皇〈○宣化〉之四世、後岡本聖朝紫冠威奈鏡公之第三子也、〈○中略〉越後北疆衝接蝦虜、柔懷鎭撫、允屬其人、同歳十一月十六日、命卿除越後城司、四年二月、進爵正五位下、卿臨之以德澤、扇之以仁風、化洽刑清、令行禁止、所冀享茲景祜、錫以長齡、豈謂一朝遽成千古、以慶雲四年歳在丁未四月廿四日、寢疾、終於越城、時年卌六、〈○下略〉

（吾妻鏡三十七）寛元四年六月十三日庚子、入道越後守光時〈法名蓮智〉配流、赴伊豆國、越後國務以下所帶之職、收公之、

（越後名寄三十一）一越後國、古昔顯朝卿知行九箇國之一也、中頃新田義貞ノ一族里見鳥山之人々領之、其後足利公方義滿ヨリ上杉憲榮ニ賜リ、貞治五丙午年ヨリ慶長三戊戌年迄、凡二百五十一年、府內春日山ヲ居城トス、同年三月、景勝奥州會津若松へ所替也、其時節、年來昵近ナリシ寺院等ヲ慕ヒシニヤ、餘多會津へ引移リ、寺號住職ノ僧侶、佛像經卷寶物等ニ至ル迄皆相携フ、故ニ今米澤ニ、又許同寺院ノ號暫時有之ト云リ、

（倭名類聚抄五國郡）越後國〈國府在頸城郡、行程上三十四日、下十七日、〉

ニ治ス、十五年、子忠俊事ニ坐シテ國除シ、松平忠輝ヲ封ジ、六拾萬石徙テ高田ニ治ス、元和二年、罪有テ封ヲ沒シ、酒井家次ニ高田ヲ賜フ、拾萬石四年、嗣忠勝松代ニ信濃轉ジ、松平秀康ノ第二子忠昌ヲ封ズ、貳拾四萬石寛永元年、越前ニ改封セラレ、從子光長之ニ代ル、天和元年、罪ヲ獲テ國除シ、貞享中稻葉正往ユキヲ封ジ、戸田忠眞、松平定重之ニ次ギ、五世定賢白河ニ轉ジ、寛保ノ初、榊原政永封ゼラル、其餘州内封ヲ受ル者、長岡初牧野、堀直寄、後與板初牧野康成、後井伊直矩、村松堀直時、椎谷堀直之、絲魚川初稻葉正成、後松平直之、黑川柳澤經隆、三日市柳澤時睦、トス、最後長岡ノ支封三根山牧野忠泰、藩列ニ入リ、後峯岡ト改ム、絲魚川改テ淸崎ト稱シ、凡十一藩、天保中、奉行ヲ新潟ニ置ク、王政革新、新潟府、越後府、後水原縣、柏崎縣ヲ設ケ、又悉ク之ヲ改テ縣ト爲ス、既ニシテ合併シテ新潟柏崎二縣ヲ更置シ、又柏崎ヲ省イテ新潟ト併ス、蒲原郡津川鄕七拾村ハ、上杉氏ノ時以リ會津領ニ屬ス、仍テ若松縣ニ隷ス、

〔先代舊事本紀十國造〕久比岐國造

瑞籬朝〇崇神御世、大和直同祖、御戈命定賜國造、

高志深江國造

瑞籬朝〇崇神御世、道君同祖素都乃奈美留命定賜國造、

〔國造本紀考三〕高志深江は諸國の村名を記せるものに、越後國頸城郡沼川鄕深江村とある是なり、また古志郡大島庄にも、深江村ありとぞ、

〔續日本紀一文武〕元年十二月庚辰、賜越後蝦狄物、各有差、

〇按ズルニ、越後ノ名ノ正史ニ見ユルハ、此ヲ以テ始トス、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月甲申、分越中國四郡屬越後國、

〇按ズルニ、此時分割セル四郡ノ事ハ、越中國篇郡條ニ引ク所ノ三州志來因概覽ニ載ス、宜シク參照スベシ、

頸城（千九十八村、古久比岐國、見ニ國造紀ニ、古府沿、）　苅羽（百九十村、延喜式等不載、疑未ダ詳ニ在ニ何時ニ、正德二年四月令、自今宜シ作ニ刈羽ニ、而今仍作ニ刈羽ニ、）　魚沼（四百九村）　古志（二百六十八村、天武十一年紀、越蝦夷伊高岐那等請、俘人七千戸爲ニ一郡ニ、乃聽レ之、蓋今古志郡、）　三島（サントウ）二百二十四村　岩船（二百五十村、延喜式等作ニ石船ニ、孝德紀磐舟柵、即此地、）　蒲原千六百十二村　沼垂（ヌタリ）（延喜式等載、後廢、未ダ詳ニ在ニ何時ニ、孝德紀渟足柵、即此地、）　出羽（和銅元年九月置、五年升爲ニ國ニ、）

〔日本地誌提要　四十一越後〕沿革　古ヘ國府ヲ頸城郡ニ置ク、（是春日山ナリ）寛弘長和ノ際、平維茂邑ヲ頸城郡ニ食ミ、子繁茂秋田城介ニ任ジ、城ヲ以テ氏トス、玄孫資長ニ至リ、平宗盛奏請シテ州守ニ任ジ、弟長茂蒲原郡赤谷ニ居リ、後源頼朝ニ降ル、文治元年、頼朝安田義資ヲ以テ州守ニ任ジ、守護ニ補ス、建仁元年、長茂謀叛シテ誅セラレ、其從子資盛鳥坂ニ（城四郎）據テ叛ス、佐々木盛綱伐テ之ヲ平ラグ、將軍頼家功ヲ賞シテ、其子信實ニ邑ヲ州內ニ賜フ、建武中興、新田義顯ヲ以テ守護トス、延元ノ初、足利尊氏上杉朝房ヲシテ守護タラシム、足利基氏關東管領タルニ及ビテ、執事上杉憲顯ヲ以テ朝房ニ代フ、憲顯孫房方（憲顯ノ第四子憲方ノ子）ニ傳ヘ、春日山城ニ治ス、五世房能ニ至リ、家宰長尾爲景ト隙アリ、永正三年、爲景房能ヲ弑シ、上條城主定實（房方ノ孫、房實ノ子）ヲ迎ヘ、陽尊シテ主トナシ、全州ヲ擅有ス、天文十一年、爲景越中ニ戰歿シ、子晴景立、十六年、弟輝虎ト相鬨テ、敗死ス、諸將士遂ニ輝虎ヲ推テ主トナシ、春日山ニ治ス、既ニシテ上杉憲政來奔シ、約シテ父子トナル、輝虎因テ上杉ヲ冒シ、京師ニ朝ス、將軍義輝以テ關東管領ト爲ス、輝虎相模ノ北條氏ヲ伐チ、上野武藏ヲ蹂躙シ又甲斐ノ武田氏ト信濃ヲ爭ヒ、威武四隣ニ加ハリ、能登佐渡及越中半州ヲ取リ、上野半州、出羽、信濃各二郡ヲ併ス、天正六年、輝虎卒レ、義子景虎景勝國ヲ爭ヒ、管內大ニ亂レ、越中、能登、上野、信濃ノ地ヲ失フ、景勝終ニ景虎ヲ殺シテ自立ス、慶長二年、豐臣秀吉之ヲ會津ニ徙シ、堀秀治ヲ春日山ニ封ジ、（三拾五萬石）溝口秀勝ヲ新發田ニ（[illegible]川氏ノ時、封[illegible]ノ知シ、）村上義明ヲ本莊ニ（後村上ト稱ス）封ズ、（後義明罪アリテ封ヲ除レ、其數氏、事保守內亂一信テ封ズ、）十二年、秀治徙テ福島ニ（[illegible]城）

海ノ間、第一深キ所、凡三百尋有ト云ヘリ、仍佐州御金荷渡ル日ハ、縮ニ三百尋ノ浮縄ヲ付ルトカヤ、

〔日本實測錄一沿海〕從鵜山(本貫)数沿海、至三厩、(○中略)

越後國頸城(クビキ)郡哥宿、三十七度、四里四町二十間(至糸魚川二里三十二町) 梶屋敷宿 五里一十一町一十九間(至能生宿二里九町三十七間) 名立大町村、三十七度九分半、四里六町(至有馬川宿二十町廿六間、從有馬川至長濱宿廿二町四十三間、) 今町 二十一町一十二間 黒井宿、三十七度一十二分、一里三十四町六間 潟町、三十七度一十四分半、 三里一十一町五十一間 鉢崎宿、三十七度一十九分半、 三里九町四十一間半(至鯨波宿二里一十町三十四間半) 苅羽郡柏崎町(至大町四町一十六間、北極高三十七度二十二分中、) 四里二町二十二間半(至宮川宿二里三十三町一間、從宮川至椎谷二十二町三十四間、) 三島郡出雲崎町、三十七度三十三分、 三里一十六町五十間(至山田宿一里二十六町四十四間半) 寺泊町、三十七度三十七分半、 二里卅五町四十三間(至三國街道追分一十七町一十八間) 間瀬村 三里三町二十間 蒲原郡角田濱 六里二町二十七間(至五十嵐濱二里二十八町五十二間) 新潟信濃川湊口(至三殿渕崎、至古三ノ町、三十三町二十一間、北極高三十七度五十五分半、從三殿渕崎沿川、至白山前、二十五町一十三間、) 二町四十八間 山下新田信濃川湊口(至山下新田一十一町五十間、) 三里二十九町一十間(至阿賀野川口一里一十九町) 太郎代濱(至太郎代濱宿所三町三十間) 三十七度五十九分、 三里一十一町一十五間 村松村 四里一十町四十五間(至荒井濱一里三十一町五十一間) 岩船郡岩船町、三十八度一十一分、 一里一十七町四十三間 瀬波町 四里一十町六間(至柏尾村一里三十四町二十三間) 新保村 二里三十四町四十間 塞川村、三十八度二十七分、 二里二十五町四十五間 府屋町(又呼大川宿) 三十八度三十分半、 二十七町二間(至國界二十町二間) 羽後國田川郡鼠ケ關

宿驛

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬(○中略)

越後國驛馬(滄海八疋、鶉石、名立、水門、佐味、三島、多大、大家各五疋、伊神二疋、渡戸船二隻、)傳馬(頸城、古志郡各八疋、)

建置沿革

〔日本國郡沿革考二北陸道〕越後 大寶二月三月、分越中國四郡、屬越後國、上國、管七郡、四千五十一村、

四十二間（至二居峠、八丁一十七間）　三股驛　一里二十八町二十二間半（至芝原峠二十三丁三十七間、從峠至神立村二十四丁二間、）　湯澤驛上町　一里二十一町五十八間　關澤　一里三十二町五十七間　鹽澤驛　三十三町九間　六日町驛　一里二十六町四十二間　五日町驛　一里二十二町二十四間半　浦佐驛　二里一十三町一十一間（至藤原峠、一里二丁四十間）　堀之內驛　二里四町二十四間半（至上田川岸、一里二十一丁二十一間）　川口驛、三十七度一十六分、　三里一十五町四間半（至麻生村木津、一里一十三丁八間、自木津、至妙見村、一里三十丁一十三間半、）　古志郡六日市驛　三里三十八間半　長岡渡町、三十七度二十七分、　三里八町五十六間半（至信濃川岸、二里五丁四十八間半）　三島郡與板新町　二里二十八町一十七間半　蒲原郡地藏堂町、三十七度三十七分半、　二里三十二町二十五間　三島郡寺泊町（從高崎、至寺泊、）街道、通計五十里一十二町四間、

從中山道追分、歷善光寺、至今町、○中略

越後國頸城郡關川宿　三十四町三間　田切驛　一里二十二町一十五間半　關山宿、三十六度五十六分、　一里九町一十五間　松ヶ崎驛　一里二十七八町二十間　荒井驛　二里二十三町四間（至矢代川岸、一里二十一丁一間、）　高田奥服町三十七度七分　二里一十町三十八間半　今町（從追分、至今町、）街道、通計三十五里二十六町三十九間半

〔越後名寄六〕越中ノ國堺市振ノ驛ヨリ、出羽ノ國境府屋ノ驛迄、國半片、頸城郡、刈羽郡、三島郡、蒲原郡、磐船郡五郡ニ渡リ凡八十有餘里、西北ノ方荒海也、南海ニ異リテ潮汐ノ漫干モナク、只折節流ルヽ計也、尤春夏ノ間、潮ノ干ル時モ有ケレ共、定マレル時刻ナシ、三月ヨリ八月迄ハ海上靜ニレテ、船ノ往來モ心安シ、夫過多三月、正二月迄ハ波風荒ク、遠キ船路乘ガタシ、行程九十里ニ及ブ、沖ナレバ大小トナク船ヲ乘テ世ヲ渡ル有、或ハ鹽ヲ燒テ辛キ身ヲスギルモ有、其中ニ漁リコソ最便ナキ業ナレ、海底ニ谷魚場ト云ヘルハ、一段低ク川ノ形ニ深キ處有、谷魚ノ居所故名付タリ、藩外ノ魚モ有、阿羅鰕、比目魚等多シ、至テ深險ナル底下故ニ、コヽナル魚何レモ性不宜、佐州ヘ渡

新發田、二十七町五十公野、古城有、七間町觀音アリ、一里米倉、山路ナリ、一里山内、出口ニ新發田ヨリ番所有、子安地藏越奧堺小川有、一里赤谷、入口ニ若松ヨリノ番所有、此當リ蒲原郡ナリ、一里半綱木、此間ニ橋アリ、一里十一町荒谷、アラヤ川、二十五町行地、此間鑛防護鑪所金鉢水有、鑪多峠ヲ下津川町嘉阿賀川舟渡、二里津川、津川ヨリ若松城下迄十六里ナリ、

奧州米澤道　新發田ヨリ米澤口

新發田、一里塚ノ目、加地川渡シ　加地八町館村、松平彈正殿役所有　一里二十八町金山村、古城有　一里中條村、大名川アリ　一里黒川、松平民部殿役所有　一里青海新田、中道出ニ村上道　一里鍛冶屋村、半里春木村新島村、一里花立村、半道飼付村、セバノ渡有、荒川ノ上也、一里大島村、一里上關村、大倉觀音有　一里下關ノ村、傍ニ湯澤ノ温泉有、川アリ、一里川口村、一里大路澗村、番所有　一里野間村、一里畑居村、大ナル農家二軒アリ、チリガ嶺此間也、龍骨ノ出ル處、越後國ト奧州ノサカイニアリ、三里玉川村、米澤ノ番所有、萱原湯有、蘆水村、厚朴嶽有　二里小度村、三萬石ノ陣屋有、黒澤嶺アリ、二里黒澤村、櫻峠アリ　三里白子澤村、ウツボ嶽有、此所藩分ニ前後ニ谷川落ル、越後荒川ノ上、三里手ノ甲村、一里松原村、三里小松村、五里米澤、

出羽道　村上ヨリ庄内口

村上、城山四面周リ一里八町、屏風テ立タルガ如ク、松柏茂リテ頂ニ郭有、家中ハ山足ニ連テ最堅固ナリ、町家三千軒、檐ヲ並テ賑也、此ヲ行過テ野村川、宮ノ下舟渡、此川瀬波ノ湊ニ落、行々山深ク往來ノ旅人モ稀ニ、秋田外濱ノ街道トモ不見、甚寂キ風情ナリ、二里半猿澤、一里半鹽野町村、長坂南權現藥師堂有　一里半葡萄、此里四面山ノ中ニテ甚寂寥ノ氣色也、村ノ出口ヨリアドウ嶽名高キ難所也、嶺中ニハ人倫不通也、半過行谷有、數丈ノ岩ノ上ニ矢武許明神ノ社アリ、一里十町大澤村、居家七八軒有、昔日ハ大澤ノ朝見ズト稱シ、怪キ事モ有シニヤ、今ノ御代ニハ穩便ト也、二十九町、此間山川ノ流ヲ七八度渉ルナリ、一里十町田中村、居家コヽカシコ飛散テ有、此ヨリ村里多シ、二里一町府屋村、居家ヨシ、後ニ大川ト云流レ有テ、越テ下ス、岩崎村、中濱村過テ、越後國ト羽州ノ堺也、ハラミ村小屋村ヲ過テ關川ヲ渡ル、一里半根津關、居家山ノ中段ニ有、前ニ關川ノ流レ有、向ニ岩山辨才天堂有リ、入海ハ關ニテ客船多ク泊リ居ル、氣色ヨシ、村ノ名主ヲ五十嵐半右衛門ト云、此ガ宅ノ前ニ文治三年義經奧州下リノ節旅館ノ跡アリ、

〔日本實測錄三街道〕從中山道高崎歷三國峠至寺泊〇中略

越後國魚沼郡淺貝驛　一里二十八町二十八間半　二居驛、三十六度五十一分、　一里二十二町

南ニ聳高山而險隔陽氣、西北ニ帶海水有餘陰氣、故常寒濕深シ、殺伐之氣烈ク、雪ノ降事早シ、仍東南ノ峯ニハ九月ノ中ヨリ頂白ク、歷三春到四月五月、猶殘雪アリ、然レドモ土地肥テ草木繁茂シ、五穀ミノル、乍然亦秋ニ到リ濕雨多ク刈採乾燥ル故ニ、穀不堅、仍年ニヨリ夏ヲ向ヘテ腐ル事アリ、

道路

〔越後名寄七驛路〕北陸道　高田ヨリ越中

高田（此高田ニ春日山アリ）一里中屋敷、（國分寺五智如來居田明神）二里長濱、（天神）二里有馬川（青木坂、名立橋現山縣ノ上ニ大木生タリ、）三里能生、（入口ニ權現有、此關ニ早川有、）一里半梶屋敷（大和川）糸魚川、（城下也、但古郡、マタ姫川難處也、田海、）三里青海、（青海川駒返）一里宇田、一里[illegible]波、（半分道計行テ風波ト云處ヨリ、親不知ニ到ル、北國第一ノ切處ナリ、）一里市振、（驛ノ出口ニ關所有、高田ニテ取タル女手形ヲ出シテ通ル、土ノ木村ヲ過テ境川有、難處也、國境、）一里

越中國堺ノ驛市振ヨリ、越中富山城下迄十三里餘、

信濃道　高田ヨリ信州

高田（屋代川土橋有）二里半荒井、（此邊ヨリ末々大雪ノ節買テ往ク）一里二本木、松ガ崎（橋一ツ有テ上下之馬次ナリ）一里關山、（寶藏院此邊妙光山ノ麓也、大田切村谷へ下リテ大田切難所アリ、）二里二俣、（半道）田切村、（右二村ニテ上下馬次、此間小田切アリ、）一里關川、（出口ニ關所有、關川ノ流中島ニ橋三橋渡シ、川ハ國境ノ文殿ニテ信越ノ堺ナリ、赤川村餘澤山、）一里信州野尻、關川ヨリ善光寺へ七里半、善光寺ヨリ上田城下へ十一里、善光寺ヨリ松本城下迄十六里半四十八丁、

三國路　長岡ヨリ上野

長岡、三里六日市、三宅、（三宅神社、神名帳ノ神也、領主ノ番所有、六日市ト三宅ニテ上下ノ馬次也、）三里川口、（入口ノ川岸ニ川合ノ神社有、神名帳ノ神也、荒隙ノ宮ト云、和南津渡有、）二里堀內、（山坂）二里半浦佐、二里五日町、二里六日町、一里鹽澤、二里關、二里湯澤、（湯ニ溫泉アリ）二里半三俣、三里蓋居、二里半淺香井（山坂上リ、道ニ宮有、伊夜彥明神、戸隱明神、赤木明神三社也、信越上州三國ノ境也、峯ヲ下ルニ[illegible]ト云難嶮ノ切所也、）三里半永井、（此關[illegible]ガ京番所アリ、）越州

淺香井ヨリ上州高崎迄二十一里ナリ、

會津道　新發田ヨリ津川口

疆域

〔令義解七公式〕凡朝集使、○中略北陸道神濟以北、謂越中與越後界河也○中略皆乘驛馬、

〔日本地誌提要四十一越後〕疆域　西ハ越中、西南ハ信濃、南ハ上野、東ハ岩代、東北ハ羽前、西北ハ海ニ至ル、東西凡六拾貳里、南北凡壹拾七里、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕越後國岩船郡　遠測　粟島

〔越後名寄六島〕粟。生。島。

島ノ長サ南北十七八町、總周リ一里半餘、東西ニ二所村里有、各人家三十軒計宛有之、旅船ノ宿舍二軒有、上泉水屋ト云、瀨波ノ港ヨリ海上七里海有、沖馬御鼻ヨリ海上四里餘ナリ、海路往來ノ船ノ泊處能間、有澳乘船難風ニ會テ、多クハ皆此島ヲトリ、危キヲ免レ、不通ノ大荒ニモ、安ナル、間ニテハ船路動計ニテ、波ノ打カクル事ナシ、僅ニ小キ島ナレ共、難船ヲ助ル事若干算ヘ盡スベカラズ、最愛タキ島也、常ノ產ハ、山畠ヲ耕作シ、漁ヲ世渡トス、又小船ヲ造作シ乘ル在、牧馬有、一年交リニ峯ヲ追越テ、駒ノ棲シ址ニ耕作シ、粟黍ヲ蒔植ル、馬ハ小ナリ、觀音寺ト號シ曹洞派有、本尊千手觀音也、長五尺計、

地勢　地味

〔易林本節用集下〕越後越州上、管七郡、四方六日、山當南、帶北海、五穀不熟、桑麻多、大々上國也、

〔日本地誌提要四十一越後〕形勢　陸羽ノ大山脈、東北ヨリ來リ、蜿蜒南方ヲ繞リ、信野ニ連ル、浜流縱横、州內運輸極テ便、其土廣衍、其產富贍、機織ニ巧ニシテ、生理常ニ豐ナリ、民俗較柔情ニ流ル、冬春ノ間積雪丈餘、舊下路ヲ通ジ、河氷橇行スベシ、

〔東遊雜記五〕越後の國は、北方へ細長く出はりし國にて、凡圖のごとくに土人の物語りなり、四方の山々を見るに、土色しろ〳〵として、遠見雪のごとし、凡山多き所也、

〔越後名寄一國〕越後大々上國也、凡其形狀計、南西ヨリ東北ヘ縱長ニシテ、越中ノ國境市振ノ驛ヨリ、出羽ノ國城府屋ノ驛迄、凡八十有餘里、橫ノ廣サヲ計見ル處三十里ニ及ベリ、最不可爲小國也、東

島郡ヲ置ケリ、明治維新ノ後、頸城郡ヲ東、中、西ノ三郡ニ、魚沼郡ヲ南、中、北ノ三郡ニ、蒲原郡ヲ東、西、中、南、北ノ五郡ニ分チ、古志、三島、岩船、刈羽ヲ併セテ、共ニ十五郡ト爲シ、新ニ新潟長岡ノ二市ヲ設ケ、新潟縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄國郡五〕越後古之乃三知乃之利（コシノミチノシリ）

〔饅頭屋本節用集天地江〕越後（エチゴ）以上越州

〔日本風土記一寄語島名〕越後日「ニラテンシヨウ」清谷

〔東遊記二〕米山

北地の人越後を二ツに分ち、上越後下越後といふ、上越後とは高田領、糸魚川領等をいふ、其東に米山といふ高山ありて、其西の麓に關所あり、○中略誠に越後を二ツにわけたる山也、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

越後高田（大手町）極高三十七度七分、經度東二度三十五分、從東都（中山道分、經善光寺）七十三里一十二町一十三間、

越後新潟（古三之町）極高三十七度五十五分半、經度東三度二十四分半、從東都（中山道高崎三國峠通、中柏崎通）九十一里一町七十九間

〔日本經緯度實測〕北極出地

越後　名立　三七度〇九分三〇秒　　潟町　三九度一四分三〇秒

　　　長岡　三七度二七分〇〇秒　　新潟湊　三七度五五分三〇秒

　　　高田　三七度〇七分〇〇秒○中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　越後　高田　東二度三四分四二秒

○中略

右四首、天平二十年春正月二十九日、大伴家持、

〔類聚三代格五〕太政官符

應省史生一員置弩師事

右得越中國解偁、此國有弩無師、不習機發、若有不虞、卒爾何爲、望請省史生員置弩師者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平七年十二月九日

越後國

越後國ハ、エチゴノクニト云ヒ、舊クハコシノミチノシリト云フ、北陸道ニ在リ、古ノ越(コシ)國ノ一部ニシテ、其ノ北端ニアルヲ以テ北越ノ稱アリ、東ハ岩代、西ハ越中、南ハ上野、西南ハ信濃、東北ハ羽前ノ五國ニ界シ、西北一帶海ニ面セリ、東西六十二里、南北凡ソ十七里、其地勢ハ、東北卽チ岩代羽前ノ境界ニハ大山脈横ハリ、信濃川ハ西南ヨリ入リテ國ノ中部ヲ貫流シ、大小ノ河川亦此中部ニ注集シ來リテ平野ヲ開キ、一大澤國ヲ成ス、信濃川ノ海ニ落ツル所卽チ新潟港ナリ、近世、上越後、下越後、(米山ヲ以テ界ス、)ノ名アリ、此國ハ文武天皇大寶二年、越中國ノ四郡ヲ併セ、元明天皇和銅元年ニ新ニ出羽郡ヲ置キ、同五年、出羽郡ヲ分離シテ出羽國ト爲ス、聖武天皇天平十五年、佐渡國ヲ併セシガ、稱德天皇天平勝寶四年、佐渡國ヲ分置セリ、古ヘ國府ヲ頸城郡ニ置キ、頸城(クビキ)、古志(コシ)、三島(ミシマ)、魚沼(イヲヌ)、蒲原(カンバラ)、沼垂(ヌタリ)、石船(イハフネ)ノ七郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、後世沼垂郡ヲ廢シテ蒲原郡ニ併セ、三島(ミシマ)郡ヲ刈羽郡ト改稱シ、更ニ古志郡ノ一部ヲ割キテ三(サン)

谷の戸はけふ霧さして禁衣すそまの山に秋風ぞふく

三島野　二上の邊なり、續拾遺秋の歌に、前の內大臣、

　三島野のあさぢがうは葉秋風に色付ぬとやうづらなくらん

有磯海　遠ひくる名のみありその濱千鳥よそに鳴つゝ戀やわたらん

多胡浦　早苗とる田子のうら人夏かけて苗代水に入江せくなり

甞の山　付り木の葉の里　色染る木の葉の里の唐錦あらくなたちそ甞の山かせ

砺波山　此所に關所有之　妹が家にくものふるまひしらるらんとなみの關をけふ越くれば

卯花山　||影さす卯花山のおみころもたれぬぎかけて神まつるらん

藪波の里　やよなみの里に宿かる春雨のこほりつらんと妹につげつる

劒峯　越路なる劒の峯もありそ海のおもひきるせのなどなかるべき

奈呉海　なごの海の汐のはやひにあさりにし出んとたづは今ぞなくなる

戀山　壹岐國に同名あり、新勅撰戀のうたに、

　戀の山しげき小笹の露分て入初るよりぬるゝ袖かな

鵜坂の杜　礪浪山　志雄濱　越の水海　二越山

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒略○中　越中國五十人

諸國器仗略○中　越中國甲二領、横刀四口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔令義解五軍防〕凡略○中資人、略○中不得取三關、及太宰部內、陸奥石城石背、越中、越後國人、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年五月丁丑、勅曰、機要之備、不可闕乏、宜仰坂東諸國、及能登越中越後、令

備糒三万斛、炊曝有數、勿致損失、

〔萬葉集十七〕東風之越俗語東風謂之安由乃可是也伊多久布久良之奈呉乃安麻能、都利須流乎夫禰、許藝可久流見由、

一人數三拾壹万三千五百六拾貳人　内拾六万五千七百九拾三人男　拾四万(万下恐脱ニ七千二字)七百六拾九人女

(吹塵錄五人口及國高)文化元甲子年諸國人數調

皆私領
一人數三拾四万五千四百拾九人　高六拾壹万千石餘　越中國

内拾八万千貳百貳拾貳人男　拾六万四千百九拾七人女

弘化三丙午年諸國人數調

皆私領
一人數四拾万三千百貳拾壹人　高八拾万八千八石餘　越中國

内貳拾万五千百七拾八人男　拾九万七千九百四拾三人女

風俗

(人國記)越中國

越中國之風俗、陰氣ノ内ニ智有、勇有、佞成處多シ、人ト物ヲ約スルニモ、親ハ子ノ云フ事ニ一言之内ニモ質ヲトリ、子ハ親ノ言葉ヲ質ニシテ、譬バ親ノ利物ヲ機嫌ヲ以是ヲ取、親死スル後ニハ、是家督親ノ讓ナド、佞ヲ作ル事、士農工商皆此風儀ニ而、親子夫婦兄弟朋友之交リニモ卒爾ニ而、底意ニ卒爾成事ナキ也、サルニ因テ、毎物大事ニシテ大事ヲ破ル、軍ニ逢フ時モ、智謀ヲ以敵ヲ取ヒシガントノミ工夫スルトイヘドモ、人之氣ヲ知ル事アタハザルベキハ、其智ノ不足事ヲ不知而、人ニ勝ツ事、邪佞ヲ以成リガタカルベキ也、如斯之風俗都而我ニホコル意地有、勇氣甚クハシキ故也、雖然臨事不厭死、

名所

(日本鹿子十)同國〇越中名所之部

二上(フタカミ)山　今いするぎより、富山へ岩瀨通して越れば、此中間に高岡と云所有、是より北に有、續古秋上家持のうた、

むば玉のよや更ぬらし玉くしげ二上山に月かたぶきぬ

澀谷　すそまの山　澀谷の崎のありそによする波いやしらく〜にいにしへ覺ゆ

國産貢獻

人口

越中國、正税公廨各卌万束、大學寮料一万束、國分寺料三万束、京法華寺料二万五千束、文殊會料二千石、修理池溝料三万束、救急料十三万束、俘囚料一万三千四百卌三束、

〔倭名類聚抄國郡五〕越中國略〇註管四（中略）正公各三十萬束、本稻八十四萬四百三十三束五把、雜稻二十四萬四百三十三束五把、

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀略〇中越中國四千石〇中略

年料別貢雜物略〇中越中國零羊角二具〇中略

諸國貢蘇番次略〇中越中國十壺四口各大一升、六口各小一升〇中略　右十箇國爲第四番辰戌年〇中略

交易雜物略〇中越中國絹百疋、商布一千二百段、履料牛皮四張、鹿皮廿斤、綿、當三百十九合、蜜廿八合、漆一石三斗、

〔延喜式主計二十四〕越中國行程、上十七日、下九日、海路廿七日、

調、白疊綿二百帖、自餘輸白細屯綿、浮浪人別輸商布四段、　庸、韓櫃卅六合、塗漆著鑞五合、白木四十一合、自餘輸綿、其輸疊綿及白綿、其庭各數ニ布一段、折ニ庸綿、充布價、段別二屯、　中男作物、紙、紅花、茜、漆、胡麻油、鮭楚割、鮭鮨、鮭氷頭、鮭背腸、鮭子、雜腊、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子略〇中越中國甘葛煎一斗

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略〇中

越中國十六種　白朮、白芷各十一斤、藍漆、大黄各五斤、苦參、夜干各十斤、黄耆三斤、榧子五斤、薯蕷二斗九升、桃人六升、附子三斗、蜀椒四升、甘葛煎三升、獺肝二具、零羊角四具、

〔延喜式内膳三十九〕年料略〇中越中國鮭楚割一斛五籠、鮭鮨一斛五籠、

〔毛吹草三〕越中

鹽硝　黄蓮　能谷鉛　白川綿　八講布　栗柄寨砂　松波鮓俗ニ鰺ノ鮓ト云、鰡ニ似タル魚ト云、　鱒アノ字ヲ云　九万疋

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年正月甲午朔、越中國獻白烏、

〔官中秘策四〕越中國　四郡略〇中

出擧稻

年、利次君ヘ十萬石分與アル頃ハ、未ダ其采邑ノ地定マラズ、或云、婦負郡ニテ六萬石、能美郡ニテ二萬石、下新川清山邊ニテ一萬六千八百石餘、上新川富山邊ニテ蹄米トシテ三千二百六十石餘ヲ納ム、萬治三年七月、二百四十九村易邑、（中略）此時能美郡ノ二萬石ヲ以テ、下新川一萬六千八百石ト換ム、田成ル、此後富山領ノコト公ヨリ官ヘ願ハセラルニ依テ、寛文四年ノ舉目如此ト云、自是富山領二郡村、數ノ通四百九十七村、總租ノ通十四萬七千石ト云、今ノ田法、越中ハ三千六百歩ナ一町トシテ一石ノ斗代二百四十歩也、相傳、天正八年、信長公ヨリ菅屋長賴福富行清ヲ監トシテ、能州檢地ヲ爲シムルトキ、越中未ダ全ク信長公ノ手ニ属セザレバ、古制ノマヽ三百六十歩一反ニテ、實ニ能ノ制ニ異也、其後我封疆ト成テモ、田制ヲ改メラレズト云、畝ハ賀能ノ檢地時リ越中ニ及フ比ホヒ、信長公薨ズルニヨリ、天正十年檢地ノコト賀能マデニテ、越中ハ縄入ナシト云、此後天正十八年、及ビ文祿二年ニ、秀吉公ヨリ木村常陸ヲ以テ、兩度諸國ヘ檢地在テ、三百歩一段ト定ムルコトアリ、[illegible]今然ルトキニモ越中縄入ナキニヤ、今猶舊制ノマヽナル者ハ、此時ハ既ニ我公ノ領メシハ、公ノ政制ニ任セサカシ、ナラン、秀吉公諸國檢地帳目錄ニハ越中三十八萬三百石トアリ、武要辨略等ニハ、五十三万六千三十七石、一本作六千六百廿石七石トアリ、當時高辻帳表ハ、略○

註新川四百拾八村、正德元年ノ高辻ニハ、此内九村、長門守領入組トアリ、長門守トハ富山侯也、拾四萬七千五百拾一斛四斗一升、射水二百拾八村、拾三萬二百五拾六斛四斗四升、礪波四百八拾四村、二十萬二千百十一斛八斗四升、三郡ノ通計一千百二拾村、今存ル正數ハ、一千二百七十八村也、四拾七萬九千八百七拾九斛六斗九升、内賜文押字舉目額四拾六萬九千七百五十四斛七斗七升三合、籍外墾額一萬百二拾四斛九斗一升七合也、是正德元年辛卯、天明七年丁未、官へ書出ル員數也、開墾額、三郡内ニテ拾五萬五千二百九十二斛一斗一升也、是ハ實曆十年、書出ル新田額數ニテ、當時モ同然也、但シ眞享元年ノ高辻ニハ、三郡ノ内十二万七千七百四十七石三斗ノ新開額也、此以後之一二萬七千五百四十四石八斗八升ノ新開增加、此二新田テ井合シテ、實曆十年、官へ書出ル額數ナリ、

〔日本鹿子十〕越中國、四郡、大々中國、四方三日、知行高五十三万六百三十石、

〔和漢三才圖會越中六十八〕四郡　五十三万六千三十七石

〔官中秘策四〕越中國　四郡（中略）

一石高六拾壹万千石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調

越中國皆私領　一高八拾万八千八石四斗六升壹合八勺貳才八石、一本ニ八百石ニ作ル、

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻（中略）

〔海東諸國記〕越中州　有温井、水田一萬七千九十九町五段、

〔三州志來因概覽一越中國郡鄕家因〕我國初、天正(百七代正親町帝、武朝豐臣秀吉公、)十三年乙酉、豐主ヨリ礪波、射水、婦負三郡ヲ瑞龍公(〇前田利長)ニ授與ストイヘドモ、其事九月廿一日、豐主ヨリ國祖ヘノ書中ニ(見書文、年譜、菅原見聞集、三壺記等皆載之、)載スルノミニテ、戰國騷擾ノ際、是亦委曲稅數等ノコト傳ラズ、斯後文祿(百八代後陽成帝、武朝同上、)四年乙未三月、新川郡ヲ國祖ヘ益封ノ時モ、仔細ノ齊錄見ヘズ、微妙公(〇前田利常)ニ及ンデ、慶長十九年甲寅(百九代後水尾帝、將軍德川秀忠公、)九月(十六日廿三日)東照(〇德川家康)台德(〇德川秀忠)ノ兩廟ヨリ華押ノ公約封入ノ賜帖ニ、加賀、能登、越中ノ三州執賜トアレドモ、是亦別ニ三州各郡稅帖ノ擧目ナシ、寬永十一年甲戌(百十代明正帝、將軍德川家光公、)閏七月、徽廟(〇德川家光)ヘ微妙公ノ書上サセラル封入目錄ニハ、越中國四郡、通計稅額五十三萬三千三百六十一斛一斗九升、(內百五十石寺社領也、〇中略)總田三萬千六百三十町四反四畝十五步、總畠三千九百二十六町九反六畝二十三步、(內九萬二百五十七石荒川成、〇中略)總物成合テ十四萬七千五百九十五斛四斗六升三合五勺五抄(內四十九石九斗九升四合八勺五抄寺社領)トアリ、〇中略此後陽廣公(〇前田光高)ヘノ賜帖ノ高ハ見ヘズ、(〇中略)然レドモ寬永十六年、微妙公賀州小松ニ養老、陽廣公三箇州襲封ノ時、陽廣公ヘハ八十萬石、微妙公ヘハ養老領、新川、能美二郡ノ內ニテ二拾二萬二千七百六十石、利次君ヘ婦負、新川、能美三郡ノ內ニテ拾萬石、利治君ヘ江沼一郡、新川ノ內ニテ七萬石分與アリ、松雲公ノトキ、嚴廟(〇德川家綱)ヨリ寬文(百十一代後西院帝)四年甲辰夏四月五日賜ル、公約采邑稅帖ニハ、射水郡二百十八村、(今ハ支村ヲ加ヘ三百十三村也、)稅額十三萬零二百五十六斛二斗四升、礪波郡四百八十四村、(今ハ支村ヲ加ヘ六百五十九村也、)稅額二十萬二千百十一斛八斗四升、新川郡四百十八村、(此外ニ七十三村富山封入也、是ヲ除テ今支村ヲ併セ、八百七十三村數州郡ノ封邑タリ、)稅額十四萬七千五百十一斛四斗一升、三郡稅額ノ通計四十六萬九千七百五十四斛七斗七升三合、此內一萬百二十四斛餘ハ、分限帳ノ餘タルニヨリ、籍外額(ニヤ、)ト云云、婦負郡百八十村、(今ハ本支併テ三百二十五村、)竝ビ新川郡ノ內七十三村(今ハ百十村也、)併セテ稅額十萬斛ハ富山侯ヘ公約ノ邑入也、(按ルニ、是ヨリ先キ寬永十六

藩封

田數石高

之由、同十二月、國司加廰宣、就之去正月、任國司廰宣地頭等寄進狀、爲東福寺領、停止勅院事國役等、爲地頭請所、可令備進年貢百石、兼又當國宮島保、雖當家領、被糺返國領之由被下評定殿下政所御下文、是爲寄附彼寺、所被相傳也、仍被申其趣於將軍家之間、可存其旨之由、今日被奉御返事、

（壬生文書綸旨院宣御教書等）越中國黑田保、幷中村保等事、停止地下輩濫妨、可全所務者、依御氣色、執達如件、

建武四年十月四日　大藏卿（花押○高階雅仲）

左大史殿（○壬生匡遠）

（南狩遺文一）東寺藏

判（尊氏）

佐々木信濃阿闍梨賴宗

可令早領越中國田中保（總領八部）半分、越後國佐味庄參拾貳分云々地頭職事、右爲勳功之賞所宛行也者、隱岐大夫判官高貞（鹽冶）配分可致□□□□□之狀如件、

建武四年十二月廿四日

（康正二年造內裏段錢幷國役引付）合

五百文　武田下條殿（越中國塚原保段錢）

二百廿文　權太慶德丸（越中國婦負郡田中保總領段錢五分一○中略）

（慶應元年武鑑）（大廣間）松平稠松利同　拾万石　居城越中新川郡富山（江戸ヨリ東海道百六十六里、下道百四リ、東山道百十五リ、）

（當國者、佐々陸奧守成正領之、天正十三以後、前田利光高代配分、松平淡路守利次、以後代々領之、）

（倭名類聚抄五國郡）越中國（○中略）管四（田一萬七千九百九町五段三十步）

（伊呂波字類抄十國郡）越中國　本田二万一千三百五十九町

（拾芥抄中末本朝國郡）越中（中中）四郡（中略）田二萬千三百九十九町

依宜行之、

建武二年二月十七日　大史小槻宿禰花押

（院宣奉）權右中辨藤原朝臣花押

〔吉田文書三〕祇園社領近江國坂田保、并越中國堀。江。庄。内六箇鄉相傳知行、不可有相違者、院宣如此、

仍執達如件、

建武三年九月廿三日　參議（花押〇原實明）

謹上吉田前宰相（房〇實）殿

〔集古文書五十四證狀〕室町家政所年貢員數注文（蜷川家藏）

越中國阿。努。庄。御年貢員數事

一根本漆百八拾貫文之内　一百貳拾貫文餘（致之七分一、富寺方押領、此子細御本家御存知之事也、〇下略）

〔康正二年造内裏段錢并國役引付〕合

十八貫廿五文　等持寺領越中國小。布。施。庄。段錢　參貫文（略御社領）北向三位殿（越中國吉。眞。庄。段錢）　七貫文　略社領

越中國倉。垣。庄。段錢〇略

〔宮寺緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論、企妨

領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絶處々付本所事、

宮寺領〇中略　越中國　埴生保〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰（〇本例下略）

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年七月廿五日壬辰、越中國東。條。河。口。曾。禰。入。代。等保事、爲請所、以京定

未百斛可備進之旨、地頭等去年十一月、獻連署狀於禪定殿下、仍可停止國使入部并諸院以下國役、

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月二日甲辰、越中國吉岡庄地頭成佐不法等相累之間、早可令改替之由、經房卿奉書到來、仍則被獻御請文、

〔西大寺文書 一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事〇中略

一 頭領庄々〇中略　越中國　射水郡榛山庄四百六町六十四歩〇中略

右依宣旨注進如件

建久二年五月十九日〇署名略

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年六月八日辛酉、今日式部丞朝時、結城七郎朝廣、佐々木太郎信實等、相催越後國小國源兵衛三郎頼継、金津藏人資義、小野藏人時信以下輩、上洛之處、於越中國般若野庄、宣旨狀到來、

〔東大寺要錄 二〕左辨官下東大寺

應令國司且停止武士狼藉、且言上子細、當寺諸國寺領貳拾參箇處事〇中略

越中國　入善庄〇中略

承久三年七月廿七日　大史小槻宿禰

中辨藤原朝臣

〔八坂神社文書 一〕左辨官下祇園社

應爲當社不斷實號料所、令執行法印靜晴門葉、相承越中國堀江莊、幷同莊内小泉、梅澤、西條、參箇村地頭職事、

右得社解狀偁、〇中略去元弘三年九月二十一日綸旨者、當社領越中國堀江莊、幷同莊内三箇村梅澤、西條、小泉等地頭職、所被付長日勤行之料所也、可令領掌云々、是併依滿延慶明兩之御願、被成元弘通三之勅許、欲信之潜通也、〇中略權中納言藤原朝臣實世宣、奉勅、依請者、社宜承知

民俗

〔三州志故墟考一中〕射水郡

高。岡。其初、此地號二關野一也、畏用㆑旋、是古所㆑謂塞口郡、塞口古郷名、見二于源順倭名類聚抄一、國俗訛、世傳久知、今猶二上莊一、〇中略慶長十四年三月十七日富山城罹災ニヨリ、瑞龍公〇前田利長遁關野ニ新城ヲ築キ、高山南坊一名之ニ加二其知慮一ニ城繩ヲ命ズ、〇略註此時關野ヲ改號アツテ高岡ト號シ、初名二高岡一、再改二高岡一、以用二詩外傳一、鳳凰鳴矣于彼高岡者、古書所㆑謂今二高岡一者、鳴鳳有二盛德一、取二義於此一必矣、如二三壺記、碧巖抄一事、所㆑謂今二僕臣三休一名之、然瑞龍、君子之儀者、所二予之不一取也〇下略

〔東大寺小櫃文書上〕民部省符越中國司

合寺田墾給百姓口分十町四段二百六十步

成。戸。庄。九段二百步　須。賀。庄。一町一段一百廿步　損。田。庄。八町三段三百步

公田墾割宛十四町七段一百廿八步

鹿。田。庄。新墾堀溝地一處長九十丈深二尺　廣四尺　墾損公田一百廿步〇中略

少輔從五位下大伴宿禰　正六位下大錄三田町登

天平神護三年二月十一日

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地〇長德四年注文定中略

越中國

礪波郡埒。城。庄。田百町　同郡石栗庄田百廿町　同郡損田庄卌町八段百九十二步　同郡麿田三十一町一段卌四步

新河郡大。荊。庄。田百五十町　同郡大。藪。庄。田九十町八段百十六步〇中略

別功德分庄〇中略

越中國　礪波郡井。山。庄。田四十町〇中略

右諸國庄家田地目錄如㆑件

〔東大寺小櫃文書下〕越中國諸郡庄園總券第三圖例

景雲元年

越中國司解　申撿按東大寺墾田幷野地圖事（○中略）

射水郡肆處（○中略）　摂田村地壹伯伍拾柒町貳段壹伯陸拾步（○中略）　須加村地伍拾陸町柒段貳伯

玖拾肆步（○中略）　鳴戶村地伍拾捌町參段貳伯陸拾步（○中略）　鹿田村地參拾町參段貳拾步（○中略）

新川郡貳處（○中略）　大荆村地壹伯伍拾町（○中略）　丈部村地捌拾肆町貳伯壹拾貳步（○中略）

以前撿按東大寺墾田野地幷圖、具件如前、仍具錄狀、附利波臣淨貞進上、謹解、

神護景雲元年十一月十六日　　正七位上行目阿部小殿朝臣訓使（○下略）

〔續日本後紀八仁明〕承和六年十二月丙辰、太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣（○中略）等奏言（○中略）越

中國介從五位下興世朝臣高世等奏偁、去六月廿八日、慶雲見新川郡若佐野村、並皆彩色奇麗、形象

非常（○下略）

〔越中國官倉納穀交替記〕川上村

東中一板倉收納糯肆伯伍拾陸斛捌斗參升（除年々交替定○中略）

意斐村

東後第一板倉（四長二丈四尺四寸八分、廣一丈八尺七寸五分、高一丈二尺八寸）收納糯陸佰貳斛貳斗參升（除年々交替欠定）

右一間延喜十年十月十五日醫師大初位依智秦公廣範

〔越中舊事記一〕富山

往昔は藤井村と云、昔泉寺は古富山寺と書し、藤居山といふ、藤井村といひし故、此號有と也、

富山町、長サ四十五町、橫町十二町四十間、通り町名拾八有と云、安永十巳年、町之總丁數御改（○中略）

總町名九十一、

村里名邑

弘安九年十一月五日　　主典在判

越中大使殿

〔三寶院文書一〕院林六郎左衛門入道了法(奉行大野雜掌)申、越中國院。林。太。海。鄕事、如申狀者、青柳孫二郎、幷今村十郎等、濫妨所務致狼藉云々、所詮停止押妨沙汰、居下地於了法、以起請文可被注申、使節令緩怠者、可被處其咎狀、依仰執達如件、

建武三年十二月廿二日　　沙彌在判

吉見參河守殿(賴〇隆)

〔郡名一覽〕一越中國　(管私領)　越州　四方三日　四郡

高六拾壹萬千石壹斗　　千四百四拾壹ケ村

●富山　東海道百六十六里　中仙道百七十四里　下道百四十里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕越中　四郡、千三百七十六村、

(管私領)高八十万八千八百石四斗六升一合八勺二才

新川郡四百八十六村　婦負郡百八十村　射水郡二百二十村　礪波郡四百九十村

〔萬葉集十七〕思放逸鷹夢見感悅作歌一首幷短歌

大王乃等保能美可度曾、美雪落、越登名爾於弊流、安麻射可流、比奈爾之安禮婆、山高美、河登保之呂思、野乎比呂美、久佐許曾之既吉、(中〇略)

右射水郡古。江。村。取獲蒼鷹、形容美麗、鷙雉秀群也、(中〇略)　於時以夢裏有娘子、喩曰、使君勿作苦念、空費精神、放逸彼鷹、獲得未幾矣哉、須臾覺寤、有悅於懷、因作却恨之歌、式旌感信、守大伴宿禰家持、

九月(天平十〇九年)二十六日作也

野十村、寺田十五村島十八村古郷名、下條二十一村、下山十五村市田七村〇中略長榎ナカエノキ六村高野六十村船倉一作ニ船倉寺六村〇中略十三室、大田保内也、六村、内三村富山領、但此内荒屋村ハ金澤富山二領來會、又針原二十村廣田二十五村、内二十三村ハ富山領、富田中島、上弥江ノ二村ハ金澤富山交會、東鑑文治六年四月十九日、内宮役夫大工作料未濟庄々ノ條ニ越中國ニ弘田御厨同加納アリ、廣田ハ此弘田廚ヘシ、八川ヤ大田保内也、十一村内二村富山領、入部十五村三位六十村加積九百十一村、三代實錄、貞觀十五年癸巳十二月授越中濃積前並従五位下トアリ、然レハ加積ハ賀積底ヘシ、賀入膳十四村〇中略熊野大田庄内也、九村皆富山領、鵜川大田庄内也、三村、富山領、按ルニ總川新右衛門親富嘗テ此郷ヲ領ス、〇中略宮川二十七村、皆富山領也、此郷中ヘ總川郷ノ最勝寺ノ支村島田、及ビ熊野郷ノ上熊野ノ支村合田入加リ、合テ今廿三村也、是モト婦負郡ノ宮川ト一郷ニテ二郡ニ渉ル、ノ二十四郷、此外ニ大田百二村、内四十九村富山領、但シ此富山領中ヘ入川郷ノ南入川ノ支村稲野、井馬瀬口ノ支村大場、新宮川郷ノ響田ノ支村和田、下板倉、奥田庄ノ稲荷ノ支村東田地方入加リ、此分五村、合テ今五十四村也、サレハ金澤富山兩領合テ今八十九村也、又此庄内ノ大田、本江、黒牧、文殊寺、大濱、呂木、堀澤、布目ノ六村ハ金澤富山兩領ノ交會也、〇中略弓、四十八村〇中略末スヘ三十四村五箇十六村奥田十一村、皆富山領也、是モト婦負郡ノ奥田ト一庄ノ五莊、竝ビ大布施保、二十九村布施保、四十八村、式ノ驛馬ニ布勢トアル是也、又式ノ新川郡ニ有布勢神社、然レハ此郷名神名ニ依ナラン、〇中略藤保二十三村ノ三保アリ、按ルニ此外此郡ニ、吉田庄、東鑑ニ見ヘ、松倉郷、檀太平記ニ見ユ、以上四郡ノ通古郷ハ四十有二、中古以來ハ郷莊保等併セテ七十有九也、今ヲ以テ古ニ比スルニ良一倍ス、況ヤ村數ヲヤ、

（續々修東大寺正倉院文書四十六帙七卷）越中國

越中國射水郡寒江郷戸主三宅黒人戸牒

天平勝寶四年十月十八日

越中國射水郡三島郷戸主射水臣〇下缺

（久志本本御裳濯和歌集紙背古文書）越中國請文案石黒庄内直海郷、外宮役夫工米事、下知狀召進之候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

弘安九　十一月五日　神祇權大副爲繼

下知狀案

當國石黒庄内直海郷、外宮役夫工米事、任内宮例可止其責之由、自太政大臣家所仰下也、早止入部催促之儀、可致注進、先例者依造宮所仰執達如件、

用ル文書ニ姉負ト書トアリ、之ニヨレバ禰比ナラン、然レドモ姉負、古書ニ於テ未考之、今俗或ハメブト訓ズ、亦非ナリ、

〔續日本後紀 十五仁明〕承和十二年九月乙巳朔、奉授越中國婦負郡從五位下鵜坂神從五位上、

〔萬葉集 十七〕婦負郡渡鸕坂河邊時作歌一首

宇佐可河泊、和多流瀨於保美、許乃安我馬乃安我枳乃美豆爾、伎奴奴禮爾家里、

〔三州志來因概覽 一越中國舊郡考〕新川ノ二字、正名也、〇中略萬葉作新河新川、和名抄還布加波ト訓ズ、延喜式、萬葉、爾比可波ト訓ズ、按ルニ、三代實錄ニ貞觀十八年七月、授越中國新川神並從四位上トアリ、式ニ新川神見ヘザレドモ、此神名正史ニ載レバ、遣郡名ハ遣神名ニ本ヅクナラン、世ニ下新川ト云フト呼ツレド古記ニハ不見、

〔續日本後紀 十五仁明〕承和十二年九月乙巳朔、奉授越中國〇中略新川郡无位日置神從五位下、

〔三代實錄 四十九光孝〕仁和二年十二月十八日壬戌越中國新川郡擬大領正七位上伊彌頭臣貞益、以私物助官用、〇代字原有濟下、據一本改民濟公、仍授借外從五位下、

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合〇中略五百文〇中略 大原備中入道殿段錢越中國新川郡

〔萬葉集 十七〕新河郡渡延槻河時作歌一首

多知夜麻乃、由吉之久良之毛、波比都奇能、可波能和多理瀨、安夫美都加須毛、

〔倭名類聚抄 七越中國〕礪波郡 川上(加波加美) 八田 川合(加波安比) 拜師(波也之) 長岡(奈加乎加) 大岡(於保乎加) 高楊(多加岐〇高牧) (山寺本作牧也) 陽知 三野(美乃) 意悲 大野(於保乃) 小野(乎乃)

射水郡 阿努 宇納(宇奈美) 古江(布留江) 布、三島(美之萬) 伴 布師(布之) 川口 櫛田(久之多) 塞口

婦負郡 高野(多加乃) 小子(知比佐古) 大山(於保也萬) 䒾田(須加多) 曰理 川合 大乘(〇高山寺本作大桑) 高島 岡本(乎加毛止) 餘

射水郡

婦負

ル、按萬葉、夜杼多知乎、刀奈美能勢伎ト詠ズレバ礪波、礪波、並ニ字緣アリテ叶ヘリ、〇中略然ルニ野史或ハ戸波、戸並等書シ、誤來也、（當時博學ト稱スル京儒皆川文藏ナド、人ノ眼テ掠スレドモ、源越伴紀事中ニ載皇ト書テ印行ス、是レ國史ニ暗ケレバ也、日本史作ニ礪ヲ誤ナリ、）皇、故ヲ以テカ寛文十一年五月四日、松雲公（綱紀）〇前田命ジテ礪波ノ正字ニ改復セラル、

〔延喜式 二十 大學〕凡越中國礪波郡墾田地、壹拾捌町肆段貳佰歩、就中熱田十三町二段卌歩、未開地五町二段百六十歩、〇中略右田、准郷價賃租、以充學生食、

〔萬葉集 十七〕礪波郡雄神河邊作歌一首

乎加未河泊、久禮奈爲爾保布、乎等賣良之、葦附（水松之類）登流等、湍爾多々須良之

〔三州志來因概覽 一 越中國郡郷來因〕射水ノ二字、國史ニ據テ正名也、延喜式等皆然リ、續紀ニハ伊彌頭ト見ユ、萬葉歌詞伊美都、又伊美豆ノ借字ヲ用ユ、（大職作ニ射水）蓋古ヘ唯國訓ニ從ヒ書ス、因ニ記ス、中古以來、氷見町邊ハ九十餘村ノ間ヲ氷見郡内、或ハ氷見庄ト唱フ、〇中略今モ其遺俗ニテ、二上山ヲ界ヒ、北ヨリ西ヲ都テ氷見庄ト唱ヘ、南ヨリ東ヲ中郡ト私唱ス、中郡ノ名目モ天正中ヨリ見ユ、岡本慶雲ガ末森記ニハ、總テ射水ヲ中郡ト書ス、然レバ其比ノ通稱ト想像ス、是ヲモ松雲公〇前田綱紀寛文十一年、射水郡ノ正名ニ改復ヲ命ゼラル

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年九月辛丑、奉授越中國〇中略射水郡二上神並從四位上、

〔和字正濫抄 二〕婦負　ねひ　和名、越中國郡名なり、万葉にはめひとあり字によれば、めおひを略せるを、ねひといふは、同韻にて通せるなるべし、

〔三州志來因概覽 一 越中國郡郷來因〕婦負ノ二字、正名也、〇中略天平ノ季、大伴家持婦負郡渡鸕坂河時作歌一首、萬葉十七ニモ載ス、婦負拾芥抄メヒト訓ズ、延喜式、和名抄並ニ禰比ト訓ズ、但シ婦ヲ禰ト訓ズル證例未考、萬葉ノ賣比ト云ゾ正訓成ルベシ、卽チ賣比能野トモ、賣比河トモ詠出ス、平春海ノ說ニハ、負ハ老女ナレバ、チビタル女ト云義カト也、又靑木敦書ノ郡名考ニ、婦負ヲ當時官家ニ

	利波古	伊彌頭古	
婦負ネヒ	礪波トナミ	射水イミヅ	管四
同禰比	同止奈美	同伊彌豆	同
同	同	同	四郡
婦負知充　姉負國	同知禰充	射水知充　泉國	
姉負ネイ	同イナミ	射水イミヅ	同
婦負ネヒ	同	同	同
同	同	同	同
同ネヒ	同トナミ	同イミヅ	同
同	同	同	五郡

〔三州志來因概覽越中國郡郷來因〕和名抄、拾芥抄並ニ越中四郡ト載ス、○中略然レドモ越中古ヘ四郡ニ限ラズ、大寶文武帝二年壬寅、越中國四郡ヲ分テ越後ニ屬スト、文武紀ニ見ユ、又養老四十四代元正帝二年戊午五月、越前國ノ羽咋ハクヒ、能登、鳳至、珠洲四郡ヲ割テ、始テ能登國ヲ置ト元正紀ニ見ヘ、天平四十五代聖武帝十三年辛巳、能登國ヲ越中國ニ幷スト聖武紀ニ見ヘ、天平寶字四十六代孝謙帝元年乙酉五月、舊ニ依テ能登國ヲ分立スト、孝謙紀ニ見ユ、以之考レバ、越中其初ハ八郡、礪波、射水、婦負、新川、頸城、古志、三島、魚沼、其後四郡、礪波、射水、婦負、新川、其後又八郡、礪波、射水、婦負、新川、羽咋、能登、鳳至、珠洲、其後又四郡、礪波、射水、婦負、新川、トナル、○按、越中建置總原、正史不載ドモ、越中大寶二年マデハ八郡アリシナラン、此年越後ヘ四郡ヲ分テ、越中四郡ニテ四十箇年ヲ歴、天平十三年ニ至テ能登ノ四郡ヲ以テ越中ニ幷セ、越中又八郡ト成テ十六箇年ヲ歴、天平寶字元年、越中八郡ノ内、四郡ヲ割テ再ビ能登國ヲ建置ス、是ヨリ越中四郡ニ定ル也、蓋此郡數ノ沿革ノコトハ、是マデ先達ノ深ク考得ザル所ニシテ、今始テ發明スル者也、方今存スル所ハ、礪波、○略註射水、○略註婦負、○略註新川、○略註以上四郡也、

〔三州志來因概覽越中國郡郷來因〕礪波ノ二字、正名也、續日本紀ニ、天平十九年、越中國入無位礪波臣ヲ載ス、可以知延喜式、和名抄ニモ、礪波ニ作ル、古事記萬葉ニハ、利波ニ作ル、東鑑ニハ砥波ニ作

ノ頃マデモ猶國府タリト見ヘテ、源平盛衰記ニ義仲六動寺ノ國府ニ到ルトアリ、六動寺ヲハ今ハ六渡寺ニ作ル、郡ナ射水郡也、其後モ永正ノ頃、上杉房能此ノ國府ニ在テ國政ヲナス、今猶古國府ノ遺名アル可以知ベシ、

〔源平盛衰記 二十九〕三箇馬場願書事

木曾ハ六動寺ノ國府ニ著、兵具タヽラベ、勢汰シテ著到アリ、其勢五萬餘騎トゾ注シケル、

〔倭名類聚抄 五國郡〕越中國〈國府在射水郡〉管四〈管四〉礪波〈止奈美〉射水〈伊三豆〉婦負〈比賣〉新川〈爾比加波〉

〔延喜式 二十二 民部〕越中國上管 礪波 射水 婦負 新川 右爲中國

〔皇國郡名志〕越中國 四郡

礪波 ●西赤尾〈城端〉●小原 ●今石動 ●一ノ關 ●庄 ●福光 ●仕井 加界

射水 ●三戸田 ●小杉 ●下村 ●大波 ●氷見 能界 〈高岡〉●島村

婦負 ●高尾 飛界山小郡

新川 〈泉川〉●東岩セ ●四カケ ●滑川 ●西水橋 ●女杉 ●伏拜 ●ダンサイ坂 〔富山〕●中ッ原 〈主堂〉●滑川 ●魚津 三日市 ●滑山 ●魚見 ●泊〈境町〉●立山 ●同社 越後界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕越中

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治拾年調	地誌提要	郡區編制
		新川〈ニヒカハ〉	新川〈爾比加波〉	同	同	同〈ニヒカハ〉	同	同	同〈ニヒカハ〉	下新川 上新川

國府

〔先代舊事本紀 國造十〕伊彌頭國造

志賀高穴穗朝（〇成務）御世、宗我同祖建内足尼孫、大河音足尼定賜國造、

〔續日本紀 文武二〕大寶二年三月甲申、分越中國四郡屬越後國、

〔續日本紀 聖武十四〕天平十三年十二月丙戌、能登國幷越中國、

〔續日本紀 孝謙二十〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、〇中略、其能登安房和泉等國、依舊分立、

〔日本後紀 桓武十二〕延曆二十三年六月癸丑、定越中國爲上國、

〔續日本紀 聖武十一〕天平四年九月乙巳、外從五位下田口朝臣年足爲越中守、

〔萬葉集 十七〕大伴宿禰家持、以天平十八年閏七月、被任越中國守、卽七月赴任所、〇下略

〔太平記 十一〕越中守護自害事附怨靈事

越中ノ守護名越遠江守時有、舍弟修理亮有公、甥ノ兵庫助貞持三人ハ、出羽越後ノ宮方、北陸道ヲ經テ京都ヘ責上ベシト聞ヘシカバ、道ニテ是ヲ支ントテ、越中ノ二塚ト云所ニ陣ヲ取テ、近國ノ勢共ヲゾ相催シケル、

〔太平記 三十九〕諸大名讒道朝事附道譽大原野花會事

翌年（〇貞治五年）七月ニ、道朝俄ニ病ニ被侵逝去シケレバ、子息治部大輔義將、樣々ニ歎申サレケルニ依テ、同九月ニ、宥免安堵ノ御教書ヲ被成、京都ヘ被召返、無幾程越中ノ討手ヲ承テ、桃井播磨守直常ヲ退治シタリシカバ、軈テ越中ノ守護職ニ被補、是ヨリ北國ハ無爲ニ成ニケリ、

〔倭名類聚抄 五國郡〕越中國（國府在射水郡、行程上十八日、下八日、）

〔三州志來因概覽 一越中國郡郷來因〕國造本紀ニ伊彌頭國（今ノ俗本無國字誤）ヲ載ス、〇中略、伊彌頭國トハ卽チ今ノ射水郡也、〇中略、蓋和名抄拾芥抄並ニ越中四郡ト載ス、〇中略、而シテ射水ヲ府ト書ス、國衙也、（下學集云、諸國之府謂之衙、）サレバ伊彌頭ハ越中ノ古都會ナルコト明カ也、（按ルニ、古ヘ國司大伴宿禰家持チ始メ此國府ニ住ス、蓋永

（日本地誌提要四十 巻中）沿革　古ヘ國府ヲ射水郡ニ置、（今新湊町、古府村ト云、）北條氏ノ末、名越時有ヲ守護トス、元弘三年、王師興リ、時有誅ニ伏シ、建武中興少將中院定清ヲ以テ國司ニ任ズ、明年時有ノ子時兼、亂ヲ州内ニ作ス、朝廷桃井直常ヲシテ伐テ之ヲ平ラゲ、因テ守護ヲ賜フ、足利尊氏ノ反スル、州人普門利清之ニ應ズ、定清之ヲ伐テ戰沒ス、既ニシテ直常叛テ尊氏ニ附シ、正平五年、再ビ吉野ニ歸順ス、尊氏乃チ足利高經ヲ守護トシ、子義將、職ヲ襲ギ、直常ヲ伐テ之ヲ破ル、天授六年、將軍義滿、管領畠山基國ニ本州ヲ賜ヒ、長子滿家ニ傳ヘ、管領ヲ世襲シテ京師ニ在リ、再傳シテ政長ニ至ル、明應二年、政長同族義豊ト戰テ敗死シ、州ノ豪族、椎名（名闕）神保、（某氏）鈴木（名闕）等、相謀テ上杉顯定ノ麾下ニ隷セントヲ乞フ、明年、顯定其弟越後守護房能ヲシテ州事ヲ兼攝セシム、永正三年、房能其臣長尾爲景ニ弑セラレ、七年、顯定、爲景ヲ伐テ敗死シ、椎名神保諸氏各其地ニ割據シ、皆爲景ト絶ス、天文七年、爲景大擧來リ侵シ、松倉（椎名泰胤）、瀧山、增山（神保氏）諸城ヲ陷レ、其地ヲ掠有ス、十一年、神保良衡、江波、三河等、爲景ヲ誘殺ス、神保氏純（某氏ノ子）富山城ニ據テ、新川婦負二郡ヲ併セ、聲威頗振ヒ、永祿ノ初、礪波郡ヲ併セ、椎名石黒諸氏ヲ降ス、爲景ノ子輝虎、報仇ヲ圖リ、屢來リ攻ム、六年、大擧シテ入侵シ、良衡、三河ヲ殺シ、數城ヲ徇フ、元龜二年、輝虎松倉城ヲ陷レ、椎名泰胤ヲ滅シ、神保氏張（某氏ノ族）ヲ富山ニ圍ミ、明年之ヲ拔キ、州ノ大半ヲ略ス、氏張走テ守山（射水郡）ヲ保チ、款ヲ織田信長ニ納ル、六年、輝虎卒シ、内訌大ニ起リ、州豪皆離畔シ、志ヲ信長ニ通ズ、七年、信長、佐々成政ニ全州ヲ賜ヒ、富山ニ治ス、十三年、豐臣氏成政ノ地ヲ削テ、新川一郡ニ食シメ、礪波射水婦負三郡ヲ以テ前田利長ニ與ヘ、守山ニ治ス、十五年成政ヲ肥後ニ徙シ、文祿四年、新川郡ヲ以テ利長ノ父利家ニ加賜ス、慶長ノ初、利長徙テ富山ニ治ス、尋テ父ノ封ヲ繼ギ、加賀ニ移リ、本州ヲ兼領シ、世襲ス、其支封ヲ富山トス、（利常ノ第二子利次）王政革新、廢シテ縣トス、既ニシテ改テ新川縣ヲ置、（初魚津ニ置キ後富山ニ徙ス、）

貫流シ、灌漑ノ利アリ、地質埴磽相半シ、土宜贍ラザル所ナク、水族尤饒ナリ、

道路

〔三州志來因概覽〕(越中國郡郷來因)凡ソ倶利迦羅嶺ヨリ(中略)古隸礪波郡今隸北郡、但貫越ノ界山也、)河境川(○越中越後境)マデ路程二十二里十九町也、(加州倶利迦羅嶺ヨリ新町マデ二十九町、新町ヨリ埴生村マデ十二町、埴生村ヨリ今石動町マデ十六町十二間、今石動町ヨリ岸川村マデ十九町四十八間、芹川村ヨリ古戸出村マデ二里六町、古戸出村ヨリ中宮村マデ三町、中宮村ヨリ中田村マデ二十七町、中田村ヨリ常國村マデ十町四十八間、常國村ヨリ沼造村マデ十三町四十八間、園潟村ヨリ三戸田村マデ二十四町、三戸田村ヨリ黒川村マデ三十二町二十四間、黒川村ヨリ佐木新村マデ二十八町十二間、花木新村ヨリ五[illegible]村マデ五十四町四十八間、五[illegible]村ヨリ愛宕村マデ十五町、愛宕村ヨリ富山町マデ十二町、富山町ヨリ町新庄村マデ三十三町、町新庄村ヨリ西水橋村マデ一里十二町、西水橋村ヨリ東水橋マデ七町十二間、東水橋ヨリ滑川町マデ一里一町四十八間、滑川町ヨリ魚津町マデ一里二十五町四十八間、魚津町ヨリ三日市村マデ一里二十五町十二間、三日市村ヨリ沓掛町マデ二十一町、沓掛町ヨリ入膳町マデ一里三十一町四十八間、入膳町ヨリ横山町マデ十八町、横山町ヨリ赤川村マデ二十二町十二間、赤川村ヨリ泊町マデ二十四町、泊町ヨリ宮崎村マデ十二町、宮崎村ヨリ境村マデ一里、境村ヨリ境川マデ五町、以上道計三十二里十九町、此二十餘里ハ圖狀ノ從數也、其横數ハ岩瀬ヨリ横谷越、飛驒界マデ十一里許也、是等ヲ正保四年、官ヘ上ル三州與圖ノ道程ノ數也、壹是ハ今ノ三十六町一里ノ積リヲ以テ記ス、)

〔日本實測錄〕(沿海一)從鞍山貫木數沿海至三厩(○中略)

越中國射水郡氷見町、三十六度五十一分、三里二町四十八間(至射水川口二里一十七町二十四間)放生津中町、三十六度四十六分、三里一十六町五十四間(至四方町二里一十六町三十一間中、從四方町至神通川口三十三町三十間)新川郡東岩瀬町(至富山一番町二里一十二町二十五間、北極高三十六度四十二分半)二里一十一町五間(至東水橋村一里二十五町一十間)滑川村四里一十八町四十四間(至魚津町二里七町三十一間)生地村、三十六度五十三分半、四里一十八町四十五間(至黒部川口三十二町五十一間)泊町(至中町一十一町二十七間、北極高三十六度五十七分、)四里七町五十六間(至國界境町一里一十六町九間半、從境町至市振宿二十五町八間半、)越後國頸城郡寄宿

宿驛

〔延喜式〕(兵部二十八)諸國驛傳馬(○中略)

越中國驛馬(坂本、川合、亘理、白城、磐瀬、水橋、布勢各五疋、佐味八疋、)傳馬(礪波、射水、婦負、新川郡各五疋、)

建置沿革

〔日本國郡沿革考〕(北陸道二)越中　延曆二十三年六月、定爲上國、管四郡千三百七十六村、

新川(四百八十六村)　婦負(百八十村)　射水(二百二十村、古伊彌頭國、見國造記、國府治、)　礪波(四百九十村、古事記作利波、)

位置　疆域　形勢　地味

(萬葉集十七)立山賦一首并短歌(此山者在新河郡也)安麻射可流比奈爾名可加須古思能奈可久奴知許登其等夜麻波之母之自爾安禮登毛加波波之母佐波爾由氣等毛須賣加未能宇之波伎伊麻須爾比可波能多知夜麻爾○下略

(地勢提要乾)各國經緯度(附里程)

越中富山(町一番)極高三十六度四十分半、經度東一度三十一分、從東都(同上○中山道通分、經善光寺)自一百七里五町二十五間半、

(日本經緯度實測)北極出地

越中　氷見村(射水郡)　三六度五一分〇〇秒　富山　三六度四〇分三〇秒○中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　越中　富山　東一度三一分二四秒

(三州志來因概覽越中國郡界圖)越中國分野、西ノ方礪波、射水ノ二郡ハ、加賀ノ石川、河北ノ二郡ニ接壌シ、北方ノ射水、新川ノ二郡ハ、滄海ニ臨ミ、海ヲ挟ンデ能登ノ鳳至、珠洲ノ二郡ニ對シ○往略東ノ方新川郡ハ境川ヲ(公式令日、北陸道神済、以北云、越中與越後之界河也、[illegible](富田)[illegible]ニ、今ノ境川ノ古名也、日本後紀ニモ弘仁十年夏四月ニ北陸道神済以北トアリ、)○中略限テ越後ニ隣リ、(長久保赤水日本圖ニハ、東方立山ノ後ロ信濃ニ跨ルトアリ、是後立山後信ナ論ズレバ、後立山嶺ヤ、富羽偽リ境モ、南ハ飛州山ニ接シ、東ハ信州ノ小野川、松木、野口、大所、筑前ノ諸山ニ接シ、是ヨリ四ハ越後ニ接續ス、)南方婦負郡ハ飛驒ニ接ス凡ソ倶利迦羅嶺ヨリ(中略)古隷礪波郡、今隷河北郡、加賀山也、)越ノ界境川マデ路程二十二里九町也、

(日本地誌提要四十越中)疆域　東ハ越後及信濃、南ハ飛驒西ハ加賀、西北ハ能登、北ハ海ニ至ル、東西凡貳拾壹里餘、南北凡壹拾九里餘、

(易林本節用集下)越中(北陸)上管四郡、四方三日、鹽蒸魚鱗多、五穀桑絲多、以諸致貢大々中國也

(日本地誌提要四十越中)形勢　立山ノ山脈東南ニ疊累シ、飛信ニ連ル、北方沿海ノ地稍平坦、四大河

今も多し、又知行わりも、今もむかしも餘り違はなしと云へども、時代に唱へ替れる、往古は三十町五十町、三十段五十段として知行とり、夫より何百貫何千貫と稱せり、凡長サ三十歩を以廣サ拾二歩ヲ一段とす、十段を一町といふ、上田は十段に五百束の公田あり、一束は米五斗、尤中田下田の差別あり、貫知行は右田五段を一貫として、古へは永樂錢、拾文に米四合八勺賣之、後は永樂拾貫各四斗八升、一百貫は四拾八石也、今の知行草高は、四つ八歩の免に平均して、米四、十八石を百石と名付て、此古法を以也、

越中國

越中國ハ、エツチユウノクニト云ヒ、舊クハ、コシノミチノナカト云ヘリ、北陸道ニ在リテ古ノ越國ノ一部ナリ、東ハ越後、信濃、南ハ飛驒、西ハ加賀、西北ハ能登ニ界シ、北ハ海灣ヲ抱ク、東西凡ソ二十一里餘、南北凡ソ十九里餘、其地勢ハ東南、信濃、飛驒ニ接スル所、大山巨嶽相連リ、漸ク西北スルニ至リ、平野開展シ、大小ノ河流之ヲ灌漑ス、此國ハ、文武天皇大寶二年、所管ノ四郡ヲ越後國ニ移シ、聖武天皇天平十二年能登國ヲ合セシガ、孝謙天皇天平寶字元年、復タ之ヲ分置セリ、古ヘ國府ヲ射水郡ニ置キ、礪波(トナミ)、射水(イミヅ)、婦負(ネヒ)、新川(ニフカハ)ノ四郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、新川郡ヲ分チテ上下ノ二郡トシ、更ニ礪波郡ヲ東西二郡ニ分チ、上新川郡ヲ割キテ中新川郡ヲ置キ、射水郡ノ一部ヲ割キテ氷見郡ヲ置キ、凡テ八郡ト爲シ、新ニ富山、高岡ノ二市ヲ設ケ、富山縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄〕五國郡 北陸國〇中略 越中古之乃三知乃奈加

〔饅頭屋本節用集〕江天地 越中(ヱツチウ)

能登國ノ風俗ハ、別而人之心持狭クシテ、譬バ一足他ヘ踏出ス時ハ、則潟命ニ及ト思フノ類多シ、因𪜈我主ヲレナクアテガフニモ、誰々モ潟命ツナグベキタメニ奉公ヲ勤ル風儀ニ而、引放タル意地スクナシ、雖然武士一身常之覺悟ハ如形ナリ、サレバ、是國ヨリ他ヘ踏出ル程之器量ノ族有テ他出スル時ハ、必可秀ナリ、不出時ハ國之棟梁ト可成人也、若又他邦セズ、棟梁トモ不成蟄居スルニ於テハ、自然ト惡意ヲ企ル如クノ風俗アルベシ、偏固ニシテ道理聞ク、而モ驕之氣有之、

名所

〔日本鹿子十〕同〇能登國中名所之部

能登の海　のとの海に釣する蜑のいさり火の光にゐさせ月まちがてに

饒石川　錦川　紅葉ちる山下水は染ませの錦川とぞ見え渡りける

岩瀬渡　舟とむる岩瀬の渡りさよ更て深山き川を出る月かげ

宮城山　長濱浦　わが戀は君を宮城の山ならでまつにかひなき長濱の浦

〔能登めぐり〕能登名所

一岩瀬の渡　時國　一羽喰の海　羽喰　一饒石川　劒地村　一香島　熊木鄕

一角島　鹿島郡　一高淵山　熊木鄕　一熊木の里　同所　一机島　鹿島郡

一長濱浦　三崎　一能登の海　羽喰郡　一能登の島山　鹿島郡　一曇津の里　三崎鄕

一宮崎山　時國村　一鈴の御崎　三崎の事　一鈴の御牧　同所　一珠洲の海

同所　右ハ古歌有

雜載

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒略〇中　能登國五十人

諸國器仗式略〇中　能登國甲一領、横刀三口、弓七張、征箭十具、胡籙十具、

〔能登めぐり〕夫古代は、郡司庄司鄕司の名ありて、鄕庄を貢物捧て、刀禰宿禰杯も司の名なり、今は郡里と稱るまでなり、然といへども、能登の國は傍邊にや專ら鄕庄を唱ふ、又刀禰といへる百姓

能登國五種　黃連三斤、梔子四斗、薯蕷一斗、桃人二升、蜀椒三斗、

〔延喜式内膳三十九〕年料略〇中　能登國與横海鼠六籠一

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、略〇中宅常擔〃集諸國土產、貯甚豐也、所〃謂略〇中能登釜、

〔毛吹草三〕能登

鯖　同背腸　烏賊黑漬　クマビキ　内海鯷シイラ　經紐苔　和島素麪

〔能登めぐり〕能登產名物

一佐志鯖　西海七浦　一黑漬烏賊黑醬車鞭有　一九万疋ナリ鰤ノ雑　熊本村　一經紐苔　飯田　一素麪　輪島　一雲苔　三崎　一串海鼠　中居村　一海雲モヅク　折戸村　一針金　師地村　一鑄鍋　中居村　一蛇ジャ酢　松百村　一鯨　宇出津　一名酒　所口　一淸水米　同所　一豆飴　同所　一釣燭　池村　一芋　島ノ地　一大根　湯川村　一午房　草野村

人口

〔官中秘策四〕能登國　四郡略〇中

一人數拾五万七千七百六拾五人　内七万九千七百拾三人男　七万七千七百九拾貳人女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調文化元甲子年略〇中

御料私領
一人數拾六万七千五百三拾四人　高貳拾三万九千貳百八石餘　能登國
内八万五千五拾四人男　八万貳千四百八拾人女

諸國人數調弘化三丙午年略〇中

御料私領
一人數拾八万六千九百七拾人　高貳拾七万五千三百六拾九石餘　能登國
内九万貳千八百拾七人男　九万四千百五拾三人女

風俗

〔人國記〕能登國

〈官中秘策四〉能登國　四郡（略○中）
一石高貳拾三万九千貳百八石餘
〈吹塵餘五人口及國高〉天保度御國高調（略○中）
能登國（御料私領）　一高貳拾七万五千三百六拾九石九斗九升貳勺壹才

出擧稻

〈延喜式二十六主税〉諸國出擧正税公廨雜稻（略○中）
能登國、正税公廨各十五万束、國分寺料五千束、京法華寺料一万束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、救急料六万束、
〈倭名類聚抄五國郡〉能登國（略○中）　管四（中略）本穎三十八萬八千束
○按ズルニ、此ニ本穎ノミヲ擧ゲ、正税公廨雜稻ノ數ヲ擧ゲザルハ、誤脱ナルベシ、蓋シ延喜式ニ據レバ、雜稻合計八萬六千束ニシテ、本穎ノ數ハ、當ニ三十八萬六千束ナルベシ、

調庸貢獻

〈延喜式二十三民部〉年料別納租穀（略○中）能登國（四千斛○中略）
諸國貢蘇番次（略○中）　能登國九壺（三口各大一升、六口各小一升○中略）　右十個國爲第四番（辰戌年○中略）
交易雜物（略○中）　能登國（絹十二疋、鹿皮十張、鹿料牛皮四張、薄鼠鹽一石、鐵千四合、）
〈延喜式二十四主計〉能登（略○中）　右廿五國中絲（略○中）　能登（略○中）　右廿九國輸絹（略○中）
能登國（行程、上十八日、下九日、）海路廿七日
調、一窠綾二疋、呉服綾一疋、白絹十疋、熬海鼠三百卅五斤、海鼠腸六十二斤八兩、自餘輸絹、　庸、白木韓櫃十七合、自餘輸綿、　中男作物、紙、簾薦、折薦、菅薦、漆、胡麻油、雜魚腊、鯖、
〈延喜式三十一宮內〉諸國例貢御贄（略○中）　能登國（甘葛煎、鯖鮨、）
〈延喜式三十三大膳〉諸國貢進菓子（略○中）　能登國（甘葛煎）
〈延喜式三十七典藥〉諸國進年料雜藥（略○中）

墾額ハ五萬九千七百八十斛三斗一升四合二勺、是ハ天明六年鳥邑検改リ、翌七年官ヘ書出ル數ニテ、正德元年書出ル開墾額トハ、百三十九斛三斗八升四合二勺ノ逃數アリ、當時モ尤同然也、貞享元年ノ高辻ニハ、官ヘ書出ル新田額四万五千五百零二石七斗ナリ、然ルニ貞享元年以後是ニ又新開額一万四千百三十八石二斗三升ヲ増加シ、正德元年書出ル二新田、都合五万九千六百四十斛九斗三升ナリ、

〔拾芥集一〕御名　日野小左衛門御代官所　能登國

高壹万四千石餘

右之所、御代官被仰付候内、從當年御預所被仰付候間、口米をも可被所務候、御仕置其外諸事入念可被申付候、且又御勘定奉行より追而村附帳相渡可申候、村方江請取候義者、村附帳相渡候巳後、右御代官より可引渡之候、

但右御預所之内、給領などに相渡候者之候ハヾ、御勘定奉行より可相達候之間、可被得其意候、以上、〇中略

帳面上書
能登國羽咋、鹿島、鳳至、珠洲郡之内、郷村高帳

能登國羽咋郡　一高四千貳百三拾八石八斗壹勺

同國鹿島郡　一高四千五百七拾九石九斗四升七合四勺

同國鳳至郡　一高四千九百七拾石六斗五升六合

同國珠洲郡　一高貳百三拾五石壹斗四升三合

高合壹万四千貳拾四石五斗四升三合八勺

右者從當寅年御預所ニ成候間、日野小左衛門江相達、郷村請取之御仕置可被申付候、村方相改、存寄於有之者、可被相窺候、尤當從御物成可有御勘定候、以上、

享保七年寅六月　木村四郎兵衛印〇下略

〔日本鹿子十〕能登國、四郡、上小國、東西二日半、知行高二十一万六千百九十石、

〔伊呂波字類抄諸國郡〕能登國　本田八千四百七十九町又見二拾芥抄一

〔運步色葉集諸國之郡名〕能登四郡田數一万二千五百卅町

〔海東諸國記〕能登州　郡四、水田八千二百九十七町、

〔三州志來因概覽三能登國郡鄕來因〕我聖祖胙茅ノ後、寬永十一年甲戌閏七月、大猷大君德川家光〇ヘ微妙公〇前田利常書上セラル封入目錄ニハ、能登國四郡、通計稅額二十一萬六千八百九十一石三斗五升四合、內千八百七十三石七斗五合寺社領開田一萬千百五十一町三反三畝十七步、開畑三千三百八町八畝二十一步、內四萬千三十七石斗四升四合免川成一總物成合ヲ六萬六千七石七斗三升七合、內七百三石三斗四升寺社領トアリ、此後寬文四年甲辰四月五日、大猷大君ヨリ松雲公〇前田綱紀ヘ改タメ賜ル公約封入稅帖ニハ、羽咋郡百七十一村、今併二支村一自領ノ分二百十一村也、但公私交會土方領ト交會ノ分モ自領ノ村數ヘ入之、稅額七萬四千六百零三斛五斗九升、能登郡百三十一村、今併二支村一自領ノ分、百五十六村也、土方領ノ事ハ、第十ノ卷ニ別出シテ詳之、稅額六萬二千九百三十五斛二斗五升、鳳至郡、二百二十七村、今併二支村一自領ノ分、三百今四村也、稅額四萬七千九百八十一斛五斗六升、珠洲郡、七十四村、今併二支村一百十一村也、以上自領ノ分、四郡ノ通、今八百四十五村也、但高辻帳ノ表ハ六百三村也、稅額二萬五千九百十二斛四斗四升也、公邑ヲ除キ、四郡稅額ノ通計二十萬六千三百八十二斛八斗四升、但五千五十斛ハ稅籍ノ外蠹額也、正保元年官ニ出ル高辻帳ノ圖、村高石高之ト同數也、當時鄕村高辻帳表ハ高辻帳ハ、本封ノミヲ擧ゲ、夫ニ封內ノ錄額ヲ刪ル者ニテ、實數ニハ非ズ、故ニ村數モ本數ヨリ寡シ、高辻帳ノ官ヘ出ル最始ハ、正保三年也、此時三州輿地圖モ副上也、其後ハ寬文四年、貞享元年、元祿十五年、此時又三州地圖副上也、正德元年、享保三年、延享三年、寶曆十年、天明七年、以上九度也、羽咋百七十村ニシテ、七萬四千九百十四斛二升一合、鹿島百二十五村ニシテ、六萬二千六百十六斛九升、鳳至二百二十七村ニシテ、四萬七千九百八十一斛五斗六升、珠洲七十四村ニシテ、二萬五千九百十二斛四斗四升、以上四郡ノ公領、土方領、交會ノ錄ハ、開錄官田數ニ詳也、四郡ノ通計五百九十六村ニシテ、今存スル四郡自領實數ハ七百八十一村也、之ニ公料土方領ヲ併セ、總計八四百十二村也、廿一萬千四百二十四斛一斗一升一合、內賜文押字擧目額二十萬六千三百八十二斛八斗四升、籍外蠹額五千四十一斛二斗七升一合也、是卽天明七年丁未、官ヘ書出ル村數斛員也、闕

〔能登めぐり〕能登一國四郡鄕庄村付組合

羽咋郡　四組
押水大海庄　拾八ケ所　押水中庄　拾四ケ所　押水北庄　九ケ所　邑知院之内志
惣庄　拾ケ所　栗生庄　七ケ所　羽咋正院　三ケ所　菅原庄　七ケ所　太田富永
保　邑知院　廿二ケ所　尾長保　三ケ所　若部保　二ケ所　廿田保　四ケ所
加茂庄　三ケ所　大坂庄　三ケ所　土田庄　拾四ケ所　堀松庄　二十六ケ所　富
木院　二十八ケ所　藤掛鄕　九ケ所　押造庄　八ケ所　熊野方鄕　拾六ケ所　能
打鄕　九ケ所　酒井保　一ケ所〇下略

藩封

〔三州志來因概覽〕（四能登國守享曆）今年（〇天正九年）十月二日、國祖（〇前田利家）ヲ以テ能登國州ノ（〇註略）封侯トナシ、（〇中略）慶長（百八代後陽成帝、將軍德川家康公、）四年己亥、國祖能州口郡（羽咋能登）ヲ孫四郎利政君ニ讓ラセ玉フ、（〇註略）五年庚子、東照大君關原ノ役、利政君出軍ノ命ニ應ゼザルヲ以テ能州ヲ除キ、之ヲ瑞龍公（〇前田利長）ニ賜フ、十三年戊申、土方河內守雄久（傳ヘ詳ニ本記慶長五年）ノ采邑越中新川郡布市ニ一萬石アリシヲ、能州ノ內六十一村一萬三千石ノ地ヲ以テ之ニ易フ、蓋シ瑞龍公放鷹ノ妨ゲアルヲ以テト云、延寶（百十三代靈元帝、將軍德川綱吉公、）九年辛酉雄久ヨリ四世ノ伊賀守雄隆弟民部ヘ、右能州一萬石ノ內千石配地、其後又還千石ノ內二村百五十石ノ地ヲ民部二男土方長十郎ヘ配分也、今能州ニ存スル土方領八百五十石ノ七村ハ（關東御小將組土方仲領分也）還配知千石ノ內也、貞享（帝將軍同上）元年甲子秋七月廿一日、伊賀守家督嗣續ノ陰姦、事既ニ發覺ニ泊ビ、嚴有大君（〇德川家綱）卽チ伊賀守ノ所領奧州岩城二萬石、及ビ能州九千石六十一村沒收セラレ、其地公邑トナル、凡ソ土方氏河內守雄久、其子掃部頭雄重、其子河內守雄次、其子伊賀守雄隆ト四世、能州ヲ領セルコト七十七年ト云、（〇下略）

田數　石高

〔倭名類聚抄（五國郡）〕能登國（〇註略）管四（郡、田八千二百五町八百三十六步）

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十月廿七日丙寅、今日左兵衛尉長谷部信連法師、於能登國大屋庄河原田卒、是本故三條宮侍、進關東御家人也、長馬新大夫爲連男也、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分　條々事略○中

一家地文書庄園事略○中　右大臣略○中　家領　女院方略○中　能登國若山庄略○中

建長二年十一月　日　　愚老在御判

〔吾妻鏡四十一〕建長三年五月廿七日丙辰、新誕若君公今日歸住本所、賜其後宴御祈之賞、以能登國諸橋保、若宮別當法印被遣、工藤三郎左衛門尉光泰爲御使、相州御書云、今度男子平產併所致法驗也、就中當日之仰、一事無相違、不言語之及所云云、

〔得江文書〕讓渡　次男吳原口藤七郎眞將所

在能登國萬行保東方内田屋敷事

右萬行保東方者、成光相傳私領也、建武二年三月十七日、嫡子眞吳次男眞將仁讓狀、彼眞將諸事背成光命之上、齋藤四郎茂成生得嫡男也、仍悔返之、於彼分者讓與于茂成畢、略○中 仍爲後日讓狀如件、

建武貳年七月十四日　　沙彌成光花押

〔永光寺文書〕能登國若部保地頭職事、爲綸旨以下證文爲寺領云々、當知行不可有相違、將又被致將軍家御祈禱之精誠者、可注申子細之狀如件、

建武三年八月廿八日　　源顯顯花押

永光寺長老

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕略○中

一貫九百五十文略○中　三寶院御門跡領能州上日庄段錢

久江保　七町三段貳(本八四丁九反三)　建保五年撿注山定　越實鄕　四段(本八五丁六反四)　承久元年撿注田定　高堀開發　四段(本八一丁六反九)　承久元年撿注田定　八田鄕　四段(本八六反三)　同元年撿立田定　南湯浦保　三段(本八十七丁三反)　同元年撿注田定　能登島庄　拾九町三段貳(本八四十三丁壹)　同元年撿注田定　奧原保　壹町三段五(本八一丁六反五)　同元年撿立定　良川保(三壹)

拾八町貳段八(本八十二丁五反八)　元久元年撿注田定　往留保　七町四段　承久元年撿立田定

吉田保五町貳段三(本八五丁七反九)　同元年撿立定　三引保　貳町(本八四丁四反六)　同年中撿注田定

與木院　四町四段六　同元年撿注定　笠師保　拾町貳段壹　同元年撿注定　豊田保　三町五段五　同元年撿立定　熊來院　卅六町四段八(本八四十九丁九反六)　同元年撿注定

一鳳至郡

町野庄　貳百町　久安元年立劵狀　志津良庄　七町　同貳年立劵狀　大屋庄內東保

卅三町五段　加南志見村定　同庄西保　四拾四町七段貳　鳳至院　六拾九町五段(二十丁餘)

櫛比庄　九拾町九段　諸橋保　廿町壹段(本八二十四丁五反四)　建治元年立劵狀　鵜川村

貳町八段三(本八廿三丁二反八)　矢並村　四段

一珠々郡

若山庄　五百町　康治貳年立劵狀　珠々正院　卅七町　承久元年撿注田定　藏見村

拾四町三段九　元久貳年撿注田定　宇出村　十町七段　高屋浦　貳町四段九　眞脇村　八町三段(本八九十七反二)　承久貳年撿立定　方上　十三町二段七(本八三十丁五反九)　正治元年撿注定　下町野庄五町六段　久安元年立劵狀

右國中四郡庄鄕保公田田數目錄如件

承久三年九月六日　注進□□

志指見保　壹町四段六（本ハ三丁七反三）承久元年撿注定　包智院　貳拾町五段貳　承久元年撿立定　同庄内　公文職壹町（本ハ三十丁）承久二年撿立定

蓮池左近將監

若部保　壹町（本ハ三丁八反）承久元年撿注田定　尾長保　拾三町七段二條角（本ハ十三丁七段二）承久元年撿注田定　廿田保　貳町壹段六（本ハ四丁七反九）元久元年撿立田定　富來院　拾五町九段八（本ハ四十一丁五反壹）建保元年撿立田定　同院内酒見村　貳町八段壹　建保貳年立劵狀　藤熊村　四町壹段（本ハ十五丁）建保貳年立劵狀　飽打村　六町五段二（本ハ三丁五反二）都智院　九町七段五（本ハ五丁四反九）建治元年撿注定　土田庄内得田村　七町七段七　文治四年立劵狀

一能登國　鹿島郡

上白庄　參拾町　久安二年立劵狀　一青庄　捌拾町　八幡新庄　壹町（本ハ二十丁）大屋庄内穴水保　四拾九町一段七（本ハ四十九丁六反五）文治九年立劵狀　曾山開發　貳町六段四

三井保　拾六町八段八　上田庄加納村々　文治二年免定　能登部村　拾町三段（本ハ二十二丁七反九）

馬庭村　六町壹段八（本ハ十六丁六反八）良河院　五町三段（本ハ二十丁五反四）高島庄　拾五町九段九　建久貳年立劵狀　大谷庄　三拾九丁貳段　建久八年立劵狀　東湯浦村　壹町三段四　三室村　拾三町五段　潟河村　九段三　澤野村　三段六　飯川保　五町三段五（本ハ二十四丁三反三）久安年中八幡宮劵狀　高田保　貳町六段九（本ハ五丁一反）壽永三年劵免

萬行保　六段（本ハ八丁二反）建曆元年立劵狀　藤井村　壹町（本ハ六丁）承久元年立劵狀　酒井保　壹町五牢　承久元年立劵狀　四柳保　貳町壹段壹（本ハ五丁五反）承久元年撿注定　大町保　壹町七段七（本ハ二丁七反四）承久元年撿注定　金丸保　七町三段壹　同元年撿立口定

長澤保　無定田（本ハ一丁六反七）建曆貳年撿口定　小田中保　六町（本ハ八丁三）同貳年撿注田定

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰在判○下略

〔賀茂注進雜記下神領〕同木○壽三年○元暦元年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十ヶ所任院廳御下文、可止武家猥藉之由有其沙汰云々、

下、諸國、可早任院廳御下文、停止方々猥藉、備進神事用途、賀茂別雷社御領庄園事○中略

能登國　土田庄　桃浦　賀茂庄　羽咋○中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々猥藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、猶可處重科之状如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔能登國田數帳〕注進　國中四郡庄鄕保公田々數目錄右□

一羽咋郡

家田庄　捌拾伍町六段七　永承六年立券狀　大泉庄　貳百町　保延貳年立券□　志雄庄　參拾町　久安二年立□□　加茂庄　參拾町　往古庄也、不知年紀、　土田庄　拾六町七段六（本ハ四十一丁七反四）　文治四年立券狀　羽咋正院　拾三町（本ハ二十五丁二反六）　文治六年立券□　堀松庄　捌町二段五（本ハ二十五丁二反六）　建久八年立券□　菅原庄（新地頭）　貳拾三町四段壹　元暦二年立券□　大田富永保（地頭陸奧國本大三入道）　三町九段三　元久元年立券狀　志雄保　拾貳町壹段八（本ハ二十九丁五反五）　承久元年立券狀　駒前保　六町　建暦貳年撿□□定　栗生保　九段六（本ハ四丁一反六）　建暦貳年撿立田定　大坂保　拾捌町九段八　承久元年撿注定　氣多社御敷地拾壹町壹段八　建保五年卯月日□　湊保　拾八町九段八（本ハ二十六丁一反六）　自鎌倉家一宮社御寄進　承久元年撿立□

件所爲國衙綺停止也

莊保

下村、五十洲村、光浦、珠洲郡、仁江村、馬緤村、雲津村、熊谷村、本江寺村、越坂村、

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合略○中百文　東岩藏寺眞性院領能州段錢○中略上○村○八百文略○中　歷代源藏人殿能州段錢西○方○村○

〔能登めぐり〕輪島長井より一里一丁、道平也、本馬四十文、輕尻二十四文、人足十二文、

南は鳳至町といふ、北は河合町といふ、間に四十八間の橋有、町の境とす、此川は輪島川といふ、湊は餘程の船出入して、水戶にには夏中數百艘の船絕す、略○中　此輪島は能州第二の繁昌の地也、家數二千軒あり、略○中　當所產物は、素絎、堅地家具、鹽肴、海苔、熨斗鮑る ひ名物也、わけて夏三月は繁昌限なし、略○中

所口田鶴濱より二里二丁、本馬八十三文、輕尻五十四文、人足四十二文、山道也、

此所口は、能登一國の國府にて、諸商賈の問屋有て繁榮の地也、凡家數六千軒といへども、今は四千軒有、町奉行一方在住に代官六人、略○中　又利長公御城跡は丸山といふに有、其時御城下は今府中とてあり、略○中　此所口名物多し、名酒數多有、中にも羽衣酒とて、若松屋何某の方に有、其外豆飴等、魚鳥類の便りよく、自由自在の國府也、むかしは七尾と云ひし、松尾の古城の跡に有し也、則松尾山の城は七尾の城とて、山の尾七ッ有て、菊の尾、龜の尾、松の尾、虎の尾、竹の尾、梅尾、龍の尾杯とて有、依て七尾の名有、此國の國府として世々の人住めり、

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石淸水八幡宮幷宿院極樂寺

應、永停止宮寺幷極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致異論、令掠領、發又有由緖事、令傳領、子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領略○中　能登國　惠。曾。飯。川。保。　一。青。庄。略○中

村里名邑

二村、公料、下町野、二十村、内四村、公料、按ルニ此三ノ町野ハ古郷ノ待野歳ベシ、南北、二十四村、内一村公料、○中略穴水、十村、皆公料也、○中略本、十九村阿岸、十八村○中略仁岸、二十一村、按ルニ仁岸ハ古ノ饒石ナルコト瞭然也、○中略河原田、十八村○中略三井、十五村、觀應元年、長門進足利直義ノ手ニ属シ、薩州ニ下リ、隅州ヲ征伐ノ功ニヨリ、能登ノ深井保ヲ南帯ヨリ賜トアルハ是カ、深三訓通ズ、○中略南志見、十一村○中略ノ十二郷也、此外ニ、櫛比、三十三村、内一村公料、古郷ノ櫛カ、天正九年六月、櫛比庄二口村ニ温井父子籠ルテ修繕スルコト詳ニ本記ニ、七浦、廿九村、一書ニ此郡ニ志津真アリ、疑クハ七浦ナラン、大屋、二十四村、古郷ノ小屋カ、按ルニ、盛衰記ニ、能登國大屋庄ヲ鈴庄ト號ストアリ、此事イカヾ、東鑑建保六年十月、信連法師能登國大屋庄河原田ニテ卒ストアリ、今ハ大屋河原田二ツニ分ル、○中略ノソ三莊アリ、一書ニ、此外此郡ニ東保、大屋庄内鳳至院アリ、

珠洲郡古管郷ハ○中略註五郷也、方今ハ、木郎、三十一村、内一村公私交會、直、十六村、直郷ハ吼木山法住寺傳藏中、永和元年十二月五日、越前守實盛ヨリ孫次郎左衛門尉ヘ與フル書ニ具ニ見ユ、又同寺文明十二年九月八日、統秀在判ノ寄進状、及ヒ享祿四年五月十九日綱光在判ノ寄進状中ニハ、若山庄内直郷トアリ、然レバ中古マデ直郷ハ若山庄内也ト見ユ、今公領方ニテ若山庄ヲ木郎郷内トナスハ尤誤レリ、飯田、六村正院、二十村○中略ノ一莊也、一書ニ、此外鈴莊アリ、蓋シ四郡ノ通計、古郷ハ二十有六、方今ハ郷莊保院ヲ併セテ七十有二也、文化元年官ヘ書上ル書ニ、羽咋郡ノ押水庄ヲ稗造庄ニ作リ、鹿島郡ノ八田郷ヲ八幡新庄ニ作リ、且大呑郷奥原保等ノ號ヲ立テ、鳳至郡ニテハ、穴水郷ノ名ヲ立ツ、是何等ノ書ニ因テ然ク書上ルヤ、最周ガ寛聞未ダ考得ザル所ノ者也、

〔郡名一覽〕一能登國　御料私領　能州　東西二日半　四郡

高貳拾三万九千貳百八石七斗九升五合四勺　六百八拾壹ケ村

)(●穴溝　加州三万石　長甲斐守

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕能登　四郡、六百六十六村、

御料私領
高二十七万五千三百六十九石九斗九升二勺一才

羽咋郡百九十一　鹿島郡百五十村　鳳至郡二百五十村　珠洲郡七十五村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

能登　羽咋郡、荻市村、犹谷村、牛下村、七海村、鹿島郡、水白村、武部村、古府村、葦染村、鳳至郡、千代村、道

能登郡　鹿島郡

道岸之時、必造還船於此山、住民伐採、或煩無材、故豫禁伐大木、勿妨民業、

〔三州志來因概覽 三能登國郡鄕來因〕鹿。島。是亦上文ニ所謂舊事紀ノ能等國ハ、卽此郡也、和名抄載之能○登○郡○、式ニ此郡能等比咩神社、能登生國玉比古神社アリ、能登郡ノ名是ニ本ヅクナラン、中古ヨリ能登郡ノ古名ヲ失ヒ、鹿島郡ト喚ヘ來ルヲ、寬文十一年、松雲公（前田綱紀）命ジテ本號ノ能登郡ニ改復アリ、其後元祿十三年、再ビ命アツテ鹿島郡トス、按ルニ、鹿島トハ、萬葉十六ニ、所聞多禰ト書テ、カシマト訓ズ、所聞多ノ三字、カシマシノ義ヲ以テ訓トス、（中略）倭名抄能登郡ノ管郷ニ加島アリ、又文治二年賴朝公ヨリ長谷部信連ヘ賜ハル書ニ、能登郡加島アリ、又萬葉集ニ香島アリ、是等鹿島ノ號ノ起本歟ベシ、

〔萬葉集 十七〕能。登。郡。從香島津發船、行於射熊來村往時作歌二首

登夫左多底、船木伎流等伊有能登乃島山、今日見者、許太知之氣思物、伊久代神備曾、

鳳至郡

〔三州志來因概覽 三能登國郡鄕來因〕鳳。至。神名帳此郡ニ鳳至比古神社アリ、並這郡名ノ起本成ベシ、此神社ハ今大屋庄輪島町ニ在者ト云、鳳至ヲ倭名抄ニ不布志ト訓ズ、延喜式日本後紀ニハフシト訓ズ、今俗フゲシト呼ハ非也、又延喜式拾芥抄作ニ鳳至、萬葉作ニ鳳至ハ、並ニ傳寫ノ誤也、（中略）鳳至ヲ寬永ノ頃ノ記ニ、鳳輯至ニ作ルアリ、最モ俗習也、

〔萬葉集 十七〕鳳至郡渡饒石河之時作歌一首

伊毛爾安波受、比左思久奈里奴、爾藝之河波、伎欲吉瀨其登爾、美奈宇良波倍底奈、

〔今昔物語 二十六〕能登國鳳至孫得帶語第十二

今昔、能登國鳳至郡ニ、鳳至ノ孫トヲ其ニ住者有ケリ、〔中略〕其鳳至ノ郡ハ、縣リタル所モ不見エ、何ナラン世界カ有ムトモ不見及所也、〇下略

珠洲郡

〔三州志來因概覽 三能登國郡鄕來因〕珠。洲。古紀ニ鈴ニ作ル、今此郡ニ鈴內村アリ、按ルニ、古ヘ珠洲ト鈴ト通ヲ用ヒシ成ベシ、延喜式此郡ニ須須神社アリ、須須ノ字亦通ズルガ如シ、這郡名ノ起本此神社アルニ因ナラン、

〔萬葉集 十七〕從珠洲郡發船還太沼郡之時、泊長濱灣作、見月光作歌一首、

珠洲能宇美爾、安佐比良伎之底、許藝久禮婆、奈我波麻能宇良爾、都奇底理爾家里、

〔日本後紀 十三 桓武〕延曆二十四年七月己丑、能登國言、船一艘漂着珠洲郡、遣使檢船上雜物、

郡

〔倭名類聚抄 七能登國〕羽咋郡　太海於保美　高家多加也　羽咋波久比　岡本　邑知於保知　都知都知　荒木阿岐　眞神

	珠洲	鳳至	能登	羽咋
管四	珠(ス)洲	鳳(フ)至(レ)	能登	羽(ハ)咋(クヒ)
同	同	同	同	同
四郡	同	鳳至	同	同
	同	鳳至 鳳鳳至	能登 鹿島	羽咋 羽咋郡
同	同(スゝ)	鳳(フケ)至(シ)	鹿(カ)島(シマ)	羽(ハ)咋(クヒ)
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同(スゝ)	同(フゲシ)	同(カシマ)	同(ハクヒ)
同	同	同	同	同

羽咋郡

〔三州志来因概覧能登國郡郷来因三〕民部式ニ、能登國四郡、羽咋、能登、鳳至、珠洲トアリ、○中略今ハ、羽咋、○註略鹿島、○註略鳳至、○註略珠洲、○註略此内、羽咋、鹿島ヲ口。郡。ト云、鳳至珠洲ヲ奥。郡。ト云、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十二月九日壬辰、能登國羽咋、能登、鳳至、珠洲四。箇。郡。新附百姓四百九十八人、優復一年、

〔三州志来因概覧能登國郡郷来因三〕羽咋今羽咋上文ニ云、舊事紀ノ羽咋國是也、又式ニ羽咋神社此郡ニ在、今羽咋正親ノ羽咋村ニアル社是也ト云、萬葉集十七ニ、大伴家持羽咋濤ト賦セル和歌アリ、中古以來羽咋ヲ羽喰ノ文字ニ誤書セルヲ、寛文十一年、松雲公(前田綱紀)命ロテ、古ノ本字羽咋ニ改復アリ、

〔日本後紀五桓武〕延曆十六年正月辛亥、能登國羽咋能登二郡沒官田、并野七十七町、賜-尚侍從三位百濟王明信、

〔三代實錄四十四光孝〕元慶七年十月廿九日壬戌、勅令-能登國禁-伐損羽咋郡福良泊山木、渤海客著-北陸

國府
郡

八國、並今置介、○中略先是三月九日、太政大臣已下參議已上奏言、○中略今件等國、或前爲上國、未備介職、或國務稍繁、官一本稱、員猶少、或長官有故、主典執印、論之政途、事非穩便、伏請甲斐周防新備介職、自餘中國同置介、○中略詔從之、

〔倭名類聚抄五國郡〕能登國國府在能登郡、行程上八十日、下九日、

〔三州志來因概覽三能登國郡鄕來因〕倭名類聚鈔、竝ビ拾芥抄ニ、國府能登郡ニアリトス、按ルニ、今云フ國府ノ地ナルベシ、古府村、國分村、府中村等ノ遺名アル村モ、此地ヨリ僅ニ二三十町ニ過ズ、又古ノ七尾ノ舊ニ、土人古ノ武部列官師澄、其後中院少將定清ノ館アリシト云傳フ、誠ニ國司守護等ノ據ベキ地位ナリ、

〔倭名類聚抄五國郡〕能登國○註略、管四○註略、羽咋波久比能登國府鳳至不布志珠洲須々

〔延喜式二十二民部〕能登國、中、管羽咋ハクヒ能登鳳至フゲシ珠洲スヽ○中略右爲中國、

〔皇國郡名志〕能登國四郡

羽咋ハクヒ　●味守　●河尻　●今濱　●一ノ宮　●福浦加丹ヨリ西海ニ面ス　●阿武浦

能登ノト　〈七尾　●柳浦　●大野木　佐渡　東海向郡

鳳至フゲシ　●道下〈宇出津　〈鳳至〈由井　●輪島　〈河井　●小田屋　時國東海ヨリ西北ノ海ニ貫

珠洲スヽ　〈飯田　〈正院町　●三崎　東北ノ海〈出崎郡

能登郡、一ニ曰ニ鹿島郡、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕能登

六國史
古書
延喜式
倭名抄
拾芥抄
諸書
郡名考
天保鄕帳
明治沿革輯
地誌提要
郡區編制

煽セラレ、子義春幼冲、國勢日ニ衰フ、天正五年、上杉輝虎將ヲ遣テ來攻ム、會々義春病テ歿ス、長綱連（宗連十三世ノ孫）拒守ヲ計ル、續光、綱連ヲ殺シテ輝虎ニ降リ、地遂ニ輝虎ニ歸ス、（畠山氏、十一世二百餘年ニシテ亡ブ、）七年、畠山ノ故臣温井景隆、上杉氏ノ戍將ヲ襲殺シ、七尾ニ據リ自立ス、明年、長連龍（綱連ノ弟）款ヲ織田信長ニ送ル、信長、景隆ヲ伐テ之ヲ降シ、續光ヲ誅シ、遂ニ全州ヲ併セ、鹿島半郡ヲ連龍ニ與ヘ、前田利家ヲシテ州事ヲ掌ラシム、九年、利家ヲ封ジ、七尾ニ治ス、後徙テ御山（加賀）ニ治シ、慶長四年、羽咋鹿島二郡ヲ割テ第二子利政ニ與フ、關原役畢リ、德川氏利政ノ地ヲ沒シ、兄利長ニ全州ヲ賜ヒ世襲ス、王政革新、七尾縣ヲ置、（越中射水一郡ヲ兼治ス）既ニシテ廢シテ石川縣ヨリ兼治ス、

〔先代舊事本紀（十國造）〕能等國造

志賀高穴穗朝（成務）御世、活目帝（垂仁）皇子大入來命孫彥狹島命、定賜國造、

〔古事記（中崇神）〕此天皇、○中略娶尾張連之祖意富阿麻比賣、生御子、大入杵命、○中略大入杵命者、（能登臣之祖也）

〔先代舊事本紀（十國造）〕羽咋國造

泊瀨朝倉朝（雄略）御世、三尾君祖石撞別命兒石城別王、定賜國造、

〔古事記（中垂仁）〕此天皇、○中略娶其大國之淵之女、弟苅羽田刀辨、生御子、石衝別王、○中略石衝別王者、（羽咋君、三尾君之祖、）

〔續日本紀（八元正）〕養老二年五月乙未、割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、

〔續日本紀（十四聖武）〕天平十三年十二月丙戌、能登國幷越中國、

〔續日本紀（二十孝謙）〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、頃者上下諸使、總附驛家、於理不穩、亦苦驛子、自今已後、宜依令、其能登、安房、和泉等國依舊分立、

〔續日本紀（三十四光仁）〕寶龜七年三月癸巳、從五位下矢集宿禰大唐爲能登守、

〔三代實錄（十淸和）〕貞觀七年五月十六日丙申、是日、置諸國介掾、甲斐、能登、丹後、石見、周防、長門、土佐、日向

宿所、五町三十六間、北極高三十七度二分半、又從二所口一至二二宮村、二里一十二町七間半、北極高三十六度五十八分、　二里一十三町四十五間　三室村、三十七度五分半、　三里八町一十三間半至二觀音島岬一三十二町一十七間　菴村、三十七度二分、　六里一十八町至二國界二里一十六町三十七間、從二國界一至二菴村、一里一町四十八間、　越中國射水郡氷見町

宿驛

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬○中略

能登國驛馬撰才、越蘇各五疋、

〔日本後紀平城十七〕大同三年十月丁卯、廢能登國能登郡越蘇、穴水、鳳至郡三井、大市、待野、珠洲等六箇驛、以不要也、

建置沿革

〔日本國郡沿革考北陸道二〕能登　古作能等、續紀　養老二年五月、割越前國羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡置、天平十三年十二月、併越中、天平寶字元年五月、依舊分立、中國、管四郡、六百六十六村、

羽咋ハクヒ百九十一村、古羽咋國、見國造記、　鹿島百五十村、古府治、延喜式等作能登郡、改今名、未詳在何時、和名抄加島郷、隸能登郡、　鳳至フゲシ二百五十村、延喜式拾芥抄作鳳至、擬誤　珠洲七十五村

〔日本地誌提要能登三十九〕沿革　養老ノ初、越前四郡ヲ割テ本州ヲ置キ、國府ヲ能登郡ニ定ム今ノ鹿島郡府中村ナリ文治ノ初、源頼朝鳳至郡ヲ以テ長チヤウ信連ニ與ヘ、大屋莊ニ居リ、地頭職ニ補シ、羽咋郡ヲ以テ得田章通ニ授ケ、德田ニ居ル、兩氏皆子孫ニ傳フ、元弘元年、少將中院定濟州守ニ任ジ、建武ノ初、越中ニ轉ズ、既ニシテ越中人普門利清、足利尊氏ノ反ニ應ジ、來リ侵ス、定濟遂ラ利清ヲ石動山ニ擊チ敗死ス、信連五世ノ孫盛連、官軍ニ屬シ、兵敗レテ京師ニ奔ル、是時ニ當テ州人吉見氏頼源範頼ノ裔孫尊氏ニ應ジ、數シバ官軍ト爭ヒ、州豪膂背常ナシ、正平五年、盛連ノ孫宗連、足利義詮ニ屬シ、采邑ヲ復シ、州事ヲ知ル、天授中、將軍義滿、畠山義深ヲ守護トシ、子基國職ヲ襲ギ、應永五年、守護ヲ其弟滿則ニ傳フ、滿則七尾城ニ治シ、子孫世襲シ、長、得田、諸豪皆之ニ屬ス、應仁ノ亂、滿則ノ孫義統ムネ、初メ西軍ニ屬シ、後東軍ニ降リ管領トナル、其五世ノ孫義隆ニ至リ、家宰游佐續光ニ

道路

右得能登國解偁、此國獨出北海、東西不隣、若有非常、誰備防禦、望請、准越後佐渡等國、被置件職者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平六年八月廿一日

〔能登めぐり〕四郡、高二拾一万八百九拾一石餘、

南北五拾里、横八里、輪島ヨリ宮腰マデ海上三拾二里、運賃米百石ニ五石五斗八升、福浦ヨリ宮腰マデ海上二十一里、運賃四石一斗四升、

〔日本實測錄一沿海〕從鞠山本貫沿海至三餘崎○中略

能登國羽咋(ハクヒ)郡今濱村至子浦村三里二十一町一間、北極高三十六度五十一分半、從子浦歴鹿島郡高畑村、至二宮村四里二十八町一間、　五里一十五町三十六間、至羽咋川口二里三町七間、　川尻村　三里一十一町四十五間半　福浦湊　五里三町四十二間半至富家町二里九間半、　鹿頭村立岩　六里三十町五十三間半至黒島村三里三十一町三十四間、　鳳至(ケシ)郡皆月村　四里二十一町五間至赤崎村二里一十二町一十九間、　輪島崎村至輪島崎三町五十九間、　五里一十六町九間半至輪島河井町、入町一十九間、從河井町至名舟村三里三町三十五間、　珠洲郡眞浦村　五里二十町四十七間半至大谷村二里一十一町、　折戸村　三里三十三町二十九間至金剛崎一里三十一町九間、　小泊村　二里二十一町六間至鰐島村一里一十五町八間、　飯田村　二里一十六町一十一間半　松波村、三十七度二十一分、　四里三町五十三間　小木湊至江奥五町一十間、　一十五町七間　同新町、三十七度一十七分、　三里二町五十三間　鳳至郡宇出津湊、三十七度一十七分半、　二里八町一十二間　七海村、三十七度一十五分、　三十五町三十九間　古君村、三十七度一十四分、　四里七町五十三間至神波村三十五町一十四間、　鹿波村　五里二十五町二十四間　川島村沖、至川島村宿所、汎濱六町、三十七度一十三分、　七町二十五間　乙ケ崎村、三十七度一十二分半、　七里二町三十一間至志ケ浦村一里三十四町一十間、從志ケ浦、至鳥浦村二里三十四町一十二間、　鹿島郡中島村濱、至中島村宿所、一十町二十間、三十七度七分、　三里四町二十一間　田鶴濱村、三十七度三分半、　四里二十町一十四間半　所口町書呼濱、至所口町二町二七尾、十四間、從所口、至

地勢地味

七度六分、遠洲　夷島　上ジヤウシヤ島　大島　小島　タラ島　中島　一ケ島　青島　稲ケ島
カラ島　湯島　辨天島　男島　女島　コシヤ島　寺島　トウ島　松島　竹生島

〔今昔物語三十一〕能登國鬼寢屋島語第廿一
今昔、能登國ノ奥ニ寢屋ト云フ島有也、其ノ島ニハ河原ノ石ノ有ル樣ニ鮑ノ多ク有ナレバ、其ノ國ニ光島ト云フ浦有リ、其ノ浦ニ住ム海人共モハ、其ノ鬼ノ寢屋ニ渡テゾ鮑ヲ取テ、國ノ司ニハ辨ケル、其ノ光ノ浦ヨリ鬼ノ寢屋ハ、一日一夜走テ人行ナル、亦其ヨリ彼ノ方ニ猫ノ島ト云フ島有ナリ、鬼ノ寢屋ヨリ其ノ猫ノ島ヘハ、亦負風一日一夜走テゾ渡ルナル、

〔易林本節用集下〕能登、能州中管四郡、東西二日半、土冷五穀遲、利鐵多、館大器、桑多衣厚、上小國也、

〔能登めぐり〕倭漢三才圖會、能登北邊國、故形異而奇水珍石多、又卍山和尚廣錄、我聞能州山水之勝地而奇秀、州中眉目也、誠山妾海形他異、凡邦國其土幅員文而有高山、則必有大川也、能登幅員狹小而無高山、故所有之川皆小川也、口郡幅或五六里、奥郡幅二三里、北突出於加州數十里、偏海國也、故於運漕有魚鹽之利也、嶺南之產物漂流來云々、

〔三州志來因概覽三 能登國郡鄉來因〕能登ハ、皇華ノ乾隅ニ境、遠古越洲中ノ一郡名ニテ、巍爾タル瀛海ノ偏國也、其表徼ニ七里（自宇出津至輪島）以内ニ止レドモ、瀛中ヘ延出スルコト二十七里強、（此州尾名三崎、以有金剛崎、宿崎、遠崎之三也、非越後、佐渡、能登三崎三會之謂也、蓋自清崎抵佐州、水程三十五里、方位指寅三分、〈佐渡國圖ニ、自佐州小木湊至能州清湊四十里、志雄紀ニ、小歌ニ、佐渡ハ四十九里波ノ上ト臨フハ、自佐州至輪島水程ヲ云トス、〉或云、越米山、佐渡彌彥山、能山伏山爲鼎足、按非也、三山各有遠近之異、）其分野ハ渤海國ノ遥南ニ方ルト云、（安積覺曰、渤海之南海、即我邦之北海、故唐書渤海傳、言南海之昆布、元正紀、蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採北地是也、）而シテ其民柔直、其俗朧樸（人國記等說不可取）太古結繩ノ遺美今ニ存ス、蓋シ舊事紀ノ所謂能等此國也、

〔類聚三代格五〕太政官符
應停史生一員置弩師事

ば、香門の國なるべきか、加賀國に能美郡あり、古事記の須久那美加微能加牟菩岐云々、日本書紀の、於明望能農之能、介彌之涨枳云々とあると、延喜神名式に、能登國羽咋郡大穴持像石神社、同國能登郡宿那彥神像石神社とあるとを合せ思へば、香所か香門か、弘仁私記に、少彥神是造酒神也、また式に、能登郡能登比咩神社、又能登生國玉比古神社もあり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

能登所口町、極高三十七度二分半、經度東一度一十六分半、從東京郡中山道國上〇追分經香光寺至今町沿海一百二十三里二十四町四十一間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

能登　二宮村鹿島郡　三六度五八分〇〇秒　宇出津湊　三七度一七分三〇秒

小木湊　三七度一七分〇〇秒　岬　三七度三〇分〇〇秒略〇中

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略〇中　能登　岬　東一度三六分〇〇秒

疆域

〔三州志來因概覽三能登國郡郷來因〕凡ソ能登州延袤、奥郡ハ東南北三面海ニ極ル、南面ノ海ヲ内浦、北面ノ海ヲ外浦ト云、是蓋佐渡國以東南沿海自鷲崎村至鵜津村間之内海府、以西北沿海自願村至小田村間之外海府、南方口郡ノ羽咋ハ賀州河北郡ト越中ノ射水郡ニ接壤ス、鹿島郡モ亦射水郡ニ接ス、一書ニ、古ヘ四郡ノ疆界ヲ敍ス、羽咋ハ南ハ寶達山、西ハ大海川、東ハ羽咋潟、北ハ高瓜山、能登郡ハ南ハ石動山、西ハ手代山、東ハ新崎、北ハ高爪山、鳳至郡ハ南ハ郡谷内山、西ハ鏡石川、東ハ高淵山、北ハ持野川、珠洲郡ハ南ハ羽根ヶ崎、西ハ岩倉山ト云々、若シ是古ノ風土記ナドノ説ニテモアラバ、好事家ノ美談也、

〔日本地誌提要三十九能登〕疆域　東南越中加賀ニ接シ、餘ハ皆海ニ至ル、東西凡壹拾壹里、南北凡壹拾八里、

島嶼

〔日本實測錄九島嶼〕能登國鳳至郡　遠測　七ツ島

鹿島郡　實測　能登島周廻、一十四里一十九町五十一間、　野崎村、三十七度七分、　東曾村、三十

古事類苑

地部二十二

能登國

能登國ハ、ノトノクニト云フ、北陸道ニ在リ、東南一方、加賀、越中ニ接シ、他ハ海ヲ以テ環ラシタル、半島狀ノ地ニシテ、東西凡ソ十一里、南北凡ソ十八里ナリ、此國ハ元正天皇養老二年、越前國羽咋(ハクヒ)、能登(ノト)、鳳至(フゲシ)、珠洲(スス)ノ四郡ヲ割キテ置ク所ニシテ、聖武天皇天平十三年、越中國ニ併セラレシガ、孝謙天皇天平寶字元年、舊ニ依テ分立ス、國府ヲ能登郡ニ置キ、四郡ヲ管ス、延喜ノ制、中國ニ列ス、後世能登郡ヲ改メテ鹿島郡ト稱ス、現今石川縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕能登(養老二年、割越中國置之、)

〔運歩色葉集 乃〕能登(ノト)(四郡四〇)能州

〔日本風土記 一寄語島名〕能登(奴朶(ノウトウ))

〔倭訓栞 前編二十三 乃〕のと　能登は式能登郡に能登生國玉比古神社と見え、其國も北海へさし出たる國也、越中國より割出したる事、續日本紀に見えたり、續紀に遣高麗國船名曰能登と見ゆ、萬葉集に、とぶさたて船木きるといふ能登の島山とよめり、國の名も和の義にや、船も祝せるなるべし、

〔諸國名義考 下〕能登
和名抄に、能登、(國府在能登郡、)名義いまだ思ひ得ず、上の越前の條に引る古事記傳の說により、强ていは

[illegible]

り南へ、ほそき入江也、鹽越の松とて此あたりにあり、是より越前の浦濱なり、

罪深き身ははろぶやと音にきく蓮の浦は行てだにみん

竹浦　蓮の浦より東にたちばなと云宿あり、是より北にあたりて竹の浦有、

昔に聞竹のうら風吹たて丶異砂にあそぶ秋のかりがね

小鹽の浦　思ひきや小鹽の浦のとまやにてね覺に秋の月をみんとは

篠原　あたかの浦とたちばなの間なり、俊成卿のうたに、

世の中はうきふししげき篠原や旅にしあれは妹夢にみゆ

高濱　都だに跡たゆ計ふる雪にこしの高濱思ひこそやれ

白山　此山越前にかゝりたる大山也、東は越中、南は飛驒境といへり、山頂に千蛇が池とて有之、みどりの池ともいふ也、白山權現の御事、神社の部にくはしく書記せり、富士の雪はきゆる日定りたれど、白山の雪はきゆる日なし、常住絶頂には雪有之、古今別のうたに、みつね、

消果る時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

龍の渡り　是白山の中宮にありといへり

徒にやすくも過ぬ山伏の龍の渡りも哀なるよや

印の竿　北國にはをしなべてある事なり、初雪の時、竿を立て、そのとしの雪のふかさを知也、

初雪に印の竿はたてしかどそこともみえぬ越のしら山

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒略〇中　加賀國五十人

〔三代實錄四十九〕元慶五年八月十四日庚寅、加賀國言、太政官去六月二十九日、下當道符、偁、比日兵庫有鳴、蓍龜告云、北境來寇、可有兵火、自秋至冬、宜愼守禦者、蓮撿、去弘仁十四年、分越前國置加賀國、其後五十八年、未備非常、伏望請被給官庫甲冑、以備非常、自餘兵器國宰新作者、勅、甲冑宜令國宰作哉、

風俗　名所

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略

私領

一人數拾九万六千七百貳拾五人

内 拾万貳千六百六人 男
九万四千百拾九人 女

高四拾三万八千貳百八拾壹石餘　加賀國

諸國人數調 弘化三丙午年

皆私領

一人數貳拾三万八千貳百九拾壹人

内 拾貳万貳千四百六拾八人 男
拾壹万五千八百貳拾三人 女

高四拾八万三千六百六拾五石餘　加賀國

〔人國記〕加賀國

加賀國ノ風俗、上下トモニ爪ヲ隱而身ヲ陰ニ持ツ、中ニモ江沼、能美如レ此、石川、川北之郡ハ、スコシ達テ氣ノビヤカ也、蓋シ武士ノ風俗、ヲトナシヤカニ有テ、尖成氣ナク、温和也トイヘドモ、武士ノ上ニテ秀ル事ヲ差テ不レ願、唯タヽミノ上ニテ、禮儀ヲ以テ身上ヲ上分ニナサント思フ氣質之多キ事、百人ニ五十人如レ斯、雖バ他國ニ合戰、亦ハ堺目論之軍有トイヘドモ、吾國全フ而出ル事モナク、我國ニ差向モノアラバ、不レ得レ止事而戰モノ也、戰國ノウチ迚モ、人ノ國ヲ無レ故奪ントスルハ盗賊之類也ト、諸人覺悟ヲ究テ、賢人風ノ形儀成フルマイ也、亦諸事之道ニ付、吾國ヨリ外ニ差テ替ル道理モ有マジキナドヽ、他ヲ求ル氣無レ之風俗ニ而、諸事ニ泥ミ安ク、何ノ道ニテモ是ニ從テ學ブトイヘドモ、ヤガテ其氣屈而半途ヨリ捨ルノ類多シ、サレバ其氣ヲ流通而、克己之工夫カラ不レ入シテ、自然ト怠リノ氣ニナレタルモノ也、都而諸事此國ニナス處ヨリ外ハ、他ニ有マジキト思フ意地ナレバ、深ク學ブ志强カルベキ故、天下ノ定規トモ可レ成國風ナルニ、最氣質之如レ此事淺猿シ。

〔日本鹿子十一〕同○加賀國中名所之部

蓮ハチス乃浦　越前の東也、かなつの宿より二里あまり行ば、加賀のさかいなり、蓮の浦は入江也、北よ

國產貢獻

（倭名類聚抄五國郡）加賀國略○中管四（中略）正公各三十萬束、本稻六十八萬六千束、雜稻八萬六千束

（延喜式二十三民部）年料舂米略○中加賀國大炊四百五十五石、樔十石、略○中

年料租舂米略○中加賀國一千三百石

諸國貢蘇番次略○中加賀國十五壺六口各大一升、九口各小一升、右八箇國爲第三番、卯酉年○中略

交易雜物略○中加賀國絹一百六十二疋、履料牛皮二張、漆一石五斗、荏油二石、樔二合、

（延喜式二十四主計）加賀略○中右廿五國中綠略○中加賀略○中右廿九國輸絹略○中

加賀國行程上十二日、下六日、海路八日、

調、小鸎鵡綾二疋、薔薇綾四疋、絣帛十疋、黃帛廿疋、橡帛十二疋三丈、帛八十疋、白絹十疋、自餘輸絹、庸、

白木韓櫃八合、自餘輸綿米、中男作物、紙、茜、紅花、熟麻、呉桃子、荏油、海藻、雜魚腊、

（延喜式三十三大膳）諸國貢進菓子略○中加賀國甘葛

（延喜式三十七典藥）諸國新年料雜藥略○中

加賀國七種　黃連七斤、枳殼伏苓各一斤、芎藭卅斤、藍漆十三兩、干地黃四斤十一兩、署預一斗、

（毛吹草三）加賀

椙原　鼓皮　鐙　手綱　鳥指竿　黑梅染　菊酒　煎餅　黃連　白山硫黃　小松糸綴絲　淺野川鰍(ゴリ)

○按ズルニ、此外ニ、日本鹿子ニハ、蘇眼物(ツクガンモノ)、小松羽二重、和漢三才圖會ニハ鹽硝ヲ載ス、

（三代實錄十二清和）貞觀八年五月十九日壬戌太政官處分、停略○中加賀略○中等九國年貢馬革百張、造兵司修理年料甲百領、令諸國貢馬革二百張、以宛彼料、

人口

（官中秘策四）加賀國　四郡略○中

一人數貳拾万貳千四百貳拾九人　内拾万八千貳拾七人男九万四千四百貳人女

九村、(實村數ハ今三百二十八村也)税額十六萬六千九百四十五斛九斗八升、能美郡二百有三村、(實村數ハ今二百四十村ナリ)二税額十一萬零九百零八斛六斗九升、三郡ノ税額ノ通計三拾五萬二千九百二十四斛八斗七升、此內六千三百零二斛四升餘ハ分限帳ノ外タルニヨリ籍外額ト云、江沼郡百三十四村、(今實村數ハ百五十三村也、三州村名ノ詳ハ、予ヵ邑籍考ニ記、)及ビ能美郡ノ內六村、税額七万石ハ大聖寺侯ヘ公約ノ邑入也、(是ハ寬文四年、大聖寺侯ヘ賜ハル嚴有大君ヨリノ花押ノ書ノ面テ也、貞享元年九月廿一日、松雲公ヘ賜ル書ニハ、加州江沼能美二郡ノ內七万百七十石餘トアリ、但此百七十石餘ハ公領也、詳ニ本封叙次考、(中略)秀吉公諸國檢地帳ノ目錄ニハ、加賀三十五万五千五百七拾石トアリ、武要辨略、等ニハ四拾四萬二千五百七十石トアリ、)當時高辻帳表ハ、河北百七拾三村、七萬五千七拾斛二斗、石川貳百二拾九村、十六萬六千九百四拾五斛九斗八升、能美二百一村、拾一萬七百三拾六斛七斗一升、三郡ノ通計六百三村、(今存ル三郡實數ハ八百四十三村也、四郡ノ圖計ハ九百八十五村ナリ、)三拾五萬二千七百五拾二斛八斗九升、賜文押字擧目額三拾四萬六千四百五拾斛四斗七合、税籍蘊額六千三百二斛四斗八升三合、是正德元年辛卯、天明七年丁未、官ヘ申文ノ員數也、開墾額三郡內ニテ四萬六千四百三十八斛四斗七升也、(是ハ寶暦十年書出ル新田額數ニテ、當時モ同然也、貞享元年ノ高辻ニハ三郡ノ內三萬千百十五石三斗ノ新田額也、此以後一萬五千三百二十三石一斗七升ノ新開増加、此二新田ヲ都合シテ、寶暦十年書出ル額數也、)

〔日本鹿子十〕加賀國四郡、中上國、東西二日半、知行高四十四万二千五百石、

〔官中秘策四〕加賀國　四郡○中略

一石高四拾三万八千貳百八拾壹石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

加賀國(皆私領)　一高四拾八万三千六百六拾五石八斗四升八合七勺

出擧

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻○中略

加賀國、正税公廨各卌万束、京法華寺料一万五千束、國分寺料二万束、文殊會料二千束、薬分料四千束、修理池溝料一万束、救急料三万束、俘囚料五千束、

藩封

田數石高

拾四貫文　等持寺領（賀州粟津上下保殿錢）　一貫文　問注所殿（賀州石田保殿錢）　壹貫文　日野前大納言御領（加州佐見保殿錢）　壹貫五百文　中島次郎殿（賀州倉四田保殿錢）　一貫文　妙慶院（北野社領加賀國小泉保一分殿錢）　一貫五百六十五文　大祥院殿（加賀國和氣保分殿錢○節略）

〔慶應元年武鑑〕加賀中納言齊泰卿（大廊下、正三位）　百二万二千七百石　居城加州石川郡金澤（江戸ヨリ東海道百五十一里餘、北陸道百十九里餘、東山道百六十里餘、城主加賀大納言利家、同中納言利長、加賀能登越中代々領之、慶長五、加州小松城主丹羽五郎左衛門長重十五万石、同大聖寺城主山口玄蕃頭七万石所領、一國屬利長、小松中納言利常、同少將光高代、十万石淡路守利次、七万石飛驒守利治配分、）

松平飛驒守利鬯　拾万石　居城加州江沼郡大聖寺（江戸ヨリ東海道百三十九里、東山道百四十八里、北陸道百卅一里、城主山口玄蕃頭持之、慶長五、前田領配分、松平飛驒守利治、以後代々領之、○節略）

〔倭名類聚抄五國郡〕加賀國（○註略）管四（田萬三千七百六十六町七段三百三十四步）

〔伊呂波字類抄加國郡〕加賀國　本田一万二千五百四十六丁

〔拾芥抄中末本朝國郡〕加賀（上中）四郡（中略）田萬二千五百三十六町（○又見二運步色葉集一）

〔海東諸國紀〕加賀州　郡四、水田一萬二千七百六十七町四段、

〔三州志來因概覽五加賀國郡鄕來因〕吾藩胙茅ノ後、寬永十一年甲戌閏七月、猷廟（○德川家光）ヘ微妙公（○前田利常）書上ナセラル封入目錄ニハ、加賀國四郡、通計稅額四十四萬二千五百七斛四斗五升六合（內四百六十一石七斗四升寺社領）闕田二萬二千三百二十九町六段二畝十五步、闕畑五千七百十八町五畝二步（內高四百八十七石五斗一升六合寬川歲）總物成（日次記云、百石ノ中、成入分七分、或二分三分ヲ取、ヲ斂ル歲ト云、是等物成ナド云ノ由所ナルベシ、）十七萬四千三百七十四斛七斗六合（內二百石二斗七升七合寺社領）トアリ、此後陽廣公（○前田光高）ヘ封入ノ賜帖ノ寫ハ見ヘズ、（寬永十六年六月廿日、陽廣公入十萬石賜ルコト、ハ合本封額次考ニ詳也、）寬文四年甲辰四月五日、嚴廟（○德川家綱）ヨリ松雲公（○前田綱紀）ヘ改メ賜ル公約邑入條帖ニハ、加賀郡百七十三村、（今實村數ハ二百六十九村也）稅額七萬五千零七十斛二斗、石川郡二百二十

〔賀茂注進雜記 神領 下〕當社領加賀國金澤庄事、當知行之處、國錯亂以來無沙汰云々、太以不可然、所詮靜謐之上者、爲直務令領知可被抽御祈禱丹誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

永祿十二年七月三日　右馬助 判

前信濃守 判

賀茂社雜掌

〔東大寺小櫃文書 下〕注進　依召進上印藏文書事

合 ○中略

加賀國石內保坪付繪圖等一通 ○中略

古依政所仰、進上文書大略注進如件、

久安三年四月十七日 ○署名略

〔南禪寺文書〕加賀國笠間保得橋鄕佐羅、佐野兩村、如元所被付寺家也、可被存知之由、天氣所候也、仍執達如件、

建武元年八月二十九日　左中將 花押 ○中院具光

南禪寺僧衆中

〔壬生文書〕主殿寮領 ○中略

加賀國橘島保 ○中略

右所々、如元知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月廿七日　參議 花押

大夫史殿

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合

下諸國 可早任院廳御下文停止方々狼藉備進神事用途賀茂別雷社御領庄園事○中略

加賀國　金津庄○中略

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々狼藉、武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、猶可處重科之狀如件、以下、

壽永三年四月廿四日

正四位下源朝臣御判

〔天龍寺文書 一〕加賀國大野莊地頭職（西園寺中納言實跡）事、爲甲斐國牧莊替、所寄附臨川寺狀如件、

建武三年八月卅日　源朝臣（花押○足利尊氏）

夢窓國師

〔鹿苑寺文書 二〕鹿苑寺領

加賀國郡家庄（右府將軍家、寺家一圓、被止地頭職、以下○中略）　以上十八箇所

建武三年九月十七日

〔集古文書 四十四寄附狀〕勝定院義持公寄附狀（細川家藏）

寄附　北野宮寺　加賀國富墓庄（給人知行分）事

右所寄附當社之狀如件

應永三十年八月十二日　春夢宛弟子（判）

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕

貳貫四百文　毘沙門堂殿（賀州能美庄段錢）　四貫文　朝日孫左衛門殿（賀州坂田庄段錢）　四貫百十五文　千

秋利部少輔殿（賀州笠間庄段錢）　四貫九百廿文　春日社領（賀州四方田小坂庄段錢）　拾五貫文　西部筑前入道殿（賀州北島庄段錢）

參貫七百五十文　結城左近將監殿（加賀○闕河田段錢○中略）

莊保

城ヘ始封ノ比ハ、其衒狀今日ニ似者ナシ、農里ノ編戸ノ若シト、其餘波今モ枯木橋畔革工ノ徒住存ス、

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地〇長德四年注文定 中略

加賀國 幡生庄田二百五十町 〇中略

別功德分庄 〇中略

加賀國 橫江庄田百八十六町六段二百歩

右諸國庄家田地目錄如件

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年四月六日甲戌、池前大納言竝室家之領等者、載平氏沒官領注文、自公家被下云云、而爲酬故池禪尼恩德、申宥彼亞相勘勤給之上、以件家領三十四箇所、如元可爲彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、〇中略

池大納言家沙汰 〇中略 熊坂庄加賀 已上八條院御領 〇中略

右庄園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行、勤狀如件、

壽永三年四月六日

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

總處分 條々事 〇中略

一家地文書庄園事 〇中略 九條禪尼 〇中略 家領 〇中略 加賀國熊坂庄 〇中略 尙侍殿 〇中略 新御領 〇中略 加賀國饒庄 〇中略

建長二年十一月 日 惡老御判

〔賀茂注進雜記下神領〕同〇壽永三年四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ヶ所、任院廳御下文、可止武家狼藉之由、有其沙汰云云、

夢窻上人禪室

〔臨川寺重書案文乾〕加賀國大野庄內藤。江。松。村。兩村事、依御辭退、被寄進正脈庵造營料所候、於所屬者、一圓爲當寺領、可有御管領候也、恐惶謹言、

建武四四月廿八日　尊氏御判

臨川寺方丈

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合○中略

三百六十文○中略　大內五郞殿之賀州讃挾。村。

〔三州志來因概覽附錄二〕國府沿革幷街巷來因

金城ハ石川郡ニアリ、(古記ニハ石川郡山崎庄ニ在トス、然レドモ今此庄名ナシ、)國府ハ石川河北二郡相半ス、此內五庄二鄕ノ(庄稱在二郡、郡鄕來因○中略)接壤シテ、郡下ノ全地ヲナス、所謂五莊トハ、田井口、○註略材木町金城際マデヲ若松莊トス、石川郡ニ隷ス、覺源寺ヨリ、○註略新坂、○註略大乘寺坂、○註略長町堤町マデヲ石浦莊トス、石川郡ニ隷ス、安江町御坊町ヨリ街尾マデヲ鞍月莊トス、(一本ニ金澤莊ニ作ル、然レドモアタラズ、)石川郡ニ隷ス、河北門ヨリ淺野川ニ及ブヲ小坂莊トス、○註略石川郡ニ隷ス、○註略金谷門ヨリ蓮池亭邊ヲ金。澤。莊トス、(遠云、加今石川河北二郡ニ金澤ノ庄名ナシ、疑クハ金津庄ノ誤カトナリ、愚按ルニ、此說非也、金津庄ハ字[illegible]村ヨリ內日角邊ニ在テ、全ク府內ニ異カラズ、金澤庄ハ全ク府內ニ止テ、府外ニ及バズ、是ヲ以テ見レバ、金津金澤二莊アルコト明ラカナリ、若松庄今河北郡ノ庄名ニナキハ、是亦府內ニ全ク止マレバ也、)石川郡ニ隷ス、以上五莊也、所謂二鄕トハ、木町(按ルニ木町、木倉町ノ誤カ、)、用水ヨリ、古道マデヲ豊田鄕トス、(豊田今誤テ戸板トス、)石川郡ニ隷ス、厩川ノ外泉野○註略マデヲ富樫鄕トス、石川郡ニ隷ス、(今ハ富樫庄ト稱フレドモ、富樫鄕也、和名抄ニ出ヅ、)以上二鄕也、○中略當城ハ金府ノ中央ニアリ、國卿大夫士諸臣ノ第宅、工買商人ノ比屋列肆、其區別ハ有トイヘドモ、大ニ其境界ヲ隔テズ、接壤聯並ス、府內畫地ノ制殆ンド小江戸ヲ爲ス、它邦播磨ノ姬路、尾張ノ名護屋、南越ノ福井、越後ノ高田等ノ、士商第肆ノ地ノ大別アルノ類ニ異也、按ズルニ、天正十一年、國祖○前田利家當

忠、馳参今月二十一日、仍以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年六月二十五日　藤原顯廣

進上　御奉行所　承丁判

〔南禪寺文書〕加賀國得橋郷内今村（山城彈正跡）爲南禪寺領可令知行給之旨、天氣所候也、仍執達如件、

建武二年三月二十日　左中將在判

夢窓和尚

〔郡名一覽〕一加賀國（曾私領）加州　東西二日半　四郡

高四拾三万八千貳百八拾壹石七斗七升　七百七拾ケ村

●金澤（東海道百五十一里中仙道百六十里北陸道百十九里）　●大聖寺（東海道百三十九里中仙道百四十八里北陸道百三十一里）

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕加賀　四郡、七百六十八村、

（曾私領）高四十八万三千六百六十五石八斗四升八合七勺

河北郡百七十七村　石川郡二百三十五村　能美郡二百十三村　江沼郡百四十三村

〔地勢提要（坤）〕郡邑島嶼奇名

加賀　江沼郡、笹原（シノハラ）村、河北郡、外日角（ソトヒヅノ）村、

〔南禪寺文書〕加賀國佐野村事、所被寄附南禪寺也、早可知行給旨、依天氣執達如件、

建武二年四月七日　左中將在判

夢窓上人方丈

〔南禪寺文書〕南禪寺領、加賀國得橋郷内牛島村地頭職、爲寺領可令知行給旨、依天氣執達如件、

建武二年五月二十五日　左中將在判

鄉

〔續日本後紀 六仁明〕承和四年七月辛卯、加賀國石川郡荒廢田卌九町、賜三品彈正尹秀良親王、

〔倭名類聚抄 七加賀國〕江沼郡 忘浪 ○高山寺本、忘作忌 山背 也萬之呂 竹原 多加波良 額田 奴加多 郡家 三枝 佐伊久佐 菅浪 須加奈美 長江 奈加江 八田 也多

能美郡 輕海 加留美 野身 乃美 山上 也萬加美 山下 也萬之多 得橋 宇波之○得、高山寺本作見、

石川郡 中村 奈加無良 富樫 止加之 椋部 ○高山寺本註久良波 三馬 美萬 拜師 波也之 井手 井天 笠間 加佐萬 味知 美知 大桑 於保久波

大野 於保乃 芹田 世利多 井家 井乃以倍○大桑以下四郷、高山寺本在加賀郡下、

加賀郡 英太 江多 玉戈 多萬保古 驛家 田上 多加美

〔三州志來因概覽 五加賀國郡鄉來因〕倭名抄ニ載スル江沼郡管鄉ハ○中略九鄉也、○中略方今此郡ニ鄉名ナシ、西ノ莊 十六村ノ莊名アルノミナリ、其他ハ北濱通 十八村 山中谷通 十七村 潟通 十四村 能美境通 十七村 那谷谷通 二十二村 四十九院通 十九村、此四十九院ト八古ヘアリシコト也、 奧山廻 二十一村 ト俗號ヲ立テ、一百四十有二ノ村落ヲ八倉ニ割リ、今ハ五倉ニ分、保此各保長ノ部下トス、泣周(遙田)抜、此西庄内ニ熊坂分七箇村アリ、花房村、間山村、吉岡村、庄司谷村、右坂村、畑岡村、北原村是也、熊坂ヘ中古ノ庄謂ダルコト書明也、東鑑ノ齡永三年四月ニ加賀熊坂庄八條院御領トアリ、以テ知ベシ古郷ノ郷ハ今ノ額見村邊ナラン、上拴ニ所前中院領ノ領ハ之チ額田庄ト呼シ底ベシ、又今潟爾ノ内ニ分田村分九箇村アリ、西泉村、原村、大野村、小島村、中村、豊野村、精野村、稲手村、宮田村是也、或ハ之チ矢田野領ト云拴ルニ是古管郷ノ八田也、是モ上拴ニ所潮中院家領ノ頭ハ之チ入田庄ト鳴ヘシ底ベシ、矢田野ノ字ハ動勝ニテ石川郡ノ野ノ市チ今々市ト書タ額底ベシ、又山中谷邊ノ内ニ山代村アリ、是ハ古郷ノ山背ナラン、光仁(光仁帝廢)帝紀ニモ天平實字六年四月道前國江沼郡山背トアリ、中古マテモ山代郷ト云コト杜々雑記中ニ見エ、富樫秦信此郷ニ據ア山代郷信ト號ス、管堅高家ノ弟也、又郷谷谷通ノ内ニ大管波小管波ノ二村アリ、是モ古管郷ノ颪瀬ナルベシ、サレバ菅部谷谷通ト云ヘ古ノ管濱郷廣ベシ、此管ハ菅波ナシ、此郷ニモ古ノ郷莊名有ベケレドモ失名可惜、能美郡古管郷ハ○中略五郷也、方今ハ德橋 三十村、樓ルニ古郷得橋ノ俗部也、 苗代 十六村 板津 イタツ 四十七村○中略 山上 ノウヘ 六十四村是郷也、○中略 古輕海 五十五村古郷也、 粟津 三十五村内六大村、雲寺領也、但今ハ此外ニ無家村テモ加ヘ五六ノ新村名アリ、村ノ六郷也、今此郡ニ莊名ナシ、平家物語、藤永二年木曽義仲能美庄サ管生神社ヘ寄進トアルハ今ノ郷波郡ノ能美郷ニテハ有マ○此古郷ノ野島成ベシ、石川郡古管郷ハ○中略十二郷也、今方ハ中 ナカ 奧 アウ 二十六村、或ハ作中奧ル、ニ奧字ナキト調ズベシ、○中略豊田 トヨタ 十二村、今作戸板若大藤也、古ヘ富樫氏ノ族豊五郎光成、其子次郎光康等、此郷ニ據也、○中略田 横江 ヨコエ 十五村、源平盛衰記ニ藤永二年林光明金劍宮ヘ横江庄ヲ寄附ストアリ、

モ、是来ダ加賀郡、越前ノ屬郡ニテ、加賀郡ニ十六郷有シ時也、加賀郡國後ヘ弘仁十四年六月ニ見ヘルヲ始トス、加賀國加賀郡ト六字連續ハ、仁和元年ヲ始トス、〔中略〕河北トハ、津田河ノ北ト云名義、歳ヘシ、津田河ハ石川郡ノ風土記ニ見ヘテ、所謂今ノ淺野川也、〔中略〕加賀郡ヲ河北ト改名ノ由来、時代共不ν可ν改、長享二年、誠越河合宜久等、河北郡ノ誠乘ヲ集メ、久保豊ニ記トアレバ、其頃既ニ此鳴館有シト見ユ、天正十一年、國祖〔前田利家〕ヨリ景周〔富田〕先祖於政ヘ賜ル書件ノ寛翰ニモ見エ、但シ書ハ國郡ニテカハキタト呼シコト明了也、河北ト皆ニ呼做シハ後ノコト也、寛文十一年五月四日、松雲公〔前田綱紀〕加賀郡ノ古名ニ復シ玉ヘドモ、元祿十三年八月廿日、又河北郡ト改名也、〔中略〕又石川河北ヲ北二郡、能美江沼ヲ南二郡ト呼コト、長享以来亂時ノ書札中ニ屢見ユ、今能州ニ於テ、口郡奥郡ト稱スルニ同ジ、

〔萬葉集十八〕越前國掾大伴宿禰池主來贈戲歌四首〇中略更來贈歌二首

依迎驛使事、今月十五日、到來部下加賀郡境、〇中略

勝寶元年十二月十五日　　　　徵物下司

謹上不使君〇大伴家持記室

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年二月戊午、越前國加賀郡少領道公勝石、出擧私稻六万束、以其違勅沒利稻三万束、

〔日本靈異記下〕女人濫嫁飢子乳故得現報緣第十六

橫江臣成負女、越前國加賀郡人也、

〔三代實錄四十七光孝〕仁和元年二月十六日壬寅、加賀國加賀郡彌勒寺預于定額、

石川郡

〔三州志來因概覽五〕加賀國郡邑來因　石川イシカハ、倭名抄ノ正訓也、石川郡風土記云、石川郡、或即郷川、東限二里直崎、西限ニ錢市、南限ニ葉田川、北限ニ椎木歟、〔中略〕石川郡ハ、原加賀郡中ニ在シテ、弘仁十四年六月、加賀郡ヲ割テ置クハ、日本後紀ニ由ルヲ始トス、加賀國石川郡ト六字連續スルハ、承和元年二月ヲ始トス、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年六月丁亥、越前國言上、〇中略加賀國、〇中略加賀郡管郷十六、驛四、割八郷一驛更建一郡、號石川郡、以地廣人多也、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月甲午、加賀國石川郡人財道女一產三男、給正稅三百束及乳母一人公粮、令以育養、

能美	能美(ノミ)	同	同	同	同(ノミ)	同	同	同(ノミ)	同
加賀	加賀	同	同	加賀 河北	河北(カホク)	同	同	同(カヽ)	同
石川	石川(イシカハ)	同	同	同	同	同	同	同(イシカハ)	同
	管四	同	四郡		同	同	同	同	同

江沼郡

〔三州志來因概覽 五 加賀國郡鄕來因〕江沼ヱヌマトハ延喜式、倭名抄ノ訓也、ヨネトハ拾芥抄ノ訓也、今方言互ニ相用ユ、古事記ニハ江沼財トアリ、按ルニ、沼ハヌト訓ズレバ、財ハ國ニテ、都ナ江沼同、日本紀江淳ニ作リテエヌト訓テ附ス、

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年八月戊寅、改加賀國人正六位上百濟公豐貞本居、貫附左京四條三坊、豐貞之先百濟國人也、〈○中略〉以乙未年被貫加賀國江沼郡也、

能美郡

〔三州志來因概覽 五 加賀國郡鄕來因〕能美ノウミト唱フハ倭名抄ノ訓也、ノミト唱フハ延喜式、拾芥抄ノ訓也、(中略)按、倭名抄、此郡ノ古鄕ニ野身アリ、然レバ此鄕名ノ郡名ト成タルナラン、此類證例尤多シ、白山記ニハ乃美ニ作ル、(中略)古ヘ能美郡ニ加賀ノ國府アルコト、倭名拾芥ノ二抄ニ載テ灼焉メリ、今猶此郡ニ國府村アリ、古迹也、

〔日本紀略 淳和〕弘仁十四年六月丁亥、越前國言上、〈○中略〉加賀國江沼郡管鄕十三、驛四、割五鄕二驛、更建一郡、號能美郡、〈○中略〉以地廣人多也、

加賀郡 河北郡

〔續日本後紀 六 仁明〕承和四年十一月丁丑、加賀國言、管能美郡人財部造繼麻呂、父母存日、定省之禮無失其節、沒後操行不變、朝夕哀慕、隣里鄕邑莫不推服、可謂孝子、勅宜敍三階、終身免其戶租、旌表門閭、令衆庶知、

〔三州志來因概覽 五 加賀國郡鄕來因〕河。北。古ノ加。賀。郡。ニシテ、古事記ノ賀我國其起原也、加賀郡ト見ハルハ、萬葉集十八卷、天平勝寶元年十二月ヲ始トス、然ド

國府ノ地ニ據タル成ベシ、○中略政親亡滅ノ後、拜賊蜂起、御山城ニ據テ其城下ヲ國府トス、是又國府ノ一變也、佐久間氏因襲シテ之ニ居ス、我國祖○前田利家モ亦道地ニ據テ都城ヲ奠メ、國府萬世隆盛ノ鴻基ヲ開キ玉フ、

〔保曆間記〕同(建武)四年ノ春、奥州モ伊氏ニ志有ケル者有テ合戰ヲ始ム、顯家卿打負テ加賀國府ヲ落、當國伊達郡ニ靈山ト云寺ニ籠リケルヲ責ケレバ、是ヲモ落テ下野國宇都宮ニ住ケリ、

〔倭名類聚抄五國郡〕加賀國、○中略管四、○中略江沼(エヌ)　能美(ノミ)國府　加賀　石川(伊之加波)

〔延喜式二十二民部〕加賀國、上管　江沼(エヌ)　能美(ノミ)　加賀　石川、○中略右爲中國、

〔皇國郡名志〕加賀國四郡

江沼(エヌマ)　大聖寺　立花　イフリ橋　作見　山中　越前界ヨリ海ニ至

能美(ノミ)　小松　入内　瀬　安宅　湊　月津　寺井　海邊ヨリ山ニ掛ル郡

加賀(カヽ)　一乘寺　竹橋　津幡　森下　越中界

石川　金澤(泉寺町)　新谷　湯　下折　野々市　尾添　松任　白山　柏野　越中界ヨリ海ニ貫　水島　本縛　鶴

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕加賀

書名	郡名
六國史	
古書	江沼
延喜式	江沼
倭名抄	同
拾芥抄	同
諸書	同
郡名考	同
天保郷帳	同
明治國郡帳	同
地誌提要	同
郡區編制	同

加賀國定上國事

右太政官、去弘仁十四年三月一日下式部省符偁、依太政官去二月三日論奏、割越前國江沼加賀二郡、爲加賀國、又定中國者、今件國准諸上國、課丁田疇其數差益、被右大臣宣偁、奉勅宜改爲上國、

天長二年正月十日

〔類聚國史 十神祇〕天長元年八月丁酉、依〈○中略〉從四位上行越前加賀守紀朝臣末成等奏、紀氏神□幣帛例、

國府

〔倭名類聚抄 五國郡〕加賀國〈國府在能美郡、行程上十八日、下九日、〉

〔三州志來因概覽 附錄二〕國府沿革幷街巷來因

國府トハ國都也、〈○中略〉我金澤ハ北方ニテノ雄都會也、〈日本諸侯國府ノ盛ナル、尾州ノ名護屋、奥州ノ仙臺等ノ外、我金府ノ如キ者、僅ニ三所ニ過ザル也、〉盛哉山海百爾ノ奇物、大氏具備セザルコトナシ、蓋シ古今國府沿革ヲ論ズルニ、加賀國太古ハ越前ノ屬タルヲ以テ、越前ノ國府〈今立郡、即今ノ府中ノ地也、〉ヨリ裁斷處置ヲナス、故ニ加賀ノ國府ナシ、日本後紀ヲ考ルニ、弘仁十四年、癸卯、加賀郡國府ヲ去コト遠ク、況ヤ途路中ニ四大川〈按ルニ、越前ノ白鬼女川、鳴鹿川、加賀ノ大日川、手取川ナルベシ、〉有テ、動モスレバ鴻水森漫、行客日ヲ累ヌレドモ涉ルコト能ハズ、苦難ニ洎プヲ以テ、太政官奏シテ越前屬郡ノ内江沼加賀ノ二郡ヲ割リ、加賀州ヲ新タニ建置ス、〈事詳ニ加賀國郡郷來因、〉是ヨリ能美郡ニ國府アルコト、和名鈔ニ載ズ、然レバ今ノ能美郡國府村邊、古ノ府治瞭然タリ、即チ能美郡、今猶大領野大領村等ノ遺名アリ、是古ヘ大領ノ住セシ地ナルベシ、爾後正暦中、富樫忠頼加州永任ノ勅許ヲ蒙リ、家國〈利仁ヨリ七世也、宗助子、〉ニ至テ館ヲ石川郡高安莊〈世本之ヲ高安庄野々市トス、又野々市ヲ今ハ富樫庄内ニ隸ス、並ニ誤也、○中略〉野々市ニ造リ、〈今野々市ニ御館ト云所アリ、又御藏ノ館トモ呼、上人ノ口碑ニ、富樫泰高ノ館迹トス、景周(富田)按ズルニ、長享二年、政親滅後泰高茲ニ移ルナラン、館跡家國以來富樫氏四百餘年茲ニ居ス、〉國政ヲ治ム、是レ野々市加州徙治ノ一變也、安元元年乙未、近藤師高加賀ノ守タルトキ、其廳〈俗ニ云評定所也、古ヘ國一隅ニ置ク、○中略〉一能美郡涌泉寺近クト源平盛衰記ニアレバ、此廳古ノ

ヲ降ラシム、德川氏、長重ノ封ヲ收メ、全州ヲ以テ利長ニ賜ヒ、金澤ニ治シ、能登越中ヲ兼領シ、世襲、其支封ヲ大聖寺トス（利長ノ嗣利常ノ第三子利治）、王政革新改テ縣トシ、既ニシテ大聖寺ヲ金澤縣ニ併セ、又改テ石川縣ト稱ス、

〔先代舊事本紀　十國造〕賀我國造

泊瀬朝倉朝（雄略）御代、三尾君祖石撞別命四世孫大兄彥君定賜國造、難波朝（孝德）御代隸越前國、

加宜國造

難波高津朝（仁德）御世、能登國造同祖素都乃奈美留命定賜國造、

〔國造本紀考　三〕加宜は考へ得ず（中略）もしくは山城を山背、武藏を胸刺とあるが如く、加宜に賀我の重複にて、官の傳文を誤寫しゝにはあらざるか、

〔先代舊事本紀　十國造〕江沼國造

柴垣朝（反正）御世、蘇我臣同祖武內宿禰四世孫、志波勝足尼定賜國造、

〔類聚三代格　五〕太政官謹奏

割越前國江沼加賀二郡爲加賀國事（中國）

守一人　掾一人　大目一人　少目一人　史生三人　博士一人　醫師一人

右得彼國守從四位下紀朝臣末成等解偁、加賀郡遠去國府、往還不便、雪零風起、難苦殊甚、加以途路之中有四大川、每遇洪水、經日難渉、人馬阻絶、動口擁滯、又郡司鄕長任意侵漁、民懷寃屈、路遠無訴、不堪深酷、逃散者衆、又部內闊遠、多煩巡檢、官舍之損、農桑之怠、莫不由此、伏請別建一國、名曰加賀國者、夫聞舉墜者終待改張之功、行政化者必資權變之道、彼越前國民俗凋弊、非患何息、境內闊遠、本號難治、臣等商量、所申合宜、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

弘仁十四年二月三日

太政官符

〔日本地誌提要三十八加賀〕沿革　弘仁中、越前江沼加賀二郡ヲ割テ本州ヲ置キ、國府ヲ能美郡ニ定ム、（今ノ國府村）永延ノ初、富樫（トガシ）忠頼州介ニ任ジ、州事ヲ知リ、石川郡野々市ニ居ル、文治元年、源頼朝、忠頼九世ノ孫泰家ヲ以テ守護ト爲ス、建武中興、大納言二條師基ヲ國司ニ任ジ、河北郡ニ治ス、（今ノ御所（ショ）村ト云）延元ノ初、足利尊氏京師ヲ犯ス、師基兵ヲ率テ入テ援ク、既ニシテ尊氏筑紫ニ奔ル、泰家五世ノ孫高家、從ヒ行キ功アリ、因テ守護トナル、三年、朝廷瓜生（ウリフ）照ヲ州守ニ任ジ、新田義貞ノ應援タラシム、義貞尋テ戰沒シ、照等逃亡シ、闔州富樫氏ニ歸シ、子孫ニ傳フ、文安四年、高家ノ後五世敎家卒シ、其子成春（シゲハル）、叔父泰高ト守護ヲ爭フ、將軍義政本州ヲ以テ兩人ニ分與シ、成春ヲ州介ニ任ズ、長祿二年、義政半州ヲ分テ赤松政則ニ賜フ、富樫ノ家臣拒デ納レズ、長享二年、成春ノ子政親徙テ高尾城ニ居ル、（石川郡）是時ニ當テ眞宗ノ僧、本願寺、專修寺ノ兩派、州內ニ蔓延シ、黨ヲ樹テ相爭フ、政親專修寺ヲ直トス、本願寺ノ黨叛シテ高尾ヲ陷レ、政親自殺シ、富樫氏亡ブ、（忠頼ヨリ二十一世五百餘年）賊遂ニ闔州ニ據リ、寺宇ヲ山崎山ニ營シ、堡砦ヲ修シ、貢租ヲ山科（山城）本願寺ニ納ルヽ者、八十餘年、（長享ヨリ天正ノ初ニ至ル）天文中、上杉輝虎伐テ之ヲ降ス、弘治元年、朝倉義景將ヲ遣リ、略ナ其西境ヲ取リ、手取川ヲ以テ界トス、天正八年、織田信長、朝倉氏ノ故地ヲ徇ヘ、遂ニ全州ヲ平ラゲ、御山（オヤマ）（今ノ金澤）佐久間盛政ニ、松任（マツタフ）（石川郡）德山則秀ニ、大聖寺（江沼郡）拜鄉（ハイガウ）家嘉ニ、小松（能美郡）村上義明ニ與フ、十一年、豐臣秀吉、盛政ヲ賤嶽ニ破テ之ヲ殺シ、其故地石川加賀二郡ヲ以テ前田利家ニ與ヘ、御山ニ治セシメ、江沼能美二郡ヲ丹羽長秀ニ、大聖寺ヲ溝口秀勝ニ、松任ヲ利家ノ子利長ニ與ヘ秀勝義明ヲシテ長秀ニ屬セシム、十三年、長秀卒シ、子長重立ツ、秀吉二郡ヲ削リ其地ヲ以テ堀秀政及秀勝義明ニ分與ス、既ニシテ利長守山（越中）ニ轉ジ、長重ヲ松任ニ徙ス、慶長二年、秀政ノ子秀治、及秀勝、義明等ヲ越後ニ轉封シ、長重ヲ小松ニ、山口宗永ヲ大聖寺ニ封ジ、自餘皆利家ニ加賜ス、利家卒シテ子利長嗣グ、關原ノ役、宗永長重西軍ニ應ズ、利長宗永ヲ滅シ、長重ニ諭シ

加賀　金澤　三六度三四分三〇秒　宮越町　三六度三六分〇〇秒○中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒○中略　加賀　金澤　東〇度五七分〇〇秒

疆域

〔三州志來因概覽五加賀國郡鄕來因〕凡ソ加賀ハ、邊海ノ國ニシテ、○中略西面ハ江沼、能美、石川、河北四郡トモニ海ニ極リ、北ハ能州羽咋ニ接壤シ、南ノ方江沼能美ノ二郡ハ南越ニ隣リテ、犬牙相錯ハリ、東ノ方石川、河北ノ二郡ハ、越中ノ礪波郡ニ錯ハッテ、比境所謂繡ノ如シ、赤水嶺ノ日本圖ニハ、東方白山介飛驒州ニ鄕ル、

〔日本地誌提要三十八加賀〕疆域　西南ハ越前、東ハ飛驒越中、北ハ能登、西北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾里、南北凡壹拾八里、

地勢

〔易林本節用集下〕加賀加州、上、管四郡、東西二日半、地冷酢醴酒漿久澄、五穀絹帛夥、中上國也、

〔日本地誌提要三十八加賀〕形勢　白山其南隅ニ聳エ、山脉左右ニ分走シテ、二越飛驒三州ニ連ル、河水概子源ヲ茲ニ發シ、北流シテ海ニ注ク、時令不調、物產豐饒ナラズ、風俗優柔ニシテ偏執ヲ免レズ、

道路

〔三州志來因概覽五加賀國郡鄕來因〕越前國界ヨリ、越中國界河北郡俱利伽羅マデ、道程凡十有九里三十五町五十二間アリ、按ルニ、何間ト云コトハ、本匠家ノ語也、即チ陶淵明詩ニ、草屋八九間、杜子美詩ニ、安得廣廈千萬間ナド是也、宮室ノ制ニ、五架三間、七架五間ト云コトアリ、柱ト柱トノ間ヲ一間トス、四柱アレバ其間三間也、度量衡書ニ、今俗縄一歩爲一間ト云ヨリ相轉シテ、今ハ道程ヲ積ルニモ、何間ト云、越前國界ヨリ江沼郡橋村マデ十六町四十間、橋村ヨリ大聖寺村マデ一里九町、大聖寺村ヨリ菅生村マデ三町、菅生村ヨリ敷地村マデ十五町、敷地村ヨリ作見村マデ十四町二十四間、作見村ヨリ八日市村マデ十町四十八間、八日市村ヨリ動橋村マデ十七町二十四間、動橋村ヨリ高塚村マデ十三町四十八間、高塚村ヨリ月津村マデ二十一町三十六間、月津村ヨリ能美郡今江村マデ一里二町二十四間、今江村ヨリ小松町マデ二十八町四十八間、小松町ヨリ寺井村マデ一里二十二町、寺井村ヨリ粟生村マデ二十四町、粟生村ヨリ石川郡水島村マデ二十七町、水島村ヨリ源兵衛島村マデ三町、源兵衛島村ヨリ荒屋柏野村マデ二十町二十四間、荒屋柏野村ヨリ下柏野村マデ一里四町八間、下柏野村ヨリ松任町[illegible]六町、松任町ヨリ野々市村マデ一里四町四十八間、野々市村ヨリ泉村マデ三十間、泉村[illegible]野町[illegible]城

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕加賀（弘仁十四年、割越前國置之、）

〔饅頭屋本節用集天地〕加賀（カガ）賀州

〔日本風土記一寄語島名〕加賀（カンキア）

〔倭訓栞前編六か〕かゞ　明らかなる事をいへり、赫ノ字の意也、出雲風土記に、光加賀、明也とみえたり、○中略詞花集に、加賀國をよろこびぞくはふとよめり、もと山を負ひ海に向ひて、前うちひらきたる國なれば、風土記の意なるにや、

〔諸國名義考下〕加賀

和名抄に加賀、（國府在能美郡、）名義は日本紀略に加賀國云々、以地廣人多也とあるを思へば、赫（カヾ）の國なるべし、うちひらけたる地なればなり、又思ふに、今も此國より鏡磨師（カヾミシ）あまた出るなり、鏡をも加賀といへり、大和國城下郡鏡作を加々美都久利といへる例あり、或書に、四時因有雲、以加賀故稱加賀也といふは、字になづみたる妄言なり、○中略立入信友云、舊事本紀に、伊勢幡主女賀具呂姫云々、豐受大神宮禰宜補任に、大若子命、一名大幡主命、越國荒振凶賊阿彦有（天）不從皇化、取平（[illegible]）云々とあるを思へば、延喜神名式に、加賀ノ國能美郡幡生（ハタフ）神社とあるは、幡主（ハタヌシ）の誤にて、加賀は賀具呂より負し名なるべし、國造本紀に、加我國の次に加宜國あり、次に江沼國あり、かゝれば主と生と、又具字と宜字とは似たる字体なり、いづれか一字誤ならむといへり、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度（附里程）

加賀金澤（尾張町）極高三十六度三十四分半、經度東五十七分半、從東都（同上、○中山道自本郷ヶ原邸二本木及足田、家敷實）一百六十八里一町二十二間半、

中山道（追分驛ニ善光寺ヘ至今町沿海）一百四十二里一十六町一十二間半

〔日本經緯度實測〕北極出地

〔續日本紀 二十六 淳仁〕天平神護元年三月丙申、勅、〈○中略〉伊勢、美濃、越前者、是守關之國也、宜其關國百姓、及餘國有力之人、不可以充王臣資人、如有違犯、國司資人同科違勅之罪、

〔令義解 五 軍防〕凡置關應守固者、〈註略〉並置配兵士、分番上下、其三關者、〈謂伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛發等是也、〉設鼓吹軍器、國司分當守固、〈○下略〉

〔延喜式 五十 雜〕凡越前國松原客館、令氣比神宮司撿挍、

〔太平記 三十九〕神木入洛事附洛中變異事

尾張修理大夫入道道朝ハ、〈○中略〉去程ニ、越前國ハ多年ノ守護ニテ、一國ノ寺社本所領ヲ半濟シテ家人共ニゾ分行ケル、

〔梧窻漫筆拾遺〕越前は不吉なる國なり、義貞北國に入りて、遂に滅び給へり、元龜に朝倉、信長公と雄を爭ひて滅びたり、天正に柴田秀吉公と雄を爭ひて滅びたり、不勝之國〈左傳〉と云ふべし、

加賀國

加賀國ハ、カガノクニト云フ、北陸道ニ在リテ、嵯峨天皇弘仁十四年二月、越前國江沼加賀二郡ヲ割キテ建ツル所ナリ、東ハ飛驒、越中、西南ハ越前、北ハ能登ニ界シ西北ハ海ニ面セリ、東西凡ソ十里、南北凡ソ十八里、其地勢ハ、東方山嶽連亘シ、西北スルニ随ヒ、漸ク平野ヲ開キ國形殆ド三角狀ヲ成セリ、此國ハ古ヘ國府ヲ能美郡ニ置キ、江沼、能美、加賀、石川ノ四郡ヲ管ス、能美ハ江沼ヲ割キ、石川ハ加賀ヲ分チテ置キタル所ニシテ、共ニ弘仁十四年六月ノ事トス、延喜ノ制、中國ニ列ス、後世加賀郡ヲ河北郡ト改稱ス、明治維新ノ後、新ニ金澤市ヲ設ケテ石川縣ヲシテ一市四郡ヲ治セシム、

いの海よそにはあらじあしのはのみだれてみゆるあまのつりふね

越の中山　有乳山よりうしとらにあたりて、木の目峠とて大山を越て、越前の府へ出るなり、是を中山といふ也、東へ行は鹿蒜山といふあり、

かりがねは歸山にや迷ふらん越の中山霞へだて、

鹿蒜山　此山は西東へ巡し、海道は南の峯也、

かへる山ありとは聞どはる霞立別なばこひしかるべし

五幡山　歸る山の近邊也、新古今別の歌に、伊勢、

忘れなん世にも越路の歸る山いつはた人は逢んとすらん

鶯原　歸山の峯也、美濃國にも同名有、

鶯の鳴つることゑにしきゝれて行もやられぬ關の原かな

淺水橋　黒戸の橋　世俗にあさう津といふ所也、此所より福井へ二里あり、

あさむつの橋は忍びて渡れどもとゞろとゞろと鳴ぞわびしき

たれぞこのね覺て聞ばあさむつの黒戸の橋をふみとゞろかす

玉江　あさう津といふ所に江川あり、是を玉江といふといへり、津の國に同名有、

玉江こぐあしかり小舟さし分てたれを誰とかわれはさだめん

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　越前國一百人〇中略

諸國器仗〇中略　越前國甲四領、横刀十口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔續日本紀五元明〕和銅五年七月壬午、令〇中略越前〇中略等二十一國、始織綾錦、

〔續日本紀八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、令〇中略越前國守正五位下多治比眞人廣成、管能登越中、越後三國、

風俗

〔人國記〕越前國
越前之國ノ風俗、日本ニ無雙智惡國ト覺タリ、是上臈ヨリ下臈ニ至マデ、他ノ國ニ分ツ而見ル時、如此之辨舌、尾州ニモ劣ルマジキ國ナリ、サルニ仍テ、高慢ニシテ底意地惡敷、輕薄ニ有之、一旦賴母敷ヤウニテ語ル處ツレナク、譬バ人ヲ過メ走リ入テ賴ム時ハ、心安ク請合テ、詮議頻リ成時ハツレナク突放シ、或ハ旅人之渡リニ舟ヲ求レバ、アタイノ甲乙ニテ舟ヲ不渡、亦ハ執行者ナ宿ヲ求ルニモ、餘國ニ違テ萬事ツレナク、如此成作法百人ニ四五十如此ナリ、智有テ智ヲ發ツ而諸事ニ闇キ事ナク辨ズルヲ本智トス、是國ノ人ハ智有テ邪智ヲ、クレテ義スクナシ、

名所

〔日本鹿子十〕同前〇越國名所之部
有乳山(アラチヤマ)　海津の宿より一里北のかたなり、京より丑寅にあたる也、
雲かゝる有乳の山をかりがねの霧にまどひていかゞまつらん
矢田野(ヤタノ)　廣野(ヒロノ)　大野(オホノ)　有乳山の北に道の口といふ宿有、それより北へ一里ばかり行ば矢田野なり、敦賀の津へ出れば、いづれも西のかた也、新古今冬の歌に、人丸、
矢田の野にあさぢ色付あらち山みねのあは雪寒くぞあるらし
阿鮁師の里(アキシ)　あらち山の西一里計行て此里有、河内の國にも同名あり、
あらち山雲げの空に成ぬれば阿鮁師の里に霰ふりつゝ
角鹿山(ツルカ)　浦濱有之、あらち山の北也、道の口より寅のかたへ行は越前の府へ行也、つるがは北へ行也、世俗に、つるがの津と云也、當津氣比の明神の社あり、社西むき也、山は東にあり、
梓弓つるがの山を春越てかへりし雁は今ぞなくなる
笥飯海(ケイノウミ)　角鹿の浦濱をいふ也、つるがに氣比明神の社あり、仲哀天皇此所に幸の時、行宮をたてて笥飯の宮といふといへり、しかしより此所の浦濱を、氣比の海と總名をよびけるといへり、け

人口

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也、(中略)宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂(中略)越前綿、

〔毛吹草三〕越前

黃蓮　鉛　奉書　鳥子雲紙　薄樣厚紙　連尺(レンジヤク)　牛頸布　割綿布　鳥布　苧屑頭巾　蒲脚巾(ハバキ)

猿　絹　肱綿　北庄切石　常慶寺砥　中會福轡　金澤鐙　戸口網代龍履　塗笠　敦賀小

荷駄　疋田飴　三久還鎬　鮭　鰆　鱁(アラ)　蒸鰈(ムシガレイ)　老海鼠(ホヤ)　大鮪　丸岡素麪　大野酒　ダマノ

油木(當國ニ多作之)

〔日本書紀八仲哀〕元年閏十一月戊午、越國貢白鳥四隻、於是送鳥使人宿菟道河邊、時蘆髮蒲見別王、視其白鳥而問之曰、何處將去白鳥也、越人答曰、天皇戀父王而將養狎、故貢之、(下略)

〔日本書紀三十持統〕六年九月癸丑、越前國司獻白蛾、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年九月癸卯、越前國獻赤烏、

〔續日本紀九元正〕養老六年九月庚寅、令(中略)越前(中略)等國始輸役錢、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年正月庚子朔、越前國獻白烏、

〔官中秘策四〕越前國　拾貳郡(中略)

一人數三拾四万八千五拾貳人　內　拾七万八千三百拾六人　男／拾六万九千七百三拾六人　女

〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調(文化元甲子年)(中略)

御料私領

一人數三拾五万四千三拾八人　高六拾八万四千貳百七拾壹石餘　越前國

內　拾八万三千百七拾壹人　男／拾七万八百六拾七人　女

諸國人數調(弘化三丙午年)(中略)

御料私領

一人數三拾五万三千六百七拾四人　高六拾八万九千三百四石餘　越前國

內　拾七万九千九百九拾四人　男／拾七万三千六百八拾人　女

國産貢獻

〔延喜式民部二十三〕年料舂米〇中略越前國内藏五十石、大炊六百五十四石、糯廿石、〇中略

年料租舂米〇中略越前國一千三百石〇中略

年料別貢雜物〇中略越前國筆五十管、紙麻一百斤、零羊角十五具、甘葛汁一斗、〇中略

諸國貢蘇番次〇中略越前國十五壺六口各大一升、九口各小一升、〇中略右八箇國爲第三番〔卯酉年〕〇中略

交易雜物〇中略越前國絹二百六十二疋、履料牛皮六張、漆一石五斗、黑葛廿斤、

〔延喜式主計二十四〕越前〇中略右廿五國中綵〇中略

越前〇中略右廿九國輸絹〇中略

越前國行程、上七日、下四日、海路六日

調、兩面十疋、九點羅二疋、一窠綾三疋、二窠綾五疋、白絹十疋、帛一百九十疋、緋帛廿疋、橡帛廿五疋、緑帛黃帛各廿疋、絲一百絇、自餘輸絹、庸、韓櫃廿一合、盛漆著綵五合、白木十六合、自餘輸綿米、中男作物、紙、熟麻、麻、紅花、茜、黃檗皮、黑葛、漆、胡麻油、荏油、呉桃子幷油、薑、海藻、雜魚腊、

〔延喜式宮内三十一〕諸國例貢御贄〇中略越前國甘葛煎、椎子、稗海藻、山薑、鮭子、氷頭、背腸、

〔延喜式大膳三十三〕諸國貢進菓子〇中略越前國甘葛煎一斗、薯蕷二擣、薯蕷子二捧、椎子、

〔延喜式木工三十四〕諸國所進雜物〇中略越前國三百斛

庸米千斛〇略註

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥〇中略

越前國十八種 黃連五十七斤、獨活四斤、牛膝十七斤、桔梗六斤、白朮五斤三兩、昌蒲廿六斤、人參十四斤、僕奈四斤、細辛五斤、大黃廿六斤、升麻六斤、夜干廿斤、黃精十二兩、榧子一斗六斤、署預二斗、桃人七升五合、菟絲子四斤、蜀椒二斗七升、

〔延喜式内膳三十九〕年料〇中略越前國穉海藻二擔卜籠別一斗、又二擔別一斗、生鮭三擔十二隻、三度、山薑一斗五升、三度、鮭兒、氷頭、背腸、

舂米料稻壹仟束
粟陸斛料稻壹伯貳拾束
殘捌萬陸仟陸拾束玖把
出擧壹萬參仟貳伯捌拾束
身死人負稻貳仟伍伯陸拾束
殘壹萬漆伯貳拾束

〔東大寺正倉院文書二十七〕江沼郡
天平元年定大税穀貳萬玖仟陸伯玖拾肆斛肆斗伍升參合〇中略
加賀郡
天平元年定大税穀參萬捌仟捌拾斛貳斗伍升肆合貳勺
穎稻貳拾肆萬捌仟陸拾玖束貳把
出擧陸萬參仟參伯漆拾束
身死人負稻壹仟漆伯漆拾肆束
殘陸萬壹仟伍伯玖拾陸束〇中略
以前天平二年收納正税穀并穎稻雜用如件、仍付史生大初位下阿刀造佐美麻呂、申上以解、
天平三年二月廿六日　從八位上行少目林連家田
從四位下行按察使兼守大伴宿禰邑治麿　正七位上行掾勳九等坂合部宿禰豐國
正六位上行介勳十二等大藏伊美吉石村　從七位上行大目勳十二等上師宿禰朝集使
〇按ズルニ、本書ニ載スル所ノ丹生江沼二郡正税ノ詳ナル事ハ、政治部上編正税篇ニ載セタレバ參看スベシ、

敦賀郡
天平元年定大税穀伍仟捌伯伍拾壹斛玖斗參升貳合陸勺〇中略
丹生郡
天平元年定大税穀伍萬伍仟壹伯陸斛肆斗伍升壹合玖勺〇中略
足羽郡
天平元年定大税穀肆萬貳仟捌伯肆拾玖斛參斗肆升貳合貳勺
　穎稻參萬壹仟捌伯捌拾參束伍把
　　出擧壹萬參仟伍伯參拾肆束
　　　身死人負稻壹仟肆伯貳拾貳束
　　　殘壹萬貳仟壹伯壹拾貳束
　　　　利陸仟伍拾陸束
　　并壹萬捌仟壹伯陸拾捌束
　　古稻壹萬捌仟參伯肆拾玖束伍把
　　輸田租穀貳仟壹伯壹拾陸斛柒斗柒升欠去年三百五十斛二斗三升
　　　食封租伍伯陸拾柒斛壹斗伍升三百七十四斛五斗二升、全給二所、一百九十二斛六斗三升、二分之一給四所、
(續々修東大寺正倉院文書第十九帙第八巻背)
坂井郡
天平元年定大税穀貳萬玖仟貳伯伍拾壹斛參斗壹合捌勺
　穎稻捌萬柒仟壹伯捌拾束玖把
　　雜用壹仟壹伯貳拾束

坂井郡　高拾八萬五千百九石貳斗八升三合　三百五拾村

右八郡總高六拾八萬千七百六拾八石五斗八升九合　千五百四拾貳村内浦數六拾五

以上享保十年乙巳五月、右者公儀へ被差出、圖帳に而は無之、御國目付へ被指出歟、

〔日本鹿子十〕越前國、十二郡、大、上々國、南北三日半、知行高六十八万二千六百五十石、

〔官中秘策四〕越前國　拾貳郡〇中略

一石高六拾八万四千貳百七拾壹石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調〇中略

越前國御料私領　一高六拾八万九千三百四石八斗壹升九合八勺七才

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻〇中略

越前國、正税公廨各卌万束、國分寺料三万束、京法華寺料二万束、文殊會料二千束、觀分料六千束、修理池溝料四万束、救急料十二万束、俘囚料一万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕越前國〇中略　管六(中略)正公各四十萬束、本稻百二萬八千束、雜稻二十萬八千束、

〇按ズルニ、延喜式ニ據レバ、雜稻二十二萬八千束ナリ、此ニ本稻百二萬八千束トアルニ合フ、雜稻二十萬八千束、恐ニ二十二萬八千束ニ作ルベシ、

〔東大寺正倉院文書二十七〕(續[illegible])越前國正税帳

越前國大税帳天平三年二月廿六日史生大初位下阿刀造佐美麻呂

穫玖仟漆伯捌斛玖斗肆升

合定大税穀貳拾貳萬漆仟壹伯參拾玖斛漆斗陸升漆合漆勺(穀入斛別一斗、不動穀八万九千七百一十三斛一斗、)

穎稻漆拾壹萬陸仟壹伯玖拾參束伍把

穗玖仟漆伯捌斛玖斗肆升(穀一万九千四百一十七、穀五斗、綿四斗四升、〇中略)

今北東郡　高三萬五千七百八拾四石五斗四升七合　六拾壹村
丹生北郡　高八萬七千五百三石壹斗六升二合　貳百拾三村
足羽南郡　高五萬千四百壹石八斗三升六合　九拾村
足羽北郡　高四萬貳百九拾五石貳斗九升九合　六拾四村
吉田郡　高八萬九百五拾貳石八斗八升六合　百拾九村
坂南郡　高四萬六千六百拾壹石七斗六升　百拾五村
坂北郡　高九萬四千九百三拾貳石貳升九合　貳百貳拾六村
大野郡　高九萬三千五百四拾八石壹斗九升　貳百五拾七村
南條仲郡　高三萬八千百四拾三石六斗九升三合　八拾九村
敦賀郡　高貳萬千三百六拾八石四斗三升壹合　八拾貳村
右拾貳郡　總高六拾八萬三百四拾九石九斗貳升三合　千三百九拾三村
以上正保四年丁亥、右公儀より被仰出有之に付圖帳被指出、

享保圖帳

敦賀郡　高貳萬千五百貳拾八石五斗七合　八拾六村
南條郡　高三萬四千九百九石八斗九升六合貳勺　九拾三村
今立郡　高八萬五千七百九拾八石貳斗六升四合　貳百貳村
丹生郡　高八萬七千六百五拾壹石三斗六合四勺　貳百貳拾九村
足羽郡　高九萬千九百六拾三石六斗貳升八合　百六拾村
吉田郡　高七萬九千貳百貳拾四石　百三拾九村
大野郡　高九萬五千五百拾七石九斗六升六合　貳百八拾三村

〔蒼梧隨筆二〕國郡大小之差異

越中、越後、上國にして、田數大國の越前に倍れるものは、三代格を考るに、嵯峨天皇弘仁十四年二月三日、越前の國江沼加賀二郡を割て爲加賀とあれば、本より加賀は越前の中なれば、此二國を合せ計れば、越前の田數凡二萬五千六十六町となりて、越中、越後にすぐれるものなり、

〔伊呂波字類抄國郡部〕越前國　本田二万三千五百七十六町〆〇拾芥國之

〔海東諸國記〕越前州　郡六、水田一萬七千八百三十九町五段、

〔越前國名蹟考首總括上〕上世租稅幷國司給分

和名抄に載る所の田數萬二千六十六町を、上中下、下々の品を論せず、殘らず中田として積りみれば、二十四万千三百二十石なり、〇中略當國は總高四拾九萬石なりしを、秀吉公の時改て今六十八万石餘なりと云事、四王天周信國主記の初めに記せり、何の據ある事を知らざれ共、四王天氏は此國の故家なれば、浮華の言にはあるべからず、因て思ふに、當國兩度の繩入にて、今の高となれる由、俗間に云傳ふ由、慶長繩入の法を押返して見る時は、そのかみ二十七万石餘にてもあらんか、又近代の書記に、當國の田數二万三千五百七十六町と載たるを、諸國の例にて推す時は、二十三万五千七百六十石となり、五町百石に積る時は、四十七万千五百二十石なり、尤少々町段の增減もあるべきなれども、大概の數は遠からずといふべし、さらば昔は二十万石餘にして、中頃繩入ありて四十万石餘となり、豐臣氏の時再び繩入有て、今の高六十八万石餘となれるなるべし、右二十万石餘を四十万石餘とせしは、柴田氏治國の比にもあらむ歟、

〔越前國名蹟考首總括下〕近世郡村高帳　正保國帳

今南東郡　高壹萬三千三百拾五石七斗四升六合　六拾二村

今南西郡　高三萬三千七百七拾四石壹斗壹合　四拾貳村

藩封　田畝石高

越前國略〇中藤島保、以庄狀寄平泉寺略〇中

文治六年四月十九日

〔吾妻鏡二十〕建暦二年正月十一日庚申、御弓始也、略〇中先召小國源兵衛三郎賴継、是無雙精兵也、而不帶弓由申之間、被下鎮西以下諸國進納之莵木弓等賜之、一五度射之處、毎度其弦絶訖、射藝又頗可謂養由、將軍家御感之餘、於當座賜越前國稲津保地頭職於賴継、件御下文云、爲弦麻可令知行者、

此賴継者、丹後守源賴行孫、桃園兵衛大夫宗賴子也、

〔慶應元年武鑑〕松平越前守茂昭大廊下　正四位上少將　三拾二万石　在城越前足羽郡福井江戸ヨリ東海道百卅里、東山道百卅七里、北陸道百四十五里餘、

慶長六、越前中納言秀康領、以後代々領之、

有馬遠江守道純帝鑑間　四品　五万石　居城越前坂井郡丸岡江戸ヨリ東海道百三十四里、東山道百四十三里餘、

慶長五、本多飛驒守成重、同淡路守重能、同飛驒守重昭、同飛驒守重益、元祿八、有馬左衛門佐清純、以後領之、

土井能登守利口雁間　從五位上　四万石　居城越前大野郡大野江戸ヨリ東海道百四十一里、中山道百四十九里、北陸道百五十一里、

織田家大野宰相居、元和九、松平出羽守直政、寛永十、松平大和守直基、正保元、松平但馬守直良、同若狹守直明、天和二、土井能登守利房、以後代々領之、

間部下總守詮道雁間　朝散大夫　四万石　居城越前今立郡鯖江江戸ヨリ百三十四里

享保五ヨリ間部氏領之、〇節略

〔慶應元年武鑑〕小笠原左衛門佐長守帝鑑間　朝散大夫　二万二千七百七十七石　居城越前大野郡勝山江戸ヨリ東海道百四十四里、北陸道百四十九リ卅丁、木曾路百卅四リ十三丁、

當國者慶長六ヨリ越前中納言秀康卿、同宰相忠昌領、同少將光長持、元祿四小笠原土佐守貞信、以後領之、

酒井飛驒守忠毗雁間　從五位下　一万石　居城越前敦賀郡敦賀陣江戸ヨリ百卅四里〇節略

〔倭名類聚抄五國郡〕越前國略〇　註管六田萬二千六十六町

也、恐々謹言、

七月〇康永元年十七日　慶俊判

三村藏人大夫殿

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合〇中略

五貫文　南都東北院內領〇越前國木田庄〇段錢〇中略　九貫文〇中略　鴨御社領〇越前國志津庄〇段錢

〔越前國名蹟考〕五足羽郡　福〇井〇庄〇十村

福井、當久居、當社莊北之故、此錯曰北莊〇足羽社記　素良按するに、昔は北〇庄〇と稱す、寬永元年甲子七月十九日、宰相忠昌公御入部の砌より福井と改らる、福井は、もと足羽神殿にまします所、五座の神の其一座にして、古訓はサクヰ、祝詞式などには柴井とも書きたり、然れども俗間にて訓みやすきに從ひフクヰと唱ふ、今御本城天守臺の上に、福井と云名水あり、是則神名に據て名付るなるべし、此井の在所、御本丸となれるより、地名も福井と改められし事ならむ、

〔當宮緣事抄〕左辨官下　石清水八幡宮并宿院極樂寺

應永停止宮寺并極樂寺庄園領家預所下司公文等、或號有先祖讓狀、或稱相傳文書、致與論、企掠領、兼又有由緒輩、令傳領子孫斷絕處々付本所事、

宮寺領〇中略　越前國　道〇田〇保〇　近來相傳橫越〇保〇〇中略

保元三年十二月三日　大史小槻宿禰〇在判下略

〔吾妻鏡十〕文治六年四月十九日壬寅、造大神宮役夫工米、地頭未濟事、頻有職事奉書、神宮使又參訴之間、可致不日沙汰之旨、下知給於有子細所々者、今日令注進京都給、因州并豊時、俊象等奉行之、其狀云、

內宮役夫大工作料未濟處敗所々事〇中略

云々、不慮御事、可謂珍重、

〔龜山院御凶事記〕嘉元三年九月廿三日丁卯、依可分進故院御書、早旦著直衣、(烏帽)相具御書、御手箱□□□(存日予預置也)參御所、(○中略)女院御方自餘御書等(箱有御封、以檀紙被立文、之押折上下、又有銘等、)悉盛筥蓋、(○中略)

一通(銘日四殿准后○註略)

准后　高倉殿(號西殿)

讃岐國宅間鄕　越前國酒井庄　西谷庄

これら御分にて候、後には尊治の親王にまいらせられ候べく候、

嘉元三年七月廿六日　　御判

〔圓覺寺文書一〕當寺領越前國山本莊、如元知行不可有相違者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年二月二十六日　　左衛門權佐(○同範國略)

圓覺寺長老禪室

〔大乘院記錄(建武應永引付)〕春日御社領亂入河口御莊致惡行狼藉交名人事

一上御使　熊谷　片山兵庫助　子息孫次郎(○中略)

右大概注進之狀如件

建武二年正月二十六日

〔太平記三十九〕神木御歸座事

大夫入道道朝都ヲ落テ後、越前國河口庄南都ニ被返付シカバ、神訴忽ニ落居シテ、八月(○貞治四年)十二日神木御歸座アリ、

〔雜々聞書〕牛原領家職事

土岐殿狀案

越前國牛原庄領家職事、被下御雜掌候、任先例所務無相違樣、可令計申給候、更不可有等閑由所候

當時彼保所當〈○此損〉七百餘石内也、〈○中略〉

一氣比庄作田四十三町四十歩内　承元三年實撿定

除四丁八段〈○中略〉

殘三十九町二段四十歩内

大佃二丁所當米三十四石〈除三種子　斗定〉　小佃一丁所當米十七石

定田三十六丁二段四十歩〈○中略〉

建暦二年九月日　　勾當彙金宮祝散位角鹿〈○下略〉

〔東寺百合文書イ一之二十四〕七條院在御判

修明門院御處分御所庄々等〈○中略〉

越前國織田庄〈法花堂領大自社〉　柚山庄　毛戸岡庄　菅原堀原庄

安貞二年八月五日　七條院　在御判

すめいもん

〔古文書類纂上處分状〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分状

總處分　條々事〈○中略〉

一家地文書庄園事〈○中略〉　侍從殿〈○中略〉　新御領〈○中略〉　越前國足羽御厨　鯖江庄〈○中略〉　前攝政

〈○中略〉　新御領〈○中略〉　越前國美賀野部庄〈○中略〉　佐々木女房讓進所々〈○中略〉　越前國河和田新庄

東鄕庄〈○中略〉

建長二年十一月　日　　愚老〈在御判〉

〔勘仲記〕弘安四年閏七月八日辛未、參殿下、次參近衞殿、〈基平〉今夕前殿御方姬君、〈予(藤原兼仲)養君〉密有御出家之儀、〈○中略〉御息所御領越前國坂北庄、自關東進本院、此御領本家長講堂領也、年來被進御年貢與爲

爲武士被押妨事也、所謂越前國北條殿眼代越後介高成、妨國務、般若野庄藤內朝宗、灘高庄藤內遠景、大島庄土肥次郎實平、三上庄佐々木三郎秀能、各或三年、或一兩年、煩所務、抑乃貢云々、二品殊令驚給、遂可止妨之由、面々可被仰含之由云々、

〔西大寺文書一〕注進　西大寺所領諸庄園現存日記事〇中略

一 顛倒庄々〇中略　越前國　坂井郡赤江庄、百六十八町三段百八十歩、〇中略

右依宣旨注進如件、

建久二年五月十九日〇署名略

〔吾妻鏡十四〕建久五年十二月十日丙寅、越前國志比庄、爲比企藤內朝宗被押領之由、有領家之訴、

〔東寺百合古文書一ノ四〕最勝光院領越前國志比庄寺用綿事、任本員數千兩可致其沙汰之由、致仰給□□可致存知之旨天氣所也、仍執達如件、

嘉曆元年十月五日　右中辨資治

修理別當法印御房

〔東寺文書射一之十二〕雜訴決斷所牒　最勝光院當院所司申、越前國志比莊寺用闕怠事

牒、入道彈正親王家〇中略　家雜掌寺用闕怠事、可究濟之由、雖被下御牒、雜掌尚不叙用之上者、任正中二年十二月三十日綸旨、地頭可直納寺用於院家之由、被仰下者、仍牒如件、以牒、

建武元年十一月十一日　左衛門尉平花押〇下略

〔氣比宮社傳舊記上〕氣比太神宮政所　注進御神領作田所當米已下所出物事總目錄事〇中略

別沙汰并押領對捍所々

一 長田小森保、當國(總論)丹生郡內

件保御封米二百十石七斗三升、相庸代米七百五十石代、被便補保也、定米三百五十一石五斗、雖然

其內〇中略

越前國桑岡尾箕所庄、卅五町八段二百九十六步、〇中略八町

右右馬寮、並准上條、

〔東大寺小櫃文書下〕東大寺越前國庄庄券等道守、鯖田、糞置庄、寺領、　一通　天曆五年

足羽郡牒　東大寺諸庄收納使衙

來牒、壹紙〇此閒闕 載寺家所領道守、鯖田、糞置等庄田、可勘徵事、送狀、〇中略

今任來牒狀、撿案內、道守、鯖庄田、雖在條里、本自或荒野、或原澤、更□□寄作人糞置庄田、□所不聞也、

仍牒送如件、乞也察狀、今勒狀以牒、

天曆五年十月廿三日

〔東大寺要錄六〕一諸國諸庄田地〇長保四年注文定中略

越前國　七百卅町八段六十七步

丹生郡椿原庄田五十町　足羽郡道守庄田三百廿六町二段五步　同郡鯖庄田百町九段二百八十八步　同郡糞置庄田十五町八段二百六十步　坂井郡富大庄田卅七町七段四十步　同郡富小庄田卅七町一段百八十步　同郡鯖田庄十七町四段二百九十步

同郡小榛庄田四十七町四段四十步　同郡溝江庄田百町

右件庄々田地、以荒廢地子不登、〇中略

別功德分庄〇中略

越前國　坂井郡田宮庄田五十三町七段三百廿六步五月三日條遺料〇中略

右唐國庄家田地目錄如件

〔吾妻鏡六〕文治二年六月十七日癸亥、梶原刑部丞朝景、自京都遣使者、執申內大臣家所領事、是家領等、

越前國司判

合高串𦲷原玖町參段伯肆拾肆歩東串方江南堺本泉○中略

天平寶字八年二月九日　　　正七位下行大目王叙忠

〔東大寺小櫃文書下〕江沼郡幡生庄使解　申百姓等障溝事

野川溝二通常田開時溝者

荒廢田十三町東北十五條田既荒者

以前溝障不漑、依玆件田荒廢、仍具口狀申送、謹解、

天平神護二年十月七日　　　庄司僧慚敬

　　　　　　　　　　　　　僧行珣

〔東大寺小櫃文書下〕坂井郡溝江庄所使解　申請溝所事

合應堀溝六百一十五丈、廣六尺深三尺應受坂井郡五百、○中略

以前、溝所請如件、仍注具狀申送、謹解、

天平神護二年十月八日　　　佃使僧慚敬

　　　　　　　　　　　　　僧行珣

〔東大寺小櫃文書下〕坂井郡子見庄使解　申可堀溝地事○中略

右應堀溝地、注顯如件、仍注事狀以解、

天平神護二年十月九日　　　僧集福

　　　　　　　　　　　　　僧花嚴

〔延喜式四十八左右馬〕越前國少名庄卌五町八段二百九十六歩佃十町○中略

右左馬寮、毎年依件營種、自餘皆收地子、以充秣料及雜用、其遠國地子者、交易輕物、送寮、運功便割、

良宮御宇大八島國白壁天皇〈光仁〉〇世、寶龜元年庚戌冬十二月廿三日之夜、夢見從大和國斑鳩聖德王宮前之路、指東而行、〇中略林佇看之、於草中有太族肥女、裸衣而踞、兩乳腫大、如竈戶垂、自乳流膿、〇中略林問、汝何女、答、我有越前國加賀郡大野鄉畝田村之横江臣成人之母也、〇下略

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合

九百六十三文　妙法院御門跡領〈越前國段錢　圓寶村〉　六百五十文　妙法院御門跡領〈越前國段錢　清永村〉

百七十五文　妙法院御門跡領〈越前國段錢　畢野庄野村〉　一貫四百文　妙法院領〈越前國段錢〇中略　加賀津村〉

八百九拾二文　妙法院御領〈越前國段錢〇中略　江尾村〉　三貫文　妙法院御領〈越前國段錢〇中略　內郡村〉

〔越前國名蹟考〈敦賀郡〉一〕氣比庄

津内町〈ツヌカ　敦賀〉　小濱領　高千三百石四斗壹升八合、〈寬文〇中略〉家數都合貳千貳百九拾四軒〈但三千軒餘有之由〉

外に奉公人屋敷寺社、　東西十三町、南北六町半ばかり、〈元祿國繪圖、東西十五町三十間、南北六町廿間、〉

〔延喜式〈主税〉二十六〕諸國運漕雜物功賃〈〇中略〉

越前國〈〇中略〉海路〈自比樂湊漕敦賀津船賃、石別稻七把、〇中略自敦賀津運鹽津駄賃、米一斗六升、〉

〔兼信朝臣集〈上〉〕つぎの日もくれぬればつるがといふところにとまりしに、うかれめどもあつまりて、歌うたひなどせしに、心ぼそさも、すこしなぐさみて、

わすられぬみやこもけふぞ忘れぬるきみゆゑとてはこしおならねど

〔東大寺小櫃文書〈下〉〕東大寺越前國桑原庄券〈雜文書〉

越前國使等解　申桑原庄所應堀開溝并度樋等事

合參處〈〇中略〉

天平寶字元年十一月十二日　坂井郡散仕阿刀僧

〔東大寺小櫃文書〈下〉〕東大寺越前國高串庄券〈圖〉　天平寶字八年

遣使聘于三國坂中井、中此云那納以爲妃、遂産天皇、天皇幼年父王薨、振媛迺歎曰、妾今遠離桑梓、安能得膝養、余歸寧高向、高向者越前國邑名奉養天皇、

〔古事記中應神〕此品陀天皇之御子、若野毛二俣王、娶其母弟百師木伊呂辨、亦名弟日賣眞若比賣命、生子、大郎子、亦名意富富杼王、中略故意富富杼王者、三國君(中略)等之祖也

〔古事記傳三十四〕三國君は、地名に因れり、續紀卅五に、越前國坂井郡三國湊、今世にもかくれなき地なり神名帳に、同郡三國神社もあり、此地なり、中略三國は繼體天皇の御母の本郷にて、其天皇の成長坐し地なり、

〔東大寺小櫃文書下〕足羽郡司解　申應堀開東大寺溝事、

合貳處

一道守村田爲溉應堀溝長一千七百卅一丈従三國口至于寒江者、中略

右受生江川水、従三重田神社北、應堀開如件、

一鳴野村田爲溉應堀溝長三百丈中略

右受足羽堰水、應堀開如件、中略

天平神護二年十月十日

〔東大寺小櫃文書下〕東大寺越前國庄庄立劵本主注文丹生足羽坂井三郡　天平神護二年

丹生郡　椿原村　水成村　足羽郡　糞置村　栗川村　道守村　鳴野村　坂井郡　子見村　串方村　田宮村

天平神護二年十月廿一日

〔日本靈異記下〕女人濫嫁、飢子乳、故得現報縁第十六

紀伊國名草郡能應里之人寂林法師、離之國家、經之他國、修法求道而至、加賀郡畝田村、還年止住、奈

牒、爲孔明子細、度々雖被下牒、更不叙用、彌致濫妨狼藉云々、然者太濫吹也、相催近隣地頭等、可被召進交名人之由、至下地者、可爲院家管領者、仍牒送如件、以牒、

建武元年十二月二十日　左衞門尉平判

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合〇中略

壹貫文〇中略　伊勢左京亮殿　越前國三〇國〇湊段錢

拾貫文〇中略　長井因幡守殿　越前國得〇郷〇郷段錢

村里名邑

〔郡名一覽〕一越前國御料私領　越州　南北三日半　八郡

高六拾八萬四千貳百七拾壹石八斗九合六勺　千五百四拾壹ヶ村

●福井　東海道百三十里　東山道百三十七里　北陸道百四十五里　●松岡　百三十八里　福井ノ枝

●大野　東海道百四十一里　東山道百四十九里　●勝山　東海道百四十四里　東山道百三十四里　●丸岡　東海道百三十里　東山道百四十三里　●西鯖江　百三十四里

○敦賀　百二十四里　距山城　)(○府中　福井　二万五千石　本多內藏助　又白崎　百廿四里　金森左京

△本保　百三十四里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕越前御料私領　八郡、千五百三十三村、

高六十八万九千三百四石八斗一升九合八勺七才

足羽郡百六十村　吉田郡百三十九村　丹生郡二百二十九村　今立郡二百二村

南條郡九十二村　坂井郡三百四十九村　大野郡二百七十六村　敦賀郡八十六村

〔地勢提要抄〕郡邑島嶼奇名

越前　敦賀郡樫間村、山泉村、小河村、杉津村、池太郎村、田結城村、大梓村、和布浦、赤崎浦、大味浦、來納津村、小尉村、吉田郡上伏村、

〔日本書紀十七繼體〕男大迹天皇、〇中略繼體、天皇父聞振媛顏容姝妙、甚有嫕色、自近江國高島郡三尾之別業、

右、件田直稻、依員請前如、仍狀注、謹以解、

天平神護三年二月廿二日　　秦前乡麻口〇中略

中。野。鄉。戶主物部古麻呂解　申請墾田直事

合田肆段貳伯玖拾肆步之中〔荒一段七十八步 得三段二百十六步〕　請直稻玖拾柒束

西北一條十寒江里廿六寒江田分北一段二百八十八步　廿七寒江田分中二段七十八步之中〔荒一段七十八步 得一段〕　卌五寒江田分西二百八十八步

右件田直稻、依員所請已畢、仍注事狀申上、謹解、

天平神護三年二月廿二日　　田主物部古麻〇中略

草。原。鄉。戶主酒部牛養戶口同戶口酒部小國解　申請墾田直事

合墾田參段　直稻柒拾貳束

西北一條十一上味岡里十三味岡田三段

右田直稻依員請已畢、仍注事狀申上、謹解、

天平神護三年二月廿二日　　酒部小國〇中略

岡。本。鄉。戶主秦田多比女戶口道守息虫女解　申進上墾田事

合肆段參拾捌步之中〔荒三百步 得三段九十八步〕　請直稻八十五束

西北一條十一上味岡里廿一味岡田分西三百步〔已荒〕　廿三川相田分西三段九十八步

天平神護三年三月二日　　田主道守臣息虫女

〔元亨釋書十五方應〕釋泰澄、姓三神氏、越之前州麻。生。津。人、〇下略

〔大乘院記錄寬武應永引付〕雜訴決斷所牒　越前國衙、大乘院雜掌申、春日社三十講料所當國坪。江。鄉。名主等、抑留供料以下布施物事、〔副訴狀具書〕

足羽郡　安味(安美)　額田(奴加太)　足羽(安須波)　草原(久佐波良)　少名(須久奈)　江上(衣加美)　井手(井天)　中野、岡本(乎加毛止)　江沼
大野郡　野田(乃多)　上家(加美豆以倍)　川合(加波比)　利刈(止加利)　毛屋　加美　資母　出水　大山(於保也末)　○高山(多加也美)
〔按、東西有二大野郡二、〕
坂井郡　粟田(安波多)　荒泊　高向(多加牟古)　磯部　長畝(奈加宇祢)　高屋(多加也)　坪江(都保江)　福留(布久留)　海部(安末)　川口
加納(久加)　堀江(保里江)　餘戸
〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字六年四月壬申、以越前國江沼郡山背郷戸五十烟施入岡寺、
〔東大寺小櫃文書下〕東大寺越前國庄庄券(道守、鴫川、國郡解、)　天平神護二年
足羽郡司解　申伏辨百姓□
合開田參町□　溝二尺已下一尺五寸已上□廣□尺
右、野田郷戸主額田國依申云、以去天平十六年□堀開如件、(中略)
天□神護二年九月十□□　伏辨額田國依(下略)
〔東大寺小櫃文書下〕足羽郡司解　申伏辨人事
道守男食(江下郡、足羽郡、戸主)
合田伍段貳伯漆拾貳歩(四北一條十一上味□才□)
右人申云、件田所奏如寺圖、伏辨□件者、郡依申状、牧伏辨手實状、申上謹解、
□　伏辨道守男食(下略)
〔東大寺小櫃文書下〕東大寺越前國庄庄券(道守、鴫野、鯖川、子見、津江、幡生庄等、庄解、郡解、)　天平神護二三
上家郷戸主野於寶多戸口秦前多麿解　申請墾田直事
合八段八十二歩　直稻二百卌四東八把
西北一條十一上味岡里　五味岡田五段百九十六歩　六味岡田二段二百卌六歩

加賀郡

郷

〔越前國名蹟考七吉田郡〕案ずるに、〇中略何れの比にか、當國六郡を分て十二郡とせし時、足羽郡を割て、此郡を置しものなるべし、されば太平記には、今の吉田郡の内をも、押なべて足羽とのみ記したり、扨吉田郡の郡號は何に依て名付しと云事、考へ知がたし、又一説には、坂井郡を割て吉田郡を置ともいへり、去ながら、たしかなる證迹を見ず、

〔日本靈異記下〕拍于億持千手呪者、以現得惡死報縁第十四

越前國加賀郡有浮浪人之長、探浮浪人、駈使雜徭、徵乞調庸、于時有京戸小野朝臣庭麿、爲優婆塞、常誦持千手之呪、爲業、展轉彼加賀郡部内之山而修行、神護景雲三年歳次己酉春三月廿七日午時、其長有其郡部内御馬河里、遇行者曰、汝何國人、答我修行者、非俗人也、長嗔嘖言、汝浮浪人、何不輸調、縛打駈徭、猶拒逆之、〇下略

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請加給大學生徒食料事

右臣伏以、治國之道、賢能爲源、〇中略至于天平之代、右大臣吉備朝臣、恢弘道藝、〇中略其後代々下勅、給罪人伴家持、越前國加賀郡沒官田一百餘町、〇中略以充生徒食料、號曰勸學田、〇中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〇按ズルニ、加賀、江沼ノ二郡ハ、弘仁十四年ニ、分立シテ加賀國トナル、

〔倭名類聚抄七越前國〕敦賀郡　神戸　與祥　津守都毛利　伊部　從省〇省、高山寺本作者、　鹿蒜加倍留、〇高山寺本作比、

丹生郡　賀茂　野田乃太　丹生　岡本乎加毛止、〇毛止二字原脫、據高山寺本補、　泉〇高山寺本無此郷、　從省之土、〇高山寺本無此郷、　可知

朝津阿佐布豆　三太

今立郡　芹川世里加波　大屋　酒井佐加井　味眞阿知末　勝戸高山寺本注、以曾倍、　勝部〇高山寺本注、波止利、　中山〇高山寺本注、奈加也末、

船津布奈都　曾博曾波久

大野郡

〔續日本紀 二十六 稱徳〕天平神護元年三月丁未、越前國足羽郡人從五位下益田繩手賜姓益田連、

〔古今類聚越前國志 一 大野郡〕今立、足羽、吉田、坂井四郡ノ東ニアリ、東南飛驒、美濃二國ニ接シ東北加賀國ニ界ス、

〔三代實錄 四十 陽成〕元慶五年七月十七日癸亥、越前國丹生、大野、〇野原作 今改 坂井等郡田地六百一町九段百五十八歩、依天平勝寶元年四月一日詔旨、令興福寺領得、但天平勝寶元年以前爲公田之類、准在四至之内、不熟領之、

坂井郡

〔古今類聚越前國志 一 坂井郡〕吉田郡ノ北ニアリ、東北加賀國ニ接シ、東南大野郡ニ連リ、西南丹生郡ニ界シ、西海ニ至ル、

再按スルニ、倭名抄坂井佐加乃井ト讀ム、日本紀ノ坂中井、舊事紀ノ坂名井皆此ナルベシ、蓋初三國一郷ニシテ後郡名トナリ、反テ三國ヲ管セシナルベシ、〇下略

〔越前國名蹟考 十 坂井郡〕素良按するに、當國中頃十二郡となりし節、當郡を分て坂南郡、坂北郡の二郡とす、寬文四年、八郡に併せられし時より、右の二郡をもとの坂井郡一郡となさる、此郡中三保島に所有の古き寄附狀に、池上郡安島浦と書記、又近年江戸にて當國無宿者の申口を以て、越前國紳田郡三國湊と公儀より御書下げ有し事などは更に論にたらず、〇中略 此郡に昔時池上紳田などの名目ありしとは意得べからず、

〔續日本紀 三十 光仁〕寶龜九年九月癸亥、送高麗使正六位上高麗朝臣殿嗣等、來著越前國坂井郡三國湊、〇下略

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年十一月丙子、以越前國坂井郡荒田廿町、賜基貞親王、

吉田郡

〔古今類聚越前國志 一 吉田郡〕舊坂井郡、後ニ割テ一郡トス、大野郡ノ西ニアリ、南足羽郡ニ界シ、西北坂井郡ニ至ル、

南條郡

〔續日本紀 光仁三十六〕寶龜十一年十二月甲午、越前國丹生郡小虫神爲幣社焉、

〔古今類聚越前國志 南條郡一〕舊丹生郡ナリ、後割テ一郡トス、敦賀郡ノ東北ニアリ、南ハ近江、美濃ニ接シ、東南ハ今立郡ニ界シ、西ハ海ニ際リ、北ハ丹生郡ニ界ス、

〔越前國名蹟考 南條郡三〕案するに、當國もと六郡にして、延喜式、或和名鈔等に、南條郡の名目無レ之、且和名鈔には國府を丹生郡に載たり、後世丹生郡の南を割て、南條郡を置れし時、府はこの郡に屬したれども、今時世上に流布する書に、丹生郡に府を記したるは、和名鈔に本づく故なり、○下略

今立郡　今南西郡　今南東郡　今北東郡

〔古今類聚越前國志 今立郡一〕丹生、南條二郡ノ東ニアリ、東ハ大野ニ界シ、南ハ美濃國冠山ニ接シ、北ハ足羽郡ニ連ル、

〔越前國名蹟考 今立郡四〕案するに、何の比か、當國六郡を割て十二郡とせし時、此郡分て三郡とす、所謂今南西郡、今南東郡、今北東郡是なり、朝倉時代の文書に、此郡號見えたり、寛文四年甲辰五月、一國八郡と成し節、三郡併せて今立一郡に復す、

〔日本紀略 淳和〕弘仁十四年六月丁亥、越前國言上、丹生郡管鄕十八驛三、割九鄕一驛、更建一郡、號今立郡、○中略以地廣人多也、

〔三代實錄 清和十三〕貞觀八年八月七日己卯、越前國今立郡大領外正六位上生江臣氏緒、授借外從五位下、以獻稻十萬束充公用也、

足羽郡

〔古今類聚越前國志 足羽郡一〕今立郡ノ北ニアリ、東ハ大野郡、西ハ丹生郡、北ハ吉田郡ニ界ス、本國ノ中央ナリ、

〔越前國名蹟考 足羽郡五〕案するに、當國中頃十二郡となれる時、此郡も南北二郡となれり、寛文四年甲辰、御領知御判物八郡となりし節より、併て一郡に復す、

肩別命者、(中略)角鹿海直之祖也、

(日本書紀六垂仁)二年、是歲任那人蘇那曷叱智請之、欲歸于國、(中略)一云、御間城天皇之世、額有角人、乘一船、泊于越國笥飯浦、故號其處曰角鹿也、問之曰、何國人也、對曰、意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等、(下略)

(古事記中仲哀)故建內宿禰命、率其太子、爲將禊而、經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿、造假宮而坐、(中略)故其旦、幸行于濱之時、毀鼻入鹿魚既依一浦、(中略)其入鹿魚之鼻血臰、故號其浦謂血浦、今謂都奴賀也、

(古事記傳三十一)都奴賀は、血浦の轉れる名なり、(又血之臰のうつれるにやとも聞ゆ)又書紀垂仁卷には、一云、御間城天皇之世、額有角人、乘一船、泊于越國笥飯浦、故號其處曰角鹿也云々とあり、異なる傳なり、此二の傳、何れか正しからむ知がたけれど、應神天皇の大御歌に、既に都奴賀とよまし給へれば、(若初は血浦と云たらむには、其名の由緒、卽此天皇の御目のあたりの事なれば、卽血浦とこそよみ賜ふべけれ、又彼御世のほどは、此名起始より、いまだいくばくも經ざれば、轉りて都奴賀と云には至るまじければなり、)書紀の方や正しからむ、(但かの額に角ありし人の名を、都奴賀阿羅斯等と云とあれば、角鹿は此人の名に依て負へる地名の如く聞ゆれども、彼名は血浦書の如くなれば、本よりの名には非ず、此間にてつけたるなるべし、此も額に角ありしに因てぞ然はつけつらむ、本よりの名には、本名とて記せる方なるべし、○中)略、さて此名、又後には都濃賀と云、和名抄に、越前國敦賀(都留)郡これなり、書紀武烈卷に、角鹿之鹽の事見えたり、

丹生郡

(古今類聚越前國志一敦賀郡)州ノ西南ニアリ、西ハ若狹國ニ接シ、東南近江國ニ界シ、東北ハ南條郡ニ界シ、北ハ海ニ際ル、

(日本書紀三十持統)六年九月癸丑、越前國司獻白蛾、戊午、詔曰、獲白蛾於角鹿郡浦上之濱、故增封笥飯神二十戶、通前、

(古今類聚越前國志一丹生郡)南條郡ノ北ニ連リ、西ハ海ヲ限リ、北ハ坂井郡、東ハ今立足羽二郡ニ界ス、

西郡、今北東郡、丹生郡、吉田郡、坂南郡、坂北郡、大野郡、南條仲郡、敦賀郡也、寛文四年、越前少將光通ニ賜フ書ニ、八郡ヲ載ラレタルヨリ古ニ復スト云、〔越前名所記、一作延寶中〕又敦賀、丹生、今立、足羽、大野、坂井、黑田、池上、榊田、吉田、坂北、南條、十二郡トセシコトアリト云、〔和漢三才圖會、越前事跡考、節用集〕其時代ヲ詳ニセズ、

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國天平四年郡稻帳

〔續目安書〕越前國郡稻帳天平五年潤三月六日史生大初位下阿刀造佐美麻呂

月廿九日至十二月卅日合玖拾箇日食料、稻貳伯伍拾貳束、〔日別三束八把〕大野郡。。

檢舶使從六位上弟國若麻呂、肆疋傳符壹枚、食料稻陸束肆把、鹽參合貳勺、酒肆升、〔一人別稻四把、鹽二勺、酒一升、三人別稻四把、鹽二勺、〕

敦賀。。丹生。。貳箇郡各經貳箇日食料、稻參束貳把、鹽壹合陸勺、酒貳升、

赴新任所能登國史生少初位上大市首國勝、壹拾疋漆封傳符壹枚、食料稻漆束貳把鹽參合陸勺、

酒陸升、〔一人別稻四把、鹽二勺、酒一升、二人別稻四把、鹽二勺〕

敦賀。。丹生。。足羽。。坂井。。江沼。。加賀。。陸箇郡各經壹箇日食料、稻壹束貳把、鹽陸勺、酒壹升、〔○下略〕

〔類聚名物考地理一〕角國つぬのくに　越前國敦賀　つるが

角國はつの丶くにて、今の越前の敦賀郡是なり、是を今本にすなはちつるがの國と訓たれども、僻事なり、古へつののくに、後に漢字二字に塡る時、音によりて敦賀と書なせしものなれば、初はそのま丶つの、またつぬとも訓べし、此類いと多し、

〔地名字音轉用例〕ンノ韻ヲラノ行ノ音ニ轉ジ用ヒタル例

つるが　敦賀〔越前〕郡〔ツルガ〕留我　敦〔トン〕ヲトヲツニ轉ジ、ンヲルニ轉ジテ、ツルニ用ヒタリ、但此名モトハツヌガニテ、古書ニ角鹿〔ツヌガ〕トアリ、

〔古事記中孝靈〕此天皇〔○中略〕娶意富夜麻登玖邇阿禮比賣命、生御子〔○中略〕日子刺肩別命、〔○中略〕日子刺

	足羽	丹生	南條	今立	坂井	吉田	大野
		丹生 今立					
[illegible]六	足羽(アスハ)	丹羽(ニフ)		今立(イマタチ)	坂井(サカヰ)		大野(オホノ)
同	同	同		同	同		同
大[illegible]	同	同		同	同		同
十二郡	足羽西 足羽 足羽北	丹生比 丹生	南中條 南條	今西 今北東 今立東	坂南 坂北 坂井	吉田 吉田	同
八郡	足羽(アスハ)	丹生(ニフ)	南條(ナンデウ)	今立(イマタチ)	坂井(サカヰ)	吉田(ヨシダ)	同
同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同

〔古今類聚越前國志〕一郡界并舊地

越前古五郡ナリ、弘仁十四年、丹生郡ヲ分チ今立郡ヲ置テ六郡トナレリ、○中略後南條吉田二郡ヲ割テ八郡トス、時代未ダ詳カナラズ、又中古十二郡ニ分ツ、所謂足羽南郡、足羽北郡、今南東郡、今南

〔皇國郡名志〕越前國 舊六郡 今十郡

敦賀ツルガ　〈敦賀　△常宮浦　●山中　●駄口　●疋田　●滿川　●ハン原　江若界

丹生ニフ　〈府中　〈上鯖江　●宿浦　今宿　西海ニ向郡

今立イマタテ　●ヌルミ　江美界山郡

足羽アスハ　[綿井]　淺水　舟橋　西海ニ向

大野オホノ　[大野]　〈勝山　●市原　●野原　加美飛ノ界、

坂井サカイ　●松藤　△白鬼女川下南條ヨリ流ル、　西北海ニ向小郡

南條ナンデウ　〈鯖波　●河野　●脇本　板島　●湯尾　●今庄　●二屋　江界ヨリ海ニ出

今北イマキタ　●アサフ　美界小郡山ハカリ

吉田ヨシダ　●松岡　△永平寺　竹田　●丸山　加界

坂北サカキタ　[丸岡]　●吉崎　●長崎　〈三國　●金津　●細呂木　加界北海ニ向

今加ニ南條、今北、吉田、坂北四郡ニ舊有ニ黒田、池上、榊田三郡、今書レ之、界不レ考、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕越前

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保鄉帳	明治沿革帳	地誌提要	郡區編制
角鹿 紀	同 古書	敦賀ツルガ	同 [illegible]	同	敦賀 和式　鶴賀 [illegible]	敦賀ツルガ	同	同	同ツルガ	同

聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

弘仁十四年二月三日

國府

〔日本書紀二十六齊明〕四年、是歲越(○越原作國)國守阿(○阿原作河)部引田臣比羅夫、討肅愼、獻生羆二、羆皮七十枚、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、從五位下高志連村君爲越前守、

〔倭名類聚抄五國郡〕越前國(國府在丹生郡、行程上七日、下四日、)

〔催馬樂〕律　道口(一段、拍子十三、與夏衣同音)

みちのくち、たけふのこふに、われはありと、おやにはまうしたべこゝろあひのかぜやさきんだちや、

〔催馬樂譜入文中〕みちのくち、たけふのこふに、こは越前國丹生郡武生國府を云ふ也、

〔太平記十八〕越前府軍幷金崎後攻事

北國ノ道塞テ、後ニ敵アラバ、金崎ヲ責ン事難儀ナルベシ、如何ニシテモ杣山ノ勢ヲ國中ヘハビコラヌ樣ニセデハ叶マジトテ、尾張守高經、北陸道四箇國ノ勢三千餘騎ヲ卒シテ、十一月廿八日ニ蕪木ノ浦ヨリ、越前ノ府ヘ歸給フ、

〔越前名蹟志南條上郡〕府中　越前ノ府ナリ、古ヘハエチゼンノ國司代々一任四年ノウチ、コノトコロニ居スト云々、ソノ後ハ城主、前田又左衛門尉利家、丹羽鍋丸、木村常陸助、青木紀伊守、堀尾帶刀、當府本多家代々(慶長六、結城中納言秀康ノ家老、)

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕越前國(○註略)管六(○註略)　敦賀(都奴我)　丹生(爾不)　今立(伊万太千)　足羽(安須波)　大野(於保乃)　坂井(佐加乃井)

〔延喜式二十二民部〕越前國、大(管)　敦賀(ツルガ)　丹生(ニフ)　今立(イマダテ)　足羽(アスハ)　大野(オホノ)　坂井(サカヰ)　○中略　右爲遠國

〔易林本節用集下〕越前(越州)　大、管十二郡(○中略)　敦賀(ツルガ)、丹生(ニフ)、府、今立(イマダテ)、足羽(アスハ)、大野(オホノ)、坂井(サカヰ)、黑田(クロダ)、池上(イケガミ)、榊田(サカキダ)、吉田(ヨシダ)、坂北(サカキタ)、南條(ナンデウ)、

三國國造

志賀高穴穗朝御世〔○成務〕、宗我臣祖彥太忍信命四世孫、若長足尼定賜國造、

角鹿國造

志賀高穴穗朝〔○成務〕御代、吉備臣祖若武彥命孫、建功狹日命定賜國造、

〔古事記 中仲哀〕故建內宿禰命、率其太子、爲將禊而、經歷淡海及若狹國之時、於高。志。前。之角鹿造假宮而坐、

〔古今類聚越前國誌 一〕高志

再按スルニ、〔○中略〕仲哀ノ時、未越前ノ名アルベカラズ、高志前ハ、越ノ入口ト云コトニテ、國名ニハ非ルベシ、

〔日本書紀 三十持統〕六年九月癸丑、越前國司獻白蛾、

〔三州志來因概覽 一越中國郡鄕來因〕持統〔四十一代〕六年壬辰九月、越前國司白蛾ヲ獻ズトアリ、越前ノ二字茲ニ始テ見ユ、文武〔四十二代〕二年戊戌十二月、越後國ヲシテ石船ノ柵修理ノ事ヲ載ス、越後ノ二字茲ニ始テ見ユ、大寶〔文武年號〕ノ二年壬寅三月、越中國四郡ヲ分テ、越後ニ屬スルコトヲ載ス〔象闕〕此文義ヲ以テ考レバ、越中ノ建ハ〔闕〕是越中ノ二字正史ニ見ハル始メ也、〔○中略〕是等ニ因テ考フ後ニ致テ後レザル文義也、レバ、三越ノ割置セルハ、齊明以後天智〔三十九代〕天武〔四十代〕、年〔號白鳳〕ノ間ニ在ベシ

〔續日本紀 八元正〕養老二年五月乙未、割越前國之羽咋、能登、鳳至、珠洲四郡、始置能登國、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

割越前國江沼加賀二郡、爲加賀國事〔准中國〕〔○中略〕

右得彼國守從四位下紀朝臣末成等解偁、加賀郡遠去國府、往還不便、雪零風起、難苦殊甚、加以途路之中有四大川、每遇洪水、經日難涉、〔○中略〕伏請、別建一國、名曰加賀國者、〔○中略〕臣等商量所申合宜、伏

ニ封ズ、其子義將嗣ギ、斯波氏ト稱シ、京師ニ在テ管領トナリ、世襲シ、家宰朝倉高景ヲ以テ守護代トス、義將六世ノ孫義敏ニ至リ、義弟義廉ト相鬩グ、高景六世ノ孫敏景、義廉ニ黨附ス、義敏敏景ヲ誘スルニ本州ヲ讓ルヲ以ス、敏景遂ニ義敏ニ歸ス、文明三年、甲斐氏亂ヲ作ス、敏景擊テ之ヲ平ラグ、將軍義政因テ守護トナシテ、一乘谷（足羽郡）ニ治ス、玄孫義景ニ至リ、勢威益振ヒ、弘治ノ初、眞宗僧徒ヲ擊テ加賀半州ヲ取ル、元龜中、織田信長ト兵ヲ構ヘテ累戰シ、天正元年、義景自盡シ、朝倉氏亡ブ、（五世百三年）信長、朝倉ノ降將前波長俊ヲ以テ假守トナス、長俊修虐、朝倉ノ遺臣蜂起シテ亂ヲ作ス、三年、信長伐テ之ヲ平ラグ、柴田勝家ヲ北莊ニ封ジ、（五拾萬石）北陸ヲ控制セシメ、今立郡ヲ佐々成政ニ（五郡ニ城一居）、南條郡ヲ前田利家ニ（府中ニ治ス）與フ、九年、成政ヲ越中ニ徙シ、其地ヲ勝家ニ加封ス、十一年、豐臣秀吉勝家ヲ滅シ、利家ヲ加賀ニ徙シ、丹羽長秀ヲ全州ニ封ジ、北莊ニ治ス、十三年、秀吉長秀ノ子長重ノ封ヲ削リ、堀秀政ヲ北莊ニ封ジ、（拾八萬石餘）大谷吉繼、（敦賀五萬石）長谷川秀一、（東郷拾壹萬石、後丹羽長昌、）青山忠元、（丸岡四萬六千石）織田秀雄（大野五萬石）ヲ分封ス、慶長二年、秀政ノ子秀治ヲ越後ニ徙シ、北莊（八萬石）ヲ青木一矩ニ與ヘ、五年、府中（六萬石）ヲ堀尾吉晴ニ加賜ス、是歲關原ノ役、吉繼以下皆西軍ニ屬ス、德川氏悉ク其地ヲ收メ、吉晴ヲ出雲ニ徙シ、第二子秀康ヲ全州ニ封ジ、北莊ニ治ス、十八年、本多成重ヲ丸岡ニ封ズ、（後有馬清純）寬永元年、秀康ノ子忠直罪アリ譴セラル、第二子忠昌代リ封ゼラレ、北莊ヲ福井ト改メ、世襲ス、忠昌其弟直政ヲ大野ニ、（後土井利房）直基ヲ勝山ニ、（後小笠原貞信）直良ヲ木本（直良徙封ノ後城廢ス）ニ分封ス、其後封ヲ受ル者敦賀、（酒井忠稠、若狹酒井氏ノ支封）鯖江、（間部詮言）凡テ六藩、王政革新改テ縣トシ、別ニ本保縣（丹生郡）ヲ置、既ニシテ皆廢シテ敦賀福井二縣ヲ置、福井ヲ改テ足羽ト稱シ、尋テ之ヲ廢シ、敦賀ニ併セ、本州及若狹ヲ治ス、

〔先代舊事本紀（十國造）〕高志國造

志賀高穴穗朝（成務）御世、阿閉臣祖屋主田心命三世孫市入命定賜國造、

七間　上海浦、三十五度五十七分半、三里一十二町三十七間　蒲生浦、三十六度二分半、一里二十七町五十間　鮎川浦、三十六度六分、一里一十二町一十三間　坂井郡棧浦、三十六度七分半、一里一十三町四十八間半　石橋村濱、（至石橋村宿所一十二町七間、）三十六度九分、二里二町二十二間　泥原新保浦（沿坂井川至足羽郡坂井郡境町五里一十六町四十三間、北極高三十六度四分半、）五町三十五間　三國湊今町、三十六度一十三分、二里二町三間　梶浦、三十六度一十五分半、二里一十三町四十七間　濱坂浦界川口（至吉崎浦一十四町一十七間、北極高三十六度一十七分、從吉崎至加賀國江沼郡大聖寺本町一里二十七町二十七間、）一里五町二十三間　加賀國江沼郡片野村濱

宿驛

（延喜式兵部二十八）諸國驛傳馬○中略

越前國驛馬、（松原八疋、鹿蒜、濟羅、丹生、朝津、阿味、足羽、三尾、各五疋、）傳馬、（敦賀、丹生、足羽、坂井郡、各五疋、）

建置沿革

（日本國郡沿革考二）越前　古高志國（國造記）　或作古志、（按、古時北陸地方、曾以越稱之、其分析爲數國、未詳在何時、而高志前國、既見神功紀、然則其所析置者、亦尚矣、）大國、管八郡、千五百三十三村、

足羽（百六十村）　吉田（百三十九村、延喜式等不載、置未詳在何時、）　丹生（二百二十九村、古府治）　今立（二百二村、弘仁十四年六月、越前國言、丹生郡管鄕十八、驛三、割九鄕一驛、更建一郡、號今立郡、）　南條（九十二村、延喜式等不載、置未詳在何時、）　坂井（三百四十九村、日本紀作坂中井、）　大野（二百七十六村）

敦賀（八十六村、古角鹿國、國造紀、角鹿國造、難波朝隷越前國、靈異記作都怒鹿、古事記云、號其浦謂血浦、今謂都奴賀也、日本紀云、御間城天皇之世、有額角人、乘船來、泊于越國笥飯浦、故號其處曰角鹿、問之曰、何國也、對曰、意富加羅國王之子、名都奴我阿羅斯等、）

（日本地誌提要三十七越前）沿革　古ヘ國府ヲ丹生郡ニ置、（今ノ南條郡武生、舊府中ト稱ス、）鎌倉府ノ時、北條時政守護ノ事ヲ行ヒ、目代ヲ遣テ州事ヲ管ス、足利尊氏ノ反スル、族弟高經ヲシテ本州ヲ侵略セシム、延元中、新田義貞皇太子恒良及親王尊良ヲ奉ジテ、金崎（敦賀郡）ニ入リ、高經ト相持ス、州人瓜生重兄保等ト共ニ義貞ニ應ジ、杣山（今南條郡）ニ據ル、因テ重ヲ州守ニ任ズ、既ニシテ皇太子賊ニ陷リ、義貞及子義顯畑時能等、前後難ニ殉ヒ、重等兵潰ユ、高經遂ニ北陸諸州ヲ定ム、尊氏乃チ高經ヲ本州

七里七町四十七間加州大聖寺へ一里半　同市野々峠國境迄　六里二十二町十一間同風谷へ半里
同竹田峠國境迄　五里二十五町二十五間同大地へ四町餘　大野郡勝山迄　七里十町大野へ三里
同平泉寺迄　八里十町　同白山本社迄　二十三里十二町　同牛首小原國境迄　十
四里三十町加州尾小屋へ半里、同小松へ四里、　同濁澄橋國境迄　十八里七町加州さらへ一里半、金澤へ八里半、　同大
野町迄　八里　同油坂峠國境迄　二十一里二十三町濃州向小駄へ一里　同三國峠國境迄　二
十二里十四町同前谷へ一里　同烏帽子峠國境迄　十七里十九町同大河原へ一里

〔日本實測錄二街道〕從東海道大津、歷海津及匹田、至鞠山〇本敦賀中嶋
越前國敦賀郡山中村　一里三十五町四十七間　疋田村　三十町五十八間　道之口村　一里
二町五十一間　鞠山本敦賀　西濱町、三十五度三十九分半、至氣比神社、七丁五十二間從大津、至鞠山、街道通計二十
二里六町四十九間半、

〔日本實測錄三街道〕從中山道關ヶ原、歷木本及匹田、至小濱、
越前國敦賀郡刀根杉橋村又呼刀根宿、　一里二十三町五十二間　匹田村　一里二十一町九間至道口村、
五十八間　桧林村至敦賀一里四丁二十三間　二里二十町一間半至國界一里一十三間　若狹國三方郡坂尻村

〔日本實測錄一沿海〕從赤間關、沿海至鞠山〇本敦賀中嶋
越前國敦賀郡手浦　二里二町二十九間　鞠山本敦賀　西濱町從赤間關、至鞠山、沿海、通計三百二十七
里一十一町一十二間、
從鞠山本敦賀沿海至三國
越前國敦賀郡鞠山西濱町　二里八町三十二間至鞠山浦、三十町三十六間　五幡浦、三十五度四十三分、四
里一十八間至大比田浦、一里一十九町一十二間　南條郡河野浦、三十五度五十分、　二里一十一町三十八間　丹
生郡米浦、三十五度五十三分半、　一里六町二十九間、　厨浦、三十五度五十六分、　二十七町四十

島嶼

地勢

〔日本地誌提要三十七越前〕疆域　東北ハ加賀、東南ハ美濃、南ハ近江、西ハ若狹、西北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾九里、南北凡壹拾七里、

〔日本實測錄九島嶼〕越前國坂井郡　達潮　安島

〔島林本節用集下〕越前、（越州）大、管十二郡、南北三日半、山當南、帶北海、五穀不熟、桑麻多、或本、五穀万倍、大上々國也、

〔日本地誌提要三十七越前〕形勢　白山ノ脈、東南ニ聳チ、西北漸低シ、三河其中ヲ貫テ、一港ニ會同ス、西南一隅、木芽嶺ヲ以テ屛障トシ、海表ニ彎出ス、土壤膏腴五穀皆宜ク、其民耕織ヲ勉メ、工商ヲ業トスル者亦多シ、

〔類聚三代格五〕太政官符

應停史生一員置弩師事

右得越前國解偁、此國西帶大海、遠向異方、戎器之具、不可暫緩、望請被給弩師、備之不虞、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寬平七年七月廿日

道路

〔越前國名蹟考五足羽郡〕福井庄町（中略）

大橋　九十九（ツクモ）橋とも米橋とも云、丑の方より未の方へかゝる、（中略）大橋より所々行程（繪圖記）

南條郡板取國境迄　十一里三十町四十四間（江州中河内へ二里）　同木の目峠迄　十一里三十四町四十四間

同河野浦迄　九里二十一間　敦賀郡津内町迄　十四里三十四町四十四間

同山中國境迄　十八里三十四町四十四間（江州海津へ三里）　若狹國境石迄　十七里三十二町四十四間（若州小濱へ九里）

坂井郡三國湊迄　四里半十町三十三間（舟路は六里十二町十三間）　同細呂木國境迄　七里十五町七間（加州立花へ三十町餘）　同九間町迄　三里十一町二十五間　同牛の谷國境迄

越前敦賀（西濱町）極高三十五度三十九分半、經度東二十一分、從東都（同上、〇中山道白ニ關ヶ原、經木ノ本及足羽、）一百二十九里二十三町十間、

越前福井（境町）極高三十六度四分半、經度東三十一分、從東都（同上道ニ敦賀、）一百五十五里一十九町二十七間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

越前　敦賀湊　三五度三九分三〇秒　鮎川浦　三六度〇六分〇〇秒

三國湊　三六度一三分〇〇秒　福井　三六度〇四分三〇秒（〇中略）

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒（〇中略）　越前　福井　東〇度三　分〇〇秒

〔古今類聚越前國誌一（疆域）〕越前國、郡八、鄕五十五、村一千五百四十二、北陸道ノ域ニアリ、福井城下大橋ヨリ東ハ大野（郡ノ石徹白ニ至ル、）石徹白、三國嶽ニ至ルマデ二十二里十四町餘（里數ハ越前國界ヲ記ス、下是ニ倣ヘ、三國ハ越前美濃飛驒三國ノ界ナリ、石徹白ヨリ美濃國郡上ニ出ヅ、）東南ハ大野郡荷暮村（ノ）蠅帽子嶺ニ至ルマデ十七里十九町（荷暮村ヨリ美濃國根尾ニ出ヅ）南ハ南條郡板取驛栃ノ木嶺ニ至ルマデ十一里三十四町餘（板取驛ヨリ近江國海津ニ出ヅ）西南ハ敦賀郡山中郷ノ椿坂ニ至ルマデ十八里三十四町（山中郷ヨリ近江國海津ニ出ヅ）同郡金山界石ニ至ルマデ十七里三十二町餘（界石ヨリ若狹國小濱ニ出ヅ）西ハ海ニ際リ、丹生郡大味浦ニ至ルマデ七里、西北モ赤海ヲ限リ、坂井郡三國湊ニ至ルマデ五里、北ハ坂井郡細呂木ノ關ニ至ルマデ七里五町餘（細呂木ヨリ加賀國立花ニ出ヅ）同郡牛ノ谷ノ關ニ至ルマデ六里餘（牛ノ谷ヨリ加賀國大聖寺ニ出ヅ）東北ハ坂井郡市布村ノ山中ニ至ルマデ六里二十二町餘（市布村ヨリ加賀國風谷ニ出ヅ）大野郡瀬戸村淸滝ニ至ルマデ十八里七丁（瀬戸村ヨリ加賀國佐竹ニ出ヅ）同郡一ノ瀨白山ノ嶺ニ至ルマデ二十三里半八丁（一ノ瀨ヨリ加賀國尾添ヘ出ヅ）京都ヲ去ルコト五十里餘、江戸ヲ去ルコト百三十里、

由是始起大八洲國之號焉

〔日本書紀纂疏上二〕越洲者彼地有坂、名曰角鹿、行人必踰此坂入越、故名曰越也、後分爲北陸五國、今三越及加賀能登是也、

〔古事記上〕此八千矛神、將婚高志國之沼河比賣幸行之時、到其沼河比賣之家、歌曰、夜知富許能、迦微能美許登波、夜斯麻久爾都麻麻岐迦泥氐、登富登富斯、故志能久邇邇、佐加志賣遠、阿理登岐加志氐、○下略

〔古事記傳十一〕高志國は越國なり(出雲國神門郡なる古志には非ず)、後に越前、加賀、能登、越中、越後など、分れつれども、歌などにはなほなべて越とよむなり、さて此國名は、越後國に古志郡あれば、(例の例によるに)其より出たるにや、名義は知がたし、(山を越て行國なる故の名と云は、ひがごとなり、若然らば、古延とこそ云べけれ、凡て自讀るなば、古延とこそいへ、古志は今三越を云なれば、我と物との異あり、今ノ世に我ことに、山川を古須と云は鐵なり、古さることなし、又書紀神代卷に、八島の一を越洲とあるを、或說に蝦夷地と云といひ、越國は其へ往來ふ道なる故の名と云も、いたく强說なり、)

〔古事記中崇神〕此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴人等、

〔釋日本紀十述義〕以七掬脛爲膳夫、

越後國風土記曰、美麻紀天皇(崇神)○御世、越國有人名八掬脛、(其脛長八掬、多力太强、是出雲之後也、)其屬類多、

〔日本書紀七景行〕四十年十月、日本武尊曰、蝦夷凶首、咸伏其辜、唯信濃國越國頗未從化、○中略於是分道遣吉備武彥於越國、令監察其地形嶮易、及人民順不、

〔令義解二戶〕凡新附戶皆取保證、○註略本問元由、知非逃亡詐冒、然後聽之、其先有兩貫者、從本國爲定、○註略唯大宰部內、及三越、陸奧、石城、石背等國者、從見住爲定、○下略

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

位置

和名抄に、越前(古之乃三知乃久知、國府在丹生郡、)立入信友云、京より越前敦賀郡へ行道に、道の口といふ地あり、この國の古名にかなへりといへり、名義は日本紀纂疏に、彼地有坂、名曰角鹿、行人必踰此坂入越地、故名曰越也とあるは非なり、○中略されど越前、越中、越後、加賀、能登、出羽等おしなべていにしへの越ノ國にて、陸奥と一つゞきの國なり、類聚三代格に、此國面帶大海遠向異方云々とあり、日本書紀垂仁天皇紀、額有角人、乘一船泊越ノ國笥飯浦云々、問之曰、何國人也、對曰、意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等、亦名曰于斯岐阿利叱智干岐云々などありか、れば外國人來り、調貢など運び置しゆゑにやしか號け、む、外國をさして諸越などいへるを思へば、調貢の品々を越の國なるべし、○中略又は古事記に、於高志前之角鹿造假宮而坐云々、其御祖息長帶日賣命、釀待酒以獻、爾其御祖御歌、許能美岐波、和賀美岐那良受、久志能加美、登許余邇伊麻須、伊波多々須、須久那美加微能、加牟菩岐云々、日本書紀崇神天皇卷に、天皇以大田々根子令祭大神、是日活日自擧神酒獻天皇、仍歌之曰、許能瀰枳破、和餓瀰枳那羅破、揶磨等那殊、於朋望能農之能、介瀰之瀰枳云々とあれば、久志は酒をいへるなり、また記の應神天皇卷の大御歌に、須々許理賀、迦美斯美岐爾、和禮惠比邇祁理、許登那具志、和禮惠比邇祁理とあるなどを思へば、久志の國なるべきよし論ひ給へり、猶下の能登國の條にいへるをてらしあはせみよ、

〔日本書紀神代諺通抄(五典書)〕于時寬文壬子八月九日、勢州山田の旅宿にして、北越の山本(廣足)謹書、

〔大江俊光記〕貞享五年(元祿元年)○元三月朔日、今朝山本勘齋(廣足)○中略越前より伊勢へ歸參ニ付被尋對顏、

〔倭訓栞(前編九古)〕こし　越の國は、つのがの坂を越る以北なれば、しかいふとの古說也、今前後に分てり、或は越後國古志郡よりや出にけん

〔日本書紀(神代一)〕伊弉諾尊、伊弉冉尊、○中略欲共爲夫婦產生洲國、○中略廼生大日本(日本此云耶麻騰、下皆效之、)豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生筑紫洲、次雙生隱岐洲與佐度洲、○中略次生越洲、次生大洲、次生吉備子洲、

名稱

越前國

越前國ハ、エチゼンノクニト云ヒ、舊クハ、コシノミチノクチト云フ、北陸道ニ在リ、古ヘノ越(コシ)國ノ一部ニシテ、其南端ニ在ルヲ以テ南越ノ名アリ、東北ハ加賀、飛驒、東南ハ美濃、南ハ近江、西ハ若狹ニ界シ、西北ハ海ニ臨メリ、東西凡ソ十九里、南北凡ソ十七里、其地勢ハ、加賀、飛驒、美濃、近江ノ境堺、即チ東南部ハ山嶺ヲ以テ國ヲ限リ、獨リ西方ノミハ平地ヲ以テ若狹ニ連ナル、此國ハ、古ヘ國府ヲ丹生郡ニ置キ、敦賀、丹生、今立、足羽、大野、坂井ノ六郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、始メ加賀能登兩國ノ地ヲモ管セシガ、元正天皇養老二年、羽咋、能登、鳳至、珠洲ノ四郡ヲ割キテ能登國ヲ置キ、嵯峨天皇弘仁十四年江沼、加賀ノ二郡ヲ割キテ加賀國ヲ置ケリ、又同年丹生郡ヲ割キテ今立郡ヲ置キ六郡トス、後丹生郡ヲ割キテ南條郡ヲ置キ、坂井郡ヲ割キテ吉田郡ヲ立テ、共ニ八郡ト爲シ、更ニ今立郡ヲ今南西、今南東、今北東ノ三郡ニ、足羽郡ヲ足羽南、足羽北、坂井郡ヲ坂南、坂北ノ各二郡ニ分チ、凡テ十二郡ト爲シヽカ、後復タ舊ノ八郡ニ歸ス、明治維新ノ後新ニ福井市ヲ設ケ、福井縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕越前 古之乃三知乃久知

〔倭頭屋本節用集 天地 江〕越前(エチゼン)(中略)以上越州

〔類聚名物考 地理一〕越前　越中　越後　こしのくに

古へは古之の國といへり、古今の歌に、みこしぢと讀しは、三越なればいふともいへれど、そのみは眞の意にて、み吉野、み熊野、み山の類ひは、皆賞美の詞なり、さらばこれも眞越路にても有るべし、

〔諸國名義考 下〕越前

風俗也、〇中略

右北陸道七ヶ國之風儀區々也トイヘドモ、若狹越前之風儀、一入不好也、其善惡ヲ數ヘテ、虛實之風儀ヲ得道ヲ而是ヲ治トモ、是ヲ取トモ工夫而、其斷スル處之者ヲ、正道ニナスベキモノ也、唯其名目名聞ニ從テ是ヲ執行バ、國ニ奸佞之人、月ニ從ヒ年ニ積テ、終ニ全正儀ヲ可失也、

名所

〔日本鹿子十〕同〇中略若狹國中名所之部

後瀨(ノチセ)山　當國の北海邊にある山也、新後撰冬のうたに侍從公世、

今朝のまにふりこそかはれ時雨つゝ後瀨の山のみねのしら雪

青羽山　水鳥の青羽の山は名のみして霜露をけば色付にけり

三形原　海邊にある原也、三形海と云もをなじ所の浦也、

戀しくばかたみの原を出て見んまた朝がほのはなはさくやと

巢立山　小濱　泊舟　黑搞

鎭戍

〔延喜式二十八兵部〕諸國健兒〇中略　若狹國卅人〇中略

諸國器仗〇中略　若狹國(横刀二口、弓十六張、征箭十六具、胡籙十六具、)

〔日本書紀(垂仁)六〕三年三月、新羅王子天日槍來歸焉、(中略)一云、(中略)自近江經若狹國、西到但馬國、則定住處也、

〔古事記(仲哀)中〕故建內宿禰命、率其太子、爲將禊而、經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿、造假宮而坐、

〔續日本紀(元正)八〕養老三年十月戊戌、詔定京畿及七道諸國軍團幷大少毅兵士等數、有差、但志摩若狹淡路三國兵士並停、

白朮　芎藥　蕤蕤子　遠肉　香附子　厚朴　石斛　辛灰　石火　絞姥（シボリウバ）　板木　楊枝木　熊川棒木　鍬鍪柄等　小濱酒　筆（諸國へ多廟）　指履（サシアシダ）　洲崎目指　尾崎鮭　小松原ツノ字　鼻折小鯛　蝸蝶（カサメ）　蒸鮓（ムシガレイ）　耳盥貝　高濱尺八烏賊　味方堀　アマサギ（魚也）　鮒鮨　大島ツカヤ（魚也、フナニ似、）

青井堅苔　若和市（ワカノ）　スカ濱黑碁石　名田庄厚紙　煮ゴキ苧（リ）

人口

〔續日本紀（元明六）〕和銅六年五月癸酉、令ニ大倭河並獻ニ雲母、（中略）飛驒若狹並礬石、

〔官中秘策（四）〕若狹國　三郡（中略）

一人數七万八千七拾貳人　內（三万八千六百壹人 男／三万九千四百七拾壹人 女）

〔吹塵錄（五）人口及國高〕諸國人數調（文化元甲子年）（中略）

（皆私領）一人數七万八千七百拾五人　高八万八千貳百八拾壹石餘　若狹國

內（三万九千六百六人 男／三万九千九人 女）

諸國人數調（弘化三丙午年）（中略）

（皆私領）一人數七万七千百八拾三人　高九万千拾八石餘　若狹國

內（三万八千三百六拾七人 男／三万八千八百拾六人 女）

風俗

〔人國記〕若狹國

若狹國之風俗、人ノ氣十人ハ十人一和セズ而、思々ノ作法也、今日親シミ有テ、明日ハ其親ミヲ離レテ、其人ノ惡儀ヲ人ニ觸知ラスルノ類ナリ、誠ニ九思一言之語ニ甚ダ違タル國風也、サルニ仍テ、下ト而ハ上ミヲ欺キ、氣ノ怠リ有、上ヨリ其罪ヲトガメラレテハ己ガ科ヲ隱シ、非道ノヤウニ云ナシ、我ガ非ヲ不レ知ニモ非ズ而、如レ斯ナル事マコトニイヤシキ風俗也、然ドモ、取廻シ利發成國風故ニ、差當ル問答ナドニハ、如レ形辨舌能タ、一花ハ氣勢ニ隨テ振舞フトイヘドモ、根ヲトゲテシマル意地無レ之、中途ニ而止ムノ類也、サレドモ伊賀伊勢兩國ニハマサルベキカ、三方郡ハ江州之

年料別貢雜物（略）○中 若狹國（零羊角十具、紙麻一百斤、）○中略

諸國貢蘇番次（略）○中 若狹國八壺（小一升）○中略 右八箇國爲第三番（卯酉年）○中略

交易雜物（略）○中 若狹國（烏賊三百斤、小鰯腊一石一斗、擣二合、）

〔延喜式主計二十四〕若狹（略）○中 右廿五國中絲（略）○中

若狹（略）○中 右廿九國輸絹（略）○中

若狹國（行程、上三日、下二日、）

調、絹、薄鰒、烏賊、熬海鼠、雜腊、鰒甘鮨、貽貝保夜交鮨、甲嬴、凝菜、鹽、 庸、韓米、 中男作物、紙、蜀椒子、海藻、鯛楚割、雜鮨、雜腊、

〔延喜式宮內三十一〕諸國例貢御贄（略）○中 若狹國（毛都久、於期、稚海藻、生鮭、）

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥（略）○中

若狹國廿四種 人參三斤、黃菊花二兩、伏苓四斤、桔梗、藺茹、杜仲、芎藭各二斤、枳實十斤、龍膽、白薇各一斤、澤瀉六兩、續斷四兩、獨活十四片、秦皮廿九斤、紫參一斤二兩、葛花三兩、榧子二斗、麥門冬、車前子、吳茱萸、蜀椒各二斗、桃人八升、蔓荊子三升、黃礬石一斗、

〔延喜式內膳三十九〕諸國貢進御贄

旬料（略）○中 若狹國雜魚上下旬各七擔（同受取擔丁百十六人、以其國交易雜物充擔丁功食、）○中略

節料（略）○中 若狹國（三節各十擔）○中略

年料（略）○中 若狹國（生鮭三擔、十三隻、三度、山薑一斗五升、三度、稚海藻十二籠、十二斤、毛都久、於己、）

〔新猿樂記〕四郎君、受領郎等刺史執鞭之圖也（略）○中 宅常擁集諸國土產、貯甚豐也、所謂（略）○中 若狹椎子

（飲食）

〔毛吹草三〕若狹

〔若狹郡縣志一圖郡〕田數幷秋米略〇中　中世所定、若狹國一圓、秋米八万千五百餘石云云、天正十六年、淺野彈正少弼長政領國之時、撿點田地而爲八万千九十石餘、又慶長十年、京極高次領國之時、三郡處々撿地云、然未知其米數、若今者、遠敷郡四万二千四百六十二石餘、大飯郡一万九千八百七十石餘、三方郡二万三千百二十八石餘、三郡都合八万五千四百六十石餘也、

〔寛文印知集九〕若狹國一圓八万五千四百六拾石餘、略〇中　如前々宛行之訖、全可令領知者也、仍如件、

寛文四年四月五日　御判

筆者　建部傳右衛門

酒井修理大夫どのへ

〔日本鹿子十〕若狹國、三郡、小上國、南北一日半、知行高八万五千九十石、

〔官中秘策四〕若狹國　三郡略〇中

一石高八万貳千貳百八拾壹石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調略〇中

若狹國皆私領　一高九万千拾八石八斗貳升貳合貳勺

出擧稻

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻略〇中

若狹國正稅公廨各九万束、國分寺料一万束、京法華寺料一万束、文殊會料一千束、修理池溝料一万束、救急料三万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕若狹國略〇中　管三(中略)正公各九萬束、本穎二十二萬束、雜穎四萬束、註

〇按ズルニ、延喜式ニ據レバ、雜稻六萬一千束ナリ、此ニ四萬束トアルニ合ハズ、然レドモ本穎二十二萬束トアルニ據レバ、雜穎四萬束亦誤ナキニ似タリ、

國全貢獻

〔延喜式二十三民部〕年料舂米略〇中　若狹國大炊二百石〇中略

年料租舂米略〇中　若狹國八百石〇中略

轉封

田數石高

若狹國恒枝保内田畠事

公文信康　□國多良地頭代

右可參決之由、度々雖出遣文、不出對云々、所詮來十四日可參決、不然者、以違背之篇、可有其沙汰之條如件、

建武二年七月四日

〔師守記〕貞和三年三月七日庚戌、是日、若狹國田。井。保。公文職事圓慶道尊子與良成當時公文相論、而方參入、不及召決、以訴陳有沙汰、圓慶爲道尊子、所申非無其謂之由、面々一同了、　十日癸丑、今日田井保公文職事、圓慶賜御下文了、安堵料十貫文、此外酒肴料百疋沙汰之、申次百疋致沙汰、予申次之丁、青侍中五連致沙汰、仍於出居華麵已下執行之、率甚々々、公文職安堵申次、先例二百疋之由、辨公被語之、然而去年良成安堵時、百疋致沙汰、二百疋分無指所見之間、任去年例百疋沙汰之了、猶可決歟、

〔康正二年造内裏段錢幷國役引付〕合略○中

三貫五百文略○中　東岩慶寺異性院領若州段錢○藤。井。保。中略　六貫文略○中　廣井殿若州段錢島。羽。上。下。保。

〔慶長元年武鑑〕酒井若狹守忠氏常陸國四日　拾万三千五百五十八石餘　若狹一圓居城遠敷郡小濱江戸ヨリ東海道百廿九里、木曾路百三十三里、儀二吳濃、關ヶ原へ出東海道、

濱主木下右衞門大夫勝俊、慶長二、京極宰相高次、同若狹守忠高、寛永十一ヨリ酒井讃岐守忠勝以後代々領之、

〔倭名類聚抄〕五郡若狹國略○　註管三田三千七十七町四段四十八歩

〔伊呂波字類抄〕郡國若狹國　本田三千百四十九丁

〔拾芥抄〕中本東國郡若狹遠中三郡中略百三田三千十九町

〔運歩色葉集〕諸國之郡名若狹　三郡田數三千三百三十三丁

〔海東諸國記〕若狹州　郡三、水田三千八十町八段

百廿卜　富○満○保○九十卜　細○工○保○五十二反三百卅卜川成七反百八十卜不作○一丁五反六十卜　俊貞百九十已不作

口口名五十八反百十卜川成三反六十卜不作五反百卅卜　東出作二丁九反百卅卜川成一反百四十卜不作七反八十卜

松○永○保○廿八丁二反三百十卜　太○良○保○四丁二百八十卜

郷田九町五反二百卅卜○中略

右注進如件

文永五年七月　　本任所判形無之

右東寺所藏百合古文書中索得寫之、翌日一校粗附考、

〔東寺百合文書せ武家御教書幷達一至廿八〕若狹國多○良○保○事、先日被寄進東寺之間、於嵯峨清涼寺分者、所被立替他所也、早可被退清涼寺雜掌之狀、依仰執達如件、

建武四年五月十九日　　武藏權守花押高師直○

伊豫守殿○足利時家

〔東寺百合文書む二十一之二十七〕一日面謁之時、委細令申候了、抑恒○枝○保○內太良莊仁押領之條、坪付注文令進之候、彼田地者、若狹次郎替代之時、爲御內御領之、竹向殿御領知之剋、檢見之使節、武士道心房誇彼權威、去正安年中ニ、被取入太良莊內之候畢、就是連々雖令申子細之、于今令延引之條、愁鬱不少相存候、所詮彼田地者、恒枝保代々知行之取帳目錄分明之上者、如元當保領知無相違之樣に御披露候て、可返給候也、事々期面謁之時候、恐々謹言、

建武元三月二十日　　源信康花押

謹上　脇袋殿

〔東寺百合文書ゐ二十三下之二十九上〕寫書　恒枝保廻文案

雜訴決斷所

九斗四合御免物　定米參拾石參斗壹升九合參勺　進納分○中略

文正元年十月　日

〔吾妻鏡七〕文治三年八月八日丙子、梶原平三景時、原宗四郎行能押領於最勝寺領之由、有寺家訴之旨、被仰下之間、就被尋兩人、各獻陳狀、以之可被付職事云云、○中略

惟宗行能謹解

最勝寺訴申、若狹國今重保○○、背院宣并鎌倉殿御下文旨、押領由事、

右九郎判官逆亂之時、自東國武士上洛之日、行能相具北條時政之手上洛畢、而爲兵粮米宛給所畢、代官不可致沙汰之由、自鎌倉殿依被仰下、不置代官、罷下本國畢、況於今重保者、無可知行之由緒、又自鎌倉殿非恩給之所、何以令致押領乎、但號行能代官、無去文者稱不可用之由、度々背院宣并鎌倉殿御下文之間、依院宣預御勘發、因之且取不當之名、其恐不少、然者於號行能代官之輩者、早被搦取、可被處罪也、全非行能結構、仍謹解、

文治三年八月八日　惟宗判

〔田文七〕東鄕　文永二年實撿大田文內若狹國

注進文永二年實撿大田文內事

合

東鄕八十七町五反二百八十

除七十八町六十卜　寺社田六丁八反四十卜　國分寺五十九反二百五十卜　上下宮六反百五十卜　推村宮二反　秋里名

別名七十一丁二反廿卜

西鄕四反三百十卜不作二百十卜　秋里名十一丁二反卅卜不作七反百七十卜川成八反百八十卜　今富名二反

以來知行所見非一歟、然者相傳領掌不可有相違之由、院御氣色所候也、仍執達如件、

建武四年七月廿二日　　權中納言（花押○修寺經顯勸）

明達上人御房

〔傳禪寺文書二〕當御代安堵院宣

若狹國名○田○庄內、須惠野村預所職事、任文殿注進、可令知行之由、可下知成重之旨、可被傳仰宰相典侍局者、院宣如此、仍執達如件

建武四年十一月廿四日　　權中納言判

謹上大藏卿殿

〔榎戶文書〕御領目錄（人數付之）

一伏見御領（依三年水損年貢不定○中略）

一若狹松○永○庄○（貢一○一百餘中略）

永享十二年八月廿八日　　當知行分記之

後崇光院御判

〔康正二年造內裏段錢并國役引付〕合

四貫二百廿五文　聖護院御門跡領（若州花○生○庄○段錢）

七貫文　金輪院（若州鳥○羽○庄○段錢）

五百五十文　瑞泉院殿御領（若州三方郡永○富○庄○段錢）

參貫五百文　沼田彌三郎殿（若州宮○生○庄○段錢）

八貫三百五十文　遠成就院（若州國○富○庄○段錢○中略）

〔集古文書五十四〕文正元年年貢注文（龜川某藏）

（表書）申御領所之御年貢以下注文（○中略）

一若狹國木○津○庄○御年貢米　合四拾四石五斗貳升參合參勺之內　五石參斗國下行在候　捌石

者、可有改易之狀如件、

庄家宜承知勿違失、故下、

弘長二年四月九日

預所在判

〔東寺百合文書は七十五之八十三〕裏書 中狀案

建武元十一二十四上之

東寺領若狹國太良莊地頭所爲代國直謹言上

欲早被經嚴密御沙汰、被召捕惡黨人等、被處重科、當國田中掃部助入道不知實名、今月二十一日夜、差遣子息四郎以下數多人勢、寺家倉本百姓、於當莊角太夫許、無是非、撰取御年貢以下、色々資財物等、重科難遁間事、○中略

建武元年十一月　日

〔壬生文書〕若狹國國富莊地頭職高時法師跡事、可被知行者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年五月二十九日　勘解由次官○高倉光守判

大夫史殿○小槻匡遠

〔園城寺文書〕若狹國玉置莊

右所々知行、不可有相違之由、可有御下知之旨、院宣所候也、以此旨可被申入長吏宮○覺性法親王給、仍執達如件、

建武三年九月廿四日　參議花押

謹上左大臣法印御房

〔鹿山寺文書〕若狹國青河莊事、就正慶勅裁、雖有其沙汰、忠雲僧都還寄[illegible]、被下安堵院宣之上、元弘

右肆拾貳箇所神領、任院廳御下文、停止方々猥藉武士等濫吹、如元可備進神事用途、若不恐神威、不用院宣、猶可處重科之狀如件、以下、

　壽永三年四月廿四日

　　正四位下源朝臣御判

〔若狹國稅所今富名領主代々次第〕一稻庭權守時定建仁二年二月八日、西津にて死去云々

建久七年八月に得替、鎌倉右大將賴朝御勘氣によりて、所領ともに悉くにめされて、西津莊ばかりかつみやうところに給る、

〔神護寺文書二〕高雄神護寺領〇中略　若狹國西津莊等事、奏聞候之處、止武士甲乙人妨、可全所務之由、可有御下知之旨、天氣所候也、以此旨可令申入仁和寺宮〇法守法親王給、仍執達如件、

　元弘三年六月十九日　　　　　左少辨宣明

　　大敎院法印〇隆禪御房

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年四月廿五日癸未、若狹四郎忠清依御下知違背之科、可避進安居院大宮禪屋、幷膳所屋之旨、今日同被仰付、是忠淸所領、若狹國依生庄雜掌成安訴申之故也、

〔古文書類纂上處分狀〕後深草天皇建長二年關白藤原道家處分狀

　總處分　條々事〇中略

一家地文書庄園事〇中略　尙侍殿〇中略　家領　女院方〇中略　若狹國立石庄　同新庄〇中略

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　愚老〇御在判

　建長二年十一月　日

〔東寺百合古文書一ノ一〕下　若狹國太良庄

　可早以中原氏女及末武名主職事

右人任所帶證文等、所令補任彼職也、有限御年貢以下公事等、無懈怠可令辨勤、若不忠子細出來時

氏族

也、

小濱　遠敷郡今宮庄海濱、謂之小濱、按日本紀曰、兄火闌降命、自在海幸、弟彥火々出見尊、自在山幸、始兄弟二人相謂曰、試欲易幸、遂相易之、各不得其利、兄悔之、乃還弟弓矢、而乞己釣鉤、弟時既失兄鉤、無由訪覓、〇中略時逢鹽土老翁、問曰、何故在此愁乎、對以事之本末、老翁曰、勿復憂、吾當爲汝計之、乃作無目籠、內彥火々出見尊於籠中、沈之于海、卽自然有可怜小汀云々、按若狹國一宮所祭彥火々出見尊也、故以此海濱擬小汀、而稱小濱者乎、小汀小濱倭語相通也、昔日阿納尻村邊有市屋、而北西兩國之商船至其處、又其西海畔有市屋、他邦海賈之所來也、其處名西津、爾後移市店于小濱、至于今海陸商賈常聚會于茲、實不易繁榮之地也、海東諸國記、日本若狹國中記小濱津名矣、凡小濱之地、東北限河繩町、松本町、川崎町、至伏原村及後瀨山麓、西接青井村、其間街衢竪橫、工商交居焉、傳言、古至後瀨山麓悉海濱、而處々有茅屋、民人業漁鹽、後爲市屋、依之漁人移今濱浦町之邊、又湯川自長源寺之東北流于今之市場町、而入于海、又北海畔處々有寺院、京極高次領國之時、築城於雲濱、導湯川水於城外、於是移寺院於西南之地、今川崎町洲崎町之邊、寺院之舊地、凡市中街衢、縱橫四十一町、戶千二百三十七軒、此間數三千百六十間、是慶長十二年五月十六日之所定也、又寬永十年之所定、戶千六百五十六軒也、又同十六年定之、時爲千七百二十五軒、又寬文六年所定戶千八百廿一軒、口男女八千五百十四人、如今街衢有五十二町、〇中略戶二千二百九十五軒、口男女一万千九百九十五人、是元祿六年所定也、僧徒之員數除之、

(賀茂注進雜記下神領)同(〇壽永)三年(〇元曆元年)四月廿四日壬辰、賀茂社領四十一ヶ所、任院廳御下文可止武家狼藉之由、有其沙汰云々、

下諸國、　可早任院廳御下文停止方々狼藉、備進神事用途賀茂別雷社御領莊園事、〇中略

若狹國　宮川庄　矢代浦〇中略

事、

牒、就去年十一月十三日上使、同十二月十三日國司、注進等、其沙汰訖、而爲有罪科之沙汰可被召進道藏以下之輩者、仍牒送如件、以牒、

建武二年正月二十五日　　　　采女正中原〇重在判

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合〇中略

一貫二百五十文〇中略　三寶院御門跡領〇若州須恵野村段錢

〔德禪寺文書二〕當御代安堵院宣案 蓮華王院領、若狹國名田庄內、知見村事、任相傳可知行領掌之由可被傳仰藤原氏女者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年九月十一日　　　　判

謹上大炊御門前少將殿〇學綱

〔康正二年造內裏段錢幷國役引付〕合

三貫文　曾我殿〇若州三重村段錢　貳貫參百七十文　上野與三郎殿〇若州賢海村段錢　七百五十文　上野刑部大輔〇若狹國耕谷村段錢〇中略

〔若狹郡縣志一〕竹原 皆食錄之家也、相傳、此地本上竹原村之田地、及下竹原村之所有也、前國主京極高次、築城於雲濱、而建家士之居宅斯所矣、其地四面河水流廻、其間有街衢數條、今所稱廣小路、在百間橋東北二面通南北、其東曰靜間町、其東曰千代町、其東曰馬場町、斯處有國主之廐、其東曰馬場町、其地自北而南、松櫻交連茂矣、其東西有二條之馬場地、武人於斯處常試乘馬之法、中央有小館、國主遊于茲而觀馳驅之處也、其北有河端町、又馬場町南曰馬場前町、其南曰入江町、其北有堀河、其南北曰南二堀北二堀、又北有堀川、其南北曰南一堀北一堀、其間武人群居焉、

西津。 傳言、京極高次國主之時、埋西津鄉之水田、且移小松原村于北方地、而爲家士之居所、卽此處

●小濱　東海道百廿九里　木曾路百卅三里

○按ズルニ、本書ノ府縣ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕若狹　三郡、二百五十五村、
皆私領
高九萬千十八石八斗二升二合二勺
大飯郡七十四村　遠敷郡百二十二村　三方郡五十九村

〔地勢提要〕郡邑島嶼奇名
若狹　大飯郡、車持村、岡津村、遠敷郡、堅海浦、加福六村、三方郡、鹽坂越浦、竹波村

〔醍醐寺文書一〕蓮華王院領、若狹國名出庄内田村、下村以下、當知行所々領掌不可有相違者、天氣如此、仍言上如件、宜明〇中御門謹言、
元弘三年六月二十四日　左少辨判
進上花山院前中納言殿信〇缺

〔東寺百合文書は七十五之八十三〕注進
建武元年十一月二十七日、於若狹國遠敷市、被案取守護代信景使者日野新兵衞并新八以下惡黨人等、賊物等注文、
合
錢貨參貫二百五十文　絹口　綾小袖一　紬布三口　白布二口　綿五屯　袖田綿一　刀五腰　布小袖二
右此外細々雜々物等雖有之、且注進如件、
建武元年

〔醍醐寺文書二〕雜訴決斷所牒　若狹國衙、伴人助成重中、當國須惠野村同國淺井道德以下靈山賊

分之爲大飯郡者乎、今世所稱加斗庄、本郷佐分利郷、和田庄、木津庄、青郷內浦等也、邑數計有七十四、〇中略戸二千七百六十二軒、口男女一万四千九百十七人、是寬文六年之所定也、寺社及僧徒非斯限、

〔日本紀略淳和〕天長二年七月辛亥、若狹國割遠敷建大飯郡、

三方郡

〔若狹郡縣志一國郡〕三方郡

在遠敷郡北、古來郡中有郷、〇中略今世所稱倉見庄、三方郷、織田庄、或稱耳庄山東郷、山西郷等也、郡中邑數計有五十六、〇中略一郡戸三千五百五十三軒、口男女一万八千六百九十七人、是寬文六年所定也、寺社及僧徒非斯限、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年三月九日癸卯、節婦若狹國三方郡人秦勝綱刀自、叙位二階、免戸內租、以表門閭、

郷

〔倭名類聚抄七若狹國〕遠敷郡　遠敷乎爾布　丹生爾布　玉置〇高山寺本注多末支　餘戸　安賀安加　野里　神戸〇神戸下原有丹生二字、重出、據高山寺本刪　志摩　佐文　木津　阿桑阿乎〇佐文以下高山寺本無

大飯郡　大飯〇高山寺本注於保比　佐分　木津〇高山寺本注岐豆　阿桑〇高山寺本作阿遂

三方郡　能登　彌美　餘戸　三方　驛家

〔東大寺要錄六〕造寺司牒三綱所

合奉宛封一千戸

若狹國伍拾戸遠敷郡玉置郷〇中略

以前、寺家雜用料、永配封、當年所輸之物、爲始奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日　主典從七位上阿刀連滿主〇下略

村里名邑

〔郡名一覽〕一若狹國皆私領　若州　南北一日半　三郡

高八万八千貳百八拾壹石五斗貳升貳合四勺　貳百五拾五ヶ村

	大飯	大飯（オホイ）	同	同	同	同（オホイ）	同	同	同（オトイ）	同
		管三	同	三郡		同	同	同	同	同

遠敷郡

〔若狹郡縣志一 圖郡〕若狹國分三三郡、曰遠敷、曰大飯、曰三方是也、拾芥抄曰、大飯郡分遠敷郡而置之矣、依之則上世分二二郡、其後爲三三郡一者歟、今世又私分遠敷郡而爲下中上中兩郡、併大飯三方四郡也、

〔若狹郡縣志一 郡〕遠敷郡

向若錄遠敷上下宮條下曰、本稱多太明神、想夫多字、倭訓遠敷之故、以遠敷換多字乎、本或作多郡、而後改遠敷郡乎、且聞、査火々出見尊神裔稱多氏、然則神裔來居此邦者、以郡爲氏、以其爲祖神之故、始祀査火々出見尊于此邦乎、古來郡中有鄕、○中略今世所稱、今富庄、名田庄、（有二四名、一宮、因古、木谷、知見鄕、多鄕等）松永莊、（有二東鄕四鄕等）玉置莊、三宅庄、瓜生庄、安賀庄、鳥羽庄、本庄、加茂庄、（有二宮川保）多良庄、國富庄、（有二太田保）西津鄕内庄、堅海庄等也、遠敷郡在大飯郡與三方郡之中間、故或稱中郡、今世分之而爲二郡、一則下中郡、一則上中郡矣、下中郡村數計有七十三、○中略又上中郡民村計有三十八、○中略下中上中兩郡村數都百十一ヶ村、戶六千八百五十三軒、口男女三万八千六十五人、是寬文六年之所定也、寺社及僧徒非斯限、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合墾田地玖佰參拾貳町○中略

若狹國乎入郡烏山佰町　四至○四至略中

右飛鳥淨御原宮御宇天皇○天武歲次癸酉年○二納賜者

大飯郡

〔若狹郡縣志一 郡〕大飯郡

在遠敷郡西、倭名類聚鈔大飯訓於保伊太、今世稱於保伊、拾芥抄大飯郡下曰、分遠敷郡置之矣、古來郡中有鄕、倭名類聚大飯郡下曰大飯、佐分、木津、阿桑（阿平）云々、按、志麻、佐文、木津、阿桑等出于遠敷郡下、

國府

年十二月廿二日給之、雖然忠季後年ニ還補了、年紀不知

〔倭名類聚抄 國郡五〕若狹國 國府在遠敷郡、行程上三日、下二日、

〔若狹郡縣志 國郡上〕國府　倭名類聚鈔曰、若狹國府在遠敷郡云々、相傳今之府中村之邊古之國府也、故至今或稱國府矣、○中略今世以小濱爲國府歟、

郡

〔倭名類聚抄 國郡五〕若狹國○註略○管三○註略　遠敷平不大飯於保伊三方美加太

〔延喜式 民部二十二〕若狹國 中、管 遠敷ヲニフ 大飯オホヒ 三方ミカタ 右爲近國

〔拾芥抄 本朝國郡中末〕若狹 中近 三郡、遠敷、大飯、分遠敷置 三方、

〔皇國郡名志〕若狹國 三郡

遠敷オニフ 小濱 若サ浦 ●中村 ●上子コリ ●日笠 ●熊川 丹江丹ノ界

大飯オイ ●本郷 ●青戸 ●高濱 ●笠原 ●川上 丹波丹後界

三方ミカタ 佐垣 ●左田 ●氣山 ●三方 越前界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕若狹

六國史	古書	延喜式	倭名抄	拾芥抄	諸書	郡名考	天保郷帳	明治初年帳	地誌提要	郡區編制
		三方ミカタ	同美加太	同	同國知元	同ミカタ	同	同	同ミカタ	同
	遠敷日本紀略	遠敷ヲニフ	同乎爾不	同	同國知元	同ヲニフ	同	同	同ヲニフ	同

光之ニ代リ、元中八年子詮範、山名氏淸ヲ伐チ功アリ、丹後ヲ加賜シ、孫義貫ニ傳フ、永享中、將軍義敎、武田信榮ニ命ジテ義貫ヲ殺シ、信榮ヲ以テ守護ト爲ス、相傳ル九世、元明ニ至リ、朝倉義景ニ合シテ織田信長ヲ拒ム、義景亡ビ、元明降ヲ乞フ、信長丹羽長秀ヲシテ州ヲ監セシム、天正十年、豐臣秀吉、元明ヲ近江海津ニ誘致シテ之ヲ殺シ、武田氏亡ブ、九世百四十餘年長秀因テ守護トナル、十三年、長秀卒シ、子長重嗣グ、十六年、秀吉之ヲ松任加賀ニ徙シ、淺野長政ヲ封ズ、文祿二年甲斐ニ轉封シ、其地ヲ分テ小濱ヲ六萬石木下勝俊ニ、高濱ヲ貳萬石其弟利房ニ賜フ、關原役畢リ、德川氏二人ノ封ヲ沒シ、京極高次ヲ封ジ、小濱ニ治ス、寬永元年子忠高、越前敦賀ヲ加賜ス、十一年、之ヲ出雲ニ徙シ、其故地ヲ以テ酒井忠勝ニ賜ヒ、拾萬石世襲ス、王政革新、改テ縣トシ、又廢シテ敦賀縣ヨリ變治ス、

〔先代舊事本紀十國造〕若狹國造

遠飛鳥朝〇允恭御代、膳臣祖佐白米命兒荒礪命定賜國造、

〔政事要略二十六十一月〕中卯新嘗祭事

高橋氏文云、六鴈命七十二年〇略 縉之秋八月、受病同月薨也、時天皇聞而大悲給、准親王式而賜葬也、於宣命使遣藤河別命、武男心命等、宣命云、〇中略 和加佐乃國者、六鴈命爾、永久子孫等可遠世乃國家止爲止、定天授介賜天文、此事波世々之遺和遂事、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年六月庚午、以從五位下大野朝臣廣立爲若狹守、

〔若狹國守護職次第〕一右大將賴朝御代

津々見右衛門次郎忠季守護領、當保一圓知行之、建久七年九月一日、守護本下司稻庭權守時定跡拜領之、但正治御下知、遠敷郡幷三方郡此內十六箇所、藤民部大夫行光朝臣、建仁三年十二月廿二日拜領之、元久元年八月廿九日忠季返給之了、又於遠敷郡內九箇所者、左兵衞尉藤原家長、建仁三

從川岸至西津村一十四町三十一間、又從南川岸沿川至川口三町二十七間半、一里一十三町二十一間至南川口八町五間、從川口至西津村、七町五十七間半、從西津至甲ヶ崎村二十二町四十六間半、阿納尻村至甲ヶ崎村字久坂五町五十四間、從字久坂歷若狹浦及堅海浦至松ヶ崎、二里二十八町一十五間半、又從字久坂至字久浦、一十二町一十五間、三里三十町一十八間至矢代浦一里三十町五十七間　田烏浦須ノ浦至黒崎一里五十六間　一十六町一十四間半

三方（ミカタ）郡世久見浦食見至岡鶴七町一十一間　一里九町一十間　鹽坂越（シホサカコシ）浦至三方村海山中湖傍七町四間　一里八間

小川浦歷常神浦アゴ崎、至早瀬浦大谷、三里三十二町二十七間、一里七町二十四間半　日向浦日向湖傍　一十一町五十三間　日向浦至白クリ崎一十六町四十二間　一十一町一十七間　早瀬浦至白クリ崎五町五十間　三十四町五十三間

和田村至外ノ濱三町一十二間　三十五町三十八間至佐柿村一十三町三十五間　坂尻村至黒崎一十五町四十四間　三里二十町

五十六間半　丹生浦至琴濱崎二十七町二十七間　四里九町六間至國界二十三町三十九間、從國界至サイノ崎、一里二町二十四間、越前國

敦賀郡手浦

宿驛

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬○中略

若狹國驛馬彌美、濃飯各五疋、

〔日本紀略桓武〕延暦十四年七月辛卯、遣左兵衛佐橘入居、檢近江若狹兩國驛路、

建置沿革

〔日本國郡沿革考二北陸道〕若狹　中國、管三郡、二百五十五村、

大飯七十四村、天長二年七月、割遠敷郡置、　遠敷百二十二村、古府治　三方五十九村

〔日本地誌提要三十六若狹〕沿革　古ヘ國府ヲ遠敷郡ニ置、今ノ府中村鎌府ノ時、惟宗忠季ニ今富莊ヲ賜ヒ、州守ニ任ジ、其餘郡邑ヲ以テ藤原行光、中條家長等ニ分與ス、寛喜ノ初、將軍藤原賴經、惟宗氏ノ邑ヲ收メ、北條經時ニ賜フ、爾後北條氏世本州ヲ領シテ京畿ヲ控制ス、北條高時伏誅ノ後、內大臣藤原公實國司トナリ、目代ヲシテ管理セシム、足利尊氏ノ反スル、族弟家兼及佐々木高氏ヲシテ之ヲ分轄セシム、興國中、家兼ノ兄高經守護トナリ、後山名時氏、大高重成、細川清氏、相繼テ守護ヲ領ス、正平十六年、清氏吉野ニ歸順ス、足利義詮、石橋和（カズ）義ヲ守護トス、二十一年、一色範

里(帶上兼總)
丹波國　至福智山十七里　至石橋十一里　至山家十六里　至濱部十六里　至園部二十四里　至笹山二十四里
丹後國　至田邊十一里　至宮津十七里　至峰山二十二里
越前國　至敦賀十一里　至府中二十三里　至福井廿八里　至松岡三十里　至丸岡三十一里　至大野三十五里

〔日本實測錄(三街道)〕從中山道圖原歷木本及匹田、至小濱〇(中略)
若狹國三方郡坂尻村　一里二十六町一十三間半(至佐柿村二十一丁二十三間)　氣山村寺谷(至下筒井三丁四間)　一十一町四十七間　氣山村(至中ノ筒井六丁四十七間)　二十町五十九間　三方村(至上ノ筒井一十丁一十四間)　一里三十三町一十八間　倉見村、三十五度二十九分、　二里二十二町二十四間　遠敷郡日笠村、三十五度二十八分、　二里六町二十八間　小濱廣小路(集圖原至小濱)街道通計二十七里一十一町九間、

〔日本實測錄(沿海一)〕從[illegible]國沿海至鞠山〇(本敦賀中略)
若狹國大飯郡上瀨村(至甲崎四町五十一間)　一十一町三十一間半　日引村、三十五度三十二分、　一里二十町二十間　神野村志津見濱(至神野浦徑濱四町五間半)　二十一町二十七間(至神野浦一十九町一十八間)　神野浦下濱(至小黑飯村徑濱二十五町五間)　三十一町二十六間半　音海村(至押廻一里六町五十七間半)　一里九町三十八間半(至鰐一町三十二間、從細谷至小黑飯村三十四町三十五間半)、　鯉波江村濱、(至鯉波江村宮所三町四十一間)　三十五度三十分半、　二里一十五町四十間(至高濱村一里一十二町四十五間半)　和田村(至大見村及大島村至赤崎、四里八町一十三間)、　一里一十八町二十一間　上下村濱(至上下村宮所三町九間)　三十五度二十八分、　三十町六間半　關津村(至本所村松原徑濱一十八町五間)　一里四町二間(至本所村松原二十九町一十六間)　飯盛村(至四勢村徑濱二十五町五十一間)　一里六町一十七間(至四勢村三十三町一十六間)　東勢村(至小濱廣路徑濱二十三町九間)　二十六町二十八間半　遠敷郡小濱[illegible]小路(歷廣小路至[illegible]木町、五[illegible]五間、北極高三十五度三十分、從[illegible]木町、[illegible]川[illegible]四町一十二間、)

〔若狹郡縣志 四一 郡〕隣國境界　遠敷郡、熊川村數百步東有大杉村、斯村中有一流澗水、以此爲近江若狹之境界、故大杉村半屬近江國高島郡、半屬若狹國、又池河內村南有坂徑、稱麻生坂、近江若狹之境界也、上根來村東南一里計有坂路、稱針畑越、近江若狹之境界、而入于朽木谷道也、永谷村鑪寇谷有坂路、謂佐布峠、近江若狹之境界也、同村別有一坂路、稱中山、是丹波與若狹之境界也、志見谷村有五波坂、超此則至丹波國桑田郡田哥村也、堂本村有高山、名八嶺、又稱血坂、是難險之山徑也、過此則出于同國桑田郡知見村也、納田終村之厄來峠、坂本村之田名坂等、皆丹波若狹之境界也、又大飯郡川上村之內大谷有澗道、過此則同何鹿郡强木村也、關屋村猪鼻山、亦丹波若狹之境界也、又青鄉有吉坂山、越此則至丹後國加佐郡吉坂村也、上鎌倉村之島越坂、下鎌倉村之澤山、下村之南無阿彌陀山、宮尾村之橫尾峠、日引村之大谷山峠、共丹後若狹之境界也、上瀨村八王坂、又丹後若狹之境界也、自斯所出于加佐郡田井村也、又三方郡佐田村、與敦賀郡關村之間山下有石、四角而屹立、斯石則爲若狹越前之境界也、自斯處至大飯郡吉坂丹後之境界、其間十七里三十町計也、

島嶼

〔日本實測錄 九 島嶼〕若狹國大飯郡　遠測　ハシカ島　名島　鳥島　イチ島　中クリ島　ハセキ小タリ　ハセキタリ　モトゞリ島　大根島　カッラ島　青島
遠敷郡　遠測　小島　二子島
三方郡　遠測　千島　ウデ島　御神島　辨天島

地勢

〔易林本節用集 下〕若狹 若州 中、管三郡、南北一日半、海近而有溫氣、魚鹽利饒多、以漆致貢、小上國也、
〔日本地誌提要 三十六 若狹〕形勢　山勢東ヨリ西ニ走リ、丹後ニ達ル、瀨海岬嶼錯出シ、疆域狹隘ニシテ平地少ク、土質磽瘠、風俗樸陋、能ク耕漁ヲ勉ム、

道路

〔若狹郡縣志 一 國郡〕隣國行程　從小濱
近江國　至朽木七里餘　至大溝十二里　至大津二十三里　至小室二十三里　至彥根十五

和名抄に若狹(和加佐、國府在遠敷郡)、名義いまだ考へ得ず、もしは字の如く、若々しく狹き國といふ義か、延喜神名式に、若狹國遠敷郡若狹比古神社二座(名神大)とあるは、この國に坐ゆゑの神號にや又はこの神より負し國名にや、本末をしらず、或書に引る風土記の逸文に、昔此國有男女爲夫婦、共長壽、人不知其年歲、容貌若而如少年、後爲神、今一宮神是也、因茲有若狹之名とあり、こもよしありげにきこゆ、

〔若狹郡縣志一(國郡)〕雄略天皇、勅覓美女於諸國、然無適意者、自斯國所獻之女、貌容美麗、而年齡又少、天皇見之、以其年少而愛之、故國名曰和加佐、一說、男女二人、自海鄕來住、無其知年歲者、然不老而如少年、依之國名曰和加佐、男女者夫妻、而上下神夾共國名風土記所載也、和加佐若狹、依語相同、蓋上下者遠敷神、而今稱若狹比古若狹比賣者、依國名也、

位置

〔地勢提要(北陸)〕各國經緯度(附里程)

若狹小濱(本町)極高三十五度三十分、經度東一分、從京都(中山道、自關ヶ原、經木本及足羽)一百四十里一十三町四十六間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

若狹　小濱　三五度二〇分〇〇秒　敦賀町　三五度三九分三〇秒(略〇中)

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒(略〇中)　若狹　小濱　中度與京都同

〔若狹郡縣志一(國郡)〕凡斯國、四方隣丹後、丹波、近江、越前等四國、而界山嶺、乾濱海、而北西兩國之船舶輻湊于茲也、

疆域

〔日本地誌提要(三十六若狹)〕疆域　東ハ越前、近江、南ハ近江、丹波、西ハ丹後、北ハ海ニ至ル、東西凡壹拾貳里、南北凡四里、

古事類苑

地部二十一

若狹國

若狹國ハ、ワカサノクニト云フ、北陸道ニ在リ、東ハ越前、近江、西ハ丹後、南ハ丹波、近江ニ界シ、北ハ海ニ至ル、東西凡ソ十二里、南北凡ソ四里、其地勢ハ、山嶺東北ヨリ西南ニ走リテ、丹波及ビ丹後トノ分堺ヲ成シ、沿海岬島ニ富ム、此國ハ古ヘ國府ヲ遠敷郡ニ置キ、遠敷(ヲニフ)、大飯(オホイヒ)、三方ノ三郡ヲ管シ、延喜ノ制、中國ニ列ス、郡數郡名爾後變改スル所ナシ、現今福井縣ヲシテ之ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄 五 國郡〕若狹 和加佐

〔饅頭屋本節用集 天地 和〕若狹(ワカサ) 若州

〔日本風土記 一 寄語島名〕若狹 脇(ワ)加(カ)撒(サ)

〔倭訓栞 前編 四十二 和〕わかさ 若狹國は腋狹の義成べし、國體しかり、

〔若狹舊事考〕此國に關る古事の始て書に見えたる趣を考るに、景行天皇の御世、膳臣の遠祖磐鹿六雁命に此國を賜ひて、子孫世々に傾きたりけるが、履中天皇の御世余磯といふに、稚櫻部といふ嘉號を賜ひけり、故その稚櫻てふ稱をやがて國名に負せて、和加佐と呼びたりけむが、(これより前の國名は考ふべき由なし)允恭天皇の御世、更めてその若狹の國造といふに、なされたるになむありける、

〔諸國名義考 下〕若狹

戸、配出羽柵戸、

〔續日本紀七元正〕養老元年二月丁酉、以信濃、上野、越前、越後四國百姓各一百戸、配出羽柵戸焉、

〔續日本紀八元正〕養老三年七月丙申、遷東海東山北陸三道民二百戸、配出羽柵焉、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年十一月丙寅、私鑄錢人王淸麻呂等四十人、賜姓鑄錢部、流出羽國、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年五月甲戌、勅出羽國曰、渡島蝦狄早効丹心、來朝貢獻、爲日稍久、方今歸俘作逆、侵擾邊民、宜將軍國司賜饗之日、存意慰喩焉、

〔諸州奇跡談下〕出羽國

羽州奥州にては、錢百文の通用に丁百を用ゆ、他國にては、九十六文にしてこれを百といふ、予羽州に下る折から、米穀高直なる由にて、米壹升の價ひ十一錢也、田畑甚だ廣大にして、苗代場處又は水付の田地は出來かたよろしからず、これによつて地を伏ると云て、空田所々に見へたり、又此國のことばに、賣女のことをやろこまかりと云由、

雜載

よし人の勸むるによりて、尾花澤より取つてかへし、其の間七里ばかりなり、日いまだ暮れず、麓の坊に宿借りおきて、山上の堂にのぼる、岩に巖を重ねて山とし、松栢年ふり、土石老いて苔なめらかに、岩上の院々扉を閉ぢて、物の音きこえず、岸をめぐり、岩を這ひて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄みゆくのみ覺ゆ、

　しづかさや岩にしみ入る蟬の聲〇中略

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責め、酒田の港より東北の方、山を越え磯を傳へ、砂子を踏みて、其の際十里、日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹きあげ、雨朦朧として鳥海の山かくる、闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色又たのもしと、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴るゝを待つ、其あした天よく晴れて、朝日花やかにさし出づるほどに、象潟に舟をうかぶ、先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の迹をとぶらひ、向ふの岸に舟をあがれば、花のうへ漕ぐとよまれし櫻の老い木、西行法師のかたみを遺す、江上に御陵あり、神功皇后の御墓といふ、寺を干滿珠寺といふ、此の處に行幸ありしこといまだ聞かず、如何なる事にか、この寺の方丈に坐して、簾を捲けば、風景一眼の中に盡くして、南に鳥海天をさゝへ、其の陰うつりて江にあり、西はむや／＼の關路をかぎり、東に堤を築きて秋田に通ふ路はるかに、海北にかまへて、波打ち入る處を汐越しといふ、江の縱横一里ばかり、俤松島にかよひて、又異なり、松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し、さびしさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり、

　きさかたや雨に西施がねぶの花

　汐越しや鶴はぎぬれて海凉し

〔延喜式二十兵部〕諸國健兒〇中略　出羽國一百人

〔續日本紀六元明〕和銅七年二月辛丑、始令出羽養蠶、　十月丙辰、勅割尾張、上野、信濃、越後等國民二百

風俗

内 四拾六万七千三百七人 男
　 四拾四万貳千八百四拾貳人 女

弘化三丙午年 諸國人數調 略○中

御料私領
一人數九拾壹万貳千四百五拾貳人　高百貳拾九万五千三百貳拾三石餘 出羽國

内 四拾七万五千七百四拾四人 男
　 四拾三万六千七百三拾八人 女

〔人國記〕出羽國

出羽之風俗ハ奥州ニ大體不替也、然ドモ奥州之風儀ヨリハ律儀ナル處有テ、知モ亦上也、武士ハ我主親ヘ忠孝之志有テ、下ヲ使フ之法ヲ沙汰シ、下輩ハ上ヲウヤマフ心有、百姓ハ地頭ヲ親ム心入有テ、他之村鄕之者、我類ヲ誹ルヲ聞テハ、則勝負ヲ付ルノ類ニテ、近ニ淵母數シホラシク有之所多ク有也、蓋シ此國之者、都而我國ハ遠國偏土ニ而カタクヘナキ國風成故、恥ケ數キ事ナド、云風俗ナリ、因茲奥出兩國之者ハ、四民トモニ磯厚キナリ、本奥出ノ兩國ハ、一國ヲ割リ出シタル國ト云傳ヘタリ、

名所

〔日本鹿子九〕同國中羽○略名所之部

最上川　奥州一番の早川也、古今大歌所の御歌、

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらず此月ばかり

象潟（キサカタ）　後拾遺旅のうたに、能因法師

世の中はかくてもへけりきさがたの海士のとまやをわが宿にして

角深山（スミノフカヤマ）　わくらはにとふ人もなき柴の戸にわが身ひとりはすみのふか山

宿鯨山（シンゲイ）　みや〳〵の國　補遺

當國は、舊記にとゞむる所の名所すくなし、世に人の志るところをのするものなり、

〔奥の細路〕山形領に立石寺といふ山寺あり、慈覺大師の開基にて、殊に淸閑の地なり、一見すべき

國產貢獻

出羽國、正税廿万束、公廨卅四万束、月山大物忌神祭料二千束、文殊會料二千束、神宮寺料一千束、五大尊常燈節供料五千三百束、四天王修法僧供養幷法服料二千六百八十束、健兒糧料五万八千四百十二束、修理官舍料十万束、池溝料三万束、救急料八万束、國學生食料二千束、

〈倭名類聚抄五國郡〉出羽國〈〇註略〉管十一〈中略〉正二十四萬四千三百二十束、公四十萬束、本穎九十一萬七千七百十二束、雜穎二十八萬三千三百九十二束、

〈延喜式二十三民部〉年料別貢雜物〈〇中略〉出羽國〈零羊角十具、紙麻一百斤、〇中略〉

交易雜物〈〇中略〉出羽國〈熊皮廿張、葦鹿皮、獨犴皮、數隨所得、〉

〈延喜式二十四主計〉出羽國〈行程上卅七日、下廿四日、〉海路五十二日、

調庸輸狹布、米穀、

〈延喜式三十七典藥〉諸國進年料雜藥〈〇中略〉

出羽國二種　甘草五斤、零羊角卅具、

〈毛吹草三〉出羽

最上紅花　青苧〈桑耳布ニ用レ之〉　蠟　漆　温石　油紙〈諸國ニ行〉　秋田紫根　干蕨　臭橮　霰煎餠　ハタハタ鮨〈鰺ニ似タル魚也〉　鹿皮　針金銕　錫　鉛　銀　田部煎海鼠　串鮑　昆布　庄內米　外濱鸕〈ウトウ〉

〈和漢三才圖會六十五出羽〉出羽國土產

紅花〈最上〇中略〉　狗背草〈秋田〉　臭橮　馬　尾花澤、有馬市、每歲六月中旬、引出奧羽兩國馬、買者奪價、而馬主不諾、則敲馬主之頭、一打則百錢、二打則二百錢、如踏仆則金一分增價、亦一興也、

人口

〈官中秘策四〉出羽國　十二郡〈〇中略〉

一人數八拾四万六千貳百五拾五人　內〈四拾七万九千貳百貳拾三人男　三拾六万七千三拾貳人女〉

〈吹塵錄五人口及國高〉諸國人數調〈文化元甲子年御料私領〉〈〇中略〉

一人數八拾七万百四拾九人　高百拾貳万六千貳百四拾八石餘　出羽國

田數石高

墾田

〈寛文十二年ヨリ佐竹壹岐守義長、以後代々領レ之、柳間、朝散大夫〉
岩城左京大夫［　］　二万石　居城羽州由利郡龜田〈城〉　江戸ヨリ百四十三里
〈慶長五年ヨリ岩城貞隆、以後代々領レ之、柳間、朝散大夫〉
織田兵部少輔信學　二万石　在所羽州村山郡天童〈テンドウ〉　江戸ヨリ九十七里
〈羽州村山郡置賜郡、明和四年、上州小幡ヨリ高畠ニ移ル、文政十三年、從レ是移レ之、帝鑑之間、朝散大夫〉
米津伊勢守政明　一万千石　在所出羽村山郡長瀞〈ナガトロ〉　江戸ヨリ九十八里
〈寛政十年ヨリ領レ之、〇中略、〉
（慶應元年武鑑）上杉駿河守勝道〈柳間、朝散大夫〉　一万石　在所羽州置賜郡米澤新田〈遠侍有國新〇江戸ヨリ七十五里〉

（倭名類聚抄〈五國郡〉）出羽國〈〇中略〉管十一〈田二萬六千百九町二段五十一步〉
（伊呂波字類抄〈伊國郡〉）出羽國〈管十一、〈中略〉本田二万六千百九十町三反五十步〉
（拾芥抄〈中末國郡部〉）出羽〈上、遠〉十一郡〈田三萬八千六百二十八町五反〉
（新撰類聚往來〈下〉）國名〈〇中略〉出羽〈羽州〉十一郡〈〈中略〉田數五万二百九十町〉
（海東諸國記）出羽州　有溫井、盧金、郡十、水田二萬六千九十町二段、
（前關白秀吉公御檢地帳之目錄）三十一万八千九十五石　出羽
（和漢三才圖會〈六十五出羽〉）十二郡　高八十七万石餘〈東山道〉
（官中秘策〈四〉）出羽國　十二郡〈〇中略〉
一石高百拾貳万六千貳百四拾八石餘
（吹塵錄〈五人口及國高〉）天保度御國高調〈〇中略〉
出羽國〈御料私領〉　一高百貳拾九万五千三百貳拾三石五斗貳升壹合四勺四才〈三百一本二五百二作少〉
（延喜式〈二十六主稅〉）諸國出擧正稅公廨雜稻〈〇中略〉

〔慶應元年武鑑〕佐竹右京大夫義就 大廣間 從四位少將 元治元子十二 二拾万五千八百石餘 居城出羽秋田郡久保田 江戸ヨリ百四十三里餘

代々領主、秋田城之助實季、同河内守俊季居、慶長十、佐竹左中將義宣、以後代々領之、

酒井左衞門尉忠篤 溜間格 四品 元治元子十二月叙 拾七万石 居城羽州庄内田川郡鶴岡 江戸ヨリ 笹屋通百廿四里 小坂通百廿里餘

最上領、元和八、酒井忠勝以後代々領之、

上杉彈正大弼齊憲 大廣間 從四位左中將上 元治元子五月任 拾五万石 居城羽州置賜郡米澤 江戸ヨリ七十五里

天正十八、蒲生飛騨守氏郷、慶長五、上杉中納言景勝、以後代々領之、

戸澤中務大輔正實 帝鑑間 四品 元治元子五月任 六万八千二百石 居城出羽最上郡新庄 江戸ヨリ百十里廿五町

住古最上出羽守義光、同駿河守家親、同源五郎領分、元和八、戸澤右京亮政盛、以後代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕水野和泉守忠精 從四位侍從 文久二戌六月任 五万石 居城羽州村山郡山形 江戸ヨリ 笹屋通九十四里餘 上山通九十二里餘

城主最上出羽守義光、同駿河守家親、同源五郎義俊、元和八、鳥居左京亮忠政、同左京亮忠恒、寛永十三、保科肥後守正之、正保元、松平大和守直基、慶安元、松平下總守忠明、同下總守忠弘、寛文八、奧平大膳亮昌能、同美作守昌章、貞享二、堀田下總守正仲、同三、松平大和守正矩、元祿五、松平下總守忠雅、同十三、堀田伊豆守正虎、同内記正春、同相模守正亮、延享三、松平和泉守乘佑、明和元、三州西尾替、同四、秋元但馬守凉朝、同但馬守永朝、同但馬守久朝、同但馬守志朝、弘化二ヨリ水野大監物忠經領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕松平山城守信庸 帝鑑間 朝散大夫 三万石 居城羽州村山郡上ノ山 江戸ヨリ九十三里

元和六、丹後守重忠、同丹後守重直、寛永三、松平中務大輔昌勝、同五、土岐山城守頼行、同左京亮頼長、同伊豫守頼殷、元祿四、松平越中守信通、以後領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕酒井大學頭忠良 帝鑑間 朝散大夫 二万五千石 居城羽州飽海郡松山 江戸ヨリ百卅里餘

寛文年中、酒井氏忠恒、以後領之、安永八年、蒙台命ニ、酒井石見守忠休、初領之、

六郷兵庫頭政鑑 柳間 朝散大夫 二万二拾一石餘 居城羽州由利郡本庄 江戸ヨリ百四十里餘

右並出之高、元和八ヨリ六郷氏代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕佐竹壹岐守義諶 柳間 朝散大夫 二万石 在所羽州秋田新田 江戸ヨリ百四十三里

莊

市中三十六丁にて、三千八百餘軒の地なり、町のあやふ皆々杉板の家根にて、上に石をかすく
ならべておしとなし、壁も板壁にして、ひさしは同じやふに一間餘も差出して、是を雪道と稱し
て、雪のふる節の通ひ路とす、往來筋には富饒に見ゆる家居もなく、かしこ爰に草よきの小家交
わりて、上方筋の城下と違ひて見苦し、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年正月六日辛酉、奥州故泰衡郎從大河次郎兼任以下、去年窮冬以來、企叛
逆、或號伊豫守義經、出於出羽國海邊庄、〇下略

〔羽前東根龍興寺鐘銘〕羽州中央、小田島庄、東根境致、白津之鄕、山號佛日、寺號普光、歸鐘六月、林鐘時
當、借爐炎熱、通冶風凉、一樣鯨骨、万斛銅湯、大解脱器、吸空肛腸、圓滿覺口、吐寺外方、天曉告報、地久天
長、日暮扣發、權僧吉辭、

正平十一年丙申六月廿四日
大檀那前備前守從五位上平朝臣長義
住持比丘圓雲叟叢季
願主比丘紹□
大工左衞門大夫宗弘

〔奥の細路〕南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊る、小黒崎美豆の小島を過ぎて、鳴子の湯より
尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす、〇中略あるじのいふ、是より出羽の國に、大山をへだ
てゝ、路さだかならざれば、道しるべの人をたのみて越ゆべきよしを申す、〇中略あるじの言ふに
たがはず、高山森々として一鳥の聲を聞かず、木の下茂りあひて、夜行くが如し、雲端に土降るこ
こちして、篠の中踏みわけ、水を渉り石に蹶き、肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ、

〔出羽國風土略記二田川郡〕大泉庄

按ずるに、田川郡のうちに有、今其分内詳ならず、庄内といふは、大泉庄内といへるの略稱也、〇中略
信正は義經記二にも大泉庄と有、飽海田河兩郡を言にや、又田河郡のみを言にや、右書の趣を考
ふれば、田河郡計を大泉といふにや云々、

年の六月は此地に來りて、冷氣の强きに驚し事也、朝夕の寒さは、江戶上方筋の十月霜月の時候に同じ、尤年にも寄る事にや、海内狹しといへども、かくのごとし、中華をおもふべし、此邊の稻のうへやふ中國におなじ、米の生せる事三百坪に直し、四斗五升入五俵宛はありと、土人物語り也、俗にいふには、稻作は暑氣の强からざれば生せず、冷氣の地には至てあしき事にいへども、奧羽の二州寒國にて、米國なるを以て知るべし、土地によるものならずや、

〔東遊雜記六〕十七日〇天明八年六月長谷堂村出立、三里餘畑谷村休、山形。止宿、御城主秋元攝津守侯六万石、城は平城にて、街道よりちらちら見ゆる計也、昔時は最上出羽守義光、家光、義俊居城にて、大いに繁茂せし所ゆへに、町の長サ壹里半餘、今は大に衰へて見苦敷町なり、端々に至ては、乞食小屋同前の家居なり、

〔東遊雜記七〕鶴が岡。は、酒井侯十四万石餘左衛門尉の御城地にて、御城下なり、昔時は大寶寺の城と稱して、最上義光居城有し時に、初て鶴が岡と改名す、庄内といふも此地の事なり、酒井侯政事正しく、淸川よりは、在々に至るまで民家のもやふ奇麗なり、富饒の百姓も數多見え、人足に出るものも衣服賤しからず、馬なども肥へふとり、かゝり美々敷、山川草木上々國の風土なり、十萬石も有なんと思ふ鄕中も見へ、これまで通行せし所々の及ぶ事にあらず、よき地の第一とおのおの評ばんせしなり、市中も寒國ゆへに板ぶき草ぶきの家居ながらも、會津の若松、二本松、白川、米澤、何れも十万石餘の城下なれども、鶴が岡にくらべ見れば、大に勝劣あり、酒田の津へ遠からざれば、上方筋への便りもよく、海魚も高直ながらも自由なり、城は往來よりは委しく見へず、ちらちら見ゆる計なり、

〔東遊雜記九〕久保田。は、昔時秋田城之助代々城主たりしに、今は佐竹侯の御城地にて、當主次郎侯と稱し、二十万五千八百石餘の諸侯にて、新羅義光の嫡流にして、諸侯の中にての歷家なり、〇中略

〔小早川家什書〕六小早河左衛門五郎入道性秋謹言上

欲早任宜旨狀賜國司御證判備後代龜鏡當知行所領出羽國由利郡小友村〈由利郡五郎地方跡〉事副進

御下文案

右所領者、性秋知行無相違之條、國中無其隱、若又以不知行之地稱當知行者、可被處罪科也、然早申賜御證判、爲備後代之龜鏡、仍言上如件、

元弘三年八月日

〔東遊雜記〕五八日〈○天明八年六月〉大澤出立、三里にて米澤城下に休、城主上杉彈正大弼侯、十五万石、城は平城にして、櫓を低く、寒國故に瓦は用ひがたきによりて、みな〳〵檜皮の家模、壁も板と見ゆ、予〈○古河辰〉思ふに敵を城外迄も引請ては、火災の防ぎ成まじきやふの城なり、定て心得も有べし、市中凡三千餘軒、大概の町にて豪家もある所也、然れども板葺草ぶきの家造りゆへに、上方筋の町と違ひて、きれいなる事なし、制度は何となく謙信侯の遺風殘りて、政事正敷聞へ侍る也、近郷の郷はひろ〳〵として、東西と南の方は嶮山并び立、奥州福島より越ゆるは、板谷峠と云し三里の間嶮しき登筋通にて、一人横たわれば万人を止るの所、南の方は會津より越ゆるを、〈出羽の方、檜木峠と云、奥州の方、檜原峠と云、〉此山道の嶮阻、筆紙に盡しがたし、峯を登りては雲に入かと思ひ、谷に下りては金輪際に入かと思ふ、蜀の棧橋たりとも是ほどには有まじと人々云し事なり、予按るに、奥州會津の地利は、出にはよく、敵を防ぐにはあしく、米澤は出るにあしく敵を防ぐによし、雙方よき事はなきものなり、兩所とも寒國ゆへに、十月頃よりは他方の往來しがたく、何事も不自由の事にて、東西ともに海をさる事三十里、海の生魚なく、產物には蠟とたばこ名產にてよし、予九州を遊行せし頃六月薩州にありしに、貴賤となく夏中は裸身にて、中以下の婦人は、他村へ行にも二布計にて裸にて行事也、予是を見て邊鄙の地、又夏中暖氣暑氣のたへがたき事には大ひに盡し事なるに、今

○天童　九十七里　○長瀞（トガトロ）　九十八里　⊠矢島　百三十里　生駒領三郡
⊠尾花澤百四里餘　∧大石田　船役所　∧寒河江　九十四里
∧柴橋　九十五里　∧幸生　銅山　∧東根　百里餘
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕出羽　十二郡二千四百四十三村
御料私領高百二十九万五千五百二十三石五斗二升一合四勺四才
置賜郡二百六十村　田川郡三百八十六村　飽海郡二百六十七村　村山郡四百三十村　最上郡百二十八村　秋田郡二百八十三村　河邊郡五十三村　雄勝郡八十六村　山本郡七十六村　平鹿郡百九村　由利郡百九十二村　仙北郡百七十五村

〔續日本紀 十二 聖武〕天平九年正月丙申、先是陸奥按察使大野朝臣東人等言、從陸奥國達出羽柵、道經男勝、行程迂遠、請征男勝村、以通直路、於是詔持節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿禰豊人、常陸守從五位上勳六等坂本朝臣宇頭麻呂佐等、發遣陸奥國判官四人、主典四人、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜七年五月戊子、出羽國志波村賊叛逆、與國相戰、官軍不利、發下總下野常陸等國騎兵伐之、

〔日本後紀 二十二 嵯峨〕弘仁二年七月辛酉、出羽國奏、邑良志閉村降俘吉彌侯部都留岐申云、己等與貳薩體村夷伊加古等、久構仇怨、今伊加古等、練兵整衆、居都母村、誘幣伊村夷、將伐己等、伏請兵粮、先登襲擊者、臣等商量、以賊伐賊、軍國之利、仍給米一百斛、獎勵其情者、許之、

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年七月十日癸卯、出羽國飛驛奏曰、（中略）秋田城下賊地者、上津野、火內、榲淵、野代、河北、腋本、方口、大河、堤、姉力、方上、燒岡十二村也、向化俘地者、添河、霜別、助川三村也、令此三村俘囚、幷良民三百餘人、拒賊於添河、又攻雄勝、後將侵府、其雄勝城承十道之大衝也、

村里名邑

河邊郡　川合　中山　邑知　五郡　大泉　稲城　片泉(〇片、高山寺本作存)、餘戸

田川郡　田川　甘禰(〇甘禰、高山寺本作其禰)、新家　那津　大泉

出羽郡　大窪　河邊　井上　大田　餘戸

秋田郡　添川　率浦　方上　成相　高泉

〔萩藩閥閲錄百二十四ノ二〕平賀九郎兵衛

讓渡安藝國高屋保、出羽國敎付鄕、今度勳功賞也

同國平賀郡内三梼鄕、蠛守鄕、

右所々者、兼宗之所領也、しかるを子息兵衛藏人貞宗に讓與ところ也、惣領として可令知行、但先年於田舍認置庶子面々讓狀畢、依天下動亂、若引失事もやとて、重書與者也、委旨可守先日讓也、仍之狀如件、

建武五年三月廿五日　遠江守兼宗(〇平賀)

〔白河證古文書〕一讓與所領等事

一出羽國餘部内　尾青村　淸河村　一同國狩河鄕内田在家(〇中略)

右於彼所領等者、相副手繼證文、所讓與孫子七郎左衛門尉顯朝也、不可有他妨、爲後日讓狀如件、

延元元年四月二日　道忠(花押)(〇結城宗廣)

〔郡名一覽〕出羽國　羽州　東西五十日　拾貳郡

高百拾貳万六千貳百四十八石八斗三升四合四勺　貳千四百貳拾七ヶ村

●米澤　七十五里　●久保田　百四十三里　●上山　九十三里

●庄内(百二十里鶴岡城)　●山形　九十二里　●松山　百二十里餘

●新庄(百十里十五町)二　●本庄　百四十里　●鶴山(百四十三里)

由利郡

（日本後紀十二桓武）延暦廿三年十一月癸巳、出羽國言、秋田城建置以來卅餘年、土地墝埆、不宜五穀、加以孤居北隅、無隣相救、伏望永從停癈、保河邊府者、宜停城爲郡、不論土人浪人、以住彼城者編附焉、

（出羽國風土略記八由利郡）延喜式第二十二卷、出羽國上管拾一鄕の中には、由利郡といふなし、但二十八卷出羽國傳馬の條下に由利六疋と有、此比は鄕里の名にして郡名にはあらず、五國史等にも由利郡といふ事見へず、和漢三才圖繪に、由利は後に郡數に加へ侍るとあれども時代見へず、予○遊佐和泉國史を見て考るに、上古は秋田郡の內なるべし、東は最上郡を隣とし、矢島領遣子村より家數百軒ほどあり荏村迄六里有、中央に山伏峠といふ有、遣子村より峠へ三里、峠より荏へ三里あり、兩郡の境に女こじき男こじきと云山貳ッ有、南は飽海郡三崎山大師堂を境とし、庄內領女鹿村と由利御領小砂川と、元祿年中、取替證文あり、西は海にして岩組亦濱地有、北は龜田領黑瀨村鵜田村を、由利郡兩郡の境とす、又同領內廣村を仙北の境とす、郡中一保十五鄕四通有、所謂一保ハ仁加保也、十五鄕ハ小菅鄕、內越鄕、子吉鄕、西目鄕、石澤鄕、瀧澤鄕、鮎川鄕、○往略玉米鄕、遣子鄕、直根鄕、大澤鄕、川內鄕、前鄕、內方鄕、以上矢島領是なり、四通といふは內越通、川內通、大正寺通、下濱通是也、龜田領也

鄕

（倭名類聚抄七出羽國）最上郡　郡可○郡恐郡誤　山方　最上　芳賀　阿蘇　八木　山邊　福有　梁田

大倉　村山　長岡　大山　福岡○高山寺本梁田以下六鄕無、蓋此六鄕村山郡鄕名之重出、宜刪、

村山郡　大山　長岡　村山　大倉　梁田　德有

置賜郡　置賜　廣瀨　屋代　赤井　宮城　長井　餘戶

雄勝郡　雄勝　大津○大、高山寺本作本、　中村　餘戶

平鹿郡○平鹿郡、高山寺本作山本郡、　山川　大井　邑知　山本　塔甲　御船　盤刀　餘戶

飽海郡　大原　飽海　屋代　秋田　井手　遊佐　雄波　日理○日理、高山寺本作由理、　餘戶

御公料也、其内給料も有、末に記、以上二十二組也、是を五通とす、京田通、山濱通、稲川通、中河通、狩川通是なり、○中略羽源記五卷、東朝日山軍酒内出張の條下に、飽海田川三庄三郡の兵共と有、三郡といふは、近代は田川櫛引、飽海三郡とも云り、慶長四年、飽海觀音寺殿、小助河への書狀にも、櫛引郡と有、

秋田郡

〔續日本紀元明四〕和銅元年九月丙戌、越後國言、新建出羽郡、許之、

〔續日本後紀仁明八〕承和六年十月乙丑、出羽國言、去八月廿九日、管田川郡司解偁、此郡西濱達府之程五十餘里、本自無石、而從今月三日、霖雨無止、雷電鬪聲、經十餘日乃見晴天、時向海畔、自然隕石、其數不少、或似鏃、或似鋒、或白、或黑或青赤、凡厥狀體鋭皆向西、莖則向東、詢于故老、所未曾見、○下略

〔郡名考〕出羽　秋田アイタ　アキタ

〔出羽國風土記秋田郡九〕河邊郡の東にして、東に太平山といふあり、此山の麓より北に當て山本郡あり、太平山より秋田郡中へ流出る川あり、北出河といふ、見國史、上古は齶田、或飽田、秋田とも書り、出羽國の號未出以前の大郡にして、東蝦共稱し、陸奥とも一國成りしと見へたり、以國史地理を推に、河邊由利飽海等は當郡の内成べし、古へ此邊無五穀、蝦夷漸王化なれて、初て水田を營、稻を植たる所より、飽田秋田ともいふ名出しにや、齶或秋の字を書たるは、和訓イトキヤト横音通るを以書たる成べし、

渟代郡

〔日本書紀齊明二十六〕四年四月、阿陪臣名闕率船師一百八十艘伐蝦夷、齶田。渟代。二郡蝦夷望怖乞降、於是勒軍陳船於齶田浦、齶田蝦夷恩荷進而誓曰、○中略隨清白心仕官朝矣、仍授恩荷以小乙上、定渟代津輕二郡郡領、　七月甲申、蝦夷二百餘、詣闕朝獻、饗賜贍給有加於常、仍授柵養蝦夷二人位一階、渟代郡大領沙尼具那小乙下、或所云授位二階使檢戸口、少領宇婆左、建武勇健者二人位一階、○中略又渟代郡大領沙尼具那、檢覆蝦夷戸口與虜戸口、　五年三月、是月遣阿倍臣名闕率船師一百八十艘、討蝦夷國、阿倍臣簡集飽田渟代二郡蝦夷二百四十一人、其虜三十一人、○中略於一所而大饗賜祿、

〔出羽國風土略記 五飽海郡〕田河郡の北にあり、東北は山也、西は海也、南は大河有、兩郡の境也、○中略郡中遊佐若瀬平田辻三郷有、郡中の大村を酒田といふ、万民出て用を達す、家數六千餘有、

〔郡名考〕出羽 河邊カハノヘ ノヘト訓 カハヘ

〔出羽國風土略記 八河邊郡〕小郡也、秋田郡を發別たる所にや、五國史等に當郡之事跡不詳、延喜式第二十二卷、出羽國上管十一郡之内に河邊と有、平鹿郡南之方より流出る河有、郡の內を流て、北の方秋田領へ流入、郡民河の兩端に居を構たる地成故に、河邊郡といふ成べし、河筋當郡を過ては秋田河といふ河上は南也、下は秋田也、三代實錄、陽成天皇元慶二年、夷賊討伐之爲に、官兵を下し給ふ條下に、凡秋田河南、拒賊川北と有、川南は河邊、川北は秋田也、河邊共秋田殿領也、其內龜田殿領一ケ村有、向野村といふ、龜田領猿田村の下に北山村といふ有、河邊郡に屬す、戸島村新庄領堺村へ四里久保田へ三里有佐竹殿御上下の節、山宿の殿舍有、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年八月乙卯、出羽國鎭狄將軍安倍朝臣家麻呂等言、○中略寶龜之初、國司言、秋田難保、河邊易治者、當時之議、依治河邊、然今積以歲月、尙未移徙、以此言之、百姓重遷明矣、宜存此情歷問狄俘幷百姓等、具言彼此利害、

〔出羽國風土略記 一〕出羽の號、後に國號と成し以來、出羽郡を田河郡と改稱せしと見へたり、藤島組の內に古郡村といふ有、新郡に對する名にや、此所羽黑山に近し、羽黑は伊氐波の神社也、伊氐波は出羽の万葉書也、此神延喜式に田河郡に屬す、是改稱の證據か、又此邊に越後京田といふ邑在、出羽郡は古へ越後の內なりし故、斯る名も殘りしにや、

〔出羽國風土略記 二田川郡〕當時二十二組あり、內五組は御公料也、所謂二十二組は、田川組、京田組、本郷組、靑龍寺組、島組、田澤組、房川組、由良組、溫海組、淀河組、加茂組、横山組、藤島組、添河組、狩河組、淸川組以上、酒井左衞門尉殿領地也、組々に大庄屋有、松山組、酒井石見守殿領知也、余目組、上余目組、下余目組丸岡組、大山組、余目以下五組

扱に、仙北の二字雄勝平鹿山本三郡の總號にして、往古一郡の名に非る事、第一卷并前件にも記し、土人に聞に、寛文四年辰山本郡を仙北と改といへども、東鑑文治元年條に、出羽國山本郡と有、ば、郡名に用たる事も近代の事とは不見、但近年米澤上杉家より寫し出たる圖繪圖を見るに、當郡を山本郡と記し、（土人寛文年中、山本郡を仙北と改といふも、此說によれば據有に似たり、仙北郡といふ事、上杉家の圖繪圖には見へず、）今の山本郡をば檜山郡と記す、檜山は郷名にして郡名にはあらず、是のみならず郷名を郡名にしたる所二三ヶ所有、

〔出羽國風土略記一〕出羽國（中略）國史を考れば、仙北は古山北と書て、郡名とは見へず、三代實錄元慶四年二月二日、先是出羽國云、管諸軍中、山北雄勝、平賀、山本三郡、遠去國府、近接賊地、云々、山北は郡名にあらざる故に、三郡とは書しなるべし、郡名ならば四郡と書べき所也、（中略）土民、庄内三郡と言るも據有に似たり國府より北に當て鳥海山有、（中略）雄勝、平鹿、山本三郡は鳥海山の後にして、國府より北に當るが故に、山北とは稱したるにや、又出羽は、東山道の內にて、三郡は北にあたれば山北といひしにや、近年關板の節用集に、山北を郡數に入ざる事、三代實錄に叶へり、但東鑑十卷、文治元年正月の條下に、出羽國山北郡とあり、又千蟲山本共あり、先年彼地の土人より來る文に、仙北平鹿郡とあり、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月十日癸卯、出羽國飛驛奏曰、（中略）其雄勝城承十道之大衝、也、國之要害尤在此地、仍遣左馬大允藤原滋實、左近衞將曹良標大目茨田貞額等、以雄勝平鹿山本三郡不動穀、給郡內及添河霜別助川三村俘囚、獲其心、令相勵勉、（下略）

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年二月廿五日己酉、先是出羽國言、管諸郡中、山北雄勝平鹿山本三郡、遠去國府、近接賊地、（下略）

〔郡名考〕出羽　飽海アクミ　アクミ

也、和銅五年十月より當國に屬す、此事續日本紀に見へたり、

雄勝郡

〔出羽國風土略記 九雄勝郡〕河邊郡の南に有、山を境とも、俗仙北といふ、仙北の事愚考第一卷に志るす、雄勝は元一ヶ村の名也、（義經記、康平元年軍の事を引侍る條下に、源氏攻せめ給ひしかば、おかしの山を打越てといふは、雄勝の事とぞ、吉野本におかちと有よし、私經記大全に見へたり、）

〔續日本紀 十一 聖武〕天平五年十二月己未、出羽柵遷置於秋田村高清水岡、又於雄勝村建郡居民焉、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延暦二年六月丙午朔、出羽國言、寶龜十一年、雄勝平鹿二郡百姓、爲賊所略、各失本業、彫弊已甚、更建郡府、招集散民、雖給口田、未得休息、因茲不堪備進調庸、望請蒙給優復、將息弊民、勅給復三年、

平鹿郡

〔出羽國風土略記 九平鹿郡〕河邊郡の東、雄勝の下に在て、秋田河の水上なり、和名抄に國府あり、平鹿郡行程四十七日下二十四日云々、三代實錄國府在出羽郡といふ事、第一卷に記す、和名抄の趣誤也、延喜式二十四卷、出羽國行程上四十七日、下二十四日、海路五十日と有、是出羽府よりの行程といふ、上下の日數不同の事は、上には東海道、下には北國と定めけるにや、海路五十二日と有は、船路の日和を待て日數を經る故成べし、和爾雅、出羽國名所の內に、平鹿とあり、又國名風土記に、平鹿廄と有、國史を見るに、當國に官人を置れし事度々なれども、當郡にも官人の居館有て、名を負ひし所と見えたり、庄內物語に、田河郡大山城主武藤家、代々田河飽海平鹿の三郡を領すと有、田河飽海を領せられし事は、誰も能知る事也、平鹿郡を領せられし事は未考、

〔續日本紀 二十二 淳仁〕天平寶字三年九月己丑、始置出羽國雄勝平鹿二郡、玉野（○中略）等驛家、

山本郡

〔出羽國風土略記 九山本郡〕秋田郡の東北に有、（○中略）上古は渟代郡の內成べし、地理を見るに、當郡は高岳山によれり、故に山本郡といふ成べし、

仙北郡

〔出羽國風土略記 九仙北郡〕村數百七十二ヶ村、當郡に眞晝嶽とて高山有、土人鬼住山といふ、

所にして、一郡の名に用ひける成べし、今山形の四方十里程の間を最上郡とす、又最上郡北と書たるもの數多有、村山郡と改稱の後も、土人呼馴たるは最上郡ともとなへ來りしにや、八九十年以前には、十が七ッ最上郡といふ、村山郡と書たる者也、百十四年前慶安元年、山形の兩所權現へ被下たる御朱印にも、最上郡と有、又寛文五年の御朱印にも最上郡と有、貞享年中より始て村山郡山形兩所權現と被下置けるとぞ、貞享以來は、別て文明の世と成、國史も開板せられ、遠國迄も流布侍れば、分最上郡置村山郡と有るを勘合せられし人有之、御朱印にも村山郡と書改し成べし、三代實錄五十卷、仁和三年四月二十日條下に、最上郡大山鄕保寳志野と有、上下略、但寳と有は、當時の事にあらす、仁和二年より先の事にて、村山と改ざる前の事と見へたり、此野に出羽府を移さんと、國司より奏したる所也、然れ共勅許なかりき、其文第一卷に記す、其文中に、最上郡地在國南邊、有山而隔、自河而通と有、是は出羽郡の府より、大山鄕の方角をさしたる詞也、山形の地、出羽府より南に當り、地理方角國史に符合す、又當方山ノ字を以名とせし所多し、村上、上ノ山、山形等是なり、予○謹案和泉按に、往古は大山鄕と書しぞ、後に山縣と稱し、又山形と轉訛せしにや、

〔延喜式民部二十二〕出羽國
頭註
仁和二年十一月十一日、分最上郡置村山郡、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年十一月十一日丙戌、勅分出羽國最上郡為二、

〔奥羽觀跡聞老志羽州十三〕村上郡

此地乃古之河邊郡也、上山、山形、延澤城地、並藏王、熊野、大鳥、朝日山岳、及宿世山、千年山阿古耶松國

山、立石寺等在此郡中、

〔出羽國風土略記置賜郡十〕村山郡の南に有、東は奥州桑折領を境とす、南に奥州會津有、西は越後に當る、西北へ入込て下永井郷といふ有、置賜郡の内にして、地は奥州に屬す、當郡上古は陸奥の内

置賜郡

後		
淳代紀		
		羽闕 書十一
		同
		羽闕 十一郡
	檜山 山本 元	
	山本ヤマモト	羽闕 十二郡
	同	同
	同	
	同ヤマモト	八郡
北秋田	同	九郡

最上郡

〔出羽國風土略記最上郡十〕當郡は大郡にして、もとは奥州の内也、和銅年中、當國に屬す、東の方は山にして、奥州仙臺領に隣、南には村上郡有、西は飽海郡にして、最上河流下る、北は由利矢島領に隣、四方重山連也、山を以て境とす、地理を見るに、當郡仙北歟郡の上に有故に、最上とは稱しけるにや、物を稱して最上といふ事數多あり〇中略當郷村等の事未考、高六万八千貳百石、戸澤上總介殿代々領之、郡中の大邑を新庄といふ、又奥州境の方に西新庄といふ有、新庄よりは東の方也、奥州よりは西也、是を以て考れば古陸奥に屬したる頃、是に對する庄有之、新庄とは云けるにや、

〔續日本紀聖武十二〕天平九年四月戊午、遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言、〇中略從賀美郡至出羽國最上郡玉野八十里、雖總是山野、形勝險阻、而人馬往還、無大艱難、

村山郡

〔出羽國風土略記村山郡十〕最上郡の南に有、村山の東の方奥州仙臺に隣る、小坂峠不動の手前に大木有、是を奥羽の境とす、西には越後と、當國の田河郡あり、北は新庄領也、四方各山を以境す、大郡にして四十万石餘有、此内御公料あり、御私領六ヶ所有、上の山領、山形領、松山領、飽海郡肥前島原領、宇都宮領、奥州棚倉領是也、三代實錄四十九卷、仁和二年十一月十一日丙戌勅に、出羽國最上郡爲二といふは、當郡の事也、延喜式二十二卷、仁和二年十二月十一日條下に、分最上郡置村山郡と有、同驛馬の條下を見るに、村山はもと一ヶ村の名にして、驛路と見へたり、山に始て村を建たる

断			羽						
					小勝				勝田
			飽海		雄勝	平鹿	山本	河邊	秋田
			同		同	同	同	同	同
			同		同	同	同	川邊	同
			同	由利 由理	同	同	山本 仙北	川邊 河邊	同
			同	由利	同	同	仙北	川邊	同
			同	同	同	同	同	河邊	同
			同	同	同	同	同	同	同
		四郡	同	同	同	同	同	同	同
西村山	北村山	十郡	同	同	同	同	同	同	南秋田

（郡名異同一覽）

羽

	置賜	田川	出羽	最上	村山
六國史古書				最上 續三代實錄仁和二年十一月分二最上郡一爲レ二	
				最上	村山
延喜式	置賜（オイタム）	田川（タカハ）	出羽	最上（モガミ）	村山（ムラヤマ）
倭名抄	同（於伊太三）	同（多加波）	同	同（毛加美）	同（牟良也末）
拾芥抄	同	同	同	同	同
諸書	同（无(?)）	同（訓无(?)）	出羽（訓(?)） 備(?)引	同（訓无(?)）	同（訓无(?)）
郡名考	同（ライタマ(?)）	田川（タカハ）		同（モガミ）	同（ムラヤマ）
天保郷帳	同	同		同	同
明治沿革帳	同	同		同	同
地誌提要	同（オイタマ）（[illegible]）	同（タガハ）		同（モカ(?)）	同（ムラヤマ）
郡區編制	西置賜　東置賜　南置賜	東田川　西田川		同	南村山　東村山

（出羽國風土略記一）出羽國略○中類聚抄又近年開板の節用等にも上管拾二郡とす、延喜式に所謂拾一郡に由利を加へて拾二郡也、庄内物語を引て云、出羽拾二郡は、田河、飽海、河邊、村山、置賜、雄勝、平鹿、秋田、最上、山本、仙北、由利、出羽府、今通じて斯のごとくいへれど、出羽府といふを合すれば拾三郡なる事を訝る、古への節用集にも、右の十三所を擧て拾三郡と書る有、近年開板の節用には、仙北を除て拾二郡とす、國史を考れば、仙北は古へ山北と書て郡名とは見へず、三代實錄元慶四年二月二日、先是出羽國云、督諸軍中山北雄勝平賀山本三郡、遠く去國府、近く接賊地云々、山北は郡名にあらざる故に、三郡とは書しなるべし、郡名ならば四郡と書べき所也、

（皇國郡名志）出羽國舊十一郡今十二郡

最上（モガミ）〈新庄〉舊シ今無　●金山　●舟方奥界　●清水　●楯岡

村山（ムラヤマ）〈山形〉●長崎　●寒河〔上山〕　●天童最上川　●立岡　●古口奥界　●砂越　●湯鹽　●川口

置賜（オイタマ）〈米澤〉●玉川　●宮　△今ノ關文殊　●鮎日　●赤湯奥界館　●小岩澤　●萩生　●小松　●口澤

雄勝（ヲカチ）●院内　●湯澤　△小野小町古跡奥界

山本（ヤマモト）〈角館〉●上檜木　〈生保内〉　●金澤奥界　●六郷　●大田　●刈和野　●田澤

飽海（アクミ）〈庄内鶴ケ岡〉●吹浦　△湯殿、月山、羽黒、　〈田麥俣〉　●本楯　△鳥海山　●丸岡西　●清川西海　●山寺　〈松山〉●坂田　●小砂川

平鹿（ヒラカ）〈横手〉　國中山ノ小郡

豊島（トシマ）●堺　國中ニテノ小郡

田河（タガハ）●尾浦　●黒崎　海邊ノ小郡

秋田（アキタ）〔久保田〕●今泉　●男鹿島　●大久保　●船越西海　●檜山崎郡　〈大館〉　●小阿　●井上島　●八子

由利（ユリ）〔本庄〕●長濱　〈龜田〉●西三川　●矢島西海　△岸岡　●杉崎

檜原（ヒハラ）〈野代〉●鷹巣　●入島　●比館奥界西海、

今書ニ檜原由利二郡、舊有ニ出羽郡、今省之、
豊島一名日河邊郡

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ將載ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

郡井口地、即是去延暦年中、陸奥守従五位上小野朝臣岑守、據大將軍従三位坂上大宿禰田村麻呂論奏所建也、去嘉祥三年地大震動、形勢變改、既成窪泥、加之海水漲移、迫府六里所、大川崩壊、法溢一町餘、兩端受害、無力隄（○隄原脫、據一本補、）塞、淹沒之期在於旦暮、望請遷建最上郡大山郷保寶士野、據其險固、避彼危殆者、太政大臣、右大臣、中納言兼左衛門督源朝臣能有、參議左大辨兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相、於左仗頭、召民部大輔惟良宿禰高尙、大膳大夫小野朝臣春風、左京亮藤原朝臣高松等、問被遷國府之利害、所言參差、同異難定、更召伊豫守藤原朝臣保則、以高尙等詞、問之、保則言、國司所請、非无理致、保則高尙等元任彼國吏、應知土地之形勝、故召問之、太政官因國宰解狀、討覈事情曰、避水遷府之議、雖得其宜、去中出外之謀、未見（○謀未見原作因、據一本改、）其便、何者最上郡地在國南邊、有山而隔、自河而通、夏水浮舟、纔（○纔原作綠、據一本改、）有運漕之利、寒風結凍、曾无向路之期、況復秋田雄勝城相去已遠、烽候不接、又舉納秋穫、國司上下、必有分頭、入部率衆、若赴沼水、而後泝水面、還有徵發之煩、更倍於尋常、運送之費、將加於黎庶、晏然无事之時、縱能兼濟警急、不虞之日何得周施、以此論之、南遷之事難可聽許、須擇舊府近側高敞之地、閑月遷造、不妨農務、用其舊材、勿勞新採、官粮之數不得增減、勤宜依官議早令行之、

〔最上系圖〕彙類　修理大夫

出羽按察使、延文元丙申年八月六日、出羽國最上郡府中山形入部、康曆元年六月八日卒、○下略

〔倭名類聚抄五國郡〕出羽國（○註略）管十一（○註略）最上（毛加美）村山（牟良夜末）置賜（於伊太三）雄勝（乎加知、有城、郡之訓合、）平鹿（比良加）山本（也末毛止）飽海（阿久三）河邊（加波乃倍）田川（多加波）出羽（國府）秋田（阿伊大、有城、）

〔延喜式二十二民部〕出羽國、上、管　最上（モカミ）村山（ムラヤマ）置賜（オイタマ）雄勝（ヲカチ）平鹿（ヒラカ）山本（ヤマモト）飽海（アクミ）河邊（カハノヘ）田川（タカハ）出羽　秋田　右爲遠國

〔和漢三才圖會六十五出羽〕十二郡（○中略）

元明天皇和銅五年、割陸奥越後二國、爲出羽、延喜式倭名抄並爲十一郡、後加增山利郡、爲十二、

國府

戊辰〇明治元年十二月七日御布告

奥羽兩國ハ、曠漠僻遠之地ニシテ、古來ヨリ教化洽ク難及儀モ有之候ニ付、今般兩國御取調之上、府縣被設置、廣ク教化ヲ施シ、風俗移易、人民撫育之道、厚ク御手ヲ被爲盡度思食ヲ以テ、〇中略出羽國ヲ、羽前羽後ト二國ニ分國被仰付候條、此旨可相心得事、〇中略

羽前國

一高二十一萬六千百六十一石二斗二升二勺三才　置賜郡　一高三十六萬六千百四十七石一斗三升五合九勺七才　村山郡　一高六萬二千三百八十七石四斗五升三合八勺　最上郡　一高十五萬九千八百七十三石八斗八升三合七勺四才　田川郡

右四郡　高合八十萬四千五百六十九石六斗九升三合七勺四才

羽後國

一高二十三萬四千三百二石三斗五升六合一勺四才　飽海郡　一高八萬四千七百十九石九斗六升　秋田郡　一高二萬二千八十三石一斗五升四合　河邊郡　一高九萬三千六百十一石七斗九升四合　仙北郡　一高五萬四千八百三十六石七斗六合　雄勝郡　一高二萬八千四百五十三石六升三合　山本郡　一高五萬九千九百五十石二斗九升二合　平鹿郡　一高七萬二千六百七十石三斗八升六合三勺　由利郡

右八郡　高合六十五萬六百二十七石七斗一升一合四勺四才

〔倭名類聚抄五國郡〕出羽國〈國府在平鹿郡、行程上四十七日、下二十四日、〉

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年十月癸酉、出羽國言、蝦夷餘燼猶未平殄、三年之間、請鎭兵九百六十六人、且鎭要害、且遷國府、勅差相模武藏上野下野四國兵士發遣、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年五月二十日癸巳、先是出羽守從五位下坂上大宿禰茂樹上言、國府在出羽

〔先代舊事本紀 十國造〕出羽國造

諸羅朝 〇元明御世、和銅五年割陸奧越後二國始置此國也、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年九月丙戌、越後國言、新建出羽郡、許之、

〔續日本紀 五元明〕和銅五年十月丁酉朔、割陸奧國最上置賜二郡隸出羽國焉、

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年九月乙未、從三位中納言巨勢朝臣萬呂言、建出羽國已經數年、吏民少稀、狄徒未馴、其地膏腴、田野廣寬、請令隨近國民遷於出羽國、教喩狂狄、兼保地利、許之、因以陸奧置賜最上二郡、及信濃、上野、越前、越後、四國百姓各百戶隸出羽國焉、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應置陰陽師一員事

右得出羽國解偁、太政官去年六月十一日符偁、國解偁、邊要之事、備豫爲本、不虞之備、知機爲先〇先原作元、據一本改、此國與陸奧共爲邊戎、雖復國有大少官員有降差、而至決嫌疑何彼有此無也、假令國內非無怪異、占候吉凶、曾無其人、望請永減史生員、殊置陰陽師、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請者、而今雜務繁多、官員減少、望請不省史生、殊〇殊原脫、據一本補、置件員、但考選俸料准博士醫師者、同宣、奉勅依請、

嘉祥四年二月廿一日

〔羽奧永慶軍記 一〕奧州兵亂之起ノ事

陸奧出羽ノ兩州數代斷鎭守府按察使ヲ得テ、天文ノ比ニハ國司探題ノ人モナケレバ、兩國ノ武家我意ニ任ゼズトイフ事ナシ、〇中略羽州ニハ、最上、天童、大梵字、武藤ノ一族、北國ノ一黨、山北ニ小野寺、六鄕、楢岡、角館、秋田ニ城介、淺利、久平、由利ニ十二黨、或時ハ舊好ノ交ヲ結ビ、或時ハ怨敵ノウラミヲ構フ、

〔憲法類編 十國郡府縣〕奧羽兩國ヲ七國ニ分國ノ事

徙シ、上杉景勝ニ賜フ、關原役畢リ、德川氏景勝ノ封ヲ削リ、僅ニ米澤ヲ賜ヒ、小野寺義道ノ地ヲ收メ、秋田六郷戸澤等ノ封ヲ徙シ、莊内三郡及仙北ヲ以テ義光ニ加賜シ、佐竹義宣ヲ秋田、(又久保田ト稱ス)ニ徙封シ、六郡ヲ領セシム、元和中、最上氏ノ地ヲ削テ近江ニ徙シ、山形ヲ以テ鳥居忠政ニ賜ヒ、(後及封數氏、最後水野忠精ヲ封ズ、)酒井忠勝ヲ鶴岡、六郷政乘ヲ本莊、戸澤政盛ヲ新莊、岩城吉隆ヲ龜田ニ封ズ、其後前後封ヲ受ル者、上山、(カミノヤマ)(初松平重忠、後松平信通、)高畠、(織田信浮、後天童ニ徙ル、)長瀞(ナガトロ)(米津通政、後久留里ニ徙ル、)トナス、上杉、佐竹、酒井支封各一、米澤新田、(上杉綱憲ノ第三子勝周)秋田新田、(佐竹義長、後岩崎ト稱ス、)松山、(酒井忠勝ノ第二子忠恒)凡テ十三藩、明治紀元、米澤、(上杉齊憲)鶴岡、(酒井忠篤)上山(松平信庸)等、皆若松藩ノ黨援タルヲ以テ削封差アリ、全州ヲ分テ羽前羽後ノ二州トス、羽前八藩、(米澤、鶴岡、山形、新庄、上ノ山、天童、長瀞、米澤新田、)鶴岡藩ヲ若松ニ徙シ、尋デ復封シテ大泉ト稱ス、長瀞藩ヲ上總ノ大網ニ徙シ、(尋テ常陸ノ龍崎ニ徙ル)山形藩亦近江ニ徙リ、山形縣ヲ置ク、既ニシテ皆廢シテ縣ト爲シ、更ニ合併シテ山形置賜二縣ヲ置ク、羽後五藩、(秋田、松山、本莊、岩崎、龜田、)矢島ノ生駒親敬新ニ藩屏ニ列シ、松山ヲ改テ松嶺ト稱シ、凡テ六藩、既ニシテ皆廢シテ縣ト爲シ、又合併シテ秋田酒田二縣ヲ置、

〔續日本紀 五元明〕和銅五年九月己丑、太政官議奏曰、建國辟疆、武功所貴、設官撫民、文教所崇、其北道蝦狄、遠憑阻險、實縱狂心、屢驚邊境、自官軍雷擊、凶賊霧消、狄部晏然、皇民無擾、誠望便乘時機、遂置一國、式樹司事、永鎭百姓、奏可之、於是始置出羽國、

〔日本書紀 二十六齊明〕元年七月己卯、於難波朝饗北。(北越。)蝦夷。九十九人、東(陸奧)蝦夷九十五人、并設百濟調使一百五十人、仍授柵養蝦夷九人、津刈蝦夷六人冠各二階、

〔古事記傳 二十七〕北、蝦夷とは、越國に在者、東、蝦夷とは、陸奧に在者を云、さるは越國にも、陸奧の如く、北邊には蝦夷渡來て、多く居住りしなり、越、北邊とは出羽國の地なり、○中略されば越蝦夷と云は、出羽の地に在し者を云なり、

磯嶋、不宜孤居北隅無隣相救、伏望永從停廢、和名抄云、有城謂全治、蒲生秀實曰、古有出羽柵、和同二年令諸國運兵器于出羽柵、爲征戰夷也、天平五年十二月徙置出羽柵于秋田村高清水之岡、蓋有議未徙、至寶字三四年而徙焉、延暦廢城爲郡、厥後復置秋田城、未詳在何世、按最後置城之時、非復廳郡、以今所治稱可知也、

河邊五十三村　雄勝八十六村作男勝、天平五年十二月、於雄勝村建郡居民焉、和名抄云、有城郡之答合、

山本七十六村　平鹿百九村古國府　由利百九十二村、延喜式等不載、置未詳在何時、

仙北百七十五村同上　出羽延喜式等載、後廳、未詳在何時、

〔日本地誌提要三十四羽前〕沿革　羽前羽後、本出羽州タリ、和銅中、陸奥越後ヲ分テ出羽ヲ置キ、國府ヲ出羽郡井口ニ建ツ、府址、今田川郡廣野新田村ニアリト云、天平寶字中、秋田城ヲ築キ、秋田郡秋田村ニ築ク、今久保田飯島ノ岡ニ故址アリ、州ノ守介ヲ以テ之ヲ兼子、秋田城介ト云、康平中、州人清原武則、陸奥守源頼義ニ從テ安倍貞任ヲ平ラゲ、鎭守府將軍ニ任ズ、寛治中、其子武衡、從子家衡ト共ニ金澤仙北郡ニ據テ亂ヲ作ス、陸奥守源義家擊テ之ヲ平ラゲ、藤原清衡ヲ以テ陸奥出羽ノ押領使トナシ、其子孫終ニ本州ヲ擁有ス、源頼朝東征シ、葛西清重ヲ以テ奥羽ノ奉行トナシ、其將小野寺武藤二氏ヲシテ邑ヲ州內ニ食マシム、將軍實朝ノ時、安達景盛城介ヲ以テ州事ヲ知リ、孫泰盛ニ至リ、北條貞時ノ爲ニ滅セラル、建武中興、參議葉室光顯ヲ以テ國司ニ任ズ、足利尊氏ノ反スル、州人多ク之ニ應ジ、光顯戰沒ス、尊氏族弟家兼ノ子兼頼ヲシテ最上郡山形ニ鎭セシメ、今村山郡ニ屬ス子孫州事ヲ知ル、是ヲ最上氏トナス、元中ノ初、伊達氏長井廣房ヲ滅シテ置賜郡ヲ取、天文中、伊達晴宗、徙テ置賜郡米澤ニ居、八年、將軍義滿、本州ヲ以テ關東管領足利氏滿ニ隷セシム、應永中、安東鹿季安倍貞任ノ裔陸奥ヨリ入リ、秋田城ヲ取テ之ニ據ル、是ヲ秋田氏トナス、永享ノ末、管領亡ビ、最上村山最上二郡秋田秋田山本二郡莊內ノ武藤氏、田川飽海二郡仙北ノ小野寺氏等、仙北雄勝平鹿三郡疆壤ヲ爭フ者數十年、天文永祿ノ際、小野寺氏漸ク盛ニシテ由利ノ十二黨、大井大江諸氏是ナリ及六鄉戶澤諸氏六鄉仙北郡六鄉ノ地戶澤同郡角館ニ居ル頗ヲ脅側シテ一時ニ雄タリ、天正中、最上義光、小野寺氏ノ地ヲ略シ、武藤氏ヲ滅シ、莊內三郡ヲ取、俄ニシテ上杉氏來襲テ莊內ヲ奪フ、十九年、豐臣氏東征、伊達氏ノ置賜郡ヲ削リ、之ヲ蒲生氏鄉ニ賜フ、後蒲生氏ヲ宇都宮ニ

町三十七間　松ケ崎村　三里二十五町四十九間半（至道川村一里一十七町五十八間半）　長濱村、三十九度三十七分半　三里二十五町三十五間（至土崎川尻三里廿四町五間半）　秋田郡土崎湊口（至土崎湊一十七町五十二間）　四里三十二町四間　船越村、三十九度五十四分、（至金川村至小濱村五里二十六町五十七間半）　二里一十六町四間　鵜木村、三十九度五十七分半、　一里二十五町四十二間　野石村宮澤、四十度一分半、　二十一町三十四間　同宮澤濱（至一川村、至菅野村一十一里七町二十四間）　二里一十九町五十三間　山本郡濱田村濱（至濱田村一十七町三十間）　二里二十八町四十六間　能代濱、（至能川、至能代濱二十三町一十二間）　四十度一十二分半、　三里一十二町三十二間（至米代川口一十一町）　八森濱、（至八森宿所四町五十七間）　四十度二十分、　二里二十二町一十八間　岩館村、四十度二十四分、　二里三十四町四十五間（至國界一里一十町三十四間）　陸奧國津輕郡大間越村

宿驛

〔延喜式二十八兵部〕諸國驛傳馬（○中略）

出羽國驛馬（最上十五疋、村山、野後各十疋、避翼十二疋、佐藝四疋、船十隻、遊佐十疋、蚶方、由理各十二疋、白谷七疋、飽海、秋田各十疋、）傳馬（最上五疋、野後三疋、船一隻、由理六疋、避翼一疋、船六隻、白谷三疋、船五隻、）

〔續日本紀十二聖武〕天平九年四月戊午、遣陸奧持節大使從三位藤原朝臣麻呂等（○中略）從部內色麻柵發、卽日到出羽國大室驛、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年九月己丑、始置出羽國雄勝平鹿二郡、玉野、避翼、平戈、横河、雄勝、助河（○中略）等驛家、

建置沿革

〔日本國郡沿革考二東山道〕出羽　和銅元年九月、越後國置出羽郡、五年九月、昇爲國、冬十月、割陸奧國最上置賜二郡隷出羽國、後復割陸奧國飽田渟代二郡隷、（未詳其年月）　上國、管十二郡、（延喜式）　二千四百四十五村、

置賜（二百六十村）　田川（三百八十六村）　飽海（二百六十七村）　村山（四百三十村、仁和二年十一月、分最上郡置）　最上（百二十八村）　秋田（二百八十三村、[illegible]二十三年十一月、停秋田城、[illegible]）

大曲驛　二十町一十五間　花館驛、三十九度二十八分半、　一里五町五十五間　神宮寺驛一十七町一十八間　北楢岡驛　一里二十五町二十一間　刈和野驛　二里二十二町五十四間境驛、三十九度三十六分半、　三里三町二間　河部郡和田驛　一里三十一町一十九間　戸鳴驛　三里二町四十六間　秋田郡久保田馬口勞町、三十九度四十二分半、　一里三十三町三十六間　土崎湊、三十九度四十五分、　三里二十三町六間　大久保驛、三十九度五十二分、　一十四町五十二間　下虻川驛　二里一十九町五十九間至二大川宿一二里一十四丁二十三間　一日市驛　二里一十六町三十七間　山本郡鹿渡驛　一里二十八町四十五間　森岡驛、四十度五分半、　一十七町一十五間　豐岡驛　一十町二十二間　金光寺驛至二能代湊宿所一三里一十丁五十一間　一里三十一町四十六間半　檜山驛　一里一十四町五十六間　鶴形驛　一里一十五町四間　飛根驛、四十度一十三分、　二里九町五十五間　荷揚場驛　一十九町五十八間半　秋田郡小繫驛　一里一十九町三十四間至二今泉驛一三十一丁四十五間　前山驛　一里二十三町三十一間　綴子驛、四十度一十五分、　二里三十四町二十八間　川口驛　一里二十五町九間　大館町　一里九町三十三間　釋迦內驛　五里三十一町三十九間半至二國界矢立峠一四里二十二丁三十九間半　陸奧國津輕郡碇關驛

〔日本實測錄沿海一〕從二鞆山一本教賀沿海至二三廐一〇中略

羽後國田川郡鼠ヶ關　三里一十七町三十五間半　五十川村鈴村、　五里一十九町三十五間半至二三瀬村一二里三十一町四十三間半　加茂村、三十八度四十五分、　五里二十一間至二濱中村一二里六町五十三間　飽海郡酒田湊最上川口沿川至二酒田湊一二十三町一十三間　四里三十三町三十九間至二青塚村一二里一十七町廿四間半　吹浦村、三十九度四分半、四里八町一十二間　由利郡鹽越村休石至二象潟追門口一一十九町四十八間　一十七町四十七間　同大町、三十九度一十三分、　二町四十七間　同追門口象潟驛一里二十四町三十九間　三里一十一町四十五間半至二金浦村一一里一十九町二間半　平澤村　三里五十四間至二出戸村一一里二十一町二十四間半　本庄古雪川口至二本庄中町一三十町三十七間　三里五

地勢　氣候

〔易林本節用集下〕出羽、羽州上、管十二郡、東西五十日、暖氣早而耘厚、大上々國也、

〔日本地誌提要三十四羽前〕形勢　山脈東南ニ綿亘シテ岩代ノ界ヲナシ越後ニ達ル、最上川ノ左右、頗ル平曠、肥磽相半ス、田川郡獨リ漁鹽ノ利アリ、○中略 氣候極暑九拾度極寒貳拾度、

〔日本地誌提要三十五羽後〕形勢　山勢陸奧ヨリ來リ、北東二方ヲ劃シ、中央ニ鬱結ス、材ヲ產スル極テ多シ、能代川北疆ニ注ギ、御物川南方ヲ貫流ス、男鹿島西方ニ突出シテ、八郎潟ヲ擁ス、地味磽薄、果蔬ニ宜カラズ、沿海頗ル繁盛ノ區アリ、○中略 氣候極暑九拾貳度、極寒貳拾五度、

驛路

〔日本實測錄三官道〕從白河城下若松至油川○中略

羽前國置賜郡綱木驛　一里一十一町三十七間（至二ナツ板峠二十三丁五十七間）關驛　二里八町五十七間半　米澤東町、三十七度五十四分半、　二里二十一町一十三間（至二米澤城大手前一二丁一十五間）　糠ノ目驛　一里七町一十一間　大橋驛　三十町四間　赤湯澤　一里五町一十一間　川樋驛　一十六町　小岩澤驛　一里一町一十二間　中山驛　二十三町五十七間　村山郡川口驛　一里一十三町一十三間　上山十日町、三十八度九分、　一里一十七町五十二間半　松原驛　二里一十四間　山形旅籠町、三十八度一十九分、　三里八町一十間半　天童驛　二里一十九町四十八間　六田驛　三町二十間　宮崎驛、三十八度二十六分半、　一十四町一十間　長瀞村　一十七町三十間　楯岡驛　一里一十六町七間　本飯田驛　一十六町二十間　土生田驛　一里一十二町五十八間　尾花澤驛　二里六町九間　名木澤驛　一里七町五十八間　最上郡舟形驛（又舟形）　二里八町三十五間　新庄南本町、三十八度四十五分半、　三里二十五町二十七間（至二新庄城大手前一五十一間）　金山澤、三十八度五十二分半、　三里七町三十四間半　及位驛　三里九町四十五間（至二雄勝峠一一里八丁五十二間）　羽後國雄勝郡下院內驛　四里八町三十三間半　湯澤町　五里四町一十一間　平鹿郡横手　一里二十一町三十七間（至二横手城門前一七丁五間）、　仙北郡金澤村　一里三十町二間　六鄕驛　二里八町五間

出羽久保田〔馬口勞町〕極高三十九度四十二分半、經度東四度三十五分半、從東都〔奥州街道白川、經會津〕一百五十里二十町四十四間半、

〔日本經緯度實測〕北極出地

出羽　米澤　三七度五四分三〇秒　上山　三八度〇九分〇〇秒

山形　三八度一五分〇〇秒　久保田　三九度四二分三〇秒

能代湊　四〇度一二分三〇秒〔中略〕

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒〔中略〕　出羽　米澤　東四度九九分四〇秒

〔古事記傳二十七〕出羽はもと越後國にて、越の域なり、續紀に和銅元年九月、越後國言、新建出羽郡、許之、同五年九月云々、於是始置出羽國、とあり、〔中略〕出羽國は、陸奥國の内を分て建たる國なりと云は、ひがごとなり、其は續紀に、和銅五年十月、割陸奥國最上置賜二郡、隷出羽國、とあるを、心得誤れるものなり、此は越後國を分て、出羽國を建られたるうへに、陸奥國の二郡を出羽に隷られたるにこそあれ、

疆域

〔日本地誌提要〔三十四羽前〕〕疆域　東ハ磐城、陸前、南ハ岩代越後、北ハ羽後、西ハ海ニ至ル、東西貳拾貳里、南北三拾五里、

〔日本地誌提要〔三十五羽後〕〕疆域　東ハ陸前、陸中、南ハ羽前、北ハ陸奥、西ハ海ニ至ル、東西凡貳拾五里、狹處壹拾九里、南北凡四拾九里、

島嶼

〔日本實測錄〔九島嶼〕〕羽後國田川郡　遠測　辨天　タヽ島　赤石　由良島

飽海郡　遠測　飛島

秋田郡　遠測　宮島　マナイタ　チブト

一郡ヲ管シ、延喜ノ制上國ニ列ス、後世由利仙北ノ二郡ヲ加ヘ、出羽郡ヲ廢セリ、明治維新ノ後、羽前國ニ西置賜、東置賜、南置賜、南村山、東村山、西村山、北村山、最上、東田川、西田川ノ十郡ヲ置キ、新ニ山形、米澤ノ二市ヲ設ケ、山形縣ヲシテ羽前國ト羽後國飽海郡トヲ治セシメ、又羽後國ニ飽海、由利、雄勝、平鹿、仙北、河邊、南秋田、北秋田、山本ノ九郡ヲ置キ、新ニ秋田市ヲ設ケ、秋田縣ヲシテ、飽海郡ヲ除キタル八郡及ビ一市ヲ治セシム、

名稱

〔倭名類聚抄五國郡〕出羽以天波

〔饅頭屋本節用集天地〕出羽イデハ羽州

〔日本風土記一管轄島名〕出羽迭ア外ヘ

〔倭訓栞前編伊三〕いでは　和名抄に見ゆ、出羽國なり、今ではと呼り、神名式に、出羽郡に伊氐波神社あり、姓氏錄に出庭臣あり、古へ名鷹又鷹羽を出せるよりの名なるにや、神社は今所謂金峯山にして出羽の池あり、

〔諸國名義考上東山道〕出羽　和名抄に、出羽以天波、國府在平鹿郡、名義は越の道の尻、また道の奥などよりの出端の國なるべし、○中略　さて或書に引る風土記の文には、上古此地貢鷹鷲之羽、故曰出羽といへるは、字になづみたるがごときこゆ、

位置

〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程

出羽野代湊、極高四十度一十二分半、經度東四度三十三分、從東都奥州街道自白川、經會津及金光寺村、一百六十七里一十六町七間半、

出羽山形旅籠町、極高三十八度一十五分、經度東四度四十四　半、從東都奥州街道自白川、經會津、九十四里三十一町三十三間、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

安比豆禰能、久爾乎佐杼抱美、安波奈波婆、斯努比爾勢牟等、比毛牟須婆左禰、

筑紫奈留、爾抱布兒由惠爾、美知能久乃、可刀利乎登女乃、由比思比毛等久、

安太多良乃、禰爾布須思之能、安里都々毛、安禮波伊多良牟、禰度奈佐利曾禰、

右三首陸奧國歌

譬喩歌

美知乃久能、安太多良末由美、波自伎於伎氐、西良思馬伎那婆、都良波可馬可毛、

右一首陸奧國歌

出羽國

出羽國ハ、デハノクニト云ヒ、舊クハ、イデハノクニト云ヘリ、東山道ニ在リテ、和銅五年越後國ノ北部及ビ陸奧國ノ一部ヲ割キテ建ツル所ナリ、明治元年、分チテ羽前羽後ノ二國トス、羽前國ハ、東ハ陸前及ビ磐城ニ界シ、西ハ南半越後ニ接シ、北半海ニ臨ミ、南ハ岩代ニ隣リ、北ハ最上川ノ下流ニヨリテ羽後ニ界セリ、東西凡ソ二十二里、南北凡ソ三十五里、其地勢ハ、四方殆ド山嶽ヲ以テ圍繞シ、最上川ハ其間ヲ北流シテ中央ノ平野ヲ貫キ、國内幾多ノ河流ヲ集メテ海ニ入ル羽後國ハ、東ハ陸前、陸中、南ハ羽前、北ハ陸奧ニ界シ、西方一帶海ニ面セリ、東西凡ソ二十五里、南北凡ソ四十九里、其地勢ハ、國ノ東部山嶺連亘シ、山勢一般ニ高峻ナレドモ、西部海ニ面スル所、處々小平原ヲ見ル、

此國ハ、古ヘ國府ヲ平鹿郡ニ置キ、最上、村山、置賜、雄勝、平鹿、山本、飽海、河邊、田川、出羽、秋田ノ十

雜載

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒略○中陸奥國三百廿四人略○中

諸國器仗略○中陸奥國甲六領、横刀廿口、弓六十張、征箭六十具、胡籙六十具、

〔儀式十〕十二月大儺儀略○中

事別天詔久、穢久惡伎疫鬼能、所所村村爾藏里隱布留乎波、千里千里之外、四方之堺、東方陸奥、西方遠値嘉、南方土左、北方佐渡與里乎知能所乎、奈牟多知疫鬼之住加登、定賜比行賜比氐、下略○

〔續日本紀元明六〕靈龜元年五月庚戌、移相模、上總、常陸、上野、武藏、下野六國富民千戸、配陸奥焉、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十四日辛未、二品令求奥州羽州兩國省帳田文已下文書給、而平泉館炎上之時燒失云云、難知食其巨細、被尋古老之處、奥州住人豐前介實俊、并弟橘藤五實昌、申存故實由之間、被召出令問子細給、仍件兄弟、暗注進兩國繪圖、并定諸郡券契、郷里田畠、山野河海、悉見此中、也注漏餘目三所之外、更無犯失、殊蒙御感之仰、則可被召仕之由云云、　十一月八日甲子、葛西三郎清重依被仰付奥州所務事、還御之時不令供奉、所留彼國也、仍今日條々有被仰遣事、

〔吾妻鏡十六〕正治二年八月十日癸巳、陸奥出羽兩國諸郡郷地頭所務事、可守秀衡泰衡舊規之旨、故將軍賴朝御時、被定之處、各勤境以下事、成非論之間、可任彼例之由、今日重被定之、且秀衡等知行之時、毎境縣札訖、以其古跡、可令爲牓示之由云云、廣元、親能朝臣等依仰、加下知、中村藏人丞相觸留守所云云、

〔結城古文書建武白河本〕陸奥國郡々已下檢斷可存知條々、御事書二通被遣候、得此意可被致沙汰之由、國宣候也、仍執達如件、

元弘三年十月五日　　前河内守朝重

白河上野前司入道殿（○結城宗廣）

〔南方紀傳乾〕建武二年八月三十日、源氏以陸奥守家長爲奥州管領、置斯波館、

〔年々隨筆 二〕多賀城碑は、天平の古物にて、いと〳〵めでたけれど、壺の石文にはあらず、つぼの碑は、古歌どもに、おほくはゑそをよみあはせたるにても、〇中略津輕近き所なる事をゑるべし、〇中略南部殿のゑらす地に、つぼ村あり、そこに石文大明神といふ祉あり、石文湮滅して後、その跡を神に祭りたりといひ傳たりとなん、これよくかなひておぼゆ、

〔清輔朝臣集〕述懷百首のうち

いしぶみやつがろのをちにありときくえぞ世中を思ひはなれぬ

〔新古今和歌集 雜十八〕前大僧都慈圓、ふみにてはおもふほどのことも申つくしがたきよし、申つかはしてはべりける返事に、　前右大將賴朝

みちのくのいはで忍ぶはえぞしらぬ書つくしてよつぼのいしぶみ

〔奥の細路〕抑言古りにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に耻ぢず、東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ、島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波にはらばふ、或るは二重にかさなり、三重にたゝみて、左に別れ右に連らなる、負へるあり抱けるあり、兒孫を愛するが如し、松のみどりこまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから撓めたるが如し、其の景窅然として、美人の顏を粧ふ、千早振る神のむかし、大山祇の爲せる業にや、造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ言葉を盡さん、雄島が磯は地つゞきにて、海へ出でたる島なり、雲居禪師の別室の迹、坐禪石などありて、將た松の木陰に世を厭ふ人なども稀々見え侍りて、落ち穗松笠など打ち烟りたる草の庵、ゑづかに住みなし、如何なる人とも知られずながら、先づなつづかしく立ち寄るほどに、月海にうつりて、晝の詠め又あらたむ、江上にかへりて宿を求むれば、窓を開き二階を造り、風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なるこゝちはせらるれ、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

外ノ濱　津輕　秋田　下紐ノ關（ヒモノセキ）　狹細布（キヤウノホソヌノ）　昔無ノ瀧　クトウヤスカタ　金花山といふは、仙臺より東のかた海中に有島山也、王江ノ蘆　武隈ノ松　名取川と云は、仙臺のうちに有川也、袖の渡（ミナト）　昔山　葉那波松（ヘナハノマツ）　緒江山

〔奥羽觀蹟聞老志　一〕奥羽名區異同考

歌枕名寄東山部陸奥

陸奥山　金山　深津島山　安積山（石井郡里）　會津山（會津郡河嶺）　信夫山（信夫郡里山關杜）　安太多良嶺　安達原（原野黒塚）　松山（末之松山）　栗駒山　奈古曾（山關）　二方山　不忘山　白河關　衣關（河）　傳關　下紐關　宮城（野原）　眞野萱原　市師原　山榴岡　片鬘岡（杜）　荒野牧　武隈　阿武隈（河）　稻葉渡　名取河（郡里湯）　玉川（里）　野田玉川　玉造江（河）　袖渡　緒絶橋　戸綱橋　朽木橋　小河橋　面和久橋　栗原（郡姉齒）　阿古耶松　標葉堺　壺石文碑　狹布　淺香潟　素都濱　十符浦　與井（郡島）　小黒岡（小美島豆）　多湖浦島　松島（雄島）　小島　松浦島　鹽竈（浦千賀）　浮島離島　凡五十有三區（略）〇下

〔袖中抄　十九〕いしぶみ

いしぶみやけふのせばぬのはつ〳〵にあひみてもなをあかぬけさかな

顯昭云、いしぶみとは、陸奥のをくにつものいしぶみあり、日本のはてといへり、但田村將軍征夷之時、弓のはずにて、石の面に、日本の中央のよしかきつけたれば、石文といふといへり、信家侍從の申しは、石の面ながさ四五丈許なるに、文をゑりつけたり、そのところをばつぼと云云々、それをつもとはいふ也、私云、みちのくには東のはてと思へど、ゑぞの島はおほくて、千島ともいふは、陸地をいはんに、日本の中央にても侍にこそ、

櫻色に四方の山風そめてける衣の關のはるの明ぼの

宮城野　秋萩の下ばの露に色付てうづらなくなり宮城野の原

阿武隈川　白川と云所より、ねだと云所へこゆる間に此川あり、江戸より出羽の山がた、奥州二本松、米澤など行海道也、高階經重朝臣のうたに、

行末にあふくま川のなかりせばいかにかせましけふのわかれを

玉川　野田の玉川ともいふ也、新古上多のうたに、能因法師、

夕されば汐かせ越て陸奥の野田の玉川千鳥なくなり

緒絶橋(ヲダヘノハシ)　とだへの橋とも、丸木橋ともいふ、

壺石文(ツボノイシブミ)　卒都濱(ソトノハマ)　十符菅薦(トフノスガゴモ)

陸奥のいはでしのぶはえぞしらぬ書つくしてよつぼの石ぶみ

陸奥の十符のすがごも七ふには君をねさせてみふに我ねん

請ひがは遠からめやは陸奥の心づくしのつぼのいしぶみ

松島　小島　松がうら島ともいふ、千載多のうたに、

波間より見へし氣色ぞ替ぬる雪降にたり松がうら島、新後撰多のうたに、俊成朝臣、

松島やをじまの磯による波の月の氷に水鳥なくなり

鹽竈浦　ちかの鹽がまとも、ちかのうらとも云、鹽竈明神の社あり、草創緣記神社の所にくはし、

古今大歌所の御歌、

陸奥はいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも

笆島(マガキシマ)　いさり舟笆が島のかゞり火に色みへまがふとこなつのはな

阿古屋ノ松　おもひきやこよひの月を陸奥の阿古屋の松の影にみんとは

穀多し、貨するに道なし、大河なきにあらずと雖、水路所多く船を通じがたきを以て、諸產物皆牛馬人力を勞するにあらざれば遠く運送しがたし、是に於て米穀封域に充滿して、價甚賤し、故に上下富る者少し、封君年々數万石の米穀價を貴くして民に買ひ、又賤くして民に賣、これを封內にて御救米と唱ふ、下民の貧困を救ふの一仁政と云ふべきなり、此等皆風土異にして、民利又同じからざるの一端なり、海內の諸封域悉く知るべきにあらざれども、此一國の理を以て風土を察し、地勢を鑑みる時は、民利の多少、物價の貴賤、亦指掌して知るべきなり、

名所

〔日本鹿子　九〕同國〇陸奥　名所舊跡之部

安積山　安積郡のうちにある山也、安積の沼といふも同じ所にあり、古今の序ニ、うねめ、

あさか山かげさへみゆる山の井の淺くは人をおもふものかは

信夫山　海邊にある山也、信夫の濕と云もひとつ所也、信夫郡のうちなり、

をのれのみ春をや獨忍ぶ山花に離れるうぐひすのこゑ

盤提山　口しの一入染のうすもみぢいはでの山はさぞ時雨らん

末ノ松山　海邊に有山也、後拾遺戀のうたに、清原元輔、

ちぎりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山浪こさじとは

無古曾關　東路の名こその關も有物をいかでかはるの越てきぬらん

白川關　山みちなり、白川とはいへども川はなし、左大辨親宗のうたに、

紅葉はのみな紅に散しけばなのみなりけり白川の關

衣ノ關　衣川といふもあり、俗にむさし坊辨けい、此所にてうち死せししるしの松と云も、此川の中の瀨にあり、そのほか鈴木兄弟腹きりたる所とて、しるしの松と云あり、いづみが城のあと有高館の舊跡、名のみ殘ていまにあり、

其風に化せられ、おのづから人間の道をも忘れるにや、されバ近頃迄は民家に子をぶつかへすと云事あり、産子は乳に及びぬれば、其父母是を縊殺す、人是をあやしまず、父母も又恬然として惻む色なし、其不仁なる事實に夷狄の風なりしが、誠に仁風の遠く及べるにや、殘忍の俗化して今其事なしとぞ、

一花徑樵話大屋士田著　曰、吾奥州の如きは、元より大管方維の封域、各其風土異なり、故に民利も又隨て別あり、先吾仙台封内は、水田甚だ多くして、米穀を產する事海内に又多からず、然れども東都に運送の便宜く、殊に隣國も又米多からざる地あり、皆他邦に貨するを以て米價貴からず、又敢て至賤に至らず、封内二十一郡廣大なりと雖、南北に阿武隈北上の兩大河あるのみならず、支流又通船すべき者少からざるをもて、海濱の外と雖、諸貨物を運輸するに、牛馬人力を省くもの少からず、民利實に多しと謂つべし、殊に西北の兩地は山多く、東方は海濱、中央は平坦にして、水陸の田地多く、百穀鹽鐵魚菜良材悉く備らずと云事なし、皆上下の日用蓄藏の餘、皆他邦に貨するに至て猶餘あり、しかして上野の餘地少からず、故に上下甚だ富ずと雖、又甚だ貧しき者なし、此土產多しといへ共、貨するに便あり、又貨するに便ありと雖餘猶あり、由て物價の利自ら常平に協ふ故なるべし、又南部は地甚だ廣大なること仙台に過ぐといへ共、山野多く不毛の地半に過ぐ故に、米價の貴賤甚だ不同にして、上下の貧富も又不同也、津輕封內は沃地多く、土產も又隨て夥しと雖、松前不毛の國に隣て、貨利尤多し、故に上下の富近國に冠たり、又信夫伊達兩郡は養蠶を貴て、農耕を次とす、故に桑田多くして穀田は少なし、由て豐歲には足るといへ共、凶歲には米穀乏し、又安達安積兩郡二本松侯采地は、專農事を先として、米穀も又多く產す、然れ共信達兩郡に貨するのみならず、封內廣からず、又士人の俸祿采地にあらず、上下米穀の貴きを希ふ故に、常に賤しからず、不登に至る時は羽を生じて飛んとす、又會津封內に、四方險難多きのみならず、隣國貴米

モ、勇氣正キ事、日本ニ可ㇾ劣國トモ不ㇾ被ㇾ思也、因ㇾ玆也朋友無盃討果、主君ヘ志ヲ忘、父母ヘ孝ヲ忘ナドスル類不ㇾ知其數、雖ㇾ然男子上下トモニ勇ヲ以テ本トスル處ナレバ、偏鄙偏屈ナリトイヘドモ、潔キ意地アツテ、耻ヲ知故、是ヲ畜トス、

女之風俗、色白ク、カミ長ク而、其顏色モウルハシキトイヘドモ、其形儀音聲更ニ逢ニ不ㇾ及シテ惡キ也、此國ノ上﨟ト上方ノ下﨟ト、其甲乙ヲ云フニ、上方ノ下﨟女房ニモ嘗テ不ㇾ及也、然ドモ心底ハヤサシク情有テ、氣ノ正キ事モ、上方ノ男ヨリモハルバル上ナリ、

總而此國、出羽、上總、下總、常陸、上野、下野之類、大形ハ人ノ音聲上ハ拍子也、然ル故ニ、心ニ佞成事ナクテ、差當ル所之儀ノミ大形ニ勤ルト可ㇾ知、然故ニ每物至テ思案工夫分別スル事鮮キ事、千人ニ九百人如ㇾ此也、若又智有テ氣質之變ヲ去ラント志シ勤ル人有トイヘドモ、其理之內之闕ヲ取テ以テ是ヲ用テナス故ニ、何事モ蠻身ナリ、取分テ牡鹿、耶我、鹿角、階上、津輕、宇多郡之人ハ、兎角ソコツアラマシナル風俗ナリ、

〔新撰陸奥風土記二〕風俗

我友大屋士田曰、按に當國大國なる故、所々の異なる風土有、然共凡山多き國なり、民俗本書に詳なり、會津は白川より西に入、遙に山谷相續たる國なり、西は越後に隣りて寒烈しく、雪深き事北國よりも勝れたり、岩城相馬（相馬ハ所の本名にはあらず、奥州の郡名なり、相馬次郎師常領ニ此地ニ住せしより自名となれり、）は東の海濱なり、故外よりは寒緩し、白川、二本松、赤館、三春、白石、福島等の所々、皆山中の形氣なり、仙臺の如きは、當時繁昌の地なる故、風儀上國に習へり、奥郡に至りては、南部（是又所の本名にあらず、甲州の在名なり、南部三郎領の自名とす、）は仙臺よりも尖どに寒烈雪深、津輕ハ南部よりも又烈、其風土に隨て人心も自別なり、松前は蝦夷につづきて、風儀又異なり、しかれども本書に說如く、一偏の鄙陋なる事各かはる事なし、古昔ハ奥の夷とて、人倫にも不ㇾ通禽獸のごとき風なりしに、中古上國の人君及となり、政治を施す力により、

高貳百八拾七万四千貳百三拾九石餘　陸奥國

弘化三丙午年諸國人數調　○中略

御料私領一人數百六拾万七千八百八拾壹人

内　八拾三万九拾人　男
　　七拾七万三千七百九拾壹人　女

〔日本書紀　七景行〕四十年六月、東夷多叛、邊境騷動、七月戊戌、天皇詔羣卿曰、今東國不安、暴神多起、亦蝦夷悉叛、屢略人民、遣誰人以平其亂、羣臣皆不知誰遣也、○中略　於是日本武尊雄誥之曰、熊襲既平、未經幾年、今更東夷叛之、何日逮于太平、矣臣雖勞之、頓平其亂、則天皇持斧鉞、以授日本武尊曰、朕聞其東夷也、識性暴強、凌犯爲宗、村之無長、邑之勿首、各貪封堺、並相盜略、亦山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞徑、多令苦人、其東夷之中、蝦夷是尤強焉、男女交居、父子無別、冬宿穴、夏則住樔、衣毛飲血、昆弟相疑、登山如飛禽、行草如走獸、承恩則忘、見怨必報、是以箭藏頭髻、刀佩衣中、或聚黨類而犯邊界、或伺農桑以略人民、擊則隱草、追則入山、故往古以來未染王化、今朕察汝爲人也、身體長大、容姿端正、力能扛鼎、猛如雷電、所向無前、所攻必勝、即知之形則我子、實則神人、是寔天愍朕不叡、且國不平、令經綸天業、不絕宗廟乎、亦是天下則汝天下也、是位則汝位也、願深謀遠慮、探姦伺變、示之以威、懷之以德、不煩兵甲、自令臣隸、即巧言調暴神、振武以攘姦鬼、

〔人國記〕陸奥國

陸奥國ノ風俗ハ、日本ノ偏鄙成故ニ、人ノ氣ノ行詰リテ、氣質ノカタヨリ、其尖ナル事、萬丈ノ岩壁ヲ見ガ如ニ而、邂逅道理ヲ知ルトイヘドモ、改テ知ルト云事スクナク、タトヘ知ルトイヘドモ、江ノ水ノ流ナクテ、塵芥之積リテ清ル事ナキガ如シ、サルホドニ名人ノ名ヲ呼ブ程ノ人ハ不得聞ヲ也、末代以テ如此成ベシ、右之如之氣質故、類母敷トコロ有テ、亦ナサケナキ風俗也、五十四郡ノ内、イヅレモ二ツ三ツニ、少ヅヽ風俗分レタレドモ、大概ニ替ル事ナク如此、

此國ノ人ハ、日ノ本ノ故也、色白クシテ眼ノ色青キ事多シ、人ノ形儀イヤシフ而、物語卑劣ナレド

色煒燁、好事者爲茶享之飯器、其雅物可愛、然如今省古制、與往年大異、
蠟燭　會津所出、其絶品冠于他邦、
漆木　以所出于同地而爲佳、
水晶　是乃非水晶、實石英者也、出于南部封内、及氣仙郡刈田郡、此地所出紫石英尤爲佳品、
紅花　是乃臙脂也、特以所産于羽州最上郡者爲上品、
紫草　以所出于秋田而爲佳、分散之他邦而需之染工、
藍草　所出之地最多、是亦分之屬于染工、
苧草　所出于秋田地而爲佳、
材木　南部爲上、又氣仙郡有楡山、金花山中多槻樹、其木理皆成疊雲聯璧之象、俗謂之玉木理、
笠　栗原郡澤邊驛以此爲業焉、其制冠于多方、然如今以貪利而失古制、略其機巧、

人口

〔續日本紀十七聖武〕天平二十一年二月丁巳、陸奥國始貢黄金、於是奉幣以告畿内七道諸社、
〔續日本紀十八聖武〕天平勝寶四年二月丙寅、陸奥國調庸者、多賀以北諸郡、令輸黄金、其法正丁四人一兩、以南諸郡、依舊輸布、
〔吾妻鏡六〕文治二年十月一日甲戌、陸奥國、今年貢金四百五十兩、秀衡入道致獻之、二品可令傳進給之故也、
〔官中秘策三〕陸奥國　五拾四郡〇中略
一人數百八拾三万六千百三拾四人　内男百壹万九千百三拾八人　女八拾壹万六千九百六拾六人
〔吹塵録五人口及國高〕諸國人數調〈文化元甲子年〉〇中略
〈御料秘録〉
一人數百六拾万貳千九百四拾八人
　内男八拾四万六千七百五拾八人　女七拾五万六千百九拾人
　　高百九拾貳万千九百三拾四石餘　陸奥國

是也、仍稱擅紙、乃引合是也、芳章之制、白色外有五綵色、其風流雅趣、足以用書翰詩箋之料也、是以他今好事之人、欲之者多、

相原　是亦出于同地、多品其中亦有施五采而淡色者、且有設文理者、稱之文相原、其亦與尋常異、不許市人賣買、是亦足以用會紙詩箋矣、尤雅騒之具也、又有濃藍布玉者、其美艶更絶妙、

料紙　是乃所用平生書通、有小大、俗謂之寄紙、蓋以寄呈友生而述其情實也、有上下中三品、膽澤郡東山、刈田郡白石、伊具郡丸森地出之、

鼻紙　俗間畜懷中而具津液唾涕之用者、謂之鼻紙、又有同名而具國主之用者、其制似料紙而精好、與和州芦野所出同、其雅物而非野州宇都宮、常州水戸產之所及也、名取郡茂庭村所出爲上品、同郡柳生亞之、又有稱封紙者、是乃具通信封緘之用、又有稱白石鼻紙者、出于刈田白石、甚足資用、（昔疊紙也）

筵席　俗謂之疊、乃居家之席也、是亦有多品、名取郡所出以中繼者爲上焉、稍似備後之制、（是乃蓆席之極品者）栗原郡三迫所出爲中品、膽澤郡東山所出爲下品、然久用而不敗、又有入間田筵、又有蓑筵、織之以染茅、而經緯其黒白雜之、以紅紫而爲其華紋、或有嘉賓上客、則所以易瓊筵擬綺席而饗之也、

埋木灰（ウモレギクワイ）　燒沈木而爲香爐灰也、其色赤黒、名取川爲名品、此河流常假水勢而下之薪木、而備資用、此重者或沈水底、而歷年也久、土人取而燒之、則其氣尤淡、是以能貯火而不滅、故賞翫殊甚、在他邦亦公伯之徒、及士大夫之族得而珍之、

牙刷木（ヤウジ）　刈田郡湯原村所出爲佳、牡鹿郡寰入村爲次、

石硯（スヾリイシ）　桃生郡雄勝濱所出爲上、其色淡黒堅剛、能磨墨、但以出海底而値盛夏、則墨亦易腐、桃生郡小船越所出爲次、其石色紫而尤佳也、

土器　其制尤多、其器肥滑澤者爲上品、俗謂之肌滑（ハダヨシ）土器、用獻盃之具也、

飯器　會津所出多品、又江刺郡所出謂之正法寺椀、朱內漆外、或畫鶴鴿、或蒔花草、飾之以金箔、其朱

株、

紙布　是亦白石之產也、其制綫紙而織之、緻密如練絹、其精白者如絹素、是亦搢紳之徒、侯伯之族、尤所賞用也、

馬秘　出于本吉郡千厩驛、驛婦攄以縷之而爲業、甚十歲已上之小女、織之尤巧、其具也立一枚木于盤上、繫其細索于枝上、挾小竹針而左右縫之、如織之、愈須臾成一秘、是亦或獻幕下、或贈之侯伯、染而用之、

飲食

糗糒　出于仙臺治府市店、純粹精白者、非他邦之制所及也、其麁者爲上、細者爲次、如粉者爲下、世稱之仙臺糒、上自王公、下至士庶、甚賞之、故年々我太守、以土用之節、而獻之將軍家及公卿、且贈侯伯士大夫、賜市人等、

秔稻　糯米　封內俱多嘉禾上品者、

糖圓　出于宮城郡松島、海濱貧家以此爲業、鹽釜次之、兩地經過遊歷之客、必買之以還家、包之以竹皮、但近年味稍惡、所以其製疎而貪利亦多也、

薄脫　是亦所出松島絕品也、以秔粉而爲餌、和豆粉而爲團、推之如麪、其薄如紙、經已七寸餘、其色青黃、味亦甘美、他所倣之不成、

火米　以遠稻熬而舂之、志田郡米倉村邑出之、尤絕于他村、已可三旬、乃薦之於一宮及宗廟而告新穀之成、然後頒之、

雲麪　乾饂飩　雲麪出于刈田郡白石、乾饂飩出于南部及仙臺城市、〇中略

器用

引合　芳章　共膽澤郡東山刈田郡白石兩地所出、其制與越前好紙稍好不相減、古人所謂陸奧紙

〔延喜式三十九内膳〕年料○中略　陸奥國〈索昆布卅二斤、細昆布百廿斤、廣昆布卅斤、〉

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、○中略宅常擁集諸國土產貯甚豐也、所謂○中略陸奥駒〈又檀紙、又漆、〉

〔毛吹草三〕陸奥

仙臺紬　紙布〈奉書ヲヨリテ織ル物也〉　沙金　奉書　雜紙　土器　埋木灰〈香爐ニ用之〉　糯　大葉　塵鰊

石花（カキ）　金鼠（キンネズミ）〈金花山ト云島ニ有澤鼠也、腸共ニ用之、アメ金色ナリ、〉　子籠（コゴモリ）鹽引〈衣川ニアル鮭ト云〉　大鮒　熊　一丈皮　尾駮駒　馬

尾〈諸國ヘ商之〉　岩城宇爾（ウニ）〈カザ蠏トモ云〉　縮布　伊北布　信夫摺　會津漆　蠟燭（ラフソク）　薄槐　同盆　南部水

精〈外ヨリ宜トイフ〉　琥珀　薫陸（クンロク）　津輕土朱　ヲガチノ硯石〈三月三日大鹽ニ取之〉　南部カタクリ

〔奥羽觀蹟聞老志三土產〕貨財

夫貨財之於天下也、一日亦不可無之至寶也、且夫我神州之出黃金也、始開其氣於此國古之小田郡陸奥山〈今坐之牡鹿郡、山亦稱金華山、〉其地幸在于封内、爾來其華盛于天下、其澤及于後世、白銀赤銅之類、亦相尋而興于封疆山谷焉、是豈非天寶之物華萃於我國乎、故略舉其地、以記神秀之異于他邦也、

伊澤郡津山〈金山〉　栗原郡細倉山〈銀山〉　玉造郡尿前〈銅山〉　加美郡檜澤〈銀山〉　刈田郡關山〈銀山〉

同郡雙森（フタツモリ）　玉造郡熊澤〈兩地共銅山〉　刈田郡黑森〈銀山〉　其他往古生于黃金白銀銅鐵鉛錫者多

衣服

筋紬（シマツムギ）　出于伊具郡金山邑、以五綵縷而爲縱橫經緯、俗謂之島紬、其好品者直尤貴、贈他邦以寄投焉、人謂之仙臺紬、以賞之、

紙絹　出于刈田郡白石城邑倉本村、尤爲上品、以柹汁染紙、織而揉之、俗謂之紙絹、用之服、以能避寒、尤足以防風、其淡赤色、或淡紫色、近代有染而成文者、又所出于相馬、其制堅强以克堪多年、而賞之擬

出擧稻

國府交易

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕百六十七万二千四百六石　陸奧

〔和漢三才圖會六十五陸奧〕五十四郡　高百八十二万九千石　東山道

〔官中秘策三〕陸奧國　五拾四郡略〇中

一石高百九拾貳万千九百三拾四石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調

陸奧國御料私領　一高貳百八拾七万四千貳百三拾九石五升九合八勺八才

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻略〇中

陸奧國正稅六十万三千束、公廨八十万三千七百十五束、國司料六十四万一千二百束、官料十六万二千五百十五束、祭鹽竈神料一万束、國分寺料四万束、學生料四千束、文殊會料二千束、救急料十二万束、

〔倭名類聚抄五國郡〕陸奧國略〇註管三十六（中略）公八十萬三千七百五十五束五把、本穎二百三十八萬六千四百三十一束、雜穎九十七萬九千七百十五束九把五分、

〇按ズルニ、倭名類聚抄ニハ、公廨ノミヲ擧ゲテ正稅ヲ脫セリ、又倭名類聚抄ニ、雜穎九十七万九千七百十五束九把五分トアルニ、延喜式ノ擧グル所、僅ニ十七万六千束ニ過ギズ、之ヲ他ニ比スレバ、甚ダ少キニ失スルモノヽ如シ、

〔日本後紀二十略〕弘仁元年九月庚申、制、諸國出擧官稻、率十束收利三束、但陸奧出羽二國、不任此限、

〔延喜式二十三民部〕年料別貢雜物略〇中　陸奧國筆一百管、零羊角四具、〇中略

交易雜物略〇中　陸奧國葦鹿皮、獨犴皮、數隨得、砂金三百五十兩、昆布六百斤、索昆布六百斤、細昆布一千斤、

〔延喜式二十四主計〕陸奧國行程上五十日、下廿五日、

調、廣布廿三端、自餘輸狹布、米、穀、　庸、廣布十端、自餘輸狹布、米、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥略〇中

陸奧國六種　甘草十斤、秦膠卅斤、大黃百卅斤、石斛八十斤、人參卅五斤、附子百廿斤、猪脂二斗、

田數石高

天正十八、蒲生領、慶長五、上杉持、延寶七、本多中務大輔政長、天和四、播州姬路替中絕、貞享元、堀田下總守正仲、同伊豆守元虎、羽州山形替、元祿十三、板倉甲斐守重寛、以後領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕松平大學頭賴升大廣間從四位侍從文久二戌十二月任　二万石　御在所奧州田村郡守山　江戸ヨリ五十六里

元祿年中ヨリ領之

南部遠江守信順大廣間從四位侍從文久元酉十二月任　二万石　居城奧州三戸サンノヘ郡八戸ハチノヘ[illegible]　江戸ヨリ百六十九里

寛文四年、依台命、直房以後代々領之、

本多能登守忠紀帝鑑間從五位下　二万石　居城奧州菊多郡泉[illegible]　江戸ヨリ五十三里餘

元和五、丹羽五郎左衛門長重領、寛永五、內藤兵部少輔政晴、同丹波守政親、同山城守政森、元祿十五、板倉伊賀守重同、同佐渡守勝清、延享三、本多越中守忠如、以後領之、

內藤因幡守帝鑑間朝散大夫[　]　一万五千石　在所奧州磐前郡湯長谷ユナガヤ　江戸ヨリ五十三里

寛文年中ヨリ內藤氏代々領之○節略

〔慶應元年武鑑〕南部美作守信民柳間朝散大夫　一万千石　內五千石於陸奧國之內領之[illegible]

文政二卯十一月、大膳大夫利敬依願一万一千石內分、

立花出雲守種恭　一万石　在所奧州伊達郡下手渡　江戸ヨリ七十五里

文化三寅年、從筑後國三池、爰ニ移ル、柳間朝散大夫

津輕式部少輔朝澄　一万石　在所奧州津輕郡黑石　江戸ヨリ百八十六里

文化年中、津輕甲斐守親足、當所ニ居所、以後領之、○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕陸奧國○註略　管三十六、田五萬千四百四十町三段九十九步

〔伊呂波字類抄國郡見〕陸奧國管卅五(中略)本田四万七十七町

〔拾芥抄中末本朝國郡〕陸奧大遠　卅六郡(中略)奧四道已上、四郡不入田四萬五千七十七町、

〔海東諸國記〕陸奧州　產金、郡三十五、水田五萬一千一百六十二町二段、

丹羽左京大夫長國 大廣間 從四位上侍從 元治元子四月任　拾万七百石　居城奥州安達郡二本松　江戸ヨリ六十六里餘

代々城主二本松右京亮居之、寛永四、松下石見守重綱、同五、加藤左馬介嘉明、同式部少輔明成持、同廿ヨリ丹羽左京大夫光重、以後代々領之、

津輕越中守承烈 大廣間 從四位少將 元治二丑四月任　拾万石　居城奥州津輕郡弘前　江戸ヨリ百八十四里

城主津輕氏代々領之

阿部豐後守正外 雁間 從四位侍從 元治元子十一月任　拾万石　居城奥州白川郡白川　江戸ヨリ四十八里餘

當城者、昔松蒲生氏領內、町野長門守居之、寛永四、丹羽五郎左衛門長重、同左京大夫光重、二本松江替、同二十、松平式部大輔忠次、慶安二、本多能登守忠義、同下野守忠平、延寶九、松平下總守忠弘、元祿五、松平大和守直矩、同大和守基知、同大和守義知、寛保元、松平越中守定賢、同越中守定邦、同越中守定信、同越中守定永、文政六ヨリ阿部鐵丸正權、以後領之、

相馬吉次郎季胤 帝鑑間　六万石　居城奥州宇田郡中村　江戸ヨリ七十八里 白川迄十一里八

右並出之、高、相馬氏代々領之、○郡略

〔慶應元年武鑑〕戸田土佐守 雁間 朝散大夫 [　]　五万石　居城奥州白川郡棚倉　江戸ヨリ五十里卅二丁

慶長五、立花飛驒守宗茂、元和五、丹羽五郎左衛門長重、寛文五、內藤豐前守信照、同豐前守信眞、同紀伊守弌信、寛永二、太田備中守資晴、享保十三、松平右近將監武元、延享三ヨリ小笠原能登守長恭、同佐渡守長貴、同主殿頭長昌、文化十四、井上河內守正甫、同河內守正春、天保七ヨリ松平周防守康爵、同周防守康圭、同周防守[　]、同周防守康直、元治二ヨリ戸田土佐守[　]以後領之、

秋田万之助 帝鑑間 朝散大夫　五万石　居城奥州田村郡三春　江戸ヨリ六十里餘

慶長六、蒲生飛驒守秀行、同下野守忠郷、寛永四、加藤左馬介嘉明、同式部少輔明成領、同廿年、松平石見守重綱、正保二、秋田河內守俊季、以後代々領之、○郡略

〔慶應元年武鑑〕田村內藏[　] 柳間　三万石　在所奥州磐井郡一ノ關　江戸ヨリ百十五里

伊達氏領、寛文年中ヨリ田村氏領之、

安藤理三郎[　] 雁間　三万石　居城奥州磐前郡磐城平　江戸ヨリ五十五里餘

城主岩城忠次郎貞隆居之、羽州龜田エ替、慶長七、鳥居左京亮忠政、羽州最上エ替、元和八、內藤左馬介政長、同帶刀忠興、同左京大夫義泰、同能登守義孝、同左京亮義稠、同備後守政樹、延享四、井上河內守利壽、寶曆六ヨリ安藤對馬守信成、以後領之、

板倉內膳正勝顯 雁間 朝散大夫　三万石　居城奥州信夫郡福島　江戸ヨリ七十一里

建武元年八月一日

〔相馬文書一〕花押○北畠顯家

伊具、曰理、宇多、行方等郡、金原保檢斷事、事書遣之、早武石上總權介胤顯相共守彼狀、可致沙汰者、國宣如此、仍執達如件、

建武二年六月三日　右近將監清高奉

相馬孫五郎殿

〔新撰陸奥風土記一〕莊今は其名亡びたり

姬松莊　略云、栗原郡一迫を古しへ姬松庄と云へり、　尾松莊　又曰、同郡二迫、古しへ尾松庄と云へり、　高松莊　又曰、同郡三迫、古しへ高松庄と云へり、　葛西莊　又曰桃生郡小野、古しへ葛西庄といふ、　明曆中今の名に改む　諏訪莊　略云、本吉郡唐桑村を古しへ諏訪庄といひしと、鄕人云り、

〔慶應元年武鑑〕松平陸奥守慶邦大廣間 正四位上中將 元治元子四月任　六拾二万五千六百石餘　居城奥州宮城郡仙臺　江戸ヨリ九十一里

代々城主伊達氏領之○中略

〔慶應元年武鑑〕松平肥後守容保溜間 正四位下中將 文久二戌閏八月任　二拾八万石　御在城奥州會津郡會津　江戸ヨリ六十五里

城主蘆名氏盛高居、天正十八、蒲生飛驒守氏鄕、同嫡子藤三郎秀行、文祿年中、上杉中納言景勝、慶長五、蒲生飛驒守秀行、嫡子松平下野守忠鄕、寬永四、加藤左馬分嘉明、同式部少輔明成、同二十、保科左中將正之、以後代々領之、

南部美濃守利剛大廣間 從四位中將 元治元子四月任　二拾万石　居城奥州岩手郡盛岡　江戸ヨリ百三十九里

南部三郎光行、治承四年、石橋山因二于軍功一、右大將賴朝賜二甲斐國南部鄕一、其後屬二依在一軍功一、文治五年、賜二陸奥國糠部五郡一、已後代々領レ之、

建如件、

建武元年四月十六日　大藏權少輔淸高奉

上野入道殿〈宗廣○結城〉

〈集古文書三十一下知狀〉天文十一年下知狀〈陸奥國白川郡八槻大善院藏〉

依神保內同行、并熊野同二所參詣檀那等事、如先々無相違可有成敗候也、執達如件、

天文十一七月廿四日　秀榮判

快弘判

八槻別當　少納言御坊

〈白河古事考五〉依上、和名抄、白河郡の鄕名に依上あり、今は常陸國久慈郡の內に入て保內といふ四十餘村あり、中古依上の保とて、保名を以て呼びし故に、今保內といふなり、今文字を寄神とも書す、保內を常陸の疆界に收めしは、恐くは白河結城の領地を、永正のころ岩城氏攻取り、保內の都會大子の城主芳賀氏をも降參たりし事、常陸國誌に載たり、其後又、佐竹氏の有となり、その時より常陸とは成たるなるべし、今此保內より西は、下野の國へ出て、東は常陸の小里の鄕に出る處に、堺明神の古祠を存したり、いにしへ國界に明神の祠を建る事、其緣由は如何なる義に據しや詳ならねども、我奥州のみにて、常陸の國中の界ならぬ地に、堺明神有べき理なし、是また依上の白河郡たりし遺蹟とも謂べし、

〈相馬岡田文書〉花押〈○北畠顯家〉

下　竹城保。

可令早相馬五郎胤康領知口保內波多谷村事

右人、令領知彼所、守先例、可致其沙汰之狀、所仰如件、

八槻近津別當

〔集古文書五十三〕祐鏡契約狀

於菊田庄四十五郷、先達相續之人體代々可致契約ニ右背此旨者、出該且那可有御成敗候、以此段口書口口候、依爲後日如件、

明應六年歲次丁巳三月十四日　菊田淨月院祐鏡判

八槻別當江

〔奧の細路〕心もとなき日數かさなるまゝに、白河關にかゝりて、旅心定まりぬ、○中略とかくして越え行くまゝに、阿武隈川をわたる、左に會津根高く、右に岩代相馬三春の莊、常陸下野の地をさかひて山連らなる、

〔吾妻鏡十九〕承元四年五月二十五日壬子、陸奧國平泉保伽藍等興隆事、故右幕下御時、任本願基衡等之例、可致沙汰之旨、被殘御置文之處、寺塔追年破壞、供物燈明以下事、已斷絕之由、寺僧各愁申、仍廣元奉行、如故不可有懈緩儀之趣、今日被仰寺領地頭之中云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年五月十日丁酉、江民部大夫以康、問注奉行之間、就有非勘之咎、被召放所領一所訖、而可有御計于傍輩中之由、兼日被儲其法、可賜宮內左衞門尉云云、是紀伊五郎兵衞入道寂西與同七郎左衞門尉重綱相論、陸奧國小田保追入、若木兩村、御下知事也、

〔白川文書〕當國依上保令知行、御年貢無懈怠可令致御沙汰者、依天氣上啓如件、

建武元年三月十八日　右少辨○甘露寺藤長判

謹上　陸奧宰相中將殿○顯家

御判

依上保可有御知行事、綸旨如此、先退前給人代官、年貢不散失之樣、可被加下知之旨、國宜候也、仍執

一同國津輕田舍郡内河邊櫻葉郷、

右於彼所領等者、相副手繼證文、所讓與孫子七左衞門尉顯朝、不可有他妨、爲後日讓狀如件、

延元元年四月二日　　　道忠花押〇結城宗廣

〔壬生文書綸旨院宣御教書等〕陸奥國安達庄（中略）

右庄々、知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年十二月廿六日　　　參議花押

大夫史殿〇壬生匡遠

〔相馬文書二〕合戰目安

相馬六郎左衞門尉胤平申合戰事

右陸奥國高野郡内矢築宿仁天、去年三年建武三〇十二月二十三日夜、御敵數千騎押寄之處仁、捨于身命、令塞戰之處仁、舍弟差平七助久小耳尾被射拔畢、（中略）當年建武四年三年四〇三月八日、爲凶徒對治、自伊達郡靈山館、於廣橋修理亮經泰大將軍、小手保河俣城被相向候之由、有其聞之間、同十一日馳向之處仁、先立于御敵成于等人參之間、同十三日信夫莊打入天、對治凶徒餘類、（中略）同年四月六日、菊田莊三箱、湯本、堀坂口、石河凶徒等引率多勢押寄之間、捨于身命、一相共懸先令戰之間御敵逃散候訖、（中略）彼此度々合戰、令忠節候之上者、爲賜御判、合戰目安之狀如件、

延元元年八月二十六日　　　（檢知了花押）

〔集古文書四十五寄附狀〕結城直朝寄附狀陸奥國白川郡大槻大善院藏

奥州菊田庄内小山田三郎天神別當并御靈堂別當

右此所知行候者、可奉寄附候者也、仍狀如件、

文安四年七月十二日　　　直朝

建武二年八月日

〔集古文書三十下知狀〕明應八年下知狀陸奥國石川郡石川大藏院藏

奥州石川六拾六郷之内、源家一族熊野参詣先達職之事、先師民部卿宥印致緩怠、依自滅、雖被沒收、彼職頻欲申條、如元被仰付之由、乘□院法印御房被仰出之儀候也、仍執達如件、

明應八年九月十六日　法橋慶俊花押

法橋快延花押

奥州石川　竹貫別當御房

〔結城神社文書〕陸奥國宇多荘、爲勲賞可被知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武二年七月三日　大膳大夫花押○中御門經季

結城上野入道館○宗廣

〔相馬文書一〕建武四年正月廿六日、於東海道宇多荘熊野堂著到事○中略

右○中略松鶴祖父相馬孫五郎重胤○中略去年□□□蜂起之時、致合戰忠節○中略於松鶴又於御方致忠節上者、賜一見御判、彌追罰近郡、爲後證備、粗著到目安言上如件、

建武四年正月日　承了花押○氏家道誠

〔白河證古文書上〕建武二年以前新恩所領注文

白河莊內上野民部五郎跡、同七郎跡、同彥三郎祐義跡、同左衛門大夫廣光之跡、同三郎泰重跡、同七郎朝秀跡、同彌五三郎左衛門尉女子跡、

建武二年十月十一日、以國宣拜領ス、同年十一月十五日重被成下官符、

〔白河證古文書一〕一讓與　所領等事

一陸奥國白河莊南方知行分　一同國同莊北方攝津前司入道々榮○結城盛跡　一同國宇多莊

右任亡父左衞門尉宗泰法師法名覺源去弘安六年三月廿七日五通讓狀、守先例可致沙汰之狀所仰如件、以下、

正安元年十二月六日　案主　菅野

〔飯野八幡社古文書乾〕陸奧國好島西莊預所伊賀三郎盛光代盛清謹言上

欲早下賜安堵國宣、備後代龜鏡、當莊預所職事○中略

右所帶者、依爲先貞重代相傳、相副代々證文等、讓與于盛光間、當知行于今無相違、然早下賜安堵國宣、爲備後代之龜鏡、言上如件、

元弘三年十一月十六日

〔岩城飯野八幡古文書〕伊賀三郎盛光申、陸奧國好島莊八幡宮造營事、訴狀如此、子細見狀、當社國職云々、所申無相違者、任先例可修造畢、若有子細者、可辨申之狀、依仰執達如件、

建武二年六月二十九日　左近將監花押○時高

好島莊東西地頭預所中

〔白川文書〕御判

下　石河莊

可令早結城上野入道道忠○宗廣領知當莊內蒲貫坂地矢沢三箇鄕事

右人、令知行彼所、守先例可致沙汰之狀、所仰如件、

建武元年四月六日

〔白川文書一〕花押○足利尊氏

下　可賴奉知藤田五郎太郎陸奧國石川莊內本知行分事

右人爲勳功之賞、可令領掌之狀如件、

莊保、

〔台記〕仁平三年九月十四日庚子、去々年廐舍人長勝近貞爲使下向奥州、先年可増奥州高鞍庄。年貢之由、禪閤被仰基衡、金五十兩、布千段、馬三匹、基衡不肯増之、久安四年禪閤〇藤原忠實以五ヶ庄讓余、〇藤原賴長同五年以雜色源國元爲使、仰基衡曰、可増高鞍金五十兩、布千段、馬三疋、本數金十兩、布二百段、細布十段、馬二疋、大曾禰。布七百段、馬二疋、本數布二百段、馬二疋、本良。金五十兩、布二百段、馬四疋、本數金十兩、馬二疋、預所分金五兩、馬一疋、屋代。布二百段、漆貳斗、馬三疋、本數布百段、漆一斗、馬二疋、遊佐。金十兩、鷲羽十尻、馬二疋、本數金五兩、鷲羽三尻、馬一疋、基衡不聽、國元其性弱不能責之、空以上洛、重遣延貞責之、去年基衡申曰、不得増所仰之數、可増進高鞍金十兩、細布十段、布三百段、御馬三疋、大曾禰布二百段、水豹皮五枚、御馬二疋、遊佐金十兩、鷲羽五尻、御馬一疋、屋代布百五十段、漆一斗五升、御馬三疋、本良金二十兩、布五十段、御馬三疋者、仰曰、三ヶ所、本良、遊佐、屋代所申非無其理、依請至于高鞍大曾禰兩庄者、田多地廣、所増不幾、猶減本數、可進高鞍馬三疋、金二十五兩、布五百段、大曾禰馬二疋、布三百段也、今日任此數延貞持來三ヶ年々貢、久安六、仁平元年、二年來貢本數、然而返却不受、今年相合三ヶ年歟、受之増年貢事、成隆朝臣高鞍預、俊通本良預所勸進也、

〔結城小峯文書〕袖判〇藤原賴嗣
下　尼陸奥介景衡後家
可令早領知陸奥國八幡庄。內中野堤上本田壹町荒野肆町、廐擅荒野柑子、袋藤木田參町地頭職事
右任亡夫景衡法師法名仁治三年二月十五日、同三年三月二十一日、今年四月日讓狀等、守先例可致沙汰之狀如件、
寶治二年十二月二十九日

〔國城寺文書〕將軍家政所下
可令早左衛門尉藤原宗秀領知〇中略陸奥國長江庄。號南山、陸藤太勝者後家一期之後可領知之由載同讓狀、〇中略等地頭職事、

からざりしなり、

〔東遊雜記十九〕八月廿三日、〇天明八年青森に止宿す、此所は諸書にも記し、津輕第一の津湊にして、市中三千軒繁昌の地とあれども、左様の所にはあらず、むかしは左も有りしや、今はよふ〳〵千軒ばかりにて、夫かも家居も見ぐるしき、松前の地御城下、并江指浦、箱館浦より見れば勝劣の論なし、さりながら近き年に此邊大地震にて、一家も殘りなく民家潰れ、死亡の人かぎりなく、相つゞき凶年にてきかつにおよび、數多の死人ありし故に斯のごとくと、案内のもの言しなり、

〔東遊雜記二十〕盛岡は、南部大膳大夫侯の城下にて、聞しよりはよき所にて、町の長サ三十餘町、豪家と覺しき商家も數家見え、御案内のもの、申上しは、市中千七百餘軒、と言し事なれ共、是は先年より御巡見使へ申上る定りの事にして、實は三千餘軒、城は往來よりは、委しく見えず、士人の物語を聞ば、要害能大城と云、〇中略市中へ中津川流れて、町の南にて北上川に落て一流と成、

〔東遊雜記二十四〕九月〇天明八年晦日夜四ツ時、仙臺城下へ著す、〇中略扨仙臺城下は先達て聞しよりは大にちがひ、町々草ぶきの小家まじはり、見惡しき所數町有り、町の長サ五十餘町、往來筋にても町内には小石數多ありて河原のごとし、〇中略六七年以前の寅卯の凶年には、下民數多飢渴して死せし事にして、むかしの形はなしと士人の云ふ也、

〔東遊雜記二十五〕中村城主、當主相馬因幡守侯、御知行六万石にて、領し給ふの地凡方十里餘、是をさして相馬と稱す、〇中略城は平城にて、城の北方をめぐると町に入る、外見要害の地にもはれ侍りしなり、案内のもの、言は、士家市中合て八百軒、餘の地と申せし事ながら、予〇古河辰がはかり見る處、都合して、二千五百餘軒、大概よき所也、

〔相馬則胤覺書〕相馬ハ爾號アリ、〇中略一方ハ斯波陸奧守ニ一味シテ、鎌倉合戰ニ討死、依、其忠賞、奧州行方莊ヲ賜リ、將軍方ニテ代代在城ス、依之行方ヲ改名シテ號相馬城、奧州相馬是也、

依上保内山田村内西とりきよ　分錢七貫文

氏朝

石寄進狀如件

永享二年正月十一日

〔東遊雜記二〕十一日、〇天明八年五月白川。城下止宿也、御城主は松平越中守君、十一万石市中千軒ばかり、御城をくる〳〵と取まわせし町なり、城は平城にして、大手からめ手の門前を往來の道として通行す、去かれども御門計見へて、御城は見えず、町の中へ流れを取て町わりをせし所なり、上方中國筋の城下と違ひて、町家見ぐるし、すべて此邊は諸品不自由にて、海魚至て稀也、人物言語も劣り民家の家造りあし、〇中略白川城下より棚倉へ六里、三春へ十二里、二本松へ十五里八丁、郡山へ九里、若松へ十九里〇中略十四日、福良二里半餘原驛三里餘。若松城下止宿〇中略原の驛より若松への街道山道にて、〇中略坂の頂より若松の鄉中を眼下に見る所あり、平地凡方五里もあらんとおもふ地なり、若松の城市中見ゆる町家草ぶきにて、瓦葺は稀にあり、寒氣强き所ゆへに瓦はよわしといふ、〇中略此所昔時蘆名黨の古城跡にて、其後上杉家、蒲生氏居城ありしより、會津侯の御知行の御城下ながら、備前岡山の城下などに見くらぶれば大に劣れり、婦人の容體殊にいやし、若松より二本松は寅に當りて十三里、西方越後の國界へ廿一里、北の方羽州米澤へ十四里、〇下略

〔東遊雜記四〕六月〇天明八年二日板倉内膳正三万石御在所福島。止宿、此所は阿武隈川、町の後へ流れて、諸方への往來自由にて、交易の便りよきゆへに、町屋並も大概よく、近鄉の田畑もひらけ、よき風土也、吾妻が嶽の麓は大に入組て、田沼龍助君の御知行も、七千石此所にて給りしなり、

〔東遊雜記十二〕弘前。は、津輕越中守侯の御城地、四万六千石、市中三千餘軒、大概の町なり、城は山城にして要害いかならんや、委しく見へず、家中町も御知行不相應に多しとの物語り也、武家の男女貴賤となく、御巡見使を見物に出しを見るに、人は武士にて、人物衣服髮の結やうまでも、あし

觀應三年五月十五日　右京大夫 花押

岩城國魂新兵衛尉殿

（集古文書三十三打渡）康永四年打渡 所藏不詳

打渡　八幡降人所領半分事

右陸奥國岩城郡國魂村田畠在家等、爲中分、任將軍家御下文、幷御施行之旨、所沙汰付于國魂太郎兵衛尉行泰也、坪付有別紙、仍渡狀如件、

曆應二年三月廿三日　法眼行慶 花押

沙彌靜義 花押

（集古文書二十九下知狀）康安元年下知狀 所藏不詳

陸奥國岩城郡平窪矢野目兩村、幷國魂村內神主知行分、國衙正稅以下年貢事、被所之者、御祈所大國魂大明神祭禮以下神役勤仕之間、諸鄉公事不致、其沙汰云々、然者且任先例、且爲天下御祈禱、所被免許也、殊至祭禮等、彌可被抽精誠之狀如件、

康安元年十二月十五日　兵部大輔 花押

（集古文書四十四寄附狀）應永二十四年寄進狀 陸奥國白川郡八槻大善院藏

奉寄進　近津大明神 八槻

石井鄉內大內村內年貢儀合五貫文每年可進上仕候、松島、

右依所願成就事畢之候、重說者天下太平、萬民快樂、壽命長遠、仍寄進之狀如件、

應永二十四年九月廿日　沙彌建久 判〇中略

結城氏朝寄進狀 陸奥國白川郡八槻大善院藏

寄進　近津宮

建武參年四月二十五日　沙彌（花押）

蒲田五郎太郎殿（〇諱光）

〔岩城飯野八幡文書〕自（裏書也）引付五番之手被成下之頭人二階堂備中入道殿（〇中略）

小山出羽小四郎判官殿　沙彌道存

伊賀式部三郎盛光申（〇中略）陸奧國好島莊内飯野村并好島村預所職等安堵事、所申無相違否、云當知行之段、云可支申仁之有無、載起請之詞、可被注申之状、依仰執達如件、

建武四年十月廿八日　沙彌在判

小山出羽小四郎判官殿

〔結城神社文書〕花押（〇北畠顯家）

陸奧國白河莊荒砥崎村（〇結城判官朝祐）可被知行者、依國宣執達如件、

延元元年六月十九日　鎭守軍監有實（奉）

上野入道殿（〇結城宗廣）

〔相馬岡田文書〕相馬泉五郎胤康（今者討死）子息乙鶴丸（〇胤家）代祐賢謹上、欲早重以御警狀預注進、施弓箭面目（〇中略）奧州行方郡内岡田村、八兎村、飯土江狩倉一所、矢河原、同國竹城保内波多谷村事、

件條、先度具言上畢（〇中略）於胤康者、致度々合戰高名、四月（建武三）十六日、顯家卿發向之時、令討死畢、乙鶴者、於奧州屬石塔源藏人殿、致合戰之上者、早預御注進、蒙恩賞、爲備後代龜鏡、仍恐々言上如件（〇下略）

〔集古文書十御教書〕等持院尊氏公御教書（所藏不詳）

陸奧國岩城郡國魂村内（國魂太郎左衞門尉隆直跡）地頭職事、爲勳功之賞、同國田村庄齋藤村替所宛行也、守先例可致其沙汰之状、依仰執達如件、

欲早任重代相傳當知行旨、且依合戰忠勤、被成下安堵國宣、津輕平賀郡内大平賀岩楯、沼楯、并名取郡四郎丸鄉内若四郎名等、全所領、彌抽合戰忠勤矣、〈○中略〉

右大平賀岩楯村々者、重代相傳所領、當知行于今無相違、次沼楯村者、光高親父曾我左衛門太郞入道光稱〈○光高親父〉自子息余一資光許、被讓與、多年知行無相違、於所領者重代當知行之上者、下賜安堵國宣、爲全所領、恐々言上如件、

元弘四年二月日

〔白河證古文書上〕建武一年以前新恩所領注文〈○中略〉高野北方内

富岡　一分　小貫　野手島　紙石　大島　玉野　印野　堤　以上八箇村

彼所々者、爲建武二年中先代與黨之闕所、伊達一族拜領之、

〔相馬岡田文書〕花押〈○北畠顯家〉

下　黑河郡

可令早相馬五郎胤康領知當郡新田村〈相馬孫五郎行胤跡〉事

右人令領知彼所、守先例、可致其沙汰之狀如件、

建武二年三月二十五日

〔飯野八幡社文書〕下　岩城郡

可令早式部伊賀三郞盛光領知當郡矢河子村內〈伊賀守盛光女子跡〉事

右爲勳功賞、可令知行之狀、所仰如件、

〔白川文書一〕預中所領陸奧國岩瀨郡狢田村并會津稻河庄內矢目村事

建武二年五月十三日　裏判

右爲御方、每度合戰抽致忠節之間、爲軍家御計之處、爲靜謐所申沙汰也、仍如件、

郡五十一村　稗貫郡五十二村　岩手郡五十五村　鹿角郡三十三村　閉伊郡九十四村　九戸郡四十二村　二戸郡四十八村　三戸郡六十七村　北郡五十四村　刈田郡三十三村　伊具郡三十六村　黒川郡四十九村　賀美郡三十八村　玉造郡二十一村　志田郡六十四村　亘理郡二十六村　名取郡六十一村　宮城郡七十八村　登米郡二十四村　牡鹿郡六十村　桃生郡六十四村　本吉郡三十三村　氣仙郡二十四村　磐井郡八十六村　膽澤郡三十七村　江刺郡四十一村　津輕郡八百四十三村　伊達郡百八村　信夫郡八十九村　柴田郡三十五村　宇多郡九村　遠田郡五十八村　栗原郡九十二村

〔地勢提要 地〕郡邑島嶼奇名

陸奥　津輕郡、大間越村、富苗村、奥平部村、瀬部地村、久栗坂村、内眞部村、清水川村、北郡、蟹田村、百目木村、奥内村、宿野部村、奥戸村、木野部村、尻勞村、出戸村、尾駮村、田名部、尻谷村、三戸郡、小舟渡村、部類家村、鹿糠村、九戸郡、小子内村、有家村、閉伊郡、磯鷄村、重茂村、氣仙郡、唐丹村、越喜來村、綾里村、長部村、本吉郡、波路上村、津谷村、追波濱、牡鹿郡、寄磯濱、長渡濱、網地濱、十八成濱、桃生郡、野蒜村、名取郡、閖上村、行方郡、雫村、提谷村、角部内村、標葉郡、夫澤村、楢葉郡、毛萱村、下壯遲村、未續村、菊田郡、九面村、宮城郡、寒風澤、白濱岐、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲三年六月丁未、浮〈○浮原作淨、據一本改〉宕百姓二千五百餘人、置陸奥國伊治村。

〔日本後紀 二十一嵯峨〕弘仁二年三月甲寅、勅陸奥出羽按察使正四位上文室朝臣綿麻呂、陸奥守從五位上佐伯宿禰清岑、介從五位下坂上大宿禰鷹養、鎭守將軍從五位下佐伯宿禰耳麻呂、副將軍外從五位下物部匝瑳連足繼等曰、去二月五日奏偁、請發陸奥出羽兩國兵、合二萬六千人、征爾薩體、幣伊二村者、依數差發、〈○下略〉

〔齋藤文書 一〕曾我太郎光高〈童名乙房丸〉謹上

高百九拾貳萬千九百三拾四石八斗八升七合四勺五才　四千三百六拾三ヶ村

●會津（若松城）　六十五里　●白川　四十八里　●二本松　六十六里

●中村　七十八里　●福島　七十一里　●仙臺　九十一里

●盛岡　百三十九里　●弘前　百八十四里　●三春　六十里餘

回泉　五十三里　●盤城平　五十五里餘　●棚倉　五十里三十二町

○黒石　百八十六里　○一之關　百五十里　○下手渡　七十五里

○八之戸　百六十九里　○湯長屋　五十三里　○守山　五十六里

又横田　六十六里（濱口修理）　●岩手山（伯）一万三千石（重）伊達内藏　●白石（伯）三万三千石（重）片倉小十郎

)(○角田（國）二万貳千石　石川大和　)(○亘理（ワタリ）（國）一万八千石　伊達安房　)(○水澤（國）一万八千石　伊達將監

)(○涌谷（國）二万八千石　伊達安藝　)(○登米（國）二万三千石　伊達式部　)(○松山（國）一万三千石　茂庭周防

●松前二（一万石以上格）　松前志摩守　△田島　六十里　△小名濱　五十里

△淺川　五十五里　△桑折（コヲリ）　七十二里　△塙　五十五里

△川俣　七十五里　△梁川　七十五里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕陸奥　五十二郡、四千五百十九村、

高（御料私領）二百八十七万四千二百三十九石五升九合八勺八才

菊多郡六十七村　白川郡九十三村　磐前郡百九村　磐城郡四十八村　楢葉郡三十八村

標葉（シメハ）郡五十五村　行方郡九十六村　宇多郡三十七村　白河郡百二村　石川郡七十六村

岩瀬郡七十九村　田村郡百三十八村　安達郡七十七村　安積郡四十七村　會津郡二百八十

五村　大沼郡百五十三村　耶麻郡二百七十四村　河沼郡二百村　和賀郡四十六村　紫波

村里名邑

ゑんげん四年七月十八日　　いだてのかもんのすけ爲景花押

〔奥州相馬系圖〕胤頼

文和三年六月一日、竹城保郷知元領知之、延文三年十一月廿日、依父之讓狀、領行方郡、（中略）貞治二年七月十一日、領宮城郡國分寺郷、（國分淡路守井一族跡也）同六年正月廿六日、以名取郡内坪沼郷、爲勲功之賞領知之、應安五年、領高城保内赤沼郷、同六年九月十八日、領高城保内長田郷、至德三年七月十二日、領長世保内大迫郷、同十二月二日、領名取郡南方増田郷下村、（大内新左衛門跡也）右各有證文、

〔結城小峯文書〕ひこ夜叉殿のゆづり狀

一石河内さわ井の郷　一よりこの内あゆ河の郷内（上あゆ河　中あゆ河）　一たか野きた郷内　大たは村　ふかわたとぬまのさは

右此六ケ所ハ若實子出き候はゞ、かやうニはけゆづり申べく也、若實子もち候すば、朝治があとを一ゑんニひこ夜叉殿ニゆづり進候べし、たゞし朝治ちぎやうの内に、上小ぬき村、たさきの村、いたくら山井内とつかの村、かた見にさい家に家、これをバ朝治一期の後ハ、寺ニあんくゑきまん申べく候間、此五ケ所ハのぞき候所也、よつてゆづり狀如件、

永和三年霜月二十五日　　朝治花押

〔集古文書二十九下知狀〕文安四年下知狀陸奥國白川郡矢槻大善院藏

奥州石川郡内成田郷、寶、熊野參詣先達職之事、任買得相傳之旨、引導不可有相違候、雖然帶支證有申子細仁者、全可被御沙汰之由、口乘院法印御房御奉行所候也、仍執達如件、

文安四年九月二十二日　　備前入道重種判
　　法橋　快乘判

少納言律師御房

〔郡名一覽〕陸奥國御料私領　奥州　東西六十日　五拾貳郡

可令早守我余一太郎貞光領知當郡法師脇鄕内（野邊左衞門五郎跡）井沼楯村事

右爲勳功賞、所被宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀、所仰如件、

建武二年三月二十五日

〔白河證古文書 一〕讓與所領等事

一陸奥國依上保道忠知行分

一同國石河莊内　高貫鄕　矢澤　坂地鄕

右於彼所領等者、所讓與參河前司親朝也、不可有他妨、但親朝一期之後者、七郎顯朝一圓ニ可知行之、仍爲後日讓狀如件、

建武貳年六月二十一日　　道忠（花押）〇結城宗廣

〔東京圖書館本結城古文書寫〕下　陸奥國白河莊内泉崎鄕地頭代職事

右依軍忠、所宛行也、任先例、可被領知之狀如件、

建武二年十月十五日　　和知次郎重秀

〔白河證古文書 上〕陸奥國依上保金原保、白河莊内金澤鄕等、爲勳功賞可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

建武二年十月五日　　大膳大夫（花押）〇中御門經季

結城參河前司殿〇親朝

〔白河證古文書 上〕みちのくにたかのこほり、またかたいの、いがうのうち、にしたかわらひ、ひんがしたかわらひ二かまよは、ためかげがまそくいたてのさへもんくらんどため[illegible]あきながくらが[illegible]んせんのおんまやうに給はり候、〇中略

建武元年八月十三日　　曾我太郎光高

〔結城神社文書〕花押〇北畠顯家

下　白河莊

可令早結城上野入道道忠〇宗廣領知當莊金山鄕〇西白川郡内新田村事

右人、令領知彼所、守先例、可致其沙汰之狀、所仰如件、

建武二年正月十八日

〔榊原家文書〕權大僧都賴基謹言

陸奥國平賀郡乳井鄕福王寺別當職事

副進　一通　上覺給御下文　一通　同讓狀在御外題

右職并寺田等者、弘安十年十二月二十三日、賴基父千田左衞門次郎入道上覺宛給之、正安三年十月十二日、讓與賴基之間、嘉元二年十二月二十四日、被成御外題畢、隨當知行于今所無相違也、賴基雖不肖、蒙奉公御免、任本知行由緒宛賜彼地、欲勵御所緒忠勤、仍勒事狀言上如件、

建武二年二月日

〔南部文書〕二花押〇北畠顯家

外濱内摩部鄕并未給村々泉田、湖方、中澤、眞板、佐比内、中目等村、被宛行南部又次郎師行同一族等候、可御沙汰之由、被仰政所畢、然而同莅彼所無事之煩、可令沙汰付者、依仰執達如件、

建武二年三月十日　　大藏權少輔淸高奉

尾張彈正左衞門尉殿

〔齋藤文書〕二花押〇北畠顯家

下　津輕平賀郡

陸奥國二迫栗原郷、内外栗原幷竹子澤内(工藤右近入道跡)事、爲合戰勳功賞、所宛行也、可被知行之由、國宣所候也、仍執達如件、

元弘四年二月晦日　大藏權少輔清高(判)

留守彦二郎殿(任○家)

〔結城私記(所收例物御判物寫讀書)〕御判

下　津輕平賀郡

可令早安藤五郎太郎高季領知當郡上柏木郷事

右爲勳功賞、所被宛行也、任先例可致其沙汰之狀、所仰如件、

建武元年三月十二日

〔結城古文書(右建武木錦)〕下　陸奥國石河莊

中島郷内大大夫入道内田島在家事

右所宛行也、任先例可領知之狀如件、

建武元年六月二十五日　和知次郎重秀

〔白河證古文書上〕建武二年以前新恩所領注文

石河莊中島松崎兩郷(建武元年四月六日國宣○下略)

〔齋藤文書一〕注進津輕平賀郡岩楯、太平賀兩郷、曾我太郎光高知行分田數事、

合

岩楯郷分　定田捌町伍段三百四十五步(御除十分一見定)此内陸反　曾我彌太郎知行分　一丁弧

森女子跡、

太平賀郷分　除田五町捌段　長峯村曾我小二郎跡　定田貳拾捌町漆段半四十五步(御除十分一見定)

此内壹町　曾我左衞門三郎入道知行分　參段曾我彌太郎知行分

牡鹿郡　賀美　碧河　餘戸
耶麻郡　分會　津郡　日量

○按ズルニ、安積郡ノ下ナル入野、佐戸、芳賀、小野ノ四郷、高山寺本ニ據レバ、宜シク耶麻郡ノ下ニアルベシ、又安達郡、高山寺本信夫郡ニ作ル、續日本紀ニヨレバ是ナルニ似タリ、又牡鹿郡ノ次ニ、更ニ耶麻郡アルハ衍ナルベシ、且ツ分會、津郡、日量ノ六字ハ郷名ニアラズシテ、分會津郡置トアルベキヲ誤讀セシモノナラン、

〔都々古和氣神社別當大善院舊記〕陸奥國風土記曰、所以名八槻者、卷向日代宮御宇景行天皇時、日本武尊征伐東夷、而到此地、以八目鳴鏑射賊斃矣、其矢落下處云矢着、卽有正倉、神龜三年改字八槻、古老傳曰、○中略日本武尊執槻弓槻矢而七發々八發々、則七發之矢者、如雷鳴響、而追退蝦夷之徒、八發之矢者、射貫八土知朱立斃焉、射其土知朱之征箭悉生芽、成槻木矢、其地云八槻郷、卽有正倉也、神衣媛與神石萱之子孫會赦者在郷中、今云綾戸是也、

〔集古文書五十讓狀〕明德三年讓狀陸奥國白川郡矢槻大善院藏

二所熊野檀那讓狀之事

一八槻郷西河郡小峯在所住人孫二郎子孫○中略

加賀阿闍梨御方讓渡所實也、但出向後若不思儀致度候得者、檀那如本旨取進申べく候、仍而爲後日證文狀如件、

明德三壬申五月　駒石侍從阿闍梨良深在判

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年五月辛未、陸奥國○中略伊具郡麻。績。郷。戸主磐城團擬主帳陸奥臣善福、○中略賜姓阿倍陸奥臣、

〔留守文書一〕花押○北畠顯家

宇多郡　長伴〈○高山寺本注云奈加止毛〉　高階〈○高山寺本注云多加之奈〉　仲村〈○高山寺本注云奈加无良〉　飯豐〈○高山寺本注云以比止與〉

伊具郡　柞葉　廣伴　靜戶　麻續　餘戶

曰理郡　曰理〈和多理〉　坂本　望多〈宇萬多〉　菱沼〈比之奴萬○高山寺本、此郡下有二玉芥鄕一〉

宮城郡　赤瀨　磐城　科上　丸子　大村　白川　宮城　餘戶　多賀　柄屋

黑〈○原作レ川、據二高山寺本一改〉河郡　新田　白川　驛家

賀美郡　川島　磐瀨　餘戶

色麻郡　相模　安蘇　色麻〈之加萬〉　餘戶

玉造郡　府見　玉造　信太　餘戶

志太郡　酒水　信太　餘戶

長岡郡　長岡　瀨城〈○瀨、諸本作レ潮〉

栗原郡　栗原　淸水　仲村　會津〈安都〉

磐井郡　丈几　山田〈也萬多〉　沙澤　仲村〈奈加無良〉　磐井　盤本　驛家

江刺郡　大井　信農　甲斐　槁井

膽澤郡　白河〈之良加波〉　下野　常口　上總〈○總、原作レ惣、據二高山寺本一改〉　餘戶　白馬　驛家

新田郡　山沼〈○沼、高山寺本作レ治、〉　仲村　貝沼〈○高山寺本作二具沼一〉　餘戶

小田郡　小田〈乎太〉　牛甘　石毛　賀美　餘戶

遠田郡　淸水　餘戶

登米郡　登米　行方〈奈女加多〉

桃生郡　桃生　磐城　盤越　餘戶

氣仙郡　氣仙　大島　氣前

古事類苑

地部二十

陸奥國下

〔倭名類聚抄七陸奥國〕白河郡 大村 丹波 松田 入野 鹿田 石川 長田 白川 小野 驛家 松戸〇高山寺本、戸作レ田、小田 藤田 屋代 常世 高野 依上

磐瀨郡 磐瀨 推倉〇高山寺本、推作レ惟、廣門 山田 餘戸 白方 驛家

會津郡 伴々〇高山寺本、々作レ了、部書字也、多具 長江 倉精〇高山寺本注二久眞波一 菱方 大島 屋代 大江 餘戸

耶麻郡 津部 量足

安積郡 入野 佐戸 芳賀 小野 丸子 小川 葦屋 安積

安達郡〇高山寺本作二信夫郡一 小倉 曰理 鍬山 靜戸 伊達 安岐 岑越 驛家

苅〇苅原作レ郡、據二一本一改、下同、田郡 篤借 苅田 坂田 三田

柴田郡 柴田 衣前 高橋 瀨城〇瀨恐賴誤 餘戸 新羅 小野 驛家〇高山寺本、此郡下有二舳猪郷一、

名取郡 指賀 井上 名取 磐城 餘戸 名取〇高山寺本、此郷無 驛家 玉前

菊多郡 酒井 河邊 山田 大野 餘戸

磐城郡 蒲津 丸部 神城 荒川 和 磐城 飯野 小高 片依 白田 玉造 楢葉

標葉郡 字良 磐瀨 標葉 餘戸

行方郡 吉名〇高山寺本注二奧之奈一 大江 多珂 子鶴〇高山寺本注二古豆留一 眞敬 眞野

贄柵之處、河田忽變年來之舊好、令郎從等、相圍泰衡梟首、

〔吾妻鏡九〕文治五年八月廿六日癸丑、日出之程、匹夫一人推參御旅館邊、投入一封狀、〇中略表書云、進上鎌倉殿侍所泰衡敬白云云、狀中云、〇中略兩國已可爲御沙汰之上者、於泰衡者蒙免除、欲列御家人、不然者被減死罪、可被處遠流、若垂慈慧、有御返報者、可被落置于比內。比內郡邊、就其是非、歸降可走參之趣載之、親能讀申御前、依之有重々沙汰、試捨置御返報於比內邊、潛付勇士一兩於其所、爲取御實有窺來者之時搦取、可被問泰衡在所之由、實平雖申行之、不及其儀、可置書於比內郡之由、泰衡言上者、軍士等各可捜彼郡內之旨被仰下云云、

津輕郡

〔日本書紀二十六齊明〕四年四月、阿陪臣名闕率船師一百八十艘伐蝦夷、齶田渟代二郡蝦夷望怖乞降、〇中略仍授恩荷以小乙上、定渟代津輕二郡郡領、〇中略七月甲申、蝦夷二百餘詣闕朝獻、饗賜贍給有加於常、〇中略授津輕郡大領馬武大乙上、少領青蒜小乙下、勇健者二人位一階、

〔日本書紀二十六齊明〕元年七月、授柵養蝦夷九人、津刈蝦夷六人冠各二階、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月三日庚申、泰衡被圍數千兵、爲遁一旦命害、隱如鼠退似鷁、差夷狄島赴糠部郡、

〔結城小峯文書〕綸旨〇北畠顯家

下　糠部郡

可早令結城參河前司親朝領知當郡內九戶右馬權頭茂時跡事

右件人、令領知彼戶、於貢馬以下者、無懈怠可致沙汰之狀所仰如件、

元弘三年十二月十八日

〔南部文書 一〕花押〇北畠顯家

糠部郡七戶內工藤右近將監跡、被宛行伊達右近大夫將監行朝畢、可被沙汰付彼代官者、依國宣執達如件、

建武元年七月二十九日　大藏權少輔清高奉

南部又次郎殿〇師行

花押〇北畠顯家

中條出羽前司時長申、糠部郡一戶事、任御下文之旨莅彼所可被沙汰付時長代使節、及遲引者可有其咎、依國宣執達如件、

建武元年十月六日　大藏權少輔清高奉

南部又次郎殿

〔好古日錄 末〕延元後五十年間遺器〇文書附中略

洪鐘　陸奧國糠部郡天台寺鐘、元中九年壬申三月二十六日、銘文略之

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月三日庚申、泰衡被圍數千兵、〇中略此間相恃數代郎從河田次郎、到于肥內郡。

鹿角郡

こほりより奉れる御鷹、よになくかしこかりければ、になうおぼして御手たかにし給けり、名をばいはでとなむつけ給へりける、

〔南部文書一〕花押〇北畠顯家、
鹿角郡闕所少々、被宛行地頭等也、任御下文之旨、可被沙汰居之由、依國宣執達如件、
建武元年三月二十一日　大藏權少輔清高奉
南部又次郎殿〇師行

〔南部文書二〕曾我太郎貞光着到目安言上
兩年于合戰致忠節間事〇中略
一今年七月十一日、又打入鹿角郡、被打落二藤次柵大豆田柵三箇所之時、若黨鎌孫三郎依沿爲代官、屬御奉行御手、致軍忠候了、〇中略
右兩年中之合戰之間、親類若黨等抽忠勤、夙夜警固所々侍候、無申計候、所詮賜大將軍御判、備後證、爲施弓箭面目、恐々粗言上如件、
建武四年八月二十三日　承了源花押

九戸郡　二戸郡　三戸郡　北郡

〔郡名一覽〕陸奥國〇中略　九戸クノヘ　二戸ニノヘ　三戸サンノヘ　北キタ

〔日本國郡沿革考二〕陸奥〇中略
九戸クノヘ四十二村延喜式不載、蓋從舊號、　二戸ニノヘ四十八村同上　三戸サンノヘ六十七村同上　北キタ五十四村同上、[illegible]之[illegible]、是即閉伊郡北境、蓋中世割二閉伊郡一所置、

〔寛文印知集九〕陸奥國北郡、三戸、二戸、九戸、鹿角、閉伊、岩手、志和、稗貫郡、和賀所々都合拾万石目錄在之、別紙、
事、任寛永十一年八月四日先例之旨、宛行之訖、全可令領知者也、仍如件、
寛文四年四月五日　御朱印
南部山城守とのへ
奉者　杉浦伊右衛門

斯波郡

彼國也、仍今日條々有被仰遣事、〇中略和賀、稗貫兩郡分者、自秋田郡可被下行稗子等也、

〔延喜式十神名〕陸奥國一百座〇中略
斯波郡一座小　志賀理和氣神社

〇按ズルニ、弘仁二年紀ニ、和我、薭縫、斯波三郡ヲ置キシコト見エタルモ、此郡名民部省式、又倭名類聚抄ニ見エズ、思フニ神名帳ハ舊記ニ據テ之ヲ書シタルノミニテ、當時既ニ此郡廢セラレシモノナラン、其廢合年代ハ明ナラズ、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月四日辛酉、著御于志波郡、而泰衡親昵俊衡法師放此事、燒失當郡內比爪館、遂逃赴奥方云云、

〔奥州斯波系圖〕覺書
一私先祖足利尾張守家氏、始而奥州斯波郡下向仕、高水寺ニ在城仕候、

香阿郡 閉伊郡

〔續日本紀七元正〕靈龜元年十月丁丑、陸奥蝦夷第三等邑良志別君宇蘇彌奈等言、親族死亡子孫數人常恐被狄徒抄略乎、請於香阿村、造建郡家、爲編戶民、永保安堵、又蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閉村便建郡家、建於百姓、共率親族、永不闕貢、並許之、

〔南部文書一〕花押〇北畠家
閉伊郡內大澤村御牧馬、并殺害追捕以下狼藉事、石見左近大夫有資申狀二通、副守常解狀等如此、子細見狀、山田六郎所行云云、急速令尋沙汰、任實正可被注進之由、國宣候也、仍執達如件、
建武元年三月三日　　大藏權少輔清高奉
南部又次郎殿〇御判行

岩手郡

〔大和物語下〕おなじみかど、〇ならのみかどのかりいといいとかしこくこのみ給けり、みちのくにいはでの

氣仙郡

〔延喜式 十 神名〕陸奥國一百座 中略○

氣仙郡三座 並小　理訓許段神社　登奈孝志神社　衣太手神社

多賀郡 階上郡

〔續日本紀 三十八 桓武〕延曆四年四月辛未、中納言從三位兼春宮大夫陸奥按察使鎭守將軍大伴宿禰家持等言、名取以南一十四郡、僻在山海、去塞懸遠、屬有徵發、不會機急、由是權置多賀階上二郡、募集百姓、足人兵於國府、設防禦於東西、誠是備預不虞、推鋒万里者也、但以徒有開設之名、未任統領之人、百姓顧望、無所係心、望請建爲眞郡、備置官員、然則民知統攝之歸、賊絶窺窬之望、許之、

〔奥羽觀蹟聞老志 十二 階上郡〕按、階上郡不詳其地、於本吉郡有稱波止上者、是古之階上地、而誤其文字者也、又曰家持謀不虞之變、而請建眞郡、且置統領之人、最得計策之旨、依此觀、則多賀亦聯屬郡縣者也、

岩井郡 平泉郡

〔吾妻鏡 九〕文治五年八月二十一日戊申、追奉衡、令向岩井郡平泉給、

〔笠井系圖〕淸重

武州河越人也、(中略)文治五年秋、賴朝自欲征奥州、淸重從之、(中略)賴朝感其忠、賞以平泉郡内撿非違使管領、且賜伊澤、磐井、牡鹿等數郡、

膽澤郡

〔日本後紀 十二 桓武〕延曆廿三年五月癸未、陸奥國言、斯波城與膽澤郡、相去一百六十二里、山谷嶮口往還多艱、不置郵驛、恐闕機急、伏請准小路例、置一驛、許之、

江刺郡

〔延喜式 十 神名〕陸奥國一百座 中略○

江刺郡一座 小　鎭岡神社

〔吾妻鏡 九〕文治五年十一月八日甲子、葛西三郎淸重依被仰付奥州所務事、還御之時、不令供奉、所留彼國也、仍今日僅々有被仰遣事、中略○　仍岩井、伊澤、柄差、以上三箇郡者、自山北方可通裏符、

和我郡 稗縫郡

〔日本後紀 二十一 逸史〕弘仁二年正月丙午、於陸奥國置和我、薭縫、斯波三郡、

〔吾妻鏡 九〕文治五年十一月八日甲子、葛西三郎淸重依被仰付奥州所務事、還御之時不令供奉、所留

陸奧國遠田郡修理亮　同國三迫藤民部大夫

小田郡

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、皇后太子並侍焉、群臣百寮及士庶分頭行列殿後、勅遣左大臣橘宿禰諸兄白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命、盧舍那像能大前仁奏賜部止奏久、此大倭國者、天地開闢以來爾、黃金波人國用理獻言波有登毛、斯地者無物止念部流仁、聞看食國中能東方陸奧國守從五位上百濟王敬福伊、部內少田郡仁黃金出在奏弖獻、

〔奧羽觀蹟聞老志十二小田郡〕按、小田郡地、乃牡鹿遠島是也、後併之牡鹿郡、其證見于光俊陸奧山歌詞、皆是古之小田地也、

登米郡

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年三月辛亥、陸奧國○中略登米郡併小田郡、

〔倭名類聚抄五國郡〕陸奧國○略註管三十六、○中略登米、止與米

志太郡

〔倭名類聚抄五國郡〕陸奧國○略註管三十六、○中略志太、

桃生郡

〔續日本紀二十稱德〕天平寶字元年四月辛巳、其有不孝不恭不友不順者、宜配陸奧國桃生、出羽國小勝、以清風俗、亦捍邊防、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年十一月癸巳、陸奧國桃生郡人外從七位下牡鹿連猪手、賜姓道島宿禰、

本吉郡

〔封內名跡志十七本吉郡〕古屬桃生郡、後割桃生置本吉郡、今之氣仙沼七村、舊屬氣仙郡云、永祿中復屬本吉郡、

牡鹿郡

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月丙寅、勅曰、○中略陸奧國按察使兼鎭守將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獦等、教導荒夷、馴從皇化、不勞一戰、造成既畢、又於陸奧國牡鹿郡、跨大河凌峻嶺、作桃生柵、奪賊肝膽、眷言惟績、理應襃昇、宜擢朝獦特授從四位下、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奧國○中略標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奧臣、○中略牡鹿郡人外正八位下春日部奧麻呂等三人武射臣、

阿部陸奥臣、〇中略新田郡人外大初位上吉彌侯〇圖書寮本、侯作候、一本、改部豐庭上毛野中村公、

〔奥羽觀蹟聞老志 新田郡十二〕按、新田郡不詳、其地、賀美郡有新田者三區、是古之新田地、而分之爲上中下三區者也、

〔今昔物語 十五〕陸奥國小松寺僧玄海往生語第十九
今昔、陸奥國新田ノ郡ニ、小松寺ト云フ寺アリ、其寺ニ玄海ト云フ僧住ケリ、〇下略

長岡郡

〔吾妻鏡 十九〕承元五年〇建曆元年四月二日癸未、陸奥國長岡郡小林、新熊野社壇堂舍等者、當國守秀衡法師之時、爲豐前介實俊奉行、加造營、剩秀衡元曆二年八月、以郡内荒野三十町、奉寄之、文治五年八月、右大將家、入御奥州之次、可止狼藉之由、被下御敎書訖、其後畠山二郎重忠知行當郡之時、殊以崇敬之、

〔奥羽觀蹟聞老志 長岡郡十二〕按、長岡郡今爲村落、在荒野西、屬栗原郡、所記小林村、亦在長岡村西、是古之長岡地也、

田夷郡

〔續日本紀 聖武十〕天平二年正月辛亥、陸奥國言、部下田夷村蝦夷等、永悛賊心、既從敎喩、請建郡家于田夷村、同爲百姓者、許之、

遠田郡

〔續日本紀 聖武十二〕天平九年四月戊午、遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言、以去二月十九日到陸奥多賀柵、與鎭守將軍從四位上大野朝臣東人共平章、且追常陸、〇中略下野等六國騎兵總一千人、開山海兩道、夷狄等咸懷疑懼、仍差田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人、遣海道、〇中略以使賓郡喩鎭撫之、

〔續日本紀 光仁四十〕延曆九年五月庚午、陸奥國言、遠田郡大領外正八位上勳八等遠田公押人款云、已既洗濁俗、更欽淸化、〇中略伏望、一同民例、改夷姓、於是賜姓遠田臣、

〔吾妻鏡 二十一〕建曆三年〇建保元年五月七日丁未、勳功事、今日先被定之、〇中略

玉造郡

〔續日本紀　稱德　二十九〕神護景雲三年三月辛巳、陸奧國〈○中略〉標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奧臣、〈○中略〉玉造郡人外正七位上吉彌侯〈○彌侯原作俟、據一本改、〉部念丸等七人下毛野俯見公、並是大國造道嶋宿禰嶋足之所請也、

丹取郡

〔續日本紀　元明　六〕和銅六年十二月辛卯、新建陸奧國丹取郡、

〔奧羽觀蹟聞老志　丹取郡　十二〕按、丹取郡不詳其地、以所記考之、則玉造、乃古之丹取地乎、且併之其郡者乎、

〔續日本紀　聖武　十〕神龜五年四月丁丑、陸奧國請新置白河軍團、又改丹取軍團、爲玉作團、並許之、

葛岡郡

〔吾妻鏡　九〕文治五年八月廿日丁未、卯剋二品令赴玉造郡給、則國衡多加波々城給之處、泰衡棄去城逃亡、自殘留郎從等束手歸降、此上者、出于葛岡郡、赴平泉給、

〔奧羽觀蹟聞老志　葛岡郡　十二〕按、葛岡郡今爲村落、屬玉造郡、有故館、稱葛岡城、往昔重忠居館、而後萬西監物據之、是古之葛岡地也、

上治郡

〔續日本紀　光仁　三十六〕寶龜十一年三月丁亥、陸奧國上治郡大領外從五位下伊治公呰麻呂反、率徒衆殺按察使參議從四位下紀朝臣廣純於伊治城、

〔續日本紀考證　十一〕大日本史注云、案陸奧國無上治郡、未詳、陸奧郡鄉考云、上治疑伊治之誤、今去栗原郡界五六里許有黑沼邑、邑有伊上城趾、其地屬登米郡、伊上上治文字必有舛訛、內藤氏曰、伊治之地、或分爲上下二邑、稱曰上治又伊上者蓋以此、

栗原郡

〔續日本紀　稱德　二十八〕神護景雲元年十一月乙巳、置陸奧國栗原郡、本是伊治城也、

〔日本後紀　桓武　十二〕延曆廿三年十一月戊寅、陸奧國栗原郡、新置三驛、

讃馬郡

〔日本後紀　桓武　八〕延曆十八年三月辛亥、陸奧國富田郡併色麻郡、讃馬郡併新田郡、

新田郡

〔續日本紀　稱德　二十九〕神護景雲三年三月辛巳、陸奧國〈○中略〉標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人賜姓

伴柴田臣、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年十一月八日、大進僧都觀基參御所申云、去月十六日夜半、陸奥國芝田郡石如雨下云云、件石一進將軍家、大如柚、鋒長也、有落石下事二十餘里云云、

名取郡

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國(略)〇中標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、(略)〇中名取郡人外正七位下吉彌侯(侯、一本作部、〇彌侯原作部、據一本改)部老人(略)〇中九人、上毛野名取朝臣、

宮城郡

〔續日本後紀九仁明〕承和七年三月戊子、宮城郡權大領外從六位上勳七等物部巳波美造私池、漑分田八十餘町、輸私稻一萬一千束、賑公民、依此公平、並假外從五位下、

黒川郡

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年正月己巳、陸奥國言、部下黒川郡以北十一郡、雨赤雪、平地二寸、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國(略)〇中標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、(略)〇中黒川郡人外從六位下靫大伴部繼(〇繼原作虫、據一本改)虫(〇虫原作繼、據一本改)等八人、靫大伴連、

〔續日本紀四十桓武〕延暦八年八月己亥、勅、陸奥國入軍人等、今年田租、宜皆免之、兼給復二年、其牡鹿、小田、新田、長岡、志太、玉造、富田、色麻、賀美、黒川等一十箇郡、與賊接居、不可同等、故延復年、

賀美郡

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國(略)〇中賀美郡人丈部國益(略)〇中等十人、賜姓阿倍陸奥臣、(略)〇中賀美郡人外正七位下吉彌侯(侯、一本作部、〇彌侯原作部、據一本改)部大成九人、上毛野名取朝臣、

〔日本後紀五桓武〕延暦十六年正月庚子、陸奥國白川郡人外□八位□大伴部足猪等、賜大伴白河連、(略)〇中富田郡人丸子部佐美、(略)〇中大伴宮城連、

富田郡　色麻郡

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年三月辛亥、陸奥國富田郡、併色麻郡、

〔奥羽觀蹟聞老志十二色麻郡〕按、色麻郡不詳其地、加美郡有稱四竈者、是古之色麻地、而誤其文字者也、

〔地名字音轉用例〕入聲キノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

しかま　色麻(陸奥)志加萬

去八月下向、夜前歸著、今日參御所、是被賞右筆幷賦物兩藝、日來所奉昵近、仍無左右被召御前、被尊仰奥州事等、

〔太平記十九〕奥州國司顯家卿上洛並新田德壽丸上洛事

金崎ノ城ハ攻落レテ、義顯朝臣自害シタリト聞ヘシ後ハ、顯家卿ニ附隨フ郎從、皆落チ失テ、勢微微ニナリシカバ、纔ニ伊達郡靈山ノ城一ツ守テ、有モ無ガ如クニゾオハシケル、

刈田郡 柴田郡

〔郡名考〕陸奥　刈田カリタ カツタ

〔續日本紀八元正〕養老五年十月戊子、柴田郡、置苅田郡、

〔日本紀略元正〕養老五年十月戊子、分陸奥國柴田郡二郷、置刈田郡、

〔續日本紀考證四〕紀略作分陸奥國柴田郡二鄕置苅田郡、十四字、爲正、和名抄郡名陸奥國柴田之次太、苅田葛太是也、按苅卽刈字、此間多加艸冠、書蓋國作薗、席作蓆之類也、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國、○中略、標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、○中略、柴田郡人外正六位上丈部島足安倍柴田臣、○中略、苅田郡人外正六位上大伴部人足大伴苅田臣、柴田郡人外從八位下大伴部福麻呂大伴柴田臣、

〔吾妻鏡十六〕正治二年五月二十八日壬午、陸奥國葛田郡新熊野社僧論坊領境、兩方帶文書、望總地頭畠山次郎重忠成敗、重忠辭云、當社雖在領內、秀衡管領之時、令致公家御祈禱、今又奉祈武門繁榮之上、重忠難自處者、則付大夫屬入道善信擧申之、仍今日羽林召覽彼所進境繪圖、染御自筆、令曳墨於其繪圖中央給訖、所之廣狹可任其身運否、費使節之暇、不能令實撿地下、向後於境相論事者、如此可有御成敗、若於存未盡由之族者、不可致其相論之旨被仰下云云、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國白河郡人外正七位上丈部子老、○中略、賜姓阿倍陸奥臣、○中略、柴田郡人外正六位上丈部島足安倍柴田臣、○中略、柴田郡人外從八位下大伴部福麻呂大

安達郡
信夫郡
伊達郡

あさか　安積(奧郡)阿佐加(アサカ)　積をシヤナ、直音ニシテサニ用ヒ、韻ヲ轉ジテカニ用ヒタリ

〔續日本紀〕(二十九稱德)神護景雲三年三月辛巳、陸奧國(○中略)標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奧臣、安積郡人外從七位下丈部直繼足阿部安積臣、

〔延喜式〕(二十二民部)延喜六年正月九日、分安積郡、置安達郡、

〔運歩色葉集〕(志)信夫(奧州)

〔地名字音轉用例〕ンノ韻ヲナノ行ノ音ニ通用シタル例

しのぶ　信夫(奧郡)志乃不(シノブ)

〔續日本紀〕(二十九稱德)神護景雲三年三月辛巳、陸奧國(○中略)標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿部陸奧臣、(○中略)信夫郡人外正六位上丈部大庭等、阿倍信夫臣、(○中略)信夫郡人外從八位下吉彌侯部足山守等七人上毛野鍬山公、(○中略)信夫郡人外少初位上吉彌侯部廣國下毛野靜戶公、(○吉彌侯部、一本作吉彌侯、下同、)(○下略)

〔古事談〕(四勇士)宗形宮內卿入道師綱、陸奧守ニテ下向之時、基衡押領一國、如无國司威、仍奏聞事由、下宣旨、擬檢注國中公田之處、忍郡者基衡處于、先々不入國使、而今度任宣旨檢注之間、基衡件郡地頭大庄司季春ニ合心テ禦之、(○下略)

〔倭名類聚抄〕(五國郡)陸奧國(○中略)信夫(伊達郡分爲二)

〔地名字音轉用例〕入聲ツノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

いだて　伊達(奧郡)　神名帳ニ、出雲ナドニ、伊太氐(イダテ)ト云社號多シ、

〔吾妻鏡〕(九)文治五年八月七日甲午、二品著御于陸奧國伊達郡阿津賀志山邊國見驛、

〔吾妻鏡〕(十六)正治二年十二月三日乙酉、有太輔房源性(士左衞門尉義盛子)者、無雙算術者也、加之見田頭里坪、於眼精之所覃、不違段歩云云、又伺高野大師跡、顯五筆之藝、而陸奧國伊達郡有境相論、爲其實檢

于相津、故其地謂相津也、是以各和平所遣之國政而覆奏、

〔古事記傳二十三〕相津(アヒヅ)は、和名抄に陸奧國會津(阿比豆)郡とある是なり(會津、耶麻、大沼、河沼を總て會津四郡と云ならへり、和名抄に大沼河沼に見えず、椛生郡の次にある大沼は別か、白河郡の西に、國分爲高野郡、今分爲大沼河沼二郡とある、今分より下は會津郡の處にありつるが離ひたるか、國分てと今分と重なれることもいかゝなればなり、)万葉十四(十五丁)に、阿比豆禰能云々なり(禰は峯なり)古今六帖に、心にもあらでわたりの會津川憂名を水に流しつるかな、後撰集別に、君をのみ信夫の里に往ものを會津の山の遙けきやなぞ、(○註略)さて姓氏錄(難波忌寸條)に、大彥命、磯城瑞籬宮御宇天皇御世、遣治蝦夷之時云々とある、是此命の陸奧まで往(ユキ)し、證なり、

耶麻郡

〔會津風土記郡村〕耶麻郡　南會津也、交河沼郡、界日橋川、西隣越後國、界檜木峠、高森山、乾隅並越後出羽二州、界飯豐山、北隣出羽國、界赤崩山、檜原峠、艮隅並出羽國、界中吾妻峯、交信夫郡、界中吾妻峯、土湯峠、東接安達郡、界東嶽、石筵峠、揚枝峠、巽隅連安達郡、界高森山陸坂、限湖水半、東西七十一里餘、(自東沼尻峠至西檜木峠)南北三十八里餘、(自南鹽川至北檜原峠、按倭名集、有耶麻郡二焉、恐重出、而其一有津部量足、其一有會津郡日量、共五而無今之五莊、蓋津部津量、量足日量亦錯誤、而分會津郡、間不空之、則會津分爲耶麻之謂也、)

〔續日本後紀九仁明〕承和七年三月庚辰、陸奧國耶麻郡大領外正八位上勳八等丈部人麿戶一烟、賜姓上毛野陸奧公、

磐瀬郡

〔續日本紀八元正〕養老二年五月乙未、割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、(○並陸奧國)置石背國、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奧國(○中略)標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奧臣、(○中略)磐瀬郡人外正六位上吉彌侯人上磐瀬朝臣、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年(○建保元年)三月十七日戊午、和田平太胤長配流陸奧國岩瀬郡云云、

安積郡

〔郡名考〕陸奧　安積アサミ　安積アサカ

〔地名字音轉用例〕入聲クノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

宇多郡

相馬孫五郎殿

〔日本書紀 持統三十〕三年正月丙辰、詔曰、務大肆陸奥國優嗜曇郡城養蝦夷脂利古男麻呂、與鐵折、請剔鬢髪爲沙門、

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國〈略〉○中 標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、〈略〉○中 宇多郡人外正六位下吉彌侯〈侯、諸本或作候、今從一本改〉文知上毛野陸奥公、

日理郡

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國〈略〉○中 標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿部陸奥臣、〈略〉○中 日理郡人外從七位上宗何部池守等三人賜湯坐日理連、

伊具郡

〔續日本後紀 仁明九〕承和七年二月癸亥、陸奥國〈略〉○中 伊具郡擬大毅陸奥眞成等戸二烟、賜姓阿倍陸奥臣、

標葉郡　田村郡

〔奥州相馬系圖〕義胤
天正四年七月七日、於伊達領古佐井之内矢之目鈴賀山、與伊達輝宗、合戰、(中略)同比、於奥州鹽松〇〇郡大越與正宗郡從合戰、時敵敗北、同比於同國田村郡〇〇〇、上宇津志下宇津志常葉與正宗合戰、

會津郡

〔會津風土記 郡村〕會津郡　東交岩瀬郡、界二岐嶽小嶽山、南下野國、界小嶽山大峠山王峠、巽隅達下野國、界荒貝嶽枯木峠、離方隅野之上下州、下州界帝釋山長田代山赤安山、上州界赤安山小瀬峠、坤隅界至佛山、西界藤原峠、並越後國、界藤原峠枝折峠大鳥嶽淺草山、乾隅限越後國、界赤是山、北交大沼郡、界桑子澤、松坂峠、鍋鼻山、關山峠、艮隅限曲而西、接大沼郡、界鶴沼川、北達河沼郡、界藤倉山、艮方額耶麻安積二郡、谷苗湖、東交安積郡、界九鐵山、黑森峠、布引山、東西一百三十二里餘、〈自東五輪峠、至西淺草山、〉南北一百二十四里、〈自南小瀬峠、至北大塩村、〉

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國〈略〉○中 標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、〈略〉○中 會津郡人外正八位下丈部庭虫〈虫、原作蟲、今從一本改〉等二人、阿倍會津臣、

〔古事記 崇神 中〕故大毘古命者隨先命而罷行高志國、爾自東方所遣建沼河別、與其父大毘古共往遇、

〔續日本紀　八元正〕養老二年五月乙未、割陸奥國〇國、據一本改、原作常、之石城、標葉、行方、宇太、亘理〇亘、據一本改、原作白、常陸國之〇常陸國之四字原脫、據一本補、菊多六郡、置石城國、〇下略

〔續日本紀　二十七稱德〕天平神護二年十一月己未、以陸奥國磐城宮城二郡稻穀一萬六千四百餘斛、賑給貧民、

楢葉郡

〔磐城風土記　郡村〕楢葉郡、東留岡濱、至北迫海邊、異隅淺見川、至江網海邊、次接磐城郡、界切通山嶺中野山、南續磐城郡、界沓掛山、猫鳴山、戶渡後山、疊小屋山、坤隅接磐前郡、界大瀧西山嶺、至栗木平平松嶋大澤嶺、次接田村郡、界長柴峠、鞭投田錫坂、西續田村郡、界矢大臣峠、早馬嶽、乾隅續田村郡、界大瀧峠、取上岩下峠、塗窪嶺、北續田村郡、界大鷹鳥峠、次接標葉郡、界赤柴嶺、北石塚嶺、艮隅續楢葉郡、界曲坂八幡飛礫石境川太刀洗、次小良濱海邊、井出濱至早馬嶺、東西五十四里、徑直三十六里、南北三十六里、徑直二十四里

標葉郡

〔續日本紀　二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國〇中略標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人、賜姓阿倍陸奥臣、

行方郡

〔郡名考〕陸奥　行方ナメカタ　ナメガタ

〔續日本紀　二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國〇中略標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人賜姓阿部陸奥臣、〇中略行方郡人外正六位下大伴部三田等四人大伴行方連、

〔奥羽觀蹟聞老志　十二行方郡〕按、行方郡不詳其地、或說以小鶴池爲行方名跡、和漢三才圖繪書、亦載于此郡中、然則此地、乃古之行方郡、而今廢位之宮城郡者歟、

〔續日本紀　三十三光仁〕寶龜五年七月丁巳、陸奥行方郡災、燒穀穎二万五千四百餘斛、

〔相馬文書　一〕行方郡事、可令奉行條々、載事書被遣之、得其意可被申沙汰者、國宜如此、仍執達如件、

建武二年六月三日　右近將監淸高奉

國多珂郡、界笠松山、奈古曾關、鵜石原嶺、南隣常陸國多珂郡、界夏山造澤蜂巢嶺、坤隅隣常陸國多賀郡、界黑磯山梨木塚松坂渡嶺、西隣常陸國多賀郡、界小金坊大金坊澤、次接高野郡、界六間山山角欠石山、乾隅續高野城、界松ヶ鼻弓張木、次接石川郡、界御歌舞山樫木澤小川、次界厥平御在處山大川筋、北界坂倉嶺瀧本澤瀨戶尻川之會、艮隅界三石至檜木淵之川筋、次界切坂山大森山瀧倉山、次接磐前郡、界大荷田矢井田坂笠貝嶺也、下川至角欠石東西四十五里、（徑直三十里）蜂巢至板倉嶺、南北二十一里、（徑直十四里）

〔續日本紀 八元正〕養老二年五月乙未、割陸奧（○陸奧原作常陸、據一本改、）國之石城、（○中略）常陸國之（○常陸國之四字原脫、據一本補、）菊多六郡、置石城國、（○中略）割常陸國多珂（○珂原作河、據一本改、）郡之鄕二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背（○背恐城誤）國焉、

磐前郡

〔磐城風土記 郡村〕磐前郡、東接磐城郡、界輕塚峠唐松山大城坊南領、次藤間高久沼內海邊、巽隅豐間至小名濱、限海邊、次接菊多郡、界瀧尻川花立山古館、南續菊多郡、界瀧倉領城石三體明神、坤隅續菊多郡、界二石嶺境明神入道瀧澤、西接石川郡、界夏焼鬼角渡戶紫山峠、乾隅續石川郡、界坂取山崩山、次接田村郡、界石佛弓張木、次接楢葉郡、界長柴吉窪嶺、北續楢葉郡、界由窪至大瀧嶺、次接磐城郡、界大瀧川筋、艮隅續磐城郡、界鹽田西小川大川筋也、藤間濱至柴山峠、東西六十三里、（徑直四十二里）三體明神至栗木平、南北二十四里、（徑直十六里）

磐城郡

〔磐城風土記 郡村〕磐城郡、東續楢葉郡、四倉濱至大越濱海邊、巽隅續藤間海邊、次接磐前郡、界動岡山、南續磐前郡、界館岡小島山大館古城、坤隅續磐前郡、界大迫嶺綱塚峠、西續磐前郡、界水石峠早坂嶺木戶石至上小川之川筋、乾續磐前郡、界高崎地獄樣多貫、限樣多瀧其川筋、次接楢葉郡、界糸條山蛇鏡山、北續楢葉郡、界天蓼山之澤黑森山之郡三森南澤、艮隅續楢葉郡、界追道鶴場難山、自四倉濱至水石峠、東西二十五里、（徑直十八里）大館古城至天蓼山、南北三十四里、（徑直二十三里）

如件、

延元二年六月廿八日　　鎮守軍監有實奉

上野入道殿○結城宗廣

〔有造館本結城古文書寫乾〕高野郡郷々相博事、伊達一族爲度々恩賞拜領候、或帶綸旨、或帶故國司○源顯家

宜候、相博之段自公方被執仰之條、彼等定失其勇候歟、直被談合、令永諾申者、就其可有計御沙汰候、

伊香郷者、平賀兵庫助景貞、爲恩賞拜領云々、於海上令討死候了、一腹兄弟數輩子息等定申子細候

歟、當時凶徒未退散候上、先被加對治、且景貞跡ニも同被直談合候者可宜候、近日時分面々難被空

功之條、可被察申候、手澤郷者藤藏人房雄拜領候云々、房雄當參候、於此所者被召替他所之條、無子

細歟、早加對治、追可被申之由、內々仰候也、恐々謹言、

五月○延元四年三日　　沙彌宗心花押

結城大藏大輔殿○親朝

〔結城文書一〕花押○源親房

高野郡內伊香手澤兩郷、爲石川郡知行分替、可被管領之由仰候也、仍執達如件、

延元四年八月廿一日　　越後權守秀仲

結城大藏大輔殿

〔集古文書二十一補任〕觀應三年陸奧國河沼郡雀林村法用寺藏

陸奧國會津大沼郡法用寺別當職事、任相傳之旨、寺務管領不可有相違、彌可被致祈禱精誠狀如件、

觀應三年十月廿四日　　右京大久

葦名禪師御房

〔磐城風土記郡村〕菊多郡、東接磐前郡、界瀧尻川、次下川中田皆海邊、巽隅關田九面又海邊、次幷常陸

白河郡

高野郡 大沼郡 河沼郡 石川郡

〔吾妻鏡九〕文治五年九月廿三日庚辰、於平泉、巡禮秀衡建立無量光院給、○中略豐前介、爲案内者候御供、申云、清衡繼父武貞、(號荒河太郎、鎮守府將軍武則子、)卒去後、傳領奥六郡、(伊澤、加(加當作和)賀、江刺、稗拔、志波、岩手、)去康保年中、移江刺郡豐田館於岩井郡平泉、爲宿館、

〔書言字考節用集十數量〕奥州山東七郡(サンタウシチグン)(白川、石川、磐瀬、安達、安積、伊達、信夫、)

〔會津風土記封域〕會津奥州之域、在州之西南、會津、耶麻、大沼、河沼、總曰會津四郡、(後四郡本會津一郡、而分爲耶麻、又割爲三、)(大沼河沼、近失會津郡、而加稱河沼也、)

〔磐城風土記封域〕磐城奥州之内在州之東南、磐城、磐前、菊多、楢葉、謂之磐城四郡、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月辛巳、陸奥國白河郡人外正七位上丈部子老、○中略等十人、賜姓阿部陸奥臣、○中略白河郡人外正七位下靭大伴部繼人、○中略等八人、賜大伴連、

〔倭名類聚抄五國郡〕陸奥國○中略白河(之良加波、國分爲高野郡、)(今分爲大沼河沼二郡、)

〔會津風土記郡村〕大沼郡　東南西會津郡也、西隣越後國、界馬尾瀧山、程窪森山、乾隅並越後國、界鋒峠、北隣越後國、界高陽峯、交河界郡、界高陽峯蒲萄倉松坂里、東西六十九里、(自東隣郡川、至西隣馬尾瀧山、)南北四十六里餘、(自南隣郡桑山、至北瀧谷村、)○中略

河沼郡　南會津郡及大沼郡也、北耶麻郡也、東交耶麻郡、界日橋川、西隣越後國、界九才坂島居峠、東西四十五里餘、(自東日橋川、至西九才坂、)南北二十二里餘、(自南隣野村、至北日橋川、)

〔磐城鹿島神社文書〕陸奥國高野郡事、爲勳功之賞、可令知行者、天氣如此、悉之、

延元元年五月二十三日　民部權少輔(花押)

結城大藏權少輔館(○親朝)

〔白河證古文書上〕雜

陸奥國高野南郡内和泉守時知跡事、爲勳功賞、所被宛行也、早可被知行之由、國宜所候也、仍執達

ぞ、　大名門　郡載　階上　今宮城郡の内なるべし、和名抄宮城郡に科上と有是也と
ぞ、本吉郡波路上村是なるべしといへるハ非、
金原以上七箇用集
上治　續紀上ハ伊の誤ならんといへり　狭布　古歌又袖中抄　十符　袖中抄宮城郡利
府也とぞ　平泉　東鑑又撰集抄、今磐井郡の中平泉村あり、　寺池　今登米郡に寺池村と
云あり　竹駒　今氣仙郡に竹駒村と云あり　松浦　高倉門岡、今江刺郡に上門岡村下門
岡村あり、○中略　鼻輪　和漢三才圖會に津輕をかくいへり、鼻和といへるハ、津輕郡の邑名に
見えたりと、郡鄕考に見ゆ、　多賀　家持卿諸て異郡とし玉へり、今宮城郡の中多賀城路の邊
なるべし、　富田　讃馬　日本後紀殘冊卷八、富田郡を色麻郡に併也、讃馬郡を新田郡に併也
と見ゆ、　優嗜曇　持統紀七陸奥國優嗜曇郡城養云々、今桃生郡、又午田村あり、是歟、　糠部
東鑑に見ゆ、今の九戸也と聞老志に云り、　又郡鄕考に南部、軍鑑を引て二戸三戸共に糠部に
在ることをいへり、舊蹟紀聞に今二戸郡に此名殘りて、糠部の鄕といへりと云々、　鉋屋　仁
土呂志　宇曾利　此三郡　蝦夷地　の内にて、今ハ南部封内に有べし、宇曾利は恐山の邊の地
なるべし、陸奥話記六丁オ云、奥地の浮囚に甘說して、官軍をおこさしむ、こゝにおきて、鉋屋に土呂
志宇曾利、合せて三郡の夷人、安倍富忠を首として兵を發し、爲時に從ふ云々、
〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年十二月丁酉、募陸奥國諸郡百姓、戍奥郡者、便卽占著、給復三年、
〔吾妻鏡六〕文治二年四月二十四日辛未、陸奥守秀衡入道請文參著、貢馬貢金等、先可沙汰進鎌倉可
令傳進京都由載之云云、是去比被下御書、御館者、奥六郡主、予者東海道總官也、尤可成魚水思也、但
隔行程無所于欲通信、又如貢馬貢金者、爲國土貢、予爭不管領哉、自當年早予可傳進、且所守勅定之
趣也者、上所奥御館云云、

ノ名目ハ、姑ク節用集（南部林宗二書）ニ載ルト雖モ、重複及寄併ノ名アリテ、信ズルニ足ラズ、新井白石氏五十四郡考ノ著アリト雖モ、說郡少カラズ、（其新田今併ニ賀美、小田併ニ牡鹿、田村古高野郡也等、皆誤ナリ）終ニ五十四郡ノ地ヲ的稱スル能ハズ、總テ之ヲ論ズル者、大抵節用集ノ名目ニ泥ミ、一モ明確ノ說ヲ得ル者ナシ、予既ニ文治中五十郡アル事ヲ歷叙シテ、尙四郡ヲ闕ケリ、因テ現今存スル所ノ石川、田村、楢葉三郡ヲ加ヘテ五十三郡ヲ得タリ、石川郡ハ結城古文書ニ出ヅ（高野郡内、伊香手澤、同高野郡、石川郡知行分事、可被管領之由、仍執達如件、延元四年八月廿一日、鎭守府將軍、結城大藏大輔殿、）田村楢葉二郡ハ未ダ古書ニ出デシモノヲ見ズト雖モ、田村郡ハ田村氏ノ據ル所ニシテ、舊石川氏ノ石川郡ニ於ケルガ如シ、蓋シ鎌倉南北朝ノ際ニ、郡數ニ列セシモノナラン、楢葉郡ハ磐城ノ分郡ニシテ、岩城氏ノ領スル所ナリ、磐城ヲ分置セシ前後ニ之ヲ置キシナルベシ、岩城氏家譜ニ海道小太郎成衡ハ、藤原清衡ノ女婿トナリテ岩城郡ヲ領シ、男子五人アリ、各一郡ヲ分領ス、長子楢葉太郎隆祐、二男岩城二郎隆衡、三男岩城三郎隆久、四男標葉四郎隆義、五男行方五郎隆行トアレバ、此時既ニ分郡セシナリ、又南部舊記ニ、古[illegible]上郡ハ今ノ北郡ノ地ト見エタレバ、蓋糠部郡ヲ割キシモノナラン、此一郡ヲ加ヘテ、恰モ五十四郡ノ數ニ合セリ、節用集ノ擧グル所ノ名目、古書ニ出ヅル者ヲ捨テ、却テ寄併ニシテ讀ミ誤キモノヲ數セ（大名門、郡）徒ニ郡數ニ充ツルノミ、其杜撰殊ニ甚シ、今一切之ヲ採用セズ、舊記ニ據リテ現今ノ郡數ノ沿革ヲ考ヘ、五十四郡ヲ考定シ、悉ク其分界ヲ得タリ、以テ古說ノ紛紜ヲ糾正スベキナリ、

〔新撰陸奥風土記〕一書有て今なき郡

丹取　神龜五年、丹取軍團を改めて、玉造軍團とす、　色麻　今賀美郡の中國竈村と云是歟

新田　今栗原郡佐沼の中新田村と云有、是にや、　長岡　今栗原郡に長岡有、是なるべし、

高野　和名抄今田村郡といふ　阿曾沼（節用集）　比内（比一作ゝ、記）　今南部の二戸の地也と

誤ナルベシ、又白河郡註ニ、國分爲ニ高野郡、會津郡註、今分爲ニ大沼河沼二郡、(此註流行本誤テ、白河ノ下ニ出ヅ、)信夫郡註ニ、國分爲ニ伊達郡、此高野河沼伊達三郡ヲ加ヘテ共ニ三十九郡ナリ、磐手郡ハ始テ大和物語ニ見ユ、(陸奥ノ國岩手郡ヨリ奉レル御鷹云々、岩手トナン付給フ、)陸奥話記ニ、六箇郡司安倍頼良ト云フ者アリ、東鑑、文治五年九月ノ條ニ據ルニ、奥六郡ハ伊澤、(即膽澤、)和賀、江刺、稗拔、(即稗縫、)志波、岩手ナリ、康平五年、源頼義ノ安倍貞任ヲ誅シテ六郡ヲ收復セシ時、此和賀、稗縫、志波、岩手四郡、蓋シ郡數ニ列セシナリ、(拾芥抄此四郡ヲ載セテ、奥四郡不入ト註セリ、)前三十九郡ニ合セテ共ニ四十三郡ナリ、藤原清衡鎭守將軍ニ任ジ、安部氏ノ故地ニ據リ、自カラ封建ノ勢ヲナシ、三世ニ傳ヘ泰衡ニ至リ、文治五年九月、源頼朝之ヲ滅シテ陸奥ノ地ヲ取リシ時、岩崎、(即磐前ナリ、東鑑、文治五年八月條下、常陸下總等國勇士等、經ニ宇太行方、囘ニ岩城岩崎渡、過ニ隈河渡、)比内、(又肥內ニ作ル、)糠部、(同上九月條云、泰衡差ニ夷狄島ニ赴ニ糠部郡、到ニ肥內郡贄柵之處ニ云々、)葛岡、(同八月、赴ニ玉造郡ニ、出ニ葛岡郡ニ、赴ニ平泉ニ、九月廿日、畠山次郎重忠賜ニ葛岡郡ニ、是狹少之地也、)ノ四郡、東鑑ニ見エタレバ、蓋シ藤原氏ノ私置セル所ナラン、前ト台シテ共ニ四十七郡ナリ、台記(宇治左府頼長ノ記)仁平三年七月、奥州高鞍庄年貢云々、本吉金五十兩布二百段馬四疋トアリ、又藤原秀衡ノ四子ニ、本吉冠者隆衡アリ、此本吉郡モ亦私置ナルベシ、(葛西古文書ニ、建武二年十月、源顯家ヨリ葛西陸奥守ニ、元眞氣仙二郡ヲ加賜セル事見エタリ、)津輕閉伊二郡ハ、上世ノ置ク所ナレドモ、久シク夷境ニ淪沒シテ、聞ユル事ナカリシガ、頼朝陸奥ヲ收復セシ後、阿曾沼四郎廣綱ニ閉伊郡ノ南方(遠野郷)ヲ賜ヒ、(遠野家記ニ出ツ、又建久中陸奥守源頼基、糠北中根城ニ居リ、閉伊氏ト稱ス、)安藤季信ヲ以テ津輕ノ守護トナス事(藤崎系圖、東鑑文治六年正月ニ、到ニ津輕ニ云々見ユ、)見エタレバ、此時本吉、閉伊、津輕三郡、亦郡數ニ入リシナリ、合セテ共ニ五十郡ナリ、

鎌倉ノ季世ニ及ビ陸奥五十四郡アリシト見エテ、平家物語(阿古屋松ノ條)ニ、陸奥六十六郡ナリシヲ、十二郡ヲ割テ、出羽國ニアリト云々、其六十六郡ハ荒蕪ナリト雖モ、當時既ニ五十四郡アリシ故、此說アルナリ、太平記(顯家卿上洛條)奥州五十四郡ノ勢共多分馳付テ、程ナク十萬餘騎ニ成ケリ、又(奥州下向勢逢難風條)結城入道道忠ノ奏言ニ、奥州五十四郡、恰モ日本半國ニ及ベリト云ヘリ、五十四郡

桓武天皇延暦四年三月辛未、中納言従三位兼春宮大夫陸奥按察使鎮守將軍大伴宿禰家麻呂等言、名取以南十四郡、（按ズルニ、名取、柴田、刈田三郡、及ビ石城、石背十一郡ナリ、）僻在山海、去塞懸隔、屬有徴發、不會機急、由是權置多賀階上二郡、〇中略　按ズルニ、宮城郡ニ多賀郷アリ、即多賀城ノ所在ナリ、蓋鎮守府ヲ膽澤郡ニ徙セシ後、之ヲ廢シテ宮城郡ニ併セシナラン、聞老誌云、本吉郡波止上村、昔階上郡之地歟、五十四郡考曰、考之源順所録者、多賀科上二郡、後併宮城郡並爲郷、此兩説未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ、但科上郷今所在ヲ詳ニセズ、故ニ考據シ難シ、又波止上村ヲ以テ階上郡ノ地トナス時ハ、後氣仙郡ト改稱セシニヤ、猶後考ヲ俟ツ、此二郡ヲ合テ共ニ三十二郡ナリ、〇中略　十八年三月辛未、陸奥國富田郡併色麻郡、讃馬郡併新田郡、登米郡併小田郡、（日本紀略）此三郡ヲ省テ共ニ二十九郡ナリ、富田ハ色麻郡ノ北方ノ地ナラン、讃馬ハ新田郡ノ東方ノ地ニシテ、今佐沼村存セリ、按ズルニ、延喜式和名抄共ニ登米郡アリ、蓋復置セシナリ、〇中略　田村麻呂ノ蝦夷ヲ征服シテ、地ヲ拓テ膽澤城ニ至ル事、實ニ非常ノ偉勳ナリ、此時蓋磐井、江刺、膽澤三郡ヲ置レシナルベシ、則共ニ三十二郡ナリ、多賀科上二郡ノ廢スルモ、此前後ニアリテ、登米郡ヲ復置シ、又氣仙郡ヲ置タトナセバ、（弘仁元年十月甲午、陸奥國言、渡島狄二百餘人、來著部下氣仙郡云々、氣仙郡始テ此ニ見ユ、）亦三十二郡ナリ、

嵯峨天皇弘仁二年正月丙午、於陸奥國置和我、稗縫、斯波三郡、（日本後紀）此三郡延喜式和名抄ニ載セズ、但延喜式神名帳ニ、斯波郡一座トアリ、蓋權置ノ郡ニシテ、只其區域ヲ畫シテ、租税ヲ徴セズ、故ニ其郡ノ數ニ入ザルモノナラン、又會津郡ヲ割テ耶麻郡ヲ置キ、（耶麻郡始テ承和七年十二月ニ見ユ、）亘理郡ヲ分テ、伊具郡ヲ（伊具郡始テ承和十五年五月ニ見ユ、）置キシモ、亦延暦以後ニアルベシ、（延暦四年、大伴家持ノ奏言ニ、名取以南十四郡ノ語アリ、此二郡分置セザルコト知ルベシ、）此二郡ヲ合セテ、共ニ三十四郡ナリ、延喜六年正月二十日、分安積郡、置安達郡、（日本紀略）是ニ於テ三十五郡トナル、即延喜式載スル所ノ數ナリ、和名抄ニ大沼郡ヲ加ヘテ三十六郡トナス、然レドモ郡郷部之ヲ載セズシテ、耶麻郡ヲ重出セリ、下ノ耶麻ハ蓋シ大沼ノ

此二郡ハ蝦夷叛亂ノ後、沒セシモノナラン、香阿ハ其地ヲ詳ニセズ、閉村ハ卽後ノ閉伊郡ノ地ナリ、〇中略此時〇養老二年陸奧國ハ幾何郡アル事史ニ明文ナシト雖モ、今之ヲ推考スルニ、賀美、玉造、黑川、宮城、名取、志太、柴田ノ七郡ナルベシト思ハル、志太ノ東北隣ノ小田郡ハ、或ハ旣ニ置レシモ知ルベカラズ、色麻郡ハ下文ニ色麻柵トアレバ、此時未ダ建置セザルナリ、且同時分國スル所ノ石城石背ノ廣狹ヲ比較シテ、今之ヲ七郡ノ地ト假定セリ、〇津輕、香阿、閉村等ノ諸郡ハ、蝦夷ノモノトシテ算入セズ、養老五年十月戊子、割陸奧國柴田郡、置苅田郡、共ニ八郡ナリ、

石城石背二國ノ廢スル國史ニ見エズ、但神龜五年四月丁丑、陸奧國請新置白河軍團、許之、トアレバ、此時二國既ニ陸奧ニ併セラレタルナリ、〇分國ヨリ此年ニ至リ十年ナリ是ニ於テ十九郡アリ、聖武天皇天平二年正月辛亥、陸奧國言、部下田夷村蝦夷等、永悛賊心、既從敎諭、請建郡家于田夷村、同爲百姓者、許之、共ニ二十郡ナリ、按ズルニ、此建郡ハ卽遠田郡ナリ、天平九年四月戊午ノ條ニ、遠田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人遣海道云々トアリ、〇中略小田郡ハ志太郡ノ東北遠田郡ノ北ニアレバ、遠田郡ヨリ先ニ置カレシナラン、其史ニ見ユルハ、天平二十一年四月條ニ、陸奧守從五位上百濟敬福部內小田郡爾黃金在止奏獻云々トアリ、之ヲ合セテ、共二十一郡ナリ、〇中略長岡郡ハ志田郡ノ北、新田郡ノ南ニアレバ、此時既ニ置レタルナラン、合セテ共ニ二十二郡ナリ、天平寶字四年十月乄、陸奧國牡鹿郡俘囚外少初位上大伴部押入云々トアレバ、是ヨリ先キ建置セシナリ、共ニ二十三郡ナリ、

稱德天皇神護景雲元年十一月乙巳、置栗原郡、本是伊治城也、共ニ二十四郡ナリ新田、讀馬、色麻、富田、登米、五郡ハ此前後ニ置カレシモノト思ハル、合セテ共ニ二十九郡ナリ、是ヨリ先天平寶字二年十月甲子、發陸奧國浮浪人、造桃生城、光仁天皇寶龜二年十一月癸巳、陸奧國桃生郡牡生郡牡鹿連猪手、賜姓道島宿禰トアレバ、此時既ニ桃生郡ヲ建シナリ、合テ共ニ三十郡ナリ、

時公儀ノ御帳ニハ、五十二郡ト載セラレ候トカ、其內一郡ニ候ヲ、御主ノカハリ故ニ、文字或ハ闕候コトモカヘラレ候事ト聞ヘ候ヘバ、實ニ五十郡ト見ヘ候、平家物語阿古屋ノ松ノ下ニ、出羽陸奧ノ國モ、昔ハ六十六郡ガ一國ナリシヲ、十二郡ヲサキ分ナ後出羽ノ國トハ立ラレシ也ト之レ有リ候、然ラバ五畿冠者ノ時ニハ俗間ニ五十四郡ノ說之レ有リ候コトハ一定ト聞ヘ候、然レドモ後來迄ノ證ニ引候ハンニ、平家物語又ハ節用集モイカヾニヤ之レ有ルベク候、モシ證ニモ立申ベキ物ニ、五十四郡ト申ス事シルシ置候事御覽候カ、此段思召ヲ承リタク申述候、

先師申候ハ、若キ時東鑑ノ講ヲセシ人ノ、奧州ハ元六郡ヲ一組ブヽニセシコトナリ、御館ヲ奧六郡ノ主ト云シモ此レユヘナリ、昔ハ六々三十六郡ナリシヲ、後ニ六九五十四郡ニ分ツテ押領シタルナリト云シ、是等ハ俗間ニ云習ハセル事モ有ルカト申シ候、其講師ノ名モ承リ候ヘ共、久キ事ニテ色々按ジ候ヘ共、存ジ出サレズ候、多年心掛候テ、大カタ沿革ハ存ジ當リ候ヘドモ、建置ノ兎角知レカネ候、三ケ條ノ御尋、御垂示ニ預リ候ハヾ、大幸タルベク候、

〔明治十四年東京地學協會報告〕國郡沿革考第三回　塚本明毅

陸奧〇中略

大化國郡ヲ定ムルノ時、陸奧ノ國境何ノ地ニ止マリシヤ、又幾郡アリシ事詳ナラズト雖、但賀美郡ハ、其置郡ノ時、必ズ極北ノ地ニアルベシト思ハル、何トナレバ凡郡鄕ニ賀美ト稱スルノ地、必ズ極北ノ地ニアルベシト思ハル、何トナレバ凡郡鄕ニ賀美ト稱スルノ地、必ズ其國郡ノ一隅ニアリテ、一モ中間ニアルモノナシ、〈武藏ノ賀美郡ハ西北隅ニアリ〉又其後置郡ノ次第ヲ考フルニ、賀美郡ヨリシテ、漸ク北ニ進ムヲ以テ之ヲ證スベシ、元明天皇和銅六年十二月辛卯、新建陸奧國丹取郡、後玉造郡ト改稱ス、卽賀美郡ノ北ニアリ、〈續紀五年四月丁丑、改丹取軍團、爲玉造軍團、此玉造ト改稱セシ明證ナリ、然ルニ先輩丹取ハ名取ノ誤トナス者、蓋此文ニ注意セザルモノカ、〉元正天皇靈龜元年十月丁丑、從陸奧蝦夷之請、於香河村閉村、各建郡家、〈續紀〉

土子所據、子孫承襲、其人賢則兵強境開、不肖則威屈勢蹙、是以伸縮不常、始或爲郷、或稱郡、遂擧其部内定爲一郡、蓋自天正頃、○中略五十四郡名、始見于此、未知是何據也、○中略然藤行長記時人之言曰、陸奥古有六十六郡、後分十二郡爲出羽國、蓋是無稽之言、其說所由亦既久矣、○中略方今版籍所載、曰白河、曰白川、曰石川、曰田村、曰岩瀬、曰會津、曰大沼、曰河沼、曰耶麻、曰安積、曰安達、曰信夫、曰伊達、曰刈田、曰柴田、曰名取、曰菊多、曰磐城、曰磐前、曰楢葉、曰標葉、曰行方、曰宇多、讀爲宇乃太、曰宇多、曰伊具、曰亘理、曰宮城、曰黒川、曰賀美、曰玉造、曰志田、曰栗原、曰磐井、曰江刺、曰膽澤、曰遠田、曰登米、曰桃生、曰本吉、曰氣仙、曰牡鹿、曰和我、曰稗貫、曰志和、曰岩手、曰鹿角、曰二戸、曰三戸、曰九戸、曰閉伊、曰北郡、曰津輕、總五十二郡、考之史籍、古郡併廢者、色麻、長岡、新田、小田、葛岡、凡五、分置者、白川、楢葉、補遺曰、源順和名抄、磐城郡下、郷名有楢葉、後或陞以爲郡也、二戸、九戸、凡四、改名者田村、補遺名、古莊名、不得曰改名、詳論於下、二戸、九戸、凡三、三戸、北郡、未詳、南部田氏曰、古老相傳云、南部舊有七郡、和我、稗貫、志田、岩手、鹿角、閉伊、海上、若依此說、則今三戸地、舊爲岩手郡、古海上、即今北郡地、然海上、古未之聞、以俟後考、補遺曰、按秋田卜部一閑所著永慶記、南部信直以天正十五年、介前田利家致信於豐臣氏、修臣順之禮、奥羽二州、是爲通使之始、是以豐臣氏欣、即以其所并取之閉伊、磐手、鹿角、稗貫、津輕等郡爲封、其後信直、又亡斯波氏、得其郡、而失津輕、田氏所謂南部有七郡、不知指何時而言也、其餘皆仍舊已、因按、色麻新田、今皆併賀美郡爲邑、○中略長岡、今併栗原郡爲邑、○中略小田、今併牡鹿郡、爲遠島地、○中略葛岡、今併玉造郡爲邑、○中略白川、古白河郡所管白川郷、今分爲郡、○中略宇多、古宇多地、今分爲二郡、○中略田村、古高野郡、後因莊園改今名、○中略二戸、蓋古比内郡、○中略九戸、乃古糠部郡、○中略由是觀之、今之所稱五十二郡、實則其爲郡者、止有五十矣、

〔新安手簡　一〕前ニモ申上候ガ、俗間ニテ奥州五十四郡ト申シ候事ニ付テ、印本ノ延喜式ヲ見候ヘバ、所管三十五郡之レ有リ候、源順和名抄ニ參シ候ヘバ、最初ニ大沼一郡之レ有リ候ヲ、印本ノ式ニハ闕候ヤノ樣ニ見ヘ候、尊藩ニ御善本ノ式之レ有ルベク候、イカヾ候ヤ、承ハリ挙リタキ事ニ候、拾芥抄ニハ三十六郡候ヘ共、和名抄トハ異同之レ有リ候、節用集ニ至テハ、イカニモ五十四郡候、此節用集ノコト環翠ノ作トハ申事ニ候ヘ共、慥ニ據モ存ゼズ候、イカヾニ候ヤノ事、又次ニ當

字之誤、鑑字亦經字之誤、皆依草書而誤其字于傳者也、鑑亦徒改貫字、訓以相似也、仍今稱神貫是也、葛江刺、又作江差、按今刊本學所名、而爲二郡矣、是乃所以拘刺差異文字、而分之也、以其昔同訓同而考之、則實一郡、而妄分之、今所呼乃江刺之字也、然則須江差乃除之而可矣、牡鹿、一作杜鹿、以其字體相似、而是亦誤二其郡耳、則書傳闕書寫之誤也、其餘同名同字之類、多除之、尤合五十四郡之數矣、故後世稱之曰五十四郡也、其中亦世除者多、若色麻、新田、長岡、葛岡(岡字誤作田)小田等、今已爲邑也、色麻、今作四竈、爲賀美郡邑、新田亦分上下中三邑、而在遠田郡、相傳往昔足利家分流斯波源家兼、爲陸奧探題、以新田而爲治府焉、以爲其名近侊家之氏、於是改之、曰大崎是也、葛岡、今爲玉造郡邑、岡作田字誤也、小田、今併在牡鹿郡、事詳于牡鹿郡、高野、今號田村、比內、非河內非也、古貫稱地、今號二戶、糠部、今號九戶、三戶、今屬岩手郡、是古書滯上郡是也、○中略

我太守封疆郡數凡二十一郡

刈田　柴田　伊具　日理　宇多　名取　宮城國分庄高城庄　黑川大谷庄　志田高倉庄松山庄　加美田河庄　玉造　遠田[illegible]田庄　栗原金屬庄二迫庄　一迫庄三迫庄　磐井西磐井庄流庄　膽澤　江刺　登米　氣仙　本吉氣仙沼　桃生深谷庄　牡鹿遠島　村落凡千十八邑

(奧州五十四郡考)東陸州郡、建置沿革、無得詳焉、世之所稱、以爲五十四郡、而古有三十五郡、補遺(廣瀨曲補遺)云、古書具載郡名、可爲證者、今世唯有延喜式民部省耳、本文亦據民部省而云爾也、然古書歷亂世、蠹簡朽廢、猶在神庫佛宇、幸不亡盡、復傳治世、而被貴重、故校合力疎、脫誤極多、遂不及此、而遽信之、其不疑紕繆者幾希、余嘗閱延喜式民部省所載、固止三十五郡耳、神祇伯家所主、在祭神名、有無其神、則郡名不徒錄、是以所收及三十二郡、乃取二編一一讎對、而得斯波郡於民部省所載之外、然則延喜時、實有三十六郡、而後世刊本民部省脫斯波郡、而不自覺也、白石氏承襲述闕者志之繆、猝斷以爲三十五郡、大綱已失、所以下文不免強解者、亦爲多也、於今亦稱五十二郡、其說皆不合、補遺曰、當今官府所建存、蓋知是也、俗間唯知有五十四郡、近世所著和爾雅、和漢三才圖繪、日本輿地全圖、武用辨略等、錄郡名者、五十四郡中、異同甚多、雜糅紛亂、莫不有知我奧者、按舊事紀成務始分其地、定以爲國者八、曰阿尺、曰思、曰伊久、曰染羽、曰浮田、曰信夫、曰白河、曰石城、補遺曰、據舊事紀、石城上脫曰石背三字、是有九國也、八當作九、史稱成務始分國郡、以定邑里、即此之謂也、應神復置道奧菊田道口阿岐閉神野等國、凡其爲國者、十有一、補遺曰、當作十有二、○中略厥後新建陸奧國、並廢舊國、以爲屬郡、蓋出自孝德大化之制焉、○中略齊明四年四月、定置齶田、渟代、津輕等郡、○中略和銅五年十月、割最上置賜二郡、隸出羽國、○中略後亦分齶田渟代二郡、隸出羽國、○中略六年十二月、新建丹取郡、○中略七年十月、置郡於香河閉等村、○中略養老二年五月、置石城石背等國、割石城、標葉、行方、宇太、亘理、菊多六郡、隸石城國、割白河、石背、

奥州五十四郡ノ勢共多分ハセ付ナ、堪ナク十萬餘騎ニ成ニケリ、

〔奥羽觀蹟聞老志 一〕奥羽郡數多少異同考

延喜式神名帳、陸奥國三十一郡、

考順倭名集五十四國郡部、載安達、菊多、長岡、新田、遠田、登米、大沼七郡、而爲三十六郡、　除苅田、信夫、斯波三郡、

拾芥抄中末、載耶麻、安達、那田、菊多、登米、長岡、遠田、和我、磐城、磐手、高野十一郡、而爲三十九郡、　除、苅田、小田、遠磨三郡、

環翠軒節用集、載耶麻、安達、遠田、菊田、阿曾沼、磐手、和賀、河内、稗貫、高野、大名門、江差、長岡、登米、耶栽、鹿角、階上、津輕、本吉、大沼、稲我、行波、磐前、金原、葛岡、伊達、閉伊二十九郡、而爲五十六郡、　除岩城、新田、遠磨、斯波四郡、

源順倭名集國郡部三十六郡

考同書九十四郡里數、載耶田、標葉、耶麻三郡、而爲三十五郡、　除信夫、苅田、大沼三郡、

拾芥抄、載磐城、和我、斯波、磐手、高野五郡、而爲三十九郡、　除苅田、小田、大沼三郡、

節用集載、標葉、阿曾沼、和我、河内、稗貫、高野、大名門、江差、耶栽、鹿角、階上、津輕、本吉、石川、稲我、行波、磐前、金原、葛岡、伊達、牡鹿、閉伊二十二郡、而爲五十六郡、　除岩城一郡、

拾芥集　多於延喜式十一郡　除三郡、俱詳于前、下倣此、　多於和名集五郡　除二郡

節用集載、小田、苅田、阿曾沼、河内、稗貫、大名門、江差、耶栽、鹿角、階上、津輕、本吉、石川、大沼、稲我、行波、磐前、金原、葛田、伊達、牡鹿、閉伊二十二郡、而爲五十六郡、

環翠軒節用集五十六郡　右郡名重出者有之、且誤字者亦多矣、故辨其義于下焉、

安積古郡、阿久、標羽古郡、論須、加美古郡、賀野、宇多古郡、浮田、伊具古郡、伊久、[illegible] 稗貫、[illegible]

東に聞ゆる出羽みちの國も、昔は六。十。六。郡。が一國なりしを、十。二。郡。にさきわかつて後、出羽の國とは立てられたるなり、されば實方の中將、おうまうへながされし時、當國の名所あこやの松をみんとて、國の内を尋ねまはるに、もとめかねて、すでにむなしう歸らんとしけるが、道にてある老おうに行きあたり中將や、御へんはふるい人とこそ見れ、當國の名所あこやの松といふ所や、知りたるととふに、まつたく國の内には候はず、出羽の國にぞ候らんと申ければ、さては汝も知らざりけり、今は世すへになりて、國の名所をもはや、皆よび失ひけるにこそとて、すでにすぎんとし給へば、老おう中將の袖をひかへて、あはれ君は、

みちのくのあこやの松に木隱て出べき月の出もやらぬか、といふ歌の心をもつて、當國の名所あこやの松とは御尋候か、それは昔兩國が一國なりし時、詠み侍りし歌なり、十二郡さきわかつて後は、出羽の國にぞ候らんと申ければ、さらばとて實方の中將も、出羽の國にこへてこそあこやの松をば見てければ、略○下

〔神皇正統記後醍醐〕ちかき代のことぞかし、賴朝の時までも、文治のころにや奧の泰衡を追討しに、身づからむかふことありしに、平の重忠が、先陣にてその功すぐれたりければ、五。十。四。郡。の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少きところをのぞみたまはりけるとぞ、

〔太平記十九〕奧州國司顯家卿上洛幷新田德壽丸上洛ノ事

奧州ノ國司北畠源中納言顯家卿、去元弘三年正月ニ、園城寺合戰ノ時上洛セラレテ、義貞ニ力ヲ加ヘ、尊氏卿ヲ西海ニ漂ハセシ、無雙ノ大功也トテ、鎭守府ノ將軍ニ成シテ、又奧州ヘゾ下サレケル、略○中顯家卿時ヲ得タリト悅テ、廻文ヲ以テ便宜ノ輩ヲ催サルヽニ、結城上野入道道忠ヲ始トシテ、伊達、信夫、南部、下山六千餘騎ニテ馳加ル、國司則其勢ヲ幷テ、三萬餘騎、白川ノ關ヘ打越給ニ、

陸

磐井	膽澤	江刺	和賀	稗貫	斯波	閉伊
			和我●	薭縫●	志波● 子波● 斯波●	
磐井(イハヰ)	膽澤(イサハ)	江刺(エサシ)				
同	同	同				
同	同	同	和我	薭縫	斯波	
同	伊澤 膽澤	江差 江刺	和賀	稗縫 稗貫 稗貫	志和 紫波	
同	膽澤	江刺(エサシ)	同	稗貫	紫波	
同	同	同	同	同	志和	
同	同	同	同	同	紫波	
同	同	同	同	同	同	
西磐井 東磐井	同	同	東和賀 西和賀	同	同	西閉伊 南閉伊

前

長岡	遠田	小田	志田	桃生	牡鹿	登米	氣仙	本吉	
	田夷		信太					階上	
長岡(ナガヲカ)	遠田(トホタ)	小田(ヲタ)	志田(シダ)	桃生(モムノフ)	牡鹿(ヲシカ)	登米(トヨマ)	氣仙(ケセン)		
同	同	同	同	同	同	同	同		
同	同	同	同	同	同	同	同		
	遠田		志太　志田	同	同	同	同	本吉　元眞	
	同(トホタ)		志田(シダ)	同(モノフ)	同(ヲシカ)	同(トヨマ)	同(ケセン)	本吉(モトヨシ)	
	同		同	同	同	同	同	同	
	同		同	同	同	同	同	同	
	同(トホダ)		同(シダ)	同(モノフ)	同(ヲシカ)	同(トヨマ)	同(ケセン)	同(モトヨシ)	十四郡
	同		同	同	同	同	同	同	

	陸								
				黑河	加美	富田	丹取	上治	遠馬
	柴田(シバタ)	名取(ナトリ)	宮城(ミヤギ)	黑川(クロカハ)	賀美(カミ)	色麻(シカマ)	玉造(タマツクリ)	栗原(クリハラ)	新田(ニヒタ)
	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	賀美	[illegible]野	玉造(タマツクリ) 葛岡	栗原	
	同	同	同	同	賀美(カミ)		玉造(タマツクリ)	同(クリハラ)	
	同	同	同	同	同		同	同	
	同	同	同	同	加美		同	同	
九部	同	同	同	同	同		同	同	
十部	同	同	同	同	同		同	同	

會津		大沼	河沼	耶麻	磐瀬	安積	安達	信夫	伊達
岩代									代
					石背				
					同	阿尺 朝香		忍	
會津(アヒツ)				耶麻(ヤマ)	磐瀬(イハセ)	安積(アサカ)	安達(アタチ)	信夫(シノフ)	
同		大沼 上注云、今分為二大沼河沼二郡一		同	同	同	同	同 [illegible]分為二伊達郡一	
同				同	同	同	同	同	
同 稲河		大沼	河沼	同	磐瀬 岩瀬	同	同	信夫	伊達
同		同	同	同	岩瀬	同	同	同	同
同		同	同	同	同	同	同	同	同
同		同	同	同	同	同	同	同	同
同		同	同	同	同	同	同	同	同
南會津	北會津	同	同	同	同	同	同	同	同

三戸（サンノヘ）　●淺水　●五ノ戸　●六ノ戸　八ノ戸　北海ニ寄　九戸（クノヘ）　●久慈　●三崎　北海ニ寄

北郡（キタコホリ）　●願法寺　●七戸　へ野邊地　●小佛　へ田名部　●矢冠崎　●九サウ泊　●佐井　外南部　北海松前ニ向

書有二色麻、長岡、新田、小田四郡一、今省之、而加二楢葉、田村、磐手、二戸、三戸、九戸、北郡七郡一、又、河内、大名門、郡載、金原、星河、高野、稲我ノ七郡界未考、

延喜式有二三十五郡一、無二大沼郡一、和名鈔爲二三十六郡一、

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山成國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

（郡名異同一覽）

磐城					
六國史古書					
延喜式	白河（シラカハ）			菊多（キクタ）	
倭名抄	同（之長新依）國分爲二高野郡一			同（大久多）	
拾芥抄	白川	高野		同	
諸書	同（知元）		石川（知元）	菊田（知）菊多（元）	磐崎（東）磐前（知元）
郡名考	白河（シラカハ）	白川（シラカハ）	同（イシカハ）	菊多（キクタ）	磐崎（イハカサキ）（イハサキ）
天保郷帳	同	同	同	同	磐前
明治沿革帳	同	同	同	同	同
地誌提要	同（シラカハ）	同（シラカハ）	同（イシカハ）	同（キクタ）	同（イハサキ）
郡區編制	西白河	東白川	同	同	同

賀美、色麻、玉造、志太、栗原、磐井、江刺、膽澤、長岡、新田、小田、遠田、登米、桃生、氣仙、牡鹿、○中略　右爲遠國

○按ズルニ、拾芥抄ニハ三十六郡トアリテ、以上三十五郡ノ外ニ、知我、蘇○[illegible]縫、斯波、磐手、高野ノ五郡、凡テ四十郡ヲ列擧セリ、

〔易林本節用集下〕陸奥奥州　大管五十四郡○中略　白川、黑河、磐瀨、宮城、府會津、那麻、小田、安積、安達、柴田、刈田、遠田、名取、信夫、菊多、又菊田標葉、阿曾沼、行方、磐手、又岩井和賀、河内、稗縫、高野、曰理、又亘理玉造、大名門、賀美、志多、又太栗原、江刺、又刺江差、膽澤、長岡、登米、桃生、牡鹿、郡載、鹿角、階上、津輕、宇多、伊具、本吉、石川、大治、色摩、稻我、斯波、磐前、金原、葛田、葛又作新伊達、杜鹿、閇伊、氣仙、

〔郡名一覽〕陸奥國○中略　五拾貳郡○中略

菊多　白川　磐前　磐城　標葉　行方　宇多　白河　石川　岩瀨　田村　安達　安積
會津　大沼　那麻　河沼　和賀　柴波　稗貫　岩手　鹿角　閇伊　九戸　二戸　三戸
北　刈田　伊具　宇多　亘理　名取　宮城　黑川　賀美　玉造　志田　遠田　栗原　柴
田　登米　牝鹿　桃生　本吉　氣仙　磐井　膽澤　江刺　津輕　信夫　伊達　楢葉

〔皇國郡名志〕陸奥國　舊三十五郡　今五十一郡

白川　[白川]　●矢ツキ　△塙　[棚倉]　常下毛界　　黑川　●新町　國中小郡
磐瀨　●小屋　●タリ石　●長沼　[黑川]　●横田　●勢七　下毛界
宮城　[仙臺]　△鹽竈社　●松島　△壹岬　●熊根　●石ノ卷　東海ニ向郡　●高木　△玉川　△末ノ松山
會津　[若松]　●五十里　●赤井　●横川　●御代　△田島　上毛下毛ノ界郡　●串谷　●大口川　●土出　●古川　●關山
耶麻　●檜原　△鹽ノ井　△猪苗代湖　羽界　會津川通
安達　[二本松]　△[illegible]石町　△アダチカ原　國中　　安積　●サヽ川　●日和田　△アサカ沼　國中
刈田　[白石]　●齋川　●桑折　羽界　　柴田　●金カセ　●野尻　●柴田　●舟廻　羽界
遠田　志太郡ト入込界不詳　國中小郡

○按ズルニ、此時岩代國ヨリ伊具郡ヲ除キテ之ヲ磐城國ニ屬セシメシナリ、

國府

〔倭名類聚抄 五國郡〕陸奧國（國府在宮城郡、鎭守府在膽澤郡、行程上五十日、下二十五日、）

〔新撰陸奧風土記 古蹟八〕國府并多賀城跡　觀蹟聞老志云、多賀國府地、今市以北岩切山陰古館址是也、本號高森、後遷市川多賀城于此、爾來呼高森曰多賀城、呼利府曰多賀國府、光則按に、多賀城卽國府にて、今宮城郡市川村壺碑の立てある邊其跡なるべし、聞老志の說は信じ難し、利府并高森など、多賀の國府に近きより、府とも高とも名におひしにや、昔多賀城に、陸奧守或は國司たる人居玉へるより、多賀の國府といひし也、

〔今昔物語 十七〕沙彌藏念世稱地藏變化語第八
今昔陸奧ノ國ノ國府ニ小松寺ト云フ寺有リ、中比一ノ沙彌有ケリ其ノ寺ニ住ス、名ヲバ藏念ト云フ、此レハ平ノ將門ガ孫良門ガ子也、

〔台記〕康治二年五月十四日庚午、於大納言伊通卿送使、爲借古今集註孝經、（[illegible]）付使者送之、佐實（[illegible]）士所望也、（九中略）○卷九奧以朱書云、寛平六年二月二日一覽了、于時爲在陸奧多賀國府、

〔吾妻鏡 九〕文治五年八月十四日辛丑、泰衡在玉造郡之由風聞、亦國府中山上物見岡、取陣之由、有其告、雖亘兩舌、泰衡所在未決、在玉造之條猶可然之間、自多賀國府經黑河、令赴彼郡給、

郡

〔倭名類聚抄 五國郡〕陸奧國（○註略）管三十六（○註略）白河（之良加波、○今分爲大沼、河沼二郡、○分爲高野郡、）磐瀨（伊波世、○國分以下六字）
（[illegible]）會津（阿比豆）耶麻（山）安積（阿佐加）安達（安多知）信夫（志乃不、○今分爲伊達郡、）刈田（葛太）柴田（之波太）名取（奈止利）菊多（久久多）
磐城（伊波岐）標葉（之米波）行方（奈女加太）宇多（宇太）伊具（以久）亘理（和多里）宮城（美也木）黑川（久呂加波）賀美（加美）色麻（之加萬）玉造（多萬豆久利）
（[illegible]）志太（之太）栗原（久利波良）磐井（伊波井）江刺（衣佐之）膽澤（伊佐波）長岡（奈加乎加）新田（爾比太）小田（乎太）遠田（止保太）氣仙（介世）
牡鹿（乎志加）登米（止與米）桃生（毛乃不）大沼（於保奴萬）

〔延喜式 二十二民部〕陸奧國、大、（白河、磐瀨、會津、耶麻、安積、安達、信夫、刈田、柴田、名取、菊多、磐城、標葉、行方、宇多、伊具、亘理、宮城、黑川、

陸中國

一高八萬三千十七石三斗二升　磐井郡　一高七萬七千三十一石二斗五升　膽澤郡　一高四萬五百八十六石六斗五升　江刺郡　一高三萬八千三百六十二石六斗九升二合　和賀郡　一高四萬二千四百四十七石六斗六升六合　稗貫郡　一高四萬七千百八十五石二斗七升九合　紫波郡　一高三萬五千九百三石三斗八升九合　岩手郡　一高一萬八千九百八十三石六升三合　鹿角郡　一高二萬六千七百二十五石二斗一升　閉伊郡　一高一萬二千八百九十一石九斗七升一合　九戸郡

右十郡　高合四十二萬三千百三十四石四斗九升

陸奥國

一高　萬三千八百八十八石五斗四升二合　二戸郡　一高三萬八千五百七十五石二斗五升九合　三戸郡　一高一萬三千九百十一石七斗二升二合　北郡　一高三十一萬七千二百六十二石二斗三升　津輕郡

右四郡　高合三十八萬三千六百三十七石七斗五升三合○中略

己巳〇明治二年十二月八日御布告

先般奥羽兩國之內、分國被仰出候處、此度更ニ割地圖面之通、御改正ニ相成候間、此旨相達候事、

磐城國○中略

右十四郡○白河、石川、田村、菊多、白川、磐前、磐城、楢葉、標葉、行方、宇多、刈田、伊具、亘理、　高合六十萬六千九百四石七斗九升五合六勺六才、

岩代國○中略

右九郡○會津、大沼、耶麻、河沼、岩瀬、安達、安積、信夫、伊達、　高合七十五萬五千七百三石九斗六升

斗九升　宇多郡　一高十一萬四千四百五十七石二斗五升一合六勺　伊達郡　一高二萬三千五百八十一石八斗一升　亘理郡

右十三郡　高合六十五萬八千三百七十九石八斗七升七合二勺六才

岩代國

一高八萬七千二百九十四石六斗六升六合九勺　會津郡　一高五萬二千六百九十一石一斗七升六合　大沼郡　一高十二萬二千八百四十八石二升　耶麻郡　一高七萬四千三百八十四石二斗六升五合　河沼郡　一高六萬九千百五十九石六斗二升八合九勺　岩瀬郡　一高九萬七百九十五石九斗一升三合三才　安達郡　一高五萬四千七百四石四斗四升七合二勺九才　安積郡　一高八萬九千三百六十八石五斗九升二合九勺　信夫郡　一高二萬三千五百三十九石二斗三升　刈田郡　一高三萬九千四百四十二石九斗四升　伊具郡

右十郡　高合七十萬四千二百二十八石八斗七升九合四勺二才

陸前國

一高三萬五百二十七石七斗八升　柴田郡　一高六萬四千二百四十九石九斗　名取郡　一高七萬五千四百三十五石八斗二升　宮城郡　一高四萬三千六百十一石九升　黑川郡　一高三萬九千二百四十七石四斗六升　賀美郡　一高二萬四千九百六石九斗八升　玉造郡　一高五萬七千百九十五石七斗九升　志田郡　一高六萬七百四十七石二斗八升　遠田郡　一高十三萬五千九百七十石三斗八升　栗原郡　一高四萬三百七十二石九升　登米郡　一高一萬四千九百二十七石三斗五升　牡鹿郡　一高七萬三千四百四十一石六斗二升　桃生郡　一高二萬千六百八十二石六斗八升　本吉郡　一高一萬五千五百二十三石　氣仙郡

右十四郡　高合六十九萬七千八百三十八石一斗八升

〔續日本紀考證 四〕按古事紀有道奥石城國造、舊事紀有道奥菊多國造、及阿尺、染羽、淨田、信夫、白河、石背、石城等國造、蓋在古並爲國、後廢爲郡、隷陸奥國、至是石城石背復分立爲國、○中略後再廢爲郡、復隷陸奥國、

〔奥羽永慶軍記 一〕奥州兵亂之起ノ事

陸奥出羽ノ兩州數代斷鎭守府按察使ヲ得テ、天文ノ比ニハ國司探題ノ人モナケレバ、兩國ノ武家我意ニ任セズトイフ事ナシ、○中略奥州ニ至テ岩城、相馬、石川、白川、會津ニ蘆名、須賀川ニ二階堂、二本松ニ畠山、米澤ニ伊達鮎貝引分レ相戰フ、並東奥ニハ亘理、國分、葛西、大崎、多田、志和ノ人々干戈ヲ動シ、北奥ニハ南部遠野閉伊稗貫合浦卒土濱迄ミダレズトイフ事ナシ、

〔憲法類編 十郡國府縣〕奥羽兩國ヲ七國ニ分國ノ事

戊辰明治元年十二月七日御布告

奥羽兩國ハ、曠漠僻遠之地ニシテ、古來ヨリ敎化洽ク難及儀モ有之候ニ付、今般兩國御取調之上、府縣被設置、廣ク敎化ヲ施シ風俗移易、人民撫育之道、厚ク御手ヲ被爲盡度思食ヲ以テ、陸奥國ヲ、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥ト五國ニ、○中略分國被仰付候條、此旨可相心得事、

磐城國

一高六萬四千百七十石二斗五升八合　白河郡　一高四萬八千九百九十八石一斗四升九合　石川郡　一高十萬六千七百五十二石八斗五升一合八勺五才　田村郡　一高四萬石四斗七升九合五勺一才　菊多郡　一高四萬三千六百七十七石九斗五升五合　白川郡　一高五萬四千八百十六石一斗二升九合三勺　磐前郡　一高三萬二千四十一石六斗六升八合　磐城郡　一高三萬千百十七石七斗二升四合　楢葉郡　一高二萬二千七百二十五石七斗九升　標葉郡　一高五萬千百四十一石六斗二升一合　行方郡　一高二萬四千八百九十八石一

伊久國造

志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖(天湯津彥命)十世孫豐島命定賜國造、

染羽國造

志賀高穴穗朝御世、阿岐國造祖(○天湯津彥命)十世孫足彥命定賜國造、

浮田國造

志賀高穴穗朝瑞籬朝(○崇神)五世孫賀我別王定賜國造、

信夫國造

志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖(○天湯津彥命)久志伊麻命孫久麻直定賜國造、

白河國造

志賀高穴穗朝御世、天降天由都彥命十一世孫塩伊乃己自直定賜國造、

石背國造

志賀高穴穗朝御世、以建許侶命兒建彌依米命定賜國造、

石城國造

志賀高穴穗朝御世、以建許呂命定賜國造、

(續日本紀二十八稱德)神護景雲元年十二月甲申、正四位上道島宿禰島足爲陸奥國大國造、從五位上道島宿禰三山爲國造、

(續日本紀四元明)和銅元年三月丙午、從四位下上毛野朝臣小足爲陸奥守、

(續日本紀八元正)養老二年五月乙未、割陸奥(陸奥原作常陸、據一本改、)國之石城、標葉、行方、宇太、亘理、(○亘原作白、據一本改、)常陸國之(○常陸國之四字原脫、據一本補、)菊多六郡、置石城國、割白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國、割常陸國多珂(珂原作河、據一本改、)郡之郷二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背(○背恐城誤)國焉

十八藩、明治紀元、王師北征、若松藩(松平容保)罪ニ伏シ、其黨伊達、南部、丹羽、阿部、田村諸氏削封差アリ、

本州ヲ分テ五州ト爲ス、

磐城七藩、(中村、棚倉、三春、泉、湯長谷、磐城平、守山、明治三年、守山常陸ノ松川ニ徙リ、六藩トナル、)尋テ按察使府ヲ白石ニ設ク、又之ヲ改テ角田縣トナス、既ニシテ皆廢シテ縣トシ、又合併シテ平縣ヲ置キ、磐前縣ト改稱ス、

岩代二藩、(二本松、福島)尋デ若松縣ヲ置キ、福島藩(板倉勝達)ヲ重原(三河)ニ徙シ、福島縣ヲ置、既ニシテ悉ク廢シ、又之ヲ合併シテ、福島若松二縣ヲ置、

陸前一藩、(仙臺)尋デ石卷登米二縣ヲ置、又石卷ヲ登米ニ併セ、既ニシテ皆廢シテ、仙臺一關二縣ヲ置、又改稱シテ宮城水澤ト云、

陸中二藩(盛岡、一關)尋デ江刺、膽澤、九戸、三縣ヲ置キ、九戸ヲ三戸ト改メ、既ニシテ之ヲ江刺ニ併セ、盛岡藩ヲ廢シテ縣トナシ、又悉ク合併シテ盛岡縣ヲ置キ、終ニ改稱シテ岩手ト云、

陸奧四藩、(弘前、八戸、黑石、七戸、)尋デ松平容保ノ子容大ヲ斗南(トナミ)ニ封ズ、既ニシテ皆改テ縣トシ、更ニ合併シテ弘前縣ヲ置キ、改テ青森ト稱ス、

〔先代舊事本紀十國造〕道奧菊多國造

輕島豐明(○應神)御代、以建許呂命兒屋主乃禰定賜國造、

道口岐閉國造

輕島豐明御世、建許呂命兒宇佐比乃禰定賜國造、

阿尺國造

志賀高穴穗朝(○成務)御世、阿岐國造同祖天湯津彥命十世孫比止禰命定賜國造、

思(○思恐誤字)國造

志賀高穴穗朝御世、阿岐國造同祖(○天湯津彥命)十世孫志久麻彥定賜國造、

牛奪氏ニ歸ス、貞家職ヲ子満家ニ傳フ、元中六年、満家經時、石橋棟義之ニ代リ傳ル數世、天文中、家臣大内宗政ニ奪セラル、既ニシテ伊達氏漸ク強大、行朝ノ子宗遠三郡ヲ刈田、伊具、柴田、併セ、其子政宗五郡宇多、亘理、宮城、名取、黒川、及出羽一郡ヲ取ル置賜郡元中八年、將軍義満本州及出羽ヲ以テ鎌倉管領足利氏満ニ隷ス、應永中、氏満ノ子満兼、其弟満貞ヲ本州管領トナシ、篠川ニ鎮ス、十八年、満兼ノ子持氏、南部守行ヲ守護トス、時ニ源顯家ノ裔、津輕郡波岡ニ據リ波岡氏ト云、後南部氏ニ地ヲ割ラレ、天正中、津輕爲信ニ滅サル、永享ノ末、満貞持氏ニ黨シテ敗死、爾後州内統一スル所ナシ、天文中、伊達政宗六世ノ孫晴宗米澤出羽置賜郡ニ移リ、兵勢益盛ナリ、將軍義晴以テ探題トナス、是時ニ方テ、蘆名、相馬、南部、大崎、及田村、結城、大内、二本松、二階堂、岩瀬郡須賀川岩城、石川石川郡石川諸氏競起リ、互ニ相呑噬ス、天正ノ末、南部信直斯波氏ノ地ヲ併セ、晴宗ノ孫政宗、二本松二階堂二氏ヲ平ラゲ、蘆名ヲ滅シ、石川大内ヲ降シ、悉ク其地ヲ有シテ黒川會津郡ニ徙ル、十八年、豐臣氏東征シ、政宗ノ會津仙道ノ地ヲ收テ蒲生氏郷ニ賜ヒ、黒川ニ治シテ若松ト改稱ス本州及出羽ノ守護タラシメ、結城、田村、大崎、葛西ノ地ヲ沒シ、葛西晴信、清重ノ後ナリ、桃生、登米、牡鹿、本吉、氣仙、磐井、膽澤、江刺八郡ヲ領ス、岩城相馬二氏ノ地、舊ニ仍リ、南部津輕ノ封ヲ定メ、津輕氏ハ南部氏ノ被官、是ヨリ始テ守牧ニ列ス、葛西大崎二氏ノ故地ヲ木村秀俊ニ賜ヒ、闔一政ヲ白河ニ封ズ、慶長十五年、一政徙封ノ後、代封セラル者數氏、安政ノ頃、阿部正備ニ賜ヒ、慶應中、棚倉ニ轉シ、城廢ス、又政宗ノ米澤、及三郡伊達、信夫、刈田、ヲ削リ氏郷ニ加封シ、秀俊ノ地ヲ奪テ、政宗ニ賜フ、政宗終ニ治ヲ仙臺ニ定ム、政宗領スル所貳拾壹郡、蒲生氏領スル所拾四郡、後蒲生氏ヲ宇都宮ニ徙シ、上杉景勝ヲ封ズ、關原役後、南部津輕相馬三氏封疆故ノ如ク、白石ヲ伊達氏ニ加封シ、岩城貞隆ノ地ヲ收メ、景勝ノ封ヲ削テ米澤ニ徙シ、再ビ蒲生氏ヲ若松ニ封ズ、六拾萬石嗣無クシテ封除シ、加藤嘉明之ニ代リ、子明成ニ至テ國除シ、保科正之ヲ封ズ、後ニ松平ト稱ス其餘州内前後封ヲ受ル者、二本松、初松下重長、後丹羽光重、磐城平、初鳥居忠政、後安藤信成、福島、初本多政長、後板倉重寛、三春、初秋田俊季棚倉、初立花宗茂、後阿部正升、一關、初伊達宗勝、後田村宗顯、泉、初内藤政晴、後本多忠知、湯長谷、内藤政亮守山、松平頼元下手渡、立花種善、明治元年、其孫種恭故封三池ニ復ス、又南部ノ支封ヲ八戸南部直房七戸南部信喜津輕ノ支封ヲ黒石ト云、津輕親足凡

〔日本地誌提要二十九 磐城〕沿革　磐城、岩代、陸前、陸中、陸奧、五州本陸奧一州タリ、養老中、磐城磐背ニ二州ヲ置、後皆併テ陸奧ニ入リ、國府ヲ宮城郡ニ置キ、府址岩切村高森ト云 鎮守府ヲ膽澤郡ニ設、達址入幡村達ニ在 永承中、州人安倍頼時、六郡ヲ膽澤、和賀、江刺、稗貫、紫波、岩手、劫略シテ衣川ニ據、源頼義州守ヲ以テ鎮守府將軍ヲ兼ネ、王命ヲ以テ之ヲ討ジ、數年ニシテ賊盡ク平ラグ、淸原武則從テ功アリ、因テ鎮守府將軍ニ拜シ、六郡ヲ領シ、子武貞ニ傳フ、寬治中、武貞ノ子家衡、其叔父武衡ト倶ニ亂ヲ作ス、頼義ノ子義家、父ノ任ヲ襲ギ、伐テ之ヲ平ラゲ、家衡ノ異父兄藤原淸衡ヲシテ州ヲ守ラシム、淸衡六郡ヲ領シ、鎮守府將軍ニ任ジ、陸奧出羽ノ押領使トナリ、平泉ニ居、磐井郡 遂ニ二州ヲ擄取シ、其女壻平成衡ニ岩城郡ヲ與フ、是ヲ岩城氏ノ祖トス、淸衡ノ孫秀衡州守ニ任ジ、盤踞益堅シ、子泰衡嗣グ、文治五年、源頼朝泰衡ヲ誅シ、葛西カサイ淸重ヲ留守トシテ二州ヲ綏撫シ、其將南部光行、糠部、岩手、閉伊、鹿角、津輕五郡ヲ領シ、糠部郡手加崎ニ居、糠部今ノ三戸郡ナリ、相傳ル二十餘世、慶長ノ初岩手郡盛岡ニ治ス、中村朝宗、伊達信夫郡ヲ領ス、伊達郡高子岡ニ居リ、後西山城ニ移ル、伊達氏是ナリ、佐原義連、會津、大沼、耶麻、河沼四郡ヲ領ス、義連ノ孫光盛、蘆名氏ト稱シ、會津郡ニ居、元中ノ初、黒川ニ城テ治トス、今若松是ナリ、相馬師常、宇多、行方二郡ヲ領ス、宇多郡小高城ニ居、後宇多半郡伊達氏ニ奪ハレ、行方郡越村城ニ移ル、結城朝光等ヲ分封シ、白河郡朝光、下總ニ在テ之ヲ領ス、孫祐廣始テ白河ニ移リ、子孫世襲、岩城田村二氏仍故地ヲ領ス、田村氏、田村郡ヲ領ス、坂上田村麻呂ノ後胤ナリ、建武中興、源顕家州守ニ任ジ、鎮守府大將軍ヲ兼ネ、義良ノリナガ親王ヲ奉ジテ、本州及出羽ヲ兼知ス、親王尋デ大守ニ任ズ、初國府ニ居リ、靈山城ニ移ル、後足利尊氏ノ反スル、族弟家兼ヲ以テ探題トナシ、大崎城ニ居、加美郡、子孫、志田、玉造、栗原、加美、黒川五郡ヲ領シ、大崎氏ト稱ス、元中ノ初、伊達氏黒川ヲ奪フ、家兼ノ從子斯波家長ヲ州守トナシ、高水城ニ居、紫波郡 二人皆官軍ニ抗シテ敗死ス、俄ニシテ顕家西上シテ戰死シ、州族多ク尊氏ニ應ズ、獨伊達行朝、朝宗六世孫 南部信長、光行五世孫 田村輝顯、結城親朝朝光五世孫 官軍ニ屬ス、興國元年、顯家ノ弟顯信州ノ介ニ任ジ、白河ニ鎮ス、四年、尊氏畠山高國ヲ探題トシ、二本松ニ居、安達郡ヲ領シ、世襲、二本松氏ト稱ス、靈山諸壘ヲ陷レ、正平中、尊氏又吉良貞家ヲ探題 シ、鹽松又四本松ニ作ル ニ居リ、安達郡 高國ト倶ニ州内ヲ略定ス、親朝等叛テ之ニ降リ、顯信西歸シ、本州大

宿驛

地、往還二十四日程也、

〔延喜式 兵部 二十八〕諸國驛傳馬 ○中略 陸奥國驛馬、雄野、松田、磐瀬、葦屋、安達、湯日、岑越、伊達、篤借、柴田、小野、各十疋、名取、玉前、栖屋、黒川、色麻、玉造、栗原、磐井、白鳥、膽澤、磐基、各五疋、長有、高野、各二疋、傳馬、白河、安積、信夫、刈田、柴田、宮城郡、各五疋、

〔續日本紀 二十二 淳仁〕天平寶字三年九月己丑、始置 ○中略 陸奥國嶺基等驛家、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年四月乙酉、廢陸奥國海道十驛、更於通常陸道、置長有高野二驛、爲告機急也、

〔吾妻鏡 九〕文治五年七月二十八日丙戌、著新渡戸驛、給、已奥州近々之間、爲知食軍勢、仰御家人等、面面被注手勢、仍各進其著到、

建置沿革

〔日本國郡沿革考 三 東山道〕陸奥 古作道奥、齊明紀或陸道奥、大國、管五十二郡、延喜式等三十六郡 四千五百十五村、

菊多 六十七村 古道奥菊多國、見國造記、後廢、養老二年五月、割多珂郡之郷二百一十烟、名曰菊多郡、屬石背國、楢山氏曰、屬石背國、蓋屬石城國之誤、 白川 九十三村 延喜式等不載、蓋近世所置、和名抄白川郷、隷白河郡、 磐前 百九村 延喜式等不載、蓋近世所置、 磐城 四十八村 古石城國、見國造記、古事記作道奥石城國、後廢爲郡、養老二年五月、割陸奥之石城、標葉、行方、宇太、亘理、菊多六郡、置石城國、後復廢、各依舊爲郡、源君美曰、初所新置石城石背國、後廢爲郡、至于此復再置、後亦皆廢爲郡、按神龜五年四月、新置陸奥國白河軍團、蓋可見、先是既廢二國、爲郡合陸奥國也、 楢葉 三十八村 延喜式等不載、蓋近世所置、和名抄楢葉、隷磐城郡、 標葉 五十五村 古染羽國、見國造記、 行方 九十六村 宇多 三十七村 古浮田國、見國造記、源君美曰、浮田史作優耆曇、和銅二年紀、後改字太、或作宇多、五十四郡考補遺、以優耆曇爲置賜郡、疑誤、 白河 百二村 古白河國、見國造記、和名抄云、國分爲高野郡、拾芥抄不載、 石川 七十六村 延喜式等不載、蓋近世割白河郡所置、 岩瀬 七十九村 古石背國、見國造記、後廢爲郡、養老二年五月、割陸奥之白河、石背、會津、安積、信夫五郡、置石背國、後復廢、各依舊爲郡、延喜式等作磐瀬、和名抄云、盤瀬國分爲伊達郡、今按二郡地勢不相接、甚可疑、 田村 百三十八村 延喜式等不載、蓋近世所置、 安達 七十村 延喜六年正月、分安積郡置、萬葉集、安太多良乃爾、即指此地、 安積 四十七村 古阿尺國、見國造記、 會津 二百八十五村 和名抄云、今分爲大沼、河沼二郡、萬葉集、安比豆禰、即指此地、古事記云、建沼河別、與其父大毘古、共東往、遇于相津、故其地謂相津、 大沼 百五十三村 延喜式等不載、中世割會津郡所置、蓋見上文、 耶麻 二百七十

十六間至長清水濱一里二十九町五十九間、從長清水至北上川口一十五町三十四間半、 桃生郡長面濱沿江至尾崎濱七里 三里三町四十五間

半至船越濱二里九町七間半 大須濱、三十八度三十一分半、 三里三十一町一十間至桑濱一里三十三町一間 分濱、三十八度三十分、 五里二町二十三間至尾浦一里十九町二十七間、從尾浦至女川濱一里三十四町四十二間、 牡鹿郡野々濱 二里二十七町一十一間至寄磯濱一里二十四町四十一間 鮫浦、三十八度二十二分半、 三里三十三町三十六間 鮎川濱 一里二十四町五間 小淵浦至小淵浦番所、四町一十間 三十八度一十九分 三里二十一町四十五間至大原濱二里五十一間 狐崎濱 五里三十二町四十五間至渡波町四里二十一町五十二間、 石巻村北上川口至石巻村門脇番所、一十四町四十五間、北極高三十八度二十五分、從番所至石巻村、一十町五十四間半、 四里五町四十五間至矢本村一里二十町四十四間、 桃生郡大塚濱 一里二十三町五十五間 宮城郡手樽村至富山大仰寺、十三町六間 一里二十七町二十四間半 松島村 一里三十一町一十二間 鹽竈村至鹽竈社一十四町四十四間半 五里四町四間半至花淵村二里三町二十六間半 蒲生村、三十八度一十五分半、 四里一十六町二十四間至荒濱一里一町四十六間、從荒濱至名取川口一里一十八町六間、 名取郡下野郷村藤曾根 三里一間半至大隈川口一里三十町四間 亘理郡吉田濱 五里二町一十五間至中濱二里一十一町、從中濱至大戸濱一里十二町九間、 宇多郡原釜村 五里一十町二十二間半至磯部村二里一十町三間 行方郡烏崎村、三十七度四十分半、 四里三十二町三十間至泉村一里一町五十一間、從泉至磯村一里八町五十一間、 角部内村 六里一町至鳥山村二里三十二町四十三間半 楢葉郡小濱村、三十七度一十九分半、 三里三十一町二十四間至山田濱村二里一十九町五間 下北迫村又作濱野宿 三里三十五町三十一間至久之濱村二里二十町三十二間 磐城郡四ツ倉村 六里六町四十四間至沼之内村三里六町一十二間 磐前郡小名濱米野村、三十六度五十六分、 一里一十一町四十五間 菊田郡下川村 三里二町五十七間至關田宿二里一十町一十三間、從關田至國界、二十一町五十九間、 常陸國多珂郡平潟濱

〔續日本紀四十桓武〕延暦八年六月庚辰、征東將軍奏稱、膽澤之地、賊奴奧區、方今大軍征討、剪除村邑、餘黨伏竄、原作竄、據一本改、殺略人物、又子波和我、僻在深奧、臣等遠欲薄伐、糧運有艱、其從玉造塞至衣川營四日輜重、受納二箇日、然則往還十日、從衣川至子波地、行程假令六日、輜重往還十四日、從玉造塞至子波

里三十二町二十三間（至大間村三里二十町二十三間）異國間村、四里三十町一十八間（至下風呂村二里一十四町四十二間半）大畑濱（至大畑宿所九町四十間）四十一度二十四分、四里五町四十七間半（至關根村出戶一里一十三町六間）野牛村、三里一十三町三十四間半、尻谷村、四十一度二十四分、五里九町五十五間、小田澤村、三里二十六町五十二間、泊村、四十一度五分半、四里五町二十間、尾駮村、六里八町五十一間半（至平沼村一里四町三十六間）濱三澤村濱（至濱三澤村二十町四十間半）五里一十四町四十九間（至市川村三里一十二町三十三間）三戶郡湊村一里三十六間、鮫村、四十度三十一分、三里三十四町五間半、角濱村、五里四町三十三間半、九戶郡中野村、四里一十五町七間（至麥生村二里二十六町四十間）久慈湊、四十度一十二分半、三里二十六町五十六間、野田村、四十度七分、五里二十八町三十二間（至堀內村界二里一十二町）閉伊郡黑崎村、四十度三十秒、三里一十三町三十八間、田野畑村、三十九度五十五分半、三里三十町二十一間、小本村中野、三十九度五十分半、四里一町三十五間、田老村、三十九度四十四分、三里二十九町五十六間、宮古鍬ヶ崎湊、三十九度三十九分、六里七町二間（至宮古川口一十八町三十九間、從宮古川口至金濱、一里一十六町五十三間半）山田町、三十九度二十七分半、四里三十四町四間（至船越村一里二十四町、從船越至大槌村安渡濱、二里三十町二十九間、）大槌町、三十九度二十一分、五里一十五町三十八間（至兩石村一里二十三町七間半）氣仙郡唐丹村、三十九度一十二分、四里一十町四十八間（至吉濱村根白濱二里四町一十三間）越喜來村松崎濱、三十九度六分半、三里六町二間半、綾里村湊濱（至唐船番所一十七町一十五間）五里一十一町五十一間半（至大舟渡村界川口二里三十二町四十八間）末崎村門之濱（至小友村中野、徑測、一里一十一町一十四間、）三里一十二町二十二間（至廣田村泊濱一十三町、從泊濱至小友村唯出濱一十町、）小友村中野、二里三十一町五十五間（至今泉村川口、一里二十八町五十〇下有脫字）本吉郡小原木村大澤濱、三十八度五十八分、三里七町三十間半、唐桑村御崎、六里一十町二十四間半（至氣仙沼三里一十七町五十七間）波路上村（至波路岬八町二十間）五里三十三町一十二間（至平磯村一里一十五町五十七間半、從平磯、至田ノ浦、二里一十町二十九間半）伊里米町、三里三十五町三十間半（至韮濱三十五町一十五間、從韮濱至志津川村、一里一十九町四間）水戶邊濱、四里二十三町五

驛　三里一町一十間至國界檜原大峠一里二十六丁四十六間半　羽前國置賜郡綱木驛○中略　陸奧國津輕郡碇關驛
六里七町三十一間半至大鰐峠二里一十七丁八間　弘前土手町、四十度三十五分半、一里三十二町四十四
間至百田村一里二丁一十五間　藤崎驛　二里一十九町二十二間半　女鹿澤驛　四里三十町一十二間至浪岡宿
一十二丁八間　新城驛　三十二町四間　油川從白川至油川街道、通計一百四十里四町三十間、
〔日本實測錄沿海一〕從鶴山本秋貫沿海至三厩○中略
陸奧國津輕郡大間越村、四十度二十九分半、三里六町六間　岩崎村、四十度三十五分半、四里
九町五十三間至鰺佐村二里二町四十四間半　深浦町、四十度三十九分、六里二十五町一十四間至島崎峠三里二十四町
三十四間　闘村　二里二十五町一十四間　鰺ヶ澤湊、四十度四十七分、八里四十二間至館岡村三里二十八町
十三町、四十一度一分半、九町三十九間　十三潟口沿十三潟至富萢村一里二十四町五十三間、　一町五十間　十三
湊沿十三潟至相内村三十一町四十八間、　三里二十三間　小泊村、四十一度八分、四里二十一町四十間至龍飛崎二里三
十四町五十九間　三厩谷川口至宇鐵村一里二十町二十五間　一十二町二十八間　三厩四十一度一十二分[illegible]
山至三厩沿海、通計三百二十三里廿三町四十二間、

從三厩沿海至東京

陸奧國津輕郡三厩　三里六町四十五間至今別宿一里九町二十五間半　母衣月村、四十一度一十三分、六里
三十四町五十三間至平舘宿三里一十九町一十一間　蟹田村、四十一度二分、五里二十三町四十一間至蓬田宿二里二町
三十二間　油川町、四十度五十分半、一里一十三町二十三間　青森町　四里二十一町四十六間至野
內村一里三十一町　中野村至小湊[illegible]二里二町一十五間　七里二十三町四十三間至夏泊崎三里六町二十八間　小湊　三里四町
六間至狩場澤村二里二十八町五十七間半　北郡野邊地、四十度五十二分半、七里八町二十三間至有戸村二里一十六町一十六間
橫濱村　六里一十六町三間至有畑村一里一十四町四十三間　田名部至大畑宿所[illegible]四里二十九間　八里二十八町、一十
九間至宿濱村一里一十三町五十一間半・　脇澤村至九艘泊一里二十六町二間　七里九町六間半至牛瀧村二里三十五町一間半　佐井村　五

町五十六間　陸中國磐井郡一關、三十八度五十五分半、　二十町七間　山ノ目驛　三里二町五十三間膽澤郡前澤驛　二里三十二町　水澤驛、三十九度九分、　一里三十四町六間　金ガ崎驛　二里二町三十七間　和賀郡鬼柳驛　三里二十三町一十七間半　稗貫郡花卷驛、三十九度二十四分半、　三里一十五町二十七間　石鳥谷驛　一里二十一町三十八間半　紫波郡日詰町　一十七町二十六間半　郡山二日町　三里三十四町二十九間　磐手郡盛岡石町、三十九度四十三分、　四里二町五十三間　澁民驛　四里二十六町七間　沼宮內驛、三十九度五十九分半、　八里六町三十五間　九戶郡一戶驛、四十度二十三分半、　一里一十三町三十二間半　福岡驛　一里一十四町五十二間　陸奧國二戶郡金田市驛　三里二十五町二十八間　三戶郡三戶驛、四十度二十三分半、　三里九町五十間半　淺水驛　一里一十九町九間　五戶驛　一里二十四町一十一間半　傳法寺驛　二十一町三十三間　藤島驛　三里二十七町三十九間半　七戶驛、四十度四十二分半、　五里二十二町四十六間　北郡野邊地町　（從東京至野邊地）奧州街道、通計一百七十九里三十町二十二間半、

從盤城國白川歷若松至油川

盤城國白川郡白川追分　一里二十四町五十四間　飯土用驛　一里三十町四間半　岩代國岩瀨郡上小屋驛、三十七度一十三分、　一里一十六町二十七間　牧野內驛　一里三町二十七間　長沼驛、三十七度一十七分、　二里三十四町一十間　勢至堂驛　一里二十五町三十三間半　安積郡三代驛、三十七度二十三分、　一里二町四十一間　福浦驛　一十六町五十六間　赤津驛（至秋山村猪苗代湖傍、二十二町三十六間）　一里三十一町一十四間　會津郡原驛　一里二十町五十三間　赤井驛　一里二十七町二間　若松七日町、三十七度三十分、　三里六町四十九間半　耶麻郡鹽川驛　一里二十七町二十五間　熊倉驛　一里二十三町五十八間　大鹽驛　二里一十五町一間　檜原

町四十四間　大和久驛　九町四間　石川郡中畑新田驛　一十一町一十四間半　矢吹驛　二十三町三十三間半　久來石驛　一十四町五十六間　笠石驛　一里一十八町五十間半　岩代國岩瀬郡須賀川驛　一里二十五町四十八間　安積郡笹川驛　一十八町三間　日出山驛　一十四町二十六間半　小原田驛　一十七町一十五間　郡山驛　二十四町七間半　福原驛　二十六町六間半　日和田驛　一里五町二十九間半　高倉驛　一里一十四町二十二間半　安達郡本宮驛、三十七度三十分半、一里八町四十八間　南杉田驛　一里九町三十二間半　二本松一里一十八間半　油井驛　六町六間　二本柳驛　一里一十町一十四間　信夫郡八町目驛　一里一町四十一間半　若宮驛　一十二町一十間半　清水町　一里二十二町一十五間半（根惡子町一一十丁）　福島才町、三十七度四十五分、一里三十二町二十七間　瀬上驛　一里一十町四十三間　伊達郡桑折驛　一里六町八間半　藤田驛　一里六町四十八間半　貝田驛　二十町三十間　刈田郡越河驛、三十七度五十五分、一里一十三町三十七間　齊川驛　一里一十七町五十七間　白石　一里二十四町九間　刈田宮驛　一里一十四町二十間半　陸前國柴田郡金ヶ瀬驛、三十一町五十六間半　大河原宿、三十八度三分半、一里六町二十三間半　舟迫驛　一里一十四町四十九間　槻木驛　一里二十六町四十間　名取郡岩沼南町　一里三十町一十四間增田驛　一十二町一十八間　中田驛　一里一十一町四十四間　長町驛　三十三町五十六間　宮城郡仙臺國分町、三十八度一十六分、二里　七北田驛　一里一十九町　黑川郡富谷新町驛　一里二十二町四十間　吉岡驛、三十八度二十七分、三里一十町二十五間　志田郡三本木驛　一里二十町二十八間　古川驛　一里一十三町二十七間　栗原郡荒谷驛　一里二十町四十三間　高清水驛　二里一十九町　築館驛、三十八度四十三分半、二十四町一十五間　宮野驛　一里三十二町四十五間　澤邊驛　一十八町四間　金成驛　二里六町　有壁驛　二里二

道路

犬牙相錯シ、阿武隈川之ヲ串流ス、西隅陸羽ノ大山ニ接シ、山谷幽邃ナリ、地勢窪隆一ナラズ、磽确半ニ居ル、瀕海一帶稍平遠、魚鹽ニ饒ト雖モ、港灣淺小、漕運ニ便ナラズ、

(日本地誌提要三十 岩代)形勢　陸羽ノ大山脈、蜿蜒北ヨリ來リ、一ハ西折シテ南ニ轉ジ、羽越ヲ界シ、又鬱積シテ二野ニ接ス、一ハ南走シテ州中ヲ貫キ、磐城ニ入、其東ハ阿武隈川北流シテ漕運ヲ通ズ、但秋漲ノ患ナキ能ハズ、猪苗代ノ巨浸、衆水ト同ジク西疆ニ注ギ、亦漕輸ニ便ナリ、河干ノ地、概ネ廣坦ニシテ、蠶桑ニ宜シ、

(日本地誌提要三十一 陸前)形勢　山脈西北ニ修亘シテ、陸中羽前ヲ劃シ、南シテ岩代ニ連ル、北方二郡狹長海ニ沿ヒ、牡鹿一郡東方ニ曲出シテ、港灣ヲ抱キ、松島群嶼其西南ニ碁布シテ、絶勝ノ地タリ、中央土壤平衍、阿武隈川其南ヲ限リ、北上川北方ヨリ來リ、運輸ノ便アリ、田壢萬頃、米穀ノ産頗ル饒シ、

(日本地誌提要三十二 陸中)形勢　陸奥ノ大山脈、二枝ニ分レテ南走ス、其西スル者ハ、羽後ヲ劃界シ、其東スル者ハ、中央ニ連結シ、北上川其中間ニ南流ス、全地原隰曠遠ニシテ、磽确多ク、盛岡以南ハ稍沃壤タリ、閉伊、九戸二郡、東海ニ瀕シ、魚鹽ノ利アリ、

(日本地誌提要三十三 陸奥)形勢　東西二隅屈折シ、相拱シテ海ヲ容レ、津輕峽ヲ隔テ北海道ニ對ス、山脈中央ニ起リテ南走シ、支脈西折シテ羽後ヲ劃ス、東方曠野相接シ、不毛ノ地多シ、西疆土壤稍肥ユ、民耕種ヲ力メ、獵漁ヲ兼ヌ、

(日本實測錄三 街道)從東京奥州街道至野邊地(中略)○

磐城國白川郡白坂宿、三十七度四分、一里一十五町二十三間(至白川城大手前二一里一十二丁八間)白川本町、三十七度七分、一十九町一十七間(至大隈川岸九丁一十二間)同追分　一十六町七間　南根田驛　二十四町五十七間半　小田川驛　一十五町一十四間　太田川驛　二十町二十間　踏瀨驛　二十三

(日本地誌提要三十一陸前)疆域　東ハ海、西ハ羽前、羽後、南ハ磐城、北ハ陸中ニ至ル、東西凡貳拾五里、狹處貳里、南北凡四拾里、狹處壹拾九里、

(日本地誌提要三十二陸中)疆域　東ハ海、西ハ羽後、南ハ陸前、北ハ陸奧ニ至ル、東西凡三拾七里、南北凡三拾三里、廣所凡五拾里、

(日本地誌提要三十三陸奧)疆域　南ハ陸中及羽後、東西北皆海ニ至ル、東西凡三拾九里、南北凡四拾餘里、

島嶼

(日本實測錄九島嶼)陸奧國津輕郡　遠測　風尻島　沙島　沖島　貝島　小島　ヲコ島　湯ノ島

生子島　コミ島

北郡　遠測　辨天島濱澤村　フコ島　辨天島佐井村

陸中國閉伊郡　遠測　サンタワレ島

陸前國本吉郡　遠測　大島村　カラ島　石峯山　アレ島　龍島　椿島　松島　コドマリ

桃生郡　遠測　サルバシリ　クジラ　八景島　宮戸四ケ濱　初島

牡鹿郡　遠測　出島　寄磯岬　カナカイ島　平島　二又島　江島　アシ島　岸山王岩　沖

山王岩　金花山　長渡網地濱　トツラ島　田代濱　見島　桂島　小出ケ島　馬脊島

宮城郡　遠測　寒風澤　朴島　野々島　桂島　松ケ島　月星島　白濱鼻大　白濱鼻小　鯨

鼻　蛇島手樽村　九ノ島　翁島　燒島　鵜日島　顯濤島　經島　御島　松島　大里鼻　ピ

シヤモシ　寒島　蛇島[illegible]村　マガキ島　馬放島　青貝　館島　烏帽子鼻

地勢

(易林本節用集下)陸奧奧州大、管五十四郡、東西六十日、昔奧出羽一國、市城宮室不可勝計、仙鳳巳兵島

怪獸充滿、以漆備貢、大々上々國也、

(日本地誌提要二十九磐城)形勢　山脈南走シテ下野ニ連リ、又東ニ支出シテ常陸ヲ界ス、地形岩代

一栗原郡鬼首村の內嶺境塚　同羽州本庄へ出
一同內村の內水境　同羽州他乏領湯の代出
一同花山村の內四段坂　同仙乏男安へ出
一同田代長嶺　同
一膽澤郡若柳村の內下嵐江（あらしえ）岩目澤　同仙臺手倉河原へ出
一同相春村の內相春　仙臺南部境南部思柳より盛岡へ出
一江刺郡下門岡村の內土橋　同立花村へ出
一同上口內村の內松坂山　同浮田村へ出
一同野手崎村の內柳清水　同安俵町へ出
一同人首村の內五輪峠　同奧友村へ出
一氣仙郡世田米村の內赤坂横大道　同遠野新妻村へ出
一同上有住村の內道祖神境　同遠野赤根へ出
一同重丹村の內石塚峠　同南部閉伊田へ出、是松島より海濱の通路なり、
右凡廿七番　仙臺領內に出所也
一南部北郡野部地　南部と津輕境
一津輕と秋田領との境矢立峠　甚天嶮の地なり
〔日本地誌提要二十九磐城〕疆域　東ハ海、西ハ岩代、羽前、南ハ下野、常陸、北ハ陸前、羽前ニ至ル、東西凡貳拾貳里、狹所五里餘、南北凡三拾三里餘、
〔日本地誌提要三十岩代〕疆域　東ハ磐城、西ハ越後、南ハ上野、下野、北ハ羽前ニ至ル、東西凡貳拾里餘、南北凡貳拾壹里餘、

五年九月ノ條ニ、泰衡潛奔蝦夷、乃赴糠部郡トアルヲ以テ知ルベシ、其後四百有餘年、渡島ノ內松前ト稱スル地、始テ亦中土トナル、國史略ニ云、天正十六年、蠣崎慶廣修使幣謁內附秀吉、使慶廣比內大名、慶廣以松前自氏焉、至此松前始入版圖トヲ以テ知ベキナリ、雖是コノ國ハ東方十二道ノ內ノ大國ニシテ、ヤガテ皇大御國ニ於テモ、第一ノ大國ナリト知ラレタリ、

〔新撰陸奧風土記 封疆番所〕陸奧隣國の疆域、古は關有しか共、今は一もなし、唯其領主の諸大名より番所を置のみなり、

一宇多郡駒ケ峯　仙臺相馬の境番所
一伊具郡大內村の內簱巻　同
一同丸森村の內峠宿　仙臺伊達の境梁川村
一刈田郡越河村の內石大俤　同藤田村
一同小原村の內上戸津宿小坂峠　同
一同湯原村跟合澤　仙臺米澤奧羽境羽州檜下村
一同湯原村猿鼻　仙臺領出羽の境
一柴田郡今宿村の內笹谷　同羽州關根村
一名取郡馬場村二口清水土峠　同羽州延澤領山寺村
一同羽の內二口二本□□　同
一宮城郡作並村の內坂元土峠　同羽州關山村延澤領也
一賀美郡小野田本鄕の內軽井澤西南坂　同延澤領羽州上畑へ出
一同宮崎村の內切籠田以西峠　同
一玉造郡鳴子村の內中山宿關澤　同羽州小國領、小田へ出

〔日本經緯度實測〕北極出地

陸奥	小石濱磐前郡	三六度五六分三〇秒	烏崎村行方郡	三七度四〇分三〇秒
	蒲生村宮城郡	三八度一五分三〇秒	唐丹濱氣仙郡	三九度一二分〇〇秒
	盛岡	三九度四三分〇〇秒	一關	三八度五五分三〇秒
	仙臺	三八度一六分〇〇秒	福島	三七度四五分三〇秒
	白坂	三七度〇四分〇〇秒	若松	三七度三〇分〇〇秒
	弘前	四〇度三五分三〇秒	三厩村	四一度一一分五〇秒

東西里差

山城	京	〇度〇〇分〇〇秒略○中	陸奥 仙臺	東五度一三分三〇秒
	盛岡	東五度四五分〇〇秒	津輕ヒロサキ	東五度〇一分三〇秒

〔陸奥國郡私考〕此國タルヤ、西南ハ毛野國略○牡ニ降リ、南方ハ常陸國ニ連ル、上世ヨリ如是ニシテ、方今トテモ同ジ也、西方ハ上世ハ越ノ國ニ接ス、越ノ國後ニ前、中、後ノ三國ニ分ケラレ、和銅中、出羽國ヲ置ルニ及ビテハ、西南ハ越後ノ國、西北ハ出羽國ニ接スルコトヽハナリタリ、東方ハ上世ハ國史ノ所謂陸奥ノ蝦夷ノ地ニシテ、拾芥抄ニ載スル所ノ行基ガ日本圖ヲ以見レバ、按ズルニ天智帝二年生、天平二十一年二月二日寂ストミユ、據把ニ、天平十年秋八月辛卯、令天下諸國造國郡圖進アいへバ行基ノコノ國ハ、諸國ヨリ國郡圖ヲ進セザル先ニ、回國ノ時實見ヲ以テ造リテ獻リタルモノナルベシ、永ク世ニ傳リテ、メヅラカナルモノナレバ、拾芥抄ニモ載セラレタルモノナルベシ、コノカミ此國ホトンド半ハ東北海マデ蝦夷ノ地タリシトミエタルヲ、時ニ隨ヒ世ニ隨ヒ、其地モ漸々ニヒラクルマヽニ中土トセラレ、中外ノ堺漸々ニ東北ニ移リ行キテ、神龜天平ノ頃ハ、今ノ桃生、本吉ノ邊ヨリ東北ナン殘リテ蝦夷ノ地ナリシトミエ、多賀城ノ門碑ニ去蝦夷國界一百二十里トアリ、オモヒミルベシ、其後藤鎭以來ハ、タダ渡島ノミ蝦夷ノ地トハナリタルトミユ、海ヲ隔テヽ島ニ在ルヲ渡島ノ蝦夷ト云、東鑑、文治

ものなるを、陸の字數の六、字と通はし用ふることあれば、六の意と心得たる人もあめれど、さにはあらず、又むかしはみちの國とこそいへれ、みちとのみいへることはなかりしを、今はたゞむつとのみいひあへるは、むげにもとをうしなへることなりかし、

位置

〔地勢提要 乾〕各國經緯度 附里程

陸奥仙臺、（國分町）極高三十八度一十六分、經度東五度十六分、從東都（奥州街道）九十二里七町三十四間半、

陸奥白川、（本町）極高三十七度七分、經度東四度三十三分、從東都（奥州街道）四十八里一十四町四十九間、

陸奥若松、（七日町）極高三十七度三十分、經度東四度一十七分、從東都（奥州街道、經白川）六十六里一十六町二十八間、

陸奥盛岡、（石町）極高三十九度四十三分、經度東五度四十分、從東都（奥州街道）一百五十九里二十五町一十九間、

陸奥國宮古鍬ヶ崎、極高三十九度三十九分、經度東六度二十八分半、（自本郷東測量所出）從東都日本橋、至永代橋、沿海二百八十里十町二十一間半、

陸奥尻谷村、極高四十一度二十四分、經度東六度四分半、前同三百四十三里三十五町一十九間、

陸奥野邊地、極高四十度五十二分半、經度東五度四十五分、從東都（奥州街道）一百七十九里三十三町五十六間、

陸奥松前、（土手町）極高四十度三十五分半、經度東五度一分半、從東都（奥州街道、自白川經會津）一百九十一里三十二町二十間半、

陸奥三厩、極高四十一度一十二分、經度東五度二分半、從東都（同上、從野邊地、沿海）二百十二里一十八町一十三間、（奥州津輕郡三厩村、海深一丁目一丈三尺位、十丁目三丈位、一里目二十丈位、人別二百七十五人、家數五十軒、大小船湊有之、遠番所有之、從東都奥州街道、經會津、從館川、沿海二百一十里三十二町四間、）

〔塵袋一〕一陸奥國ヲミ。チ。ノ。ク。ニ。ト云フハ、ムツノオクト云フベキヲ、アシクミナミ。チ。ノ。ク。トハ云ヒナセル歟、如何、ツチニハサゾオモヒナラハシタレド、六ト云フ所ノ、ナカランニハ、ソレガオクトモ云ヒニクキニヤ、其上ヘ、日本紀ニハ道奥トカキテミチノクトヨメリ、陸ハクガノミチト云フ心ニテ、ミチ東ノオクト云ハムトニヤ、東山道ノ國ナレバ、ナドカクガノミチトモイハザラン、

〔倭訓栞前編美三十〕みちのく　萬葉集にみゆ、陸奥をいふ、倭名抄にはみちのおくと見えたり、國號の義字の如し、俗にみちのくに、又む。つ。の。く。に。といふ、歌にはよむ事なし、續紀に陸奥國上治郡と、今此郡なし、

〔古事記傳二十〕道奥、書紀齊明卷にも道奥と作、又陸道奥とも作れたり、萬葉十四十八に、美知能久と見ゆ、（能に於の誤ある歟に、自於は舍かるゝなり、）和名抄には、陸奥三乃於久とあり、（古今集顯注に云、陸奥國と書て、みちのおくのくにとよむなり、歌にはみちのおくとよむを、略してみちのくとも書り、世俗にみちのくと申すは歌の詞に非ず、ましてむつの國と申す、無下のことなり、陸奥と云文字をむつと云ばと思へり、陸なばみちとよむなりと云り、陸をむつと云とは、數の六に此字を借用ることなり、借に此國名の美知を牟都と訛れるは、是よりぞまぎれつらむ、）奥は口に對へ云稱にて、道口道後の後に同じ、京より行に、初の地を道ノ口と云、終を後とも奥とも云り、此國は東北の極に在て、實に道の奥なり、（筑紫にて、大隅薩摩を奥の國と云ること、檜垣家集に見ゆ、又陸奥國にても、黒川郡より北を奥ノ郡と云、大同五年の官符に見えたり、源氏物語若菜卷には、播磨國内にて、此國の奥郡と云ることあり、）

〔玉勝間五〕みちの國　むつ
陸奥は、歌にもよむごとく、美知乃久にて、和名抄には美知乃於久とありて、道之奥といふ意の名なれば、下に國とそへていふ時は、美知乃久乃久爾なり、然るを中昔の物語書などには、みちの國とのみいへるは、みちのくのくにといひては、乃久といふことの重なりて、わづらはしきまゝに、乃久をはぶきていひならへるなるべし、さるを又後にはむつの國といふは、みちの國を訛れる

名稱

此國ハ古ヘ國府ヲ宮城郡ニ置ク、延喜ノ制大國ニ列シ、白河、磐瀨、會津、耶麻、安積、安達、信夫、刈田、柴田、名取、菊多、磐城、標葉、行方、宇多、伊具、亘理、宮城、黑川、賀美、色麻、玉造、志太、栗原、磐井、江刺、膽澤、長岡、新田、小田、遠田、登米、桃生、氣仙、牡鹿ノ三十五郡ヲ記シ、倭名類聚抄ニハ管三十六トアリテ、以上ノ外ニ大沼ノ一郡ヲ加ヘタリ、後世ハ奧州五十四郡ノ稱アレドモ、其郡名甚ダ明確ナラズ、蓋シ此國ハ、元蝦夷ニ地ニシテ、漸次北方ニ向ヒテ開展シタルガ故ニ、建郡ノ制、頗ル他ト異ナリ、後世ノ郡名ニ至リテハ公稱ト私稱ト相混ジテ、今辨別シ難キモノ多シ、明治維新ノ後、分合ヲ行ヒ、磐城國ニ、西白河、東白川、石川、石城、雙葉、相馬、亘理、伊具、刈田、田村ノ十郡、岩代國ニ南會津、北會津、大沼、河沼、耶麻、岩瀨、安積、安達、信夫、伊達ノ十郡、陸前國ニ、柴田、名取、宮城、黑川、加美、玉造、栗原、遠田、志田、桃生、牡鹿、登米、氣仙、本吉ノ十四郡、陸中國ニ、西磐井、東磐井、膽澤、江刺、和賀、稗貫、紫波、上閉伊、下閉伊、岩手、九戸、鹿角ノ十二郡、陸奧國ニ、上北、下北、三戸、二戸、東津輕、西津輕、中津輕、南津輕、北津輕ノ九郡ヲ置キ、凡テ五十五郡トス、而シテ新ニ福島、若松、仙臺、盛岡、青森、弘前ノ五市ヲ設ケ、福島縣ヲシテ、福島、若松ノ二市、及ビ岩代全國ト、磐城國ノ西白河、東白川、石川、石城、雙葉、相馬、田村ノ七郡ヲ治セシメ、宮城縣ヲシテ、仙臺市、及ビ磐城國ノ亘理、伊具、刈田ノ三郡ト、陸前國ノ氣仙郡ヲ除キタル十三郡ヲ治セシメ、巖手縣ヲシテ、盛岡市、及ビ陸前國ノ氣仙郡、陸奧國ノ二戸郡ト、陸中國ノ鹿角郡ヲ除キタル十一郡ヲ治セシメ、秋田縣ヲシテ、陸中國ノ鹿角郡ヲ治セシメ、青森縣ヲシテ、青森、弘前ノ二市、及ビ陸奧國ノ二戸郡ヲ除キタル八郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五國郡〕陸奧 三知乃於久

〔日本風土記 一國郡島名〕陸奧

〔饅頭屋本節用集 天地〕奧州 陸奧

古事類苑

地部十九

陸奥國上

陸奥國ハ、ムツノクニト云ヒ、舊クハ、ミチノオクノクニト云ヘリ、東山道ニ在リテ、土地ノ廣大ナル、他ニ其比ヲ見ザル所ナリシガ、明治元年之ヲ磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥ノ五國ニ分チタリ、磐城國ハ、イハキノクニト云フ、東方一帶海ニ面シ、西ハ下野、岩代、及ビ羽前ニ界シ、南ハ常陸ニ接シ、北ハ陸前ニ隣ス、東西二十二里餘、其狹所五里餘南北三十三里餘、地勢ハ高原地、國ノ大部ヲ占メ、國內殆ド峻嶺ヲ見ズ、岩代國ハ、イハシロノクニト云フ、東ハ磐城、西ハ越後、南ハ上野、下野、北ハ羽前ニ界シ、東西凡ソ二十里、南北凡ソ二十一里、其地勢ハ、山嶽連亘シ、平地少ナク、毫モ海岸ヲ有セズ、陸前國ハ、東方一帶海ニ臨ミ、西ハ羽前、南ハ磐城、北ハ陸中及ビ羽後ニ界シ、東西凡ソ二十五里、南北凡ソ四十里、其地勢ハ、國ノ東邊、及ビ西境ニ山脈連亘シ、其中央ハ北上平原ニシテ、北上川其間ヲ灌漑ス、陸中國ハ、陸前ノ北ニ位シ、西ハ羽後、北ハ陸奥ニ界シ、東方海ニ面セリ、東西凡ソ三十七里餘、南北凡ソ三十三里餘、其地勢ハ、頗ル山嶽ニ富ミ、平地甚ダ乏シク、僅ニ北上川ノ貫流スル所、細長ナル平野ヲ見ルノミ、陸奥國ハ、奥羽ノ北端ニ位シ、南ハ陸中及ビ羽後ニ界シ、東大平洋ニ面シ、西日本海ニ臨ミ、北ハ津輕海峽ヲ隔テ、北海道ノ渡島ニ對ス、東西凡ソ三十九里餘、南北亦相若ケリ、其地勢ハ西南部一帶山地ヲ形成シ、中部ニ至リテ津輕平原ヲ開キ、岩木川之ヲ灌漑ス、

〔萬葉集十四東歌〕相聞

之母都氣野、美可母乃夜麻能、許奈良能須、麻具波思兒呂波、多賀家可母多牟、

志母都氣努、安素乃河泊良欲、伊之布麻受、蘇良由登伎奴與、奈我己許呂能禮、

右二首下野國歌、

雜載

しほやのさと下野　　中務卿親王

こと、はんしほやの里に住蟄もわがごとからき物や思ふと

〔十訓抄　二〕源經兼下野守にて在國の時、或もの便書を以て、雜事など乞に、大かた便りなき由などいひて、はかばかしき事もせねば、冷然として、二三町ばかりゆくを、人を走らかして、さらばとよびかへしければ、不便なりとて、しかるべき物などたぶべきかと思て歸たるに、經兼云、あれ見給へ、室の八島はこれなり、都に人にかたり給へと云、いよいよ腹立氣有て歸にけり、○下略

〔延喜式　二十八兵部〕諸國健兒○中略　下野國一百人○中略

諸國器仗○中略　下野國甲三領、横刀九口、弓六十張、征箭六十具、胡籙六十具、

〔日本書紀　二十九天武〕五年五月甲戌、下野國司奏、所部百姓遇凶年、飢之欲賣子、而朝不聽矣、

〔日本書紀　三十持統〕元年三月丙戌、以投化新羅人十四人、居于下毛野國、賦田受稟使安生業、

〔續日本紀　六元明〕靈龜元年五月庚戌、移相模、上總、常陸、上野、武藏、下野六國富民千戶、配陸奧焉、

〔續日本紀　三十二光仁〕寶龜四年二月辛亥、下野國災燒正倉十四宇穀糒二万三千四百餘斛、

〔扶桑略記　二十五朱雀〕天慶三年二月八日甲辰、受官使未到間、二月一日、下野押領使藤原秀鄉、常陸掾平貞盛等、率四千餘人兵、一云万九千人兵於下野國、與將門合戰、時將門之陣已被討靡、

〔吾妻鏡　四十〕建長二年十二月廿八日己未、下野國大介職者、伊勢守藤成朝臣以來、至小山出羽前司長村、十六代相傳、敢無中儀絕之處、依大神宮雜掌訴、所被改補也、於彼訴訟事者、以來鋼以下贖令解謝訖、被行二罪之條、殊含愁訴之由、長村連々言上之間、可被返之旨、及評儀云云、

〔小山文書〕下野國可被國務者、天氣如此、悉之以狀、

建武二年八月三十日　　大膳大夫花押

小山四郎館

寒川村にて、出流澤の流れと落合ひ、末は佐野、中川と、もに利根川に入なり。○中略

宇都宮里　河内郡二荒神社を云なり、今は地名をも宇都宮驛と唱ふれど、往古は池邊郷、また中頭は小田橋、驛ともいひしなり。○中略

衣川　鹽谷郡栗山の奥より出て、同郡佐貫の邊りにて、黒髪山より出る大谷川と落合ひ、芳賀郡と河内郡との境を流れ、常陸下總を經て、利根川に入なり。○中略

鹽屋里　鹽谷郡氏家驛と喜連川驛との間にて、五月女坂と云所なり、和名抄には、郡名にのみ鹽屋ありて、郷名にはなし。○中略

狐川里　鹽谷郡なり、今は喜連川と改む、されど猶キツネ川と唱ふるなり。○中略

那須野　御狩　殺生石　温泉　那須郡太田原の邊より、陸奥の國境までをなべて那須野原と云なり、其西北の方に那須嶽と云山ありて、麓に温泉あり、其所に殺生石と云毒石あり。○中略

朽木柳　那須郡蘆野驛の町はづれより、西北の方百歩許にあり、遊行柳とも云なり、猿樂の遊行柳と云謠曲は、則此柳を作りなしたるものなり。○中略

姿川　都賀郡猪倉山より出て、末は佐野、中川と落合ひ利根川に入なり。○中略

都賀山　都賀郡の山をさして云なり、安蘇郡の山を安蘇山といふが如し。○中略

眞岡里　芳賀郡にあり、古名芳賀郷といひし所なり、晒木綿の名所なり。○中略

庚申山　安蘇郡足尾郷赤岩と云所にあり、二子山の峯つゞきなり、日光山より西の方にあたりて七里許あり。○中略

檀山　歌枕名寄に、下野と擧たれども、何に依て下野と定めけんおぼつかなし。○中略

〔夫木和歌抄三十一〕里をやまのさと　小山下野或近江　家集　俊頼朝臣

紅葉せしをやまの里の戀しさにまぐれてのみもあけくらす哉○中略

伊吹山(イブキヤマ) 里 都賀郡吹上村にあり、栃木驛より西北の方にて今道一里餘あり、○中略

標茅原(シメヂガハラ) 都賀郡河原田村にあり、伊吹山より十餘町東の方にて、今しめぢが原と訛れり、○中略

六帖

下野やしめつが原のさしもぐさおのが思ひに身をや燒らむ○中略

室八島(ムロノヤシマ) 都賀郡總社村にあり、其隣郷に國府村ありて、古へは總社村も國府の分郷なり、○中略

嗽杜(シハブキノモリ) 右に同じく、國府村の北の方にて、總社明神と室の八島との間にある森をいふなり、

朝忠卿家集 本院の將曹しはぶきするなき、てとあり

下野やしはぶきの森のしら露のかるゝをりにや色かはるらむ○中略

三毳山(ミカモヤマ) 驛 都賀郡にあり、兵部式に三鴨驛とあるも此所なり、和名抄にもあり、○中略

三香保崎(ミカホサキ) 圖 同所なり、八雲御抄に、三香保崎慈覺大師誕生の地とあり、今下津原に大師の產湯あび給ふ跡とて、盥窪(タラヒクボ)と云所あり、烏丸光廣卿の日光山紀行にもみえたり、○中略

安蘇川原(アソカハラ) 安蘇郡佐野天明驛の西を流るゝ川なり、往古は天明の東を流れしといへり、水上は同郡秋山と云所より出て、末は佐野ノ中川とゝもに利根川に入なり、○中略

安蘇沼(アソヌマ) 安蘇郡佐野天明驛の東の入口小屋街と云所の田の中にあり、今は大かた田になりて、わづかに東西四間許、南北六間許の沼となれり、眞菰(マコモ)生ひ茂りて水もみえぬばかりなり、○中略

安蘇山(アソヤマ) 安蘇郡なり、是とさす山はあらで、佐野庄より北につゞきたる山を、すべて安蘇山と唱ふるなり、○中略

佐野(サノ) 中川船橋田 安蘇郡佐野庄を云なり、佐野ノ中川と云は、渡瀬(ワタラセ)川のことなり、○中略

二子山(フタゴヤマ) 安蘇郡足尾鄕の山つゞきにて、日光山より上野國へ越る山中にあり、八雲御抄、藻鹽草等にも下野とあり、

後撰集よみ人しらず 下野にくだりける女にかたみにそへてつかはしける

ふた子山ともにこえねどます鏡そこなるかげをたぐへてぞやる

寒川(サムカハ) 寒川郡にあり、水上は都賀郡河原田村の標茅原より涌出て、栃木驛の西裏を流れ、寒川郡

へをば、三浦介上總之介またがへたると云々、

武士の矢なみつくろふこての上に霰たばしる那須の篠原

二子山　櫻ケ池　標茅原　黒戸の濱路　走湯（ハシリユ）の瀧　中禪寺湖　名所にはあらず、眺望無雙の地、利根川の水上也、

〔下野國誌二 名所歌枕〕黒髪山　都賀郡、日光山の奥にあり、當國第一の高山にて、遙に武藏、下總、常陸等の國々よりもみゆるなり、世俗は男體山とも呼なり、略○中

万葉集七 雜歌 ぬば玉の玄髪山を朝こえて木の下露にぬれにけるかも

同十一 柿本人麿 ぬば玉の黒髪山の山菅に小雨ふりしきます〱ぞおもふ 略○中

二荒（フタアラ）山　日光山の古名にて、もと補陀落山なるを、歌にはふたら山とよみ來れり、委しくは下の佛寺部の日光山の條に記したり、

蜻蛉日記 右大將道綱母の日記なり 下野や桶のふたらをあぢきなきかげもうかばぬ鏡とぞみる 略○中

歌濱（ウタノハマ）　中禪寺の湖邊にあり、委しくは佛寺部の日光山の條に記す、回國雜記に、今宵はことに十三夜にて、月もいつこに勝れ侍りき、渺漫たる湖水侍り、歌の濱といへる所に、紅葉色なりあらそひて、月に映じ侍れば、船に乗りてとあり、

敷島の歌の濱べに船よせて紅葉をかざし月を見るかな 略○中

瀧尾（タキノヲ）三本杉　日光山の瀧尾權現の鎭まりいます所なり、三本杉と云古木ならびたてり、委しくは佛寺部日光山の條に記せり、回國雜記に、瀧尾と申侍るは、無雙の靈神にてましましける、瀧の靈目おどろかし侍りきとあり、

世々を經てむすぶ契りの末なれやこの瀧の尾の瀧の白糸 略○中

山菅橋（ヤマスゲノハシ）　日光山の入口にあり、今は神橋（ミハシ）と唱ふるなり、其下の流れは大谷川といふ、中禪寺の湖より落て、末はきぬ川に入なり、八雲御抄に、下野の山菅橋とあり、枕草子に、山菅の橋名をきゝたるおかしとあり、略○中

裏見の瀧　不動立

日光山よりひつじ申に當れり、日光より一里半程アリ、瀧の所へは山を越ヲ又下る也、瀧の少前に岩のほらあなあり、二間に三間ほどあり、其内にゑやうず河原のうば石にて作る、其外石塔三ツ四つあり、新湯殿といふて、山伏參詣してぼんでんを納る也、それより瀧へ下り、瀧のうらより見る也、たき高サ二丈ほどあり、瀧の廣さ三間ほどあり、瀧のうらに石にて不動作り、瀧の下に立る、中々凡人一人登も行がたし、所の者にたづぬれば、天狗の住家と云、おしことといふ者は、此瀧のちかく成木の枝にかけると云々、

霧降の瀧　日光山より丑寅

道法三里ほどあり、瀧の下やげんのごとく谷也、瀧三段に落る、上の瀧には松紅葉其外色々の木共よき景にはへたり、たき三段におつるせいにて、きりのごとく水ちる也、日光開山の景也、狩野の探幽繪にかきしと也、其ほど近くみれば、布引の川とて見ゆる、其川にてむかし天女布さらせしといひつたふる也、

戰場が原　むかし神いくさの場也といひ侍る、さも有つべし、

守子石　中善寺ふどう坂　日光山のもり、中ぜんじに參らんと願ひて、ふどう坂までのぼりしが、一夜の内石になりたると、道づれかたりしと云々、中善寺は女人けつかいの山也、

伊吹山　近江國同名有　後拾遺戀のうたに、藤原實方

　かくとだにえやは伊吹のさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを

室八島　新後撰夏の部に、家隆のうた

　立のぼる煙も空に成にけり室の八島の五月雨のころ

那須野　此野に殺生石あり、そのむかし近衛院の宮女、玉藻の前化して此石となれり、並ものゝ

人口

〔官中秘策〈三〉〕下野國　九郡〈○中略〉
一人數五拾五万四千貳百六拾壹人　内〈三拾万九千拾壹人　男〉〈貳拾四万五千貳百五拾人　女〉　高六拾八万千七百貳石餘　下野國

〔吹塵錄〈五〉人口及國高〕諸國人數調〈文化七甲子年○中略〉
〈御料私領〉一人數四拾万四千四百九拾五人　内〈貳拾壹万八千百六拾三人　男〉〈拾八万六千三百三拾貳人　女〉〈○中略〉
弘化三丙午年諸國人數調〈○中略〉
〈御料私領〉一人數三拾七万八千六百六拾五人　内〈拾九万五千百貳拾四人　男〉〈拾八万三千五百四拾壹人　女〉　高七拾六万九千九百五石餘　下野國

風俗

〔人國記〕下野國
下野國ノ風俗、多クハ氣質ニ淸之内之濁ヲ得タル人多シテ、其淸濁流通スル事ナク、而邪氣甚ク、倂若無人ニ而、常ニ業トスル事、辻切强盜ノ類ニテ少モ耻ル事ナク、慾心有テワレナク、而モ恥ヲ知テ直ナル事ヲ不ㇾ用、如ㇾ形風俗惡シ、然ドモ其氣ノ强キ事ハ、上方ノ國五ケ國、七ケ國合タルヨリハ、猶モ上成ベケレドモ、更ニ理非ヲ辨ル事ナキガ故ニ、法外ノミ多シ、子細ハ理非タクキガ故ニ、耻ヲ知ル事鮮ク、亦耻マジキ事ニモ耻ルハ、其闇キガ故也、如ㇾ此人百人ニ九十人也、取分芳賀寒川塩屋那須異壁之人如ㇾ此也、

名所

〔日本鹿子〈九〉〕下野國名所之部類
がんまんが淵　日光に有
へうへうたる淵也、向に大山のごとく成岩ふちへおほひかゝりたり、〈○中略〉
寂光　觀音本尊也　寺領十三石
山の上に立、堂の脇向に二丈計高サの瀧アリ、瀧ノ上に不動有、よき景也、

國產貢獻

十八萬云々ノ誤ナルベシ、

〔延喜式民部二十三〕年料別納租穀略〇中下野國斛一万一千〇中略

年料別貢雜物略〇中下野國筆一百管、麻紙一百張、麻子三斗、〇中略

交易雜物略〇中下野國布一千四百卌六端、商布七千三段、履料牛皮七張、洗革一百張、鹿角十枚、席八百枚、砂金百五十兩、練金八十四兩、紫草一千斤、鹿皮十一張、櫨子四合、

諸國貢蘇番次略〇中下野國十四壺各大一升九口各小一升、〇中略五口 右八箇國爲第三番、卯酉年〇中略

〔延喜式主計二十四〕下野國行程上卅四日、下十七日、

調、緋帛五十疋、紺帛六十疋、橡帛廿五疋、絁二百疋、紺布八十端、縹布十五端、橡布十端、自餘輸布、庸輸布、中男作物麻一百五斤、紙、紅花、麻子、芥子、

〔延喜式典藥三十七〕諸國進年料雜藥略〇中

下野國十四種 靑木香廿斤、芎藭十五斤、枸杞二斤八兩、黃菊花五兩、藍漆九斤、石斛廿斤、秦膠十六斤、干地黃、桃人、烏頭各二斗、附子四斗、決明子一斗、杜荊子八升、石硫黃二斗三升、

〔毛吹草三〕下野

宇都宮笠出家者之 鷹鈴 餌畚(フゴ) 扇 團扇鹽相物也 那須大方紙 漆 絹 日光苔川ニ有之 銅

〔國花萬葉記十一下野〕當國〇下野州郡諸品名物之出所

日光苔(ノリ)川にあり 大方紙那須より出る、其外那須など、て、名紙多く江戸に出る、九寸な 漆 絹 宇津宮笠 鷹鈴 餌籠(エカゴ) 團扇うつの宮より出る 稆葉牛房 日光椀 同折敷 日光盆 同木鉢 銅あしな山より出る、此山名所の部に出せり、

〔海東諸國記〕下野州 有火井、產硫黃、

〔續日本紀一文武〕二年七月乙亥、下野備前二國獻赤烏、三年三月己未、下野國獻雌黃、

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、相模、常陸、上野、武藏、下。野。五國輸調、元來是布也、自今以後絁布並進、

足利郡高三万二千百四十九石三斗三升五勺　四十六ケ村

梁田郡高一万四千三百九石四斗五升　三十三ケ村

安蘇郡高六万七千八百四十九石二斗七升　八十五ケ村

都賀郡高十九万六千七百三十石七斗二升一合　三百七十六ケ村

寒川郡高八千三百十六石四斗七升五合　十三ケ村

河内郡高十万六千二百八十九石二斗三升二合　二百六ケ村

芳賀郡高十一万五千二百八十石七斗二升四合六勺　百八十八ケ村

鹽谷郡高四万九千十五石九升七合五勺　百六十二ケ村

那須郡高九万七千三百三十六石七斗九升三合六勺、三百八十七ケ村

〔官中秘策三〕下野國　九郡略〇中

一石高六拾八万千貳百貳石餘

〔吹塵錄人口及國高五〕天保度御國高調略〇中

下野國御料私領　一高七拾六万九千九百五石貳升七合五才八札

〔延喜式主税二十六〕諸國出擧正税公廨雜稻略〇中

下野國正税公廨各卅万束、國分寺料四万束、興福寺料二万二千束、文殊會料二千束、修理池溝料三万束、救急料八万束、俘囚料十万束、

〇按ズルニ、此書ニ據レバ雜稻總計二十七万四千束ナリ、倭名類聚抄ニ雜稻三十八萬六千九百三十五束トアルニ合ハズ、此書皋グル所、恐ラクハ脱誤アラン、

〔倭名類聚抄國郡部五〕下野國略〇　管九（中略）正公各三十萬束、本稻百八萬六千九百三十五束、雜稻三十八萬六千九百三十五束、

〇按ズルニ、本稻百八万云々トアルニ據リテ推考スレバ、雜稻三十八萬云々トアルハ、恐ニ國

帝鑑間 堀田攝津守正頌　一万六千石　居城下野安蘇郡佐野（城無）江戸ヨリ廿二里、舟路二十九里中

貞享元年堀田備後守正高居、元祿十一年、江州堅田エ替、文政九年再堀田攝津守正敦、以後領之、

菊間 朝散大夫 大田原銈丸□□　一万千四百石餘　居城下野那須郡大田原（オホタハラ）江戸ヨリ三十七里

當城遂出之高、大田原先祖代々領之、（○節略）

〔慶應元年武鑑〕菊之間 朝散大夫 戸田長門守忠行（○中略）　一万千石　在所下野足利郡足利　江戸ヨリ陸路二十里、船路三十里

寶永二、戸田忠利、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕菊之間 朝散大夫 有馬兵庫頭□□　一万石　在所下野都賀郡吹上　江戸ヨリ二十四里

享保十二年ヨリ代々上總市原郡五井、天保十二年ヨリ當所ニ替ル、以後代々領之、

喜連川左馬頭縄氏　在所下野鹽谷郡喜連川　江戸ヨリ三十八里

天正十八年、喜連川左兵衛督國朝移二當所一、以後代々住之、○節略

〔倭名類聚抄五國郡〕下野國（○註略）管九（中略）田三萬百五十五町八段四歩

〔伊呂波字類抄國郡志〕下野國（管九中略）○　本田二万七千四百六十町

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕三十七万四千八十石

下野

〔國花萬葉記十一下野〕下野國（野州）　上管九郡　田數貳万七千四百六十町　知行高四拾六万四千石

〔下野掌覽〕下野九郡高分村數

慶長高分帳下野九郡

高五十六万六千六十一石五斗二升七合、千百四十九ヶ村、內高千七百六十八石三斗六合寺社領、

貞享高分帳下野九郡

高六十八万七千七百九十六石四斗三升九合二勺　千四百九十六ヶ村

藩封

建武元年三月十九日　左中將

〔壬生文書主殿寮領論書院宣御寮〕主殿寮領

近江國押立保　下野國戶矢子保〇〇〇〇富田保〇〇〇〇〇中略

右所々如元知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

建武二年十二月二十七日　參議花押

〔慶應元年武鑑〕松平周防守康直帝鑑間　四品　慶應元丑四月領　六万四百石餘居城下野河內郡宇都宮江戶ヨリ二十六里半

城主、天正年中、宇都宮彌三郎居、文祿四、蒲生飛驒守秀行、慶長六、奧平大膳大夫家昌、同美作守忠昌、元和五、本多上野介正純、同八、奧平美作守忠昌、寬永入、松平下總守忠弘、延寶五、本多下野守忠平、同七、奧平美作守昌章、[illegible]、阿部對馬守正邦、寶永七、戶田山城守忠眞、同[illegible]、同能登守忠章、寬延二、松平主殿頭忠祇、同大和守忠恕、安永三、戶田因幡守忠寬、同能登守忠翰、同日向守忠翰、同山城守忠[illegible]、同因幡守忠明、同越前守忠恕、同上佐守□□、元治二年ヨリ松平周防守康直、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕大久保三九郎忠順雁間　三万石　居城下野那須郡烏山江戶ヨリ三十五里

成田左馬介居、元和九、松平石見守重綱、寬永四、堀美作守親良、同美作守親昌、寬文十二、板倉內膳正重矩、同內膳正重種、延寶九、那須遠江守資德、貞享二、永井伊賀守直敬、元祿十五、稻垣對馬守重富、同和泉守昭賢、享保十、大久保佐渡守常春、以後領之、

鳥居丹波守忠寶帝鑑間　朝散大夫　三万石　居城下野都賀郡壬生江戶ヨリ廿三里半

北條[illegible]、慶長六、日根野織部正吉明、同十一、阿部豐後守忠秋、寬永十六、三浦壹岐守正次、同志摩守安次、同壹岐守直次、元祿四、松平右京大夫輝貞、同八、加藤越中守明英、同左近江州水口ヘ轉、正德二、鳥居伊賀守忠英、以後領之、

大關肥後守增裕柳間　朝散大夫　一万八千石　在所下野那須郡黑羽江戶ヨリ三十八里半

右黑羽之高、慶長五ヨリ大關氏代々領之、〇中略

〔慶應元年武鑑〕細川玄蕃頭興貫柳間　朝散大夫　一万六千三百石餘　在所下野芳賀郡茂木江戶ヨリ三十里

元和三、細川玄蕃頭興元、以後代々領之、

〔小山結城家之證文〕去二十七日、於野州西御庄捕進右衛門佐入道禪秀家人等(秋山十郎、曾我六郎左衛門尉、池内太郎、池田小三郎、土橋又五郎、若菜石井九郎、)條、尤以神妙也、向後彌可被抽忠節之狀如件、

應永二十四年閏五月九日　持氏

結城彈正少弼入道殿

〔集古文書(四十四寄附狀)〕永享八年賴胤寄進狀(相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏)

奉寄進鶴岡八幡宮　下野國佐野庄内富地鄕半分事

右爲當社毎月本地供七ヶ日之料所、永所奉寄附也、然而祈念意趣者、爲天下安全、武運長久、次賴胤除病延命、壽命長遠、子孫繁榮、二世所願成就圓滿、奉寄進之狀如件、

永享八年五月二十六日　前信濃守賴胤(花押)

〔關八州古戰錄十二〕佐野小太郎宗綱討死ノ事

下野國栃木ノ城主佐野小太郎宗綱ハ、血氣壯勇ノ荒武者ニテ、初ハ北越ノ幕下タリシガ、輝虎卒去ノ後ハ、佐竹義重ノ一味トナリ、南方ト不和ナリ、然ルニ佐野ト足利トハ入組ノ所ニシテ、年來領境ヲ論ジ、近年ニ至テハ、雙方ノ百姓等動モスレバ喧嘩鬪爭シテ、竟ニ兩地頭ノ矛盾ト成レリ、

〔集古文書(十九判物)〕太閤秀吉公御判物(那須家藏)

下野國　那須庄内合五千石事(目錄別紙有之)

爲加增令扶助之訖、全可領知候也、

天正十九年四月二十三日

那須與一郎どのへ

〔茂木文書(一)〕下野國東茂木保、茂木三郎左衛門尉知貞爲勳功賞可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

四月二（〇建武二年）十日　右中將（判）

長沼判官館

（上杉古文書二〇藏）下野國皆河庄內闕所事、所被預置上椙安房守（〇憲顯）也、早任預狀之旨、可被沙汰付之狀、依仰執達如件、

建武三年十月十九日　武藏權守（花押〇高師直）

小山常犬殿（〇朝氏）

（茂木文書二）茂木越中彌三郎知政申軍忠事

□日侍從（〇細川顯氏）多田木工頭入道（〇貞）以下凶徒、打圍下野□小山城間、合戰之次第、

建武四年七月四日、屬大將軍桃井兵庫助殿（〇直常）御手、於小山庄內乙妻眞々田兩郷、合戰之時、知致

致合戰、追落御敵訖、（〇中略）

建武四年七月九日　一見了（花押）

（鹿島文書）寄附鹿島社

下野國大內庄內高橋三郎跡半分事

右爲天下安全、武運長久、所奉寄進之狀如件、

永德三年正月廿八日　左兵衛督源朝臣（花押）

（集古文書四十四寄附狀）足利滿兼寄進狀（相模國鎌倉名越別願寺藏）

寄進　名越別願寺

下野國藥師寺庄半分除□同平塚兩郷事

右爲永安寺殿御菩提所、令寄附、任先例、可□致候□狀如件、

應永七年十二月三十日　左馬頭源朝臣（花押）

〔吾妻鏡五〕元暦二年(〇文治元年)十月九日戊午、可誅伊豫守義經之事、日來被凝群議、而今被遣土佐房昌俊、此追討事、人々多以有辭退氣之處、昌俊進而申領狀之間、殊蒙御感仰、已及進發之期、參御前、老母幷嬰兒等、有下野國、可令加憐愍御之由申之、二品殊被諾仰、仍賜下野國中泉庄云云、

〔吾妻鏡八〕文治四年三月十七日癸丑、付庄々有被申條事、先々雖令申給、未無左右仰云云、仍重被整事書云云、〇中略

一下野國　中泉　中村　鹽谷等庄事

件所々雖不入沒官注文候、爲坂東之內、自然知行來候、年貢事地子、闕前

〔白河證古文書一〕仙台白河家藏

一讓與　所領等事

一下野國中泉莊內(二階堂下野入道跡同下總入道跡)

右於被所領等者、相副手繼證文、所讓與孫子七郎左衛門尉顯朝、不可有他妨、爲後日讓狀如件、

延元元年四月二日　　　　道忠(花押〇結城家藏)

〔吾妻鏡十一〕建久二年十二月十五日己丑、故土佐房昌俊老母、自下野國山田庄參上之由申之、則召御前、申出亡息事、頻涕泣、幕下太令歎給、被下綿衣二領云云、

〔栃木縣廳採集文書六〕長沼莊幷小藥鄉、陸奧國長沼莊、南山內古々有鄉、湯原鄉等地頭職、五條東洞院西南角地等、可令管領者、天氣如件、悉之以狀、

建武元年八月二十八日　　　　左衛門權佐(〇岡崎範國)

長沼越前權守(〇秀行)館

〔古文書淺草文庫本〕後醍醐天皇綸旨宣旨、下野國長沼莊用水事、停止同國中村莊地頭小栗播磨助重貞違亂、任先例可全耕作業者、天氣如此、悉之以狀、

庄條

れば商ひの店多し、又販食人拍戸も見ゆる、

（吾妻鏡二）治承五年〈〇養和元年〉九月七日庚辰、從五位下藤原俊綱〈字足利太郎〉者、武藏守秀郷朝臣後胤、鎭守府將軍兼阿波守兼光六代孫、散位家綱男也、領掌數千町、爲郡内棟梁也、而去仁安年中、依戚女姓之凶害、得替下野國足利庄領主職、仍平家小松内府、賜此所於新田冠者義重之間、俊綱令上洛愁申之時被返畢、

（鎌倉大草紙）成氏も以專使京都へ申されけるは、憲忠事不儀逆心の間、無據退治いたす所也、京都へ事對、毛頭不儀を不存、京方の御領分一所もいろひをなし不申、殊に足利の庄は御名字の地にて候間、御代官を被下、可有御成敗之旨、再三被申上けり、

（集古文書〈外物〉十六）足利滿兼判物〈下野國足利郡鑁阿寺藏〉

足利庄鑁阿寺造營材木事、當庄幷佐野庄上州所口不論寺社領、可被採用狀如件、

應永十二年四月二十三日

法樂寺長老

（集古文書〈感狀〉四十八）慈昭院義政公感狀

今度足利庄内赤見城發向事、相談長尾左衞門尉則時、攻落之條尤神妙、彌可抽戰功候也、

五月廿日

橫瀨信濃守どのへ

（集古文書〈禁制〉三十五）鑁阿寺制札〈下野國足利郡金剛山鑁阿寺藏〉

禁制

右於足利庄鑁阿寺々中、軍勢甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若有違犯之輩者、可被處罪科狀如件、

文明四年六月　日　　左衞門尉〈花押〉

千八百石を領せらる、此邊都會の地にして、万の商家ありて賑ふ所なり、勿論江戸よりの奥州街道にして販食茶店貨食家多し、町中の西の方に宇都宮あり、社殿奇麗にして詣人多し此所の生土神とす、

〔飯野八幡社古文書坤〕伊賀式部三郎盛光代難波本寂坊軍忠事

右於下野國宇都宮、國司家○顯勢今年建武四三月五日、寄来小山城之處ニ、盛光代本寂馳向下條下河原、屬于大將軍左馬助殿御手、致合戰軍忠畢、以此條加治五郎次郎、同十郎五郎見知訖畢、依被加御一見、爲備後證目安如件、

〔集古文書四十二寄附狀〕等持院尊氏公寄附狀下野國足利郡鑁阿寺藏

寄附　足利庄鑁阿寺　下野國中山村事

右爲當寺領所寄附也、守先例可令致沙汰之狀如件、

曆應二年四月十五日　　權大納言源氏花押○尊

〔集古文書四十四寄附狀〕結城直朝寄進狀陸奥國白川郡八槻大善院藏

下野國茂武大山田村やはら在家　分錢二貫文

右所者、八槻近津大明神寄進申也、狀如件、

永享十一年二月十三日　　直朝

〔木曾路名所圖會五〕足利。下野　足利の町は山下にあり、東西長し、江戸よりこれまで廿二里、足利學校東の方にあり、○中略　足利の町を西へ行ば大河あり、渡ら瀨といふ、これ足利の町はづれなり、下野上野の國界なりとぞ、

〔木曾路名所圖會五〕眞岡。下野　小守屋まで貳里八町、此眞岡てふ所は、名にしおふ綿き木綿をさらし白くして商ふ、桒門などの服に用ゆ、是を眞岡木綿といふ、此所は近隣の村邑の都會の地な

村里郡邑

右爲一切經料所、所寄之狀如件、

正長元年十月七日　從三位源朝臣（花押）

（海潮寺文書）光西寺之事、近年以不斗儀相違、然者爲替代、大内之庄西臺之郷田貫七貫文、厚木之郷六貫文、鹽谷之郷壹貫五百文、横堀壹貫文、合十五貫五百文、御成敗不可有子細候、仍而狀如件、

大永八年戊子二月七日　興綱

（郡名一覽）下野國（御料私領）野州　東西三日半　九郡

高六拾八萬千七百貳石八斗壹合四勺六才　千三百六拾壹ヶ村

●宇都宮　二十六里半　●壬生　二十三里半　●烏山　三十五里　●大田原　三十七里　回佐野　二十二里餘　○足利　二十里　○黑羽　三十八里餘　○喜連川　三十六里　∆福原　那須與市　☒佐久山　福原内匠　☒蘆野　蘆野中務　☒守田　大田原帶刀　∧東郷　二十八里　∧今市　（日光道）三十四里　∧足尾　（銅山）三十八里　□日光　三十六里

○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國葛村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

（郡國提要）下野　九郡千三百六十五村

（御料私領）高七十六万九千九百五石二升七合五才八毛

河内郡二百二村　芳賀郡百九十二村　鹽谷郡百九十一村　那須郡二百九十八村　足利郡四十六村　梁田郡二十八村　安蘇郡六十四村　都賀郡三百七十八村　寒川郡十三村

（武藏上野下野國村名帳）關東村數

下野國　千四百五拾八ヶ村

（木曾路名所圖會五）宇都宮下野　これより日光まで九里城下の半より西へ行、又江戸まで廿五里、奧州白河まで廿里半十三町、仙臺まで六十五里、此所の城主は戸田因幡守侯にして、七万七

可早以小山七郎朝光母堂爲地頭職事

右件所、早以朝光之母、可令執行地頭職、住人宜承知、勿違失、以下、

文治三年十二月一日

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年七月十日丁巳、泉又太郎藏人義信、與安房四郎賴綱、相論下野國杤本郷事、賴綱以彼郷、依入質券、已被付給人畢、然者任傍例、加一倍之定、於百貫文錢者、早可沙汰渡義信云云、

〔宇都宮系圖〕景綱下野守

歌人、宇都宮撿挍、引付衆、略〇中東勝寺井蓬萊釋迦堂建立、觀音堂建立、本尊身像石塔院寄進石田郷、

〔有造館本結城古文書寫〕下　下野國那須上莊內横岡郷地頭代職除山手向中定事

和知次郎重秀

右爲恩賞所宛行也、任先例可領知之狀如件、

延元三年六月十五日

〔集古文書四十三寄附狀〕足利基氏寄進狀下野國足利郡鑁阿寺藏

寄進　鑁阿寺

下野國足利庄內借宿郷佐々木近江守妻跡事

右爲一切經會料所所被寄附也者、依仰奉寄狀如件、

觀應二年九月二十三日　散位藤原朝臣花押

〔集古文書四十四寄附狀〕足利持氏寄進狀下野國足利郡鑁阿寺藏

寄進　鑁阿寺

下野國足利庄內名草郷參分壹名草兵部大輔入道事

記したり、黑川は奧道中の往還筋にて、黑川と云川の岸なり、兵部式には黑川驛と記したり、また回國雜記にもみえたり、

〔東大寺要錄 六〕諸寺司牒三綱所

合寺宛封一千戶

下野國貳佰伍拾戶（芳賀郡石田鄕五十戶、足利郡土師鄕五十戶、寒川郡寒川鄕五十戶、都賀郡高栗鄕五十戶、鹽屋郡片岡鄕五十戶、）

以前寺家雜用料、永配件封、當年所輸之物爲始、奉充如件、今以狀牒、牒至准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日　　主典從七位上阿刀連酒主

〔關八州古戰錄 二〕宇都宮術綱野州早乙女坂合戰ノ事

後冷泉院ノ御朝、奧州ノ夷賊安倍ノ貞任宗任叛逆ノ時、調伏ノ爲トテ、粟田關白道兼ノ玄孫大僧正宗圓、江州志賀郡石山寺ノ座主タリシガ、宇都宮多氣鄕ヘ差下サレ、祈念ノ丹誠ヲナサシメラル、旣ニシテ凶徒誅伐シ、奧羽平均ニ付テ、勸賞トシテ宗圓ヲ下野國ノ守護ニ補セラレ、〇下略

〔宇都宮系圖 同本〕宗圓（天台座主）天永二年辛卯十月十八日、六十九歲寂、

人王七十代後冷泉院御宇天喜元年、詔八幡太郎義家、討安倍貞任高家宗任、逆徒爲調伏之御祈禱、康平三年庚子、宗圓十八歲、于時後冷泉院依勅命、下野國宇都宮下向、依御願成就、上洛、其時爲勸賞被補下野國守護職、御祈禱本尊座像不動有宇都宮田氣鄕、

〔吾妻鏡 七〕文治三年十二月一日戊辰、今日小山七郎朝光母（下野大掾政光入道後家）給下野國寒河郡并綱戶鄕、是彼爲女性、依有大功也、

〔栃木縣廳採集文書 四〕

花押（賴朝）

下　下野國寒河郡并阿志土鄕

東北なる櫻野村なりと云、其は次にいふべし、

鹽屋郡　山上　片岡　阿會　散伎(サヌキ)　山下　餘戸

鹽屋はシホノヤなるを、今の俗はノを省きてシホヤと呼ぶなり、文字も近世は鹽谷に作る、委しくは下の名所部の鹽屋里の條にいふべし、さて山上廢す、片岡は今高原山の東南にあり、阿會廢す、散伎は佐貫に作りて、舟生驛の東南にあり、山下餘戸はともに廢す、

那須郡　那須　大笥(オホケ)　熊田　方田　山田　大野　茂武(タケブ)　三和(ミワ)　全倉　大井　石上(イシカミ)　黒川

那須郡は往古は一國なり、國造本紀に、那須國造、纏向日代朝御代、建沼河命孫大臣命定賜國造」とあり、然るを孝德天皇の御代に、坂東の小國を郡に改むるよしみえたれば、其時郡とは成しなるべし、また同書に、神野國造瑞籬朝御世、神八井耳命孫建五百建命定賜國造」とある、神野國は那須郡に屬して、今の狩野鄕と云所なり、白川の廣瀨以事は云り、さもあらむか、さて那須鄕と唱へし所は、いづこにか今知がたし、但し那須國造韋提と云人の碑は、今黒羽城の南の方にて、湯津上村にあり、其邊ならむか、大笥は大桶に作りて、鳥山城の北の方にあり、熊田も同所にあり、方田も堅田に作りて存す、山田も存す、黒羽城の東南にて、中川の東岸なり、大野は武茂庄に、今大野地と云所あり、是なるべし、茂武は武茂の轉倒にて、タケブなり、今は武部に作る、神名帳に載せたる建武(タケブ)山神社も當所にあり、續日本後紀には、下野國武茂神、坐採沙金之山」とあり、今も其邊に金洗澤と云所あり、然るを近世宇都宮の一族武茂常陸介と云人、當所に居住して、字音のまゝにムモと唱へしを、今の俗は、訛りてモヽの庄と唱ふるなり、されど武部村をば、舊の如くタケブと呼ブなり、三和は三輪に作りて存す、三和神社も當所にありて、神名帳、三代實錄等に載たり、全倉廢す、但し矢ノ倉と云村あり、もし全は矢の誤にてはあらざるか、よく考ふべし、大井また大湯か、大湯村は蘆野驛の西にあり、石上は今上下二村に分れて、太田原驛の西の方にあり、兵部式には磐上驛と

河内郡　丈部　刑部　大續　酒部　三川　財部　眞壁　輕部　池邊　衣川驛家

丈部廢す、但し芳賀郡にも丈部あれど、是も廢せり、萬葉集卷二十に、天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌とある中に、下野國防人部鹽屋郡上丁丈部足人が歌あり、また續日本後紀卷九に、陸奥國人丈部繼成と云人もみえて、則下野君の後なりとあれば、是も當國の丈部より出しものなるべし、刑部存す、宇都宮の東南にて、きぬ川の岸なり、大續廢す、酒部は坂上に作りて上三川の南にあり、三川存す、今の上三川なり、上中下とわかれたる内、下三川は今三村と稱す、財部眞壁輕部はともに廢す、池邊は宇都宮の古名にて、同所の池上街その名殘なりと、上野宮住いへり、宇都宮は二荒神社のことなれば、地名はもとより池邊郷なるべし、池も鏡が池とて今あり、衣川驛は兵部式にもみえたれども、今廢したれば、何所とも定かならず、猶次の驛馬の條にいふべし、

芳賀郡　古家　廣妹　遠妹　物部　芳賀　若續　承舍　石田　氏家　丈部　財部　川口

眞壁　新田

古家廣妹、遠妹、ともに廢す、但し妹は昧の誤なるべし、今中川の邊に大瀬村あり、廣瀬遠瀬などの轉じたるにや、よく考ふべし、物部は眞岡の南なる物井村なるべし、芳賀は天正年中より眞岡と改む、されど字に芳賀口、また芳賀林、芳賀沼等なは存せり、また芳賀氏の古城跡もあり、委しくは下條にしるす、若續は若續の誤にて、眞岡の東なる若色村ならむと或人云り、若色村は今東鄕と唱ふれど、天正中までは若色鄕にて、芳賀伊賀守が一族、若色播部助と云人居住す、承舍は今續谷に作りて、眞岡の東北の方にあり、氏家は中頃より鹽谷郡に屬して、今奥道中の驛なり、丈部、財部廢す、但し今續谷村の北の方に給部村あり、財部の轉じたるにや、よく考ふべし、川口は中川の邊なる川合ならむと或人云り、眞壁新田廢す、但し新田は兵部式にも新田驛とありて、今氏家驛の

は五十戸に作りて、コベと唱ふるなり、足利驛の西の方十餘町許にあり、則チ上野への往還なり、
新田老談記と云書に、天正十二年、小田原の北條氏政金山の城を攻ける條に、五十戸大岩の鄕人
等云々とみえたり、金山城は上野國新田郡にて、新田山と古歌にもよめり新田義貞朝臣も則チ
此所に居住せり、後には由良信濃守貞治住す、

梁田郡　大宅　深川　餘戸　ともに廢す

安蘇郡　安蘇　說多　意部　麻續

安蘇、說多、意部ともに廢す、麻續は存す、今は小見に作る、佐野天明驛の北の方にあり、さて麻續の
續は績の誤りなり、

都賀郡　布多　高家　山後　山人　田後　生馬　秀文　高栗　小山　三島驛家

布多廢す、或　は二荒山を布多の荒山ならむかといへど、おぼつかなし、高家存す、今は武井に作
る、家と井、は假字たがへど、後世にはかゝる例數多あり、和名抄中、佐渡國の鄕名にも高家あり
て、假字多介倍とあり、さて武井は栃木驛の南の方にあり、山後山人ともに廢す、田後は存す、今は
田尻に作る、是は栃木の西北の方にあり、生馬存す、今は生駒に作りて寒川郡に屬す、小山驛より
佐野への往還筋なり秀文は委文の誤にてシトリなり、今は志島に作りて、太平山の西北の方に
あり、高栗廢す、但し東大寺要錄に高栗と記したれば、もし田川にてはあらざるか、さらば今川の
名に田川あり、よく考ふべし、小山存す、奧道中の驛家なり、三島驛は三鴨の誤にて、今の下津原村
と云所なり、兵部式に三鴨驛とみえ、また萬葉集に美可母乃夜麻とあるも同所なり、委しくは下
の名所の條にいふべし、

寒川郡　眞木　池邊　努宜

眞木、池邊廢す、努宜は存す、今は野木に作る、奧道中の驛なり、されど今都賀郡に屬す、

那須郡

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
都乃久爾乃、宇美能奈伎佐爾、布奈餘曾比、多志埿毛等伎爾、阿母我米母我母、
右一首、塩屋郡上丁丈部足人、
〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
布多富我美、阿志氣比等奈里、阿多由麻比、和我須流等伎爾、佐伎母里爾佐酒、
右一首、那須郡上丁大伴部廣成、

驛

〔倭名類聚抄七下野國〕足利郡　大窪　田部　堤田　土師　餘戶　驛家
梁田郡　大宅　深川　餘戶
安蘇郡　安蘇　說多〇高山寺本作識、意部　麻續
都賀郡　布多　高家　山後　山人　田後　生馬　秀文〇高山寺本作秀、高栗　小山　三島　驛家
寒川郡　眞木　池邊　努宜
河內郡　丈部　刑部　大續　酒部　三川　財部　眞壁　輕部　池邊　衣川　驛家
芳賀郡　古家　廣妹　達妹　物部　芳賀　若續　承舍　石田　氏家　丈部　財部　川口
眞壁　新田
塩屋郡　山上　片岡　阿會〇高山寺本作河、散伎　山下　餘戶
那須郡　那須　大笥　熊田〇高山寺本作熊、方田　山田　大野　茂武　三和　全倉　大井　石上
黑川
〔下野國誌一郡名郷名〕足利郡　大窪　田部　堤田　土師　餘戶驛家
大窪存す、今は大久保に作る、足利驛と佐野天明驛との間にあり、田部、堤田、土師ともに廢す、但し足利驛より上野國への往還筋に葉鹿と云村あり、もし土師の訛にてはあらぬか、餘戶は存す、今

多妣由伎爾、由久等之良受氐、阿母志々爾、己等麻乎佐受氐、伊麻叙久夜之氣、

右一首、寒川郡上丁川上巨老、

〔吾妻鏡　六〕文治二年九月三十日癸酉、下野國寒河郡内、以田地十五町被付日光山三昧田、當郡去年雖被寄進野木宮、於件十五町者、可被切改國領之由云云、

〔結城系圖　二〕朝光　母八田宗圖娘、〇中略養和元年至鎌倉、於頼朝御前元服、號結城七郎朝光、頼朝賜御劔并野州寒〇河〇本領、

河内郡

〔郡名考〕下野　河内カハチ　カフチ

〔萬葉集　二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

久爾具爾乃、佐伎毛利都度比、布奈能里氐、和可流乎美禮婆、伊刀母須敝奈之、

右一首、河内郡上丁神麻績部島麿、

芳賀郡

〔東大寺要錄　八〕勅旨可有封庄章之中、

金光明寺宛食封一千戸〇中略

下野國芳賀郡五十戸〇中略

奉今月廿一日勅、併件封宛金光明寺、其收停期、更待後勅者、

天平十九年九月廿六日

〔類聚國史　五十八人〕弘仁十四年三月甲戌、下野國芳賀郡人吉彌侯部道足女、授少初位上、免田租、終其身、標門閭以褒至行也、道足女、同郡少領下野公豊繼之妻也、夫亡之後、誓不再醮、常居墓側、哭不絶聲、

〔性靈集　二〕沙門勝道上補陀洛山碑

有沙門勝道者、下野芳賀人也、俗姓若田氏、神邈救蟻之齡、意清惜蠢之歯、〇下略

鹽屋郡

〔郡名考〕下野　鹽屋シホノヤ　シホヤ

あり、倭名抄郡名部に、足利阿志加々と見ゆ、こは手利口利の例にて、文字の如く足利かとも思へど、さる語例は物にも見へねば、必しかにはあらざるべし、故強て稱ふるに、もし麻利の轉説には非じか、當國はよき麻の出る國なり、今の世こそたがへ、麻郡とて、書にも名麻あるなり、足利に並びて安蘇郡あるも、麻郡の義なるやとおもはる、猶後賢考ふべし、此足利より西南ノ方一里許に、利保村といふがあるは、足利保の上略にやあらん、又陸奥國耶麻郡小布瀬郷、河沼郡等に、利田村といへるあるは、所謂上田にて、作毛に利潤ある義なるべし、此說は會津風土記郡村篇に見へたり、猶類聚名義鈔、色葉字類鈔、字鏡集、平他字類抄等にも、利字をばカヤとよめり、

梁田郡

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

奈爾波刀乎、己岐𣴎氏美例婆、可美佐夫流、伊古麻多可禰爾、久毛曾多奈妣久、

右一首、梁田郡上丁大田部三成、

安蘇郡

〔續日本紀三十七桓武〕延暦元年五月乙酉、下野國安蘇郡主帳外正六位下若麻續部牛養、〇中略等、獻軍糧、並授外從五位下、

都賀郡

〔伊呂波字類抄都國郡〕下野國　都賀府

〔郡名考〕下野　都賀ツカ スガ

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年七月丁未、下野國言、都賀郡有黒鼠數百許、食草木之根數十里所、

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

都久比夜波、須具波由氣等毛、阿母志志可、多麻乃須我多波、和須例西奈布母、

右一首、都賀郡上丁中臣部足國、

寒川郡

〔郡名考〕下野　寒川サムカハ　サカハ

〔萬葉集二十〕天平勝寶七歳乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、

足利郡

河内	芳賀	鹽屋	那須	管九
同	同(波加)	同(乙保乃夜)	同	同
同	同	同	同	九郷
同(無元)	同(無元)	鹽屋(無)　鹽谷(元)	同(無元)	
同	同	鹽屋	同	同
同	同	鹽谷	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	同
同	同	同	同	郡十

〔萬葉集 二十〕天平勝寶七歲乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌、
之良奈美乃、與曾流波麻倍爾、和可例奈波、伊刀毛須倍奈美、夜多妣蘇弖布流、
右一首、足利郡上丁大舍人部禰麻呂、

〔碩鼠漫筆 六〕利と云語
利ノ字かゞと訓ムはかゞやくのかゞにて、事物十分に滿足するを云フ語なり、かゞやくと云も、光明にまれ、英名にまれ滿足せるを云へるにて知べし、○中略 遊囊抄卷一に、文選、商者兼贏ト云へり、李善注、商賈贏利尺せり、クフサトハ買賣ノ利潤也、利ノ字ヲバカヾトヨム、カヾト云ヘ共利潤ノ義也、按に、商云云は、西京ノ賦に見へて、贏の古訓カヾとあり、又、魏都賦に、利往チ則賤シとも見ゆ、とある利潤も、亦滿足の義なり、クプサ、或ハタガサとも見ゆ、其名義は未考へれど、カゞと云フも同意なり、文選は贏とよみ、推古天皇紀には、利ノ字を訓メり、そは二十年ノ條に其留レ臣而用則爲レ國有レ利何空棄ニ海島一耶と見へたり、又下野國に足利

河内(カフチ)　●鈴石　●日光山　●大ワリ　●大原　●篠原　上毛奥界

鹽屋(シホノヤ)　●鶴二頁　●今市　●氏家　國中ヨリ奥界

芳賀(ハガ)　●宇都宮　●茂宮　●眞岡　●眞木　●高田　△專修寺　常ト下ヤノ界

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國葛野郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ参照スベシ、

(郡名異同一覽)下野

	安蘇	足利	都賀	梁田	寒川
六國史					
古書					
延喜式	安蘇(アソ)	足利(アシカヽ)	都賀(ツガ)	梁田(ヤナタ)	寒川(サムカハ)
倭名抄	同	同	同	同	同
拾芥抄	同	同	同	同	寒河
諸書	同	同	同	同	寒河 寒川
郡名考	同(アソ)	同(アシカヽ)	同(ツガ)	同(ヤナタ)	寒河(サムカハ)
天保鄉帳	同	同	同	同	寒川
明治[illegible]	同	同	同	同	同
地誌提要	同(アソ)	同(アシカヾ)	同(ツガ)	同(ヤナダ)	同(サムカハ)
郡區編制	同	同	上都賀 下都賀	同	同

國府　郡

上野下野三國、

〔三代實錄 三十五 陽成〕元慶三年二月廿六日丙戌、勅許讃岐國例損四十九戸、永以爲例、○中略 下野國幷云、上國、免三十九戸、望請准彼國例被許件數、從之、

〔延喜式 二十二 民部〕凡下野讃岐等國、准大國聽卌九戸例損、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕下野國 國府在都賀郡、行程上三十四日、下十七日、

〔拾芥抄 中末 本朝國郡〕下野 ○中略 都賀 府

〔袋草紙 三〕源經兼下野守ニテ在國之時、或者便書ヲ持テ向國府、不叶之間、無術之由ナンドイヒテ、ハカバカシキ事モセズ、冷然トシテ出テ一二町許行ヲ、○下略

〔倭名類聚抄 五 國郡〕下野國 ○略 管九 ○略 足利 阿志加々 梁田 夜奈多 安蘇 都賀 國府 寒川 佐無加波 河内 芳賀 波加 鹽屋 之保乃夜 那須

〔延喜式 二十二 民部〕下野國 上、管 足利(アシカヾ) 梁田(ヤナタ) 安蘇(アソ) 都賀(ツカ) 寒川(サムカハ) 河内(カフチ) 芳賀(ハカ) 鹽谷(シホノヤ) 那須(ナス) ○中略 右爲遠國、

〔易林本節用集 下〕下野 野州 上、管九郡、○中略 足利、梁田、安蘇、都賀、府 芳賀、寒川、鹽屋、那須、眞壁、

○按ズルニ、國花萬葉記亦眞壁郡アリテ河内郡ナシ、又和漢三才圖會ニハ、或改河内爲眞壁トアリ、蓋シ眞壁ハ河内郡ノ一郷名ナルヲ、之ヲ郡名ニ呼ビタルハ、土俗ノ私稱ナルベシ、

〔皇國郡名志〕下野國 九郡

足利(アシカヾ) 〈足利 佐野 上毛ノ界　梁田(ヤナダ) ●川崎 梁田 上界足利ニ並小郡

安蘇(アソ) ●栃木 ●合戰場 ●野上 ●足毛 上毛界

都賀(トガ) [壬生] ●ニレ木 ●鹿沼 ●文挾 國中

寒川(サムカハ) ●飯田 ●富田 ●小山 飯塚 ●新田 ●石橋 下サ上毛界

那須(ナス) ●佐久山 [烏山] 〈福原 [大田原] [黒羽] 〈殺生石 ●喜連川 ●芦野 ●鍋掛 常奥界

〔古京遺文〕那須直韋提碑〇中略

碑在下野國那須郡湯津上村、俗稱笠石、舊在荊棘中、上人觸犯者、必豪疾祟、有僧圓順、以是事語梅平村人大金重貞者、梅平在水府封內、重貞以聞義公、〇德川光圀貞享四年之秋也、義公好古、聞之卽命臣佐々宗淳、就損之、元祿四年三月、更命有司封築、安碑於其上、建亭以護之、巋然存于今者、公之賜也、棠齋曰、永昌元年當作朱鳥四年、蓋係洗者改作、今審觀之、字様不類、其說似可信、朱鳥四年五年六年七年見萬葉集、朱鳥七年見靈異記、不得據史略言朱鳥之號僅一年也、飛鳥淨御原宮天武天皇所營、帝崩後持統天皇嗣御是宮、至八年、朱鳥九年始遷都藤原、故碑謂持統天皇之時、猶稱淨御原大宮也、猪名大村墓志所云、後淸原聖朝卽是也、追大壹天武天皇所制爵位、四十八階之第三十三等、那須直姓也、所謂胙之土而命之氏者、姓氏錄不載、其祖不詳、韋提名也、佐々氏釋、作那須宜事提非是、評督官名、猶後世郡領也、既於妙心寺鐘銘詳之、白石新井先生云、評督是郡督之誤、亦不知古時有評督之職也、康子、卽庚子係文武天皇之四年、庚作康、又見伊福吉部氏墓志、唯未見西土人以庚爲康者耳、歿故猶言病死也、佐々氏釋作殯故疑爲物故之訛、並非是、歿字旁从夕、下文歿字同、漢李翊夫人碑、殂字作殂、與此同法、偲訓志奴布、思慕其人之義、萬葉集多用之、蓋是聞會意字、非詩所謂美且偲之偲、白石先生釋爲德字、亦非、棟梁卽棟梁、淮南主術訓、魏崔浩沈法會文、北魏文帝弔比干文、唐虞世南書破邪論、皆用此字、蓋連上字、增木傍者、猶鳳皇作鳳凰、琅邪作瑯琊之類也、無翼長飛、無根更固、蓋本于管子或篤無翼而飛者聲也、無根而固者情也之語、唐高宗三藏聖敎記亦云、名無翼而長飛、道無根永固、然銘文多不可讀、諸家往々强作解事、不可據信、今姑從佐々氏所釋、棠齋以是碑爲持統天皇時物、則誤矣、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、從五位下多治比眞人廣成爲下野守、

〔續日本紀 八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、令〇中略武藏國守正四位下多治比眞人縣守管相模

綱ノ子氏綱、足利氏ニ附ス、小山朝山(朝政八世ノ孫)獨官軍ニ屬シ、孫義政ニ至ルマデ、宇都宮氏ト接戰數次、弘和二年、足利氏滿ノ軍ト戰テ敗死、足利氏、結城基光ノ二子泰朝ヲシテ小山氏ヲ繼ガシム、(祇園城ニ居、天正ノ末祀絶ユ、)後、小山、宇都宮、長沼、那須、及下總ノ結城氏、八館ノ列ニ班ス、足利成氏兩上杉氏ト相閧グニ及ビ、長沼成宗成氏ヲ援ヒ、兵敗レテ出亡ス、宇都宮氏獨兵威日ニ强ク、終ニ州主ト稱シ、壬生、泉、山田、諸族皆來屬ス、天文中、那須氏ト戰テ大ニ敗レ、(那須氏那須郡烏山城ニ居ル)諸族稍那須氏ニ歸ス、北條氏亦州ノ南境ヲ略シ、宇都宮氏日ニ衰頽フ、豐臣氏東征、那須氏ノ地ヲ收テ、那須家臣大關高增ヲ黑羽ニ、大田原晴清ヲ大田原ニ封ジ、那須氏ヲシテ僅ニ福原ニ食ンメ、(德川氏ニ至リ、黑羽大田原食邑故ノ如シ、)宇都宮國綱、獨其舊封ヲ全ウス、(十八萬七千餘石)慶長二年、亦罪ヲ蒙リ、其封ヲ收テ之ヲ蒲生秀行ニ賜フ、六年、德川氏秀行ヲ會津ニ徙シ、奥平家昌之ニ代リ、又數姓易シ封ノ後、寶永中、戸田忠眞ヲ封ズ、(後島原ニ轉封、曾孫忠寛復封、)其餘封ヲ受ル者、烏山、(初松下重綱、大久保常春、)壬生、(初日根野吉正、後鳥居忠英、)足利、(戸田忠利)佐野、(堀田正敦)吹上、(有馬氏郁)最後戸田氏ノ支族忠至ヲ高德(タカトク)ニ封ズ、(後下總曾我野ニ徙ス)凡テ九藩、王政革新、日光縣ヲ置既ニシテ皆改テ縣トナシ、又廢シテ橡木宇都宮二縣ヲ置キ、又宇都宮ヲ廢シテ橡木ニ併ス、

〔先代舊事本紀十國造〕下毛野國造

難波高津朝(○仁德)御世、元毛野國分爲上下、豐城命四世孫奈良別、初定賜國造、

〔好古小錄上金石〕下野國那須郡那須國造碑(在那須郡湯津上邑、碑石高四尺一寸、厚五寸、闊一尺六寸五分、趺上高七寸、闊二尺一寸、下高一尺三寸、闊三尺一寸、元祿四年辛未建碑亭、)

朱鳥四年己丑四月、飛鳥淨御原大宮那須國造。追大壹那須[ ]提評督被賜、歲次康子年正月二壬子日辰節物故、意斯麻呂等立碑銘偲云、爾仰惟殞公廣氏尊胤國家棟梁、一世之中重被貳照、一命之期連見再甦、碎骨口髓豈報前恩、是以曾子之家无有嬌子、仲尼之門无有罵者、行孝之子不改其語、銘夏堯心澄、神照乾[ ]童子意育助坤作徒之六合言喩口故無翼長飛无根更固、

り、いつしか櫻野の里と稱すとぞ、今の氏家驛は、また天正年中より驛場となりし所にて、栗ケ島、增淵、內御堂、古宿等の四ケ村を合て一驛とせり、今の古宿と云所ぞ、もとの氏家鄕なる、また今氏家新田と云所あれども、是は元和年中の新開とあれば混ずべからず、さて新田氏家の兩鄕は、和名抄には芳賀郡なれど、中昔より鹽谷郡に屬したり、磐上驛は今の石上村なり、黑川驛も黑川村にて、ともに那須郡なり、都て足利、三鴨、田部、衣川、新田、磐上、黑川それより奧の白川驛驛の間七八里許づゝあり、

〔吾妻鏡九〕文治五年七月二十五日癸未、二品著御于下野國古多橋驛、先御奉幣宇津宮、有御立願、

〔太平記三十〕薩埵山合戰ノ事

宇都宮ハ、藥師寺次郞左衞門入道元可ガ勸ニ依テ、兼テヨリ將軍ニ志ヲ存ケレバ、〇中略十二月〇觀應二年二十五日、宇都宮ヲ立チテ、薩埵山ヘゾ急ケル、〇中略都合其勢千五百騎、十六日午刻ニ、下野國天。命。宿。ニ打出タリ、

〔日本國郡沿革考三東山道〕下野　上國、管九郡、千三百六十五村

河內二百二村　芳賀百九十二村　鹽谷百九十二村延喜式等作鹽屋　那須二百九十八村古那須國、見國造記　足利四十六村　梁田二十八村延喜式等作簗田　安蘇六十四村　都賀三百七十八村古國府　寒川十三村和名抄作寒河

〔日本地誌提要二十八下野〕沿革　古ヘ國府ヲ都賀郡ニ置、今ノ國府村是ナリ天慶中、藤原秀鄕州ノ介ヲ以テ、平將門ヲ誅ス、功ヲ以テ世州ノ守介ニ任ジ、押領使ヲ兼子、小山城都賀郡ニ居ル、十二世朝政、州ノ望族宇都宮朝綱、那須宗隆等ト俱ニ、源賴朝ニ從テ功アリ、宗隆那須一郡ヲ賜ヒ、朝綱子孫宇都宮ニ居リ、小山氏ト相代テ州守ニ任ジ、紀淸兩黨皆其下ニ隷ス、朝政ノ弟宗政、長沼芳賀郡ニ城キ、子孫之ニ居テ、長沼ト稱ス、源義兼ノ孫義康、足利郡ニ食ミ、八世尊氏ニ至ル、元弘ノ末、尊氏兵ヲ擧テ西上官軍ニ降リ、京師ヲ復ス、朝綱八世ノ孫公綱、建武中、勤王本州守護ヲ賜フ、既ニシテ公

十間　小山宿　一里一十三町五十九間半　大町新田宿　二十五町五十七間　小金井宿　一里一十四町八間半　石橋宿　一里二十五町三十九間半　河内郡雀宮宿三十六度三十分、二里三町二十七間半　宇都宮池上町、三十六度三十三分半、　二里一十六町五十八間半至宇都宮城大手一丁四十八間　白澤宿　一里二十九町一十二間半至鬼怒川岸一十一丁三十七間半　鹽谷郡氏家宿　一里二十七町四十九間　喜連川、三十六度四十三分、　二里三十四町四十四間　那須郡佐久山、三十六度四十八分半、　一里二十七町五十五間半　大田原　二里二十二町四十六間　鍋掛宿　一十町二十七間　越堀宿、三十六度五十六分半、　二里六町四十三間　蘆野　二里三十四町五間至國界境明神社前二里一十三丁二十一間　磐城國白川郡白坂宿○下略

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬○中略

下野國驛馬、足利、三鴨、田部、衣川、新田、磐上、黒川各十疋、　傳馬、安蘇、都賀、芳賀、鹽屋、那須郡各五疋、

〔續日本紀光仁三十一〕寳龜二年十月己卯、太政官奏、○中略　其東山驛路從上野國新田驛達下野國足利驛、此便○原作使、據一本改道也、○下略

〔下野國誌一驛名存廢〕一本足利驛を餘戸驛に作る、また和名抄にも餘戸驛家と記したり、續日本紀に、光仁天皇寳龜二年冬十月己卯、太政官奏云々、其東山驛路從上野國新田驛達下野國足利驛、此便道也云々とみえたり、足利驛は今に存す、三鴨驛は都賀郡下津原と云所なり、和名抄には三島驛家と誤て記したり、田部驛は今多功驛に作りて存す、そも〳〵藤原奈良の朝の法は、五十里に一驛を置とあれば、今道八里餘りの間にあること考て知るべし、衣川驛は宇都宮の東の方にて、今の石井村のあたりなるべし、回國雜記にも、宇都宮より常陸の小栗へ行給ふ條に、衣川と云所にて云々とみえたり、新田驛は氏家の東なる櫻野村、上野新田といふ所なりといへり、中昔までは、ニヒタと呼びしを、ことなる櫻の大木ありて、をちこち人の愛あへりしよ

○按ズルニ、古クハ、野之上州、野之下州ト云ヒシナラン、然ルニ後世ハ之ヲ略シテ上野ヲ上州ト云ヒ、下野ヲ野州ト云ヘリ、

位置

〔地勢提要 勢〕各國經緯度 附晷度

下野、宇都宮 驛町 上 極高三十六度三十三分半、經度東西度一十一分、從東都 奥州街道 二十七里三十町四十六間、

〔日本經緯度實測〕北極出地

下野　喜連川　三六度四三分〇〇秒　宇都宮　三六度三三分三〇秒〇中略

東西里差

山城　京　〇度〇〇分〇〇秒　下野　宇津宮　東四度一一分〇二秒

〔木曾路名所圖會 五〕椎名(シヒナ) 常陸 小栗まで四里半、〇中略 長き野原を過て民居有、民居過て又野原あり、いづれも同じさまを行々て間々田(マヽダ)、まかべ川を過る、此川は常陸下野の國界なり、

疆域

〔日本地誌提要 二十八 下野〕疆域　東ハ常陸、西ハ上野、南ハ上野、武藏、下總、北ハ岩代、磐城ニ至ル、東西壹拾九里、南北貳拾五里、

〔易林本節用集 下〕下野 野州 上、管九郡、東西三日半、山少而野深、土厚而草木多、種生百倍、中上國也、

地勢

〔日本地誌提要 二十八 下野〕形勢　大山脈北西二方ヲ界シ、西方最嶮峻、日光ニ至テ其秀抜ヲ極ム、州ノ中央地勢平衍、官道砥ノ如ク、絹川貫流ス、

〔文德實錄 十〕天安二年四月丙午、置下野國大少掾各一員、先是國上請、地勢曠遠、人居懸隔、差撿部内官員數少、仍許之、

道路

〔日本實測錄 三 街道〕從東京奥州街道至野邊地〇中略

下野國都賀郡野木宿、一里二十六町二十七間、　間々田宿、三十六度一十六分、　一里二十三町三

名稱

下野國ハ、シモツケノクニト云ヒ、舊クハシモツケヌノクニト云フ、東山道ニ在リ、東ハ常陸、西ハ上野、南ハ上野、武藏、下總、北ハ岩代、磐城ニ界シ、東西凡ソ十九里、南北凡ソ二十五里、其地勢ハ南部ハ平衍ニシテ鬼怒川思川等ノ流域ニ屬シ、西北部ハ日光山地方ニシテ山嶽連起シ、東北部ハ謂ユル那須野原ニシテ、今猶ホ茫漠タル平原ニ屬セリ、此國ハ古ヘ國府ヲ都賀郡ニ置キ、足利、梁田、安蘇、都賀、寒川、河內、芳賀、鹽屋、那須ノ九郡ヲ管シ、延喜ノ制、上國ニ列ス、明治維新ノ後、都賀郡ヲ上下二郡ニ分チ、又寒河郡ヲ廢シテ下都賀郡ニ併セ、梁田郡ヲ足利郡ニ合セ新ニ宇都宮市ヲ設ケ、栃木縣ヲシテ一市八郡ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕下野 之毛豆介乃

〔運歩色葉集 志〕下野

〔饅頭屋本節用集 天地之〕下野 野州

〔日本風土記 一 寄語島名〕下野 什麼子計

〔倭訓栞 前編 十一 志〕しもつけ　下野をよめり、下つ毛野の略也、

〔元亨釋書 三 慧解〕釋圓仁、性壬生氏、野之下州都賀郡人也、昔崇神天皇第一皇子豐城入彥、節察東壤、其次子留爲郷人、仁其胤也、

〔下野國誌 八 佛閣僧坊〕雞足寺 ○中略

洪鐘之銘文

寺號雞足、有下。狛。坤、朱雀皇帝御願所、羽林中郎將歸依地、○中略

弘長三癸亥年二月十七日　奉行僧祐圓　金剛佛子密豫　別當灯大法師會惠 ○中略

有下狛坤、上野國を上州と云る事、古き物にもみゆれば、下野を下州とも云るなめれど、物に書ること、此外には見及ばず、

刀禰河泊乃可波世毛思良受多々和多里奈美爾安布能須安敝流伎美可母、

伊香保呂能夜左可能爲提爾多都弩自能安良波路萬代母佐禰乎佐禰氐婆、

可美都氣努伊可保乃奴麻爾宇惠古奈宜可久古非牟等夜多禰物得米家武、

可美都氣努可保夜我奴麻能伊波爲都良比可波奴禮都追安乎奈多要曾禰、

可美都氣奴伊奈良能奴麻能於保爲具左與曾爾見之欲波伊麻許曾麻左禮、（柿本朝臣人麻呂歌集出也）

可美都氣努佐野田能奈倍能武良奈倍爾許登波左太米都伊麻波伊可爾世母、

伊加保世欲奈可中次下於毛比度路久麻許曾之都等和須禮西奈布母、

可美都氣努佐野乃布奈波之登利波奈之於也波左久禮騰和波左可禮賀倍、

伊香保禰爾可未奈那里曾禰和我倍爾波由惠波奈家杼母兒良爾與里氐曾、

伊香保可是布久日布加奴日安里登伊倍杼安我古非能未思等伎奈可里家利、

可美都氣努伊可抱乃禰呂爾布路與伎能遊吉須宜可提奴伊毛賀伊敝乃安多里、

右二十二首、上野國歌、○中略

譬喩歌

可美都家野安蘇夜麻都豆良野乎比呂美波比爾思物能乎安是加多延世武、

伊可保呂乃蘇比乃波里波良和我吉奴爾都伎與良之母與多敝登於毛敝婆、

志良登保布乎爾比多夜麻乃毛流夜麻能宇良賀禮勢那奈登許波爾毛我母、

右三首上野國歌、

下野國

殊可行捨斷之由云云、

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

元弘三年、〇中略諸軍勢ノ恩賞ハ、暫ク延引ストモ、先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可被行トテ、〇中略新田左馬助義貞ニ、上野。播磨兩國ヲゾ被行ケル、

〔梅松論上〕今度兩大將に供奉の人々には、信濃常陸の欠所を勳功の賞に充行るゝ處に、義貞の討手の大將として關東へ下向のよし風聞しける間、先義貞の分國上野の守護職を上杉武庫禪門に任せらる、是を拜領して用意の爲に國に下る、

〔萬葉集十四東歌〕相聞〇中略

比能具禮爾、宇須比乃夜麻乎、古由流日波、勢奈能我素低母、佐夜爾布良思都、

安我古非波、麻左香毛可奈思、久佐麻久良、多胡能伊利野乃、於父母可奈思母、

可美都氣努、安蘇能麻素武良、可伎武太伎、奴禮杼安加奴乎、安杼加安我世牟、

可美都氣乃、乎度能多杼里我、可波治爾毛、兒良波安波奈毛、比等理能未思氐、

或本歌曰、可美都氣乃、乎野乃多杼里我、安波治爾母、世奈波安波奈母、美流比登奈思爾、

可美都氣野、左野乃九久多知、乎里波夜志、安禮波麻多牟惠、許登之許受登母、

可美都氣努、麻具波思麻度爾、安佐日左指、麻伎良波之母奈、安利都追見禮婆、

爾比多夜麻、禰爾波都可奈那、和爾余曾利、波之奈流兒良師、安夜爾可奈思母、

伊香保呂爾、安麻久母伊都藝、可奴麻豆久、比等登於多波布、伊射禰志米刀羅、

伊香保呂能、蘇比乃波里波良、禰毛己呂爾、於久乎奈加麻左、可思余加婆、

多胡能禰爾、與西都奈波倍氐、與須禮騰毛、阿爾久夜斯豆之、曾能可把與吉爾、

賀美都氣野、久路保乃禰呂乃、久受葉我多、可奈師家兒良爾、伊夜射可里久母、

無石碑、作一小石室、而設裏小佛石像耳、觀大行於民間、過塗于官吏、不拘常態、下馬捨蓋、跪于草塵馬蹄之間、官吏不逝則不敢去、勵業勤農、素長織絹、故地產綾絹花紋絹矣、山間之小民根利山之民重君恩不顧己貧、孜孜事賦稅矣、仕士尙儒重書、或長射或能御、性素質朴無貴賤之品、各以木綿爲服、然退讓談話不亂其序矣、

名所

〔日本鹿子九〕同國上野〇名所之部

黒髪山　むば玉の黒髪山を朝越て木の下露にぬれにけるかな

佐野　道遠き佐野の舟橋夜をかけて月にぞわたる秋のたび人

伊香保ノ沼　いかほのやいかほの沼のいかにして戀しき人をいまひとめみん

吾妻川　北より南へ流る、大川也、すそへとね川也、

衣の關　戸根川　碓氷峠

雜載

〔延喜式兵部二十八〕諸國健兒〇中略　上野國一百人〇中略

諸國器仗〇中略　上野國甲六領、横刀廿口、弓廿張、征箭廿具、胡籙廿具、

〔日本書紀推古二十二〕九年九月戊子、新羅之間諜者迦摩多、到對馬、則捕以貢之、流于上野、

〔日本書紀齊明二十六〕四年十一月戊子、捉有間皇子與守君大石、坂部連藥、鹽屋連鯯魚、〇中略流守君大石於上毛野國、

〔續日本紀元明六〕和銅七年十月丙辰、勅割尾張上野信濃越後等國民二百戸、配出羽柵戸、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年五月十七日丁酉、上野國言、加擧權任國司公廨料稻七萬束、從之、

〔吾妻鏡十九〕承元四年九月十一日丙申、故足利又太郎忠綱遺領、上野國散在名田等、此間稱尋出之、安達九郎右衞門尉景盛令注進、仍被補新地頭、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年八月廿七日庚子、安達左衞門尉申、上野國奉行雜退事、今日有其沙汰、無恩許、

人口

〔官中秘策三〕上野國　十四郡 ○中略
一人數五拾七万六千七拾五人　内 三拾壹万五千六百九人 男 / 貳拾六万四百五拾六人 女
〔吹塵錄五人口及國高〕諸國人數調 文化元甲子年 ○中略
御料私領
一人數四拾九万七千三拾四人　高五拾九万千八百三拾四石餘　上野國
内 貳拾六万六千貳百七人 男 / 貳拾三万八百貳拾七人 女 ○中略
諸國人數調 弘化三丙午年 ○中略
御料私領
一人數四拾貳万八千九拾貳人　高六拾三万七千三百三拾壹石餘　上野國
内 貳拾万九百七拾五人 男 / 貳拾万七千百拾七人 女

風俗

〔人國記〕上野國
上野國ノ風俗ハ、碓氷、吾妻、利根三郡ハ、人之形儀信州ニ似タリ、亦勢田、佐位、新田、片岡四郡ハ、風儀信州ヨリ上分ノ風俗也、然ドモ詰ル所之意地少信濃ヨリハ不足也、其譬ヲ云ニ、人之氣上分成故ニ免ス所ノ氣有テ、我ト我ガ非ヲ少キ也ト、小罪ヲ免シテナスガ如シ、小罪ヲナス時ハ後大罪ニ及ブ事眼前也、然レバ信濃ノ風俗上下トモニ弓箭ヲ取レバ、負テ氣ノ屈スル事ナク、亦出テ先悔ヲス、ガントハゲムガ如ク、此國ハ二三度モ如斯ナレドモ、後ニハ理非ヲ談ジテ不入剛氣ナレバ、人數ヲ損ゼンヨリハ、戰ヲ可止ナド、、半ヨリ能分別發テ、差置ク等ノ風儀ニ而、シマリスクナク而、亦邑樂、群馬、甘羅、多胡、綠野、那波、山田等之郡ノ風俗ハ、一氣勢ニ而一人氣ヲハゲマセバ、諸人氣ヲ一ニ而一同シヌ、一人氣ヲ縮メ氣ヲクヂカレテ退ク氣ハ、諸人其氣ニ同スルノ類ノ風儀也、雖然根性ハ徹シタル心アレドモ、氣質ノ變ニツナガル、事餘ニコヘタリ、
〔前橋風土記〕風俗
村落農商各尙志勵勇兇强、而好殺輕生矣、然以强不犯禁出入帶利刀、信佛知文字、言語重濁、死則多

交易雜物〇中略　上野國絁五十疋、布一千五百九端、商布七千七百卅一段二尺二寸八分、紵八十斤、席九百枚、細貫席六十枚、紫草二千三百斤、鹿革六十張、履料牛皮廿張、樋子四合、

〔延喜式二十四主計〕上野〇中略　右十一國絁絲〇中略

上野〇中略　右十國輸絁〇中略

上野國行程上卅九日、下十四日、

調、緋帛五十疋、紺帛五十疋、黃帛八十疋、橡帛十三疋、絁三百十疋、紺布五十端、縹布十五端、黃布卅端、橡布卅五端、緋革十五張、自餘輸布、　庸、輸布、中男作物、麻一百五斤、席、漆、紙、紅花、

〔延喜式三十七典藥〕諸國進年料雜藥〇中略

上野國十五種　青木香、黃芩、黃蘗各十斤、細辛六十四斤、芍藥、當歸各廿斤、升麻三斤二兩、防風六十斤、蘭牙五斤、干地黃、胡麻、蜀椒各一斗、麥門冬八升、附子四斗、猪蹄四具、

〔庭訓往來〕常陸紬、上野綿、

〔毛吹草三〕上野

日野絹　新田山絹　佐野白苧　布　漆　戸澤砥　釜山石　利根川鯉

〔諸國名物査〕上野

絹綿、島絹、畢竟に用之、羅閣ノ出る也、　麻苧、砥、高崎足袋、同節若、山名節若、新田山絹、松枝飼美島、漆、利根川釜石、同鮎、鱒、沼田串柿、漬蕨、紙、佐野白苧、

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月癸酉、相模、常陸、上野、武藏、下野五國輸調、元來是布也、自今以後、絁布並進、　七年正月甲申、令相模常陸上野三國、始輸絁調、但欲輸布許之、

〔續日本紀八元正〕養老五年正月戊申朔、武藏上野二國並獻赤烏、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年正月丁酉朔、上野國獻白烏、宴五位已上於內裏、賜祿有差、

〔伊呂波字類抄地儀加〕上野國（管十四○中略）本田二万八千五百四十四丁

〔拾芥抄中末本朝國郡〕上野（大遠）十四郡（中略）田二萬八千五百卅四町

〔新撰類聚往來下〕國名○中略　上野（上州）田數二万七千四百六十町

〔海東諸國記〕上野州　郡十四、水田三萬二千一百四十町三段、

〔前關白秀吉公御檢地帳之目錄〕四十九万六千三百八十石　上野

〔國花萬葉記十一上野〕上野國（上州）大、管、十四郡、○中略　田數貳萬八千五百三十四町○中略　知行高四十六万八千石

〔和漢三才圖會六十六上野〕十四郡（一宮拔鉾大明神）高四十六万八千石

〔官中秘策三〕上野國　十四郡○中略

一石高五拾九万千八百三拾四石餘

〔吹塵錄五人口及國高〕天保度御國高調○中略

上野國（御料私領）一高六拾三万七千三百三拾壹石六斗三升三合壹勺

出擧稻

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正稅公廨雜稻○中略

上野國、正稅公廨各卅萬束、國分寺料五萬束、興福寺料三萬束、文殊會料二千束、藥分料一萬束、學生料一萬束、修理地溝料四萬束、救急料十二萬束、俘囚料一萬束、勅旨御馬秣料四千七百廿束、同繫飼御馬秣料五千九百束、占市牧牛直四千三百十五束、

國產貢獻

〔倭名類聚抄五國郡〕上野國○略註　管十四（中略）正公各三十萬束、本穎八十八萬四千束、雜穎二十八萬四千束、

〔延喜式二十三民部〕年料別納租穀○中略　上野國（一万七百卌五石○中略）

年料別貢雜物　上野國（筆一百管、零羊角六具、杏仁三斗、麞十二斤、樺皮四圍、○中略）

諸國貢蘇番次○中略　上野國十三壺（五口各大一升、八口各小一升○中略）　右八箇國爲第三番（卯酉年○中略）

田數 石高

守政房、享保二ヨリ再右京大夫輝貞、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕秋元但馬守□□ 雁間 朝散大夫 六万石、居城上州邑樂郡館林、江戸ヨリ十八里

天正十八、榊原式部大輔康政、同遠江守康勝、松平式部大輔忠次、寛永廿癸未年迄、正保元、松平和泉守乘壽、同宮内少輔乘久、寛文元、館林宰相綱吉公御居城、延寶八以後中絶、寶永四、再築之、松平右近將監清武、同肥前守武雅、同源之進武元、享保十三、太田備中守資晴、同十九、御番城、元文五、太田攝津守資俊、延享三ヨリ松平右近將監武元、同右近將監武寛、同右近將監齊厚、天保七、井上河内守正春、弘化二ヨリ秋元但馬守志朝、領之、

土岐山城守頼之 帝鑑間 從五位下 三万五千石、居城上州利根郡沼田、江戸ヨリ三十六里餘

當國小田原北條持、猪俣能登守範直居、天正十八、眞田安房守昌幸、同伊豆守信幸、元和八、眞田河内守信吉、同伊賀守信利、同彈正忠信直、天和二、被レ潰二城地一、元祿十五、再依二台命一築之、本多伯耆守正永、同遠江守正武、同豐前守正矩、享保十七、黑田豐前守直邦、同大和守直純、寛保二、土岐丹後守頼稔、以後領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕板倉主計頭勝殷 雁間 朝散大夫 略○中 三万石、居城上州碓氷郡安中アンナカ、江戸ヨリ廿九里九丁

慶長年中、井伊兵部少輔直之、後水野備後守、同信濃守、同備後守、堀田備中守正俊、延寶九、板倉伊豫守重同、元祿十五、内藤丹波守政森、同山城守政里、同金市郎政苗、寛延三、板倉佐渡守勝清、以後領之、

〔慶應元年武鑑〕松平攝津守忠恕 帝鑑間 朝散大夫 二万石 居城上州甘樂郡小幡、江戸ヨリ廿九里十六町

元和五ヨリ織田氏代々領、明和四ヨリ松平攝津守忠恒、以後代々領之、

酒井下野守忠彊 菊之間 朝散大夫 二万石 在所上州佐位郡伊勢崎、江戸ヨリ廿四里

寛文年中ヨリ、酒井氏代々領之、○節略

〔慶應元年武鑑〕前田丹後守利豁 柳間 朝散大夫 略○中 一万石餘 在所上州甘樂郡七日市、江戸ヨリ廿九里廿九町

慶長年中ヨリ、前田氏代々領之、

〔慶應元年武鑑〕松平鐵丸信謹 大廊下下之御部屋 略○中 一万石 御在所上野多胡郡吉井、江戸ヨリ廿七里

毎歳米一万俵宛拜領之、寛永六年四月、松平越前守信綱、于二宮所一賜レ居、以後代々住之、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕上野國 略○ 註 管十四（中略）田三萬九百三十七町百四十四歩

藩封

〔太平記三十〕薩埵山合戰事

宇都宮ハ藥師寺次郎左衞門入道元可ガ勸ニ依テ、○中略十二月〔觀應二年〕十五日、宇都宮ヲ立テ薩埵山ヘゾ急ケル、○中略路ニ少シノ滯モナタ、引懸引懸打程ニ、同十九日ノ午剋ニ、利根河ヲ打渡テ、那。和。庄。ニ著ニケリ、

〔集古文書二十八下知狀〕正平七年下知狀伊豆國熱海走湯山東明寺殿

走湯山造營料所、上野國淵。名。庄。事、正平七年正月二十日、被成一圓御敎書之處、新田大島讃岐前司義政、去年十月十一日以御書拜領之上者、所詮中分彼所沙汰付半分下地於當山雜掌、可執進請取之狀、依仰執達如件、

正平七年閏二月十六日　　前遠江守花押

宇都宮下野守殿

〔鎌倉大草紙〕長尾景春は、上州勢を引卒して、五十子梅澤といふ所に陣を取、太田道灌所々の軍に打勝て、上州那。須。の庄へ兩上杉の迎に來り、同○文明九年五月十三日、利根川を越、五十子へ歸陣す、

〔神田孝平所藏文書一〕寄進

上野國山。上。保。葛塚村、諏方兩社上下神事幷燈油等料田事、

右當保田部村新平三入道作田屋敷、幷葛塚村和泉房作田屋敷、源六入道跡田屋敷、河ハタ田等、限年紀沽却訖、年紀以後所寄進當社也、以件得分、神事料田不足之時、且令勤行祭祀、且可備當社燈油也、為祝管領、可勤彼役也、仍寄進狀如件、

建武元年十一月二十七日　　前美作權守貞宗花押

〔慶應元年武鑑〕松平右京亮輝照〔雁間朝散大夫〕○中略八万二千石、居城上州郡馬群高崎、江戸ヨリ二十六里半

天正八、井伊兵部少輔直政、慶長九、酒井左衞門尉家次、元和二、松平丹波守康長、同三、松平伊豆守信吉、同五、安藤對馬守重信、同右京進重長、同對馬守重治、元祿八、松平右京大夫輝貞、寶永七、間部越前

返モ無念ナレ、爭カ乍見可休トテ、數多ノ人勢ヲ差向ラレテ兩使ヲ忽生取テ、出雲介ヲバ誡メ置キ、黑沼入道ヲバ頸ヲ切テ、同日ノ暮程ニ、世良田ノ里中ニゾ被懸ケル、

〔上野國志新田郡〕長樂寺〇中略

永宣旨

上野國新田庄世良田山長樂寺別院眞言院事、勅願處上者、門徒中官位之事、爲住持可令下知之旨被聞食之、彌專佛法興隆、宜奉祈寶祚長久者、天氣如此、悉而以狀、

永正十七年後六月廿三日　　右中辨

眞言院住持御坊

〔吾妻鏡一〕治承四年十二月二十四日壬寅、木曾冠者義仲、避上野國赴信濃國、是有自立志之上、彼國多胡庄者、爲亡父遺跡之間、雖令入部、武衞權威已輝東國之間、成歸往之思如此云云、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年三月廿五日癸丑、海野左衞門尉幸氏、與武田伊豆入道光蓮、相論上野國三原庄與信濃國長倉保境事、幸氏所申、依有其謂、任式目加押領分限、可沙汰之旨、被仰含于伊豆前司賴定、布施左衞門尉康高等訖、

〔太平記十〕新田義貞謀反事附天狗催越後勢事

則武藏上野兩國ノ勢ニ仰セテ、新田太郞義貞ハ舍弟脇屋次郞義助ヲ討テ可進ストゾ被下知ケル、義貞是ヲ聞テ、宗徒ノ一族達ヲ集テ、此事可有如何ト評定有ケルニ、異儀區々ニシテ不一定、或ハ沼田庄ヲ要害ニシテ、利根河ヲ前ニ當テ、敵ヲ待ント云義モアリ、

〔上椙古文書一〕八幡庄〇上野被下事、所被違背也、守彼狀、可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

建武四年十一月二日　　武藏權守高師直花押

上椙民部大輔殿〇憲顯

左衛門督家政所下　上野國新田御庄官等、補任下司職源義重、右人依ㇾ爲ㇾ地主、補ㇾ任下司職ㇾ如ㇾ件、御庄官等宜承知、依ㇾ件用之、敢不ㇾ可ㇾ違失、故下、

保元二年三月八日　安主宮内録菅野

〔田文五〕ちうまんにつたのみまやうかおうこれんの日六、たはたけさいけにの事、

合

田　二百九十六町十だい　畠　百町六反三十口だい　在家二百八宇　此内そ、田二十四町八反　神田十六町八反

享德四年乙亥閏四月吉日

〔東路のつと〕明る朝利根川の舟渡りをして、上野の國新田の莊に、禮部尚純隱遁ありて、今は靜喜かの閑居に五六日、連歌度々におよべり、

露分て袖にみるべき野山かな

〔沙石集六上〕榮朝上人之說戒之事

一上野國新田庄世良田ノ本願釋圓房ノ律師榮朝上人ハ、慈悲深ク智惠賢クシク、顯密共ニ學シ、說法說戒マコトニタツトカリケレバ、近國ノ道俗歸依渴仰シテ聽聞シケリ、

〔太平記十〕新田義貞謀反事附天狗催越後勢事

相模入道、舍弟ノ四郎左近大夫入道ニ、十萬餘騎ヲ差副テ京都ヘ上セ、畿內西國ノ亂ヲ可ㇾ靜トテ、武藏、上野、安房、上總、常陸、下野、六箇國ノ勢ヲゾ被ㇾ催ケル、其兵粮ノ爲ニトテ、近國ノ庄園ニ臨時ノ夫役ヲ被ㇾ懸ケル、中ニモ新田庄世良田ニハ、有德ノ者多シトテ、出雲介親連、黑沼彥四郎入道ヲ使ニテ六萬貫ヲ五日ガ中ニ可ㇾ沙汰ト、堅ク下知セラレケレバ、使先彼所ニ莅テ、大勢ヲ庄家ニ放入テ、譴責スル事法ニ過タリ、新田義貞是ヲ聞給テ、我館ノ邊ヲ雜人ノ馬蹄ニ懸サセツル事コソ、返

名跡考ニ云、前橋、中世厩橋トモ書、古ノ利刈ノ驛ノ轉ジタルナルベシト云、三碑考ニ、厩橋ハ驛橋ノ意ニヤト云、(前橋ハ群馬勢多兩郡ニワタレリ、舊說雜記ニハ、前橋厩橋ハ別、今混ジテ一ニスルハ非也ト云、)和田記ニ、厩橋城ハ厩橋氏代々居住、其後長尾持ト成、後又小田原ノ抱城ト成、福島孫十郎城代ト云、

〔信長記十五下〕瀧川武藏野合戰之事

去程ニ、瀧川左近將監一益ハ、關東管領職ニ任ゼラレ、上野國厩橋城ニ在シカバ、關八州ノ大名小名成厩橋城ニ居ヲト、上下ノ因ミヲ深セント媚ヲナス事、恰昔平相國淸盛公、源氏ヲ討亡シ、威勢一天振、威四海ガゴトシ、

〔關八州古戰錄五〕近衞前久公關東動坐附輝虎於東上野所々軍事

斯テ謙信西上野ノ先方衆ヲ驅促シ、先以テ勢多郡那波ノ城エ働ヲ驅ラル、(中略)輝虎悅喜斜ナラズ、桐生ノ城ノ繫ギ要樞ノ處ナリトテ、北城丹後守長國ヲ入テ守レシメ、夫ヨリ厩橋エ軍ヲ出サル、(中略)此折節何ナル放弗者(ハウラツ)ヤ仕タリケン、沼須川ノ端ニ落首ヲ書テ立タリケル、

小田ハラヲ結バン繩ハ朽果テ厩橋落ス沼田永荒、勢多郡伊勢崎ノ砦エハ、谷備中守宗次、荻田備後守、瀨玉主稅助、毛利丹後守、四百餘騎ニテ馳向ヒ、早速ニ攻落シヌ、

〔上野國志佐位郡〕伊勢崎　モト赤石村ト云、橫瀨氏ノ說ニハ、弘治元年(或ハ天文十五年トモ云)由良成繁那波ヲ手ニ入レ、赤石鄕神人村ヲ伊勢神領ニ寄附シテヨリ、伊勢前ト稱スト云、

〔古文帖〕伴野氏

上野國緣埜郡大塚村七百石、右宛行之畢、全可知行者候、仍如件、

天正十九年辛卯五月　御朱印

伴野隼人どのへ

〔集古文書下文十二〕保元二年下文　由良家藏

ツヾケリ、是所謂和田宿也、〔略〕○中慶長三年戊戌、中山道ヲ開カレシニ及テ和田ハ緊要ノ地ナレバトテ、直政〔○井伊〕ニ仰セ、城ヲ築シメテコレヲ賜フ、此時直政地名ヲ更テ松ガ崎ト云シト、龍廣寺ノ住持ノ白庵ニ語ラレシニ、白庵曰、尤然ルベク、去ナガラ諸木ニ榮枯ノ時アリ、物ニ盛ノアルコトハメヅラシカラズ候、公既ニ命ヲ奉テ此城ヲ築キ玉ヘルハ、所謂盛事大名也、サレバ成功高大ノ義ニ取テ、高崎トシ玉ハレバイカヾト云ケレバ、直政大ニ悦テ高崎ト名ヅケラレ、且高崎ノ二字ヲ以、龍廣寺ノ山號トスベキヨシヲ命ゼラル、

〔木曾路名所圖會〕四 高崎〔上野〕 倉加野まで一里十九町、此所は松平右京亮侯居城の地也、城下の町長し、凡三十町ばかり繁昌の地也、此國都會の地にして、月毎に六度の市あり、第一に上州絹、館煙草、白目竹とて、馬の鞭に用、其外種々の物を出して交易す、賑ひいはんかたなし、これより少し行て佐野むらにいたる、

〔上野國志〕〔信 邑楽郡〕館林城 佐貫庄ニアリ 弘治二年正月、赤井但馬守照康入道法蓮ガ築ク所ナリ、〔略〕○中御入國ノ後、榊原式部大輔康政ニ賜フ、〔天正十八年八月、外張ノ町屋今ノ所ニ移ス、文祿二年正月ヨリ郭外ノ總濠ヲ堀ル、〕

〔古文帖〕植村駿河守藏

大神君

上州館林大島村五百石、右宛行之證、全可令知行者也、仍如件、

天正十九辛卯年　御朱印

植村新六郎どのへ

〔前橋風土記〕前橋方域

前橋古曰厩橋、在于上野國群馬郡矣、

〔上野名跡誌〕〔二編下 群馬郡〕厩橋

上野　碓水郡、行田郡、甘樂郡、南蛇井村、神成村、

〔夫木和歌抄 三十一〕くるまの里 上野

題不レ知懐中　　よみ人不レ知

都よりかへりくるまの里人はひとねがはをばわたらざらなん

〔長樂寺文書 三〕奉寄進　上野國世良田長樂寺

右當國新田莊〔新田郡〕平塚村内得分貳拾貫文、地所奉寄進也、仍如件、

元弘三年七月二十日　　源行義 花押

〔上野國志 新田郡〕德河村　義重ノ次男義秀、德河ト稱シ玉フ、此郷何レノ時ヨリカ、誤テ勢多郡ト稱ス、勢多郡トハ隔リテ相接ス、ソノ誤リ傳ル所以ヲ詳ニセズ、此御當家御姓氏ノ地、貢役免除ノ郷、誠ニ欽々敬ベキ村名ナリ、

〔田文 五〕新田庄江田郷内得河方目錄

合田畠拾貳町貳段半　分錢都合貳拾七貫五百文定

明德五年甲戌八月廿七日　　國政 判

〔集古文書 四十 施行狀〕應永二十七年施行狀 相模國鎌倉建長寺藏

建長寺寶珠庵雜掌申、上野國条久留見村參分貳才内遠安名事、任先月二十六日御奉書之旨、退被官伊豆守違亂、可分全寺家所務之由也、仍執達如件、

應永二十七年六月八日　　花押

神谷掃部助殿

瀬下隼人佐殿

〔高崎志 上〕上野國群馬郡赤坂ノ庄ハ、名義未詳、〇中略 和田氏居住ノ頃ハ、民家ヲノ北ヨリ東南ニ立

村里名邑

飯塚郷　佐貫庄ヘ押領　新河郷　山上ヘ押領　小廣田郷　西庄ヘ押領　小泉郷　西庄ヘ押領　花香　綠郷　同前木島郷　同前
足乘郷　薗田庄ヘ押領　藤心郷　薗田庄ヘ押領
以上八ヶ所、此外十七郷他庄ヘ相分、在所分明ニ不存知候也、
應永十一年甲申四月七日　沙彌判

〔郡名一覽〕上野國　御料私領　上州　東西四日　拾四郡
高五拾九萬千八百三拾四石四斗四升八合八勺七才　千貳百拾三ヶ村
●高崎　二十六里半　●館林　十八里　●沼田　三十七里餘
●安中　二十九里九町　●厩橋　川越ノ持　○小幡　廿九里十六町
○伊勢崎　二十四里　○七日市　廿九里廿九町　○矢田二十七里
⊠田島　岩松滿次郎　△岩鼻　二十五里出ハリ
○按ズルニ、本書ノ符號ハ、山城國篇村里條ニ引ク所ノ、本書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡國提要〕上野　十四郡千二百十七村
御料私領高六十三万七千三百三十一石六斗三升三合一勺
邑樂郡八十六村　新田郡百十四村　山田郡六十三村　佐位郡二十六村　那波郡五十一村　群馬郡二百九村　勢多郡百七十八村　利根郡百十七村　吾妻郡八十八村　碓氷郡六十八村　片岡郡三村　多胡郡二十七村　綠野郡四十五村　甘樂郡百三十二村

〔武藏上野國村名帳〕關東村數
上野國　千二百五拾四ヶ村

〔地勢提要坤〕郡邑島嶼奇名

華（花押）
沙彌（花押）

〔田文五〕上野國新田庄嘉慶年中目錄持國當知行分

大○間○郷○　太○田○郷○　田○島○郷○　東○牛○澤○郷○　福○戶○郷○
武○藏○郷○　西○牛○澤○郷○　濱○田○郷○（曾根柏井四分內、）　石○塚○郷○　大○島○郷○
由○良○郷○　今○井○郷○　高○林○郷○　村○田○郷○　廣○田○郷○
高○島○郷○　岩○瀨○河○郷○　尾○次○島○郷○　千○歲○郷○　小○島○郷○
堀○口○郷○　多○古○宇○郷○　高（生野）嶋郷（東光寺領）　鶴○生○田○郷○（長壽寺領、自生半守由押領分、）
藪○塚○郷○半分　阿○佐○見○郷○半分　鳥○山○郷○半分

以上廿七ケ所

一田○中○郷○（四ケ村）　田中民部大輔知行
一德○川○郷○（阿佐見郷半分）　（鳥山上總介、闕名右馬助、）兩人知行
一大○館○郷○　大館知行（京都奉公）
一一○井○郷○
一鳥○山○郷○（四分ノ一）
一飯○田○郷○　長○斗○郷○　寺井村半分香[illegible]郷半分　鳥井式部大夫知行
世○良○田○郷○
一小○角○郷○　世良田遠[illegible]知行
三木村
一綿○打○郷○　綿打九郎知行

他庄へ被押領地之事

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年五月七日丁未、勳功事今日先被定之、〇中略

上野國桃井。。藤内左衛門尉

〔和名抄諸國郡郷考八上野〕上野志略、按桃井庄存、今按、今も桃井郷とて、十三ヶ村あり、伊加保の邊也、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年六月二十八日甲申、有臨時評定、故佐貫八郎時綱養子太郎時信訴申後家藤原氏改嫁之由事、今日被沙汰、爲式目以前改嫁之間、不及罪科、仍於本夫遺領上野國赤岩郷。。者家領云云、

〔上野名跡志初編中綠野郡〕白倉村板倉村鮎川〇中略

武州秩父郡大河原御堂淨蓮寺ノ鐘ニ、上州綠野郡板倉郷。。圓光寺鐘、正慶二年癸酉三月廿二日願主尼蓮阿大工妙トアリ、今板倉ニ、圓光彌藤門寺ト云寺ナシ、

〔伊達文書一〕任今年七月二十六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

元弘三年十二月五日　源朝臣花押〇新田義貞

上野國公田郷。。一分地頭伊達孫三郎入道々西謹言上、

欲早且任傍例、且任相傳道理、賜安堵國宣、全當知行公田郷一分地頭職間事、〇中略

右道西最前參御方、屬頭中將家〇千種忠顯御手、致合戰忠節之間、申恩賞之上者、任傍例可賜安堵國宣者也、當知行之條、若有御不審者、可有御尋伊達彥七郎朝基哉、然者早賜安堵國宣、爲全當知行、粗言上如件、

元弘三年十月　日

〔長樂寺文書三〕上野國大胡郷。。内野中村地頭職事、長樂寺了愚上人禪庵、義貞〇新田寄進被聞食了、不可有相違之由綸旨如此、早可被沙汰付之旨、國宣所候也、仍執達如件、

建武二年六月十九日　平花押

明和中、上野國高崎ノ山崩レテ出ヅ、文義通ジ難シ、後考ヲ俟ツ、

〔古京遺文〕高田里結知識碑〇中略

碑在緑野郡山名村金井澤山中、舊在山下村民彌一家側、彌一家貧族絶、村民等謂、犯穢是碑之所致、遂移碑於山上、或云、明和中、烏川厓畔崩壞而出者、非是、下賛鄉、或云、今佐野村高田里今不詳、其處、上野國神名帳有群馬郡高田明神、蓋卽其地、〇下略

〔吾妻鏡一〕治承五年〇養和元年閏二月廿五日辛未、足利又太郎忠綱雖令同意于義廣、野木宮合戰敗北之後、悔先非、耻後勘、潛籠于上野國山上鄉、龍奧、招郎從桐生六郎許、數日盤居、遂隨桐生之諫、經山陰道、赴西海方云云、是末代無雙勇士也、三事越人也、所謂、一其力對百人也、二其聲響十里也、其齒一寸也云云、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年七月十六日壬寅、藍谷次郎高重者、勇敢之器、頗不耻父祖之由、度々預御感、凡於事快然之餘、被傾寄之所、於上野國黑河鄉、止國衙使入部、可爲別納之由、賜御下文、仍今日被仰含其由於國事行藤九郎盛長云云、

〔小山結城家之證文〕將軍家政所下　下野國日向野鄉住人補任地頭職事

左衞門尉藤原朝政

右壽永二年八月　日御下文云、以件人補任彼職者、今依仰成賜政下文之狀如件、以下、

建久三年九月十二日　　案主藤井判

〔吾妻鏡十七〕正治三年〇建仁元年四月三日壬午、越州、廣元朝臣、善信等參會、就越州飛脚資盛謀反事、仰在國士、可被追討否、可被遣當參之輩否、各被經評定、而長用難被誅之、其伴類未散之時也、〇中略但折節當國無可然輩、佐々木三郎兵衞尉盛綱法師法名西念有上野國磯部之鄉、可被仰彼者、仍雖越後國御家人等、可誅資盛之旨、遣御教書於盛綱入道、件御教書義盛給之、付飛脚下遣上州云云

邑樂郡　池田(伊岐太)　疋太(比木太)　八田(也太)　長柄

〔古京遺文〕上野國山名村碑

辛巳歲集月三日記

佐。野。三家定賜、健守命孫黑賣刀自、此新川臣兒斯多彌足邊孫大兒臣娶、三兒長利僧母爲記定文也、

放光寺僧

碑在上野國綠野郡山名村山上觀音堂傍、文義古拙不可讀、佐野在山名村北廿餘町、古歌所詠佐野船橋卽此、距佐野村一許町有一小堂、俗呼云放光山頗邊寺、或云是放光寺之蹟、又上野國神名帳有群馬郡放光明神、然則放光寺在於此、亦未可知也、蒙齋以其文似高田里碑、其所在亦相近云、或出一手、定以辛巳爲天平十三年、余則謂、高田里碑以神龜紀年、此特不可舍天平之號、以干支紀、則辛巳當在天武天皇之十年也、

○按ズルニ、好古小錄ニハ、佐野伏野ニ作ル、

〔萩藩閥閱錄(八十二原對馬)〕讓渡所領幷鎌倉地事○中略

一上野國佐。野。鄕。內(在家四宇、田八丁)、

右ちやくし彈正藏人貞賴御下文以下手次等をあいそへて讓渡所也さらにたのさまたげあるべからず、もし子細を申仁子孫中あらば、ふけうの仁たるべし、上へ申て、おもきざいくわに申おこなわるべき狀如件、

元德元年十二月廿二日　長井賴秀(道可判)

〔好古小錄(上金石)〕上野國群馬郡下贊(シモサノ)鄕碑(碑石高二尺餘、濶一尺七寸許)

上野國群馬郡下。贊。鄕。高田里三家子□爲七世父母現在父母、○中略

神龜三年丙寅二月廿九日

〔上野國志邑樂郡〕和名鈔、於波良岐、(オハラキ)○中略今村落七拾四村、租入伍萬漆仟捌佰陸什伍斛陸斗捌升壹合、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲三年四月甲子、上野國邑樂郡人外大初位上小長谷部字麻呂、甘樂郡人竹田部荒當、緑井部表故等十五人、賜姓大伴部、

〔倭名類聚抄國郡七〕上野國　碓氷郡　飽馬(安未)　石馬　坂本(佐加毛土)　磯部(伊曾倍)　石井(伊波井)　野後　驛家　俘囚

片岡郡　若田(和加多)　多胡　高渠(太加無曾)　佐沒　長野(奈加乃)

甘樂郡　貫前(奴木乃佐木)　酒甘　丹生　那非　端下　宗伎　端上　有只　那射　額部(奴加倍)　新屋(爾比也)　小野(乎乃)　抜鋒

多胡郡　山宗(也末奈)　織裳(於利毛)　辛科(加良之奈)　大家　武美　俘囚　八田

緑野郡　林原(八也之波良)　小野(乎乃)　升茂　高足　佐味　大前　尾張　保美　土師(波爾之)　俘囚　山高

那波郡　朝倉(阿佐久良)　鞘田(佐也多)　田後(多之利)　佐味　委文(之土利)　池田(伊介多)　韮東(爾良加倍)

群馬郡　長野(奈加乃)　井出　小野(乎乃)　八木　上郊(加無佐土)　畔切(安木利)　島名(之萬奈)　群馬　桃井(毛々乃井)　有馬(安利萬)

利刈(止加利)　驛家　白衣

吾妻郡　長田(奈加太)　伊參(伊佐萬)　大田(於保太)

利根郡　渭田(奴末太)　男信(奈萬之奈)　笠科(加佐之奈)　呉桃(久留美)

勢多郡　深田　田邑(多無良)　芳賀(波加)　桂萱(加以夜)　眞壁(萬加倍)　深渠(布加無曾)　深澤(布加佐波)　時澤　藤澤(布知左波)

佐位郡　名播(有牧、那波、〔那波〕之)　岸新　反治　佐井　淵名(布知奈)　驛家　雀部(佐々伊倍)　美侶

新田郡　新田　滓野(加須乃)　石西　祝人(波布利)　淡甘　驛家

山田郡　山田　大野(於保乃)　園田(曾乃太)　眞張(萬波利)

佐位郡

〔上野國志義佐位郡〕村三十五村、租入壹萬伍仟捌佰陸拾玖石貳斗伍升、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月乙卯、上野國佐位郡人外從五位上檜前君老刀自、賜姓上野佐位朝臣、

新田郡

〔上野國志智新田郡〕新田郡ハ源家累代ノ領所ナリ、其初將軍賴義ヨリ、陸奧守義家ニ相傳シ、義家ノ三男陸奧三郎義國ニ新田ノ領家ヲ讓與セラレテ、始テ新田式部大夫ト稱ス、義國ノ長男大炊助義重コレヲ傳領ス、是ヲ新田ノ元祖トス、義重ヨリ八代ノ嫡孫左近衞中將義貞、後醍醐天皇ノ勅ヲ奉ジテ北條高時ヲ滅シテ後、上野越後播磨三箇國ヲ賜ル、此時上州義貞ノ分國トナル、新田氏義貞ヲ宗室トシテ、一族各其所居ノ地ヲ以氏トス、

村落凡八十八箇村、租入五萬六千二百五拾九石三斗二升三合二勺六撮、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年正月丁酉、上野國新田郡人勳七等犬養子羊弟眞虎等二人賜姓丈部、

山田郡

〔上野國志禮山田郡〕今按ニ、上古ノ縣四ツアリ、今不詳、但山田郡ノ内多ハ園田庄ト云、桐生ヨリ渡瀨川ノ南通皆園田庄ナリ、和名ニハ園田ト書テソノト訓ム、後世字ノ如ク讀、

村落五拾四村、租入參萬貳仟佰參什陸石壹斗肆升肆合、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年七月甲子、以空閑地〇中略上野國山田郡八十町賜諱〇田邑

邑樂郡

〔伊呂波字類抄加國郡〕上野國　邑樂オホアラキ

〔地名字音轉用例〕入聲フノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

おはらき　邑樂郡上野　於波良岐オハラキ　邑ハ吳音オフナルヲ、オハニ用ヒタヲ、〇中略

入聲クノ韻ヲ同行ノ音ニ通用シタル例

おはらき　邑樂郡上野　於波良岐オハラキ　樂ヲラキニ用ヒタリ

〔郡名考〕上野　邑樂オハラキ・オホハラ

利根郡

日嶺而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、(嬬此云菟摩、)故號山東諸國曰吾嬬國也、

〔古事記 中卷 景行〕平和山河荒神等而還上幸時、到足柄之坂本、○中略 故登立其坂、三歎詔云、阿豆麻波夜、(自阿以下五字以音也、)故號其國謂阿豆麻也、

〔古事記傳 二十七〕號其國謂阿豆麻也、其國とは、細に云ば相模國を指て云るなり、彼弟橘比賣命の亡坐しは相模國の海なればなり、然れども廣く云ときハ、此足柄山より東ノ方なる諸國なり、(其國と云るは、然一國を指るがごとく聞ゆれども、其國より東ノ諸國を挽ても其國と云べし、)書紀に、故因號山東諸國曰吾嬬國と見えたる如く、古も今も汎く東方の國々をぞ阿豆麻とは云なる、○中略 書紀には、歷常陸至于甲斐國とありて、後に自甲斐北轉歷武藏上野、西逮于碓日坂云々、進入信濃とあるは路次順はず、○中略 さて彼御歎ありし地も、足柄と碓日と傳の異なる、此は何れか正しからむ、決めかねつ、上野國に吾妻(阿加豆麻)郡あるを以見れば、碓日の方や正しからむ、(凡て郡名などは大方いと古きことにて、然由緒あるべければなり、さて碓日を正しとすることは、此記に據て、其國に阿豆麻とあるも、此吾妻郡によく當るべく、又下文に給二東國造一とあるも、此郡の地とすべし、然れども此國造の事も、郡名の事も、足柄にしては又別に考あり、)

〔上野國志 利根郡〕當郡都テ沼田ト稱、蓋シ沼田氏ノ領スルニ依テナルベシ、在昔ハ淵田ト書シテ、何ノ比ヨリカ沼田ニ書替シヤ、東鑑ニハ沼田トアリ、吳桃(ナクルミ)ハ村名猶存ス、

村落玖拾伍村、租入壹萬捌仟貳佰拾參石玖斗參升捌合、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年十月丙寅、上野國利根郡長野牧、賜三品葛原親王、

勢多郡

〔郡名考〕上野　勢多(セタ)

〔上野國志 勢多郡〕村落百參什捌村、租入伍萬柒仟陸佰肆什參石壹斗柒升肆合、

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、上野國勢多郡小領外從七位下上毛野朝臣足人、○中略 授從五位下、

姓上毛野朝臣、

〔郡名考〕上野　群馬クルマ　クンマ

〔上野名跡志二編上群馬郡〕群馬ハ元久留末ナリシヲ、和銅六年ノ詔ニ、著好字ノ時書改タリケン、金井澤ノ神龜三年ノ碑ニ、群馬郡トアリ、地名字音轉用例ニ、群馬ハ元久留末、クンヲクルニ用タリト云、榛名山ナル元享三年ノ鐵燈籠ニ、車馬郡トアルヲ見レバ、其頃マデモクルマト唱ヘケンヲ、今ハ字音ニ群馬トノミ唱ル也、上野三碑考ニ、久留末ハ玄馬也、ロウノ反シル、上野ハ牧野所ニテ、馬ニヨシアル地名多シト云、名跡考ニハ、郷ノ名ヨリ郡ノ名ニモ及シナルベシ、今白川ノ水源善地村ニ、群馬ノ名ハ、ソノマヽ殘レリ、川ヲ車川ト云ト云、東西二郡ノ堺ハ定カナラズ、利根川ヲ爲堺トイヘド、昔ハ利根川群馬勢多ノ間ヲ流、應永ニ變流セシトイヘバ、外ニ堺アリシナルベシ、

〔上野國志禮群馬郡〕和名鈔曰、久留末クルマ、國分爲東西二郡、府中間國府、今按、東西二郡ノ境界不レ詳、但利根川郡中ヲ流、川東ニ數十村アリ、コレヲ東郡トスルカ、故府ノ跡モ詳ナラズ、今ノ總社ノアタリ府城ノ跡ナルベシ、國分村モ其近所ナリ、國分寺ノ在シ處ナルベシ、或ハ謂ラク、國分ハ國府ノ說ナルベシト云ハ非ナリ、餘國ニ國府ノ名違ルアルモ、多クコフト唱來レリ、コタフト唱ル處ナシ、○中略

今村落佰捌什陸村、租入拾壹萬仟參佰陸什漆石伍斗陸合、

〔上野國志禮吾妻郡〕和名鈔云　阿加豆末

日本武尊東征ノ時、碓日ノ坂ニ登リ賜テ、弟橘姫ヲ忍賜ヒ、吾嬬耶ト宣ヒシヨリ、山東諸國ヲ吾妻ト稱スト、日本書紀ニ見ヘタリ、而シテ此郡山東ノ郡縣ニ於テ、最モ西ニ居ル、因テ吾妻ノ稱ヲ專ニストト見エタリ、○中略

村落凡漆拾玖村、租入壹萬參仟捌佰陸石肆斗貳升參合、

〔日本書紀景行七〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略於是日本武尊曰、蝦夷凶首咸伏其辜、唯信濃國、越國、頗未從化、則自甲斐北轉歷武藏上野、西逮于碓日坂、時日本武尊、毎有顧弟橘媛之情、故登碓

群馬郡

吾妻郡

寅宣、左中弁正五位下多治比眞人、太政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、右大臣正二位藤原尊、

碑上野國多胡郡池村ニ在、〇中略此碑始テ多胡郡ヲ置レシ時建タル碑也、土人誤テ羊大夫ナル者ノ碑トシテ牽合附會ノ說アリ、村民故事ヲ談ズルノ憑據ナキ者、論ズルニタラズ、

緑野郡

〔上野名跡志初編中緑野郡〕今土人ハミトリ郡ト唱、上野名跡考ニ、神奈川、藁川、鮎川皆當郡ニ落合ハ、美止乃ハ水處野カト云、

〔上野國志仁緑野郡〕當郡ハ多ク高山庄ト云、日野金井村、高山氏ガ居ル所ナリ、高山ハ秩父ノ旗ナリ、秩父十郎武綱ガ子權守重綱ガ第三ノ子三郎重遠、始テ封ヲ受テ高山氏ト稱ス、ソレヨリ子孫相續ス、藤岡モ高山庄ナリ、神田大獄モ、長總寺寄附狀ニ高山庄トアリ、今村落伍拾捌村、租入貳萬捌仟肆佰陸什肆石壹斗陸升玖合、

〔日本書紀十八安閑〕二年五月甲寅、置〇中略上毛野國緑野屯倉、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年六月壬子、上野國緑野郡與嶋正倉八間、穀顆卅三万四千餘束、

那波郡

〔郡名考〕上野　那波ナバ　ナハ

〔上野國志那波郡〕按ニ、昔時那波氏二家アリ、一家ハ藤原秀郷ノ後、淵名大夫兼行ガ二男成綱ガ子那波二郎季風ト云、其子ヲ太郎廣澄ト云、泉福寺ノ開基ナリ其子家澄孫景澄ノ後聞ルコトナシ、東鑑建久六年ニ、那波太郎アリ、コレ廣澄ナルベシ、又那波彌五郎ト云アリ、コレ藤氏ノ那波ナルベシ、大江氏ノ那波ハ、年代ヲ以計ルニ、コレヨリ後ノ封ナルベシ、又考ルニ、大江廣元ガ三男政廣、始テ封ヲ那波ニ受ク、政廣兄弟ノ次第ニ於テ、太郎ト稱スルコトナルベシ、一家ハ大官令大江廣元ガ第三ノ子掃部助政廣、始名家元始テ賴朝卿ノ封ヲ受テ那波ヲ領ス、其子左近大夫政茂、關東ノ評定衆タリ、ソレヨリ子孫相續シテ那波ヲ領ス、又按藤氏ノ那波衰微シテ、後ニ大江氏ノ那波其地ヲ繼テ領セシナルベシ、今ノ村落四拾四村、租入貳萬仟捌佰拾參石參斗壹升貳合、

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十月癸巳朔、上野國那波郡人左近衞府將監正六位上檜前公綱主賜、

倭名鈔に、上野國郡名甘樂(加牟良)とあるは、方今もカンラと呼なれたれど、本義はカミラと呼べくぞおぼゆる、甘をカミと呼ブ例ハ、甘南備山、甘南備河など、万葉中に多く見へたり、甘南備山ハ、神並なり、ミと呼ぶハ失ノ轉音なり、欽明天皇紀(廿三年)に、備前兒島郡とし見へて、此備ハ吉備にて、酒實の義なり、此他万葉集(卷廿七)に可奈之備伊麻世、續日本紀卷十七(天平十七)に、撫惠備賜事、皇太神宮儀式帳に、大御饗乎、悉備給比、また五穀物乎、悉備給部など、ミと訓べきもののおほし、かく思ひとらる、ゆゑハ、韮菜の介羅より付、そめし名とおぼしければなり、抑韮菜にハ、薤蒜葱等の種類多しといへども、原ハ都て薤といふが、總名にて有けるなるべし、○(略)註　さて上野國甘樂郡に出る冬葱ハ、比類なき名產なり、(武藏の岩附、下野の栃木等に產るも名物)とすれど、上野のにハ比べがたし、殊に郡中西牧村に產るものを上品とすれば、國人ハ西牧葱と呼べども、此地ハ下仁田驛の隣村なれバ、他國人ハ下仁田葱と呼べり、かゝれバ上古ハ此冬葱をも臭薤とハ呼けむからに、郡名としもなれるにぞあるべき、

〔上野國志(甘樂郡)〕今ノ村落百漆拾玖村、租入肆萬參仟玖佰陸拾漆石伍斗捌升肆合、

〔續日本紀(二十六稱德)〕天平神護元年十一月戊午朔、上野國甘樂郡人中衛物部蛯淵等五人、賜姓物部公、

〔續日本紀(二十七稱德)〕天平神護二年五年甲戌、上野國甘樂郡人外大初位下礒部牛麻呂等四人賜姓物部公、

〔日本後紀(二十二嵯峨)〕弘仁四年二月丁酉、上野國甘樂郡大領外從七位下勳六等壬生公郡守、特授外從六位下、以戸口增益、爲民所懷也、

多胡郡

〔上野國志(多胡郡)〕今村落參什陸村、租入壹萬仟佰貳拾參石玖斗肆升貳合、

〔續日本紀(五元明)〕和銅四年三月辛亥、割上野國甘良郡織裳、韓級、矢田、大家、緑野郡武美、片岡郡山奈等六鄕、別置多胡郡、

〔好古小錄(上金石)〕上野國多胡郡碑(碑石高四尺、濶二尺八寸、蓋方三尺、)

弁官符、上野國片岡郡、緑野郡、甘良郡、并三郡內三百戶、郡成給羊、成多胡郡、和銅四年三月九日甲

	山田(ヤマダ)	那波(ナハ)	佐位(サヰ)	新田(ニフタ)	邑樂(オフアラキ/オハラキ)	[illegible]十四
	同	同	同	同	同	同
	同	同	佐井	同	同	十四郡
	同	同	佐位	同	同	
	同(ヤマタ)	同(ナハ)	同(サヰ)	同(ニフタ)	同(ヲウラ)	同
	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同
	同(ヤマタ)	同(ナハ)	同(サヰ)	同(ニフタ)	同(オフラキ/オハラキ)	同
北勢多	同	同	同	同	同	十七郡

碓氷郡

〔上野國志碓氷郡〕今村落十六村、租入參萬漆仟肆佰肆石伍斗壹升肆合、

〔續日本紀二十八〕神護景雲元年三月乙卯、上野國碓氷郡人外從八位下上毛野坂本公黒益、賜姓上毛野坂本朝臣、

片岡郡

〔上野國志片岡郡〕今村落三村、租入肆仟貳百陸石肆斗壹升肆合、

甘樂郡

〔類聚[illegible][illegible]七〕甘樂郡名義

ヘテナルベシ、然ルニ源平盛衰記ニ、田原又太郎忠綱、宇治川ノ先陣セシ功ニ、上野十六郡ノ大介ト、新田ノ庄ヲ屋敷所ニ望ムトアルハ、上野國十四郡ニ、下野ノ足利郡梁田郡ヲ加ヘテカゾヘシナルベシ、

〔皇國郡名志〕上野國十四郡

碓氷（ウスイ）　安中　●松井田　●戸倉　●モロタ　〈碓氷　横川廿　△島川　信界　〈横見町　●トフミチ

片岡（カタヲカ）　高崎　●松鼻　●倉野　國中

多胡（タゴ）　〈小幡　國中小郡

那波（ナハ）　厩橋　●伊香保　●玉村　●芝　國中

吾妻（アガツマ）　●草津　●長原　●川原　●大戸　信越後界

　●沼田　●永井廿

勢多（セタ）　黒川　下毛界

新田（ニヒタ）　●木崎　●太田　△新田社　下毛界

邑樂（オハラキ）　館林　●矢木　●板倉　武界カンナ川ニ邊小郡

甘樂（カムラ）　●白井　△妙義山　●藤澤　●下仁田　●宮崎　信界

緑野（ミトノ）　藤町無シ　武界カンナ川ニ邊小郡

群馬（クルマ）　●横瀬　國中利根川ヲ横キル

利根（トネ）　〈沼田　△高科川　●戸倉　△利根川源　越後下毛奥界

佐位（サイ）　〈伊勢崎　國中小郡

山田（ヤマダ）　●桐生　下毛界小郡

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國愛宕郡條ニ引ク所ノ、二書ノ凡例ヲ參照スベシ、

〔郡名異同一覽〕上野

書名	郡名
六國史	吾嬬
古書	
延喜式	吾妻（アガツマ）
倭名抄	同
拾芥抄	同
諸書	吾妻　我妻
郡名考	吾妻（アガツマ）●
天保鄕帳	同
明治拾年編	同
地誌提要	同（アヅマ）
郡區編制	同

天長三年九月六日

〔日本紀略十四淳和〕天長八年正月壬戌、三品明日香親王爲二上野大守一、

〔鎌倉大草紙〕上州は上杉の分國なりければ、足利は京都幷鎌倉御名字の地にてたにことなりと、かの足利の學校を建立して、種々の文審を異國より求め納ける、此足利の學校は、上代承和六年に、小野篁上野の國司たりしとき建立の所、同九年篁陸奥守になりて下向の所、此時に學校をたてけるよし、○下略

國府

〔倭名類聚抄五國郡〕上野國國府在二群馬郡一、行程上三十九日、下十四日、

〔上野名跡誌二群馬郡上編〕國分村

和名抄ニ府中間國府國府ハ往昔國司ノ住玉ヒシ地也、土人コクホト唱フ、

〔吾妻鏡一〕治承四年九月卅日己卯、新田大炊助源義重入道、法名上西臨二東國未一レ一-揆之時、以二故陸奥守嫡孫一、插二自立志一之間、武衛雖レ遣二御書一、不レ能二返報一、引二籠上野國寺尾城一、聚二軍兵一、又足利太郎俊綱、爲二平家方人一、燒二-拂同國府中民居一、是屬二源家一、令レ居二住之一故也、

〔鎌倉大草紙〕永壽王殿關東におもむき給ふ、これにより上杉相模守は越後上野の境へ出むかひ、政事を輔佐し、同顯定は上野國府中へ參、還御の御支度を馳走被レ申、八月廿七日、上州白井をたち、鎌倉へおもむきたまふよし聞へければ、○下略

郡

〔倭名類聚抄五國郡〕上野國○略管十四○略碓氷宇須比片岡加太乎加甘樂加牟良多胡[illegible]緑野美止乃那波、群馬、久留末、國分爲二東西二郡一、府中間國府、吾妻、阿加豆末利根止禰勢多、佐位・新田、爾布太山田、夜末太邑樂、於波良岐

〔延喜式二十二民部〕上野國、大管碓氷ウスヒ片岡カタヲカ甘樂カムラ多胡タコ緑野ミトノ那波ナハ群馬クルマ吾妻アカツマ利根トネ勢多セタ佐位サヰ新田ニフタ山田ヤマタ邑樂オハラキ○中略

右爲二遠國一

〔上野名跡志初編上〕延喜式民部上、上野國大、管二十四一、和名抄國郡部ニ、上野國管二十四一、類聚國史上野國十。五。郡。、十五郡トアルハ、和名抄ニ、群馬久留末、府中間國府國分爲二東西二郡一、トアレバ、群馬郡ヲ東西二郡トカゾ

シテ皆之ヲ廢シテ群馬縣ヲ置キ、山田新田邑樂三郡ハ栃木縣ヨリ兼治ス、又群馬縣ヲ廢シ、餘十一郡熊谷縣ヨリ兼治ス、

〔日本書紀五崇神〕四十八年四月丙寅、立活目尊爲皇太子、以豐城命令治東、是上毛野君、下毛野君之始祖也、

〔日本書紀七景行〕五十五年二月壬辰、以彦狹島王拜東山道十五國都督、是豐城命之孫也、然到春日穴咋邑、臥病而薨之、是時東國百姓、悲其王不至、竊盜王尸、葬於上野國、　五十六年八月、詔御諸別王曰、汝父彦狹島王、不得向任所而早薨、故汝專領東國、是以御諸別王、承天皇命、且欲成父業、則行治之、早得善政、時蝦夷騷動、卽擧兵而擊焉、時蝦夷首帥、足振邊、大羽振邊、遠津闇男邊等、叩頭而來之、頓首受罪、盡獻其地、因以免降者而誅不服、是以東久之無事焉、由是其子孫於今有東國、

〔先代舊事本紀十國造〕上毛野國造

瑞籬朝〈○崇神〉皇子豐城入彦命孫彦狹島命、初治平東方十二國爲封、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、從五位上田口朝臣益人爲上野守、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年二月庚辰、上野國元上國、今改爲大國、

〔類聚三代格五〕大政官符

親王任國守事

上總國　常陸國　上野國

右撿中納言從三位兼行左兵衛督清原眞人夏野奏狀偁、〈○中略〉望請、點定數國、爲親王國、遂任彼國、身留京都、宜欲居京官者、一兩人許聽、若有守國者、不補他人、其料物者納置別倉、支无品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國府官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

特ニ太守ト稱ス、鎌府ノ時、安達盛長、子景盛相繼デ守護ニ補ス、元弘ノ末、州人新田義貞兵ヲ擧ヲ勤王、遂ニ北條氏ヲ滅ス、建武中興、義貞ヲ以テ守護トス、足利尊氏ノ反スル、其將上杉憲房ヲシテ守護ト稱セシメ、其地ヲ掠奪シ、第四子憲顯ニ傳フ、憲顯鎌倉管領足利基氏ノ執事職トナリ、群馬郡白井城ニ鎭シ、子孫職ヲ襲テ、鎌倉山内(ヤマノウチ)ニ居リ、家隸長尾氏ヲ守護代トス、五世憲實ニ至リ、管領持氏ト隙アリ、將軍義教憲實ヲ助ケ、持氏ヲ滅シ、憲實ノ弟淸方ヲ管領トス、持氏ノ子成氏(シゲ)再ビ管領タルニ及テ、憲實ノ子憲忠ヲ殺ス、憲忠ノ弟房顯、本州ヲ以テ之ニ畔ト、將軍義政ニ請テ關東管領ト稱シ、子顯定ニ至テ、綠野郡平井城ニ移ル、孫憲政ニ至リ兵威日ニ衰フ、天文二十年、北條氏康大擧シテ、平井ヲ圍ム、憲政越後ニ奔リ、東境將士地ヲ以テ悉ク氏康ニ歸ス、獨リ箕輪城主長野業正、西境ヲ守テ相抗ス、明年、上杉輝虎平井城ヲ拔キ、上杉ノ故臣ヲ招撫シ、永祿三年、廐橋沼田諸城ヲ拔キ、大半東境ノ地ヲ取ル、六年、武田晴信長野業盛ヲ滅シ(業盛ハ業正ノ子)、箕輪安中諸壘ヲ陷レ、其地ヲ略ス、天正六年、輝虎卒ス、武田勝賴廐橋沼田ヲ掠取ス、十年、織田信長武田氏ヲ滅シ、瀧川一益ヲ關東管領トシテ廐橋ニ居シム、信長弑セラルヽニ及ビテ、城ヲ棄テテ西奔シ、氏康ノ子氏政、遂ニ本州ヲ取ル、十八年、北條氏亡ビ、德川氏關東ニ遷リ、廐橋(後前橋ニ作ル)ヲ平岩親吉ニ、館林ヲ榊原康政ニ、高崎ヲ井伊直政ニ、沼田ヲ眞田信幸ニ、白井ヲ本多廣孝ニ、那波ヲ松平家業ニ、小幡(後松平忠恒)ヲ奧平信昌ニ畀フ、廣孝家乘轉封ノ後、二壘皆廢ス、廐橋ハ親吉甲府ニ轉ジ、酒井重忠封ゼラレ、相傳ル十世姬路ニ轉ジ、松平朝矩之ニ代リ、後川越ニ移リ、城廢ス、慶應中、末孫直克再ビ川越ヨリ徙封、館林ハ康政三世ニシテ白河ニ轉ジ、代封數氏ニシテ弘化中、秋元志朝(ユキ)ニ賜フ、高崎ハ直政佐和山ニ移リ、後亦封ヲ易ル者數氏、最後ニ松平輝貞封ヲ受、沼田ハ天和中廢壘、後ニ土岐賴稔(トシ)ニ賜フ、其餘州內封ヲ受ル者、吉井(初菅沼忠政、後松平信淸)、安中(初井伊直勝、後板倉勝淸)、伊勢崎(初稻垣長茂、後酒井忠寬)、七日市(前田利孝)凡テ九藩、王政革新皆改テ縣トシ、岩鼻縣ヲ置キ吉井ヲ併ス、既ニ

町一里一十九町三十八間　横堀驛、三十六度三十三分、二里一十八町一十六間至中山峠一里二十二丁一中山驛　一里三十町二十二間至不動峠一里四丁五十九間　利根郡、上津村、塚原驛、三十六度四十一分、二十一町四十二間　羽場村下新田驛　一十九町一十七間至今宿七町五十九間　吾妻郡布施町　一十九町一十八間　須川驛　二十五町四十三間半　利根郡相俣驛　一里一十五町四十八間半至猿ケ京村一十二丁三十三間　吾妻郡永井驛　二里二十二町一十八間至國界三國峠一里二十四丁四十七間　越後國魚沼郡淺貝驛

官驛

〔延喜式兵部二十八〕諸國驛傳馬中略上野國驛馬坂本十五疋、野後、群馬、佐位、新田各十疋、傳馬碓氷、群馬、佐位、新田郡各五疋、

〔續日本紀仁三十一光〕寶龜二年十月己卯、太政官奏、中略其東山驛路從上野國新田驛達下野國足利驛、此便道也、而枉從上野國邑樂郡經五箇驛到武藏國、下略一本、便原作使、據一本改、

〔關八州古戰錄五〕信玄上州板花台戰附土肥赤働事

同年永祿三年九月中旬、中略斯テ晴信ハ箕輪ヨリ東道一里半此方、板鼻ノ宿マデ押出ラレシニ、長野左衞門大夫業正白井箕ノ人數ヲ召連、廣野ニ待受テ支へ挑ム、

國郡沿革

〔日本國郡沿革考東山道二〕上野　古毛野國、仁德天皇之時分爲上下二國、見國造舊上國、弘仁二年二月、改爲大國、管十四郡、千二百十七村、

邑樂八十六村　新田百十四村　山田六十三村　佐位三十六村、拾芥抄作佐井、　群馬二百九村、和名抄云、國府、古國分

勢多百七十八村　利根百十七村　吾妻八十八村　碓氷六十八村

後、東西二郡、中國國府、置實錄二作一郡、永祥、在何時、　多古二十七村田、大家、綠野郡、和銅四年三月、割甘良郡織裳、韓級、矢田、大家、綠野郡、武美、片岡郡山等六郷、別置多胡郡、　綠野四十五村

喜式等作二碓氷、續日本紀作二確日、　片岡三村

甘樂百三十二村日本紀、續日本紀共作甘良、　那波五十一村

〔日本地誌提要上野二十七〕沿革　古へ國府ヲ群馬郡ニ置、今ノ東國府西國府村是ナリ天長中、親王ノ任國ト爲シ、

〔日本地誌提要二十七上野〕形勢　山勢岩代越後ヨリ來テ信濃ニ連リ、西北最重疊、利根川源ヲ極北ニ發シ、衆水會同、洪流トナリ武藏ヲ界シテ東下ス、東南夷沃、蠶桑ニ饒ニシテ、績織ニ長ジ、商估ヲ勤メ、繁富ノ區タリ、

〔日本實測錄三街道〕從東京中山道至草津〇中略
上野國綠(ミドリノ)埜郡新町宿　一里二十五町二十一間（至烏川岸一十九丁四十六間）　群馬郡倉賀野宿　一里一十六町四十間半　高崎本町、三十六度二十分、一里三十四町二間（至烏川岸一十四丁五十五間）　碓氷郡板鼻宿　二里七町三十八間　安中、三十六度一十九分半、一里一十六町三十七間　松井田宿、三十六度一十八分半、（至妙義山一里六町六間）　二里一十一町一十四間半（至橫川關所一里二十八丁）　坂本宿　二里二十八町二十三間（至國界碓氷峠一里一十七丁五十七間）　信濃國佐久郡輕井澤宿〇中略

從中山道本庄歷下仁田至借宿〇中略
上野國綠(ミドリノ)埜郡藤岡町　二里一十七町五十六間（至白石村一里一十二丁三十三間）　多胡郡川内村（至池村多胡碑一十四丁五十七間）　二町二十四間　吉井中町　一十六町三間　長根村（至常行院三丁四十二間）　三十三町二十四間　甘(カン)樂(ラ)郡福島町（至小幡陣屋二十四丁三十九間、從陣屋前至崇福寺、一十五丁三十九間、從寺前至長巖寺、二丁四十五間）　二十六町一十五間　富岡町　二十三町　七日市　一十八町三間　一宮町（至一宮貫前神社四丁一十五間）　一十二町三十間　宮崎村　二里三町一十二間　下仁田町（歷中町至龍棚寺、四丁三十九間、又從中町歷上町至鏑川岸、二丁一十間、從上町至清水寺、七丁四十二間、從清水寺前至常住寺、一丁三十間、）　二里一十二町一間（至小坂村一里三十一丁十二間半）　本宿村　二里二町一十五間半　矢川村初鳥屋　三里一十四町三十六間（至國界鍋坂峠三十一丁一十二間）　信濃國佐久郡借、村（從本庄至借宿）街道、通計一十八里一十四町五十八間

從中山道高崎歷三國峠至寺泊
上野國群馬郡高崎本宿　二里一十八町五十八間　金古驛　二里二十一町一間半　澁川河原

位置

東七郡ト云、然レドモ群馬郡ハ川東ニモ數ケ村アリ、利根那波郡ハ川ヲ跨テアリ、
〔地勢提要乾〕各國經緯度附里程
上野高崎本町極高三十六度二十分、經度東三度十七分半、從東都中山道二十八里二町一十四間、
〔日本經緯度實測〕北極出地
上野　高崎　三六度二〇分〇〇秒　板鼻宿　三六度二〇分三〇秒略○中
東西里差
山城　京　〇度〇〇分〇〇秒略○中　上野　高崎　東三度一七分三六秒

區域

〔和漢三才圖會上野六十六〕上毛野下毛野之間有二野、一曰佐野、一曰宜𥙿野、其中間有一河、名渡瀨、以爲兩國界、西乃上毛野、東乃下毛野、
〔上野國志七〕風土記抄云、略○中兩國ノ境ニ渡瀨川アリト云、舊說ナレドモ、今ノ國界ニ據テ見レバ甚非ナリ、渡瀨川ハ源上州入ノ內足尾下野ノ內山中ヨリ出テ、勢多郡、山田郡ヲ過ギ折ケテ東流シ、邑樂郡ノ北ニ至リ、又南ニ流レ、下野國足利梁田ノ二郡ヲ過テ利根川ニ注グ、總ジテ渡瀨川ヲ以テ界トスル所ナシ、邑樂郡早川田ヨリ下ヘ、此川ヲ界トシ、是ヨリ上ハ新田郡邑樂郡ノ界ハ矢場川ヲ境トスル、此川ハ市場堀ヲ源トス、
〔日本地誌提要上野二十七〕疆域　東ハ下野、西ハ信濃、南ハ武藏、北ハ越後岩代ニ至ル、東西凡貳拾三里、南北凡貳拾五里、
〔上野國志那波郡七〕武州兒玉郡都島山王堂宿仁手沼和田等、寬永ノ始マデハ那波郡ニ屬ス、寬永中洪水ニテ烏川北ニ移リタヨリ武州ニ隷ク、

地勢　風氣

〔鷹林木節用集下〕上野上州大管、十四郡、東西四日路、暖氣、桑多、而絹綿豐也、以致貢、大々上國也、
〔新撰類聚往來下〕國名略○中上野上州十四郡略○中南北五日、陰氣深、草木不長、壽担豐味希、地深一丈、桑麻綿多、大々下國也、

守弘按ふに、木を氣と云ることもあれば、毛は草木をさし、野は顯昭が古今註にも、坂東は足柄の關より東いと山なども侍らず、皆遙なる野なりと云る如く、都て平らかなる國なれば、毛野國とも名つけしならむと思へるも、然ることながら、內藏寮式に、氈十枚、下野國所進とありて、當國とは古へ好毛席を織て奉げし國なり、是に依て毛をむねとし、好毛の出る野といふ義にて、毛野國とは名づけしものなるべし、氈は、和名抄に加毛、毛席撚毛爲席也とありて、上代には專ら獸の皮を席とし、又毛をも撚りて織て席となして用ひたり、其例は、古語拾遺に、好麻所生、故謂之總國、穀木所生、故謂之結城郡、古語麻謂之總也とあり、出羽も好羽の出し故の名、また木ノ國も是に等し、萬葉集に載たる、之母都家野、美可母乃夜麻とあるも、眞氈山の義にて、氈を織出したるに依て負せし名なるべし、

〔日本書紀繼體十七〕二十四年十月、是歲、毛野臣被召到于對馬、逢疾而死、送葬尋河而入近江、其妻歌曰、比攞哿駄喩、輔曳輔枳能朋樓、阿苻美能野、愷那能倭俱吾伊、輔曳府枳能朋樓、

○按ズルニ、愷那能倭俱吾トハ、毛野臣ヲ指スカ、是古ク毛野ヲケナト言ヘル一證ナリ、國名ニアラズト雖モ、以テ毛野國稱號ノ傍證ニ資スベシ、

〔都のつと〕春になりしかば、かんつけの國へこえ侍りしに、おもはさるに一夜のやどをかす人あり、

〔關八州古戰錄七〕信玄西上野仕置付上泉伊勢守小幡泉龍齋ガ事

枝城ノ庭屋ヘハ、城代トシテ信玄ノ旗奉行甲州譜代ノ士タリシ上原圖書入道隨應軒ニ、庭屋左衞門尉以下先方ヲ差副テ是ヲ守ラシメ、西上野七郡ノ總橫目ヲ命ゼラル、

〔上野國志七〕今按ズルニ、何レノ時ヨリカ、利根川ヲ國ノ中央ト定テ川ヨリ西ヲ西上州ト云、川ヨリ東ヲ東上州ト云、

碓氷、片岡、群馬、吾妻、甘樂、多胡、綠野七郡ハ、川西七郡ト云、那波、利根、勢多、佐位、新田、山田、邑樂ヲ川

りと云り、

〔諸國名義考上〕上野　下野

和名抄に、上野(加三豆介乃、國府在群馬郡、國分爲東西二郡、府中間國府、)下野(之毛豆介乃、國府在都賀郡、)名義は毛野(ケヌ)なり、國造本紀に、難波高津朝御世、元毛野國、分爲上下とあり、されば上毛野下毛野なりしを二字と定られし時に、毛の字は略かれつれど、猶毛といへる名のこりて、却て野ノ字をば唱へず、さて毛とは、草木五穀などをいへるなるべし、そのはじめは木をいへる名なり、下の紀伊國の條にいへる、須佐之男命の木種蒔をも思ひ合すべし、また筑後國に大なる歷木(クヌギ)株あり、高サ九百七十丈ありて、朝日ノ影には肥前の杵島多良岑を蔽ひ、夕日影には、肥後の阿蘇荒爪山を蔽ひたり、(日本書紀と風土記とはすこし異なり)よりて御毛國といふ、この木僵れて後、其樹を蹈て往來ゆゑに、瀰概能佐烏麼志(ミケノサヲバシ)と歌にもよみしなり、また日本書紀に、是居於御木川上といふ、分註に、木此云開(ケ)とあり、萬葉集にも、木を毛とよめる事あれば〱あり、さて令義解に、稱土地之所生爲毛也とあり、外國にも、左氏傳に食土之毛、註毛草也とあり、字典に、桑麻五穀之屬、皆曰毛とあり、素問に、地有草木、人有毛髮應之とあり、その外にも窮髮不毛などいへること、漢籍に間々見えたり、

〔上野名跡志初編上〕上野國ハ、元毛野國也、○中略上野名跡考ニハ、和名抄、豐前國ノ郡名、上毛下毛訓註加牟豆美介、之毛豆美介トアルヲ思ヘバ、毛野ハ美介ノ國ニテ、ミケハ御食ナルベシ、此國ハ地形廣平ニシテ、田畠開ケ、嘉穀豐饒シテ御食物多ヲ野邊ナル故、上ツケ野ト云ナルベシト云リ、亦相馬日記ニハ、和名抄ニ、下野國河内郡衣川鄕トアルハ、モト毛野ノ鄕トイヒケンニ川ニヨリテ後衣川トハイヘルナルベシ、毛野テフ國ノ名モ、コノ鄕ヨリオコル事ウツナシト云、(國學等ニハ、毛ハ穀物ノ說名、野ハ毛物ノ生ル地ナリト云、)

〔下野國誌一〕毛野名義○中略

上野國

名稱

上野國ハ、カウヅケノクニト云ヒ、舊クハ、カミツケヌノクニト云フ、東山道ニ在リ、東ハ下野、西ハ信濃、南ハ武藏、北ハ越後、岩代ニ界シ、東西凡ソ二十三里、南北凡ソ二十五里、其地勢ハ山野殆ド相半シ、田野概シテ開ケタリ、此國ハ古ヘ國府ヲ群馬郡ニ置キ、碓氷、片岡、甘樂、多胡、綠野、那波、群馬、吾妻、利根、勢多、佐位、新田、山田、邑樂ノ十四郡ヲ管シ、延喜ノ制、大國ニ列ス、明治維新ノ後、廢、廢合ヲ行ヒテ、勢多、群馬、多野、北甘樂、碓氷、吾妻、利根、山田、新田、邑樂、佐波ノ十一郡ト爲シ、新ニ前橋、高崎ノ二市ヲ設ケ、群馬縣ヲシテ之ヲ治セシム、

〔倭名類聚抄 五 國郡〕上野加三豆介乃

〔倭訓栞 前編六 加〕かうづけ　上野をいふ、上津毛野の略也、

〔日本風土記 一 寄語 島名〕上野庚子計

〔古事記傳 二十三〕上毛野は、和名抄に上野加三豆介乃國とある是なり、(毛字を省きて上野と書くは二字につゞめ書例ぞ、齊明紀には、上毛野國とあり、又後世野を略きて、かみつけとのみ云は誤なり、又其をかうづけと云は、美を音便にウと云、又音便のウンの下は多く濁る例にて、ツをも濁りて呼なり、)萬葉十四、上野國歌に、可美都氣努、又可美都氣野などよめり、(又一可美都氣乃ともある、乃字は、奴の誤なるべし、和名抄などのこるにこそ、野なば、もはら乃と云つれ、古には然ることなく、又野を省きて、加美都氣と云ることも無ければ、辭の乃にも非ればなり、凡そ此國名をよめる歌、十二首ある中に、乃と云るは只一にて、餘はみな奴なるをや、)名義未思得ず、毛は草木を云か、木を氣と云ることもあり、(顯昭古今注に、坂東は足柄の關より東いと山なども侍らず、みなはるかなる野な

地部三十四

薩摩國

壹岐國

對馬國

地部三十五

地部三十三

地部三十一

豐前國

豐後國

地部三十二

肥前國

土佐國 八八八

地部三十

筑前國 九一五

筑後國 九六一

地部二十九

地部二十八

地部二十七

地部二十五

播磨國

美作國

地部二十六

備前國

伯耆國

出雲國

石見國

隱岐國

地部二十四

地部二十三

地部二十二

地部二十

陸奥國下

出羽國

地部二十一

若狹國

古事類苑

地部十八

地部十九

古事類苑

地部第二册目錄

神宮司廳藏版

古事類苑

地部二

古事類苑刊行會